東方伊吹伝

じらい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方伊吹伝

【Ｎコード】
Ｎ０４６７Ｑ

【作者名】
じらい

【あらすじ】
人間なのに訳あって萃香の子供に！？
妖怪の山に住む人間の子供。彼に才能なんて無かった。しかし才能の無さを努力で補おうと必死になって駆けた。努力することこそが才能であったという話。時には挫けて落ち込むことはあっても、決して逃げることはしなかった少年の物語。
自分の夢をかなえるために今日も生きていきます！・・・だったらいいなぁ

ぷろろーぐ（前書き）

初投稿ゆえ、至らぬ点があるとは思いますがご容赦ください。
本作品は二次小説です。ご都合主義・キャラ崩壊・独自解釈を含みます。また、技を「史上最強の弟子ケンイチ」からお借りする場面があります。

以上の点を理解したうえでお読みください。

ぷろろーぐ

季節は春。冬を越えた此処、妖怪の山の一画に幼い少年の声が響く。

「でりゃっ！！」

「ははっ、まだまだだねぇ。ほいっと」

「うっうわ！？」

少年の『魔力』の籠った突きは、逆に腕をとられてしまいそのまま投げられてしまった。背中から地面に落ちるが、魔力で身体強化されているためこれといった痛みは感じない。非常に優しく投げられたというのが一番の理由なのだが。

「今日はここまでだね。あんたの母さんがお待ちかねだ」

背の高い女性が息も切らさず事もなげに言う。汗などは一切掻いておらず、むしろ清々しいまでの笑顔を見せている。

「はぁっはぁっはぁ…」

対する少年は地に仰向けになったまま空を仰ぎ、息継ぎもままならないようであるが。

「まったくだらしないねぇ。これくらいで音をあげてたらこれからどうするんだい」

女性の名前は勇儀。寝転がっている少年との一番の違いは、額から生えている特徴的な角だろう。

「ねっ姉さんが凄すぎる、っだけだと、思うんだけどっ」

「はは、そりゃちがいない。なんたって私は鬼だからね。人間の子供とは比べものにすらならないよ」

わっはっは、と笑いながら言う彼女は鬼である。妖怪の中でも破格の力を持つ鬼であり、その中でも上位の存在であるのだ。それに対して少年は、魔力を使うとはいえ唯の人間である。生物としての土台が違うので、この結果が当然といえば当然であるのだが。

「それでも、悔しいことにかわりはないよ」

ようやく息が整った少年が起き上がりながら言う。悔しそうに口を尖らせているのは何時ものことだ。

「それでこそ、あたしの弟分だよ大和」

わしゃわしゃと乱雑に少年の頭を撫でながら彼女は笑う。それに気を良くしたのか、拗ねていた少年にも笑顔が浮かんでいる。

「さて、あんたも落ち着いたところで帰るか」

「はい！」

まったく元気なもんだ、と彼女は苦笑し、二人は山奥へと帰っていった。

母親は息子を大切にするものだと思う（前書き）

展開が早いと思うのは私も同じです。
小説って難しいですよね

母親は息子を大切にするものだと思う

「帰ったよ」

「只今帰りました」

稽古で泥まみれにした身体を途中の沢で綺麗にしてからの帰宅。母さんには僕が姉さんに鍛えてもらっていることは秘密にしているからね。こうやって綺麗なままで帰って来ないと何かと面倒なことになるんだ。主に心配性な母さんが暴走するとか、まぁそんなとこ。

「お、ようやく帰ったのかい二人とも。みんなお待ちかねだよ」

そんな僕たちを長い二本の角を生やした妖怪が笑って出迎えてくれた。この人が僕が母と慕う小さな鬼（本人に言ったら叩かれる）の伊吹萃香だ。小さな体で凄い力持ち。義理の息子でありながら、それでも僕のことを心から思ってくれる優しい鬼。僕の自慢の母親だ。

「私の顔に何かついてるかい？」

っと、いろいろと考えていたら母さんの顔を見続けてたみたいだ。僕とそれほど背丈も変わらないので、目の前の訝しむ顔が僕を真っ直ぐと見つめている。

「ううん。考えごとしてた」

「またあの話かい、私は反対だよ。断固反対だ。あんたは「はーいはい、この子はそんなこと考えちゃいないよ。だろ?大和」「う、うん」…ならいいけどさ」

…別にそんなことは考えてないんだけど。やっぱり母さんはやっぱり反対なんだよね…。

以前、僕と母さんは真っ向から対立したことがあった。別に腕っ節でどうこうした、と言うわけじゃない。結果的にそう言う構図になったと言うだけだ。理由は僕にあるんだけど、ご飯前の今は別に関係ないことなので放っておくことにする。でも、僕は今でも諦めてないんだよね。

「私は先に行ってるよ。萃香も大和も早くいかないと、飯も酒もなくなっちまうよ」

姉さんがさっさと行ってしまい、気不味い雰囲気を醸し出している僕たち親子だけが残ってしまった。姉さんめ、逃げたな。

「はぁ…じゃあ私達も行こうか。今日は母さんが採ってきた魚もあるんだ。あいつらには少々もったいない代物だからね」

「はい！」

◇◆◇◆◇◆◇

「只今帰りました」

愛息子の声がわたしの耳に入って来る。このやんちゃ息子め、漸く帰って来たか！

…どうやら今日もわたしに黙って修行してたみたいだね。顔は綺麗に洗ってきたようだけど、服に若干泥がこびり付いている。まったくこの子は…あれだけ言ったのにまだ懲りてないのか。まぁそんなところも可愛いんだけどさ。ああもう、頭に草がついてるよ。あ、こら勇儀。ニヤニヤしてわたしを見るんじゃない！

う～勇儀がいなければ今すぐ大和を抱きしめてやりたいところだよ。でも、最近大和も背が伸びてきたんだよね…。おかげでわたしより

背が高くなってしまった。生意気な奴め。

わたし達の関係を知らない者が見ると、まるで人間の兄妹に見えてしまうだろうね。人によっちゃあ妹が兄に甘えているように見えてしまう、とは勇儀の弁だけど…。いや、勇儀なんかは角なんか関係なしに笑い飛ばすんだけどさ。

はっ、意識が違う方向に飛んでしまっていた！このままではわたしの威厳が！

「私の顔に何かついているかい？」

うん、完璧。これでわたしの威厳も「ううん。考え事してた」っこの子まだ諦めてないのか！？

◇◆◇◆◇◆◇

大和の『考え事』という言葉に萃香が急変した。何時もは鬼の四天王らしく威厳たっぷりのくせに、この親馬鹿は大和のこととなると

人が変わるかわねぇ。おっと、わたしたちは鬼だから鬼が変わるか？　まあどっちでもいいけどそろそろ助け舟をだしてやるとしよう。何時もは仲の良いこいつらの親子喧嘩？　は見てて空気が悪くなるからね。

それに早く逃げるにこしたことない。今日の宴はいい酒がある気がする臭いがする。馬鹿親と馬鹿弟分なんかにかまっちゃいられない。

◇◆◇◆◇◆◇

あ～、今日もよく動いたからお腹すいたなぁ。

ここを一言で言うと…鬼の集会所？　になるのかな。僕は母さんの息子だから当然のように此処にいるけど、鴉天狗の射命丸や河童のにとりなんかは此処には居ない。ちなみに2人とも僕の親友だ。そんな2人に一緒に夕飯を食べよう！　と誘ってみた所、肩や顔を真っ青にして震えだし、もう片方は失神寸前で水の中に沈んでいく始末。いったい何が悪かったんだろう？

そんなわけで此処には鬼しかいない。見渡す限りの鬼・鬼・鬼。僕は人間だけど、皆はそんなことをまるで気にしてないかのように接してくれる。嬉しい限りだ。

「大和、食べておるか？」

「大母様は…飲んでますね…」

それも大量に。

この人は鬼の総大将。勇儀姉さんと同じくらいの背丈で、頭からは捻じれた角が2本生やしている。みんなからは大将と呼ばれていて、此処に居る鬼の誰よりも強い。もちろん母さんよりも。

ちなみに僕が大母様って呼んでいるのは、母さんの母さんだからだ。この辺りの詳しいことは僕も良く解らないけど、母さんの母さんはお婆さんと言うって射命丸に聞いたことがあった。だから一度だけお婆様って呼んでみたことがあるんだけど…指で突かれて吹っ飛んだのは忘れられないね、うん。

「修行は順調か？　ん？」

「ツゲホッゲホ！　なんで知ってるんですか！？　姉さんにも内緒にしてって言ったのに！」

ちょっ！？　なんで知られてるの？　わざわざ射命丸に人が寄り付かない所を教えてもらった上に、姉さんにも秘密にしておいてって

頼んでいたのに。

「ほれほれ、そんな大声では全員に知られてしまうぞ？　もう手遅れじゃがの。勇儀のやつが酒の席でうれしそうに話しておったわ」

「…はぁ、じゃあ母さんもしってるんですよね？」

「萃香もその宴にいたからの」

終わった・・・。あれだけ秘密って言っておいたのに。こんど姉さんには約束を破った報復をしないと…。お酒でも隠しておこうかな？　…う、ばれた時のことを考えると怖くて出来ない…。

ってあれ？　じゃあなんで母さんは表だって反対しないんだろう？

「呆けた顔をしておる。萃香が反対しないのが不思議なんじゃろ？　気にせんでいい。強くなることをあやつは否定せんよ。おまえが旅に出ることには反対らしいがの」

「僕が旅に出るのを諦めてないことまでしってるんですか…。（決めた。姉さんの酒は隠しておこう）　大母様は反対ですか？」

「反対じゃ」

少しの時間もかけずに反対されてしまった。なんで？

「何故か、お主にも解るように理由を教えてやろう。いいか？　お主は弱い。それはもう、すぐに死んでしまうほどにの。勇儀と長い間修行しておるようだが所詮は人間の子、妖怪にはとどくことはない。そこいらの雑魚妖怪相手にすら相手にならん。そんな奴を、ましてや子供の一人旅など許可できんのじゃよ」

「……それは、そうですけど」

解ってる、僕にだってそれくらい解ってるよ。大母様の言うことは何時だって正しいし、馬鹿な真似はせずにここで暮らせって言ってるのも。僕みたいな子供の一人旅が自殺行為だってことも。

でもね、これだけは誰が何と言おうと譲れないんだ。

「それでも、僕は旅に出たいんです。僕には目標も、夢もあります。それはここで暮らしていては絶対に手にはいらないんです！　だから、どうしても旅に出たいんです！！」

小さい身体から精一杯大きな声を出す。周囲が聞いていようが聞いていまいが、無茶だと笑おうが関係ない。これは僕の夢だ！　僕の目標だ！　だから胸を張って大母様に向かって言った。

「…じゃとよ、萃香。どうする？」

え？　あれ？　なんか皆こっちみてるんだけど!？　何？　よく言った？　ここは『馬鹿だな大和』　って笑い飛ばす所じゃないの!？

「…反対だよ。大将の言う通り、大和は弱い。力が無ければこの世では生きていけない。だから、反対」

「じゃが、志は高いようじゃがの。それに萃香、大和ももう１０歳を迎える。お主もそろそろ子離れするころじゃと思うんじゃが？」

大母様が説得してくれてると考えていいの？　頑張れ大母様！　僕じゃ母さんを説得させられないのはもう経験済みだから！

「ならば大和が力を見せればいいんじゃな？　大和、萃香と闘って

力を見せてやれ」

は？

「大和が力を見せれば萃香も賛成するらしいんじゃが、どうする？」

うわぁ、イイ笑顔ですね大母様。貴方様の今の顔はそれはもう素晴らしい笑顔です。僕は一生忘れられないと思います、はい。…でも、これは絶好の機会だ。これが失敗すれば次は無いと考えた方がいいかも…。だったら、

「わかりました！母さんに僕の力、見せてやりますよ！」

胸の前に握り拳を作ってそう言ってやった。やってやるぞ、コンチクショー！

「大和はこう言っておるが？」

対する母さんの顔は下を向いていてよく見えない。…あれ、母さんぷるぷる震えてる？

「……ふっ…ふふふふふふふふ。いいよ、いいだろう。だったら鬼の四天王が一人、伊吹萃香の全てを賭けてお前の夢を妨害してやる！」

そりゃないよ。どこに子供を全力で邪魔する母親がいるんだよ。あ、ここにいるか。せめて手加減してください。

「よかろう！　今宵は新月。ならば次の満月の日に決闘を行う！立会人はこの私じゃ！異論はないか皆のもの！？」

「「「「「ないぞー！！！」」」」」

ちょっと待って！？　何でみんな手加減してやれとか言わないの？…言わないのか。これ、早まったかも…。

「ふふふ…。大和、母さんはお前を殺してでも引き留めるぞ」

あ、僕死んだ。

人生の先達って偉大だよね

～宴会から一夜明けて～

母さんに宣戦布告をした夜から一夜明けたある日。僕は鬼の住処から離れ、一人で川の水を眺めながら考えを纏めている。考えが行き詰った時には石を川へと投げ入れているので、そろそろ河童達が文句を言いに来るかもしれない。

でも本当にどうしようか。昨日は無謀にもあんなことを言ったけど、一晩明けて冷静に考えてみると僕には勝ち目が全くないことが解る。宴会の空気に当てられたとか、よくよく考えると大母様に乗せられたとか今になって気がついたけど、後の祭りだ。

でも悪いことばかりではない。あの後、僕に全く勝ち目が無いことを悟った大母様が『萃香に一撃でも入れたら勝ち』って決まりごとが付け加えてくれた。

『勝敗は…そうじゃのう、ただ闘えば萃香が勝つに決まっておるのじゃから、大和は萃香に一撃でも入れたら勝ち。これでいいかの？』

『賛成！　大賛成です大母様！』

『別にかまわないよ。どちらにしろ、私が勝つからね』

とまあ、こんな感じで決闘の決まりごとが付け加えられた。これならまだ勝ち目がある…と考えたい。へたれと言うなかれ、もともと勝ち目なんて無いんだから。

でも母さんが能力を使って体を霧散させたら攻撃なんか当たらないよね？　…うん、深く考えないでおこう。母さんもそこまで本気にならないだろうし、何よりそれじゃあ僕の強さを測れないだろうし…。とりあえず僕に出来ることをもう一度確認してみよう。

えーと、魔力を使った身体強化…だけ。…うん。これは無理だ。はぁ、やっぱり早まったのかなぁ。

どうしようか？　と無い頭を必死に回転させるも無いものは無いわけで。考えが行き詰った僕はまた石を手にとって投げてみると…

「は～い大和、元気に…ッブ！？」

「…あー、紫さんはお変わりないようで…？」

僕が投げた石に運悪く当たってしまったのはスキマ妖怪の八雲紫さん。綺麗な放物線を描いた頭に当たったようで、少し涙目になりながら頭を擦っている。この人は母さんの友人で、僕に魔力や能力が在ることを教えてくれた人だ。もっとも、在ると言うことを教えてくれるだけで使い方は教えてくれなかったけど。

「な、なかなか有効な不意打ちね…。この借りはまた今度返すとして…聞いたわよ大和。萃香と決闘するんですって？」

わざとじゃないのに！？　紫さんの出てくる位置が悪いんです！

「わざとじゃなくてもよ。私は結果主義だもの」

あ～…相変わらず人の心を読むのが上手い人だ。前からそうだけど、僕の考えなんて手に取るように解っているんだろう。前に何度か、何処で何をしたとかも当てられたことがあったけど、本当にどうやって調べたんだろう。

そんな紫さんからすれば、僕が何に悩んでいるのかも解っているんだろうか？

「フフフ、もちろん解っているわ。大方萃香に勝ち目がなくて困っているんでしょう？」。

「・・・僕ってそんなに解りやすいですか？」

「さあね。今日はそんな大和にいい物を持ってきてあげたの。な・ん・と、西洋の魔道書よ」

「…どうせまた僕をからかう冗談なんですよね？　ひっかかりませんよ」

この手の冗談は日ごろからされている。前には魔道書だと言っていたのが、実は狐の絵巻だったこともあった。なんでもどの狐が好みか？　なんて意見を求められたこともあった。いったい何の為に聞いたのだろうか。

「あら失礼ね。今回は正真正銘本物の魔道書よ。この本の魔法を使って萃香を倒してやりなさい」

紫さんが素直に応援してくれるなんて…。いつもは冗談を言うか、母さんと一緒にいる僕をからかうばかりなのに今日は親切すぎる。

「失礼ね。私だっていつも冗談ばかりではないの。時と場所はわきまえるものなのよ？」

心まで読む人に時と場所もないでしょうに。

「…まあいいわ。それと大和、あなた能力の方はどうなの？　少しは使えるようになった？」

「す、少しぐらいなら…」

「嘘おっしゃい、あなたは嘘を吐くときは頬を手で掻くのよ？　今のように」

「え！？「う・そ」…あ」

「はぁ、進歩してないようね。身体ばかり鍛えているだけではだめよ？　せっかく強力な能力を持っているのに台無しよ？」

紫さんの言う通り、僕は自分の能力を使いきれていない。どちらかと言うならば、自分の能力が何なのかも掴めていないという表現が正しい。ただ、集中すると右目で未来が『視える』　ので『未来を視る程度の能力』　としているけど、それが正しいのかも解らない。その上、使える時間と回数が恐ろしく少ないので使いどころも難しい。紫さんは強力だ、強力だ、と何度も言うけど、僕にしてみれば単なる使いにくい能力でしかない。

「うぅ…面目ないです。でも、本当に解らないんですって。確かに先のことが視えたりしますけど、なんかこう、しっくりこないというか…。とにかく自分でも良く解らないんです」

自信なく言う僕に溜息を吐く紫さん。そんな紫さんは少し思案した後、真面目な顔をして僕を見つめ言った。

「…心を静め、力の源泉を見つめなさい」

「え？」

「あなたは”静”の者よ。慌てずじっくり自分を探すといいわ。そういう意味では、あなたの旅はいいきっかけになりそうね」

「はあ、わかりました。って、紫さんも旅のこと知ってるんですね」

「あら、『何でも知っている』と言ったのはあなたじゃない」

本当は良く解ってないんだけど、それは秘密だ。

「あれ、母さんたちに会っていかないの？」

「それは今度の機会でいいわ。あ、私も二人の決闘は見にくるから。じゃあね、大和」

胡散臭い笑みを浮かべながら僕の頭を撫でた紫さんは、僕が何かを言う暇も与えず『スキマ』　に消えていった。あの人も絶対に楽しんでるよ…。どうも僕の知り合いに親身になってくれる人はいないようです。…でも紫さんが応援してくれているんだ、勝たないと何されるかわからないよ！？

とにかく貰った魔道書を読み込むことから始めよう。紫さんが今渡すんだから、きっと意味があるに違いない…はず。

◇◆◇◆◇◆◇

あの子は相変わらず面白い。あの百面相は弄りがいがあるし、あの真っ直ぐな志は評価に値する。

本当に私の望み通りに育ってくれている。

あの子にきっかけを与えることには成功した。魔力について教え、あの子自身の力についても教えた。魔法使いという存在について教えたのも私だ。あまり才能はないようだけど。

今回の決闘はあの子の成長の糧になるだろう。私はあの子に期待しているのだ。だからあの子のこれからの為にも、そして私自身の目的のためにも強くなってもらわなくては困る。

「だからせいぜい足掻きなさい。貴方が私達がいる高みまで這いあがってくるのを楽しみにしているわ」

誰も存在しない空間の中で女性が一人、怪しい笑みを浮かべていた。

親友は二人ぐらいがちょうどいい（前書き）

8月3日改訂

親友は二人ぐらいがちょうどいい

紫さんが帰って行くのを見送ってから、少しの緊張と期待を胸に魔道書を開いた。と言うのも、今までに騙された経験からくる警戒心と、初めて見る実用的な魔道書に興奮しているからだ。いったい、何が書かれているのだろう――――――

暫くの間、川のせせらぎを聞きながらの読書に励んだ。少し長く没頭したせいで凝り固まった身体を解すべくポキポキと鳴らしながら伸びをしてみると、頭上に太陽の姿が見えた。

「ああ、道理でお腹が減るわけだ」

集中しすぎて昼飯のことも忘れていた。昨晩のあれで、今日は母さんと一緒にお昼をとらないと言って出てきたのは運がいい。時間に遅れると心配かけてしまうからね。そう思いながら昨晩の売れ残った焼きキノコを頬張る。

でもそこまで集中して読んだおかげで、魔道書に書いてある内容はだいたい把握した。理解なんて出来てないし、実際に使うことは出来ないけど。とりあえず、紫さんの持ってきた魔道書には基本的な魔力の使い方とその応用が載っていた。

以前、紫さんは魔力を体にまとって格闘する魔法使いは珍しいと言っていた。身体強化しか使えない僕は格闘しか出来ないんだけどね…。別に正式な魔法使いじゃないけど。でもこの本にはその方法が詳しく載っている。たぶん僕に合うものを探してくれたんだろう。こういうところは凄く気の利くいい人なのになぁ…。

あとは魔力糸？　を使った戦闘方法だ。極めればとんでもない切れ味を誇ると書いてある。

載っているのはこの二つ。特に魔力糸のことが詳しく書かれていて、次の満月までには間に合わないだろう。いや、使うだけならどうにかする自信はありますよ？　…たぶん。

まあ考えてても仕様がない、とりあえず修行を「あやや、大和さんじゃありませんか。こんなところで何をしているんですか？」　始めさせて欲しかったなぁ…。

◇◆◇◆◇◆◇

今日も元気だ下っ端は辛い！

『妖怪の山に侵入者あり』　との報告を受けた私、射命丸文はその場に急行させられることとなった。ケッ、人使いがあらいことで。そうやって自分で動こうしないから腹がでるのよ。

上司の天狗にならこう舐めた口を聞いていただろうけど、今回はこの山の最大勢力である鬼の命令だ。何時ものように煙に巻いて断ることは出来ないし、断れば私の命が危うい。いや、本当に。何せ自分は妖怪にすれば生まれたばかりの下っ端天狗だし、何より彼らと深～い関係を持つ人の友であるせいか、顔や名前もそれなり以上に

広まっている…らしい。

「ほんと、世知辛い世の中ね」

別に友人がどうのこうのと言うわけじゃないが、愚痴の一つや二つくらいなら別にいいだろう。そう声に出しながら空を飛ぶ。出来たら叫びたいと思ったのは内緒だ。

そんな私は飛ぶ速さなら鬼も超える自信がある。現場まで１０秒と掛からないだろう。だからこそ思う。自分たちで行けよ、と。ま、これればっかりはどう言っても仕方がないことなんだけどねぇ。

そしてその現場にいたのは侵入者ではなく、私の友人の一人の大和であった。

◇◆◇◆◇◆◇

「大和さん、ここに誰かいませんでした？」

さあ修行だ！　と意気込んでいた僕の出鼻を挫く形で現れた射命丸がそんなことを聞いてくる。その顔はニコニコと微笑んでいるけど長い付き合いの僕には解る！　あの顔は『私、ここに遣わされたことが不満です』　と言っているであろうと！！　会った時は何時も上の人の愚痴を漏らす射命丸のことだ、今回も其れなんだろう。

そして紫さん、貴方はまたいつも通りの不法侵入だったわけですね。

「紫さんが来てたんだよ。帰ったからもういないけど」

とりあえず事の次第を話そうと思ったけど、何をどう話せばいいか上手く纏められなかったので魔道書片手にそう言っておいた。何時も通りの、とあるように紫さんは神出鬼没だから、急に来たと思ったら知らない内に帰ってしまっている。だから哨戒天狗の人達にとって、とても厄介で面倒な妖怪だという認識で広まっている。面倒だしもう放っておこうと考える人もいるとかなんとか…。

「はぁ、またあの人ですか。まったく仕方ない人ですね」

言うに漏れず、射命丸もその一人のようだ。やれやれ、と腰に手を当てて溜息を吐いているのだからそうなのだろう。何時も彼女が哨戒任務に当たっているわけじゃないらしいけど、普段哨戒任務に携わっている白狼天狗の手に負えないことや、何かしらの面倒事があれば射命丸に御鉢が回って来るらしい。本人曰く閑職。僕には閑職が何なのか解らないし、どういう経緯でそうなったのかは知らないけどそう言うものらしい。

「…にとりも隠れてないで出てきたらどうなの？」

「ははぁ、ばれてたか」

「うわっ！？　にとり居たの！？」

川の中から勢いよく飛び出してきた河童、河城にとり。自称・えんじにあとか言う珍しい玩具を扱う女の子で、僕の最初の友人。

「いやぁ、大和が何やら考えこんでて話掛けようと近寄ったらあの八雲紫が現れてね。ちょいと隠れてたのさ」

たぶん紫さんは気づいてたんだろうなぁ、と言わないのは優しさのつもりです。

「まったく…。ところで大和さん、その本はなんですか？」

「ああ、これは魔道書なんだ。さっき紫さんにもらったばかりだよ」

「「ええっっ！！」」

手に持った魔道書を指で指されたので答えてみると、大声を上げて驚かれてしまった。…うん、理由はなんとなく解る。でも間違ってたら紫さんに失礼だし、一応答えを聞いておくべきだと頭の悪い僕は愚考します。

「あれ？　おかしいところでもあった？」

「大ありだよ大和。あの八雲紫だよ？　何を考えているか解らない相手から滅多なモノ貰うんじゃないよ」

「そうですよ。絶対裏がありますって」

誠に残念ですが、考えていた通りですよ紫さん！　別に2人が特別キツイわけじゃないですよ！　紫さんの普段の行動がアレだからしかたないだけなんです！　そしてにとり、滅多なモノを創って僕で試そうとする君が言う言葉じゃないです。

「僕もさっき考えた。でも今度母さんが決闘するから、その力になればと思って持ってきたみたいなんだけど…」

「「えええええええ!?」」

2人から再び驚きの声が上がる。ええい、2人が驚くよりも僕自身が一番驚いているさ！　でもこれが変えようもなく引きようもない事実なんだから仕方がない。

「あんたあの伊吹萃香とガチンコするつもりなの!?」

「いやぁ、勢いでそうなっちゃった」

「大和さん死んじゃいますよ。それはもう、ぎったんぎったんにされるに決まってますよ」

「それくらい言われなくても解ってるやい！　でも『夢』の　為には負けられない闘いなんだ！　今からじゃ間に合うかわからないけど、それでも諦められないからこの本に書かれていることを少しでも習得ようとしてたとこなんだよ！」

そう言っても2人は呆れて声もでないようだ。それも仕方がないけ

どね…。何せ相手はあの伊吹萃香なのだから。妖怪の山の最大勢力。しかも鬼の中でも最も強い四天王の一人と闘うというのだ。二人にすれば自殺行為としか見えないのだろう。…間違ってはないんだろうけど。

…あれ？　それを二人が自殺行為と言うのなら僕はどうなるのだろうか？　……死？

「貴方は本当に、何時だって私を驚かしてくれますよね…」

「え？　何か言った？」

少し俯き加減で射命丸が何か言ったようだけど、顔が見えない上に上手く聞き取れなかった。反対に、隣に居たにとりには聞こえていたようで、肘で射命丸と突いてからかって？　いる。

「私が助けてあげるって言ったんですよ、大和さん」

そんなにとりを脇で固める射命丸が、少し顔を紅くしながら嬉しいことを言ってくれた。…聞き間違えじゃなければ、どうやら手伝ってくれるらしい。

「それって、修行を？」

「他に何があるんですか」

「わたしもわたしも！　わたしも手伝うよ！！」

「にとりも！？」

ハイハイッ！　と腕を伸ばしながら自己主張をするにとり。でもにとりって玩具弄り以外に何が出来るんだろう…？　実際に戦っているとこ見たことないし、どれだけ強いのかも解らない。何よりにとりが闘う姿なんて想像出来ないんだよなぁ…。

「そのかわり絶対に勝ってもらうわよ、大和」

「……」

そんな風に思っている射命丸の顔を見つめていると、これもまた嬉しい単語が聞こえてきた。ちょっと前まではその名で呼ばれていたのに、今じゃ『さん』　付けされて呼ばれなくなっていた僕の名前。

やっぱりそう呼んで貰えるほうが僕は嬉しい。だから笑顔になる。

「…なによ」

「いや、射命丸に呼び捨てされるのと普通に話されるのが懐かしくて」

「はは、大和も一応鬼の一味だからね。文も気を遣ってたんだよ」

「仕事中は今まで通りに話すわ。私のことも文でいいから」

「わかった。文、にとりもよろしくね」

「任せなさい！」

今日からは今まで以上に楽しくて波乱な日々になりそうだ。

「ところで、決闘の日は何時なんだい？」

「次の満月」

「はぁ、大丈夫かしら」

苦しさの方が多いかもしれない…

特訓特訓、また特訓（前書き）

一応、文・にとりとの過去編とかも考えてたりします。機会があれば上げます。８月６日改訂

特訓特訓、また特訓

～数日後　妖怪の山、某所～

「ほらほら、避けないと体がバラバラになるわよ！！」

声を張り上げる文の扇から、可視できるように調整された風の刃が放たれる。

「このっ！！」

対する僕は足に魔力を集中。魔力によって強化された脚力で風の刃の中を駆け巡る。ある程度避けると同時に足裏の魔力を爆発させて急加速、文に近づく。

「接近戦なら！！「甘いわねぇ」えッ！？」

風の刃を抜けて近づけた時にはもうその姿はなく、自分の背中が向いている方から声が聞こえてきた。だがこの状況を僕は既に『視ていた』

「甘いのは、どっちかな！？」

振り向かず、文が今居るであろう場所に準備していた魔力糸を放つ。まだ直線的な動きしか出来ないけど、今のような場合にはそんなことは関係ない。文に向かってまっすぐ進むだけで脅威になるのだから。

「危なッ！？」

それに驚いた声を上げてた文は全速でその場を離脱する。僕の放った魔力糸は目標を失い、本来切り刻むべきだったものとは違う木々を切り倒していく。

「逃がすか！！」

後ろ向きで逃げる文に追撃の手を緩めることはしない。再び魔力糸を文に向って放つと同時に、僕も再び加速して文に迫る。行ける！　初勝利は目の前だ！　放った魔力糸を見て確信するも、しかし真正面からでは相手が悪かった。

「風よ！！」

文の扇から放たれた突風により糸は吹き飛ばされ、

「ぷぎゃっ！？」

僕も一緒に飛ばされて木に当たってとまった。

「はい、そこまで～」

僕達の勝負を見ていたにとりがそう勝敗を着けた。…ぉおう、受け

身を取れずにぶつかったせいか頭がクラクラする。

◇◆◇◆◇◆◇

「えーと、これで文の３０戦３０勝０敗だね。おつかれ」

あの日から１０日。身体強化と魔力糸が形になった後、大和はすぐに文との実戦訓練に入った。もっとも二つとも形になっただけで、後は時間の問題で実戦のなかで鍛えるしかなくなったんだけども。そんな中での魔力糸の運用だけど、まだ直線的な動きしか見られない。それでも大和の魔法は日に日に上達していっている…はずだ。

ただし、大和には圧倒的に足りてないものがあった。

「はぁ、もうちょっと燃費がよければねぇ」

そう、大和には魔力が足りない。大和自身の魔力はそれなりにあるはずなのだが、彼の『能力』　を補うには魔力が少なすぎるのだ。

「大和の『未来を視る程度の能力』　は確かに強力だ。文もさっき危なかったし…だからこそもったいないんだよなぁ」

大和によると、集中すれば次に相手が何をするかが片方の目に視えるようだ。だから私たち二人は大和の能力をそう呼ぶことにした。しかし、

「大和自身が違うと思うって言うんだよねぇ」

本人が否定している、と言うことはまだ何かあるのかも知れない。実際、大和が言うには別の何かを感じると言っていた。

「どっちにしても、使いこなせなければ意味ないけどね」

私は苦笑しながら大和を介抱している文に近づいていった。

◇◆◇◆◇◆◇

ふう、今のは少し危なかった。危うく三枚におろされるところだったわ。まったく、本当に厄介な能力ね。未来を視るだなんて、こっちの動きが読まれているんじゃたまらない。

それに大和自身も強くなっている。魔力による身体強化、それに糸。この二つがある今の大和なら、そこいらの雑魚には負けるとは思えない。強さ的には、雑魚のちょっと上ぐらいかしら？下級妖怪には勝てるとは言わないでも、負けることはまず無いわね。

…それにしても急激に強くなっている。これほどの伸びは異常と言ってもいい。。四六時中一緒にいるのにわからないなんて、いったいどういうことなのかしら？

「いてて、文はやっぱり強いなぁ。あの糸も当たったと思ったんだけど」

「伊達に上司に喧嘩売ってるわけじゃないわよ。あの程度じゃ私はやられない。でもいい攻撃だったわね」

実際はちょっと、ちょっとだけ危なかったことは伏せておこう。大和を調子に乗せても面白いなんてことないし。なんというか、私も私で負けず嫌いなのだ。

「わたしは結構いい線いってたと思うんだけどな。文も危なかったんじゃないの？」

うっ、このまま流して余裕の私を見せつけようとしていたのに、横から口を挟まないでよにとり。大和が調子にのるじゃない。

「へー、中々よかった？」

「うん。まあまあじゃないの？　燃費の悪さ以外」

「それは言わないでよ」

それは私も思うところだ。大和の魔力はそれほど低くはないはず。なのにそれが活かせていないのは余りにももったいなさすぎる。彼の言う通り、他に何かあるのだろうか？

「さあ、もう一戦するわよ。時間は限られているんだから」

本当、大和と一緒だと退屈することがない。

かくして、決闘の幕はあける。勝つのは息子か？それとも母か？

～その頃の母～

もそもそ、ざわざわ

「大和が帰らないのが心配なら様子を見に行けばいいじゃないか」

「そうは言っても勇儀！わたしはあんなこと言ったんだよ！どんな顔して会えばいいんだよ！？」

あーだこーだと、大和の事となると五月蠅いやつだよまったく。はぁ、早く満月の日になればいいのに。

特訓特訓、また特訓（後書き）

ここで一つネタばれです。
大和の能力に関してですが、未だ扱いきれていないところを無理やりに引き出しているために燃費が悪いということです。

僕と母さんの第一戦（前書き）

8月7日加筆修正

僕と母さんの第一戦

夢を見ている。寝ている時、それが夢の中だと解る時があるだろうか？　目の前にいる自分を上から眺めていたり、はたまた夢の中の自分に乗り移っているかのように体験したり…。

今の僕は、そうやって上から自分を眺めている状態だ。身体つきが違うけれど、何故だかそれが自分だとはっきりと解る。そして目の前には紅白の服を着た一人の少女がいる。その少女が僕に何かを言っているようだけど、それが上手く聞き取れない。楽しげに僕と会話している女の子。君は…誰？

「……」

何を言っているのか聞き取れないけど、夢の中の僕には聞き取れたようだ。夢の中の僕も楽しそうに笑って返事を返す。

「分かってる。一緒に居るよ、×××」

世界が光に包まれ、僕の夢が終わった。

◇◆◇◆◇◆◇

う〜ん、良く寝たなぁ。昨夜は文とにとりに今までのお礼を告げてから、久しぶりにぐっすり寝たんだっけ？　母さんとの一戦を前にしっかりと休めるかどうか不安だったけど、何とまぁ図太いことで。それだけ疲れてたのかも知れないけどさ。

そういえば何か夢を見ていたような気がするけど、いったいどんな夢だったんだろう？　よく憶えてないや。

ま、いっか。それより今日は母さんとの決闘の日だ。今日の夜には僕の一生を懸けた絶対に負けられない闘いが始まるんだ。今日の為に修行もしたし、魔法も憶えた。ぐっすり眠れたおかげで体調も万全だ。なにより僕には応援してくれる人がいる。負けるわけにはいかないぞ、大和。

一人気合いを入れ、朝食を採りに川へ向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

遂に大和との決闘の日がやってきた。この決闘はあの子の一生を懸けた闘いになるだろう。旅に出たいと愚図っていた小さな大和が、今度は自身の力を持ってその意志を証明してくる。

だけどあの子は絶対に旅に行かせない。行かせるわけにはいかないんだ。あの子がなんであんなに旅に出たがっているのか…。たぶんわたしの考えている通りだと思う。でもそれだけは駄目だ。それはわたしも、きっとここに居る皆も望んでいないだろう。だからわたしはあの子を止めてみせる。

わたしは鬼。頑固で我儘な鬼だ。

一人静かに、日が沈むのを待つ

◇◆◇◆◇◆◇

凄い面々ね。

大和が萃香様と決闘する場所に来た私の最初の感想がこれだった。今宵は千客万来。鬼はもちろんのこと、私たち天狗や河童、それにあの八雲紫も見に来ている。それだけ大和が大切に思われているのだろう。…半数以上は酒の肴や賭け事にするつもりだろうけど。

特訓を手伝って上げた私から言わせてもらえば、大和が萃香様に勝てる確立は無に等しいだろう。第一、私にすら攻撃を掠らせることが出来ない大和が勝てるわけがない。でも私は彼に勝つと信じたい。勝って、自分の夢を追い続けて貰いたい。それが私の望みだ。

私がここまで大和に固執するのには訳がある。

私は妖怪・鴉天狗として生まれ、すぐに妖怪の山の天狗たちの仲間に迎えられた。生まれ持った素質が高かったらしく、当時は天狗の長の天魔様や幹部の大天狗様たちから未来の天狗社会を担う一角として期待されていた。

だがそれは、本当に私の人生なのだろうか？　期待を受け、それに応えるため切磋琢磨する。地位を築き、天狗社会の一躍に力を入れる。確かにそれは素晴らしいことだろう。だがそこに自分の意志は

全く含まれない。あるがままを受け入れ、大衆に流されるだけの人生。それでもそれが私の人生だ、そう諦めた色の無い世界で私は彼と出会った。

河童と人間。

最初はその二人が大嫌いだった。河童はまだいい。だが人間は別だ。奴らは私たち妖怪を滅ぼす。人間は妖怪の敵であり、逆もまた然り。

その人間が馴れ馴れしく話掛けてくる。何故天狗は早く空を飛べるのか、鬼とどっちが強いのか、等とどうでもいいことを延々と続けられた。余りにも鬱陶しいので食べてやろうか、あの時は本気でそう思った。実際、大和が萃香様の義理の息子だと聞かされていなければ本気で食べていただろう。

私がいくら無視しようと彼は諦めずに話掛けてきた。そんな彼に対して無視を決め込んでいると、隣から嗚咽が漏れてくる。

拙い。非常に拙い。

人間の子供とは言え、鬼の御子息。ほんの些細な出来事でも大事に発展する可能性すら秘めているこの子供を私は持て余していた。どうしようもなくなった私は仕方なく話を聞いてあげることにした。するとどうだ、彼は私よりも多くの事を知っていた。あそこはよく鬼が魚を取りに行く、あそこでは白狼天狗が休憩に使っている、など沢山のことを。話を聞けば聞くほど、私は彼に対する興味が沸い

ていった。

そうやって彼との日々を繰り返すうちに、自分の中に何かが生まれていくのが解った。それは楽しいという感情だった。だから私は彼に聞いてみた。私と一緒に居るのは楽しいのか？　今の私は、上の良いなりになっている私は楽しいと胸を張って言えるのか、と。

「天狗さんと一緒にいるのは楽しいよ！　でも天狗さんが楽しいと思えないんだったら、きっと楽しくないんだと思う…。天狗さんは、楽しい？」

それに対する返答は言わなくても解ると思う。

堅物だった性格も、気が付くと今みたいになっていたわ。おかげで上司に喧嘩売って、別に干された訳ではないけどそれなりに危ない橋も渡る嵌めにもなった。でも後悔なんてしてなしするはずもない。

そんな私を変えた彼がする話の中で、私は彼の夢を聞いた。旅に出たい。そう聞いた私はどうにかして彼の力になれないかと悩んだ。

そう思い続けていた時に彼と鬼の決闘の話を聞いた。彼の力になれる。私は表には出さずに喜んだ。だから私は大和を応援する。私に人生の楽しさを教えてくれた小さな存在が、より楽しい人生を送れるための助力をしているのだ。

「勝ちなさいよ、大和。あなたのこれからを始めるために」

◇◆◇◆◇◆◇

「それでは決闘は始める！　大和は萃香に一撃入れれば勝ち！　萃香は大和を降参させれば勝ちじゃ！　よいな！」

「はい」

「うん」

「では・・・始め！！」

開始と同時に魔力を足裏の送り爆発させ、急加速して母さんに肉薄する。僕たち三人で考えた母さん対策の結果、僕が唯一勝てる見込みがあるのは開始後のわずかな時間のみだと結論が出た。母さんは

僕がここ数日でどれだけ成長したかを知らない。その虚を突き、速攻で一撃当てる。これが僕らの作戦。

出し惜しみをしている暇はない。最初から全力で行くしかないんだ！

「やっ！！」

母さんに向かって真っ直ぐに拳を打ち出す。身体強化の恩恵か、拳が風を切る音が辺りに響く。

「おお！？」

しかし、その一撃はあっさりと避けられてしまった。でも母さんの顔は驚きに満ちている。僕の成長具合を図り間違えたのか、どれにしろ、今が好機だ！

「やぁっ！！」

足払い、そのまま回転して回し蹴り

「わっわっわっ！？」

片足を上げて躱したことで体勢が崩れた!?　今だ！　体中の魔力を右拳に集中させて突きを放つ！

「だぁぁぁぁぁぁぁあ！！」

突きが当たると、その衝撃で同時に辺りが土砂煙に包まれた。手応えあり、かな。出来ればこれで決まっていてほしいんだけど…

「そんなに甘くないかぁ…」

「いやー驚いたね。修行してたのは知ってたけど、ここまで強くなってるとは思わなかった」

煙の中から楽しそうな母さんの声が聞こえると同時に、辺りを包んでいた土砂煙が風によって吹き飛ばされた。腕をぶんぶん振り回す風圧だけで土砂煙を吹き飛ばしたようで、何が楽しいのか今も元気よく腕を回している。うぅ、こんな何気ない動作でも格の違いがはっきりと見えるなんて反則だよ。

「じゃあ今度はこっちからいくよ」

うっ、万事休すか!?

◇◆◇◆◇◆◇

開始当初からつい先ほどまでの大和の攻撃は見事だった。下級妖怪くらいなら一撃は確実に入っている攻撃だったからね。短期間でよくここまで成長したもんだ。

でも残念ながら、私（ゆうぎ）や萃香には意味はないだろけど。奇襲という選択肢は中々よかったんだけどねぇ。今はもう萃香の攻撃を避けるだけで精いっぱいになっている。

当初の予想通り、早くに決着が着きそうだね…。まぁ結果がどうあれ、大将が上手く纏めて大和の旅を認めさせるだろうけどさ。どうせ今回は大和の覚悟を見極めるためだし。…萃香自身は本気で止めさせるつもりなんだろうけどさ。

それにしても見物客が多い。そう思い、ふと周りを見渡すと大和の友人がいた。確かあの二人は大和と一緒に修行もしていた奴らだ。今も真剣に二人の闘いを見つめている。

「お二人さん、ちょいと聞きたいことがあるんだが」

二人は私に話かけられるとは思ってもみなかったのか、地蔵のように固まってしまっている。まったく、私のような鬼に話かけられた奴はこいつらみたいに固まるか、混乱して襲いかかってくるかどっちかしかいないのかい？　少しは根性見せてしゃんと立ってもらいたいもんだ。それを無視するか、力でねじ伏せてから話をしなければならない私らの手間を考えてもらいたい。

「大和の奴、あれでもう引き出しは全部出しちまったのかい？」

「いっいえ、大和さんはあと二つ手を持っています…」

ほぅ…少し度盛りながらもしっかりと返すとは中々見どころがあるじゃないか。流石は最近噂の鴉天狗と言うところか…。河童の方は…こっちは駄目だな、ビビっちまっている。しかし大和の奴、あと二つも残しているのか。これは大番狂わせがあるかもしれないね。

「それはなんだい？」

「魔力糸と、あとは「彼自身の能力よ」　え？」

豪胆にも私の顔を真っ直ぐと見つめながら天狗が私に返そうとすると、後ろから聞きたくない声が聞こえてきた。

「あと一つは彼自身の『今の』　能力ですわ」

八雲紫。最近になってよく山に現れるようになった意味不明な妖怪。だいたい隙間妖怪、なんて名前からして意味不明だ。

「あの子が能力持ちなのは知っている。ほら、今も未来を視る程度の能力を使ってるじゃないか。『今の』　能力ってことは、あの子にはまだ何かが隠されているとでも言うつもりかい？」

だいたい、こいつの言い方は何時も引っ掛かる。真実を言っているようで、実際は何も教えていないようにもとれる。腕っ節の力だけじゃなく口も上手い。こういった手前が一番厄介だ。

「さて、その質問にはお答えしかねますわ」

口元を扇で隠して笑みを浮かべるこいつ、殴ってやろうか？　そう睨んで見てやると、あいつはクスクスと笑い続けながら下がって行った。ちっ、せっかく良い気分だったのに邪魔が入っちまったよ。こうイラついた時には酒も不味くなる。ああもう、早く終わって宴会と洒落込みたいね。

◇◆◇◆◇◆◇

「ほら、逃げないと痛いよ！」

「こっこのッ！？」

強い。全く歯が立たない。

「なんだいこれ？　こんな細い物が効くわけないじゃないか」

蹴りや拳は片手で防がれ、魔力糸は無残に引きちぎられた。主導権を完全に握られてからは能力を使い、逃げ回ることしか出来ずにいる。

それも今、母さんの拳が一発入って終わった。

「降参しな。お前じゃ私に一撃当てることもできやしないよ」

地に伏した僕に母さんは降伏を促してくる。確かに、僕にはもう勝ち目はないだろう。

もう、いいじゃないか。僕はよく頑張ったよ。母さんは本気で止めるって言ったけど、本気なんて全然出してない。多分な手加減をされてもこの様だ。元々勝ち目の無かった勝負だ。諦めたって、別に誰も僕を責めやしないんだから。

心の何処からそう訴えてくるモノがあった。

「なんで私があんたの邪魔をするか、教えてやろうか？」

「……」

「あんた、魔法使いとか言う奴になって不老になるつもりだろう？魔法使いにはそれができるって紫から聞いたよ」

「ッなんで知ってるの！？」

ありえない…このことだけはまだ誰にも話していない。姉さんや文たちにも旅のことはまだしも、魔法使いに関しては一言もしゃべってないのに。

「わかるさ、大和が何を考えているかぐらい。私はあんたの母親だよ」

「だったらどうして！？　不老になれば、ずっとみんなと一緒に笑える、みんなと一緒にいられるのに！」

「なればこそ、お前は人間でいるべきだ」

「え…？」

「お前は、まっとうな人間として生きて、幸せになるべきだと言っている！」

「か、母さん？　なにを言って…」

「……人間のお前が、なんで妖怪の山で暮らしているか考えたことはあるか？」

そんなの…あれ…？　僕は人間だ。でも周りに人間なんていない。

どうして？　今までそんなこと一度も考えたことがなかった。

「人間でありながら、親が鬼でおかしいと思ったことは？　自分が魔力を、人間の身でありながら強力な能力を持つことへの疑問は？」

「母さん何を「おまえは私たちが滅ぼした里の生き残りなんだ」

…え？」

「始まりは仲間の鬼が人間に負けたことだ。その鬼は正々堂々と闘い、その結果敗れた。悔しいことだけど、私たちはその鬼の死を受け入れたさ。けどそれと同時に嬉しかった。私たち鬼を相手に、真正面からぶつかり倒したんだからね。人間はまだ強い、私たちのいい敵なんだって。

私たちはそんな人間達に闘いを仕掛けた。前情報以上にあいつらは強かった。何人もの鬼が逝ったよ。一人一人の力も普通の人間より遙かに上だった。特に集団になると手ごわくて、手加減なんてできそうもなかった。

激戦の結果、気付いた時にはその村の住人は一人残さず倒れていた。でも生き残っていた者がいたんだ。赤ん坊故に闘う力を持ってなかった生き残り、それがお前だ。大和、お前はあの里唯一の生き残りなんだ。だからお前にはその里の誇り高き人間として生きて、幸せ

になってほしい。その為には私はどんなことだってしてやるつもりだ。

勝手な願いだとはわかってる。でも、これだけは譲れないんだよ」

僕はその村のたった一人の生き残りで、母さんたちはその仇…。自分勝手の罪悪感やらもあって、自分の願いだけで僕を育ててきた…？。

「……はは、そんなことか」

でも、そこにはちゃんと息子への愛があって

「なんだって？」

「だって、母さんは僕に幸せになって欲しいんでしょ？　僕は今も十分に幸せだよ。母さんがいて姉さんがいる。文もにとりも、紫さんや皆もいるんだ。
これだけの人に囲まれて、幸せじゃないほうがどうかしてるよ」

それを一身に受けている。何も悩むことないじゃないか

「なら、今のままでいいじゃないか。魔法使いになんて、旅なんかにでなくたって、いいじゃないか」

元々居た村のことなんて知らない。本当の親の顔も憶えていない。けれどこれだけははっきりしている。

僕の親は母さんだけであって、この夢は誰の為でもない。母さんの為でもない。ただ、母さん達と一緒に笑って生きたいと言う僕の我儘。その我儘を大切に、僕だけの幸せのために――

「僕は我儘だから、今のままじゃ足りない。人としての寿命だけじゃ、全然足りないや。だから、ここで母さんを越えて旅に出るんだ！」

諦めることなんて出来やしない！　出来る限りの最高の笑顔を浮かべてそう宣言した。

「我儘なのは私に似たのか、この馬鹿息子。だったらこのわたしを越えて見せな！！」

手加減されても尚、力強い拳が迫る。けれどその拳筋は視えている。躱す為に身体を捻る。すると同時に、何故か母さんの拳が凄く遅くに見えた。まるで時間の進む早さが遅くなったようだ。そんな不可思議な空間の中、僕は最後の力を振り絞って右手を振った。

僅かな魔力すら籠っていない僕の拳は、それでも母の頬に当たった。

未来を視る目。それとは逆の目が淡く輝いていた。

◇◆◇◆◇◆◇

大和が萃香に勝った。この出来事は雷鳴の如く妖怪の山に響きわたった。正に番狂わせの結果だ。大和に賭けていた者は大勝ちしているでしょうね。

だがそんな事はどうでもいい。私の思い通りにコトを運ぶには、大和の勝利が今回の絶対条件。

その為に彼に魔道書を渡すのと同時に、『器』　を広げ、月の魔力で満ちる今日に合わせて魔力量を増やし、無理やり能力を解放させたのだから。半ば賭けだったとはいえ、上手くいったのは良好だと言える。しかし、本来の彼はこんなものではないはずだ。

まだまだ彼には上を目指してもらわなければならない。

「本当に面白い」

笑いが止まらない。自分の思い通りに進めばいいと思ってはいたが、まさかこれほど筋書き通りに進むと何かしらの作為すら感じてしまう。

「順調にいっているようですね、紫様」

「ええ、楽園のために必要な準備は全て上手くいっているわ」

主の思惑が思い通りに進んで嬉しいのか、それはよろしいことで、と九尾の狐は頷いていた。

「私の描く世界には彼のような存在が絶対不可欠。この程度で満足してもらっては困るわ。もっともっと強くなってもらわないと」

頭の中ではもう次の計画を練っているであろう主を見て、従者は件の少年の運命を哀れんだ。これから先、私たちは荊の道を進むだろう。その先で一番辛いのはあの少年になる。

そう思うと、彼を想うことをやめることが出来ない従者であった。

「けれどその前に、大和が居なくなることで萃香が暴れないか心配だわ…」

紫様も、普段は友人想いなのだがな…。

従者は静かに、しかし深く溜息を吐くのであった。

いってきます（前書き）

8月11日加筆修正

いってきます

母さんとの決着のあと、そのまま倒れ込んだ僕は二日間眠り続けた。
大母様が言うには限界近くまで魔力を行使したことと、知らず張り詰めていた決闘への気持ちが無くなった解放感のせいだとか。…鍛え方が温い軟弱者とも言われたけどね！

そして決闘から三日目、旅仕度を終えた僕は妖怪の山の麓まで下りていた…んだけれども、

「やっぱり嫌だ～。大和ぉ、母さんも一緒に行くぞ～～～！」

「だーもう！　いい加減に落ち着け、この親馬鹿！！」

「馬鹿でもいい！　だから行かせてくれよ勇儀ぃ～」

こんな調子である。酒を飲もうが飲まれまいが、下の人がいる時に威厳だけは忘れずにしていたはずなのに…。普段の母さんとの違いがありすぎて開いた口が塞がらない。

それに…息子は恥ずかしいです、母さん。特に見送りに来てくれている友人二人の、『この鬼いったい誰ですか？』　って笑いながら

訴えてくる視線が。

本当に何時もの母さんは何処に行ったの？　あれだけ鬼を怖がっていた文やにとりが、今では笑いを堪えるのに必死になっているんだよ？

「なっ仲良しなんですね。くくっ」

文さんや、その程度の感想ならむしろ欲しくないです。そんな笑いを含んだ感想なら、正面きって馬鹿にされたほうが楽だよ。お前の母ちゃん可笑しいな！　って。ほら、笑えるでしょ？　笑えよ。

「あ、文。わらっちゃ失礼だろ、ぷぷ」

にとりも笑っている。鬼様は怖くて恐ろしい妖怪じゃなかったのか河童さん。失礼な奴め、鬼の御前であるぞ！　とでも言えばいいんだろうか？　だったら恐怖で震えるにとりに戻るかも。…ああ、でもやっぱりすぐ近くに鬼がいるのは怖いみたい。足がカクカク震えている。

「はぁ、せっかくの旅立ちだっていうのに…」

絞まらないんだよなぁ。よし！　頑張って行って来い！　みたいな感じで力強く押し出してくれるか、涙無しではいられない感動的な別れだとばかり思ってのに…はぁ。

「いいじゃないですか。せっかくの門出が堅苦しいのも嫌でしょう？」

「そりゃそうだけどさ。普通は激励の言葉とか言うのが普通じゃないの？」

「そうですねぇ。…なんだったら抱きしめて行ってらっしゃいの接吻でもしましょうか？」

「やめてよ。『頑張って』　って言ってくれるだけでいいから」

「つれないですねぇ」

冗談なのか本気なのか。僕だってもう１０歳だし、そういうことがどういう意味で行われるかくらい知ってるんだよ？　確か…接吻したら結婚で子供が出来る。

紫さんがそう言ってた。で、責任？　とか言うのを取らされる。だから大きくなるまでしちゃダメだって言われた。だから冗談でも真面目に拒否しなさいだって。

どうだ！　僕の勉強は完璧だろう！？

「でもそろそろ行かないと日が暮れるね」

「やまとやまと～、母さんも行っていいだろ～？」

「あんたは留守番だって言ってるだろう！　いい加減にしつこいよ！！」

ほんと、母さん…と皆に構っていたら日が暮れるかも。母さんが僕のことを心配してくれるのは凄く嬉しい。でも僕だって母さん達と離れ離れになるのは辛いし悲しいんだよ？

でもね、後でいっぱい一緒に居られる時間を増やすために旅に出るんだ。だから僕も母さんも、今は涙を堪える時なんだ。

「ちょっと待って。餞別を…ってあれ？　何処にしまったのか…。ああ、あったあった。大和、これあげるよ」

笑い終わった後はだんまりで何をしていたのかと思えば、にとりは自分の鞄から何かを探していたらしい。餞別…ということは贈り物なんだろうか。

「何この黒い箱」

渡されたそれをおっかなびっくり手に取ってみる。…ああ、またにとりのトンデモ発明品か。あの悲惨な記憶が頭を駆け巡っていくね…。

「これは魂奪ってごめんなさい！　の設計思想を元に造られた写真機…カメラだよ」

ちょっと待って!?　魂奪ってごめんなさい！　って何!?　さ、流石に冗談…だよね…？　それに…今回は爆発しないよね？

「何が出来るの？　まさか本当に魂獲ったりしないよね…？」

カメラ片手に聞いてみる。まさかとは思うけどそこは河童の発明品、もしもがあるかもしれない。

「そこまで高性能じゃないよ。映像、まあ今日の前にある光景を記

録することができるすぐれものさ！　もちろん人だって写せるよ！」

そこまで高性能じゃないって、本気でそういうカメラを造ろうとしたの！？　…よかった、出来なくて本当に良かった…。もしそんなもの渡されでもしたら怖くてやってられない。

「残したい光景があったらじゃんじゃん使ってね。あと、珍しい光景があればとにかく撮っておくこと」

「…素直にお土産に、って言ってくれればいいのに」

「あはは、まあそう言うことで。わたしからは以上だよ」

「いいなー大和さん。ねぇにとり、私にもかめらちょうだいよ」

カメラにそれ程興味を持ったのか、目を輝かせている文がにとりに迫って行った。文も懲りないなぁ。前造った妖力増加装置で一番の被害者は文なのに。稼働させたら暴走開始で大爆発。服は吹き飛び髪の毛はボサボサ、それを目の前で見ていた僕まで吹き飛んだ思い出を忘れたとは言わせないよ？

「そうは言っても、まだ試作段階だからそれしかないんだよ」

「僕で試作品を試さないで！？」

今試作品って言ったよね！　ほんとに大丈夫なの！？　爆発とか、本当にもう勘弁だよ！？

「大丈夫、たぶん大丈夫。実験段階では爆発しなかったからさ、ね？」

ね？　じゃないですよ！？　そんな笑顔で誤魔化されてたまるか！

「文には正式タイプを贈らせてもらうよ。何時も新作品を試させてもらってるし」

出来れば僕もちゃんとしたのが欲しいな～、なんて…。言っても無駄なんだろうなぁ。

「やった！　そうだ、私もこれを大和さんに送ろうと準備してきたんですよ」

「…これって笛？　文忘れた？　僕はこの手の物は苦手なんだよ」

何を隠そうこの大和、この手の娯楽に関してはてんでダメなんです。どれくらい駄目かと言うと、宴会で酒の入った鬼が裸足で逃げ出すくらい、と言えばどれ程のものか想像つくと思う。

「だからですよ。むさ苦しい修行ばかりでなく、息抜きにでも使ってください。少しは教養も身につけないと気になるあの子を落とすことは出来ませんよ？　あと、その笛の音色は特殊ですので風を伝って私に聞こえるようになってます。だから何かあったら思いっきり吹いてくださいね。５秒で駆け付けますんで」

教養…宴会芸の間違いだと思うけど。それに５秒って何だ。文なら本当に出来そうで怖い。…まぁいいや、せっかく貰ったんだし暇を見つけたら吹くとしよう。

「…さて、じゃあ行きますか！」

「大和ぉ、母さんも「じゃあね大和。身体には気をつけて、無事に帰ってくるんだよ！」」

「やま「解ってます。姉さんも母さんのこと頼みます」

「まかせときな」

「…大和！」

「なに？」

無視しすぎたのか少しご立腹な様子の母さん。頬を膨らませて怒りを表しているけど、少し子供っぽく見えてしまう。背の高さがそれほど変わらないからなのかな？　…でも何だか今までとは違って、今日は母さんの新しい一面が見えて嬉しく思う。…これが素なのかもしれないけど。

「お前に伊吹の名前を授ける！」

「…今更？」

珍しく真剣な表情をして何を言うかと思えば、いきなりそう言われた。実は、僕は今まで伊吹の性を名乗ることを許されてなかった。つまり伊吹萃香の息子だと周知はされていたけれど、ただの大和でしかなかったってこと。母さんが何で伊吹を名乗らせてくれなかったのか知らないけど、僕は自分のことを伊吹大和だと思ってきた。だから今更なんだ。

「お前はこれから名実共に伊吹大和と名乗るんだ。この意味が解るか？」

「解りません。でも、なんで急に？」

本当に今更で、急だ。

「そこら辺の妖怪や人間にとって、鬼の名での伊吹は畏怖の対象だ。敵を近づけないのと同時に、多くの者に命を狙われる恐れがある。だからお前に名乗らせなかったが、今となってはそれも必要ないだろ。だから誇れ。伊吹の名を持つ者としての誇りを持って、前に進むといい」

今まで母さんが僕に伊吹を名乗らせなかったには理由があったみたい。僕を無闇に危険に晒さないために、態とそうさせていた…。もっとも、僕が伊吹を名乗るに相応しくないと思っていた可能性もあるのかもしれない。だって僕、弱いし。

「お前にその覚悟はあるか？」

「あります」

でも、これからはそれくらいの覚悟がなければ一人旅なんてできや

しない。まして、生きて帰って来ることなんて尚更だ。

「なら私から言うことは何もない。…行って、無事に帰って来い。私の最高の息子」

「行ってきます、母さん。それにみんなも、どうか元気で！」

最後に抱き合って、最後の挨拶をする。母さんの腕が少し震えていたのは、僕を心配してくれているからなのだろう。でも大丈夫。きっと、きっと帰って来る。約束する。

こうして僕は旅に出た。後からの別れの声が尽きることはないけど、僕は一度も振り返ることはなかった。次に会う時は僕が魔法使いになった時。皆と同じ土俵に立ち、もっと大きくなって無事に帰って来た時だ。だからその日までは……。

――――――――――――――またね！

「かくして少年は旅に出る、か。八雲の奴め、コトがうまいこと話が進んで今頃は一人笑っておるんじゃろな。…じゃが、果たして彼の者はお主の考えておる通りになるかの？　…私にはそうは思えんがの」

～大和を見送ってすぐ～

「勇儀ぃ～大和が行っちゃったよ～～」

「あ～もうほら、あたしの胸をかしてやるよ」

「…寂しくなるわね」

「わたしも胸を貸そうか？」

「いらないわよ、もうッ！」

いってきます（後書き）

本日二度目の投稿。だいたいここまでが第一章ってところです。
第二章の予告？みたいなのもできたんでオマケであげときますね。
読まなくても問題ないんでスルーしてくださって結構ですが。

予告編（前書き）

タイトル通りの予告編なので、過度な期待はしないでね。
ネタバレ全開・短くても問題ねえ！それでもＯＫという人はどうぞ！

＊追記　この後の話を全て投稿してから再び上げたので、過度なネタばれが含まれます。９月４日改訂

予告編

人の一生を語るにあたり、まずこれだけは知っておいて貰いたい。

人の一生は物語であり、歴史である。人の数だけある物語の中では自分自身がその物語の主役。周りを脇役が固め、己を題材にした一つの舞台として進んで行く。しかし自分もまた、他人にとっては脇役である。今ここにいる私も、そしてあなたも…

そして人の生み出す物語もまた、多種多様を極めている。激しい動乱の中を生きる物語もあれば、争いとは無縁の物語を紡ぐものもある。

――国の王として民を導く者

――王の剣となり、戦場を駆け巡る騎士

――莫大な富を得る商人

――舞台裏の歯車として生きる者たち、そして…

膨大な数で繰り広げられる舞台のなか、静かに光を放つもの。今はまだ、花咲く前の蕾のように。

――――奇貨、居くべし――――

物語とは過去現在未来、全てを知ってこそというもの。これから『先』を語るためにも、まずは彼の昔を語る必要があるでしょう。

◇◆◇◆◇◆◇

物語の始めは遙か昔のこと。燃え盛る村、倒れ逝く者たち。そして、彼らを倒す者たち――――――――

少年が鬼に命を救われてからはや6年。人間としての自覚が芽生え、人と妖怪の違いに苦悩し始めた少年の前に一人の妖怪が現れます。

「魔法使いという存在はね、不老になることだってできるの。だから、貴方の夢は叶うのよ」

それは、まるで甘い誘惑のようだった。妖怪にそう囁かれ、導かれた少年は新たな世界へと足を踏み出させる。しかし少年の夢は遙かに遠く、たった一人で手に届くようなものではなかった。その事実に少年は失意の底に沈みかける。

しかし天は少年を見放さなかった。苦悩する少年を救ったのは、少年に惹かれた二人の妖怪

「力になりたい」

きっかけを得た少年の物語は加速していき、そして遂にはその拳が鬼にも届いたのです。

そして少年は大空のもと歩みを進める。今のように、昔のように

母親を下した少年は山を下り、一人都を目指す。どのような出会いが待っているのだろうか。新たな出会いの予感に心を躍らせた少年の前に現れたのは、この世の者とは思えぬ髪を生やした少女。

「お前、弱すぎ」

山で培った常識は通用せず、力も通用しない。少年は自身の弱さを再び自覚させられる

「この本はどうやら大陸から渡ってきたらしい」

手に入れたのは一冊の魔道書。求め続けた夢への扉が僅かに開いた瞬間、少年は何を思ったのか？

「妖怪を憎みはしても、好むやつなどおらん」

人と妖怪。自身の考える範疇を越えた問題に直面する時、少年の出した答えとは…

「伊吹萃香、お前の相手は僕だ！」

これは、小さな少年の物語

――――――――さあ、物語を紡ぎましょう

人の出会いは一期一会（前書き）

ここからが第二章ってところです

８月１１日改訂

人の出会いは一期一会

「妖怪の山があんなに遠く…。ええい、振り返るのは止めよう！」

妖怪の山が遙か後に見えるまで歩いた僕は、当初予定していた通りに都を目指すことにした。

都はあらゆる情報や物が集まる場所。

母さん達の受け売りだけど、都なら魔法使いについて詳しい人もいるのではないかと思ったからだ。それに都はこの国の中心だとも聞いた。魔法使いの情報以外にもいろんな物がたくさんあるんだろう。見たこともない物も沢山あるに違いない。今から楽しみだなぁ。

とは言っても、わざわざ都くんだりまで遊びに行くわけではないんだ。少しでも強くなるために道中は魔法糸を練習しながら歩こう。いくら未熟とはいえ、母さんに素手で引きちぎられたのは衝撃だったからなぁ…。あれ、太い木も真っ二つになるんだよ？

「しかも僕の努力を笑って引き千切られたし」

いくら効かないからって、少しくらいは躊躇ってくれてもいいと思

うんだ。情け容赦なしに引き千切られた僕の残念な魔力糸。自信があっただけに本当に悔しかった。だから練習しよう。悔しかったらそれを糧に、次のために頑張ればいいんだから。

「う～ん…。極めれば鬼でも触れないくらいになるのかな？」

持っている魔道書を読みながら魔力糸を出してみる。母さんに引き千切られたこれがねぇ…。なんだろう、まったくそういう感じには見えない。

――ここで一つ言っておくと、大和に魔法の才能はあまりない（本人は気付いていないが、紫や鬼神は知っている）　つまり、達人になるには相当な努力が必要なのだ。もっとも、努力したところでなれる保証は何処にもない――

「とりあえず、右の指全部で操れるようになろう」

◇◆◇◆◇◆◇

「や、やっと人里に辿り着いた…」

妖怪の山を出て二日。歩き続けて漸く小さな人里に辿り着くことが出来た。人里離れた場所で生活してきたけど、まさか山から人里までがこんなに離れてるなんて思わないよ。…決して道に迷ったとか、そんなことはない！

それにここ二日は木の実やら何やらをを食べて空腹を紛らわせていたけどもう限界だ。人の手が入った料理が…母さんの焼いた魚が食べたい…。母さんの笑顔を思い出してちょっと涙目になりながらも、何か食べられる場所を探して歩く。すると料理を運ぶおばちゃんの姿が目に入った。

ここで一息着こう。そう思った僕はおばちゃんのお店の中に入った。これが椅子…なのかな？　妖怪の山には造られた椅子が無いから合っているか解らないけど、人が造った椅子らしきものに座ってみた。おお！？　こんな細い足なのに壊れない！　そうやって少し感動し

ていると、おばちゃんが歩いてきた。

「坊や一人？　親御さんはどうしたの？」

「母さんのこと？　いないよ。今は僕一人で都に向かっている途中だから」

「…ああ、それは悪いことを聞いたねぇ。ここいらは妖怪もよく出るし、坊やも辛いだろうけど頑張んな。負けんじゃないよ」

「？　はぁ、ありがとうございます」

「坊やは見た所手持ちが無さそうだね…。まぁ一度きりだし、おばちゃんからの贈り物だと思って頂戴。ちょっと待っておいてね、すぐに温かい物を持ってくるから」

そう言っておばちゃんは下がって行った。実は僕、僕以外の人間とは初めて会うんだけど凄く優しいし、どこも鬼の皆と変わらない。種族が違うだけで、僕たちの違いってほとんどないんだね。

そうやって鬼と人間の違いについて考察していると、おばちゃんが手の込んだ料理を持ってきてくれた。見たことの無い料理ばかりで、何から食べればいいのか迷ってしまう。

「そう言えば、坊やはあの噂は聞いたかい？　白髪の妖怪退治屋の話」

「白髪の妖怪退治屋？」

出された料理を手掴みで口に運んでいると、おばちゃんから何やら興味深い話が振られて来た。…何だこの料理、山の魚や木の実も美味しいけど、これも凄く美味しいぞ！

「そうよ坊や。坊やも知ってるでしょうけど、最近ここらの村々でも妖怪による被害があったの。その村の生き残りが口々にこう言ってるらしいわ。妖怪が現れる黄昏時、闇を切り裂く白髪が現れて妖怪を滅す。その人の御蔭でその村は助かったそうなの。だから白髪の妖怪退治屋って通り名が付いたらしいわ。でも白髪でしょう？誰も彼もが気味悪がって、しっかりとその人の顔を見た者はいないそうよ。実は妖怪じゃないかって噂もあるくらいなの。だから坊やも気をつけるのよ？」

「解りました」

白髪の妖怪退治屋かぁ…。妖怪の山にはそんな噂話は聞こえてこなかった。これでも僕は妖怪の山の中ではいろいろと詳しいつもりなんだけどね。反対に僕を知っている人も多いけど。母さんたちと一緒に居ると色々と、それはもう色々あった。そのおかげで山の中じ

ゃあ僕を知る人が多いんだよね。

だから何かあれば教えてくれる人が居る思うんだけど、そんな僕も白髪の妖怪退治屋なんてのは天狗や鬼からも聞いたことはない。

と、言うことでそれほど強い人じゃないんだろうと一人完結してしまった。でも、もしこの里に来るのなら会ってみたい気はする。

◇◆◇◆◇◆◇

～夜　村の外れ～

日が傾いて山に半分沈みかけた逢魔が時、僕は白髪の妖怪退治屋がいつ現れるか楽しみに待っていた。やっぱり噂の退治屋に会ってみたくなったからだ。もしかしたら会えないかな？　と思って能力を使って視たところ、今日の夕方にその退治屋がこの村に現れることが解ったから。

長い白髪をしたおそらく女の人、が大蜘蛛を相手に闘っている姿が今でも目に焼き付いている。それ程に女の人の後ろ姿がかっこよかったってことあるんだけど。

「早く現れないかなぁ」

そろそろ日も暮れて来た。人里から少し離れた地面に座って待っているけど、女の人はまだ来ない。未来ではこの近くだったはずなのになぁ…。

その先入観に囚われていたせいか、僕は後に迫った脅威に気付くことが出来なかった。

「グギギギｔｔｕｇｇａａａａａａａａａａａ！！」

「え？」

後に現れていた妖気に気付いて振り向いた時には時既に遅し。自分が視た大蜘蛛の妖怪がその鋭い前足を振り下ろすところだった。

やられるッ！？

恐怖の余り思わず目を閉じてしまった。反射的に手で頭を守るように抱え込み、来るであろう衝撃に身を震わせるも、いくら待っても鋭い痛みや身体を痛めつけるような衝撃は無かった。逆に僕の耳には何かが千切れ、地面に落ちた音と妖怪が苦しむ声が聞こえてきた。

「え…？　あっあれ…？」

「大丈夫か？」

開いた目に映ったのは死神の鎌ではなく、綺麗な白髪をした妖怪退治屋の後姿だった。

人の出会いは一期一会（後書き）

受験生のみなさんセンター試験お疲れ様っす。今年は雪が酷かったみたいですけど
大丈夫でしたか?私は炬燵に潜ってゴロゴロした日曜日でした。
テスト近いのに;;;
何はともあれこれからもがんばってください。

妖怪退治屋と僕～なれそめ～（前書き）

8月12日改訂&タイトル変更

妖怪退治屋と僕～なれそめ～

「大丈夫か？」

太陽がその姿を隠そうとしていた逢魔が時。大蜘蛛の妖怪に後を取られ、振り返った時にはもはやここまでと思った時に彼女は現れた。細く、しかし力強い背中に長く美しい白髪。後ろからでは顔は見えないが、耳に届く凛とした声が逞しく思える。

その後姿に感動を覚えると共に、僕は一人後悔していた。大蜘蛛が現れることを知っててこのざまか、と。未来を視て大蜘蛛の妖怪が現れることを知っていたにも関わらず、注意を怠たり命を危険に晒した。更には助けられた自分の情けなさに後悔の念が尽きなかった。こんなことでは都までもたないぞ、と。

「ちょっと待ってな。こいつを片づけたらすぐに村まで送ってやる」

自己嫌悪の時間をくれるのなら何時までも待てます。

「gぎザ…mゴr…ス」

「ハッ！　あいにくと簡単に死ぬような身体はしてなくてね」

そう言った彼女の手に頭ほどある炎の塊がいきなり現れた。…あれ？　何で妖力が感じ取れるんだろう。

「お前は簡単に死ぬのか？」

そう言って放たれた彼女の炎は、大蜘蛛を瞬く間に滅した。苦しむ間も与えて貰えなかったのだろう、叫び声を上げる間もなく塵と化していったのだから。

「ったく、死ねないのはあいつのせいだっての」

強い…それにかっこいい！　あの炎！　この圧倒的な強さ！　この退治屋さん凄いよ！

「あ、そうだ。お前怪我とかしてないか？」

おまけになんて優しいんだこの人は。強いだけじゃなくて周りにも気を配れる。凄いなぁ…憧れるよ！

極めつけはあの炎！　文の風やにとりの水も凄いけど、この人の炎

には負けるね。なんかこう、燃え盛る炎って力強く感じるじゃないか。

「もう大蜘蛛はいないから大丈夫だぞ」

魔法使いになったら、僕もこの人みたいな炎の魔法を使ってみたい。姉さん達のような他を寄せ付けない圧倒的な力にも憧れるけど、あんな人外な腕力が僕にはつかないだろうから。

「おい、喋らないと何も解らないんだけど」

「あっあの！！」

「うわっ！　何なんだよ急に」

「お姉さんは強いんですね！　今の炎なに？　どうやって出したの？　それにさっき妖力を感じたんだけど！？」

「ちょっ、落ち着けって！　なんなんだよいきなり」

ああ駄目だ、興奮して礼儀を忘れてた。敬意を持つべき人にはそれ相応の敬意を持って対応する。母さんの教えの一つじゃないか。

「すいません、僕は伊吹大和といいます。魔法使いになるために旅をしている途中なんです。お姉さんは妖怪ですか？」

「魔法使い？　なんだそれ。それに私はこれでも元人間だ。これは後天的な妖術」

「妖術！？　お姉さんは魔法使いじゃなくて、人間じゃなくて、妖怪だったの！？」

おばちゃんの話通り、この人は妖怪だったの！？　少し身構えていると溜息を吐かれた。ホントに餓鬼は…なんて聞こえてくる。失礼だな、聞こえてますよお姉さん。

「だから妖怪じゃないての。確かに真っ当な人間じゃないけどな。例えば死ねないとことか」

「死ねないって…またそんな冗談を言って。子供だからってからかわないでください」

はは、中々なお茶目さんなんですねお姉さん。死なない存在なんているわけないじゃないですか。僕が知っている中で一番強い母さん達だって不死身じゃないんですよ？
そんな真面目な顔して冗談が上手いんだから。

「冗談じゃないんだけどな。まあいいさ、ほら、家まで送ってやるからさっさと行くぞ」

「あ、その必要はないです」

「そうか。なら一人で帰れるな？」

「いえ、さっきも言った通り魔法使いになるために旅をしているんです。だから帰る必要がないんですよ」

「…たった一人で？　お前みたいな餓鬼が？」

そう言うと一瞬ぽかんとし、じろじろと僕を見つめる妖怪退治屋のお姉さん。少し見て満足したのか、鼻で笑われた。少し腹が立つ。貴方も僕とそんなに歳が違わないんじゃないですか。

「餓鬼じゃないです。僕には伊吹大和と言う立派な名があるんです。それに、僕だって自衛くらいはできます。馬鹿にしないでください。あと、お姉さんは何て名前ですか？」

「お前を助けた妖怪退治屋。それでいいだろ」

随分と愛想の悪いお姉さんだ。目つき悪いし。だから助けられた人も顔を直視出来なかったのかも。でも残念ながら、その程度じゃ僕は諦めませんよ。

「よくないです。礼には礼を。母さんの教えです。さあ自己紹介をどうぞ！」

「……藤原妹紅だ。これでいいんだろ？　じゃあ私はもう行くからな」

「待ってください！」

背中を向けたお姉さんを必死に追い縋る。ずっと前から、それも山を下ってからずっと気になってたことがあるんだ。おばちゃんにも聞きそびれた今、頼れるのはこのお姉さんしかいない。これだけは、どうしても今聞いておかないと駄目なんだ！

「なんだよ。まだなんかあるのか？」

「都って、何処にあるんですか？」

別に迷子じゃないよ？　目的地の場所を知らないだけだから。

◇◆◇◆◇◆◇

とりあえず今晩はあの村の近くで夜を明かそう。そう思って村の近くまで行ってみると、子供が大蜘蛛に襲われそうになっていた。あの子供は気付いてないみたいだ。ったく、こんな妖怪が活発になり始める時間帯に子供一人で外にいるなんて、親は何をしているんだよ！

「ｇｇａａａａａａａａａａ！！」

大蜘蛛が子供に前足を振り下ろす。私自身も間に合うかどうか微妙な所だったが、それでも見捨てられなかった。最悪、この身を犠牲にしてでも庇ってやる。その覚悟と共に身体を投げ出すように子供の前に出た。幸いなことにギリギリの瞬間で間に合うことに成功した。ふぅ…やれば出来るもんだな。

そのまま炎を纏った腕で蜘蛛の足を受け止め、足をそのまま焼き切

る。

鈍い音と共に大蜘蛛の足が地面に落ちた。余程痛いのか、のたうち回るかのように身体を左右に揺らしている。まったく、最近はこんな輩が多くて困るね。

「gぎザ…mゴr…ス」

「ハッ！　あいにくと簡単に死ぬような身体はしてなくてね」

あの薬を飲んでから死ぬことも老いることもなくなった。あいつを殴り飛ばすまでは死ねないから丁度いいと思えてきたけどな。…まぁそれはいい、とりあえず目の前のやつを消そう。こんな奴等が生き残ると、また何処かで犠牲者が出るだろうしな。

炎弾を打ち出して敵を焼き消す。今まで何回も繰り返してきたことだ。…さて、後はコイツを家に送れば終了だ――――――――

――――――――と思っていたが、中々どうして面倒な奴みたいだ。しかし魔法使いになるための旅、ねぇ。魔法使いとやらが何かはよく解らないけど、この歳で一人旅なんて信じられない。自衛は出来

ると言ったが、あんな雑魚にやられそうになって本当に大丈夫なのか？　本当にこいつの親は何をしているんだか…。

…ま、私には関係ないか。

「都って、何処にあるんですか？」

本当に大丈夫なのか！？

◇◆◇◆◇◆◇

「都って、何処にあるんですか？」

僕がそう言うと、妹紅さんは呆気にとられたみたいにポカンとして

いた。そんな顔したって仕方ないじゃないか。今まで妖怪の山から出たことなんてなかったんだから。前もって調べとけ？　どうやってよ。

「おっお前、もしかして都が何処にあるのかもわからずに都を目指して旅してたのか？」

「そうです」

「信じられねぇ…」

胸を張ってそう応える僕。逆に妹紅さんは頭を抱えていた。自慢じゃないけど、都が何処にあるかなんて僕は知りません。本当に仕方ないじゃないか。母さんが山から出たら駄目だー、なんて言うんだから。

でも一度だけ山を下りて人里を見に行こうとしたことがあるんだよね。その日の内に大規模な山狩りが行われて、真っ青な顔をした文に見つけられて終わったけど。もちろん後で母さんに吊るされたけどさ。

そんなことがあったから、山を下りるなんてことは考えることは二度となかった。だって怒った母さんは怖いし。

そのかわりと言っちゃなんだけど、妖怪の山のことなら何でも知ってる。ここじゃあ自慢にもならないだろうけど。

「でも…妹紅さんに連れて行ってもらえるなら安心ですね」

それでだよ、僕は考えたんだ。やっぱり案内人っていた方がいいと思う。都行きにしても、妖怪の山にしても迷ったら野たれ死ぬしかないしね。僕、死ぬのは母さんたちの後って決めてるから。だから案内人は居た方がいいよね、うん。

「ちょっと待て！　なんで私が連れていくことになるんだよ！」

「え…？　駄目なんですか？」

「当たり前だ！　都くらい一人で行けよ！」

むぅ…手強い。どうやら押しには耐性があるみたいだ。ならもっと押して、どうなるか試してみよう。

「妹紅さん。一つ言っておきますが、このまま一人行かせると僕は迷います。野たれ死ぬかもしれません。いえ、確実に野たれ死ぬ自

信が有ります。それでもいいんですか？」

「私には関係ないね」

ツンとした態度で明後日を見ながら妹紅さんがそう言う。本当に心底どうでもよさそうな態度だよ畜生。だけど諦めません、勝つまでは。

「ふぇ……ヒック……」

ならば必殺泣き落とし。子供ってさ、泣けばどうにかなるものなんだよね。文が言ってた。泣かれるのか一番辛いって。だから困った時には泣いてみるのが一番良いんだってさ。

…でもその代わりに、何か大切な物を失った気がするのは何でだろうね…。

「ったく、しょうがない奴だな。いいぜ、連れてってやる」

「やった！」

文、泣き落としは確かに効いたよ。でもさ、これって大切な何かを失うよ。気がするんじゃなくて、絶対に失ったんだよ。

◇◆◇◆◇◆◇

うぜぇ。

こいつに対する第一印象がこれだ。何なんだこの餓鬼。いきなり都に連れて行けとか言いだすし、わけが解らない。それに何で泣きだそうとするんだよ！？　嘘泣きだと見破れて魂胆が丸見えっていうか、なんでそんな簡単に涙が出せる！？

でもこいつの言う通り、癪だが心配なのも確かなんだよな。知り合ったばかりだけど何故か放っておけない…と思う自分がいる。

それに、さ…。人間時代にほとんど隔離された状態で過ごしてきた私は、御世辞にも人付き合いが良いとは言えない。兄貴たちも居るには居るらしいけど、結局最後まで会うことはなかった。…憧れているのだろうか、私は。人間を辞めた私が、今更姉弟なんて…。

はは…私もまだまだ人間臭いってことか。まぁいい、私もこの生活を始めてからずっと一人で生きてきたんだ。たまには道連れがいて

もいいかもしれない。あいつを見つけるまでの暇つぶしにもなるだろう。都までくらいなら私が連れてってやる。

そう、決して私の誘惑に負けたわけじゃないぞ？

「ところで大和、輝夜って奴を見なかったか？」

「見てないけど、誰？」

「いや、見てないならいい」

やっぱあいつ、月に帰りやがったのか…？

妖怪退治屋と僕～なれそめ～（後書き）

なれそめタイトルは…詐欺だよ？

こんな僕って草食系？（前書き）

姐御妹紅でお願いします。８月１７日改訂

こんな僕って草食系？

突然で申し訳ないけどここで一つ…いや二つ？　人生とはどういうものか、若干１０歳の僕は考えてみようと思う。

人生には山あり谷あり、楽しい時もあれば長いく苦しい時もあると思う。生まれてまだ間もない僕にだって、そりゃあもう辛い日や苦しい日があった。もちろん楽しい日の方が多かったよ？　でも１０歳の僕でもこれだけの体験をしているんだ。これが２０年や３０年、母さん達ほど長く生きるとすれば、それはもう大変な日々だろうと僕は考える。

「弱すぎだろお前…」

だからさ、こうやって年長の妹紅さんに手も足も出ないのも仕方ないよね。

以上、長い僕の言いわけでした。

何故いきなりこんなことを言うのか？　それは次の日、それも早朝から始まった妹紅さんとの模擬戦が原因なんだ。なんでも『自衛くらい出来る』　と言った僕の実力を測る為らしい。

ふっふっふ、鬼に条件付きとはいえ真正面から勝った僕の実力を見るがいい！　開始直前までは条件付きとはいえ母さんに勝ったた実績もあるkとから僕は自信満々だった。だからと言って油断はしてなかった。昨日の妹紅さんの闘いぶりを見れば実力差は明白だし、むしろ何時も以上に注意して模擬戦に入った。

にもかかわらず結果は惨敗。文字通り手も足も出なかったよ。最初こそは身体強化の魔法で突っ込んで掻き乱せたようだったけど、少し時間が経つと完全に妹紅さんのいいようにやられていた。鬼の四天王である母さんに、条件付きとはいえ一撃入れることが出来たにも関わらず、妹紅さん相手には掠りもしなかった。

世の中にはまだまだ強い人が沢山いるんだねぇ。今までの僕の世界は妖怪の山だけだったし、そこでは白髪の妖怪退治屋なんて噂を一度も聞いたことが無かったのに、本人はこんなにも強いんだから。世界って広いなぁ…なんて一人前らしく考えてみたり。

「う～、母さんには一撃入れれたのに…」

「その母さんが弱かっただけだろ」

「そんなことない！　母さんは鬼なんだから弱いはずがないよ！」

「なら、手加減でもされてたんだろよ。何にせよ、お前は弱いことに変わりはない。私見だけど、昨日の大蜘蛛とどっこいじゃないのか？」

「さいですか…」

うげ、文とにとりとの集中特訓でちょっとはマシになったと思ってたのになぁ…。でも妹紅さん的にはそう見えるのか。さすがに僕でもあの大蜘蛛ぐらい倒せる…と思うけど。それでも力不足なのは確かなんだろうなぁ。いったい母さんはどれだけ手加減してくれたのやら…。

こうして一人になった今に初めて解るけど、僕には足りないものが多い。力然り、知恵然り。妖怪の山で学べたことは過ごした時間に比べたら本当に数少ない。でもこの旅の中で僕は皆に追いつくんだ。守られるだけの存在じゃない、僕が守る存在になるためにも。

だからと言って、たった一人で強くなれると思うほど自惚れてなんかいないわけで。やらなければならないことははっきりとはしている。僕に必要なのは努力すること。それも一緒に切磋琢磨する良き競争者か、姉さんのような師が必要だ。だいたい、僕だけじゃどう鍛えればいいのかも良く解らない。…腕立て？　これくらいしか思い浮かばないからね。

…でも目の前にちょうど勝手のいい人もいることだし、駄目元で頼んでみようかな。

「妹紅さん、都につくまで僕に闘い方を教えてくれませんか？」

弱いなら強くなるように努力する。母さんたちが口酸っぱく言っていた『結局世の中は力が全て』　という真理。どれだけ綺麗事を言っても、それを貫き通すだけの力がなければ意味はない。それが知恵であれ、腕っ節であれ。皆が口を揃えてそう言っていた。そして力の無いものは『母さん達の世界』　じゃ通用しない。自分を貫くことすらできない。僕がここに居られるのも、母さんに僕の力を示せたからだ。

けれども僕は妹紅さん相手に何もできなかった。だから自分を鍛え、精一杯の努力をする。今の僕に出来ることはそれだけだと思うから。

「いいぜ、こっちもただ歩くだけじゃつまらないと思っていたところだ。それにこのままのお前じゃ簡単に死ぬだけだしな…。でも覚悟しろよ？　私は甘くないぜ？」

「どんと来いです！」

でもこれは喜ぶべきことだ。弱いということは、これからまだまだ強くなる余地があるということ。幼いということは、まだまだ成長できるということなのだから。

「それと思ったんだがな…」

頭を手で掻きながら言葉を選んでいるのか、あーでもないこーでもないと一人ごとを言っている妹紅さん。僕の修行方法でも考えてくれているのだろうか、そう思った僕は少しでも力になれればと話かけてみた。

「何ですか？」

「それだ、その喋り方」

「え…？　失礼だったかな？」

自分の考えていることとは全然違うことだったので少し驚いた。僕なりに年長者の妹紅さんに対して失礼のない言葉を選んでいるんだけど、何か気に入らない点でもあったのだろうか…？

「違う逆だ。お前の話し方は優し過ぎるんだよ。そんなんじゃ舐められる。お前は見た目がアレだし、弱いんだからせめて話し方ぐらいもっと男らしくはなせよ」

「うぇえ!?」

お、男らしく!?　男らしい話し方ってどんな!?　…ぼっ僕のことを「俺」　とか言っちゃうわけ!?　むっムリムリ、無理だって!　だって僕が「俺」　だとか…ねぇ?　似合わないよ。それに今までもこの話し方だったから、急にはちょっと…

「僕じゃなくて『俺』　だ。これからはそうしろ。じゃなきゃ、やっぱり一人で都に行くんだな」

「おっ俺?　…いや、やっぱり似合わないからなかったことに」

一人で都に行けとか、この苛めっ子!　勘弁してください!

「駄目だ。私のことも妹紅と呼べ」

「その点に関しては賛成です」

「よし!　…って納得いかねぇなあオイ!?」

妹紅って言いやすいし。それに、そんなに歳が変わらなさそうな人を「さん」って呼ぶのも好きじゃないし。妹紅さんじゃなくて、妹紅ちゃんならいいけど。

「じゃあ妹紅、これからもよろしく」

「…まあいいさ。でも覚えておけよ。自分を強く見せるのも大切だからな」

「妹紅もそうなんです…そうなのかー？」

どうやら俺発言は流してくれるみたい。やったね。

「私もこんななりでも女だからな。いろいろと、な…」

…妹紅のような女の子がたった一人で妖怪退治をしているなんて、それこそ余程の事情がないとありえないことだろう。何か特別な事情がないとそんな危険な事を親が許すわけがない。だって僕の知っている親は何時だって子供の味方。だからもしかしたら妹紅の両親はもう…。髪が白髪なのもそれに関係してるのかも。あまりの出来事に髪の色が変わる人もいると聞いたことがあるし…。

でもそれはおいそれと人に話せることでもないだろう。だから僕から深く聞くことはしない。妹紅が自分から話してくれることを気長に待つよ。だからこの話はここでお終いだ。

「それじゃあ行くぞ」

「はい」

都に向けて、僕らはゆっくりと歩き出した。

～オマケ珍道中　とある村で～

「喜べ大和、お前のために特注の重りを手に入れたぞ」

「すごい、どこで手に入れたの？」

「秘密だ。じゃ、とりあえず足に重りをつけて都まで行ってもらうから」

「修行の最中も！？」

「これも修行だ、たぶん」

丸いのやら三角のやらを渡されて、母さんの飾りみたいに思えて一人喜んだ。

妹紅と貴族と花の妖怪（前書き）

8月19日改訂

妹紅と貴族と花の妖怪

「都まであと少しってところだな。ほら、しゃきしゃき歩けよ」

「まっ魔力糸繰りながら重り引きずって移動なんて、無茶苦茶だよ！？」

妹紅が言うにはもうすぐ都に着くらしい。が、僕にとってはそのあと少しすら恨めしい。なんと妹紅は勇儀姉さん以上に厳しかったのだ。僕が倒れる直前まで歩かせ、倒れかけたらその場で休憩。背負って進むことなどしてくれるわけもない。自分で頼んだこととはいえ、妹紅を選んだ数日前の僕に一言言ってやりたい。もう少し考えるべきだったよ、と。

でも修行内容は決して複雑と言えるものではない。ただ魔力糸を繰りながら歩くだけなのだけど、少しでも制御を失敗すればお仕置きの炎が飛んでくるだけであって…。それが僕が耐えれない限界を測って放って来るから逃げるのも撃ち落とすのも一苦労。撃ち落とすのに失敗して何回焼かれかけたことか…。

まぁそれだけ必死にやっていれば自然と僕達の仲も深まってくるわけで。…僕が焼かれれば仲が深まるのには一言物申したいけどね。そんなこんなで妹紅ともだいぶ打ち解けることができて、昔話を聞かせてもらったりもした。

例えば『私はあの藤原家の娘なのだ！』　って話。自慢げに聞かされたけど、僕にしてみれば『藤原家って何？』　な感じだった。仕方ないじゃないか、本当に世俗に関係ないとこで暮らしてたんだから。でもあの時の妹紅のキョトンとした顔といったら見物だった。あんな隙だらけの妹紅は初めて見たよ。それでつい笑ってしまったんだけど、どうやらそれが妹紅の機嫌を損ねてしまったようで…

「お前には貴族のなんたるかを叩き込んでやる」

『元』　育ちのいいお嬢様直伝の作法とかを無理やり叩きこまれた。先ほどの呆けた顔とは一転し、鬼の形相で貴族の作法習得が始まった。そこでは貴族とは何か。貴族のなんたるかを徹底的に教え込まれた。一度聞いたことを間違えたりしたら、これまた炎が飛んで来るからたまったもんじゃない。むしろこっちの方が炎が飛んでくる比率が高かったような…。ま、まぁ目の前が真っ赤になることは多かったね。

…嘘です、本当はとても恐ろしかったです。言葉にならないほど怖かったです、本当に。よく生きてた僕。自分を褒めてあげよう。

…貴族のなんたるかを憶えれたとは思えないけどね！

馬鹿なこともしてきたけど、ちゃんとした修行も波に乗っている。
魔力糸の方も、右手で操る分にしてはだいぶマシになってきたし。
でもね、妹紅からそんな僕を馬鹿にしたようなことを言われたんだ。

「お前才能無いなぁ」

酷い言いようだと思わない？　これでも右手で魔力糸を操れるようになったんだよ？　そう言っても妹紅は少しも評価してくれない。むしろこう返されてしまった。

「それなりの魔力？　があるのにやっと右指で魔力糸を『動かず』に操れるだけって、才能ないとしか考えられないんだよな」

…そうですよーだ。まだ動きながらはできませんよーだ。動きの堅さを少しでも無くそうとしたら、その場から動くことなんてまだ出来ないんだ。それでも動きの堅さがとれないんだから、僕の才能とやらの底が窺い知れる。そう苦言を呈されている日々がここ最近は続いている。

そして今日も弱音と愚痴と、妹紅への悪態を吐きながら、重い足を都へと進める。都まであと少し、この生活も、もう終わりが見えてきたね…。

◇◆◇◆◇◆◇

最近あの子供を見ない。風が運ぶ噂にも、例の子供の噂は途絶えてしまった。何かあったのだろうか。別に何があっても構わないけど、一応面白い子供だったから気にはなる。…ならこちらから様子を見に行くのもまた一興かしら？　ふふ、あの時のようにまた私を楽しませてくれると嬉しいんだけどね。でも、まずは都に行くとしよう。最近都で五月蠅い奴らを黙らせるために。

◇◆◇◆◇◆◇

～夜　都近くの野原～

「明日には都に着くだろう」

すこし、寂しくなるな。そう呟いた妹紅の表情は、言葉通りに寂しく見えた。それは僕も同じだ。短い付き合いとはいえ、妹紅とはまるで姉弟のような関係になったと僕は思っている。たぶん、妹紅も同じように想ってくれていると思う。それぐらいの仲になったはずだと、僕は自負している。

「妹紅は都に着くと、どこか別の場所に行くんだよね？」

「…ああ。ずっとお前に構ってはいられないからな」

「そう…」

く、空気が重い。今日が最後の夜だからか、まるでお通夜みたいに沈んだ雰囲気になってしまっている。

「そ、そういえば、妹紅は笛って吹ける？」

少しでも何時も通りの明るい雰囲気を取り戻すために、新しい話題を振ってみた。僕も今まで敢えて触れなかった文の笛。僕は吹けないけど、元貴族だと言う妹紅なら案外こういうものが上手なのかもしれない。

「笛か…。ああ、そういうのは得意だな」

「へ～意外だな、こういうのとは縁のない人だと思ってたけど」

まさかとは思っていたけど、本当に吹けるとは驚きだ。笛を吹く妹紅…だめだ、意外過ぎて想像できない。むしろ妹紅がお淑やかに笛を吹く姿なんて似合うと思えないよ。

「うるさい、私が元貴族だとは言っただろ。その時の名残だ。言われなくても、私に似合ってないことぐらいわかってるさ」

「似合ってないとは言ってないんだけどなぁ…」

ごめんなさい、心では言いました。

「どうだか。…まあいい、それで？　笛がどうかしたのか？」

「いや、旅に出る前に友人の一人が笛を送ってくれたんだよ。僕は吹き方も知らないけど、意外と多芸な妹紅ならもしかして？　と思って聞いただけ」

文も難儀な贈り物をしてくれたよ。僕が吹けないと知って贈ったんだから。修行の合間にでも練習して～なんて言ってたけど、これは練習して何とかなるものなんだろうか？

「ま、お前みたいなお子様には過ぎた贈り物だな。貸してみろ、吹いてやる」

「む…。そこまで言うのならお手並みを拝見させてもらうよ？」

下手だったら、思いっきり笑ってやる。

◇◆◇◆◇◆◇

都へと続く街道で野営をしている人間を二人見つけた。普段なら捨て置くところだが、その二人から何らかの力を感じる。妖怪に遭遇する確率が高い夜の街道で野営をしているあたり、それなりの自信があるのだろう。それでも私には遠く及ばないのだけど。

…へぇ、これは驚きね。どうやらあの中の一人は私が知っているあの子らしい。前に感じた妖怪とも陰陽師とも違う力を感じることから、ほぼ間違いないだろう。でもあの鬼がよく外出を許したものね。それとも、どうにかして山から抜け出してきたのかしら？

…どうでもいいか。大事なのはあの子の力が前よりも少し大きくなっていること。せっかく親馬鹿のいないこんな場所で会えたのだから、少し揉んであげるのも悪くない。隣のもう一人が何だかは知らないけど、なかなか楽しめそうな大きさ。フフ、今夜は退屈しなくて済みそうね――――

◇◆◇◆◇◆◇

聴き入る…とはこの事を言うのだろうか。妹紅の吹く音色が夜に溶け込むように響く。優しくて、でも力強くて。それが妹紅を表しているように感じる。妹紅の白髪が月の光を反射し、夜の闇を優しく照らす。その姿はまるで月に祝福された御姫様のよう。目を閉じると、開けている時とはまた違った心地よい音色に耳が満たされていく。

「ふぅ…どうだった？」

「うん。すごく心に響く音色だった。本当に感動したよ」

それ以上に、月に寄り添うように笛を奏でる妹紅が綺麗だった。でもそんなこと口には出来ないから、僕はただただ別の賛辞を送るだけだった。

「そ、そうか。ならいいんだ」

そう言われて少し照れくさかったのだろうか、妹紅が頬を染めていた。…こうやって二人で話せる日もこれで終わりだと思うと、やっぱり寂しいね…。

「それにしてもいい笛だな。思い通りに音がでる。相当なものだぞ、これ」

へえ、文ってそんなにいい笛を贈ってくれたんだ。今度会うときに改めてもう一度礼を言っておこう。おかげで妹紅の新たな一面も見れたし…。でも、妹紅の笛を聴いていたら僕も吹きたくなってきた。何て言うかこう、喚起されたんだと思う。

良い機会だしちょっと練習しようかな？　そう思い笛を握った瞬間、辺りが強い妖気に包まれた。

「とてもいい音色だったわ。…思わず壊したくなるくらいに」

◇◆◇◆◇◆◇

突如現れた妖気に私は驚きを隠すことが出来なかった。まったく気づくことが出来なかったのだ、この私が。これでも今までの旅での経験から、自分が強い部類に入ると思っていた。けどこれは何だ！

？　今までとは桁外れ、こんなにも死を連想させる奴なんて、私は知らない！

くそ、肌に妖気が刺さる…。これほどの大妖怪が近づいていたというのに、なぜ気づくことができなかったんだ。妖気を抑えて近づいた？　これほどの力を持ったやつがいったい何の為に？　解らない…解らないが、これがヤバイ状況だってことは解る。私はともかく、大和が拙い。これほどの妖気をただの人間でしかない大和が浴びたら、それだけでただではすまないことになる可能性だってある。

「…何者だ？」

大和を守るように一歩前に出る。せめて、大和だけでも逃がさなければならない。その為に少しでもこいつの注意を私に引き付ける必要がある。幸いにもここは都の近くだ。都に入れば腕の立つ陰陽師も多い、例えこいつといえど簡単に手は出せないはずだ。

「それは後ろの坊やが答えてくれると思うわよ？」

何だと？　後の坊や…大和の事か！？　おいおい、まさかこいつの狙いは…

「大和、知っているのか？」

まさかとは思うが、それでも後の大和に問いかけずには居られなかった。だがその時に後を向くような愚かなことはしない。一秒でもコイツから目を離せば、その瞬間には胴と首が離れる。それ程の威圧感をこいつは放っている。

「なんでここにいるんですか、幽香さん！？」

震える声が返ってくると思ったが、問いかけた私も驚くほど凛とした声が帰って来た。…はは、こいつも中々肝が太いじゃないか。私も負けてられない。何時もの強きな自分を取り戻すように、一人喝を入れた。

「ふふ、憶えていてくれて光栄ね。久しぶり、そして初めまして。私の名前は風見幽香、四季のフラワーマスターよ」

退治屋なら誰でも知っている最強の一角を前に、私は自分の顔が歪むのを抑えられなかった。

月夜の下で（前書き）

8月21日改訂

月夜の下で

――――四季折々の花が咲く場所がある。そこには一人の花の主が居り、花を甲斐甲斐しく世話している。
あまりの美しさに花を摘んで行こうとした旅人がいた。旅人は尋ねた

「花を一つ、貰ってもよろしいか？」

花の主はこう答えた

「構わない。しかしこの花は私が誠心誠意込めて育てた花。故にこちらも一つ、貴方から一つ大切なものを貰う」

その旅人が何を奪われ、どうなったかは解らない。花しか居らぬ場所で起きた事など、花に聞かねば解らぬのだから。だがゆめゆめ忘れなさるな。その主は花を傷つけるものを決して許しはしない――――

◇◆◇◆◇◆◇

風見幽香。現在確認されている妖怪の中でも圧倒的な力と知名度を持つ、妖怪最強の一角と呼ばれる存在。

そいつが今、私の目の前に悠然と立っている。そして驚くことに、決して手をだしてはならない部類に入る妖怪と、ただの魔法使い志望の人間の子供が知り合いだと言う事実。以前に大和が妖怪の住む山に住んでいたとは聞かされたが、こいつにはどれだけの繋がりがあるのだろうか。ただの子供である大和に、何故こうも名のある妖怪たちが集まって来るのだろうか…？

不思議に思うことはあるが、目の前の事実がそれが現実だと教えてくれている。信じないわけにはいかないだろう。…それにしても、大和は私が思っていたより弱くはないみたいだ。目の前でこれだけの妖力を放つ存在がいると言うのに、それを感じていないかのようにピンピンしている。…いや、本当に感じていないだけなのかもしれないが、それだとどれだけ肝の太いやつなのやら…。

「随分大きくなったわね大和。元気にしてたかしら？」

「はい、御蔭様で元気に…ってそうじゃないです！　幽香さんは何でここにいるんですか？」

「質問に質問で返すのは失礼だって、あの小鬼に習わなかったかしら？」

「先に聞いたのはこっちだ。失礼なのはそっちだろ」

「強気なお嬢さんね。…でもそれに伴う強さがないとただの強がりにしか見えないわよ？　あらごめんなさい、正直に言いすぎたかしら？　でも安心するといいわ。知り合いを見つけたから遊びに来ただけだから」

…一見すると惚れ惚れする笑みだな。よくもまぁ、それだけヤル気を出しているくせに堂々と嘘を吐ける。舐めやがって、気付かないとでも思っているのか？　お前、私たちで『遊ぶ』つもりなんだろう。まぁそれが解った所でどうしようもないことも確かなんだが。私だって自惚れちゃいない、今の私でこいつに勝ち目がないことくらい十分承知している。どうにかしてコイツの気を散らして、大和だけでも逃がしてやらないと…。

「おい大和、お前風見幽香と知り合いなのか？」

機会は一度。その一度に全てを賭ける。

◇◆◇◆◇◆◇

「三年くらい前だったかな？　山に来てた幽香さんを見つけて一緒に遊んだんだ」

あの時は楽しかったなぁ…あまり憶えてないけど。確か魚を獲ってもらって、そのあと山の案内…？　をしたんだっけ？　気付いた時には服が土塗れだったからよく遊んだとは思う。でも何故か母さんたちに拳骨もらうほど怒られたんだよね。

「憶えていてくれて嬉しいわ。私もまたあなたに会いたかったんだけど、私用で行けなかったのよ」

「そう言わずに来てくれればよかったのに。…で、どうして此処にいるんですか？　『遊ぶ』にしては妖力を出しすぎている気がするんですけど」

これだけの妖力を感じ取れれば、いくら僕でも様子が変だと感づいている。僕がこの妖力に当てられて大丈夫なのは、妖怪の山で１０年も暮らしていたからなんだろう。物心つく前から母さん達のような妖怪の中で生きていたからね。そういうのには抵抗が出来ているのかもしれない。

「せっかちなのは相変わらずね。子供にしては聡明なのだけれど。あなたの母の育て方がよかったのかしら？」

「母さんは今関係ないです。質問に答えてください」

「あの小鬼に言ったら泣くわよ。そうね、私も都に用があるからここに居るっていうのはどうかしら？」

「その言い方じゃ、他に何か目的があるみたいだな」

妹紅、あまり刺激しないで。母さん達に後で聞かされたけど、僕の知る最強の人と闘って生き残ったらしいから、たぶんとんでもなく強いんだと思う。だから無闇に刺激するより、ここは話し合いで解決を――

そうやって打開策を探っていると、目の前に居たはずの幽香さんの姿がブレた。

「ガァッ！？」

ッ何！？　何が起きたの！？　今まですぐ横にいたはず妹紅の声が、遙か後から聞こえたきた！？

「あら、やっぱり期待はずれかしら」

「もっ、妹紅!?」

妹紅が居たはずのその場所では、幽香さんが拳に付着した『血』を払っていた。

「ぇ…血……それ、妹紅の……？」

「重りをはずしなさい。死にたくなければね」

血の気が引いていく。今すぐにでも逃げ出したかったけど、いきなりの出来事に拒否することなんて出来なかった。正直、これから始まることに対しての震えが止まらない。妹紅がやられた。傷は？生きてるの？　幽香さんは、何でこんなことするの？　恐怖で頭の中がぐちゃぐちゃになりながらも、僕の手は震えながら重りを外していく。

僕は…この人を相手に生き残れる自信がない。

「準備はいいわね？」

「…どうして僕たちを襲うんですか？」

「生きていたら、教えてあげるわ」

望まない死闘の幕が上がった。

◇◆◇◆◇◆◇

「上手に避けるわね。その右目のおかげかしら？」

右目に魔力を集中させて能力を発動させ、迫りくる暴力の嵐を「視て」　回避行動をとる。おそらく手加減されているのだろう、なん

とか避けることができる速さで攻撃されているのが解る。未来を視て最善の手を考えて動けるのに、それでも限界ぎりぎりのところでしか避けられない。宣言通り、僕で遊んでいるつもりなのか…。

でもこの状況を打破しない限り、妹紅の手当ても出来ない。どうにかして幽香さんを封じ込めないと…っ！　当たれば即死級の拳を躱すと同時に後方に大きく跳躍、左指からそれぞれ一本ずつ魔力糸を飛ばす。動きながらじゃ直線的な動きしか出来ないから、これが避けられることは目に見えている。重要なのはその避けた場所。能力を発動している僕にはそれが手に取るようにわかる。

「そこ…ッ！」

左手の魔力糸を強引な操作で横に薙ぐ。そこに本命の軟らかい動きが可能となった右手の魔力糸で幽香さんの体を拘束する。そこに

「…ッだぁ！」

妹紅の炎弾並みとは言えないけど、それなりの威力を持つ魔力弾を放つ。直撃と同時に辺りが煙に包まれる。

「まだまだぁぁぁぁぁぁ！！」

それでも魔力弾による追撃の手を緩めたりはしない。この人の強さは母さん達から言われてよく知っている。この程度じゃびくともしないだろう。でもやるしかないんだ。体中の魔力を吐きだすように弾を放っていると、突如爆音の中から暴風が吹き、僕の魔力弾が跳ね返ってきた。

「うわ！？」

突然の事に驚きながらも、何とか身を捻ってそれを躱すの同時に、無傷の幽香さんが出てきた。

「これが全力なら、期待はずれもいいところね」

「じゃあ、これもくらっとけ」

「妹紅！？」

至近距離からの不意打の炎弾。放たれたソレは太陽と見間違う程の熱と大きさを誇っている。先ほど僕が放った魔力弾とは比較にならない爆音があたりに響き、再び視界を土砂煙が覆った。

「さすがのフラワーマスターも、あれを至近距離で喰らったらタダじゃすまないはずだ」

「妹紅、無事だったの!?」

「あれくらいすぐ治る。言っただろ？　私は――」

「態と受けてあげたけど、やっぱり期待はずれね」

「ッ大和!!」

「え……ガッ!?!?」

妹紅が叫んだ次の瞬間、僕の腹部に尋常じゃない衝撃が襲った。それと同時に身体が面白いように中を舞い、地面に何度か身体を打ちつけて止まった。あまりの衝撃に息が出来ず、口からは声にならない言葉が零れた。なっ殴られた、の…!?

「服が焦げちゃったじゃない。弁償してもらわないと」

幽香さんの日傘の先に膨大な妖力が集まっていく。あれは…あれは拙い！　忘れられないあの光景…一度しか見たことないけど、あの

時のあれは死んでも可笑しくない威力だった！　何とかして避けないと。そう思って起き上がろうとするも、殴られた衝撃でまだ身体が動かない。

「避けろ大和！！」

視界を埋め尽くす程の形となった妖力が僕に向かって放出される。駄目だ、避けられない。

「っこの馬鹿！！」

諦めかけた僕の目の視界に見なれた白髪が目に入った。何やってるんだ妹紅、早く逃げて！　そう言っても妹紅は一歩も引かず、遂には僕の盾になるように立ち塞がって炎の壁を作った。

「ぐっ……こっこの野郎…ッ！」

「も、妹紅！？　僕はいいから逃げて！　このままじゃ妹紅が！！」

「安心…っして、見てろ…お前だけは、守ってやる！！」

炎の壁は既に消滅してしまったが、妹紅は素手になっても力の奔流を受けとめようと奮闘している。でも、いくら身体強化してもそれは無茶でしかない。

やがて力の奔流が終わった時には、妹紅の両腕は肩から無くなっていた。その他にもあちこち焼け爛れた妹紅が、遂に僕の前で崩れ落ちるように倒れ込んだ。

「妹紅！　妹紅！！　しっかりして！？」

ようやく動けるようになった体を動かして妹紅の身体を揺すった。血まみれ、死に体。両腕を失い、その言葉通りになっている妹紅の血が僕の服や両手を紅く染め上げた。口からは微かに『逃げろ』と言う声が流れ出ていた。

「残念、もうその子は助からない。あなたを庇ったせいで死ぬの。知っておきなさい大和。この世界では力の無い者、弱さは罪なのよ。あなたの弱さがこの結果を招いた」

「…んで、こんな…ッ！」

自分が弱いのはよく知っていた。でも今までだって何とかなってきた。だからこれからもどうにかなる、そう思ってた！　自分のせいで人が死ぬなんて、思ってもみなかった！　でも今目の前にいる妹紅はそんな僕を庇って、死にかけている！　弱さが罪だと言うのなら、僕は存在自体が罪なのか！？

「何でこんな…何でこんなことを！！」

そんな訳ない！　絶対にあるわけない！　大切なのはその弱さを克服することと、得た力をどう使うかのはずなんだ！　少なくとも、僕はそうやって習ってきた！

妹紅をやられた怒りに身を任せ、そう叫びながら幽香さん目がけて走りだした。歯が立とうが立たまいがどうでもいい。勝てないのならそれでもいい、目の前の敵の、せめて片腕だけでももらっていく！！

「フフ…いい顔になったわ。さあ、掛かってきなさい！」

これが僕の全力全開！（前書き）

9月4日改訂

これが僕の全力全開！

「だぁッ！！」

未来が視える僕には、『敵』　がこれからどう動くかが手にとるように解る。左は牽制、右が本命。狙いは相変わらず顔面。放たれる凶悪な拳を避け、反対に動きを先読みしてる逆襲の拳を放つ。未来を視ることが出来るおかげで、僕の拳はすべて『敵』に吸い込まれていく。並の妖怪ならば、あとは手数を加えれば問題なく勝てるはずの攻撃。

防御の隙間を縫うようにして放たれているので本来なら防ぐこともままならないはずだが、相手は遙か格上の存在。いくら魔法で身体能力を底上げしようとそこは人間と妖怪、地力の差を埋めることは並大抵のことではない。そんな母さん並の力を誇るであろう『敵』は、未来を見られることなどハンデにすらならないと言わんばかりに攻撃を捌いていく。

「だいぶマシになってきたわね。さあ、もっと私に力を見せてみなさい！」

未だ笑みすら浮かべれるほどの余裕をもった『敵』に僕の焦りは増していく。妹紅は命を張って僕を逃がそうとしてくれた…。けど妹紅を捨てて逃げるなんて、仲間を見捨てる選択肢なんて選べるはずない！

じわりじわりと押され出した拳や蹴りの応酬の中で、僕は必死に喰らい付いていく。ぶつかり合うことで生まれた衝撃波によって辺りの大地は荒れていくが、そんなことは目にも入らなかった。

「負けない…！　負けられない！！」

怒りと焦り、友を失った悲しみが心を動きを鈍らせていく。今、目の前に居る存在を倒す。ただそれだけしか考えられない。

「怒りこそ力の本質、怒りこそ力の根源。さぁ、もっと怒りなさい。じゃないと、貴方自身が死ぬわよ？」

徐々に『敵』の攻撃が激しくなり、喰らい付いていくことすら難しくなってくる。そんな中でも諦めることができるはずもなかった。相手は仇。自分の姉と言っても過言ではない友人を殺した仇なのだから。だから負けていいわけがない！　そうやって必死に負けじと

殴り、蹴り返す。それでも力の差は埋まらない。

「がぁッ！？」

現実は非情だった。限界を超える立ち振る舞いをしようと、圧倒的な力の前では何の意味もなさない。僕の顔面を『敵』の拳が綺麗に捉え、僕の身体は宙に舞った。たった一発、されど一発。重い一撃を貰った身体は簡単に吹き飛んだまま指一本動かない。

魔力の限界消費と身体強化の上からでも届いた衝撃で、身体機能が麻痺したの…？

「動け…動いてよぉ…」

「…ここまで、のようね」

視線の先に倒れた妹紅の姿が見える。悔しい…その言葉が頭を過るのを最後に、僕の意識は薄れていった。

◇◆◇◆◇◆◇

「ここは…？」

真っ白な空間の中、僕はふわふわと浮いていた。おかしい…たしか幽香さんに顔面を強打されて倒れていたのが最後の記憶のはずなんだけど…？

「もしかして…死んじゃった…？」

ここが所謂、天国ってところなのかな…？　三途の川を渡った覚えはないんだけどなぁ。…どうしよう、母さんにはどうやって伝えればいいんだろう。…無茶したし、死んでもおかしくなかったから仕様がないよね？　とか…？　…いやいや、軽すぎるよ僕。きっと母さんのことだから、言葉じゃ表わせられない程悲しむと思う…。母さんに会えなくなるって考えたら、僕だって今にも泣きそうなくらい悲しい…。

でもあの時は妹紅の仇をとることしか考えてなかった。結果はこれだけど、やったことに悔いはない。でも妹紅に仇はとれなかったっ

て謝らないといけないね…。

「ほんと、貴方は何時でも変わらないわねぇ」

一人悶々と唸っていると、何時もと変わらず不思議な紫さんが同じく浮いた状態で目の前に現れた。いや、元々そこに居たのかもしれない。まぁ紫さんだから、何処に居てもおかしくはないと思うんだけどね。…あれ？　でもここって天国だよね？　ということは、

「成程、紫さんも死んじゃったわけですか」

「ブホッ」

そう言うと紫さんは浮いたまま爆笑して転げ回る、なんて難易度の高そうなこけ方をした。そのまま一回転したせいで見事に下着丸見えです。でも思わず手で目を覆ったから見てないよ！　…僕、何か可笑しなことでも言ったかな？

「クックック…ッ！　ハァ～…おかし……。様子を見に来れば死に

かけてるし、ほんと貴方って子は生き急いでいるわね」

「えぇっと…人間は寿命が短いものですからそう見えるかもです」

生き急いでると言われれば、「あ、そうか」ぐらいの反応しかできませんよ。自分、早いこと魔法使いになりたいものなんで。

「人間でも貴方のような人は見たことがないわよ。まるで珍獣よ、珍獣」

酷いです、人を珍動物みたいに言うなんて。確かに僕は普通の人と違った環境で生きてきましたけど、流石にまだ人間です。更に言うと僕なんて他の人と比べてもまだまだなんだから、努力して当然なんです。言うじゃないですか、凡人は天才の何倍もの努力が必要だって。でもまぁ…死んじゃったから関係ないけど。

「すいません紫さん、母さん達にはよろしく言っといてください」

「何を勘違いしてるのかは分かるけど、貴方は死んでないわよ。死にかけてるだけ」

それは良かった！　…って、それってほとんど変わりないような…？

「あ～、ところで紫さんは何しに来た…？　んですか？」

「弱い弱い大和が負けたのを慰めに」

「いや、弄りにの間違いでしょうに」

何時でも何処でも変わらないのは僕じゃなくて紫さんじゃないのかなぁ…。珍獣の件もそう思うけど、言ったらまた弄られるのは目に見えてるから言わないけど。

「そうねぇ、最近の貴方の『俺』発言には私も驚いたわ。…その似合わなさに」

「…やっぱり似合わないですよね。僕らしくもないですし」

僕も似合わないのをちゃんと解ってます。「かっこいいとか思ったでしょう？」　…勘弁してください。

「怒りに呑まれるのもらしくないわね。私も初めて見たわ、貴方があんな風に怒るのは。貴方は”静”の者だって言ったのに、怒りに我を忘れてたでしょう。教えを守らない弟子は伸びないのよ？」

何時から僕はあなたの弟子になったんですか。

「冷静になって闘えば、少しは足掻くことができるというのに」

「…それはもっとマシだったと言う意味ですか？」

「御明察」

何が面白いのか、クスクスと笑いながらそう言われた。でも紫さんの言う通り、もっと冷静に戦えていたのなら一発くらいは入れられただろうか？　逆に怒りに支配されてたから何時も以上の力が出たと思うんだけど…いいや、どちらにしても無理だろう。僕如きで幽香さんに勝てるはずがない。

「幽香さんは格が違いすぎます。冷静になったところで足掻けるかどうか…」

足掻くってところが、既に勝負を諦めている証拠だ。

「あら？　私は出来ると踏んでいるのだけど。貴方が萃香との闘いで得た力を使うことが出来るのならば」

あの時は無我夢中で何がなんだか。時間の進みが僕以外遅くなったかのように感じただけです。

「でもあの時は必死でしたし、やろうにしても今は魔力が足りません」

いかんせん、僕の使う魔法は消費が激しく、僕自身の魔力も少ない。普段から少ない魔力故に短期決戦をしなければならない身だけに、焦りが先走ってしまうことも多い。だから実力を出し切れていない

というわけでもないんだけどね。

「甘っちょろーい！足りなければ外から集めるとか方法があるでしょう！　どこぞの9歳児には出来るのよ？　出来ないとは言わせないわよ！　そ・れ・に、あなたの魔力は中級妖怪を上回っているの！　…貴方に黙って、貴方の魔力の境界を弄った私の苦労を少しは考えてもらいたいものね」

扇で僕の頭を小突きながらそう言う紫さん。そんな無茶言わないで下さいよ、と返そうと思った所で、凄く大事な事に気が着いた。僕が中級妖怪並の魔力を持っているとかもそうだけど、それよりもふざけた事だ。

「ちょ、いつの間に弄ってたんですか！？　初耳ですよ！？」

「あなたを弄るのと同時に」

…あ、頭が痛い、僕は中身までも弄られてたの…？　母さん。あなたの息子は小さな間から汚されていました…。

「大和、あなたは確かに才能がないわ。「ぐへぇ…」　でも強力な能力とそれなりの魔力はある。あなたの能力はあなたの思っているよりも強く、魔法は努力次第で化けるかもしれない。萃香が育て、勇儀が鍛え、私がきっかけを与えた。そんなあなたが弱いまま死ぬなんて、この私が許さないわ」

「紫さん…」

僕は、自分で思う以上に幸せ者だろうな。こんな人達に囲まれて今まで生きてきたのだから。…確かに、このまま負けたまんまじゃ母さん達の顔に泥を塗ることになる。そんなの、許せるわけないもんね…！

「さあ、あいつに一発かましてやりなさい。負けたことを萃香が知れば、拳骨を貰うわよ？」

「わかりました！　行ってきます！！」

「冷静になって闘うのよ！　って、行っちゃったか…」

◇◆◇◆◇◆◇

子供にしては良くやった、というところか。けれど、初めてこの子供に会った時はもっと強い何かを感じた。それこそ一瞬でも私を奮い立たせるほどのものを。あれに比べてしまえばやはり見劣りしてしまうが、

「…ここまで、かしらね」

綺麗に気絶している顔はそこらの子供と全く変わらない。このまま殺してもいいが…やはりもったいない気がする。今はまだ殺さないでおこう。この子は遠い未来、私の前に今よりずっと強くなって現れる。そんな気がするから。そう思い、もう用の無いこの場を後にするため背を向けた。

「待って下さい、まだ勝負はついていません」

――――――本当に面白い子供だ。

◇◆◇◆◇◆◇

「待って下さい、まだ勝負はついていません」

あの空間から意識が戻った時、幽香さんは既に背中を向けてこの場を去ろうとしていた。

――――――これではやり返すことが出来ない。

そう思った僕は咄嗟に幽香さんの背中にそう声を掛けていた。すると幽香さんはゆっくりと僕のいる方向に振り返ったけど…殺す笑みを浮かべていたので背中と下半身がブルッと震えた。…早まった気がしないでもない。

「魔力も少ないボロ雑巾の状態で私に向かう意気込みは認めるけど、今の貴方を相手にするつもりはないわ」

…どうせなら表情でも戦意がないことを少しは表してほしいです。その言葉が全く感じられないそうな獰猛な笑みですよ幽香さん。うぅ…正直足掻くこともできない気がしますよ紫さん…。正直逃げ出したいけど…ええい、男は度胸！　妹紅も言ってたじゃないか！

「これを見ても、そう言えますかね」

周りの魔力を自分に集めるイメージ…。よし、周囲の魔力を感じることには成功…次だ。しかし紫さんとの会話で何か掴めたのだろうか、周辺の魔力が感じとりやすくなった気がする。――周囲にある魔力を身体に張り付ける感覚…よし、これで簡易的な身体強化の完成だ。

「へぇ、おもしろい芸ね」

ニヤリ、今の幽香さんの表情を表現するのに一番相応しいだろう。笑顔で歪んだ幽香さんを前に、僕も苦笑が浮かんでくる。圧倒的な力の差の前にどうでもよくなったからじゃない。確かに幽香さんは怖い、でもそれ以上に僕の心が昂っているように感じる。表情には

出さず、心の底で熱く燃えている。

…ああそうか、これが“静”なんだ。直感的にそう感じた。こんな土壇場で成長するなんて、僕も立派な戦闘狂（おにのなかま）だよ…！

「行きます」

周囲から集めた魔力を『左目』に送る。イメージするのは母さんと闘った時の一瞬の出来事。瞬間的に周りの進む時間が遅くなるその中を幽香さん目がけて突き進む。

「…ッ！　はやいっ！？」

幽香さんが何か言っているけど無視。この期を逃すわけにはいかない！　殴る。殴る殴る殴る殴る殴る。最後にもう一回殴る。僕の動きが急に変わった驚きからか、幽香さんは防御もままならずに僕の拳をその身に受けていた。

「ふぅ～…どうだ！？」

とりあえずやられたら倍以上にして返す。母さんの教え通りだ。うん、僕冷静だ。冷静に殴ったから大丈夫。ボコボコにされた恨みなんてこれっぽっちも込めてない。…別に逆襲が怖いだなんて、微塵も思ってないんだからね！

「ふっふふふふ、あはははははは！！　やってくれたわね大和！　あなた最高よ、ここまで私が一方的に殴られたのは貴方が初めて。…でも、力が足りないわ。大方、その目に魔力を送るのが精一杯で身体強化にまでは回らなかったと言った所かしら」

やっぱりばれるか…！　楽しそうに笑いながら言う幽香さんに、顔が歪むのが隠せない。ぶっちゃけ怖いです。そんな頬を染めて睨まないでください。背筋や下半身から吹き出す冷や汗や震えが止まらないね。

それにしても弱点もしっかりばれてるなぁ…。幽香さんの言う通り、さっきの身体強化はただのハッタリ。右目も左目も燃費が悪すぎるんだよね。便利なくせに厄介な能力だよほんと。

「楽しいわ！　本当に楽しい！！　それだけに、終わらせるのが残念ね！」

そう言った幽香さんの日傘の先に、前とは比べ物にならない妖力が集まっていく。あれはさっきの…！？　こん畜生、僕の魔力は闘い当初から少なくなっているのに…

「幽香さん！　じゃあこれで決着といきましょう！！」

だったらもうここで決めるしかない！　なけなしの魔力を掌に集中…足りない魔力は周りから集める！　使いきれず、周囲に霧散した僕の魔力を収束、両掌を腰に溜めて回すように魔力を練り、凝縮させる…！　魔法の構成も手順も滅茶苦茶、ただ前に向かって魔力を放つだけのお粗末な魔法。

けれど、これが今僕が出せる、全力全開！！

「マスタァァァスパァァァァク！！！！」

技名つけてごめんなさーーーーい！！

「…私の技まで真似るなんて、本当に面白い子。でも、力不足よ！」

幽香さんの日傘の先端から放たれた極光と、僕の突き出された両手から放たれた極光。互いの技がぶつかり合い、暗闇を明るく照らした。そして一瞬の拮抗の後、あっと言う間に目の前までそれが迫って来た。こ…こんにゃろぉ…！　このまま…このまま終われるかッ！！

「人間の――――――――――魔法使いの底力を舐めるなぁぁぁぁぁ！！」

すこしでも気を抜けば押し切られそうになるのを耐える。耐えて耐えて耐えて、体中の魔力を爆発させて押し出す！　自分も、周囲の魔力も空っぽになるくらい力を込めて出した最高の魔砲はゆっくりと、でも確かにその勢いを強めていく。

「ふふ…よくここまで頑張ったわ。…じゃあね、大和。次はもっと強くなった貴方と闘いましょう」

じわりじわりと押し返していたマススパークもここまでだった。全力を出し切った僕の遙か上をいく幽香さんの極光が僕の一撃を呑みこみ、そのまま僕を包んだ。

あぁ…でも、それほど悔しくないかな…。最後の瞬間、何故かそう思えた。

◇◆◇◆◇◆◇

「…あ～痛てーな畜生」

フラワーマスターが去ってから少しした後、私は目を覚ました。死なないから良かったものの、あんな奴は二度と相手にしたくない化物だぞまったく…。今の私じゃ相手にならないしな。

…ってそうだ、大和は何処だ!?

「お、おい大和!?　生きてるか!?」

周囲を見渡すとあいつはいた。煙を上げて伸びているが…生きてるよな?

「うぅん…はっ、そういえば妹紅は!?　って生き返ってるぅぅぅぅ!?!?」

よし、何時も通りで大丈夫みたいだな。頭は相変わらず沸いているが…しかしあんな奴相手によく生き残ったもんだ。少しは評価を改めるべきかもしれないな。

「あ、悪霊退散!怨霊よ、去れ!!」

…とりあえず、この動転した馬鹿を殴ってからだな。じゃないと会話も成りたたねぇ…。

これが僕の全力全開！（後書き）

戦闘シーンってホント難しいと思います。自分の頭ではイメージ出来るのに、それを文章にしようとしたら手が止まります。漫画は絵が付いていて分かりやすいんですけど、文章となるとちょっと・・・。まあ、漫画なんて描けませんけどｗ

それはさておき、そろそろ話しのストックが尽きかけてきました。ピッチ上げてるんですけどリアルの方も忙しいんでちょっと・・・。今は一日に一つ投稿してますが、そのうち止まると思います。が、また話が溜まれば更新していきますので。（このまま更新し続けれるかもしれないけど

どうも長々と失礼しました。

また会う日まで（前書き）

短い・・・短いです！！声を大にして言うことじゃないですねけど

９月５日改訂

「ったく、人を怨霊扱いしやがって」

「普通、人間って死んだら生き返らないと思うんだ」

「私の話を信じないお前が悪い」

返す言葉もございません。でも仕方ないよね、死んだ人間が生き返るとかふざけた話だと思うでしょ？

妹紅に向かって知りもしない悪霊退散の呪文を唱え続けること数分、いい加減にしろと脳天におっきなたんこぶが出来るほどの拳骨を貰った次第であります。あまりの痛さに涙がうっすらと…。

その後は妹紅がなんで生き返ってるのかをもう一回、今度はしっかりと聞いた。…別に聞き逃していたわけじゃない、信じてなかっただけだ。だって死なないなんて…ねぇ？

妹紅が言ったのは蓬莱の人の形。不老不死の身体。輝夜って人との関係などなど。不老不死と聞いた時、思わず魔法使いにならなくて

もいいんじゃないのか、不老不死の薬がまだあるのかを聞きたかったけど、この話をしていた時の妹紅の顔色を考えると聞くことができなかった。

「そ　れ　に、私は逃げろって言ったよな？　何で逃げなかったんだよお前。まさか、あいつに勝てるとでも思ったのか？」

「そんなわけないよ。ただ…やられっぱなしって言うのは僕の家族にも顔向け出来ないし…」

「それで死ぬかもしれない闘いに身を投じたってか？　ハッ、そんな矜持なんて捨てちまえ。いいか？　お前の家族の事を思うのなら尚更逃げた方が良かったんだよ」

「む…でもそれだけの理由で逃げなかったんじゃないよ」

「ならどんな理由があるんだよ」

「妹紅を、仲間を見捨てるなんて選択肢を選ぶことなんて出来なかったんだ」

あの時、絶対に勝てない相手を前にした時は妹紅の言う通りに逃げるべきだったのかもしれない。僕自身の為を思えば逃げるべきだったんだ。魔法使いになる夢を、帰りを待ってくれている母さん達のことを思えば尚更そうするべきだった。でも鬼は仲間を見捨てるよ

うな真似はしない、絶対にだ。『伊吹』　の名を持つ者として、それだけは出来なかった。…いいや、名前なんて関係なしに、僕は妹紅を置いて逃げるなんてことを考えも出来なかった。

「……お前、救いようの無い馬鹿だな」

「ひどっ！？」

真面目に答えたのにそれですか！？　ちぇ…なら見捨てて逃げてやれば良かった「でも――」　ん？

「でも、そんな馬鹿も嫌いじゃないぜ。…ありがと」

「……も…妹紅～～～～～ッ！！」

頬を掻いてそっぽを向きながらも感謝を言ってくれた妹紅に感極まった僕は、そのまま思いっきり跳びかかっていった。こんな僕でも、人の役に立つことが出来たんだ！　そう思ったら居ても立ってもいられなくなった！

「だーもうっ！　抱きつくな！　邪魔だ離れろっ！！」

「照れなくていいじゃないか～」

「こんのクソ餓鬼…調子に乗るなッ！」

「アチァチアチアッチチチ！？！？　アッツーーーーーーイ！？」

「フンッ！　いい気味だ」

鬱陶しかったのか、抱きついていた僕は腕に軽く炎を押しつけられた。なんだよなんだよ、照れ隠しなんかしてさ。似合わないよ～？　何時もみたいに馬鹿とか使えないとか言ったほうが妹紅らしいよ？　でも褒めてくれるのが嬉しいことに変わりないけどね！　なんならもっと褒めてくれてもいいんだよ？

「ニヤニヤするな気持ち悪い…先行くぞ」

「あ！　待ってよ妹紅！」

すたすたと歩幅を大きく歩きだした妹紅の背中を追いかける。もう、本当に素直じゃない人だなぁ…。

「結局口調は変えなかったし私の忠告も無視するし…お前、実は私のこと嫌いだろ」

隣に追いついて見上げた顔はやっぱり無愛想な表情を浮かべていた。もうさっきの話は終わりだ、妹紅がそう言っているように感じたので、僕も仕方なくそれに乗ってあげることにした。これ以上は後が怖いからね。

「そんなことあるわけないって。このままの方がしっくりくるだけだよ」

何でかなぁ…僕が『俺』　だとか偉そうに相手と接するって考えられないんだよね。これって皆の中で一番の年少だったからなのかなぁ。

「…まあいいさ、お前が決めることだからな。それに…私たちの旅はここで終わりだしな」

そう言った妹紅と僕の視線の先には、既に都の入り口が見えていた。

最初に僕と妹紅が交わした約束、それは妹紅が都まで僕を連れて行ってくれるというもの。隣の妹紅を見上げてみると、少し寂しそうに見える苦笑を返してきた。妹紅は元貴族だ、自分の育った場所を懐かしいと思っても立ち寄るつもりはないのだろう。それに妹紅の姿が目立つ。都から遠い人里でも噂になっていたくらいだ、都にだって白髪の妖怪退治屋の噂は流れて来ているだろう。

それも僕が聞いたようにいい噂ばかりではないだろうし…。

だから僕らの旅もここまで。でも、僕は少しの望みを賭けて誘ってみることにした。

「妹紅、やっぱりもうちょっと一緒に旅をしない？」

やっぱりこのまま別れるのは少し寂しい。もしかしたらもう二度と会えることは無いかもしれない。何時か恩を返そうにも、この広い世界で再び会える保障は何処にもない。それに妖怪の山から都まで、

僕はほとんど誰かと一緒に行動してきた。これからも誰かとの出会いがあるだろうけど、やっぱり不安は拭えない。

そうなると、やっぱり頼りがいのある人と一緒にいたいと思ってしまった。これは僕の我儘で、弱さだ。

「嫌だね。お前の御守はもう御免……冗談だから泣くなって！！」

真面目に尋ねてみたのに返ってきたのがこれですか！？　うぅ…酷い言われようと別れの悲しみで涙があふれそうだ。俯いていると涙が溢れそうだよこの野郎。僕はこんなにも妹紅が好きなのに、妹紅が僕のことをそう思っているだなんて悲しすぎるよ。

「あ〝ぁ〜…なんだ、その…私もこの旅で思うことがあったんだよ」

頭の上に優しい重りが乗ってきた。顔を上げてみると、膝を曲げて視線を合わせてくれている妹紅が目に入った。今まで見たことの無い、優しい瞳。……あぁそうか、やっぱり妹紅も僕のことを大切に想っていてくれたんだ。何故だかは解らない、でも自然とそう察することが出来た。

「やっぱり子供が嫌いだってことですか？」

でもさっきの仕返しも兼ねて涙目で聞いてみてやった。すると驚いたことに割と本気の涙が出て、妹紅は当然ながら僕自身も驚きだった。

「男がそう簡単に泣くな！　冗談だって言っただろ！？　……まぁなんだ、私もまだまだ弱い、そう思ったんだ」

「妹紅は強いよ。僕なんかよりもよっぽど腕が立つじゃないか」

弱くないです。繰り返して言うと弱くないです。重要なことなのでもう一度言うと、弱くなんかないです。むしろ妹紅が弱いのなら僕はいったいどうなるんですか。ただの雑魚、生きてる価値無しですってやつですか？

「いや、私は弱い。本来なら私がお前を守ってやらなければならなかったのに、何も出来なかったからな」

「そんなことない。妹紅が守ってくれなかったら、今頃あの場所で鳥の餌になってたはずだよ」

これだけは言える。あのとき妹紅が盾になってくれなかったら、絶対に僕は死んでいただろう。自慢じゃないけど、跡形も残らなかったかもしれない。…改めて思い返してみると、幽香さんは僕を本気で殺そうとしていたんだよね…？　うぅ…今更ながらに冷や汗が…。本当に生き残れて良かったと思うよ…。

「まあ聞け。だから今度お前みたいな奴が出てきたら、周りの奴から指一本触れさせないくらい強くなるって決めたんだ。そうしたら無鉄砲な馬鹿が無茶する前に終わらせるだろうし、輝夜の奴も楽に張り倒すことができるだろうからな」

僕の頭をくしゃくしゃと撫で回し、最後にニヤッと笑って付け足した妹紅は今までよりもずいぶん逞しく見えた。こんな事をサラッと言うなんて……やっぱりかっこいいなぁ。憧れる…本当に大きな人だ。

じゃあせっかくだし少しだけ、僕もカッコつけさせてもらおう。

「だったら僕も約束するよ。誰にも負けない、そんな強い魔法使いになってもう一度妹紅に会いに来る。その時は母さんたちとも一緒に宴を開こう」

「くく、何カッコつけてんだか。まぁいいさ、じゃあ約束だ。破るなよ？」

「大丈夫！　鬼は絶対に約束を守るから！」

「お前は人間だろうが…」

お互い強くなってまた会おう。そんな風に思うと、自然に二人とも手が出て。堅くお互いの手を握り締めてから、それぞれに背中を向けて、別々の道を歩き始めた。遠く離れていても確かに感じることが出来る絆がそこにはあった。

「あ、妹紅！　せっかくだし写真撮らせて！」

「…台無しだなぁ、おい」

「まぁまぁ、そう言わずに」

「…まぁいいけど、早くしろよ。それが前に言ってたカメラか…」

終わったよー」　早ッ！？　ああそうだ、足の重りは外すな。それも修行だ」

「…辛いです」

ほんと、締まらないなぁ。

また会う日まで（後書き）

誤解されると問題なので言っておくと、この場合の大和の『好き』は友達への『好き』　です。若干１０歳の若造が男女の好きなんて早いです！

帝の御膝元（前書き）

9月9日改訂

帝の御膝元

「おお～ここが都か～。人や家もいっぱい…はぇ～凄いところなんだなぁ」

大きな門を潜ってやってまいりました花の都。まず最初の目的地で、この国の中心で一番栄えている場所。

「ほぇ～、聞いてた通り、いろんな物がいっぱいあるんだ…。あ、魚も売ってる」

それだけに凄い人とお店、家の数だ。門からまっすぐに伸びる道には至る所に商店が開かれている。ここに来るまでに寄った街とはすごい差があるね。さすが都ってことなのかな？

もちろん食に関してもいろいろと種類があるようで、僕の食欲をそそる物も多い。至るところから美味しそうな匂いが…じゅるり。それにしても魚か～…、山でも沢山捕れてたよね。…そう言えば、母さんどうしてるだろう。元気にしてるかなぁ……っと、考え込んでる場合じゃないや。はやく帰るためにも魔法使いについて聞かない

とね。でもその前に…

「まずは腹ごしらえだね」

とりあえず、この五月蠅いお腹を黙らせることから始めよう。丁度いい具合にお店もあるし、都の味を堪能するぞ！

◇◆◇◆◇◆◇

「うぅ～～～……」

お日様が頭の上に位置するころ、僕は一軒の店の前でうんうんと唸っていた。理由は無一文だから。そんなお金なんて持っていない僕が食べ物にありつけるはずもなく、美味しそうな匂いを前に途方に

暮れていた。

「お金って、大切なんだなぁ…」

話には聞いていたけど、お金って本当に大切なんだね。山での生活ではまったく必要なかったから、考えが及ばなかったよ。こんなことなら『自称人間は盟友』　のにとりにもっと話を聞いておくんだった。にとりは人間に無駄に詳しいからね。…会いに行ったことも無いらしいけど。

「でも…お腹へったな～」

「おい少年」

お腹が減って幻聴まで聞こえるとはこれ如何に。

「少年、聞いているのか」

「うるさいなぁ、今は構ってられないの。どこかに行っておじさん」

幻聴に律義に言葉を返す僕もだいぶ参ってるけど。…よし。この際匂いだけでお腹が満たされるかどうか確かめるのもいいかもしれない。

「お、おじ!?　私はまだ２０にもなってないぞ！　…少年、君の目の前の店主が酷く迷惑しているようなのだ。それでは商売にならんだろう」

あ～？　はッ!?　食べ物の匂いに釣られてついつい立ち止まってしまったみたい。ずいぶんと迷惑を懸けていたようで、店主さんは困り顔でこっちを見ている。どうもすいません、直ぐに退きます。でも…

「すいません店主さん。それくれたら退きますんでちょうだい？」

「お前のような客がいるか!?」

だって仕方ないじゃないか。邪魔なのは理解できなくもないけど、

背に腹はかえられないというか、背に腹がくっついて動けないんですよ。貰える物貰ったらちゃんと退くからさ。

「うるさいよおじさん。僕はお腹が減っているんだ…少し気も立ってるよ？」

立ち上がってえい！　えい！　と拳を突き出して威嚇する。さぁ邪魔するつもりなら掛かって来い！　昼ごはんを賭けて勝負だ！

「子供を怖がる大人がいるか。…単に金を払って買えばいい話だろう」

「それができれば苦労はしないんだ…」

…貧乏なわけじゃない！　ただ手持ちが無いだけだもんね！

「文無しか。…仕方ない、家で家内の飯を食わしてやる。ちょうど昼飯時だ、少しくらいなら分けることもできるだろう」

なんて心優しいおじさんだ、見ず知らずの僕にご飯を御馳走してくれるなんて…。今までの非礼をお詫びさせてください。どうもすいませんでした！　それと礼には礼でしっかり倍返ししないとね。だからおじさん、

「思いっきり食べさせてもらいます」

「…少しは遠慮しろよ？」

御馳走されるのだから、しっかり食べることが僕なりの礼です。

◇◆◇◆◇◆◇

「いや～、いっぱい食べましたね」

「ああ食べた、君がな」

おじさんご立腹ですね。僕もお腹が立ってます、膨らんだ意味で。あんな美味しいご飯初めてだったから、ついつい食べ過ぎちゃったよ。

「…それにしても、この家には本がいっぱいですね。おじさんが書いたんですか？」

「なら今頃は宮中に召し抱えられてだろうな。残念ながらこれは売り物だ。こう見えても本屋なんでな、自慢の商品だ。都一の本屋と自負しているぞ」

付いて行ったおじさんの家には沢山の棚に本が並べられていた。見渡す限りが本の山。通りや入口一帯にもそうだけど、居間…とか言う場所にまで棚に本が飾られている。これも全部売り物なのだろう、ふふん、とおじさんは自慢げに鼻を鳴らしていた。確かにこれなら自慢したくなると思う。それくらいの量がここにあるから。

「ごめんね坊や。この人は本のこととなると自慢したがるのよ」

「いえ、奥方様は気になさらないでください。これほどのものならば自慢したくなるでしょうし」

「あら、できた子ね。さぞ良い親御さんに育てられたのでしょう」

「自慢の母親です！」

「あらあら、それは良いことね」

二人には旅をしていることを話してある。妖怪の山出身だとか、鬼の息子だとか詳しいことは言ってないけど。二人も何か事情があるのだと思ってくれているのだろう、詳しい身の上までは聞いてこなかった。…うん、やっぱりヒトは親切な人ばかりだ。どこも皆と変わらない、変わっているのは種族だけだ。

……でも、ここには本当にたくさんの種類の本があるんだね。なんだか本に観察されているように感じる。物には魂が宿るって母さん達も言っていたし、もしかしたら本当にそうなのかも。でも…これだけあれば目当ての物もあるかもしれない。

もしかしたら、と言う希望を抱いた僕は、おじさんに聞いてみることにした。

「ところでおじさん、ここに魔道書はありますか？　魔法使い…大陸の陰陽師みたいな人を言うんですけど、その人達の技を記したような本です。あと、そんな知り合いは居ますか？」

「魔法使いの知り合いは居ないな。魔道書…大陸の陰陽師の書だったかな？　生憎と、そういう本は市井には出回ることはないと思うぞ。出る前に陰陽寮の検閲に引っ掛かるだろうからな。だから都中のどの本屋にも置いてないと思う。…陰陽師の書も出回ってないんだ、欲しいと思っても諦めるしかない」

「…都まで来て手がかり無しって、そんなのあり？」

「有りも無しも、事実だからしょうがない」

嘘ぉ…せっかく苦労して此処まで辿り着いたのに…。いきなり詰むなんて、そんなのあんまりだ。魔法少年伊吹大和、始まることすら出来ないよ…。

「もうあなた、意地悪がすぎますよ」

「……へ？」

「実はね、ありそうな場所があるのよ」

「ど、どこですか!?」

そんな場所があるの!?　人が悪いぞ自称都一の本屋さん！　…視線を逸らさないでください！　さあ、隠さずキリキリ吐いてもらおうか…！

「さっきこの人が言った、陰陽師さんたちがたくさんいる場所よ」

「確かに陰陽寮ならあるかもしれん…。しかしあそこは朝廷の中枢とも言える場所だ、一般人は入ることが出来んよ」

陰陽寮…陰陽師がいっぱい居る場所…。つまりあれだね、妖怪にとっての最大の敵。人間にとって一番頼りになる人達の集まり。…鬼に育てられた僕は立場上危ない気がするけど、魔道書のことを考えたらそんなことは言ってられないか。でも普通に入ることは出来ないみたいだし…どうしようか。

……忍び込む？

「あら、あそこにはお得意様がたくさんいらっしゃるでしょう？頼んでみてはどうですか」

「仮にも帝の御膝元だ。いくら気の良いあいつらでも無理だろう…」

ちょっと危ない考えを巡らせていた僕だけど、二人の会話を聞くにそんな危ない橋を渡る必要はないのかもしれない。そのお得意様とか言う人に頼んで貰えないのかな？

「あの、すいません。話を聞く限り何か手がろうようですし、それをお願いすることは出来ないですか？　僕にはもうおじさんしか頼れる人がいないんです。お願いします、頼んでみてくれませんか？」

ここまで来て、はいさよならなんて言えない。藁にも縋る思いとはこのことだよまったく。

「むぅ、しかし…」

「頼んであげればいいじゃないですか、この子もせっかくここまで来たんですから」

そうそう。せっかく山を下りてきたんだから。魔法使いに成れませ

んでした、なんて言って帰ったらいい笑いの種だよ。

「…わかった、頼んでみよう。後は自分で何とかするんだぞ？」

「はい！　それだけで十分です！！」

悪知恵と勝算はあるんだよね、これ。

◇◆◇◆◇◆◇

「この子が例の？」

「ええ、大陸の陰陽師の書を探している子供です」

「はじめまして、伊吹大和です」

「伊吹とな!?　…いや、そんな訳あるまい」

「どうかしましたか？」

「…いや、なんでもない。大陸の書を探しているそうだな」

危ない危ない…。もしかして、とは思ったけど、やっぱり伊吹の名前には反応するんだ…。やっぱり陰陽師には要注意、鬼の子供ってことは伏せておこう。無駄な騒ぎは起こさないほうが双方にとってもいいだろうし。

「はい、魔法使いになるために旅をしています。何か自分の為になればと都までやって来ました」

「若いのにしっかりした子だ。確かに海の向こう、かの国と交流が始まってからそのような書がこの国にも入って来てはいる」

かの国と言うことは……魔道書は大陸から流れてきてるのか。そう言えば紫さんも西洋、大陸の魔道書だと言って本をくれたっけ。…場合によっては行く必要もあるかもしれないね。

「出来れば一つ頂きたいのですけど…駄目ですかね？」

「無理な相談だ。帝がいたく気に入っておるのだ、どうしようもあるまい」

最近はそれに現を抜かしてしまって…と、一息吐く陰陽師の人。どうやら帝は相当気に入っているみたいだ。でもそれだけ気に入ってるってことは、ここにあること事態かなり珍しいってことだよね？

…やっぱり都以外に魔道書は無いと考えていいだろう。

「こう見えて、実は僕も魔法が使えるんです。なのでその書も自分が精進できればと思い訪ねてみたのですが…」

見せてもらうついでに借りていけばいいんだよ。大丈夫、死んだら返すから。

「既に会得していると！？　その年では素晴らしい才能だな！」

「はい。既にいくつかを習得しています」

ニコリと笑ってそう言うと、陰陽師の人は驚いていた。…ごめんなさい、出来るのは三つだけです！　嘘は吐いてない、嘘は吐いてないからね！！　それに才能なんてありません！　散々言われてますから！！

「そうだ、この子の魔法とやらを帝に御見せしてはどうですか？」

良いことを思いついた、そんな顔で僕を見つめたおじさんは突然そんなことを言った。…おじさん何言ってんの？　僕はただ、書を見せてもらう機会が欲しいだけなんだけど。　何良いこと言っただろう、みたいな笑顔浮かべてるの！？　機会があれば後は何とでもするのに、何でそんな事言うのー！？

「うむ、帝も書ばかりでなく実際に見てみたいとおっしゃっておいでだからな。ちょうどいいかもしれん。よかったな君。場合によっては書を見せてもらえるやもしれないぞ！」

……えええぇぇぇぇぇぇ！？　帝に見せる！？　あんなお粗末魔法を

？　何でそんな簡単に納得するの！？　無理無理、首を刎ねられるのがおちだって！　僕は見る機会があればそれでいいのに！　それに帝の御前とか、借り逃げしたら地の果てまで追いかけられそうじゃないか！

「うむ、ではまず陰陽寮に行くか。なに、心配することはない。皆気のいい奴ばかりだ」

何てことだ…当初の予定が大幅に狂っちゃったよ…。ああもう、お願いだから厄介事だけは勘弁してください…。

陰陽寮怖い（前書き）

今回も恐ろしく短いです

９月２４日改訂

都一の本屋さんで魔法書を探していた僕は、紆余曲折を経て陰陽寮まで来ることになりました。で、現在は陰陽寮で陰陽師の方々に囲まれています。

「みんな聞いてくれ。魔法を使うことのできる少年を連れてきたぞ」

拉致の間違いですよ皆さん。有無も言わさず連れてこられたんですから。

「『見習い』魔法使いの大和です。よろしくおねがいします」

見習いの部分を強調しておく。過度に期待されても困るからね。それと、伊吹の名は伏せさせてもらいます。陰陽師の本拠地で妖怪の息子だって言うほどボケちゃいません。

「まだ小さな子供ではないか」

「このような者が大陸の術を？」

「平凡な顔立ちじゃのう、凡人にしか見えんわい」

ああ、やっぱりこうなった。大人は懐疑的で慎重深いって妹紅も言ってたし。それに僕がまだ１０歳の子供だからってこともあるだろう。そんな子供がいきなり出てきて、はいそうですか、みたいなことになるはずないもんね。

あと最後の人、平凡言わないで。最近脆くなってる僕の心が傷つくから。

「まあ聞けみんな。都一の本屋の紹介だ。まだ私もどれほどのモノかは見てないが、きっと我々とは違う素晴らしい術を使うのだと思うぞ！」

「本屋の紹介とな」

「それは期待できそうだ」

「しかし才能なさそうじゃの」

煽るおじさんに、打って変わって掌を返すおじさん達。僕にそんな期待掛けさせてどうするつもりなんですか、大したこと出来ないのに……。

それにしても本屋さんは信頼されてるなぁ。でもごめんなさい、その信頼失っちゃうかも。

あと最後のお爺さん、大正解です。大正解ですが、凡人凡人言わないでください！

「さっそく帝に知らせようと思うのだが、帝は今どこに？」

それにしても皆さん、何でそんなに魔法への期待が強いんだろう？
やっぱり大陸の術だからとか、帝が魔法の書を離さないと言うところから興味が沸くのかな。だったら、それほどの魔法がここにある書には書いてあるってことだよね。

……なんだ、また難易度が上がった気がする。

「皆、少し待て。帝に報告するのはよい。じゃが、それよりも先にせねばならぬことがある」

助け舟参上！　大当たりお爺さんが僕の方を向いてちょっと待てと言ってくれた。面倒事を回避しようとしている僕に気付いてくれたんですか！？

「この子供がどのような魔法とやらを使うか見ねばならぬ。半端なものでは帝の機嫌を損ねる……それに、この子が帝に危険を及ぼすかどうか、見極める必要がある」

まったく違うじゃないですか！　なんで危険かどうか見極めるとか言うのに、僕の実力は見抜いてくれないの？　書が大陸から渡って来たことが分かったからもう帰りたいんです、ほんとに。おじさん達も変な目で見てくるし……。帝に僕の魔法を見せるより、今の僕には大陸に渡ったほうが簡単な気がしてしかたがないんです。

「では修練所に向かうかの」

ぐへぇ……

◇◆◇◆◇◆◇

「見せてもらおうか。大陸の魔法とやらを」

魔法書だけ手に入れば僕はそれでいいのにね、なんでこうなったかなぁ……。でも仕方ない、もう逃げられないし覚悟決めますか！できれば大技一発見せるだけで許してください！

「いきます！」

体中の魔力を練りながら掌に集中、大気からも魔力をかき集める。
腰だめ構えた両手に光が、魔力が満ちていく。僕の使用した魔力が大気中に霧散してないからそれほど威力はないけど、その分は派手さで勝負だ！

「ほう……」

なにやらお爺さんと数名の方が声を上げているけど驚くのはまだ早い。放出された魔砲の派手さは今の比じゃないんだよね…！　聞いて驚け見て驚け、これが僕の全力全開！

「魔砲！　マスタースパーク！！」

溢れだすように放出された魔砲は轟音と共に空に向かって打ち上げらた。空に向かって一直線に伸びていく光は都中の人が目にすることができるだろう。これならお爺さんたちも満足してくれるはず…。

「どうですか？　僕の魔法は」

なかなかの物でしょう？　と、上手くいった事に安堵しながら胸を張った。憶えたばかりだけど上手く出来て本当に良かったよ。

「うむ、子供にしてはよくやる。じゃがな、それくらいなら儂らにもできるわい」

ちょっと、あれは幽香さんの技ですよ？　確かに僕のやつはてんで駄目だけど、そう簡単にあれほどの威力を出せるとは思えない。僕だって中級妖怪くらいの力はあるって言われてるし。それを『それくらい』　と言えるはずがないでしょ。

「嘘ではないぞ。あんな力の塊を放出するだけならここにいる者なら大抵の者ができるじゃろう。見ておれ」

そう言ったお爺さんは腕を空に向け、力を集中を始めた。たぶんこれが人が持つ霊力とか言う力なんだろうけど、なんて霊力なんだ！？　目視することができるほどの霊力がお爺さんを取り巻いている。その霊力を掌に収束させ、先ほどの僕の魔砲なんて屁の様に感じるくらいの極光が空に向かって打ち出された。

打ち出された霊力は僕のそれとはあまりに違いすぎている。あれは本家（幽香さん）にも匹敵するほどの威力を秘めているはずだ。それほどの怖さを感じた。

「儂ら陰陽師は妖怪との争いで矢面に立つことが多い。特に上級妖怪などを相手にせねばならぬ場合もある。これくらいできねば簡単に死んでしまうのじゃ」

くつくつと笑うお爺さんが、もはや同じ人間だという様には見えな

かった。

日の本の都を守護する陰陽道の達人たち。その陰陽師が住まう陰陽寮。……ある意味、妖怪の山よりおっかないです。

陰陽寮怖い（後書き）

最近小説書いてる時に思うことが、「無茶苦茶な進行だよなぁ」です。これからの展開でも主人公の有利に進むし。ほんと、読んで下さる人には感謝ですよ。

さて、今回から一言でも後書きに何か書こうと思いましたので、とりあえず今回の話の補足をしておきます。今回出てきた陰陽寮は実際に存在していたモノを参考?にしています。まあ名前を貰ったくらいで、どんな場所かすらも詳しく知らないんですがｗ　ｗｉｋｉ見て一人納得して書きましたｗ　それではまた明日お会いしましょう

結界と再会と

「とりあえず帝が帰って来るまでここで休んでいくがよい。
急ぐ旅とはいえ、身体は大事にせねばならん」

と言うお爺さんたちの好意に甘えて、帝との謁見まで陰陽寮で厄介になることになった。
だけど気持ちには落ち着きがなく、沈み込んでいた。
ようするに、自分の力不足にがっくりきているところである。
見かねた陰陽師の人たちが「外で気分転換でもしてくるといい」と半ば強引に僕を陰陽寮から追い出した。なので今は外に出て気分転換をしているところだけど、

「そりゃ才能はないかもだけどさ、それはもうしょうがないじゃないか」

一人都を歩いていると、もっと惨めな気分になるし、愚痴もでる。むしろ陰陽寮でじっとしてたほうが良かった気がする。こんな賑やかな中だともっと沈み込んでしまうから。
ったく才能がなんだよ。僕だってがんばってるのに何で・・・

「いっそのこと山に帰ろうかな・・・。才能ない僕なんてどうせ魔法使いなんてなれるわけないし」

「才能がなければ諦めるのが正しいのかな?」

「えっと、どちら様ですか?」

あちゃ、さっきの話きかれてたのかな。

声の聞こえた方を振り向くと綺麗な服を着た人がこちらを見ていた。
格好からして貴族の方かな？
ちょうどいいや、僕が妹紅から習った「貴族への対処法」の成果を見せてやる！

「なにやら悩んでいるようだったのでな、つい声を掛けてしまった」

「申し訳ございません、お耳を汚してしまいまして。すぐに消えますんで」

その一　とりあえず謝って逃げるべし

「あいや、待ちなされ。なに、そなたの悩みを話してみなさい。何か力になれるかもしれないのでな」

し、しつこい！街中で貴族を相手にする時は大抵面倒事になるから逃げたほうがいいって言われてるのに、これじゃ逃げれないよ。

「じゃあお言葉に甘えて」

その二　逃げれないなら当たり障りのないように

とほほ。都に来てからロクな事がない。
でもいきなり話かけられたけど、この人になら何故か話せる気がした。
全てを包み込むような、そんな感じの人みたいに感じるんだ。不思

議でだよね？
賢者って呼ばれる人ってみんなこんな感じなのかもね。僕の知ってる自称賢者は滅茶苦茶な人？だけど。

――――――――――――――――――――――――――――――――

「魔法使いか。なるほど、帝は大陸の術を見てみたいと言っておるからな」
「はい。でも僕程度の魔法なら誰にでもできるって言われて・・・。帝に見せられるような物でも無いって解っちゃいましたし、このままじゃ首刎ねられて終わりです」
「帝はそのようなことはせんよ・・・」
しっしまったーーー！！？？貴族の人に帝の悪口？とにかくマズイ言い方だったのか！？
「す、すいません。貴族の方にこんなこと聞かせてしまって」
不敬だ！打ち首じゃあ！とか言われたりしないだろうか。
「まあよい。・・・そうだな、この都に強力な結界が貼られていることは知っているかな？」

おろ、お咎め無しみたい。心の広い人だねぇ。
都の結界って言えば、何か妹紅も言ってたな。最も結界の力が高まる夕方から夜にかけては、力のない人で目視できるほど強力であるらしい。僕も都に入るときにこの結界を潜ったけど、強い安心感に包まれた。

「はい。妖怪から身を守るために張っているのですよね？」

「そうだ。そしてこの結界を貼ったのは陰陽師の爺だ。・・・君の頭に浮かんだ爺であっておるよ。
奴は一人でこれほどの結界を貼りおった」

あのお爺さんどれだけ凄いんだ！？紫さんたちとも立ち向かえるんじゃないの？
まあそれも、持って生まれた才能が物を言うんでしょうね。

「しかしな、爺も才能があまりなかったらしい（嘘だがな。少年の為にはこう言うしかなかろう）」

「え？」

「弛まぬ努力、諦めぬ強き心が奴をあの高みにまで育てあげたのだ」

あのお爺さんに才能がなかった・・・。努力だけであの高みまで辿りつけた？
この人はそう言うが、本当にそうなのか、僕には解らない。

「そなたはどうかな？諦め、才無き身を嘆くだけで終わるのかな？
そなたはまだ若い。これからも苦悩は続くだろうが、諦めてはそ

こで終わりなんですよ？
　それに、才能が無いなら、無いなりにもやりようもあるでしょう」
僕が強くなる機会はまだたくさんある。それを活かすか活かさぬかも僕自身の『これから』
にかかっているということ。そして自分を支えるのは強い心だということ。そう・・・でいいんだよね？

・・・不思議な人だ。人をこんなに安心させられるなんて。

「ありがとうございました。何か憑きモノがとれた感じがします。
　これでまた、頑張っていくことができそうです」

「よく言った。ではこれを持つがいい。そなたの欲しがる魔道『妖怪だー！妖怪が攻めてきたぞー！！』　何だと！？」

「妖怪だー！それも、鬼が攻めてきたぞー！！」

その叫び声と同時に都中の人達は我先と門の方角から逃げていく。
この貴族の方が何かあげるって言ってくれたようだけど、もう目の前の人は攻めてきた鬼を前に緊迫した面持ちへと変わっていた。誰

か知らないけど空気読んでください。

「むう、鬼か」

なんかすいません。身内が迷惑かけてしまって。

「都には結界があるじゃないですか。心配はいらないのでは？」

そんなに心配することもないでしょうに。
お爺さん曰く、鬼も通さないことが自慢らしいし。

「確かに結界は強力。だが、鬼神や四天王ほどの者がくればどうなるかわからん」

あの人たちはねえ、人の常識に当てはまらないバケモノばかりですから。
気にしたら負けですよ。大母様とかなら世界相手に勝てそうだし。

「晴明が所用で出かけとる今に仕掛けてくるとは、間の悪いやつめ・・・」

晴明・・・安倍晴明のこと？
安倍晴明の名は僕でも知っている。文が天文道の達人の人だって言ってた。
って、所用で出かけてるんじゃやばいんじゃないの？

「でも他の陰陽師の人達もいるじゃないですか」

他の人もそれなりにできる人がいたはずだ。
あのお爺さんなら鬼とはいえ、母さんクラスじゃないと厳しそうだ

ったけど。

「それでも鬼相手には時間稼ぎが限界だろうな。鬼の強さは破格のものだ」

「それでも闘うのが陰陽師ですぞ」

うわ、ビックリした。急に現れないでくださいよ！
周りには陰陽寮の陰陽師が勢ぞろいしていた。何処に戦をしに行くつもりですか・・・。
国を一つ落とせるくらいの戦力はあるよね、この人達全員なら。
いきなり現れたのは転移でもしたのか、力の残り香がする気がする。

「来たか爺。状況はわかっておるな？」

「わかっております。攻めてきた鬼は二人。伊吹と星熊、四天王の内二人が来ておるようです」

「よりにもよってまたあの二人か・・・。おそらく暇だからとかで来たのだろうな」

「おそらく」

何でこの人達母さんたちの性格理解してるの！？てか、理解されるほど攻めてるの！？
・・・土下座でもしたほうがいいんだろうか。

「いつも通り都の外で闘え。それと一人も死者をだすな。これは余の勅命ぞ」

「「「陛下の仰せのままに」」」

そう言うとみなさんまた消えてしまった。おそらく転移したんだろう。

「言い忘れておったが、余はこの国で一番偉い者だ。驚いたか？」

言わないでください。帝に向かって帝の悪口言ったことへの逃避が忙しいんです。

――

「よいか！必ず纏まって動くのじゃ！倒せなくてよい！負けなければよいのじゃからな！！」

わしがそう言うと皆は固まって防御の陣を形成し、結界を張る。個々の力はそれほどでもないが、束ねれば強固なものとなる。これが人間の強みじゃ。

「ったく、相変わらず攻めてこないやつらだね。おい爺さん、晴明の奴はどうしたんだ？いないのか？」

「出かけておるわ。お主の目当ての者はおらんぞ。今日は引き返したらどうじゃ！？」

声を大にして言う。この二人は強者との闘いを望んでいるからの。いないと分かっても帰るような奴らではないが、一応伝えておく。

「でもあんたはいるじゃないか。静明の師にして私の好敵手、天文道の使い手『賀茂忠行』」

何時もならわしがこの星熊の相手をして、晴明が伊吹の相手をするのだがあいつは今おらん。
しかたない、わしが二人の相手をするしかないか・・・。

「では、わしが二人の相手をしようではないか。何、小鬼如きわし一人で十分じゃわい」

故にこう言う。他の者にはこやつらの相手は危険すぎるのでな。皆の助けもある。死にはせんじゃろ。

「吹いたな、爺。後悔するよ」「私たち二人を相手にするか。流石は好敵手、言うことがちがうねぇ」

「もうよいかな？では、天文道　賀茂忠行　参る『ちょっと待った――――――――！！』？」

「伊吹萃香！お前の相手はこの僕だ！！」

「何奴！？」

おい小僧、いきなり出て来てわしの出番をとるな。

結界と再会と（後書き）

今日も更新、じらいです。今回は一話が短かったために急遽二話を合わせる羽目になりましいた。読みにくかったかと思います。すいませんね。

さて、今回お爺さんの名前が明らかになりました。彼も実在していたと思われる人物を名前だけ頂いてきましたｗ　改めてｗｉｋｉの偉大さを思い知らされますね。

ではまた明日

ふざけた闘い

ああ、何をやってるんだろう僕は。こんにちはみなさん。今回もいつも通りの伊吹大和でお送りします。
帝と一緒に居たくなくてこっちに来たのはいいけど、何で母さんに喧嘩売ってるんだろうね僕。
母さんたちには僕だってことがばれたら面倒だし、陰陽師の人達には鬼の子供ってことがばれないように顔に布を巻いて出てきたけど、これじゃ僕ってわからないから逆に手加減なしで危ないかもしれない。

「何しに来た小僧。早くこの場から去れ、死ぬぞ。」

ホント、何しに来たんでしょうね僕。アハハ、自分でも解ってないんです。
まあ去れって言われてますから、喜んで引かせてもらいます。

「あんな派手な登場をしておいて引くなんてことないよな?やま・・・じゃなくて見知らぬ少年」

姉さん僕ってわかってて遊ぶつもりですか!?
あ、でも姉さんが気づいてるんだ、母さんだってわかってるよね。
若干の期待を込めて母さんの方を向くと、

「おまえ、子供にしてはできそうだな。遊んでやるよ、かかっておいで」

・・・気づいてるのかそうじゃないのかわからないんですけど。
今すぐにでも逃げたいのに、僕逃げられません。まったく、後先考

えずに動くもんじゃないよね。
僕の大馬鹿野郎！

「じゃあお言葉に甘えて」

仕方ないから右目に魔力を集めて突撃する。突撃の最中に魔力糸を束ねて剣にして斬りかかる。
ついさっき思いついた技をうけるがいい！ふはははは！やけくそだコンチクショー！！

「だらっしゃぁぁぁぁ！！」

先読みで得た空間に思いっきり魔力剣を振った。・・・何時も同じで芸がないとか言わないでね。

「うおっと、危ない危ない」

うそん。なんで魔力剣を素手で止めることができるの！？

「なんだかわたしの動きが読まれてるみたいな攻撃だな・・・。
あれ？子供で読む？？？未来を視る・・・。
あああああああああああ！！や、大和か！？お前大和だろ！！？？」

気付いてなかったの！？それはそれで驚きなんだけどさ。
・・・悲しいとか思ってないデスヨ？

「なんだよ、それならそうと何でお前も勇儀も私に言ってくれないんだよ。母親なんだぞ、私は」

あ、バカ。そう姉さんの呟きが聞こえたけど、時既に遅し。

「「「「「はっ母親ぁぁぁぁ！！？？」」」」」

やっぱこういった反応をしますよねー。

「あれ、どうかしたのか？」

「・・・萃香、ここはどこだい？」「都。何言ってんのさ」「私たちは？」「鬼だ」「大和は」

「人間だよ・・・あ゛？」

「まったく、大和が顔を隠した理由くらい少し考えればわかるだろうが」

姉さんはよくわかってくれてたのね。母さんは僕が置かれている状況も分かってなかったみたいだったけどね！僕が後に引くのを邪魔したけど。

観念して顔をさらけ出す。ううう、罪悪感が。

「小僧、伊吹の子じゃったのか。だがその前に、どうやってあ奴の腹から出てきた？」

そう言って母さんを指差すお爺さん。ああ、何だこの空気。

「義理の息子ですって！母さんみたいな成りで子供産める訳ないじゃないですか！

「あ゛？なんか言ったか大和？」何にもないです！！それに僕は鬼じゃないんです。

・・・隠していてすいません。でも、知られたら追われそうで」

怖!?母さん怖!?そんな成りだったらこう言われるのだって解ってたんじゃなかったの!?

「ふん、舐めるなよ小僧。そやつが人に害なすかどうかぐらい己の目で判断するわ」

「・・・ありがとうございます」

お爺さん、貴方様は大変いい人でございますね。

「そうだそうだ、家の大和は悪い奴なんかじゃないぞ!」

「あんたはもう黙っときな、それと今日はもう手を出すんじゃないよ。

唯でさへ危うい大和の立場が更に悪くなるから」

僕からもお願いします。黙ってて下さい。それと都の中に帰らして下さい。

「わかってるよ。ほら大和、こっちで一緒に勇儀の喧嘩を見よう」

座り込んでポンポンと隣をたたく母さんの元に行こうかどうか悩む。

今すぐ帰りたいんだけどなぁ。

「かまわん、そこでわしの勇姿を目に焼き付けておれ」

おお、お爺さんカッコイイね。相変わらず大切なこと解ってくれないけど。

もう帰る雰囲気でもないので諦めて母さんの隣に座る。

「どうかねぇ、私も今日は負けられない理由ができたもんだから、さっ！！」

やる気満々な姉さんが突っ込むと同時に、何発もの蹴り放った。

「ふん！」

お爺さんはそれに障壁を展開して防いで

ドドドドドドドド

二人がたった一瞬の内に行った攻防で周囲の大地は抉れ、衝撃波が襲った。

「なにこれぇ？」

「はは、これくらいまだ序の口だよ。しっかり見てこれからの参考にするんだよ」

呑気に酒飲みながら言うことじゃないよねそれ！？

正直、実力差がありすぎて参考にもならないんですけど！

「はっはあ！闘いはいいなあ！！生きていると感じさせてくれる！！」

「わしは勘弁願いたいものじゃがなあ！！」

姉さんはその剛力で迫り、お爺さんはそれを避け、時折防ぎ、隙あ

らば符を放っている。

「か、母さんもこんな闘いをっ！？」

ぶつかり合うことで発生する衝撃波に飛ばされないように耐えながら聞く。

ば、馬鹿げてる！こんな闘い、見たことも聞いたこともない！

「私たちの闘いじゃ地形が変わることなんて朝飯前さ。大将なんかはもっと酷いことになる」

だからなんでそんな涼しい顔して酒飲めるの、この状況で！？

いったいどんな世界なんですかここは！？

言ってる間にもどんどん地形は変わっていく。うわーなんだあれ、僕が喰らったら体が消し飛ぶよ。

「怖いか、大和。でもお前はもう一歩を踏み出したんだ、この闘争の世界に。

そしていつかは私たちのいる高みまでやってくることになるだろう。

だから今一度聞いておく。・・・己の選択に後悔はないか？」

「母さん・・・」

その問答の答えは、ついさっき出したばかりだ。

母さんがなんで僕を傍に置いておきたかったのか、今ならなんとなく解る気がする。

だって、息子を何時死ぬかわからない世界に旅立たせるなんてこと、

普通はしないじゃないか。

「僕は才能に恵まれていません。母さんたちのようになれるかもわかりません。
でも、何もしないぐらいならしてから考えます！
嬉しいこともつらいことも、後で笑って酒のつまみにできるぐらい精一杯生きていきます！！」

あの時のように、精一杯の笑顔でそう応えた。

「なら、自分の信じた道をまっすぐに進みな。・・・お、そろそろ決着がつきそうじゃないか」

母さんはそう言って話を切り上げた。その横顔はとても嬉しそうで、とても綺麗だった。

「ぜぇ、ぜぇ、」「はぁ、はぁ、」

「さ、流石は好敵手。私相手に一歩も引かないとは」

「お、お主こそ」

あれからそんなに時間は経っていないはずなんだけど、この闘いの激しさは周りを見渡してもらうと理解できると思う。なんかもう、

戦場跡？

「でもそろそろ終わりにしようか。・・・大和！！見ておきな！！
これが私の必殺だ！！」

そう言うと姉さんは一歩、また一歩と歩を進める。なんすかその冗談みたいな妖力は？

「っ！？ならばわしも奥義をもって打ち砕かん！！」

お爺さんは莫大な霊力を符に込めていく。お爺さん人間だよね？人間だって言ってたよね！？
才能なかったって言ってたよねぇ！？

「　三歩必殺　」

「　天文道　奥義　空の奏（オト）　」

えっちょっそんな力でぶつかり合ったら！！？？

冗談のような爆音と共に世界は光に包まれた。

煙がはれ、そこにはお互い横たわっている二人がいた。

「はい決着、引き分け～」

キャキャキャと酔った勢いのまま笑う母さん。いつも思うんですけど、はしたないです。

「ま、まちな萃香。私はまだやれる」

「ふ、ふふふ。わしだってまだやれるわい」

二人ともなんとか立ち上がろうとしているけど無理みたいだ。
そりゃそうだろう。むしろアレだけやってまだ物足りないとか言うとかふざけてる。

「何言ってんのさ、両方とも戦闘続行不可能で引き分け。さ、帰るよ勇儀」

そう言って姉さんを担ぐ。

「いたた、あんたはいいのかい？せっかく大和と会えたのにもう少し話さなくも？」

「あの子は、もう自分の道を自分で歩いて行けるよ・・・。さ、背負ってやるから帰るぞ」

「すまないね。やいこの馬鹿爺！また来るからな！」「二度と来るな！この馬鹿鬼！」

「あ、そうだ大和。強くなるなら私みたいな一撃必殺の技を作りな。師匠からの命令だよ！」

「が、がんばります」

あんなのできるか！？引き攣って返した僕の言葉にわらいながら二人は去っていった。

～今日の母～

「今日はやけ酒だ～！！大和の親不孝者～～～！！」「はあ、これだよ全く」

ふざけた闘い（後書き）

はい、長いのか短いのか知りませんけど、２０話です。今回主人公はただ見てるだけでした。まぁ彼なりの社会見学みたいなものですね。世界は広いということを知るのは早い方がいいだろうということでの今回でした。

・・・いずれはチートになってバリバリやってもらうわけですしね。それを書く日が楽しみです。・・・来るのかそんな日は！？

では読んで下さっているみなさん、また明日に会いましょう。

「つまりそなたは伊吹の義理の息子で、星熊の弟子であると」

「あっはっは、黙っててごめんなさい」

やあみんな、今日も元気な伊吹大和だよ。え？なんでそんなに元気かって？頭おかしいって？

はっはっは、こんな状況じゃ笑うしかないですよー。ではどんな状況か説明しましょう。

あのふざけた闘いの後、今回の襲撃の報告をするためにお爺さんたちと一緒に帝の下へ向かったんだ。

そこで今回の事と僕のことが報告されて今にいたるんだけど、

「縛られているのはなんでだろう・・・」

「何を笑っている！もとより、お前に発言など許しておらん！！」

「申し訳ございませんでしたーー！！」

陰陽師その１さんの言葉に這いつくばって謝罪をする。

「陛下、この者の処分はどうなさるおつもりで」

陰陽師その２さんそう言うと、次々に「厳しい罰を」と声が上がる。

「みな、少し黙れ」

帝の一声でその場が静まる。ああ、１０年間の短い人生だった・・・

。

「今回の少年の一件　不問とする」

「「「「なっ！？」」」」「へ？」

帝の一言に大勢が驚きの声を上げる。一番大声出したのは僕たけど。

「恐れながら陛下、そのものは鬼に育てられた身。いつ人に弓引くかわかりません。

死罪はもとより、せめて封印処理はお許しください」

本屋のおじさんの紹介でここまで連れてきてくれた人がそんな事を言った。

騙していたのは事実だけど正直、胸が痛い。

「ならん。今回の一件は余が預かる。・・・報告は以上か。なければ少年と爺以外は解散。

それぞれ持ち場に戻れ。・・・戻らぬか！」

まだ納得がいかないといった感じだったけど、陰陽師の人達はしぶしぶと立ち上がり去って行った。

「お前が鬼の子と知っていれば、俺は真っ先にお前を殺していた。

この人の皮を被った妖怪（ばけもの）め」

去り際にそんな言葉を残して去っていく人もいた。

「・・・すまぬ。みな妖怪に恨みはあれ、好意など欠片も持ち合わせておらぬ者ばかりだからな」

「いえそんな、都を守る者として当然ではないですか」

そう、彼らは陰陽師。都を守り、人に仇なす存在を滅する人達。決して間違ったことを言ってない。
それがただの子供相手だろうとも。・・・思うことはたくさんある。
でも、それを口にするだけじゃ何もかわらない。

「無理をするでないわ。そんな顔で言われても誰も信用せん。
正直に生きたほうが楽じゃぞ、お主の師匠のようにな」

「そう、ですね。つらいです、本当に。笑い話ですよね。母さんたちに育てられたことは
僕の誇りのはずなのに。妖怪（ばけもの）は褒め言葉のはずなのに、こんなにも悲しいなんて・・・。
僕はまだ、どこかで人間でいたんですね・・・」

言葉にするだけじゃ、決して何も変わることはない。
力が欲しい。自分を貫くことができる、本当の強さが。

「・・・正直、鬼に育てられたと言えばそこらの忌み子よりもたちが悪いじゃろうな」

「鬼の子、伊吹の名。どちらも人の世には溶け込めん。この都でもな」

伊吹、か。はは、覚悟してたようで、僕は本当に何もわかってなかったんだな・・・。

「では陛下」

「うむ。伊吹大和、そなたを都から追放する。二度とこの地を踏めると思うな」

「・・・わかりました」

「しかし陛下、あの誰も使えぬ書はどういたしましょう」

「そうだな、あの本屋に渡してしまえばいいだろう。後、厄介払いの金と手紙を忘れぬようにな」

「承知しております。では小僧、行くぞ」

「え、あ、はい、わかりました。陛下、お世話になりました」

「早く行け、爺がまっておる」

「賀茂殿、お久ぶりです。おかわりないようでなにより」

「ふん、わしも老いたな。お前の様な悪戯な餓鬼が今では立派になっているとは」

追い出されてから僕たち二人は自称都一の本屋に来ていた。

「その話は無しですよっと。所で今日は何用で？」

「何、厄介払いじゃ」

「こ、こんにちわ」

な、情けない。あれだけ頼んだのに収穫無しとか・・・終わったｏｒｚ

「おお！久しぶりだな少年。で、厄介払いってことは失敗したってわけだ」

笑って言うとか酷くないですか！？泣くよ！？

「あなた、空気を読んでください。賀茂様、本を御所望ですか？」

「いや、要らぬ書を売りに来ただけだ。ではまた」

それだけ言うとお爺さんは早足で帰って行った。・・・もう僕も行こう。

「じゃあねおじさん、奥方様。僕ももう行くよ」

「少し待て。・・・ははぁ、帝様も賀茂殿も人が悪いなぁ」

ニヤニヤしながらそんなことを言うおじさんがちょっと、いやかなり気持ち悪い。

「どうかしたんですか？」

「この書とここにあるお金は全部君の物だってことだよ。
帝様も賀茂殿も君をいたく気にいっているみたいだ。
ここに手紙が入っているから、都を出てから読んでみなさい」

そう言うとおじさんは笑って僕に書とお金を渡してきた。

「すまないが少し手紙を読ませてもらった。その上であえて言わせてもらおう。
私は君が何処の誰でも恐れはしないよ。子供を恐れる大人はいない、前も言っただろう？」

知らず、目から涙が溢れていた。

「あら、泣いては駄目よ。あなたは笑顔が似合うのだから」

奥方までも優しい声をかけてくれた。

「そういえば、君の名前を聞いてなかったな」

三人、蒼い空を見上げて笑う。

「僕は伊吹、伊吹大和。鬼の、伊吹萃香の息子です」

頬をつたう雫を日の光が照らしていた。

心の空は蒼く晴れ渡っていた。

人と妖怪《ばけもの》（後書き）

はぁ、疲れました作者です。ネタに戦闘、ギャグよりもシリアスのほうが話を作りやすく感じるのは私だけ?正直今回はシリアスと呼べるかどうか・・・。気にしたら負けですかね。

さて、次は閑話を一つ挟みたいと思います。そこで一旦投稿が途切れます。続きは五割ほど出来てるんですけど、矛盾したら後々困るので。しないようなら投稿しますけどｗ

ではまた明日会いましょう

閑話～大和昔話～（前書き）

ただのネタ。書きたかっただけです。

今日はあと一つ更新予定。

いろいろと考えさせられた都を出てから少し経った後、僕は手紙を開いた。
その手紙には一文しか書かれてなかった。

『鬼子の夢　大事にせよ』

この一行にあの二人の気持ちが含まれていて、心が熱くなった。
で、その下に帝の印があるんだけど、

「乗船許可証？」

なるほど、大陸に渡るためには船に乗らなければならない。そのための許可証みたいのも入ってた。

「魔道書も手に入ったから、大陸には行く必要はないと思うんだけどなぁ」

ムフフ、これで僕も魔法使いの仲間入りだよねぇ・・・！
と自分でも分かるくらいニヤニヤしながら魔道書を開く。いざ行かん！新たなる境地へ！！

こっこれは！！？？

「読めないｏｒｚ」

なんてことなんだ！読めなければ話にならないじゃないか！？
おそらく大陸の文字なのだろうけど、学の無い僕がこの国の文字を読めるようになったのは
にとりの『読み書き詰め込みマッスィ～ン』の甲斐あってである。
そんな僕が大陸の言語を独学で理解することは無理です。

「しょうがない。行きますか、大陸に」

まさか本当に国を飛び出すことになるなんて・・・。

「母さんたちを長いこと待たせることになるかも」

「それなら私が伝えましょうか？」

「うひゃあ！？ゆっ紫さん、急に現れないでくださいよ！」

「うふふ、悪戯せいこ～う」

ニュニュニュと擬音が付きそうな感じでスキマから出てくる。
そう言いながらニコニコ笑うあなたが時々憎いです。

「話は聞いたわ。私が萃香に伝えてあげましょう。大和は大陸で帰らぬ人となったって」

「いや、山狩りが大陸規模で行われそうなんでやめてください」

一度妖怪の山で実際にあったし、母さんたちならやりそうで怖い。

「あら、母のことを想っているのね」

「違いますよ・・・。嫌な思い出ですから」

「ああ、山狩りのことね」

ああ、思い出すのもおぞましい。

~妖怪の山でのある某日~

「人里？」

「そうそう。大和と同じ人間が沢山いるんだよ」

僕と同じ人間が沢山・・・。僕が沢山いるのか。

「河童にとって人間は盟友なんでしょ？会いに行かないの？」

「恥ずかしいじゃないか」

その考えはどうかと思う。

「相変わらずの人見知りね」

「そういう文は友達が少ないじゃないか」

にとりさんや、そりゃ禁句ですぜ。射命丸がメッチャ落ち込んでるじゃないか。

「そんなこと言っちゃ失礼だよ。射命丸、僕はちゃんと数少ない君の友達の一人だからね！」

「そりゃトドメって言うんだよ大和・・・」

あ、あれ？何で射命丸は座り込んで泣いてるの？僕が友達でそんなにうれしかったのかな？

「いいんです、いいんですよ大和さん。貴方がそう言ってくれるだけで私は・・・」

「まっまあ、文もこう言ってることだしいいじゃないか。それより大和、人里だよ」

そうだね、射命丸も喜んでいることだし元の話に戻そう。

「でも、一度よね行ってみたいよね。人里」

うん、本当に一度行ってみたい。僕は人間に会ったことがないから凄く興味が沸く。

「それならば、私が偵察に行ってきましょう！！」

「うわっ、ビックリした」

ハイ！っといきなり立ち上がる射命丸。今まで座ってたのに急に元気になるんだから。

そんなに人里に興味があるの？

「なら文、ちょっくら行ってきてね」「頼んだよ～」

言うや否や、ジュワッと射命丸は飛んで行った。元気だよねホント。

「人間がいっぱい居ました」

そりゃ当り前だろうでしょうに。帰って来た射命丸はそれしか言わなかった。

というより、それしかなかったらしい。射命丸の報告を聞いた後で一人考えを纏めていたんだけど、いまいち分からないんだよねぇ。

やはりここは、

「大和、行ってきま～す」

直接行くに限る。今日は母さんたちは居ないので、誰に言うのでもなく一人山を下っていく。

妖怪の山は幾つもの山が連なってできている。僕も詳しいとはいえ、未だ全てを把握している訳ではない。下りかと思えば上りになる。できれば日帰りが出来る距離かどうかを聞いてくればよかった。

「ただいま～ってあれ？大和居ないのか」

何だ、せっかく今日は母の武勇伝の続きを話してやろうと思っていたのに。

「あれ、居ないのかい。まあそのうち帰ってくるさ」

勇儀の言うとおり、日が暮れだしたら何時も通り戻ってくるだろうし、後でいいか。

～歩き疲れた頃～

「ま、まだ山は続くの！？」

正直疲れました。だってどれだけ歩いても山道ばっかり、足が痛いよ。

「日も暮れてきたし、母さんたち心配してるだろうな・・・」

一人で山道を歩いていく。正直馬鹿なことをしたって思ってます。やめないけど。

その背後を一匹の妖怪が見ていた。

～夜　鬼の集会所～

「遅い！！」

遅すぎる！日はとっくに沈み、妖怪の山特有の強い妖気が辺りの闇に広がっている。
いったい何処で油を売っているんだいあの馬鹿息子は！！

「確かに遅いね。・・・萃香、大和は今日何処に行ったか分かるかい？」

「確か、天狗と一緒に河童に会いに行ったはずだ」

「とすれば川か。よし、私が探しに行ってきてやる」

「わたしも行くよ。とっ捕まえて拳骨してやるんだ」

心配させる悪い息子にはお仕置きが必要だ。でもまずは事情聴取だ。
息子に付く悪い虫は駆除しないと。

「誰か、その天狗を連れて来ておくれ」

「じゃあ何か？大和は人里に向かったとでも言うのか？」

目で殺すとはこの事か。眼力で相手を殺せるほどの力で天狗を睨みつける。
連れてこられた天狗はプルプル震えていた。周りは大和を心配する鬼ばかり。
こうも鬼に囲まれては誰でも萎縮してしまうだろう。だがそれ以上に驚くべき事実が発覚した。
なんと大和は一人人里に向かったらしい。

「はっはい。ひ、人里にきょっ興味を持たれて、ましたのでッ」

あの馬鹿息子、あれだけ夜はうろつくなと言っておいたのに・・・。
あの無邪気に人を困らせる性質は一体誰に似たんだか。

「じゃとするとまずいの。今の時間帯は妖怪が活発じゃ。そんな所に人間の子供が一人で歩いてみろ。
・・・この先は言わぬでも解るな？」

大将の言にわたしは自分の血の気の引く音が聞こえた。

「大和っ・・・!!」

気が付けばもう走り出していた。

それを邪魔するのが一人。

「待ちな!萃香!!」

「うるさい・・・邪魔をするのか勇儀。殺すぞ・・・!!」

目の前に立つ勇儀を殺すつもりで睨みつける。

「そうじゃない。あんたの能力を使って探すほうが早いだろうが。
でも流石にあんたでもここいらの山一　帯を囲って探すには時間がかかるだろう?
だから、あんたとあたしは西側。他には東側を探してもらったらいいだろ。
それと・・・今度私が大和の事を考えていないと取れる言い方をしてみろ。
いくらあんたでも容赦はしないよ!!」

「・・・ごめん」

「わかりゃいいんだよ」

はっはっは、豪快に笑う勇儀にわたしも周りの空気も和んでいった。
大和のことで周りが見えてなかった。ごめんね勇儀。
大和だけじゃなく、わたしまで心配してくれたのに。

「じゃあごめん。みんな、力を貸してくれるかい？

「「「おう」」」　「「「ヒャッハー！山狩りだお前ら！気合入れてけよ！！」」」

もう今までのような悲痛な面持ちな鬼はいなかった。
そう言って皆大和のために駆けていった。大和、あんたはこれだけ皆に愛されているんだよ・・・。
それじゃ、わたしもがんばりますか「あの～」

「なんだ天狗、もう帰っていいぞ」

「私も手伝います。こう見えて飛ぶのも速いですし、こうなった原因は私にもあります。
それに彼は私の友人ですから」

この天狗なりに考えてのことか。足が速いのなら一番に駆けつけてもらうにはもってこいか。
・・・本当なら私が一番がいいけど。

「わたしが見つけるから現場に急行してくれ。
事件は此処で起こっているんじゃない。現場で起こっているんだ」

「はい！！」

こうして鬼による大和捜索隊が発足した。悲観している者は居ないだろう。
むしろ、楽しんでいる者のほうが多い。

「どいつもこいつも、親バカばっかじゃな・・・」

鬼神が呆れるほどに。

「・・・何か寒気がした」

うーん、これは母さんっぽい。かなり怒ってるねこりゃ。
でもねぇ、帰ろうにも帰れない状態なんですよ。

「いい加減諦めて俺の腹に入れ」

「嫌です！」

現在逃走中です。後ろからムカデが追っかけて来てるんで。まさに明日への逃走！状態です。

「しぶとい小僧め、逃げても無駄だと解らぬか！」

そんなの知るか！？逃げるが勝ちだ。逃げるしか手が無いともいう。ちょっとは立ち向かえって？自殺願望はありません！

・・・ちょっとだけ振り向いてみようかな。

「え？」

振り向いた時には追いついた妖怪が体当たりしてきたところだった。

「ブッ」

おもいっきり吹き飛ばされて木に当たった。

「ゲホッゲホッ、身体強化が無ければ即死だった・・・」

かっこつけて言う言葉じゃないけど。それに言ってる場合じゃないし。

「鬼ごっこは終わりだ。潔く食われろ!!」

ムカデの巨体が再び迫る。もう駄目と思い潔く目を閉じた。みんな、ごめんね・・・

一陣の風が吹いた

「大丈夫ですか、大和さん?」

「・・・射命丸?ってあれ?何で飛んでんの?」

目を開けた時には射命丸の腕の中にいた。正面から抱きかかえられているので表情は解らないけど、
体が小刻みに震えていた。

「よかった、本当に助かってよかった・・・!(主に私の命が)」

「苦しいよ射命丸」

そんな力込めないで!?折れる、折れるから!?

「萃香さんに言われてここまで必死に飛んで来ました（間に合わなかったら唐揚げにしてやるって言われたから必死でした）とにかく、もう安心です。ほら、もう萃香さんたちも来てますよ」

「うわぁ、ムカデが悲惨なことに・・・」

言われて下を見ると凄い光景が見えた。中々見れることのない母さんの本気で怒った姿です。
ムカデを殴って蹴って甚振っている。ああ、僕もこの後そうなるんですね。そんな馬鹿な事を考えていると母さんがムカデを踏みつけて殺、もとい退治していた。ひ、酷い。一方的すぎてもう見てて辛い。
おぇ、中身見えてる。良い子には見せられないね。

「先に帰っているように言われてますから、このまま送りますね」

「死にたくないなぁ・・・」

本気でそう想った。

あ～、思い返したらとんでもない事してたんだよなぁ。自衛すらまともに出来ない頃に一人飛び出して行ったんだから。もちろん帰ってからは母さんに拳骨もらって、大母様の説教、みんなの小言を聞かされた上に宴会での下働きをさせられた。それも一月。
正直罰にしても酷すぎると思わない？そりゃ危なかったけどさ。

「萃香から話を聞いたけど、その時もまだあの子怒ってたわよ？大和は無鉄砲すぎる、てね」

「もう言わないでください・・・。だから紫さんも母さんに早まったことは言わないで下さいよ？」

もう拳骨は嫌です。鬼の力で何回も叩かれたら本当に頭が割れるんで。

「ふふ、わかったわ。しっかり伝えておいてあげるから行ってきなさい」

そう言って紫さんはスキマに消えていった。・・・不安だ。
紫さんを信用しよう。うん、きっと大丈夫だ。きっと。

「さて、じゃあ僕も大陸目指して行きますか！」

海を見るのが楽しみだ！

閑話～大和昔話～（後書き）

詳しくはあと一つ投稿するので、そちらで書きます。

閑話～その頃のみなさん～（前書き）

ああ、閑話だから短いデスヨ？

閑話～その頃のみなさん～

～鬼の場合～

「萃香、飲むなとは言わない。もう少し考えて飲みな」

「うるさいなぁ。可愛い息子がいないんだ、飲むしかすることがないんだよぅ」

情けない・・・。たかが息子一人いないだけでこの有様かい。鬼の四天王が聞いてあきれるねまったく。
いい加減この親馬鹿に違うことさせないと。

「そうだ。なあ萃香、喧嘩しに行こう！」

鬼の血を滾らせる闘いに行こうじゃないか！！

～鬼神と隙間の場合～

「ぜえっぜえっぜえっ」

「ふむ、まあ及第点じゃな」

「な、ならお受けしてもらえますね？」

「任せておけ。鬼は嘘をつかぬ」

私の夢見る楽園を創るための第一歩。それは鬼の力を手に入れること。

なのだけれど、何を血迷ったか日の本において最強と呼ばれる妖怪とガチンコする羽目になってしまった。

どれだけ妖力弾を当ててもビクともしない。私も強いはずなんだけどね・・・。

「やはり鬼神といったところでしょうか。感服いたしましたわ」

「お主も若いなりによくやるほうじゃったぞ？」

嘘をつけ、このバケモノめ！！私の隙間を力技だけで破る存在など見たこともない！！

力を測ることも、能力を使わせることもできなかった。

「帰って宴会でも開くか。それでは・・・」

そう言って鬼神は帰って行った。

「藍、来て頂戴」

「はい紫様・・・って!?大丈夫ですか!?ボロボロじゃないですか!?」

「あ～もう、ホント疲れたわ」

まあ、これも『夢』のため・・・なんてね。

～天狗と河童の場合～

「あややや」

「いい?それは大和にあげた試作品とは違って正規品だから、大事に使ってよ」

「あややや」

「写真を撮ったら持ってきてね。現像の仕方も教えるから」

「あややや」

「・・・文、聞いてるかい？」

「もちろん！」

現金な奴め。まあその正直なところがイイヤツなんだけどね。

「このボタンを押せばいいのよね？」

「そうだｙ「それでは早速一枚」へ？」

ピカっと新たにつけられたフラッシュライトの光が私に向けられた。

眩しい！？

「眼が！？眼がぁああ～！？」

「じゃあ私は他の写真をとりに行ってきますので！！」

コンチクショウめ、流石は妖怪の山最速ってところか。眼が治った後には言葉だけ残してもう姿は消えていた。

～白髪の旅人の場合～

今日も今日とて妖怪退治。今日の仕事は村から依頼されていた妖怪の退治だ。

「はぁ、最近は雑魚ばっかだな」

今は厄介になっている村の依頼を中心に動いている。

「嫌な目で見られるのは御免だけどね」

依頼されてこなすのはいい。けどあの目はごめんだ。
人をバケモノみたいに見るのはまだいい。だがあれは、

「いつか襲われそうで怖いな・・・」

女としての直感が働いている。これはヤバイって。まあ襲って来やがったら炭も残さず燃やしてやるが。

「今日にでも村を出るか」

やれやれ、あの馬鹿との旅が懐かしいね。

～花の主の場合～

花は言葉を発している。それは私にしか聞こえない声。
花を愛し、花を愛でる。花を育てることは、花の妖怪である私の務めでもある。

「人の花もね」

咲いていない花を摘む趣味はない。
花は咲いてこそ美しさが際立つから。例えそれが刹那の瞬間であっても。

「私の手で育てることのできない花は、いつ咲くのかしら?」

本当に楽しみだ。

閑話～その頃のみなさん～（後書き）

皆さんこんばんは、じらいです。今回は山狩り・その頃のみなさんの二話をお届させてもらいました。正直、支離滅裂で話としてなってないような感じですが、喜んでもらえるとうれしいです。感想とかあれば待ってます。

ところで昨日、この閑話で更新が途切れるかもしれないと言いましたけど、まだ行けそうです。頑張りましたよ、ええ。早いだけが取り柄なもんで。なので明日も更新できそうです。

それではまた明日。

海は広いな・・・深そうだなぁ（前書き）

今日も今日とてテンプレな展開です

海は広いな・・・深そうだなぁ

紫さんに言伝を頼んでから数日経ったある日、ついに僕は船着き場に到着した。

「お～青い。空と同じ色なんだ、海って」

こちとら海を初めて見る山の住民なわけでして、この感動を一体どう表現すればいいのやら。
ただ青く、見渡す限り青い海が広がっているとしか言いようもございません。

「おう坊主、海を見に来たのか？凄いだろう海は。この先にあの大陸が広がっているんだぜ？」

「ほんと凄いですね。何時までも見ていたくなります。まあこれからこの上を行くんですけど」

「はっはっは！船乗りになりたいのか！そいつはいいことだ！けど大きくなってからな！」

「いや～、この船に乗って大陸に行くんですよ。はい乗船許可証」

はっはっは、この帝の許可証が目に入らぬか！！

「こいつは・・・?帝の許可証!?坊主、いや坊ちゃん、貴方様はいったい・・・?」

驚いてる驚いてるw

「とりあえず、案内してくれる?」

「へっへい!おい誰か!!」

いやー権力って気持ちいいね、癖になっちゃいそう。

青い空・白い雲・焼けつくような太陽の下、僕たちは船で移動していた。
帝の許可証の効果は絶大で、本来なら決められた人しか乗ることのできない船への
搭乗を許可されたのだ。何やら大陸への使節団の人の乗る船らしく、けっこうな衣服を纏った人も多い。
驚くべきなのは、その人達と僕の待遇がほぼ同じってことなんだ。

「貴方様は帝に何の命を受けたのでございますか？」

もう何回聞いただろうか。船員がこんな感じで聞いてくる。
唯の子供が帝の許可証を持って搭乗したことは既に船全体に伝わっているようで、ちょっとした話題になっている。

「あはは、そんなたいしたことじゃないですよ？」

何の命といわれても困る。それにこっちは初めての船で、船酔いが激しくてそれどころじゃない。
今にも吐きそうです。

「うぇっぷ。すいません、何か酔ったみたいなんで少し中で休んできます。案内頼めますか」

「はは、初めてにこの波は厳しいでしょうな。おい誰か、この子を中へ案内してやってくれ」

「わかりました。さあ、こちらへいらしてください」

「すいません・・・うぇっぷ」

ううう、船がこんなに揺れるなんて聞いてないよ。偉そうにしてたから余計に恥ずかしい・・・。

恥ずかしがる暇もなく案内に続いて中に入ることになったんだけどね。

～ｓｉｄｅ名もなき船長～

子供が帝様の搭乗許可証を持ってきたときは目が飛び出そうになったぜ。宮中の御方ならともかくあんな子供が大陸に渡るなんて今でも信じらんねぇ。どう見たって貴族様の息子って感じでもねえしな。今大陸では戦が行われているとも聞く。そんなとこに一人で行くあの子が心配でたまんねえ。

まあそんなことは置いておこう。あの子が選んだ道だ、俺にどうこう出来る物でもねえしな。

それより今はもっと気になることがある。

陸を離れるまでは心地よい風が吹いていたのに、今は気持悪い風にかわってやがる。

首筋にビンビンくるってやつだ。こんな予感はよく当たるって俺達船乗りには有名な話だ。

俺達だけじゃねえ、あんな子供まで乗ってんだ。大陸に着くまで荒れてくれるなよ。頼むぜ、海の神様。

「うぇ、寝起き最悪」

あのあと宛がわれた部屋で寝てたんだけど、寝起きは最悪。
船酔いは治ってないし、むしろ酷くなってる気がする。
ほら、足元も何か前より揺れてるみたいだし。・・・いやいや、前の比じゃないよこれ！？
なんか上の方からも怒鳴り声が聞こえてくる。風の音？も大きい。
とりあえず甲板に出てみよう。

「いや、何あれ？」

船はまだ晴れ模様の空の下にあった。あったんだけど、船の進行方

向がマズイ。
何がマズイって?どう見てもある一線から向こうが嵐模様なんだよ。
海の神秘は綺麗だねーとか言ってる場合でもないっす。
このままあの嵐に向かって行くの!?

「野郎ども!船を回せ!まだ陸からそう離れちゃいねえ!今ならまだ間に合うはずだ!!」

「せ、船頭さん!あれ、あの嵐なんですか!?」

船頭の大声に負けないように声を張り上げる。

「見ての通りでさぁ!これからあの嵐から逃げるために引き返します!ご容赦ねがいますよ坊ちゃん!」

「それはいいんです!でも、逃げ切れるんですか!?」

僕としても今すぐ引き返してもらいたい。あんな中に入って行ったら確実に沈む!

「全力を尽くします!でも、難破するにしても陸に近い方がいいでしょう!!」

そりゃそうだ。って、難破すること前提だよねそれ!?

どうしよう!?何か僕にできることないか!?

「頭ぁ!追いつかれます!!」

言ってるそばから!?船が今までより大きく揺れた。こっこれは本気で危ないんじゃないの!?

「くそ、悪い予感は当たるってことか!?
おまえら!その子と中で震えている貴族様に何か浮くものを持たせてやれ!」

「坊ちゃん、これを持って!あとその足の飾りは外して!浮けなくなりますぜ!!」

「は、はい!」

急いで足の重りを外し、船員の人に渡された物を両手で抱えて壁際に寄る。

「でかい波がくるぞ!何かに掴まれぇ!!」

「おお!?」

ドゴォッ

鈍い音と共に船が大きく揺れた。

「頭ぁ！船底から浸水している模様！このままじゃ沈みます！！」

「くそったれ、大工の奴らまともな仕事しやがれってんだ！！全員、何かに掴まれ――――――」

「でかい波がきます！！」

「ふ、船が沈む――――――――――――！？」

最後に見えた光景は大きな波が再び迫る瞬間だった。

――

「あら、この島にモノが流れるなんて珍しいわね」

だれ？

「生きてる。・・・私たちも人助けをしてる場合じゃないんだけど、仕方ないわね」

「感謝しなさいよ。この私が助けてあげるんだから」

海は広いな・・・深そうだなぁ（後書き）

じらいです。最近引き籠りに成りかけななじらいです。テスト近いんで当り前なのかもしれないけど。
ついに次話からこの物語も動きだします。この物語最初の山場と言っていいでしょう！・・・あんまり期待しないでね？応えられないから。
まあ期待する人など居ませんから自分のペースでやっていきます。

ではまた明日。

初めましてね、輝夜よ。都でブイブイ言わせてたこの輝夜姫も今ではただの逃亡者。しかも迎えにきた、俗に言う「月の民」連中を始末して逃げてる犯罪者ってところかしら。とりあえず、現在進行形でこの島に潜伏してるのに変わりはないわ。・・・ちゃんと島の主には許可をもらってるわよ、永琳が。

「永琳、ちょっといい？」

そして目の前にいる人外が八意永琳。どうかしてるとしか思えない頭脳と戦闘技術を持った自他共に認める天才であり、私の元教育係。今は逃亡の片棒を担いでしまっているので永琳も狙われているのだろうけど。正直、迎えに来た中に永琳がいてよかった。私だけじゃ逃げきれなかっただろうし。

「どうかなされましたか？」

そしてとても頼りになる。きっと今回の事態も余裕を持って答えるのであろう。それはね輝夜、ってね。

「陸に打ち上げられた人間を見ればどうすればいいかしら？」

「何ですかそれは。今回答が必要？」

あ、あれ？以外に辛辣じゃない。私何か悪い事したっけ？そう考えてそんな事は無いと再び確信する。

だって、永琳がとってくる食料を食べて、暇の相手をしてもらって、ちょっかいを出す事しかしていないんだから。あ、あら？もしかして私、何もしなくても永琳に迷惑かけてた・・・？

「ええ。今向こうに打ち上げられた人間がいるもの」

こ、今回は私が悪かった。

そう思うけど言葉にすることは中々出来ないのでいつも通りに返してしまった。

「この島に？ありえないわ」

う、こっちを見ないで適当に言うなし。少しは真面目に話を聞いてよ！

「あら、私が夢を見たとでもいうのかしら？とにかく来て頂戴。死にかけだから」

私としては漂流者の死よりも、永琳との仲の方が大事だけどね。

拾っちゃった分は責任を持つわ。

「はいはい、姫様の仰せのままに」

だから面倒くさいみたいな顔しないで！？

「たしかにまだ生きているわね。この子をどうするの？」

「とりあえず助けましょう。その子供には私の暇つぶしにでも付き合ってもらうから。あとはよろしく」

そういって輝夜は欠伸をしながら去って行った。

「はあ、あの子にも困ったものだわ。今の私たちの状況を解っているのかしら？
・・・輝夜はもう行ったわね？

まさかこんな所でこの顔を見ることになるなんて・・・。
決して忘れることは許さない、あの子たちの最後の言葉・・・。
・・・とりあえずこの子を運びましょうか」

う～ん。なんだ、もう朝か。早く母さんたちを起こさないと。

「母さんってことは、母親と一緒に居たってことでいいのかしら？」

「え？」

「目が覚めたかしら？痛いところは無い？」

赤青?の服を着た優しげな大人が僕の顔を覗きこんできた。うわ、美人さんだ。

「え、あ、はい大丈夫です。えっと、此処はいったい何処なんでしょう?」

確か僕は波に攫われて・・・どうなったの?

「その前に自己紹介しましょうか。私は八意永琳よ」

「これはご丁寧にどうも。僕は伊吹大和です。それでここはいったい?」

「聞くより見た方が早いと思うわ。歩けるかしら?」

百聞は一見にしかずとは、正にこの事か

「えっと、ここはあの世ってことでいいんですよね」

体中から冷汗がとまらない。自分の知らぬ内に死んだとか悪夢以外の何物でもない。

この世じゃない光景が目の前に広がっていた。そりゃ見た方が早いっていうわけだ。

「勘違いしているようだけど、あなたはちゃんと生きているわ」

「カメラが必要かな、この光景を撮らなくちゃ。ああ、でも僕はもう死んでるから意味無いかな」

フフフ、綺麗なお花畑だな～。

「人の話をちゃんと聞きなさい。子供の騒ぐ声って大嫌いなのよね」

声のした方を振り向くとこれまた顔立ちのいい少女が立っていた。正に絵に描いたような人だ。

でも残念、もう死んでるから意味無いね。死人仲間同士、仲良くしましょう。

「ここは桃源郷よ。まあ、蓬莱島なんて呼ばれてるけど」

クスクスと女の子が笑いながら言う。

桃源郷？

「あなたが海岸線で倒れているところを輝夜が拾ってきたのよ。憶

えてないかしら？」

気絶してたから憶えるも何もないです。

「感謝なさい。私が気まぐれを起こさなければ、あなたは死んでたはずなのよ」

「ありがとうございます。えっと・・・」

「輝夜よ。なんなら姫様って呼んでくれてもいいわ」

なんて言うか、傲慢そうな人だなぁ。姿は姫そのものだけど、姫って言葉が一番似合いそうにない。

「ありがとうね、輝夜」

故に呼び捨て。

「ちょっと、なんで呼び捨てなわけ？」

輝夜がジト目でこっちを向いている。いや、そんなに見られると恥ずかしいです。

「輝夜よって言ったじゃん」

「姫様とも言ったわよ！」

「だって、姫様って感じよりお転婆な感じが強いんだから」

確かに見た感じはそうなんだけど、なんかこう、僕の中にそういう印象があった。
目の前の人物はお転婆だって確信が。

「な――――――――！？」

「あら、あなたよくわかったわね。いつもはお姫様ぶっているんだけど、
こう見えて可愛いところがたくさんあるのよ」

目の前で僕をもの凄い形相で睨みつけてくる。あ、これはやばい。
たぶんこの後は

「こ、この無礼者ーーーーー！！」

顔面を平手で強打され、視界は再び暗転した。

流されて蓬莱島（後書き）

じらいです。ついに輝夜姫登場です。原作でも彼女、いいキャラしてると思いません?永夜のハードになると倒せないんですが・・・。金閣寺?友人のプレイ見るだけで精一杯ですが何か?まあ原作はどれも素晴らしいから置いておいて。

明日は更新できないかもしれません。できなければ明後日、二話投稿しますんで。

ではまた。感想待ってます。

動き出すモノ（前書き）

なんとか更新間に合ったかな?

今回は難産でした。詳しくはまた後書きで

動き出すモノ

「貴方にはこれから私の暇つぶしに付き合ってもらうから」

強烈な平手から目が覚めて一番、いきなりそんな言葉を叩きつけられた。何で？

「えっと、何で僕がそんなことをしなくちゃいけないの？」

「死にかけのあんたを助けたのは何処の誰かしら」

それを言われると困るなぁ。でも僕だってずっと此処に居るわけにはいかないし。

「僕は大陸に行く用事があるんだけど」

大陸に渡らないと魔法使いになれないわけでして。

「ふーん。ねえ永琳、場合によっては私たちが大陸に行く可能性ってあるわよね？」

「その場合、その子の存在は確実に私たちの足を引っ張ることになるわ」

「その時は捨て置けばいいじゃない。どうせ奴らも捨て置くでしょうに」

な、なんか僕の知らないうちに話がどんどん進んでいくんだけど。
捨て置くなら最初から放っておいてほしいと思っても罰は当たらないよね？

もういいや、ほっとこ。

あ、カメラは大丈夫だったかな？

「それにこの島を感知される可能性もあるわよ」

「私と永琳の力でこの島は隔離されているわ。それなら問題ないでしょ？」

「それでも破られるかもしれない。この世に完璧など在りはしないわ」

なんか嫌な話してるなぁ。別にそこまでして僕を引き留める意味ってあるの？
・・・逃げることも無理そうだなぁ。永琳さんとの力の差がはっきり感じとれるし。
なんて言うかもう、圧倒的？月とスッポン？

お、さすが河童のカメラだ。水に濡れても大丈夫ってね。

文の笛も無事だし、よかったよかった。

「どうしても諦めないつもり？」

「せっかくの楽しみを潰すわけにはいかないわよ」

「・・・わかったわ。大和君、ちょっといいかしら？」

「なんですか？」

話が終わったみたい。
たぶんお世話様係になるんだろうけど、隙を見て途中で逃げてしまえばそれでいい。
どんな人にだってそういう瞬間はあるだろうし。まあ、まずは自分の口で説得するけど。

「大陸に行くって言っていたけど、何をしに行くのかしら？」

「魔法使いになるんです。寿命を延ばす魔法があるらしいんで」

自分の考えを悟られないように、カメラを弄りながら答える。
とりあえず輝夜でも撮っておこうか。・・・あ、ちゃっかりカメラ目線でポーズまでしてるし。

「だったら永琳に師事してもらいなさい。永琳は天才だから魔力の使い方ぐらいお茶の子さいさいよ。

私の世話をする傍らに教えてもらうといいわ。永琳もそれでいいでしょ？」

ポーズしたままの体勢でそう応える。何？まだ撮れって？

「永琳さんは長寿の魔法を教えられるんですか？」

面倒くさいからもうほっといて真面目に話を聞くことにした。僕のこれからが掛ってるしね。

僕に一番大切なのはそこだ。いかに永琳さんが天才だといえど、この魔法を教えられるとは限らない。

僕の目的の妨げとなるのなら、問答無用で此処は出ていかなければならないからね。

「無理ね。魔法が専門ではないから」

それならば、輝夜には悪いけど出て行かせてもらおう。

「悪いですけど出ていｋ「あら、させると思う？」・・・無理やりにでもさせるつもりですか？」

話は聞かない。そんな不敵な笑みを輝夜は浮かべながら僕を見てく

る。
狙った獲物は絶対に逃がさない。餌となる人間を追いかける妖怪のような凄みを感じる。
あ、そういたら僕って美味しく頂かれちゃうわけ!?

「別にあなたにだって悪い条件ばかりではないわ。
例えばあなたの持っていた魔法書。あれって幻術関係の魔法書よね?
あれくらいなら私でも教えてあげられるけど?」

フフン、と輝夜が自信ありげに胸を張って言う。あの書には不老の法が載ってなかったのね・・・。
って、輝夜はあの文字が読めるの!?もしかして結構賢かったりするのかな?

「永琳さん、そうなんですか?」

「その点に関しては輝夜の言う通りよ。
それと、あなたの懸念事項についてもおそらく解決できているわ」

「どういうことですか?」

「あなたの問題は人間の持つ寿命の短さ。
それを無くすために捨食・捨虫の法を修めに大陸に行くのでしょう?理由は知らないけど。
これらの魔法は習得するのに多くの時間と努力が必要難だと聞いているわ。

そこで私から提案よ。ここで魔法の基礎を私から習っていかない？
ここから出て行く時に少しでも魔法について知っているのならば、だいぶ変わってくると思う。
それに、これからこの島は私と輝夜で外界との時間を断絶して時の進まない場所にする。
つまり時間は永遠にある、ということになる」

「私の世話をする傍らに魔法をならうことになるけどね」

「時間が永遠にあるってどういうことですか？」

時間を止める？外界との断絶？何を言っているのかさっぱりだ。
そして輝夜が何を言おうと無視だ。ちょっとでも関心を示すと揚げ足をとられるに違いない。

「さっき言った通りよ。輝夜は時を止められるの。だからあなたが歳を重ねることはない。
そしてその永遠を生きるのに一番厄介なのは変化がないこと。つまり暇つぶしね。
貴方はその相手になってくれればいい。わかったかしら？」

ほんのちょっとは理解できた。つまり、ここにいれば歳をとらない。
だから寿命では死なない。
そういうこと、だと思う。・・・納得はできないけど。

「捨食・捨虫の魔法の習得は難しいと言いましたよね？

だいたいでいいですから、どれくらい掛かるかわかりますか？」

「おそらくだけど、６０は過ぎると思うわ。けどまあ、努力しだいね」

「そうですか・・・」

うげ、とんでもない時間がかかるのか。魔法使い舐めてたかも。

だとすると、その永遠の中とやらで魔法について勉強するほうがいいかもしれない。

だって僕、才能無いじゃない？・・・おじいちゃんの魔法使いって、僕的にちょっと嫌だし。

「わかりました。その話受けるよ輝夜。そのかわりに永琳さん、ご指導よろしくおねがいします」

ほんと、しょうがなしですけど。嫌々ですけどね！どのみち逃げられそうにないしね！

「話は終わったか？」

「えっと、どちら様ですか？」

「はじめまして、になるのかな。この島の主だ。武天と呼んでくれればいい」

「あ、はい。よろしくおねがいします武天さん」

「うむ、よろしく」

これまた立派なお髭のお爺さんですね。まるで仙人みたい。
きっとあの髭には武天さんの夢が詰まっているのだろう。

「話もすんだことだし、さっそく私に付き合ってもらうわよ」

「えっちょ輝夜!?」

挨拶もそこそこに、いきなり輝夜に手を取られてその場を後にすることになった。

「あの子を育てるつもりか?」

二人が出て行った後、いきなり話を振られた私は困惑していた。話かけられた事にではなく、彼、伊吹大和と言ったか、と出会い、あのように会話できたことに、だ。

輝夜があの子を拾ってきた時、私の心は驚愕に包まれていた。知らぬうちに記憶に埋もれていたのだろうか、顔を見るまで忘れてしまっていた。

・・・違う、自ら忘れようとしていたのだ。あの記憶を。

「そのつもりです。私が彼にできることといえば、今はそれくらいしかないですから」

あの子の顔を見るまで考えもしなかった。もうあの顔を見る日はこないと思っていたから。

「わざわざあの子の前で反対したのも演技だったのだろう？
あの子はまだ、自分自身のことを何も知っていないようだった。
このまま何も知らずに一生を終えることもできるかもしれないぞ？」

「見られてましたか。・・・あの子の生まれ持った環境がそれを許しはしないでしょう。
もし此処が見つかった場合、彼の存在は周知の事実となります。
それまでにあの子を少しでも鍛えておかないと。取り返しのつかないことになる前に」

彼らは必ず感づく。そしてその時を守れるのは私だけ。
だが、いかに私といえど数の暴力にたった一人では抗うことはできない。
それに今は輝夜も一緒に守らなければならない。輝夜も確かに強い部類には入るが、実際の戦闘訓練を受けたことはない。ホンモノが出てくると厳しいだろう。
故にあの子自身を強くし、自分の身を守れるまでになってもらわなければならない。
・・・心苦しいけど、私にはそれ位しか対抗策が閃かない。
月の頭脳が聞いて呆れるわね・・・。

「その結果、あの子の覚醒を速めてしまうのではないか？」

「あの子なら自らを律することができる。そう信じてます」

今度は私が最初から仕込む。同じ過ちを繰り返してなるものか。

「信じているのだな。・・・ならばこの武天もあの子を鍛えてみるか。一番弟子として」

「ふふ、それはよい考えですね。なら、人類最強にまで鍛えますか？」

「何を言う。月の頭脳とこの武天老師が鍛えるのだ。世界最強まで鍛え上げてやる」

動き出すモノ（後書き）

じらいです。今回の話は無理なこじつけが多いので、不快なひとも多いでしょうね。って、前からですねｗ

永琳の言ってたことですが、永夜での時止め＆密室のミニバージョンとでも思ってください。残念ながら私にはこれが限界でした。

生きるか死ぬか！？（前書き）

ケンイチが元ネタ・・・というか、そのままな感じで修行がはじまります。

吐き気を催すであろう人は注意して戻るをクリック

生きるか死ぬか！？

「しっかし、この島はいったい何で出来てるんだ？金や銀に輝く木に生ってる実は凄く美味しいし、
川の水は川底が見えるほど透き通っている。極めつけはこの空。全然変わらない昼間だし？」

「人の幻想が具現化したのがこの島って言ったでしょ。その幻想を形にしたのは武天だけど」

武天さん・・・あなた一体何者なんですか！？

「そして私がその作られた幻想を永遠に変えている。
ほら、あんたがさっき食べた木の実はもう生っているでしょ？
私の能力の中にあるおかげで変化を拒んでいるの」

すごいでしょう、と胸を張って言う輝夜。
輝夜も大概バケモノ染みた能力の持ち主だよね。案外強そうだし。

「でも、やっぱり姫って感じじゃないよね。言葉遣いもそうだし、その身の振り方も」

姫様っていうと、もっとお淑やかな感じのはずなのに、輝夜は、ねぇ。

それに何より、僕の姫という想像とかけ離れているんだよね。

「私を見る人がいないのに意味ないじゃない。あんたには何でか直ぐにばれたし。
　ホント理不尽だわ、こんな子供にばれるなんて。姫の貫録を出すのって疲れるのにねー」

今すぐ全ての姫様に謝って！僕の頭の中の姫様像が壊れる前に！
輝夜が姫だなんて認めてなるものか！だって姫だよ、姫・・・輝夜姫？ぷぷ、絶対似合わないや。

「私が都に居た時は、それはもう注目の的だったわ。都中、いえ国の全ての男共が私に夢中だったのよ？
　一眼見たいと毎日押しかけてきたわ。そんな男共は私に求婚し続けた。ま、帝も含めて全部振ってやった　たけどね」

何より面倒だったしねー、とか何とか輝夜が笑って言っている。そんな言葉の節々からは姫の威厳なんて在ったもんじゃなかった。こんな嘘姫に誑かされる男って生き物は・・・。
ま、まあ僕も輝夜は喋らなければ可愛いと思うよ？うん可愛い。喋らなければね！

そ、それより気になることがあるんですけど。

「その男共の中に藤原って人いなかった？」

そう。妹紅の話にあった輝夜と、輝夜の話す自身の自慢話があまりにも類似しすぎているんだよね。

「いたわよ。あの手この手で私を自分のものにしようとしてたわ。あまりにしつこいから難題まででだして追っ払ったわ」

あいつか、と苦々しく言う輝夜。妹紅さーん、僕の目の前に君の仇敵がいますよー!?

でもごめんなさい。こういう時、どんな顔をしたらいいか解らないの。

馬鹿言ってる場合じゃないや。とりあえず伝えておいた方がいいよね。

「その人の娘が輝夜を探してたよ?」

「は?何言ってんの。誰かは知らないけど、とっくに寿命が尽きてるでしょうが」

「蓬莱の薬飲んだんだって」

「はあ?何でそいつが勝手に飲んだわけ?あれ私が帝に贈ったのよ、手切れ金として」

酷くご立腹な様子の輝夜。それより手切れ金って・・・。
この人に掛かったら帝すら唯の人なのね・・・。

「一応伝えておいたから、暇を見つけて会ってあげてね。そして殴られてね」

いくらかは殴られて下さい。そうじゃないと貴方様に唆された人達が不憫で不憫で・・・。

「何で私が殴られなきゃならないのよ。返り討ちにしてやるわ」

フンフン、と拳を打ち出すポーズをする輝夜。
うげ、これは血を見ることになりそうだ。二人が会う時は絶対に近づかないようにしないと。

「まあ一応私に求婚しに来た男の娘だし、名前ぐらいは覚えておいてあげてもいいわ。何て名前？」

「藤原妹紅。僕の姉みたいな人だよ」

願わくば、僕が理不尽な争いに巻き込まれませんように。

「大和君、君は強くなりたいか？」

「ふぇ？」

輝夜に島をあっちこっちに引っ張られ、ようやく帰れてたと一息吐くなり武天さんにそう聞かれた。

「何？永琳、武天の奴コイツを鍛えるの？」

「そのつもりだそうよ。それに私も本気で鍛えるつもりだわ」

「うげ。ねえ大和、貴方ひょっとしなくても死ぬわよ。永琳の扱きはヤバイから」

「ちょ、ちょっとどう言うことなんですか？訳わかんないんですけど」

し、死ぬってそんな大げさな・・・。
永琳さんが魔法について教えてくれるのは約束だからいいとして、
武天さんも僕を鍛えてくれるって言うわけですか？それはそれで有
難いんですけど。

「君が強くなりたいと一言言ってくれれば、私も君を鍛えようと思
ってな」

「はぁ、一刻も早く強くなりたい気持ちに嘘偽りはないですけど」

一体何を教えてくれるんだろうか？

「それはよかった！では明日から君を内弟子とする。君にはこの武
天の全ての武術を詰め込むつもりだ。
では始めにこれだけ言っておく・・・死なないでくれ！！」

「ええ！？」

な、何それ！？死なないでくれって、一体どんな修行するつもりな
んですか！？
人が死ぬような物は修行じゃなくて、拷問ですよ！！

「頭の中で思い浮かぶかぎりの、つらい修行を考えてくれ」

そう言われて思い浮かべるのは妖怪の山での文との模擬戦、妹紅の扱き・・・

「そんなものは天国だ!!」

考えとは全く関係なく、足が勝手に明日への逃走を図っていた。
人間としての危機察知能力が全力で命の危機を察していたみたいだ。

「逃がすかあぁぁ!!輝夜!!」

「は～い!」

目の前に輝夜が立ちはだかる。だがそんな事は知ったことか!
遊ぶことしか考えないお姫様にやられる様なやわな鍛え方なんかしてない!!

「どけぇぇぇ!!」

やわな姫様は簡単に突破だ!

「あら、野蛮ね」

「ボフゥ！？」

手加減なしで顔を狙って放った拳を逆にとられ、まるでお手本かのように華麗に投げられた。

「ふふ、こんな小娘に手も足も出ないようじゃ、ホント唯の足手纏いにしかならないわよ？」

クスクスと僕の背中に座って言う輝夜。こ、このやろう！

「永琳、武天、コイツを思いっきり鍛えてやって。これじゃあ遊び相手にもなりゃしないわ」

見てろよ輝夜！必ず泣かせてやる！どんな修行でも来いってんだい！！

そう思ってた時期が僕にもありました。

生きるか死ぬか！？（後書き）

じらいです。昨日は滑り込みの投稿ができて何よりですw
今回は修行の前振りです。これからケンイチばりに修行を大和君は体験します。
修行内容を上手く描けないので飛び飛びになることをご容赦ください。

ではまた明日。

もう何年たった？（前書き）

注）前回同様、ケンイチ分含みます

場面が飛び飛びしてます

もう何年たった？

こんにちは、輝夜よ。ついに大和の修行が始まったわ。
そんな修行を伝えたいんだけど、あまりにも修行内容が『こゆい』し、見ててこっちも辛くなるからダイジェストで伝えるわね。

「ぎゃあああああああ！！？？」

魔力による身体強化抜きでの筋肉強化トレーニング。特に足腰に重点をおいて約半日の間武天が鍛える。
他にも腕立て腹筋。なんでも全身を瞬発力と持続力を兼ね備えた中間筋肉？に改造するやら何やらと永琳が言っていた。そのために食事も制限されているみたいだ。

「どわぁあああああああもう駄目だあああああああ！！？？」

永琳が放つ霊弾を魔力糸のみで捌いていく修行。もちろん手加減はされているみたい。
密度や速度、威力はギリギリ大和が耐えられない強さで放たれている。
日に日に霊弾の威力も強くなっているし、大和も打たれ強くなっているといったところなのだろう。
ここら辺はさすがの永琳といったところか。

だが一ヶ所に留まって捌くようにさせてくれないのは中々にエグい。

「いい？魔力も霊力も、きちんとした運用ができれば使われる力以上の力を引き出すことができるの。
あなたの場合はその魔力運用が全くできてない。つまり、無駄が多すぎるというわけ。
まずは効率のいい魔力の運用について教えましょう。まずは・・・」

身体を動かした後は魔力運用・幻術魔法についての座学。疲れてきたところの座学だから頭に入らないかと思いきや、動いたあとで頭が活性化して逆にいいらしい。

「今日は何処まで行く？なんなら島一周でもしようかしら」

「・・・重い」「あ゛？」

まったく、失礼なやつだ。私の遊び相手の権利は帝にさへ与えていなかったのよ？

その後は私の遊び相手。やることは島の探検。軽く島を何周か回った後、山を登る。

もちろんこの時もコイツは修行と平行して行われている。
何をするかと言うと、この島にだけある普通よりだいぶ重い木を使った牛車を一人で運ぶ。
乗っているのはもちろん私、と特性の重りの数々。
これがまたトンデモなく重い。これまたこの馬鹿がギリギリ動かせる重さで調整された物である。
製作はこれまた永琳。・・・永琳ってやっぱり天才ね。

これが最近の一日の出来事だ。え?私の暇つぶしの時間が短いんじゃないかって?
そんなことはないわ。だって見てるだけで面白いんだもの。

「師父（武天）ー!?来る日も来る日も筋肉トレーニングばかり!!いったいどんな武術を教えてくれるんですか!?」

大和です。来る日も来る日も筋トレばかり、凄くしんどいです！
今も中腰になって木の杭の間を早く移動する修行をしてます。他にも熊歩とかなんとか。

「まずは純粋な”力”が必要だ。いかに優れた技を用いても蟻がゾウには勝てないだろう？」

ゾウってなんですか！？僕は蟻と同列ってか！？

「ああ、蟻に失礼だったか」

「馬鹿にしてますよね！してますよね！！怒っていいですよね！？」

こ、このやろう・・・僕だって怒るんだぞこの髭じじい！！

・・・そう言えたらいいのにね。その後が怖くて言えません。ヘタレでごめんね。

「それもそうねぇ、こうも筋トレばかりでは”あき”がくるわね。
・・・少し早いけど技の修行に入りましょうか」

「ほんとですか！？やった！流石師匠！わかってるぅ！！」

「これはいよいよ死ぬかもね・・・」

輝夜の一言が怖いです。

「こ、これでは殺人未遂だ・・・」

とまあ、あれから随分とたったある日の言。

あれから更に激しくなった筋トレ・魔法・座学に加えて技の練習。師父の拳法に師匠（永琳）の月流柔術。独自の拳法とか、合気の混じった柔術とか名前を聞いただけではわからないモノをもう何年行っただろうか・・・。

臨死体験の回数も数えきれないほど体験してしまった。

魂が引っ張られるっていう感じで気持ちがイイんだ、エヘヘ。

三途の川の死神ともいまや仲良しだ。僕の愚痴を聞いてくれるいい

人なのだ。

正直僕は強くなったのだろうか？師匠達には全く歯が立たないし、輝夜にも負ける。
新しく使えるようになったのは”気”と”幻術魔法”ぐらいだ。

でもね、この二つ凄いんですよ。
気は身体を鍛えれば鍛えるだけ量が増えるし、幻術に関しては師匠からお墨付きを貰えたんだ！
これはうれしいね！

・・・魔力？もう増えません。
だいたいが人間にしたら破格の量らしくて、これ以上は見込めないらしい。
残念だ、魔法で無双がしたかったのに・・・。

だから運用に力を入れるようになった。能力も長持ちするし、二つ同時使用とかできるようになったし。

「これでも勝てないんだよなぁ」

「仕方ないじゃない。あんた才能無いし」

「うるせぇやい」

輝夜とは互いに軽口を言いあう仲になった。時々喧嘩もする。その度にのされてるけど。

いつか師匠に、なぜ思った以上に僕が伸びないかを聞いたことがある。
そのとき帰ってくる言葉が、お前には才能がない、の一言。
でも師匠達はそんな事は関係ないと言った。

「武は才能より信念」「魔は培った年月」

「こんなにすごい技が簡単に使える、のではなく、こんな基本的な技なのにすごい威力がある。
そう言われるようになりなさい。君は不器用なのだから」

この言葉を信じ修行を続けてきた。本当に僕は今どれくらいの強さなのだろうか・・・。

「今日の分の修行はもう終わったんでしょう?なら私に付き合ってもらうわよ」

「はいはい、解りましたよお姫様」

こんな日が続くのも悪くないね。

もう何年たった？（後書き）

じらいです。週刊アクセス見たら、２２２２。これを見た時は「おお！？」と思いました。２がいっぱいだったのでｗじらい、お前がナンバー２だ・・・みたいな？

今回本当ならもっと修行風景を書きたかったです。でも書くことができなかったので、一気に年月が飛びました。の・で、明日から番外編入ります！

恵方巻き食べてきます。ではまた明日。

蓬莱島小ネタ集（前書き）

題名通りの小ネタ集

～写真を撮ろう～

「写真を撮りに行こう」

ということで、今回は写真を撮りにいきます。蓬莱島の隅々まで記録に残すのだ！

「相方は人生の暇人、輝夜です」

「早く行くわよ」

こう見えて、彼女ノリノリです。なんでもまだ見ぬお宝が発見できるかもしれないとか言って。

移動開始

「写真撮るんだけどさ、なんで輝夜まで？」

「華があったほうがいいでしょう？」

黙らっしゃい。蓬莱島はそのままでも綺麗なんです。

満足いくまで写真を撮って帰宅。最後に４人で集合写真を撮った。
いい記念になったね。

～弟子は生かさず殺さず～

今日も修行。明日も修行。きっと一年後も修行。・・・身体がもちません。

「師匠ズ、休日が欲しいです」

「何？死ぬにはまだ早いわよ？」

「死ねばいくらでも休めるのだから、生きてる間は頑張りたまえ」

「今日だって気絶で修行終了だったじゃないですか！？こうも厳しいとホントに死ねますよ！？」

「「それくらいで死ぬようなやわな鍛え方はしてない」」

だめだこの人たち、何とかしないと・・・。

「で、逃げてきたと」

「違うよ輝夜。ただ休日を過ごしているだけさ！」

「ふ～ん、そんなにキツイんだ」

「アレは文句なしで死ねる。あの二人は鬼よりも恐ろしいバケモノです。頭おかしいとしか・・・。」

「それ、本人たちの前で言ったらどうなるかしら？」

「物理的に地獄に落とされるか、更なる修行かな」

人を絶望させる達人の間違いじゃないのか、あの二人は。

「へえ、うれしいわ。師匠のことを理解しれいてくれて」

「正にその通りだ。いやなに、私は更なる修行をさせるだけだ」

「あら、なら私は物理的にも精神的にも地獄に落とそうかしら」

ああ、儚い人生でした。

～女心は秋の空～

今日は輝夜に誘われ、男女に関する勉強です。
今も熱心に目の前で独自の理論を繰り広げておってです。

曰く、女の子に暴力を振るってはいけない。
曰く、女の子の心情を考えるにあたり、言葉だけで判断してはならない。
曰く、私には優しくすること。
曰く、私の言うことを聞くこと。
曰く、・・・ｅｔｃ

って、あとから全部輝夜のことばかりじゃないか。どうかしてるぜ！！

言った瞬間に殴られました。

曰く、喧嘩となれば男が全てに於いて悪い。

なにこの理不尽!?

～気になったので～

「師父、女の子が敵の場合何処を攻撃すればいいのですか？」

「ん？そうだな。相手が強者ならばどこでもいいだろう」

「ですが、輝夜は暴力そのものが駄目だって言ってました」

「そんな君に私の秘伝を教えてあげよう。その名も『男女平等パンチ』だ」

「『男女平等パンチ』！？」

「うむ。闘う意志を持つものはそれぞれ戦士だ。そこに性別・老若

男女は関係ない。
なぜならば彼らは皆闘う意志をもっているのだから。
だが、か弱い女性には紳士の態度を忘れては駄目だ。これさえ守れば例え女子でも殴って良し」

「わかりました師父！ちょっと輝夜に模擬戦仕掛けてきます」

数時間後

「師父・・・あなたの言う通りに気にせず闘いましたが勝てませんでした。
むしろより一層攻撃の激しさが増しました」

「・・・それは君の力不足だろうに。いろいろと」

～空を自由に飛びたいな～

それはある日の出来事

「何あんた、空も飛べないの？」

「五月蠅いこの馬鹿輝夜（ばかぐや）ーー！！」

「というわけで師匠ズ、空が飛びたいです！」

「・・・もしかして、飛べないの？」

「人に飛べるような翼は無いのです」

「忘れてたわ・・・。てっきり飛べるものかと」

「誰でも飛べると勘違いした我々のミスだな。決して君が能無しという訳ではないよ、決して」

「ば、馬鹿にしたなー！？責任もってしっかりと教えてくださいよ！？」

ということで、現在地上から遙か上空に来ております。師父におんぶされてます。

「気の使い方は理解しているね？」

「大丈夫です」

「では飛んでみたまえ」

え？っと思えば急降下中。ちょっ死ぬ！？

「飛べると思いたまえ！必要なのはイメージだ！！」

いきなり言われても！？ええい、ままよ！僕は鳥！鴉天狗だと思うんだ！！

「飛べーー！！」

人間、追い詰められたら不思議なパゥワーが出ます。

再び上空。今度は師匠におんぶされてます。ご丁寧に気を封印されて。

「師匠、まさかとは思いますが・・・」

「逝ってらっしゃい」

「またかよーーーー!!??」

今度は魔力!飛べる!天狗とは僕のことだ!!

「こんちくしょーー!!」

案外飛べるもんです。達人の指導のもと行われてますので、皆はマネしないように。

～必殺技・・・？～

それは修行中のある日の出来事

「何時も教えてくれるのは地味な技ばかり。・・・師匠ズ、何か派手な必殺技って無いんですか？」

「君にはまだ早い」「そんなことより、教えた技が完璧になるように努力しなさい」

「そんなこと言って、ホントは持ってないんじゃないですか？だから教えないんでしょ？」

カチン

何か聞こえたらマズそうな音が・・・？

「良いだろう、そこまで言うのなら来たまえ」

移動中

「こんな湖でなにを？」

「見ていたまえ。ゆくぞ・・・『浸透水鏡掌！！』」

湖の水が消し飛びました。

「どうだね？表面を破壊する打撃と、内部を破壊する打撃の両方を同時に発する技だ。
まだ地味ならもっと見せるが？」

「け、結構です」

その威力は、湖の水がすべて浮き上がり、そのあと雨粒となって降って来るほど。

また移動中

「じゃあ次は私ね。いくわよ・・・。『悶虐陣破壊地獄！！』」

投げる練習に使う人形がメメタァです。

「投げ、当見、関節技を同時に仕掛ける繊細な技よ。ああ、生命活動に必要最低・最小限な機能は
残してあるから死なないわ。人体の構造をしっかりと理解できている私だからできる技ね。どう？」

「死んだ方がマシかと」

そんなの人間じゃなくても死にます。

結論。師匠たちにケチつけるものじゃないです。

「ああそうだ、私たちの技は全部憶えてもらうから。
じゃ、まずは体験しましょうか。忘れられないように」

僕、生きて帰れたら眠るんだ。それはもう、ぐっすりと。

～重心を安定させよう～

針のような山の頂上で、てかむしろ針の山の頂上で片足立ち。
少しでも手を抜くと、下に落ちるか、針が足に深く刺さる。
刺さらないように気か魔力を足の一点に集中しなければならない。
更に師父から時々気弾を飛ばされるというオマケ付き。

「君の足腰の力はもう達人の粋に達すると言っても過言ではないだろう！
なぜなら足腰に重点を於いて修行させてきたからだ！！
そこから繰り出される蹴りは正に必殺！
重心のコントロールを上手く行い、まっすぐ打点に叩き込めれば威力は更に増すだろう！！
蹴りだけでなく、突きも同様だ。故に完璧な重心にまで鍛えねばならん！！」

もはや疲れて何を言っているのか解らないけど、修行なので我慢するしかない。
気絶するまで修行するのが師匠ズクオリティー。

～孤墨・敵の隙をつけ～

「連綿と続く攻防の中、防御こそしているが意識下より外れ孤立している場所を孤墨という！」

「はあ」

「ではこれより輝夜の孤墨を探してくるのだ」

此処で待っていれば輝夜は来る、と言われたので待つ。それにしても蒸すねここは。

ん？輝夜だ。・・・周りを確認しているようだ。隠れていてよかった。

って！？なんで服脱いでんの！？この湿度・・・まっまさか、ここには天然の温泉があるのか！？
目の前では産まれたままの姿の輝夜。師父、なんて喜ばゲフンゲフン、なんて不埒な修行を！？
だがしかし、これは修行なのだ。僕も心苦しいけれどやり遂げねばならない・・・！！

師父、弟子はしっかりと孤墨を探して見せます！

「へえ、じゃあ武天の差し金なんだ」

「ハイソウナンデス。ダカラボクハワルクナイヨ？」

「男女の掟その1」

「男はすべからずスケベであるべし。だが度が過ぎれば制裁を」

「よろしい。ならば制裁だ」

「輝夜が僕をスケベに（調教）したんじゃないかアッーーーー！！？？」

結論　孤墨探しはルナティック。

～やめろショッ○ー！？～

それは気絶していた時に耳に入ってきた会話

「ふむ、最近は厳しい修行を行っても中々気絶しない。
今までの修行で外功と内功がしっかり鍛えられている証拠だ」

「そして理想的な筋肉のつきかたもしています。弟子改造計画、上手く言ってますね」

フフフフ、と妖しく笑う二人だが、意識が朦朧としているため何の反応も出来ない。

「では今回もこの薬を体内に注射して」

「この漢方を飲ませる」

「「さあ、もっともっと可能性を見せてくれ」」

そこで僕の意識は完全に途絶えた。

おわれ

蓬莱島小ネタ集（後書き）

じらいです。と、いうわけで今回は小ネタ集です。一気に跳んだ時間を埋めようと躍起になって出来た話です。実はこれ、一話一話を省略して出来た話なんです。でもそうすると、無駄に話が長くなるからやめましたw

そして残念なことに明日も番外です。特に次話は蛇足かも？

蓬莱島小ネタ長編（前書き）

蛇足な番外。今日も番外なので、もう一つ番外を投稿します。

蓬莱島小ネタ長編

とある日、蓬莱島にて

「ぐおおお！！馬鹿輝夜（ばかぐや）めぇえええ！！」

輝夜と時々行われる模擬戦で連敗を期している僕は焦っていた。毎日死にかけの修行を行ってもう長い。それなのにまだ一本も取れていないからだ。

「だあああああ！！」

一心不乱になって拳を突き出し、蹴りを放つ。

「どぅおりゃぁぁぁあああああ！！」

柔術で投げる練習に使う人形を投げ続ける。

「そんな無茶苦茶な修行は意味ないわよ」

「師匠！僕には武術も魔法も才能がないんでしょうか！？」

「ええ、ないわね（キリッ」

「せっかく師匠達が仕込んでくれた達人の技を、僕自身が駄目にしているんでしょうか！？」

「まさにそのとおりね。間違いないわ（キッパリ」

鬱だ・・・・死のうｏｒｚ

僕の才能の無さは無限大さ、へへへ。

「まったく仕方ない弟子だ。どうだ大和君、ここは一つ私のとっておきを教えてやろうか！？」

「頼みます！！・・・殺さないでくださいね？」

さすが師父、師匠と違って話のわかる人だよまったく。

え？師匠？とんでもなく怖いです。あの笑顔の下を見たら再起不能です。

「責任は持てないなぁ・・・冗談だよ、半分」

師父、あなたもやっぱりそうなのですね。わかってましたけど。

ああ、死神さん、僕また近いうちにそちらに逝かせてもらいます。

こんどは閻魔様も呼んでお話しましょうね。

「で、なんでこんな山の奥地まで？」

大和です。只今蓬莱島にある一番高い山の中心部に来ています。
周りは可笑しな成長をした木々が生い茂っていて、周りよりも空気が濃いく感じる。
木が声を発するって言ったら信じる？

・・・自分を追い込んで逃げ場をなくすにはいい環境だと思う。

「ところでどんな修行を？」

輝夜を泣かせるためならどんな修行だって耐えてやる！
・・・その前に僕が泣くかも。

「何もしない修行だ。これより七日間武術の使用を禁ずる。魔法もだ」

な！？師父の秘密の特訓だと思っていたのにがっかりだ・・・。

ひとり落ち込んでいると

「今は私を信じろ。必ず為になる」

「はあ・・・」

師父がそこまで言っているのに信じない弟子はいませんよ

何もしない山籠り・・・妖怪の山での生活となんら変わりないじゃん!?ホントに意味あるのかなぁ。
まあいいや、もう一度深く自分を見つめ直すのもいいだろう。

僕の今までの人生を振り返ってみよう。

山で普通に暮らしていたけど、みんなよりも先に死ぬのが怖くなって魔法使いを目指したんだっけ。
はは、今思えば情けないよね。死ぬのが怖いなんて・・・もう何回も死にかけてるのに。
いやいや、僕はまだ生きているぞ!うん!嫌なことは忘れよう!

それから姉さんと修行して、文とにとりと遊びながらも楽しく生活していたんだっけ。
そんで大母様に嵌められて母さんとの決闘。勝てたからよかったけれど、負けた時にはどうなっていた事やら・・・。

山を下りたら妹紅と出会って、幽香さんに殺されかけて・・・ええい、考えるんじゃない！

その後は都。陰陽師の人には冷たくされたけど、僕を迎えてくれた人もいた。
それに最初に姉さんの本気の闘いぶりを見たのも都だったよね。あれはすごかった。僕も少しは近づけているのだろうか？

運よく魔道書を手に入れたのはよかったけど読めなくて、それで大陸を目指した。
んで、その過程で今ここにいる。

・・・中々に激しい人生だな、僕。普通の人なら何回も死んでるのを運だけで生きてきたんだから。

チリッ

うん？今なにか後頭部を翳めたような・・・。何か異様な視線を感じる・・・？

「何をしている、川へ魚を捕りにいくぞ」「あ、はい！」

気のせいかな？

「一つ言わせてください」

「何かな？」

「魔法も気もなしで、素手で魚が捕れるわけないじゃないですか！？」

「捕れているが、なにかね？」

こ、この人は・・・！？自分の常識を僕に当て嵌めて考えないでほしい！

「自分の分は自分で捕りなさい」

「や、山で木の実を探してきます・・・」

捕れるかコンチクショー！！

「木の実なし・・・どういうこと!?」

おかしい。明らかにおかしい。この島の木に一つも木の実が生っていないなんて!?
地面には・・・は!?これはキノコ!イタダキマス!!

「うぼぇえええええ!?」

ど、毒入りとは、さすが蓬莱島の摩訶不思議、やるじゃないか・・・!?

チリッ

!?まただ、今回ははっきりと感じれたぞ。いったいなんだ!?

四日後

心の波を静めよ。さすれば鏡のごとくまわりを映す。其れ即ち明鏡止水なり。

なんてカッコいい言葉を残して師父はどっか行っちゃうし堪ったもんじゃない。
毒のないキノコを探して食べ続け、早三日。そろそろ限界だ、魚を食べないと身体がもたない。

捕れないと半ば解っていても行くのが男ってもんです。自分に言い聞かせて川に入る。
明鏡止水、か。そう言えば紫さんも僕のことを”静”に属する者だって言ってたっけ。

あれ?不思議だな・・・。やけに心が落ち着いている。疲れきって闘志がわかないのかな・・・?

「っとそこだ!ってあらら」

まだ心に波があるのか・・・。野心を捨てろ、ただ流れる川の中の岩になればいいんだ。

川の音が聞こえなくなる。落ち着いて周りをみると魚の動きがはっきりとわかる。
右前・・・はまだ遠い。左からも一匹近づいて来ているぞ。
僕の両手で届く範囲を意識する。届く範囲は・・・!?まだだ、焦るな僕。
魚は常に前に向かって逃げている。僕が掴むべきは魚ではなく・・・
魚がこれから向かう先だ!!
「と・・・とれたあ!!」
パシッ
知らずに手が後頭部に当てられた師父の足に触れていた。
「・・・師父?も、もしかしてここに来てからずっと後ろ髪を蹴ってました?」
「やっと気づいたか。冷や冷やしたぞ、気づかないかと思ってな」
す、すばやい爺さんだ!
「どうだ?制空圏の感じは掴めたか?」

「制空圏？」

「”先に開展を求め、のちに緊湊に至る”。始めは大きく、のちに小さく。

自分のゾーンを決め、その中に入った物は確実に掴み、払い、打ち砕く！

今回君が本当に”静”の者であるかを確かめさせてもらった。安心したまえ。君は”静”の者だ。

君には制空圏を納めてもらうつもりだ。その先にあるモノも含めて、な。

ではまずは制空圏の修行をはじめようか」

簡単にいうと、自分の範囲内に入った攻撃や物を無効化させる技ってことか。

すごいじゃないか！さすが師父の技なだけはある！さらにその先もあるだなんて！！

こうして僕は制空圏の修行に入った。

そこからまた僕の苦労話があるんだけど、無事に制空圏は修めることが出来たとだけ言っておく。

・・・制空圏の先にある物は触り程度にしか修められなかったけどね！！

番外　輝夜と大和（前書き）

輝夜と大和のある一日の出来事です。
切ない姫様が書きたかったんダヨ！

番外　輝夜と大和

とある蓬莱島での一日　～姫の想い～

修行も波に乗り、順調に行っていたある日の出来ごと。

「大和、私と恋仲になりなさい」

「・・・へ!?」

どどどどど、どういうこったい!?輝夜が壊れちまっただ!!衛生兵ー、永琳さーん!?

「ああ、違ったわ。恋人ゴッコをしなさい」

なんだ、違うのか。少し惜しかｔ・・・へ!?

「・・・輝夜ホントに大丈夫?熱あるのなら師匠呼ぼうか?」

本気で輝夜が心配だ。おでこにおでこを当てて熱を測る。あ、熱い

！？凸アッツーーーーい！！

「な、なにすんのよーーーーー！！？？」

「プギャァ！？ちょ、いきなり殴るとかなにしてくれる、この馬鹿（ばか）輝夜（ぐや）！！」

「う、ううぅうるさいわね！！いきなりなにすんのよ！！」

人が心配してやったのになんて扱いだ。これだから我儘姫様には困るね。

「で、今回の遊びは恋人ゴッコなわけで。・・・具体的に何するの？
非常に遺憾ながら、僕には今までそういう経験がなかったから解らないんだけど」

「その点に関しては男女仲の先輩である私がリードしてあげるわ。
感謝なさい！」

なにが感謝なさいだ。何時も遊びに付き合ってあげている僕にこそ感謝すべきじゃないかと思わないか？

「はあ、わかったよ。今日は一日休みを貰ってるし、言うこと聞きますよお姫様」

「よろしい」

華が咲いたような微笑みを浮かべる輝夜。

ホント、喋らなければ可愛いのにね。

「で、なんで膝枕？」

自分、現在輝夜の膝に頭乗っけてます。
いい匂・・・ゲフンゲフン、気もｔ・・・・まあいい心地でありま
す、師匠。

「恋仲の男女はこうするものらしいわよ？」

ついさっきとは打って変わって強きな輝夜。攻守交代したみたいに
僕の顔のほうが真っ赤になっている。
自分でもわかる程に顔が熱い。・・・母さん以外にされたからだ。
断じて輝夜が相手だからではない！

「それにしても大和は不思議ね」

「ん？」

どうしたの輝夜？って言いたくなるくらいに真剣な顔をして話かけ
てきた。

「私からみても貴方が大して才能がないのはわかるわ。それなのに
あの二人に師事してもらって・・・。
並大抵の苦労じゃなかったはずよ。今のあなたクラスの実力にな
るのは。
一体、何が貴方をそこまで動かしているのかしら」

「ああ、そんなこと」

簡単だ、そんなことは。

「僕さ、妖怪の中でたった一人普通の人間として生きてたんだ。
何の力もない、けれど何の力も必要としない、そんな環境で育った。
でもね、そんな時思ったんだ。僕はみんなより早く死ぬ。当たり前だよね、人間なんだから。
でもそれが嫌だった。僕を守ってくれる人達に一生囲まれて生きて、死んでいくことなんて。
役に立ちたかったんだ思う、憧れたんだと思う・・・その人たちの生き様に。
今までやってこれたのは、いつか・・・いつの日かその人たちの為に、守ってあげるくらいになりたかったから。そんな存在になりたいから。

・・・・・よくわかんなかったかな?」

「ええ・・・さっぱりね」

「そう・・・。僕寝るね。このまま膝借りるけど、いいでしょ?」

「え?ええ、いいわよ」

「じゃ、お休み」

月からの追手を振り切って幾らかの年月が過ぎたある日、コイツはやってきた。
無謀にも一人で大陸を目指そうとした無鉄砲な餓鬼、それが私の第一印象。
私の暇つぶしの相手、という方言もその時の思いつきで出た言葉だった。
それに期待もしていなかった。男なんて皆クズばかり。
女と見れば下心丸出しで迫る汚い生き物程度の価値観しか持ち合わせてなかった。

上辺ばかり褒めて、誰も本当の私を見ようなんて、してもなかった。

「だって、お転婆な感じが強いから」

認めない、認めたくない。
出会ったばかりの、しかも子供にホントの自分を見られてしまったことが怖かった。
あれだけ都で持て囃されていたプライドがそれを許しはしなかった。
あの時は結構な力で殴ったんだっけ？フフ、思い返すと笑えるわね。

だからだろうか、コイツに興味を持てたのは。
永琳に頼んで何とかコイツを此処に引きとめることに成功した。そんな事をした自分にも驚いた。
正直どちらでもよかったのだが、残ることになったのだからコイツを観察することにした。

馬鹿・お人好し・ヘタレ。観察の結果得られた情報はこれだけ。だが十分だった。

「結局、コイツも今までの男となんら変わりは無し、と」

腹が立つ。これほど私に興味を持たせておいて今までの男達と何ら変わりのないことに。

今日にでも出て行かせよう。そう思い、修行場に出向いた所で私は見た。見てしまった。あいつの目を。

「立ちたまえ」

「う・・うぅう！」

「敵は待ってくれはしない！！」

武天に何度も殴られ、それでもなお立ち上がるあいつの目を、私は見てしまった。

普段のあいつからは想像もできない、強い力の籠った目をしていた。

私には向けられたことのない熱の籠った目。

一心不乱に立ち向かっていく大和に、私は考えを改めさせられた。

今回の恋人ごっこは、ただ私が人肌恋しくなっただけ。

何時もは寂しくなると永琳と寝てたけど、今回はコイツが偶然、そう偶然いたから頼んだだけ。

それにこれは、何時もの遊びの一環。そう、遊びなのだ。

だってその証拠に、大和の話の中に・・・守る対象に、私は入ってなかった。それが真実。

ほんのちょっぴり心がイタイけど、これも一時の気の迷い。

だから、今だけは

「傍にいさせてね、大和」

無邪気な寝顔をしている彼の髪を優しく撫でるのであった。

難波江の
　蘆のかりねの
ひとよゆゑ
　みをつくしてや
　　恋ひわたるべき

この蘆の根のひと節のように短い、一夜かぎりのあなたとの恋。
　あの難波の海のみおつくしのように、この身をつくしてあなたを恋し続けるのでしょうか

番外　輝夜と大和（後書き）

ども、妄想したら止まれなかったじらいですw甘い話だったかな？実は今回が一番ヤリきった感が大きいので、感想もらえるとメッチャうれしいっす。

話の中で輝夜は遊びだと言ってましたが、実際に恋しているかは自分でも理解してない状況・・・のはず。でも、大和が気になる。それくらいに思ってくれると幸いです。

和歌は誰のだったか忘れました。記憶にあるモノを引っ張りだしたので合ってるかもわからないんでw

実はあと数人こんな話を作る予定があったり。タグにハーレムって入れたほうがいいのか？

動き出したモノ

やあみんな！大和だよ！のっけからテンション高いって？フフフ、実は今日いいことがあったんです！

それでは回想スタート

目の前には師匠達。今日は話があるということで、修行は早いうちに終り話を聞くだけとなった。
なにやら重大な話らしく、あの輝夜も静かに座ってこちらを見ている。

「大和君」

「はっはい！」

師父と師匠の今までにない温かな笑み。こ、こいつは危険な香りがプンプンするぞ・・・！？
また何か酷い修行を考えているに違いない！

「今日を以って、君は弟子を卒業する！」

「嫌だーーーー!?・・・・へ?」

「今までよく耐えたわね。正直驚いているわ」

「うむ。よくぞここまで育ってくれた。師としてこれほどうれしいことはない」

「ちょ、待ってください!弟子卒業って・・・僕まだ弱いんですよ!?」

輝夜相手にようやく勝ち星を拾えるほどにしかなっていないのに。

「貴方、自分の強さを理解してないの?」

「師匠、僕はまだ輝夜にすらまともに勝てないんですよ?」

綺麗な勝ち方なんてしたことがない。泥臭い闘いでようやく勝てるくらいだ。

「輝夜は上級妖怪クラスの強さの持ち主だ。それにまぐれでも勝つことのできる君は、
人間としては最強クラスといっていいだろう」

輝夜が上級クラスだって?そんな馬鹿な!?

自称お姫様がそんなに闘えるわけ・・・あ、実際に僕と闘ってるじ

ゃないか。

「そんな貴方をもう弟子にはしておけないの。魔法も武術も基本以上のことを徹底的に叩きこんだ」

「あとは君が自身で力をつけるべきだと判断したのだ」

「そうなんですか」

言葉ではこうしか言ってないけど、内心すごく喜んでます。それはもう今すぐ飛び跳ねたいくらい。
喜んでいいですかね？

「喜んでいいわよ」

「いぃよっっっしゃぁぁぁあああああああああああ！！！！」

やった！ついにやったよ！僕、ついに強者の仲間入りを果たしたんだ！！
才能に悩まされ、悩む暇も与えてくれないほど修行に明け暮れて約何年？
ついに僕は努力によって勝ち取ったんだ！！

「しかし」

「へ？」

「しかし、君はまだまだ弱い」

ははは、何を言ってるんですか師父～。さっき貴方が弟子は卒業って言ったじゃないですか。

「弟子を卒業しただけであって、貴方が上級クラスとは誰も言ってないわ」

「へ？」

「ま、中級ぐらいかな。今の君は（上級に近いけど」

なんてことだ。あれだけの修行をしてもまだ上級じゃないなんて・・・。

でもいい、まだまだ強くなるんだ！今までだってやってこれたし、これからもやっていけるさ！

「これからも精進していきます」

「「あたりまえね（だ）」」

なんてことがあったんだよ。いや～、それにしてもうれしいねぇ。
きっと三途の川の死神姉さんの喜んでくれるはずだよ全く。

今日は一日もう休みでいいみたいだし、僕から輝夜を誘って遊びに行こう！

「輝夜ー！遊びに行こー！」

これから起こる事件に、僕が気づく余地なんてなかった。

～弟子卒業を告げる少し前～

「ここの結界に綻びが見つかったとは本当かね？」

「間違いありません。現在修復作業を行ってますが、発見されたことは確かです」

ついに見つかった。おそらく発見はされていたのだろう。
長い年月をかけて結界対策をした、そう考える事が妥当であろう程の早さでの結界への対処。
見つかる可能性があったのは確かだが、これほど早くに結界が破られるなんて思っていなかった。

「確証はあるのか？」

「輝夜も能力の干渉を受けていると言っています。もってあと二日かと」

奴らは確実に攻め込んでくる。おそらく狙いは輝夜と私。大和の存在には気づいていないはずだ。

「明日には輝夜と此処を出ます。・・・彼のこと、よろしくお願いします」

「・・・いいのかね？最後の別れになるのかもしれないのだよ？」

「今更です。最初に彼と会ったときから覚悟は出来てますから」

私にできることは全てしてあげた。それに、彼は思いのほか頭がいい。流石は私の・・・

「では明日、彼には弟子卒業を言い渡すとしよう」

「お願いします」

「どうしたの輝夜？いつもの元気がないね」

元気など、出るはずがない。
この楽しかった生活も今日で終わり。明日からまた逃げ続ける日々が始まる。
私の遊び相手だったコイツとも別れることとなる。自分の想いすら解らないままに・・・。

「明日はさ、何しよっか。久しぶりに山に登る？それともまた宝探しでもする？」

それなのにコイツは何もしらずに話掛けてくる。

イヤだ、聞きたくない。コイツと、大和と離れたくないよッ・・・！

「てい」

「ひぃたひ。ふぁにふんのょ」

いきなり人の頬を抓るな!?痛い・・イタいって!?

「なに悩んでるの?」

「え?」

「話かけても知らぬ顔だし。ほら、大和君に話してみな。悩み相談くらい聞いてあげるから」

ホレホレと言う馬鹿。本当に馬鹿だ、コイツは・・・。

・・・ごめんね永琳。でもね、逃げ続けるのはもうやめる。
コイツの頑張っている姿を見たら、自分が情けなく見えてくるの。
そんなの嫌だから。

だから、最初に謝っておく。

「あのね、大和・・・」

私は私の闘いを始めるわ

戦闘開始（前書き）

話が浮かんでこない日々が続く。浮かんでも原作の話しか浮かんでこないよ！？

戦闘開始

～月部隊　隊長～

「此処か・・・」

「隊長、全員配置に着きました」

「了解した」

我が部隊の任務。それは八意永琳、並びに輝夜姫の確保である。
何事もなく確保できればそれが一番いい。だが彼女たちは既に月の民を殺して逃亡している。
故に不足の事態に備えて我らのような戦闘部隊が送り込まれた。
我々は月の中でも優秀な部隊であり、錬度も高い。あの二人といえど、十分相手ができるはずだ。

「隊長、どうかしました？」

それにこの少女もいる。まだ若いが能力は十分ある将来有望な若手で、今回私の副官も務めている。
ただ、この子にはいつも黒い噂が絶えない。
なんでも人道に反する研究を行っているとか・・・。まあいい、噂は今は関係ないことだ。

「いや、なんでもない。それにしても今回はやる気があるな。訓練の時には随分怠けているというのに」

「あらら、ばれてましたか。・・・そうですね、今回あちらには興味深い人がいるもので」

「珍しいな、貴官が興味をもつとは」

いつもの彼女からは想像もできないことだ。だがそんな彼女も今回は精力的だ。きっと全てが旨くいく。

少なくとも私はその時にはそう思っていた。

「ターゲットを確認、これより確保に入ります」

第一陣からの報告が入る。どうやら目視距離まで接近できたようだ。

「了解。ただし注意しろ、相手はあの月の頭脳だ。罠を張っているかもしれん」

「どうやら食事中みたいです。月の頭脳も落ちた物ですね・・・行きます！！」

～とある隊員～

私たちはターゲットを既に目視できる距離まで近づいていた。

「ここまで近づいて気がつかないとは、月の頭脳も鈍ったな」

皆口々にそう言う。私も口には出さないがそう思った。だが任務が楽になるのなら大歓迎だ。

「確保する。私に続け！」

「動くな！動かなければ危害は加えない！」

沈黙目標は４人。私はその中の少年の手をとり、地に身体を押しつけて宣言する。
他の隊員たちも同じように確保を完了していた。

「拍子抜けだな。これがかつての月の頭脳の姿か・・・」

私が話に聞く人物とは全く違う手応えに拍子抜けしていた。
月の頭脳とは全てにおいて完璧であり、他を寄せ付けないモノを誇ると聞いた。

だが結果は見ての様。所詮は地上で穢れきった身だということか・・・。

「八意永琳は・・・」

私の下にいる子供が何かを言っている。何を・・・？

「僕の師匠は、愚かじゃないぞ？」

途端、少年の身体が爆発。それが私たちが最後にみた光景だった。

～先日～

「師匠、僕に何か秘密にしてることありませんか？」

「いきなり何？・・・ありすぎて困るわね」

おおう、いきなりコケそうになったじゃないですか！？
でも今はそうしてる場合じゃないんだよ。危機が迫ってきているん

だから。

「輝夜から聞きました。明日にも月の民が攻めてくるんですよね？」

「・・・あの馬鹿」

額に手を当てて俯く師匠。本当に輝夜に仕えているの？扱い酷いよ。仮にも教育係だったんだから、輝夜が馬鹿なのは貴方の責任ですよ？

「だとしても、貴方には関係ないわ」

「師匠が困っているんです。僕は弟子としてできることをしたいんです！！」

「あなた程度で「永琳、私からもお願い！」・・・輝夜？これは一体どういうことなの？」

師匠が本気で怒っている・・・！怖い・・・メッチャ怖いんだけど！？

輝夜と永琳の睨み合い・・・師父、タスケテ！！

「永琳、私決めたの・・・。もう逃げない、闘うって！」

「闘うって貴方、月と一戦交えるつもりなの！？」

「ええ！」

額に若干の汗を滲ませ、そう宣言した輝夜の顔には計り知れない覚悟が見えていた。

「僕も闘います！」

あの時輝夜から話を聞いた。そして手を貸してくれと頼まれた。あの輝夜が頭まで下げてまで。

「もう逃げない、私も闘う。だから助けて」って。そこまでされて断るほど、薄情な関係ではもうない。

だから今こうやって此処に居る。

「貴方達が闘っても「なら私も参加しよう」・・・貴方までそんなことを」

武天師父も僕たちの意見に賛成してくれる人だ。実は永琳師匠に話す前に武天師父にこの話をしたんだ。

そしたらなんと簡単にＯＫを出してくれた。久しぶりに暴れられるとか言って喜んでましたよ、ええ。

「永琳お願い、もう逃げ続けるのは嫌なの。今回でケリをつけたい

の」

「僕からもお願いします」

絶対に引かない。そう想いを込めて二人、もう一度頭を下げる。

「・・・来ることがわかっていれば、出来ることも多い」

「え？」

「大和、今回のケースではどういう対処が最適かしら？」

師匠！！

「はい！えっと、今回は相手から攻めてくることが解っていますから罠を張ります。

・・・そうですね、僕の幻術を使いましょう。その後幻術を爆破、敵を吹き飛ばします」

「じゃあその案でいきましょう。・・・ありがとう、力を貸してくれて」

準備がある、そう言って師匠は行ってしまった。

そして今日、月の民が攻めてきた。計画通り、僕の幻術に見事引っ掛かり敵部隊は壊滅した。

「中々の威力ね。あそこにいる奴ら、全員吹き飛ばせたじゃない」

輝夜の言には僕が一番驚いています。まあ油断しきってたし、あの程度の相手ならヤッちまえますよ？

「やはり幻術に才が偏っているようだ。今の幻術を初見で見抜ける者はそういないだろう」

ほう、僕は幻術の才能があるとそう言いたいんですね（ニヤリ

「偏ってるって言ったでしょう。他は駄目なのよ」

持ち上げてから叩き落とす！ホント何時も酷いですよね！！

「馬鹿やってる場合じゃないわ、来るわよ！！」

第二陣が向かってくる。さあ来い、修行の成果を見せてやる！！

戦闘開始（後書き）

テストしゅ～りょ～、メンテナンス付きの春休みに直行ダ！！
と言うわけで、テストで盛大に地雷を踏みまくりました。ああ、単位・・・君は何処へ行くんだい？勉強したとこが出ないって哀れすぎるだろjk

すいません、頭が可笑しかったみたいです。
今回から戦闘開始です。何話か戦闘が続く・・・けどシリアスな空気を絶対に消してみせます！抜けている家の主人公ならやってくれるはずだ！

初陣、そして圧倒（前書き）

おっはよ～。午前5時をお知らせするぞ！

初陣、そして圧倒

「第二陣は二人に任せる。私たちは敵の本陣を潰してくるので」
「初陣だけど焦らないでね大和。あなたの実力なら問題ないから。輝夜も無茶しないでね」
「わかりました」「わかってるわよ」
そう言うと師匠達は敵の第二陣を無視して走り去っていった。
「待て！」
「待つのはそっちだ！！」
追いすがろうとする敵に魔力糸を放ち足止めをする。
敵の数はおよそ１５人弱。
師匠はああ言っていたが、今回は実力的には僕と変わらないと思われる人も数人いる。
「対多数戦闘・・・初めてだろうけど、出来る？」
「もちろん！！」

輝夜の言葉に自信を持って答える。
師匠達の修行には対多数・対武器の戦闘も考慮されていたんだ、出来ないわけがない。

「あいつら、地の力はそれほどではないわ。持っている武器が脅威ね。
特に後方で飛び道具（銃）を持っている奴には注意しなさい。当たり所によっては即死するわよ」

「わかった。半分は任せて・・・行くぞ!!」

敵がこちらへ攻撃を仕掛けようとした瞬間に跳ぶ。
元居た場所に銃弾が多数撃ち込まれた。・・・あれは確かに当たれば痛そうだ。

まず最初にあの後方の人達を黙らせよう。
そう思い着地すると、魔力剣のような物を使って斬りかかって来る人達が目に入った。

「死ね!」

見える!師父の攻撃にしたらまるで止まっているみたいだ!
斬りかかる一人の手を、勢いがのる前に両手で払い流す。そのまま両手を相手の胸に当てる。
その過程で両足から震脚のように力を込め、送りこまれた力を背中

で増幅させて掌打！

「双纏手（そうてんしゅ）！」

一人撃破！

「お前！？」

休む暇なく次が来る。
勢いののった斬りかかりを前進することで避ける。
後に下がっては駄目だ。敵が恐れるのは自分の領域に入られることなのだから！

「ぐわ！？」

そのまま相手の鳩尾を殴り、前屈みになったところで左手を右手に重ね、勢いよく突き出す。

「単把（たんぱ）！」

相手を後方まで吹き飛ばす。後を巻き込めたようだ。

「貴様！おい、囲んで潰すぞ！！」

円陣を組まれ、囲まれてしまった。甘い！甘いよ！！
戦略的には正しいだろうけど、あの地獄の修行を体験している僕に
そんなもの脅威には成りえない！！

「今だ！掛かれ！！」

こういう時にこそ、この技は真価を発揮するのだから。
心を落ち着かせ、向かってくる敵を迎え撃つ。

「なっなんだ！？攻撃が当たらない！？」

「制空圏（せいくうけん）」

自分のパーソナルスペース内の攻撃を完全に無効化する。今の僕に
死角など存在しない！
敵の剣、拳、蹴りを捌き、逆にこちらの攻撃は確実に当てていく。
気がつけば僕の近くには一人しか立っていなかった。

「こ、このやろう！」

仲間をやられて焦りでもしたのか、攻撃には勢いがなかった。
そんなんじゃ、投げられても文句は言えないよ！

「せ・お・い・投げー！」

腕をとり、思いっきり投げてやった。

パンッ

乾いた音とともに僕崩れ落ちる。撃った本人はそう思っただろうね。

「けど残念、幻術だよ。いい夢見れた？」

「何時の間に！？」

回復していた後方隊員の後で、笑いながら声をかける。
そんなこと言う訳ないじゃないか。幻術は魔法（マジック）なんだ。ネタがバレると通用しないからね。

「おやすみ～」

最後の一人の間接を決めた上で気絶させる。ふぅ、とりあえず僕のノルマは達成。
怪我一つなく、気・魔力共にほぼ消費無しで撃退できたぞ！

・・・僕って実は強い？ムフフ、あの修行を耐えたんだから当然だよねぇ・・・！

それでも敵はどれだけいるか解らないから、出来るだけ使わないで勝てたのは大きい。
勝利の余韻に浸るのはいいけど、一応この危ない銃は魔力糸で切断しておこう。

さて、輝夜の方はどうだろうか？

「あらもう終わり？だらしないわね」

こちらも怪我一つなく倒していた。だろうね。僕で勝てるのだから、輝夜が負けるはずがない。

「ふ～ん。中々やるもんだね、元月の姫。それに『兄さん』も」

これは魔力弾！っ何処から！？

「お、避けた避けた。まあ当然だよね、兄妹なんだから」

「あんた、一体何者？」

目の前の相手に僕は度肝を抜かれた。

「ハジメマシテ。私はシリアルナンバー３０００００４６、個体名はアキナって名乗ってるわ」

何故ならば、目の前の存在は僕そのままで、女の子になった僕自身の姿だったのだから。

月から更に降下する気を感じたので、そちらを迎撃する。
そう言い武天は月からの増援へ向かって行った。

「久しぶりだな、八意永琳」

なので私は今一人で隊長格（おそらく最低でも中級クラス。ほぼ全員が上級）と向かい合っている。

「ええそうね。できればもう会いたくなかったのだけれど。今からでも遅くないわ、帰ってくれない？」

「それはこちらのセリフだ。今からでも私たちと月へ戻れ。月はお前を必要としている」

「私ではなく、私の頭脳を、でしょうに」

どの口がものを言うのか。
月に戻れば、おそらく輝夜は実験室行き。貴重な実験体として精神が崩壊するまで体中を切り刻まれるだろう。

私も似たようなことになるだろう。脳を取り出し、移植するなど珍しいことでもない。
脳さえあれば、後はどうとでもなる。その技術を生みだしたのが私という所が皮肉なのだが。

「月とはもう手を切ったの。私たちの邪魔をするなら消すわよ」

殺気と共に力を解放。並の者なら立っていられないほどの圧力をかける。

実際に怯む者もいたが、それでも平然と立っている者が5人。

今から私が闘う相手はそれほどの猛者たち。

「技術畑とはいえその力。一度闘ってみたいと思っていたのだ。
このような場所とはいえ、闘う機会を得たことに私としては感謝している」

彼を中心に5人が力を解放する。・・・中々できそうね。

「なら掛かって来るといいわ。月の頭脳の実力、その身で確かめなさい！！」

初陣、そして圧倒（後書き）

眠れねえんだよ、眠れないんだよぉ！？なんで！？メッチャ眠いのに！！

ども、熱くなっているじらいです。眠い中作った話なので主語とか誤字とか、変な感じになってるかも。あったら後で直すから勘弁してちょ。

蓬莱島編も佳境に入りました。戦闘が終われば蓬莱島編も終了、輝夜のターンも終了です。でも戦闘シーンが上手く表現できない。そのせいで投稿が遅れます。何処かで上手い表現のある作品を見つけたら御一報ください。飛びつきますんで。

大和とアキナ（前書き）

超オリジナルな話が展開されます。ご注意を

「『兄さん』だって・・・？」

「そ。血は繋がってないけど、そういう関係だと私は思っているわ」

・・・はい？何のことですかね？おかしいなぁ、僕は一人っ子のはずなんだけど・・・。
それに僕は滅んだ里から拾われた子供なんだから、妹なんていないはずなんですけど。

う～んそうなるとこの子、アキナはお兄さんが欲しいだけなのだな、ふむ。

「残念だけど、僕は君の兄さんじゃないよ。ただ、兄さんになって欲しいのならなってあげるけど？」

「・・・もしかして兄さん、八意永琳やそこにいるお姫様から何にも聞いてないの？」

「へ？」

いっがーい、なんて態とらしい驚き方（と引き方）をする自称僕の妹。
いっがーい、僕ってなんか間違った？・・・兄さんになってあげる

とか唯の変態じゃないかｏｒｚ

目の前で驚く自分がいるけど、彼女にもそう見えているのだろうか？それはそれで愉快だなぁ。

「どういうこと?輝夜は何か知ってるの?」

「何も知らないわよ。むしろ、何でその子があんたソックリなのか私が知りたいわ」

だよね～、なんたって自称姫様だから世俗のことには興味ないもんね～。

そして何より、輝夜が嘘を吐く必要なんてない。

「ふーん。なら八意が意図的に隠してたってことか・・・。

んふふ、これはまた面白いことになりそうね」

本当に面白い、そう彼女は笑って僕を見つめた。

あの、自己完結しないでほしいんだけど・・・。

「流石は月の頭脳と呼ばれるだけのことはある。闘い方も実にスマートだ」

そう言い霊弾を放つ隊長。その援護のもと素早い動きで私を翻弄し、時間差で攻撃を仕掛けてくる5人。

私に反撃されるのを恐れているのだろう、完全にヒットアンドアウェイに徹する相手に私は手を拱いていた。

敵は確実に私を恐れている。いや、試しているといった所か。

噂通りの相手ならばこのまま削り、そうでなければ一気に攻勢に出るのだろう。

私にすれば、後者の方が好ましい。その方が早くにケリがつく。

此処にいる者たちさえ倒せば、後はもうどうにでもなるのだから。

いっそ、こちらからこの均衡を壊すか？そう思った矢先、接近戦をしかける相手方の声が耳に入った。

「貴方の『失敗作』、今頃どうなってますかね」

「！！」

何故知っている！？アレは貴様のような若造が知り得るコトではない筈だ！！

「実はね、今回『成功作』も来ているんですよ。今頃は感動の対面でもしてるんじゃないですか？」

「――――――ッツ！？」

その言葉に、今度こそ私は驚きを隠せなかった。

「隙ありィ！！」

「あっ――――――――――――――！？」

一瞬の隙。常人にとって隙にはなり得ないその隙をついてこそ真の強者。

私はその一瞬の隙を突かれ、５人の攻撃をその身に受けてしまった。

「私たちはね、八意に造られたの。所詮、人造人間（ホムンクルス）ってところかしら？」

「ホムン、クルス・・・？」

「そう。『月人育成計画』のもと、月のありとあらゆる因子を組み込まれた人間を造り、月の保有戦力を増やす計画」

なんだ、それ・・・？人造人間（ホムンクルス）ってなんのことだ？

「ふざけるのもいい加減にして！永琳がそんなことするはずないじゃない！！」

輝夜、知っているのか！？僕には何が何だか解らん！

「おや、元教え子である貴方の因子も取り込まれているのですよ？」

「な――――――――――――!?」

「・・・詳しく聞かせてもらえる?」

解説プリーズ。お願いだから一人だけ置いて話を進めないで!?

「大和、聞いちゃダメよ。コイツは言葉で惑わすつもりだわ」

「ううん、聞く。聞かないといけないんだ」

やかましいわ!何で当事者が解らん内に話が進むんじゃ!納得いくまで説明してもらうからね!!

それにさっきから胸がざわめくんだよ。聞かないとダメだって、心の深い底から話かけてくるみたいに。

「いいわ、なら話してあげる。

計画が立案されたのは遙か昔のこと。

当時、月に移住したばかりの月人は移住前に起きた、後に『人妖

大戦』とよばれる闘いで疲弊しきっていた。

なんとか人類は月へと脱出。移住することができたのだけど戦力はボロボロ、

月にまで攻め込まれるともう打つ手がない状況まで追い詰められていた。

そこで当時、戦力を強化するために立案されたのがこの計画。

立案・実行は八意永琳主導で行われたわ。

月の優秀な因子を組み込んだ人造人間の創造に挑んだ。

けれど結果は失敗。だけど八意は諦めなかった。

産まれてきた失敗作を生きたまま解剖し、原因を調べ続けた。

時が進むにつれて人口も増え、自然と取り込む因子の数も多くなった。

すると行き詰った計画に光が差し込んだ。月の姫の因子を反転させることである一定まで安定させる

ことに成功したのよ。それまでに支払った犠牲もまた多大なものだったけど、八意は止まらなかった。

だがそこで再び問題が起きた。今までの失敗作と違い、今回の個体は自我を持っていた。
更に、身体機能や精神に何処か欠落した状態になるということ。
月の上層部はこれ以上の成果に期待を諦め、失敗作同士を戦わせて少しでも強い者を残そうとした。

表向きわね。その頃には月も潤っていたから、ただの暇つぶしに闘わされていただけって聞いたわ。

・・・笑えるわね。同じ顔をした、同じ存在が殺し合うのよ？
それを一時の戯れに見る月の上層部。・・・吐き気がするわ。

勝った者は生きる権利を与えられるはずだった。けど八意の知らぬ内に解剖されていた。
あいつがそれを知った時には、もう何百人もの兄妹が犠牲になった後だった。

それから少しして、八意は全計画の中止を決定。彼女に何かがあ

ったんでしょうね。
そして計画は終わるはずだった。だというのに、計画は止まらなかった。

秘密裏に行われ、生き残った失敗作はチップを埋め込まれて地上に放たれた。
少しでも地上の妖怪を殺してくれるとでも思ってたんでしょうね。

幸か不幸か、地上に放たれた者たちは一か所に集まって村をつくり、生活を始めた。
その行動も、埋め込まれたチップによって逐一報告されていた。

笑えるでしょ？ようやく自由を得たと思ったのに、実際は月の支配から逃れることなんて出来てなかったのだから。

そうしている間に貴方が生まれた。今までと違い、身体・精神的欠如は見られなかった。

一見すると成功作。それは研究者も喜んだそうよ。
ただ、能力値が今までの個体と比べて圧倒的に低かった。解剖すれば良かったんでしょうけど、
そこで邪魔が入った。秘密裏に進められていたことが八意の息の掛かった者たちにばれ、
その抗争中にあなたが入っていたポットは地上へ落下。

これは後で解ったことだけど、貴方の落ちた場所は兄弟の住む村だったらしいわ。

そこから先はあなたの知っての通り。村は鬼と闘い、激戦の末滅んだ。

そして当時はまだ試験管の中だった私は数年の後に生まれる・・・というわけ。

これが私の知りえる真実。理解できた？」

「・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・」

僕も輝夜も、言葉が出なかった。そんなのは嘘だ！なんて言葉もでない。

僕の中にある『何か』がそれは真実だと言っている。

この子の、アキナの話は本当なんだって。

僕はそこで、自分と同じ存在に拾われる。だけど、拾われて間もなくその村は母さんたち鬼との

戦争をして、滅んだ。後は母さんに拾われて今に至る、か。

はは、辻褄が合うじゃないか。もう否定のしようもない。

「それで？いったい君はどうしたいの？」

感想　　心・底・どうでもいい

けどそれがどうしたっていうんだ？
僕にこんなことを話したって、僕が今までに重ねてきた歳月、関わった人達との記憶は僕だけのものだ。
僕は伊吹大和なんだ、ってはっきり言うこともできる。

それに、こんな話を聞いた後でも僕には師匠を怨むなんてことは出来なかった。

厳しい修行を行う師匠、怪我を癒してくれる師匠、柔らかい頬笑みを浮かべて話かけてくれる師匠をいまさら怨むなんてできないよ・・・。

嘘です、メッチャ恨んでます。主に修行で何度も殺されかけたことに対しては。

けど恩は感じても憎しみなんて感じないのが変だよなぁ。知らないとはいえ、何人もの自分が殺されたのに。

「兄さん、私と一緒に月で暮らしましょ?今日は兄さんを連れ戻しに来たんだ」

「君は憎くないのか?怨んでいないのか?」

アキナからは月に対する怨みを感じる。そんな子がどうして月で暮らしているのか?
僕なら真っ先に月から去る。小さな世界で自分を殺して生きていくことなんてできそうもないから。

「確かに憎いわ。なんの罪もない兄弟が殺されたのだから当然でしょ?
でもね、月も住めば都ってところかしら。生きていくのに不自由ない生活をしているわ。
私の境遇を知る人は優しくしてくれるし。だから兄さんも、ね?」

そうか、君は今に満足してないんだね・・・。
そんな暗い瞳をしているのに、そんな嘘を言う言葉になんの意味もないから。

だったら、兄である僕は助けてやらなければならない。苦しむ妹を救うのが兄の役目だ。

「悪いけど、断る！」

「どうして？月に来れば何不自由ない生活が出来るのに！」

「僕の居場所は、地上なんだ」

月には帰らない、と言うより行かない。母さんや姉さん、いろいろな人との繋がりや約束もできた。
アキナ、月に帰ろうって誘うのが遅かったんだよ・・・。僕にはもう、帰る場所があるから。

「そっか・・・。なら、無理やりにでも連れて帰るしかないね！？」

「なら僕は、君を救ってみせる！！」

「一つだけ聞かせて頂戴。あなたはどうして大和に固執するの？」

「生き残った個体は、もう私と兄さんだけ。家族を求めて何が悪い！！」

個体言うな。僕らはそれぞれ別人だ！

「輝夜、手はださないで。アキナとは1対1で闘いたいから」

「だせるわけないでしょ・・・」

「私に勝つつもり？無理よ、それはぁ！！！」

生まれて初めての兄弟ゲンカだ、派手に行こうぜ！！

大和とアキナ（後書き）

バレンタインが近くに迫ってきて鬱になりかけのじらいです。

今回の話は正直どうかなぁ、と思いながらも書きました。大和の出生に関わるだけに難産でしたよ、本当に。

永琳スキー、な方には申し訳ないですけど、悪者になってもらいました。まあ大和君が救済しますから、それで許してくださいね。

一応次話はできているのですが、納得いかないんですよ。自分の文才の無さに呆れる毎日です。

兄妹ゲンカ（前書き）

ＰＶ１０万、ユニーク１万越えました。何時も読んでくださる読者様に感謝を

～とある隊長～

「死んだか・・・」

闘いは一瞬で決まる。

八意が見せた隙は時間にすれば一秒にも満たない時間。そこを突いて奴の首を刎ねることができた。

普通それは隙とは言わないだろうが、我々ほどの実力者となればそれは致命的な隙となる。

だがその隙のでき方、あれは”らしく”ない。奴ほどの者がああも隙を見せるなど有りはしない。

となると、気になるのは部下の言った言葉、『失敗作』と『成功作』。

「おいお前、『失敗作』とやらは何の話だ?」

「・・・何の話ですか?自分は何も知りません」

なるほど、惚けるつもりか。まあいい、結果がすべてだ。任務を続

けよう。

「おい、奴の首を持ってこい」

部下に奴の首を持ってくるよう命令する。
私たちは何も考える必要はない。軍隊とはそういうものだ。

「なっなんだッ!?」

「どうしたッ!?」

見れば奴の身体と首が光を放っていた。一体なにが起こっている!?

「ぎゃぁぁぁぁあ!!」

「なんだ!?」

後ろから聞こえる悲鳴に反射的に振り向く。そこには死んだはずの八意がいた。

「『失敗作』ね・・・。生きていたら教えてあげてもいいわよ」

「貴様、まさか蓬莱の薬を!?」

「ええ、飲んだわ。輝夜と共に生きるために」

ええい、なんということだ！私たちは始めから勝ち目のない闘いをしていたのか！？

「さあ、第二ラウンドと行きましょうか？」

狩る側であったはずが、狩られる側になった瞬間だった。

～ｓｉｄｅ大和～

「あっはっは！兄さん避けるの上手いね！ゴキブリみたい！！」

「ちょっとは手加減しろー！！」

失敬な！あんな真っ黒クロスケで地面を這う妖怪と同じにするな！
只今アキナが使う二丁拳銃から撃たれる魔力弾を余裕をもって回避してます。
向こうも遊んでるみたいだしちょうどいいや、折角だしアキナの実力でも測らせてもらおう、
って感じのケンカが続いてます。

それで解ったことが、僕と同じ存在だからか魔力を使うってこと。
おそらくだけど、アキナは今の僕よりも強いってこと。

ちょっとだよ？負け惜しみじゃないからねっ！

まあいいや（良くないけど）、強いのは事実だし。
でもさぁ、すっごく納得いかないコトがあるんだよねぇ・・・！

「僕と同じ存在だっていうのに、なんで僕より魔力がそんなに多いんだよ！？不公平だ！！」

「言ったでしょ？兄さんは基礎能力値がとんでもなく低い、いわば『失敗作』なんだって！」

避ける避ける・・・危なッ！？弾幕がだいぶ密度を増してきたぞ！
避けきれない分を両手で魔力糸を操って魔力弾を切り裂いていく。

「だったら何か！？僕も本来ならそれだけ魔力があったってか！？」

「それはないね。だって私は最終的な調整を受けて生まれた、いわば『成功作』。
『失敗作』の兄さんとは次元が違うのさ」

こんちくしょう、才能ないから失敗作ってことですかぁ！？

くそっ、また密度が増してきた！このままじゃ捌ききれなくなる！
こうなったら未来をみて弾幕の軌道を読んで、なんとか接近戦に持ち込んでやる！

『未来を視る程度の能力』発動

この能力は未来を視て、これから起こる事象を知ることができるのだけど・・・未来が視えない！

なんで！？

「今、未来を視ようとしたでしょ」

クソ！どうしたっていうんだ！？今まで能力が発動しないことなんてなかったのに！

だったらもう片方の目に魔力を集中して加速、意地でも接近してやる！

「遅いわね、兄さん。私はその『先』にいるわ」

「ガァッ！？」

ッツ～～！まともに何発か貰ってしまった。なんでだ？どうして僕の能力は通用しないんだ？

「やっぱり思った通り、私と兄さんの能力は同じ。
ただそれが使いこなせているか、使いこなせていないかだけの話。
まあ兄さんは『失敗作』なわけだから私に敵うわけないのは当たり前だけど。
やっぱり兄さんは弱いから私が保護してあげないと駄目ね」

どうする？能力は通じない、接近は出来ない。
ダメージ覚悟で接近したところで有効打を与えられるか解らない。
だとすると、幻術しかないか。今までアキナは僕の幻術を見たことはない。
確実に騙し、キツイ一撃を喰らわせてやる。

「じゃあね、兄さん。大丈夫、気がついた時にはもう月の都だから」

アキナが銃をこちらに向けてくる。
・・・今だ!!幻術を発動。アキナの目には偽物の僕だけが見えるようにして、僕は気で身体を強化。
魔力と気の同時使用ではない。幻術との魔力ラインは切ってある。
時間が経てば消えるが、瞬間的な利用では問題ない。

「なっ偽物!?」

直撃するはずの魔力弾は幻術を通り過ぎていった。

「気がつくのが遅い!もらった!!」

加速したまま背後に回り込み、一撃を放つ!・・・はずだった。
背後に回ったはずの僕は何故かアキナの正面にいた。

「!?」

気で強化した僕の突きを、両手に持った銃で止めた!?

「危ない危ない、とっさに能力を発動してなかったら痛い目にあってたよ。
妹を殴ろうだなんて、そんな兄さんにはお仕置きが必要よね」

拳を払い、至近距離で銃を僕に向けるアキナ。

「しまt「ブラスト」！？」

茫然とした僕にできた、決して見せてはならない僅かな隙。

そこを狙って、凄まじい威力と密度をもった銃撃をその身に受けてしまった。

「私たちの能力はね、『先を操る程度の能力』。
兄さんの攻撃が向かう『先』は全て私の思うがままなの」

地に伏した僕に向かって、アキナがそう宣言した。

兄妹ゲンカ（後書き）

ついさっき蓬莱島編を全て書き上げました、じらいです。
全部で3話ぐらいですかね。一気に書き上げました。

アキナと大和の闘い、そして能力の正体が判明し、二人の闘いも激しさを増していくのか?戦闘描写は難しいので満足できないかもしれませんが、読んでやってください。

覚醒する者（前書き）

２月には１４日なんてありませんよね？

覚醒する者

「『先を操る程度の能力』ですって？」

「そうよ輝夜姫。貴方の能力に干渉できたのも、私の能力が貴方の能力を相殺したから」

「どおりで・・・」

「・・・じゃあ僕にも、それだけの力が眠っているってわけだ」

痛む身体に鞭を打ち、なんとか立ち上がろうとする。

「兄さん、立たないで。骨や内臓へのダメージが大きいわ。無茶したら死んでしまう」

知ったことか。僕はアキナを助けるって決めたんだ。無茶も無謀も、そんなことは何時ものことだ！

「意地があるんだ、男の子にはぁぁぁあ！！」

震える足に力を入れて突貫する。

もちろん策無しで突っ込むことはしない。両目に魔力を込めての接近戦を仕掛ける。

「だぁぁあ！！」

加速した勢いそのままに蹴り、拳を無数に放つ。が、アキナは両手の銃でそれを捌いていく。

「銃使いは接近戦が出来ないって？それは何世代も前の話よ！」

近接砲撃タイプとでもいうのだろうか。アキナの振るう銃も鋭さを持っている。
だけど、近接で負ければ僕に勝ち目はなくなる。

技の豊富さは僕の方が勝っているんだ、手数で勝負！

「双纏手（そうてんしゅ）！」

「無駄よ！！」

「単把（たんぱ）！！」

「遅い！！」

そんなのは本人が一番解っている！今までのは唯の時間稼ぎ、本命は孤塁を見つけること！

・・・見つけた！そのガードを破らせてもらう！！

「やぁ！！」

膝蹴りを防御の隙間に捻じ込み、防御に隙間をあける。そこに

「だあぁぁぁあ！！」

今まで鍛え上げた脚力を、重心のコントロールを使ってそのまま打点につぎ込んだ蹴りを放つ！

「グゥッ！！？？」

秘儀　孤墨抜き

「ガ、ガードをしているからこそ、意識が薄い場所がある。
そこに持てる力の全てをそそぎ込む修行をした・・・！」

これが、今の僕ができる最も威力の高い攻撃だ。
足腰を徹底的に鍛え上げた結果によって生まれた凄まじい威力を誇る蹴り。

倒れ込むアキナ。
頼む、立ってくれるなよ。これが決まらなかったら・・・

「た、確かに強力な蹴りだったわ。打点をずらさなければ負けてたかもしれない」

チクショウ、ダメージはあるようだけど立ち上ってくる。
打点がずらされたと言っても、かなりの威力のはずなのに・・・!?

「残念だったわね。今のが私を倒す最後のチャンスでしょうに。もう手加減はしないわよ!!」

「ぐっぅぅぅぅう!?」

凄まじいな密度の弾幕の中を必死に逃げていく。

「向かう先は我に仇名す者なり」

なんだ!?魔力弾が全部停止した!?まるで檻の中じゃないか、コレは!

「ブラスト」

さっきの物と違い、レーザーと化した二つの閃光。
幽香さんや僕が使うマスタースパークの様な力の濁流。

「クゥッ！？」

周囲を魔力弾に囲まれているせいで避けることはできない僕は、ただ必死に守りに徹するしかなかった。
だが絶対的な魔力量の差か、たいした抵抗もできずに光に包まれた。

大和と永琳が死闘を繰り広げている中、武天は新たに月からきた部隊を蹂躙していた。

「今時の月民は軟弱になってしまったものだ。あの頃に比べるとだいぶ劣る、平和ボケでもしたのか」

武天は月の住民の弱体化に呆れていた。
あの頃の、人妖大戦頃の彼らは強かった。武器に頼らず無手で戦う者が多かったあの時代。
彼らと比べると、この者たちは武器に頼りすぎる。武器の強さを、自分たちの強さだと勘違いしている彼らに落胆の遺を隠せなかった。

「なぜ、止めを刺さない・・・？」

「長生きをしていると、難しいことにチャレンジしたくなるのだよ。殺すことより、生かす方が難しいだろう？」

「このバケモノめ・・・」

「褒め言葉だな、それは」

武天にとって、彼らとの闘いなどただの暇つぶしでしかなかった。
それは今回の騒動も同じことだ。
なにも彼は、善意で輝夜の申し出を受けた訳ではない。

それは大和を鍛えたことに対しても同じことである。

ただ、長い時を生きる自分に刺激が欲しかっただけなのだ。
大和を弟子にし、いつか自分を殺せるくらい成長してくれれば面白いとも考えていた。
ただ、大和には才能がなく、彼の思惑は外れることになったのだが。
それでも結果的には暇が潰せたことはよかった。

「そろそろこの島も潮時か」

彼にとって重要なのは自分が楽しいか楽しくないか。
長命な彼は何時も自分を中心において物事が考えている。それはこれからも変わらないだろう。

目の前が霞む・・・。誰？そこにいるのは・・・？

「・・・と、ｙｍと！大和！！しっかりして！！」

「輝、夜・・・？なんで、・・・泣いてるの？」

何泣いてるんだよ、らしくない。なんか、体が冷たいな・・・。これは僕の血、か？

「さあ、兄さんを渡して貰おうか」

「・・・渡すもんか」

「は？」

「こいつは、渡さない！！」

「言っておくけど、貴方じゃ私の相手にならないわよ。
碌に戦闘訓練を受けたこともなく、頼みの能力は私にはきかない。
辞めておいたほうがいい」

「月は私が目的なんでしょ！？捉えなくていいわけ！？」

「今回の任務は八意永琳と蓬莱山輝夜をとらえること。
けど私には関係ない。兄さんがいれば他はいらない」

「させない！」

「じゃあ、そこで死んでろ！！」

放たれた魔力弾に、輝夜は迎撃の姿勢を見せるが、

「僕と1対1だって・・・言っただろ！！」

二人の間に入って弾幕を受け止める。
溜ったダメージは計り知れない。それでも負けられない、負けてやるわけにはいかない！

「・・・兄さんは弱いよ。沢山の人に利用されているってことに気がついてない哀れな人なんだ。
だから私が保護してあげるって言ってるのに、なんで反発するの？」

「僕はそんなに弱くない！保護してあげる！？それが一番人を見下しているんだよ！！
僕は地上で生きて、死ぬんだ！誰にも邪魔はさせない！！そして君も、君の幸せを掴むんだ！！」

「何よ、それ。私は今幸せなの。・・・どうしても一緒に来ないの？」

「そうだ！！」

「じゃあ仕方がないね。私と来ないって言うのなら、望み通りにここで殺してあげる！！」

もはや津波と化した弾幕が迫って来る。

「攻撃が向かう『先』に僕はいない！」

「なっ！！？？」

その弾幕は僕の周りを素通りしていった。

思ったとおりだ。僕が能力を使いこなせなかったのは、本当の自分を知らなかったため。

能力を知り、自分の置かれている状況を理解することができた今、僕は真の意味で能力持ちの人間になった。それを月の研究者は『成功作』と皮肉を込めてそう呼ぶのだろう。でも、この力は僕の『先』を貫くための力だ。誰の思惑とも関係ない、僕だけの力だ。

「今、僕は自分の能力を完全に掌握した。これで能力差は関係ない。勝負だアキナ！」

「能力を使いこなせただけで私と同等だなんて思われるのは心外だわ」

「だから見せてあげるよ。”静”の極みの技の一つ、真の制空圏を！」

覚醒する者（後書き）

非リア充なじらいです。モテる奴は爆発すればいいんだ、と昨日は呟きながら悪友たちと飲んでました。持つべきは彼女ではなく友ですねｗ

今回ついに大和君が覚醒しました。次話はずっと大和のターンです

兄妹ゲンカ決着（前書き）

感想もらえると作者は小躍りします

兄妹ゲンカ決着

八意永琳は天才である。それは自他共に認めていることであり、否定のしようがない事実である。
月に移住する前に起こった大戦で彼女が人間側に貢献した事は数知れず、当時の妖怪に最も恐れられた人間の一人でもある。

そんな彼女が産まれて初めて体験した挫折。
完璧であるが故に一度も経験したことのなかったたった一度の失敗は彼女に多大な影響を与えた。
理解できなかったのだろう、惨めだったのだろう。そして何より悔しかったのだろう。

彼女は自分の失敗を認められず、その結果多くの命を散らした。
生まれてきた被検体の解剖、より良い結果のためには犠牲はつきものである。
ただボタンを押せば生まれる命に、当時の彼女は何の感慨も浮かんでこなかった。

失敗、失敗、失敗。度重なる失敗に彼女は己の限界を悟るようになった。決して自分は完璧な存在ではないと。失意の底にいた彼女だったが、月の姫との出会いが彼女の心に再び火をつけた。正に神の啓示とでも言うのだろうか、ふとした時に姫の因子を混ぜた結果、実験は一応の成功を得た。

一度成功すれば後は調整するのみ。姫の世話をしながら実験をする毎日。
そんなある日、彼女は御上から計画の変更を指示された。そして彼

女がこの件に関わることは徐々にだが無くなっていった。計画が変更になり、うってかわって穏やかな日々を送る毎日。

どれくらい優しい時間が経ったのだろうか、彼女の耳にある噂が耳に入る。

彼女の造った人造人間が戯れに使われているということ。
彼女は噂を確かめるために計画の中心まで足を進めた。そこで起きていた事実に彼女は震えた。

運ばれてくる死体。生きたまま、泣き叫び、許しを哀願する子供を切り刻んでいく研究者たち。

姫との穏やかな日々を生きた彼女に、かつて自分が行っていた所業は正しく地獄であったと知った。

その時、解剖台の上の被検体と目が合った

――――――――絶対に許さない――――――――

実際に聞こえたわけではない。だが彼女にはそう聞こえた。
そして彼女は御上に訴え、計画は一応の終結をみせた。彼女はそう思っていた。

そして時を経て、彼女は再び自分の罪の形と出会う。

「なるほどな、隙ができるわけだ」

「完全にしてやられたわ。やっぱり完全な存在など有りはしないわね」

「ふ、俺以外の者を数分で殺してよく言う」

そして決意する。姫と彼を助けるためになら悪魔にでも魂を渡すと。

「旧知の仲だから言っておくわ、敗北を認めなさい」

「・・・私も武人だ、死に場所くらい心得ている」

「そう、じゃあね」

故に彼女は旧知の者をも手に掛ける。それが新たな罪を生むことを知りながら。

静の技の極みの一つに『流水制空圏』と呼ばれるものがある。
己のパーソナルスペースに入った物を叩き落とす技が制空圏。その先にある一つの極み。

流水制空圏とは、敵の力が払いきれないほど強力で目で追えない程のスピードだった時、
薄皮一枚まで制空圏を絞り込み敵の動きを”流れ”でとらえ、軌道を予測して最小限の動きでかわす。

「攻撃が・・・当たらない！？」

そして大和が発動している物がその”第一段階”。アキナの目を見て動きを読み、寸での所で回避する。
振るわれる銃、繰り出される足技。そのどれもが大和を捉えることはなく、空を切っていた。

「やるわね。じゃあこれはどうかしら！？」

距離をとり、大和に銃を向ける。その銃口には先ほどと同じく膨大な魔力が見てとれた。

「ブラストォ！！」

迫る弾幕。撃った本人が微笑を浮かべる程の完成度を誇る技。

その避ける隙間などもはや存在しないかに見える弾幕の中を、大和はまるで散歩をするように歩いていた。

「・・・ッツ！？」

己の必殺を簡単に避けられたアキナは言葉を失っていた。

「ッ向かう先は我に仇為す者なり！！」

再び、今度は能力を使った攻撃。

しかし既に大和も同じ能力を掌握しているため、結果は先ほどと同じこととなった。

「なんでよ・・・私の方が強いのに、私は『成功作』なのに！！」

弾幕が通用しないからか、再び接近戦をしかけるアキナ。そこに大和は”第二段階”を発動させる。
それは相手の動きを、心の流れを読み、相手と一つになること。大和はアキナと全く同じ動きをしていた。
そして、

「君の目を見て君の側になって考え、その流れと一つになった。
こんどは・・・僕の流れに乗ってもらう！！」

最終段階は己の流れに相手を乗せること。
大和の流れに乗ってしまったアキナは、まるで吸い込まれるように大和に技をかけられていく。

ここで大和が基礎修行を徹底的に行った成果が発揮された。
大和が繰り出す技は数は多けれど、それほど難易度の高いものではない。

ただ錬度が以上に高く、隙もない上に威力も絶大だった。一方的に攻撃を受けるアキナ。
たった一つの技で勝負の行方は解らなくなっていた。

こうなると堪らないのはアキナである。格下だと思っていた兄に敗北しようとしているのだから。

「幸せになれだって・・・？兄さんに、兄さんに私の何が解る！！」

もはや余裕は消え、感情を露わにするアキナ。もはや自分の思いをぶつけずにはいられなかった。

「・・・わかるさ、痛いほどに解る。君は、寂しかったんだ。　確かに君の周りには沢山の人がいた。　でも上辺ばかりの付き合いで、君を理解してくれる人なんていない。そう思って君は自分の中に閉じこもってしまったんだ。

だから君は僕を求めた。

同じ存在である僕ならば、君は自分をこの寂しさから解放してくれるって思ったんだ。

すこし外を見れば、君を理解してくれる人達がいるというのに。

だから僕は君に教えなければならない。

相手を受け入れる、ただそれだけでいい。人はこんなにも単純だってことを」

流水制空圏とは相手の心の流れを読む技でもある。それは時に相対する者の心の奥底までをも読む。

大和がアキナの心から読み取った物は孤独。

自分が度重なる失敗の上に立つ者としてのプライドゆえ、周りを拒否してきたということ。

計画が憎くて仕方がないのに、『成功作』として生まれた自分に、

自分が一番固執していたということ。

「だったら何よ、私を理解してどうしてくれるって言うのよ」

「だから僕は、君を救うよ。君を悲しめるもの全てから君を守ってみせる」

おそらく最後の打ち合いになるだろう、二人はお互いに構えをとる。

二人同時に駆け出し、だが先に仕掛けたのはアキナ。

振われた銃は何処から力を振り絞ったのか、今までで一番鋭いものであった。

対する大和はそれを左手で受け止める。鈍い音と共に骨が砕ける感触がする。

だが負けてやるわけにはいかない。激痛を無視して、右手を振りかぶる。そして・・・

「君を苦しめる月は、僕が砕いてやる!!」

――――――――”砕月”――――――――

大和が放った突きは、特殊な呼吸法で横隔膜を振動させ、身体を一つの弾丸とする技。名を雷声という。

だが大和は月の邪悪そのものを砕かん勢いで放った故に、砕月と名付けたのだ。

練り込まれた気で強化された砕月は正に弾丸。それはもはや人が耐えきれるものではなかった。

ゆっくりと地に倒れ込むアキナを慌てて支える大和。

「僕の・・・勝ちだ」

腕の中で眠るアキナの寝顔は兄に抱きしめられたからなのか、安らかな顔をしていた。

兄妹ゲンカ決着（後書き）

どうせ今日は投稿できないんだからやっちまえ！どうせ痛い話なんだから勢いだけが勝負だろゴルァ！！
みたいな感じで投稿しました。次は蓬莱島編エピローグです。

蓬莱島編エピローグ（前書き）

どうせならエピローグまで出しちまえ

蓬莱島編エピローグ

「まったく、あんたホントに無茶しすぎよ。どうすんのよこの左腕」

「あはは～、どうしましょうか～」

まったく、後のことなんか何にも考えずに真正面からぶつかっちゃって・・・。

「それにしてもまあ、あんたこの子にプロポーズでもするつもり？守ってやるなんて」

「へ？何のこと？」

こ、この天然め！女の子はそう言われたら勘違いするわよ、この馬鹿！

「う、う～ん」

「お、アキナ気がついた？」

「兄さん！？・・・そうだ、私負けたんだね」

見れば見るほど大和そっくりね。しかも女の子になった大和か・・・

イイ。
落ち込む姿も中々可愛らしい、家で飼いたくなっちゃいそう。

「アキナはこれからどうするの？」

「私は・・・月に帰るよ。もう一度、やり直してみる。
難しいだろうけど、兄さんの言った通り頑張ってみる」

「ん。えらいぞアキナ。僕も応援する」

「兄さ～～～～ん！！」

とか言って大和に抱きつく馬鹿２号。前言撤回、やっぱコイツ要らない。

「いつまでくっついてんのよ！は・な・れ・ろ～～～！！」

「嫉妬は醜いですよ輝夜姫。底が知れるわ」

「なんですって～～～～！！？？」

ムカつくところまでそっくりねこの兄妹は！？

そんなふざけた雰囲気をぶち壊すような轟音が一つ。

「なんだ!?」

即座に警戒態勢に入る3人。怪我をしているとはいえ、そこは武人（一人除く）。
この切り替えはさすがと言うべきか。

爆煙の中から出てきた影は2つ。

「師匠!?」「隊長!?」

「あら、二人とも無事みたいね」「副長！無事だったか!!」

師匠と、おそらく月の隊長であろう。
二人の闘いはまだ終わっていなかったようで、こっちまで来たみたいだ。

隊長さんは傷だらけ、傷の無い場所を探すほうが難しいくらい負傷しているけど、師匠は服が破れているだけだ。

「あんた何処見てんのよ！」

「ひでぶ！？」

服が破けて適度にエロイ師匠を見てたら輝夜に吹っ飛ばされた。

あの、輝夜さん。僕一応ケガ人なんですけど・・・？

「副長、撤退するぞ！！」「アイアイサ～」

吹っ飛ばされている間に隊長さんがアキナを抱きかかえて距離をとっていた。

「兄さ～～ん、私まだ諦めてないから～～。また迎えに来るね～～～！！」

なんて言葉を残し、二人は僕たちの前から去って行った。

「良かったの永琳？あの二人逃がしちゃって」

「かまわないわ。それよりも・・・」

「ええ・・・私たちの勝ちよ！！」

当初の予定通り、月の部隊は壊滅し残った人も撤退した。これで一応の危険は去ったのだ。

「あの・・・師匠、アキナから全て聞きました」

一息ついた後、僕はこう切り出した
僕の一言で一気に冷えていく場の空気。

「ちょっと大和、いきなりそれは・・・」

「いいのよ輝夜。・・・ごめんなさい、あなたをｄ「ありがとうございます」・・・え？」

「僕がこうやって此処にいられるのは、師匠が僕を生んでくれたからです。
確かに、それまで『僕達』はただの実験体に過ぎなかったかもしれません。
でも『僕』は、あなたに大変お世話になりました。この御恩を忘れて怒るなんてできません。
貴方のことだから、罪の意識に苛まれているのでしょう？だから、皆を代表して言っておきます」

――――――貴方を許すよ、永琳――――――

「あ・・・・・・」

「って言っても、僕の主観みたいな感じで「う、うぅ、ぐすっ」はい！？」

ちょっ！？師匠！？何で泣いてんの！？

「や～ま～と～、私の永琳を泣かすなんていい度胸してるじゃな～い？」

「ちょっ、僕はそんなつもりじゃ！？」

「う、ヒック・・・あり、がとう。ありがとう・・・大和」

「師匠・・・」

泣いている師匠の腕の中に包まれて、できるだけ尊敬する師の泣き顔を見ないようにする。

だって僕は、不敵で無敵な師匠が好きだから。

騒ぎから数日、師匠の不思議な薬を飲んで怪我が癒えたある日。

「この島を消す？」

「うむ。月の民にばれてしまったのでな、仕方のないことだ」

「だから、私たちも此処を出ることになるわ」

う～む、外の世界か。久しぶりだなぁ。これでやっと大陸に向かえるわけだ。

「大和、私に付いてきなさい！・・・って言いたいけれど、貴方は自分の夢を追うといいわ」

「輝夜（そういったら全力で逃げるつもりだったよ）・・ありがとう。師父や輝夜たちはどうするの？」

「私たちはもう一度日の本に行くわ。そこで安住の地を探すの」

「私はそうだな・・・久しぶりの一人旅でもするか」

「魔法使いになったら私たちを探しにいらっしゃい。最高のもてなしをしてあげる」

やった！その時までに師匠を越えて見せますよ？

「じゃあね、大和。風邪には注意するのよ」

最初から最後まですいませんね師匠。

「大和・・・目を瞑りなさい」

「殴られたくないから嫌です」

経験則からして、殴られることが解ってます。経験則なめんな。

「本気で殴るわよ！？いいから瞑る！！」

おお怖！？いつもの３割増しに怖いっす。

目をつぶって衝撃に耐える準備をしていると、唇に柔らかい感触。

「は？」

「これは貸しよ。ちゃんと返しにきなさいよね。永琳！行くわよ！！」

驚きの余り、茫然とする僕を尻目に二人は去って行った。

「ふむ、若いことはいいことだ」

「師父、こういう時に弟子はどうするべきなんでせう？」

「ふむ、女心の修行もすべきだったかもしれないな。ほら、これは私からの餞別だ。
君が魔法使いになれば必ず役に立つ物だから大事にしなさい」

渡されたものは鉄が錆びたような塊。なんだこれ？

「はあ、ありがとうございます」

貰えるものは貰っておく。役に立つと言われれば尚更ね。

「ではもう行け。大陸はあちらだ。飛んでいけばすぐに着く」

「・・・今までお世話になりました。この御恩は一生忘れません」

「当然だ」

最後までストレートな人だ。そんな師父だからこそ、僕は最後までついて行けた。

さようなら、師父。また会いましょう。

若干涙ぐみながら蓬莱島を後にする。
僕はここで、またも掛け替えのない絆を手に入れることができた。
輝夜にアキナ、師匠に師父。

大切な人達との出会いと別れは、僕に様々な影響を与えた。

「大切なものが一気に増えた。皆の為にも、僕は僕の夢を叶えに行こう！」

そして物語の舞台は大陸へと移る。

蓬莱島編　完

蓬莱島編エピローグ（後書き）

最早テンション高すぎて何がなんだかわかんね。ここまで来たらエピローグも出しちまえ、おまェは早さだけが取り柄だろがァ！

という強迫観念にかられたのでもう出しました。もうやめて、話のストックは0よ！というわけで、しばらく執筆期間をとります。自然消滅しないようにはしますが、今まで通りの投稿は無理だと思うので注意してください。とか言いつつ適度に吐き出しますけど

感想とかもらえるとモチベーションも高まりますので、送ってもらえるとうれしいです。対応はしますので。それじゃまた

閑話～その頃の皆さんＰａｒｔ２～（前書き）

今までの閑話より更に短いです。なのであと一話更新します

閑話～その頃の皆さんＰａｒｔ２～

～鬼の場合～

「萃香・・・」

「・・・・・・」

「大丈夫だ、大和なら絶対に大丈夫だよ。あんたの息子なんだ、あんたが信じないでどうするんだよ」

「大和が出て行ってからもう何年経ったと思ってるんだい・・・人の寿命なら、大和も・・・」

「多分今頃は魔法使いになって修行中なんだよ！あの子は修行が好きだから！！」

「そう、なのかな？うん・・・そうだよね。大和は必ず帰って来る。約束したもんね」

（こうは言ったけど、私はともかくお前の母はもう待てないぞ。せめてどうしているかでも解れば・・・。八雲にでも探してもらうか）

大和の行方が解らない鬼たちは、まるでお通夜のように静けさの中にいた。

～鬼神と隙間の場合～

「では我々も間もなくそちらへ移住する。受け入れ準備はできておろうな？」

「もちろんですわ。山に住む鬼・天狗・河童、その他もろもろの受け入れは完璧です」

「では近いうちに行かせてもらう」

「お待ちしております」

「・・・ふう、ようやく一段落ね」

「お疲れ様です紫様。お茶をどうぞ」

「ありがとう藍。まったく、鬼神を前にすると流石に私でも精神的にクルわ」

「心中察します」

（けどこれで前準備は完成、流れには乗った。
後は方向を修正していくだけでいい。さて、久しぶりに・・・）

「寝るわ。後よろしく」

「え、ちょっ紫様！？」

起きたら久しぶりにあの子の様子でも探してみましょうか。
・・・そういえば、あの子って今何処にいるのかしら？

～天狗と河童の場合～

「文はアレだね、大和が心配で取り乱したりはしないね」

「何よ急に。・・・心配はしているわよ？」

「へ～。てっきりもう忘れちゃったかと」

「そんなわけないじゃない。私はね、信じているの」

「信じている？」

「そうよ。大和は今まで嘘を吐いても、大事な時には絶対に嘘は吐

かなかったでしょ？
いつも実現させてきた。だから今回も大丈夫。それだけで私は待っていられる」

「へ～。文もいろいろと考えてるんだね」

はあ、罪な奴だよ大和は。
でももう出て行ってから随分経つんだ。早く帰ってきなよ、私も文も待っているからさ。

～焼き鳥・花屋の場合～

「はぁ、私は本当に強くなっているのか？」

「ふぅ、最近暇ね。何かないかしら？」

「「あ？」」

「久しぶりじゃねえかフラワーマスター。お花弄りは辞めたのかよ？」
「あら、誰かと思えばあの時の雑魚じゃない。生きてたの」

「「あ〝あ〝!?」」

「上等じゃねえか。せっかくだし、どれだけこの炎が強くなったか試させてもらおうか」

「ふう。これだから身の程しらずは・・・」

プチン#

このあと何十年か、出会うごとにお互いストレス発散の為に衝突するのであった。

閑話～その頃の皆さんＰａｒｔ２～（後書き）

大和が旅に出て（人としては）かなりの時間が経ちました。蓬莱山での闘いが終わった頃だと思ってください

紅の武術家（前書き）

大陸編スタート

紅の武術家

「ふう、やっぱり空より地面の方が好きだなぁ」

島を出て少し飛んだあと、僕は大陸の街のはずれに降り立った。

まず僕がやるべきことは魔法使いについての情報収集。

この幻術の魔道書がこの地域のものかも調べないといけないし。

まあ、こんな大きな街にきて最初にやることは決まっているんだけどね。

「腹が減っては戦はできぬ」

暴れるつもりはないけどさ。

「おねえさんおかわりー」

てなわけで、優雅にお食事タイムを過ごしています。
街の人イチオシのこの料理店。評判以上に美味しいです！

「おかわり追加でーす」

蓬莱島での食事も美味しかったけど、あれは殆ど人の手が加えられてなかったからね。
こうやって人が一生懸命作った料理はまた違う味がする。
そ・れ・に！蓬莱島では僕が殆ど食材集めしてたし！！サバイバルの修行とか言ってたけど、あの師匠ズは絶対めんどかっただけに違いない。輝夜？期待する方がどうかしてます。

「沢山食べますね～、大丈夫なんですか？」

「らいじょうふ、らいじょうふ。まらまらはいりまふ」

「あ、そうじゃなくてですね、お金の方なんですけど・・・」

「・・・・・・」

おかね、オカネ、お金！？代金と言うなの取り立てか！？

しまった、本気で忘れてた。何時もの感覚でお金という概念をどこ

かに投げ捨てていたみたいだ。
しかし一体どうする？今の僕は全くの文無し、いわば無銭飲食者だ。
だけどできればこの街で情報収集をしたい（大きな街だし）から事を大きくしたくない。
ならば正直に、僕お金持ってないんです、って言うか？いやいやいや、最悪この街の責任者につき出されてしまうだろう。

ならば、僕がとるべき道はただ一つ。

ゆっくり、俯きながら無言で立ち上がる。そして、

「ごめんなさーーーーい！！」

ＤＡＳＳＨＵ！あの鴉天狗も驚きのスタートダッシュで駆け出す。
うん！情報収集は次の街でいいや★

ｓｉｄｅ店員

「ごめんなさーーーーい！！」

料理をたらふく食べていた少年の懐が気になった私は彼に尋ねてみたところ、どうやらその予感は当たっていたらしく、少年はいっそ清々しいまでの食い逃げっぷりを見せた。

「いやはや、まさかあの歳の子供が私と同じコトをしでかすとは」

あの身のこなし、正しく武人のもの。いったい何処であれほどの技術を身に付けたのか。

妖怪ならばまだ解る。だがあの少年は間違いなく人間だった。ああいうのを天の才とでも言うのだろうか？

「足も速い。多くの功夫を積んでいるんですね」

「何のん気に見てやがる紅！はやくあのクソガキを捕まえてきやがれ！！」

「はいはい、解りましたよ店長」

「・・・期間延ばすぞ」

「逝ってきます！！」

少し、興味が湧いた。

「待ちなさーーーい！！」

「ごめんなさーーーーーい！！」

僕に代金を請求した店員さんが必死の形相で追いかけてくる。

「貴方が逃げたら、私のタダ働きが増えるんです！おとなしく捕まってください！！」

「ごめんなさーーーーーい！！」

知ったことかー！？捕まったらえらい目にあうじゃないか！！
お姉さんに事情があるように僕にも事情があるのです！だから許してー！？

「むむ、こうなったら・・・はっ！！」

「なにぃ！？」

だいぶ後ろから追いかけていたはずなのに、跳躍でもしたのか僕を通り越して前に降り立った。

「逃がしませんよ！」

「チィ！！」

セリフが完全に悪者ですね僕。・・・僕が悪いんじゃない！世界が悪いんだ！！

「見たところ中々の実力があるようですが、この紅美鈴を抜けるとは思わないことです」

ピシィッ、と構えをとってこちらに威嚇する店員さん。一気に張り詰める場の空気。

・・・すんごいできるねこの人。対峙して初めて解ったけど、僕如きでどうにかできる相手じゃない、か？

「それはどうかな？隙だらけだよ」

正攻法ならばね。だったらお得意の搦め手を使えばいい。幻術を使い姿を眩ませ、逃走を続ける。貴方の前にいる僕は虚像です。

「な！？・・・逃げるのですか！？貴方にも師がいるはずです！武人が勝負から逃げるなど、師が泣きますよ！？」

「ッツ！？」

そう言われては、仕方がない。僕はその場に止まり、振り返って大声で言う。

「あの人達ならば、むしろ笑う！！」

「隙ありぃ！！」

「プゲラッ！？」

そう宣言した所を顔面に蹴を入れられてノックアウトしたのでした。

「おう新入り、この料理を二番テーブルに持って行け」「早く注文とってこんかい！」「皿洗えや、坊主」

見事に捕まった僕ですが、店長の計らいによってこの店で無料奉仕して食代を払うことだけで、つきだされるなんてことにはならなかった。

「坊主、お前にもいろいろあるんだろうが頑張っていけや。
ここで働く限り、お前さんは俺らの家族みてえなもんだからよ」

「店長さん・・・」

「タダで働く家畜みてえなもんだ。そう感謝するなよ？」

「・・・酷いや」

なーんて事があって僕今日からここに住み込みで働くことになりました。

「はぁ、どうしてこんなことに・・・」

「ほら、動かないとまた叱られますよ？」

「わかってるよ美鈴さん」

「紅か美鈴でいいですよ。さん、って呼ばれるのはなんだか恥ずかしいので」

「変な人ですね、貴方」

この人は紅美鈴。僕に顔面キックをお見舞いした店員さん。実はこの人、以外に僕と共通点が多い。

「心外ですね、大和さんに言われるのは」

「同じことした人には言われたくないですよ」

まず武術を扱うこと。おそらく達人（僕は達人じゃないデス）。
そして僕と同じように無銭飲食をはたらいて此処で使われています。

「それを言われるとつらいですね・・・」

「まったくです。あと、僕も大和でいいですよ」

「いや～、ここで長いこと働いてたらこの言葉遣いが当たり前になってしまって」

「どんだけ食べたんですか・・・」

そして驚くことに妖怪である。なのだが、この店で働く人たちはまったく気にした様子がない。知らないのかな?と思ってそれとなく聞いてみたところ、『飯を食うのに人や妖怪は関係ない！むしろ紅が入ってから客が増えやがった』と言うのは店長の言。うん、いいよねこういう雰囲気。

「二人とも何サボってやがる！期間延ばすぞ！！」

「「すいません！！」」

まあちょっとくらいなら、油売っててもいいよね。

紅の武術家（後書き）

頑張った、超短いけど頑張ったじらいです。
なんとか一話更新。でもストックはない？これ重要

というわけで大陸編突入です。日本を離れてついにやって来ましたユーラシア。
自分でも書くのが楽しくなってきますよ、テンションＭＡＸです。
何時までもつか解りませんけどｗ

大陸編予告（前書き）

※注意！！

予告なので、実際とは異なる場合があります！ネタバレを避けたい人は戻ることを勧めます！そしてなにより短いです！！いいですか？

大陸編予告

人の力とは、妖怪を凌駕するのか？

「それで、伊吹大和さんはその後どうなったんですか？」

私も話でしか聞いてないから、詳しいことは知らない。本人に聞くのが一番だぞ？

「少しでも聞いておきたいのです。貴方の知っていることを私に話してくれませんか？」

・・・まあいいだろ、確かあいつは大陸で――――――――――――

――

「熱い」

「それ言うともっと熱くなりますよー」

灼熱の砂漠を越えて一路大陸の西を目指す。大陸を横断する商隊の護衛としてついていく二人

「ここが、大陸の果ての都市・・・」

故郷ではあまり見ることのなかった新しい人間の力『科学』
人と妖怪の存在が壊れ始めた瞬間

「どうも、不思議なお二人さん。いったい此処になんの用や？」

始まりは背中に紋章を背負う人物との出会い

「クックック、貴様らの様な愛すべき馬鹿が未だに存在しているとはな。面白い、面白いぞ・・・」

初めて知った人間と妖怪の絶対的な差。大和は己の限界を知る

「ここは・・・地獄だ」

目の当たりにする終わったはずの計画

「紳士ですね、貴方は」

「紳士ではない。騎士（ナイト）なのだ」

後の自分に大きな影響を残す騎士団との共闘

「これが・・・魔法使い・・・」

――――――――――――――――――――そして少年は、人を超える

大陸編予告（後書き）

やっちゃった、じらいです。何こんなの投稿してんだよ！！という人にはごめんなさい。本編ではございません。ただ一回予告編ってやってるもんでもう一回やりたかっただけですｗ

次回はちゃんと本編を投稿します。早くて明日・・・いや、明日に投稿します！！

そんな日常（前書き）

感想はいつでも受け付けてます

そんな日常

「3番オーダー入りました。餃子2、炒飯2、野菜炒め1です」「8番テーブル上がり、持ってってくれ」

飛び交う命令、怒涛の如く押し寄せる客。

調理場では腕に自信のある料理人が腕を奮い、連続する注文を次々に捌いていく。

街1番の飯屋の昼時は正に戦場であった。

それはホールで働く僕にも等しく与えられた戦場。

「坊主、これ持ってってくれ。4番な」

「わかりました！」

ここに住み込みで働き始めて早3ヶ月。

初めての頃は右も左も解らなかったけど今となってはそれも懐かしく感じる。

なんで調理場で働いていないのかは聞かないでね、長くなるから。

・・・どうしても聞きたい？なら教えてあげる。止められたんだよ店長に。店が潰れるって言われて。

「美鈴、5番オーダー呼んでるよ！」

「手が離せないんで大和さんお願いします」

「美鈴希望だってー」

美鈴もホールで働く貴重な戦力である。何ヶ月も働いているからか、動きが無駄に洗礼されている。
それにこの飯屋の看板娘的な働きもしているようで、美鈴目当ての客も多く、そんな人達には僕がオーダーに言っても白い目で見られるだけであって。

とは言っても、僕もこの飯屋の看板息子としての扱いを何故か受けている。
それはこの店だけでなく、この街全体でのことである。
前に何回か僕みたいに食い逃げを図る愚か者がいて、それを公衆の面前でボコボコにノシてやったのが始まりだ。あの時は照れ臭かったよ、まるでヒーローの様に扱うんだから。

「すいませーん」

「あ、今行きますんで少々お待ちください」

まあそんなこんなで僕も立派に飯屋の一員として働いてます。今までこんなに沢山の人と触れ合うことがなかったからか、毎日が新鮮で楽しい日々が続いている。

「ねぇ大和君、私の娘とお見合いしない？
大和君みたいな立派な子が息子になってくれたらお義母さんうれしいわぁ」

「あはは～、僕が１５になったら考えますね～」

時々こんな客もいて対応に困る。美鈴や店長曰く、優良物件は即買うのがしきたりだそうで。
・・・いや、嬉しいんですけど、その相手が僕より１０以上も年上なら引きますよ。

「坊主、これ１１番だ」

遊んでる暇もなく次の指示が来るけれど、お客さんを蔑ろにするわけにもいかなくて判断に困るところです。

こうやって飯屋で働いている僕だけど、何もしていないわけではない。
買い出しとか休日とかに街を散策して情報を集めている。

そしてようやく魔法使いの手掛かりを見つけたんだ。

なんでもこの大陸の遙か西にある国では魔法が盛んであり、それを専門に研究する機関もあるらしい。
そして僕の持っていた魔道書だけど、確実にそこから流れてきた物

だって。街で見かけた商隊の人に聞いたところ、同じ商隊仲間がいろいろと買っていた時にそれも手に入れたんだろう、との話だ。

つまり、魔法使いになるためには大陸の西を目指せばいいってことが解った。

でもその道のりはとても険しく、砂漠越えでは死者もでるらしい。

まあ鍛え上げた肉体を持つ僕には関係ないことですけどね、えっへん！

もちろん武術の修行も欠かしてはいない。

ある日に一人基礎鍛錬を終えて技の練習に入ろうとしたとき、美鈴に模擬戦を掛けられた。

結果は敗北だったけど、その後から二人でずっと組み手をしたり技の開発なんかをしている。

驚きだったのが、美鈴が僕のことを天才だと思っていたことだ。

何やら、その年でこの力量は正しく武の為に産まれてきた子だ！とかなんとか。

あの時は思わず涙がでたよ。勘違いとはいえ、僕のことを天才だと言ってくれた美鈴に対して。

なんで僕がこんなに武術ができるかを赤裸々に語ると、美鈴は黙って僕の方を叩いてくれた。

あの時の美鈴の向ける哀れんだ顔は忘れられない。

「注文いいですかー？」

あと数ヶ月で代金も全て支払うことができる。そうなれば後は西に向かい、魔法使いになるのだ。

「坊主！客待たせてんじゃねえ！！」

「す、すいません只今！！」

それまではこの飯屋で馬車馬の如く働かされる毎日が続くんだけど、それも悪くないや。

なんといっても、楽しいからね。

そんな日常（後書き）

戦闘よりもほのぼのとした日常を書く方が楽しいじらいです。宣言通り更新出来てほっとしてますw

大陸編の予告通りにいけたらいいんですけど、予定は未定ですw
それほど期待は・・・するわけないですよね？いやホントに

西へ行こう（前書き）

なんかグダグダです

西へ行こう

飯屋で働いて三ヶ月が過ぎた。今日の仕事を終えたら僕はお役御免となる。
少し寂しい気がするのはそれだけここが気に入ったわけで。

今日が最後の仕事ということで、店員からは今まで以上に扱き使われています。
皆さんなりの愛情表現ですよ、とは美鈴の言だ。

その美鈴も今日が最後の仕事らしく、追っかけが何時も以上に来ていて店は開店満席状態。僕だけならともかく、美鈴も辞めるとあってか客の中には涙する人や告白する人、果てには踏まれたい人など可笑しな人まで出て来て混沌としています。

「「「「紅さん！好きです踏んでください！！」」」」

「無理です。お願いですから離れてください！」

ほら、また特殊な人が群れをなして店にやってきた。何て言うかもう、皆さん必死ですね。目が血走っているし、美鈴ほとんど泣き顔になってきてるし。

「「「「ああ！紅さんのその顔も愛らしい！！」」」」

これが輝夜の言っていた馬鹿な男達って言うんだろうね。こんな相手に迫られたら、輝夜が引いたって言うのもよく解る。と言いますか、同じ男として逆に尊敬してしまいそうだ。欲望に忠実なところにだよ？決して変態的って意味の尊敬じゃないよ？

「ねぇ大和君、家の娘なんだけど・・・」

人のこと言ってる場合じゃない！？

「「今日までありがとうございました」」

二人、飯屋で働く人たち全員に頭を下げる。経緯はともかく、この店で働けて嬉しかったし楽しかった。

変な人達も大勢いたけど悪い人ではなかったし、忙しい毎日なだけに飽きることはない日々を送れた。

「紅さん、大和君お疲れ様」「飯屋の看板が一気に二枚もなくなるなんて・・・」「寂しくなりますねー」「紅さん！結婚してください！！」

お店の人達も想い想いの言葉を送ってくれる。約一名何かに侵されている人がいるみたいだけど、それも含めて飯屋で働いた仲間だ。

「紅に坊主、今までの給金・・・ほどじゃないが、俺たちの気持ちとしてこの金を受け取ってくれ」

そう言って店長さんはお金の詰まった袋を僕達に渡してきた。なんでお金を？

「店長！？この量は気持ちってものじゃないですよ！？」

「それに僕達、無銭飲食の代わりに働いたんですよ？これじゃ今までの働きが無意味になりますよ！」

袋はパンパンすぎて破けてしまいそうに膨らんでいる。明らかに渡しすぎだ、これじゃあ申し訳なさが余計に・・・。

「いいんだよ。それにな、これは感謝の気持ちだ。
お前さんたちのおかげで店も前以上に繁盛するようになった。そ

れくらい直に元取れるから心配すんな。何よりお前らみたいな大飯喰らいが金払って食べようと思ったらそれ位は必要だろうが！」

違いない！！と笑う皆に僕と美鈴は返す言葉を無くして一緒に笑っていた。ありがとう店長さん。

「これから大和さんはどうするんですか？」

「前にも言った通り、大陸の西を目指して旅をするつもりです」

飯屋から出て街を二人で歩いていると、美鈴がこれからどうするのかを聞いてきた。前からこういう話はしていたんだけど、晴れて自由の身になったからか、改めて聞いてきた。

「魔法使いになって早く帰らないと、母さんたち心配してるだろうしなぁ」

蓬莱島でどれだけの時間を過ごしたのかは解らないけど、とりあえず長い間閉ざされた空間の中に居たのは確かなことで。そのせいで自分が今何歳かもわからない。一応外見は変わってないから１０歳でいいやって思っているけど・・・。

「そのことなんですけどね。私もその旅にお供していいですか？」

「え？別にいいけどなんでまた急に？」

「私自身まだ修行中なんですよ。今まではこの地域を中心に活動してましたけど、環境を変えるのもいい　かなと思って。それに私も西に行ってみたいですし」

僕としても旅には道連れがいる方が楽しいし心強い。
美鈴自身がそう言ってくれるのならば凄くありがたいし、逆にこっちからお願いしたいくらいだ。
それにしても、美鈴ってまだ強くなるつもりなんだね。今でも十分強いと思うけど・・・。こういう向上心を忘れたらダメなんだろうね。うん、僕ももっと強くなろう。強くなって、いつかは母さんたちを守れるほどの強さを手に入れるって決めたじゃないか。

「じゃあ美鈴、僕と一緒に旅をしよう！もっと強くなろう！」

「はい！お願いします！」

「こちらこそ！！」

頼れる人と一緒に居られるということは、心強い。

「ところで大和さん、西がどっちかとか解ってます？」

解らないです。とりあえず太陽の動きをみて何となくで行けるって思ってたから・・・。

「西に行くには険しい道中があって、砂漠越えもしなければならないですし。
準備とかももちろんしてますよね？」

砂漠を越えるのに準備っているの？たかが砂如きに準備っているの？

「・・・もしかして、なんの準備もしてなかったり？」

「その通り！！」

そう言うと美鈴は呆気にとられたようだった。ポカーンと口を開けてこっちを見ている。もしもーし、どうしたんですかー？

「大和さん、あなた旅を舐めてます。準備やアテのない旅なんて自殺と変わりません！

それに、道を知らずにどうやって行くつもりだったんですか！？せめて最低限の準備というものをです　ね・・・」

いきなり旅とは何か？という美鈴先生の授業が始まりました。

・・・いろいろと長いのでとりあえず準備に取り掛かるらしいです。

「砂漠越えには専用の装備が必要です」

「装備って・・・。そんなに過酷なの？」

そんなに準備に意気込む必要あるかなぁ。

所詮は砂の土地でしょ？あと、昼は暑くて夜は寒い、たったそれだけのことなんでしょ？

「私も旅をする商隊に聞いた話ですけど、正に命がけらしいですよ」

「ホントかなぁ・・・」

「むぅ、そこまで言うのなら買い物は商隊の人に話を聞いてからにしましょう」

「じゃあそうしようか」

「坊主、お前さんは甘いぜ。シルクロードっていうのは正に旅人殺し。

それは商隊の俺たちにも言えることだ。それに脅威はそれだけじゃあない。

道中妖怪に襲われることもある。その妖怪に売り物ばかりか命まで取られる奴までいるんだ。

護衛は付いているんだけどな。まあ今言った以上に旅ってのは危険と隣合わせだ。そんな考えだったら止めといた方が身の為だぜ」

「ほら大和さん、私の言った通りじゃないですか」

むぅ。さすがに何回も西に行っている人の話を無視することはできないね。

でもだったらどうしようかな？

道も知らない、砂漠越えの基本も知らないんじゃ危ないし・・・。

妖怪？多分大丈夫だと思うよ、師匠クラスじゃない限り。そう思わないとやっていけないよ。

「今から私たち西に向かうんですけど、よければ貴方達に付いて行かせてもらっていいですか？」

なんの相談もなくそう切り出した美鈴。

「ちょっと美鈴、何言ってるの！？」

小声で美鈴に聞くと、なにやら、私イイコト考え付きました！って感じのイイ笑顔を向けられました。

「考えてみてください。私たちはどうやって行くかすらも知らないんですよ？

だったらこの人達と一緒に行ったほうが遥かに楽だし安全そうじゃないですか。

それとも砂漠で野垂れ死にますか？」

「う・・・確かに」

「だったらここは私に任せてください。悪いようにはしませんから」

「よろしくお願いします」

「・・・連れていくって言ったって、お前さんたちが何かの役に立つとは思えないし、逆に足を引っ張りそ　うだからこちらとしては勘弁願いたいんだが」

僕達の相談が終わるのを見計らってか、そう拒否する旅商人。

「こう見えて、私もこの子も武術をやっています。そこんじょそこらの妖怪には遅れをとりませんよ。
　聞けば道中妖怪が出るとか。そこで提案です。貴方は私たちを西に連れていく、私たちは貴方の商隊を守る。端的に言いますと、私たちを護衛にしませんか？」

おお！確かにいい案かも！美鈴偉いね！！

「・・・いいだろう。だが試させてもらう。おい、護衛の中から選りすぐりの二人を呼んで来い！」

そうして呼ばれてきた人を見たんだけど、なんとその中の一人は飯屋で食い逃げした人でした。
僕の顔を見るなり逃げ出してどっかに行っちゃいましたよ。

酷いなぁ、なんで顔を見るなり悲鳴を上げて逃げるんだよ。
たかが関節を何個かはずして詰所の前に放置しただけなのに。

隣は隣で美鈴のパンチ一発で沈んでるし。ホントに大丈夫なのここの護衛？もしかして今までも運だけで生きてきたんじゃないの？

「・・・あんたら何者だ？それだけ強いなら噂ぐらい立ってるはずだろうに」

「「飯屋の元看板息子（娘）です」」

そう言うと笑って、準備はこっちが整えておいてやる、と言ってくれたので今日は商隊仲間に挨拶して終わりました。ただし準備にかかったお金はとられました。

ちぇ、ケチだなぁ。

西へ行こう（後書き）

三日ぶりのじらいです。大陸編は早めに切り上げます。内容的に薄くなりますけど、幻想入りしないと東方じゃないような気がしますので。と言いますか、早く霊夢たちとの絡みが書きたいだけなんですが。オリキャラ尽くしの大陸編になるので早いこと終わらせます。

gd gd旅路と妖怪退治（前書き）

ずっと大和のターン

gd gd旅路と妖怪退治

太陽の光がこれほど憎いと思ったことはない。
信じられない程に乾いた大地をただひたすら列をなして歩いていく。

ラクダと言われる動物に香辛料などを運ばせ、ほぼ全ての人が地に足をつけて進んでいく。
その顔に笑顔はなく、話声など聞こえはしない。口を開けばすぐにでも喉が乾いてしまうからだ。
砂漠では水の確保は難しい。旅人がオアシスと呼ぶ場所まで行かなければ補給も、まともに休むことすらできない。

それは一般人をあらゆる点で超えている僕も同じことであった。人より身体が丈夫であるとか、気や魔法が使えるとかは自然の力の前には全くの無力であった。

何が言いたいかというと、砂漠越え舐めてましたゴメンナサイ。

妖怪である美鈴はどうなのだろうか?妖怪でもこの砂漠はキツイのだろうか?そう思い隣を歩く新しい相棒を見上げて見る。

外套を頭から被り、吹きつける熱風から身を守っている。しかしその顔に辛い表情はなく、むしろ活き活きとしていた。何が面白いのか、地平線の向こうまで砂まみれの砂漠に目をやっては笑顔まで浮かべている。少し気になるので、無茶を承知で話かけてみた。

「美鈴、何か面白いものでも見つけたの?」

「あの向こうの緑が見えますか？たぶんオアシスです。
久しぶりに好きなだけ水を飲むことができますよ！」

どれどれ？美鈴が指で示す方向を見てみる。
・・・裸眼でも薄らと見ることができる天国がそこにはあった。

「今度こそ、蜃気楼とか言う奴じゃないよね？」

実は美鈴がオアシスを見つけたと言うのは今回が最初ではない。今までに二回あった。地図にはそんなオアシスは存在しておらず、商隊の隊長もただの幻だと言っていた。ただ美鈴はそれがオアシスであると、見間違いではないとしきりに僕に訴えていた。だから僕は、まだ見つけられていないオアシスじゃないの？とだけ言っておいた。酷いかもしれないけど、この砂漠で道を外れるのは自殺行為でしかない。

「お前ら、もうすぐ休憩所だ！紅と伊吹、先行して安全かどうか確かめてこい！
あそこは妖怪の休憩所でもある！いたら蹴散らしておいてくれ！！」

どうやら今回は間違いないみたいだ。
僕達以外の人はその場でいったん停止して報告を待つようにしている。

「じゃあ美鈴、行こうか」

「妖怪がいたらボコボコですね。水場占領とか許し難い行為です」

「「僕（私）たちの天国（オアシス）のために」」

そう言って僕達は二つの閃光となった。何と言うか、美鈴もイロイロ溜ってるみたいです。

「誰もいない・・・？」

「みたいですね。私たち以外の気も感じ取れませんし」

「魔力も感じ取れないよ」

美鈴の能力は『気を使う程度の能力』である。僕としてはすごく羨ましい。だって気を扱う練習をしなくてもいいじゃん。武術家にとっては最高の能力だと思うよ?僕は身体強化に気と魔力のどちらかをその場の状況で切り替えているからなぁ。魔力はもう増えないし、自然と気に頼る部分が増えていくと思うんだ。気の絶対量を増やす修行もしているけど、そうなるとバランスが・・・。

そこで僕は新しい技の開発に取り組んでいます。美鈴が発案した技なんだけど、はっきり言って無茶苦茶だ。旅の始まりに試してみたけれど、えらい目にあいました。爆発ですよ、爆発。身体が吹き飛ぶかと思いました。今使えるのはその爆発の威力だけですねー、とか笑って言う美鈴のお尻にケリを入れた僕は絶対に間違いじゃなかった。もっと蹴っておけばよかったと思う。

「じゃあ私は水浴びしておきますから、報告頼みますね」

「は!?僕も汗流したいんだけど!?」

「こういう所で気を効かせるのがイイ男っていうものですよ。・・・覗いたら潰しますからね」

「自分に誓って覗きません」

非常に勿体ない気もするけど、ある一点に指さして言う美鈴に逆らうことなんてできません。ごめんね皆・・・僕がヘタレで・・・。

しかし、最近煩悩が多すぎるぞ僕!いくら輝夜に教育(調教)され

たとはいっても、これは酷すぎる。いい機会だし、煩悩なんてものは捨ててしまおう！

「紅が水浴びしているだと！？行くぞお前ら！！天国（オアシス）はすぐそこだ！！！」

ダメだ僕達、早くなんとかしないと・・・。

「いや～、オアシスって正に砂漠の中の天国ですね～」

「そうだね～」

上から美鈴、僕です。僕達が着いたころには既に美鈴は服をきて待ってました。ただラクダに乗って突撃していった隊長がその横でボロボロになってましたけど。正に天国だったと言い残して気を失った隊長に敬意を示します・・・。

「今日明日とここで休憩するみたいですし、どうです大和さん？久しぶりに組み手でも」

「疲れてるんで勘弁してください。・・・技撃軌道戦（ぎげききどうせん）だけならいいですよ」

技撃軌道戦とは、相手の攻防の動きを脳内で先読みし牽制し合うことで発生する戦い方である。つまるところ、脳内で詰み将棋を行うようなものだ。

「むぅ、しょうがないですねぇ。それで勘弁してあげましょう」

「じゃあ先に相手に一撃当てれたら勝ちということで。・・・では早速」

二人間合いを取って構える。

・・・美鈴の右膝蹴りは前にでて避けるか？いやいや、それは向こうも解っているみたいだし一度下がって・・・・・・・右を払えば左、いやもう一度右・・・・・・・・・・・・・・・・・・突いて捌いて、払って突いて・・・・・・・・・・・・・・・！？気を多くため込んでいる！！だったら！！

「紅寸剄！！」

「浸透水鏡掌！！」

互いに相手の後に向かって実際に技を放つ。

「「ギャアッ！？」」

なんだこの妖怪？僕らの隙を突いたつもりなのだろうか？

「思った通り、此処は狙われていたみたいですね」

「美鈴気づいてたの？」

「え？気づいてなかったんですか？」

「・・・キガツイテマシタヨ？」

男の子とは、見栄を張りたがる生き物ナノデス。

「大和さんもまだまだですねぇ」

うんうん、と頷いている美鈴は放っておこう。藪蛇はごめんだ。

「それより、商隊のみんなが心配だよ。急ごう美鈴」

「大和さんはホントに解りやすいですね」

・・・蹴っていいかな?

商隊のみんながいるところに行くと、そこでは既に戦いが繰り広げられていた。

僕達と同じ護衛として雇われている人は剣や槍、弓で妖怪に立ち向かっている。

商人たち非戦闘員は木や草なども物陰に隠れて様子を窺っています。

「下級妖怪ばかりでよかったです。こちら側の錬度はそれほど高くありませんし・・・」

「問題はあの姿だね、あんな気持ち悪い生き物見たことないよ」

「いやいや！？問題は数でしょ！？形は別に関係ないと思いますよ！！」

「じゃあ美鈴は叩いたら変な液体がでそうな相手を殴れる！？」

「あ、いや、それはちょっと・・・」

砂漠でよく見るサソリみたいな妖怪とか、なんか胴体膨らんでるし。
あれは叩いたら臭い液体が飛び出ると思う。

「じゃあどうしますか？言ってる間にも劣勢ですよ？」

「まかせてください。・・・皆さん！下がってください！あとは僕がやります！！」

そう言うと戦っていた人達は僕より後に退避していった。
全員が下がったことを確認してから僕は空へと上がり、オアシスを見降ろす。

すると地上にいる妖怪たちが妖力弾や変な液体を飛ばしてきた。

「うぇ、まだ何もしてないのになんで出すかなぁ」

想像通りの異臭がする真っ白い液体。

早くケリをつけよう、そう思って両手から魔力糸を放つ。

飛び交う攻撃を避けながら指を操り、糸で妖怪を刻んでいく。以前のように一本一本に気をやる必要などない。蓬莱島での修行は並ではないのだ。この程度が出来なければ師匠の霊弾によって死んでいただろう。

「よっと・・・妖怪チャーシューのでき上がり！・・・って、誰も食べないけどね」

細切れになった妖怪を見やり、地上に降りた僕を待っていたのは待っていた人達の賞讃の声だった。

「すごいな坊主！」「あれだけの妖怪をこれほど早くに始末するなんて・・・」「ぜひ私の専属護衛になってくれ！」

えへへ、照れるなぁ。大切な人を守ることが僕の最終目標。今ここでこの人達を守れたということは、僕にとっても嬉しいことだ。

「すげえな坊主。ここまでやるとは思わなかったぜ」

「僕なんてまだまだですよ。美鈴のほうが僕よりもだいぶ強いです

し。

それよりも早くここを出た方がいいと思います。遠いですけど大きな妖力を発見しました。

皆さんを守りながらでは闘いきれないと思うので、早く逃げちゃいましょう」

「そうなのか？お前さんがいうならそうなんだろうな。おいお前ら、出発するぞ！」

こうして補給を終えた僕達はオアシスを後にした。あの時感じた力も襲ってくることはなく、あと7日程度で目的地に着くらしい。それまでの護衛はまかせたぜ、と隊長に言われた。頼りにされるっていうのは嬉しいものだ。

「あの魔力糸ですけど、上位クラスになると通用しないと思いますよ？」

「それは僕も思っていることだよ。魔力や妖力でガンガンくる相手には所詮ただの糸になるだろうし・・・」

糸が通用するのはある一定のレベル・・・おそらく通用するのは自分よりも弱い存在までだと思っている。修行をして人並み以上にはなったけど、僕自身がこの技にそれほど向いてないんだろう。自分より格上の存在と闘う前に何か対策を考えないと・・・。

「だからこそ、あの技ですよ」

「コレかぁ」

そう呟く僕の両手の間には気でも魔力でもない力が渦巻いていた。

「あ、やばい制御が・・・」

「ちょ！？しっかりしてくださいよ！？」

gd gd旅路と妖怪退治（後書き）

友人に勧められて見たＩＳにハマってしまったじらいです。シャル可愛すぎて見るのがツライ・・・

今回は特に何も言うことなーし。題名通りで面白みもなーし。おまけに元気もなーし。みんなーオラに元気を分けてくれ―状態。とりあえずシャルル分補給してきます

始まりの都（前書き）

少し考えている事があります。詳しくは後書きで

始まりの都

長い旅を終え、僕達は大陸の西で最も大きい都にやってきた。
一緒に旅をしてきた商隊のみんなは足早に市場の責任者へと挨拶に行ったみたいだ。

僕と美鈴の契約内容は都に着くまでの護衛であったので、都に着くなり隊長から暇を出されたわけで。
中には専属の護衛として雇うと言った人もいたが、丁重にお断りして諦めてもらった。

そんな一悶着もあったのだが、今は飯屋で貰ったお金をこちらで使えるお金に変換してもらい、
そのお金で西側の食事を堪能しているところである。で、あるのだが・・・

「なーんか視線を感じるんだけど」

フォークとスプーンを持ち、スパゲティと呼ばれる麺料理をつつきながら呟く。

「私たちの格好って此処の人達とは全然違いますからね」

そんな僕の呟きにも律義に返してくれる美鈴。食べるのはいいけど、

もうちょっと落ち着こう。
美鈴の言うことも一理あるだろうけどね。美鈴も僕の服装もここで食事している人からはだいぶ浮いているし。ほぼ全ての視線は好奇心と見ていいだろう。

「監視されてる・・・？」

「・・・・」

微かにだけど、好奇心による観察ではなく、敵意のようなモノを感じる。

僕がそう呟くと、美鈴はそっとフォークを置き、目を閉じて俯く。
そして顔を上げた美鈴の顔にいつものような笑顔はなかった。そして僕に向かってこう言った。

「このスパゲッティって、すごく美味しくないですか!?」

「うん！ラーメンと違ってまた別の味がなんとも・・・って違うわ!!!
なんか視線感じませんか!?なんでそんな暢気なの!?シリアスぶった僕が馬鹿なの!?ねえ僕がおかしいの!?」

僕が変なのかー!?

頭を抱えて立ち上がる。すると周りで食事をしていた人達は一度こ

ちらを見やり、それぞれのテーブルでヒソヒソと話を始めた。

「大和さん、東側の恥さらしになる前に座ってください」

誰のせいだ、誰の！

思うところはあるけどずっと立っているわけにはいかない。座って残っている料理を再び食べ始める。

「あの服装、東の人間よね？」「野蛮ねぇ、こんな所で騒ぐなんて」「見てよあのみすぼらしい服装」

聞こえない。僕には何も聞こえてませんよ。お金がないから着のみ着のままなことを気にしてるなんてことはまったくありません。だから目の前でスパゲッティを吹き出しそうなほど笑いを堪えている美鈴を気にすることは・・・

「ふん！」

「痛い！？」

思いっきりつま先を踏んでやった。悪いとは思うけど、謝らないから！

「イタタ、酷いですよ大和さん。・・・まあ、酷いのは大和さんだけじゃありませんけどね」

「じゃあ・・・？」

今までのようなふざけた空気は消え去り、今度こそ僕らの間には緊張した空気が張り詰めてきた。

「見られてますね。複数の視線を感じます」

「やっぱり」

「でも心配する必要はないでしょう。こちらが気づける程度と考えれば楽ですよ。

・・・大和さん、私から何か『視え』ますか？」

「特には何も。ただ、広い建物の中にいるね」

先を視ることはできるけど完璧ではない。アキナなら可能かもしれないけど、まだまだ未熟な僕にはそんな芸当はできないので断片的なことしか解らない。

「とにかく、何か動きがあるまで私たちにできることはないでしょう」

そう言ってまた料理を口に運ぶ美鈴。こういった対応は潜り抜けた修羅場の違いなのだろうか。
こういう経験が多いであろう美鈴の対応は僕にとっても学ぶべきことが多い。

「すいませーん。このマルゲリータという物くださーい」

・・・こういう部分も見習ったほうがいいんだろうか？

「おーいそこのお二人さん。そうそうあんたらや、ちょっとお話聞きたいんやけどええか？」

お店を出ると一人の男の人に声を掛けられた。
振り返るとキラキラと光る純白の服に胸には十字架のネックレスを

着けた背の高い青年がいた。

「貴方が私たちを見ていたんですか？」

単刀直入に美鈴はそう質問した。店で料理を食べていた時からあった視線が一段と強くなるってくるが、そんなことを気にしていても仕方がない。それにこういう対応は美鈴に任せる方がいだろう。僕も出来ないことはないのだけど、こんなナリをしているから相手にされないことが多いから。

「あれま、バレとったんかい。すまんなぁ、ワイもこれが仕事やから堪忍してくれや。
大事の前のイレギュラーやから気ぃ張り詰めとんのや」

悪い悪い、と笑いながら答える相手に僕も美鈴も毒気を抜かれてしまった。

見た感じは悪い人ではないようだ。なんだよ、心配して損したじゃないか。
でも人を監視する仕事っていうのは如何なものかと思うんだけど、その辺はどうなのか？

「そうなんですか。よければ私たちが監視された理由を聞かせてもらえますか？」

「ん？ええよ、迷惑かけたみたいやし。けどその前に自己紹介といこうや。
ワイの名前はケビン・フォレスト。聖堂騎士団（てんぷるきしだん）の新米騎士や」

「紅美鈴です」「僕は伊吹大和って言います」

「美鈴ちゃんに大和君やね。よろしゅう」

そういって僕達は握手をした。ケビンさんの手は堅く、何かしらの武術をしている感じを受けた。だけどそれは無手ではなく、何かの武器を使うような手だった。

「じゃあ早速本題に入ろか。

ワイは今、ある妖怪を狩るっちゅう任務中なんよ。
今までもその妖怪を狩ってやるっちゅう勇気と腕のある妖怪退治屋がおったんやけど、意気込んだ連中　は全員死体も返ってこんかった。それなら別に騎士団も動かんかったんやけど、今になって一般人がそ　いつに襲われる事件が多発したんや。

事態を重く見た騎士団はその妖怪の退治を決めたっちゅう話。

でもこれが簡単な話やなくてな、騎士団は今別の任務に多くの団員が割かれてるんよ。暇やったのが新　米の俺ぐらいやって、それを俺にヤレっちゅうんや。こりゃ無理やわ、と思ったワイは腕利き

の退治屋を大勢雇ったってわけ。
　んで任務前の大事な時に君らみたいな強い力をもった人物がやって来た。
　しかも一人は妖怪。やから大事になる前に探りを入れようって今に至るわけ。ＯＫ？」

「・・・あー、つまり、僕達って疑われてるわけだよね？その妖怪の仲間かどうか」

そりゃ神経質にもなるよ。腕利きの退治屋がやられるほどの妖怪に増援だなんて悪夢でしかないし。

「でも君らは仲間じゃないみたいやし、すまん事した思ってる。悪かった」

そう言って頭を下げるケビンさんを通行人は驚いた表情で見ている。あの聖堂騎士団の団員が頭を下げている！？と騒ぐ人も大勢いる。何これ！？もしかしてヤバイ状況なわけ！？

「ちょっ、ケビンさん頭上げて下さい。私たちはただ用事があって来ただけですから！
　そんな状況なら疑われたって仕方ないじゃないですか！だから貴方に非はないですって！」

「そうですよ！ただ僕らの来るタイミングが悪かっただけですって！頭を上げてください」

必死に宥めて頭を上げてもらう。通りの人の印象からして聖堂騎士団ってすごくお偉いさんっぽいし、そんな人に頭下げられても後の迷惑しか浮かばないって！

「いや、ホンマ悪いと思ってるよ？・・・んで、お二人さんはここに何の用や？」

ヘラヘラと笑うケビンさんだけど、どうもこれがこの人のスタイルみたいだ。それにこんなのでも嫌いになれそうもないんだから驚きだよ、まったく。

「それは僕から。簡潔に言うと、僕魔法使い目指してます」

「なるほどねぇ、確かに西には魔法使い多いしなぁ。せや！ワイの依頼受けて貰えへんやろか！？」

「それって討伐の話ですよね？でもなんで？」

美鈴がそう尋ねるけど、正にその通りだと思う。大勢雇ったのなら、僕らは別に要らないんじゃないかな？

「恥ずかしい話なんやけど、そんなに腕のええ奴は集まらんかったんよ。
有名所にも声は掛けたんやけど断られてしもて。
しかも理由が『お前のような名前も売れていない団員の下には着かん！』なんて言って。
やから集まったのは金や名声欲しさに集まった弱い奴らばっか。
やから君らみたいな強い仲間が欲しいんよ」

そうは言っても、僕も命は惜しいし。退治屋が逆に退治してしまう妖怪相手に僕が何処まで闘えるか。
それに正直背中を預けられないような人とは一緒には戦いたくないって言いますか・・・。
それにケビンさんって強いのかなぁ？確かに霊力や魔力・・・のような力は大きいみたいだけど、それほど強いようには見えない。それに新米騎士って言うくらいだから、駆け出しだろうし・・・

「もちろん報酬の用意できるで。依頼を受けてもらえたら君が魔法使いになるために最大限の協力をさせて　もらうつもりや。ああ、別報酬として金銭も十分用意するで」

「よーし美鈴、頑張っちゃおうか！！」

仕方ないなぁ、そこまで言われたらやるしかないでしょ！？そうだよね、美鈴！

「・・・はぁ、言うと思いましたよ。まあ私も付き合いますけどね」

やれやれ弟を持つ姉は辛いですねぇ、なんてお姉さんぶっている相棒に今は感謝するよ。美鈴が隣で戦ってくれている間は僕は負ける気が全くしないから。

「それで、その妖怪って何の妖怪なんですか？」

何でも掛かって来い！！そう意気込んで僕はケビンさんにそう尋ねた。
するとケビンさんはニヤリと笑い、

「ターゲットは二匹。アルフォード・スカーレットとシルフィーユ・スカーレット。
悪名高い紅魔館の現頭首であり、吸血鬼さ」

隣で驚愕する美鈴を余所に、まだ何も理解していない僕は首を傾げていた。

始まりの都（後書き）

遅くなりました、じらいです。
これからの話の展開で少し悩んでいます。なので皆さんの意見を参考にしようと思っています。大陸編ではオリキャラが多くなる予定です。話数も増えるし、もはや東方関係なくない？とまではいきませんが、それなりの事になりそうです。内容としては、騎士団との共闘を入れるか入れないかです。もちろん美鈴などの原作キャラも活躍します。何か意見があれば一言お願いします。

ピンチピンチってそれはチャンスだよ！

吸血鬼

膨大な魔力・妖力を誇る大陸最強の妖怪の一種。身体能力も人間のそれとは比べ物にもならない。
圧倒的な力を持つ故、討伐を行うには一個師団が壊滅する覚悟で臨まなければならない。
最強種としてのプライドが高い個体が多く、その誇りを傷つけられることを何よりも嫌う。
銀製の武器が有効。それ以外で倒せないという訳ではないが、滅することはできない。
詳しくは３１２ページを・・・

「ええい、なんだよこの吸血鬼の項目は?特に目ぼしいことは書いてないじゃないか！」

紅魔館

代々続く『吸血鬼』スカーレット家の根城。西側ほぼ全域の妖怪を統べていると噂される。
紅魔館の中には大量の魔道書が存在しているらしい。理由として挙げられているのは現頭首の妻である
シルフィーユ・スカーレットが魔法に大変興味を持つという噂から。
館には執事・メイドが存在し、彼らもそれなりの戦闘力を持ってい

るはずである。

「大和さん、紅魔館には魔道書がたくさんあるかもしれないですよ！」

「本当！？」

ホイホイとケビンさんの依頼を受けた大和です。
あの後ケビンさんに教会支部に連れていかれて、吸血鬼対策を練っています。
美鈴は吸血鬼と聞いた時点で後に向かってダッシュしようとしたけど、ケビンさんが「武術家が逃げるんかいな」と放った一言で撃沈。
そして血の涙を流さんばかりの勢いで僕を説得に掛かってきた。

曰く、吸血鬼にだけは手を出してはならない。
曰く、吸血鬼相手に勝てるわけがないなど。

けど、その時の僕にはケビンさんが示した報酬に目が眩んで美鈴の言葉が耳には入ってなかった。

話を聞いていればよかったと思ったのは、ここに連れてこられた時。

「言うとくけど、吸血鬼相手にするんや。ちゃんと死ぬ覚悟はしといてや」

ああ僕の馬鹿！嵌められた！？と思って逃げ出そうとすると、

「今逃げたら異端審問にかけるでー。運よく逃げられたとしても、もう西では活動できんやろなぁ。
心配すんなや、骨は拾たるさかい」

流石は教会、アフターサービスもバッチリですね。
馬鹿を言う暇があったら対策を練りましょう！と必死に訴える美鈴に全力で同意して今に至ります。あの不良騎士は吸血鬼に食べられてしまえばいいのに・・・。

「でもどうする？銀製の武器なんて持ってないし、倒せてもキュッとできない。
でも相手は簡単に僕らをキュッとできる。これって無謀じゃない？」

「だから言ったんですよぉ。吸血鬼だけは辞めましょうってぇ。てか、キュッてなんなんですよ～」

私はまだ死にたくないんです～、と言って机に突っ伏す美鈴を見て僕も頭を抱える。自業自得とはいえ、美鈴まで巻き込んじゃったことには反省してます。着いてきてもらったのは死に場所までだったのだー、なんて馬鹿なことも言っても場が和むわけないし、逆に暗くなるだろう。

しかしながら、僕と美鈴は一蓮托生の身となってしまった。

「美鈴、落ち込んでてもしょうがないから具体的な対策を立てよう」

「わかってますよ・・・」

誰のせいですかまったく、と言いつつも見捨てないでくれる美鈴にありがとうと言っておく。

しかし本当にどうする?相手は最強の一角である吸血鬼。強さは師匠クラスと思ったほうがいいだろう。だとすると、僕にできることは時間稼ぎ程度だろうね。けど今回そんな時間稼ぎをしても、文字通り死ぬまでの時間稼ぎにしかならない。勝たなければキュッされるだけだから。

じゃあどうしようか?美鈴も強いけど、師匠達のような強さではない。ケビンさんは正直どこまで出来るのかすら解らない。同じく雇われた人達は僕らよりも弱いと聞いているし・・・。

あーもう!八方塞がりじゃないか!?

なら一泡だけでも吹かせてみせようか?勝てないにしろ、何かは出きる筈だ。

・・・ちょっと待って?元々銀製の装備を持たない僕達を大量に雇ったのは何故だろう。

弱くても束になれば勝てるなんて安易な考えではないだろうし・・・。

考えろ、師匠にもらった頭を使うんだ大和。こんな時師匠なら何て言う？
・・暗殺。
それしかないね。正面からケビンさんが勝てるわけがない。襲撃に気をとられた瞬間に一撃必殺するなんらかの方法でもあるのだろう。
つまり僕らは最初からただの捨て駒だ。・・・やってくれるね。流石に僕でも怒りが沸いてきましたよ・・・。問題はそのやり方が成功したところで僕達はキュッされてることだ。だから別の方法を考えなければならない。

「大和さんって仮にも鬼の子供なんでしょう？なら吸血鬼のマネでもして話し合いにでも持ち込んでくださいよ～」
「美鈴・・・。いくらなんでも鬼のマネだなんて・・・ってそうか！いいこと考えた！！」
普通にやったら死ぬんだ。何も殴り合いだけが勝負じゃないんだ！いやでも最後は腕っ節がモノを言うだろうけど、やってみる価値はある！だったら一か八かの賭けに出てみよう！！
「美鈴、今から僕の話す作戦が成功するかどうか考えてみてね。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・で・・・・・・・・・・・・Ｐ３１２の・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「ええ！？それ無茶ですって！最悪の場合何も出来ずに全滅ですよ！？」

「普通に闘うよりは可能性ありそうじゃない？」

「目に見えない程の大きさしかないですけど、確かに正面からよりはマシかなぁ」

「じゃあ、雇われた人にも話をしようか。美鈴頼んだよ」

「ええ！？私ですか！？」

「何言ってるの。こういうのは年長者の仕事だし、美人な美鈴の言葉ならみんな賛成してくれるって」

フッフッフ、待ってろよケビン・フォレスト。君がどれだけの人物かは知らないけど、僕を敵に回したことを後悔させてやる。

ピンチピンチってそれはチャンスだよ！（後書き）

スランプ真っ只中のじらいです。ネタは浮かんでも書く気が中々起きないｏｒｚ
ちょこちょこネタを保存することしかできない・・・なんてこった。
大陸編も何も要望がないようなので私の好きなようにするのであしからず。

勘違いって怖いよね（前書き）

今回の大和は酷いよ！さすが大和汚いって感じだよ！

勘違いって怖いよね

「ここにある武器等は使ってもろてかまへん。吸血鬼を退治しよう言うてるのに銀製の武器もなかったらどないもあらへんやろ。そんな人はここの武器を持って行ってくれや」

剣に槍、斧に弓。それにこれは鉄砲だろうか？月の戦闘員が持っていたのとは形が違うけど目の前には新品の物が数多く並んでいた。

結局、僕の案は他の退治屋には相手にされなかった。そんな作戦は通用しない、数で当たれば倒せるなどの案が多く、連携して吸血鬼と闘うなど考えている人は少なかった。中では集団でこの討伐に参加している人達もいて、なまじ力がある分楽観視している者も多かった。

そんなわけだから僕と美鈴だけで実行することになった。皆さんには悪いけど僕もまだ死ぬわけにはいかない。邪魔はしないけど、こっちのいいように使わせてもらうだけだ。

「ん？二人は何も持っていかんのか？」

「銀製の武器よりも用意してほしい物があるんですけど、頼めますか？」

「モノによるけど、なんや？」

「礼装と儀式杖とかってあります？」

『吸血鬼』アルフォード・スカーレット。
その圧倒的な力を持って人を殺し、食い、その血を全身に浴びることを何よりも喜びにしている。

なんて噂が何年も前から流れているが、実際の彼はそんな噂とはかけ離れていた。

人の血を飲みはするが、生きている人間を襲うことはなかったし、何より彼は人間が好きである。もちろん妖怪も。明るい太陽の下で共に笑い、泣き、時には喧嘩する者を誰よりも愛おしく思っていた。
そして羨ましかった。

確かに妖怪としては絶大な力を持つが、心の半分以上がヘタレ分で出来ている彼は争いなんてしたくなかった。彼を狙ってくる退治屋

が紅魔館に訪れた時も裸足で逃げ出したかったし、実際逃げていた。それにハンターを倒したのは執事のクラウスであった。それを見て悲しかったし、バラバラになった死体を見て気絶しそうにもなった。そんな彼が欧州の妖怪を纏め上げる恐怖の象徴としていられるだろうか？

そんなこと出来るわけがない。誰にも優しい心を持つ吸血鬼に着いて行く妖怪は多くはなかった。だが彼にはそんなことどうでもよかった。美人なお嫁さんに、ちょっと怖いけど優秀な執事とメイド。産まれて間もない愛娘に、もうすぐ産まれる二人目の娘。それだけあれば何も要らないじゃん、と彼は本気でそう思っている。そうして幸せな生活を送っている彼だが、執事からまた自分が狙われていることを聞かされていた。

「クラウス、また俺を狙う愚か者がいると言うのか」

「左様にございます」

そんな彼には何故か無駄なカリスマがあった。椅子に座り、食後のトマトジュースをワインと勘違いして飲んでいる彼には何故かカリスマがあった。執事はしたり顔、妻とメイドは必死に笑いを堪え、何も知らない娘はそんな威厳のある父をキラキラした目で見ていた。

「今回は聖堂騎士の者が来るようですが、如何いたしましょう？」

「フン、俺を始末しに来るのだ。何位の者が来るのだ？」

お願いだから位持ちは来るなよ～、と顔には出さずに心の中で言うが、娘以外の付き合いの長い者には彼の心の中が手に取るように解っており、またしても笑いを堪えていた。

「それが新人らしく、ケビン・フォレストと言う名の青年としか解っておりません」

「何だそれは。俺は舐められているのか？」

実際彼ほどの妖怪を相手にするには、騎士団の第一、二位を除き、位持ち一人ではだいぶ厳しいのが現状である（ただ彼は戦闘らしいことなどしたことがないため一概には言えないが）。そんな彼に仕向けられた刺客は新人騎士ただ一人。可愛そうな新人だと思うが、これもまた彼の運命なのだろうと諦め、執事に任せることにした。

「クラウス、何時も通りお前に任せる」

「かしこまりました」

「お父様！私はお父様の闘う姿が見たいです！！」

「レ、レミリア！？何でまたそんな事を言うんだい？」

それに異を唱える者が一人。アルフォードの娘であり、その力を十分受け継いでいる自慢の娘。

名をレミリア・スカーレット。眼に入れても痛くない程に溺愛している娘である。

「だって、何時もクラウスがお父様の出番を取るじゃないですか！　レミリアはお父様のカッコイイ姿が見たいです！」

困った。これは困ったことになった。自分がしたくないからクラウスに任せていたというのに、愛娘はそれが不服のようだ。うー、と可愛く唸りながら私を見つめるレミリアを見、助けを求めるように妻を見た。

「あなた、レミリアの為にがんばってね」

イイ笑顔だなぁシルフィ。何で君もそんなに期待している？俺が争いが嫌いなのは君も知っているだろうに。

「お父様・・・だめですか？」

ああレミリア、そんな潤んだ瞳で私を見ないでくれ。執事の影に隠れて生きる俺には眩しすぎる・・・。

仕方ない、一応その場に立ち会ってやっぱり何もすることはなかったよ作戦で許してもらおう。

「よし、じゃあ父様も今回は前に出よう」

「本当!?やったあ!!」

(よろしいのですか旦那様?)

(仕方ないだろう。それに、新米如きに私が遅れをとるとでも思っているのか?)

(旦那様は久しく闘っておりませんからなぁ。正直不安で胸が潰れてしまいそうです)

(う・・・それを言われると困る。だが危なくなっても俺には優秀な執事がいるから大丈夫だろう?)

(まったく・・・難儀な主に仕えてしまったものです)

(頼りにしているぞ、クラウス)

実はアットホームな紅魔館。そこに暮らす妖怪たちの笑顔が絶えない日はない。

「じゃあそろそろ襲撃するけど準備はええか？」

夜も更け、妖怪たちが活発になる頃僕達は紅魔館のすぐ近くまで来ていた。なんで夜かって？あの不良騎士僕らを囮にした乱戦の中で仕留めるつもりだから暗い方がいいんじゃないのかな？まあそんなの無理だろうし、させないけどねー。

それは置いといて、ご飯は食べたし、礼服に着替えた。杖も貰った、作戦も頭に叩きこんだ。準備はＯＫですよ不良騎士。お前の作戦ブチ破るための準備は全部整ってますよ。

「じゃあ各々の作戦があるやろうから、中に入ったら個人に任せるさかいに。ほな行くで！！」

やっぱり僕達は囮ってわけか。

オオオオオォオオォォッォオォォ、なんて声を上げて突撃する人もいれば、僕達みたいにゆっくりと注意しながら進む人など足並みはバラバラだ。

紅魔館の内部はそれなりに広いようで、これなら僕の作戦に支障もはないだろう。

「なあお前だろ?あの時の作戦を考えたのって」

ん?そういうオッサン達は何者ですかね?

「ああ、別に名乗らなくてもいいだろう。こんな所に来ちまったんだ、死ぬ奴の名前など知りたくないだろ?」

だったら話掛けないで貰いたいものだ。僕の心の中は今でも恐怖に震えているのだから。

今までだってそう。母さんの時も幽香さんの時も、アキナの時だって僕も何時も恐怖で足が竦みそうなのを耐えて立ち上がって来た。

死というモノを前にしている今、あんたのような人に関わっていられるほど僕は強くないんだよ。

「・・・それで、なにか用ですか?」

「いや何、俺たちはお前の案に乗っかろうと思ってな」

「なんでまた急に・・・？」

散々人を馬鹿にしておいて、よくそんなことが言える。

「すぐに解る」

ギャアアアアアッアアアアアア！！？？

ｔッツ！？何だ今の悲鳴は！？

「やっぱりな。俺たちは吸血鬼に会うことすら叶わないらしい」

「・・・噂の執事ってやつですか」

紅魔館に住む執事。文献にはその執事すら戦闘が出来るらしい。流石は執事（バトラー）と言うだけはあるのか？

「Ｅｘａｃｔｌｙ（その通りでございます）。皆さま、今宵は紅魔

館にお越し頂き誠にありがとうございます。
おかげで買い出しに行く必要が省けました。そう言う訳ですので、
どうぞ安心して死んで逝ってください」

黒を基調とした服に身を包んだ、銀色の髪の色をした初老の男性が
こちらに頬笑みかけていた。この頬笑みが街中で見られればどれほ
どよかっただろうか。優しげにみるその瞳には、街では見られない
確かな殺意が込められていた。

「お前の案に乗るぜ。まだ死にたくないからな」

死を前にして保身に入るか愚か者。僕だって本当なら逃げ出したい
さ。でもね、逃げたら伊吹の名に傷がつく。そうなると母さんの顔
に泥を塗ることになってしまう。誇り高い鬼の一族として、目の前
の存在から逃げるなんて選択肢なんて存在しないんだよ。

「今は下がっていてください。こんな爺さん、僕一人で十分です」

だからそう言って杖を構える。鬼は嘘は吐かない。何時だって真っ
向勝負で打ち勝ってきたんだ。

「たった一人で十分だと？無礼るなよ小僧・・・！！」

「棺桶に半分浸かってる爺が何言ってるのやら？まあ安心しなよ。
あんたの主人と同じ棺桶に入れてやるから」

「吠えたな、小僧！！」

この人は強い。凄く強い。真正面から闘ったらタダじゃ済まない。だから僕にこの人の意識を集中させる必要がある。・・・目の前にいるのは僕だけなんだと思わせるために。

「そんなんだから、周りが見えないんだよ。・・・美鈴！！」

「お任せ！！」

僕がそう言うと、目の前の執事は何かに当たったかのように吹っ飛んで気絶してしまった。

「いやはや、幻術ってやつはすごいですねぇ。一応気配は消してましたけど、意味なかったかもしれないですよ」

「当然！何たって師匠お墨付きだからね。初見で見抜く人なんて居やしないよ」

そこにいた全員は何が起こったのか解らず唖然としていた。何？説明を要求するって？しょうがないなぁ。つまりどうやったかと言うと、

紅魔館襲撃前から美鈴を幻術で隠す→侵入の後執事と会って挑発・もしもの為に意識を僕に向かせる→隙を見つけて美鈴が一撃で気絶させる

という流れで執事を撃破したというわけ。もちろん気絶させるだけに留めている。もしキュッとしてしまったなら僕らは吸血鬼の本気を見ることになるだろうしね。

鬼は真っ向勝負じゃないのかって？残念ながら僕人間です★もちろんこんな真似したくなかったよ？でも死んじゃったら元も子もないでしょ。生きてさえいれば何だって出来る。生きてればね。これからの消耗を考えると、こうでもしなきゃやってられないんだよ。

「お前たちって、案外汚ぇんだな・・・」

ははは、オジサン達今頃気が着いたんですか？あの不良騎士ほどじゃないですけどね。

あと僕も美鈴も、貴方達からしたら十分に規格外だと自負してますよ？

「ほう、あのクラウスを策一つで退けるか。今回の騎士は随分優秀と見える」

突然に背筋をゾクリ、とさせる声。声の聞こえた先には金髪の男が立っていた。どこか『王』を感じさせる存在感に知らず膝を突きそうになるほどの重圧がその場を包んでいった。

来たか、吸血鬼。呟く美鈴を見、その目線の厳しさにはこれからの激闘を想わせる物があった。そして僕は美鈴に心の中で謝り、そして祈る。どうか全てが旨く行くようにと。

それとあと一つ。作戦立てたの、ケビンさんじゃなくて僕ですから！

勘違いって怖いよね（後書き）

汚い主人公でスイマセンね、じらいです。

ここの『お嬢様』は『おぜうさま』です。

ちなみにメイドは咲夜ではないまったくの別人です。そして将来のメイド長についてですが二次設定のどれかを使います。これにはいろいろと反論あると思いますけど、この作品の中ではこうなんだって思ってもらうしかないです。

しかし紅魔館が長い・・・

鬼ごっこみたいなモノでもしますか？（前書き）

大和が無茶苦茶なこと言ってますよー
あと、後書きで５０話記念のアンケートっぽいものやってるんで見てみてください

鬼ごっこみたいなモノでもしますか？

ハンターたちがこの紅魔館を襲撃してからほんの僅かな時間。クラウスはその糸を使った圧倒的な強さで目の前の人間をスライスしていた。血の匂いが濃く、顔が愉悦を浮かべているのは吸血鬼としての本能だろうか。だが私自身は目の前の光景に吐き気を催していた。

（うぇっぷ。今すぐにでも吐きたい）

しかしながら私の横には妻の魔法で姿を隠した愛娘がいる。この子を前にして無様な姿など見せられようか？いや見せられない。この子自身もまだ人間のスプラッタなど見たことがないため、若干顔が青ざめてはいるがまっすぐ前を見つめている。

（レミリアは俺と違って強いな・・・・？）

だがよく見るとレミリアは立ったまま失神しているではないか。うーむ。この親にしてなんとやら、とは正にこの事だな。まあこの子も女の子だ。進んで戦場などには出て行かんだろうし、後々この子専属の執事にでもレミリアの為に働かせばいいだろう。となると、優秀な執事がいるな。いや、メイドだな。執事ではこの子に『もしも』があるかもしれんからな。そんなことになったらお父さん本気だしちゃうぞ？いや、この子の幸せは願うが、悪い奴に騙されないとも限らないからな。やはり優秀なメイドを雇おう。うむ。我ながらいい考えである。

「旦那様、また変なことをお考えですかな？」

「へ？いやそんなことはないぞ？」

「・・・いつも通りでございますな。少しは緊張感をやらをお持ちください。今は戦時ですぞ」

「わかった、わかったから。ほれ、さっさと残りを片づけて俺を安心させてくれ」

「仰せのままに。御主人様（マイマスター）」

クラウスを送り出したのはいいけど、あいつの怒声となんやら甲高い子供の声がするではないか。まさか子供が紛れ込んでいるのを見てクラウスが怒っているのかもしれない。あいつの顔は顔は怖いからな。怒られでもしたら私でも泣きそうになる顔付きだからなぁ。狼男だから仕方ないといえば仕方ないんだが・・・。しかし、紛れ込んだ子供が心配だ。流石にクラウスも無関係な子供に手を上げるなんてことはしないだろうが一応、な。待っていろ少年。今私が助けてあげよう。

「レミリア、何時まで呆けているつもりだ。先に進むぞ？」

「ふぇ？あ、ハイッお父様！」

・・・やっぱりお前は私の娘だよ。

「遅い登場ですね吸血鬼。私たちに臆しでもしたか？」

「笑止。俺が出るまでもないと踏んでいたのだがな。そこの執事があまりにも使えなかったようだ」

「一撃で沈む執事に隠れている吸血鬼なんて、僕らの敵じゃないね」

「殺人者だな貴様ら」

「さっきの執事は人だったの!?」

「?いや違うが」

「「違うんかい!!」」

馬鹿にするつもりがそのまま返ってきましたよ。なんなんですかこの吸血鬼?こっちはさっきから肌にビンビンくる妖力やら魔力やらに当てられて殺気立ってるのに、飄々としてから調子狂うんだよ。

「しかし以外だ。貴様のような子供が騎士とはな」

「は?」

何言ってるのこの人。なんで僕が騎士なの?

「僕って何時の間に騎士になったんだ?」

「そんな訳ないでしょ大和さん。服ですよ服。紛らわしい服着るからですよ」

「何だって!?この服は大切なんだよ!?これも今回の作戦のために・・・」

「んん!!お前は騎士じゃない。それでいいんだな?」

「全くもってその通りです!あんな不意打ち狙って貴方を倒そうとする不良騎士と同じにしないでください」

あんな騎士と同じだなんて怖気が走るよ。
どうやらあちらもいい具合に調子が狂ったみたいでいい頃合いです。

「・・・・・・あれ?」

なんで皆コッチ見てんの?僕なんかしたっけ?

「あ~、大和さん?今思いっきりケビンさんの存在ばらしましたよね?見てくださいよあの吸血鬼を。過剰なまでに障壁張って待ってるじゃないですか」

うん?もしかして何の策も無しにケビンさんのバレたの?そりゃないよ。

「そりゃないのはワイのほうやで・・・。全く、お前さんが底なしのアホウやったとは知らんかったわ」

あらら、何処に隠れていたのやら。不良騎士只今参上ってやつですかね？えらく遅い登場ですけどどこでビビっていたのやら。まあ結果オーライってものだ。図らずも邪魔できた僕グッジョブ。

「それでアルフォードだっけ？ちょっと提案があるんだけど」

提案、又の名をお願いと言う。これ重要。

「・・・何だ？」

「僕達と鬼ごっこしません？鬼ごっこというのはですね、鬼が相手を追いかけて捕まえる遊びです。今回の鬼は『吸血鬼』の貴方ですね。逃げるのは僕たち。勝敗の付け方は貴方が僕達全員を捕まえるか殺すか倒すか。逆に僕達が今から二時間、日の出まで一人でも残っていれば僕らの勝ち。もちろん、勝った方は負けた方の言うことを聞くって罰でもつけましょうか。ああ、殺してしまった人の言うことは聞けませんからそれはいいです。生き残った人の願いでも聞いてあげてください。
どう？こちらの提案に乗る？それとも勝負を受けずに僕達を今ここで殺す？しないよねぇ。誇り高い吸血鬼が勝負を受けないなんてないよねぇ」

Ａｈａｈａ何言ってんだこの屑野郎！！とか思ってるんだろうねー。でもごめんね、僕が死なないにはこれがいいんＤＡ☆逃げるだけな

ら自身がありますから!!これでも賭けなんだけどね。賭けにもなんないし、馬鹿みたいな提案なのはちゃーんと分かってますよ?もちろん次の策も用意してるけどこれに乗ってもらうのが一番なんですよ。死なない確立を少しでも上げる為には、ね。いやしかし、こんな馬鹿な提案に乗るなんて馬鹿な人はそうそういないはず・・・

「いいだろう（それのほうが俺も気が楽だし、何よりも殺さなくてすむ）ボソ」

ええんかい!?思わずケビンさんの口調がうつったけど本当にいいんかい!?今即答だったよね?いいの?こんな馬鹿な提案に乗っていいの?

「しかし、ククク・・・。ハーハッハッハ!!面白い!吸血鬼相手に提案などとはな!?貴様のような愛すべき馬鹿が未だ存在しているとは面白い、面白いぞ・・・!」

するとどうしたことか、目の前の存在は体を曲げながら笑いだした。その姿からは今まで以上の威圧感が発せられており、目の前の存在から溢れだすオーラに当てられた僕の身体はガタガタブルブル。隣の貴方もガタガタブルブル。はぁ。美鈴の言った通り、これはやっぱり相手にしちゃいけない相手だった・・・。

「ならば逃げるがいい!俺の目の前から犬のように!!　Ｈｕｒｒｙ!!　Ｈｕｒｒｙ!!!!」

「ッ散開！！」

ケビンさんの合図で皆必死に逃げていく中、僕は逃げるフリをして自身の周囲の空間に幻術を掛けて姿を消す。しかしあの絶対的強者のもつ狂ったかのような死の雰囲気に呑まれなかった人はいったい何人いたのだろうか？逃げ出したい、アイツだけは相手にしちゃいけない。そんな生き物の持つ防衛本能が僕にそう訴えてくるけど、僕が踏ん張らないとこの作戦は潰れてしまう。

邪魔した分はきちんと自分の役目を果たさなきゃね。
バケモノが皆を捕まえに行った後に幻術を解き、僕はこの作戦に一番重要な魔法陣の作成に掛かった。

「ねえ貴方、さっきからそこで何をしているの？」

「え？」

振り向いた先には一人の青い髪をした少女がいた。
えーと、こういう時って何すればいいのかな？やっぱり自己紹介？

「えっと、伊吹大和です。ハジメマシテ」

「ふぇ？あ、どうもご丁寧に。私レミリアっていうの。レミリア・スカーレットよ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・はあ！？

鬼ごっこみたいなモノでもしますか？（後書き）

じらいです。もうすぐ５０話ですね。
どうする？せっかくなので５０話になにか特別編でもしようかな、と思ってます。案としては

１）妖怪の山で天狗・河童たちと遊ぼう　２）蓬莱島で輝夜と遊ぼう

の二つのうちどちらかかな？こっちが見たいーってのがあったら言って下さいねー。無かったら強制的に１）をするか、スルーしますｗ

関係ないですけど、相棒が終わって悲しいです・・・

超番外　蓬莱島で輝夜と（前書き）

本編続きではないです。『蓬莱島で輝夜と遊ぼう』をお送りします。

超番外　蓬莱島で輝夜と

アキナ達、つまりは輝夜と師匠を狙ってやってきた月の部隊を退けた翌日。弟子の初陣にして初勝利、月部隊に勝利したという名目での宴会が開かれていた。とはいっても元々四人しかいないこの蓬莱島では宴会と呼べるほどの規模ではないのかもしれないが、それでも心から湧き出る喜びの気持ちは宴会のそれであった。

「大和君、今日は無礼講だ。心ゆくまで私の酒を飲みたまえ。浴びるほど飲んでも今日は誰も文句は言わない」

それは嬉しいですね！母さんや姉さん、鬼の皆はすごい酒豪だから僕もお酒を飲む機会というのは多かったんですよ！僕自身はそんなに強い方じゃないから母さんたちの宴会には最後までついて行けないけど、お酒を飲んだ時のあの高揚感は最高ですからね！！

「ほら大和、注いであげるからお猪口出しなさい」

「ありがとう輝夜。ほら、おかえし」

「どうも」

輝夜も何時も着ている服ではなく、都で着ていたと言うかぐや姫の衣装に身を包んでいた。なんでも宴会なんだからそれに相応しい衣装じゃなければ駄目だとか言ってたけど、誰の目もないから別にいいんじゃないかなぁとは心で思うだけに留めておいた。藪蛇はご免だ。

「んっんっん、ふぅ」

「いやぁ、いい飲みっぷりですね輝夜姫」

「自棄にもなるわよまったく・・・ボソ（いったい誰のためにおめかししたと思ってんのよ）」

「ん？どうかしたの？」

無礼講での宴会で楽しめない人がいたとなっては鬼の名が廃るってもんだ！これは何か僕が一芸を見せるしかないね！

「永琳・・・私挫けそう」

「がんばりなさい。どうもそこらへんの調整も出来てなかったみたいだから」

「一番大和！笛吹きます！！」

ピーロロロ～ピ～ロロロ～。心の赴くままに笛を吹く。僕は未だに笛吹けないから適当に笛を吹く～。宴会だから誰も文句も言わないだろうしね～。（？既に酔ってます

「ちょっと！？その無駄に頭に響く笛止めなさいよ！」

「えぇ～～～！！何でぇ！？」

「大和君。君は笛と言うモノを舐めているのか？たしかに音楽に心が必要だ。だがな、それにはある程度の腕が必要であってだな・・・・・・・・・」

あっはっは！師父、それ岩ですよ！少し飲んだだけで酔っぱらうとかお酒に弱いですねぇ。あと僕って何時から岩になったんだろうね？いくら岩みたいに身体は堅く鍛え上げられたとはいえ、僕はまだ岩じゃないよ？

「はぁ。大和、その笛を輝夜に渡してみなさいな。きっと素敵な音色を聴かせてくれるわよ？」

「そうなの？じゃあ輝夜お願い」

「仕方ないわね、特別よ？私がこんなサービスするなんて、帝にすらないんだから」

とは言っても、笛を吹くのは久しぶりだ。上手く吹けるだろうか？と言うかその前に、これって間接・・・！？いやいや、関係ないわよ輝夜。『直接』したわけでもないのに動揺するなんて、そんな乙女ではないはずでしょう！いや、私は乙女だ・・・・って誰がそんなこと聞くのよ！？ええい！吹けばいいんでしょ吹けば！！

「二番輝夜！笛、吹くわよ！！」

「へぇ～。流石は月のお姫様ってやつだねぇ。上手いねぇ」

「まぁ、教えたのは私だけどね」

「師匠が教えたんですか？」

「ええそうよ。立派な淑女に育てるためにそれはもう苦労したわ。それなのに・・・」

「あのお転婆ですからねぇ・・・」

お察しします。さぞかし落胆したことでしょう。

「・・・ねぇ大和、一つ聞いていいかしら？」

「何ですか？」

「・・・どうして私を許したの？」

どうしてって言われても・・・。僕は別に直接被害を受けた思いがないから別にいいや、程度にしか考えてなかったんだけどなぁ。

「差し出がましい質問だとはわかってる。でも聞いておきたいの」

「そうですね・・・。一つは前に言った通り、僕の今があるのは貴方が居たからだということ。あと一つはまあ、なんとなくですよ」

「大和、私は真剣に「だって！」？」

「だって・・・産みの親を恨んだり憎んだりなんて、そう簡単に出来るものじゃないですか」

「あ・・・」

「僕には伊吹萃香って母さんが居るけど、師匠も僕の母みたいなものなんですよ。母をそんなふうに思うわけないじゃないですか。・・・さ！この話はもう止めましょう！輝夜がせっかく吹いてくれてるんだからそっちを見てましょう」

言いたいことだけ言って話を切り替えた。酒の席とはいえ恥ずかしいじゃないか、こうやって自分の想いを正直に打ち明けるなんてことは。だからいくら僕の頭を微笑みながら撫でたって振り返るなんてことは決してしない。そう、決してしない。

飲んで食べて、いっぱい笑って楽しい宴会となった。師父なんかが酔っぱらって暴れだした時は流石に酔いが醒めたけど、それ以外は楽しい飲み会であった。

そして宴会も終わって、そろそろ床に着く時間となった。でも「風に当たってくる」と言って出て行った輝夜が中々帰ってこないので、師匠の命で探しに行くことになった。当人は海が眺める高台にいたのですぐに見つかったのだが、

「なーに黄昏てるの？」

「別に・・・。私だって一人静かになりたい時だってあるの」

そりゃそうだ、と呟いて輝夜の隣に腰掛ける。

お互い一言も話さずに、夜空に浮かぶ月を見ていた。結界を破られたからか、久しぶりの夜空が頭上には広がっていた。

「ねぇ大和、聞いていい？」

「今日は質問されっぱなしだね・・・。何？もうなんでも答えるよ？」

「私も守ってくれる・・・のよね？」

「？守ったじゃないか。今更何を言ってるの？」

「そうじゃないわよ。だから、えっと。あんたの中で私って何なのかなって・・・」

「友達じゃないの？」

思えば輝夜は山を出てから二人目の友人になるのかな。一人目は言わずもがな妹紅である。あ、妹紅といえば輝夜との問題があるんだっけ。嫌だなぁ、なんか巻き込まれる気がしてきた。

「友達、ね。ま、今はそれでいいわ。それよりも、大和は他にどんな友達がいるの？」

「ん？そうだな・・・。鴉天狗の文に河童のにとり、後は不死の妹紅だね。ってあれ？案外少ない…」

「おまけに全員が女じゃないの・・・」

そう言えばそうだ。男の鬼も大勢いたんだけど、誰もが僕より年上で、友達というよりかは兄ちゃんみたいな人達だったから仕方がないといえば仕方がないんだけどね。

「これは私もうかうかしてられないわね…」

「何か言った？」

「あんたが大きくなったら厄介だって言ったの」

なんだそれ？大きくなった僕は輝夜を簡単に倒せるぐらいになるってことで厄介と言う事なのか？どうせあんたの考えてることは外れてるわよ、なんて言ってまた月を眺め始めた。どうやらもう相手にされていないようだ。

「・・・やっぱり月に帰りたい？」

「ううん、そうじゃないわ。ただ、思い出してただけ」

そう言う輝夜の顔には少しの自嘲が含まれているように見えた。

「ふふ、別に今更月が気になるわけじゃないわ」

「じゃあなんで・・・？」

そんな泣きだしそうな顔で月を見上げているの？

「もう、なんでもないって言ってるでしょ」

「てっ輝夜！？」

隣に座る僕に身体を預ける形でしなだれかかってきた。僕を見上げる顔はやや上気したようで、いつもよおり艶やかに、美しく見えた。

「ねえ大和。月が綺麗ね・・・」

ああ、そうだね。とは答えられなかった。僕は男であって、輝夜は女である。詰る所、あまりにも突然の輝夜の行動にドギマギしてしまっていたのだ。

「もう少し、このままでいましょ」

「はい。輝夜姫」

だから僕にはそう応えることしかできなかった。

「月が綺麗ね、か。あの馬鹿は結局のところ解ってないんでしょうね・・・・」

輝夜が言った『月が綺麗ね』という言葉。その意味は今で言うと『私は貴方を愛している』。だが当の本人は気付いていないだろう。それが輝夜に見惚れていたと彼女が知れば、それは喜ぶのだろうか？それとも聞き逃したことに怒るのだろうか？どちらにせよ、彼が彼女のキモチに気がつくのはまだまだ先であることには変わりないだろう。

超番外　蓬莱島で輝夜と（後書き）

これを読めているということは、皆さん大丈夫だったのでしょうか？何の力もない私には祈ることしかできません。ですが自分に出来ること、おそらく募金程度でしょうが、少しでも被災した皆さまのためになることをしたいです。

・・・さて、今回の話は５０話記念ということでちょっと妄想リミッターを外してみましたけどどうでしたか？甘かったですかね？私は書きながら悶えてましたｗｗなんかこう、輝夜かコイツ？とか思ってしまいます。

『天狗と河童と遊ぼう』についてはまた次の機会ということで。

何だこれは？／どういうこと？（前書き）

本編の続きです。しかし昨日上げた輝夜が尾を引いているのか、頭が桃色空間でいっぱいだ

何だこれは？／どういうこと？

ああ困った、いったい何だこの状況は。子供を救おうと思い駆けつけた所にはハンターたちがいっぱい居た。おまけにその子供が騎士みたいな格好している上にクラウスは伸びている。だれかこの状況を説明できる者がいるのなら説明してほしい。いったい何が起こっているんだ？

「遅い登場ですね吸血鬼。私たちに臆しでもしたか？」

臆す？別に臆した訳ではないぞ？争いが嫌いなだけであって、断じて臆しているわけではない。
そのあともなんやかんや言ってくる相手を適当に相手をしていると鬼ゴッコをしないか？との提案がされた。

うむ。殺さないですむのならまだマシだろう。適当に脅かして帰ってもらおう。

「しかし、ククク・・・。ハーハッハッハ！！面白い！貴様のような愛すべき馬鹿が未だ存在しているとは面白い、面白いぞ・・・！」

しかし毎回思うのだが、俺はなんでこんなに演技が得意なのだろうか？隣で娘が見ている（周りからは見えてない）からではないのだがな。妻やクラウスはこんな俺だからいいんだとも言うし、正直何がなんやら・・・。まあそれはいい、もうひと押しくらいしておく

か。

「ならば逃げるがいい！俺の目の前から犬のように！！　Ｈｕｒｒｙ！　Ｈｕｒｒｙ！！　Ｈｕｒｒｙ！！！！」

「ッ散開！！」

うむ。力を入れて脅かしたおかげでほぼ全てのハンターはそのまま帰るだろう。クラウスなんかは『紅魔館の敷居を跨いだ者を生かして返すとは――――――』などと言うだろうが、俺は別に構わないのだけどな・・・。クラウスはそこら辺の融通きかないからな。

「全員帰っただろうが、一応探しに行くか」

レミリアにも私が離れればシルフィの所に帰るように、と言ってあるから別に問題はないだろう。

「では言ってくる」

それでも一応声はかけておく。返事は聞かないが。

「でね、私はお父様の強い姿を見るために隠れて見てたの」

「へー、そーなのかー」

あ…ありのまま　今　起こった事を話すぜ！

吸血鬼封印（一時的）の魔法陣展開準備をしていたら後ろには吸血鬼（幼）が立っていた・・・
な…何を言ってるのかわからねーと思うがおれも何をされたのかわからなかった…

恐怖で頭がどうにかなりそうだった…
幻術だとか寝ぼけてたとか、時がずれていただとか、そんなチャチなもんじゃあ断じてねえ
もっと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ…

「それで、貴方みたいな子供がどうしてお父様を？」

「いや、君だって見た目子供じゃないか。これでも僕は１００年以上生きている・・・ハズ」

「え？じゃあ貴方も妖怪なの？」

「特殊な人間もいるってことだよ」

思えば馬鹿みたいな生活をしているからなぁ僕って。全部自分が望んだことだけど。

「ねぇ、何かお話してちょうだい？誰も居ないし暇なの」

「・・・作業しながらでいいのなら」

「構わないわ。どうぞしてちょうだい」

「じゃあお構いなく。そうだなぁ。僕の今までの人生『伊吹伝』でも聞いてもらおうか」

さてどうしたものか。あの吸血鬼が吠えたせいで他の奴らは全員逃げてしまった。まあ最初からそうなるように踏んでいたけど、実際

逃げられると腹も立つ。

しかしまあ大和さんも無茶を言ってくれる。罠を張り終わるまで一人で吸血鬼を相手してくれだなんて。まあ予想外なことに一人戦力になりそうな人が残ってますけどね。

「ったく、とんだ災難や。まさかこんなことになるとは」

「おや？随分雰囲気がかわりましたね。今までは猫の仮面でも被ってましたか？」

なるほど、これが本来の貴方というわけですか。初めて会った時から可笑しいとは思っていたんですよ。大和さんは気付いているかわかりませんが、新米騎士と言う割には闘いの残り香が強いこととか、ね。今私の目の前にいる人は初めて会ったケビン・フォレストではない。歴戦の騎士、おそらく名を広めさせる事もなく相手を仕留めることの出来る手だれだ。

「別にそういうわけじゃない。それにオマエも人の事を言えないだろう？知っているぞ紅美鈴。お前の経歴、犯した罪、伝説とまで言われた紅龍。もっともあの甘ちゃんは何にも知らんようやけど」

最後にいつもの調子でニカッと笑いそう私に言う外道。コイツ・・・知りあって僅かな間に私のことを調べ上げたとでもいうのか？

「しかしそれも遙か昔の事。そして『オレら』の管轄でもないから黙っとったるさかい。今はお互い生き残ることを考えへんか？こうなったらにはあんたらに付き合うたるさかい」

「随分と潔いですねぇ。まだ何か隠してます？」

「いろいろと、な。でもまあ、あのバケモン狩るのが仕事やからその辺は信用してや」

まあいいでしょう。後ろから撃たれるのは私も嫌ですし。協力しないという選択肢はない。目の前の脅威と対峙している間は。

「やれやれ、こうも簡単に見つかるとは。お前達本当に逃げていたのか？」

思いっきり貧乏くじですね。大和さん、死んだら枕元に立ってあげますから覚悟しといてくださいよ。

「とりあえず逃げ続けましょう。私が前に出て引きつけますんで、サポートお願いします」

「オレ向きの仕事やな。任せとき！」

当人たちにとっては命を懸けた鬼ごっこが始まった。

「で、アキナは今頃は月で頑張っているんだと思う。何ていうかこう、解るんだ」

「それでそれで!?月のお姫様はどうなったの!?」

「輝夜を狙った月の使者を千切っては投げ千切っては投げ、一人でやっつけた大和さんのおかげで無事逃げおおせることが出来たのだ!」

「すごい!大和って強いのね!!」

「そうとも!この星の平和は僕が守ったのだ!はっはっは!」

大和です。キラキラとした瞳で見つめられてしまって話を誇張してしまいました。あっはっは、仕方ないよねぇあんな眼で見つめられたら誰もやっちゃうよ。そう思うことでしか自分を保てません。と言いますか、輝夜にバレた時が怖いです。笑われること間違いなしなので。自分で撒いた種なんですけどね。まっまあ、バレなきゃいいんだよ、うん。

「いいなー。私もお外の世界が見てみたいな・・・」

「うん？レミリアは外に出たことがないの？」

「うん。お外は危険がいっぱいだからってお父様に禁止されてるの。その代わりにお父様がずっと遊んでくれてたんだけど、流石に飽きちゃった」

ふーん。あの吸血鬼も可愛い娘には敵わないのか・・・ってあれ？何か変じゃないか？ケビンさんは人が襲われているのはアルフォード・スカーレットの仕業だって言ってたよね。でも、レミリアの話では此処から出てないみたいだし・・・？

「ねぇレミリア、お父さんは最近も紅魔館から出たことないの？」

「うん、最近は特に。今度私に妹ができるの。だから赤ちゃんがお母様の中にいるって分かってからは付きっきりで、私の相手もしてくれないのよ？『メイドのカリーヌがいるから大丈夫です、それよりもレミリアに構ってあげて』ってお母様が言っても聞かないの。それに私が知る限りじゃお父様って一歩も外に出てないんじゃ・・・

。私もだけど・・・。あれ?これってもしかして引き籠りってやつ?私たちってもしかして引き籠りなのかしら・・・?」

「引き籠りかどうかは別として、僕ら君のお父さんが人を襲っているって聞いて退治に来たんだけど、何か僕達誤解してたみたいだね・・・」

「それはそうだろう。旦那様は進んで人を襲うような真似は決してしない。そしてしたこともない」

ッ後!?

「そう構えるな。私はもう一度敗れた身だ、妙なマネはせん。それよりも聞きたいことがある。旦那様が人を襲ったとの噂だが詳しく聞かせてほしい」

あっあれ?なんで執事さん目覚めているの?どうみても一日は目を覚まさない一発を貰ったはずなんですけど?

「あの程度でやられるほど執事歴は短くない」

執事っていったい何なの・・・。執事っていう種族でもあるのか？

しかし、う～ん、まあ大丈夫かな？この執事も妙なマネはしないって言ってるし、僕も事態がよくのみ込めてないから情報が必要だし。

「えっと、じゃあ僕の知っていることを話しますね。

アルフォードは欧州の妖怪を統べていて、人にとって非常に脅威となっていたけど退治までには踏み切られなかった。けど最近になって紅魔館周辺で吸血鬼に襲われたと思わしき人が急増してきて、事態を重く見た騎士団は討伐を決めた。それで僕らはアルフォード・スカーレットの退治を手伝ってくれって言われて来たんだけど・・・？」

「それはないな。旦那様は此処から一歩も出ていない。そして襲った者だが、心当たりがある」

「その心は？」

「旦那様の弟君だ」

つまり襲っているのはアルフォードじゃなくてその弟ってことなのか？もう何が何だかわからないよ。

何だこれは？／どういうこと？（後書き）

久しぶり？に二日続けて投稿します、じらいです。前書きにもあったように、一日中頭が桃色でしたｗもう書けないよあんなの・・・。輝夜のターンはこれで終わりダヨ！書けと言うならネタをくれ！そして感想をくれｗｗ

争いの始まりは誤解から（前書き）

ヒロイン1人の小説を書いているつもりが、気がついたら微ハーレムになりかけていた・・・。と言う事で、そういう事です。わけがわからないよ。

争いの始まりは誤解から

こういう形では初めてですかね？皆のお姉さん紅美鈴です。
逃げ続けてどれくらいたったでしょうか。私とケビンさんは思いのほか逃げおおせることが出来ています。

「そら、もっと避けてみろ！」

パワー・スピード共に最強種である吸血鬼であることに変わりはない。だけどもこの吸血鬼の攻撃はとても読みやすい。実際に私とケビンさんも服を掠る程度にしか攻撃が当たっていない。舐められているのだろうかと思い接近戦を仕掛けてみると、これまた驚いたことに気が着いた。

この吸血鬼は闘いを知らない。

おそらく、と前には着くが、この吸血鬼は戦闘経験が極端に少ないのではないだろうか？私たち程の強さを誇る妖怪ならば闘いにおけるカンというモノを誰しも少なからずは持っているものです。例えばそれは敵の隙を瞬時に見つけることであったり、相手側の手の内を見切る目を持っていることであったり、戦闘においては重要なファクターであることは変わりはありません。

だがこの吸血鬼にはそれが感じられない。

戦闘経験の少ない大和さんでさえ、多少のカンを持っている。彼には修行で見に着く程度でしかないが、確かに身に付いている。だが目の前の存在はどうだ？闘いの『た』の字も感じられないではないか。それを証明するために一つ隙を見せたのだが、私の予想通りそれを見つけられることはなかった。

「ワイもう限界やー誰かたすけてーやー」

「うわーわたしももうダメですー」

つまりは力があるだけの素人。私にとって脅威に成り得る存在ではないということだ。

あははー大和さん、この吸血鬼は力だけみたいです。敵の力を往なせる貴方が直接闘ったほうが楽にすんだかもしれませんねー？

「弟・・・。お父様って弟がいたの？」

「お嬢様。しばし難しい話をしますので耳を塞いでおいてください」

「却下で」

「・・・では聞いていないフリをしていてください。

旦那様にはフィナンシエという弟様が居られるのだ。二人は仲も良く、共に召使いの私を困らせては笑っていらっしゃった。お二方とも心優しい方だったのだが、ある日を境にフィナンシエ様は変わってしまった。私は私用でその場に居なかったから詳しいことは知らない上に、旦那様も何も語らぬので当時の事は何一つ解らないままなのだが。

出て行ったフィナンシエ様の行動は早かった。これは旦那様は知らぬことであるが、同類である吸血鬼を殺し尽くしたのだ。何故かは

解らん。だが嘗ては妖怪の中でも一大勢力だった吸血鬼も、今となってはこの紅魔館に住む旦那様とシルフィーユ様、あとは此処におられるお嬢様と新たに産まれる妹様だけになってしまった。

そして旦那様は此処から一切出ていかない引き籠りだ。なので今回の事件はフィナンシエ様が起こしたとしか考えられないのだ」

「そのシルフィーユって吸血鬼が起こした可能性は？」

「身籠ってからもう長い。何時産まれるか解らないのに出歩く者は妖怪にも居ない」

なるほどねぇ。つまり僕らの勘違いだったってわけだ。おまけに吸血鬼アルフォードは人を襲ったこともない、と。証拠はないけど。だとすると、騎士団も上手く躍らされたわけだ。当然僕達も。せっかく魔法陣も書き終わったのに無駄骨だとはこれ如何に。はぁ、美鈴が帰ってきたら僕達も帰らしてもらおう。

「勘違いしてすいませんでした。連れが帰ってきたら僕も引き上げていいですかね？」

「別にかまわん。私達とて騎士団とコトを起こしたくないのでな。説明もして貰えると助かる」

「お安い御用です「ちょっと待ちなさい」？」

「貴方、ここに住みなさい」

・・・・・・・・・・・・・・はあ！？

「言ったでしょ？私暇なの。大和は魔法使いに成りたいんでしょ？ならここで成ればいいわ。ここなら魔道書も沢山あるし、なんたってお母様は今世紀最強の魔法使い兼吸血鬼よ！！」

「待った待った！ケビンさんが魔法使いになる援助をしてくれるって約束があるんだ！だからもういらないよ！」

そう。吸血鬼退治に助力すれば魔法使いになる手伝いをして貰えるとの約束がある。紅魔館なんて騎士団が目の付けている場所なんかより、世間公認の聖堂騎士団の下で成ったほうが大分いい。

「ダーメー！コーコーにーすーむーのー！！」

「腕を引っ張るんじゃありません！」

こんにゃろ、チョップしてくれるわ。うーうー☆なんて涙目になっても大和さんは落ちませんよ！

そうこうしていると、通路の方から爆音やら可笑しな声が聞こえてきた。もうダメですー、なんて全然平気そうだね美鈴。

「あ！大和さんお久しぶりですね！どうぞ魔法陣を！！」

「あ、その件だけどね「貴様！レミリアに何をした！？」へ？」

レミリアに何をした！？ってぺしぺしと頭を叩いただけですけど？吸血鬼なんだからこれくらいなんともないでしょ？そう思ってレミリアを見るとなんと泣きべそをかいていた。

「お父様・・・？」

なんて声を上げて父親を見るレミリア。あ、涙こぼれた。

「貴様ーーーーーーーー！！！」

「誤解だーーーーーーーー！！！」

「娘を泣かす者は許さん！！」

「ちょ！？それ誤解ですって！！」

「聞く耳もたん！！」

「この親馬鹿・・・話を、聞け！！」

クソ！美鈴たち何であんなに余裕があったんだ！？噂に違わぬ実力じゃないか！付いていくすら出来てないじゃないか！？

「大和君下がれ!!」

!?大量の矢がアルフォード目がけて降り注ぐ。アルフォードが矢を防いでいる間に、僕は美鈴とケビンさんたちに合流する。

「いったいどういうこと?美鈴たちの様子から、だいぶ余裕があると思ったんだけど・・・?」

「私も驚いています。今まではこんなことなかったのに何故か急に・・・」

「今までとはまるで別人や。大方、大和君があの子供を泣かしてるのを見てブチ切れでもしたんだろう」

「「・・・・・・・・・・・・・・・」」

なっなんだよ二人とも!?僕が悪いって言うの?

・・・えぇえぇわかってますとも、前々から思ってましたとも。僕って人を逆撫でするのが上手いんじゃないのかなぁって。それが今回も上手い具合に作用したみたいだね・・・・・僕の大馬鹿野郎!どうしてこうなるんだよ!?

「こうなったらもう仕方ない、殴ってから話をしよう。ほら、拳で語り合うのって美鈴もケビンさんも得意でしょ?」

「「一人でやれこの馬鹿野郎」」

僕に対する二人の反応に感涙を隠せません。

「死ねこの糞餓鬼が！」

「「どわー！？」」

危ない！話を聞く気もなく、こちら（特に僕）を狙った魔力弾を放ってくる。ああもう！これだから親馬鹿は！！

「とにかく大和君の言う通りにするしかないな。叩きのめすで！！」

ケビンさんの声を皮切りに、僕と美鈴は同時に突っ込んだ。

「「だぁッ！！」」

地面を踏みしめ拳を放つ。僕と美鈴の使う武術は地に足が着いている方が威力を増す。なので空中で闘うよりも地面に貼りついて闘うほうが得意なのである。もちろん空中戦が出来ないというわけではない。美鈴は気を使って空を歩いたり蹴ったりすることが出来るし、僕はそれに加えて簡単な魔法陣で足場を創ることが出来る。だが、やはり地面での闘いの方がやりやすいことに代わりはない。なので

僕も地上戦ではそれなりに自信を持っているのだが、

「速い！？クソ、当たらない！」

「動きは素人そのものなのに！」

美鈴の言う通り、アルフォードの動きは素人そのものだ。だけど素人故に無茶苦茶なその動きが読みにくい。それがやっと目で追える程の早さになれば尚更だ。

「ワイを忘れるなや！！」

僕らがまだ一発貰っていないのは、ケビンさんの神がかった援護があるおかげである。戦力とは数えてなかったけど、今この状況に於いては無くてはならない存在にまでなっている。

「一発当てれればこんな奴・・・」

「なら当ててみるか？」

「え？」

突如、アルフォードの動きが止まる。メッチャ舐めてるね僕のこと。だったらお望み通り一発イイヤツをあげようじゃないか。悪いけど、

一撃で眠ってもらうよ！特殊な呼吸法を用い、身体を一つの弾丸とする――――――――――――

「砕月！！！」

アキナを沈めた僕の最高の一撃。この技の威力は美鈴の持つ技には決して負けず、むしろ勝っているほどの技だ。これをノーガードで喰らったら如何な吸血鬼とはいえ・・・

「この程度か？笑わせる…」

「な！？うわッ！！？？」

！？迫る右腕を受け止める。あ、危なかった。瞬時に防御の魔法陣を組めていなければこの首とはおさらばすることになっていただろう。防げたといっても僕だけの力ではなく、咄嗟に張ってくれたのであろうケビンさんの障壁のおかげでもある。

「無礼るなよ人間。今お前の目の前に立っているのは最強の吸血鬼。人間如きの技など児戯にも劣る」

空中からそう告げる最強種。人間の技が児戯だって？フザケてるね。僕ならいくらでもバカにしてもらっていいけど、その技を授けてくれた師匠を馬鹿にするのは許さないよ・・・！

「言ってくれるね吸血鬼。なら人間の底力ってやつを見せてやる」

さあ、ふざけた親馬鹿をブッ飛ばそうか！！

・・・デキルカナァ？

争いの始まりは誤解から（後書き）

紅魔館が出てしまえば微ハーレムへと路線を変更せざるを得ない、じらいです。だがしかし、最後には1人に絞るのが男ってもんだ？そこは譲らない！つまり何が言いたいかと言うと、浮気性な作者を許してやってくださいｗｗ

努力は才能を超える、そう信じる！（前書き）

福島原発・・・どうなってしまうんだ？ただただ祈るばかりです

話しの展開が早いですがすいません

努力は才能を超える、そう信じる！

まるで台風だ。血のように真っ赤で強大な魔力・妖力を纏いながら突撃してくるアルフォードと闘い始めてどれほどたっただろうか？１０分？３０分？それともまだ１分しか経っていないのだろうか、凌ぎ続けてきたけどそろそろ限界が近い。と言うのも、こちらは耐えることしか出来ないからである。馬鹿みたいな威力の弾幕を放ってこちらを牽制し、それの対処に追われているとその力を十分に使った接近戦を仕掛けてくるからだ。その牽制する弾幕にすら強い力が込められているからだ。僕と美鈴は最低限の弾のみを躱し、或は強化した腕や足で弾いてアルフォードを迎え撃つ体勢を整える。ケビンさんは後方で僕らに襲いかかる弾を撃ち落としてくれている。自分も躱すので精一杯だろうにこちらを援護してくれる余裕があるなんて、常時ならば関心してしまうことであるのだが、今の僕にはそんな余裕はない。

「このままじゃジリ貧です・・・。私が前にでます！大和さんは私のフォローを！」

「僕だって闘えるよ！」

「分からないんですか！？あなたの手に負える相手じゃない！私でも通用する分からないんですよ！？」

「それでも、僕には力があるんだ！！」

確かにパワー、スピード共に強大だ。更にまだまだ上がり続けてい

る。けどね、そんな格上すらも想定した修行というものを僕はしてきたんだ！

流水制空圏、発動！パワーもスピードも僕より上ならば、相手の流れに身を任せてやる！

アルフォードの目を見て心の『流れ』を読む。見える！僕にもお前の心の流れが見えるぞ！！

「ヒュウ♪大和君もやるねぇ。美鈴ちゃん、援護はしたるさかい、大和君のフォローしたり」

「もう！人の気も知らないで！！」

「無駄だよアルフォード。あなたの動きは全て読めている」

流水制空圏を発動している僕に死角などない。視覚外から攻撃が来たとしても、薄皮一枚まで絞り込んだ制空圏がそれを察知してくれる。もしくは心の流れで攻撃の意図が読めてしまうのだから。・・・だけど何だ、この心の中のモヤモヤとした感覚は？アルフォードの

心の中は『キモチワルイ』。

まるで何かを必死に泣き叫んでいるような感覚に、頭が痛くなりそうだ。はっきりとは読み取れていないけど、これは悲しみ?憎しみ?痛み?負の感情であることにはかわらないだろう。

「だろうな。現に俺の攻撃は貴様にクリーンヒットしていない」

「分かったなら僕の話を聞いてください」

これ以上叫ばないで。頭が割れるように痛む。

「分かる?何を分かれというのだ?」

「・・・誤解しているって言ってるんです」

これ以上覗いたら、戻れなくなる。

「それがどうした?そんな事は関係ない。レミリアが泣いている。俺にはその事実だけでいい」

・・・引く気はまったくない、ということですか。それでも僕が有利だという点には変わりはしない。それにお前が相手をするのは僕

だけではないんだ。美鈴やケビンさんも相手取らないといけない。
ちなみに執事はレミリアを抱いてもう避難済みだ。悪いけど、頭が冷えるまで叩くか、逃げるかさせてもらうよ。

「例え動きが読めても、超のつく速さには付いては来れまい」

「は？」

突如、視界がブレた。何をされたか理解できたのは身体を壁に叩きつけられて痛みを感じることが出来てからだった。

「大和さん（君）！？」

「まず一人。次は貴様らだ」

「チッ！美鈴ちゃん！！」

「わかってます！！」

主に額から出血している様だけど、あの程度で大和さんが死ぬことはないだろう。今はコイツをどうにかしないと・・・

「防御は全部オレが引き受ける！気にせず行けや！！」

「上等！！」

「フン！雑種ごときが」

迫りくる弾幕の防御を任せて接近する。が、それでも眼では追えない速さにまで加速してきている。付いていくことがやっとの状態だ。だから気の動きを察知して、なんとか動きを感じ取ることで凌いでいるのだが、これもいつまで続けられるか・・・！

「アカン動きが速い！障壁が間に合わん！！」

「これでトドメだ！」

「しまッツ！！？？」

アルフォードの手には紅き魔槍が握られていた。私を三度殺しても足りないであろう程の力が今まさに解き放たれようとしていた。

「獲っっったァ！！」

パキン。そんな軽い音と共に魔槍は砕け、アルフォードの動きが止まった。

「！・・・これは」

「吸血鬼封印の、魔法トラップっだ…。ハァ…礼装で儀式的付加価値を強め、ハァ…教会で使われる魔法陣を引き、儀式杖でそれを起動する。…必要ないと思っていたけど、上手くいってよかった」

全身血塗れ、肩で息をして満身創痍ながらも、僕ははっきりとそう言った。P312に載っていたのは吸血鬼封印の魔法。遙か昔より続く人と吸血鬼の争いにおいて、もっとも有効だと言われている魔法の使用を知ることが出来たのは僥倖だといえるだろう。だけど僕如きが単身で使えるはずもなかった。だから礼装などを用いて付加価値を利用すると考えたんだ。それでも一時的な上に、僕のほぼ全ての魔力を持って行かれた。

「簡単だ、吸血鬼」

事前の準備さへ出来ていれば最強種とだって闘える。遙か昔から人間は知恵を武器に闘ってきたのだから。

魔法陣に縛られ為すすべもなく俯いているアルフォード。これで少しは落ち着いて話を聞いてくれるだろう。

「話を聞いてくださいアルフォード。貴方は誤解しているんです。僕たちは「クククククク」どうしたんですか?」

「いや、人間如きの魔法でこの私を封印したつもりとはな。笑わせる」

「強がっても無駄やで。一時的とはいえ、大和君の張ったソレはあんたらの一番嫌がる構成でできとるんや。大人しくしたほうが身のためやで」

ホレホレ、とボウガンでアルフォードを突きながらケビンさんが忠告する。

「我々が何の対策もしていないと思っているとは、人間とは愚かな存在だな」

ピシッ・・・ピシッ・・・・。
陣にヒビが!?何で・・・どうして!?

「簡単なことだよ小僧。貴様が対策を練るように、我々妖怪も対策を施すということだ。多少の抑制はあるがな・・・。理解したなら受けるがいい、我が最強の槍を」

――――――――――魔槍　スピア・ザ・グングニル――――――――――

真っ赤な槍が僕の胸を貫いた。

大和君が倒れてから数分、ワイは伝説とまで言われていた力をその目で拝んでいた。目の前で闘っているのは音に聞こえた紅き龍。い

や、龍人とでも言えばいいのだろうか。それにしても形容しがたいものがある。特にこれといって姿が変わったとは見受けられないが、その身に纏った気は明らかに人・妖怪のそれとは一線を画している。吸血鬼にも負けず劣らずの暴れっぷりだ。現にアルフォード相手に渡り合っている。そこに人である自分が入って行ける余地はなかった。もっとも、自分が『全力』をだせば十分に渡り合うこともできるだろう。だが今はその時ではない。確実にトドメを刺せる時を静かに待つ。

胸に魔槍を受け、その衝撃で吹き飛ばされたけど意識はある。でも動けない。胸を貫かれたようだけど、胸に穴が開いている感覚はない。何故かと思い胸に目をやると、どうやら師父にもらったさびた塊が守ってくれたようだ。その塊は紅く発光していた。

（大和君。これを聞いているということは、随分な強敵に出会ったということだろう。なんと言ってもソレの起動条件は大量の魔力を受けることだからね。ところで君は理解しただろうか？人間には努力では超えられない壁が存在するということを。気付いただろうか？人間と妖怪との差を。そして絶望しただろうか？自分の無力を。これはそんな弟子のために師が贈る最後の手向けだ。遙か昔、まだ月人が地上にいたころのモノだが性能は折り紙つきだ。君が自分を貫き通せることを私は願っている）

「起動条件ヲ確認。魔動機関『イクシード』ヲ起動シマス」

ああ、そうですね師父。確かに人間は弱い。貴方の教え受けたとはいえ所詮は人間。それでも妖怪との自力の差を埋めれると思って僕は修行をしてきました。でも結局、僕ら人間には超えられない壁があることを理解しましたよ。でも、でもね、理解できても納得なんてできない。諦めることは簡単だ。でもあの日、母さんに誓ったから。自分の道を進むって！それに師父は間違っている！諦めてはならないと、虐げられるだけの存在であっては駄目だと教えてくれたのは師父じゃないですか！

「引かず、媚びず、己を貫き通す。それこそが伊吹だ」

「その特異な虹色の気・・・貴様龍の末裔か！まさか伝説を拝める日が来るとはな！！」

「それに着いてくるどころか、押している貴方は本当にただの吸血鬼なのか！？」

一合い、二合い。方や型のある武術を駆使し、もう一方は己の思うがままに拳を振るう。そんな楽しい時間。いくら混じり物とはいえ、龍の末裔である私と対等に渡り合える存在など知りもしなかった。全力を用いても倒せない相手がいる。大和さんには感謝しなければならない。これほどの相手と闘えることは、武人にとってはこの上ない幸せだ。残念なのは、この楽しい時間が長くは続かないことだろうか。

「「今この瞬間こそ、力だけが全てだ！！」」

願わくば、刹那の闘争を！

前方で美鈴がアルフォードと闘っている。というかなんだあの気？虹色ですごく綺麗だ。それに力強い。とりあえずここから一発援護射撃といきますか！

「美鈴下がって」

――――――――魔砲　マスタースパーク――――――――

！？後方から莫大な魔力を感じ退避する。すると太すぎる魔力レーザーが私の横を掠めていった。咄嗟に避けていたアルフォードだっ

たが、その顔は驚愕に満ちていた。それは私も同じことだ。それも仕方のないことだろう。あの魔砲が通過したであろう紅魔館の壁は全て吹き飛び、その先には外の景色が見えているのだから。

「ちょ！？今の当たってたらヤバ・・・大和さん？なんで紅く輝いて・・・？」

「ああこれ？なんかの魔動機関の影響みたい。今の僕の魔力は通常の三倍だ！」

そう言った大和さんの全身からは力強い魔力を感じ取れ、その身体はあの魔槍のような深紅に輝いていた。はは、もう笑うしかない。いつも貴方は私の予想の斜め上を行ってくれる。

「でもこれ長続きしないみたいだから。悪いけど、美鈴とケビンさんであいつを削ってくれる？トドメは僕が『アレ』でやるから」

「ブフゥッ！？アレってアレですか！？アレなんですよね！？」

思わず吹き出してしまった。だって大和さんのアレはまだ未完成で成功したことは一度もないから。その破壊力を身をもって体験したからこそ、大和さんの宣言に吹き出してしまった。

「うん。アレだよ」

「アレアレって何言うとんかわからへんけど、信用してええんやな？」

「もちろん！だから時間稼ぎお願いします」

「・・・わかった。いろいろ聞きたいこともあるけどそれは後や。やっこさんも正気に戻ったみたいやし美鈴ちゃん、行くで！！」

「了解です！」

美鈴が接近を試みるのを見て、僕は準備を始めた。アルフォードも美鈴に対応しようとするが、一瞬身体の動きが止まり、顔には苦悶の表情が見えた。おそらく封印の弊害だろう。対抗策を用いたと言っても多少の弊害はある。それが今になって現れたのだろう。アルフォードは後方へ飛翔しながら弾幕を張る。だけど今までの様な力は込められてはいない。その程度の弾幕なら、今の特異な気を放っている美鈴には効きはしないだろう。

「うりゃあ！はぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁだあ！！！！」

肘打ち、裏拳正拳その他もろもろがアルフォードに打ち込まれていく。

「ぁぁぁぁ降華蹴！！！！」

僕がトドメを刺す前に私が倒す！と言わんばかりの気合一線。アルフォードの頭上にとんでもないほどの気が込められた蹴りがお見舞いされた。

「我が魂に刻まれし蒼き刻印よ…神に仇名す者を救う光指す道となれ」

その後に続くのは蒼く光る刻印を背負った聖堂騎士団の騎士、ケビン・フォレスト。彼がこの討伐に任命されたのは単に手が開いていたという理由ではない。彼ならば出来ると騎士団が踏んでいたからである。

「！？」

「守護騎士第七位、ケビン・フォレストや。覚えとき」

――――――――――穿て　空の聖槍――――――――――

天より降り注ぐ無数の聖槍。その一本一本に込められた力は測ることすら馬鹿らしく感じる程である。アルフォードのそれが魔槍であるのなら、これは正に聖なる槍であると言えよう。

そして最後を飾るのは僕だ。

吸血鬼アルフォード。貴方は確かに強く、才能に溢れているのだろう。でもね、それじゃあ『僕たち』には勝てない。

――――――――右手に魔力を――――――――

なんで僕ら人間が武術を、努力をするか理解る？

――――――――左手には気を――――――――

産まれ持った才能の無い人間が有る人に立ち向かうなんて、一や十、百の努力では無理だろうね

――――――――ありったけの量を両手に集めて――――――――

でも千の努力なら？万の努力ならどうなる？

――――――それを合成し、右手に纏わせる――――――

僕が諦めずに歩んでいけるのは

「努力は才能を超えると…信じているから！！！！」

魔力と気。相反する二つの力を込められた一撃が生みだした爆発は遠く離れた場所からでも見ることができたそうな。

努力は才能を超える、そう信じる！（後書き）

ＰＶ２０万ユニーク２万ありがとうございます、じらいです。最近は特に見てくれる人が増えているようで嬉しいですｗ

そこでもう一度、もう一度だけ読者の方に聞いておきたいです。これからの展開ではオリキャラが増え（とは言っても大陸編のみ）、「これ東方関係なくね？」みたいな展開になるかもしれません。一応幻想郷との関係はあるのですが、余分かな？と思う部分もあります。なので反対・賛成あればお願いします。もちろん原作キャラも活躍します。

赤くなれば強くなる！これってもうお決まりなのかなぁ？

気がついたら全部終わってた（前書き）

時代背景や歴史的出来事は飾りです。エロい人にはそれがわからんのです！

ということで、今回出てくることに関してはこの物語だけです。時代も何もあったもんじゃないことを理解してね！！

気がついたら全部終わってた

魔力と気。この二つを合わせてみようと考え付いたのは美鈴である。鍛えたところで所詮は人間、持てる気や魔力には限界がある。だったら二つ合わせてみればいいじゃないですか、との考えから実際にやったところ、爆発。爆発である。初めての行いだったために力を抑えていたから良かったものの、それでも馬鹿げた威力の爆発が起きた。相反するものが生み出すエネルギーは凄まじいものがある。どれくらいかと言うと、鬼の一撃と遜色ないと言えば解るだろうか？だがそれも完全にコントロール出来ればの話なのだが。そもそもこの技は魔力や気による身体強化の代わりとして考えていたのだが、大和にはまだそんな芸当はできず、仕方なしにあの時の三倍の魔力・ありったけの気を込めて殴った結果がアレである。

「つまりどういうことかと言うと、失敗だったんだよ」

「それで巻き込まれたワイの気にもなってくれ・・・」

そして今現在、僕は教会傘下の病院に入院中である。シスターさんがあれこれしてくれてデュフフな日々を送っています。なぜ教会内の医療施設じゃないかと言うと、美鈴が妖怪であるからです。どうやら妖怪排他的な人も多いらしく、こちらを使わせてもらっているらしい。とは言ってもそんな人ばかりではなく、仲良くする人もいるらしい。ケビンさん曰く、美鈴は聖堂騎士団のアイドル的存在になっているらしい。

「ごめんなさいと言ってみる」

「謝っても許さん」

じゃあどうしろって言うんだよ。そうそう、あの時深紅に輝いていた金属（ピカピカになってた）は駆けつけてきた教会の人に回収されたんだ。でも僕の持ち物だってケビンさんが証言してくれたおかげで今は僕の手元にある。

「ところでさ、紅魔館はどうなったの？」

「あの爆発の後、アルフォードとお前は仲良く気絶。折角やからワイが冥土に送ってやろうと思ったのにクラウスの爺が邪魔してくれてなぁ。逆に論破されてしもうた。詳しいことは省くけど、もう聖堂騎士団（ワイら）があそこに手を出すことは無くなったわ」

「そりゃ良かった」

誤解が五階で六階になったみたいな状況でバトルが始まってたから、収拾がついて一安心です。

「省いては駄目だろう。この少年は当事者であると同時に被害者でもあるのだ。それを説明しないとあっては騎士の名折れ。それに君も彼に謝るべきではないのかね？」

開かれたままに成っていた入口から入ってきたのは金髪の成人男性。
顔の半分には火傷かなにかの傷が刻まれていた。

「貴方は？」

「名を名乗るにはまず自分からと言うが、敢えて言わせてもらおう。
聖堂騎士団第二位のヴリアントだ。よろしく頼む」

「普通の人間の伊吹大和です。こちらこそよろしくお願いします」

第二位・・・ケビンさんが第七位だから上司の人なのだろうか？

「一応副団長やけど、ワイの上司やないで」

「フ・・・私も君のような部下はお断りだ」

「あの～、ところでどういうご用件で？」

「なに、君に感謝を述べるためだ。本来なら団長が行うべきなのだ
が彼女も多忙の身であってな。私が代わりを務めさせてもらっただ
けだ」

おお、副団長直々のお礼ですか。有難いですねぇ。ケビンさんはお
見舞いに来たフリで実際は文句言いに来ただけだし。

「この度、我々に協力して頂いたことに深く感謝し、ここに彼の者の勇気を称える。飾られた言葉より恩賞を用意した方がいいかもしれないが、都合によりそれはできない。なので何かあれば力になることをここに約束する。聖堂騎士団団長カーネリア。以上だ。ここにあるように都合で恩賞は用意できないが、何かあれば私も力になろう」

「その都合ってのは何ですか？」

「それは後で説明しに来る者に聞いてくれたまえ。それとケビン、この少年に感謝と謝罪を述べるのだぞ」

「へいへい」

「ならいい。少年、すまないが私も多忙でな。今日は引き揚げさせてもらう。また会おう」

突然やってきて突然帰って行ったけど、すごい自分に厳しそうな人だったな～。ああいうのを騎士道とか言うのだろうか？それに比べてこの人は・・・

「お、待ち人が来たで」

「誰なｎ「大和～～～～～～～！！」レミリアあ！？」

ちょっ、ここ騎士団傘下の病院だよね！？こんな平然と吸血鬼を通

していいの!?

「騎士団言うても一枚岩やないっちゅうこっちゃ」

「なんだかなぁ・・・」

「ねえ大和やったわね!あなたこれから紅魔館に住むのよ!!」

「そうなんだ、それじゃあ宿いらずだねーって何故!?これから騎士団のところで魔法使いになる修行じゃないの!?」

いったいどういうことなんだ!?とメンチビームをケビンさんに送る。目を逸らすな目を!!

「大和知らないの?今この辺りじゃ妖怪を存在から消すために『魔女狩り』が行われているのよ?それをやってる場所で魔法なんて習えるわけないじゃない」

「不良騎士!説明をどうぞ!!」

「嘘をつきました。反省もしてなければ後悔もしてません」

「殴ってやる!そこに直れーーーー!!」

こんにゃろう!囮役どころか全部ウソだったってことかよ!?謀ったなケビン!

「しゃあないやろ。まさか生き残るとは思わんかったし」

「ふざけてる・・・ふざけすぎだぁ」

「いいじゃない。代わりに家で成れるんだから」

家で成れるって言ったって、あんな真っ赤で目に悪い館に居たくないよ・・・。

「ワイらと紅魔館はな、これから起こるであろうコトに協力して対処するための盟約を『秘密裏』に結んだんや。やからワイらが紅魔館をどうこうすることは無いってわけ。隣人を愛せよってやっちゃな。んで生き残ってしもたお前さんらは、この際そっちで魔法使いに成らしちゃおうぜってわけだ」

「・・・魔女狩りしてるんでしょ?見逃すことになるけどいいの?」

「さっきも言った通り、ワイらも一枚岩やない。勘違いしてもろたら困るから言うとくけど、聖堂騎士団は一枚岩やから安心し。それにさっき副団長も言うてたやろ?協力するって」

「つまり大和は魔法使い志望&紅魔館の住人になるの!もちろん美鈴も!」

あ、美鈴もちゃっかり含まれてるのね・・・。美鈴には悪いことし

たなぁ。

「傷が治り次第向かってもらうことになっとるから、はよ治せよ。美鈴ちゃんは今日から紅魔館に行くみたいからな」

「じゃあ大和、待ってるから。逃げちゃダメよ」

そう言って二人は出て言ってしまった。

ふと二人が座っていた場所を見てみると、紙切れが一つ落ちていた。

『スマンかった。堪忍してや』

はぁ、これだから嫌いになれないんだよなぁ。クク、と笑っているとその文字の形が変わっていった。そこにはこう書かれていた。

『ウッソ～』

「ぁんの不良騎士～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～！！！！」

今日も綺麗な晴れ空の下、少年の声が響き渡っていた。

魔女狩り

もとは妖怪の力を弱めるためだったが、誰でも使える科学が台頭しだした現在ではその存在すら否定しはじめる者も出てきた。人が妖怪への恐怖を和らげ、弱ったところを叩くつもりがいつのまにか存在すら幻想扱いするようになってしまってきているということ。

気がついたら全部終わってた（後書き）

気がついたら終わってた、じらいです。魔女狩りについては完全オリジナルです。妖怪が弱まるというのは大陸でも起こっていて、それは魔女狩りが元になったのだー、ということです。大陸編ではこれを元に話が進みます・・・たぶん。感想・質問・意見等ありましたらどうぞ！

ではまた

おいでませ紅魔館（前書き）

ちょっと内容が薄いかもしれませんがご容赦を

「いらっしゃい大和！待ってたわ！！」

「お世話になります・・・」

と、言うわけで紅魔館にやってまいりました。勧められてやって来た、もとい厄介払いですね解ります。
そして見渡す限りの赤・赤・赤。目の前には吸血鬼（幼）ア～ンド

「あらあらレミリアったら、喜んじゃって」

あらあらうふふ、とレミリアが大きくなったような大人の吸血鬼。
おそらくレミリアの母親なのだろう。髪の色はレミリアと同じブルーで、外見の違いはその背中から生えている宝石のような翼だけだ。
レミリアが妹が産まれると言っていたように、お腹も膨らんでます。

「初めまして、シルフィーユ・スカーレットと申します。レミリアから話は聞かせてもらいました。勇敢で強い魔法使い志望の男の子だって」

「いやその・・・照れますね」

美人です。ボンッキュッボンで超美人です。こんな美人ですばらしい奥さんをもらったアルフォードが憎い・・・！ちょっと待ってよ・・・、顔だちもレミリアと良く似ている・・・。ならばレミリアも成長すると・・・！！

「フン…俺は認めんからな」

「あなた、カーネリアにも言われたでしょ？認める認めない関係なくこの子は家で責任を持って預かります。大和君、今日は貴方と美鈴ちゃんの歓迎会よ。カリーヌ（メイド）とクラウス（執事）が歓迎会の準備をしていますから、詳しい話はそこでしましょうね」

「わかりました」

貴方様のような美人さんに頼まれて断る男はいません。だがアルフォード、お前は別だ。

「レミリアは準備が出来るまでここの案内をしてあげてね。美鈴ちゃんも一緒に」

「わかりました。美鈴を呼んでくるから大和はそこで待っててね」

パタパタと翼を動かしてレミリアは行ってしまった。ご機嫌…なのかなぁ？なんだが見ていて微笑ましいね。

「おい小僧。始めに言っておくがレミリアに手をだしたら許さんからな」

「心配しなくてもそんなことしませんよ・・・」

少なくとも今は。

「ならいい。今の言葉忘れるなよ」

準備が出来たら起こしてくれ、それまで寝ている。そう言ってアルフォードも行ってしまった。なんか感じ悪いなぁ。ああいう人は苦手だ。

「ごめんなさいね。あの人も貴方が来て戸惑ってるの。あの人本当は争いが嫌いなくせに、貴方に暴力を振るったでしょう？それも誤解だったって話しですし。どう貴方に接すればいいかわからないの。だから嫌いにならないであげてね」

ププッ、それじゃあ子供じゃないか。アルフォードもああ見えて可愛い所があるんだね。

「わかりました。じゃあ機会を見て僕から話をしてみます。それにしても、あの人のことをよく理解しているんですね」

「ふふ、私はあの人の妻ですもの。それくらいは解ります」

「大和さん久しぶりです！もうケガのほうはいいんですか？」

「おかげ様でこの通り、元気だよ」

すごい久しぶりに美鈴を見た気がする。一日修行を怠れば取り戻すのに三日かかるんです、なんて言って騎士団の訓練所に行ったが最後、帰ってくることがなかったんだよね。

「もう！私を無視して話をしないでよ！」

プンプン！私怒ってます、とアピールしながら言うレミリアは見える通りに怒っているのだろう。だけど、ねぇ。レミリアみたいな子供が怒ってもお兄さんは逆に和む程度でせう。

「ごめんごめん。それじゃあお願いしていい？」

「むぅぅ・・・。なんか気にいらないけど、気にしないことにする。それじゃあ行くわよ」

扉を開けると、そこは一つの図書館でしたとさ。

「うわ～、すごい本棚ですね。これ全部魔法関係の本ですか？」

「別に本だけじゃないわ。童話や歴史書、その他もろもろ沢山あるわ。まあ、魔法関係の本が一番多いのだけど」

「これだけあれば僕魔法使いに…」

魔法初心者でも魔法使いに成れるのではないか？と思えてしまうほどの貯蔵量がそこにはあった。日の本の都で本屋さんを見たことがあったけど、あの本屋さんの本の貯蔵量とは比べ物にならない程だ。ここにある本を全部売ってしまえば一国くらい簡単に買えそう。

「フフン、当り前よ。それにお母様が教えるのよ？これで成れなかったら努力が足りないか、よっぽど才能がないかのどっちかね」

「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」

「どうしたの？」

「あのですね、大和さんはその…なんと言うますか才能が、ねえ？」

言わないでくれ美鈴サン。ボクの才能はそれはもう、それはもう…

……

「えへへ、いいんだ…。僕に才能は無いんだから……。ああ、師匠に師父、今日のメニューなんですか?え?今日も気絶するまで叩きのめす?そうだよね。僕には才能がないんだから…えへへへ…」

「えっちょ、大和!?ご、ごめんさい!私が悪かったから、悪かったから!!」

「あ~、それ一種のＰＴＳＤみたいなモノですから。大丈夫、ほっといたら直ります。それより先を案内してくれますか?」

「・・・放っておいていいの?」

「あの状態からじゃ元通りになるのに半日はかかりますよ?」

「・・・次に行きましょう」

「それじゃあ、大和君・美鈴ちゃんの歓迎会を始めます♪」

シルフィーユさんの音頭で始まった歓迎会。始まると同時に運ばれてくる料理の数々。野菜から始まってメインである肉まで様々な料理が運ばれてきた。お恥ずかしいことながら、こういう料理は初めてで作法なんかはまったく出来なかった。「大和様のお好きなように食べてください。料理は美味しく食べられるのが一番です」とはメイドさんの言だ。うん、メイドさんってイイ。何がイイかは語らないでおくけど、漢心を燻らせる何かを感じます・・・！

「また変なこと考えてますね・・・」

美鈴さんや、僕は変なことなど考えてはございません。ただ、メイドさんについて思考を巡らせているだけだよ。

「大和君？そろそろ話もしたいのだけどいいかしら？」

「あ、お願いします」

っと、真面目な話みたいだ。頭を切り替えないとね。

「うん、じゃあ話を始めましょうか。これから貴方達は紅魔館で過ごしてもらいます。大和君が魔法使いに成るまでは私が面倒を見るつもりだけど、今は私も身籠ってるから無理することはできないの。そこは我慢してね。それに関してだけど、今は紅魔館も手が足りないの。だから二人には家のことを手伝ってもらいたいの。美鈴ちゃんは今まで通りカリーヌ（メイドさん）の手伝いをお願いできるかしら？」

「まかせて下さい。給料もご飯もでますし、悪いことなんてありませんよ」

「ありがとう。それで大和君なんだけど、クラウスの手伝いと「私の遊び相手！」をお願いできるかしら？レミリアも魔法を使えるわ。まだまだ未熟だけど、基礎は私が詰め込んだから役に立てると思うわ」

「解りました。子守りとクラウスさんの手伝いをすればいいんですよね？」

「お願いね」

子守りじゃなーい！レディに失礼よ！うー☆、と喧しいお子様はこのさい放っておこう。話もすんだみたいだし、今は食後の紅茶？を

飲ませて貰おう。・・・しかし甘いねこの紅茶。

「アルフォード、ちょっといい？」

「・・・何だ」

明け方。吸血鬼も寝静まるころに僕はアルフォードに会いに行った。理由は言わなくてもわかるだろうけど、これまでとこれからについてだ。

「えーっと、誤解させてごめんなさい？」

「？何を謝ることがある。あの時のことを言っているなら、非は俺にある。お前が謝る必要などないだろうが」

「いや、どちらかにだけ非があるなんてないよ。それにレミリアを泣かしたのは事実だし」

「律義なやつめ・・・」

ふぅ、と溜息を吐く。明け方だからか、若干眠そうだ。でもその口元は笑っている。なるほど、シルフィーユさんの言っていた通り解りやすい人みたいだ。

「それにしても、まさか紅魔館の主が争い嫌いだなんてなぁ」

ふと思ったことを口にしてみる。もしかしたら釣れるかもしれない

し。

「なあ！？小僧誰に聞いた！？」

「あんたの奥さん」

おお！釣れたのは結構な大物みたいだぞ！というかマジだったのね…。それにしても、ねぇ。まさかあれほどの力を持つ存在が争い嫌いだなんて世の中は広いと感じさせてくれるよ。

「・・・ヘタレ？」

「ヘタレじゃない！俺は平和を愛しているだけだ！！」

…大漁ですよ奥さん。カマかけるだけでこれほどとは。

「これから仲良くやっていけそうで何より」

「勘弁してくれ・・・」

うん。今日一日で僕は紅魔館での立ち位置が決まったね★アルフォードより上なのは確かダヨ！！

おいでませ紅魔館（後書き）

おぜうがヒロインレースへ参加を表明!?どういうことだ!!

というわけで、レミリアが参戦するかも。あくまで『するかも』。
ちなみに現在レーストップは輝夜です。トップを独走中だ!

東方のキャラはみんな魅力的すぎて表現するのが難しいです。何が言いたいかと言うと、『微』で止まれるかなぁ。一応頭の中じゃあ友人・ヒロインの分類はできているけど・・・?とりあえず自重しながらやって行きますw

だいたいこんな感じです（前書き）

だいたいこんな感じです

だいたいこんな感じです

やあみんな！今日から魔法使いに成るためにいろいろと学んでいきます大和です。できれば全部を話せたらいいんだろうけど、それじゃあ何かと都合も悪いから、何があったかを簡単に説明？することにする。

紅魔館１日目

ここに住む住民が妖怪ということで、活動し始めるのは僕ら人間が言う深夜からである。お昼に寝ておかないとツライけれど、そうそう生活習慣を変えれるわけもないので、疲れる日々がいくらか続くのは我慢しなければならないだろう。

初日ということもあって、クラウスさんからは仕事着（執事服）を渡された。あれ？単なるお手伝いじゃないの？と思い聞いてみたところ、

「仕事には仕事着を着るのが当たり前」

との有難いお言葉を頂いた。あと執事としての心構えなどなど・・・。話が終わった後、僕は執事しに来たわけじゃないんだけどなぁ、と思いつつも僕はまだ自分が幸せなのだと思った。なぜならば美鈴の方がだいぶ厳しく指導されていたからである。ご丁寧にメイド服まで着させられて。思わず噴き出して（いろいろと）しまったのは悪くないだろう。メイド美鈴ＧＪ！！

話だけで終わったのでその後は図書館に行くことにした。すると既にレミリアが本を用意して待っていてくれた。

「大和のために準備したんだけど・・・これでいい？」

なんて上目遣い言われた日にゃあ、お兄さん暴走しそうでしたよ。よくぞ耐えたと自分を褒めてあげよう。

紅魔館１ヶ月目

ようやく生活習慣も夜型に慣れてきた。最近は紅魔館の掃除を手伝う日々が続いている。もちろん魔法の勉強もしているけど、まだシルフィーユさんに教えてもらったことはない。なんでも、もうすぐ子供が産まれるらしい。そのせいか最近のアルフォードの行動が明らかにおかしい。急に立ち上がったかと思うと床に足を取られて転んだり、誰かが話しかけても聞こえていなかったり。なので紅茶に塩をいれてやればどうなるのかな？と思い実行してみれば、これまた反応なかったり。そんな父親をみてレミリアも焦りだしたりと忙しい日々。美鈴はカリーヌさんと一緒にシルフィーユさんの部屋に付きっきりで出て来れないみたいだ。なので紅魔館のことは実質僕とクラウスさんの二人でするしかないのだ。

「アルフォード・・・少し落ち着いたら？」

「おお、落ち着いていられるか！一大事なんだぞ！？そうだ名前はどうする？お前も何か案があったら言ってくれ！いや言わなくていい！！それが良かったら採用しなければならなくなるからな！！」

落ち着け親馬鹿。

なんて馬鹿な真似を続けていると赤ちゃんの産声が聞こえてきた。するとドアを蹴破り、壁を突き破ってパパさん突撃。その後には愛娘が続くというなんとも面白い光景が見れた。うむうむ。世界広しといえど、こんな光景を見えるのは僕だけだろう。

閑話休題

とりあえず僕も赤ちゃんを見ようと思い、その場に行ってみる。そこにいたのは、アルフォードと同じ金髪で、シルフィーユさんの宝石のような翼を持った赤ちゃんだった。レミリアとは正反対だね。

「ハ～イフランドールちゃん。パパでちゅよ～」

正直言っていい？あんた誰ですか！？そう言葉がでるのは仕方ないよね！いつもより3割増しで酷い。と言うか何時名前決めたんですか！？さっきまで悩んでましたよね？ほら、レミリアも困惑してるし。まあ仕方ないか、子供が産まれたんだし・・・。せっかくだから この子の未来でも見てみようかな～、と思って見てみた瞬間に僕はその場を離れた。なんでかって？そりゃあ・・・

「うぇぇえぇぇぇえぇぇぇえええぇえぇぇえぇぇぇん！」

「「わぁぁぁぁぁあぁぁぁぁぁあぁあぁぁぁああぁあぁぁぁあああ！！？？」」

僕の目に映った光景は部屋がボロボロになったところだったから。何があるのかは解らないけど、あそこにいたら危険だと思って、レ

ミリア抱えて能力の加速までして逃げてきた。

「ね、ねえ大和・・・お父様と美鈴、大丈夫なのかしら・・・？」

あそこに居て助けられなかったのは美鈴とアルフォードの二人だけ。
執事・メイド・母親は無事だろう。障壁張ってたし・・・。あの二人の犠牲は無駄にはしないよ・・・。

ついに魔法使いに成るための講義（修行）が始まった。生徒は僕とレミリアの二人。先生はもちろんシルフィーユさん。その腕の中には産まれたばかりのフランドールがいて、レミリアが羨ましそうに見ていた。お姉ちゃんだけどまだ抱っこされたいのだろうね。そのフランドール、潜在能力は姉よりも上らしいです。能力はまだ分かってないけど、部屋をボロボロにするなどを考慮すると凶悪な能力ではないのだろうか？

「じゃあ授業を始めましょうか」

とりあえず何が出来るかを見せてほしい、とのことなので幻術をして見せた。僕の幻術の完成度には先生も驚いており、おそらくこれで完成系なのだろうとのお言葉を頂いたぞやったー！と思ったのもつかの間でした。

障壁…全然だめ。身体強化…無駄に魔力を使いすぎ。マススパーク等の放出系魔法…舐めてますか？

総評・・・駄目駄目ですね

魔法の必須条件である才能が足りないわ・・・、とのお言葉をもらいました。挫けそうですが、頑張っていくしかないのです。ただし基礎はしっかりできているので、あとは改良のみだそうな。ここまで仕上げた師匠には脱帽らしいです。ただ、改良するにはセンスやら何やらの才能が必要なので、時間はかかるらしいです。魔法使い

？まあ6~8年はかかります。気と魔力の融合？そんなの超後回しです。

紅魔館7ヶ月目

盟約がうんたらかんたら~、だから手伝ってもらうで~、と言いながらケビンさん襲来。アルフォードの命令と騎士団の御指名によって僕が行くことに。何故！？と思いつつも違法研究をしている場所に急行。研究員の間接を決めて動けなくしてやった。別に憂さ晴らしではないけど、何人かの骨をバキバキした気がする。僕も魔法研究や執事の仕事で動いてなかったからいい運動になったね★ただ、嘘吐いて僕に敵のほとんどを仕向けるのはどうかと思う。しまいにはグレるぞコンチクショウ！！

帰った時に「お帰りなさい」と言ってくれたメイド美鈴に不覚にも涙が出そうになった。

紅魔館1年と3カ月目

紫の魔法使い襲来！いや、闘いをしに来たわけではないみたいだけど。なんでも最近は魔女狩りが盛んで魔法研究にも苦労が多く、その時に紅魔館には魔道書が多くあるとの話を聞いて来たらしい。吸血鬼の根城に良く来たな小娘…、と父親を最近リスペクトしだしたレミリアだけれど、上手く言いくるめられたみたいだ。とりあえず

仲良くなったみたいなのでいいことです。ただ、僕を空気のように扱うのはどうかと思う。これでも此処に住み始めたのは僕が先なのだよ！

紅魔館1年と6カ月

仕事場（紅魔館と最近は騎士団の任務）で疲れている上に、ストレスの溜まるような無視をされるのは最早限界だ。一発脅かしてやろうと思って幻術をかけてやった。それも1日もの時間をかけて念入りに作った特別製のやつを。これが仕返しだバカヤローなんて思っ

てた数日後、いきなり話掛けられた。

「貴方の幻術すごいわね。できれば構成とか教えて欲しいんだけど」

とのこと。お互い自己紹介をして、日が昇るまで魔法談義をした。
その時なんで僕を無視していたのかを聞くと、

「あの時は貴方に興味がなかっただけよ。今はすごく興味があるわ。
その能力も興味深いわね…」

とのこと。ふと背筋に悪寒が走ったのは何故だろう?なんだか地雷
を踏んだ気がする・・・。

「貴方のその魔道機関の解析が終わったわ。あとこれは改良案よ。魔力の少ない貴方のために考えてあげた仕様になってるから」

「ありがとうパチュリー。僕じゃどうしようもなかったから助かったよ」

「別に…頼まれたからしたまでよ。ああ、一遍に使うと貴方の身体弾け飛ぶから」

今度埋め合わせでもして貰うわ、と言って寝てしまった。いい人すぎる、惚れてまうやろーー!!自分の研究もあるはずだろうに。僕は知ってますよ?一生懸命頑張ってくれていたことを。

「なになに?かーとりっじを導入・・・?りぼるばータイプにして最大3発使えるようにする…?」

つまるところ、最大で3回使えるようにするわけだ。ほら、最近リボルバータイプの拳銃があるだろ?あれみたいにするらしい。拳銃の弾の代わりに魔力を溜めれる物を使うらしい。うーん、どうもよく理解できない。

「先生ーちょっといいですかー？」

解らない時は先生に聞こうね！

紅魔館４年目

「ヤマト、昔話して」

大和絶賛ピンチ中です。目の前の悪魔っ子は凶暴です。時々吸血したさに突撃しにやって来ることもしばしば。

「・・・あのねフラン、僕も掃除とか何やらで忙しいんだけど」

まだ幼いので我儘くらいは聞いてあげたいけれど一度甘やかしたら最後、一日中ひっついて離れやしない。おまけにそれを見たレミリアも参戦してきたらもうお手上げだ。

「お姉様は聞いたって言ってたよ？」

「そういうこともあったなぁ・・・」

どうしようかな。正直今日は勘弁してもらいたいんだけど・・・

「ねぇヤマトお願い。お姉様に負けたくないの…」

「何に負けるんだ、何に」

「ねーいいでしょ～？お・ね・が・い？」

何その『うっふん』ポーズ微笑ましいんだけど。いったい誰がこんなこと教えたのやら…。

「ケビンだよ？こうすればヤマトは何でも言うこと聞いてくれるって」

あんの腐れバカ不良騎士、子供になんてこと教えてやがる！！今度会ったら顔が陥没するまで殴ってやる！！

「話してあげるからそんなことするんじゃありません。あと、大きくなっても男の子相手にしちゃいけません」

「はーい」

素直でよろしい。じゃあ昔話といきますか。・・・歳とったなぁ

結局一日中フランドールの遊び相手をすることになりました。

紅魔館５年目

外見年齢１５歳、本当は１１５歳くらいになるのかな？体つきも少年から青年へと成長し始めてきた大和です。紅魔館での仕事や魔法講義もそうだけど、最近は騎士団からの任務が多い。最近はレミリアだけじゃなく、フランの子守りまでするようになったから疲れが・・・。アルフォードのやつ、気になるんだったら自分で面倒みればいいのに・・・。

「そう言わんと手伝ってや。ワイももう疲れて疲れて・・・」

「自分たちでしろと。あと僕を巻き込むな」

結局この不良騎士を殴ることはまだ出来てない。元気があるのなら、ということで行われたヴリアント副団長との模擬戦とかは本気でヤバかった。何がヤバイって、あの人全てにおいてまっすぐだから手加減とかしないんだよ。あの剣捌きはすごかった・・・。あまりにもその姿がカッコよかったので僕も秘かに剣の練習とかをしてたり。

「何や大和君、えらいグレてきたけど溜まっとんのか？そりゃ大和君もエエ年やし、美鈴ちゃんやパチュリーちゃんと寝食を共にするのはツライわなぁ・・・。よっしゃ！今日の任務が終わったらそのままエエ場所に行こか！溜まったモン出すのも大切やで？」

「誰のせいだと思ってます！？そして騎士の言うことか！？」

僕もだいぶ変わってきたなぁ、とは思う。その、そっち方面にも意識がいくようになったと言いますか・・・。前から輝夜のせいで多少はあったけど、最近特に酷くなってきたと思う。パチュリーとか無防備過ぎて正直たまりません・・・！誘ってんのかコンチクショー！！

変わったと言っても、自分の思ったことをそのまま言うようになっただけなんだけどね。今まではちょっと躊躇ってたけど、ここ最近でわかったことがある。それは自分をしっかりと持つことだ！我儘の多いここでは自分を保つためにしっかりしないと！常識に囚われては駄目なんです！！

「ほな行こか」

「はぁ・・・」

そして今回も僕は味方の罠に嵌るのでした。やっぱり何時か殴ってやる！

だいたいこんな感じです（後書き）

しんどいな、と思って体温計を使ったところ３８・８度？の現在。投稿しようか迷ったけど待ってる人がいるかもと思い頑張ってみたじらいです。とりあえず目の前が回りだす前に寝ます。

パチュリーの可愛さに今頃気がつきました

番外？大和と騎士団（前書き）

とりあえず熱が下がったので更新。実際の団体と関係はあり（ｒｙ

あと、質問があるので後書き読んで下さい

番外？大和と騎士団

「めちゃくちゃ大きい・・・」

僕は今、この国の中枢を担っている建物の前に来ています。それだけあってデカイ。紅魔館の何倍大きいのだろうか？門の前に立っていると、この門が世界の行き止まりかと錯覚してしまいそうだ。

「すいません、聖堂騎士団副団長の命で来ました」

門の前には当然のように門番が立っている。軽装備ではあるけれど屈強な門番なのだろう、見える二の腕ははち切れんばかりの筋肉が見える。むむむ・・・僕の身体は師匠独自の肉体改造で華奢だから少し羨ましい。などと考えていると奥からヴリアント副団長が歩いてきた。

「急な呼び出しに応えてくれて感謝する。さあ付いて来てくれたまえ」

案内されるまま後ろを歩く。・・・周りからの視線が気になる。背が伸びたとはいっても僕の見かけまだ幼さの残る子供だ。そんな子供が副団長と歩いているのが珍しいのだろう。そのまま後ろをついて行くと庭園に出た。

「もう間もなく給仕がお茶を持ってくるだろう。それまで話でもして時間を潰そう」

「そうですね」

何を隠そう、今日はただ話をするためだけに来たのだ。最近は騎士団からの依頼も多く、僕も疲れが溜まっている。そのため今回は任務御苦労の意味を込めてのお茶会である。

「まずは感謝を述べさせてもらおう。大和少年、今までの任務御苦労であった」

「正直に言うと勘弁願いたいんですけどね・・・」

「フ、君は実に優秀だ。それ故に我々も君を頼ってしまうのだよ」

「そう言われると嬉しいですけどね。でも騎士団内のケビンさんの評判を聞いたら厄介に付き合ってるようにしか感じられませんよ」

騎士の風上にも置けない外道・情け容赦なく敵を殲滅する殲滅騎士などなど。他にもいろいろと悪い噂が彼には付き纏っている。そしてそれが中々に的を射ているから尚厄介だ。僕も彼と長い。だからその噂が真実であることも知っている。実際に任務中の姿を見ると、味方であるはずの僕すらをも恐怖させるものがある。

「ヴリアント様、紅茶とお菓子でございます」

っと。どうやらメイドさんが紅茶とお菓子を持ってきてくれたようだ。紅茶とお菓子のいい匂いが鼻孔に刺激を与えてくれる。

「ああ、頂くよ。大和少年も飲むといい。庶民には中々手が届かない葉を使っているのが自慢でね。君のためにと取っておいた物だ。もっとも、紅魔館でもいい葉を使った紅茶を飲んでいるのだろうが」

「アハハ、イタダキマス」

実は紅魔館の主な収入源は僕が騎士団から不定期にもらう給金なんです。今までどうやって生活していたのかが不思議に思える。でも何故かお金があるんだよなぁ。

「それで先程の話に戻るが」

「あ、はいどうぞ」

「君は騎士の掟を知っているか？」

「えっと、たしか『騎士の十戒』と呼ばれる掟ですよね？」

えーっと、『優れた戦闘能力・勇気・正直さ・高潔さ・誠実＞忠誠

心く・寛大さ・信念・礼儀正しさ、親切心・崇高な行い、統率力』だったっけな。

「そうだ。我々聖堂騎士団だけでなく、聖ヨハネ騎士団にも当てはまる騎士の十戒だ。君はこれについてどう思う?」

聖ヨハネ騎士団とは、聖堂騎士団とは異なる騎士団だ。聖堂騎士団が攻め込むことに長けているのに対して、聖ヨハネ騎士団は守ることに長けていると言える。だが、その戦闘力と団員の数には歴然とした差がある。戦闘力では聖堂が、数では聖ヨハネが。何時かケビンさんがこう言っていた、『ワイらがその気になったら国一つ潰すなんて楽なモンや』と。

「素晴らしい心構えだと思います。そしてそれを実行している貴方達には敬意を称しますよ」

「フ、嬉しいことを言ってくれる。私は騎士として誇りをもっとも大切にしている。君に譲れないモノがあるようにね。そして君はケビンがそれを守れていないと考えているのだろう」

「別に・・・。僕は騎士じゃないからどうこう言うことはしたくないですけど、ケビンさんは何故ああいう人なんですか?」

「・・・彼は自ら汚れ役を請け負っているのだ。本来我々もしなければならないことを、な。気がつかないか?」

自ら汚れ役を・・・？どういうこと・・・ってそうか！

「気付いたかね？君がいつも彼とどのような任務を行っているかを。君も見たはずだ。この世界の裏側を」

半妖にされ、その力をコントロールできずにいた子供の××。研究所で××となった人間らしきモノの××。バケモノに心まで犯されてしまった少女の××。・・・普通の騎士のする任務じゃない。

「ケビンさんは何故・・・？」

「知らんよ。知りたくもない。ただアイツは何処か壊れている。それでも任務はこなせるのだ、問題はない」

「カーネリア、そんな言い方はないだろう」

いきなり現れた女性の名前はカーネリア。聖堂騎士団の団長にして、守護騎士第一位。非の打ちどころのない女傑だ。要約すると怖い人。会うのは初めてではございません。会うたびに僕は震えあがっています…。あ、それ僕のケーキ・・・

「カーネリアさんは騎士の十戒についてどう思いますか？」

「ん？特に何も思い入れなどないよ。それでも、と言うのならそうだな…時代遅れの馬鹿な考え方だ」

ブフォッ！！思わず口に含んだ紅茶を吹き出しそうになったよ！ほんと型破りの人ですね貴方は！！

「ほぅ・・・。伊吹は我々守護騎士を人と呼ぶのか？」

「心まで読まれてる！？」

守護騎士は聖痕をその身に宿している。それ故神の使いと呼ばれることが多く、寿命もただの人間より長く、頑丈だ。

「悪即斬。この一つでいいと私は何度もそう言ってきたぞ。なあヴリアント？」

「君のそんな所には好意を抱くよ」

「気持ち悪いことを抜かすと叩き切るぞ」

やれやれ、とポーズをとって僕を見ないでくださいよ。

「なんであれ、我々守護騎士はそれぞれ暗い部分がある。そしてそこには不干渉との暗黙の了解があってな。私からはお前にアイツを見捨てないでやってくれと言うことしかできん」

「カーネリアさん・・・。分かりました！僕はケビンさんの友人でいると、そうします！」

「フ、彼はいい友を持った。少し羨ましく思うよ」

「そうか？青臭いったらありゃしない。それより伊吹、一戦どうだ？」

え゛！？

「私も君との果たし合いを所望する」

あ゛！？

「では行こう。今日は珍しく私も暇だからな。巷で噂の『狸』とやらの実力を見せてもらおう」

そのとおりなはヤメて！！

なんでも幻術を使って人を騙す、東方より来た子供だから『狸』らしい。誰が考えたんだ！？

「ワイやで～。団長、今日のお仕事終了しました。もう帰っていいですかね？」

「好きにしろ。行くぞ伊吹」

「逝ってらっしゃいませ～」

「覚えてろよ不良騎士～～～～！！」

「ケビン、あの件はどうなっている？」

「副団長らの考えとった通りや。妖怪連中の動きが活発になってきよる。しかも纏まった動きまで見られるようになってきた。・・・まるでデッカイ戦争でもしようかってぐらいにな」

「やはりそうか。早急に対策を練らねばならないな」

「巻き込む前に手ぇ切った方がええんちゃう？」

「彼を正式に騎士にするのもアリだが、君が人の心配をするとは・・・。人も変わるものだな」

「ワイかてたった一人の友人くらい守りたいからな、それくらいはするよ」

「そうだな、君も人だということだ。・・・では私も行ってくる」

「アイツは強いで。思いっきりやらな負けるんちゃう？」

「フ、熟知している」

きょうは、おちゃかいのはずが、かーねりあさん・う゛りあんとさんとのもぎせんになりました。ぼくは、よくいきていたとおもいますマル

聖堂騎士団

構成員

守護騎士１０名　その下に正騎士が４０名　従騎士が１５０名

妖怪退治から法を犯す不届き者の処分・時には邪魔者を始末する組織。歴史の表舞台に出てくることはほとんどない。その組織力故に他の騎士団から疎まれている。その戦闘力は一国を凌ぐほど

番外？大和と騎士団（後書き）

まあ蛇足といえば蛇足でした、じらいです。あ、聖ヨハネは出ませんのであしからず。では本題に入ります。

1）十六夜咲夜は半妖（半吸血鬼・月関係）でもいい

2）十六夜咲夜は人間じゃないとだめ

1）なら大陸編にチビ咲夜がでます。なぜそうなったのかは本編の兄妹と原作永夜抄おまけｔｘｔを見た人なら察しがつくかと。2）なら大陸編出番なし。紅魔郷が初登場になります。パチュリーでやっちゃったので今回は皆様の言う通りにしようかなと。

イイコトと悪いコト（前書き）

咲夜さんについては2）との意見が多かったので2）でいきます

イイコトと悪いコト

紅魔館に住み始めて6年と少し経った。伊吹大和16歳です。あの魔道機関の改造は誠に遺憾ながらケビンさんの古い友人に頼んで改良が進んでいる。何処で僕が剣の練習をしているのを知ったのか、フランがケビンさんに頼んで剣に組み込んで貰うように頼んだらしい。何時の間にそこまで仲良くなったんだよ…。

魔法についても改良は進んでいる。先生に加え、パチュリーが手伝ってくれているおかげで新たな魔法の習得もできた（習得までに頭がどうにかなりそうだった。むしろ頭弄られた）。所謂属性魔法である。

予てからの願いであった炎を扱う魔法なのだ！妹紅の炎に憧れていた僕も、ついに炎を使えるようになったんだよ！！けど僕の属性魔法への適正は高くなかった・・・。だから火属性の一つに絞った（絞らされた）。一応他の属性も使えるけど、日常生活になんとか使えるぐらいで戦闘に使えるようなものではない。とは言ってもまだ炎も碌に使えないんだけどね…。まともに使えるのは一つぐらいかな？しかも超接近戦でしか使えない。

それにしてもパチュリーが属性魔法のスペシャリストでよかった・・・。ほんとパチュリーには助けられてばかりだ。

今の季節は秋であり、寒くもなく、かといって暑くもないので身体の弱いパチュリーを誘っても大丈夫だろう。今まで手伝ってくれたパチュリーのために今日一日使うぞと思い、所謂デートとやらに誘ってみた。何も卑しいものはない、ただ純粋に感謝の気持ちを受け取ってもらおうと考えたからだ。普段から引き籠りがちなパチュリーを誘う時にレミリアとフランが絶望してけど、おそらく今日一日話相手が居なくなるからだろう。お土産まで頼まれたし。ああそうだ、最近門番にジョブチェンジした美鈴が「今日はお泊りですか？」と尋ねてきた時はパチュリーが魔法をぶっ放してた。そりゃ怒るだろうよ。

「で？何処に連れて行ってくれるの？」

煉瓦造りの町並みを二人並んで歩く。外に出る機会が少ないパチュリーにとっては珍しい物が多いのだろう、しきりに周りを見渡しながら歩いている。時折目に入る露天が気になっている様だ。

「とりあえずお茶でもしようか」

騎士団での仕事をこなしていると、自然と何処に何があるかを憶えてしまった。おかげで何処のお茶が美味しいとか、あそこの料理が上手いとかも耳に入ってくる。・・・ほとんどケビンさんの情報だけど。

「あら、いい葉を使ってるわね」

女の子を連れて行くならこのお店、とまで言われる喫茶店に入って紅茶を飲む。そんな謳い文句があるだけあって、喫茶店内はカップルだらけだ。そして紅茶も美味い。ケビンさんのお勧めだから正直

不安だったけど当てが外れなくて良かった。なんと言っても今日はパチュリーの慰労だからね。喜んでもらうことが一番だから。

「お口にあって何より。パチュリーの好みに合う喫茶店を選べてよかったよ」

「フフ・・・」

「ん？何か気になった？」

「何もないわ。ただ、少し嬉しいと思った自分がいただけよ」

「そっか・・・」

店内の雰囲気に当てられたのだろうか。それともパチュリーが落ち着いているからか、自然と優しい気持ちになれた。普段忙しい分、見てるだけで癒しを貰えた。こうしているとまるで僕らもカップルのように思えてしまう。・・・まあこのお店に入るのはカップルだけなんだけどね。ちなみに僕らはカップルでも何でもない。パチュリーの為のデートなのに、いつの間にか僕がいい気分になるとか・・・ダメだなぁ。

「そろそろ次に行きましょうか」

どうしようもない思考に時間をとられていたようだ。気がつけば紅茶の入っていたカップは空になっていた。こうしてはいられない。紳士たるもの、淑女をエスコートしなければね。

「ではミス・ノーレッジ。お手を」

「・・・似合わないわよ、馬鹿」

す、少しぐらいカッコつけさせてよ!?

「フフ、ウソよ。さ、行きましょう。エスコートしてくださるのでしょ、ミスタ？」

かなわないなぁもう。

露店を一緒に回ろう、そんなパチュリーのお誘いを受けて二人で通りを歩く。この通りには露店が所狭しに並んでいる。売り物はそれぞれの露店で異なっていて、食料品から身につけるアクセサリーまで幅広い品物が扱われている。露店だからと侮るなかれ、案外掘り出し物が多いこの通りでは買い物客でいっぱいだ。人が多いのでパチュリーの身体が心配になったけど、本人はいたって普通に露店巡りを楽しんでいるようだ。

「あ・・・」

そんな時、アクセサリーを見ていたパチュリーが声をあげた。

「どうかした？・・・これは」

「ええ。僅かだけど魔力を感じるわ。たしか魔法に関する物は御禁制じゃ・・・？」

僅かに魔力を発している月を模したアクセサリー。

魔女狩りの影響は日常生活にも影響を与えている。今までは魔法の掛っている商品が多く市場にも出ていたけど、今ではそれも禁止されている。それだけではない。街に設置されていた魔法を使った街灯も撤去され、夜は松明の灯りしか街を照らさなくなった。妖怪や魔法、幻想と思われるものを排除しようと教皇とその一派が必死になっているのだ。

「大和どうするの？」

「どうするって・・・。僕も一応騎士団の仕事を手伝ってるからなぁ」

そういってを頭から外套を被っている店主を見る。この人も魔女狩りの影響を受けた被害者なのだろう。出来れば見逃してあげたい、けれど今の僕には立場と言うモノが存在する。聖堂騎士団は魔女狩

りに積極的に参加していないとはいえ、教皇傘下の騎士団である。
『外部協力者』である僕がそれを見逃したとあっては騎士団のみんなに迷惑がかかるかもしれない。・・・仕方がないけど通報するしかない。

「へ～。最近地上じゃ『魔女狩り』とか言うのが流行ってるって噂は本当だったのね。それより兄さんって騎士団に入ってるの？執事服なんか着てるから執事でもしてるのかと思ったけど意外ね～」

「へ？」

「あれ？もしかしてこのカワイイ声を忘れちゃった？酷いなぁ兄さんは」

「ア、アキナあ！？どうして地上に！？」

いやいやいや、何で此処にいるんだよ！？そう言って外套を脱いだ人物は僕と同じ存在の妹。髪の毛は伸びてロングになっていた。どうやら成長麗しいらしく、僕にはない女らしさが垣間見えている。

「こんにちは彼女さん。「ちょ！？」兄さんの調子はどう？結構ヤルと思うんだけど」

「生憎と私は彼女じゃないわ。ただの同僚よ」

・・・パチュリーさんや、少し恥ずかしがるとかしてくれたら僕としては嬉しいんですけどね。アキナも何安心してるんだよ。ここは不安に成るべきじゃないのか？兄に恋人の一人もできないことに。

「・・・貴方本当に妹なの？魔力の質や貴方の放つ波長もそっくりそのままなんだけど」

・・・流石はパチュリー・ノーレッジといったところか。一瞬の内にアキナと僕の魔力の質を感じ取り、不自然な点を指摘してくる。顔に出やすい僕は無表情を貫き通してアキナに全てを任せることにした。

「あらら。地上もまだまだ捨てたもんじゃないわね。その辺も含めて兄さん、話をしましょうか」

「わかった」

振られた話題を断れることもなく、慰労のためのデートは妹との顔合わせに変わってしまうのでしたとさ。

「で？なんでお前がここに居るの？」

「つれへんなぁ大和君は。この店教えたのはワイやとゆうのに・・・」

とりあえず落ち着ける場所を、とのことで来たのは静かで雰囲気のよい喫茶店（さっきの所じゃないよ）。ここなら内緒話もしやすいだろう、兄も少しはヤルのだよと意気込んで選んだ先には待ち構えていたかのように座っているケビンさん。

「私が前もって言っておいたのよ。兄さんはこの店に私たちを連れて行くってね」

「なんで・・・ってそうか。視たんだよね？」

アキナも僕と同じ能力を持っている。しかも僕には出来ないような芸当も出来るのだから、これくらいは当然なんだろう。出来た妹を持つことは嬉しいけれど、それが自分を遙かに凌ぐとあっては、兄にしてみればいろいろと複雑な心境だ。

「そうよ。だからこの魔法使いのことを彼女だと思ってたんだけど」

「そんなことより早く話をしない？私も暇じゃないの」

う…パチュリー怒ってる…。望みもしてない外出した先でこんな事が起きれば誰でも怒るよね普通。

「ボソ（せっかく外にまで出たのに…」

「何か「さ～て、それじゃあ話をしましょうか！」「そやそや、始めるでえ！」・・・じゃあ始めようか」

パチュリーが何か言った気がするけど、いつも独り言の多いパチュリーのことだ。状況整理でもしているのだろう。・・・だから睨まないでくださいコワイです。

「じゃあまず私から。兄さんには悪いけど、今回は遊びに来たわけでも連れ戻しに来たわけでもないの。ちょっとした指名手配犯をしょっ引きに来たの。で、この男が今回の目標であるＤｒキリシマ。見たことない？」

「見たことない」

男の写真と、どこで手に入れたのだろうか、詳細な地図を出しなが

ら話を進めるアキナ。しかしこの写真に写っている男、犯人面である。金の短髪、顔に入れ墨までいれて、おまけに研究者の割には体つきがゴツイ。体つきだけ羨ましいぞコノヤロウ！

「続けるで？急に表れた得体の知れない魔力を感じた教会はワイを調査に派遣。そしたら大和君によー似とる女の子がおるやないか。ナンパする勢いで話かけたら、これまた大和君と良く似とる。んで大和君の話をしてみたらビンゴってわけや」

「・・・ケビンさん、女の子とはいえ僕そっくりさんにナンパとか勇気ありますね」

「何言っとるんや？大和君もアキナちゃんもえらいカワイイやんか」

「や～ねもうケビンさんたら！そんなこと言っても何も出ないわよ？」

「・・・話を進めてくれるかしら」

そのテの人間が居ないとは言えない。僕は後を気をつけた方がいいのだろうか・・・？

「んで今度の聖堂騎士団（ワイら）の標的はこの研究所で・・・」

「指名手配犯の居場所もこの研究所ってわけ。私一人でもイケると思うんだけど兄さんが近くに居るって言うじゃない？だから手伝ってもらおうと思って」

二人の指差す場所は全くの同じ場所だ。おいおい、何もない空き地って記載されてるじゃないか。……今までの経験から言うと、地下か？……今回も厄介な事になりそうだ。おまけにアキナまで一緒とか・・・。

「・・・僕今すっごく忙しいんだけど」

言外に僕は遠慮させて貰いますと伝える。

「八意」

ッッツ！！

一気に場の空気に緊張が走る

「これは私たち兄妹で片付けるのよ。兄さんも解ってるでしょ？これ以上はイケナイ」

「・・・本当に？」

あり得ない。仮にそうだとしてもあの計画はアキナで終わったはずだ。この写真の男がどれほどデキルのかは知らないけれど、たった一人でやれるものじゃない。なんといっても月の頭脳と言われた師匠でさえ失敗に失敗を重ねた上での成功だったのだから。でも、既に僕とアキナという結果ができてしまっている。もしそのデータを手に入れていたとしていたら・・・？

「心配しなくても八意じゃないわ。けど、それに関係しているのは間違いない。断言できることは『私たち』に関係しているということ。いいこと兄さん？もしアレが今もまだ続けられているとしたら私はもう我慢できない。だから潰す。粉々になるまでね」

「わかった。手伝うよ、いや、手伝わせてもらう」

「ありがとう。兄さんならそう言ってくれると信じていたわ」

真実かどうかは分からない。けどもしアキナの言った通りだとしたら、それは僕らの問題だ。これ以上僕たちのような存在を生まないためにも、この男をしょっ引く。

「ほな明日紅魔館まで迎えに行くさかい、今日はこれにて解散っちゅうことで」

真面目な時間はこれでお終い、ケビンさんがそう纏めて今日はお開きになった。

「じゃあ兄さん、今日は停めてね？」

・・・兄はつらいよ

オマケ

「ヤマト、お土産は？」

「私で～す！はいカワイイ吸血鬼ちゃん、アキナちゃんだよ～」

「ヤマト・・・お姉ちゃん？」

「大和が…大和が女の子を連れて帰ってきた～～～～～～！！？？」

「なにこのカオス・・・」

イイコトと悪いコト（後書き）

大陸編も最終章に入ったところでしょうか、じらいです。アキナ再登場！前回よりパワーアップした彼女に期待です！

そう言えば最近は設定集を弄ってませんね。あの設定集、最初は出たキャラ全部書くつもりでしたが、ちょっと長くなりすぎるので困ってます。なので、一旦消してからオリキャラのみ記載して、常に最新話の下に置いておこうかな？と思っています。ネタバレ激しいですし。・・・割込更新でも新着順になるのかな？それだけが心配です。

近日中にも作業しようと思います。消さないで欲しいとの意見があればまた別の案を考えます。

月の申し子とは僕のこと（前書き）

タイトルは詐欺です。

月の申し子とは僕のこと

日も傾きかけたきた頃、アキナを連れて帰る途中もパチュリーの機嫌は悪いままだった。ただ、何かを聞きたがるそぶりをしていたのが気になる。聡いパチュリーのことだ、僕とアキナの関係に気づいているのだろう。それよりもアキナを連れて帰った時の言い訳を考える方が今の僕には先決だ。

案の定、紅魔館に着いた時は大変だった。時間も夜なだけあって、姉妹が起きていたのが一番の原因だろうけど。何があったか一部だけ言うと――――――――美鈴が僕そっくりなアキナを見て騒ぎだしたり、レミリアが僕が女の子を連れ帰ったと発狂しだしたり、フランが暴れだしたりしてもう大変。普段以上に混沌とした紅魔館の中で腹を抱えて笑っているアキナがいたり――――――――もう勘弁して…。そして今回の騒動で壊れた物は全て僕が直しておくように言われたりともう最悪の日だった。ああ、パチュリーは気がついた時にはもういませんでした。

他にも沢山カオスな出来事がいろいろあったけど、とりあえず僕が全面的に被害を受けたとだけ言っておく。

「や～～ま～と～く～～ん、あ～そび～ましょ～」

「・・・鬱だ」

後片付けや我儘姉妹のご機嫌とりに時間をとられ、結局一睡もでき

ずに迎えた襲撃の夜。秋とはいえ夜になると寒く感じるのは僕の心も冷えているからなのだろうか？いつもの調子で迎えに来たケビンさんを見てでた第一声がこれだ。

いっつもが不安だらけの任務だけど今回の不安はそれだけじゃない。今日は僕の隣にはアキナ、それとなぜかパチュリーが立っている。身体に障ると言っても無視されるのでお手上げである。特にパチュリーは魔法研究者のイメージが強いので、戦闘で足を引っ張られそうで怖い。

「なんでパチュリーまで？」

「別に・・・確かめたいだけ」

「いいじゃない。さ、行きましょ」

何時もより冷えた夜空の下、一抹の不安を胸に僕たちは紅魔館を後にした。

明け方。おそらく研究所があるであろう手前の茂みに隠れ、僕たちはこれからの作戦について話し合っていた。何時もの作戦は『正面突破で陽動作戦』なんだけど、今回の標的は逃げ足が早いらしく、陽動するだけで逃げるかもしれないということなので、今になって作戦を立てることになった。とりあえず制圧するのはＤｒキリシマを捕まえた後になった。所謂スニーキングミッションである。ちなみに何時もは僕が正面突破する役です。・・・あれ？僕って毎回損してる？

「ここね」

「なんともまあ違法研究してます、みたいな空気やなぁ」

あの写真の男は、おそらく僕たちの誕生に関わっているのだろう。どれだけ関わっていて、月で何をしていたのかをアキナに聞いても「これは月の任務だから話せないの・・・ごめんね」としか返ってこなかったので良く解らない。それでも僕がこの男を捕まえることにかわりない。そのあとで真実を吐かせる。

「ほなメンバーはワイと大和、アキナちゃんとパチュリーちゃんでいこか」

「ちょっと待って。それ不安すぎる」

会ったばかりの二人が組むなんて無茶すぎる。僕がどちらかと組んだ方がいい。

「大丈夫よ兄さん。私は兄さんより強いだろうし、パチュリー？の一人や二人くらい守ってみせるわよ」

「あなたこそ私の足を引っ張らないで」

火花が散る・・・程ではないが、友好的なムードは一切感じられない二人に僕の不安は有頂天だ。

（ケビンさんケビンさん、これホントに大丈夫!?絶対問題あるって!!）

（大和君。女にはいろいろとあるんやから察したり。たぶんやけど、パチュリーちゃんはアキナちゃんになんかあるんやろ）

（それが心配だって言ってるんだよ・・・）

「それじゃあお先に」

そうこうしているうちに二人は潜入していった。ああ、不安だ・・・

今、私の目の前にいる女、名前はアキナと言うらしい。大和の妹らしいが、その顔だちは大和のそっくりそのままである。まるで同じ存在であるかのように魔力の質も、放っている波長もまったく同じである。双子・・・という線も考えてみたが、それでもここまで似る可能性は極めて低い。如何な双子といへどもまったく同じなどありはしない。その理由を突き止めるべく今回同行したのだ。

「ふ～ん、それほど厳しい警備じゃないわね。これはアテが外れたかもしれないなぁ」

あちゃちゃ、と苦笑しているその仕草すら大和を連想させるものが

ある。性別こそ違うが、今までの判断材料を含めて考えてもこの二人は全くの同じ存在。クローンではないのだろうか？

「よし、警備は行ったみたいね。先に行くわよ」

「待って。貴方に話がある」

「私と兄さんの関係かな？」

・・・どうやら洞察力は馬鹿（やまと）より上らしい。

「あんたの思っている通り、私と兄さんは同じ存在よ。試験管から産まれたモルモット。男か女かの違いと、才能が有るか無いかの違いだけ。詳しいことは兄さんに聞いてね、面倒だから」

「大和は貴方のことが心配そうだった。あいつはあんなのだから産まれを気にしてないだろうけど、貴方はどうなの？」

私の目にはコイツもそれほど思いつめている様には見えない。だけど大和の目にはそう見えていたのだろう。紅魔館に帰ってからは何時もより溜息が多かった。

「・・・兄さんに会うまではそうだったわ。でも私はわたし。今は

そう思えるようになってる。もういいかしら?早くしないとターゲットが逃げちゃうわ」

「そうね。先を急ぎましょう」

もっとも、聞きたいことを聞けた私はここで引き返してもいいのだけれど。そういえばレミィやフランも大和の変化に気がついていたわね。後で教えてあげることにしよう。

「気付いたか？」

「うん。血の匂いが濃いくなってきた」

鼻を埋めるのは鉄の匂い。何度も嗅いだ、真っ赤な血の匂い。『僕』を刻む白衣の人たち。すぐ横の台でも『俺』が刻まれている。この地獄にいるのは、『僕』とけんきゅうしゃ。

「大和君？大丈夫か？」

「っ！大丈夫です！」

しっかりしろ、アレは僕じゃない。僕の記憶じゃないんだ。引っ張られるな、自分をしっかり持て！

「しかし慣れへんもんやな。初めのげーげー言うてたころよりはマシやけど」

前まではあんな光景を視るなんてことはなかった。いったい、『僕』は僕に何を教えたいんだろう？

「大丈夫だって・・・何年同じ任務で付き合ったと思ってるんだよ」

ケビンさんは普通の騎士ではない。背中に聖痕と呼ばれる紋章を背負った守護騎士だ。それ故一般の騎士がするような任務は受けていない。いや、受けないと言うべきか。何時だったかヴリアント副団長が言っていた、『彼は進んで汚れ仕事を引き受ける。それ故敵やっかみも多い。君だけは彼を見放さないでやってくれ』と。損な性格だと思った。彼がどうしてそうなったのか僕は知らないし、知ろうとも思わない。ただ、彼の友人でいるだけでいいと思う。彼もそれ以上を望んでいないだろうしね。

「・・・！ココやな」

「・・・制圧するよ」

扉を蹴破って突入。薄暗い部屋の壁と床には血がこびり付いている。その場にいた研究者二名を瞬く間に黙らせる。ついでに二人の間接をキメて動けないようにしておく。これが何時もの作業だ。

二人を気絶させた後、僕とケビンさんは乱雑に置かれた書類に目を通していた。

「書類と現場を見る限り、ここは解剖所やな。クソッタレ共が・・・・・！大和君これ見い！！」

ケビンさんから渡された書類を見る。いや、見ているつもりだった。
目の前にある書類を見ているはずの目には違う光景が視えていた。

「アキナ・・・？」

「大和君・・・？」

「やめろ・・・おいやめろ・・・ッツ！！」

「ちょっ！？大和君！？」

書類には犠牲となった被検体の数が書かれていた。

「こんにちはＤｒキリシマ。初めまして？それともお久しぶりと言えばいいのかしら？」

「あぁン？何だオマェ？新しく配属された奴か？」

壁一面真っ白の部屋の中、目の前にいるのは月の指名手配犯Ｄｒキリシマ。八意の計画中止宣言の後も秘密裏に私たちを創り続けていた張本人だ。豊姉（とよねえ）も粋なことをしてくれる。コイツを捕まえるために私を派遣するなんてね。

「残念だけどあんたを捕まえに来た月の使者よ。ああ、別に罪が許されたから連れ帰るわけじゃないから。然るべき所で裁きを受けてもらうだけ。それより、私の顔に憶えは無いかしら？」

「月ィ？今更御苦労サンなこって。・・・うん？お前もしかして俺の作品か？その顔、確かに見覚えがあるぜ」

「手を出さないで。私がヤる」

それだけ聞ければ用はない。警告などしない。とりあえずぶちのめす。両手に銃を持ち接近、そのまま振り下ろす。

「おお、怖い怖い」

だがどうしたことか、一介の研究者のはずのＤｒキリシマは戦闘訓練を受けたアキナの一撃を避けてみせた。

「まさかナァ。成功品をこの目で見ることができるたァ思ってもみなかったぜ。傑作傑作」

「貴様・・・！」

「どうしたよ？反抗期か？お前ぐらいの歳の女ってのは喧しくてかなわねェな」

「・・・自分を改造でもしたか、変態研究者」

「あン？それはお前らモルモットの分野だろうが。やるわけねェだろバーカ」

もう何も話すことはない。ただ殺す。そう考えて銃から魔力弾を放つがそれすら防がれてしまう。

――――――障壁突破付与　アグニシャイン――――――

「あ？」

横から聞こえた澄んだ声。飛び出たのは劫火の炎。間抜けな声を残してキリシマは炎に包まれた。

「あんた何てことしてくれるのよ！？あいつは！！」

炎を放った本人に突っかかって行く。我慢ならない。アイツは私が・・・！

「貴方にどんな理由があれ私には関係ない。彼を始末して終わるのならそれでいいじゃない」

「一応連れてこいって命令だったのよ・・・。あれじゃあ跡形も「ハーハッハッハッハ！」！？」

「！？そんな・・・直撃のはずよ」

それは私も確認した・・・けど現にアイツは、

「効かねえなァ、ンな炎じゃあ俺は殺せねェよ。さ・て・と、次は俺の番だ。いい声で泣いてくれよォ、お嬢ちゃんたち！！」

「アキナ無事か！？」

「はは、ちょっと厳しいかな・・・？」

嫌な未来が視え、二人目が居るであろう場所に急行した。幸いこの研究所は地下にあったためか、構造はそれほど複雑なものではなかったため、直ぐに見つけることができた。

目の前のアキナとパチュリーは傷だらけだった。特にアキナの傷が深い。おそらくパチュリーを庇ったのだろう、その分パチュリーの傷は浅い。が、二人とも動けないようだ。

「なんだァ？月の申し子は量産でもされてんのか？ったく、親に逆らうなんて不出来な餓鬼を持ったもんだぜ」

「ケビンさん、二人をお願い」

「どうするつもりや」

「決まってる。叩きのめすだけだ！！」

魔力糸を精製、目の前の男の首を落とす勢いで振るう。が、魔力糸は相手に触れる前に消え去ってしまった。

「！？」

「ヒュウ♪望外だ、悪くないぜお前ら！！」

「チィッ！」

お返しだと言わんばかりのレーザーの雨。魔力を使った月の科学兵器というやつか！？

「こんなもの！」

攻撃の向かう『先』を操ってキリシマに向かわせる。が、その能力で操られたレーザーすら目の前で消滅して当たらなかった。

「ハハ！やっぱり時代は科学だよなァ！魔法なんて時代遅れの産物

なんざ、スイッチ一つで無効に出来るんだからよ！！」

「お前さん、いったい何をしたんや？」

「よくぞ聞いてくれた似非騎士様！仕組みは単純！魔法なんてふざけた力を無力化する力場を作ってやればいいんだよ」

「馬鹿な！それは月でもまだ実用化されていない技術なのよ！！」

「この俺様と八意を失った月が作れるはずねェだろうが。だいたいよォ、なんでお前らは個人の能力持ってんだ？月の全因子を含んだ月の申し子とも言えるお前たちがだぞ？何か劇的な反応が起きるハズだとは思わねェか？それこそ俺や八意にも想像つかねェような馬鹿げたことがなあ」

「劇的な反応！？僕らは人間だ！物をように言うな！！」

これ以上お前の汚い口から発せられる言葉なんて聞きたくない。魔法が効かないのであれば肉弾戦！そんなに殴り合いをしたいのならば朝まで付き合ってやる！

「だーかーら甘いんだよなァお前らは。近づけさせるわきゃねェだろうがよ」

ウザったい！！レーザーだけではない、鉛の銃弾も含んだ弾幕を避けたら後ろの三人に被害が及んでしまう。後ろを無視したら倒せるかもしれないけれど、『もしも』のために友人を危険にはさらせな

い。踏みとどまって弾幕を捌く。

「お前ら殺すのはこれから起こるお祭りの中までとっておくわ。じゃあな」

最後に極大のレーザーを放つキリシマ。僕は加速を使って三人を回収、躱すことで難を脱した。

結局キリシマは逃亡し、アキナの任務は失敗。研究所を潰すという騎士団の任務は達したが、後味の悪い任務となった。

～某所　歴史を感じさせる城の中～

「よォフィナンシエ、帰ったぜ」

一人はＤｒキリシマ。月の指名手配犯にして大和とアキナの真の創造者

「遅い帰りだな同志キリシマ。遅刻かと思ったよ」

もう一人はフィナンシエ・スカーレット。行方不明とされていたアルフォード・スカーレットの弟である。

「とりあえず宣戦布告はしてきたぜ。後は外でお前を待ってる馬鹿どもを扇動すりゃそれで終わりだ」

「正義を行う者を馬鹿呼ばわりするのは頂けないな。では行こう、同志が待っている」

『君たちは知っているだろうか？一部の人間は妖怪の存在を隠し、一部の人間は我々を忘れかけている。人類は己の発展のために我々をこの世から消滅させようとしているのだ。このままでは我々妖怪は活力を失い、諦観の内に壊死するだろう。それを良しとしないのであれば

――――――――――――――――――――――――――戦争を始めよう』

「「「「「「「ウオオオオオオオォォォォォォォォォォオォォォオオオオ！！！！！！」」」」」」」

『諸君、派手に行こう』

「ククク、扇動家がよく言う。だがこれで殺し放題だ。クク、ククククク」

歴史に刻まれることのなかった、人と妖怪との最後の大戦が始まろうとしていた。

月の申し子とは僕のこと（後書き）

ＡＣファンの方ごめんなさい。『いちどつかってみたいせりふ』だったんですよｗ
ＡＣって難しいゲームだと思うじらいです。エーシー♪じゃないよ？ＡＣだよ?どうもあの手のゲームは苦手です。

オリキャラ多いんだよ!!と思っている方、サーセン。もうしばらくお付き合いください。そろそろ大陸編終わって幻想郷に帰るんで。もうすぐ大陸編も書き終わるかと。時間が足りないんだよねぇ。一日が４８時間くらいあったらいいのに。

状況は刻一刻と変わる（前書き）

あなたの正義って何ですか

状況は刻一刻と変わる

～紅魔館門前～

夜も明け、太陽が真上に上がってきたころ、僕たちは紅魔館の門前に帰ってきた。ケガをした二人を担いでいる僕らを美鈴が見つけ、治療の手配をしてくれている。間もなく受け入れ準備が整うところだろう。

「ワイは報告があるから一度本部に帰るわ。・・・気ぃつけえや大和君、何か嫌な予感がする」

「大丈夫。とりあえず紅魔館で二人の治療をするよ。ここなら何でも揃ってるから」

「わかった。それじゃあな」

そう言ってケビンさんは駆けて行った。ケビンさんの言いたいことは分かっている。あの男が何かを企んでいると言いたいのだろう。僕も気味が悪い。能力で見れればいいんだけど、未だに使いこなせていないからか、ピンポイントで見たい未来を視ることはできない。

「大和さん！二人の治療の準備が出来ました！！」

「分かったすぐ連れて行く！」

焦りを隠せていない美鈴が後ろに二人の吸血鬼を連れて帰ってきた。アキナとパチュリーの二人はケビンさんの術で応急処置をされ、今は眠らされている。さあ運ぼうかと思い、二人を何とか抱きあげる。あ、柔らかい・・・

「痛っ！？」

「大和！さっさと運ぶ！！」

「運べ～！」

「はいはい、お嬢様方の言うとおりに」

怪我人がいると聞いて飛び起きたのだろう、私達寝起きですと言わんばかりの寝ぐせをつけたままのお嬢様方がやって来て、僕の脛を蹴りあげた。別に役得だと思うくらいいいじゃないかＹＯ

「「あ゛あ゛ん！？」」

「直ぐに運ばせて貰います！！」

「アキナちゃんのケガが酷いわね・・・。完治には時間がかかりそう」

紅魔館の一室、臨時に病室として使われている部屋に置かれているベッドに寝かされた二人を、シルフィーユさん（先生）は診察していた。

「先生、二人は助かりますよね・・・？」

「安心しなさい。アキナちゃんもパチュリーちゃんも私がしっかりと治してあげるから」

ベッドで死んだように眠っている二人を見て、本当に間に合って良かったと思う。もしあの時僕らが少しでも遅れていたかと思うと・・・

「ありがとうございます」

口惜しいけど、二人を先生に診せたところで僕の出来ることは終わりだ。・・・アレ？安心したら眠く・・・

「今日はもう寝なさい。大丈夫、娘たちにも邪魔しないように言っておくわ」

「スイマセンお願いします」

あ～もう限界。いい機会だから思いっきり寝かせてもらおう。

ト・・・・・・・・・て

マト・・・・・・・・・・・・・・きて

「ヤマト起きて！！！！」

「はい起きてますとも！！・・・・・・あれ？何してるのフラン？」

もう夜なのか？部屋の窓からは月光が入ってきている。邪魔はさせないと言ってはいたけど、仕事の時間になったから起こしに来たのかな？でもねぇ、何も起こすのに僕の頭を叩かないでもいいと思うんですよ。そうすれば寝起きに頭がフラフラすることもないと思うから。・・・・・・・フランだけに。

「寝ぼけてる場合じゃないの！！襲撃よ！！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

「だから襲撃よ！！紅魔館が襲撃されてるの！！！！」

「な、なんだってーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！？？」

吸血鬼の根城に！？僕と美鈴みたいな馬鹿が来たって言うのか！？紫の魔法使いみたく挨拶して紅茶飲みに来たんじゃないの！？

「とにかく！美鈴とクラウス、お父様が迎撃してるけど数が多すぎるの！！ヤマトも手伝って！！」

いったいどこの誰が来たんだ！？妖怪廃絶の一派なのか！？数は！？戦力は！？戦略は！？レミリアたちはどうする！？動けないアキナ、パチュリーはどうなる！？

最悪の状況を考えてしまい、思考の波に呑まれてしまって動けなくなった。そんな僕の脳天を再びキツイ一撃が襲った。

「しっかりして！ヤマトがこうやっている内にも家族が危険に晒されているんだよ！！ヤマトも紅魔館の一員であるなら、出来ることをやって！！それでも私と姉の執事なの！？」

「フランドール・・・・・？」

僕の服の襟を両手で掴み、激しく僕をゆすり、声を張り上げた。かつてない程の真剣なフランドールを目にした僕は固まってしまった。

「・・・大丈夫だよヤマト。みんな頑張ってるの。絶対なんとかなるってお姉様が言ってたの。運命を操れるお姉様が言うんだもの、きっと大丈夫だよ」

そう言って何時も通りに戻ったフランドールを見て、僕は自分の頭が急激に冷えていくのがわかった。

……はぁ、やっぱり僕って駄目だなぁ。こんなにも震えている小さな女の子に言われるまで分からないなんて。しかも子守りしていた子にこんなに言われるなんて思ってもみなかった。お兄さんちょっとショック。知らない間にかフランもレミリアも大きくなっていくんだね・・・。親ってのは、こういう気持ちになるんだろうか？

「わかりましたフランドール様。伊吹大和、才無き身ではありますが、この身を賭してお二人をお守りいたします」

片膝をつき、騎士のマネごとのように誓う。僕はまだ魔法使いには成れていない。そしてこの闘いは、守るための闘いだ。約束は守らなければならない。なぜなら鬼は約束を守らない者が嫌いだから。だから僕は死ねない。生きて帰ると母さんにそう誓ったから。

「それでいいんだよ♪」

花が咲いたかのような笑顔を浮かべるフランドール。現金な子になっちゃったなぁ。育て方間違ったかな？

そんなことを考えている暇もない。急ぎ部屋を飛び出して長い廊下を飛んでいく。

「それにしても」

隣を飛ぶフランを見て、ふと思った。

「なに？」

「フランって、あんな一面もあったんだね」

「もう、恥ずかしいから言わないでよ・・・」

帽子を両手で押さえ、少しでも照れた顔を見せないようにしている様を見ると、やはりまだ幼いのだと感じさせる。

「誰かに習ったの？レミリアとか？それともアルフォード？」

「・・・ケビンだよ。こう、カワイイのとシリアスのギャップがイイんだって」

・・・間違ったのは僕の友人を選ぶ程度の能力だったわけだ。

「執事長！敵の数が多すぎます、このままでは！！」

「吠えるな門番！！吠えるくらいなら一匹でも数を減らせ！！」

「そうは言ってもこの数相手じゃ・・・！」

「俺達に後退の二文字は無い。覚悟を決めろ紅美鈴」

倒しても倒しても次々と押し寄せる妖怪の群れ。先の見えない闇の中で私は必死に闘い続けていた。今はアルフォード様も私達と一緒に前線で闘っている。私と執事長は下がって支援してくれればいいと言ったのだけど、この人は大和さん並に融通の利かない人だ。本人が一度決めたことは決して変えやしない。門番としてはいい迷惑

だけど、個人としては好ましい人だ。そしてこの吸血鬼、やはり闘いに向いている。本人は嫌だ嫌だと言っているが、一分一秒ごとに動きのキレが増している。大和さんとは馬が合わないはずだ。

「遅くなりました!!」

その声と共に一筋の太い魔砲が戦場を横切った。ようやく登場ですか。それにしても開幕マスパとは、大和さんも中々派手好きですねぇ。今の一撃はあちら側に中々の恐怖心を抱かせたみたいですよ？それなり以上の数が吹き飛びましたからね。・・・それでもまだまだ湧いてきてますが。

「同志諸君、しばらくそこで待っていたまえ。ここからは我々が相手をする」

群れの中から一人の妖怪が出てくる。・・・あの妖怪、強い。それも底が見えない程に。そして背中にあるその翼、何処かで見たような・・・？

「・・・フィナンシエ・・・なのか・・・？」

「久しぶりだな兄よ。こんな形で再開するとは思ってもみなかったが」

フィナンシエ・・・？弟のフィナンシエ・スカーレット！？何故彼がここを襲う必要がある！？実の兄が住んでいるというのに！

その後ろから２０人の上級妖怪が出てきた。・・・マズイ、非常にマズイ。私と大和さん、主従コンビだけじゃここを防ぎきれない・・・！

「大和さん、今すぐお嬢様方に紅魔館を脱出してもらうように言ってきてください」

「・・・もう言ってあるよ。怪我人も含めて脱出の準備を始めているはずだ。あとトイレ行ってきていい？」

「ダメですよ、そのまま帰ってこれなくなるんですから。それにそんなことを言う余裕があれば十分です」

こんなときにも冗談を言えるとは頼りになりますねぇ。おそらく本人は本心から「逃げていい？」とか思っているのでしょうけど。しかし流石は大和さん、脱出を既に促しているとは。・・・案外軍師とかに向いているのかも。

「では兄よ、久しぶりにやり合おうか。同志諸君は他の三人を頼む」

「来るぞ！！」

兄弟が戦闘に入ると同時に、私と執事長に7人、大和さんに6人が一斉に襲いかかった。四方八方から迫る弾幕、突きに蹴り。どれもが一級品。多少のダメージは覚悟して攻撃しないと、何もできないままに終わってしまう。私でもこれほど追い詰められているのだ。このままじゃ大和さんと執事長が危ない。そう思っていたが、私は驚くべき光景を目にした。

「老いぼれが！さっさと逝っちまえ！！」

「おやおや、お若い方は元気でいらっしゃいますなぁ。ならば私もそれなりのオモテナシをせねばなりませぬ。例えば・・・咽喉を食いちぎるとかなあ！！！！」

自身の骨格すら大きく変貌させ、巨大な狼となった執事長がそこにはいた。狼男だということは聞いてましたけど、あれじゃあ神話クラスのバケモノじゃないですか！？

「この紅魔館の敷居を跨いで、生きて帰れると思うなよ若造！！」

そして一番心配な大和さん。あのイクシードとか言う不思議魔道機関があってようやく上級と闘えると私は思っていたけれど、どうやらそれは間違っていたようだ。

未来を視て、加速を使った上に制空圏を用いて敵を絶対に近づけさせないようにしている。騎士団での任務で実戦経験が豊富だったからか、闘い方が前よりだいぶ上手になっている。だけどあの闘い方では勝てない。勝てはしないけど、負けもしない。そんな闘い方をしている。おそらく本人はお嬢様方が脱出するまで時間稼ぎをするつもりなのだろう。その後で自分がどうなろうとも、未来より今に全力を注いでいる。

「私も負けていられない・・・！！」

龍人の力を解放し、全身を虹色の気が包み込む。さあ掛ってこい、伝説とまで言われた龍の末裔の力を見せてやる！

「人間の餓鬼が、澄ました顔しやがって！！」

「このガキ、いい加減に！！」

「その餓鬼一匹仕留められないで上級？笑わせる。生まれ直したら？」

闘っていると何故か言葉遣いが悪くなる。僕の悪い癖・・・なのかな。

どうやら今の僕は少しオカシイみたいだ。そんなことを考えられるほど余裕があり、すごく闘いやすい。今の僕、すごくのってる。３６０度、まるで誰かが教えてくれているかのように周りが手に取るようにわかる。何か、何かが掴めそうなんだ。この先にある何かを・・・。

あと少しで何かを掴めそうだったけど、突然の一言で僕は現実に引き戻された。

「紅魔館から誰か逃げ出したぞ！！」

「！？」

レミリアたちの脱出がバレた！？クソ！今のレミリア達は怪我人を運んでいる最中で戦闘なんか出来る状態じゃない。どうにかしてこの囲いを突破しないと・・・！

「おっと、行かせないぜ」

「ッツ！どけッ！！」

手元にイクシードがないことが悔やまれる。アレさえあればこの囲いを突破することもできただろう。だけども今の僕にはその囲いを突破することが出来ず、今まで見ているだけだった妖怪たちが追いかけるのを見ていることしか出来なかった。レミリアたちは怪我人を運んでいるせいで速度が出ないのだろう、直ぐに追いつかれていた。振り下ろされる爪を前に、僕はどうしようもなく無力だった。

―――――――――そんなお前に空の一矢をプレゼント―
―――――――――

闇夜を貫く一本の聖槍。その槍はレミリアたちに襲いかかった妖怪を全て消し飛ばした。

ああ、どうやら駆けつけてくれたみたいだ。本当に、本当に君は頼りになる人だよ

「聖堂騎士団、抜刀と同時に散開！友軍を援護する！各員、命を惜しむなよ！！」

妖怪の大群の進行を確認した。夜中まで執務室でケビンの報告書を見ていた私、ヴリアントにその一報が届いた。

届けたのはケビン・フォレスト。妖怪の進行方向には紅魔館がある、居ても経ってもいられない。一人でも救援に行くと言う彼を引き留め、準備をすませた私と彼は騎士団を率いて教会を出た。妖怪を守るために妖怪を討伐する。あまりにもふざけた話故に報告は事後にする。一応カーネリアを置いてきたので大丈夫なはずだ。彼女も現場に行きたがっていたが、それでは教皇に言い訳をする人物がいなくなる。もっとも我慢弱い彼女のことだ、直ぐにでも現場にくるだろう。だが、

「それまでに終わらせてもらう!!」

怪我人を連れた少女たちと入れ違いになるように私は戦場に入る。愛剣も久しぶりの実戦を待ち望んでいたのだろう、鈍い輝きをもって私に応えてくれた。フッ、この戦、負けることなど在りはしない!!

「ふむ、ここまでだな。今回は引かせてもらう」

聖堂騎士団が援軍として加わり、戦況が僕らに傾いたのを察してか襲撃の首謀者は妖怪たちに撤退の意を伝えた。

「待てフィナンシエ！何故俺達を襲う！？」

アルフォードが声を張り上げてフィナンシエ・スカーレットに問う。

「兄よ、私は今のこの世界を憂いているのだ。我々は人間を滅ぼすぞ。妖怪を廃絶し、自分たちの事しか考えていない人類は粛清されねばならん。兄は私の考えが理解できないだろう。だからこれは警告だ。邪魔をしないのであれば手を出しはしない。そこで何もせずに見ているがいい」

言いたいことだけ言って彼らは引いていった。いったい何が起ころうとしているのだろうか。二人の会話を前に何も出来ずに呆然としていた僕には、ただ黙って見ていることしかできなかった。

状況は刻一刻と変わる（後書き）

大陸編終わりまであと何話？たぶん5話くらいと踏んでいるじらいです。

役者は全て揃いました。これからの話に出てくる人物は基本的に自己中心的です。人によって違う考えがあると言うべきなのかな？ただ、誰もが自分の正義を持っています。

話は変わりますけど、いいサッカーでしたね。あのように勇気を与えられる人たちは改めてスゴイな、と思いました。

僕らの戦い

大戦の発端となった紅魔館襲撃から数ヵ月後、欧州一帯が戦場と化していた。人間を滅ぼす――――――――――――そう宣言したフィナンシエ・スカーレットを頭とする妖怪の軍団は各地で様子見を決めていた妖怪たちすら己の陣営に引き込み、人間たちに牙を剥いた。だが人間たちも無抵抗ではない。騎士団を筆頭に各地で義勇軍を募り、大砲や鉄砲、科学によって生み出された武器を手に取り闘っていた。この話は、その中で同類と闘ったとある妖怪たちの物語である。

国立図書館　語られぬ大戦より抜粋

「と言うように、私は後世に名を残す妖怪になりたいの。だから参加しましょう」

「・・・つまり目立ちたいんだよね？」

太陽が頭の上を通過する、普段は眠っているはずの時間。紅魔館の一室、レミリアの私室に集まっているのはレミリア・フランドール・パチュリー・アキナ・僕の四人。輪になってそれぞれの意見を述べているところだ。所詮秘密会議というものである。そして今はレミリアが自分の案を通そうとしている。もっとも、みんなそれぞれ似たりよったりの意見を既に言ったのだけれども。

「妖怪の一生は、その人が何為したかで決まるわ。レミリア・スカーレット此処に在り！とその名を歴史に刻むのよ！！」

人間の一生もです、とのつっこみは入れても無駄なんでしょうね。

襲撃から数ヶ月、外の景色が雪景色に変わってからは、紅魔館の生活は今まで通りに戻っていた。「こちらが手を出さない限り何もしないなら、手を出さなければいい」とのアルフォードの宣言を受け、僕らは何もせず普段通りの生活を送っている、ことに異を唱える集団です。

ケビンさんを始めとする騎士団のみんなは各地を転戦、その血で真っ白な大地を紅く染め上げている。正直、心配で気が気じゃない。

盟約云々の話もあったけど、それは秘密裏に結ばれたものであって、妖怪と手を組んでいたなどと公に晒してしまえば騎士団の存続すら危ぶまれてしまう。そう言っても人間が滅んでしまえば意味ないんだけどね。

「いいねレミリアちゃん。私もそろそろ暴れないと駄目だと思ってたし、何よりまだお仕事終わってないしね～」

「フランもね、おつむにきてるの。だからきゅっとしてあげたいな」

アキナとパチュリーのケガも完治した。そのアキナはキリシマを捕まえるまで帰れないと言っている。元々協力を頼まれていたので今更断ることなんて選択肢はない。その上レミリアとフランもヤル気満々だ。美鈴もアルフォードというよりも二人に仕えているみたいだし、僕に至ってはただの客人兼お手伝いだ。駄目と言われても聞く義理がないのです。それに何より、

「「「「「やられっぱなしはムカツク」」」」」

「「「「「……プッ」」」」」

何だ、やっぱり皆そこに行きつくんだ。

「あら？大和は反対じゃなかったの？」

「そんなこと言って、レミリアも戦場で泣かないでよ？迷子になっても探しに行かないから」

「なあ！？私は子供じゃないわよ！！」

「お姉様泣き虫だからね～」

「あはは！カワイイ子たちだなぁ！」

そんなこんなでただウサ晴らしのためだけに僕らが戦場に行くことが決まった。軽いノリで決まったけど、僕たちの戦う動機なんてそんなものでいいと思う。フィナンシエみたいに魔女狩りで妖怪の存在が～～、なんて小難しい話はこの際いい。ただ腹が立ったからぶん殴る。自分に正直に生きるのっていい生き方してると思わないかい？

「仕方ないわね。帰ってくる場所くらいは守ってあげるから、存分に暴れてきなさい」

今までだんまりだったパチュリーも賛成してくれた。これでとりあえずの方針は決まった。後は夜になれば紅魔館を抜け出す。おそら

くこの戦いが終わるまで紅魔館には帰って来れないだろう。皆それを理解した上での行動だ。

「悪いわねパチェ。お父様とお母様への言い訳もお願い」

「・・・善処するわ」

「そんなこんなで今は戦場を駆け抜けるーーーーーー！！？？」

「大和君後や！！」

「おわ！？コンチクショーーーーーー！！！！」

あれから更に数週間！ケビンさんたちに合流して共に戦場を駆けています！何？レミリアたちは妖怪で盟約うんぬんじゃないのかって？型破りな人の率いる聖堂騎士団の中に入っちゃえばそんなことどうにでもなったよ！！

「アッハハハハハハ！たっのしいねヤマト！！！！」

「この状況でそう思えるフランさんは何処かオカシイとお兄さんは考えますよ！？」

飛び交う銃弾と弾幕。血と硝煙の匂いが辺りを包みこむ戦場。血を流して倒れている仲間を踏みつけ、敵を倒すために戦い続ける。降り積もった雪はもはや白ではなく、血の紅に染まっている。もはや白い部分を探すほうが難しいだろう。大砲が直撃し、粉々に吹き飛ぶ妖怪。生きたまま腕や足を引きちぎられる人間。まさに地獄絵図だ・・なんてことはなく、小規模な戦闘が起きているだけです。ただ、局地的に攻撃が激しいだけであって。その理由はまあ、妖怪が妖怪相手に戦っているからかな？

「しっかし雑魚ばかりですねぇ。お嬢様には物足りないんじゃないんですか？」

「そうでもない。私にはいい実戦経験になっている。むろん、フラ

ンにもな」

「私には物足りないわ。早いとこキリシマ辺りが出てきてくれないと飽きちゃう」

そんな中でも余裕を持つ者ものが数名。紅魔館勢（僕以外アキナ含む）だ。戦場を散歩するように悠々と歩き、目の前に敵が現れると片手間に片付ける。それが出来るだけの力を彼女たちは持っている。今も彼女たちは目の前に群がってくる妖怪を叩きのめしており、彼女たちの歩いた後には死屍累々の行列が出来あがっている。

紅魔館を出てからの僕たちのリーダーはレミリアだ。リーダーたる人物にはカリスマが求められるとのことで、アルフォードのマネをしている。けどこれが中々『さま』になっており、騎士団内でも評価が高い。そのカリスマ性は流石レミリア・スカーレットと言ったところか、おぜう様は大変輝いています。その妹は狂ったように戦場に酔っているんですが。

「お、あいつら引いていきよるな」

「ふぅ・・・終わったぁ～～～～」

妖怪が引きあげていくのを見てその場にへたり込んでしまう。僕も何回か戦場に出ているけど、この独特な空気は嫌いだ。一対一の決

闘ならともかく、四方八方からとんでくる殺気に気が滅入ってしまいそうになるのだ。それでも慣れてきている自分がいることに驚きなんだけど。

「ほれ立たんかい大和君。ワイらも帰るで」

「はいはい分かってますよ」

最近は小規模で散発的な戦闘しか起きていない。初期にはフィナンシエたち大物も戦場に出ていたらしい。そのころ僕たちはまだ紅魔館で普通に生活していたわけで・・・良かった、主に僕の生命的に良かった。

そんな戦場に似つかない馬鹿な事を考えながら荒れ地と化した戦場を後にした。どうやらまだそんなことを考えれる余裕が僕にもあるらしい。

～聖堂騎士団　拠点～

街から離れた平原の聖堂騎士団のベースキャンプ。遮蔽物が少なく、むしろ狙って下さいと言わんばかりの立地を敢えて選んだのは豪快な団長（カーネリア）の気質ゆえか。その簡易テントの中で紅魔館メンバーはつかの間の休息を得ていた。

「おかしいと思わない？」

「何が？」

ここには妖怪が三人、人間を辞めている月人が一人居るせいか元気が有り余っている。ただの人間である僕はノックダウン気味なんだけど、僕も男だ。先にお休みなさいなんて出来ないのでこうやって意地を張って一緒にいる。

「フィナンシエのことよ。人間を滅ぼすだなんて、とても正気の沙汰とは思えないわ。大和も私たち妖怪が何を糧にして生きているか知ってるでしょ？」

そう言われればそうだ。妖怪にとって人間の存在は絶対に必要なはず。仮に人間を滅ぼしたところで待っているのは緩やかな消滅だけだ。

「もっとも、そこいらの妖怪は暴れたいだけなんでしょうけどねぇ」

「私も美鈴の言う通りだと思う。あいつらからは目的を達成するとかの覚悟とか意気込みを感じられない。近いうちに自然消滅とかするんじゃない？」

「むむむ・・・じゃあそれまでに何とか名を轟かせないとダメね」

「私は既に伝説ですから」

「兄さんが褒めてくれたらそれでいいの」

「少しはやる気を出してもらいたいものね・・・」

また話が脱線してきてる気が・・・。まあ本人たちは超真面目なんだろうけど。あ～もう駄目、今の内に座ったまま仮眠をとらせてもらおう。

「ヤマト、膝いい？」

「好きにしたら～？」

ごめんよフラン、僕はもう眠さで限界みたいだ。膝に座ってきたフランを後ろから抱き締めるようにして寝る。背が伸びた僕の腕の中ではフランがすっぽり入っていしまうわけで。抱き枕みたいで気持ちがいい。違うのは温かさだろうか。

「えらい面白い顔しとるなぁ。一発ギャグか？」

「目覚めの一発が吸血鬼（姉）の拳っていうのは、ギャグになるのだろうか？」

拠点の作戦会議室。定期会議のためにやって来た僕を見たケビンさんの第一声がこれだ。顔が面白いほど陥没しているのが自分でも分

かる。

「…愛されてるなぁ」

「酷い愛情表現だね…」

「たぶんお前はいろいろと勘違いしてるんやろなぁ…」

「黙れケビン。ではこれより会議を始める」

円卓に宛がわれている席に座る。僕は一応紅魔館代表として参加している。参報という面倒でありがたい役職を押しつけられたからだ。僕の他にここに居るのは１０人。団長・副団長（カーネリア ヴリアント）・ケビンさんたち守護騎士である。それぞれが正騎士・従騎士を率いている。

「まずは悪い知らせだ。・・・伊吹。再び紅魔館が襲撃され、シルベーヌ（先生）が拉致された」

「・・・え！！？？」

「悪いが事実だ。証人もいる。・・・入れ」

入ってきたのは紅魔館のメイド長。忘れている人もいるだろうから

説明しておくと、いつも先生について世話をしている人？です。何時ものメイド服は所々破け、激しく争った後が見える。

「間違いありません大和様。旦那様方の善戦虚しく、奥様はあ奴らに捕まりました。貴方様方の責任です。手を出さなければこんなことには・・・」

メイド長が大和を非難し、親の仇のように睨みつける。何時もの大和なら萎縮してすぐさま頭を下げるところだが、大和にはそれとはまったく違うモノが視えていた。それを指摘しようとしたところで、再びカーネリアが口を開いた。

「次にいい知らせだが・・・奴等の本拠地が分かった。人質もそこに運び込まれたはずだ。今回の我々のフィナンシエの討伐・可能であれば人質の奪還だ。頭を潰せばやつらも潰れるだろう。数ヶ月に長引いた戦争もここでケリをつける。いや、つけねばならん状況にまで我々は追い込まれた。総力戦だ。ヨハネの連中も来るぞ。総勢２万といったところか。あちらはおよそ６万程の見込みらしいがな」

２万対６万！？会議に参加している誰もがその言葉に目を丸くしている。あの副団長（ヴリアント）でさえ苦い顔をしている。

「ちょ、ちょっと待ってや！3倍もの戦力差があるというのに攻め込むんか！？自殺と変わらんやんけ！！」

「では義勇軍でも募るか？ケビンよ、我々は騎士なのだ。民間人を危険にはさらせん。我々だけでやらねばならんのだ。いましがた、強烈な魔力光と共に大規模魔法陣が上空で観測された。外に出れば見えるぞ？解析班によると、あれは大量殺戮ができるほどの魔力を含んでいるようだ。それこそ、欧州すべての生き物を殺せるくらいのな」

「なんやそれ・・・絶望的やないかい・・・・・」

「以上だ。これで会議は終わりだ。別命あるまで待機していろ」

一人、また一人と席を立って行くけど、誰もが言葉を失ったままだった。見込まれる敵戦力はざっと6万。僕たちは3倍の戦力差をひっくり返し、なおかつ魔法陣の発動を止めなければならない。2万対6万の戦いなんて聞いたことがない。戦いにすらならないのではないか？

「・・・大和君らは逃げえ。わざわざ死にに行くことはない、今すぐ国に帰り」

「・・・生憎と僕らのリーダーはレミリアでね。僕はそれに着いていくだけだ」

俯いたまま動かないケビンさんを後に、僕は席を立った。

僕らの戦い（後書き）

読者は着いて来れているのか！？じらいです。大陸編が終わったら色々とこの後書きで何でこんなことしたかとか言えたらいいですねぇ。迷った挙句に書いています。別にキリシマ倒して幻想郷行ってもよかったんですけどね、好きにやらして貰ってます。もうちょい付き合ってやってください

決戦前（前書き）

早くも更新できたよ！『大和、嫉妬する』をお届けします

「・・

これが今僕たちが置かれている状況。別に逃げても構わないらしいよ？わかったか親馬鹿。わかったらその手を離せ親馬鹿」

襟首を持たれ、宙に浮かされた状態でもアルフォードの目を見て言う。

会議が終わって戻ってみると、そこにはアルフォードを始めとする紅魔館ファミリーが勢ぞろいしていた。レミリアやフランドールはアルフォードに本気で怒られたようで、涙をこらえて俯いている。子煩悩なコイツのことだ、愛ゆえにというやつなのだろう。それを感じているのだろう、美鈴にアキナでさえ罰が悪そうにしていた。特に美鈴は本来は止めるべき立場だったのだから。

パチュリーや執事長も戦ったのだろう、ボロボロの服を着て、立っているのもやっとのような状態が見受けられる。

僕はその激高したアルフォードに捕まりながらも状況を説明して今に至っている。

「戦うしかない。アルフォード、もう戦うしかないんだよ。先生を

助けるのも、弟を止めるのもお前の力がないと出来ないんだ。何時までも逃げてなんていられないんだよ」

逃げて、隠れて、そういう自分が大嫌いなはずなのに甘んじて受け入れているコイツが大っ嫌いだ。本当はそんな自分が嫌で嫌で仕方ないはずなのに。僕には解る。だってアルフォードは力のない頃の僕そっくりだから。母さんや皆の後ろに隠れて、のうのうと生きていた僕にそっくりだから。

「・・・遙か昔に自ら出ていったのだ。引きとめることの出来なかった俺が、今更どの面下げて会いに行けと言うのだ」

「そんなあんたの事情なんか知らない。でもあの人はあんたのことを『兄』って言ってたじゃないか。それで十分じゃないの？レミリアが泣いている事実で十分だと言ったお前はどこに行ったんだよ」

大切なのって何だろうね。僕の物差しで言ってみれば、家族と仲間。その二つの為なら命をかけてもいい。

「力があるくせに・・・僕なんか足元にも及ばない力があるくせに！争いが嫌いだって理由だけで逃げていいわけないだろ！？自分の奥さんぐらい自分で連れ戻してみろ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・」

「僕は行くよ。友達を一人にするわけにはいかないから」

そう言ってテントを出た。行き先なんてない。とりあえずあそこには居られない空気だったから。

手近な場所に腰をおろしてこれからのことを考える。…分かってるさ。アルフォードの言いたいことも、僕がどれだけ自分勝手な行動をして、自分勝手な事を言っているかぐらい。ああもう、寒空の下だったら一人だということを余計に実感させてくれるなぁ。それでもたった一人の友人を見殺しにしてまで魔法使いになる夢を追いかけたくない。でもなぁ、

「あああぁぁぁぁぁぁぁぁあこんな自分が大嫌いだ……。早まったなぁ。そういえば先生いないのにどうやって魔法使いになろうかなぁ」

自己嫌悪タイム突入だ。チャンスタイムよりも発生率が高いです・・・

「そうやって後先考えないから馬鹿呼ばわりしてるのよ」

「それは言わないお約束……ってパチュリー!?なんでここにいるの!?」

属性魔法ならお手の物。ここぞという時に頼りになる紫の魔法使いが何時の間にか隣に座っていた。
ボロボロの服は魔法で直したのだろうか、今ではすっかり直っている。

「だいたい、兄さんも少しは能力を使えばいいじゃない。便利よ?」

反対から聞こえてきたのは僕よりもできた妹の声。何でも僕以上にこなす癖に、どうしてか僕のことを慕ってくれる愛すべき?妹。

「何でここに…?」

「さあ?何でかしらね。とりあえず貴方には魔法使いに成ってもら

わないと私の今までの努力が無駄になるから、とでも言っておくわ」

「何でって、キリシマ捕まえなきゃ月に帰れないじゃない。私も参加させてもらうわ」

……アルフォードに偉そうなこと言えないなぁ。まったく、僕はいい友人を持ったもんだ。

「ところでアキナ、その能力のことなんだけど・・・」

「さっき私も『視た』わ。兄さんの考えていることで間違いないと思う。いい？私たちは未来を視ているの。未来を変えれるのは私と兄さんだけ。変えるも変えないも私たち次第。人には過ぎた力なのかもしれないけどね・・・」

会議室でみた未来。・・・それを変えるも変えないも僕次第、か。僕に何ができるのだろう。

「すいませ～ん。伊吹大和さん？でよろしいですか～？」

「ん？そうだけど」

今までの考えを纏めている最中に声を掛けられた。

振り向いた先にはつなぎを着た子供が短剣を抱えて立っていた。だ、大丈夫なのか・・・？見ていてすごく危なっかしいんだけど。

「よかった～。これ、教会から依頼されてた剣です。魔道機関『イクシード』？を搭載した工房の最高傑作です。大切に使ってくださいね。それでは～」

子供は短剣と説明書？を渡してさっさと帰ってしまった。

「・・・魔力が徹りやすい金属使ってるわね。これなら魔法媒体としても使えそう。私の考案したリボルバーも使われているわ。大和にはもったいないできね」

物珍しそうにそう評価するパチュリー。魔法使いとしての血でも騒ぐのだろうか、次々と気になる点をあげていく。

「・・・あげないからね？」

「いらないわよ。それよりも弾に魔力を込めなさい。今のままじゃ

只の剣よ」

この剣の利点は一時的ながら魔力量の爆発的アップにある。人間では気や魔力には限界がある。もともとの魔力量じゃ上位妖怪以上とは到底闘えない。そんな僕のために師父が贈り、パチュリーが考案した真・魔道機関。これがこれからの僕の切り札になるのだ。

「装備も届いたことだし、そろそろ始めましょうか」

「何を？」

「魔法使いになる儀式ってやつを、よ」

～歴史を感じさせる城の手前～

間もなく会敵ポイントといったところか。上空には巨大な魔法陣が展開されており、嫌でもこれからの激戦を感じさせてくれる。先に出陣していた聖堂騎士団に私(アキナ)はようやく追いつくことが出来た。総勢2万の騎士団員が列を作って行進している。

「あ、いたいた。おーいケビンさん、私と兄さんも参加させてもらうわよ」

「アキナちゃん!?・・・一人なんか?大和君はどないしたんや?」

「パワーアップするための儀式中」

「あー・・・、またなんかやらかす準備しとんか」

そう言って苦笑するケビンさん。たしかアルフォードを討伐するた

めに紅魔館に行った時も、一人で全部をぶち壊したらしい。その時のことを思い出しているのだろう。兄さんが土壇場で予想外の動きをするのは私も知っている。そうじゃないと蓬莱島で負けるなんてことなかったから。

「ワイは逃げえ言うたはずなんやけどなぁ・・・」

「そうは問屋が卸さないわよ。私だってケリをつけなきゃいけない相手がいるんだから」

Ｄｒキリシマ。中止が決定したはずの計画で私と兄さんを創り、多くの兄妹の命を奪った張本人。あいつを倒さないと死んでも死にきれない。

「…死ぬなや」

「互いに、ね」

目の前には妖怪の大群。戦力差は2万対6万。いや、目算ではそれ以上と見ていいだろう。私もこんな戦いなんてしたことがない。でも大丈夫、未来は視えているから。

「では行こうか諸君。これが最後の戦いだ」

カーネリアの号令の下、２万の騎士が武器を構える。

歴史に刻まない人と妖怪の最終決戦が始まった。

大和の短剣講座

２０～３０？程度の両刃（適当だね）。魔法が徹りやすい金属が使われており、掴と刃の間にリボルバー式に改良された魔道機関『イクシード』が搭載されている。弾には魔力を込めることができ、魔力さえ込められていれば何度でも使用できる。数は３発。発動には大和が意思を込めることで発動。別に手で持ってなくても発動可能な御都合だよ！

主に無手での戦いをサポートすることに主眼を置いたため、基本的には逆手に持って扱う。これで両手でもパンチが出来る・・・ハズ。イクシード使用時は一時的に大和の魔力が３倍になるが、全ての弾を同時に使った場合は大和の身体が持たないので使用できない。一回の戦闘では一個しか使えないのが普通。無茶をすれば身体が弾け飛ぶよ！刀身に魔力剣を作り、長剣としても使うことができる。

決戦前（後書き）

こんばんわー、じらいです。なんか一気に投稿したほうが解りやすいかな?とか思って更新してます。今回大和を嫉妬させてみました。といいますか、心で思ってたことぶちまけただけなんですが。何で僕には才能ないんだよオイ!?な感じです。あとついに不思議魔道機関搭載の短剣が届きました。3倍以外はそこらの剣と同じ・・・はず?これで装備は全て揃ったんで、あとは戦うだけですね。頑張って貰いたいものです。それでは

最後の人妖大戦（前書き）

副題　激戦なう

最後の人妖大戦

その日は、冬の夜にしては珍しく、吹雪いていなかった。

轟音を上げ飛ぶ砲弾。それが直撃し粉々に吹き飛ぶ妖怪。悲鳴と血飛沫を上げながら倒れ込む人間。怒号が飛び交い、目の前の敵を打倒せんと己の武器を振るう者たち。遙か昔に起こった人妖大戦を彷彿させる戦場の中で、彼らは必死に生きていた。

「魔道士隊、貫通付与魔槍形成！数五！目標正面・・・放て！！」

カーネリア団長の号令に合わせて聖堂騎士団の術士が魔力で出来た槍を形成、正面に放つ。目の前まで迫っていた妖怪たちに直撃。更には貫通してその後ろの妖怪にもダメージを与える。

「次！魔力弾連続発射！目標地面・・・撃ぇ！！」

次々と地面に直撃する魔力弾。それは地面を抉り、土のカーテンとして双方の姿を隠した。

「吶喊する！騎士たちよ、私に続け！！」

土のカーテンが隠している中、槍や剣を構えた聖堂・ヨハネが誇る近接部隊がヴリアント副団長を戦闘にカーテンの向こう側、もはや壁と化した妖怪の中に突撃して行く。組織だった攻撃を前に、ただの群れでしかない妖怪たちは次々と葬られていく。3倍という戦力差の中でも、組織され、一つの軍団と化した騎士団は互角以上の戦いを見せていた。

私(アキナ)はその戦場の中を守護騎士のケビン・フォレストと共に駆けていた。

「キリシマがいない！ケビンさん、何か感じない！？」

「残念ながら！やけど必ず奴は出てくる！！それまで待ちぃ！！」

ッチ、いったいどこに隠れている！？私たちは空を飛びながら戦っている。主な戦場は地上だが、空中でも激戦が繰り広げられている。空を飛べる騎士を中心に空中戦闘を行っているが、妖怪側に比べて数が少なすぎる。ケビンさん以外の守護騎士も空を駆けているが、戦況は妖怪側に有利な状況だ。制空権をとられれば戦況は一気にこちら側が不利になる。そのために私もここを離れてキリシマを探しに行けないでいた。

向かってくる弾幕を躱し、お返しとばかりに両手に握った銃から魔力弾を放つ。ギリギリの戦いが続いている中で、急に妖怪たちの動きが変わった。

「妖怪たちが下がった・・・？マズイ！！ケビンさん、全員に防御をするよう指示を！！」

不審に思った私は即座に能力を発動し、この後の展開を探る。未来を視れる私にはこの後の光景が直ぐに視えた。ヤバイ、ここに向かって凄まじい砲撃が来る！！

「!?各員、防御の陣を!!」

言うや否や、戦略兵器並の一筋の光線がこちらに向かって放たれた。駄目だ間に合わない!!私は能力を使い加速、砲撃がここ一帯を包む前にケビンさんを抱きかかえて離脱した。

「・・・半分は持っていかれたわね」

地上部隊とは離れた場所で戦っていたが、それでも地上部隊にもそれなりの被害が出ている。そして空中部隊は少しの部隊を残してほとんどの団員が影も残さず消滅した。

「っ畜生がッ!オイ!生きとる奴はワイを中心に陣形を作れ!!空を抑えられるわけにはイカン!!」

集結し、なんとか体勢を立て直そうとする私たちを妨害しようとする妖怪たち。一人に対して数人で囲い、確実に墜として行く算段なのだろう。先程には見受けられなかった組織だった動きが見られる。ネチネチとこちらの自滅を待っているかのように決して近づかず、しつこいまでに弾幕のみ撃ってくる。

「この厭らしい戦略、キリシマか・・・！」

「そんなん今はどうでもええ！これじゃあ全滅や！！」

こちらの空中戦力はほぼ全滅。先程の砲撃を逃れた団員も孤立し、四面楚歌の中で必死に戦っている。私も両腕の銃を振るい、弾を放つ。隣ではケビンさんが必死に矢を放ち、術を行使している。一人でも救おうと弾を放つが、その努力虚しく、一人、また一人墜とされていく仲間を見て、私たちの焦りは頂点に達した。

もうここまでなのか、そう思ってしまうほど絶望的な状況。知らず銃口を下に向けてしまいそうになる。

「あら？アキナって案外諦めが早いのね」

「ヤマトはしつこいよ～。諦めの悪さだったら世界一かも」

紅の槍と炎の剣。二つの閃光が走った後には墜ちていく妖怪の群れ。散歩途中で知り合いに話かけるかの様子で現れた二人は、瞬く間に周辺の妖怪を墜とした吸血鬼の姉妹。両名をレミリア、フランドールと言う。

「来てくれたんか！！」

「私たちだけじゃないわ」

「紅砲！！」

声が聞こえてきた先は地上で最も激しく戦闘が行われている場所、副団長たちが戦っている場所だ。紅色の気が空に噴き出るのと共に、多くの妖怪が宙を舞っているのが見えた。見る者を魅了させるほど美しい気を纏って戦うのは紅魔館の誇る最強の門番、紅美鈴。

「大和さんが来るまではここを防ぎきる！！」

虹色の気を纏いながら敵陣を噛み砕かん勢いを見せる姿は正に龍そのものであった。

「この紅魔館の執事長、主の危急を御救いいたすため貴様らを地獄へ送ろう！！」

その隣では一匹の巨大な狼となった執事長（クラウス）が猛威を奮っていた。引き裂き、食い千切られ、為すすべもなく散って逝く妖怪たち。その爪、牙はただ主の敵を殲滅するためだけに。

「おいおい、あいつら息吹き返しやがったぜ。どーすんだフィナンシエ？」

「心配はいらんよ。現に私たちが出なくとも戦況は互角ではないか」

城のテラスで戦況を見つめるのは一人の妖怪と月人。フィナンシエ・スカーレットとＤｒキリシマである。この戦争を仕掛けた張本人たちである。

「しっかし、お前と初めて会った時は流石に肝が冷えたぜ。いきなり『俺に力を貸せ、さもなくば殺す』だもんなァ。もっとも、あの時のお前に俺を殺せるはずなんてなかったがな」

「それに快く応えてくれたのも君だったと私は覚えているが」

二人の出会いは遙か昔のこと。一方は世界に絶望し、もう一方は自らの行いで居場所をなくした二人は出会うべくして出会った。そして誓った。世界を変えると／全てを破壊すると。そのためにはまず自分たちが頂点に立つ必要がある。そう決めた二人の行動は速かった。決起の邪魔になるであろう存在を抹消して己の地盤を固め、妖怪たちが行動に移るように扇動する。『このままでは妖怪という存在が消えてなくなるぞ』と。魔女狩りによって力の減衰を感じていた者たちの動きは速かった。すぐさま協力の意を示し、二人の下に

ついた。

そして今日この日、どのような形であれ世界は変わる。

「妖怪と言う存在を、世界に示すために／気に入らねェ世の中なんざ、ブチ殺してやる」

求めている結果は同じ。ただ、自分にとってより良い世界を創るために。

空に描かれた魔法陣の輝きは増して行く。

人間は脆弱であり、あらゆる点で妖怪に劣る。一発の銃弾でも人は死ぬが、妖怪は死なない。簡単なことだ。彼らは人の理解を超えた存在であるのだから。

「ック！こうも数が多くては・・・！！」

それは守護騎士である私も同じだ。神の遣いと呼ばれ、いくら身体が丈夫で死ににくいとはいえ、精神は元となった人間の物だ。身体に影響はなくとも、心は長く続く戦いによって擦り減っている。それがただの人間である騎士たちならばどうなる？

我々は嘗てないほどに追い詰められていた。

斬っても斬っても沸いてくる妖怪。一撃で沈むこちらの兵とは違い、何度も斬らなければならない敵。元々の４倍の戦力差というものを埋めることはもはや不可能である。上空で戦っていた者たちも数は減り、今では僅かに残ったケビンを中心に私の上で戦っている。一人、また一人と目の前で散って行く戦友たち。助けられなくてすまない。仇はとってやる。その思いだけが彼を奮い立たせていた。

そしてまた、私の前で一人の戦友が散ろうとしていた。

「ケビーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！！！！」

最後の人妖大戦（後書き）

エイプリルフール？鬼は嘘が嫌いなんだよ。ケビンさん？ああ、やっちゃったね★

はい、じらいです。確か今日は何を言っても『嘘ウサ』で通る日だったはず。嘘吐きな私としては嬉しい限りですｗ

さて、最終戦始まりました。今回は大和が一度も出なかったので、→で一言。題名通り、大陸編最大にして最後の見せ場です。明日は更新出来ません。できないったら出来ません。書けてないから。・・・ホントウデスヨ？

しまった、今気がついたけど、エイプリルフール番外編とかすればよかった!?輝夜かレミリア辺りとすればよかった・・・。２日以降（何時になるか分からないよ）になってもいいと言う猛者がいるのなら、リクエスト貰います。輝夜か、レミリアか。

超番外　4月1日（前書き）

※注意　遙か未来での話です。本編とまったく関係ありません

ブラックコーヒーをお手元に置いて下さい。無い人は直ぐに買いに行くんだ！

・・・準備はいいですか？

超番外　4月1日

～嘘吐きはだれ？～

幻想郷の一角にある城。吸血鬼と魔法使いとメイドと門番が住んでいる真っ赤な城を紅魔館という。その城の当主、レミリア・スカーレットは今日も暇を持て余していた。

「はぁ、今日も暇ねぇ。神社にでも行こうかしら？どうせアイツもいるだろうし」

その意中の人はもう紅魔館に住んでいない。自らの行いと彼の希望によって今は神社で過ごしているからだ。秘かに恋する乙女を続けている彼女も５００年以上生きた身だが、一向に身体が成長しない。そのせいなのかは知らないが、想い人にまったく相手にされていないことが彼女の最近、といっても長年の悩みである。自分からアプローチをするのもいいが、彼を慕う者も少なくない。彼女たちを刺激するのもよくないし、自らなんてプライドの高い彼女ができるわけもなかった。

更にそんなことをすれば幻想郷が軽く揺れる。間違いなく揺れる。主に彼の母親が暴れることによって物理的に揺れるだろう。そして一番被害を被るのは彼なのだ、それは私も望むところではない。以前に月の姫が少しちょっかいを出しただけで血の雨が降った。あん

なのはもう沢山だ。

「とりあえず図書館で読書でも・・・」

そう思って紅魔館の誇る図書館に足を運び、扉を少し開けたところで話声が聞こえてきた。

「ねえねえパチュリー知ってる？ヤマトお見舞いするらしいよ？」

「それを言うならお見合いよ。大和もそろそろいい歳だし、身を固めても不思議じゃないわ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？

「ヤマトのお母様も賛成しているって聞いたよ？」

「伊吹萃香も認めた相手と言うわけね。これはひょっとするかもしれないわ」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ええ！？

「ええ！？ヤマト結婚しちゃうの！？」

「おそらくね」

聞き終わるや否や、扉から手を離し、全力で廊下を飛ぶ。メイドの能力で更に長くなった廊下が今はとても鬱陶しく感じる。途中、急ぎすぎて曲がり切れず、壁に身体を打ちつけながらも飛ぶ速度は落さない。溢れだしそうな涙をこらえ、それでもクシャクシャな顔で駆け抜ける。メイドと門番が私を見つけて何かを叫んでいたが、耳には入ってこなかった。ただ一分、一秒でも早く彼の元へ。

「・・・・・・・・・レミィ、行ったわね」

「そうだね」

「よかったの？本当は貴方も・・・」

「いいの。私はお姉様が大好き。だから、お姉様が幸せなら、私も幸せなの」

「・・・・・・・・・・・・・・・馬鹿ね、貴方」

「・・・・・・・・・・・・・・・嘘吐き。『も』が抜けてるよ」

「今日は嘘を吐いていい日なのよ」

何時もの倍は速く飛んだはずだが、神社に着くまでにいつもの倍以上の時間がかかってしまった。忌々しい日光が出ていたせいで木の間を飛行するしかなかったからだ。その間にも彼が盗られてしまうと思うと、もう涙をこらえるなんてことは出来なかった。顔は流した涙と鼻水でグシャグシャ、服は無謀な飛行で木々に引っかけたでズタズタ。お世辞にも紅魔館のお嬢様としての体裁を繕えている格好ではないが、もうそんなことすら気にならない。

そして遂に見つけた。人の気も知らないで呑気に境内を箒で掃いて

いる彼を。

「大和ーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！」

気がつけばそう叫んでしまっていた。

「なんだレミリアか、って！何その格好大丈夫！？」

知るか馬鹿！誰のせいでこんなことになったと思ってるのよ！？

「～～～～～～～～～～～～～～～ッッいくな！！」

「・・・・・・・・・・へ？いや何処に」

色々と言いたい言葉が沢山あったけど、本人の前に立つと何を言えばいいのか分からなくなって出た言葉。そんな私の言葉に彼は、何を言っているんだコイツ？みたいな目で私を見てきた馬鹿を見て、既に有頂天にまで昂っていた私の感情は歯止めが利かなくなってしまった。紅魔館で聞いた話を筆頭に私は自分の、大和への想いを叫び続けた。

「プッ・・・あはは、あっはははははははははは！！」

「なっ何笑ってるのよ！？」

「ふぅ～、こんなに笑ったのは久しぶりだ。レミリア、君騙されたんだよ」

「なあ！？だってパチェとフランが！！」

「今日は４月１日、エイプリルフールなんだよ。まんまと騙されたってわけだ。ほら、折角神社まで来たんだから上がって行きなよ。お茶くらい出すからさ」

・・・

なんだ、私の取り越し苦労だったわけね。そういえば今日はエイプリルフール、嘘をついてもいい日だ。

そして彼は私の言葉を、想いまで嘘だと思っているのだろうか・・・？…怖い。彼が私の気持ちまで嘘として扱うことが何よりも怖い。

そう思ったら、もう自分を止められなかった。

彼に声を掛けて引き留める。振り向いた彼と目と目を重ねて向かい合うと、胸の奥がどんどん高まっていくのがわかった。どうか、この想いが貴方に届きますように

「あのね大和、聞いて欲しいことがあるの。私、大和のことが――――――――――――――――――

今日は４月１日。何処までが嘘で、何処までが本当なのか。そして誰が嘘吐きなのか。それを決めるのは貴方

超番外　4月1日（後書き）

やあ（＊´ω`＊）よく来たね、コーヒーでもどうだい？

うん、何を言いたいかは解るよ。だけど落ち着こうか、今日はエイプリルフールなんだから。

妄想5分、書くのに3時間程。猛ダッシュで書いたから内容は薄っぺらだと思うけど、少しでも悶えてくれたら嬉しいな。なんたって書いてた本人が悶えたんだから。

とりあえず有り得るかもしれない未来だと思ってくれ。そうじゃないとおぜう様が浮かばれないからさ。とりあえず今年のエイプリルフールはこれで終わりだよ。

じゃあね（＊´ω`＊）

一人じゃない（前書き）

精神コマンドは熱血です

一人じゃない

～騎士団拠点より少し離れた場所～

アキナがケビンさんたちに追いつき、戦闘が開始される少し前。ようやく一つの弾に魔力が込め終わった後、僕たちは広い場所に移った。

「時間がないから早速始めるわよ。さっき私が貼った魔法陣に乗りなさい」

目の前にはさっきパチュリーが地面に描いた複雑な魔法陣が描かれている。過程や何やら色々と飛ばした上での魔法使いになるための魔法陣らしい。何それ怖いんですけど。

「ちょ、ちょっと待って！何も今魔法使いにならなくったって・・・」

「今のままじゃ絶対勝てないわよ」

「ッ！・・・なんのこと？」

「はぁ、気がつかないとでも思った?私も『魔法使い』なのよ。少しでも可能性を上げるなら私の言うとおりにしなさい」

「・・・ごめん」

空に輝く魔法陣を見上げる。僕がアレを見て感じたことは、豪快かつ繊細。何に使う魔法陣かは解らない。けれど、あれほどの魔力を使える存在は正しくバケモノと言える。

「いい大和?作業は単純。自分に正直になりなさい。そうすれば後は魔法が応えてくれる」

言われ、魔法陣の上に立つ。自分に正直に、か。いろいろな過程をすっ飛ばしているために少し頼りなく感じるのは、魔法陣の輝きが儚く見えるからなのだろうか。術失敗のリスクは・・・ええい、ままよ!!男は度胸だ!!

大きく息を吸い、想いを自分に言い聞かせる

昔の僕は弱かった。・・・いや、今の僕も十分弱い。いくら身体を鍛えても、いくら魔法を憶えても、心の強さはどうにもならなかった。昔のままだ。それがはっきりと出たのは、紅魔館が襲撃されたと聞いた時。フランに言われるまで僕は我を失っていた。それじゃ駄目なんだ。それじゃあ皆の横に並ぶことすらできない。だから、

「だから、力を!!自分を誇れるだけの力を!!」

どうだ?これが今の正直な気持ちだ。これでいいんだろう?と思ってパチュリーを見やる。目を見開いて僕を見ている。ふっふっふ、感動でもしてくれたのかな?

「・・・まさかそこまでやるとは思わなかったわ。嘘なのに」

思わずコケた。そりゃもうコケた。コケる前に何を言われたのか数秒考えた後、思いっきりコケた。

「パ~チュ~リ~!!??」

「別に騙したわけじゃないわ。あなたが魔法使いに値する人物ならば魔法陣が応えてくれるだけ・・・来るわよ」

「眩し!?」

魔法陣が輝きだし、コケている僕を包み込む。魔法陣に描かれた文字が身体に刻まれ、染み込むように体の中に入って行くのがわかる。魔力が身体の中で一ヶ所に集まって行くのが感じられる。光が収まったあと、弾に込めて少なくなったはずの魔力が回復していた。

「おめでとう。これで貴方も魔法使いよ」

「・・・納得いかないなぁ」

こんな簡単に、しかもただ僕が恥かいただけじゃないか!?謀ったなパチュリー!!

「基礎が出来ていたからこれですんだのよ。師に感謝しなさい」

はいはい、そういうことにしときますよ。

「・・・しかしこれが魔法使い、凄まじい魔力が「あるわけないでしょ」なんでだよ!?」

「元々足りてない貴方が少し背伸びしただけじゃない。魔力量が増えるわけないの。多く感じるのは、貴方の中にある魔力が魔法使いになった影響で一時的に活性化されただけ。何か特典があるとしたら、不老とか、ご飯食べなくても大丈夫とかだけね」

「なん・・・だと・・・?」

魔法使い大和、始まったけど終わった。・・・いいさいいさ、不老に成れただけでもいいさ。そう思わないと目から滝が流れそうになるから、別にいいさ!!

「・・・魔力量増えないんだったら魔法使いになった意味ないんじゃない？」

「そうでもないわ。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・いい？私は仕方なく、し・か・た・な・く、どうしようもない貴方の為に行う行為だから、決して誤解しないように。・・・目を瞑りなさい」

「へ？」

「瞑りなさい！！そして少し屈め！！」

「イ、イエッサー！！」

目が血走ってますよパチュリーさん！・・・待て大和。前にもこんなことなかったか？そう、たしかあれは蓬莱島での出来事だったはず・・・！目！とりあえず目を開けて話合おう！！

「ちょいm、んんんんんんんんんんんんんんんんん！！？？」

「！！！？？？」

硬直。パチュリーもまさか僕が目を開けるなんて思っていなかったんだろう、お互いの目を見つめあったままで固まってしまった。・・・唇と唇が当たったままで。真っ赤、パチュリーさんの顔真っ赤で

す。そしてそれだけでは終わらなかった。パチュリーの口内から何らかの液体が送られているのが解った。・・・鉄の味がする。血、なのか?眼で飲めと訴えてくる。お嬢さんや、お兄さんは・・・解りました飲みます。(この間も唇は離れません)

「ぷはっ!いきなｒ「目、瞑ってなさいって言ったのにぃ・・・」すいません!!謝りますから泣かないで!!??」

涙目になって訴えてくるパチュリーを見て、というか涙を流す勢いのパチュリーに僕の心の痛みがマッハです。といいますか、僕も僕ですごい衝撃なんだよ!?でもこういう時は女の子を労わらなければ男失格なんです!!もはや僕が何を言っているのかも解らないよ!!

「・・・今、大和と私は一時的に繋がっているわ。私の魔力が感じ取れるでしょ?」

「あ、ああ感じとれますです」

繋がっているんです。Q.ナニが?A.魔力がです。目の前のお方が頬染めて少しもじもじしているのも、僕は気にならないとです。・・・やばい滾る

「・・・ならいいわ。(今貴方の脳に直接話掛けているのだけど、聞こえるかしら?)」

「わ!?脳に話掛ける・・・（こうかな?）」

「私は戦場に出ないけど、貴方のサポートをするわ。こうすればあの魔法陣を消すのに力を貸すこともできるから・・・」

「・・・ありがとう」

ありがとう。

「生きて帰ってきなさい。それが貴方の責任よ」

「嬉しいこと言ってくれるね。・・・じゃあ行ってくる!」

新たに手に入れた短剣を腰に差し、空を飛んで戦場に向かう。目に映るのは妖怪の大群と僅かな騎士団。生きて帰れる保証はない。でも、

「大丈夫。未来は視えているはずだから」

負ける。この戦い、もうワイらに勝ち目はない。戦闘開始から何時間経った？地上への援護射撃も今は行われていない。行えるだけの戦力がないのだ。辛うじて戦えている状況で、他に手を回すことなんて出来るはずもなかった。

「こんのぉ、諦めるかっちゅーの！！」

「アキナ！突っ込みすぎよ！！」

「お姉様後ろ！！」

「ッきゃあ！？」

アキナちゃんにレミリアちゃん、フランドールちゃんを中心に今まで持ちこたえてこれたけどもう限界や。フィナンシエと魔法陣さえどうにかできれば後はもうどうでもええ。あいつらさえどうにか出来れば今回はどうにかなる。再び決起しようにもこれだけの痛手を与えたんや、数年の月日が懸るはずや。後は産まれてくる新たな者に任せればええやないか。ワイらはもうようやった。

そんなことを考えてしまった。だから、迫りくる危機を察知するのに倍以上の時間がかかった。

「ケビーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーン！！」

副団長の声でようやく自分が危ないことに気がついた。クソッタレ、障壁が間に合わんやないかい！これで・・・これで終わってまうんか、ワイは！！？？

――――――――――――そんなお前に聖なる一矢をプレゼント？だったかな？――――――――――――

煌く閃と共に、光目の前まで迫っていた妖怪が瞬く間に切り刻まれた。これは…糸か？

こんのアホンダラ、遅いんじゃボケ！！

思っていたより厳しすぎる戦況だねこれは。おまけにケビンさんが危ない状態だ。大丈夫そうだけど、とりあえずこの前の意趣返しも兼ねて借りを返しておこう。

「そんなお前に、聖なる一矢をプレゼント？だったかな？」

魔力糸を放ち、ケビンさんに迫っていた妖怪を切り刻む。うお！？パチュリーの魔力もあるからか、バターみたいに簡単に斬れるぞ！

パチュリーの力もあるとはいえ、強くなった自分が少し嬉しい。この絶望的な戦況の中、僕は不敵な笑みを抱えて仲間たちに合流する。

「来たんかい！！」

ケビンさんが

「もう！遅いのよ！！」

レミリアが

「待ちかねたぞ、少年！！」

副団長が声を張り上げて僕を歓迎してくれた。さあ、反撃開始だ！！

（いい？まっすぐ魔法陣の破壊に向かいなさい。アレを壊さないとどうにもならないわ）

「わかった・・・ケビンさん！！」

「ワイに任せぇ！！」

僕の前にケビンさんが飛び出し、ボウガンを正面に構える。そのケビンさんの周りには、数えるのも嫌になるほどの槍が待機している。

「空の聖槍・・・・乱れ撃ちじゃーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！！！！！！」

止まることを知らない勢いの、馬鹿げた数の聖槍が敵陣中央に大穴をあける。聖槍の発射は数秒続き、多くの妖怪を屠った。

「行くわよフラン！合わせなさい！！」

「お姉様もね！！」

「言ったわね？じゃあ行くわよ！！！」

その後に続くのは二人の吸血鬼。妖怪にしてみれば若輩の身であるが、身に秘めた力は最上級を誇る。ケビンの開けた穴を更に広げていく。左右対称に動き飛びまわり、時には背中合わせに、時にはクロスするように飛び交い敵を切り刻んでいく二人。

「これが！」

「私（フラン）の力だ！！」

「ちょ！？私（レミリア）を忘れないでよ！？～～～ッああもう！！！」

聞いていれば微笑ましいことこの上ないが、彼女たちと戦っている者たちにとっては正しく悪魔の所業だろう。

「スピア・ザ・グングニル！！！！」

「レーヴァテイン！！！！」

トドメと言わんばかりの二つの閃光。放たれた槍と剣は立ちはだかる妖怪を吹き飛ばし、城への道を作った。

「「大和（ヤマト）！！」」

「行ってくる！！」

開かれた道を突き進む。城まであと少しだ！そう思い飛ぶ速さを更に加速させる。

「オイオイ行かせるかよ」

「ここは通さん！」

あと少し、というところで城からフィナンシエ・スカーレットとＤｒキリシマ、その後ろには２０以上の上級妖怪が一斉に飛び出してきた。クソ！まだこんなに戦力が残っていたのか！？

「この！しつこい！！」

放たれる厚い弾幕に防戦一方になる。

「何をのんびりしている！！」

「ヴリアントさん！！」

「私（アキナ）たちもいるわよ！！！」

必死に障壁を張って耐えている僕の前に、ヴリアントさん、アキナ、美鈴、執事長が僕の前に立ちふさがる。

「大和さんは先に！ここは抑えます！！」

「そういうこと。さーて、勝負をつけましょうかキリシマ！！」

「伊吹、頼んだぞ」

（大和、魔法陣が稼働し始めたわ。急いで）

皆の声を後ろに、再び勢いを取り戻した空を駆ける。

「ハッハー！直撃だ直撃ィ！次はそのカワイイお顔を消し飛ばしてやるよ！！」

「（ッ流石に厚い弾幕ね、左腕がイッた・・・！）でもまだ！！」

「手間をかけさせるなよ、お前一人に。俺はまだまだ殺さなきゃならねえんだからよ」

ふざけんな、これ以上お前の行いで人を不幸になんてさせない！余裕を見せているクソ野郎に私は右手に残っている銃をぶっ放した！

「ハッ！魔法なんざ「実弾なのよね」なんだと！？」

ッチ、言わなきゃよかった。少し身体を動かしたから肩に当たったじゃない。頭狙（ヘッドショット）ったのに。

「テメェ・・・！」

「ハッ！実弾が撃てない銃なんて存在すると思う？馬鹿じゃないの？・・・そして！！」

私は新たな能力を行使する。それはこいつの存在できない時間で銃弾を放つという離れ業だ。放たれた銃弾はキリシマの腹に綺麗に吸い込まれていった。

「ッガァ！！？・・・・・・・なんだと！？俺が反応できない程の弾速とでも言うのか！！？？」

「はぁ・・・あんた月の申し子は何とやらって自分で言ってたじゃないの？」

「ああン？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まさかテメェ！！？？」

「そう！今の私は月の実力者の能力を使いこなすことが出来る！！さっきのは輝夜姫の能力よ。如何なＤｒキリシマといえど、前情報なしで須臾の時間には対応できないでしょ？私にきっかけを与えた、お前の負けだ！！」

「・・・・・んのクソガァ！！」

「龍の末裔紅美鈴、大袈裟な伝説もここまでだ！！」

「誰がっ！！」

「多勢に無勢なんだよ！いい加減諦めやがれ！！」

諦める？諦めるだって？人間の子供である大和さんが諦めずに戦っているのに、たかだか２０強ほどの妖怪に囲まれているだけの私が諦めるなんて出来るか！！

「執事長！突っ込んで下さい！！」

「？！…任された！！」

２０以上の妖怪の中に飛びかかる巨大な狼。そこに妖怪の目が行ったところで私は地面を思いっきり踏み込んだ。

「溜黄振脚！」

踏み砕いた地面の亀裂が妖怪の立っている場所まで届き、地を砕いた。不安定な地面に足をとられ、バランスを崩したところを執事長が斬り裂いていく。それを見た私は両手に気を集中！そして！

「星脈・・・地転弾！！」

気を最高まで高めて発射!!放たれた気弾は敵対していた全ての妖怪を包み込んだ。

「ふむ。守護騎士とはいえ人の身でよく此処まで私と渡り合ったものだ。誇るがいい」

「・・・それは光栄だ。だが、まだ終わっていない」

5回。たった5回攻撃を受けただけで私は脚に力が入らなくなってしまった。だが、引くわけにはいかない。少年は魔法陣の停止、私には目の前の吸血鬼を倒すという使命がある。そして、騎士に撤退の2文字はない!

「いや、これ以上の時間は割けん。・・・上客が来てしまった」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

「アルフォード・スカーレットだと!?」

「遅かったな、兄よ。・・・・・・・・・言葉は不要か。では始めるとしよう」

城の中に入った僕は魔法陣の核となっている場所を探していた。

「魔法陣の核はどこにあるんだよ!パチュリー、もう発動しそう!?」

（・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・）

「パチュリー！？どうかした！？」

一度滞空し、念話に集中する。ッツ！？前方から魔力反応！！？？

急ぎ回避運動をとる。ゾッとするほど膨大な熱線がすぐ横を通り過ぎて行った。

「フフ、やっぱり避けるのね。解っていた、いいえ、視えていたと言ったほうがいいのかしら？」

（・・・・・・・・信じたく、なかったけどね）

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・先生」

未来は変えられる。僕が変えてみせる。

一人じゃない（後書き）

やる気、元気、勢いだけのじらいです。正に総力戦・・・と言いたいんですけどパチュリーさんの勢いに負けてしまいましたwハァ、何やってんだか・・・。ここはカッコよく決めるところなのに。

長かった大陸編もあと2話です。ヤバイです。今エピローグ書いているのですが、次話が衝撃のラストになります。ホント、書いてて大丈夫かよオイ?!みたいな。とりあえず、あと2話です。それではまた

信じた道、違えた道（前書き）

１１時過ぎた頃に大陸編エピローグとＮＥＷ設定集を上げます…だぶん

信じた道、違えた道

アルフォード・スカーレットとフィナンシエ・スカーレット。欧州最強と言っても過言ではないだろう二人の吸血鬼が向かい合って立っている。即座に戦闘に入るかと思われたが二人だが、当初の予想を裏切る形での睨み合いが続いていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・何故だ」

「？？兄よ、何か言ったか？」

「何故、こんなことをした」

解らない。俺にはフィナンシエが、弟が何故こんな戦争を引き起こしたのかさっぱり解らない。

「聞いたところで意味はない」

「だが、それでも俺は知っておかなければならない。なによりお前の『兄』として、あの時お前を引き留めれなかった俺は知っておかなければならない」

「・・・・・・・・・・・・・・いいだろう」

「ねえ大和君、貴方の目には今の世界はどう映っているの？」

城の中、先生（シルフィーユ）と僕は空に浮かんで向かい合っていた。いきなり攻撃してきた…ということは、僕が視た未来がおそらく真実だということ

と。間違いであってほしい、きっと何かの間違いだと自分に思い込ませてきたけど、やはり僕の能力は間違った光景を映すことはないらしい。でも僕は、先生と闘いたくない。どうやって先生を退かせるかと思考を巡らしていると、いきなりそう質問された。

「どうって・・・特に嫌なことはないです」

「でしょうね・・・。だって、大和君はまだ人間だもの。身体は老いることはなくなったようだけど、貴方の心はまだ人間よ。だから、私たち妖怪の気持ちなんて解らないでしょうね」

「妖怪の・・・気持ち？」

どういうことなんだ・・・？妖怪の気持ちだなんて、そんなの人間の持つ感情と大差ないんじゃないの？喜怒哀楽。楽しかったら笑って、悲しかったら泣く。妖怪の山ではみんなそうだった。

「私はね、人間が好きなの。フフ、何を言ってるのか解らないって顔をしてるわね。当然よ、私たち妖怪を理解しようとしないのは貴方たち人間なのだから」

「すいません、先生が何を言いたいのか僕にはさっぱり理解できないです。でもこれだけは言わせて下さい。今、レミリアとフランが先生を助けるために外で戦っています。僕は貴方を助けに来たんです。だから一緒に外に行きましょう」

「私の話を聞いてた？これが私と大和君の最後の話になるんだから、しっかりと聞いておきなさい。それに、いきなり襲った相手によくそんな事が言えるわね」

…………………………………………………。

「私もね、小さい頃は妖怪だってことを隠して人間の子供と一緒に遊んでたの。私は日光に弱いから日傘をさしてお友達とお話したり、人間の男の人に淡い恋心を抱いたりもしたわ。…幸せだった。何故人間に産まれなかったのか真剣に悩んだこともあった」

「年月が経つにつれて人は歳をとる。友人の外見は成長して、私だけが成長しなかった。幻術で見かけを変えても良かったのだけど、私は皆に嘘を吐くのが嫌だったの。だから全部話したわ。彼らなら私を受け入れてくれると思ったから」

「結果は失敗。正体を告げた途端にバケモノ呼ばわりされて、捕まったわ。××されたし、××××にもされた。でも、抵抗なんて出来なかった。騙していた負い目もあったし、何より友人を傷つけたくなかったの」

「その時ね、同じ境遇の妖怪と出会ったの。それがアルフォードの弟よ」

「いくら人間を他の妖怪から救おうと、いくら人間を愛しようとも奴等は私をバケモノと言い放った。自分勝手で厭らしい、ゴミ共だと思わないか?それからは兄も知っての通り、私は紅魔館を出た。その時の私はまだ人間を信じていたよ。だが、その期待も裏切られた」

「・・・魔女狩り」

「そうだ。奴等は妖怪の存在すら否定し始めた。奴等は己の利益のみ追求し!隣人である我々を忘れ、そして存在すら殺す!その傲慢はいずれ人間、いや世界すら滅ぼす!なればこそ、私は人間を救わなければならない!!決して人間が我々を忘れられないよう、己の存在を末代の魂まで刻みつけるために!!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・すまなかった」

「なんだと・・・・・・？」

「俺がお前を理解してやれないばかりに、お前を追い詰めてしまった・・・。本当にすまない」

「何を言っている・・・！？」

フィナンシエがこうなってしまったのは、俺のせいだ。

当主の長兄として産まれた俺には主となる義務があった。その義務感故に俺は弟に構ってやる時間なんてなかった。こいつが紅魔館をたびたび出て行くことも、一人で悩んでいることも俺は知っていたのにな。知っていて何もしてやれなかった。だから弟が紅魔館を飛び出て行った時も俺は何も出来なかった。だからこそ、

「フィナンシエ、俺がお前を止めてやる。今度こそ！」

「そうやって兄は何でも解った気でいる。・・・嫌いだ。私を、理解(わか)るな！！」

「その時フィナンシエに誘われたけど、私は断ったわ。まだ人間を信じたかったから。でもアルフォードと結婚して、魔女狩りが始まり、子供も産まれた。だからフィナンシエに協力することにしたの。あの子たちの未来を守るためにはこうするしかなかったのよ」

「・・・・・・だからって、だからってこんな方法で守らなくてもいいじゃないですか!!もっと他に方法があったはずだ!!」

なんでだよ・・・!どうしてこんなことになったんだよ!?人間が好きだったフィナンシエたちも、豊かになろうとした人間たちも、誰も悪くないじゃないか!!

「今からでも遅くないはずです！これだけの力を持った貴方達だ、今からでも遅くない！その力を平和と協調に使うことができれば！！」

「強い子ね・・・。すべての人間が、大和君みたいな人だったらよかったのに・・・。話は終わりよ、構えなさい」

「ッ先生！！」

（無駄よ大和、もうどうしようもないわ。魔法陣を止めるには貴方が彼女を倒すしかない。おそらく核となっているのは彼女のはず。制御に魔力を回している分、一発が勝負を決めるわよ）

（・・・・・絶対に止める！！）

（その意気よ。なんたって彼女は史上最強の魔法使いと言われる存在なんだから）

始まりは先生から。火・水・風の三種類の属性を含んだ魔力弾が迫って来る。距離があるため余裕を持って避ける事が出来るが、こちらは始まる前から不利な状況なのだ。

なぜなら僕は自分の手の内を全て知られているからだ。僕は先生が魔法を使っているところを見たことないけど、先生は僕を知り尽くしている。十八番である幻術は解析されているので使うことが出来

ないし、いかにパチュリーの魔力があるといっても魔力糸では吸血鬼を仕留めることなんて出来ない。

つまり、僕の出来ることは

――――――――――――魔砲　マスタースパーク――――――――――――

「魔法はパワーだ！！」

脳筋らしくパワーで押し切るか、超接近戦しかない。

パチュリーの魔力も合わせ、何時もよりも威力が上がっているマスタースパークだが、相手は最強の魔法使い。僕の見たことも聞いたこともない障壁で完全に防がれてしまった。

「絶対守護領域とでも言っておきましょうか。これを破るなんてことは大和君には出来ないわ」

（特殊な障壁・・・おそらく対魔法対物理の６重障壁ね。破れそう？）

（接近して連続でたたみ込めばなんとか・・・）

「ほら、次は天の魔法よ」

――――――――七つの彗星――――――――

「い〝ッツ！？」

七つどころか１０００を超えるほどの隕石が空から墜ちてくる。

（大和！！）

（ッッ流水制空圏発動！！）

次々に堕ちてくる隕石を紙一重で躱し、それと同時に距離を詰めていく。だけど先生の目を見て心の流れを読むことで、そこから感じとれる感情が僕を動揺させる。先生は本心から人間が好きで、でも憎くて、家族や他の妖怪を守るために戦っていることが解ってしまった。・・・なんて哀しい人なんだ。

「終わりよ」

――――――――完全模倣　マススパーク――――――――

「やばッ（大和！！）」

大和が城内で戦っている時、外でも激戦が繰り広げられ、辺りは二人のぶつかり合いによって生じた衝撃波で荒れ果てていた。そんな二人の一騎討ちに見惚れてか、妖怪と騎士団の戦いはもう鎮まり、その場にいた全員が勝負の行方を見守っていた。

「クッ！こうも互角とは・・・」

「争いは嫌いだが、今の俺はどうしても負けられない。その想いが俺を後押ししてくれているのだろう」

お互いボロボロの二人。常人なら既に何度死んだか解らない攻撃の応酬があったが、互いの再生能力が高いために必殺の一撃を受けても怯むことはない。だが、いかな再生能力とはいえガタはくる。おそらく次が最後の撃ち合いになるだろう。

「最後だ、兄よ。勝敗は世界が選んだ方になる。私が勝てば世界は私に味方したことになる。そして…」

「俺が勝てば、お前の考えは間違っていることとなる。・・・行くぞ！！」

戦場にいる誰もが固唾をのんで見守る中、一つの影が城へと入って行った。

「・・・・・・・・・・・・ハズれた？完璧なタイミングだと思ったのだけど」

飲み込んだと思われた閃光から出てきた大和の身体は紅く輝いていた。逆手に構えた短剣に付けられた魔道機関『イクシード』に込められた弾を使い、急激に自身の身体能力を上げて躱したのだ。

（時間がない！パチュリー、アレ使うよ！！）

（魔力制御は任せなさい！貴方は倒すことだけ考えて！！）

魔法媒体としても優秀な短剣からは今まで以上にスムーズに魔法を使うことができる。その剣先から通常の3倍の威力であるマススパークを牽制として使って接近を試みるも、それは防がれ、張ら

れた濃い弾幕によって近づけないでいた。

（3倍で障壁二枚だけ！？）

（でも破れる！完璧な魔法なんて存在しないわ！！）

たった2枚しか破れない上に、接近できない。オマケに直ぐ障壁は完全な状態に修復されていく。どうにかして接近できれば・・・。幻術で騙すか？いや無意味だ。なんとかして死角に入れれば・・・。師匠、お受けした技を使わしてもらいます！！

――――――――劣化　柳葉揺らし――――――――

『重心や動きを錯覚させる柔術特有の足運びを、相手の目の動きより速く行う事で透けていくような錯覚を見せながら相手の死角に入る技ｂｙｗｉｋｉ』だけど、師匠のように完璧にはまだできない。加速で自身の動きを速め、一瞬であれば通用するであろう幻術を使って死角に入る。

そして右手に魔力、左手に気を纏わせて合成！

「ッどこへ！！？？」

「うッッらあああ！！」

その力を右手に纏わせ、障壁を貫く一撃を放つ！！

――――――――浸透水鏡掌――――――――

「～～～～～ッ無茶苦茶な威力だけど、まだ私を倒すには至らないわっ！」

障壁を完全に破った。だけど先生に傷を負わせるには至らなかった。けど、ここからが僕のオリジナル！師父のマネだけではこれ以上強く成れないと考えた僕が、パチュリーと共に考えだした必殺の一撃！！

「浸透水鏡…紅蓮一式！！」

僕が唯一使うことの出来る属性は炎。マスパを炎属性にして使う案もあったけど、成功には至らなかった。けど失敗から成功も生まれた。接近し、掌から直接相手の内部に炎を送りこむ技。欠点と言えば、

「あああああああああああああああああああああっぁぁぁぁっぁ！！？？」

威力が高すぎることぐらいだ。上級妖怪すら一撃で屠る威力故に、相手をほぼ確実に殺してしまう可能性が大きいので多様はできない。更に今回は気と3倍魔力の合成だ。耐えられるのは最強クラスでも極一部のみのはず。一人では到底出来ないが、今回は魔力の制御をパチュリーに回しているおかげで僕は気だけを制御すればよかったため、威力をまったく逃がすことがなかったことも大きい。

（いいえ、まだよ！！）

「なあ！！？？」

身体が蝙蝠となって霧散し、離れた場所で再び先生を形作る。手にはフランと同じレーヴァテインが握られている。

（内部に送りこまれた炎の魔法を操って致命傷を避けたの！？）

「クッソぉ・・・。こっちはもうスッカラカンだっていうのに・・・」

（でも向こうももう限界のはず・・・ッ大和避けて！！）

「ここまで追い込まれたのは初めてよ・・・死になさい！！」

動けないでいる僕の目の前で振られると同時に、目の前に紅い槍が
を持ったレミリアが立ちふさがった。

「「レミリア（レミィ）！！？？」」

「お母様・・・もう、もういいじゃない・・・」

剣を槍で受け止めたまま、レミリアが先生に話掛ける。その顔は酷く歪んでいた。

「・・・お父様は言ってた。時計の針が狂ったのなら、直せばいいって。人間にも、大和のような人だっているの！だったら！！」

「いいえ、一度狂った時計の針は壊してから零に戻すしかないわ。全てを零に戻し、次の新しい時代に生きる者たちに全てを任せるのよ」

「そのためなら大和のような優しい人間を殺してでもいいの！？」

「だったら、今すぐ貴方が全ての人間を彼のようにしてみなさい！！！！」

「～～～～～～～～ッ！！？？」

「レミリア・・・どいて」

もう、止まれないんだ。先生もフィナンシエも。二人とも人間を愛しすぎたから、こんな不幸なことが起きてしまった。誰かが受け入れてあげるべきだったんだ。傷ついた二人を正面から受け止めて上げる誰かがいれば、こんなことにはならなかったはずだ。だから・・・

「大気中に分散した、魔力を、集中・・・・・・」

気の酷使で身体は限界、おまけに僕もパチュリーも魔力は残っていない。大気中の魔力を掻き集めても全然足りない。だったら、

「能力の応用しかないよなぁアキナ・・・」

僕の『先を操る程度の能力』。アキナはもう自分の答えを出したのだろうか。アキナなら、きっと僕以上のことをして、今頃はキリシマを倒しているだろう。僕は駄目駄目だから、一つを突き詰めることしか出来ない。

「ここより僕が『先』に保有している魔力を今ここに・・・」

こんなすごい技が簡単に使える、ではない。たった一つの基本をとことん極める。才能が無い僕に師匠たちが言った言葉。今ならそれ

を証明できるはずだ。

（ッ止めなさい大和！貴方が保有できる魔力量を超えている！このまま発動させたら死ぬわよ！！）

「引くもんか！僕がここで引いたら誰も先生を受け入れてやれないじゃないか！！」

（・・・・・馬鹿。好きにしなさい）

ごめんパチュリー、無茶言った。横にいるレミリアを見る。レミリアの能力は運命に関わっている。だから先生と僕が闘うことを実は解っていたんじゃないのかな。そしてこのあとの事も・・・。だとしたら変えられない運命だったのかもしれない。

涙を流しながら僕を見ているレミリアを見て、心の中で謝る。・・・ごめん。僕は結局未来を変えることができなかったみたいだ。

「勝負です先生。僕が勝てば馬鹿なマネはやめて、紅魔館で何時もの日々を暮らしましょう」

「・・・無理ね。勝つのは私だから」

『先を操る程度の能力』の応用。それは未来の僕が保有しているであろう魔力を先取りすることだ。その量約1年分。その全てをマス

タースパークにつぎ込む。手や腕、頬は無茶な魔力運用からか裂け、血が滲み出てきている。意識は朦朧とし、剣先を向けるも腕は震えて照準が定まらない。

そんな僕を、細く白い腕が支えてくれた。

「大和だけに、責任を押し付けるわけにはいかない」

「・・・ありがとう」

（私も出来るだけ大和の魔力を制御してみるわ）

はは、どうですか先生。僕らは解り合えている。・・・確かに人間と妖怪の関係はもう駄目なのかもしれません。でも、まだ希望を捨てたら駄目なんです。進むことを諦めたら、狂った時計を零に戻すことすらできないんだから。

それを僕が証明してみせる

――――――大魔砲　月隠す極光――――――――

空が墜ちてくる――――――。それほどまでの膨大な魔力の奔流は、同時にシルフィーユから放たれた閃光を丸ごと飲み込み、そのまま包み込んだ。

「結局、世界は私に味方しなかった、か」

「・・・・・なぜ最後に手を抜いた。あれさえなければ、今倒れているのは俺だったはずだ」

「フ・・・何故だろうな。私も自分が解らん。・・・だが、最後に敗れる。それもまた、運命なのかもしれないな」

決着はついた。アルフォードとフィナンシエの一騎打ちはアルフォードの勝ちで終わった。妖怪たちは頭首、そして主だった幹部を失い敗走していく。騎士団はそれを追うまでもなく、ただ見ていた。彼らも今回の戦いでの被害が大きすぎたからだ。その中から一人の女性が歩み出る。

「馬鹿な最後だな、フィナンシエ・スカーレット。結局貴様は負けた。時代が我々を選んだのだ」

出てきた女性は聖堂騎士団団長カーネリア。この激戦の後でも何時も通りでいるのは流石と言うべきか。

「・・・確かに私は負けた。だが憶えておけ、貴様たちの行いそのものが人類を壊死させるのだと」

「・・・・・・・・・連れていけ」

今まで空に輝いていた魔法陣は消え、空には新たな未来を告げる太陽が昇ろうとしていた。

そして城でも、一つの命が終わりを告げようとしていた。

「お母様！お母様！！しっかりしてください！！」

「フフ、もう無理よ。私の全魔力を魔法陣につぎ込んだの、再生能力ももうないわ」

大魔法使いであるシルフィーユ・スカーレットをもっても、あの魔法陣を完璧に操ることは出来なかった。だから彼女は己の命すら使って魔法陣を完成させようとしていた。それを邪魔され、力の大半を失った状態で闘い、蝙蝠となって避けた時点で既に限界だったのだ。己を貫くために、彼女はその命を使ってまで大和に応えた結果である。

「レミリア、どうか泣かないでちょうだい。私はもう駄目だけど、貴方には妹も父親もいる。心強い友達も・・・」

そう言って力無く僕を見る先生の顔はどこか嬉しそうで、泣きそうだった。もう体に力が入らず、目が見えているのかすらも分からない。

「大和君、この子たちのこと頼めるかしら・・・？」

「・・・・・嫌です。先生が自分で面倒見て下さいよ。我儘過ぎて困ってるんです」

「もう、意地悪ね。・・・あの人に伝えて頂戴。『幸せでした』っ

て」

「・・・・・わかり、ました」

本当に、本当にもう、駄目なんですね・・・。僕は、僕は貴方を受け止められたでしょうか？

「強い子に会えてよかった・・・。レミリア、フランドール、貴方たちはいい友人を持ったわ。どうか、幸せに――――――――――――――――――」

「お・・・かあ・・・さま・・・・？ねえ・・・、目を開けてよ・・・・頭撫でてよ・・・・私を・・・レミリアって呼んでよ！！――――――――――――うあああ！！！！！」

最後にそう言い残し、先生は静かに息を引き取った。レミリアに看取られながら逝った先生は、穏やかな笑顔で、ただ寝ている様だった。

その日、僕は確かに世界の危機を救ったのかもしれない。でも、目の前で泣いている女の子を救うことは出来なかった。

信じた道、違えた道（後書き）

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はい。先生は亡くなりました。嘘でもなんでもございません。

次は大陸編エピローグです。後書きが長くなりそうだ…。

大陸編エピローグ（前書き）

ＰＶ３０万ユニーク３万ありがとうございます。

今までありがとうございました。これからもお願いします

大陸編エピローグ

傷心中の大和です。現在、聖堂騎士団所有のテラスで僕とケビンさん、仕事を抜け出してきた団長の3人でテーブルを囲って話をしています。

「これで全て終わり、余はことも無し、か。なんや、えらい嫌な幕切れになってもうたなぁ」

「・・・そうだね」

大戦が収まってから一ヶ月。先生の遺体を城から運びだした後、僕は紅魔館の面々に事の全てを話した。先生の過去、悩み、そして死。話したあと、誰も僕を責めたりしなかった。フランでさえ、涙でグシャグシャになった顔で無理やり笑顔を作って、僕が生きててよかったと言ってくれた。・・・親を殺した僕を許してくれた。

アルフォードに遺言を伝えた時も、アイツは苦笑して『ありがとう』と言った。俺もこうなることがなんとなく解っていた、と言って。

みんな僕を気遣ってくれたけど、僕は紅魔館から逃げ出すように出て行った。みんなの優しい気遣いが辛くて、逃げだした。そして今はケビンさんたちに厄介になっている。

「ケビンさん。僕は正しかったのかな・・・」

「ああもう、何度も言うとるやろが！お前がそんなんやったら死んだシルフィーユさんが浮かばれへんて！！悩んで落ち込むくらいやったら、前向いて歩け！！それが人を殺したもんの責任っちゅうもんや！！」

「でも・・・」

先生もフィナンシエも悪くない。確かに戦争を引き起こしたことは駄目なことだと思う。でも、その根幹には人を思う気持ちがあったはずなんだ。僕らはそれに気がつくべきだったと思う。

「だがな伊吹、奴等は戦争で多くの人を殺している。それは紛れもない事実だ。教皇も今回の一件で魔女狩りの徹底を再び命じた。これは私の理屈だが、強ければ生き、弱ければ死ぬ。私の価値観で言えば、奴等の行動は間違っていたんだ」

団長（カーネリア）さんの言う通り、今まで以上に魔女狩りがその勢いを増している。欧州の妖怪が姿を消す日もいずれ来るのだろう。でもそんな極論でしか考えられないようなことになったら、それこそ世界は・・・

「当然今回の戦争も歴史には残らん。我々も忘れなければならない。そして我々聖堂騎士団も歴史に残されることなく消えて行く。・・・だから伊吹、お前だけは覚えておけ。例え歴史に刻まれなくとも、時代に翻弄された者たちがいたことをお前は胸に刻みこめ。そして誇れ。それがあいつらと私たちへの手向けになる」

本当に、強い。強くて厳しい人だ。先生とは正反対だ。

「辛気臭い話しはこれくらいにしよか。・・・・・んで？これからどうするんや。ずっとこのままっちゅうのもアカンやろう？」

「・・・・・て、手紙でも・・・」

「このどあほう！！さんざん人に時間と迷惑かけた癖に手紙やと！？裸に剥いて紅魔館に届けたろか！？」

「ご、ごめんなさい？！？！」

だ、だってしょうがないじゃないか！どの面下げて合いに行けっていうんだよ！？

「はぁ・・・。まあええわ。明日、手紙もってここにもう一度合いに来い。届けたるさかい」

「ケビンさ～～～～～～～～～ん」

「ええい離れろ！！女の子のアキナちゃんならともかく、男のお前が引っ付いたところで気持ち悪いだけや！！」

「まったく、馬鹿どもが・・・」

そのアキナ、実はもう月に帰ったんです。アキナも自分の能力を覚醒させてキリシマを後一歩の所まで追い詰めたらしいけど、結局逃げられたみたい。すっごく悔しがってたけど、それまでだったみたい。月からの帰還命令を受けて帰って行った。拉致されそうになったのを止めたのは目の前の悪友です。魔法が使えず、ケガも癒えてなかった僕の盾になってくれたんだ（してやったんだ★）

ああ、魔法が使えないっていうのは本当のことだ。少なくとも1年間は魔法を使うことが出来ないはずだ。あの時僕が引き出したのは僕の持つ1年間の魔力。だから使えなくて当然なんだ。もし使えたとしても、少しの間使わないと思うから・・・。

「そういえば、メイド長はどうしたの？」

「・・・ワイらもそれが唯一の気がかりなんや。結局、シルフィーユさんは拉致られたんやのうて、自分の意思であっちについたんやさかい、あの決戦で手を出してもおかしぃなかったんやけどな・・・」

「だが奴は戦場に姿を見せなかった。だがまあいい、一人では何も出来んさ。あのキリシマとやらも相当の痛手を受けたのだろう？なら問題はない。そこらで野たれ死ぬさ。・・・それより伊吹、最近弛んでいるようだから鍛え直してやろう」

「ちょっ！？今の僕って気しか使えないんですよ！？」

「好都合じゃないか、なあ救世主君？」

「お、おたすけーーーーーーーーーーーーーー！！？？」

結局、騎士団に居ても僕はこうやって気遣われている。一人じゃ歩けない、まったく駄目な男なんだ。

～次の日の朝～

「じゃあこの手紙を渡しておいて下さい」

「・・・・・・ホンマに何も言わんと行くんか？」

「今の僕じゃ、会っても迷惑かけるだけです。少し落ち着いて、自

分なりの答えを出してからもう一度会いに行くつもりです」

昨晩、紅魔館のみんなに向けた手紙を書いた。書いた内容は謝罪とこれからについて。そして僕は旅に出るために身支度をすませてケビンさんたちに会いに来た。そして今、こんな僕を見送るために団長や副団長まで来てくれている。

「・・・少年。確かに君は直接的ではないかもしれないがシルフィーユの命を奪ったのだろう。だが憶えておいて欲しい。それと同時に、君は何百万もの命を救ったのだ。それは誇っていいことだ」

「我々もフィナンシエたちのことをどうも言えん。ただ、互いの正義をぶつけ合った結果こうなった。伊吹、お前はまだ若い。答えを見つけ、もう一度合える日を楽しみにしているぞ」

「・・・今までお世話になりました」

深く一礼する。役に立てたのだろうけど、それ以上に迷惑を掛けたから。数秒の後、頭を上げるといきなり脳天にチョップを喰らった。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ッツ!!??何するんだよ!?」

「ハッ!なに別れ際まで辛気臭い顔しとるんや、いつもみたいに笑わんかい!」

「だからってこんなこととしなくても「おい大和君」・・・なんだよ」

「ありがとう。こんなワイに今まで付き合うてくれて。楽しかったで、お前さんとの日々は。こんなワイに真正面から向き合ってくれたのは大和君が初めてや。・・・嬉しかったで」

「ケビンさん・・・」

「なんや、ワイまで辛気臭なってもうたやないかい。ホレ、はよ行けや」

シッシッ、と腕を振るケビンさん。まったく・・・最後まで意地張るんだからなぁ。でも、これが最後じゃないんだ。また会いにくればいい。

「じゃあ行きます。・・・でもその前に」

一発は一発、目の前のアホを思いっきりぶん殴ったらー!!コンチクショウめ、最後まで人のこと叩きやがって!!

「ブフォアアア!!??このアホ、いきなり何すんねん?!」

「じゃかあしい!今までの怨み辛みを出してからじゃないと気持ちよく行けるわけないでしょーが!!」

「上等じゃボケ！！やったらあ！！！！！」

「積年の恨み、ここで晴らすぞこの馬鹿野郎！！！！！」

――――――拳と拳で語り合うのは得意でしょ？――――――

「まったく、こいつ等は最後までこうなのか」

「まあいいではないか。ケビンも少年も、湿っぽいのは良くないからな」

涙を見せるのが嫌で始めた殴り合いだけど、どうやら大人二人にはバレていたみたい。

喧嘩の結果？引き分けで痛み分け。最高の別れになったに決まってるじゃないか。

一人、荷物を持って街を出る。太陽は真上まで昇っている。行き先はまだ決まってないけど、とりあえず東に向かって旅をしよう。自分の答えを見つけて、また戻って来るために。

「あら、じゃあもうここに用はないのね？」

「想い残したことはあるよ。先生のこととか、紅魔館のみんなのこととか・・・。魔法使いには成れたけど、本当にこれで良かったのか・・・。それを見つけに・・・・・・・・・・・・・・・え！？」

「ウフフ、久しぶりね大和。そしてしばしのサヨナラよ」

振り向いた先には懐かしい顔。僕は声を上げる前に開いた地面に吸い込まれていった。

大陸編エピローグ（後書き）

これにて大陸編は終了です。では少し語らせてもらいますね。

まず大陸編の人妖大戦です。これを書いた理由は、八雲紫との対比を書きたかったからです。八雲紫は来るであろう人間と妖怪のパワーバランスを守る為に幻想郷という共存できる世界を作った。フィナンシェは共存を選べず世界を変えようとした。そしてその原因は魔女狩りという人間の台頭であったということ。まったく逆の関係を書きたかったんです。こういう話もあっていいのではないかと思って。

そして紅魔館。一応タグにもある通り、『親子』がテーマです。子のために一人奮闘する母親、自らの存在そのものをかけて子供を守ろうとする関係を書きましたが、伝わったでしょうか？伝わっていただけたら幸いです。

次に大和とアキナ。本編通りですが、能力の命運を分けたのはやはり才能かと。デキる人は違うんですと言わんばかりのチートな妹でした。大和も頑張ればアキナと同じことが出来るかもしれませんが、その予定はないですｗ

後、これは前話の後書きに書き忘れていたことです。浸透水鏡・紅蓮一式です。まあギアスの輻射波動と思って頂けたら。一式なのは本編でもあったとおり、本来ならマスパにやるつもりが失敗したためです。マスパならマスタースパーク・紅蓮二式ですかね？ゴロ悪いなぁ。

宣言通り、このあとＮＥＷ設定集を上げてから遂に幻想郷入りです。

ここまで読んでくれた皆様には感謝感激雨嵐。今まで通り生温かい目で見て上げて下さい。

じらいでした。

設定集　大陸編終了時（前書き）

キャラ設定はオリキャラのみに変更しました。理由はキャラ全部だしたら長くなりすぎるからです。後、大和の年齢に大幅変更があります。本編の方では気づかれないようひっそりと変更します

設定集　大陸編終了時

時代設定

作者は歴史に明るくないので、時代背景など基本妄想です（マテ汗情報源はもちろん日本史と世界史とほとんどｗｉｋｉ。だけど知らないのでパラレル的なものとして軽く流してやってください。我慢ならぬぅ、な人は「ははは、こやつめ」と声を大にして笑ってやってください。また、この話に出てくる組織は実際の団体とは関係ないです。

現在の総合的強さランク

※本作品の場合ですので個人差がありますスペルカードルール制定前なので、ガチンコです。キャラは出るたびに更新していく予定です。

※また、それぞれのランクの中でも天と地の差があります。細かく分類するとどうしようもないので、そのランクに名前がある場合があります。つまり、同ランク内でも強さの格差があるということです。

また妖怪は生きた歳月で妖力が増える設定なので、最初は弱くても強くなる場合があります。

バケモノ

鬼神　伊吹萃香　星熊勇儀　八雲紫　風見幽香　八意永琳　武天アルフォード　シルフィーユ　フィナンシエ

上級妖怪　一般で言う最強クラス

☆主人公　蓬莱山輝夜　アキナ　紅美鈴　レミリア　フランドール　Ｄｒキリシマ　パチュリー　執事長

中級妖怪　ここでも十分強い

河城にとり

下級妖怪　唯の人間よりはだいぶ上

いなくなっちゃったヨ

雑魚　唯の人間より上

毛玉　妖精　とか

←この先キャラ設定←

※ある程度読んだ人を対象にしているためネタバレを多分に含みます。注意してください

変更点アリ。宣言通り、オリキャラ以外は削除したよ！

主人公

変更点→時代と年齢が変だったので、蓬莱島で１００年ではなく、４００年程過ごしたことにしました。

伊吹　大和　４１話現在

伊吹萃香の義理の息子。黒い髪に黒い瞳で正に日本人らしい風貌をしているが、顔は男とも女とも取れるけど男。人間の里にいたところを偶然拾われる形で息子となった。初登場時は１０歳になったばかりのただの子供。魔法と能力を使う以外は人間の子供といっしょ。それだけでも人間じゃないって?妖怪の中じゃ普通です。１０歳だけど某魔法先生ではございません。先生みたいな才能もございません。

現在の見た目は１６~１７歳だが、実は４００年以上の時間を本人

の知らない間に過ごしている。蓬莱島では輝夜の能力のおかげで歳をとることはなかった。才能の無さから伸び悩むが、蓬莱島・人妖大戦を経てその実力は上級のものとなっている。執事の訓練も受けて姉妹の面倒役になるが、料理の担当だけはさせて貰えなかった。Q．何故？A．下手糞だからさ。

この度、遂に当初の夢であった魔法使いになることができました。憶えてる？魔法使いの前に人造人間なんだぜコイツ。

人妖大戦では戦いへの覚悟の無さから己の行為に悩み、紅魔館を逃げ出すように去った。その後自らの答えを見つけるための旅に出るが・・・？

ステータスとか

能力は『先を操る程度の能力』

先見　未来を視ること

加速　相手の動きより先に動く

先取り　未来の自分が持つ魔力や気を引きだすことができるが、代償は使った年月を消費するまで使えなくなること

武器とか出来ること

魔力糸　幻術魔法　イクシード搭載の短剣　属性魔法↑主に炎。他

にも水や氷、雷や風も使えることは使えるが一般生活で使える程度。例えばコップに水を入れるとか、そよ風を起こして涼むとか。

鬼神

鬼の御大将。みんなから母と言われるより大将と呼ばれる方が好き。何故なら恥ずかしいから。萃香の親馬鹿はここから始まったのかも。三度の飯より闘いが好き。酒はもっと好き。お婆様と呼んだ大和にはデコピンでノックアウト。さすが大将、手加減もばっちり！実は大和を萃香の子にする最後のひと押しをした人でもあって、何かと大和を気にしている。達観したＢＢＡを目指しま（ピチューン

能力『？？？？？』

武天

蓬莱島の島主。実は月の住民が地上に居たころから存在していたとか。無敵という言葉が一番似合う風貌をしている仙人。露食べて暮らしているかは謎。おそらくこの作品の中で１・２を争う実力の持ち主。チートです。

大和に独自の武術を教えている。

この人は馬剣星と風林寺隼人との武術を使います。ちなみに永琳は岬越寺秋雨の柔術を使う。

全員が島を出た後、蓬莱島を出て行った。その瞳の先には何が見えているのだろうか。

能力は『他人の幻想を形にする程度の能力』

アキナ

見た目は大和を女の子にした感じ。だけど大和にしか見えないちょっとヤンデレな人造人間（ホムンクルス）。兄ラブで年齢不明。初登場時の背丈は大和とかわらず１０歳程度の子供の外見をしている。その幼い外見に似合わず、ゴツイ二丁拳銃を操る猛者。

大陸編で再登場。こちらも外見は１６～１７程度にまで成長している。大和曰く、女っぽくなったとか。自分を創ったＤｒキリシマを追って再び地上へ。キリシマとの闘いと人妖大戦の中で己の中に秘められた能力を覚醒させる。未だ能力を持て余しているのだが、それでもべらぼうに強くなってしまった。はてさてこれが真の能力なのかな・・・？

元ネタ、というより参考にしたのは某格ゲーの背中がエロイ、ベレー帽な少尉さん。彼女みたいに銃使い《ガンマン》のくせに接近戦

もバリバリこなす超エリート。才能のない大和とかわって何でもこなすチートさん。実は大和に持たせようとした銃は彼女に急遽持たせました。

能力は『自らを操る程度の能力』

ケビン・フォレスト

聖堂騎士団の新米騎士。騎士である者は誰でもある程度は名が通っているものだが、彼の噂はまだ広がっていない。それ故に吸血鬼討伐では有名なハンターに強力を断られた・・・とでも言うとでも思ったのか?面倒だったから誘ってないだけ。オマケに守護騎士第七位の猛者。任務の為なら味方も売るし、後からでも撃つぜ★主に大和と騎士団の任務を行った。騎士にしては緩く、騎士の十戒なんて知ったこっちゃねえぞと。でも自らの最低ラインは決めてある。大和のことをカワイイと言い、実際にアキナをナンパしようとした。

使用武器はボウガン。ボウガンを使うケビン。空の軌跡のケビン・グラハムの設定を引用させてもらってます。

能力は『聖痕を使う程度の能力』

団長カーネリア　副団長ヴリアント

聖堂騎士団の守護騎士第一位と第二位。不真面目と真面目。カーネリアが仕事をほったらかす分だけヴリアントが苦しむという関係。ダメな上司と優秀な部下みたいなもんです。大和曰く、カーネリアは型破りな人、ヴリアントは騎士そのもの。己に絶対の自信と誇りを持ち、騎士団を率いる最強の二人。人妖大戦では騎士団を勝利へと率いた。

両名とも武器は剣。その二人の生き方・考え方は大和の心にしかと刻みこんだはず。

アルフォード・スカーレット

紅魔館の現頭首。真・カリスマ無双を地でいける吸血鬼であるが、争いが嫌い・見た目に反して優しい上に基本ヘタレなのでカリスマ（笑）に成り下がっている。吸血鬼という種族を考えてもふざけた量の魔力・妖力を持つが、ヘタレ＋素人なので宝の持ち腐れである。実は主人公補正入ってます。

家族構成は妻・娘二人（予定）・執事・メイドである。実は能力がない分、基礎能力がヤバイとか。

人妖大戦時にも引き籠るヘタレっぷりを発揮。ここまで来たら褒めてあげたいくらい。最終的にはフィナンシエと一騎打ちを行い勝利。大戦の終わりを戦場で見届けたが、その戦場で妻を失った。その後、今までとは違ってどこか悟ったよう大和に礼を言った。

シルフィーユ・スカーレット

→の妻。生い立ちやら過去やらは本編でどうぞ。大和の魔法の講師をしていた。考えがあってアルフォードと結ばれたのではなく、ただ純粋にアルフォードが好きだから結婚した。これだけは紛れもない事実。二人の娘に恵まれ、幸せな日々を送っていたはず。人妖大戦では敵側に回るが、それは家族と人間を想っての行動だった。無茶な魔法行使さえしなければ死んでいたのは間違いなく大和。レミリアに看取られながら、その人生の幕を閉じた。この人も大和の心に大きな何かを残した。

フィナンシエ・スカーレット

→×2の弟。人間を愛しすぎた故に戦争を起こしてしまった人。妖怪と人間、更には世界の行く末まで考えた上での行動だった。世界の行く末を考えたまっすぐな感じで書こうと思ったら、気がついたらガンダムのシ○アみたいになってた。コロニー落とす逆な方ね。兄はア○ロじゃないのに何故？

紅魔館を出てキリシマと遭遇。求めるものは違うが、世界を変えるという点では同じだったため手を取り合った。そのあとは本編通り。この人も大和の（ｒｙ

執事長クラウス

主至上主義。忠犬ハチ公も真っ青なくらいに主に尽くしているが、それと同じくらい弄り倒してもいる。狼男であり、本気モードになると○○け姫に登場する犬？みたいになる。美鈴曰く、神話クラスのバケモノ。龍の末裔が何を（ｒｙ。大和に執事とは何たるかを教えるが、結局本人は分かったのか分かってないのか・・・。

Ｄｒキリシマ

大和とアキナを創った張本人。中止を発表された計画を裏で行っていた研究者の一人。大和が地上へ落ちることになった抗争の際に地上へ逃亡。フィナンシエと手を結ぶ。自分を使うだけ使っておいて切られたことに苛立ち、全てを破壊すると心に決めるも覚醒したアキナに敗れた。逃げ足には一家言持ちらしく、その時にも何とか逃げ出している。現在は行方不明。

何時も通りの予告編（前書き）

もはや御馴染になりつつある予告編だー！ネタバレあり！だけど本編がこうなるとも限りませんので過度な期待はしないように！と言いますか見ないほうがいいので戻ってください！！

「大陸でそんなことが…。幻想郷とは全く別の形で決着がついたんですね。…今の彼からはまったくその面影が見えませんけど、その辺はどうなんですか？」

今でも弱さを見せないようにしているだけさ。あの頃のアイツは死んだ魚みたいな目をしていたからな。私は遠くから見ていただけだから何とも言えないが、相当苦しんでいたはずだ。

「その時貴方は彼と何か話を？」

いや、私が直接会ったのはそのだいぶ後だ。わざわざ励ましに行くなんてマネをするほど私は優しくないさ。それにその時は隣に友人がいたしな。

あややや？これは珍しい組み合わせですね、何かあったんですか？

この天狗が隣にいたな。

「大和さんの項目を書き直そうと思っているんですよ。そうだ、貴

方にも話を聞いてもよろしいですか？」

おお！？取材をするのは得意ですけど、取材されるのは初めてですね！どうぞどうぞ、この一番の親友に何でも聞いてください！

「では彼が幻想郷に来た頃の話なんですけど――――――――――――――

～幻想郷第一章　自答編～

紅魔館には手紙を、騎士団には直接別れを告げた大和。自らの答えを探すための旅に出るつもりが、行きついた先は自身の故郷によく似た場所。名を幻想郷という。

「あややや、珍しい顔を見つけましたよ？お久しぶりです、元気にしてましたか？」

「まあ、それなりに」

人と妖怪が一緒に暮らしている世界。それは、あの妖怪たちが心の

底で望んでいた世界ではないのだろうか？

「そうですか。魔法使いには成れたんですね」

「うん・・・でも解らないんだ。今まで自分ばかり見ていたから、周りを気にするなんてことはなかった。だから初めて周りを見渡した時、本当に自分の馬鹿さ加減に気がついたよ」

魔法使いになり、みんなの役に立つ。だけど最初にしたことは、二人の少女の母親を奪ったこと。

少年から青年へと成長した彼は、己の力を振う理由を探しに出る。

「結局のところ、貴方は『こちら側』の人間よ。強ければ生き、弱ければ死ぬ。私はそうやって生きてきた。それはこれからも変わらない」

絶対的強者との再会。四季のフラワーマスターは彼に己の生きる道を告げる。

「人と妖怪の関係は確かに難しい。私は半妖だが、だからこそ人間を守ろうと思う。今の幻想郷という世界はまだまだ未完成で危険だ。私は人間が好きだ。今は受け入れられなくとも、いずれ解ってくれ

る日が来ると私は信じている」

人里で出会った半妖の女性。その姿があの人に重なり、彼の想いは加速していく。

「・・・久しぶりだな小僧。何を驚いている？ここは幻想郷、全てを受け入れる場所だ。俺たちがいても何ら可笑しなことはないはずだが？」

あまりにも早すぎる再開。未だ答えを見つけられていない彼を、後に吸血鬼異変と呼ばれる異変が襲いかかる。そして彼女たちとの再会。

「答えを見つけて、もう一度会いに来る！だから！！」

「・・・もういい。二度と私たちの前に現れないで」

――――――狂った時計の針は、零に戻すしかないよ――――――

そして悩み続ける彼を、多くの者を裁いた人物が救いの手を差し伸

べた。

「覚悟なき拳は、ただの暴力でしかない。それが理解出来ている分、貴方はまだマシな方です。どうですか？しばらくの間、私が貴方を再教育してあげましょう。無論、地獄で」

地獄の裁判長。数え切れぬ程の生き方を見てきた彼女が、青年に大きな一歩を踏み出させる。

「あら、じゃあ大和さんでいいかしら？私のことは幽々子って呼んでね」

「迷いを断つ白楼剣だが、お主には必要ない。自らの迷いを人に委ねた時点でお主は迷いを捨てたが、その分弱くなっている。それが解らぬお主ではなかろう」

彼は答えを見つけ、再び歩めるのだろうか。そして歩んだ先には何が待ち受けているのか？

未来を知ることに意味はない。

「ここが博麗神社・・・」

――彼は答えを得た――

何時も通りの予告編（後書き）

あはは～じらいです。ただやりたいだけの何時も通り予告編を長くしてみました。と、言うわけで次回から自答編です。今までの予告編を読んだ人は解っているとは思いますが、この通り進むとは限らないです。ただ今回の予告編は頑張ったので、本編もできるだけこのままで行けるようにやって行きます！

望まぬ帰郷と望んだ再会（前書き）

自答編（仮）始まります

望まぬ帰郷と望んだ再会

真黒。多数の目と不思議な物が浮かんでいる空間の中、上下の感覚すら曖昧な中を僕は確かに落ちていた。

「今さっきのはやっぱり紫さん…なんだろうな。だとするとここはスキマの中」

まるでタイミングを測っていたかのような悪戯。そう、あの人にとっては悪戯なのだろう。やられた僕としてはたまったものじゃない。でもこの中じゃ何も出来ない。ただ流れに身を任せて出口が開くのを待つ。

「・・・・・・・光が見える！出口だ！！」

紫さんのことだ、何が待ち受けているか解らない。魔法が使えない分注意して、身体全体に気を纏わせて有事の際のために構える。

「――――――――――――――――――へ！？っちょ！？落ちる落ちる！！？？」

――――隙間が開いた先は空でした――――

馬鹿言ってる場合じゃない！飛べ飛べ！僕は鴉天狗だ！！

「・・・これは地面の中じゃなかった分喜ぶべきなのかな？」

いやいや、喜んじゃだめだろ。ここはきっちり怒るべきだ。だいたい、タイミングを測っていたのなら、僕の行動も全て見えていたはず。それを解ってこんなことをしたのなら許せるなんてものじゃない。そう思って周りを見渡すも紫さんの姿はなく、僕の飛んでいる場所は山の上だった。春らしく、山の木々は緑の葉が生い茂っていて何処か懐かしさを感じさせてくれる。

「そう言えばここ、どこかで見たことあるような風景な気がする。・・・懐かしい？」

何処だったか？確かに見たことがある気がするんだけど。なんとか思い出そうとしていると、首の後ろがチリチリしてきた。所詮、殺気と言うモノだ。・・・解り易すぎる。そんな生の感情剥き出しで襲おうとするということは、今までの僕の経験上、何種類かの攻撃手段があると考えた方がいい。

こちらが隙を見せるのを待っているのだろうか、こちらをずっと見ているだけで手を出してはこない。仕方ない、少しだけ隙を見せて反応を見よう。そう思い、滞空したままであくびと背伸びを行う。もちろん隙を見せた『フリ』だ。実際はどんな出来事にも対処できるように力を隠しての行動だ。

・・・・・・・・ッ動いた！！後ろから飛んでくる、おそらく弾幕を気で強化した拳と蹴りで叩き落とす。すると山の中から多くの天狗が出てきた。もしかしてここ、妖怪の山なのかな？いやそれはない。だって母さんたちの持つ異常なまでの力が感じ取れないから。

数人の天狗がそれぞれ武器を持って仕掛けてきた。動きも遅く、攻撃のスピードも今まで闘ってきた人たちに比べれば止まっているように見える。でも僕は防戦一方だった。

『何の答えも見つけられていない僕がこの人たちを攻撃してもいいのか？』

そんな考えが僕の頭を過る。頭の中ではシルフィーユさんの最後、レミリアの泣き顔がはっきりと映し出されている。くそ…なんて情けないんだ僕は！？

「でもこのままじゃ・・・」

やられることはない、と思う。でもこれ以上コトを大きくすればどうなるか解らない。ここはひとまず逃げよう、そう思っていた僕の前に一人の鴉天狗が現れた。

「まったく、人間の一人も堕とせないんて「文ぁ！？」・・・あや

ややや!?もしかして大和さんですか!?」

「正真正銘の伊吹大和だよ」

「うううううおっっっしゃあああああああああぁ!?!?今日という日はなんといい日なのでしょう!大和さんが帰ってきましたよ!!ええい皆の者、控えおろう!!こちらにおわす御方を何方と心得る!?恐れ多くも鬼の四天王が一人、伊吹萃香様の一人息子、大和殿にあらせられるぞ!頭が高い!控えおろう!!!!」

「「「「「「は?はーーーーーーーーーーーーーー!?」」」」」」

・・・なぁにこれぇ?天狗たちの中じゃ空中土下座が流行っている・・・わけないよね。ノリがいいだけなんだろう。

「・・・・・良し。さき大和さん、積もる話もあります。下で話をしましょう」

「…うん、そうだね」

「…何だか元気ありませんね。大丈夫ですか?」

「大丈夫、大丈夫だから」

本当は全然大丈夫じゃない。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ささ、どうぞどうぞ。汚いですけど、座ってお茶くらいは飲めますんで」

あの後すぐに文の家へ向かった。自ら汚いと言うだけあって、家の中は物が散乱していた。落ちているのは写真が多く、おそらく文が自分で撮ったものなのだろう。にとりに頼みこんでカメラを貰ったんだろうか。でも文って掃除が苦手だったのかな？新発見だ。

「男の人を家に入れるなんて初めてなんですよ？大和さんも大きく成りましたし、誤解されちゃいそうですね。射命丸文、昔の友人と一夜を共に…なんて噂されて…キャッ！もう、何言わせてるんですか！」

「昔からの付き合いなのに、今更そんなこと言う人なんていないと思うけどなぁ…」

「…ちょっと、本当に大丈夫？今まで何があったか知らないけど、話してもらっていい？私でも力になれるかもしれないから」

そう言い、真剣な眼差しで僕を見る文を見て思う。自分で答えを探

すこともいいけど、違う人の意見を参考にするのもいいことかもしれない。話合うことすら出来なかった先生たちと違って、僕は話合うことが出来るのだから。僕は旅のことも含めて、今までの出来事を全て語った。

山を出て妹紅、幽香さんとの出会い。都で出会った陰陽師、妖怪は人間の敵だと言われた。遭難した後の輝夜や師匠、師父との出会い。僕とアキナの関係。美鈴やケビンさんとの出会いと共闘。そして、紅魔館と大戦。人間を愛しすぎた妖怪の話。

全てを話した頃には辺りはすっかり暗く、夜が訪れていた。長時間話したけど、文は真剣に僕の話しを聞いてくれていた。

「文、僕はどうすればいいのかな。どうしたら先生たちを救えるのかな…」

やっぱり話すべきではなかったのかもしれない。話した分、僕はもっと自分が惨めに思えて仕方なかった。

「…私は大和に救って貰った」

??僕が文を救った…?そんなことは一度もない。むしろ毎回僕を助けてくれていたはずだ。

「恥ずかしい昔話になるんだけど、昔の私って愛想無かったでしょ

?正直のところ、大和のことが大嫌いだったの。鬱陶しいわズカズカと人の中に入って来るわ、その上ちょっとのことで泣く泣き虫だったし」

「・・・・誠に申し訳ありません」

「別に責めてるわけじゃないの。でもね、そんな無愛想な私に大和はずっと声をかけてくれたでしょ?嬉しかった。今までただ与えられた仕事をこなすだけの灰色な世界を、色とりどりに染め上げたのは貴方よ」

「それは、いいことだったのかな…?それって文の生き方を僕が変えちゃったんだよね?」

「いいに決まってるわよ。だって今の私、すごい自分が好きだもの。その私を創り上げたのは間違いなく大和、貴方よ。何時だって真正面から人を見て、ぶつかっていける。そうやっていくことが、その先生たちを救うことに繋がるんじゃないかな?」

面と向かって言われると恥ずかしい…。文も恥ずかしいのだろう、頬が紅く染まっている。でも真正面からぶつかっていく、か。相手が受け入れるまで根気強く当たって行く、ねぇ。昔の僕は知らない内に凄いことをしでかしていたんだなぁ。世間知らずって言うか、何も考えずにただ危なっかしかっただけなのかもしれないけど。

「さて!暗い話はこれでお終い!…ねえ大和、その輝夜って人とパチュリーって魔法使いのこと詳しく話してくれる?」

「ん？別にいいけどどうして？」

「威力調査」

そう言いきった文さんの怒気は凄まじかった。僕の背筋は正直らしく、恐怖に震えて冷や汗だらだら。鬼もかくや、とばかりで後ろには炎が見えましたよ…。あまりの勢いに事故で接吻してしまったことまで話してしまった。その時はまぁ、地獄のように酷かったです。家が吹き飛ばんばかりに風が舞って、ねぇ。文さんや、ぱんつ見えちゃいますよ。

「いい？知らない女の人に勝手に着いていったら駄目。特に輝夜さんと会う時は私を連れて行きなさい。そうしないと食べられても知らないわよ」

「た、食べられるって…輝夜は人食いじゃないんですが？」

「い・い・わ・ね！？」

「イ、イエッサー！！」

あまりの勢いに頷くしかなかったです。

望まぬ帰郷と望んだ再会（後書き）

遅くなりましたａｎｄこれからもっと遅くなります、じらいです。私生活が多分厳しくなって行くので前みたいな毎日更新は出来なくなると思います。たぶん出来て一週間に一話か二話くらいかと。許してやってくださいね。

さて、幻想郷に戻ってまいりました。文との関係は親子？姉弟？大和の保護者（仮）みたいな感じだと思って貰えたらいいかと。一番好きなキャラとカップリングなんてさせてたまるか！

人によって考えが違うのは当たり前だよね（前書き）

感想・要望・なんでもござれ。手の届く範囲で形にしてみましょう

人によって考えが違うのは当たり前だよね

突然だけど、ここは何処なのだろうか？いきなり地面に吸い込まれたと思ったら天狗に襲われて、文の家で一夜を過ごした僕の今朝一番の疑問がこれだ。文がいるということは妖怪の山…で間違いないと思うんだけど、この山からは少し違った印象を受けるのは何で？

「今この周辺一帯は幻想郷と呼ばれているわ。そしてこの山は確かに妖怪の山であってる。たぶん大和の違和感はこの山に鬼がいないからだと思う」

「鬼がいないって…母さんは！？姉さんやみんなは何処に行った！？」

「おおおお！？揺すらないで下さいぃぃ～～！鬼の皆さんは地底で生活してます！！」

地底って何だ？地面の下の何処らへん？というか、僕を放って行ったってどういうこと…？

「大丈夫ですって！萃香様は大和さんが帰ってきたら直ぐに地上に帰るって言ってましたから、そのうち帰ってきますから落ち着いて！！」

…そーなのか。ならいいや。今会ったとしても、情けない！とか言ってブッ飛ばされるのが目に見えているし。

「幻想郷って言ったっけ？にとりたち河童もいるんだよね？」

「それだけじゃないですよ？ありとあらゆる妖怪がこの地にはいます。そして人間の住む人里も幻想郷にはあります。ま、簡単に言うと人間と妖怪の共存した世界ですかねぇ」

人間と妖怪の共存…先生たちが目指した世界そのものじゃないか…。この地なら僕は答えを見つけられるかもしれない。先生たちが望んだ世界なら。

「ちょっとこの辺りを回ってみたいんだけど、案内とか頼める？」

「別にいいですよ？でも条件があります」

「う…どんな条件？」

流石に文も暇じゃないんだろう。手帳をビシッ、と僕に突き付けてそう言った。

「簡単なことですよ。私は文々。新聞という新聞を書いているんですよ。その記事に大和さんを載せたいんですけど、それが条件です」

「新聞？何それ？」

「ええとですね、大和さんの行動をあれこれ書いて皆さんに知らせるんです「却下で」じゃあこの話はなかったことで「待ったで」…もう、別にいいじゃないですか」

よかないよ。何でわざわざ情けない姿を、しかもまったく知らない人にまで知られなくちゃならないんだよ。社会から指差された生活なんて送ってられるか！？

「僕と文の仲じゃないか。今回だけ！今回だけお願いできない？」

「むむむ、そう言われると辛いものがありますね。…今回だけですよ？」

…良し、何でも言ってみるものだ。でもまさかこの歳になって媚びることになるとは…。でも媚びるのはこれっきりにしたいね、うん。

「じゃあさっそく行きましょうか」

「待って。最初に行くところの希望があるんだ。その人が幻想郷にいればの話なんだけど」

「？誰の所ですか？」

「…風見幽香。フラワーマスターの所だよ」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

太陽の畑と呼ばれる場所がある。夏には沢山の向日葵が咲き、見る者を魅了する場所である。向日葵以外にも沢山の四季折々の花が咲いている。そこに住むのは世に名高きフラワーマスター・風見幽香その人である。

「何も最初に超危険人物に会わなくてもいいじゃないですか…」

「ごめん。でも幽香さんに聞きたいことがあるから」

幽香さんは強い。その強さを振るう時にいったい何を考えているのか、僕はそれが知りたい。

「…危なくなったら逃げてもいいですかね？」

「いいよ、危険を感じたら直ぐに逃げてもらって構わない」

「そこは守ってあげる、くらい言ってもいいと思うんですけど？」

「別に守る必要もないくらい文も強いじゃないか。隠しているのか知らないけど、だいぶ強くなったね」

最後に会った時と比べ物にならない程に妖力が大きく感じる。何で僕の前で隠しているかは知らないけど、上級クラスの力はあると見ていいはずだ。

「へぇ…、大和もやるようになったわね。合格よ。これが解るくらい強くなったのなら私が一人気張ることもないわね」

「嬉しいこと言ってくれるね」

でも文、それは外面的な強さだ。心の強さは全然足りないんだ。もし僕が本当に強かったら逃げ出さずに向き合えたはずだから。

「もうすぐ着きますよ。…これは驚いた、本人自らのお出ましとは」

幽香さんは花の中に堂々と立っていた。飛んで来る僕らを待ち構えていたかのように、こちらをその双眸でしっかりと捉えて離さなかった。

「お久しぶりです、幽香さん」

「そうね。最後にあったのは何時だったかしら？月日が経ったと言うのにあの時より弱く見えるのは何故かしらね」

「…今日は幽香さんと話がしたくて来ました。聞いてもらえますか？」

「ご丁寧に護衛まで付けて？嫌ね。あの頃ならいざ知らず、今の貴方に興味ないわ」

話はこれでお終い、そう言って幽香さんは花の世話に移った。歯牙にもかけないと言わんばかりの対応。…あの時より弱く見える、か。酷い言われようだ。いや、その通りなんだけどね。

「だったら試してみませんか？僕が幽香さんの思っているより弱いかどうか」

「ちょ！？大和さんそれは無茶ですよ！！」

なら認めてもらうしかないじゃないか。せめてそこらの石を見るかのように向けられる視線を変えないと話しにもなりゃしないよ。だったら無茶でも無謀でも幽香さんの気を引かないとしょうがないじゃん？

「へぇ…それは面白いわね。でも今の貴方じゃサンドバックにしかならないけどいいかしら？」

「ど、どんとこいや！いや、やっぱり一発耐えれたらにしてくださいどうかお願いします無理ですか？」

マジだ、この人本気でボコボコにしてやるって顔してる！？ムリムリ！強がったらあの世に一直線だから！

「…その腐った根性に免じて本気一発で勘弁してあげるわ」

「ありがとうございます！ありがとうございますぅ！？？」

全然ありがたくないよ！ブンブン日傘振りまわして威嚇するとか酷すぎる。前から思ってたけど幽香さんってドSですよね。さっきからマスパのトラウマ甦って脚が竦んでるんですけど。しかも魔力なし気オンリーとか無茶すぎる。僕、今は出来るだけ拳を振るいたくないんだ…とかカッコつけた罰ですね解ります。

「耐えてみなさい」

「む、むりかなぁ…」

無理でした。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

パチッと眼が覚めることを覚醒すると言うのだろうか。だったら僕はいっつも覚醒しているはずなのに全然強くならないんだけど。

「遅い御目覚めね。そこ、早くどいてくれないかしら?」

「このベッド幽香さんの匂いが…嘘です勘弁してください」

ねえ知ってる?向日葵で人を拘束することも出来るんだって。そんなことない?だったら今すぐ僕の目の前に来て変わってもらいたい。イイ笑顔で嗤っている人を見せてあげよう。

「あんまりふざけたこと抜かすと頭割るわよ」

「上と見せかけて下をした人が何を言ってるんですか…」

左の顔面ストレートと見せかけて右のアッパーとか鬼畜すぎます。あれだよ、『騙してもらえる上にアッパーしてもらえる』ってやつだね。そんな趣味じゃないから嬉しくもなんともない。…嘘じゃない!嘘じゃないよ!?

「大和さんエッチになりましたね」

「ツッコミが遅いよ文さん…。あと僕は受けじゃない」

「漫才するなら帰りなさい」

幽香さんの生態調査するまで帰れまテン。何かアレだ、故郷に戻って来て文にも会ったせいか、小さかった時みたいにふざけて馬鹿やってた頃に戻ったみたいで楽しい。

「で、ではまず最初の質問から」

「誰が答えるって言ったのよ。貴方見事に気絶したじゃない」

「ノーガードで受けた男気を買ってください」

「直ぐに果てる男に興味はないわ」

うぐ…なんて冷たい人なんだ！既に砕け散っている僕のハートを更に足で踏みつぶすなんて流石ドS。もうこれからそう心の中で呼ばせてもらおう。別の意味で痺れるけど憧れるわけがない。

「では最初の質問です！」

良し！行くんだ文！新聞記者としての意地を僕に見せてくれ！！僕は幽香さんが怖くてどうしようもないからここで黙って応援させてもらうよ！！

「いい根性してるわね貴方たち…！」

「ずばり！好きな食べ物と好きな花と好きな男性のタイプは！？」

え？幽香さん何か言ったの？そんな無視して馬鹿なの死ぬの？文さんや、もうそろそろ限界ですぜ。幽香さんの肩プルプル震えて怒りマックスじゃないですか。

プチ＃なんて効果音を初めて聞きました。

「…今日は鳥の唐揚げね。いい獲物が目の前にいることだし、生け捕りにするわ」

「その鳥を生け捕りにする時、幽香さんは何を考えているんですか？」

…無言。突然真面目になった僕を見てか、まるで何かを確かめているかのように僕を見つめる幽香さん。しばらくした後、再び口を開いた。

「…楽しんでいるだけよ」

「…え？」

「生きるか死ぬか、とても解りやすい二つの答えがあるだけ。強ければ生き、弱ければ死ぬ弱肉強食の世界。力を持った者の宿命。よかったわね、貴方は『こちら側』の生き物よ」

「幽香さんは…自分の力にを振るうことに、命を奪うことに対して何も思わないんですか？」

「楽しいと言った。結局のところ、貴方はもう逃げられない。だったら覚悟を決めるか、死ぬまで綺麗事を言ってなさい。話は終わりよ、出て行きなさい」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

太陽の畑を出た頃には日も傾いていた。今日はもう文の家に帰ろうと飛んでいたのだけど、「忘れ物したので大和さんは先に帰っていてください」と言われたので先に帰っている。せっかくだから夕飯でも作っておこう。…大丈夫だよね？今日の夕飯が鳥の空揚げとか僕嫌だよ？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ちょっといいですかね？」

「まだ何かあるの？」

「大和さんが来ることを知っていたんですか？」

太陽の畑での第一接触・今の大和さんを試す絶妙な力加減・そして風見幽香にしてはあり得ない質疑応答。自分の気が乗らなければ動かないこの人が何故あれほどまでに大和さんと向き合ったのか？考えれば考えるほど気味が悪い。

「鳥頭に話した所で意味はないわ」

「私は萃香様に大和のことを頼まれている。それに私も気になることを放っておけないたちなのよね」

これは萃香様たち鬼の総意であると言っておく。今も昔も大和は鬼たち全員の子供だ。あの人に危害を与えるようなことになればあの力、日の本を震わした力を敵に回すことになる。もっとも、コイツは嬉々としてそれを受け入れるのかもしれないが。

「…馬鹿が頭を下げたのよ。来たら頼むと」

「…そんなことするはずがない。第一、そんなことをするのなら直ぐに顔を見せるハズ」

「そんなこと私は知らないわ。聞くばかりではなく、少しはその足りない頭で考えてみたらどう？」

「何を企んでいる」

「それも貴方自身で考えなさいな」

そのまま家の入って行く姿を見て、私もその場を飛び去った。いったい何が起きている？萃香様が姿を見せない…いや、見せられない程の何かがあるとでも言うのか？これはきな臭くなってきたわ…なんてね。射命丸文、チャンスですよ！？大和さんに引っ付いていればスクープを撮れるかもしれません！あややや、個人としても記者としても、これはもう離れませんね！？

オマケ

「あ、お帰り。夕飯できてるよ」

「あやや、どうもありがとうございます。では食べましょうか」

「「頂きます」」

次の日の周辺探索は中止になりました。理由は文の食中り。僕は平気だったのになぁ。何故かそのまま調理場にだけは立たないでと言われました。

人によって考えが違うのは当たり前だよね（後書き）

人間、やればなんでも出来るんだなと。これが今やるべきことなのかと言われれば…うん、なんだ、言わなくても解るだろうか。なんでいきなりレポートがあるのか？叫びたくなるね、勉強で作者を殺す気かと。けっこう追い詰められているのでこうやって発散させてもらってます。

さーて今回はちょっとだけ遊んでみました。たぶん大和の幼いころはふざけ回ってたんだろうなぁと自分で想像してみたり。作者のお前が言うなと。まぁいつか書けたらいいね。自答編とか鬱展開多いのでサクサク行きます。次に上げられるのは早くて水曜日・遅くて日曜日です。それでは

人生相談と動くお嬢様

文の家に泊まり込んで幾日。春の朝日が気持ちいい今日も僕と文は出かける準備をしていた。

「人里に行ってみたい、ですか？」

「うん。妖怪たちが生きている世界で人間がどうやって生きているのかを知りたいんだ」

幽香さんとの邂逅のあと色々考えてみた。弱肉強食。勝った方が正義で負けた方が悪。幽香さんらしい何とも解りやすい主張だと思う。でもそれって負けた人を完全に否定することになるよね？僕は先生たちをスッパリ切り捨てるなんてこと出来そうにない。

とまあ色々考えたんだけど、結局他人の意見を批判するなら自分の意見を固めろよ、なわけでして。せっかく先生が望んだ世界にいるのだからその世界に住む人の意見を聞きに行こうというわけ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「そこの二人、止まれ。ここから先は人里だ。何用でここに来た？」

何人かの退治屋のような人に囲まれての厳しい声。声の聞こえた方向を見ると長い髪、意志の籠められた強い目、堂々と立つその姿は見た目以上に大きく見せる女性がいた。

「慧音さん、射命丸ですよ」

「ん？ああ君か。すまない、どうも最近の幻想郷は騒がしいのでな。執拗に反応してしまった」

「んん？妖怪？人間…？」

気の質が違う…とでも言えばいいのかな？気の質には大きく二つの種類がある。一つは僕みたいな人間が持つ少し柔らかい感じのする気。もう一つは美鈴など妖怪が持つ力強い気。目の前の人からはその両方の気を感じ取れる。

「…鋭いな。私は半妖だ。そういう君も普通の人間とは違うようだが」

ああ、じゃあこの人が文の話していた人里に住む半妖、上白沢慧音さんか。確かワーハクタクの半獣だとか言ってたような気がする。

「初めまして。一応魔法使いの伊吹大和といいます。よろしくお願

いします」

「上白沢慧音だ。射命丸に聞いているだろうが、ワーハクタクの半獣だ」

ああ…なんか久しぶりだこの空気。すごく…和みます…。僕の周りって昔から騒がしい人が多かったから、こういう落ち着く人と一緒だと嬉しいなぁ。是非とも御近づきになりたい。

「慧音さん慧音さん。それより幻想郷が騒がしいってどういうことですか？何かいい新ネタですかね？」

「なんだ、文屋のくせに知らないのか。実はな、新しく幻想郷に来た妖怪の一派が暴れてその対応に八雲紫たちが追われているらしい。どうも多くの妖怪を支配下においていっているようでな、もしもに備えてこうやって私が先頭で里を守っているのだ」

「あやや、おかしいですねぇ。私のところにはそういう情報は入ってきてないんですけど…」

「文は最近僕と一緒にいるからじゃない？ほら、何故か天狗たちも近寄ってこないし」

ほんと、何でだろうねぇ。天狗は定期的に連絡は取り合うとか聞いてたのに最近はまったく音沙汰なし。その上河童を探しに行っても誰も川から出てこないし。これもその騒動が原因なのかなぁ。

「むむむ…それもそうかもしれません。ですが記者として最新の情報を他人から教わるなんて愚の骨頂！慧音さん、私は里で聞き込みをして来るので適当に大和さんの相手でもしてやっててください」

「え？ちょっと文！？…行っちゃったよ」

シュバッ！なんて擬音を残して文が人里の中心地に向かって飛んで行った。それにしても記者かぁ、文も自分のやりたいことが見つかってよかったね。

「お互い苦労するな」

「それほどでもないですよ」

気の良い友人ですから、これくらいはね。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「すまないな、最近忙しくて家の中を片付けられてないんだ」

「御気になさらず…と言っても、文の家よりはだいぶマシですから気にすることないと思いますよ」

道中にはいろいろと人里のことを教えてもらったりした。どこのお店が美味しいとか、特に新鮮で良い野菜や魚を売っている御店などなど。あれこれ教えている時の上白沢さんはすごく輝いていたんだけど、小さな子供に教えるような感じは男として嬉しいのか悲しいのか…。

そんなこんなで向かった先は上白沢さんの家。とりあえず話を聞くことになった。

「これは歴史書か何かですか？」

まず目に入ったのは机とその上に置かれている巻き物。机の上に置かれている巻き物を見てみると、今まで起こった出来事が年月ことに細かく書かれていた。歴史書なのだろう、今まで高位の魔道書などは読んだけどこういった書物は初めてだからすごく興味がある。

「ん？ああそうだ。私は幻想郷の歴史編纂作業をしていてな、それもその一部だ。…あまり見ないでくれよ？」

「っと、すいません。珍しいものでつい」

「いや構わないさ。そう言えば君の名字は伊吹と言ったな、確か鬼にも伊吹とつく者がいると聞いたことがあるのだか？」

「僕は伊吹萃香の義理の息子ですよ。鬼じゃないんですけどね」

うーむ。やっぱり鬼の四天王だけあって母さんの名も広がっているんだな…。母は強し、と言うやつなのだろうか。まあ昔の都でも名が通っていたくらいだし、当然と言えば当然なんだろうけど。

「上白沢さん、ちょっと話が聞きたいんですけどいいですか？少し込み入った話になるんですけど…」

「慧音でいい。そうだな、なら御茶を入れてくるから少し待っててくれ」

慧音さんはそう言って台所に御茶を淹れるに行った。あまりジロジロと見るのもどうかと思ったけど、紅魔館で手伝いをしていた時によく紅茶も入れていたから気になって目がそちらを見てしまった。その視線を感じているのだろう、御茶を淹れてきた時は苦笑いを浮かべていた。

「視線には慣れているつもりなのだが、こうも見つめられては私も恥ずかしいものがある」

「すいません…どうも前の職業柄気になってしまって」

何処かの家でお手伝いでもしていたのか？と聞きながら僕に御茶の入った湯呑を渡してくれた。ん～いい香りだ、文の家のとは大違いだね。

「ちょっと大陸にある屋敷で執事のマネごとをしてたんです。それでですね、僕の話というのは――――――――――――――――――

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「それでは最近人里の周りにもよく妖怪が出てきていると」

「そうなんだよ、まったく困ったものだ。おちおち魚も釣りに行けない」

「わかりました。どうもありがとうございました」

こんな話でよければ何時でも、そう言って取材を受けてくれた男性の背中を見送る。

う～んそれにしても怪しいわね。今は小～中程度の妖怪が好き勝手に暴れているようだけど、それくらいでは人里がこれほど嫌な空気になるとは考えられない。だとすると、やはり理由は湖の近くに現れた紅い館か。夜にその館に雑魚妖怪共が集まって行くのを見た…という証言があるとはいえ不確かだけど。人間でも危機察知能力と

いうものがあるらしいけど、彼らも無意識のうちに危険を察知しているのかしら？

ペンをフリフリ、手帳を片手に思考を巡らせる。それにしても紅い館…。確か大和のいた屋敷も真っ赤だったはず。仲が良かったから追いかけてきた？そのついでに幻想郷を支配してやるぜ？…なーんてことはないですよね、私の思い込み過ぎでしょう。だいたい、紅魔館とやらの主は争い嫌いだったはず。そんな人がわざわざ幻想郷に喧嘩売るなんて…

「だ、だれか！上白沢さんを呼んで来てくれ！妖怪だ、妖怪の大群が人里に向かって来てるぞ！！」

…あやーなんて間の悪い人達なんでしょうか。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「ふむ…なるほど、君の言いたいことはだいたい解った」

「慧音さん自身、そういった葛藤ってなかったですか？」

渡された御茶と、一緒に持ってきた急須の中の中が空になった頃に全てを話終わった。レミリアたちのことは伏せて、人間と妖怪の戦

争があったこと、その理由が人間を愛しすぎたからだという話を聞いてもらった。

「私もなぁ、始めはそれほど受け入れられなかった…と言うより、出て行けという雰囲気のほうをよく感じていたよ」

はぁ、と手に持った空の湯呑に溜息を入れるようにそう言う慧音さん。苦労したんだよ…と呟く姿に失礼ながらお婆ちゃんみたいで可愛いと思ってしまった。

「この人里でですか？随分慕われているようですけど…」

「始めから全てが上手くいくわけじゃないさ。何年も掛けてようやくここまで受け入れてくれるようになったんだ。もっとも、幻想郷だからこそ受け入れられたのではないかと考えているが」

「どういう意味です？」

「この人里は四方を妖怪の住処に囲まれている様なものだ。だからここの人達は妖怪のこともよく知っている。妖怪がいることに慣れた…とでも言えばいいのだろうか」

狭い世界だからこそ慧音さんを受け入れられた？そんなことはないと思うけどなぁ。だって慧音さん優しいし綺麗だし、何より誠実そうだから。やっぱさ、誠実な人は慕われて当然だと思うんだ。

「伊吹君はどうしたい？」

「どうしたい…と言いますと？」

「君は何がしたいのかと言うことだ。あまりフィナンシエとかいう妖怪のことを引きずり過ぎると己を見失うことになるぞ？君は君だ、やりたいことをやればいい。良いように持っていこうと努力すれば必ず結果はついてくる。有史以来、自らの信念を貫いた者が己の夢を叶えたようにな」

僕がどうしたい、か。実際僕ってどうしたいんだろう？今まで先生への贖罪とか罪悪感？から僕に何が出来るのかを考えていたけど、それじゃ駄目なのかな？僕に出来ることじゃなくて、僕が出来ることねぇ。それも一つの答えなのか。

もう一度御茶を沸かしてくる、と言った慧音さんを視界の端に置いて再び思考の波に身を委ねていた。こうしていると何だか新婚さんみたいだ、なんて馬鹿な妄想をしている僕を叩き起こしたのは春なのに汗をかくまでに急いで来た来訪者の一言だった。

「上白沢さん大変です！妖怪たちが来ます！！」

「何だと！？／…ええー！？」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇

～人妖大戦終結後～

「レミィ、大和が出て行ってもう長いわね」

「…知ってる」

「フランドールも地下室に籠って出てこない。食事を運んだ美鈴がすすり泣く声を聞いたみたいよ」

「…知ってる」

「何処に行ったのかしらね」

「…知らない」

知らない。知らない。大和のことなんか知らない。みんな大和のことが心配で優しくしていたのに、出て行った。一人じゃないって、私たちが居るって言ったのに出て行った。お母様が亡くなって、それが自分のせいだって言って。そんなことないのに、あの時私は言った。大和だけの責任にさせないって。私も一緒に背負うと言ったのに。

白。今の私の世界は真っ白。お母様を失い、初めての友人も失った。パチェは声を掛けてくれているけど、それでも前みたいにただ日々を過ごすだけ。笑うことはない。遊ぶことも、本を読んで勉強する

ことも…大和と一緒にいることもない。心にポッカリ空いた穴は塞がれることなく、その穴は今も広がり続けている。

ケビンの奴も大和のことを言いに来たけど、そんなことで納得できるほど私たちの仲は薄情じゃなかったはずだ。だいたい手紙一枚とか舐めてる。家を壊して住み込んで、引っかき回すだけ引っかけ回して勝手に居なくなりやがって。あの馬鹿(やまと)め、考え出したら腹が立ってきた。

「仕方がない。馬鹿を探しに行こう」

何時までも沈みこんでいるなんて紅魔館の次期頭首の姿ではない。最強種の吸血鬼が人間に振り回されるなんて愚の骨頂！吸血鬼なら人間の一人や二人、侍らせるくらいの気概を持たなくてどうする！

「確かにあの子は馬鹿ねぇ。でも、そんな子に振り回されている貴方のほうがよっぽど間抜けでしてよ？」

「貴方誰よ？」

癇に障る笑顔を浮かべた人物を前に、私は再び自分の運命が動き出すことを感じた。

人生相談と動くお嬢様（後書き）

ども、じらいです。今まで後書きにいろいろと書いてきたんですけど、後書き読んでる人ってどれくらいいるんですかね？今日携帯でここにある別の小説読んでて後書き読まない自分を見つけたんです。いや、携帯ってページ多くなるじゃない？自分が読まない癖に誰が読むんだよｗとか思った次第でありますｗ読んでる人は一言書いてくれれば嬉しいですなぁ。

じゃあまた何時かに

吸血鬼異変（前書き）

お気に入りが３００を超えたよ！驚きだ！

人里へ妖怪の大群が向かって来ていると聞いた僕と慧音さんは、家を飛び出して妖力の感じる方向に向かう。距離があったことと、感じられる力がそれほど大きくなかったために気がつくのに時間が掛ってしまった。

「慧音さん！力はそれほど感じられませんが、数はそれなり以上みたいですよ！！」

「解っている。伊吹も一緒に戦ってくれるのだろう？あの伊吹萃香の息子だ、頼りにしてる」

感じる力はほとんど小粒。だけど問題はその数だ。隣を飛翔している慧音さんもそれを考えているのだろう、厳しい顔立ちで正面を見据えている。

正直まだ戦いたくない…と言っても被害を出させるわけにはいかない。…人・妖怪ともに。一人も死なせずにできればそれが一番いいに決まってる。飛びながら一人決意する。僕の目の前では絶対に犠牲者を出させない。

「見えてきたな…。ん？あれは八雲のところの妖怪か？一人で持ちこたえているようだ。私たちもいくぞ！！」

視界の先には狐の尻尾を生やした妖怪が一人で防衛線を築いていた。
如何せん、実力が高かろうと圧倒的な数の暴力には手を焼いているようだ。

僕たちはその前方で戦っている狐さんを援護する形で戦場に入った。
飛んで来たままの勢いで目の前にいる妖怪に気を込めた蹴りを胴目掛けて『手加減して』繰り出す。

「グゥ!?」

手加減したはずの蹴りだったけど、当たった瞬間に骨が砕ける感触がした。目の前の妖怪は少し痛がったそぶりの後、こちら目掛けて拳をくりだしたが、隣から放たれた妖力弾で木端微塵に吹き飛んだ。
ああもう!これ以上人の目の前で死なないでくれよ!!

「詰めが甘いな。それでは足元を掬われるぞ?」

「…それくらい解ってます。でも、出来る限り目の前で人が死ぬのを見たくないんです」

これは僕の我儘。もう誰かが目の前で死んでいくのなんて見たくない。それが敵であったとしても、生きてさえいれば――――――

「八雲藍。貴方は大和殿だろう?紫様から話は聞いている」

「よろしくお願いします、藍さん？でいいですよね？」

「構わない。が、詳しい自己紹介は後だ。今は目の前の状況を何とかするぞ」

「出来るだけ被害者を出したくないんです。人も妖怪も。…出来ませんかね？」

「出来ることは出来るが――――――――――――――――――――――――わかった、君の言う通りにしよう」

「ありがとうございます！！」

藍さんを中心に右に僕、左に慧音さんで防衛線を敷く。向かってくる妖怪は最高でも中級の中程度。その中級も数は少なく、ほとんどが下級クラスだから、僕でも十分余裕を持って相手取れる。慧音さんも戦いなれているのだろうか、無難な戦い方で確実に立っている妖怪の数を減らしていく。

向かってくる妖怪を叩き、投げ、蹴り飛ばし続けているのも辛くなってきた。手加減しているとはいえ相手は妖怪。しかも向こうは殺す気で来ているのに、僕は殺さないギリギリの力加減で戦っているからか今まで以上に精神的にも肉体的にも苦しい。いい加減諦めて帰ってくれないかと思っていると、遠方から大きい力の鼓動を感じた。そしてそれはとても懐かしく感じて・・・

――――――スピア・ザ・グングニル――――――

「紅い魔槍!?」

突如正面遠方から飛来してきた紅い魔槍。閃光の如く飛来する槍だが、相手側も当てるつもりはなかったのだろう狙いが大きく逸れていた。でも僕にはそんなこと考えていられなかった。槍を放った方向からどんどんとそのシルエットが大きくなっていき、目の前に懐かしい顔が現れた。相性最悪、出会いたくない奴ナンバーワン。あまり人を嫌いにならない僕が唯一と言ってもいいほど嫌いな相手。

「久しいな小僧」

「…何やってるんだよアルフォード」

金髪に蝙蝠のような羽を持つ吸血鬼、アルフォード・スカーレット。僕が逃げ出した紅魔館の主にして、欧州最強の一角である男がそこにはいた。

「何でここにいるんだよ…」

「ここは幻想郷だぞ?来るものは拒まないと聞いたが?」

「…この騒動の首謀者は?」

「俺だ」

その答えを聞き、我慢ならなくなった僕はアルフォードに飛びかかっていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

～お嬢様と隙間妖怪の初対面の後日～

「八雲紫か」

「どうなされるおつもりですか？」

「どうもこうも、娘たちは行くと言っているのにどうしようもないだろう」

紅魔館の一室。代々その頭首が執務室として使ってきた部屋には二つの影が存在していた。紅魔館のパーフェクト執事長（クラウス）とその主の吸血鬼（フォード）。彼らはレミリアが提案した案件について意見を交わしていた。

議題は八雲紫から提案された『らしい』幻想郷への移住。理由は魔女狩りによる緩やかな消滅を避けるため…というのは表の理由だろう。どうやら小僧もその幻想郷とやらにいると俺は踏んでいる。何

故か。今まで虚ろだったレミリアが必死に訴えてくるなんてことは小僧がらみを置いて他にはあるまい。もちろん俺もクラウスも娘たちのケアに試行錯誤していたが、もはや小僧しか娘の機嫌をとることは出来ないと半ば諦めてしまっている。

非常に遺憾だが、今の俺のとるべき道は一つしかないのだ。

そして何より俺を苛立たせるのは妻を亡くしたというのに何故か塞ぎこむことはなかったこと。そして逆に何故か納得してしまったこと。『ああ、逝ってしまったのか』と。張本人である小僧を恨むこともなかった。おまけに最後の言葉を届けてくれたあいつに感謝の言葉まで贈ってしまった。人にここまで影響を与える人物など、見たことも聞いたこともない…と言っても俺は半ば隠居生活を送っているので当たり前といえば当たり前か。

「娘たちはどうしている？」

「レミリア様は引っ越しの準備中、妹様は引き籠りとでも言いましょうか。二人とも見ていて辛いものがあります。まるで偶像を崇拝しているかのように慕っていたようでございます。アテが外れた時のことなど考えたくもありません。…門番と魔女はまだマシですが、似たようなものでございます」

「…居ても困るが、居なければもっと困るな」

「あれでも優秀でしたので」

幻想郷と言ったか、小僧もそこにいるのだろう。娘たちのことを思うならそこへ行くことが一番いい。

「が、それでも足りん」

「は？何か不足の物でもございましたか？」

「娘たちのことだ。あちらに向かうだけでは意味がない」

自ら逃げ出した小僧をただ追いかけるだけでは意味がない。小僧が再び逃げ出さないよう手を打つ必要がある。そして話に聞いた八雲紫とかいう妖怪。小僧のことを理解しているばかりか、初対面のレミリアの心情を短時間でその心境を理解しているようだ。頭のキレと人の感情を察知することが非常に優れていると見ていい。…何を企んでいるのか知らんが、娘たちだけは絶対に守らなければならない。妻が残した忘れ形見、この身を犠牲にしてでも守って見せる。そのために、

「クラウス、一芝居打つぞ」

「かしこまりました」

責任という重さを青臭い餓鬼に教えてやらねばな。そして八雲紫。俺が適う相手かどうか解らんがベストを尽くそう。…小僧がこの試練を乗り越えられれば、なんだ、一人くらいくれてやっても構わん。

もちろん双方の合意があればの話だが。それくらいの気概を持たねば、俺自身もまた幻想の中に埋もれてしまうだろうからな。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

空中でアルフォードと正面からぶつかり合う。突きだした拳は張られた障壁によって防がれたが、そのままの均衡を保ったまま叫ぶ。

「何でこんなことをする！あの大戦をここで繰り返すつもりなのか！？」

「違うな。小僧、お前もこの幻想郷には確固とした主導者が存在していないことは知っているだろう？だから幻想郷の平和を俺が保つのだと言っているのだ」

薄笑いを浮かべてそう言うアルフォードに僕は背筋が冷えるのを感じた。今までの傲慢ながらも温かい空気を放っていた男からの発言を僕は信じられない想いで受け止めながら。

「人里の人間を滅ぼして！？本心では先生はそんなことを望んでいなかったのに！」

「ああそうだ望んでいないだろうな。お前が殺したのだから！望む

ことすらもう出来ぬ！！」

「ッだからって、こんなことをして何になるんだよ！」

「俺が一番強いのだから、俺に従って生きていればいいだろう？そうすれば誰も傷つくことはない」

そう言って僕を障壁を消し去り、密着状態からの強引な蹴りで僕は吹き飛ばされが、身体が勝手に反応して大事には至ることはなかった。しかし心は酷く動揺していた。何故？どうして？先生を亡くして狂ってしまった？目の前にいるのは今までのアルフォードとはまるで別人。争いが嫌いで、ヘタレだけどそれを補って余るくらい優しい奴だったのに変わってしまった。僕のせいで。

「――来たようだな」

更に飛来する二つの影。一つは相棒と認め合った仲。もう一つは友人と呼べる幼き吸血鬼。

「大和、久しぶりね」

「レミリア…」

後ろに美鈴を引き連れてやって来たのは僕が逃げ出した館の長女。目の下には隈が出来ているが、それでも彼女は僕を見つけると笑っ

ていた。反対に僕は一度彼女を見た後、視線が下へ向いた。…彼女を見るのが辛かった、見られるのが恥ずかしかった。

「ねえ大和、紅魔館に帰りましょ？」

「…まだ出来ない。中途半端のままで帰ったらそれこそ先生に見せる顔がないよ」

「フランがね、狂ったように泣いてるの。初めはただ泣くだけだったけど、今は情緒不安定になってる。能力の暴走を恐れて地下室で泣いてるのは、大和がいなくなったからなのよ…？」

フランドール・スカーレット。レミリアの妹で、よくレミリアをからかって遊んでいた活発な少女。明るく、その笑みは太陽を思わせるものだったけどそれももうないとレミリアは言っている。僕がいなくなることで起きる影響なんてあるはずがない…そう思っていた。慕ってくれていることは知っていた。けれども、僕がいないだけでそうなるなんて考えてもみなかった。だけど、そうだとしても、

「中途半端なままじゃ、今の僕じゃみんなと向き合うことはできない」

「――――――――無理やりにでも連れて行く」

牙を剥き出しにした暗い笑みを見た瞬間に悪寒が背筋を走った。その怯んだ瞬間に急接近した美鈴がその特徴的な服を翻して蹴りを放

ってきた。制空圏を習得しているおかげか、意識よりも先に身体が先に反応して防いでいた。

「ッ美鈴！」

「今回ばかりは大和さんが悪い。すいませんが、無力化して連れて行かせてもらいます」

右肘・左膝・左突き・右足蹴り。それに合わせて右腕・左腕・反転回避・左足蹴り。ぶつかり合うたびに火花が散る超接近戦での体術の応酬。僕と美鈴では近距離戦での軍配は美鈴に上がるだろう。魔力による幻術は使えない。ただ純粋な肉弾戦のみでは、才のない僕が勝つことは皆無に等しい。今持ちこたえられているのは一重にあの死にかけた修行の賜物だろう。

「くっそぉ、羨ましいほど綺麗な武術だね！？」

「大和さんこそ、その泥臭さが光ってますよ！！」

「それ褒めてないよね！！」

畜生め！嬉しそうに笑いやがって、何がそんなに嬉しいんだよ！

「何で笑ってるのか、ですか？私一度は本気で大和さんと闘ってみたかったんですよ！でも残念。今回はそれは叶わないんです」

「大和が帰ってくれば何時でも闘わせてあげるわ」

右方向、視界の端からの不意打ちだが制空圏を張った僕には――――

「こんの馬鹿力！そのまま制空圏を侵してくるなんて！！」

最強種である吸血鬼の純粋な力と膨大な魔力で高められた身体能力は、たかだか人間を辞めた程度の気なんてあってなかったかのようにその衝撃を僕に伝える。防いだはずの攻撃をもろに受けた右腕は肩から痺れて動きにくくなってしまった。

二対一では万に一つ、いや京に一つも勝ち目はない。せめて援護でも貰えればと思い、慧音さんたちの様子を視界に入れるが、向こうでも激戦が繰り広げられていた。アルフォード対藍さん、どこかに潜んでいたのか、執事長対慧音さん。どちらも劣勢だ。藍さんはまだいいが、慧音さんが追い詰められている。

生き残っていた下級妖怪たちは今がチャンスと云わんばかりに防衛線を突破。そのまま人里に向かっていく。絶対防衛線を抜かれ、人里が危機になるけどそれを振り返って見る程の余裕すら今の僕にはなかった。しかし、背後に感じていた多数の妖力の群れが一つの大きな霊力、離れている僕まで届く熱、３つの妖力の出現と共にその数を急激に減らしていった。

妖怪が殲滅されるにあたり、藍さんと慧音さんの戦闘は終わったようだ。僕の方は美鈴はもう仕掛けて来ないけど、レミリアはしつこ

いほどに僕を襲ってくる。

「は～いそこまで」

そんなレミリアの四肢が隙間に挟まれ、空中でその襲いかかる姿のまま拘束されてしまった。

「紫様、遅いですよ」

「あら、絶妙なタイミングよ？見なさいこの顔ぶれ。豪華だと思わない」

吸血鬼・狼男・龍の末裔・魔法使い・天狗・半獣・蓬莱人・巫女に隙間に九尾の狐、そして鬼の四天王の一。これほどの顔ぶれ、その気になれば国の一つや二つ一日で落せるほどの戦力がそこにはいた。懐かしい顔もチラホラ。その筆頭はもちろん母である伊吹萃香。

だけど母さんは一度も僕を見ようとせず、真剣な面持ちでレミリアやアルフォードを見ていた。

「これはどういうことだ八雲紫！私の邪魔はしないと言ったはずだ！」

「あらら？そんなこと言ったかしら？ごめんなさいねぇ、忘れちゃった」

失敗、失敗。扇で口元を隠してそう呟いているが、周りにダダ漏れの上に目も笑っている。口元もそれはニヤけているのだろう。

「ふざけるな！私は！！」

「ふざけるな？それは私のセリフなのだけど。『私の』幻想郷にこんな形で喧嘩を売ってタダで済むと思って？」

そう言って除々に妖力を膨らませて威圧する紫さん。レミリアも対抗しようと妖力を高めていくが、隙間に締め付けられているのだろうか、苦悶の表情を浮かべて紫さんを睨みつけるだけになった。悲鳴こそ上げてないけど、その整った顔は痛みを堪えるように目を瞑り、口を引き攣らせていった。

「その報い、貴方の命で払いなさいな」

「あああああああああ！？！？」

ついに耐えられなくなったのか、悲鳴を上げるレミリアを見た『僕ら』の行動は速かった。アルフォードと僕は紫さん、執事長は藍さんに向かっていった。美鈴はあとの五人を牽制。僕とアルフォードは紫さんの目の前に手を突きだし、最大火力を放てるようにして迫る。

「今すぐ解放しろ」

「紫さんやりすぎです。もう十分でしょう?」

「もういい?大和、貴方なーんにも解ってないわね。悪いことをしたら罰を与えるのは普通でしょ?それと同じよ」

「だからってここまで虐めることはないじゃないですか」

手を更に突きだした僕だが、その僕の背中に掌を当てる人物がいた。

「その手を下げな大和。そうじゃないと母さんはお前をやらなきゃならなくなる」

「…それ、本気で言ってるんですか…?」

正に一触即発。誰かが動けば即座に大乱闘が始まる雰囲気が場を占めていく。

「二度とこんなことを出来ないように、しっかりと身体で教えてあげなければこの幼い吸血鬼は解らないでしょう?大和、これは個人の問題じゃない。幻想郷という一つの世界の話なの」

「首謀者は俺だ。俺を殺せばいいだろう」

「残念。底の見えた貴方より将来有望な芽を摘む方が効率がいい。こんな騒動を何回も起こされたら堪ったものじゃないわ」

おちおち昼寝もできないわ、と言う紫さんに僕は、

「――――――僕が止めます。次にこういう事態が起きたら僕がレミリア達を止めます。だからどうか、今回は見逃して下さい。お願いします」

手を下ろし、深く頭を下げてお願いする。このままじゃ必ず死人がでる。そんなの絶対嫌だ。

「…貴方程度が彼女たちを止めるですって？ふざけたことを。現実を見なさい大和。貴方では吸血鬼はおろか、そこの武人すら倒せないわよ。才の無い貴方では才に溢れた彼女たちの高みまで昇ることは不可能よ。貴方にいったい何が出来ると言うの」

「死んでも責任とります。だからどうか、レミリアを殺さないで下さい」

頭を下げたままそう言う。今をどうにかしなければレミリア達は殺される。問題の先送りでしかないけどこう言っておくしかない。もっともこんな提案、紫さんには通用するはずもないことは解っている。でも今の僕ではこう言うしかない。せめてもの温情に縋るしかないんだ。

「――――――――帰るわよ藍」

「えッ？」

「畏まりました」

そう言った紫さんはレミリアを拘束していた隙間を消し、藍さんと一緒に新たに開いた隙間に消えて行った。僕が驚いて頭を上げた時にはにこやかな笑みを浮かべ、手を振りながら隙間に消え去る瞬間だった。

人里へ帰る。そういって慧音さんたちは帰って行った。母さんは何時の間にかいなくなり、文も何かを察してくれたのか先に山に帰っていると言って行ってしまった。

そして僕は彼女との久しぶりの対面を果たす。手紙では伝えきれなかったことを伝えるために。

「レミリア…」

「…もういい。大和が私たちの元に帰ってこないのは解った」

「…自分の納得いく答えを見つけたらまた会いに行く、だから「もう来なくていい」レミリア！」

「もう二度と…私の前に現れないで」

レミリアは俯いたままそう言った。もう会いたくないと、はっきりと拒絶されてしまった。いい加減に理由をつけて出て行った僕がしたのは彼女を傷つけ、泣かせ、そしてこのザマだ。もう何を言ったらいいのか、何をすれば良かったのかなんて解らなくなった。ただ、僕は再び目の前で泣いている彼女が飛び去るのを見ることしか出来なかった。そして僕も彼女が飛び去った後、周りに憚らずに泣き叫んだ。自分の馬鹿さ加減が生んだ結末だったけど、それでも胸の内を掃き出さなければどうしようもなかった。

吸血鬼異変（後書き）

ども、じらいです。前書きにも書いたけれど、お気に入りが３００を超えました。実はＰＶ３０万ユニーク３万お気に入り３００件が当初の目的でした。だからもういいかな～なんて思ってみたりも。すいませんねこんな作者で。

吸血鬼異変、これにて終了です。あっけなかったですね。あの場にいた巫女は博麗の巫女、蓬莱人は藤原妹紅、天狗は文です。

後は予告でやってた通りになるかと。その前に母親の方を上げますね。では

吸血鬼異変―裏―（前書き）

文章メチャメチャですので注意

吸血鬼異変―裏―

「大和が帰って来たって!?だったら早く迎えに行かないと!!」

鬼の四天王でありながら人間の子供の母親であるわたしは、古い友人から可愛いわが子が長旅から帰って来たことを知らされた。旅に出て、都で再開したが最後、音信不通になっていた息子が無事帰還したとあって、私は喜びでいっぱいだった。早く勇儀達にも教えて宴会の準備をしなければ、ああでも最初は親子水入らずで飲み合いたい…。夢は膨らんでいくが、その浮かれ気分を吹き飛ばしたのもまた紫であった。

「あの子、今すごく悩んでいるの。そこで一芝居うつつもりなんだけど、貴方にも協力して貰うわ。だから面と向かい合うのはまだまだ先になるわよ」

「ふざけるな。いくら友と言ってもこればかりは譲れない。邪魔をするというのなら、その身に鬼の力を刻みこむことになるよ」

「話は最後まで聞きなさいな。いい萃香?大和は今岐路に立っているの。己の立ち位置と、手に入れた力の遣い方に悩んでいる。貴方ほど長生きしていたら、力を持った者の末路くらい知っているでしょう?私たち大人があの子を導いてやらないとダメなのよ」

「大和は自分で歩いて行けると言った。息子を信じるのも母の務めだろう?」

「今のあの子が嘗てないほどに不安定になっているのは確かよ。それでも貴方は手を貸してくれないの？」

悩む。母親としての私と、紫の友であるわたし。大和のことを考えれば、この話に乗った方がいいことは明白だ。けど、わたしとしては大和と早く会いたいな～、って思うんだよねぇ。

「大丈夫よ。悪いようにはしない」

そして目の前の友。御世辞にも良い性格をしているとは言えない。いや、違う見方をすればいい性格をしているのだが。とにかく今の紫が何を考えているのかが解れば手の打ちようもあるんだけども…

「私があの子に酷いことしたことはないでしょう？信じてみなさいな、貴方の友である八雲紫を」

信じると言う言葉を紫から聞くとは思ってもみなかったな。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

その後の動きを大まかに説明すると、？大和の姿を見て感涙。隣の紫はドン引き。？悩む大和を見て飛び出しそうになるのを止められる。隙間の中で久しぶりに本気で暴れた。？先回りして花の妖怪に頭を下げる。大和の為ならいくらでも下げてやるぞ。？そろそろ限界↑今ココ。

今も隙間から見ているけれど、もうお預けは限界だ。常に大和の隣で話している天狗を見て殺意が沸いてくる。隙間の中では私の放つ妖力が紫の顔を紫に染め上げているが、そんなこと知ったこっちゃない。自業自得だ。次に大和が動いたらわたしも動くぞと告げるが、紫は座ったままわたしの足を掴んでイヤイヤと頭を振る。言いたいことがあれば口を使えと。

更に半獣と仲良さげに話をしているのを見てわたしの怒りは有頂天。鼻の下を伸ばした息子を見て真剣に半獣を排除するか更生させるかどうか悩んだ。そんなに胸がいいのか胸が！？と言うかわたしのことはどうでもいいのか息子よ。母はお前をいつも見ているんだぞ。

そして妖怪たちが人里を襲うのを見てわたしは驚いた。人里を襲ってはいけないのは最早暗黙の了解となっていたはずだ。なのにそれを破るとは、管理者に対して宣戦布告したも同然だからだ。

「紫、これほっといていいのかい？」

隙間の中、隣にいる人物は笑っていた。そして今から起こることを見ていましょうと。それはいいけど、あんたの式神が可哀そうだよ。

しばらくして大和と半獣が参戦した。初撃の蹴りを見てガッカリしたが、どうやら手を抜いていたらしい。何を思ったのか知らないが、一人も殺さないように戦っているようだ。まったく危なっかしいたらありゃしないよ。

「えい！や！そこだ！おお巧いぞ大和！」

息子の晴れ姿を見れてわたしは嬉しかった。あんなに小さかった大和が今では立派に戦えている。まだ粗削りで危ない部分も多いが、それでも目を見張るものがあった。

しばらく妖怪の相手をした後、吸血鬼が現れた。その力の大きさをわたしははっきりと理解した。そして大和では相手にならないと判断し、紫に隙間を出ると伝えたが、それでもまだだと言われた。これでは大和がやられる。そう言っても紫は真剣な面持ちでまだ全員揃っていないと言う。

そして幼い吸血鬼と武人が大和と闘っている中、わたしは紫から最後の注意を受けていた。

「大和と必要以上の話をしては駄目。相手を殺しても駄目。私の指示に従うこと。思念を送るからそれに合わせてちょうだい」

「無理」

「大和のこれからがかかってるのよ？」

「…わかったよ。でもこれが終わったらもういいんだろ？」

「それを決めるのは大和よ。じゃあ行くわよ」

わたしは遂に大和の前に姿を見せた。大和はわたしを見て驚き、そして嬉しそうな顔をするが、わたしは何も出来ない。紫が先程から常に顔がニヤけないように！と思念を送り続けているからだ。無理だよ、今すぐ大和に抱きついて『おかえり』を言ってやりたい。それにしても大きくなったねぇ。

そんな葛藤を続けていると、紫が大和と吸血鬼から脅されていた。いい気味だ、と思っているのもつかの間。次の思念が送られてきた。

『大和を後ろから威嚇して』

…決めた。終わったら紫をしこたま殴ろう。大和には謝ろう。その後うんと甘やかしてあげよう。

そして全てが終わった後、

「あの小さい吸血鬼は大和を好いているわよ？」

「何ぃ！？！？」

爆弾落して紫は消えて行った。ふ、ふふふふふ……。レミリア・スカーレット、お前の名前と顔は絶対に忘れやしないよ。大和が欲しいのなら私を倒してもらわないとねぇ…！！

今は霧状になって大和の周りに漂っている。あの子が真剣に悩んでいるのを知ったから、わたしはそれを身守ろうと思う。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

上手くいった。大和というカードをチラつかせ、紅魔館という戦力を幻想郷に引き込むことが出来た。そして大和を紅魔館から引き離すことも完了。今は落ち込んでいるだろうけど、あの子には早く立ち直ってもらわないといけない。

「あ～早く有望な若者が出て来ないかしら？」

いい加減私も疲れた。悪役になるのも慣れたけど私だって人の目くらいは気になる。…ほんの少しだけだけど。友人の子供を自分の思惑に使うのは忍びないけれどそうも言ってられない。幻想郷という世界を創り上げるのは速い方がいい。

「あ～疲れた疲れた。萃香も怒っていたし、私も良心が痛いわ」

「…そんな笑顔で言われても誰も同情しませんよ？」

「藍が酷いわ。私だって心を痛めることくらいあるわよ？」

「今まで陰謀策略恐喝殲滅縦横無尽唯我独尊で邪魔者を消してきた方がよく言う…」

「アハッ！藍ったらその片棒担いでいるのによく言うわぁ」

幻想郷設立にあたり、私たちは邪魔者を穏便な方法で消してきた。仲の悪い強者同士を相討ちにさせたり、弱ったところをついたり。んー、でも一番の成功は月への侵略かな？月に行けば強くなるぞー、なんて言ったら馬鹿が湧く湧く。少しでも野心のある者を排除出来ればと思ったら、ほとんどの妖怪が月に攻めて行ってくれるなんてねぇ。オマケに全滅。月の戦力にも驚いたけど、妖怪連中にも流石に呆れたわ。

まあ結果は良好で今に至る、と。

「悪いわね萃香。大和にはいい人形でいてもらわないと困るのよ」

主に私の目指す世界の為にね

吸血鬼異変―裏―（後書き）

裏のじらいです。…裏じらいって何だよ?とにかくじらいです。昨日ぶりですね。裏なんで出来れば昨日のうちに更新出来たらよかったんですけど無理でしたｏｒｚ

一応裏としてますが、ほとんど萃香の話です。紫の話も少しあったかな?とりあえず母回でした。さて!次は裏判長だよ!!…たぶん

人生の達人との出会い？（前書き）

おそらくナヨナヨした大和はこれで最後になります

人生の達人との出会い？

一通り泣いた後、以外にも心は澄んでいた。おそらく全てが空になったからだと思うけど、それはそれで悲しいことだ。その後は文の家に帰るのではなく、かといって人里に向かうのでもなく、僕はただただ歩き続けていた。

日も暮れ、それでもただ歩き続ける。歩いていると露店がある通りに出て、声を掛けられるもそれに反応することもなく歩き続ける。

すると一つの場所にでた。目の前には川。岸辺には舟もあり、どうやらこれを使って渡るらしい。舟に乗るのもいいかな、そう思い舟に触れようとした時に後ろから焦った声が聞こえてきた。

「ちょ、ちょっと待ちな！それを勝手に使われるとあたいが四季様に叩かれちまうよ！」

んー？振り向くとそこにはおかしな鎌を持った女の人がいた。やけに焦っているようで顔から汗も噴き出している。

「いいかい？触れるんじゃない、絶対に触れるんじゃないよ？」

…そう言われると触れたくなるのはお約束です。そのまま触れようと右手を伸ばすも、何故か右手は一向に舟に触れることはなかった。

まるで距離が遠くなったように感じたけど、いったいどういうことなんだ？

「ったく、油断も隙もあったもんじゃない。で？あんた何で此処にいるんだい？ここは三途の川。死者の魂が来る場所だよ。健康な奴は帰った帰った」

「気がついたらここに居たのは僕が死んでいるからですかね？」

「はあ？」

手首を振って帰れアピールをしていた女性は、僕の言った言葉に何やら考え込むように後頭部を掻きながら俯いた。

「ま、ここに来たのも何かの縁。どれ、生きている奴の話を聞くのもまた一興だ。何か話してみな」

そう言って鎌を置いて座り込んだ女性は立ったままの僕に早く座れと急かしてくる。三途の川の目と鼻の先で何かを語り始めるのはおそらく僕が最初なのだろう、女性は嬉々として僕が話始めるのを待っていた。

「じゃあ話をしますけど、つまらない「げ、ヤバイ。四季様が来る」うん？」

「ここら一帯の死者を裁く閻魔様のことさ。何時もあたいのサボりを注意しに来るお方だ。今回は真面目に働いてたから怒鳴りに来るわけじゃないだろうけど…」

閻魔様?…嘘吐きの舌を抜くあの閻魔様!?ど、どうしよう僕今までに何回も嘘吐いたよ!抜かれるのはきっと舌だけじゃなくなっているはずだよ!

あたふたとしていると川の向こう側からその姿が見えてきた。片手に棒、大きな目立つ帽子を被った人が飛んで来て僕たちの目の前で着地した。

背はそれほど高くない…といっても目の前の女性の背が高いためその対比で小さく見えただけなのだが。それよりも特筆すべきはその威圧感。小柄でありながら放たれている存在感はアルフォードと互角…いやそれを上回っている。

「小町、久しぶりによく働いたと思えばこれですか。どうやら貴方を褒めることでは何も変わらないようだ。そう、あなたは――」

「ちょっと四季様、客人です客人。目の前の青年が『俺の話を聞け!』といってきかないので話を聞いてやろうと思ったんですよ!」

「うぇ!?何気に僕のせいにされてる!?」

「嘘はいけませんよ小町。彼を見ればそれが真実かどうかくらい解ります。そして貴方は私に嘘を吐きましたね?だから貴方は――」

おおぅ、目の前で始まった説教…でいいのかな?は自分の行いを全て赤裸々にされた上で行われている。…聞いててこっちが恥ずかしくなるような話も多い。

「何をボケッとしているのです。次は貴方ですよ」

「えぇぇ!!??」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「成程。つまり貴方は友を裏切ったわけですか」

「うぐッ。…そんなつもりはなかったんです」

ああ、夜も更けたと言うのに何故僕は河原で正座をしているのだろう。夕闇が世界を支配しているために死者の魂とやらの仄かな光が辺りを照らし、それはもう不気味な世界を創り上げていた。とは言っても死者の魂も閻魔様には近づこうとはしない。誰だって二回も説教されたくないのだろう。

「死者の魂を裁く時には過程よりも何より結果を重要視します。貴方がどう解釈しようと、私にしてみればそれは立派な裏切りと言う

名の罪です。解りますね？」

「はい…」

お互いの自己紹介も済まさずままに開始された人生相談と言う名のお説教。自分を隠さずに話しなさい、と有無を言わせぬ圧力で僕に迫り、それに応じる形で話してしまった。実際には閻魔様は迫ったのでは無いのだろうけど、自分でも悪いことをしたと思うところがあるため強迫のように感じてしまった。

「そうですね――――――――構えなさい」

「ちょ！？いきなり何するんですか！」

構えなさい、と言いながら既に放たれている弾幕を躱していく。小町さんは我関せずといった面持ちで僕と閻魔様を眺めている・・・あ、流れ弾がデコに当たった。

「動きが悪いですね。聞いた話によると貴方はもっと出来るハズなのですが」

「勝手なこと言ってくれるますね！？」

誰かから僕のことを聞いたのだろう、頭に疑問符を浮かべながらそう言われた。閻魔様と話をすることが出来るのって誰だろう？…紫

さんですよねー。　（残念そりゃわたしだよ）

「動きが鈍いですね。それでも鬼の子ですか」

「弱くてすいませんね！！」

「そういう問題ではありません。貴方の悩む心が動きを鈍くしているのです」

弾幕を止め、滞空しながら向かい合う僕たち。厳しい面持ちでお互いを見合う。今までのようなただの会話ではなく、本格的に糾弾するとでも言えばいいのだろうか、全てを見通しているような澄んだ瞳で僕を見つめてきている。

「貴方は何も解っていない。恩師を殺した時、悩んでいるのは自分だけだと決めつけ、恩師の娘たちを見ようともせずに逃げ出した貴方が悩んでいるというだけで既に罪です。あの時貴方は逃げるべきではなかった。逃げずに向き合うべきだったのです。しかも貴方は逃げることに対して正当な理由付けまでした。結局貴方は自分を正当化し、責任を周りに押し付けているだけなのです」

「そして貴方は再び逃げた。つい先ほども彼女を追いかけるべきだったのにもかかわらず。人の一生には掛け替えのないものがありますが、友もその一つです。貴方は我が身可愛さに友を失った。恥を知りなさい」

閻魔様の言うことは何にも間違ってない。冷静な時ならそう判断できただろうけど、たび重なる出来事に僕の心情は不安定であって、突っ掛かっていってしまった。

「僕だって…僕だって何度も向き合おうと思ったよ！でも駄目だった！どう声を掛けたらいいのか解らない、母親を殺した僕が何を言えばよかったんだよ！？」

感情が抑えられずに目から涙を流しながら怒鳴り散らした。

「それを探すと言ったのは貴方自身のはず。死者に報いることが出来るとしたなら、それは己のしたことに恥じず、前を見据えて進むこと。…もっとも今の貴方には到底できそうにありませんが」

だったらどうしろって言うんだよ。閻魔様は言うだけでいいかもしれないけど、当事者の僕にしてみればもうどうしようもないことなんだよ。

親の仇を見るように閻魔様を睨みつける。こうなってしまっては恥も外聞も、正義も悪も関係ない。自分の弱い部分を突かれた人間は自棄になるか、全てを認めて諦めるかの二つに一つだ。それを指摘したのが並の人物であるのならば、ただ指摘するだけで終わっただろう。

だけど幸か不幸か、僕を指摘した人物は並の人物ではなかった。

「もし少しでもやり直したいと思っているのなら私と共に川を渡りなさい。貴方を再教育してあげます」

「！　映季さま、生きている者と親密になるのはあたいたちの法に触れるんじゃないんですか？」

「その分の罰とでも言いましょうか、ある人物と交換条件を既にとってあります。もちろん、彼にその気があればですが」

「…着いて行ったら、僕は変われますか？」

「貴方次第…と言いたいところですが、私が全力を持って面倒を見るつもりです」

僕を見るのではなく、僕の周囲を見渡す閻魔様。何故閻魔様が僕の周りを見ていたのかを、この時の僕には知る由もなかった。

「来ても地獄。来なくとも地獄。さあ、どうします？」

そう言って挑発的に僕を見降ろしてくる彼女に、僕は力強い目で見つめて応えてみせた。

人生の達人との出会い？（後書き）

土日にストックを作っておいたおかげでこうやって更新出来たじらいです。前書き通り、ナヨナヨした大和はお腹いっぱいだぜ！な皆様お待たせしました。おそらくこれが最後です。これからはしっかりと前を向いて歩いていきますので遠くから見守ってもらえると私としても嬉しいです。

今までシリアス（笑）が続いていたのでそろそろ甘い話が書きたくなってきたなぁと思った週末。微ハーレムのタグに負けないようにここは一発やりますか！と思ったので次回はライトで甘い話をほんの少し混ぜました。少しでも楽しんで貰えれば嬉しいですねｗ

ではまた次回

僕と閻魔様の奇妙な関係（前書き）

朝チュンって何だ？

僕と閻魔様の奇妙な関係

―前を向けない者に明日はない―

「映姫様ー起きて下さいよー。朝ですよー」

「……む～～、もう朝ですか……？」

「寝ぼけてないで起きて下さいよ。今日も仕事が詰まっているんですから」

眩しい朝日が差し込んでくる部屋の中、苦笑しながら寝室のカーテンを開ける。

僕が生きたまま三途の川を渡ってから早1年。こうやって映姫様の専属秘書となって毎日を過ごしている…とでも思った？　こき使われているだけです。本人にはその気がないので何とも言えないんだけどね。

何故僕が彼女の私室、しかも寝室にいるかって？　・・・っふ、坊やには教えられないな。…嘘ですごめんなさい。いや、寝室に入っている事実は変わらないんですけどね！　こうなったのも幾つかの理由があったんですよ。

閻魔と言うだけあってその仕事の量も多く、ストレスも溜まるもの

みたいなんです。だから小町（こまっちゃん）も誘って飲みに出かけたところ見事に大爆発。普段は酒を飲んでも飲まれることはない、なんてこまっちゃんも言ってたけど何故かその日は全てぶちまけたらしく、僕は普段の映姫様からは見られない彼女を見てしまったと。そして酔い潰れた彼女を家に運んで、翌朝の執務室で会った時、その日のことを聞かれた。隠すのも意味ないと思って全部話したら今まで何処か他人行儀だった映姫様の何故か柔らかくなりましたとさ終わり。そこからはフレンドリー？　な仲です。

ちなみに僕、今は映姫様の家の部屋借りてそこで済んでます。なんちゃって同棲とでも言うのかな？この人仕事はきっちりしているのに私生活が駄目なんですよ。だからこうやって私生活の面倒を見ながら、上司と部下でもなく、恋人とかでもない奇妙な関係が続いています。

もちろんただ普通の毎日を送っているだけではないよ？前を向いて歩くために、死者の人生が書かれている書類に目を通してその人が何を思っていい生きていたのかを知ったり、家に置いてある倫理や哲学の本を読んで勉強もしている。今の僕は後ろ向きではなく、前を向いて進んで行こうと思えているんだ。

そして今日も今日とて朝日が昇り、地獄に近い場所での奇妙な一日が始まるのです。

「むぅ……大和の淹れた御茶は美味しいのに、何故ご飯はこうも残念なのでしょうか」

茶の間での朝食。作ったのはもちろん僕です。毎日のように料理の

味つけについて文句を言われるけど、僕にとってはこれが普通なんです。

「文句言うなら作りませんよ？　僕だって早起きするの辛いんですから」

寝巻で寝ぐせのついたまま熱い御茶を啜る様子からは厳しい裁判長という印象はなく、見た目相応な女の子だと思える。これが仕事が始まると厳しい御方になるのだから不思議なものだ。

「大和とももう長くなりますけど、どうです？　私を言い負かすことが出来る程度の知識を身につけましたか？」

「言い合いで閻魔様を負かすというのも難儀ですよね…」

映季様を言い負かす。それが僕の今の目標だ。彼女を納得させることができるだけの言い分を持ち、且つそれを認められることによってここを卒業となる…のだけど、閻魔を口で負かすなんてこと出来るのか！？

「じゃあ先に執務室に行ってますんで。洗い物は水につけておいてくださいね」

「わかりました。ボソッ（行ってらっしゃい」

「行ってきまーす」

最後に何を言ったのかは聞こえないけど、僕は何時もこうやって挨拶をしてから家を出ている。さあ！　今日も勉強するぞ！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「この人物の経歴を見て、大和はどう思いましたか？」

「確かに罪はありますけど、この少年の動機を考えると情状酌量の余地はあると思います」

部屋に置かれているのは黒塗りにされた机とソファーのみ。無駄を嫌う彼女らしい質素で厳格な雰囲気が漂う執務室での意見の応酬。こうやって死者の経歴から学ぶべきこと多い。今見ている書類に書かれている者の罪状。それは窃盗だ。貧しい生活を送り、日々を生きることすら困難な子供が市場から食料を盗み、その罪から行われた懲罰によって死亡した少年の裁判。

「ではこの仇打ちをした人物については？」

「…どんな理由であったとしても、他人を殺すことは駄目だと思います。憎しみは必ず自身に返ってきますから」

父親を殺された青年は仇打ちを成したあと自害。自身の目的を果たすことは出来たのかもしれないけど結果として一人の命を奪った。この一年、僕がここで生活を始めて最初に自分に決めたことがある。それは殺さない覚悟。その人がどんなに悪いことをしていたとしても絶対に殺さない。生かして更生する機会を与える。裏を返せば『それはその気になれば殺せるということですね？』と言われた時には大目玉を喰らったけれど、これについては映姫様も納得してくれている。それを貫き通せれば、それもまた一つの道だと言って。

「ふむ。ではお得意の倫理学でも並べてみますか？」

「勘弁してくださいよ、法を倫理で破れるわけないでしょ。しかも法の番人を相手に」

サディスティックな笑みを浮かべる彼女に溜息が出そうになる。人の数だけ正義があるように、倫理とは人の数だけ答えがある。それとは違い、法の答えは有罪か無罪かの一つしかない。だけど僕は敢て倫理を学んでいる。これはもう意地でしかないんだけどね。なんとかしてこの頑固な人を僕の想いで打ち負かしてやりたい。

「要勉強ですね」

「返す言葉もありません」

笑顔で頷いている映季様を見ているとここに住むのも悪くないとか思えてきてしまう。それはなんて素晴らしいことなんだろう。でもそれは叶ってはいけないことだ。僕は答えを得てここを出て行き、レミリア達ともう一度向き合って想いを伝えなければならない。いくら居心地がいいとはいえ、出て行くことは確定しているのだから。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

お昼休み。昨日こまっちゃんから昼飯を奢ってやるとの男らしいお言葉を受けたので誘いに乗ったんだ。本来なら男である僕が女性であるこまっちゃんに奢ってあげるのがお約束なのだろうけど、残念ながら僕の現金収入は限りなく0に近い。今までもお金と縁がなかったけど、ここまで引きずると最早呪いか何かと考えてしまう。

「お前さん、遅いよ」

「ごめんごめん、本読んでたら遅れた」

先に注文しようと思っちまったよ、と愚痴りながらすぐさま店員さんを呼び注文をするこまっちゃん。これ以上待たせるのも駄目かと思ったので店員さんには同じやつをと言った。駄目な人の典型です。

「どうだい？　四季様を言い負かすことは出来そうなのかい？」

「こまっちゃんは出来ると思う…？」

「あたいにゃ無理だね」

アッハッハと豪快に笑っているけど、こうやって話を聞く機会を作ってくれたりと、何かと親切な人である。

「んで？　四季様の寝顔は可愛いかい？」

「ブッッ……ゲホッゲホッッ！？　何で知ってるんですか！？」

口に含んだ御茶を吹き出して慌てる僕をニヤニヤした顔でこまっちゃんが覗き見てくる。

「ここらじゃ今一番の話題さ。あのこわ～い閻魔様を骨抜きにした男の噂がね」

「随分とまぁ俗っぽい裁判所とその周りですね……」

「あたい達だって生きているんだ。暇な毎日にそういう話題は付きものなのさ」

フフン、そう鼻で笑っている貴方だけが暇だ暇だと言ってるんじゃないかと思う。そう言ってもこれ以上弄られたくないので黙秘権を

行使します。

「で、実際どこまでいったのさ？　一発かましたりした？　んん？」

「何にもないですよ！　いや本当に！　僕と映姫様にはこまっちゃん達が思っている様なことは何にもないです！」

ニヤニヤしながら男女一つ屋根の下で何もないことはないだろ、と言われるも実際に何もないのだから仕方ない。確かに寝顔とか、風呂上がりの姿とか見てるとドキドキすることはあってもそれはただ僕が男なだけであって恋愛感情とかではないんだから。

「面白くないねぇ。何かある方に賭けていたのにこのままじゃあ負けだよ」

「人を賭けごとに使わないで！？」

四季様には内緒にしておいてくれよ、と言われても意味ないと思うけど。だってあの人、自分のことは一番最後に考えてるから、そういうのに疎いんだよね。

「……まあそれよりも期日だ。間に合いそうなのかい？」

「…正直どうなるか解らない。自分の中にははっきりと答えが見えているんだけど、それが映姫様に通じるかと言われるとどうも自信

がないんだよなぁ」

三途の川を生きた人間が長年渡ったままでいるのは本人にも、対外的にも良いとは言えない。それ故にここにいられる期日が始めに定められた。その期日まであと一月。その時までに映姫様を納得させられなければ僕の死後地獄行きが確定される。

「お待たせしました。天麩羅定食と地酒になります」

……一緒のものとは言ったけど、まさかお昼から酒を飲むことになるとは。これは後で怒られるだろうなぁ、と思いつつも飲むんだけどね。出されたものは全部食べないと作った人に迷惑でしょ？　うん、そうだ。

一人完結して山菜の天麩羅を齧る…普通に美味しいね。何時もこういったお店の味を目指して料理を作っているのだけど、どうも不評なんだよなぁ。もしかしてお店の味付け自体が悪いのかもしれないね。

「あたいが言うのもなんだけど、四季様はあんたを気にいってるんだ。だから四季様を泣かせる結果になったらあたいが許さないよ。イの一番にあんたの魂を運んでやるから覚悟しな」

「嬉し怖いこと言ってくれるなぁ。でも、僕ももう後ろを向いたりはしないよ。だから意地でも納得させてみせるさ」

その後は食事と飲酒の楽しい時間が続いた。執務室に酒が入った状態で帰った時は棒で思いっきり打たれた。飲んだ勢いでサボってたこまっちゃんも後で打たれたらしい。

僕と闇魔様の奇妙な関係（後書き）

やあ、ちょっと溜まったものを吐き出させてもらったじらいだよ。普通なら番外編か何かで甘い話をしていたんだけど、我慢ならなくなってやりました。異議申し立てがあるなら相手をしよう、どんと来い。

だけどこれが本編であることを考えてみてほしいです。本編で朝チュンだよ？番外編ならどうなるの！？R指定ブッチギリとかマジ勘弁です。

ちなみに私は理系なので倫理とか哲学とか知ったかぶってますので間違えてたら言ってもらえると嬉しいです。

自分で思っている以上に他人に支えられている（前書き）

まるで最終話のようだ…

自分で思っている以上に他人に支えられている

期日が間近に迫って来るにつれて、僕と映姫様の会話も少なくなってきた。普段の何気ない会話もなくなり、僕は読書、映姫様は仕事に集中している。家でも必要以上の会話が消えた。会話をするのなら少しでも知識を、そう思って最後の詰め込みに時間を費やしているからだ。映姫様もそんな僕を分ってくれているのだろう、何も言わずにそっとしてくれている。

「あ～～駄目だ。もう期限間近だってのに納得させるだけの言い分が持てない～～」

宛がわれている自室で本を投げ出して横になる。ダメダメだ、これじゃあ到底納得させられない。

「考えるんだ大和。諦めたらまた惨めになるんだぞ」

投げ出しそうになる自分に喝を入れる。もうあんな惨めな思いをするのは沢山だ。待たせている人にも、待ってくれている人のためにも結果を出さなければならない。

「…そう言えば、僕はいろんな人に話を聞いてきたんだっけ」

レミリア達を前にしたショックで忘れてたけど、僕は三人に話を聞いた。妖怪の山に住む文・絶対的強者の幽香さん・半獣でありながら人里を守ろうとする慧音さん。

「みんなブレない心を持った強い人ばかり」

うん！　と横になったまま伸びを行い、浮かんできた人達の主張を思いだす。少しでもあの人たちと同じ位置まで、高みまで昇るために僕は投げ出した本を再び手にとって読書を始めた。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「では伊吹大和に問います。貴方の覚悟とは何ですか？」

そして最終日当日。執務室で向かい合う僕たちであったが、凛とした映姫様と打って変わって、僕は眠気を抑えるので手一杯だった。緊張したのだろうか、昨日の夜は中々寝つけず、朝食も思ったほど咽喉を通らなかった。ここまで緊張したのは初めてだ。

「…昨晩寝れなかったのは知ってますが、欠伸をすれば叩きますよ」

「絶対しません！　…あれ？　映姫様は何で僕が寝付けなかったことを知ってるんですか？」

おっかしいなぁ。昨日は僕よりも早く寝ていたはずだから知ってるわけないのに。

「～～～～ッそんなことはどうでもいいのです！　どうなのですか！？　貴方の言い分を言ってみなさい！」

あはは、心配してくれてたんですね。目の前で赤くなっている優しい閻魔様は、僕に気がつかれないようにいろいろと気を使ってくれたみたいだ。…今までは支えられてきたばかりだったけど、今日から僕は支える側に変わるんだ。

「己の心の赴くままに、自分が正しいと思ったことをやります！！」

「……は？」

おお！？　これには流石の映姫様も目を丸くしている。今まで必死に難しい本を読んだり、死者の経歴や罪状について意見を交換していたのに、『やりたいことやるぜ！』　なんて言われたら呆気にとられるのも分かるよ？

でもこれには理由がある。僕が話を聞いた3人は何故ブレないのか？　それは3人が自分のやりたいことを、やりたいようにしている

からだと思った。好きこそ物の上手なれ…とは違うけど、僕のやりたいことを1から考え直してみた。

「『実在は本質に先立つ』　僕が僕たらしめる理由なんて、それでいいと思うんですよ」

「……その答えで、本当に通用すると思っているのですか」

「伊達や酔狂だけでこの場所に立ってませんよ。超本気です」

「開き直ってどうするんですか…」

頭を押さえている映姫様だけど、これが僕なりの答えだ。初心に戻った時、僕が頭に最初に出てきたもの。それは都で誓ったはずの母さんへの決意の言葉。何もしないよりは、何かをする。それも己の正しいと思ったことをただひたすらに。それは例え法を破ることになろうとも、己の意志を貫き通すということだ。つまり僕がしていることは、法の番人たる彼女に対しての宣戦布告に他ならない。

「どんな人でも殺さないし、殺させない。悪いことをする人がいたら、叩いてでもごめんなさいをさせる。先生の目指した世界を壊そうとする人は、僕の全てをかけて止めてみせる。それが親しい人間・妖怪であれ、決してブレることのない心の強さを持ってね」

別に先生が目指した世界だから守ろうとするわけじゃない。確かにそれも理由の一つではあるけど、この幻想郷を守りたいと思った理

由は他にある。母さんがいて、文がいる。まだ会ってないけど、にとりや鬼の皆も。もちろんこの前初めて会った慧音さんや、目の前にいる優しい闇魔様が暮らす素晴らしい世界を守っていきたい。

…口にはっきりと出さないのはこんなこと真面目に話したら青臭いって言われそうだからです。いや、恥ずかしいなぁとか思ったり？

まあこれは僕の心の決意ということでお願いします。

「力で捻じ伏せると、力による脅威で縛るというのですか？」

「話し合いで通じるならそれが一番いいことに変わりないです。でも僕には力があります。どうしようもない理不尽に巻き込まれた人達を救うために、その力を使うことに何の躊躇いもありません」

そのまま僕の誓いは続く。

「嘘も吐くし、逃げも隠れもします。でも人と交わした約束と、この志だけは絶対に破りません！　あ、この逃げるってのは心じゃないですよ？」

お互い、眼と眼で見つめ合って視線を逸らさない。僕は己の答えが心からのモノだということを、映姫様は僕の覚悟を見極めるために、僕らはどちらからも視線を外さないでいた。

「…貴方の目の前で、１人の行いによって１００人もの人が命が失

われようとしています。その時貴方は…大和はどうしますか？」

おそらくこれが最後の質問なのだろう。そう尋ねた後、映姫様は目を瞑って僕の答えを待っている。僕はそれにはっきりとした口調で答えた。僕が生涯を懸けて目指したいものを――――――

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「こ～～ま～～っちゃ～～～～ん！」

「んん？　お前さん、その様子じゃどうやら上手いこといったようだね」

「ギリギリ合格といったところですがね」

「そんなこと言って四季様も嬉しいんじゃないんですブフゥッ！？」

「こっ、こまっちゃんしっかり！？」

目出度い門出だというのにいきなりの一人沈黙。照れ屋さんな閻魔様の照れ隠しは思った以上に強烈のようで、こまっちゃんは相当痛そうに頭を擦っている。

「イタタ…四季様酷いですよ」

「無駄口を叩く暇があれば仕事をしなさい」

「そう言う四季様は見送りに来たんですブホッ！？」

ひ、酷い…。２発目だ。２発目ですよ閻魔様。遂に頭から煙が出る程に頭が熱を持ったようです。こまっちゃんも一回で止めてたらよかったのにね。涙目になるまでやることでもないでしょうに。

「大和も早く行きなさい！　…待っている人がいるのでしょう？」

「いやぁもう少しこの空気を味わいたいなぁなんて……うそうそ！もう行きますからそれ振りかぶらないで下さいよ！！」

般若とでも言えばいいのだろうか、とにかく怖かった。そんな顔してたら可愛い顔が台無しですよ？　なんて言えば、また面白いことになるんだろうけど僕にそんな勇気はなかったよ！

「じゃあホントに行きますね。今度はお酒でも持って来るので３人で飲みましょう！」

「お！　じゃあ期待して待ってるよ！」

「…まぁ、それなら歓迎しますけど。…それまでには料理の腕も上げておくように」

だからアレはもうアレでいいんです！　いちいち文句言わないでくださいよ！

手を振るこまっちゃんと、優しい笑みを浮かべる映姫様に手を振り返して僕は飛び去った。目的地は一つ、友の待つ紅魔館だ！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「行っちゃいましたねぇ」

「そうですね」

「あれ？　何でそんなに淡泊なんですか？」

「？　そこまで悲しむこともないでしょう。今生の別れでもあるまいし」

「確かにそうですけど、四季様は悲しくないのですか？」

「家事をする者がいなくなるのは悲しいですね」

相変わらず可愛げのない御方だねぇ。素直に寂しいとでも言えばあいつも気にするだろうに。…どちらにしろ、あたい達が生きている

人間に必要以上に関わることは禁じられている。だからどうしようもないと言えばどうしようもないんだけど…。

「ところで決め手は何だったんですか？」

「１人の犠牲で１００人助かるとしたらどうするという質問です。小町、貴方ならどう答えますか？」

そりゃまた難儀な質問だ。捉え方を間違えれば１人の命を軽く見る結果に成りかねない。四季様も本気で心配してるってのがよく解ったよ。

「あたいならそうですね、１人を犠牲にします」

「そこが貴方と彼の違いですね」

嬉しそうに微笑んじゃってまぁ、恋する乙女って歳でもないでしょうに。

「彼はこう言ったんです。『１０１人助けます。その後で宴会でも開いて皆仲良くなれれば尚良いですね』　とね」

「……そりゃまた、えらく豪儀なこと言いましたね」

見た目は頼りなさそうに見えるのに、どうも心の方は強くなったもんだ。完敗だよ完敗。多くの死人と話してきたあたいもその答えは浮かばなかったよ。

四季様も気に入ってるし、この際大和が死んだら死神に転職させるとかどうだい？　中々いい案だと思うんだけどね。大和がいればあたいの仕事も楽になるかもしれないし。

「どうなるにしても敵は多そうだ。そう思うだろ？　伊吹鬼」

大和がいなくなってもしばらく漂っていた霧に向かってそう言うと、当然だと言わんばかりに揺ら揺らとした後消えていった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

目の前に佇むのは目に悪いほど紅い紅魔館。まるで館そのものが死んでいるかのように静かで不気味な雰囲気が漂っている。こうなった理由の全てが僕のせいだと思うと心が痛い。だけどもそれも今日で終わりにさせる。僕の手で、僕のしでかした過ちを帳消しにするんだ。

「だから美鈴。そこを通してもらうよ」

「現在、紅魔館はいかなる人物も受け入れておりません」

うわ、美鈴ってば冷たいなぁ。何でそんな白い目で僕を見るかなぁ。確かに僕は酷いことしたよ？　だからこそ今ここにいるんだ。だから美鈴がそんなこと言っても通るんだけどね。

「しかし…例外もあります。例えば私が居眠りをして通行を阻止できない場合とか」

「……それってただの職務怠慢だよね？」

・・・！　美鈴に電流走る。いや、電流とか走らないでもいいでしょうに。その通りなんだから。

「…せっかくキメてたのに、何で水を差すんですかぁ？」

「あはは！　何時もの美鈴だ！」

そう言ってへなへなと肩を落とす美鈴を見て思う。うんうん、やっぱり美鈴はこうじゃないと。

「でもよかったです。今の大和さん、出会ったころよりも輝いてますよ？」

「あは、ありがとう。じゃあ行ってくるね」

「お嬢様方のことを頼みます」

一礼する美鈴を後ろに、僕は再び駆けた。まず目指す場所は紅魔館次期党首の部屋。何年もここで生活していたためか、ちょっと離れたぐらいでは迷うことなどなかった。そして僕はレミリアの部屋の前に立ち、

「レミリアーーーーーー！！」

ノックもせずに扉を蹴破った。

「レミリア！　僕は……ってあれ？」

何が悪かったのか。答えは簡単、ノックして扉を開けていいのかを聞かなかったことに決まっている。何故だかは知らないけどレミリアは、

「きッ～～～～～～キャアアアアアアアアアアアアア！！？？」

「うぇぇえええええええええええ！！？？」

着替え中だったのです。だってしょうがないじゃん！　勢い余って失敗するなんてこと誰にでもあるでしょ！？　今回はそれが僕の番だっただけだよ！

「お、落ち着いてレミリア！　落ち着いて冷静になって！！」

「なっ、なれるわけないでしょ！？　この状況でどう冷静になれるのよッ！？　大和の力を感じたから…大和が来たのが解ったから着替えてたのにぃ…」

～～～ッああ～もうまどろっこしい！　こんなことをしに来たわけじゃないんだからしっかりしろ僕！

訳の分からない勢いのまま、着替え途中のレミリアを腕の中に抱き寄せた。

「ちょっ！？　そんな、まだ心の準備が「悪かった」……ボソッ（ですよね～」

「レミリア、僕はもう逃げないよ。先生の分も僕が頑張っていくんだ。だから…僕を許してくれる？」

もっと他に言うべきことがあるんだろうけど、これが精一杯の気持ち。そしてレミリアならこれで解ってくれると信じている。けれどこの吸血鬼、中々頑固な一面もあるようで、

「ヤダ」

なんて僕の胸に顔を埋めたまま言うんです。密着してそんなこと言うので凄くこそばかったからか、僕の顔は笑みが出てきた。だったらどうすればいい？　と意趣返しの意味も込めて耳元そう囁いたら、僕の顔を下から見上げて身体を震わせながら、

「もっと強く抱きしめなさい。そうすれば許してあげる」

と悪魔的な笑みを浮かべてこう言った。だから僕はレミリアの華奢な身体を思いっきり抱きしめた。

「もっと強く」

「うん」

「もっと強く！」

「うん！！」

これは後の話になるんだけど、レミリアはこの時既に気絶していたらしい。どうにも僕の力が強すぎて息が出来なかったとかいってたけど、そんな訳ないのは力を込めていた僕がよく知っている。…だ

ったらなんで気絶したかって？　さあ？　本人に聞いても教えてくれなかったよ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

とりあえず気絶した半裸レミリアにしっかりと服を着させて、僕はフランドールがいるであろう地下室に向かった。…今さらっと凄いことを言った気がする。半裸とか。

「確かフランって能力暴走してるかもしれないんだよね……死ぬかも」

だけどこれも僕が引き起こした事実。逃げずに立ち向かっていこう！　そう思っていたけど、実際に地下室に入ったら裸足で逃げ出したくなった。だってこっちからじゃ背中しか見えないフランの周りを囲うように展開されている魔法陣が壊れたり修復したりの繰り返しをしているんだよ！？　これってもう完全に能力が暴走しているよね…？

「アハッ！　ヤマトだ。また来たの？」

「う、うん。また来たよ？」

逃げちゃだめだ逃げちゃだめだ…。振り返った顔が野生の本能に溢れていたとしても決して後ろを向いては駄目なんだ。

「ねえヤマト遊ぼう？」

……ああ、やはり逃げては駄目だ。見つめてくる虚ろの目には、おそらく僕は映っていないのだろう。『また』ということは、僕の幻影だと思っているのかもしれない。…こう言っちゃなんだけど、そこまで想ってくれていると思ったら場違いながら笑みも出てしまう。

「フランはさ、言ったよね。私とお姉様の執事なら出来ることをしなさい！　って。だから僕は自分の出来ること、やりたいことを見つけたんだ」

「うん？」

近づいて僕の血を吸おうとするフランを制止しながらそう言った。少しだけど彼女の虚ろな目から理性の色が見えだしてきた。

「そのためにもう一度紅魔館を離れることになるけど、許してくれるかな？」

「…ヤマトはそうやって何時も1人で走りたがるよね。もう慣れたとはいえ、どうにかならないの？」

「フランも大人びたマネせずに、年相応に甘えてみればいいのに」

「いいもん。これから甘えさせてもらうから！」

そう言ってフランは自分から僕の腕の中に入って来た。まるで猫のようにじゃれついてくる彼女からは先程のような狂気はすっかり消えていた。はぁ、死ななくてよかったぁ…。

「レミリアに甘えなよ。僕だって何時までも此処にはいないんだからさ」

「ヤダ」

姉妹揃って我儘なことでよろしい。今日だけは甘やかして――――――あげるのは駄目だ。あと3人ほど残っている。その内の1人は地下室の扉の前に立っているようだけどね。

「さて、後が詰まっているから僕も行くよ」

「ん。また来るんでしょ？」

「当然！　だってここ、第二の家みたいな所だし」

その答えに満足したのか、フランはいい声で僕を後押ししてくれた。

そして扉の先で待っていたのは魔法仲間。たぶん僕が一生を懸けて魔法を学んだとしても足元にも及ばないであろう魔法使いのパチュリー。おそらくフランの暴走を止めていたのもパチュリーなのだろう。本当に苦労ばかりさせている。

「遅かったわね」

「ごめん」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・それだけ？」

「？　他に言うことあるかしら？」

冷たい…のではなく、これがパチュリーにとっての普通なのだろうね。久しぶりに会ったからか会話が続かない。元々そんなに喋る人じゃないけど、ここまで素っ気ないのは初めてです。けっこう心にクルネ。

「あ、そうだ」

そのまま階段を上って図書館に帰る途中で、パチュリーは肩越しに僕を見てこう言った。

「お帰り大和」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「最後はココか…」

紅魔館の執務室前。この扉の向こうにはおそらくアルフォードと執事長がいるのだろう、中から二つの力を感じる。結果的にあいつから先生を奪った僕が何が出来るか。とりあえず目の前の扉を開けてから考えよう。

「うぉわ！？」

扉を開けた瞬間に目の前に拳が迫って来た。とりあえず避け、それを放ったのがアルフォードだと気づくのに０．０３秒。さらにそこから反撃にでるのに０．０５秒。お互い挨拶もせず、ただの純粋な殴り合いが始まった。

「よくもノコノコと顔を出せたな小僧！」

「あんたこそ、よくも幻想郷までやって来やがったな親馬鹿！」

防御？　こいつと向かい合う時に後ろを向くだけでもうそれは負けなんだよ。お互いに顔面・鳩尾その他もろもろ目掛けて拳を繰り出す。滅茶苦茶痛いけど、何時もの辛い痛みじゃない。どこか嬉しい、懐かしい痛みだ。

「娘のためを思っての行いだ！　小僧のためではない！！」

「お前が僕のためとか吐き気がするから！」

お互いに狂ったように笑いながら、遂には足まで出すようになった喧嘩。お互い口や頭から大量の血を吹き出しながらも殴り合うのを止めない。

「だいたい！　貴様が逃げたせいだ！　貴様さえいなければ俺は！！」

「僕がいなかったら、お前はただの引き籠りだーーーーーーーー！！」

お互いの最後の一撃。魔力も気も、妖力も込められていないパンチでダブルノックアウト。お互いの拳が当たった反動で背中から床に倒れ込み、血を垂れ流しながら肩で息をする。

「み、認めんからな…。俺は絶対に認めんからな…！」

「い、いつか絶対…絶対お前を見下してやる…！」

「負けず嫌いなのはよろしいのですが、お二人には掃除を手伝ってもらいます」

今まで見ているだけだった執事長が肩を落としながらそう言った。

「「こいつにやらせてよ（やらせろ）」」

最後までとことん相性の悪い僕らでしたとさ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

こうして僕は自分の進む道を見つけた。それが誰かが作った道だとしても、僕は自分で選んで自分で決めた。だからこの先に何が待ち受けていたとしても前を見据えてやっていけると思う。何故なら、僕には掛け替えのない仲間がいるからね――――――――――――

「家、建てよっと」

自分で思っている以上に他人に支えられている（後書き）

『東方伊吹伝』Ｆｉｎ――――とか書いてて本気で二回くらい思いました、じらいです。
もうゴールでいいじゃないかって?残念ながらまだ続くんですよ。
もうしばらく大和に付き合って下さい。

ところで、闇魔様と交換条件を受けたのはもちろん大和の義母です。
大和を生きたまま三途の川を渡らせるために、大和が渡った後に善行を毎日行っていた…という裏があったことをここで書いておきます。今回の副題はその意味が大きいです。

これでちょっとは話も落ち着くかな?あと、次の更新は土曜か日曜になります。更新出来なかったら今週はもう無しということで。それでは

そうだ、自立しよう（前書き）

リハビリ作ですよ?何時もより更に文が変です

そうだ、自立しよう

こんにちは、お久しぶり、初めまして、伊吹大和です。

現在、紅魔館のテラスでお茶しながらこれからについて話をしています。僕が幻想郷に来た時が春だったでしょ？そんでそこから一年と少したって、今の季節は夏です。元気のいいお日さまの日差しが気持ちいい季節なので、紅魔館の住人も薄手に半袖で生活している。もっともここに住む半分以上は太陽が大の苦手なので、気持ちのいい夏が大嫌いのようだけども。

「と、言うわけで紅魔館出るから」

「何を言ってるのか理解出来ないんだけど」

夏は人を開放的にさせる…なんて言うけどこのお嬢様にはむしろ閉鎖的な季節みたい。聡いのだから僕の言ってることが解る、と言うか運命が視えるのだから僕が何を言おうとしているのか解っているだろうに。

「何時までもここにいたら僕も甘えちゃうし、レミリアもそろそろ頭首になる勉強を本格的にしないと駄目だろ？　とりあえず此処を出て自立しないと僕のしたいこと出来ないんだって。だから出て行く」

「却下で」

「別にいいじゃない」

「パチェ！？」

別にいいよー、とフランが寝転びながら賛成してくれている。こちらも薄着…というよりもはや半裸に近い。はしたないから服を着ろといっても、見るのはヤマトだけだからいい、と言ってきかない。そんな問題じゃないんですけど。あと美鈴は…最近は門番に勤しんでいるので此処にはいないけど、賛成してくれると思う。だとすると、賛成3人反対1人よって可決。

「そもそも住む家もないのにどうするのよ」

「幻想郷には魔法の森って場所があってね、その近くに出も作ろうと思う。もちろん自分で」

「素人が1人で作れるわけないじゃない」

「…いっつも僕の周りに漂っている人に手伝って貰うよ。積もる話もしたいしね」

最近感じる程僕の周りを漂っている霧。今も疎くしているのだろうけど、一度気がついてしまえば気になって仕方がない上に、何かと存在をアピールしてくるので僕も鬱陶しく感じている。…何で真正面から合いに来てくれないかなぁ。

「だいたいお姉様はヤマトに依存しすぎよ。自分だけじゃなくて、相手の事も考えないと振り向いてもらえないよ？」

「う…それはそうだけど…。って、服も着てないフランにそんなこと言われたくないわよ」

妖怪が人里を襲った時に紫さんと共に現れたのを見ただけだけど、あの時だって本当に驚いたのに。まさか母親に後ろから脅されるなんて思わないでしょ普通。

「何で服着てないか解らない？　お姉様がそんなんだったらフランが貰うけどいいよね」

「ダメに決まってるでしょ！？」

聞いた話によると、幻想郷を作ったのは紫さんらしい。だからあの場所に現れたのは頷ける。だけど何故あれほど簡単に引き上げた？

あの時の紫さんは確かに本気で怒っていたはず。なのに後から紅魔館をどうしようともしなかったらしい。もっとも、主二人の緩やかな話合いがあったと執事長からは聞いたけど、そこで何を話したかは知らない。けどそこには確かに何かがあったはず。パチュリーからも紫さんには注意するように言われた。

「でもあの人昔からああだしなぁ…」

「ちょっと貴方達、自分の世界に入らないでちょうだい。今は大和の自立の話なんでしょ？」

あたふたしているレミリア、ニヤついているフラン、考え込んでいる僕にまとめ役のパチュリー。あの時から止まっていた紅魔館の時計は今確かに動いている…はずなんだけど、だらけすぎでしょこれは。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

青い空、白い雲、鬱になるほどの気持ち悪い瘴気。摩訶不思議な魔法の森の前に僕は立っている。魔法使いなら魔法使いらしく魔法の森に住むぞと思い、森の入口に家を建てようと考えてます。

「魔法の森って、少し湿っぽいなぁ。家建てても大丈夫かな？」

結局あのまま紅魔館を出ることになった。約1名駄々を捏ねたけど、姉よりもしっかりした妹に丸めこまれたらしく、最後には顔を歪めて『出てけ！』と言われてしまった。もっとも僕らはそれを見て大爆笑していたんだけども。だってその後で『家が建ったら直ぐに招待しなさい』とかプリプリして言われたら笑いもするでしょ。

「…で、母さんは何時までそうやっているつもり？　出来れば手伝って貰いたいんだけど」

ジト目で目の前に漂っている霧に話掛ける。すると霧はユラユラと揺れながらその濃さを増していき、小さな形を創りだした。小さな身体に秘められた膨大な妖力・不釣り合いなほどに伸びた二つの角。ほんのり紅い顔は何時も通りお酒が入っているのだろう。

「久しぶりだね我が息子。元気にしてたかい？」

名前を伊吹萃香という。月から飛ばされてきた僕を拾った義理の母親だ。

「久しぶりも何も、ずっと僕の周りにいたんでしょうに。オマケに人里近くで一回会ってます」

「うぐっ…ま、まあ細かいことはいいじゃないか。折角会ったんだ、母さんに甘えていいんだよ？」

「却下で」

そう言うと母さんは驚きのまま目を見開き、口を開けたまま固まってしまった。僕ももういい歳だし、何時までも母さんに甘えてたら駄目だ。それにはたから見たら青年が鬼（幼）に甘えるって相当ヤバイ光景になるしね。…すいませんただ甘えることが恥ずかしいだ

けです。

「で？　そんな母さんは家建てるの手伝ってくれるの？」

「大和が意地悪だ大和が不良になった大和がわたしにそっけない…」

「…とりあえず森の木を切り倒してこよう」

そっけないと思うなかれ、子は親から離れていくものなのです。母さん、僕だって辛いんですよ？　な～んて馬鹿なこと思いながら魔法の森の木の具合を見る。どの木が良いのかなんて僕にはさっぱり分からないので手当たりしだいに切り倒していきますか。

「むん！」

元通りに使えるようになった魔力を身体に纏う。う～ん、やっぱりこの感触は何時になっても気持ちがいいものだ。なんかこう、満たされた感じになるね。

そのまま手刀一閃。音もなく振われた手刀は木を見事に切り倒した。短剣なしでも木が切れるって僕すごい。

「こうしてみると自分がどれだけ強くなったか感じることが出来るね」

「ですよねぇ。ピーピー泣いてた頃の大和さんが懐かしいです」

「うおわぁっ！？」

「どうかしましたか？」

どうかしましたか？　と当然のように隣でペンを回している古い友人の名前を射命丸文という。キョトンとしているけど油断ならないのは当時よりも磨きがかかっていると思う。

「ってこら、写真撮らないでよ」

「別にいいじゃないですか。幻想郷に新たな魔法使いが来たことはもう誰もが知りうることですし、大々的にしないほうが後味悪いですよ？」

「…僕ってもしかして有名人？」

「自覚ないんですか？」

はっはっは何をおっしゃる天狗さん。母さんの影に隠れてもう影すら見えていないはずの僕が有名人だなんて…

「すごい噂ばかりですよ？　失われた鬼の末裔・紅魔館の執事・稀代の魔法使い・生きたまま三途の川を渡った・無自覚・女泣かし…

八雲紫の懐刀なんてのもありますけど」

「当たらずも遠からずだけど二つ訂正。懐刀と、特に女泣かしはないよ」

「稀代の魔法使いも大嘘ですけどね」

「文ちゃん酷い」

真実を伝えるのが記者ですから、と手帳にペンを走らせていく文を見て本当に記者とやらをしているのだと思った。うんうん、何かに頑張れることはいいことだね。

「ところで大和さんは何ここで何してるんですか？」

「家を建てようと思ってるんだ。母さんにも手伝って貰おうとか思ったんだけどあの調子だし…」

「ああ～発作みたいなものですね。以前にも何回かありましたよ」

普段からああなってたら邪魔に思わないの？　とかは思っても口にはださない。たぶん原因は僕っぽいからね。それよりも家だよ家。出来れば今日・明日中には完成させたい。母さんなら建て方にも詳しいと思ってたんだけどまさかの戦力外だし…

「そうだ、いいところにいい人いるじゃないか」

「あ、すいません私急用が「待てい」…もう、大和さんったら強引でだ・い・た・ん？」

うぜぇと思いながらも空に逃げようとする文の手を掴んで地面に引き摺り下ろす。ふっふっふ、こうなった以上逃がすわけにはいかない…！

「手伝ってもらうよ？」

「あやや～～～～～～～～～～～！！？？」

その後は森の木を切り倒し、家の基礎を文が考えている時に母さんが復活したのでそっちは任せることにした。僕は考えるよりも動くことが好きな脳筋なので、指示に従って木を切ったり骨組みを作ったり？　した。作業は夜通し続き、朝日が顔を見せるころに漸く僕の新居が完成した。

そうだ、自立しよう（後書き）

ＧＷまでになんとか一話出来ました、じらいです。酷い話がさらに酷い出来ですけどｗ　最近はここから紅魔郷までどうしようかな～と考えることに時間を費やしてます。そのおかげ？　でだいたいの方針が決まりました。ここからは空白期ってことになるのかな？博麗のオリジナル巫女の出演が決まったようです（仮）。

幻想郷での日々（前書き）

だいたいこんな感じです

～祝　我が家～

「わっはっはっはっは！　目出度い、今日はなんて目出度い日なんだ！　こうやって大和と一緒にお酒を飲める日が来るなんて！　くぅ～～～今日は酒が美味い！　天狗、お前も飲め飲め！！」

「い、頂かせてもらいます！」

「わっはっは！　どうだ大和！？　わたしと飲むお酒は美味いだろう！？」

「美味しいよぉ…こうやって帰ってこれて嬉しいよぉ…」

何だこの空間は？　紫様に言われてスキマを抜けてみれば萃香様・天狗・大和殿がお酒を飲んでいた。それはいい。だが目の前の光景は常軌を逸している。何度も天狗に酒を勧めている萃香様、逆らえずに死を覚悟して酒を飲む天狗、酒に酔って明後日の方向を向いて泣いている大和殿。もう一度言おう、何だこれは？

「しかし大和殿は泣き上戸なのか」

「ま、この子もいろいろ我慢してるのよ。それよりも藍、私たちも相伴に預かるわよ？」

「賛成です。私も大和殿同様、溜まっておりますので」

「…それって喧嘩売ってるの？」

「さあ？　ただ、性根の腐った主を持った身になれば分かるかと」

「…いいわ。今日はとことん付き合ってあげる。酒を持ちなさい！！」

「上等です。吠え面かかせてあげますよ！！」

僕の目が覚めた時には新築なのにゴミが散乱した床と、誰かの吐瀉物が広がっていました。

「片付けてから帰ってよーーーー！！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

～1人暮らし準備中～

とりあえず食料がなければどうにもならない。魔法使いは食べなくても生きていけるとはいえ、元々が人間なのでご飯時には何かを口

に入れないと気が済まないんだ。とは言っても僕は無一文。食材が買えない上に食器や調理器具すら買えないのが現状だ。

「と言うわけで、困ってるのはそれくらいです」

「…それは『それくらい』と片付けられる問題ではないと思うのだが」

人里へ行く→慧音さんに捕まる→事情聴取→助けてやろう！　なんて素晴らしい人なのでしょう。食うだけ食って、飲むだけ飲んで帰った人たちとは大違いだよ！　あの４人、いつか必ず思い知らせてやんよ！

「食器は土の魔法を使えばどうにかなるかと思うんですけど」

「火を使っても大丈夫なのか？」

「…粉々になりました」

家財や食器がないなら作ればいいんだよ！　そう夢を見ていた時もありました。一応生活に困らない程度には属性魔法が使えるので、土釜とかは母さんと一緒に作れた。でもお皿とか小さいものは難しく、フライパンになると火に翳すと砕けた。なので貰いに…もとい買いに来たのだ。

「…なんだ、私の使ったお古でよければ譲るが」

「お願いします！！」

それは閃光のような即答であった。慧音さんの譲るの一言で僕の生活は救われたのである。持つべきものは美人で優しい友人だと思う。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

～摩訶不思議な魔法の森～

魔法の森には不思議がいっぱいだ。生えているキノコを食べると大きくなったり、掌から火の球が出るようになったりする。人面樹もあれば肉食の花も咲いている。魔法の森の名にふさわしい馬鹿げたモノが多いけど、数多くの修羅場を潜りぬけた僕にはどうってことはない。

「このキノコは食べれるのかな？　向こうの人面樹の木からは良い魔法杖が出来そうだし、この森って宝の宝庫だ。瘴気のおかげで並の人間も妖怪も近づかないから独占出来るぞ。…これで商売してお金稼ごうかな？」

ここでの生活が我が馬鹿弟子1号の為になるとはこの時思ってもみなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

～懐かしい影～

一年中タケノコが採れると噂される竹林があるらしい。もし本当ならばなんと素晴らしいことなのだろう、我が家の食料事情はこれで解決されたも同然だ。なんでも一年中採れる場所は竹林の中でも奥深い場所にあるらしい。迷いの竹林とも呼ばれているらしく、あまり深くには入らないほうがいいと里の人に聞かされた。

「飛べば関係ないのでは？」

生憎こちとら普通の人間ではございません。更に言えば幻術は十八番なので解析とかも得意中の得意だ。僕に幻術は効かないぜ！

「……ｏｈ迷った」

なんということでしょう、迷うはずないと思っていた竹林でまさか

の迷子。４００年以上生きているのに迷子である。知人に知られたら恥ずかしさで死にそうだ。１人頭を抱えていると竹林の奥から音と、何やら言い争うような声が聞こえてきた。

「――――――――――――――ッ！！」

「～～～～～～～～～～ッ！！」

うん、間違いない。誰かが争っている。気で強化した聴力を頼りに現場へ向かってゆっくりと飛んでいく。ゆっくりと確実に、心を静め、周囲の気と自分の気を同調させる。抜き足、差し足、忍び足。僕の気持ちに呼応し、背中に背負った大量のタケノコでさえ音を出すことを躊躇っているようだ。

「輝夜ーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「妹紅ーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・帰ろう」

一目見た瞬間に撤退開始。まさか懐かしい顔を二つ同時に見ることになるとは思ってなかった。血沸き肉躍る闘いを繰り広げ、血で血を洗う殺し合いをしている二人を背中に音も立てずに飛ぶ。巻き込まれたくないとです。

しかし幻想郷に輝夜が潜伏しているとは。…ちょっとマテ。ここに

輝夜がいるということは師匠も…？甦るのはあの地獄の日々。そして最近の僕は自分でも分かるくらいにまで鈍ってる。そう考えると背筋に震えが起きた。あの師匠のことだ、結界の一つや二つ、予備も含めて罠も張っているはず。となると、僕は罠にノコノコ入って行った兎さん？

「じーーーーーーーーーー」

「……どわーーーーーーーーーーー！？」

1人思考を走らせていると、真横で一匹の兎が僕を見ていた。思わず声を上げてしまった僕は何も考えずに全力で飛んだ。恥も外聞も関係なく全力で竹林より上の空を人里目掛けて飛んで行った。

その後人里では季節外れのタケノコが予想以上の高値で売れて僕の懐は潤ったけど、新たな心配が出来てしまった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

～お久しぶりです～

それは懲りずに竹林で採ったタケノコを人里で売りさばいていた時の出来事。

「私にもタケノコをくれ」

「はいどう……ぞ？」

「どうした商人。私の顔になんかついてるか？」

ｏｈ…目の前でニヤついているのは懐かしの藤原妹紅さんじゃありませんか。

「ひ、久しぶりだね妹紅。タケノコが欲しいのかな…？」

「ああそうだな。私を放ってまで採れるタケノコとやらに興味があってな、わざわざ金を払って買いに来たわけだ」

魔力を身体に纏わせ幻術を使用、同時に地面を殴って砂埃を立てて逃走開始。逃げろ逃げろ！　妹紅の意地悪そうな顔を見たくなければ全力で逃げるんだ！

「待て――――ってなんだぁ！？」

「ふはは！　あばよもこたん！！」

砂埃がはれてみれば、そこには幻術で３０人近く増えた僕が散り散

りに逃げて行く様子が見てとれる。その様子を見た妹紅は目を見開いて驚いている。その隙に僕はタケノコ両手にその場をその場を後にした。

一刻後

「よう、家燃やすけど構わないよな？」

「お助けーーーーーーーーーーーー！！」

慧音さんから聞いてきたらしく、僕の家には妹紅がやって来た。

「冗談だって。…まったく、そそっかしい所は変わってないのか？」

「あはは、最近はマシだよ。でも久しぶりだね妹紅」

「本当に久しぶりだ」

どっこいしょ、そう言って座る妹紅がどこぞのお婆ちゃんに見えるのは白髪だからだろうか。本人はあの頃とまったく変わりないようだけど。

「で、お前は魔法使いに成れたみたいだな」

「おかげ様で」

とりあえず御茶を出そう。そう思って急須に入っていた冷めた御茶に、炎の魔法を当てて瞬間的に温め直す。とりあえずこれでいいだろう。

「横着だな。まあ構わないが」

「妹紅ならそう言うと思ったよ」

「なんだそれ、私だって繊細なんだぞ？」

そこでお上品に笑ってくれたらそう思えるけど、ズズズっと構わず御茶を啜る姿を見ればとてもじゃないけど繊細とは言えないと思う。

「妹紅は誰かと争っていたようだけど、アレは何だったの？」

「ん？　ああ、前言ってた輝夜姫との殺し合いか？」

「って本当に殺し合いしてたの！？」

そうだぞー、とあっけらかんに言う妹紅に驚きが隠せない。もし本当にそうだとすれば忌々しき事態だ、早々に止めさせないと！

「とは言っても、私もあいつも蓬莱人。死ぬことなんて絶対にないから無駄なんだけどな」

「あ、そうなの？　ならいいや」

そう言えば蓬莱人だったよね。死なないんだったら別にどれだけやっても何も言いません。わざわざ不毛な争いに首突っ込めるほど強くもないし。第一どっちの味方も出来ないので出来れば関わり合いたくないのが本音だ。

「そう言えば私が輝夜を見つけたと言っても驚かないんだな。知ってたのか？」

「知らない」

僕は何も知りません。ホントウダヨ！　だから2人の殺し合いに巻き込まないで！！

「…まあいい、今日は飲みに来たんだ。大和も酒くらいもう飲めるだろ？」

どこから取り出したのか、妹紅はそう言って酒瓶を床に広げた。その後は翌日の朝日が見えるまでお互いに語り、飲みつくした。朝日が辛いよ…

幻想郷での日々（後書き）

いわゆる閑話ですね、じらいです。今日の講義中にネタが頭を過ったので形にしてみましたけど、山も谷もない話になってますねwただ久しぶりに妹紅が出せたのは嬉しかったです。これからは輝夜・妹紅・大和の3人で絡むことが増えたらいいですねぇ。

幻想郷での日々2（前書き）

閑話その2ってところです

幻想郷での日々2

～新魔法と先生の遺品～

どうも最近の僕は鈍っている。武術の方もそれほど行っていないし、魔法使いのくせに魔法も全然使えない上に持ってない。武術の方は昔のように鍛え直せれるだろうけど、魔法に関しては一から始めるしかない。

「今出来るのは…？身体強化　？マススパーク　？魔力糸　？幻術　？イマイチな属性魔法　だけかぁ。結局僕が向いているのは幻術魔法だけだから仕方ないって言えば仕方がないないけど」

それでもこれは少ないだろう。パチュリーなんてとんでもない数の魔法を使えることが出来る。しかも属性付きで。嫉妬してしまうほどの戦力差だよ…。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「てなわけで、どうすればいいと思う？」

「自分で考えなさい」

「そこをなんとか」

「一魔法使いなら、他人に教わることを恥であることくらい自覚しなさい」

「恥じる程の物を持ち合わせてないんだよ」

紅魔館・図書館内。相変わらず本を読んでいたパチュリーに尋ねてみる。折角の時間を邪魔されたことをかなり鬱陶しく思っているらしく一度も顔を合わせてくれない。別にそれでも意思疎通は出来ているので問題はないんだけど。

「パチュリーさんパチュリーさん、どうすればいいと思う？」

「しつこいわね…」

「答えてくれるまで今日は寝かせないぞ！　って危ない！？」

「次変なことといったらアグニシャインを当てるわよ」

いったい何なんだ！？　ちょっと冗談めかしただけで魔法を飛ばしてくるなんて傷つくなぁ。そこで頬を染めるくらいしてくれたらグッドなんだけど、睨みつけられるのは心外です。

「で、どうすればいいと思う？」

「…はぁ、本当にしつこいから答えてあげるわ。仕方なく」

「仕方なく答えてあげてください」

「（本気で燃やそうかしら？）　いい？　貴方の特性は幻術に特化していることは知ってるわよね。幻術っていうのはリアリティーが大切なの。ここまでは分かる？」

「大丈夫」

「今まではいかに相手を騙せるかに重点を置いていたのよね？　なら今度はそれを攻撃にも使いなさい。例えば相手に焼け死ぬと思わせる程の幻術、痛くてどうしようもないと思わせる幻術。今までとは違い、周囲に変化をもたらすだけでなく相手自身も狂わせればいいの。それをさらに昇華すれば『有幻覚』というほぼ実体に近い幻術を使えるようになるわ。実体だからそれで内側にも外側にもダメージを与えることができる。つまり想像の産物が本物と同じ価値になるのよ」

「おお～」

つまり相手に嘘をいかに本物っぽくみせるかは変わらず、今度は相手に使えと。そしてそれを昇華させた奥義が有幻覚と呼ばれる物。そしてそれは想像の産物が武器になる…。何もない所から何かを生み出すなんて、それはもう本当の『キセキ』と呼べるんじゃ…？

「有幻覚を扱えるようになれば属性魔法は意味をなさなくなる。な

ぜなら全てを自身のイメージで作ることが出来るから。ちなみにレミィの母親は使えたらしいけど、最高位の魔法使いでも使いこなすのは難しいわ。貴方には到底扱いこなせないでしょうね」

「やってみないとわからないじゃないか」

そう、全てはやってみなければ分からない。目標があれば僕は頑張ることが出来る。それはこれまでもこれからも変わらない。この世に不可能なんてことはないんだって証明してやる。

「有幻覚の魔法書もあるから全部持って行きなさい」

「え？　持ってっちゃっていいの？」

「…ここにある本は貴方の先生の魔法書よ。ならばそれは貴方が受け継ぐべきなのよ。本当はこの図書館も貴方の許可がないと使ってはいけないのだけれど、構わないわよね？」

「もちろん！　と言うか、これ全部僕のモノになってるの…？」

「魔法使いの世界では師の物は全て弟子に受け継がれる。そうやって魔法は進歩しているの」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

～妖怪の山で河童と天狗と～

今日は妖怪の山に登ろう。そう思ったのはにとりと久しぶりに会いたかったのと、今まで撮った写真を現像？　とか呼ばれる作業をしたいからだ。昔にいた山とは少し違うようだけど、それでも１０年間育った場所だ。迷う心配もないので山の上空を川目指して飛んでいく。

「見られてる…なんで？」

あちこちから視線を感じる。山に自由に入れる許可は既に貰っているのだけど、それでも多くの視線が僕を捉えている。僕が『伊吹』だからなのか、それとも人間（まほうつかい）だからなのかは知らないけど、見え透いた監視体制にはうんざりする。

「大和さん大和さん、何処行くんですか？」

「文、ひさしぶり～。ちょっとにとりに会いに行こうと思って」

シュバッ！！　という擬音がピッタリな速度で僕の目の前に文が現れた。何時も通りのペンと手帳を持ってネタを探していたのだろうけど、監視の目に気がついたのだろうか周囲を睨みつけていた。

「文も気がついた？」

「ふん。大方山に入ることを簡単に許された大和に嫉妬している連中でしょ、ド三流ばかりだから気にすることないわ」

「相変わらず他人には酷いね…」

「私は自分の周りがよければそれいいのよ。…ってなわけで大和さん、私も取材がてら付いて行っていいですかね？」

「別にいいよー」

表と裏と忙しい人だよまったく。どちらも文だし昔からこんなだから何とも思わないけど、他の人は違うのだろう。だって文、友達少ないもん。本人にそれ言ったら泣くだろうけど。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「にーとーりーー、あーそびーましょ～～～～」

川に向かって叫ぶ。姿は変わっても中身が昔と変わらない僕の姿に文が腹を抱えて笑っている。

「文、笑っちゃいけない。子供の頃もこうやってたじゃないか」

「そっそうは言ってもッ、おとっ大きくなってその誘い方は…ブフッ、ムリムリ我慢できなヒィ！？」

ついには膝を着いて笑いだした文。むぅ…僕は大真面目なんだけどなぁ。

「認めたくないものだな、若さ故の過ちというものを」

「むむ、その声はまさしくにとり！　何処にいる！？」

にとりの声が周囲から聞こえてくるが姿は見えない。川の中から声は聞こえなかったからおそらく陸地からだろう。ならば！　成長した僕ならにとりの妖力を読みとって場所を見つけることができるはず！

「そこだ！」

「ひゅいッ！？」

何もない空間に向けて手を突きだし、咄嗟にそこにあった物を鷲掴みにする。たぶんにとりの顔なのだろう、柔らかい感触を掌に感じさせてくれる。

「もしかしてにとり太った？　なんか柔らかくなったみたいだけど」

何度も握ったり離したりしているとプニプニした感触がよく伝わってくる。それにしてもこれは太りすぎだろう、いったいにとりに何が起きたの言うのか？

「あぁ、ん、何処触って、ちょ、んん！？　やめろってばぁ…やめろよーーーーーーーう！！」

「プゲラッ！？」

いきなり目の前に現れたにとりに高水圧の水で吹き飛ばされ、僕は懐かしい気絶を味わうことになった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「目が覚めた？」

目が覚めてみるとにとりと文は何やら作業をしていたけど、僕に気がつくと一旦作業を止めてこちらを気にしてくれた。しかし一言いっておきたい。

「久しぶりの再会に水を差すのはどうかと思うんだけど」

うん、今上手いこと言った。

「大和に言われたらお終いだ」

「アレは大和さんが全面的に悪いです。ただの変態でしたから」

「何それ酷い」

二人ともジト目で見てくる。まるで変態を見るかのように、軽蔑した目で僕を見てくる。何なんだよいったい？　僕が何かした？

「文は今も記者モードなんだ？」

「そのために着いて来ましたから」

気にしていても仕方ないので話を勧める。二人ともまだ冷たいけどそんなの僕が気にしても仕方ない。だって何でこうなったか分からないんだから。

「大和の持ってたカメラを現像してるけど、別にいいよね？　答え

は聞いてない」

「別にいいよ。気にしてない」

テキパキと不思議な機械を使って写真をカメラから取り出して行く？　にとりは昔と変わらず、いや昔以上に機械好きみたいだ。次々と出てくる写真には僕が今まで映してきた光景や人が多く映っていた。

「大和さん、この女性が輝夜さんですか？」

「ん～？　そうだよ、月の元お姫様でこっちに映っている師匠の被保護者。師匠っていうのは僕が武術やら魔法の基礎を教わった人で、永琳って言うんだ」

「へぇ…。大和、前言ったこと忘れてないでしょうね？」

「オボエテイマストモ」

輝夜と会う時は文が隣に立つ『らしい』。保護者としては当然とか言っているけど、僕の保護者は母さんだけですどうもありがとうございました。

「こ、これはまさか大陸の光景！？　しかも僅かに機械が映っている！？」

「ああ、機械だけの写真もあるけどそれはまだ現像してないんだね」

「な、なんだってーーーーーーー！？」

大陸にあった最先端の機械の写真も撮ってある。主ににとりのために。たぶんそういうことも含めて僕にカメラを渡したのだろうから。

その後も珍しい光景やら、紅魔館での１コマなど色々あったけど、蓬莱島の景色を映したものだけなぜか撮れてなかった。いや、写真自体が真っ白になっていたと言う方がいい。記録にすら残らない島、蓬莱島。そう言えば師父は今どこで何をしているのだろう。

「おいお前たち、少しいいか」

「よくない」

久しぶりの再会に邪魔は付き物というのだろうか、１人の天狗が声を掛けてきた。それと同時に何人もの天狗出てくるが、文が素っ気なく返すと一瞬たじろぐ。しかしそれでも負けじと声を掛けてくるのは天狗のプライドなのか。

「文屋に用はない。俺達はそこの人間に用がある」

「人間じゃなくて魔法使いだよ」

「オマケに『伊吹』の名前持ち。天狗様といえど、下手に手を出すと危ないよ？」

「河童にも用はない。ただ何の力も持ってない子供が『伊吹』と言うだけで山で自由にしているのが気に食わない」

「これでも４００年以上生きてるんだけど…」

しかしこんな輩に絡まれるなんて大陸以来だ。騎士団で仕事してた時なんてほぼ毎日絡まれてたからね。聖ヨハネの連中からしてみれば、紅魔館からの協力者とか屈辱的だったんだろう。

ゆっくりと立ち上がり、天狗たちと向き合う。

「ふん、やる気になったか」

「文、にとりも耳塞いでて。ちょっと酷いから」

「お前の悲鳴がか？」

「違う…僕の笛の音痴さがだ！！」

――――秘儀・輩撃退音痴笛（やからげきたいおんちぶえ）――――

説明しよう！　とてつもなく音痴な僕は笛を吹くことが出来ない！　そんな僕が全力で笛を吹いたらどうなると思う？　答えは至って

単純。音を奏でる笛が聴力破壊兵器に変わるのだよ！！

「耳が、耳がぁ～～～～～～～！？」「鼓膜から出血！？嘘でしょ！？」「パルスッ！？」

耳を塞いでいた二人以外はまともに僕の兵器で耳を破壊されたようで、足元が覚束ない様子の天狗たち。それでも必死に立っていようとするが、努力虚しく耳を押さえて空に消えて行った。

「ふっ、恐れ入ったか」

「私の上げた上等の笛をそんな風に使うなんて…」

文が項垂れているけど知ったこっちゃない。練習しても出来ないことってあると思うんだ。うん、本当に申し訳ないとは思っている。

「それよりも現像だよ現像、まだ文のカメラの分も余ってるんだからさ」

「にとりの言う通りだよ。早くやらないと日が暮れる」

「私の笛が～～～～～」

だから悪かったって言ってるよ！

幻想郷での日々2（後書き）

幻術って言えばリボーンの幻術が出てくるじらいです。有幻覚ってのもあれですよ、もうリアルと区別着かないようなやつ。でもアーチャーみたいにその場に贋作作るわけじゃないですから。

うむむ…説明が難しい。リボーンの幻術と大体同じって考えてもらえるといいんですけど、やっぱそれじゃ分かりづらいですよねぇ。なんとか出来ればいいんですけど…。

幻想郷での日々3（前書き）

輝夜、永琳、大和＆てゐと言ったところです

幻想郷での日々3

～再会　月の民たちの宴～

「！？　…気のせい…じゃないよね、確実に見られてる」

季節は冬。辺り一面銀世界となり、冬独特の夜の静けさが周辺を包み込む…とは言っても、魔法の森の前に家を建てている僕の周りは常に静かなんだけども。近頃はにとりがくれた『魔力式こたつ』とかいう暖房器具の中に入ってゴロゴロすることが日課になっていたりする。これがまた温かいんですよ。魔力喰うけど。でも前みたいに面倒を見る相手がいないのはいいことだ。ビバ★1人暮らし。

ところが最近僕の周りが騒がしい。実際に喧騒とかが有るのではなく、どこに言っても見られていると感じたりする。一応心当たりはあるけど。何時も僕を見ているのが兎とか兎とか兎とかだったら嫌でも察しがつくものだ。今回もその類だろう。

「だがしかし、まだそうと決まった訳じゃない。うん、決めつけるのはよくない」

師匠とか輝夜とか師匠とか決めつけるのはまだ早い。兎＝師匠たちだなんてそんな超理論が成り立つなんて

「こんばんわ～。伊吹大和さんに伝言ウサ」

「ガタッ（ビクゥッ！？）」

突然の来客に動揺してしまった。それでも物音一つ立てないように注意して居留守を使う。大丈夫だ、問題無い。これはただの幻聴だ。じっとしていればいずれ聞こえなくなるなずなんだ。

「居留守つかっても家の中に居ることくらい既に調べがついてるウサ。だから伝言を言うよ。『月の見える日に竹林へ来い』　以上。それじゃあ待ってるよ」

そう聞こえた後扉の向こうの気配が消え、再び静寂が辺りをしめた。どうやら本当に帰ったようで、この家を覗こうとする視線も完全に消えた。けれど問題発生。いや、問題じゃなくて久しぶりの再会を喜ぶべきことなんだろうけど…

「師匠と輝夜、僕が避けてたこと知ってたとすると、これはマズイことになった…」

何と言っても相手はあの2人だ。特に輝夜が機嫌を損ねていたりすれば最悪だ。なんせそのしわ寄せが師匠にいくわけだから、比例して師匠も不機嫌になっていく。そうなればひょこひょこ現れた僕は生贄になることになってしまう。それだけは阻止したい。

「よし。お土産を持っていこう」

少しでも機嫌を損ねさせないために貢物を持って行こう。輝夜に貢物…まるで昔にいた求婚者みたいだね…。でもよく輝夜に求婚する人がいたものだ。実際に話したことあるんだろうか？　あの我儘姫と。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

月の見える夜、と言ってもほぼ毎日月が見えていたので満月の夜に、前もって人里で買ってきた高い一升瓶を片手に竹林の中に入った。するとどういうことか、今までまっすぐに生えていた竹がふにゃりと曲がり、一本の細い道を作りだした。真っ暗闇の中で竹が曲がる光景は少し恐怖を与えてくる。まるで生きているかのように僕が通った後の竹は真っ直ぐ元通りになっているからだ。

「ここか」

竹の作りだした道を進んでから少し経った後、開けた場所に出た。そこには一つの大きな家屋もあり、人が生活している様子が見てとれる。しかし大きい。姫が住む家には十分な大きさを誇っている。

「伊吹大和、参上しました」

「いらっしゃい。２人がお待ちかねウサ」

御出迎えはピンク色の服を着た兎耳の少女。声からしてこの子が僕に伝言を伝えた妖怪で間違いないのだろう。

「因幡てゐ。古い兎妖怪さ」

「あ、これはどうもご丁寧に。僕は伊吹大和。魔法使ブッ！？」

玄関を跨いだ状態で握手の為に右手を差し出されたので、その握手に応えようとしたらいきなり扉が閉まって挟まれた。…地味にイタイ。

「悪いね、これ自動扉なもんで」

「へぇ～、これが最新式ってやつなんだよね？」

「そうそう、最新式最新式（２人の言う通り騙されやすいウサ）」

流石は元月の賢者の住む家。少し驚いたけど、最新式の設備が整っているんだね。２人の部屋に案内されるまでも最新設備とやらを身体で感じることができた。いきなり穴が開く廊下や、外から飛んで

来る矢などなど。ほとんどは防犯の為らしいけど。僕の家にも取り入れたいね。最近は吸血鬼とか鬼とか蓬莱人とか天狗が断り無しに入って来るからどうにかしたいと思ってたところなんだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「大和の魔力を竹林内で感じたわ。てゐもそれらしき人物を見たって報告があったから間違いないわね」

私（かぐや）が永琳からその知らせを受けたのは少し前のこと。なんでも蓬莱島で別れてから音沙汰無かった大和が見つかったとの話を聞いた。その知らせを聞いた時、自然と笑みが生まれた。永琳も笑みを浮かべていたけど、それは母性や、弟子の姿を見つけたからだろう。でも私は違う。

――――私は大和に恋している――――

何故だかは分からない。でもはっきりとそう思えたし、別に驚いたりもしなかった。今まではただ気がつかなかっただけ。それに気がついた私の顔に笑みが浮かぶのが分かる。会える。また大和と会えるのだ。

私に求婚してきた男は数知れず。でも大和は今までの男たちとは全

く違った存在だった。上辺ではなく、本当の私と向き合ってくれた人。今となっては失うことの許されない特別な存在なのだ。

それから数週間、てゐに大和を監視させた。驚いたのは大和の周りを妖怪たちが闊歩しているということ。てゐ曰く、誰もが並々ならぬ実力の持ち主らしい。妹紅もたまに飲みに誘っているのを知った時は驚いた。その次に妹紅とヤリ合った時はボコボコにしてやったわ、ふん！　アレは私のだ。誰にも渡すもんか！

そして今日、大和が此処（えいえんてい）にやって来る。既に敷地内にその存在が感じ取れるから、もうすぐ会えるだろう。恋する乙女となった私は想い人の到着を待つ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「や…やっと着いた…」

最新式の設備のせいで必要以上に体力を消耗してしまった。もう限界だけど、本番はこれからだ。てゐちゃんに案内されて豪華な襖の前に立つ。この扉の向こうに2人がいるのだろう。始めは嫌々だったけど、今となっては胸の高鳴りのほうが大きい。なんだか凄く緊張してきた。

「大和です。入ります」

豪華な装飾の施された襖を開ける。軽いはずなのに、何故か重く感じた。

「いらっしゃい大和。待ってたわ」

「久しぶりね。元気だった？」

「あ…うん、２人とも久しぶり」

上から輝夜、師匠。師匠は何時も通りの赤青の服装だけど、輝夜は最後に宴会をした時を思い出すような豪華な服装、所謂お姫様の服装をしている。なんだか嬉しいのと恥ずかしいのとで顔を見ることが出来ない。

「あら？　大和は何で私を見ないの？」

「う……別に……」

穏やかに微笑む輝夜が綺麗過ぎて直視出来ない、なんて言えるわけない。そ、そう！　これは服が豪華だからだ！　そうに決まっている！

「ねぇ、私を見て？」

「うぅ……」

にじり寄って来る輝夜にたじろぐ。出来ればこれ以上近づいて貰いたくない。僕がおかしくなってしまいそうだから。

「大和、久しぶりに会ったのにその反応はないんじゃないの？」

「……だから」

「何？」

「輝夜が綺麗だから、見るのも見られるのも恥ずかしい……」

「あ……うん、ありがと／／／」

「い、いや別に…」

そう言って華が咲いたように笑う輝夜をみて、僕は再び鼓動が早まるのを感じ取った。

「はいはい、お見合いもいいけどそろそろ始めましょうか」

師匠が手を叩くと部屋の外から兎の妖怪が料理とお酒も運んできた。豪華な料理の数々が机に上に並べられ、上等なお酒もどんどん置かれていく。僕の持ってきたお酒が霞むほどの逸品ばかりのようだ。

「さあ、再会を祝って宴会を始めましょう」

「大和、今夜は私が御酌をしてあげる。楽しんでいってね／／／」

「わ、わかりました！」

何故か敬語で応えてしまうほどに僕は動揺していた。師匠との会話も覚えていないほどまでに僕は酔ってしまった。それほどまでに輝夜は綺麗だったし、見惚れてしまっていたんだ。注いでもらったお酒の味も分からないほどに、その日の月は輝いていた。

幻想郷での日々3（後書き）

もしかしてブラックコーヒーが必要でしたか？　ＧＷ突入に伴いテンションの可笑しいじらいです。そのテンションのまま出たネタを形にしたら結果がコレだよ！　何か頭沸いてるのかもしれませんがそれは何時ものこと。生温かい目で見守って下さいｗ

そしてまもなくＰＶ５０万です。そして今回はＰＶ記念でもない。…もうわかりますね？　アレですよ。はるか遠い未来でのｉｆ話がやって来ます。今回のターゲットは映姫様です。人気があったのでｗｗ

そして感想が１００件行くかも。１００件目を踏んだ人、おめでとうございます。何かしたほうがいいですかね？　踏んだ人に任せることにします。そしてこれほどまでに感想を送って下さった皆様に感謝感激雨嵐です！！　ありがとうございます！！

超番外　大和と映姫（前書き）

ＰＶ５０万記念作

これはｉｆ話です。本編とは一切関係ありませんのでご注意を

Ｒ－１５くらいです。１５歳以下は読んじゃダメだよ！

超番外　大和と映姫

～遙か遠い未来でのｉｆ話～

トントントン。規則的な音が響き渡る台所。霜が朝日を反射するような冬の朝、僕は住みなれた家の中で朝のお勤めをしていた。

「よし、朝御飯の準備完了。後は映姫を起こして…だけど今日も寒いなぁ」

おはようございます。伊吹大和改め、現在は四季大和と名乗っています。名字が変わっているのでもうお気づきの方も多いと思いますけど、実は僕、結婚しました。　相手はあの泣く子も黙る地獄の裁判長、四季映姫・ヤマザナドゥその人です。

◇◆◇◆◇◆◇

きっかけはある日の事。珍しく映姫と小町も僕らの宴会に参加した珍しい日の出来事だった。何かに苛立っていたのか、映姫は何時も以上にお酒を飲み続けていた。そんな彼女を周りの皆が心配しだし、声を掛けたが反応はなく、俯いたままだったので酔っぱらったのだ

と思っていた時のこと。

何時もより酔いの早い彼女が心配になって顔を覗き込んだ僕は、思いきり顔を掴まれてそのまま唇を奪われてしまった。なんの脈絡もなく、いきなりの出来事だったので何が起きたかも理解出来なかった。そんな呆然としたままの僕に映姫は、

「自分の気持ちに白黒はっきりつける日が来ました。大和、私と一緒になりなさい」

宴会場である博麗神社は一度完全に静まり、次の瞬間には大爆発が起きた。吸血鬼は飛び、月は狂い、鬼は暴れた。他にもその場にいた全員を含めた大乱闘が始まり、幻想郷もここまでかと思われたが、再び口を開いた映姫によってそれらは驚きのあまり完全に沈黙してしまった。

「もう一度言いましょう。私と結婚しなさい。それが貴方にできる善行です」

少し怯えながら、それでも凛とした表情を崩さず僕を真っ直ぐに見つめる映姫。身体が震えているのは歓喜からか、それとも別の何かか。

「…本当に僕でいいの？　あとで後悔してもしらないよ？」

「私が選び、そして決めたことです。…私は貴方が好きです」

「……あ～その、じゃあよろしくお願いします？」

「はい。旦那様」

涙を流しながら微笑む彼女を抱き締めた。身体は歓喜で震え、彼女の熱い体温が服越しに伝わってきた。もう離さない。そう言うと更に強く抱きしめ返してくれた映姫が愛おしくて堪らなかった。大きいけど小さい女の子を一生僕が守って行こうとその時誓った。

何時までもこのままでいたかった。けれどそうしている余裕なんてなかった。とっさの判断で紫さんが僕と映姫をスキマで移動させなければこうやって生きていることはできなかっただろう。…主に暴れ出した母さんのせいで。その母さんも勇儀姉さんたちに取り押さえられたと後で聞いた。死者がでなくて本当によかったよ…。

◇◆◇◆◇◆◇

あの時確かに僕らはお酒が入っていた。でも僕が映姫を、映姫が僕を好きだという気持ちに嘘偽りはない。少し口煩いところもあるけど、それさえも可愛らしいと思える僕はどうやら完全に彼女に掴まってしまったようだ。こうやって僕と映姫は自分の気持ちに白黒はっきりつけ、今は懇ろになっている。

そして映姫は今も裁判長を、僕は公私にわたってその秘書役をしている。公私混同はよくないんじゃないか？　と尋ねてみたところ、一時も離れたくないし、仕事はしっかりとすると言われてしまった。まいったね、それじゃあどうしようもないよ。

「映姫～朝だよー。起きろー」

「……寒いです。それに昨日は寝るのが遅かったじゃないですか。もう少しだけ…」

「何言ってんの、寝た時間は同じはずだし、どちらかと言えば僕の方が疲れてるはずなんだけど」

布団に包まっている彼女をぽんぽん叩く。いい加減起きて貰わないと仕事に送れるし、また仕事仲間の皆さんに迷惑がかかる。

「ほら起きて！　遅刻するよ！」

「きゃっ、ちょ、大和止めて下さい！」

「ん～？　聞こえないなぁ」

しつこく布団に包まっている映姫を布団から引きずり出し、亀になっている所をお姫様だっこで居間まで運ぶ。もう知ったことだけど、映姫は羽の様に軽いので苦にもならない。それに恥ずかしがる顔も見られるので役得なのだ。

「ちょっと、下ろしなさいっ！」

「んじゃ下ろすよ」

「う、うわ！？」

パッと手を離すと着地すら出来ない始末。寝ぼけているとはいえこんな事になるなんて…

「…もしかして、腰抜けてる？」

「うっ……し、仕方ないじゃないですかっ！？　昨日は！　昨日は…その……」

昨日、ね…。

蝋燭の僅かな灯りが部屋を照らし、一糸纏わぬ姿となった2人。2人の体温で湿ったベッドの中、互いを求めて激しくまぐわる。暗闇の中に見えた瞳は情熱に揺れ、玉のような肌には冬の夜だというのに汗が浮かんでいる。甘い声で僕の名前を叫ぶ映姫が――――――――

「ああ、昨夜ははげブフォッツ！？！？」

「あッ朝から不埒なこと言う人は地獄行きです！！」

ッツ～～～～～！？　何もグーで殴ることないじゃないか、本当のことなんだし。夫婦なんだからまぐわって当然だろうに。まあ何時までも初心な所も彼女の魅力の一つなんだけど。

「もう知りません！　朝御飯食べてさっさと職場に向かいます！」

「はいはい。闇魔様の言う通りに」

冷たい床に座ったまま痛む頬を押さえそう言うと、流石にやり過ぎたと思ったのか心配して僕の頬に冷たい手を当ててくれた。

「…その、すいません。やり過ぎました」

「別にいいよ、僕も少しふざけ過ぎたし」

床に膝を着き、お互いの鼻が当たってしまう程の距離で会話。やや蒸気した顔から出される生温かい吐息が直接僕に当たる。なんと言いますか、こうも見え透いた『ごめんなさい』　をされてしまうとついついその場に流されてしまうわけで。

「ん……」

ただ触れ合うだけの軽いキス。ごめんなさいの挨拶。それだけで顔を真っ赤に染め上げる。僕だけが見ることの出来る、あまりにも不器用で少し優しすぎる彼女の姿。

「さ、今日も仕事が詰まっています。張り切って行きましょう」

「その前に朝御飯」

「……少しは味付けを考えて下さい」

「精が出る味プゲラッ！？！？」

「二度は許しません」

そして今日も彼女との楽しい一日が始まる。

四季映姫と四季大和。幻想郷で一番のラヴラヴ夫婦に職場の者は砂糖を吐いているそうな。

超番外　大和と映姫（後書き）

上げたら直ぐにでも消したくなる作品、作者はもちろんじらいです。
悶えましたかね？　何か心に来ましたかね？　……本気で消していいですかね？
これほどまでにはっちゃけたのは初めてです。もう書けないよ…

地獄廻りと新たな境地への一歩（前書き）

久しぶりに真面目な話？　になりました

地獄廻りと新たな境地への一歩

「構えなさい」

永遠亭で夜通し行われた宴も終わり、一眠りした後師匠に叩き起こされた。はっきりしない頭で少し懐かしいな、そう思った時には僕は見事に宙を待っていて、目が覚めた時には畳の上に叩きつけられていた。受け身すらとれなかったのは長いブランクのせいだ。そう言われ、鍛え直しとどれだけ成長したかを見るために今師匠と向き合っている。

「…行きます！！」

魔力を身に纏い急接近。ほぼ毎日行っていた身体強化は力強く、見る者を魅了するほどのものとなっている。あの頃とは一味違う動きをもって師匠の腕をとり、重心の下に自分を入れ背負い投げを仕掛ける。

「……！」

普通ならば背中から畳に叩きつけられる。だが、僕も含め師匠も『普通』ではないのだ。腕と肩の関節が外れているのではないかと思うほど空中で身体を捻り、そのまま僕の投げから逃げて目の前に

着地。逆に顔面を掴まれ後頭部から叩きつけられた。

「ぇほっっっゲホッッッゲホ…」

「……どういうこと？」

「どういう…ことって…？どういう…こと…ですか…？」

畳に打ちつけられた影響で息も絶え絶え、痛む後頭部を抑えて尋ねる。僕を見つめる師匠の表情は、今まで見た中でも特に深刻な顔をしていた。

「自己鍛錬を怠った？　これと言って進歩が見えないの。本当に修行してきた？」

「そんな！？　修行もしてきたし、命を賭けた実戦を何回も経験しました！　確かに島ほどの馬鹿げた量をやってたわけじゃないですけど、達人相手に毎日組み手もしてきました！！」

師匠の言葉に痛みすら忘れて起きあって反論する。そりゃ島での命懸けの修行じゃなかった。けど多くの闘いの中で僕は打ち勝ってきた。だから強くなってないことなんてありえない！　そうやって必死に師匠に訴えかける。僕は必ず強くなったはずだと。

「…私の目に間違いがあるとは思えないわ。貴方は変わっていない。

達人の領域に片足が浸かった程度のあの頃となんら変わりはないわ。おそらく周りの仲間や短剣に備えられた魔道機関、魔法の影響が大きいはず」

「そんな…じゃあ、じゃあ僕は…」

「残念ながらあの頃とまったく変わっていないわ」

武術では美鈴に勝てず、魔法ではパチュリーの足元にも及ばず、総合力では輝夜に劣る。今まで勝ってこれたのは、周囲の助けとイクシードによる魔力の底上げがあったから。それらが僕を強いと勘違いさせてきた。沢山の物が詰まっていたと思っていた箱を一度開けてみれば、そこには何も入ってなかったのだ。悲しみや喪失感以上に驚きで言葉が出なかった。

「でもそれほど深刻に考える必要はないわ」

「え…？　どういうことです？」

「何故なら私がもう一度鍛え直してあげるからよ。喜びなさい。死んだ方がマシな修行になるけど、必ずもう一度限界を超えさせてあげるわ！」

目から怪光線を出しながら師匠はそう宣言した。そこに痺れる憧れるぅ！？　あまりの師匠の勢いに蛇に睨まれたカエルのように動けなくなってしまった。これが真の達人なのか！？

一瞬憧れもしたけど大事なことに気がついた。限界を超えるって、それってあの…、もしかして『地獄廻り』　だったりします？

「あの…拒否権とｋ「ないわね。さあ逝くわよ」　師匠！　字が、字が違います！？」

落ち込む暇すら与えてもらえない。スパルタなんて言葉では表現できない地獄廻りが始まった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

蓬莱島での修行を表現するのならば壮絶、この一言に限る。私なら一日で止める。あんなのは死なない私でも死ぬ。でも死ねないから精神が崩壊して廃人になってしまうだろう。今は常人の目には映らない速度で動きまわり、ひたすら勝ち目のない組み手を行っている。目に映らないとは言っても私（かぐや）には『まだ』　見えているのだけど。

「全然見えないウサ…。姫様には見えてる？」

「もちろん。今も泣きながら投げ回されてるわ」

「それは修行じゃなくて虐めウサ…」

虐め？　たったのこれだけで？　こんなのはまだ地獄廻りに於いては序の口でしかない。本格的に始まったらもう私でも目で追えないことになる。たぶん大和も何をされているのか解らないだろう。気絶させられればそれ以上の苦痛で起こされ、更に酷い痛みを覚えさせられる。頭で理解させるよりも、身体が勝手に反応するまで続けられる。

「本当の地獄廻りはこんなもんじゃないわよ…」

「……てゐちゃん用事を思い出したから失礼するウサ」

そう言ってゐは退出していった。おそらく遠くで見ている私たちにまで衝撃波が届くようになったからだろう。既に永琳の振る腕のスピードが速すぎてもう影すらも見えない。大和の姿も見えないので、おそらく見えていない腕の先で振り回されているのだろう。

「可哀そうな大和。頼むから死なないでね」

ホロリと涙が流れそうになるほど見ていて面白い修行風景。目から怪光線を出し、腕を振り回し続ける永琳を見ているともう手遅れな気もするけれど。でもとりあえず此処を離れよう。巻き込まれたら酷い目に合う。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

死ぬ。本気で死んでしまう。どう投げられているのかすら理解できない。覚えが悪い僕は頭よりも身体で覚えなくてはならない、何度も身体で受けてみれば技の特性が理解できる、そう言って蓬莱島で始まった修行。通称地獄巡り。現在地獄の一丁目くらいかな？　ちなみに今まで意識を失わずに覚えていられたのは４丁目までです。もう何がなにやら。

「立ちなさい！　立たないのなら死になさい！！」

師匠、そりゃ無理ってもんです。何回も気絶させられて、その度に叩き起こされての繰り返しがもう何時間も続いている…と思う。頭は別のことを考えながら、身体は勝手に動いているせいで時間の経過すら分からない。少しでも技を見極めようとしたけどもう無理っす。

「遅い！　百回は死んだわよ！！」

意識とは正反対に師匠に身体が立ち向かっていくも襟首掴まれてまた振り回される。ああ、時が見える…。

「……よし、今日はこれくらいね」

「やっと終わ　「次、72時間耐久で魔力による身体強化。自分の分身を50人創ってやるわよ」　ですよね…」

あの頃の3倍の時間と2倍の分身（げんじゅつ）の数。もう無理。僕これが終わったら映姫様のところで判決受けてると思うんだ…。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「月に一度ここに来なさい。鍛えてあげるから」

「……ハイ」

天に月が昇った時間に漸く解放された…何日も経った後だけど。

あの後気絶したままで何が起こったのか解らない。ただ師匠の顔を見ただけで身体が震えだすのだからよっぽど酷いナニかがあったのだろう。既に永遠亭を訪れて20日が経過していると師匠が言っていたから、僕は19日くらい意識がない状態だったみたいだ。…もしくは脳が覚えた記憶を忘れさせたのかもしれないけど。

「どれだけ修行させられたんだよ…。ここに師父がいたら絶対死んでた…」

「私がいるのだから死なせるはずないでしょう」

「また変な薬でも飲ませました…？」

「いい実験になったわね。これからも頼むわ」

気絶した弟子に変な薬飲ませないでください。

「自己鍛錬も忘れちゃ駄目よ。取り戻すのが大変だから」

「肝に銘じておきます！！」

もう嫌だ、あんな目には二度と合いたくない。だから一日たりとも修行を疎かにすることができないんだ！　美鈴と一緒に組み手をしておこう！　少しでも強くなろうと努力すれば師匠も容赦を…してくれないだろうなぁ…。

「じゃあ帰りますね…」

「一ヶ月後に会いましょう。これからは2~3日で終わるようにメニューを組んでおくから」

それは頼もしいことですね！　これだけ死にかけたというのに見送りは師匠だけ。輝夜とてゐちゃんは中で寝ているらしい。薄情な上

に羨ましいぞコンチクショウ！

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

久しぶりに家に帰った後、疲れでくたくたのはずなのに何故か身体を動かしたくなった。夜も更けているので派手な活動は控えなければ迷惑…といってもここらに住んでいるのは妖怪だけだから別にいいんだけど。とりあえず動きたくなったので外に出て構えをとってみた。

「なんだろう、疲れたはずなのに妙に心が落ち着いている…」

構えに何時もの力はない。疲れているせいで気も魔力もそれほど多くない。しかしいろいろ合ったからか、それとも飲まされた変な薬のせいか自然と流水制空圏のような無心になっていくのが解る。何もない、夜の闇と静けさに己の身を任せる。

「右手に魔力…左手に気を…」

自分でも何故そんなことをしたのか分からないけど、自然と身体がそう動いた。流水制空圏…心を静めた状態で初めて行った気と魔力の合一。爆発しか生み出さなかった欠陥技は見事に身体に馴染んで

いった。

「なんだろう…気持ちがいい。ずっとこのままでいたいな…」

相反する二つの力に包まれた身体は、今まで以上に満たされていた。今なら何でも出来る、そう感じさせるほどに僕は全てから解放されているように思えた。

「今夜はこのままこうやって過ごそう…」

立った状態で力を纏ったまま目を瞑る。力を抜き、己を周囲に溶け込ませるように身を任せる。今日はいい夢が見れそうだ…

地獄廻りと新たな境地への一歩（後書き）

GW。久しぶりにド田舎にある実家に帰ってみたところ、なんと既に家族が揃っていました。帰って早速した仕事は近所の子供の相手です。兄ちゃん兄ちゃんと呼んでくれる子供がお兄さんには眩しいよ…。

子供　「何してるのー？」
じらい　「お話書いてるんだよ」
子供　「ねっとしょうせつだよね」

最近の子供って発達早いですね。一日中驚いてばかりでした

博麗の巫女って強いんだよ？（前書き）

博麗大結界が幻想郷を覆う約４年前の話

博麗の巫女って強いんだよ？

あれから更にウン１０年。いやウン１００年？　長く生きてくると感覚が麻痺してよく解らないよ。

月に一度の地獄巡りと、美鈴との組み手を欠かさず行ってきた成果が漸く目に見える形で出てきだした。師匠に一撃当てることが出来たんだ！　本気を出した師匠に頬を掠った程度だけど、お話にすらならなかった頃に比べればもの凄い成長だ。むしろ師匠に僅かでも本気を出させた自分を褒めていいと思う。

魔法の方も成果が出ている。紅魔館の蔵書とパチュリーの知識、そして図書館の奥深くで眠っていた先生の研究所、更にはレミリアとフランの斬新なアイデアを元に幻術の術式を再構成した。有幻覚には未だ程遠いけど、脳に向けて精神的ダメージを与えられるという結果は出ている。…まあ意志の強い人にはやっぱり効かないんだけれども。

日々の暮らしの方も慣れてきた。今では人里の人と一緒に農作物作って分け前を貰ったり、僕にしか採りに行けない妖怪の山の幸や竹林のタケノコと物々交換してもらっている。商人の仲買役として働くことも多いのでお金にも恵まれ出した。溜めておいても使い道がないので、良いお酒があったら買って家に持ち帰っている。そのお酒を飲みに来る人が多いので、これぞ！　という秘蔵の逸品には５重の結界を施している。でも見せかけだけの結界なので妹紅・レミリア・母さんには力技で破られることが多い。最高級のものをレミ

リアに飲まれた時には1人枕を濡らした。

あとは妖怪退治かな。退治と言っても殺したり消滅させたりするのではなくて、殴って蹴って更生させる方だ。人里の人には甘いんじゃないかと言われるけどこれだけは譲れない。僕の目の前では殺しも殺されも許さないと決めているからね。

そんなある日のこと、博麗の巫女が代替わりしたと聞いた。あそこの巫女とも付き合いが長い。先々代から妖怪退治の時には協力関係にあったからね。その先々代から巫女は温和な人が多かったのでこちらとしても付き合いやすかったし。聞いた話によると、どうやら最年少で博麗の巫女を襲名したらしい。しかも若干11歳で歴代最高と言われる腕前。興味を持つなと言う方が無理な話だ。

これはそんな巫女に興味を持った僕と歴代最高の巫女、博麗零夢（はくれいれいむ）の話。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「妖怪が暴れてる？」

「そうなんだ。最近は深夜の襲撃が多くてな…。私や里の退治屋も碌に寝れていないんだ」

「でも人里を襲ってはいけないって暗黙の了解が合ったはずじゃ？」

「最近幻想郷にも妖怪が多く住みつきだしただろ？　新参者が暴れているんだろう」

はぁ…、と気を吐く慧音さんにも活力がない。最近森の方も煩いと感じていたけど人里でも同じことになってたわけか。…ん？　森の方は僕と妖怪が『楽しい話合い』　の結果和やかな雰囲気で過ごしていますよ？　まあ魔法の森の生物自体が強いから、並の妖怪は森の不思議生物に勝手に食べられたおかげで話合う数が少なくて良かったよ。

「じゃあ僕も人里の防衛を手伝いましょうか？」

「そっちは妹紅に話を着けてあるから大丈夫だ。君には博麗の巫女と共に奴等を退治に向かって欲しい。向こうにも話は通しているから。…今までと違って凄い巫女だったぞ」

「ははは、そうらしいですね。注意しておきます」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

深夜。人里の遙か上空で巫女を待つ。だけど待ち合わせの時間を過

ぎても巫女はやって来ない。何をしているのか、どれだけ待っても姿形すら見えない。もう1人で行こうか、そう考えた時に隣から緩い声が聞こえてきた。

「あんたが協力者？」

!？　何の前触れもなく突然現れた巫女に驚きを隠せなかった。僕の驚いた姿に何を思ったのか、

「空間転移してきたんだけど、そんなに下手だったかしら」

と言い放った。眠たそうに欠伸をしながら言い放つ姿からはそんな殊勝な感じはしない。逆に強者たる存在感を放っている巫女は、黒い髪に黒い瞳、整った顔は正しく美少女と呼べる。

「伊吹大和。今夜はよろしく」

「はいはい、博麗零夢よ。よろしく」

握手の為に差しだした手には見向きもせずにそう言い放った。まだ子供だし、こんな深夜には辛いか。そう思って少女を見ていると、その視線すら鬱陶しそうにしていた。

「さっさと行くわよ。こんな面倒な仕事早く終わらせて寝ないと身体がもたないわ」

しかしこの巫女、先代たちとは違って非常にやる気なさげである。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あ〜〜もう、多すぎなのよ!!」

「確かに多いけど、数ばかりいたってね!」

上下左右を妖怪の群れに囲まれているけど何の問題もない。僕が対処する前に零夢ちゃんがお札や針、陰陽玉から放たれる弾幕で妖怪たちをどんどん地面に堕としていく。まるで全方向が見えているかのように後ろから近づく妖怪にもお札で対処している。…これ、僕いらなかったんじゃない？

ほんの数分で妖怪たちは地面で気絶していた。流石は歴代最高と呼ばれるだけはある。いずれはレミリアたちとも肩を並べる程に強くなるだろう。

「さてと、とどめを刺さないと　「待った」　…何よ、邪魔するの？」

「別に殺さなくてもいいじゃないか。しっかり言い聞かせればもう悪さしないだろうし」

「この数相手に？　私は嫌よ面倒だし。それにあとで何かされたらどう責任とるのよ」

心底面倒くさそうに嫌な顔をしている。小さいのに何故か大人を相手にしているかのような錯覚に囚われそうになるもなんとか踏みとどまる。

「それはそれ、しっかりと責任とるのが僕らの仕事でしょ」

「面倒は嫌いなの。１人でどうぞ。嫌ならこいつ等始末するから」

「ちょっと待って。……おいお前、起きろ。起きろって」

リーダーらしき妖怪を叩き起こす。ココから先は何時もやって来た通りの作業だ。妖怪の目を見て脳に幻術を直接たたき込む。してはならないこと、そしてすればどうなるかを本当に在ったかのように脳に刻みこむ。きっとこれから何日間かは悪夢に悩まされるだろうけど自業自得だ。

妖怪のリーダーは僕の話をしっかりと理解してくれたのか、何度も頷いて夜の闇に消えて行った。

頭を潰せば力のない連中は動かない。これは僕が実地で学んだこと

の一つだ。

「終わったよ」

「あんた、見かけによらず酷い奴なのね」

「それ程でもないよ」

「褒めてないわよ…」

帰って寝る。送ろうか？　変なことされそうだからいい。そんなやり取りでその日は別れた。…と言うか変なことされるって、僕ってどう思われてるんだよ…。いくらなんでも子供に手は出さないって…。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「伊吹君たちのおかげで人里も再び平和になるだろう。礼を言う。助かったよ」

「いえいえ、報酬も貰ってますしお互い様です」

事実、懐は報酬でホクホクであるのだから。

翌日、結果報告のために慧音さんを訪ねたところお礼を言われた。他にも里で贔屓にしているお店の主人や商人の人にもお礼を言われた。こうやってお礼をされると自分が役に立てていると感じられて嬉しい。

「そう言って貰えると嬉しいな。…ついでですまないが、一つ頼まれてくれないか？」

「別にいいですけど、何ですか？」

少し言いにくそうに慧音さんが言う。なんだろう、慧音さん程の人が僕に頼むことなんてそうないと思うけど…。

「実は博麗の巫女の所にお礼の品を運んで貰いたいんだ」

「…？　それって僕じゃないと駄目なんですか？」

「彼女はその…私と合わないと言うか、人里の人ともそりが合わないんだ」

「それはまた……」

難儀なことですね、とは口にはしなかったのは僕にも思うところがあったから。でもいったいどういうことなんだ？　今まで僕が知りうる中で博麗の巫女が人から避けられるようなことなかったのに…。

まあ、確かにあの少女は人付き合いとか苦手そうだったけど。

「分かりました。今日中に持っていきます」

「おおそうか！　助かるよ！　持って行ってもらうものをここまで運んで来るから待っていてくれ」

一度会っただけだから放っておいてもいいんだけど、何故か放っておけない気がした。だからそのお願いを受けたんだけど、結局慧音さんの運んできた荷物は台車一個分あった。とても飛んで運べる分ではなかったので、結局地面を歩いて行くことになった。トホホ…

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「や…、やっと着いた…」

重い荷物を運ぶこと数時間、漸く博麗神社に辿り着いた。今まで何度も訪れたことはあったけど、歩いたらこれほど距離があるなんて思っても見なかった…。

「さて、零夢ちゃんはどこに…って掃除中か」

階段を登り、わざわざ探すこともなく境内を箒で掃いている姿を直ぐに見つけることが出来た。その姿もどこか浮いているようで、やはり面倒くさそうにしているのが見てとれる。どれもが今まで見てきた巫女とは違う雰囲気をしている。

「お～い零夢ちゃん、お届け物だよ」

「……あんた誰？」

ずっこけた。おまけにここまで背負ってきた大量の荷物に潰された。

お、重い…

「ちょっと、あんた大丈夫なの？」

「い、いや平気だよ。それよりも本当に忘れたの…？」

「馬鹿にしないで、しっかり覚えてるわよ。…え～っと、とまとさん？」

「大和だよ！！」

あらそうだったかしら？　と零夢ちゃんは本気で思い出そうとしている。あの夜とは打って変わって、ころころと笑っている姿はやはり歳相応の少女のようだ。

「ところで零夢ちゃん　「ちゃんは止めて」　…零夢に届け物だよ。この僕に乗っかってる荷物。人里からのお礼の品だって」

「あら、運んでもらってどうもありがとう」

いろいろと運んできた荷物を物色していく。…あの、出来ればそろそろどかしてもらえると嬉しいなぁなんて。

「疲れたでしょ、お茶でも飲んでいきなさい」

「おお、案外優しい」

「失礼ね。お礼くらい私もするわよ」

荷物を運んでから神社の縁側に腰を下ろす。少し境内を見渡すと、来た当初には気が付かなかった砂や落ち葉で散乱としている。これも今までとは大違いだ。いろいろ考え込んでしばらくすると、零夢がお茶とお菓子を持ってきた。

「お礼の中に羊羹が入ってたわ。せっかくだから頂きましょう」

「お、いいねぇ」

しかも里でも人気の羊羹じゃないか。やっぱり博麗の巫女って慕わ

れてるなぁ。

「いつも人里で買い物とかしてるの？」

お茶菓子を一口。うん、美味しい。特に高級品とかに通じる舌なんて持ってないけど純粋に美味しいと感じることができる。こういうのを良いお菓子って言うんだろうね。

「してないわ。と言うか、人里の人間と触れ合う機会なんてないし」

「え？　なんで？」

お茶を飲みながら、ふと不思議に思った。先々代や先代の巫女も、人里ではあまり見かけたことがなかった。会うのは何時も博麗神社か、どこかの空を飛んでいる時だけだったはず。自分で思っていた以上に僕は彼女たちを知らないことに気がついた。

「…博麗の巫女は幻想郷の守り手。それ故にどこかに組することなんてあってはならない。あんた知ってる？　博麗神社が人里からも、妖怪の住処からも離れているのはそういうことなの。まあ、私が先代たちより変なのは違う理由があるんだけどね…」

そう言った一瞬、何かを悟っているような表情が垣間見えた。僅か１１歳にして歴代最高という称号を得た少女は、その代償として人

の持つ温かさという物を知らずに育ってきたのだとその時気がついた。そして今までの巫女たちもまた…。

「『空を飛ぶ程度の能力』　この能力で私は他のモノ全てから浮いてるの。あんたも私と会った時不思議に思わなかった？」

「確かに零夢の存在はどこか浮いているように感じるね」

何からも、何者にも束縛されない。それはつまり自分以外、外界との接触がほとんどないことになるんじゃ…？

「解ったらさっさと帰って頂戴。私も暇じゃないの」

どこか儚く、そして少し寂しそうに見えた。おそらく彼女にそんなつもりもないだろうし、持った能力からそう思わせることなんてないはずだけど、確かに僕にはそう見えた。そしてこの触れれば壊れてしまいそうな少女を1人にしてはいけないと思ってしまった。

「じゃあ今日は帰るね。また明日」

「明日？」

「そう。明日また来るよ」

「来なくていいわよ面倒だし。私もあんたに構うくらいなら縁側で

ゆっくりお茶飲むわ」

「じゃあ一緒に飲めばいいじゃん」

「嫌よ」

むむむ…中々に頑固なヤツめ。面倒なことに本気でそう思っていそうだからこっちも対応に困る。どう切り崩そうか？　そう考えたけどそれすら無意味に思えてくる。それに今の態度からは、さっきのが幻覚に見えてしまうくらいに素っ気なく見える。

「ええい！　嫌でも来てやるからな！！」

「あ、待て！！」

とりあえずそれだけ言って空に逃げた。わざわざ追ってこなかったのは性格だろう。むしろ追ってこられても反応に困る。

「久しぶりに面白い子に出会ったな」

１人空を飛びながら明日の予定を考える。明日は特に何もないから、朝から行って少し困らせてやろう。

数１０年変化のなかった日常に少し変化が出来たのを嬉しく思いながら、茜色に染まった空をゆったりと飛んでいった。

そしてその様子をじっと見つめる影が一つ

「貴方は食べてもいい人間？」

博麗の巫女って強いんだよ？（後書き）

博麗零夢は博麗霊夢ではないです。でも外見はそのままだと思って下さい。名前を零夢にするか零無にするか迷いましたが…。一応大和のこれからの相棒です。

雨にも負けず、子供にも負けずやりきったじらいです。すんごい頑張りました。と言っても実家では何もすることがないからこうやって書けているんですが。

大和の絵を描こうと近所の子供と一緒にお絵描きしてたのですが、無理でした。私にはアンパソマソが限界です。

子供「なにそれへたくそ～」
じらい「じゃあアンパソマソを描いてあげよう」
子供「へたくそ～」

…素直なのはヨイコトデスネ

零夢と大和。狸はヤメテ

「おはよう！」

神社に通うようになって幾数日。いや～今日も良い天気だね。それに風も心地いい。こういう時は神社で神様にお礼を言いたくなるね！　ほら、零夢が境内を掃除するほど良い天気なんだよ！

「帰れ変態」

それが神に使える巫女の言うことか！？　僕の知る巫女はもっとこう、清楚で慎ましやかで、一歩引いて男性を立てて、結婚したら男性に尽くす甲斐甲斐しい大和撫子のような人が多かったよ！　ちなみに僕の好きな女性のタイプです。誰かそんな人居ないかな～？　慧音さんとかタイプなんだけどね…。あの人僕のこと何とも思ってないから…悲しいね…。

それはこの際置いておこう。とりあえずこれは今までで一番酷い扱いだ。挨拶しただけで変態扱いを受けたのは産まれて初めてのことだよ。僕のような清く正しい魔法使いにその評価は間違っていると言いたい。

「とりあえず朝御飯ちょうだい」

「はあ！？　あんた私にたかる気！？」

「食べて来なかったんだよ。何かおかしい所でもある？」

「非常識だ馬鹿！？」

むぅ…。１人暮らしは意外と寂しいものなんだぞ？　だからこうやって会いに来てやって…あれ？　１人暮らしの少女の家に遊びに来る？　これってもしかして変態の所業…いやいや、そんなことはない！　何も疾しい気持ちはないのだからドンと構えていれば良いんだよ！！

「聞こえてるわよ変態」

「…口に出てた？」

「ええもうばっちり。このことを人里で言えばどうなるかしらねぇ？」

こ、こいつ、僕を脅そうと言うのか！？　しかし、いくら博麗の巫女とはいえ未だ世間を知らない少女、そんな相手に僕が屈するとでも…

「申し訳ありません零夢さん。この通りですからどうか許してくださいｏｒｚ」

自分、この子には勝てないと本能で察しました。

「……ハァ。とりあえず中に入りなさいな。朝御飯は駄目だけど、昼御飯くらいは用意してあげる」

「おお！？　ありがとう零「有料よ」　ケチ「あ〝あ〝ん〝！？」
何も言ってないよ？　うん、昼御飯が楽しみだね」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「あんたの作った料理って残念な味がするわね」

「悪かったね！　どうせ下手ですよ！！」

「違う言い方をすれば不味い」

「作らせといてそりゃないよ…」

呼んでもないのに来たんだから飯ぐらい作れ、もちろん私の分も。
確かに呼ばれてもないのに来たのは確かだ。でもさ、せっかく作った料理に酷評とか酷いとか思わない？　辛うじて材料費だけは払わずにすんだけどさ、何か納得いかないよね。

「でもさ、こうやって誰かと一緒にご飯食べるのって楽しいと思わない？」

「別に。１人の方が気に掛けることもないからいいわ」

１１歳にしてこの素っ気ない態度。もう子供だとかいう考えは捨てた方がいいかもしれない。だってこの年頃の女の子ってもっと可愛げがあるし。

「へ～…。それでも一応僕に気を使ってくれたんだ？」

だけどどれだけ大人ぶってもまだまだ子供。発言に隙があるから揚げ足を取りやすい。つまり逆襲しやすいってこと。伊達に長生きしてないんだよね！！

「やっぱり君みたいな女の子はって！？　その針を仕舞えよ！　危ないから！！」

「別に！　私は！　面倒なだけで！　嬉しくないわよ！！」

「そうやって全力で否定するところが…ってこれくらいで本気になるなって！？！？」

問答無用！　その言葉と同時に針にお札に霊力弾。バリエーションが豊富なことはいいことですねぇ！？　そのまま空に上がって逃走。

流石に此処までは着いて来ないだろうと思って振りかえってみた。

「何で今日は着いて来るんだよ！？」

「退治してやる！」

「横暴だーーーーーーーーーーーーーーーーーー！？」

行き成り始まった空中戦。もちろん一方的。後ろから飛んで来る弾と針を避けてながら全速力で空を駆ける。なんと逃げ切るのに加速まで使わされた。あんにゃろう本当に１１歳の子供か！？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「と言うことがあったんだ」

「……よしその巫女殺そう。私のために殺そう」

「何でいきなりの殺害宣言！？」

紅魔館のテラス。月に何度か行われるお茶会に今日も招待されたのでやって来た。折角だから零夢のことを話してみるといきなりの殺害宣言がされた。最近勉強が辛いのか、レミリアのイライラが激し

い。今も紅茶を持った手がプルプル震えている。

「ヤマトはその子の神社にこれからも通うの？」

フランドールは何時も通りで元気いっぱいだ。あの時から大人ぶるよりも甘えん坊になって僕を困らせてくれる。僕が紅魔館にいる時はアヒルの子のように後ろを着いて来ては子猫のようにじゃれついてくる。甘えられる相手がいない…そう考えると無視するわけにもいかず、流されて相手をすることが多い。でもレミリアに甘えればいいのに、そう考えるくらいは良いと思う。

「一応そのつもり。1人って辛いだろ？　だから友達になれたらいいなぁ、とか思ってる」

「うん、その巫女キュッとしよう。これ以上被害者を出さないために」

手を握っては開け、握っては開けしている姿に苦笑いを隠せない。どうやら一度能力の暴走があったらしく（僕が逃げた時）、それから長い間上手く使えなくて暴発していたからだ。今ではしっかり出来ている…らしい。でも何で姉妹揃ってこんな好戦的なんだよ…。お兄さんはこんな風に育てたつもりはないんですけど。

「パチュリー？」

「少しは周りを見なさい」

こちらも通常運転。お茶会の時以外はずっと図書館に引き籠っているみたいだ。日陰に居るせいか、日光に当たったら直ぐに変色するんじゃないかと思うほど白い肌をしている。いつも鬱陶しそうな顔で出迎えてくれるけど、それでも魔法で困ったことがあれば話を聞いてくれる案外優しい御方である。

そしてパチュリー、ちゃんと周りくらい見てるって。魔法使い足る者、常に多くの視点で物事を考えなければならないのだからそれは当然のこと。何を今更そんなことを言う必要があるんだよ。

「ねっねえ大和、今日は泊まっていくの…？」

「いや、今日は遅くなる前に帰るよ。この後博麗神社に行こうと思ってるし」

最近の日課になってるし、巫女のくせにほっといたらずっとぐーたらしそうだからね。それにまだ友達になれていないし。僕、しつこさにだけは定評があります。

「へ、へえぇぇぇぇ～～～～……そう、そう言うことなのね。ワカッタワ」

「だから今の内にウンと遊んでおこう！」

更に不機嫌になったレミリアを見て急いでそう付け加える。ストレスの捌け口は誰にだって必要だよ。我儘なお嬢様のご機嫌を損ねたら後が酷いからね。馬鹿親も煩いし。それにこうやってレミリアを弄って遊ぶのも案外楽しいと最近になって気がついた。教えてくれたのはフランだけど。曰く、お姉様苛めるの楽しいよ？　って。

「そ、そこまで言うなら「じゃあ今日はわたしとあそぼっ！！」
「こら、いきなり肩に乗るんじゃありません！」　……」

レミリアが何か言いかけていたみたいだけど、フランが肩に乗っかかって来たから聞き取れなかった。むしろフランは狙ってやってるのかもしれないけど。

「じゃあ今日は何して遊ぶ？　久しぶりにポーカーでもしようか？」

ポーカーは運がものを言う…とでも思った？　実は紅魔館に於いて、ポーカーという遊びは高度な技術を必要とする実にハードなお遊びなのだ。何故かって？　僕は未来が見える上に幻術つかって手札誤魔化すし、パチュリーはその頭脳とこの遊びの為だけに生みだした魔法で誤魔化そうとする。レミリアに至っては能力全開で運命を感じさせる引きを何度でも出来る。…不正しすぎたら全員からゲーム中に叩かれるんだけどね。もちろん敗者にはそれ相応の罰が待っている。

どのような遊びか理解出来ただろうか？　…フランドール？　元々

勝ち目がないから不参加だよ。

「え～フラン出来ないのに」

「じゃあこのままで僕と一緒に参加しようよ」

「うん、それならいいよ」

フランはそのまま僕の上で肩車の体勢に移った。僕の頭をポンポン叩いて良い調子だよまったく。テーブルにはパチュリーが既にトランプを取り出して配っていた。さあ、今日罰ゲームを受けるのは誰かな…？

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「おーい零夢、今日も来たぞー」

太陽が沈みかけた頃に僕は博麗神社に降り立った。晩御飯にありつくためだ。もちろん一人ぼっちの零夢を励ます意味も含んでるよ？

うん。

「あれ…？　居ないのか？　おーい零夢～……？」

本当に居ないみたいだ。ちぇ、せっかく晩御飯にありつけると思ったのに空振りか…。仕方ない、今日は久しぶりに妹紅に晩御飯作ってもらおう。良いお酒を持っていけばご飯くらい作ってくれるだろう。

本人が居ないことに愚痴りながら僕は妹紅の家を目指して空を飛んだ。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

「最近無駄に疲れる。原因は…あいつに決まってるか」

最近(れいむ)私に着き纏うようになった変人。確かとまと？　とか言う魔法使い。1人が寂しいとか何とか言って私に毎日会いに来る。正直鬱陶しい。そう伝えたらあいつは苦笑いしてまた来るとか言う。迷惑だということが解っていないのだろうか？　だとしたら幸せな奴かとんでもない馬鹿のどちらかだ。

「って何で私は1人分多く料理を作ってるのよ」

調子狂うわね…。いっそのことあいつを封印するか？　そう物騒な

考えが浮かぶほどに今の私は機嫌が悪い。今までここまで嫌いな奴が出来るなんてことはなかった。どいつも平等。見る顔全てが同じに見えていたのに、数日前に知り合ったあいつだけ何故か覚えてしまっている。

「やっぱり封印しよう」

邪魔者は排除、それに限る。私が駄目になっても次はいる…。でもその空白を埋めることは出来ない。如何な博麗の巫女と云えども未熟なままでは妖怪に歯が立たない。それ故に博麗の巫女の邪魔をする者は消さなければならない。

「使命感に燃えるのは良いことだけど、あの子に妙なマネされると困るのよね」

「…八雲紫」

「久しぶりね零夢。元気だったかしら？」

目の前で薄ら笑いを浮かべている大妖怪。妖怪の賢者などと呼ばれているが私は全くこいつを信用していない。会ったことがあるのは私が博麗の巫女を襲名した時のみ。一度会っただけの存在を信じられる奴がいれば私の目の前に来ればいいわ。そのおかしい頭をお祓いして治してあげる。

「どういうことよ。人間の1人や2人の命くらい、あんたにとっちゃ何の意味もないでしょうに」

「まあそう言わないで。あの子だって善意で貴方の為を思っての行動なのよ？」

どの口が『善意』　なんて言うのか。知っているのよ？　あんたが妖怪の腹を満たすために『善意で』　幻想郷以外の人間をここに生贄として神隠しに合わせていることを。

「あの子はきっと今日も貴方の様子を見に来るわ。だってあの子、しつこいもの」

ニヤニヤと嘲笑うこいつが鬱陶しい。あいつだけじゃない。こいつもたった数回会っただけで私をイライラさせてくれる。

「残念ね。つい最近本気で追い返したの。あんな目に合えば二度と来ようなんて思わないわ」

お生憎様、追い返すのに陰陽玉まで使ったのだ。これで来たらただの馬鹿でしかないわ。

「じゃあ賭けようかしら？」

「何を？」

「大和が来るかどうか」

「……いいわ。その賭け、乗ってやるわよ」

期限は太陽が沈むまで。私が勝てば、これから私が死ぬまで食料を無償で渡すこと。八雲紫が勝てば『出来るだけ』　あいつと仲良くすること。…賭けが不釣り合いだけど関係ない。どの道私が勝つのだから。

そして間もなく日入りという時間。スキマの中に姿を隠し、境内の様子を覗き見る。どうだ、やっぱりあいつは現れなかったじゃないか。そう言って隣を見ても八雲紫は未だ笑みを絶やしていない。まあいい、どうせもう来ないだろう。そう思った矢先のことだった。

「来たわ」

！？　ウソ！？　あれだけ追いかけ回したのにわざわざ来る！？　馬鹿じゃないの！？

「言ったでしょ？　あの子、相当しつこいって」

勝ち誇った笑みを浮かべる目の前の存在に歯ぎしりをして悔しがっ

た。ばれない様にだけど。でもふざけてる。お人好しとか、優しいとかそんなんじゃない。どこか頭イッてんじゃないのあいつ？

「あれ…？　居ないのか？　おーい零夢～……？」

「あらあら…。貴方、よっぽど好かれたみたいねぇ」

「馬鹿言わないで頂戴。誰があんな奴」

結局私を見つけられなかったからか、少し境内を見渡した後空へと消えて行った。

「賭けは私の勝ちね。そうねぇ、名前で呼ぶのが嫌なら『狸』って呼んであげたらいいわ。たぶん喜ぶでしょうから」

そう言って八雲紫はスキマの奥に消えて行った。私は目の前で起きたことに呆然としてしまっていたが、あいつがスキマから私を強制的に外へと出したところで正気に戻った。

「あいつ、今日も来た…」

何故かは知らない。ただ気に喰わないことははっきりしている。でも八雲紫との賭けに私は負けた。…賭けに負けた私は約束を守らなければならない。『出来るだけ』　相手をすることにしよう。

「伊吹とまと…うん。狸で十分ね」

次の日も伊吹とまとはやって来た。名前は大和だから！　と煩く言って来るので、その時に狸と読んでみた。すると一度派手に転び、そして誰に聞いたかを問い詰めてきたけどのらりくらりと躱してやった。狸の困った顔を見たその時、初めて楽しいと思った自分に驚いた。

「貴方達は食べても良い人類？」

遠くで呟かれた言葉は風に流されて消えて行った。誰にも気付かれることもなく…

零夢と大和。狸はヤメテ（後書き）

何だろう、巫女が出てきてから妄想が止まらないじらいです。巫女だけじゃなく、原作キャラと大和の絡みを書きたかったので今回は紅魔館の皆さんに登場してもらいました。おぜう様、もう後戻りできないレベルになったような気が…どうしようか。

一番最後のセリフはルーミアですが、彼女の出番はまだ先です。それより先に幽々子様とお庭番が先になるかと。幽々子様……腕が鳴りますね…！　主人公には頑張ってもらわないと。

零夢についてですが、基本的に面倒だ面倒だと言ってますが、博麗の巫女として妖怪退治などの使命感には燃えています。もちろん有事の際にはその才を遺憾なく発揮することでしょう。

狐、狸、巫女さんと亡霊の主従

僕が零夢と出会って2年程経った。零夢もあと2年で男性で言う元服を迎える。そんな彼女は成長麗しく、大人と子供のちょうど中間という危うい色気を持つようになってきた。けどまあそんなの関係ないけどね。相変わらず面倒そうに生活してるし、僕に対して酷いし（ここ重要）。

今でも素っ気ない態度をとられているけど、それでも出会った当初に比べればだいぶ柔らかいと言える対応をされるようになった。2年も近くで見ていれば零夢という人間性も見えてくるものだ。

「狸、買い出しに行ってきて」

「自分で行きなよ」

朝以外のご飯は神社で済ませることが多い。そしてご飯を誰が作るにしても材料がいる。そして今日も今日とて晩御飯の買い出しの擦りつけ合い。始めはただの言い合いから始まり、酷くなれば寝技・投げ技なんでもござれの取っ組み合いが始まることもある。

そして僕はほぼ毎日、朝から晩までを博麗神社で過ごすようになっている。魔法の練習や武術の修行も神社の境内で行っている。魔術式の構築は部屋の中でやっているけど。そうしていると零夢が術式の間違いをカンだけで指摘してくる。僕も気が付かないのにカンだ

けで…しかも的確に言ってくるから年上としての尊厳が危うい…。

「何よ？　どうせあんた今日も家で食べるんでしょ？　だったら買ってきなさいよ」

「嫌だね」

ホント、僕のお金で材料を買うくせによく言いますね！

実は博麗神社の財政は赤字と言うものでは表わせれない程に酷い。今までの巫女たちはあまり人里に行かないとは言っても、妖怪退治の報告の際にお礼と称して多くの食料や生活用品を貰っていた。でも零夢は妖怪退治をしても報告にすら行かない。だから僕が代わりに報告しているのだけど、そのせいなのか人里での零夢の評判はあまり良いとは言えない。人によっては彼女を無能呼ばわりする人もいる。本人は気にしてないようだけど、否定する僕の身にもなってもらいたい。

さっき妖怪退治の話が出たので、ちょっとそのことを話そうか。僕と零夢が一緒にいるようになってからは自然と妖怪退治でも共闘することが多くなった。前衛・僕、後衛・零夢の布陣で退治に向かっているのだけど……何時も後ろから撃たれます、ハイ。

射線上に入んなボケ、だったらしっかり狙って撃てアホ。妖怪を滅そうとする零夢に止めようとする僕、幻術で出来た僕を躊躇いなく吹き飛ばして舌打ちする零夢、その零夢もろともマスタースパークで吹き飛ばす算段をしている僕。妖怪ほったらかしにしてガチンコ

したこともあるよ？　どう考えてもはしゃぎすぎですありがとうございました。こんな会話とある意味での醜態が戦闘中にほぼ毎回行われている。

「「…ブッ飛ばす（わよ）！！！」」

「……取り込み中すまないが、少しいいだろうか？」

「藍さん？」「狐？　何の用よ」

掴み合いの取っ組み合いが始まりかけた頃、部屋の入り口から声が聞こえてきた。八雲藍さん。最早伝説となった九尾の狐にして紫さんの式でもある忙しい御方。人里で油揚げを大人買いして喜んでいる姿はなかなか和むと噂の主婦妖怪だ。

「すまない。呼びかけはしたのだが、まったく気づく気配がしなかったのでお邪魔させてもらった」

「いえいえ、別に構いませんよ」

「あんたが言うな」

生活費を全て出して上げている人に言う言葉じゃないね。零夢と一緒に生活してて解ったことがある。こいつ、生活能力が全くといってない。服は脱ぎっぱなし、箪笥は開きっぱなし。境内の掃除はただ箒を持つだけ、料理に至ってはカンで味付けをする始末。いや、

料理は何故か美味しいからいいんだけどさ。

洗濯くらいしたら？　じゃあやっておいて。そう言われたので下着もろとも洗ってあげたら寝技かけられた。下着見えてますよ、あと首絞まってるから！？　変態は死ね！　四の字固めは人を殺すには十分な殺傷力があるので皆はマネしないように。

とりあえず零夢はご飯以外の生活能力が皆無と言ってもいいのだ。

「実は折り入ってお願いがあるのだが…」

「自分でやんなさい。以上」

「何ですか？　僕『ら』　でよければやりますけど」

「勝手なこと言わないで頂戴。面倒は嫌なのよ」

「困っている人見つけたら力になろうと思うのが普通だろ」

「あんたが常識を語るな！？」

何だって！？　何よ！？　いがみ合って取っ組み合いが始まった僕たちに

「荷物を届けるだけでいいんだ！　……ええい聞けお前たち！！」

2人でやり合っている僕らに温和な藍さんも癇癪を起したのか、取っ組み合いをしている僕たちに一発ずつ妖力弾を放つも、それくらいでは僕らを止めることにはならなかった。

「だいたいあんたは無責任なのよ！　いっつも私の周りをうろついて！！」

畳の上で転がりながらマウントポジションのとり合い。大人げないとか女の子なのにとか、そう言うのは僕らの間では無粋な物言いだ。常に平等で物事を見る零夢に対して、どちらが上とか下とかそんなことを説いても意味がない。…今は別だけど。

「はん！　寝言で僕の名前を1回呼んだくせによく言うよ！！」

「その後『出て行けって言った』　って言ってたでしょうが！　それに1回なんて数に入らないわよ！！」

「いい加減にしないか！！」

◇◆◇◆◇◆◇◆◇

結局喧嘩が終わったのは日が沈み出したころ。3人とも服がボロボロになるまで暴れ通した後、全員そのまま畳に仰向けに倒れ込んだ。

両隣からも肩で息をしているのだろう、荒い息遣いが聞こえてくる。

「何故私はここでこんなことをしているのだろうか…」

「そう言うあんたが一番暴れてたじゃない…」

「同じく…」

「…紫様の相手は疲れるからな」

紫さん、か。あの時以来一度も姿を見ていない。何処に住んでいるのか、何をしているのかすら解らない。右隣で横になっている零夢も何か思うところがあるのだろうか、難しい顔をして考え込んでいる。

「大和殿に一つ忠告しておく」

これは老婆心になるのかな…。そう言って左隣で横になっている藍さんがいきなり深刻な様子で話しかけてきた。

「…何ですか？」

「決して紫様を怒らるな。あの御方は普通ではない。敵にすれば全てを失うぞ」

少しの言い淀みもなくはっきりとそう言い切った。私が言ったことは紫様には内緒だぞ、と付け加えて。そう言われ、問い詰めようと隣を覗きこんだ時には、既に藍さんは目を瞑ってしまった。

「ってあんたここで寝る気!?　まさか泊まるとか言わないでしょうね!?」

「?　別に構わないだろう?」

「構うわ!」

「紫さんはどうするんですか…?」

「少し困らせて、私が居ることへのありがたさを自覚させてやる」

フフフ…と暗い笑みを浮かべている藍さんは非常に怪しい雰囲気を醸し出している。紫さんの相手って、相当苦労してるんだろなぁ。僕もいろいろと苦労してるけど。

「じゃあ僕もお休み」

「あんたら帰って寝ろーーーーーーーーーー!!」

無理もう限界。僕も藍さんもそのまま寝て、結局零夢もそのまま寝たのだろう。朝起きた時には見事な川の字が部屋には出来ていた。

◇◆◇◆◇◆◇

「すごい階段だ…」

「亡霊でお金持ちって…」

白玉楼と呼ばれる場所へ荷物を届ける。ただそれだけの仕事に燻っていた零夢をその気にさせたのは藍さんが「お礼は出す」　の一言だった。…現金な奴め！

そして白玉楼にやって来た。荷物は風呂敷一つだけ。中を覗くなんて野暮はしてないけど、あまりの軽さに本当に何が入っているのか不思議に思う。そして目の前の長い階段。飛べば関係ないけどあまりの長さに僕も零夢も言葉を失っていた。

「話しは通してあるらしいから早く行こう」

「…そうね」

…最近、零夢の調子がおかしい。以前はそれほどでもなかったけれど、痛そうに頭を抱える姿が多く見られるようになった。僕にバレない様にしているみたいけど、それすら僕にバレている。今も少し

返事が遅れたのもそのせいだろう。…とにかく、早く用事を済ませて帰らないと零夢が辛そうだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「よくぞ参られた。儂は魂魄妖忌、白玉楼の庭師をしている」

「博麗零夢。見ての通りの巫女よ」

「伊吹大和。魔法使いです」

出迎えてくれたのは1人の高齢の剣士…いや半人半霊の侍だ。藍さんからそう聞いておかないと、彼の周りを浮いている魂？　に言葉を失って失礼をしてしまうところだった。2本の刀を腰に差し、微動だにせず佇んでいる姿からはある程度以上の実力を感じとれる。おそらく僕と同じ達人の部類だろう。…僕で勝てるかな…？

「魔法使い殿は儂の実力が気になるようだ。だがまずは主に挨拶を通して貰わないとな」

「すいません（バレてたか）。では案内をお願いします」

「承知した」

綺麗に整えられた庭を眺めながら長い廊下を歩いて行く。廊下や襖に張られた障子にも汚れもなく、毎日隅から隅まで清掃している様子が見てとれる。この大きな家を清潔に保つのは並大抵の苦労じゃないぞ？

「随分と綺麗にしてるわね。客人が来るから掃除したのかしら」

零夢は思ったことをそのままを口にしているから、少し失礼な物言いなのはお約束となっている。何時も素直なのは良いことだけど、そろそろいろいろと学んだほうがいいと思う。

「掃除は何時もしておるよ。広い分苦労はあるが、美しくなった時の気持ちはなんとも言えんぞ？」

零夢の皮肉にも笑って返す妖忌さん。庭師と言うだけあって、何かを綺麗にすることを楽しく思えているのだろうか。僕や零夢には到底理解できない考え方だけど流石は侍、この程度で心を乱されるようなことはないようだ。

「ここだ。失礼のないようにな」

開けられた襖の先には1人の女性が居た。桜色の綺麗な髪に、輝夜姫もかくやと思わせる端正な顔立ち。貴族を虜にした輝夜とはまた

違う感じを受ける、正しく絶世の美女と呼べる人。この人が藍さんの言っていた亡霊なのだろうか。

「初めまして、博麗の巫女。そして鬼の魔法使いさん。私は白玉楼の主、西行寺幽々子と申します」

見る者を魅了させるこの世のものとは思えないアヤシイ色気と、触れれば崩れ落ちそうな儚さを持ち合わせた、柔らかい頬笑みを浮かべる美女を前に僕は言葉を失った。

つまり、あまりの美人を前に呆けちゃったわけ。…輝夜ではなかったのにね。

狐、狸、巫女さんと亡霊の主従（後書き）

GWに子供と遊ぶ以外は暇なじらいです。

次回からは白玉楼での話になりますが、1話か2話で終わってしまうかと。なので、その間に幽々子様のカリスマぶりを書けたらなぁと現在も試行錯誤しています。中々に難しい…。

そして妖忌も変態さんではなく、カッコイイお爺さん目指してます。たぶん出番は中々無い思いますが、大切な男キャラなのでしっかりと生かしていきたいです！

彷徨い続ける紅白の蝶

頭が、イタイ。

伊吹大和。妖怪の山出身。義理とはいえ人間にしてあの伊吹鬼の息子であり、今は魔法使いになって魔法の森の前に居を構えている。

その男が私(れいむ)の周囲を騒がしくしてもう2年経つ。始めから嫌な奴だった。初対面の私の中に土足で踏み入り、傍若無人にかき乱す。そしてかき乱すだけかき乱して、それを悪いとも思っていない。私の真っ白な部分を汚した大罪人だ。

あいつと一緒にいると自分のペースを乱される。すぐ怒るになったし、よく喋るようになってしまった。…そしてそれを歓迎し、暮らしの一部として迎えている私に一番腹が立つ。

頭が、痛む。

こんなこと私は望んでない。だって博麗の巫女は幻想郷で中立の存在。誰かと懇意にすることなんてあっては駄目なのだから。先代たちもまた、そうやって生きてきた。それを理解している癖に絡んでくるあいつが本当に大嫌いだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「これが届け物です」

「確かに。受け取りました」

藍さんから頼まれていた届け物を渡す。それを受け取ってもらい、頼まれていた仕事は終了。ほっと一息つくと同時に、渡した物の中身が気になった。そしてそんな僕の様子に気がついたのか、西行寺さんは苦笑してその中身を教えてくれた。

「中身はただの手紙よ。紫からの」

「紫さんと知り合いなんですか？」

「ええ、無二の親友といったところね」

「…あの狐、だったら自分で届ければよかったのに」

確かにそれなら自分で持っていけばよかったのにね。しかも紫さんならスキマを使えば一瞬で届けることが出来るのに、なんで僕たちに届けさせたのやら。少し気になるけど、今の僕はそれ以上に気になることがある。

「…儂もお主も武人、考えることは同じか」

魂魄妖忌さん。白玉楼に来てからずっと彼の実力が気になっていた。高齢のお爺さんという見た目に似合わない身のこなしに安定した重心。武の真髄を極めた人たちが放つ人と一戦交えてみたいと言う僕の気持ちはしっかりと届いていたようだ。

「みたいですね…。すいません西行寺さん、庭をお借りします」

2人同時に席を立ち、庭へ向かって歩き出した。木の葉舞う庭で少し距離をとって向かい合う。僕も妖忌さんもまだ始まってもいないのに闘志を剥き出しにしており、身体からは気の揺らぎが大きくなってきた。

「これほどまでに気持ちが高まるのは久しぶりです。良い闘いをしましょう！」

「…勝負！」

互いに相手に向かって駆けだす。僕は左手に逆手で短剣を持ち、妖忌さんは二本ある中の長い一振りを振り抜いた。僕はそれを短剣で逸らし逆襲の蹴りを放つが、後方へ跳ぶことによって避けられた。

「ふむ、手加減は無用か」

「本気を出してくれないと怒りますよ？」

僅か一合い。たったそれだけでお互いの力量を計りきる。この程度が出来ずに何を達人と呼ぶのか。

「では鬼の子の力がどれほどのものか見せてもらうとしよう」

鞘に入っていた残りの一本を抜き、一刀流から二刀流になった時、妖忌さんから放たれていた気は更に力を増していく。それも肉眼ではっきりと彼の制空圏が見える程に大きくなり、ある一定の大きさになるとピタリと止まった。剣気とでも言うのだろうか、甲高い音が響くと同時に彼の周囲にある木から落ちてくる葉は真っ二つになったり消し飛んだりしている。額に汗が滲み、口の中が渇く。正に達人。そう思うと自然に猛獣のような笑みが零れた。これほどの武人と闘えることへの喜びだろうか。だとしたら、僕も相当な戦闘狂だ。

「行きます！！」

「妖怪が鍛えたこの楼観剣に、斬れぬものなどあまり無い！！」

勝ち目は少ないだろうけど、今は出来るだけの力を持って相手をしよう！！

◇◆◇◆◇◆◇

…今日は頭が余計に痛むわね。そう言えばあの変態が亡霊に見惚れているところを見た時が一番痛かった気がする。あの変態狸が自分の品を下げるのは構わないけど、一応一緒に居る私にもその影響があることを少しくらい考えてもらいたいものだ。

「ちょっといいかしら？」

「…何か用？」

「2人が遊んでいる間に少しお話でもしない？」

「頭が痛いの。後にしてくれない？」

私に話しかけるな、余計に頭が痛くなる。今も庭で人外な戦闘を繰り広げているあいつの姿を見ているだけで頭に響く。斬られそうになり、泥だらけになっているくせに楽しそうに笑っている。正直理解に苦しむ。だから痛んでいるのか？　とにかくこの上会話だなんて頭を使うことなんてしたくもない。

「その頭の痛み、それは貴方自身の心の叫び」

「……何ですって？」

「可哀そうな子。人を知らず、己を知らないから変わることさえ出来ない。いいえ、変えれることすら知らない」

「何言ってんのよ、あんた…」

痛む頭をなんとか起こして亡霊を見る。するとどうしたことか、亡霊姫は心底憐れむような視線で私を見つめていた。そしてその瞳の中には明らかな侮蔑と同情が見てとれた。それと同時に、こいつと私が根っ子の部分で同じではないかと私のカンが訴えてきた。『本当の自分を知らない』　のだと。

…違う……私はあんたとは違う！　だからそんな目で私を見るな！

「自分を知りなさい。そうすれば、今の貴方に必要なのが彼のような友人だと理解できるはずよ」

「自分を知る？　必要なのは友人？　あんた、頭沸いてんじゃないの？　私は望んで1人で居るの」

何を言うかと思えば…。仕様もない、そんなくだらない話を私にしないで頂戴。

頭に再び激痛が走った。

「孤独を求めるなんて、そんな自分に嘘をついては、自分を知らないままなのは駄目よ」

「お説教でもするつもり？　私は自分をしっかりと理解している。だからいらぬお世話よ」

掌と額が汗ばんできた。目を開けているのも辛いほどに頭が痛む。

「貴方が理解しているのは古い自分よ。それは今の貴方じゃないわ。だって貴方、自分自身さえ愛せてないもの。貴方自身のためにも、自分を知りなさい」

「…私の…ため、ですって？　…そんなのただの自己満足よ。成果が上がれば自分の、失敗すれば誰かか何かの事象のせいにする。あんた、本当は自分自身のために言ってるくせによく言うわね」

その点はあいつも同じだ。人・妖怪問わず己の目の前で死ぬのが許せない。とんだ自己満足野郎だ。これが私があいつのことが嫌いな理由の一つでもある。

そして目の前に居るこいつは確実に私と自分を重ねて考えている。馬鹿な奴。私は私、あんたはあんたでしょうが。

「…確かに私自身に言い聞かせてる部分もあるわ。でも私の場合はもう遅いの…。でもね、『愛』　に於いてそれはないわ。だって純粋に、能動的に行われることですもの。自己満足なんて答えでは覆せないわ」

「…あんた、結局何が言いたいわけ？」

もう限界。頭の痛みも、こいつとの会話ももう沢山。早く帰って早く寝よう。明日になればこの頭痛も…

「……彼のこと、『愛』　してしまっているんでしょう？」

「！？」

途端、頭痛が引いた。

「本当の自分を探すために誰かを求める。それは素晴らしいことよ。今まで孤独だった貴方が、彼の隣という漠然とした安心感を求めるようになるのは当然のことだわ。決して恥じることじゃない。でも孤独だったのは貴方が自分自身を愛することさえ上手くいってないからなのよ？　人を愛するのであればまず自分から…。だから自分自身を知り、自分自身を誇り、愛しなさい。何者でもない、貴方自身のために」

「……余計な、お世話よ……」

あいつに出会ってから2年。徐々にヒビが入っていった私という器が割れ、中にあった何かが音を立てて流れ出すのを私は感じた。

「…もう帰る。あいつに伝えておいて」

私は逃げるようにその場を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

「ふむ……引き分けか」

「……いいえ、僕の負けですよ」

紙一重で斬撃を躱し、短剣で逸らし、一歩も引かずに撃ち合うこと数十分。僕の浸透勁と、妖忌さんの二刀の斬撃がお互いの身体に当たる直前で停止した。僕の服は所々斬られているけど、反対に妖忌さんは無傷。お互い大きなダメージがないのは、大技を控えて純粋な技術のみで闘ったから。

無傷と多数の浅い切り傷。誰が見ても僕の負けと判断するだろう。

「2人とも凄かったわ。良いものを見させてもらいました」

「お嬢様、少ししか見ておられなかったのでは？」

「あら？　妖忌は余所見するほど余裕があったのかしら」

「嘘!?　まだ余裕あったんですか!?」

「いや…うむ。まぁ、な」

嘘だと言ってよ妖忌さん…。魔法を使わなかったとはいえ、それ以外は全力で立ち向かったのに、それでも余裕があったなんて言われたら流石にへこむよ…。

「少し目に入っただけであって、そこまで余裕があった訳ではない」

慰めは要らないですよ…。

でも、まだまだ僕も未熟だなぁ。…よし!　もっと強く、もっと強くなろう。僕の周りにいる人たちが何時も笑って暮らせるように強く!

「…ってあれ?　零夢はどうしたんですか?」

「…先に帰ると言ってたわ」

「そうなんですか」

あちゃぁ、退屈させたかな。零夢の体調が悪いことを忘れるくらいに闘いに熱中してた僕が全面的に悪いか。今から神社に向かっても

いいけど…

「今日はもう来るな、と言ってたわ」

「あ～…はい、わかりました」

なら仕方ない、今日は僕も自分の家に帰ろう。昨日は結局泊まったから2日ぶりの我家だ。ご飯は…人里ですまそう。手持ちもまだあるし。

「じゃあ僕も帰ります。今日はすいませんでした」

「ええ、今度も2人で来ればいいわ」

「ありがとうございます。それでは」

こうして僕は白玉楼を後にした。

今になって思う。この時、僕は気付いているべきだったのかもしれない。どうして零夢が1人で帰ったのかを。

◇◆◇◆◇◆◇

「…儂にはいらぬお世話と思いますが」

「あら、妖忌も気付いていたの？」

「何分、あの子の何倍もの時間を生きておりますので。何を悩んでいるのかくらい、顔を見れば判断できます故」

「長生きするのも考えものねぇ」

本当、紫も私も長く生き過ぎた。だからこうやって欲が生まれる。いいえ、紫の場合は初めからそれを望んでいたと言うべきかしら。

…でもね、

「私まで馬に蹴られるのはごめんだわ…」

出来れば私を巻き込まないでもらいたい。

「さよなら。私の初めての友達…」

深夜の博麗神社に少女の声が響く。それと同時に1人の少女が幻想郷から姿を消した。

彷徨い続ける紅白の蝶（後書き）

サブタイトル、厨二乙。そしてこんな終わり方ですいません、じらいです。ちょっとカッコつけてみました。

ゆゆ様何が言いたいの？

人を愛するのなら自分愛しなさい。何故？　自分すら愛せないのに他人を愛するなんて出来ないでしょうが→自分を愛するには自分を知らないと出来ないでしょうが→だから自分を知りなさい。その後でやっと相手も・・・です。すいません。私のただの戯言だとスルーして下さいｗ

自答編も次話で終了です。実はもう出来あがっているので投稿しようと思えば何時でも出来るのですが…別に今度でいいですよね？この後は日常を少し挟んで博麗大結界→オリジナル異変→原作準備となる…ハズ。

今日実家を出ました。最後に近所の子供に帰んな！　と泣きつかれて逆に泣きたくなりましたｗ　予定なんて何もなかったけど、いいＧＷでしたよ…

貴方の隣に立つ為に（前書き）

独自解釈の塊ですけど許してください

貴方の隣に立つ為に

愛し合うということは、お互いの顔を見つめることではなく、むしろ同じ方向を一緒に見つめることだ。

――――サン・テグジュペリ――――

◇◆◇◆◇◆◇

「…よし、今日も元気に行こう」

僕が一人で白玉楼に荷物を届けに行ってから２０日。今日もいい天気…と言いたいところだけど、生憎と空は曇っている。でも気分だけは元気に行かないとね。

「今日も神社に…ってあれ？　何で今日も誰もいない神社に行こう

と思ったんだ…？」

最近…とは言っても白玉楼から帰って来てからのことだけど、何故か誰もいないはずの神社に行こうとする自分がいる。誰もいないのだから行っても意味がないのに、毎朝神社に行かなければならないと思ってしまう。疲れているのか、それとも地獄廻りの最中にそういう薬を師匠に飲まされたのか…。いずれにせよ、不思議なことに変わりはない。

「とりあえず今日も暇だし、タケノコでも採りに行こう」

身支度を済ませてから、僕は竹林めざして空を飛んだ。

◇◆◇◆◇◆◇

「あ。妹紅だ。おーい！」

「！　やっと見つけたぞ大和！！」

「へ？」

タケノコを採って竹林を出ようとすると、妹紅が歩いているのを見

つけた。少し採り過ぎたから御裾分けでもしようと思って声を掛けたところ、何故か怒鳴るように声をぶつけられた。

「お前と言う奴は～～！　どうして黙っていたんだ！！」

「ちょっと待った！　何言ってるのか分かんないって！？」

襟首を掴まれて頭を揺すられる。目が、目が回るって！？

「お前が輝夜と知り合いだったってのは本当なのか！？」

「ブフォッ！？」

「うわっ、汚いな！？」

思わず吹き出してしまった。と言うか妹紅さんや、たかだか口から出ただけの液体を汚いなんて酷いです。そう思いながらも頭をガクガクと揺すられるままになる。ただ2人のいざこざに巻き込まれたくなかったから嘘ついていただけのに、何でここまで怒られるのか！　そして何でこんなタイミングでバレることになるのか！？

「まさか…お前もあの女の毒牙にかかっているんじゃないだろうな！？」

「……へ？」

「だから！　お前も私の父親と同じようにあの女に騙されているのか！？」

「…僕が輝夜に？　フッ…妹紅、それはあり得ないよ」

やれやれ、少し落ち着いたらどうだい？　と前髪を手で払いながら自分でも気持ち悪いく思うくらい格好つけて言い、襟首を離してもらった。…妹紅が少し引いた気がしないでもない。だってさぁ、よ～く考えてみてよ。輝夜だよ？　あの我儘お姫様の相手とか勘弁願いたいというか、こちらから願い下げと言いますか。

その辺りのことを妹紅によく言い聞かせた。何度か確認されたけど、僕の話すことに嘘偽りがないことをどうやら理解してもらえたようだ。

「でも何で急にそんなことを？」

「前に輝夜と殺り合った時にあいつが言ってたのさ。『古い友人に会えて機嫌が良い。今日は負ける気がしない』　ってな。それでよく竹林に出向いているお前じゃないのかと思ったんだ」

「あ～…（輝夜がバラしたのか）」

あんにゃろう、僕の気苦労も知らないであっさりバラしやがって…。輝夜には僕が避けてることを教えたほうが良かったかな？　でもそうすれば絶対理由を聞かれてたしなぁ。うん、バレるべくしてバレ

たと思おう！　…でも古い友人に会えて、か。輝夜も嬉しいことを言ってくれるよ。

「ところで聞いたか？」

「ん？　何かあったの？」

「聞いてないのか？　最近騒いでいた妖怪連中、退治されたようだぞ」

「ああアレ。噂は聞いてたけど、退治されたんだね」

妖怪同士で争っていたとか言うあれか。出来れば殺さないでもらいたいけど、僕の目の前の出来事じゃないからどうしようもない。ただ悪いことをすれば必ずしっぺ返しが来るということをいい加減理解して欲しいとは思う。

「ところがこの話には続きがあってな。どうもあり得ないやり方で退治されたらしい」

「あり得ないやり方？」

ん～、酷い殺し方なら大抵のモノは聞いたことあるよ。騎士団にいた時に拷問と一緒に一通り教えられたからね。教える側のケビンさんは平気そうだったけど、教えられる側の僕は聞くだけで吐き気がしてた思い出がある。うおぇ、思い出したら気持ち悪くなってくる。

「なんとな、争った跡地から博麗の巫女が使うお札が多数見つかったらしい」

「え……？」

「不思議なもんだよな。今は博麗の巫女は不在だっていうのに。あ、だから妖怪たちも暴れたのか」

ちょっ、ちょっと待ってよ。博麗の巫女が不在ってそんなのあり得ないよ。だって今の巫女は…あれ？　なっ何で思い出せないんだ！？

――狸、また来たの――

――今日の晩御飯、あんたが作りなさいよね――

細い線にまだ少女のような身体つき……輪郭はぼやけて思い出せるのに、何で顔や名前は出て来ないんだ！？

――何時も私の周りをうろついて！――

「おい大和、どうかしたのか？」

誰だ？　誰なんだ！？　何時も会ってたんだ！　何時も面倒くさそ

うにして、何に対しても平等で、でも博麗の巫女としての使命だけは決して手を抜かなかったあの少女を！　何で僕は思い出せないんだ！？

「っらあぁぁぁッツツ！！！！　ッツ～～～～～～～～！？！？！？」

声を張り上げ気合一閃、思いっきり自分の頭を殴った。自分でも褒められるくらいの良い拳に酷い鈍痛がしたけど、その御蔭で大切なことを思い出すことができた。

「お、おい大和。お前大丈夫か…？」

「大丈夫！　逆に何時もより頭冴えてるよ！　それとありがとう、これお礼に受け取っといて！！」

「おっ、おい！？」

採ったタケノコを全て妹紅に投げつけて走り出す。向かう先はもちろん博麗神社だ。あの巫女、いったい僕たちに何したんだよ！

◇◆◇◆◇◆◇

「零夢！　居るんだろう零夢！　隠れてないで出てこい！！」

無人の博麗神社。いつも呑気に境内で箒を持っている巫女の姿はなく、それどころか気配すら感じ取ることが出来ない。まるで始めから居なかったか、存在そのものに気が付けないかのように。

「気配がない…。いいや初めからなかったかのように感知できない。……まさかあいつ」

僕はある一つの可能性に考えつき、博麗神社にある倉庫へと向かう。

「これだ…くそ、結界で封印されてるのか。箱を開けれない」

倉庫の中を漁って見つけたのは、博麗の巫女が修行に使うと言っていた書物が入っている箱。この中には博麗の巫女が使う奥義の全てが記されている…と思いたい。たしか零夢は前にこう言っていた。博麗の巫女の奥義『夢想天生』　は全てから浮く技だと。たぶん零夢はこの夢想天生を使って、僕も含めて幻想郷に住む全員から浮き、自分の存在を周囲に感知することすら出来ないようにしているのではないだろうか。だから皆、零夢のことを忘れたかのように扱っているのではにだろうか？

「右手に魔力、左手に気を！　博麗の巫女の皆さんごめんなさい！

悪いけど、この結界ブチ抜かせてもらいます！！」

他に方法があったろうけどそんな時間すらもったいない。厳重に張られた結界を力技で破った。

あの日の夜以来安定してきたこの技、今では対師匠戦の切り札として使っている。この不思議な力で身体を覆えば、気や魔力で身体強化する何倍もの力を得ることが出来る。でもこの効果はこの技の第一段階でしかない。その先にある境地を僕は一度だけ体験したことがある。

「やっぱり夢想天生…全てから浮く技なのか。でも零夢のやつ、浮くにしても限度があるだろ…」

壊した箱の中にあった書物を見て、僕は自分の考えが間違いではなかったことを確信した。…歴代最高という才能を無駄に使う零夢に肩が下がる思いです。しかし気を落としている訳にはいかない。何故こんなマネをしたのかを問い詰めるためにも、なんとしてもあの巫女を見つけ出してやる！

「夢想天生を破るには……あ〜〜何で書いてないんだよ！！」

術式とか方法とかわけ分からないことは書かれているのに、対処法が解らなければやりようがない。夢想天生を使っているということを理解できても、それを破れなければ意味がないじゃないか！　ど

うしろって言うんだよまったく！

苛立ちを隠せずに境内へと向かう。お手上げだ、僕には為す術もない。頭を抱えて境内をうろつく。

…零夢は今も僕の行動を見ているかもしれない。だから一縷の望みを込めて声を張り上げた。

「零夢、聞いているんだろう！？　僕はお前が姿を現すまでここから一歩も動かないぞ！　雨が降ろうと風が吹こうと、何でお前がこんなことをしたか理由を聞かせてもらうまでここを離れないからな！！」

それだけ言って境内に座り込んで目を瞑る。僕はね、諦めの悪さとしつこさだけなら世界一の自信があるんだ。だから零夢、君が出てくるまで僕は待つよ！　……他にやりようもないし。

◇◆◇◆◇◆◇

白玉楼から帰った後、私（れいむ）はまるで抜け殻のようになってしまった。一日中、食事も睡眠も取らずにただ呆けていた。あの亡霊姫に言われたことがあまりにも自分を打ちのめしたからだ。

「博麗の巫女は…誰とも懇意にしては駄目なのよ…」

幻想郷の秩序を守る。そのためには何処の勢力とも、誰か個人とも深い付き合いをしてはならない。だって情が移れば判断を鈍らせてしまうから。中立でなければならないのは自分の責務だと私は思っている。

だから私は浮いた。全てはあいつから逃げるために。妖怪たちが博麗の巫女が不在だと信じ込み騒動を起こしたようけど、それはしっかりと私が抑え込んだ。あいつから逃げても、博麗の巫女としての責務から逃げることだけはできない。

私が姿を消して二十日。私は確かに浮き、全てから解放された。でもあいつからは解放されたとは思わなかった。離れれば離れるだけ気になって仕方がなかった。それでも誰もが私を感知できなかったし、できないはずだった。私は確かに解放されたはずだった。

けどあいつはやって来た。どうしてか知らないけど、あいつは無意識のうちに夢想天生をほんの一部だけでも破ってみせたのだ。

「零夢、聞いているんだろう!?　僕はお前が姿を現すまでここから一歩も動かないぞ！　雨が降ろうと風が吹こうと、何でお前がこんなことをしたか理由を聞かせてもらうまでここを離れないからな!!」

馬鹿な奴。私は今、目の前で座り込んでいるこいつを見降ろしている。どうやら私の存在は理解できても姿は見えないようだ。当たり前だ、こんな奴に博麗の秘奥が破られて堪るものか。

…でも、なんであんたは来るの…？　私は逃げたのよ？　博麗の巫女としての私と、個人としての私の板挟みになった想いから。怖くなって、訳分かんなくなって逃げ出した私を、何でここまで追いかけてくるの…？

一日、二日、三日……十日。どれだけ時間が過ぎてもあいつは境内から少しも動かなかった。雨の日もあった。風の強い日もあった。それでもあいつは食事も取らずにただ座っていた。時折不思議な力があいつを包んだかと思えば、私と目が合う時があった。暫くすると再び目を瞑るからたぶん私の勘違いだと思うけど…。

「なあ零夢…。僕、ここでじっくり考えて思ったことがあるんだ」

そしてこいつが此処に座り込んでから更に二十日。今までずっと座り込んだままだったけど、何を思ったのかいきなりそう言いだした。

「零夢がこうなるまで追い詰めたのって、僕なんだろ？」

!?　心が鷲掴みにされた思いだった。お前のせいだ！　そう叫び

たかった。でも咽喉から声が出て来なかった。驚く私をよそに彼の独白は続く。

「僕さ、始めはただの好奇心で君に近づいたんだ。歴代最高の巫女。どんな子か気になったんだ。それで初めて神社で話した時、君が、君たちが一人で戦っていることを知ったんだ」

「なんでこんな小さな子供がそんな大きな責任を負っているのか。そんなのは間違いだと思った。でもそれも間違いだった。君は僕の思っている以上に強くて気高い存在だった。これが博麗を継ぐ者なんだって思えた」

「…でもそれすらも間違いだった！　たった数日一緒にいるだけで解ったよ！　僕が帰ると言った時に僅かに見せた悲しそうな表情、朝おはようと言った時に見える、やる気の無さに隠れた笑顔！　君が本当は寂しさを押し殺して一人でいることを僕は知ったんだ！！」

そう言って目の前の彼は一息ついた。呼吸は乱れ心臓は鼓動を増し、熱を持った血液が体内を高速で駆け巡るのが解った。

「だから僕は出来るだけ君と一緒にいることにした。でも君には博麗としての責任がある。出来ればそれを手伝いたかったけど、それを苦しめてたのは僕だって気付いたんだ。だからこれで最後にする。…もし僕がこれからも君と関わっていて良いのなら、僕の前に姿を現してくれないか…？」

溢れだす感情を私は抑え込むことが出来なかった。拭っても拭っても目からは止めどなく涙が流れだし、必死に押さえた口から漏れる嗚咽を止められなかった。だというのに、私の心は満たされていった。姿を消してから心を開いていた空洞が、目の前の彼によって埋め尽くされるのが解った。

涙は嬉しい時にも出るのだと、生まれて初めて知った。

ボロボロに泣いている情けない姿だけど、今は彼の気持ちに応えたい。

その想いだけで、私は新たな一歩を踏み出した。

◇◆◇◆◇◆◇

「零夢…」

約４０日ぶりに見上げた彼女は、ボロボロと溢れだす涙を必死に止めようとしている姿だった。

「ごめっ…ごめん、なさィッ！　わッわたし、もう、なにぁッ、なんだかっ、わかんなくなってッ！」

「……」

「わたしはッ、巫女で、でもッツ、寂しくてェッ！」

「うん」

「自分にもッ！　正直になれないっ馬鹿で！」

「違うよ…。前の零夢にとっては、一人でいることが正しいと思えてたんだ。それはその時の零夢にとっては必要なことだったんだよ。だから前の零夢は何も間違っちゃいないんだ」

「一人はイヤ！」

「だったらこれからは僕を頼ればいいさ」

「ッやまとぉ！！！！」

座り込む僕を押し倒す勢いで抱きついてきた彼女を、僕は全身全霊で受け止めた。腕の中で泣き続ける彼女をあやしながら、僕は心の底から自分が浅はかな奴だと思った。紅魔館での一件以来、もう間違いを犯さないと心に決めていたはずなのに僕はまた人を傷つけてしまった。…ホント、僕も一人じゃ何も出来ない奴だ。

「初めて名前で呼んでくれたね」

だから僕は自分の反省も含めて彼女を強く抱きしめる。今日は泣きたいだけ泣けばいいさ。泣くだけ泣いて、明日からはまた何時も通りになればいい。

「…一つ、私の願いを聞いてもらえる…？」

「っな、何かなッ？」

目を真っ赤に濡らし、頬を上気させて僕を見上げる零夢に少し緊張する。それを自覚してしまうと今まで感じられなかった彼女の“女”としての部分が見えてきてしまった。潤んだ瞳に淡いピンク色の小さな唇、抱きしめた彼女の柔らかな感触に服越しで伝わる熱い体温…って!？　僕なんでこんなこと思ってるの!？

「あ、あの～零夢さん？　出来ればもう離れてもらいたいなぁとか…」

馬鹿じゃないの！　馬鹿じゃないのか僕!？　一人で泣いてる少女を家族のように支えたかっただけなのに、なに興奮しそうになってんの!？

（ヘイ大和、そろそろお前も身を固めるべきじゃないのか？）

（誰だお前!？　というか何言っちゃってくれてるの!？）

（これを逃せば次は無いかもしれないぜ？）

（零夢は家族！　嘘偽りないよ！！）

（下半身にパｗ　（黙れアホ！？！？）　ッチ、ここまでか）

「私ね、あんたが「そこまでだ！！」　「うえぇっ！？　母さん！？！？」　…え？」

「話は全部聞かせてもらったよ！　いや～良かったね大和、これで晴れて博麗の巫女と友達になれたわけだ！　そう！　友達に！！」

どこから現れたのか、いきなり現れた母さんが僕から零夢を引っぺがしてそう言った。笑顔なんだけど、その笑顔の中に苛立ちがはっきりと見てとれる。…顔に青筋立てる理由はなんなんですか？　そんなよく分かんない表情でも生き生きしながら零夢の背中をばしばし叩いている。

「…そうね、うん。私とこいつは友達よ。これからもずっと」

「そうかそうか！　ならいいさ！　今日は目出度い日だ、乾杯！」

そう言って母さんはお酒の入った瓢箪を口にした。笑顔でお酒を飲む母さんに呆れた僕と零夢は、今までの空気が嘘だったかのように笑い合った。その後母さんも含めた3人でお酒を飲み、笑い合い、

夜が明けるまで語りつくした。

先代たちには悪いけど、今日私に初めての友達ができた。とても面倒な奴だけど、それでも私の中じゃ大切な人。これから私は一人じゃない。だから前以上に強くなれる、そう思える。

隣で笑い合える人がいる限り・・・

貴方の隣に立つ為に（後書き）

…ふぅ。やりきったぜ☆　すいませんね、何時も以上に頭沸いてて。

零夢、だいたいこんな感じです。説明投げてすいませんね、解ってもらえると思いたいです。選ばれし者だったのに！？ｗ

自答編はこれにて終了。自答は大和だけでなく、これから主人公と深く関わっていくことになるだろう博麗の巫女にも焦点を当ててみました。…別にフラグ建てようと思ってやったわけじゃナイデスヨ？

それはそうと、良い機会なので大和のフラグ状況でも書こうと思ってます。ただ私と皆さんの間でどうやら大きな違いがあるようなので、活動報告に書かせてもらおうと思ってますｗ　このキャラとくっつくな！　とか、嘘だ！！　と思うことがあれば書いてもらって一向に構いません！　期待は裏切ります！

次回からは日常を少し→大結界→オリジナル異変なのかー→原作準備の予定です。ここまで長かったですね～。ポイントも遂に１０００超えましたし、嬉しさより逆に怖くなってきましたｗ　読んでくれている皆様、ありがとうございます！

もうすぐ９０話。そして大台の１００話が近くなりますね。…腐腐腐、１００話に何しましょうかね…？

何時も通りの予告編（前書き）

もはや御馴染になりつつある予告編だー！　ネタバレあり！　だけど本編がこうなるとも限りませんので過度な期待はしないように！

と言いますか見ないほうがいいので戻ってください！！

後書きで何か言ってますんで、何時も見てない方も目を通してもらえると嬉しいです。

「博麗零夢さんですか…。確かに歴代最高という記録が残ってますけど、今の博麗の巫女である霊夢さんよりも強かったんですか？」

あややや、それはですねぇ…

おいお前ら、ここで何してるんだ？

「お久しぶりです。今、伊吹大和さんの項目を作り直しているんですよ」

ん？　あの馬鹿師匠のことなら何で私を呼ばないんだ？　これでも一応は弟子だから詳しい方だと思うぜ？

今までは貴方が産まれるだいぶ前のことを話していたんですよ。これからは貴方の方が大和さんのことについては詳しいかもしれませんね。なんと言っても弟子ですし、私たちも知らない人生談とかも聞いてたりするんじゃないですか？

それは私も気になるな。あるんだったら聞かせてくれよ。

それほどのことは聞いてないんだけどな…。心構えとかなら耳にタコが出来る程聞かされたぜ！

「何でもいいので聞かせてもらえますか？」

いいぜ。じゃあ確か博麗大結界のころの話らしいんだけどな――――

――――――

～幻想郷第二章　別れ。そして出会い～

博麗の巫女の仕事を正式（仮）に手伝うことになった大和は、当代の巫女、博麗零夢と共に幻想郷の秩序を守るために奔走する。

「博麗大結界…ですか？」

「ええ。幻想郷がこれからも成立していくためにとても大切なことなの。手伝ってもらえるわね？」

博麗零夢が１５歳の時に妖怪の賢者、八雲紫と創り上げた今尚幻想郷を守り続ける結界。その名を博麗大結界と言う。歴代最高という肩書は伊達ではなく、その力は永遠に幻想郷を守り続ける…はずだった。

「悪いねぇ紫。邪魔するよ」

「あら？　藍が居たはずなのだけど」

「残念ながら、親子の絆の前に狐なんざ壁にもなりゃしないよ」

大結界構築の最中に乱入する萃香。八雲紫が作りあげようとする大結界を妨害・邪魔しようとする彼女の目的とはいったい何なのか？

「この４年間、ずっと貴方達を観察してたの。だから貴方達のことなら何でも知っている。勝ち目なんてないのよ」

「はは、面白いことを言うね。観察してきた僕たちすら幻覚だと思ったことはないの？」

博麗大結界構築後、初めて幻想郷で起こった異変。その名を日蝕異変。幻想郷から太陽の光は消え、漆黒の闇が支配する世界に２人が立ち向かう。

「有幻覚に幻覚、流水制空圏に無想天生。条件は全て揃った。大和、あんたに全て託すわよ」

「見せてあげるよ…。気と魔力の合一、その先にある極地を！！」

そして時は流れ、別れの時がやって来る。

「こら、泣くんじゃないわよ」

「泣いてない」

「人は何時か死ぬの。…後のこと、頼んだわよ」

「…解ってるさ」

初めて親しい人を見送る大和。彼女を失った彼は再び塞ぎこむことになるのか？　それとも乗り越えられるのか？　幻想郷の未来を誓った少女との信頼の強さが今試される。

「この子のこと、頼んだわよ」

「わたしを…わたしを魔法使いにしてくれ！！」

別れがあれば出会いがある。初めて見守る側に立った大和は、その目に何を見ているのか？

「どうしてこうなった…」

ｎｅｘｔ　ｓｔａｇｅ　ｔｏｕｈｏｕ　ｋｏｕｍａｋｙｏｕ

何時も通りの予告編（後書き）

嘘予告くらいに思った方がいいと、今までお付き合いして下さった人は知っていると思いますけど敢えて言います。この通りに話が進んだためしがないですw　何故なら予告編はただこうやりたいな～と思って書いているだけだから！

次回からは…何編って言ったら良いんだろうか？　思いつかないので空白期（仮）です。

あと、大和へのお便りコーナー的な何かをしてもらいたいとの要望があったので急遽することになりました。質問とか…とか…とか、何でもいいのであれば感想の一言にでも書いてもらえればお答えしましょう。ホントはロリコンなんだろ？　何でヘタレなの？　とかでも全然構わないんで、何かあればよろしくお願いします。主人公が答えるので。

数が多ければ番外編として、超少なかったら後書きにちょちょいと書かせてもらうことになります。ではまた『今日』　会いましょう～

今日も良い日だなぁ（前書き）

綺麗な萃母さんを書いてみました。

あと、主人公への質問等は何時でも受け付けておりますので

今日も良い日だなぁ

～文文。新聞増刊号　噂の魔法使い～

今回は個人的にも深い付き合いのある友人、伊吹大和さんについて纏めた。何分彼については語るべきことが多いので、通常とは違う増刊号として書かせてもらうことにする。

伊吹大和。旧妖怪の山出身。人間の子供ながら、嘗てその名を轟かせた鬼一族の一員として迎え入れられ、四天王の一人、伊吹萃香の義理の息子として生きていくことになる。若干１０の身にて条件下ながら母親を破り大陸へと旅立つ。その後、紆余曲折を経て帰還。現在は魔法使いとなり、魔法の森前に居を構えている。

そんな彼にはおもしろ…もとい、様々な噂が付き纏っている。曰く、新たに現れた館の吸血鬼ととても親密にしている。曰く、裁判長と同棲したなどなど。挙句の果てにはつい先日、博麗神社境内にて博麗の巫女と抱き合っている姿を私は見つけてしまった。巫女が泣いていたため痴情の縺れかと思われる。カメラを定期検査に出していたため、生憎とその瞬間をカメラに収めることが出来なかったため証拠品はないのだが、事実である。彼の噂の多くが女性関係なため、友人である私もとても彼のことが心配でもある。

だが打って変わり、人里ではかなりの高評価を得ている。人間が普通入れないような場所に行けることから、上質な食材を届けて貰えて嬉しい、妖怪退治の腕前は人里でも有名だ、よく家の子供と遊んでもらっている、など優しい一面も見られるようだ。

そんな彼を語るにはまず彼の母親、伊吹萃香について知らなければ
――――――――――

「それで大和、これ本当なの？」

「…イエス」

「闇魔と同棲してたというのも本当なのね？」

「マチガイアリマセン」

紅魔館、図書館の一角で何故か公開処刑が行われている。裁判官・レミリア、書記・パチュリー、罰執行人・フラン、そして傍聴人・美鈴。…なんだこれ。

始まりは一枚の新聞だった。零夢との一件から三日、久しぶりに穏やかな日々を送っていた僕にいきなり“召喚状”が届いた。それも血のような真っ赤な文字で『今すぐ紅魔館に来い』　と書かれていたモノが。いったい何が起きたのか？　不思議に思った僕はその日のうちに紅魔館に出向いた。

紅魔館に着いてみると、何故か門番である美鈴が居なかった。なのでそのまま門を潜ろうとしたところ、不意に背後からの一撃を受けた。まさか紅魔館で襲撃されるなんて思ってもみなかった僕はそのままお寝んねすることに。不覚をとったとはいえ、こんなことを師匠に知られると…。うぅ、寒気がするよ…。そして気がついた時に

は縄で身体をぐるぐるに縛られて図書館の椅子に座らされていましたとさ。

そんなこんなで今はレミリアからの質問に答えている。何故返答がおかしいのか？　可愛らしい顔に青筋立てて歪めているお嬢様が目の前にいると言えば解ってもらえるだろうか？　更にはその隣でイイ笑顔のフランドールが魔杖をブンブン振り回しているのでさあ大変、下手すれば明日の朝日は拝めなくなるね！　…もう一度言うけど、なんだこれ？

「そう…全て真実なのね。…フラン」

「な～に？　お姉様？」

「やれ」

「いえっさー！」

肩を回しながら近づいてくるフランに顔が引きつる。待った待った！！　何で！？　何でこんなことになってるの！？

「ちょっ！？　待っ！？　…アッーーーーーーーーーーーー！？！？」

その日、青い空に弧を描きながら飛ぶ黒焦げの物体が、幻想郷各所

から見られたらしい。

◇◆◇◆◇◆◇

「あややや!?　私は記者として真実を伝えただけですよ!?」

「アレのせいで死にかけたんだよ!?　いい加減嘘を書いたことを認めてお縄につけ!!」

紅魔館から吹き飛ばされた勢いのまま、僕は妖怪の山目指して飛んだ。目的は新聞を書いた犯人、文を締め上げて誤解を解くこと。……零夢の件は誤解だよ、うん。他はだいたいあってる。

…身体と心の両方が痛いね。だってあの新聞、もう幻想郷各地に配られたらしいし。せめてそれを見たであろう慧音さんや妹紅が誤解を解いてくれようとしてくれていると信じよう。そうじゃないと今度から人里を歩けない…

「言うこと聞かないなら、今日の晩御飯は鴉の丸焼きだ!!」

「んもう、大和さんったらだ・い・た・ん?　そうやって私まで食べちゃうつもりなんですかぁ?」

「ムキーーー!!?　馬鹿にして!　そこまで言うなら本気出すよ

！！！！」

空を縦横無尽に駆け回っている文を追う。しかし悲しいかな、文の飛ぶスピードが速すぎて僕じゃまったく相手になってない。必死で追いすがる僕に自分が捕まるなんて微塵も思っていないのだろう、スカートを端を摘まんでチラリ、健康的な太股をアピールして挑発してくる。

「え～？　今までも本気じゃなかったんですか？　それとも本気って、私を本気で食べるつもりなんですかぁ？　もう、夜が寂しいのならそう言ってくれればいいのに～」

「…吹き飛べーーーーーーーーーーー！！！！」

――――魔砲　マスタースパーク――――

結局、文を捕まえることは出来なかった。武士の情けでどうか誤解を解いて下さい、と土下座までしたのにそのまま椅子にされる始末。尻を乗せるな尻を！？　興奮しました？　……。本当にエッチになりましたねぇ。

男は皆、変態になると思うよ…。僕だってもういい歳なんだから、ね？

◇◆◇◆◇◆◇

～大和、風邪で寝込む～

「～～～～ッ寒い、風邪ひいたかなぁ」

２０日の間に何も飲まず食わず。更には姉妹にボコられ、文との追っかけっこには完敗。魔法使いになったから飲まず食わずでも生きていけることが解ったけど、心情的には結構きつかったです。境内で座っている時とかほとんどご飯のことばかり考えてたし…（零夢には内緒です）

そんなこんなで今までに溜まっていた疲れが一気に出たようです。朝起きた時に頭痛と寒気、あと熱が出てました。…ついでに吐き気も。

「うぅ～～～～～～～…しんどいけど、それよりも暇だ」

「だったら母さんが話相手になってあげよう！」

「…せめて玄関から入って来てください」

何処から…と言うより、何時の間にか母さんが寝ている僕の隣に現れた。息子が風邪をひいているというのに、隣で呑気にお酒を飲んでいる。美味しそうに咽喉をならす姿を見たら僕も飲みたくなってきた。

「母さん、僕にもお酒頂戴」

「ん？　風邪に酒は効いたっけ？　まあ飲みたきゃ飲めばいいさ、御猪口はどこだい？　動けないお前に代わって母さんが飲ませてやろう」

「自分で飲めるから大丈夫だよ」

「そう言わずにさぁ、今くらいは私に甘えなよ。お前の悪い癖だぞ？　何でも自分でやろうって思うのはいいけどさ、誰かを頼ることも大事なんだぞ？」

それよりも御猪口だ御猪口、と家の中を粗探ししだす母さん。そこ探っちゃダメです！？

しかし、誰かを頼れってか。今までもずっと頼って来たのに、これ以上迷惑を掛けるわけにはいかないんだよ。むしろ頼られる存在になりたい。それで今までお世話になった分を返していきたいんだ。

「あったあった。さあ母さん特性の酒だ。これを飲めば風邪なんてあっという間に飛んでっちまうよ」

「…だから自分で飲めるって言ってるのになぁ」

母さんに支えられるようにして起こされる。僕の方が母さんより背が高いので、母さんが僕に隠れるようになってしまう。しかしいくら小さい（言ったら怒られる）　と言っても鬼だ。その細い腕に似合わない力を持って僕を支えてくれている。

「……大きくなったなぁ、大和も」

「そりゃあね、あれからもう何年も経ってるんだ。何時までも小さくないよ」

「…私の気のせいだったみたいだ、気にしないでいいよ」

本当にお前は大きくなったよ。何時までも私たちの後ろを付いてきたあの頃と比べるとね。

少し、悔やしい…。

だって私はお前が成長する過程を見てやることが出来なかったんだから。お前は弱くて泣き虫だったから、人一倍悩んで迷ったはずだ。出来ればそれを一番近くで見てやりたかった。悩んで迷って、それを全部背負って進んでいくお前の姿を見てやりたかった。

…やっぱり付いて行くべきだったね、勇儀に止められようとも。

帰ってきた時のお前と今のお前も全然違う。また強くなった。お前

は知らないことだろうけど、勇儀や大将、仲間にお前のことを話した時は楽しかったんだぞ？　どんな風に大きくなったんだとか、強くなったのかとか、中には娘と結婚させるなんて奴もいた。もちろん言った奴は殴ってやったが。

お前は皆から祝福されているんだ。だから周りを頼れ。必ずお前の為になってくれるはずだ、私が言うんだから間違いない！

「母さん、ありがとうね」

「ん？」

「いや…その…、普段恥ずかしくて言えないからさ。お酒が入った時に言わないと言えないんだ」

「～～～～～～～！！　このぉ！　可愛い奴め！！　ほら、どんどん飲みな！　今日はこのまま宴会だあ！！」

あ～～～～～～～ッ！　もう、可愛い息子だな！　絶対婿になんてやらせないからな！！

◇◆◇◆◇◆◇

～翌日の夜～

「…で、はしゃぎすぎて酷くなったと」

「ゲホッゲホッ…申し訳ない…」

「…別に私に関係ないからいいけど」

結局夜通しで飲み続けた結果…風邪が悪化しました、はい。

「でもさ、零夢は心配してきてくれたんだよね？」

「ばッ、馬鹿言ってんじゃないわよ！？　ただ単に、毎日来てた奴が急に来なくなったから気になっただけよ！」

一般的にはそれを心配して様子を見に来たと言うんじゃないのですかね？　そう言えば何故か風邪が悪化すると思えたので黙っておくけどさ。

「で？　ご飯食べたの？」

「へ？　いやまだだけど」

「そ。食材くらいあるでしょ？　作ってあげるから早く食べて治しなさいよ」

…明日は空から槍が降るのか？　それとも夢想封印が降るのか…？
その前に目の前の存在は本当に零夢なのか…？　あまりの優しさに目の前の存在が幻覚に見えてきた。むしろ視界が潤んできて見えなくなってきたんだけど。

「ってあんた、何泣いてるのよ気待ち悪い」

「うぅ…零夢の優しさに感動してるんだよぉ。今まではあんなに横暴だったのに…」

「…あんたも馬鹿ね。私とあんたは『友達』　でしょうが。これくらい当然よ」

いいから病人は寝てなさい、そう大和に言い聞かせて私は台所に立った。割烹着がないので服が汚れるかもしれないけど、その時はこいつに洗濯させれば済むか。…とりあえず咽喉を通りやすい物を作ろう。こいつの家、男の一人暮らしの癖して保管されている食材が多いのね。

…こいつと一緒になった奴はそりゃいい暮らしするんでしょうね。人里にも妖怪にも顔が利いてるってのもあるし…。

…別に、悔しいとかいう嫉妬はない。……嘘ね、もう自分に嘘を吐くのは止めておこう。悔しいですよ、嫉妬してますよ、これでいいかしら？

ほんと、ふざけた奴め。あの新聞は私も見た。女関係で苦労してい

るみたいだし、これからも苦労するのだろう。ま、今となっては関係ないんだけど。何と言っても友達なわけだし。

私が本気になればこいつなんて一発だろうけど、私は彼を置いて先に逝くことになる。そうなった時、たぶん大和は耐えられないだろう。だってこいつ、ヘタレだもの。しかも本人よりも周りの方が理解しているのだから余計にタチが悪い。

だから悔しいけど、別に私は悲しくない。女の人と仲良く話をしている所を見ると心がモヤモヤするけど、別に悲しくはない。むしろその女の人を応援したい。どうかこの男を幸せにしてやってほしい。私にはもう無理なことだと理解出来たから…。

「ほら、おじや出来たわよ。いっぱい作ったから、そこで寝ている鬼にも食べさせてあげるといいわ」

「ごめん零夢、迷惑かけた」

「馬鹿ね、こういう時は『ありがとう』　って言うのよ。じゃあね」

「ありがとう、夜道に気をつけて～」

人間の寿命は妖怪に比べると非常に短い。妖怪にとっては瞬きの間の時間でも、私たちにとっては必死に生き抜いた時間になる。でも私たちは妖怪と違って成長するのが早い。短い寿命の間で驚くほど変わっていける。だから私も変われた。

「だから吸血鬼、あんたも早く変わりなさい」

「…いつから気付いていた、博麗の巫女」

「ずっと前からよ。私が大和の家に入る前から」

「……」

「明日になれば治ってるでしょうね」

「そう……」

大和の家のある場所から少し離れた場所、木の影になっている場所に吸血鬼はいた。

一瞬厳しい視線をぶつけて来た吸血鬼は柔らかい表情になったが、直ぐに厳しい視線を私に向けてくる。ああ、この子もそうなのか。乙女のカンなのかは知らないけど、はっきりと解った。私と同じ、でも私とは大きく違う。

「安心しなさい、別に盗ったりしないわ。貴方のモノでもないようだけど」

「何の事かしら？　さっぱり理解できないわ」

「なら別にいい。ただ、はっきり言わないと伝わらないと思って。悪かったわね、それじゃ」

「…待ちなさい。貴様の名は？」

「博麗零夢。博麗の巫女よ」

「そう。私は「別にいいわ。もう会うこともないだろうし、妖怪の名前を聞いてもしかたないから」　…ならいいわ。行きなさい」

吸血鬼が見送る中、私は神社目指して飛んだ。今夜は気分がいい。ゆっくりと夜風を味わいながら空を飛ぶ。隣を飛ぶ人が居ないのは少し寂しい気もするけど、きっと直ぐに隣であいつが飛ぶだろう。その時は精一杯の笑顔で迎えてやろう。

別に友達でも構わない。そこに確かな絆を感じられるのであるのなら…

「巫女と魔法使いは恋人同士ではないのかー。……これはもう少し

調べたほうがいいわね。フフフ…」

今日も良い日だなぁ（後書き）

質問が来たので答えようかな？　と思ったけど番外にして詳しく答えようか、それとも後書きでちょちょいと答えようか迷っているじらいです。

今回は萃母さんに焦点を当てる話しにするつもりが、何故か零夢が持っていくということに。そう言えば文や姉妹も出てましたっけ？

まあいいや。

次回はおふざけ回です。人里の男衆と大和が大暴れの予定になっております。あとは白玉楼かなぁ。それが終われば博麗大結界に入ります

伊吹大和。これでも僕、男なんです（前書き）

今回、主人公が変態になっています。そんな主人公が見たくないと言う素晴らしい方がいれば戻るを押してください。キャラが崩壊していますので。

伊吹大和。これでも僕、男なんです

～永遠亭　真・免許皆伝～

竹林の大気が揺れる。

常人が見れば影すらも残さぬスピードで動き回る2人。そのスピードは正に神速。竹林の間を縫う様に駆け抜ける2人の後には粉々に吹き飛んだ竹が無残にも散らばっている。

ただ勝利を。

一秒にも満たぬ時間の中に太鼓を叩いたかのような轟音が葉を揺らし、衝撃波によって吹き飛ばしていく。その轟音と衝撃波が拳撃によって生まれたモノだと誰が理解できようか。常人ではない、達人とカテゴリーされる己の限界を超えた者同士のみが為せる技、拳撃乱舞が繰り広げられていた。

「どうしたの！　そんなものでは私は倒せないわよ！？」

「うッツらあああアアアアアアアア！！！」

己の技と力に絶対の自信を持って放たれる無数の拳。音速を超えて突きだされるそれはただ目の前の存在を打ち抜くためだけに真っ直ぐに放たれている。時折幻術を混ぜて放たれる突きの数は最早点ではなく面で相手を捉えようとしていた。

その猛攻を涼しい顔で往なしていくのは一人の長身の女性、八意永琳。赤と青、二色を持った特徴的な服を翻しながら拳を避け、時には防ぎ、隙を見つけては声を張り上げ指摘する。

嘗て大陸の騎士や月の使者が用いた銃などとは遙かに比べ物にならない力を持った拳撃を単身で放ち続ける2人。降り注ぐ拳の弾幕を躱しつつ隙を探し、己で隙を作らせる。瞬きも許されない中で見つけられた隙はすぐさま己に跳ね返り、自身を窮地へと追いやるだろう。一瞬の油断も許されない乱舞が一進一退で進む。

くそ…このままじゃジリ貧だ…。

逆手に構えた短剣に魔力を纏わせ、長剣とすることで虚を誘う。常人には剣筋すら見えない回避不能の斬撃の嵐。高密度で形成された魔力剣は周囲の竹を真っ二つにしていく。だが彼女はその平素と変わらぬ涼しい顔でそれを躱していく。物を断つことは出来ても目の前の存在を断つことは出来なかった。

「嘘ッ！？」

「馴れないことはしない方がいいわよ」

逆袈裟で脇を狙った剣は二本の細指によって止められ、そのまま腹部を蹴りによる剛撃が襲った。肉眼でも目視することが出来るほどの気で身体全体を覆っていたにも関わらず、その衝撃は内臓を抉る

ほどのものだった。

「～～～～ェッホッゲホッツ」

地に足を着けて耐えられるほど柔な蹴りではない。冗談のように吹き飛ばされ、地に打ちつけられる。だが、この程度でやられる程少年も軟ではない。すぐさま起きあがり、口内に溜まった血を吐きだして構えをとる。

「能力使用、並びに魔道機関の使用を許可」

女性の言葉を聞き、少年の顔が笑顔に染まる。そう、これだけの人外な闘いを繰り広げておきながらも少年は本気ではなかったのだ。これでようやく全力でイケる、そう呟いた少年の右目と左目が淡く光ると同時に、予備動作すら見せずその場から姿を消した。

背後！　女性が振り返った先には笑う少年の姿。既に迎撃態勢を整えているにも関わらず何を笑う、そう思った彼女は刹那の内に己の失態に気がついた。目の前の少年の姿が煙のように消えていく。

幻覚。それは少年の十八番。こと幻術に関しては天才と言っても過言ではない才を持つ彼はその成長麗しく、もはや彼女ですら完璧に騙されてしまう程にその腕を上げていた。ただ見せるだけでなく、『そう思わせる』　精神系の幻術すら自由自在。自らの奥義と定めた有幻覚には未だ程遠いと聞いたが、これでも十分に脅威となり得る絶技。彼女は己の弟子の成長を嬉しく思うと同時に恐怖した。

眼下で自身の幻覚に騙されている彼女を見、この好機を逃さんとばかりに急降下。同時に雷鳴を思わせる鋭い踵落としを放つ。対する女性は辛うじてそれを両手で受け止める。インパクトの瞬間、女性の立っていた場所は深く陥没し、地形が大きく変わる。再び襲った衝撃波が竹を根元から吹き飛ばした。

これで終わりじゃないんでしょう？　当然！！

目と目で語り合う2人。お互いの健闘を誇りつつ、相手への賛美も忘れはしない。

お互い後方へと跳び、距離を取る。女性が何かを呟くと同時に構えを解き、両手を地に向かって降ろした。それを見た少年は息を飲み、額から大量の汗が噴き出し始めた。呼吸は乱れ、大量の汗を含んだ服が背中にへばりつく。

「本気で行くわよ」

構えを解いたのではなく、これが彼女本来の構え。流れに身を任せる流水に似た動きこそが彼女の真骨頂。油断も隙もない、鋭い眼光で少年を睨みつける。自らの師にここまでさせた少年が手を抜けるはずもなく、彼も全力を出さざるを得ない。これこそが彼の望んだ試合なのだから。

――――イクシード　起動――――

小さく呟かれた言葉と同時に少年の身体が紅い魔力に包まれる。身体が紅く輝くのは、弾に篭められた己の魔力を一定時間爆発的に高め、使用することの出来る魔道機関の副次効果だ。

――流水制空圏…気と魔力の合一――

戦意が失せたと見える程の虚ろな瞳に、身体を纏う明らかに異質な力。これが少年の新たな技。その状態で幻覚・有幻覚を混ぜたモノこそが彼の秘奥。

今までの喧騒が嘘のように竹林が静まりかえる。だが今までで一番その場は張り詰めていた。もし彼ら以外に誰かがこの場にいれば立っていることはおろか、多くの者が彼らの放つ圧力に失禁することになるだろう。

「「勝負!!」」

地が爆ぜるよりも早く2人は消えた。

◇◆◇◆◇◆◇

「うぅ…また負けた…」

「ま、当然の結果よね。大和如きが永琳に勝てるハズないもの」

「馬鹿輝夜、少しくらい慰めてくれてもいいじゃないか！」

「嫌よ。敗者は地面を這ってなさい。それより肩揉んでよ、最近よく肩がこるのよね～」

「てゐちゃんにやってもらいなよ…。僕もう無理…」

結局あの後本気になった師匠にボコボコにされた。途中で気を失ったのに身体は勝手に動き続けていたらしい。…師匠の修行の異常性が解るよね、まるでアンデッド大和だよ。勝手に動いてたのを沈黙させるために殴って蹴って投げ続けた師匠も異常だけどね…。

「てゐにしてもらうより大和の方が利くのよね～。ねえ、私の専属整体師にならない？」

「心底御断りです。輝夜は傷薬持ってきてくれたんじゃないの？」

「あら、昔の男たちならハァハァ言いながらやるわよ？」

「お生憎様。僕はその人たちと違って輝夜を知ってるからね」

「……貴方って本当に厄介な男よね」

そんなことより早く背中に薬塗ってよ。ここまでは流石に届かない…って!?　なんで叩くんだよ!!

◇◆◇◆◇◆◇

～突撃　人里紳士隊!～

風邪と永遠亭でのケガが治ってから幾数日、ようやく元気になったことを喜びながら人里へと足を運ぶ。寝込んでいたために溜まっているであろう依頼の確認をしに行くのだ。基本的に僕は商人の人に頼まれて山の幸や魚なんかを取って来ている。それが僕の生活費になったり、博麗神社の財政を助けることになっているのだ。つまり、僕がいなければ零夢が餓死する…と思いこんでいる。

「すいませーん。大和です、お仕事貰いに来ましたー」

「おお、ようやく来てくれたのか。風邪をひいていたんだって？もういいのかい？」

「それだけじゃないんですけど、おかげ様で。この通り元気いっぱいです！」

むん！　と身体を魔力で包んで笑って見せる。淡い光が身体を包ん

でいる僕を見た店主さんは、それは頼もしいことだ、と笑ってくれた。

「これが今回の依頼だ。秋も近づいてきたし、何時も以上に山の良いやつを期待しているよ」

「解りました。山の神様たちにもお礼を言って頑張ってもらいますよ」

紙を貰った後、通りを歩きながら紙を見る。紙に書かれたリストには山の幸を沢山と書いてあった。…なんてアバウトなお願いなんだろう。苛められてるのか、それとも信頼されているのか…。信頼されてるんだよねきっと。そうだ、あの山の姉妹にも手伝ってもらおう。何と言っても神様だし、美味しい所を熟知してるだろうし。

「いたぞ！　大和だ！」

「んぉ？　一郎さん、そんなに慌ててどうしたんですか？」

通りを歩いていると前から４人の男たちが走って来た。通称人里４人兄弟、ある意味人里で一番有名な男性たちだ。長男から一、二、三、四ととても分かりやすい名前をしているのも理由なのだろうけど。

「実はお願いが「嫌ですよ、今から山に入るんですから」　それが

終わってからで構わないからさ！　頼むよ！！」

「えー…」

これは厄介なことになったなぁ。この兄弟が有名なのは人一倍女性に興味があるからなんだよね…。覗きなんてほとんど毎日してるのでは？　と人里では思われている程の猛者であるから、清く正しいイメージを保ち続けたい僕的にはあまり関わり合いたくない人達なんだけど…憎めない人達なのです、はい。

「実は…俺たち兄弟全員が慧音さんに恋をしたんだ」

「なっ…なんだってー！？」

慧音さんに恋を…。うんうん、凄く解るよその気持ち。優しいし、柔らかいし、顔立ちもすごく整っている。惚れるなと言う方が無理な話だよね。

「だが俺たち兄弟の絆は堅い！　誰かが抜け駆けを謀るなんてことは絶対に出来ないんだ！」

「無駄に仲良いですからね…」

兄弟の誰かが捕まったら全員で謝りに行くほどの潔さを持っているからなぁ。真摯に謝る姿を見たらどうも怒る気がなくなるって女の

人も言ってたし。…それが嘘かどうかは知らないけど。

「そこで俺たちは決めたんだ。…慧音さんの風呂を覗くと」

「待てその発想はオカシイ」

「可笑しくはない！　俺たち兄弟が共に幸せを勝ち取るにはこれしかないんだ！！」

グッ！　っと拳を突き上げて宣言する四人に気圧されそうになる。こ、この人たちなんて目をしているんだ!?　目の前にいる四人全員が死に逝く漢の目をしている。本気だ…本気で慧音さんのお風呂を覗くつもりだよこの人たち!?

「…止めるべき…なんだよね」

気を身体に纏わせ、直ぐに戦闘を行えるように構えをとる。慧音さんの為に…あわよくば慧音さんの気を引くためにも、僕は貴方達を止めなければならない！

「止める？　何を言っている、お前も一緒に覗くのだよ」

「なん…だって…!?」

その時、体中に電流が走った。僕が、慧音さんのお風呂を覗く…だって…？

「フッ…お前が慧音さんのようなお姉さんが好みなのは知っているさ」

「でっ、でも僕はそんなことはしないッ、出来ない！！」

「お前の力が必要なんだ！　大和、お前は真の幻想郷を見たくないのか！？」

「ぼっ僕は、僕はあッツ！！？」

「行こうぜ兄弟…共に夢の国へ行こう…」

「…兄さんと呼ばせて下さい…」

「「「「弟よ！！　（（（（ちょろいもんだぜ））））　」

「これより我々は人里紳士隊と名を変える！　決行は今夜だ！」

すいません慧音さん。僕も男なんですよ…

◇◆◇◆◇◆◇

夜。太陽が沈んだころに上白沢邸に近づく5人の漢たちがいた。

「正面に罠なし。よし、前進するぞ」

「罠って…そんなの仕掛けられてるの？」

「俺たちの覗きに対抗するために、今では年頃の娘さんの居る家では常備されているのさ」

親指をぐっ！　と立てていい笑顔をするのはいいけど、それは別に誇ることじゃないと思うんだ…。なんて言っても無駄ですよねー。

「！　止まれ、罠だ。大和、これは解けるか？」

「…大丈夫、この草の陰になっている部分を踏まなければいいから。僕が向こう側まで皆を運ぶよ」

罠が仕掛けられた一帯を一人一人担いで飛んで躱す。トラバサミに落とし穴とか、下手すれば一生の傷になるかもしれないものをよく躊躇いもなく置けたものだと思う。慧音さんも自分を守るためには手段を選ばないということか…

「しかしその目は便利だよな。俺も能力持ちになりたいぜ」

「一郎さんたちもある意味能力持ちでしょうに…」

変態行為を行える程度の能力とか。むしろ貴方達が能力持ちになったら誰がを止めれるんですか！？

ちなみに僕、これから嵌るであろう罠を先読みしています。僕が助けなければどういった罠に嵌るかが視えるため、罠の設置場所と種類が手に取るように分かる。でもこんなことに使うのは初めてだよ…。

◇◆◇◆◇◆◇

「諸君、よくここまで付いて来てくれた。長男としてこれほど嬉しいことはない。今、この薄壁1枚の向こうには幻想郷が広がっている。本当なら俺が一番に覗きたいところだが、今回一番の功労者は新たに仲mに加わった大和だ。だから大和に一番に覗かしてやろうと思うのだが、どうだ？」

「「「異議なし」」」

「よし。では大和、お前が一番だ。楽しんで来い」

「イタダキマス」

この壁の向こうに真の幻想郷が…。そう思うと胸の高鳴りが抑えきれません。押さえられないのは慧音さんのけしからん胸かもしれないけど。

「おい慧音、背中流してくれよ」

「いいぞ。ただもう少し浸かってからな」

「その後で構わないさ」

こ、この声は妹紅!?　何と言うことだ、土壇場で一人追加されるなんて!!　神様、これはいつも頑張って来た僕へのご褒美なんですね!?　ありがたく頂戴します!!

「おっ、おい慧音、何処触ってんだよ」

「せっかく一緒に風呂に入っているんだ、普段洗えない所までしっかり洗っておかないとな」

「こそばいっての」

ブホッ!?　鼻から血が出そうです…。声だけ聞いても十分に桃色空間が楽しめるんだけど、そろそろ本番と行きましょうか！　気配を消しながらそっと浮き、覗く。

「!?」

「よう変態。元気か?」

「…伊吹君、まさか君までこんなことに手を貸すとはな」

衝撃の事実発覚。なんと2人は風呂に入らず、服を着たまま窓を見張っていた!? 僕がほんの少し顔を覗かせた瞬間に目と目で解り合うアイコンタクト。お前が覗き魔か? イエス! 正直でよろしい。

「な、何で妹紅さんがいるんです?」

「あのなぁ、通りであれだけ大きな声出してたら誰でも気付くっての」

「!?」

再び体中に電流が走った。なんてこった、まさか初めからバレていたなんて。こうしてはいられない、早く皆に伝えて逃げなければ、

「っておいいいいぃ!? 何でもう逃げだしてるの!?」

尻尾を巻いて逃げるとは正にこの事だろう、振り返って見えたのは明日へ向かって走り出していた4人の兄だった男たち。僕を置いて

逃げやがったな！？

「お前は逃げられないけどな」

壁の向こう側から妹紅が宣言してくる。でもね妹紅、壁なんだよ。壁があるから僕は確実に逃げ切れる自信がある。だから僕は壁に手をついて勝利を確信する。…覗きとは、帰って一息ついて笑えるまでが覗きなのです。

「妹紅か慧音さんが追いかけてくるの？　残念だけど、回り込んでくるまでに僕は逃げさせてもらうよ」

たかだか覗き魔を捕まえるためだけに壁をブチ破るなんてことはしないはずだ。直すのに時間も手間もかかり過ぎる。

「安心しろ、お前には私たちよりも適任がいるさ。後ろを見てみろ」

何を言っているんだ、そう思って後ろを振り返った。

「…変態。あんたって最低ね」

「れっ、れれれッ、零夢さん！？」

「私もあの新聞を読んでな、一応巫女にも知らせておいたんだけど正解だったみたいだな」

振りかえった先には巫女の皮を被った夜叉がいました。

「変態は死ななきゃね。安心しなさい、ちゃんと神社で供養してあげるから」

「に、逃がして貰えたり…なんて。あは、あはははははは」

「あはははははは。…無理ね」

「お助けーーーーーーーーーーーッ!?!?」

清く正しい伊吹大和。人里では少しの間、酷くヤラシイ伊吹大和と揶揄されることとなりました。トホホ…。もちろん４人のことは直ぐに吐いた。生贄は多い方がいいもんね、ただじゃ転ばないよ…！

◇◆◇◆◇◆◇

伊吹大和。これでも僕、男なんです（後書き）

あれですよ、ちやほやの法則ってやつです。頑張ったと思われた後に落されるアレです。

久しぶりに戦闘描写を書いてみようと思ってやってみましたが、見ての通り酷いものですｏｒｚ　どうも戦闘描写は苦手なようで、書きにくいですよ。日常書いている方がだいぶ楽なのですが、そろそろ異変もやって来るので練習も兼ねて今回やってみました。

そして人里紳士隊。嘗て原作登場人物に対して覗きを敢行した二次の主人公がいただろうか？　私は読んだことがありませんｗ　最近主人公の男としての部分が問われているようなので本気出してみましたｗ

…覗きが成功してたらワッフルワッフルでノクターンへＧＯですね…

番外　第一回質問コーナー（仮）（前書き）

地の文なんてありません。送られた質問を大和が答えるだけの話です。興味がないぜ！　な人は読まなくても全く問題がありませんので戻るでＯＫです。

番外　第一回質問コーナー（仮）

～第一回？　質問コーナー的な何か～

文「皆さんこんにちわー。皆さんのアイドル兼専属新聞屋の射命丸文ですよー」

大「伊吹伝主人公の伊吹大和です。今日はみなさんよろしくお願いします」

文「今回は皆さんから質問が意外と多く集まったということなので、番外編として一話丸々つかわせてもらうこととなりました！　いよッ色男！」

大「ここまでやって来れたのは皆さんの応援あってのことです！だから誠心誠意答えさせてもらおうと思っています！！」

文「まぁ、かなり突っ込んだ質問もありますので、その心意気がなくならないうちにちゃっちゃと行きましょうか」

大「え？　ちょ、ちょっと！？　趣味とかだけって言ってたよね！？」

文「むしろ趣味は聞かれてませんよ？　ではさっそく一問目。まずはは軽めのジャブからいきましょう。『大和の身長はどれくらいですか？　また、４００歳くらいの年齢についてどう思いますか？』
いいですね～、最初の質問にピッタリですよ」

大「ホ…）　僕の身長かぁ…。実はそれほど大きくないんですよ。やっぱり紫さんや師匠と比べると小さいんだよね」

文「ですよねぇ。私と同じか、少し小さいくらいですし１５６～１６２ｃｍくらいですかね」

大「〇ｃｍ厚底の下駄履いてる文に言われたくないよ。でもレミリア達よりかはだいぶ大きい！」

文「そこは誇ることじゃないですけどね。歳についてはどうなんですか？　歳に関しては『永遠の～歳だと思ってますか？』　との質問もきてますけど」

大「これについてはよく生きてこれたとしか。師匠たちとかアルフォードとか、先生と闘う時なんかは本当に怖かった。そういう風には見せなかったけど、闘う前には足とかガタガタ震えてどうしようもなかったからね…。だからそういう意味ではよく生きてこれたと思う。あと、僕は１６歳で魔法使いになったんで、永遠の１６歳です」

文「臆病な方が生き残れるらしいですし、それくらいでいいんじゃないですか？　ちなみに私も永遠の１〇歳です」

大「僕もそう思う…って言ったら駄目なんだろうなぁ。そう言えば文って僕よりほんの少し年上なんだよね」

文「お姉さんですから。じゃあ次です。ここからはかなり突っ込んだ質問になるので注意してくださいよ？　行きますよ？　ずばり！『今恋愛的な意味で好きな人は何人いますか!?』　大和さん、誰!?　ではなくて何人!?　と来ましたよ。ここのところもどうなのか一言お願いしますね」

大「あ～…僕ってそんなに浮いた話多いの？　と言うか、誰？　じゃなくて何人？　なのに驚きを隠せませんね!?　とりあえず答えるとすると、好きな人はいない…と言うか恋愛をしようと思ったことがないんだ」

文「それはどういうことですか？　ここには可愛い人や綺麗な人が大勢いるから答えられないのですか？　１人じゃないとダメなんですか？　２人じゃダメなんですか？」

大「そうじゃなくって、今まで自分のことしか考えてなかったから女の子のことなんて見てる暇がなかったんだよ」

文「今はどうなのですか？」

大「…ほんと容赦ないよねこの人。……一人だけ気になる人がいま

す、はい。誰かは言わないよ！？　何人かを聞かれただけだから！」

文「あやや…萃香様が聞いたら発狂しそうですね…。聞きたいですけど、その相手が血祭りに上げられそうなんで聞かないでおきましょう。ではどんどん行きますよ！　これもまたブッ込んだ質問です！　『大きいことはいいことか？』　『結局のところ、貧乳がすきなのか？』　気になりますね～。女としてこれは私も気になりますね。大和さん、私の知り合いの男性代表としてどうぞ！！」

大「…在るのと無いのとだったら、在るほうがいいと思うよ？　小さいよりも大きい方がいいと思いますよ…？　でも、お互い好きあってるのならそんなのは関係ないと思います！！」

文「教科書通りの解答ありがとうございました。見損ないましたよ大和さん。そこは「俺は貧乳でも虚乳でも巨乳でも構わず食っちまう男なんだぜ？」　くらい言って欲しかったですよ！！」

大「何キレてんの！？　ねえ！？　何でそんなに怒ってるの！？」

文「どうせ中間の私に色気なんてありませんよーだ。ケッ、次の質問です。…これはまた、凄い質問がきましたよ」

大「ん？　どんな問題？」

文「そ…そのですね、あ～、えーっと…。大和さんって魔法使い…だったりします？」

大「？　僕は魔法使いだよ。文も知ってる通り」

文「知らないわよそんな事!?　いえ！　じゃなくて、そういうことではなくてですね…。『ぶっちゃけ童貞？』　との質問です…／／」

大「…真っ赤になりながら言うセリフじゃないよねｏｒｚ」

文「すいません、恥ずかしいので早く答えて欲しいですｏｒｚ」

大「…ぶっちゃけると、まだ童貞さんですｏｒｚ」

文「……でもあれですよね、今まで女の人たちとずっと旅してきたみたいですし、闇魔様や巫女となんてほぼ同棲生活だったんですよね？　その時風呂場でばったりー、とか、着替え中に部屋に入っていやーんエッチーみたいなことになりませんでしたか？」

大「あ～～～、実はあるんだよね…。妹紅の時は僕がまだ小さかったから関係なかったけど、蓬莱島じゃ輝夜の入浴中に孤墨探しさせられた経験があるし。でも美鈴にはそんなことしようと思ったことはなかったんだよなぁ。何故だか知らないけど。レミリアとフラン

は…そうそう、あの2人が寝てる時に寝室に行けば解ると思うよ」

文「…吸血鬼姉妹って凄いんですか？　そう言えば『幼子を引き寄せる程度の能力』　を持っているらしいですけど、そこんとこどうなんですか？」

大「朝起こしに行った時にちょっとね…なんか変な癖になっちゃったらしいよ？　でも2人はまだ子供だから大丈夫、そこまで騒ぐようなことじゃないよ。後、僕はロリコンじゃないです。お兄さんは優しいから子供に好かれてるだけなのです」

文「つまり、寝ている2人を起こす時に何かがあったと。では巫女と闇魔様については？」

大「別に狙っやってるわけじゃないんだ…。ただタイミングが悪いだけであって、僕のせいじゃないと主張してるんだけどね…。頬が痛いよ…」

文「…怖いものついでに聞いておきましょうか。一番酷い時はどんな姿でしたか？」

大「ぜんｒ　「ストップ！　ストーーーーーップ！！　もう結構です！」　その方が身のためだと思う」

文「はあっはあ…。　さ、流石は大和さん。凄い体験してますね…」

大「少しでも思い出したら地獄行きなんで勘弁して下さい」

文「本気でやられそうだから怖いですね…。そうだ、あと意見のような物も来てますよ？」

大「お～気になる！　どばっと一遍に言っちゃってよ」

文「ではどばっと行きましょうか。『やはりロリコンか』　『このロリコンが！！』　『…散れっ！　ロリコン！！』　だそうです。あと、『覗きするなら堂々とやれ』　です。…大和、貴方覗きなんてしたの？」

大「……ロリじゃないんです。健全な男の子だって信じて下さいよぉ……」

文「とは言っても、大和さんの属性はロリで固められてますのでイメージチェンジは不可能ですよ？　あやや、感動のあまり涙を流してますね。解答者が使い物にならなくなったので今回はこれで終了とさせてもらいますね！　あと、大和さんへの質問や意見なんかがあればこれからもしっかり答えさせますので、お気軽にどうぞ！
以上、射命丸文でした～～～」

番外　第一回質問コーナー（仮）（後書き）

じらいです。届けられた質問への解答はだいたいこんな感じかなと。送られた質問や意見は少し変わっているかもしれませんがそこはご容赦を。

また機会があればやってみたいと思ってますので、何かあればまた送ってもらえると嬉しいです。では

幻想郷のために（前書き）

独自設定まみれの大結界始まります。

幻想郷のために

境内に咲いていた桜の花も全て散り、爽やかさを感じさせる柔らかな緑色の葉で覆われだした初夏。僕は母屋の縁側に座りながら、今年に入ってからよく見る『悪夢』　について思考を巡らせていた。所詮は夢、ただ寝ている間に見る夢だ。そう決めつけようとしているのだけど、現実のように思えてしまうのは僕の能力に原因がある。『先を操る程度の能力』…未来を読みとることすら可能なため、一概に夢だと決めつけることが出来ないからだ。

「暑くなってきたわね。そろそろ夏用の巫女服を用意しないといけないわ」

難しい顔で考え込んでいる僕の隣に座っているのは神社の主、博麗零夢だ。巫女服の胸元を大きく開いて少しでも風を通そうとしている。僕とは違い、暑くなってきたことに顔を歪めているみたいだ。

零夢と出会ってからこれで5年目。１５歳になった零夢は完成された美少女と言っていいだろう。何気ない仕草にも艶やかさというものが見え隠れしてきている。今もさらしがほぼ丸見えなのだが、僕が何も感じない…のは真っ赤な嘘だけど、何か行動を起こそうと思わないのは常に隣で見てきたからなのだろうか。

「そうそう、その夏服でも一悶着があった。まったく紫様には困っ

たものだよ。大和殿、君もあの人の酷さは知っているだろう？　あの人はこの前も――――――――――」

「藍さんも大変みたいだね」

「と言うか、何で毎回ここまで愚痴りに来るわけ？」

零夢の反対側で愚痴を言っているのは紫さんの式である八雲藍さん。事あるごとに愚痴をしに来ているため、聞き流すこともうお手の物となっている。それでも紫さんに尽くしているのだから良い主従関係が築けているのだろう。文句の中にも紫さんへの親愛を感じ取ることができる。

「狐、あんたまさか愚痴を言うためだけに来たわけじゃないわよね？」

「……ああ、そう言えば紫様と幽々子様から君たちに伝言があったのを忘れていたよ」

そう言えば、と九尾をピンッと立てて言う藍さんの尻尾が凄く気になる。触ると気持ちいいんだろうなぁ、あの尻尾。もふもふしたいなぁ、そう思って考え込んでいると零夢に抓られた。この巫女、最近カンが鋭くなったのか知らないけど、邪な考えをしたら直ぐに針とか飛ばすようになって来た。おかげで清く正しい僕が維持出来ているのだけど。

「『今夜2人で白玉楼に来なさい。御持て成しをするわ』　だそうだ」

「へー、それは楽しみだね。せっかくだし行こうか」

「…そこまで言われたら行くしかないわね」

そう言う零夢からはそれほど嬉しそうな感じがしない。面倒臭いのかな？　前に一度行った時も一人で早く帰っていたし、それほどいい思い出もないのだろう。でも今回は最初から御持て成しされに行くのだから、暇になるなんてことはないだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

「よく来て下さいました。白玉楼の主として、今宵は精一杯の御持て成しをさせてもらいます」

「お招き頂きありがとうございます」

「はいはい、挨拶はいいから早く飲ませて頂戴」

「まあそう言わないの。貴方も大和を見習ったらどうなの？」

本当にすいませんね、家の巫女が自分勝手で。申し訳なさでいっぱ

いですよ。西行寺さんと紫さんも笑っているみたいだけど、零夢も最低限の礼儀は覚えた方がいいと思う。2人がそうだとは言わないけど、笑顔で人を惑わせる人だっているのだから。

「どうやら答えが出た様ね」

「おかげ様でね。もう何も迷うことはないわ」

「それは良かったわ」

「ど、どうかしたんですか？」

柔らかい眼差しで見つめる西行寺さんと、睨みつけて吐き捨てるように言う零夢。初めて会った時に何かあったのだろうか、2人の放つ気が凄く怖いです…。助けを求めようと紫さんを見るも、何故かこちらも難しい顔をして黙りこんでいる。あの～、何が起こってるんです？

「お待たせした。料理を持って…何かあったのですか？」

「何もないわ。さあ、宴を始めましょうか」

◇◆◇◆◇◆◇

宴会とは言ってもお酒はあまり出ず、豪華な料理とお茶が中心になっていた。何でもこの後に難しい話をするらしく、それはお酒が入った状態でできるような軽い話題ではないらしい。しかし、お酒が出ないことを気にさせない程美味しい料理だった。

「ところで西行寺さんに質問があるんですけど…」

出てきた料理を堪能し、少し落ち着いた所で僕は前来た時に気になっていたことを聞くことにした。

「何かしら？」

「あの大きな桜の木、あの木から異様な感じを受けるんですけど、何か謂れでもあるんですか？」

「……そうねぇ、私よりも妖忌や賢者様の方が詳しいと思うわ」

「え？　何でですか？」

長い空白の後、少し寂しそうに微笑んだ西行寺さんに僕は自分が聞いてはいけない類の質問をしてしまったのだと気がついた。やってしまったと思ったけど、今更訂正してもあまり意味はないだろう。ただ、そんな僕を見てか、紫さんや妖忌さんは苦笑している。零夢にいたっては我関せずと少ないお酒を飲み続けている。

「私から言わせてもらうと、もうあの桜の木が咲くことはないと言うことだけよ」

紫さんの言葉に妖忌さんも深く頷いている。だけどその表情からは…いや、これ以上は藪蛇だろう。それに何かあるにしても、妖忌さん程の達人が露骨に顔に出すようなこともないはずだ。

「…そろそろ良いかしら？　私からも大切な話をしたいのだけど」

そう言って紫さんは真面目な顔で僕らを見つめてくる。何時もはふざけて人を煙に巻く人だけに、真面目な顔をされると何故か怖くなる。普段とのギャップの差が激しすぎるだけに。だから今から話される内容は、それほど大切な話だということになるのだろう。

「――――――――――――――――――――――――――――――――」

このあと紫さんから聞かされた話に驚きを抱くのと同時に、自分の見た悪夢が未来に起こるであろう事件だとの確信を得た。

◇◆◇◆◇◆◇

「本当に手伝うの？　危険が大きすぎる、やっぱり僕が…」

「これは博麗の名を受け継いだ者の使命よ。私じゃないと駄目だと八雲紫も言ってたじゃない」

「だけどさ…、命を落とすかもしれないんだよ？」

「もしかしたら、よ。博麗が幻想郷のために尽くすのは、何も今始まったことじゃないわ」

白玉楼からの帰り道、紫さんから話されたことについて話し合う。どうやら紫さんは幻想郷に結界を張るらしい。最近になり、幻想郷から離れた場所では妖怪の存在が否定され始めたようで、このままでは妖怪が絶滅する恐れがあるからと。

まるで魔女狩りが行われていた時みたいだ

そう思った。でも結界が貼られるため、前みたいに人と妖怪の大規模な戦争が起きるようなことはないと思う。でも幻想郷内では解らない。悪く言えば妖怪は幻想郷に閉じ込められることになるのだから。そうなった時、結界の張られた理由を知らない妖怪たちが暴れ出すかもしれない。紫さんは、既に妖怪の山を始めとする幻想郷の各所に説明を終えていると言っていたけど、末端までその考えを理解出来ているとは到底思えない。

結界構築には博麗神社の地下に眠る地脈エネルギーを利用し、それを結界の主な力とする。ただそれでも結界を補える程ではないため、

零夢と霊力と紫さんの妖力を使うのだけど…。最悪の場合、霊力が枯渇して死に至る可能性が否めないのだ。そこまで激しい消耗はほぼないと言うことだけど、もしもの場合がある。

更に結界を張る時、紫さんと零夢は完全に無防備になる。だから僕が呼ばれた。僕と藍さんで2人を死守して欲しいと頼まれた。また、出来ることなら人里・紅魔館にも協力を要請して欲しいと。でもそれは難しいと思う。人里にも妖怪が押し寄せる可能性があるから妹紅と慧音さんは動けない。紅魔館には一応協力を要請するけど、あのアルフォードが僕らのために動くなんて考えられないし、僕自身があいつに頼りたくない。

「あ、1人だけ手伝ってくれそうな人がいるのを忘れてた」

「誰よ？　こんなことに手を貸してくれる変人って」

引き受けてくれるに違いない。だって僕の本気のお願いを断ったことのない人だから。…だからもう一つのお願いもきっと引き受けてくれるはずだ。

本当なら誰にも頼りたくない。全部僕一人でやりたいけど、それには力が足りない。…悔しく思う。

◇◆◇◆◇◆◇

「藍、帰ったわよ」

「お帰りなさいませ」

八雲邸。誰も知りえない場所に建てられた大きな一軒家には八雲を冠する2人が住んでいる。隙間を繋ぎ、白玉楼から直接移動した八雲紫の顔には深い笑みが刻まれていた。

「引き受けてくれるらしいわ。まったく嬉しい話よねぇ」

「…その件なのですが、一つ気になることが」

流し台に立って洗い物をしていた藍が手を止め、主に己の気がついたことを伝えようとする。その表情は何時も神社で見せている朗らかな笑顔やムスッとした不満げな顔ではなく、見る者を震え上がらせる程に冷たい表情だった。

「伊吹大和が感づいているかもしれません。本日神社へ様子を見に行った時には私の話もどこ吹く風、上の空でした。少し読心を仕掛けた所、心に大きな揺れを感じました。その後には紫様と彼が向き合っている光景が」

「『先を操る程度の能力』　か…。厄介なモノね、飼い犬に手を噛まれるなんて笑える話じゃないわ。だとしてもあの子にはもうどうしようも出来ないし…はっきり言っちゃなんだけど、どう転んでも

結界は張られるわけだからどうでもいいのだけど。それよりも術式の方は完成しているんでしょうね？」

「抜かりありません。両方とも問題なしです。」

「よろしい。後はその日を待つだけね」

博麗大結界。幻想郷の未来を守るために2人は動き出す。夢物語のような世界がもう間近まで迫って来ているのだ。きっと上手いく。上手くする。今までも多くの犠牲を払ってきた。もうすぐ私の目指した理想郷が出来あがる。迷いはない。大の為に小を切り捨てることに、今更何の迷いもない。

「ところで、藍は神社で何を話しているの？」

「貴方への不満です」

「…油揚げ抜きね」

「じゃあ紫様はご飯抜きですね」

…この2人にしてみれば、それほど気負う程のことではないのかもしれない。

◇◆◇◆◇◆◇

←この先お便りコーナー

文「シリアスなんかやってられるか糞くらえ！　てなわけで、ここからはお便りコーナーで～す！　番外で話数伸ばそうか？　なんてマネはもう止めです！　今回からはお便りが来る限り、本編後にやっていきたいと思います！」

大「こうやって少しずつ顔を見せることになるかもなので、興味のある方もない方もよろしくお願いします」

文「基本的に一話に一個か二個しか答えれません。尺の問題です。なので質問等を送ったけど自分のではない！　と思った方、次回以降に期待しておいてください。では早速。『胸がない方が好きな僕は変ですか？』　…うわ～ぉ、こいつはヘビィな質問ですね」

大「あれだよ、前にも言ったけどそこに愛があればいいと思うんだ」

文「じゃあ吸血鬼姉妹のどちらかと大和さんの間に愛が生まれれば胸なんて何の問題もないと？」

大「それ、僕答えたらまたロリコン扱いされるよね!?　折角送って貰えたんだから答えるけどさ…。もしもだよ？　仮に僕が2人のどちらかと結ばれることになるとしたら、そんなこと関係ないと思うよ？　でももう一回言っておくね？　僕、ロリコンじゃないですから！　慧音さんみたいな人が好みですから!!」

文「そうやって必死になる時点で駄目ですね。ではまた次回にお会いしましょう！」

幻想郷のために（後書き）

大結界が始まりました、じらいです。これから先、八雲紫がサド…というよりかなり外道っぽくなりますので、構えておいて下さい。

ここは予告通り行けそうな目途が立ちました。…本当に良かったです。

質問？　お便りコーナー？　はこれからも続きます。もちろん届く限りの話ですがｗ

博麗大結界（前書き）

独自解釈塗れで始まります。テンション上げて行かないと持ちません。

博麗大結界

～大結界の構築三日前　紅魔館～

「じゃあ要請は受け入れられないと？」

「当たり前だ、お前たちだけでやればいいだろう。だいたいお前自身がそんな嫌そうな顔をして頼みに来た時点でお断りだ」

「来たくて来たわけじゃないし、頼みたくて頼んでるわけじゃない。頭首がお前じゃなくてレミリアだったらそっちに話を通しているよ。後で紫さんに何か言われないために来ただけ」

「なら早く帰れ。娘たちにも手伝わせんからな」

ふん、相変わらず偉そうな奴め。こっちだって名目上で頼みに来ただけだっての。だと言うのによくもまぁ踏ん反り返って言えるもんだ。お前に助けてもらうつもりはねーから！

ケッ！　軽く舌打ちして叩きつけるように扉をしめて部屋を出た。イライラするなあもう！　だいたい紫さんが自分で話をつけたらいいんじゃないか！

「ヤマト、お父様とのお話終わった？」

「終わったけど、どうかしたの？」

紅魔館の廊下を音をたてて歩いているとフランが曲がり角から現れた。何やら落ち着きがなくそわそわ…いや、もじもじしている。僕の機嫌が悪いのを理解しているのか、話すのを躊躇っているように目線を合わせようとしない。

「えっと…その、また本を読んで欲しくって…」

偶然出会ったのではなく、どうやら話が終わるのを待っていたみたいだ。後ろ手に持った本がそれを知らせてくれる。今も目を背けてそわそわしているし、少し脅かしちゃったかな…。

「じゃあ図書館に行こうか」

勤めて優しく話す。フランは人の感情を捉えるのが凄く上手い。感受性が高いと言った方が良いだろうか。少しのことでも大きく受け止めてしまう傾向がある。それは僕が出て行く前からあったみたいだけど、地下室に籠った後更に強くなったとレミリアが言っていた。なんでも、嫌われたくないとか。こんなに可愛い子を嫌う人がいるのなら逆に見てみたい気がするけどね。

「うん！　今日もいっぱい読んでね！！」

荒んだ心にその笑顔は眩しすぎるよ…。

紅魔館に来た時に僕がすることは主に三つ。レミリア達とのお茶会・パチュリーとの勉強・そしてフランと一緒に本を読むこと。子供らしくなったフランは暇を持て余すとこうやって本を読んでと頼んでくる。だから図書館で読んであげているんだけど、それをみた幼い姉も目を輝かせて聞いていることがある。…本人にいったら、そんなことはない！　と強く否定してくるけど、それが返って疑惑を強くしているんだよね。

「あ、お姉様がいる」

「本当だ。勉強してるみたいだから、あっちの奥に行こうか」

「もう終わったから気にしなくていいわ。せっかくだし、私も聞かせてもらおうかしら」

かなり注意して小さな声を出したはずなんだけど…まあいっか。でもお嬢様、不敵な笑みを浮かべて言うのはいいですけど、口元が緩んでいらっしゃいますよ？

「むぅ…ヤマト、膝借りるから！」

「どうぞー」

椅子に座ったところでフランが膝に跳び乗って来た。まるで私の場所だと言わんばかりにレミリアに向けて唸って？　威嚇している。…残念ですけど、これは僕の膝ですから。あと、レミリアも悔しそうな顔しないでね。余計にフランが膝上で暴れます。

「じゃあ読んでー」

「……」

「じゃ、じゃあ読もうかなー」

何でだろね、何でこんなにも殺伐とした本読みが始まるんだろうね…。最近ね、この姉妹実は仲が悪いんじゃないかと思うんですよ。普段は仲良さそうなんだけど、時々こうやってケンカ腰になるんだ。しかも僕の居る時だけだってパチュリーが言ってたから、こうして僕も出来るだけお願いごとを聞いてるんだけど…意味ないんです。

「しかし、また恋愛小説なんだね…」

騎士がお姫様と助けて恋に落ちる話。これで何回目なんだろうか…。僕の妹的存在であるフランドール・スカーレット、どうやら御年頃のようです。

◇◆◇◆◇◆◇

「じゃあまた今度」

「うん！　また本読んでね！」

本を読むのも終わり、夜も明けようという時間帯に僕は帰路へとつこうとしていた。レミリアとフラン、美鈴が門まで見送りに来てくれている。…美鈴は門番だから居るだけだけど、寝てるのかな？目を瞑ったまま微動だにしないんだけど…。

「明日の夜、美鈴は非番になっているわ」

「…！　わかった。じゃあ美鈴を誘って遊びにでも行くよ」

「そうね。幻想郷を案内してあげて頂戴。…大きな運命が動くのを感じるわ。気をつけてね」

「わかってる」

レミリアは少し心配したように、フランドールは満面の笑みを浮かべている。アルフォード、どうやらお前の娘は強かに育っているみたいだ。次期党首、レミリア・スカーレットはきっとあんた以上の器を持っているに違いない、そう思うよ。

◇◆◇◆◇◆◇

～博麗大結界構築当日の深夜～

「悪いね美鈴、こんなことに付き合わせちゃって」

「別に構いませんよ。それに大和さんとまた背中を合わせて戦える機会を無駄になんて出来ませんから」

「…実を言うと、僕も美鈴と一緒に戦えて嬉しいんだ」

紅魔館から美鈴を借りて、僕は博麗神社から少し離れた空を漂っていた。美鈴にはこれから何が起こる可能性があるのかを伝えてある。妖怪たちが動かなければ僕らは何もしなくてもいいけど、そんな楽は出来そうにない。僕の能力がしきりに警戒するべきだと伝えてくれている。妖怪がやって来るという、ね。だからほぼ確実に動くこととなるだろう。

「ではこの場は頼む。私はもう少し後方に位置する」

僕らが神社から少し離れているのは、もし防衛線を抜かれても追撃によって対処できるようにするためだ。前衛・美鈴、中衛・僕、後

衛・藍さんの三人が迎撃チームだ。美鈴が単騎で突っ込み、僕は広い範囲を魔力糸でカバーする。藍さんはその零れた部分のカバーに入るのが今回の作戦だ。また、僕の魔力糸は中級の中位程度なら難なく切り刻めてしまうため、構成を雑にして面で叩き落とすように考えている。

「そろそろ始まる頃合いだな……地面を見るといい、肉眼でもはっきりと見ることが出来るぞ」

藍さんの声と共に地面が淡く輝いていくのが見えた。その光は線となり、力が博麗神社から外へと向かっているのがはっきりと見える。地脈エネルギーを幻想郷中に広げているのだろう。おそらくこの後に結界の構築が始まるはずだ。

「前方より妖怪接近！」

「って！？　何であんなに大量に！？」

「事前に情報を知らせておいたのが仇となったか。紫様も博麗の巫女も、妖怪たちの怨みを多く買っているからな。これを気に始末してやろうと思う輩がいても不思議ではない」

だからってこの数はないでしょ…。ぎりぎり上級に届きそうな人もチラホラと。戦力比、見た感じでざっと１００対３。まったく嫌になる。

「言ってても仕方ないですし、私が突っ込んで数減らしますんで。大和さんと藍さんはフォローお願いします」

「任せてもらおうか」

「無駄な殺生は避けて！」

「1人も殺しませんよ！　ただ、一生歩けなくなるくらいの覚悟はしてもらいましょうか！！」

美鈴は虹色に輝く気を纏い、妖怪たちの中へと吶喊していった。

◇◆◇◆◇◆◇

「さて、じゃあ始めるわよ。準備はいい？」

「何時でもいいわ」

何時もとは違い、博麗に伝わる神器を片手に境内に立つ。向かい合って立つ八雲紫の顔も緊張からか、何時もより厳しい顔が見てとれる。何時も飄々としている妖怪だけど、それも仕方ないことかもしれない。何せ私たちは今から一つの『世界』　を創ろうとしているのだから。

緊張しているのは私も同じだ。失敗は許されないし、もしかしたら死ぬかもしれない。歴代最高という評価も前代未聞の出来事を前にすると霞むというものだ。…あいつが心配してくれているから少しはマシなんだけどね。

「地脈エネルギー、来るわよ」

「…！」

境内に張られた巨大な術式に膨大なエネルギーが流れていくのが解る。私たちの仕事はこの力を暴走させることなく、かつ結界を幻想郷を囲むように張り巡らせること。とても骨が折れる仕事だ。少しでも歪みがでると力が暴走し、私たちに害を及ぼすのだから。

「ん……ッ……」

正直、いっぱいいっぱいだ。幻想郷中から流れ込んでくる膨大な力をたった一つの術式に入れる。大量の力を受け入れるために入口は大きく調整されていても、流れてくる力がそれよりも遙かに大きければ意味がない。額には大量の汗が浮かび、目の裏がチカチカと光る。

「……力の軌道を確保、後は任せたわよ……」

力の通る道を制御下に置いたところで一息をつく。身体は汗でびしょびしょだし、頭はがんがん痛むし、なんかもう、どっと疲れたわ。まだ全部終わってないけど、後は目の前の賢者様にでも任せていればいいだろう。どうせ後は足りない分の力を私たちで補えばそれで済むはずなんだし。

「――――――――――術式も稼働し始めたわ。後は時間が経つのを待つだけね」

「…そうみたいね。幻想郷が覆われていくのが解るわ」

集められた力が幻想郷中に再び、今度は明確な意志によって広げられていく。でも、よくもまぁこんなモノを創ろうと考えたものよね。一つの世界を丸々覆ってしまうだなんて普通の奴が考えることじゃない。…だから賢者だなんて呼ばれているのか。

「足りないのはちょうど1人分ってとこね。じゃあ、足りない分の力を入れて行きましょうか」

◇◆◇◆◇◆◇

「ああもう、何だってんだよこいつ等！　それほど強くもないのに

全然堕ちない！！」

「熱くならないで下さい！　ここを抜かれなければいいんですから！！」

「解ってる！！」

解ってるけど、さっきから胸の奥がざわついて仕方ないんだ。視界の端で零夢が泣いている光景が映っているんだ、冷静になれるわけないだろ！　こんなことしている場合じゃない、今直ぐにでも助けに行かなきゃならないのに目の前の妖怪たちは全く堕ちてくれない。

「誘われてるのか…？　いや、だとすれば何で…？」

追えば引き、引けば詰め寄られる一進一退がもう長い間続いている。まだ1人も通してないけど、これじゃあ千日手だ。どうにかして早く堕とさないと、そう思っていると正面から真黒い物体が凄いスピードで飛んできた。

「真黒い…玉…？」

少し離れた場所でふわふわと滞空している黒い球体。球体といってもはっきりとした球状のものではなく、形はいろいろと変化しているのだけど。周りの妖怪たちはその球体を見て怪しんでいるのか、動きが止まっているものが多い。

「今の内に「大和さん避けて！！」　…ッツ！？」

動きの止まっている妖怪の隙を突こうとしたところで美鈴が声を張り上げた。何事か！？　そう思った瞬間には濃厚な殺意と妖力を含んだ黒い槍が、玉から僕目掛けて飛んできた。

「ッ突破された！？」

瞬きする暇もない程の速さで放たれる無数の黒槍を前に、捌き、避けることしか出来ない僕の横を妖怪たちが素通りしていく。美鈴が追いすがろうとしているけど、そちらにも同等の黒槍が放たれた。あの通り過ぎていった妖怪たちはもう藍さんに任せるしかないだろう。彼らよりも、目の前の存在の方が零夢たちにとって危険になるだろうから。

「何者だ？　闘うと言うのなら姿くらい見せるのが筋じゃないのか？」

避けきれず、所々皮膚と服が裂かれた。掠っただけで致命傷は受けてないけど、この玉がとんでもない使い手だということは解る。これが全力でなかったとしたら…ゾッとするね。

「……」

「だんまりか。美鈴、倒すのにどれくらいかかると思う？」

「…正直解りません。強敵なのは確か、なんですけどその度合いが」

隣で滞空している美鈴も所々傷を負っている。こちらもかすり傷程度だけど、一筋縄ではいかない敵を前に顔を顰めている。美鈴を以てしても目の前の不思議な物体は測りきれないと言うことなのか。

思わぬ強敵を前に、僕らは足止めをくらってしまった。

「どうしたの零夢？　苦しそうだけど…大丈夫？」

「…誰の、せい…だと、思ってんのよ！！」

大和が謎の妖怪に足止めされているその時、零夢は冷笑を浮かべる紫の前で膝をついていた。

博麗大結界の完成は近い

◇◆◇◆◇◆◇

文「第二回！　お便りコーナ～！　嬉しい限りですねぇ、こうやって届けてくれる方が居ると言うのは」

大「第二回にして弄られるのが確定してる大和です…。大和です…。やまとです…」

文「古い人のネタだしても誰も反応しませんよ？　やるんだったら、そのシリアスをぶっ壊す！　くらい言ってもらわないと」

大「そ、その「では質問入りまーす」　……」

文「『大和って結局どこに住みたいの？』　だそうです。どうですか？　これを気に私の家に永住しませんか？」

大「文ちゃん寝言は寝て言おうね～。住みたい希望は、鬼の皆がいる近くかなぁ。やっぱ家族とは近い方がいいし」

文「本当に鬼の方々が好きですよねぇ。こんな美少女が一緒に住まないか？　って聞いてるのに断るなんて。普通はホイホイ付いて行きますよ？」

大「じゃあ住む？　なんなら死ぬまで一緒でもいいけど」

文「え……。そ、それって、その…ぷ、プロポー　「そしたら文、絶対僕のことこき使うよね。帰ってきた時もご飯作らされたし、新聞のネタにされるから却下で」

文「一瞬でもドキッとした私が馬鹿でした…。ちょっぴり落ち込みますね。まあ別にいいですけど。じゃあ次です。『本家才能のない主人公様とどっちのほうが才能ないですか？　飲みこみはどちらの方が早いですか？』　です」

大「僕のほうが才能あります」

文「即答！？」

大「男の子は負けず嫌いです。たとえ負けていても心では負けれません」

文「根性論どうもありがとうございました。詳しくは愚かな作者が超番外の方で絡む機会を考えていますので、その時にちゃんとした答えがでると…思いたいですね。残念ながら今回はこれで終わりです。また何かあれば送ってくださいね」

大「…ああそうだ、別に僕のことだけじゃなくていいですよ？　伊吹伝独自の世界観とか、師匠に勝てる人いるの？　でも何でもＯＫです。それではまた次回」

博麗大結界（後書き）

こんにちは、じらいです。博麗大結界始まりました。が、直ぐ終わりそうな気配がした御方、正解です。これも含めて全3話にするつもりですので。

大和の前に現れた黒い物体、2人の八雲の思惑、零夢の行方、大和の言った助けてくれる人とは誰なのか？　次回以降に判明しますのでお待ちください。

博麗大結界２（前書き）

今回は短めです

博麗大結界2

よし、全て予定通りに進んでいるな。

私(らん)は目の前で奮戦している2人を見つめながら、計画が当初の予定通りに進んでいることを確認する。幻想郷のために紫様が数百年も前から立てられた計画も、もうすぐ最終段階に入っている頃だろう。

幻想郷を守る博麗大結界の構築。それは博麗零夢の死を意味する。いや、直接殺すわけではない。歴代最高の巫女である博麗零夢を幻想郷の礎にすると言った方が正しいだろう。

紫様の夢。それは人間と妖怪との楽園を創ることだった。

滅びゆく定めであった私たちを救済する最善の一手。外界との繋がりを遮断し、半永久的に続いて行く楽園を目指し、今日この瞬間まで漕ぎ着けた。大陸の妖怪たちが目指し、憧れ、それでも届かなかった夢がもう目の前まで来ている。もうすぐ、もう間もなく私たちの悲願が達成される。全ての妖怪が緩慢な死を避けられる、そんな世界が出来るのだ。

今、目の前では大和殿たちが妖怪たちに大立ち回りを見せている。…残念な妖怪たちだ。我々に誘い出されたことも知らずにわざわざ殺されに来るとは。ここにやって来ている妖怪たちはならず者か、巫女と賢者を倒したという名声欲しさに来た者たちばかり。世界と

いう大局を見ず、己の利権にのみ走る愚か者たち。待っていろ、結界が貼られ次第私が直々に始末してやろう。

そしてこの場に黒い闇に包まれた妖怪が姿を見せた。

これは一つの合図だ。この瞬間から、2人はあの闇を纏った妖怪に引きつけられることを意味する。この妖怪が現れることは前もって計画されていたことであるが、あの闇を纏った妖怪には注意しておかなければならない。何を考えているのか解らない上に、私を以てしても御しがたい存在だから。紫様も何故あのような妖怪を利用しようと思ったのか…

「私がこいつ等を迎撃する！　2人はその妖怪を足止めしておいてくれ！！」

闇の妖怪が大和殿を強襲し、その隙を突いた妖怪共が防衛線を突破してくる。迎撃はするが、わざと何人かの妖怪を素通りさせ、それを追いかけるフリをしながら紫様たちの場所へと向かう。この後、私は2人と距離を取ってからこいつらを始末し、後は何者にも主の邪魔をさせない様に控えておく手筈になっている。

「悪いが、敵対する者は逃がすなとの御命令だ。恨むのなら浅はかな自分を恨め」

前方を飛ぶ妖怪たちに狐火を飛ばして焼き殺す。神社の近くに来た時には、目の前には一匹の怯える妖怪しかいなかった。…仕方あるまい、私は九尾の狐。目の前の小さな存在にしてみれば遙か雲の上の存在だ。だが、どんな相手でも情け容赦はしない。せめて苦しまないように一瞬で殺す。

目の前で怯えている妖怪の首を一瞬で斬り裂き、絶命させる。返り血が私の服に跳んだが、気にもならなかった。

…あまり気分の良いものではない。解っていたこととはいえ、巫女やこの妖怪たちも本来なら救うべき対象だ。こういう結果になってしまって本当にすまないとは思う。

計画の立案当初から多くの犠牲者が出ることは重々承知していた。そのことに何度も迷い、苦悩し、だがそれでも止まらない、止まることを許されない。私たちが止まればより多くの犠牲が出る。悪いとは言わない。謝ることも絶対にしない。だがせめて礼を言わせてくれ。『未来』　の為になってくれて、本当にありがとう。深く頭を下げ、感謝の意とする。何度も、本当に何度も繰り返したことだ。

「ふざけろ、この馬鹿者」

「!?」

そんな私の背後に突如とし現れたあまりにも強大な妖気。振り返って見るまでもない、これほどの力を持つ存在は幻想郷でも限られている。だが何故、何故貴方様が今此処にいるのですか!?

「そこで待ってな。わたしがあんたの主を止めてやるよ」

視界が暗くなる前に見た人物は、悲痛な面持ちをした大和殿の母であり、紫様の数少ない『友人』　である伊吹萃香様だった。

◇◆◇◆◇◆◇

～神社から少し離れた上空～

「大和さん右！」

言われなくても、右方向から飛んで来る槍で串刺しにされる僕が視えてるよ！　先程から視界を覆い尽くすように目の前の黒い球体から多数の槍・棘や、黒い弾幕が飛んで来ている。辺りは夜の闇以上の漆黒の世界に包まれており、あまりの視界の悪さに能力を使わなければ攻撃を避けられない。

そうこうしている間にも時間は過ぎていく。何故か妖怪は執拗に僕を狙ってくるため、藍さんの援護に行けないでいる。基本的に美鈴を無視しているようなので、美鈴を藍さんの援護に向かわせようとしたんだけど…それは叶わなかった。

美鈴を向かわせるために僕が全力で相手をしているのにも関わらず、その僕を相手にしながらも美鈴の行動を制限させる。背後？（真黒いためどちらが表か解らない）　から仕掛けても、まるで後が見えているかのように迎撃される。一つ一つが必殺の一撃であり、出所や初動を見ることが出来ないので厄介なことこの上ない。

「早く零夢のところに行かなきゃならないのに…」

焦りは禁物。そんなことくらい熟知している。でも時間が掛り過ぎている。こうしている間にも零夢の身に何かが起きているかもしれない。紫さんが居るとはいえ、絶対に安全だとは言えないのだから。

焦りは判断を鈍らせ、動きを単調にする。静の気質を持った僕にとって平常心を保てないことは死活問題だけど、今回ばかりは心を静めることが出来そうにない。

「…焦ってるのね」

「！」

相変わらず姿は暗闇に紛れて見えないけれど、今までの沈黙を破って声が聞こえてきた。そこから考えるに、おそらく女性ではないだろうか。

「早く向かわないと手遅れになるけど、それじゃ私は倒せない。巫女の身を案ずるのならばこそ、全力を以て私と闘いなさい」

それすら出来ないのなら此処で死んでもらうわ、そう言った妖怪から途方もない力が解放される。そこから放たれてるプレッシャーはまるで師匠と対峙しているよう。こんなとんでもないバケモノが幻想郷にはゴロゴロ居るのかと思うのと同時に、僕はここを突破出来るのかと考えた。いや、それ以前に僕はこの師匠クラスの妖怪を前に生き残ることが出来るのだろうか？

あらゆる思考が頭の中を駆け巡り網目のように絡み合う。思考の淵に沈んでいく僕を正気に戻したのは、嘗て大陸を共に横断した相棒だった。

「大丈夫、私が着いてます。勝てますよ…いえ、貴方を勝たせてあげます！！」

「美鈴……」

僕の肩を叩いて強気な笑みを浮かべて崩さない。今も昔も頼れる武の先達を前に僕は目頭が熱くなるのを押さえた。…はぁ、何時もこうだ。僕が周りを守っていきたいのに、誰も彼もが僕の前に出てくる。カッコよすぎるんだよまったく。

「何言ってるんだ、僕が美鈴を勝たせてあげるんだよ。何なら後で寝ててもいいよ？」

「そうですねぇ…。それも魅力的ですけど、せっかくなんで隣に立たせて貰います」

「好きにしたらいいと思うよ？」

ケラケラと笑い合う僕らを見て、目の前の妖怪からもクツクツと笑い声が聞こえてきた。何が可笑しいのか、僕らは狂ったように笑い合った。

漸く何時も通りになりましたね。ありがと。短い一言だけど僕らにはこれで十分。あとはこれからの行動で示せばいい。

「さて、と。じゃあ一発やってみますか！」

「ですね」

魔力を、気を纏い目の前の妖怪を睨みつける。もう大丈夫、何時も通りにやれる。隣には心強い仲間がいる。きっと勝てる。そして零夢を助けに向かうんだ！

「やっぱり貴方、面白いわぁ。ああ！　食べたいなあ！！」

闇が覆い尽くす空を僕らは駆け抜ける。

◇◆◇◆◇◆◇

文「暗黒面ダースシリアスってしってます？　間違ってる？　んなこたぁ知ってる射命丸文と」

大「伊吹大和です」

文「色々喋くりたいのですけど時間がないのでさっさと行きましょう。では質問です。『大和君の現状況での好感度が高いのは慧音さん以外では誰？』　もちろん私ですよね。てか私と言えや」

大「じゃあ文で」

文「真面目に答えない人は向日葵のサド丘送りなんですよねー」

大「誠心誠意答えさせていただきます、サー。とは言ってもこの質問抜け道がアルノデス。好感度、つまり好感度ならどう捉えてもＯＫなのだから。友達的好感度とかどうよ？」

文「…ありじゃないんですかねー」

大「やる気ないね文。じゃあ言うと、零夢だね。一番近くにいるし、何と言っても相棒だし」

文「だそうですよー。次は『ぶっちゃけ誰と結婚するつもり？』

とか逃げ道消す方向で質問したほうがいいと思いますね。　…この人がそれでちゃんと答えてくれるのかは解りませんが」

大「誠心誠意公言してるじゃないか、慧音さんのような人がタイプだって。妹紅みたいなカッコイイ人も好きだけど、あれは憧れみたいなものだからなぁ…」

文「じゃあ輝夜さんって人はどうですか？」

大「…正直、会いに行くのが怖いんだ。何と言うか視線がヤバイ。気がついたら近くにいるし…」

文「…会いに行く時、保護者（わたし）を連れていくって約束しましたよね？」

大「（隠れてるのに会わせられるわけないよね!?）　ではまた次回！」

文「こらッ逃げるな大和！」

博麗大結界2（後書き）

2夜連続で投稿するのは久しぶりになります、じらいです。今回は藍様の心情が主になってます。外道は外道、でも綺麗な外道を目指そうと思っているのですがどうでしょうか？　結局は大陸の時の繰り返しのようになるんですけどね。

次回で大結界編は終了です。それほど綺麗には終わりません。むしろ最悪な終わり方に近いかも。零夢・紫が主になるので大和はお休みですね。その代わりに母親が頑張るかもしれませんがw

それではまた次回

博麗大結界　終幕（前書き）

何も知らない方が、幸せな時だってあります。つまり、そう言うことです

博麗大結界　終幕

博麗神社の境内。八雲紫が放った一つの術式に身体を絡め取られた私は、その場から一歩も動くことが出来ない状態にあった。その動けない私の身体からは霊力が奪われて行っている。

「死に逝く貴方には全てを話しておきましょう。…安心してあの世に逝けるように」

身体に力が入らない。既に足腰は立たず、今では境内にうつ伏せの状態で横たわっている。あまりの虚脱感に指一本動かないが、そんな状態でも一つの事実だけははっきりと理解できている。

私（れいむ）は今日、ここで死ぬ。

八雲紫が隠し持っていた二つ目の術式、それは結界を展開するのに足りない分に私の霊力を全て流し込ませるものだった。その思惑に早い段階で気が付いた私は必死に抵抗しようとしたけど、おそらく入念に私の霊力波長を計算し尽くしていたのだろう、たいした成果も出せなかった。

「貴方の霊力波長を完璧に捉えたこの術式、良い仕事してると思わない？　これを創ったのは藍なの。ほら、あの子よく神社に遊びに来てたでしょう？　その度に貴方に悟られない様に探っていたの。

カンの鋭い貴方にいつバレるか解らない、骨が折れる作業だったと言ってたわ」

やっぱり調査済みだったか。あの狐、何度も神社に来ていると思ったらそんなことをしていたのね…。気がつけなかった私自身の問題だ。巫女が妖怪に気を許すなんてあってはならないことなのに。

「次に何故妖怪たちに大々的に結界構築を知らせたのか。それは敵対者をあぶり出すためよ。今後の為にも私に敵対する者の戦力を少しでも削る必要があるの。だって私、味方よりも敵の方が馬鹿げたほど多いんだもの。こんな時にでも減らしとかないとやってられないのよ」

あー本当に面倒だわ、と笑って言う八雲紫。ええ多いでしょうよ、私もあんたの敵なんだからね！

「じゃあ問題。結界を張るために、何故貴方が必要だったと思う？何故力を私と貴方で二等分しなかったのでしょう？」

「知るかクソ野郎」

私をそこら辺の石ころを見るかのような視線を投げかけてくる。実際にはそんなことはないのだろうけど、地に這いつくばっている私にはそう感じた。そんなに私を殺せて嬉しいことでもあるって言うのか？

「正解を言うと、貴方だから意味があるの。博麗の巫女を『人柱』にすると言う案はだいぶ前からあったのだけど、人柱に値する有能な巫女が中々現れなくてねぇ。正直、別案も考えていた頃に貴方を見つけたの。先代に貴方を渡した時点で私は確信していたわ。きっとこの子は最高の巫女に、人柱として最高の人材になると」

「良かったわね、私を見つけられて。私じゃなかったらどうなっていたのかしら…？」

軽口を叩いている間にも霊力は抜かれて行っている。腰や腕・指どころか、尿道にすら力が入らなくなって来た。このままじゃ産まれたばかりの赤ん坊がする醜態を晒してしまうか、それとも霊力枯渇で死ぬか…。そんな私の状況などお構いなしに話は進められていく。

「私の思惑どおり、貴方は１０歳で博麗史上最高の巫女に成長した。そして貴方と大和が出会うことで物語は動きだした。ここで更に問題。何で大和は貴方に興味をもったのかしら？」

「…あいつは私が博麗史上最高の巫女だから興味を持ったと言ってたわ」

半分正解、八雲紫はそう言って話を区切った。半分正解ってどういう意味よ。倒れたまま次の言葉を待つ。

「不思議だと思ったことはない？　歴代最高とはいえ、まだ１１歳の子供。幾ら貴方が女だとはいえ、彼が乳臭い子供を相手にするわけないのに何故？　それにあの子、今まで博麗の巫女とはそれほど深く関わっていなかったのに、急に興味を持つなんてオカシイと思わない？」

そう言われ、ある一つの予感が頭を過った。それもとびっきり最悪なものが。嫌な予感と共に、私は背筋に寒気を感じ、身体が震えだした。嘘だと言いたい。でも嘘じゃないと、ハッキリと働いているカンがそれを嘘ではないと訴えてくる。

「貴方が博麗を襲名する前から魔法の森での生活土台を固めていたというのに、貴方に対して並々ならぬ興味を持つなんて可笑しな話ね。しかも大陸からずっと一緒にいた吸血鬼も幻想郷にはいる。そんな仲の良い相手を蔑ろにしてまで会いに来るなんて、まるで誰かに「黙れェ！！」　あらら」

「あいつは…あいつは私を心配していると言ってくれた！　それは嘘なんかじゃない！！　心の底から私を想ってくれていたから出た言葉だ！　それをあんたが、あんたみたいに大和を利用するだけの奴が否定するな！！」

否定なんてさせやしない！　私を救ってくれた、彼との大切な思い出を穢されるのを黙って聞いているなんて出来るわけがない！　普段の私からは全く考えられない程怒鳴り散らした。あまりの衝撃に理性を押さえきれず、歯を剥き出しにして無様なまでに泣き叫んだ。

「嘘も何も、事実よ。『私が大和の心を弄り、貴方に興味を持たせるように仕向けた』。幸い時間は沢山あったから仕込みは容易かった。前にも彼の中身を弄った経験もあったしね。けど安心なさい。きっかけはどうであれ、その後は確かに貴方の言う通りよ。あの子は自分で貴方と一緒にいるようになった」

八雲紫はそう言うが、そもそもの出会いから仕組まれていたという事実に心が引き裂かれてしまうくらいに痛い。いくら嘘だと信じ込もうとしても出来ない。冷笑でもなく、ただ能面のような無表情で言われることにそれが真実だと、私の巫女として『まだ』　冷静な部分が真実だと伝えてくる。

いやだ…、嫌だよやまと…。あんたとの毎日が創られたものだなんて信じたくないよぉ…

あの日の出来事さえ創られたモノの結果だと、そう考えてしまったら涙が止まらなくなった。心は悲鳴を上げ、宝物だった思い出は無残にも崩れ落ちていく。

「遙か昔より、大仰な儀式には生贄が必要。歴代最高の巫女は、幻想郷を永遠に守り続ける結界の象徴としては最高の生贄になる。貴方には幻想郷の礎となってもらう」

地面を伝わって足音が近づいてくる。

「私が結界構成に力を足せないのは、今後幻想郷に仇名す者が現れた時に打倒することが出来るようにするため。私のような力を持った、同じ志を持った妖怪が今後出てくるとは考えにくい。でも、博麗の巫女である貴方は違う。貴方が死んでも、次はいる」

それは死神の声か、それとも苦しみからの救済の言葉か。

「人間の一生は短い。貴方が私よりも長く生き続けれるのならこうはならなかった。貴方にこの幻想郷を守ってもらいたかった。でも人間にそれは出来ない。この期を逃せば、次はないと考えた方がいい」

もう何も考えたくない。涙で霞む私の視界に八雲紫の靴が入る、それ程私に近づいている。噛みついてやろうか、普段の私ならそう思っただろう。でも、もうどうでもよかった。

「悪いなんて言わない。謝罪もしない。ただ、礼を言わせて頂戴。……貴方が犠牲になることで、幻想郷に住む多くの命が救われる。博麗零夢、貴方に心からの感謝を送ります」

八雲紫の手が私の頭を撫でる。

ああ、もう終わりなのか。思えば短い人生だった。物心付いた時から博麗の名に恥じないように頑張って来たけれど、それすらこいつの掌の上で踊らされていたという事実しか残らなかった。唯一の救いは、その掌の上で大和に出会えたことかな…。出来れば死に際を看取って貰いたいとまで考えたこともあったけど、どうやらそれは無理みたい。

ごめんね。私、先に逝くわ。半分殺されるような形で逝くけど、どうかこの妖怪を憎まないで。幻想郷のことを思っての行動だから、優しい貴方はきっと解ってくれるはず。八雲は八雲の、私は巫女としての、最後の役目を果たします。

――――幻想郷の空から、貴方を見守らせてもらいます――――

目を瞑り、最後の瞬間を待つ。

そんな私を現実に引き戻す人がいた。

「やれやれ、そう簡単に逝かせるとでも思ったのかい？」

「なッ…！？」　「え……？」

「やあ紫。随分とまあ興味深いことしてるねぇ」

私の身体から霊力を奪っていた術式が力づくで引き剥がし、

「…ムンッ！！」

そのまま握り潰した鬼がいた。…私が全く抵抗出来なかった術式をただの力技で破るなんて、ふざけたバケモノだ。親と子ではこうも違うものなの…？

「お～ッ流石に手が痛いね。ああ、話はぜーんぶ聞かせてもらったよ。思いっきり疎くしてたから気が付かなかっただろうけど」

「…やられたわ、まさか貴方が邪魔しに来るなんて。途中で藍が居たはずなんだけど、どうしたのかしら？」

「不意打ち喰らってお寝んねさ。こういうのは嫌いなんだけど、親子の絆の前には無視出来るまでに順位が下がるのさ。もちろん友人を止めるためにもね」

「成程成程…大和が貴方に頼んだ訳ね。盲点だったわ、貴方に頼るのが好きじゃないあの子がねぇ。私はてっきり、大和は紅の武人だけに頼ったと思っていたのだけど外れたわけね。……でもね萃香、あまり私を怒らせないで頂戴。そうじゃないと私、本気で貴方と敵対しなくちゃならなくなる」

「へぇ…。私を前に面白いこと言うね、紫は」

薄ら笑いを浮かべながら、鬼と八雲はお互いの身体に膨大な妖気を纏わせていく。そのあまりにも巨大な力に神社は音を立てながら揺れ、境内には多数のヒビが入った。２人の間にある空間は、放たれている妖気で目に見えて歪んできている。

何だ、いったい何がどうなっているの？　大和が私を助けるために鬼を遣わせた？　そんな馬鹿な、あいつがこの事態を、私の死を予見していたとでも言うの？

「その子は死なせない。大和が悲しむし、これ以上あんたに苦しい思いをさせる訳にはいかないからね」

「どういうことかしら？」

「前から思ってたんだけど、紫は嘘を吐くのが下手だね。嘘を吐こうと思えば思うほど無表情になる。自分じゃ気がついてないんだろう？」

「……だったらどうだと言うの？」

状況を上手く理解出来ていない私を前に話はどんどん進んでいく。ただ、目の前では小さな鬼に徐々に気圧されていく八雲紫の姿が映っている。あの大妖怪である八雲紫が、鬼とはいえこんなに小さな妖怪に…。

「家の馬鹿息子を使えばいいじゃないか。それで万事解決！」

……は？

両手を腰に当て、自信満々に無い胸を張って言い切った鬼に、一瞬

だけ世界が止まった気がした。いや実際に止まっている。わっはっは！　と大口を開けて笑い続ける鬼に、然しもの八雲紫も言葉に詰まって固まってしまっているのだから。

「…まさか息子を売ろうって言うの？　さんざん私の邪魔をしてくれた貴方らしくもない」

「私も無理だと思ってたんだけどさぁ、あの子の器は思ってた以上に大きいみたいでね。世界の一つくらい軽く御して見せるさ」

訝しげに聞く隙間妖怪に対し、本気で胸を張っている小鬼。…正気かこいつ。大和如きが世界一つを纏め上げるなんてこと出来るわけがない。それにこいつは確か、自分の息子を溺愛しているはずだ。そのはずなのに、何故息子を売るようなマネをするの…？

「後悔しても知らないわよ。私の思い通りにならなかった時は…解ってるんでしょうね？」

「解ってるさ。あんたも息子も纏めてブン殴ってやるから安心して貰っていいよ」

「……残りの足りない分は私が出します。良かったわね零夢。貴方、ほんの少しだけ寿命が延びたわよ」

そう言った八雲紫は、あいつにとっては僅かの力を術式に流し込んだ。そのまま隙間に消えて行こうとするところで再び鬼が八雲に話

掛けた。

「紫！　…あんたは、何時止まるんだい？」

「……愚問ね」

2人の間でどんな思惑があるのかなんて私には全く解らなかった。でも全ては大和に丸投げされ、大和はこれまで以上に厄介事に巻き込まれること。そしてその代わりに私が見逃されたことくらいは解った。

八雲紫が消えた後、私は何とか立ち上がろうとしているけど全然力が入らない。霊力は驚くほど吸取られていて、その虚脱感が重く圧し掛かる。

「無茶するんじゃない。力の大半を失ったんだ、そう動けるものじゃないだろ」

「…一つ頼めるかしら。あいつには今回のこと黙ってて欲しいの…」

「……言えるわけないだろ。言ったら最後、大和は紫に喧嘩を売りに行って返り討だ。何も知らない方が幸せな時もある。あと、紫はああ言ったけど大和は本気であんたのことを想っている。それは確かなことだよ」

「…ありがと」

漸く起き上った所で力の大半が結界に流れ込んでいったのが解った。休めば元通り…とは行かないのだろう。今の私はそこら辺の下級妖怪にも劣るはずだ。このままじゃ巫女としての体裁を保てない。でも巫女でいたい、あいつと出会う切っ掛けになった巫女で。…だったら、出来ることは一つしかない。

「…寿命を削ってまで巫女を続けるつもりかい？」

「私は博麗の巫女としての生き方しか知らないの。博麗の巫女だからあんたの息子とも出会えた。だから巫女を続けていくわ。死ぬまでね」

自分の限界を超えて霊力を引きずり出す。命と引き換えだったら力も引き出せるはずだ。普段は今のままでいいけど、戦闘時にはそうするしかない。寿命は短くなるけど、それで一緒に居られるのなら別に構わない。…足手纏いになんて、なりたくない。

「…好きにしな。…あと、本当に悪かった。私が来た時には、もうお前は力の大半が抜かれてた状態でね。直ぐに助けるより話を聞くことを優先させてもらった」

「気にしないで。その状況じゃ私もそうするから」

鬼は俯いたまま私の身体を支えてくれる。境内から見える空からは

懐かしい姿が飛んで来るのが見えた。つい数刻前に別れたばかりなのに、何年も会ってなかったように感じる。私が鬼に支えられているのを見て驚いたのか、血相を変えて飛んで来るのが見える。どうやらあちらも相当激戦だったみたいね。急いでいるのだろうけど、フラフラしていて真っ直ぐ飛べていない。

「ばーか、生きてるわよ」

でも大和、私と貴方の出会いは全部仕組まれてたことなのかなぁ。だとしたら、私の貴方への想いも全部偽物になっちゃうの？　こんなに想ってるのに、そんなの寂しすぎるよね…

乾いた笑みすらもう出ない。私の寂しい呟きは風に乗って消えて行った。望んだ声が届くことは、もうない。

◇◆◇◆◇◆◇

～八雲邸～

「藍。起きなさい、藍」

「……ッは！？　…紫様？　と言うことは、上手く行ったのです

か？」

「ええ。萃香という思わぬ邪魔が入ったけれど、保険が功を為したわ」

綻びは出た。が、結界の構築は大成功と言っていいだろう。

思い返してみれば、綻びが出始めたのは幽々子からだったかしら。手紙で親密になり過ぎている2人の関係を少し崩して欲しいと頼んだのだけど、何を思ったのか巫女の後押しをしてくれた。萃香のおかげで寸での所で止まったけど、もしあの2人が結ばれていたら…考えたくもない。あの子はまだ親密になった友人を失ったことがないからどうなるのか解らない。あの子が使い物にならなくなっては困るのよ。

…萃香は私が嘘を吐く時に無表情になると言っていたけど、そんなことはない。私が本気で嘘を吐く時は無表情にはならなず、自分でも気味が悪くなるような笑みが零れるのだ。鬼の手前、本当は嘘を吐きたくないのよ？　と思わせるために長年続けてきた保険が功を為したと言っていいだろう。

「そして得たモノも大きい」

あの時私が力を流し込まなければ、萃香は本気で私を襲っていただろう。隠してはいたようだけど、強者のみが持つ独特の雰囲気まで

は隠し切れていなかった。…正直あの時は勝てるとは思わなかった。息子の願いか、それとも私を止めると本気で思っていたのか。母は強しと言うことなのだろう。だが…

「おかげでこんなにも早くに大和を手中に収めることが出来た。零夢を人柱にして結界の持つ意味合いを強めることは無理だったけれど、今後の動く壁としては十二分に使える」

大和にも零夢にも、悪いとは決して言わない。許しも請わない。ただ、私たちのために消えて行った人たちには礼を言う。大局のために必要な犠牲になってくれてありがとう、と。

萃香、私たちは止まれないんじゃない。止まらないの。だからこれからも必要であれば何人でも犠牲にするわ。それで生まれる罪を被るのは私だけでいい。その罪を背負う覚悟くらい当の昔に出来ている。

すべては、理不尽で満ち溢れた世界に救いを齎すために。

「まずは…そうね、おそろいの服でも用意しましょうか」

確か中華風の服が残っていたはず。あれを藍に頼んで男用に仕立てて貰おう。八雲の服に袖を通してもらって、形から入ってもらうと

しよう。まずはそれからだ。

この日、幻想郷を覆う結界が完成した。大和が弄した策は確かに零夢の死を止めた。だが、それは彼女の死を先延ばしにしたに過ぎない。寿命を削ってまで巫女であることを決意した零夢が生きていられる時間は、この時点でそれほど長くはなかったのだから…

◇◆◇◆◇◆◇

文「いや～、本編がえらいことになってますけど、ここではそんな空気をまったく無視する射命丸文と」

大「大和です。今回もよろしく」

文「質問も少なくなってきましたし、もうそろそろここも終わりですね！」

大「そうみたいです。それでも僕の生態系に興味を持つ人がいてくれたのは嬉しかったですけど」

文「まったくですよね。皆様どうもありがとうございます。じゃあ今回の質問に行きましょうか。今回の質問は『愛って言葉は便利だ

よね。ロリコンでも年上専門でも高尚にするんだから』　です。…なんかこう、心にズバッときますね」

大「…ホントにもう、心にズバッときますｏｒｚ　言葉を選んで『愛』　って言ってたのが完全にバレてたみたいで僕ショック…」

文「何時までも逃げられないと言うことです。で、どうなんですか？」

大「アハハーもう言葉が思いつかないヨ。…でもそうだね、ロリコンと言われようと、年上趣味と言われようと、本当に好きで愛してるなら好きなモノは好きだとハッキリ言うよ！」

文「今日から君は、ロリコンだ！！」

大「何故！？」

文「以上、射命丸文でした～。ではまた～」

博麗大結界　終幕（後書き）

零夢が死ぬって私言いましたっけ？　どうも、じらいです。たぶん大勢の人が零夢が死ぬって思った（かな？）　と思いますが、そう簡単に死なせません。彼女が死ぬ時はちゃんと大和が看取ります。これ絶対。

零夢が苦しんでいた時の対闇妖怪は省きました。別に面倒臭かったからじゃないですからねッ！！

では今後の予定を少し。日常・お馬鹿日常を挟んで日蝕異変（仮）にでもしようかと思ってます。…ほんと、戦闘描写どうしようかな。

大和と4兄弟―再・前編―（前書き）

全2話のつもりの前編です

大和と4兄弟―再・前編―

～大和と弱い妖怪～

大結界騒動から数日。母さんから大まかな説明を受けた僕は、今日も零夢とだらだらしている。が、

「暑い…」

夏になれば暑いのは同然だけど、これは酷く暑い。零夢なんて巫女服肌蹴させて寝転がっている程だ。相変わらず防御の薄い奴だな、と思うなかれ。視線を感じたところで針が飛んで来ます。服着ろや。暑いから無理。目にも精神的にも毒だからなんとか涼しい風を、と思って風系の魔法を使っても意味はなかった。だって僕、そよ風起こす程度が限界ですから。魔力使って余計に暑くなったよ…。

「あんたもそんな格好してたら余計に暑いでしょうに。と言うか見てるだけで暑い。着替えてきなさいよ」

「せっかく貰ったのに着ないわけにはいかないだろうに…」

ついこの間、藍さんが博麗大結界構築のお礼と称して服を持って来てくれた。藍さんの来ている中華風の服を男版にしたものなんだけど、着心地はとてもいい。でも夏でも着れるように半袖の夏用も用

意して貰いたかった…。折角だし頼んでみよう。それくらいの苦労はしたはずだし。

「あんたの母親からも服貰ったんでしょ？　そっち着ればいいじゃない、半袖なんだから」

半袖どころか、肩丸出しだよあれは。

あの大結界から数日、幻想郷は前の落ち着きを取り戻しつつある。妖怪の山に住む天狗の長・天魔、霧の湖近くに住む紅魔館・吸血鬼一家を中心に名のある妖怪たちが事後処理に動いてくれているおかげだ。もっとも、紫さんと藍さん、そして何故か僕も一緒に頭を下げに行ったのだけど。…本当に何で？　そう言えばレミリアが仮当主にランクアップしたおかげでアルフォードに頭を下げずに済んだんだっけ。まあそれは置いといて。

まあその時に藍さんから服を贈ると言われた。そしたら母さんが、

『なら母さんからも服を送ってあげよう！　喜べ大和、おそろいだぞ！！』

とか言って服をくれた。それもそのまま母さんの服を大きくしたやつ。でもさ、男用に作られていないアレを仕立て直すのに人里を回った僕の苦労を考えて貰いたいね。仕立て直しに掛った代金はそれはもう高かったです。鬼の着る服、普通の素材なんて使われてないんだから。つまり何が言いたいのかと言うと、最初から男用を用意して欲しかったと言うことです。

「明日からそうするよ…」

何はともあれ、夏である。こんなに暑いのに長袖はない。出来れば上半身は裸でいいと思うのは僕だけじゃないはずだ。こんど半袖の服も頼んでおこう。それくらいの仕事はしたはずだ。

「お願いだから脱いだまま神社に来ないでよ。暑苦しいったらありゃしない」

「…けちんぼ零夢」

お前が言うな、とは言わない。言ったが最後、ここから叩きだされる。

「半裸の変質者が神社で血祭り、ね…。明日の文文。新聞の一面にはちょうどいいわね」

「さて、夕飯の買い出しに行ってくるかな。今日は何食べたい？」

「牛鍋」

「…代金「あんた持ちに決まってるでしょ」　僕を破産させるつもりか！？」

霊力が少なくなっても何時もの酷い扱いは健在ですか…。でもこんな日常も久しぶりな感じがする。長い年月を生きると生活に刺激がなくなって暇だと言うけど、僕こっちの生活の方が好きだね。

でも牛肉は…高いです…ｏｒｚ

◇◆◇◆◇◆◇

「相変わらず空は気持ちいいなぁ」

空を飛んでいると何故か幸せな気分になる。夏の空は特に蒼く澄んでいて綺麗だし、少し高度を上げれば風もよく吹いている。零夢に小間使いにされても、この晴天の中を飛べば気分は上々ってやつだ。

でも僕の幸せがそんなに長い間続くことはないわけであって。つまり、また何かの厄介事に出会ってしまいました。空を飛んでいる最中にふと地面に目をやると、なんと小さな女の子が仰向けで倒れていました。

「解せぬ」

普段使わない言葉が出てくるほど理解できません！　如何に長い間生きてきた僕でも、生き倒れ（少女）　なんて見たことがないぞ！

？

「…おーい、大丈夫かー？」

驚いていても仕様がないので声を掛ける。空（ここ）からじゃ良く解らないけど、どうやら人間の子供じゃないみたいだ。ほんの僅かだけど妖力を感じ取ることが出来る。とは言っても、僕が声を掛けようが全く反応がない。一応妖怪みたいだから放っておいても大丈夫だろうけど、別に急いでいる訳でもないしちょっと様子を見に行ってみよう。

「そこで寝転がってるお嬢さん、妖怪だってのに昼間から何してるんだ？」

「……あぅ」

「ふんふん……それで？」

「……なの」

「君は実に馬鹿だね」

原因発覚、只の生き倒れ。ってそのままじゃないか！？

「だから、何で生き倒れてるのかを聞いてるんだよ！」

「…お腹…すいた。お兄さんは…食べてもいい人類…？」

「もうちょっと大きく…じゃなくて、お腹すいてるの？」

「うん」

妖怪が空腹で生き倒れって…。仕方ない、人里の飯屋さんにでも連れて行って何か食べさせてあげよう。僕が連れていたら大丈夫だろう、このままここで放っておいたら本当に空腹で死ぬかもしれないし。

「そう言えば、君の名前は？」

「うん？　ルーミアって言うんだよ。よろしくね、ご主人さま」

◇◆◇◆◇◆◇

～人里・飯屋～

「おい裏切り者。何時の間に巫女様の子供を授かったんだ？」

「一郎さん、この子金髪。僕・零夢は黒髪。ＯＫ？」

人里の門を潜った瞬間に現れた変態４兄弟。待っていたぜと言わんばかりに周りを囲まれ、そのまま持ち上げられて気付いたら飯屋に居た。奢ってやるとのお誘いに絶対に裏があると思って立ち去ろうとしたけれど、その時にはルーミアちゃんがおばちゃんに注文し終わっていた。ニヤリと笑う兄弟にしてやられたと思いつつも、もうどうしようもない。と言うかどうにでもなれ。

「お前が巫女様と半同棲していることは周知の事。文文。新聞愛読者である俺たちに隙などないぞ？　さあキリキリ吐くがいい！！」

「文の新聞を真に受けないでね！　８割は嘘捏造塗れだから！！」

「射命丸さんとも仲がいいのか！？　貴様、どれだけ俺たちを苦しめれば気が済むんだ！！」

「どうすれば解ってもらえるんだ！？　それに話通じてないよね！？」

だめだこいつ等、全く人の話を聞く気がない。いや、この４人相手に会話を成り立たせようとすること事態が愚の骨頂だった。…武力制圧したほうがいいかな？

「どれだけお前が否定しようとも、この子が生きた証人だ。お嬢さん、この『年上好きです詐欺』　をしている男の娘さんなんだろう？　いやいや、別に君のお父さんを責めようと言うわけじゃないん

だ。ただね、『俺たち結婚しない』　の誓いを破った奴「何時そんなのした!?」　は事と次第によっては去勢せねばならんのだよ」

「もぐもぐもぐ……？　ご主人さまはお父さんじゃなくて、ご主人さまだよ？」

「ご、ごしゅッッツ!?!?　……弟たちよ。この変態の所業…どう思う？」

「「「すごく…羨ましいです…。故に死刑」」」

「全軍突撃ィ!!!」

「…伊吹大和、全人類の敵を破壊する」

僕目掛けて飛んで来る変態たちうぉ、目標をセンターに入れて右フック！　目標をセンターに入れて右フック！　目標をセンターに入れて右フック！　一郎をセンターに入れて〇玉蹴り上げ!!

「ちょっおま…、それはないってぇ…」

「黙れ。そして僕の話を聞け」

「いやあの、大和さん？　俺たちの話も…」

「いいかね諸君？　一度しか言わないから一度で理解しろ。出来なければ死ね。ああ、安心してもらっていい。幸いにも闇魔様とも親しくしていてね、色欲の罪が大きそうな君たちは大層立派な地獄に

行くだろう」

頬を押さえて蹲っているの3名、内股で地面でのた打ち回っているの1名、計4名の殲滅を確認。まったく失礼な奴等め。起き上るのを待つまでもない、地べたに寝転がっている4人を見降ろしながら話を進めるとしよう。

「まずこの子の名前はルーミア。言ったとは思うけど僕と零夢の子供じゃない。この子はれっきとした妖怪です。ちなみに好きな食べ物は？」

「人間」

「可愛い顔して恐ろしいこと言うから注意するように。解ったね？綺麗なバラには棘が多いから注意するように。バラが何かって？自分で調べなよ。…あ～おばちゃん、慧音さん呼ばなくても大丈夫だから。僕が見張ってますんで」

大慌てで慧音さんの所に走って行こうとしているおばちゃんをそう言って制す。なら良いけど、とは言ってるけどだいぶ怖がっているみたい。そりゃそうだろう、こんな小さな子が「好きな食べ物は人間です」　なんて言ったら僕も驚く。驚いたけど。

「さっき此処に来る前に倒れているのを拾ってきたんだ。放っておいても空腹で死にそうだったからね」

「大和先生に質問です！」

「どうぞ、一郎君」

「何でその子は先生のことを『ご主人さま』　なんて呼んでるんですか？　嬉しいですか！？」

「…僕も不思議に思うけど、何でだろう？　「無視ですか先生！？」ルーミアちゃん、何で？」

「初対面から決めてた」

にっこりと笑って淀みなく言い切られてしまいました。先生はこんな小さな子は守備範囲外なのでドキドキしないけど、可愛いことは確かです。とか言ってる間に四郎が泡吹いて後に倒れてしまった。…やば、四郎が歳下好きなのを忘れてた。

「四郎！　四郎、しっかり四郎！　傷は浅いぞ！？　…駄目か。くそぉ…やっぱお前が何もかも悪いんじゃねぇかーーーーーーーー！！！！」

「何でだよ！？」

「４００年以上生きている人外でもやって良いことと悪い事があるぞ！」

「黙れ若造！　僕だって何が起きてるか知りたいわ！！」

「４００歳過ぎて何で童貞なのかが今はっきりと解ったぜ！！」

「プチ＃」

「あ、やべ。逃「がすか」　母ちゃんお助け――――――――――！！？」

フフフフ、一郎君。君は言ってはならないことを言ってしまったね。ピュアな僕のハートは酷く傷ついたよ。その報い、その身体で受けてもらうとしようか…！

「君がッ泣くまでッ殴るのをやめないッ！」

「泣いてるって！！　泣いてるからもうやめてッ！？」

僕たちが暴れ出し、再び混沌と化した飯屋でおばちゃんが溜息を吐いた。その裏では１人の少女が妖しい笑みを浮かべていることも知らずに

◇◆◇◆◇◆◇

文「はいはい皆さんこんにちは！！　射命丸文と」

大「伊吹大和です。今回もよろしくお願いします！」

文「実は最近新聞の売れ行きが良くて嬉しいんですよ」

大「あの４兄弟め…。あんまり酷いことは書かないで欲しいんだけど」

文「この清く正しい射命丸、嘘なんて書くわけがありません！　今もこうやって大和さんからネタの提供を受けているわけですし」

大「！？」

文「じゃあ質問に行きましょう。『大和の趣味は何ですか？』　すいませんねこんなに先延ばしにしてしまって」

大「誠に申し訳ないです…。じゃあ答えようか。僕の趣味は…読書だよ！」

文「……えー」

大「？　何か変？」

文「脳筋の大和さんが読書が趣味だなんて似合わないですよ」

大「忘れてるかもしれないけど、僕はそんなに頭は悪くないよ。むしろ良い方。だって『そういう風にデキている』　んだから」

文「？　それはどう言うことですか？」

大「（文にはアキナっていう生き別れの妹の話しかしてないからね）

秘密ということで。とりあえず魔法関連の本を読むのが好きだよ。最近は錬金術の本を見つけてね、宝石とか作れないかと思ってる。できればパチュリーの賢者の石が作りたいね」

文「無理ですよ、才能ないんですから」

大「やってみないと解らないよ。とりあえず頑張る。後はやっぱ修行かなぁ。これはむしろ生活の一部になってるけど。一日でも動かないと身体がムズムズするんだ」

文「え～っと、それについては何処からか手紙が届いています。『そうなる薬を盛った』　だそうです」

大「ああ…。もうだめだ、おしましだぁ…」

文「あやや、沈んじゃいましたか。今回は長くなっちゃいましたね。ではまた次回に会いましょう！」

大和と4兄弟―再・前編―（後書き）

最近忙しくて小説書く時間がまったくないじらいです。内容も普段より更に駄目だったと思います。申し訳ないです。

ルーミアの件はただのノリと言うかネタです。それほど大きな意味とか伏線はないです。理由とかは異変の時だと思います。

そして人里４兄弟が再び登場。今回は大和が変態行為をすることはない…はず。前書きでは２話だと言いましたが、３話になるかもしれません。

ではまた次回

「ッ～～～！　まだ頭に響くよ…」

「確かにアレは痛い…。以前にアレを快感に変えようとしたが、失敗に終わった経験がある。気持ちよくなろうとすれば威力を上げられてしまって…。おかげでデコが鍛えられたんだけどな！」

「慧音さんに手を出したら僕が黙っちゃいないよ…。～～～ッでも痛い！」

結局あの後飯屋さんに慧音さんがやって来ることとなった。僕が兄弟を千切っては投げ千切っては投げと大暴れしていたので何事かと文字通り飛んで来たのだ。そんなことは露知らず、暴れている僕は愛の鞭と言う名の頭突きを額にブチ込まれた。突然の痛みに悶絶したままの状態で説教が始まり、その場から逃げようとした4兄弟も当然の如く説教を受けることになった。いい歳して大人げないことするな！　だってさ。心は何時だって16歳なのに！！

「ご主人さま、頭大丈夫？」

「ルーミアちゃんは優しいねぇ。僕の知り合いの中じゃ希有な存在だよ」

この可愛い子め！　頭を撫でてあげると「えへへ」　なんて擽った

そうに微笑を浮かべている。…何だこの生き物、すごく可愛いんだけど。

「お前、本当に大丈夫なのか？　まさかあの頭突きで頭が可笑しくなって、幼女趣味に目覚めたなんてことはないよな…？」

誰が幼女趣味だ、誰が。僕は今でも年上（外見が）好きだ。

まあ色々な事があったけど、今は牛鍋の材料を買う為に通りを歩いているのです。が、何故か付いてくるのが４人。人里にやって来た時も思ったけど、いったい何の用があるのやら。…どうせ碌なことじゃないんだろうけど。

「実は折り入って頼みたいことが「断固拒否する！！」　まだ何も言ってないぞ！？」

「前の覗き事件を忘れたとは言わせないよ！！」

あれは忘れはもしない数年前の話。慧音さんのお風呂を覗こうと誘われ、それに付いて行った僕の愚かすぎる行為。あの事件の後、僕は零夢に半殺しにされ、妹紅には弄られ、慧音さんには軽蔑され、人里の女の人たちに白い目で見られる日が何日も続いたのを忘れることなんて出来るわけがない。全て自業自得とはいえ、元凶がこの兄弟の企みであることを忘れてはいけない！

「いや、今回は至って真面目な話なんだ…。聞いてくれるだけでもいい。いや、聞いてくれ！　この通りだ！」

そう言って頭を下げる４人。一郎さんに至っては土下座までしそうな勢いで深く頭を下げる始末。

「…何です？　話してください。聞くだけ聞きますから」

あまりの勢いについそう言ってしまった。でも聞くだけ、聞くだけだよ、うん。だから聞き流しても大丈夫。相手にしなくたっていいんだよ！　そう軽い気持ちでいたけれど、次に一郎さんが発した言葉に僕は度肝を抜かれることになった。

「……実は、好きな人が出来たんだ」

「……はあ！？」

「何年も前から想っているんだ。出来れば一緒になりたいとも思っている」

「一郎さん、それって本気…なんですか？」

嘘、だよね？　何時もみたいに僕を嵌めようとしてるんだよね？
そう思って弟たちを見るも、全員が真剣な目つきをして僕を見ている。その目からは今まで見たことのないモノが見えている。どうや

ら本気、いや本当の事みたいだ。如何な4兄弟とはいえ、人生の一大事にまで嘘を吐くほど腐っちゃいないはずだ…と思いたい。

「俺は今まで数々の変態の所業をやってきた。俺たちの行いを皆が白い目で見つめる中、その人だけが笑っていたんだ。解るか、大和？　笑ってくれたんだ。でも俺が幾ら好きだと言っても、その人は何時もの悪戯だと思い込んで相手にしてくれないんだ。…全ては今までやってきた俺の業だ」

「「「「一郎（兄）さん…」」」」

「ご主人さま、このお兄さんが変態なのが悪いんじゃないの？」

ブッ！？　ルーミアちゃん、それは確かにそうだけど、せっかくイイハナシをしてるんだからそっとしておいてあげてね！

「…だから俺は強硬策に出ることにした」

強硬策？　花束でも贈って求婚とか、ずっと家に通い続けて愛の囁きをするとかかな？　ああ、そう言えばこれは大陸の文化だったっけ。じゃあ恋文か歌でも贈り続けているのかな？

「夜這いを仕掛けるとつい先程宣言してきた」

「おいィィィィィィィ！？　何やってんだよあんたは！？！？」

その発想はなかったよ！　正に逆転の発想ってか！？　嫌よ嫌よは嫌なんだって解ってるのかこの人は！？　今日こそは許さん、清く正しい僕がその女性の為にこいつを叩き潰してやる！

「一郎さん、地獄へ行こうか。罪をするまでは罪に問われないから大丈夫。映姫様にも話しておくから、ね？」

身体に魔力を滾らせぇ、それを腰だめに合わせた両掌に集中ぅ！マスパの発射準備を完了。安心してくれていいよ一郎さん。せめて痛みを伴わないように一瞬で細胞も消し去ってあげるから…

「待て待て！　待ってくれ！！　これは先方も承知の上なんだ！！」

「は？　今更命が惜しくなったの？　嘘ですって言うの？」

だとしたら尚性質の悪い悪戯だ。もしそうならメチャクチャ痛いようにしてやる！　既にマスパは発射１０秒前、何時でも打てますよ！　さあ返答は如何に！？

「先方の家族も、あの人も承知の上なんだって！　家の娘が欲しければ奪ってみろってそこの親父がそう言ったんだ。その代わりに最高の罠と最強の防人を配置するって。それでも欲しいのなら掛ってこいと言われたんだ」

「それ、本当の話？」

本気と書いてマジと読む。そう頻りに頷く４人は顔が真っ青だ。…やば、僕の魔力に当てられちゃったみたい。ま、いっか。

でも４兄弟は絶対に間違いないと言ってるし…本当なんだろうね。しかし、すごい豪気な親父さんも居たもんだ。一郎さんを息子に迎える準備があるなんて、普通の家庭じゃあり得ないことだよ。だって浮気発生率１００％じゃないか。

「おそらく向こうの最強の防人は慧音さんと妹紅さんだと思う。だからお前の力が必要なんだ！　あの２人を相手に出来る知り合いはお前くらいなんだ、頼む！！」

「「「大和、兄さんの願いを叶えてやってくれ！！」」」

…知らない間に、皆大きくなったんだなぁ。たった１０数年まで大和お兄ちゃん、大和お兄ちゃんって慕っていた子供たちがもう結婚をするまで大きくなって。あの小さい頃から問題児だった君がこうやって大きくなった姿を見ると、僕も感慨深いものがあるよ。

「わかった。出来る限りの協力はしよう」

「ありｇ「ただし！」　？」

「絶対にその人を幸せにしてやるんだぞ？　一郎」

だから、あの時のように兄貴面して笑ってやる。小さい頃から見てきた子供の新たな門出だ、笑って見送ってやるのが筋ってもんでしょ？

「ッはい！　大和さん！！」

満面の笑みを浮かべる一郎。あの頃から全く変わらない笑顔だけど、一皮向けた男の顔はこうも頼もしいものなんだね。…母さん、僕もこう成れてますか？　自慢の息子に成れてますか？

「あと一つお願いが…」

「何？」

「武術には女を一撃で倒す技があるって聞いたんですけど、あります？」

「何言ってんの。そんなのあるわけ……あ゛」

あるぞ！？　トンデモない技が一つだけ！　師父が対女性用最終奥義とか悪ふざけで僕に習得させた秘儀が一つ！　ヤバイヤバイヤバイ！？　あんな技僕が使えると知られたら、この人たちに教えたらトンデモナイことになる！？

「あるんだな!?　さあ大和、キリキリ吐け！　そして教えろ!!」

「ちょ!?　良い空気だったのになんで!?　口調も元に戻ってるし!」

「やっぱお前に敬語なんて使うのは嫌だね！」

「子供の頃はそうだったじゃないか！」

「随分と昔の話だぜ！　今はこれで十分！」

横暴だ!?　さあ吐け大和！　絶対に吐かん！　横を向いて頑なに拒否し続ける僕を４人は必死になって説得してくる。

「お前も出来る限り協力すると言ってくれたじゃないか！」

「出来る範囲を超えているんだよ！　第一、武術は付け焼刃で出来るものでもないんだよ！」

「女性に対する熱い想いがあれば常識なんぞ糞喰らえだ！　無理なんて言わせないぞ！　なあお前ら!!」

「「「当然だぜ兄さん!!」」」

ええい、暑苦しい奴らめ！　なんで女性に対してだけはこんなに勢

いづくんだよ!?　本当に、本当にこの技を教えることだけは出来ないんだ。特にこの人たちにだけは教えられない！

「大和さんは…、俺の門出を祝ってくれないんですか…？」

「うっ…そ、それは…」

「人生の一大事だって言うのに、兄貴分が祝ってくれないなんて…そんなの悲しいですよ…」

ひ、卑怯なり！　一郎は卑怯なり！　情に訴えようなんて、そんなの卑怯だよ！

「まあまあ兄さんも落ち着いて。ここは俺に任せてよ」

「二郎…。解った、頼むぞ」

一郎さんの弟、二郎。通称４兄弟の頭脳と呼ばれる参報役だ。今まで行われて来た数々の変態行為を成功させたのは、この男の作戦があったからだと言われる程だ。僕を覗きに誘う計画を立てたのもこいつらしい。変態の癖に頭の回転が早いなんて、もう手のつけようがないよね…。

「大和さん、少しこっちに来てもらえますか？」

「う…。わ、解った」

二郎に近づいたところで肩を組まれる。…顔近いって！

「大和さん、どうしても兄さんを助けてくれないのですか？」

「仕方ないんだよ。二郎は頭イイんだから解ってくれるでしょ？」

「まぁそう言わずに。手伝って貰えるのなら、技を授けてもらえるのならこちらもそれ相応の報酬は払う準備があります」

「…お金には靡かないよ」

お金なんかに靡くのは当の昔に止めました。お金で買えないものだってあるのを知ったからね。人、それを信頼と呼ぶ。

「お金なんてそんな無粋な！　私が用意出来るのは…これです」

「んなっ！　こっこれは！？」

何故二郎がこんなモノを！？　驚いて顔を二郎の顔を覗いた僕だけど、目に映った二郎の顔はただただ笑顔のままだった。

「まだまだありますよ？　どうです？　これと引き換えに引き受け

てくれませんか？」

「で、でも…。慧音さんの信頼を失うわけには…」

「信頼では手に入らないものもありますよ。ね、大和老師？」

「……やってやろうじゃんか。いいよ、やってやる。こうなったらもう妹紅でも零夢でも何でも来いだ！」

結局、こうして僕は全面的に協力することになった。秘伝を教え、罠を突破し、一郎さんを花嫁の所まで送り届ける。約束の日は近い。

◇◆◇◆◇◆◇

「ご主人さまは結婚とか考えたことないの？」

「ん～？　ルーミアちゃん、急にどうしたの？」

買い物を済ませた神社への帰り道でそう尋ねられた。太陽が沈んだからか、隣を歩くルーミアちゃんの表情は良く見えない。

「ううん、ただ結婚って面白いのかな？　って思って」

「難しい質問だなぁ…。僕も結婚なんてしたこともないし、考えたこともないから分かんないや」

だからごめんね、と頭を撫でてあげる。わはー、と楽しそうな声が聞こえてくるので、別に誤魔化したことに怒ってもいないようだ。…でも結婚、か。本当に考えた事もないや。実際どうなんだろう、好きな人と一緒になると言うことは。

「じゃあね、私が大和のお嫁さんになってあげてもいいよ？」

「あはは、じゃあ大きくなったらそうして貰おうか」

「うん！　私が大きくなるまで生きていられたら《・・・・・・・・・》なってあげてもいいよ！」

「うーん、じゃあ長生きしないといけないね」

他愛もない、子供を相手にした話だとこの時は考えていた。思えば、僕はこの時から深淵よりも更に深い闇に囚われてしまったのかもしれない。

オマケ

「遅い！」

「ごめんごめん、ちょっといろいろあって。ああそうだ、友達を紹介するよ」

「はぁ？　あんた何言ってんの？　誰もいないじゃないの」

「え！？　…ホントだ、何で？」

「はぁ…。もういいわ、今日は私が作るからそこで寝てなさい」

「いいの！？」

「特別に、よ。折角の牛鍋が不味かったら嫌じゃない」

この後、割烹着姿の零夢を見て「似合ってるね」　と言った。零夢を煽てて、これからもご飯を作らせようとしたけれど、バレていたのか針人間にされてしまいましたとさ。

◇◆◇◆◇◆◇

文「むふふ…むふふふふ」

大「どうしたの？　そんな気持ち悪い笑い方して」

文「特大のネタを手に入れたんですよ！　このネタを元に文文。新聞を発行すれば私の新聞も…。むふ、むふふふふ」

大「（怖い…）　それで、今日の質問はなんだっけ？」

文「おっと、そう言えばそうでした。今回は面白い質問が来てますよ？　実は大和さん宛じゃなくて、作者宛なのです！」

大「な…なんだってー！？　…じゃあ僕いらない子？」

文「そんなことはないです。私が質問しますので、そこにあるカンペを読んでくださいね。じゃあ質問です！　『大和より、作者のじらいの好きなタイプが知りたいです』　だそうです。さぁちゃっちゃと答えてくださいな」

大「僕の存在意義って…。え～と『幽々子様が好きです。でも射命丸の方がも～っと好きです！』　…何これ？」

文「つまりそう言うことです。私は作者に贔屓されてますからね。今もこうやって出てますし」

大「ああ～成程成程。つまり出てるとこは出て、へっ込むところはへっ込む人が好みだと」

文「ま、私は着やせするタイプですから」

大「（何か言ってるよこの人。そんなことないのを僕は知ってます）

それじゃあまた次回にお会いしましょう！」

大和と４兄弟―再・中編―（後書き）

変態準備中…

今回はイイハナシだなー、なんて思って貰えたら嬉しいじらいです。大和も人里の人間の成長を見てきたんだな、と思って貰えたら嬉しいです。あと、変態準備中というのは私ではなくてですね、４兄弟のことです。あんたは変態じゃないの？　と聞かれるとＮＯとは言えないのですがｗ

次回で４兄弟＋主人公で人里大決戦の予定です。大和秘伝の技とか、二郎が大和への報酬に用意したものなども次回に回します。つまり、次回で変態の襲撃開始ということです！

ではまた次回の後書きで

大和と4兄弟―再・後編？―（前書き）

1万文字超えたので分割することにしました。？も近いうちに投稿します。

また今回は『まだ』　マシですが、変態大和が出てきます。そんなの僕の知る大和じゃない！　と思ってくれる優しい御方は戻るを押してください。じらいからのお願いです。

大和と4兄弟―再・後編？―

～紅魔館・図書館～

「あ、頭を撫でなさい！」

「よしよし」

「だだだ、抱きしめなさい！！」

「ぎゅ～っとね」

「う～☆」

目の前でふにゃふにゃになっているのは紅魔館の当主（仮）。幸せそうに『僕』に甘え続けている姿を、『僕』はこの光景を創りだしたパチュリーと一緒に遠くから眺めていた。

「恐ろしいモノね、『有幻覚』と言う魔法は。見てみなさい、あの緩みきった顔を。偽物だなんて微塵も思ってないわよ」

「何故だろう？　成功して嬉しいのに心が痛む…」

「どう見ても酷いを超えているわね。どうしてこうなったのかしら？」

「それはパチュリーが有幻覚をレミリア相手に使ってみろと言ったからじゃないか…」

当主としての勉強で最近溜まってるから、甘やかしてあげなさいと言ったのは何処の誰だよ。

ちなみに『有幻覚』　とは、簡単に言ってしまえば現実に干渉できる幻術だ。僕が普段使っている幻術は実体が無いため、触れることや幻覚側からダメージを与えることは出来ない。しかし『有幻覚』　にはそれが出来る。触れられるし、実際にダメージを与えることが出来る。

魔法に大事なのはイメージだ。明確なイメージさえ出来ていれば、後は幻術でどんな物でも作ることが出来る…はず。ちなみに今回のイメージは『素直な僕』　です。相手の言うことにＮＯを言わない人形みたいなモノだ。

魔法には術式も大事だけど、僕は幻術に限っては術式の工程を飛ばして感覚だけで操っている。師匠たちが僕を幻術の天才と呼ぶのはそれもあるのだろう。むしろ幻術使う時に一々魔法陣を展開させる人がいたら見てみたい。だってさ、そんなことしてたら「今から騙すよ！」　って言ってるようなものじゃないか。

そんな僕だけど、パチュリーも術式を飛ばした上に同時使用とか、

先生に至っては全て術式を飛ばせていたからそれほどすごいこととは思えないんだよね…。

「時間が掛ったとはいえ、良く使えるようになったわね。正直無理だと思っていたわ」

「諦めなければ誰だって、何だって出来るようになるさ。でもまだ簡単なものしか出来ないからあまり意味はないんだけど」

事実、こちらから逐次命令を送らなければ決められた動きしか出来ない。簡単な動作なら問題ないけど、普通に生きている人間そのものを創るのはまだ無理だ。まだ、ね。

「…貴方、また何か企んでいるでしょう？」

「え！？　そ、そんなことないよ！？」

「顔に出てるわよ。何をしようが勝手だけど、その前にアレをどうにかしてからにしなさいよ」

「アレかぁ…」

目の前で繰り広げられている僕の幻術とレミリアの、何かこう、形

容しがたい桃色？　空間。アレ、どうやって止めればいいんだろう？　自分の撒いた種とはいえ、どうすればいいのか対応に困る…。

「早くしないとレミィが暴走寸前よ」

パチュリーに言われて見てみれば幻覚の僕がイイ笑顔でレミリアを抱きかかえていた。シット！　オートで動いている僕よ、止まるんだ！！　…おい止まれって、レミリア抱えて何処行くつもりだよ、おい！？

制御が聞かないなら物理で殴ればいいじゃないか、と言うわけでぶん殴って止めることに。消えろや暴走幻覚。ふにゃふにゃのレミリアには悪いけど種明かしの時間だ。ごめんねレミリア、実験台みたいになっちゃって。

幻術の僕が消えたのを不思議に思ったのか、周りを仕切りに見渡しているレミリアに苦笑しながら近づいて行く。最近は見せない様になったポカンとした表情で僕を見つめること数秒、事の次第を理解したのか真っ赤なって詰め寄って来た。

「やまっやまッツ、大和！　これはどういうこと！？」

「あはは、ごめんごめん。でも久々に甘える姿見たけど、前と一緒で可愛かったよ？　お兄さんは嬉しいです」

「かっかわッ！？　きゅぅ……」

「…失神したわね。大和、貴方って本当に馬鹿ね」

騙したことに対しては反省してます。でも失神するほどショックを受けたなんて予想外…と言うか、パチュリーにも責任があるだろうに。

そう思ってパチュリーを見ても、半目で睨まれるだけに終わる。失神したレミリアを介抱する…ええい、そんな目で見るんじゃない！

「レミリアのことは置いておいて、気になることがあるんだけど」

「（哀れねレミィ）　貴方が何を言いたいのかはだいたい理解してるつもりだわ。大方、闇の妖怪についてでしょ？　操影術関連の資料を纏めておいたから持っていきなさい」

驚いた、まだ何も言ってもないのにピンポイントで当ててくるなんて。美鈴に聞いたのかもしれないけど、流石は紅魔館の頭脳。何年も一緒に居た僕の考えなんて何でもお見通しと言うところなのか。

「じゃあそれ貰ってお暇しようかな。２人には宜しく言っておいて」

「自分で言いなさい。あと、次に来る時は何か持って来なさい。タダ働きなんて嫌よ」

「わかってる。今度はお菓子でも買ってくるさ」

気絶したままのレミリアをつつくパチュリーに背を向け、僕は紅魔館を後にした。

◇◆◇◆◇◆◇

～人里から少し離れた場所～

「…ふふふ、ふはははは！　見たか大和！　俺たちはお前の秘伝をますたぁしたぞ！」

「ありえねー」

信じられねーです。マジありえねーです。死に物狂いで修行した末に漸く習得できた技を、こうも簡単に習得されるなんてプライドずたずたです。恐るべきは４兄弟のエロパゥアーか。

「教える前にも言ったけど、僕の許可なく使うこと、無暗やたらに使うことは絶対に許さないから。これはお願いじゃない。命令だよ」

破ったりしたら解ってるよね…？　と、身体に魔力を滾らせて睨みを利かせる。これは脅しでもなんでもない。技を教えた者の義務だ。もし教えた技を使い、義に反する行いをするのであればそれを止めるのは教えた者だ。弟子と師の関係ではないけど、間違った方向に行く者を止めるのは先達の者なのだから。

「わかってる。今回もこれからも、お前の許可なく使用することはないと誓うよ。そこまで腐ってない」

「ならそれでいい。じゃあ準備をしようか」

名付けて『花嫁強奪作戦』。作戦決行は今夜、日が沈んでからだ。

◇◆◇◆◇◆◇

俺(いちろう)たちは今、日が暮れて見通しの悪くなった通りを横一列になって歩いている。今回は逃げも隠れもしない、真正面からぶつかって想いを受け止めてもらうためだ。が、当初考えていたような大がかりな罠は全くなかった。せいぜいが落とし穴くらい。その程度の罠では歴戦の勇たる俺たちには不足過ぎるぞ、未来の義父さんよ！

「良かったですね兄さん！　これなら楽に行けますよ、なんたって大和も付いてますから！」

「そうだな四郎。だけど油断はするなよ、日が暮れたとはいえ、人っ子一人見当たらないのは流石におかしいのだからな」

そう、俺が気がかりなのはこの静けさだ。周囲には誰もおらず、かといって家の中に居るようには見えない。通りに面した家の中からは、夜だというのに灯りが燈っていないように見えてより一層不気味さを感じさせる。…いったい、里の連中は何をしているのだろうか。

「この先に誰か居ます。注意してください」

気配を感じた、とでも言うのだろうか、大和が全員に合図を送る。その動きの一つ一つに無駄がないと言うのだろうか、武術をしたことの無い俺には解らないけど、すごいのだということだけは解る。

…今もそうだけど、普段からも本当に頼もしい男だと思う。この人のことを気安く大和と呼んでいる人が多いのは、それを感じさせない彼の親しみやすさもあるのだろう。本人は気付いてないだろうけど、人里に住む男衆は皆この人に憧れている。その強さと人格、そして誰よりも人を想う気持ちに。

だから誰もが彼を頼り、尊敬と僅かの嫉妬を抱くのだろう。だけどもう一度言っておこう。こいつは全く気付いちゃいない。

「もうすぐ皆さんの視界にも見えてくるはずです。…いいですか、たぶん罠ですから無視ですよ、無視」

おっと、要らない事を考えているわけじゃなかった。今に集中しよう。

暫く歩くと、大和の言ったように、通りの真ん中に小さい女の子が座り込んでいた。

「いった～い。足捻っちゃった～」

「…罠だな」

「罠ですね…」

うむ、完全に罠だ。座っている少女の前には、如何にも落とし穴がありますと言わんばかりに土を掘った後がある。ふ…罠の質も落ちたものだ。こうも見えやすく、そしてこんなに幼い子供を使えば俺たちを嵌められると考えるとは…

「ああ！　大丈夫かいお嬢ちゃん、俺(しろう)が助けてあげるからね！！」

ッしまった！　奴等の狙いはこれか！

「よせ四郎！　これは孔明の罠だ！！」

「何を言ってるんだ兄さん、罠なんて関係ないよ！　僕があの子を助けてあ――――――――」

最後まで言うことも出来ず、四郎は少女の一歩手前で穴に落ちて行った。…中々に深いな、落ちた音が届くまでに時間があったぞ。

「っく、四郎の馬鹿野郎が…」

「本当に四郎は少女趣味の糞野郎の大馬鹿ですよね」

そう言ってやるな、とは言えない。大和が最初に注意したにも関わらず、少女を助けるために見え透いた罠に散った末弟。四郎…無茶しやがって…

「者共、出合え、出合えぃーーーーー！！」

「何奴！？」

四郎が穴に落ちたのを悲しむ暇もなく、家の影から里の女衆が現れた。手には鍋やお玉、洗濯板で武装している人が多く見られる。しかし、その数に顔が轢きつき、乾いた笑みが零れる。四方を囲む女衆の数はどう見ても里の全員にしか見えない。

ありえねぇ…さすがにこれはやり過ぎだろうが！？

「元々、あの穴は大和さんの為に特別深く掘った落とし穴なの。風の噂で…その、大和さんが…小さい女の子に興味があるとかないとか…」

「ちょっと待って！？　誰だそんな噂流したの！？」

「嘘ですよね！　大和さんは落ちた変態と違って、そんな趣味じゃないですよね！」

「当たり前です！！」

俺としてもその噂を流した奴が気になる…っておい二郎、何を笑っているんだ？　何？　最初に大和が狙われると読んでいたからこんな噂を流したって？　…うむ、よくやった。慧音さんにもこの噂が届いているのを願うばかりだな、はっはっは。

「最大戦力が削れなかったのは悔しいけど、それはあの人たちに任せるわ。私たちは貴方達３人を止める！」

「ッ来るぞ！　全員作戦通りに！」

人里の女性全員対２人の男のな戦いが始まった。

◇◆◇◆◇◆◇

「すまないな零夢、君にまで手伝ってもらって」

「気にしないで頂戴。あの馬鹿を懲らしめるためなら這ってでも行くから」

今回の騒動には私（れいむ）も参加させてもらった。半獣に頼まれた時にはすぐさま断ろうと思ったけど、大和が参加していると白髪頭に聞かされたので自ら進んで参加したのだ。

「しかし大和も懲りない奴だよな。てっきり前の覗き事件であの４人とは手を切ったと思ってたんだけど」

「あいつも男よ。最近じゃ私を見る目も時々妖しくなってきてるし」

「…伊吹君には困ったものだな。年頃といえば、年頃なのだろうが」

風呂上がりとかは特に視線を感じる。私が気付かないとでも思っているのだろうか、あいつは。だとしたら舐められたものだ。ちょうど良い機会だ、今回の件も含めてキツイお灸を据えてやろう。

「「「――――――――――――――――!!」」」

「始まったようだな」

今回はその一郎とかいう男を仕留めればそれですむ。一番の懸念事項は大和だけど私の敵ではない。軽く捻ってやる。でもあいつのことだ、自分を犠牲にしても一郎を行かせるだろう。あいつはそういう奴だ。

「おい慧音、見てみろよ。大和のやつ手を出せないでいるぞ。流石に女には手が出せないみたいだな」

「そうでなければ皆に手伝って貰った意味が無いさ」

……ふぅん。私には容赦無いくせに里の女には手を上げないのか。これはもう手加減なんて出来ないわね…。

そう考えていると、ふと不思議に思った。

どうしてあいつは飛んでこない…？

「ッしまった！　半獣と白髪！　構えなさい、攻撃が来るわよ!!」

目に見えている大和は幻術。何故解ったかなんて私にも分からない。ただカンだけを頼りにそう叫んだ。その声と同時に視界を埋め尽くす程の弾幕が私たち目掛けて来るのが見えた。

流石人里の守護者と言われることはある。急に叫んだにも関わらず、声を聞いた瞬間には2人は空へと退避できていた。

「不意打ちとはやってくれるじゃない。アレ、あんたの幻術？　私でも今の今まで気付けなかったんだけど」

「秘密。ただ、零夢と同じように僕も日々進化してるんだよ」

「ええそうね。風呂上がりの視線も日々進化しているみたいだし、羨ましいわ」

「……」

先程の強気の態度は何処へやら、一変して額から大量の汗を流し続けている大和。それでも私への視線を逸らさないのは男としての、針の先よりも小さいプライド故か。どちらにせよ、顔色が悪くなったのことに違いないし、そんな大和を見ているのも楽しいものだ。

「大和、俺はあの人の家に向かうつもりだが…大丈夫か？」

「大丈夫、問題ない。さあ、一郎さんは自分の戦場に行って下さい」

背中にいる1人の男へ向けて、僕はハッキリとそう宣言した。大丈夫、絶対にここを突破させやしない。卑怯と言われても、馬鹿と言われても…例え変態と罵られようとも、僕は誰一人としてここを通しはしない。

だから行くんだ、一郎。

「おっと、行かせるわけには行かないな」

「例え妹紅といえど、ここを通すわけにはいかない！」

一郎を追いかけようとする妹紅に炎弾を放つ。それを舌打ちしながら回避する妹紅の脇を慧音さんが抜けようとするも、僕は魔力糸を飛ばして慧音さんを絡め取ろうとする。しかし、零夢の放つ針を避けながらでは動き回る慧音さんを捉えきることは出来なかった。

「チッ。大和、まずはお前をやらなきゃならないみたいだな」

「すまないが、私も同意見だ。潰させてもらう」

「私は初めからそのつもりだったけどね」

3対1か。…きっついなぁ。でも負けられない。僕の後ろには、僕

を信じて走り続ける男がいる。だったらその信頼に応えないと、男としての一生の恥になる。

「言っておくけど、今の僕に勝とうなんて思わない方がいい。今夜、君たちが相手にするのは伊吹の名を持つ者。伊吹の名に敗戦の２文字は無いのだから」

◇◆◇◆◇◆◇

走る。ただひたすらに夜道を駆け抜けていく。

もう目と鼻の先には俺の嫁が居る家がある。だがここで思わぬ伏兵が現れた。なんと１０人弱の武装した女傑が家を警備しているのだ。どうやらあの場にいたのが全てではなかったらしい。…ここまでされると本当に嫌われているのではないかと思えてくる。

「くそ、どうする一郎…。兄弟や大和が頑張ってくれているというのに…」

「ん！　誰だそこにいるのは！？」

！　バレた！？　くそ、格なる上は正面突破を…。そう思って立ち上がって周りを見渡すと、一瞬の内に全員が気絶させられていた。

「わはー。あ、変態のお兄さんだ。面白そうなことしてるから混ぜて貰ったよー」

「ル、ルーミアちゃん？　これ、君がしたのかい？」

死んで…ない、よな。良かった、気絶しているだけだ。いくら小さいとはいえ妖怪だから俺としても心臓に悪い。

「そうだよ。…面白いものが見れたお礼としてね」

「そ、そうなのかー」

一瞬、ほんの一瞬だけ酷く妖怪らしい冷めた表情が見えたけど、見間違いか何かだろう。こんな小さな子があれほど怖いわけがない…。ああ、でもこの子も妖怪だったか。小さい上に妖怪らしくないあどけなさのせいか、直ぐにその事実を忘れてしまう。

「早く行けばいいよ。ご主人さまなら大丈夫。ほぼ互角に戦えているから」

大和ってそこまで強かったのか。…よし、じゃあ俺も行こう！

「たのもーーーーーーーーー！！」

◇◆◇◆◇◆◇

文「お待たせしました～。貴方の街の新聞屋、射命丸文と」

大「最近ロリコンと言われることに悩む永遠の１６歳、伊吹大和です」

文「いや～暑くなってきましたね。もっとも、空を飛ぶ分には気持ちいいくらいなんですけど」

大「だよねぇ。文ほど速くは飛べないけど、空は気持ちいいからね」

文「ですね。では今回の質問に入りましょう。ロリコンと言われ続ける大和さんにふさわしい質問が来てますよ？　『目の前に幼女がいます。どうしますか？

？お持ち帰り～

？ぼ…僕とお医者さんごっこしないか？

？パ…パンツ何色

？ハアハアハアハアハアハア

？ペロペロ

？や　ら　な　い　か

？影からずっとずっとず～～～と家に帰るまで見守る

？しゃ、写真撮っていい？

?裸で抱きしめる
?一緒に温泉（露天風呂）に入らない?』

です。…これは酷い。どの選択肢をとっても変態でしかないですね」

大「…この中から選ばないと駄目?」

文「もちろんです」

大「…?かなぁ。だって一番マシそうじゃない?　ほら、1人で危ないだろうから影から見守るとか」

文「ストーカーという奴ですね。別にいいんじゃないですか?」

大「そんなつもりないよ!?」

文「変態は放っておきましょう。ではまた次回に会いましょう」

大和と4兄弟―再・後編？―（後書き）

待っていてくれた皆様も待ってなかった皆様もこんにちは、じらいです。久しぶりで悪いのですが、最初から御目汚しをして申し訳ありません。反省してますが、後悔してませんので怒らないでください。

前書きにも書いたように、1万文字を超えた為に分割しました。分割しなくてもよかったかもしれませんが、あまり長かったら読むのがめんど、もとい、しんどい（方言らしいです）　と思ったので。次回は自重を止めた内容になってます。全力でニヤニヤして読んでくださいね。では！

大和と4兄弟―再・後編？―（前書き）

待っていた方、お待たせしました。待っていなかった方、申し訳ありません。

※注意
変態が出没しています。皆様御引き取りください。

大和と4兄弟―再・後編？―

「矛槍（ハルベルト）！」

僕の掛け声と共に炎で出来た矛槍が空中で待機し、

「突撃！」

それぞれが凄まじいスピードで3人目掛けて飛んで行く。3人はそれぞれ迎撃・回避していくが、堕としきれなかった分を至近距離で爆発させ、視覚と聴覚を一時的に機能させなくさせる。

その爆発によって生まれた煙の中を僕は突き進む。目標はこの中で最も力の弱い慧音さん。弱い人を最初に叩くのは戦いの基本！　まずは一人、確実にやらせてもらう！

「そこね！」

「ッチ！　零夢か！！」

爆煙で見えていないにも関わらず、正確無比の御札は僕目掛けて飛んで来る。クソッタレ、博麗の巫女は化物か！？

「慧音を最初にやるつもりだな！　そうはさせるか！」

声を頼りに位置を特定したのか、妹紅がその身に真っ赤な炎を身に纏って突撃してきた。回避は不可能。避けたところで零夢の追撃にやられる。ならば！

一秒にも満たない内にイメージを固定。迎撃準備完了。

「弓！」

何もない空間に炎で出来た弓を無数に創り出し、炎矢を一斉掃射。そのまま掃射を続けて妹紅の足止めとする。この後に慧音さんが背後から接近してくる姿が視えているからだ。

矢と向かい合った妹紅は、今度は同量の炎弾を放って相殺させていく。思惑通り、足止めは出来たようだ。

「足元がお留守だぞ、伊吹君！」

「なんとお！！」

来ることが解っていればいくらでも対処のしようがある。ここは僕の距離だ！

振われる腕を絡め捕り、そのまま地面に投げつける。慧音さんが地

面に叩きつけられると共に轟音が響きわたり、地面に大きなクレーターが産まれた。

「…ふぅん。面白い幻術ね。実体がある幻術なんて初めて見たわ」

「（バレたか）　まあね。つい最近使えるようになったのさ」

「イタタ…。酷いな伊吹君、ここまで容赦のない攻撃は久しぶりだぞ」

「強くなったな。これなら私たちも本気を出してもいいかな？」

やっぱり全力じゃなかったか…。おかしいとは思ってたんだ。有幻覚という新しい魔法を使ったとはいえ、3人相手にここまで互角に戦えるわけがない。勝てるなんて思い込みはしないけど、簡単に負けてやるつもりもないけどね。

「そろそろあんた達も終わりね。見なさい、あの2人も直ぐそこまで追いやられてるわよ」

そう零夢が指差す先には、里の女性たちに追いやられて来た二郎と三郎がいた。不味い、非常に不味いぞ。見たところ2人はもう駄目だろうし、僕も今から追い詰められるのが未来を視なくても解っていることだし…。

「大和！　もう限界だ！　あの技の使用許可を！！」

解ってる。解ってるけどやっぱり許可出来ない。今を乗り切ることが出来ても、後に地獄が待っていることが解っている。だというのに許可なんて出来るわけがない。

「このままでは突破される！　今使わないで何時使うんだよ！？」

必死に訴えてくるが、それでも許可はできない。一郎さんが先に進んでからもうだいぶ経った。そろそろ目的地に着いたはず。だったら、僕たちの役目はもう…。

「なんだ大和。お前は勝てるかもしれないのに、その好機を逃すやつだったのか？」

「妹紅…」

「見せてみろよ、成長したお前を。お前の真の実力を」

…僕と妹紅が交わした古い約束。妹紅は覚えてくれていたんだね。だったら…だったら悩む必要なんてないじゃないか。僕の全てを懸けて、勝利を奪いにいってやる。

でも絶対に、ぜっっったいに怒らないでよ？

「使用を許可する！」

僕、自重止めました☆

「「っしゃあーーーーーーーーーー！！」」

その言葉と共に、僕は超スピードで3人の視界から消え去り、そのままの勢いで妹紅の真横を通り過ぎて行った。3人が僕の居場所に気が付いたのは、僕が完全に止まってからだった。

「何だ？　特に何も…ッ！？　お、おい大和……その手に持ってるモノって！？」

「フ…。察しの通り、妹紅様の『上着』　にございます」

対女性用最終奥義『縛札衣』

本来ならば、対象が着ている服を利用して、　相手の手足などを拘束して動きを封じる技なんだけど…拘束という過程を脱がすに変えるとあら不思議、『超スピードで服を脱がす』　技に早変わり！師父曰く、手籠めにする時に使えるだろうとか。流石は師父！　解ってらっしゃる！！

「かっ返せ変態！！」

「フ……甘いぞもこたん！！」

上半身がさらしだけになった妹紅が向かってくるけど、羞恥心からか動きにキレがない。キレのない妹紅なんて、唯のもこたんでしかないのだ！　そんなんじゃあイイ的だよォ！？

「縛・札・衣！」

「へ……キャァァーーーーーーーーーー！？！？」

最後の砦も奪ってみた。するとどうした事か、僅かに膨らんだお労しい上半身が丸見えです。

如何な妹紅といえど流石に女性だ。意外にあった胸に手を当てて座り込んでしまった。…なんで解ったかって？　鍛えられた動体視力を舐めるんじゃないです。とりあえず…ゴチソウサマでした。

「妹紅！？　いッ伊吹君…？　これはやり過ぎではないのか…？」

「慧音さん、僕は友の為に戦っているのです。友の為ならば神にでも悪魔にでも…変態にだってなりますよ？」

酷くヤラシイ伊吹大和、参上！　両手を突きだし手をワキワキ。非常にヤヴァイ顔をしているのだろう、僕が一歩踏み出すと慧音さんは一歩退く。更に一歩、また一歩。じりじりと慧音さんに近づいてく…

「「「キャァァァァーーーーーー！？！？」」」

「眼福眼福ぅ！！」

「我が世の春がキターーーーーーーー！！」

二郎達の方からも羞恥に満ちた声が上がる。麗しい人里の女性の多くが半裸で逃げ回っているとは…うむうむ、素晴らしい光景ですな。天国にいる先生見てますか？　幻想郷はここにあったのです。

でも2人も必要以上に追いかけまわして無いみたいでよかったよかった。やり過ぎはいかんよ、君。

「変態は死ね」

「ええい！　どこまでも僕の邪魔をするか、博麗零夢！！」

一人悦になっていると空気を読めない巫女が針と御札を放って来た。今まで以上に厚い弾幕を張り、僕を仕留めようとしているのだろうけど、今の僕には零夢が僕を怖がっている様にしか見えないぞ！

「ぬおりゃァーーーー！！」

多少の被弾はお構いなし！　肩に針が刺さろうと、顔面に御札が直撃しようとも零夢目掛けて突き進む。そして弾幕を抜けるとどうだ、何時も強気な零夢の顔が恐怖で歪んでいるではないか！！

「意地でも縛札衣！！」

「ッツ～～～～～～！！　……あれ？　何も盗られてない…？」

そんな訳ないでしょうが。しっかり盗らせてもらってます。

「これな～んだ？」

答えは『さらし』　です。僕程の手だれになると、上着を盗らずに下着を盗ることなんて御茶の子さいさいなのです。どうだ参ったか！

「ッ馬鹿！　変態！　死ね大和！！」

「零夢はまだ若いからね。上着を盗らずに下着だけを奪う『こだわり』　が理解出来ないのは解る」

「むしろあんたの行為に理解が苦しむわよ！」

「大丈夫、男を何年もやれば理解出来るようになるから」

「遂に頭までやられたの！？」

酷いな、本当のことなのに。肉を切らせて服を剥ぐ！　なんてことを出来るのは、世界広しといえど僕ぐらいしかいないって言うのに。

「こんのぉ…無想「遅すぎるわー！！」　へ……！！？！？」

下着だけ盗るのはせめてもの情け。上着を盗られて肌を晒すほうが恥ずかしいだろうと考える僕の優しい思いやりです。さっきは上の下着である『さらし』　を盗った。だったら今僕が手に持っている下着は…言わなくてもご理解して頂けると思う。

「ハーハッハッハ！　零夢破れたり！！」

「……」

真の変態とは巫女をも打ち倒す。身体を抱くようにして座り込む零夢に勝利宣言だ！　僕も本気になればこの程度どうと言うことない！　今までは虐げられるだけだったけど、これを機に僕という恐ろしさを身に染みるといいよ。

「…あ～、伊吹君。降参だ、降参する。だから2人に盗った物を返してやってくれないか？」

「むぅ…慧音さんがそう言うのなら仕方ないですね…。（次は慧音さんの番だったのに…）　しかたない、解りました。でも返したら行き成り殴りかかるなんて止めて下さいよ？」

まあ慧音さんが降参だと言うのも解らなくもない。だって妹紅と零夢は座り込んでただ僕を睨むだけだし？　向こうではやり遂げた2人が満足げに汗を拭いているし。僕たちの完全勝利と言ってもいい状況なのだからね。

「それは本人達に言ってくれ」

今にも噛みついて来そうな2人には用心に用心を入れて、少し離れた所から盗った服を投げる。明日家を燃やしてやる、やら、神社の生贄にしてやる、なんて物騒な言葉が聞こえてくるけど、所詮は負け犬の遠吠え。まだ剥がれたりないのなら剥いであげるけど？　と手をワキワキさせて近づくと、涙目に成りながら後に下がられた。少し傷ついた。

でも今からの逃げる準備と、先に進んだ一郎さんの現状が気になる。どうせ追いかけて来るだろうし、幻想郷の果てまで逃る準備もしておかないとね。

「ああ、ここにいらっしゃったのですか」

「あれ？　霧雨さんは今回の馬鹿騒ぎに参加してなかったんですか？」

服を投げ渡し、一息ついていた僕の前に現れたのは霧雨家のお嬢さん。物静かで奥ゆかしい人だ。つまり、僕の理想を体現したかのような人です。僕が普通の人間なら真っ先に声をかけています。

「私も参加してましたよ？」

「へ？　でも今ここに来ましたよね？」

「それは俺から説明させてもらおうか」

「一郎さん!?　じゃあもしかして、一郎さんのお嫁さんって…」

「はい。私です」

……嘘ぉ!?　え、何これ!?　だって騒がしい一郎さんと、木陰で読書するのが似合うような霧雨家のお嬢さんだよ!?　絶対にありえない組み合わせだって!!　と言うか羨ま、羨ましくなんかないやい!!

「でも親御さんは？　一郎さん、どうやったんです？」

気になる。メッチャ気になる。霧雨家の父親は頑固オヤジで有名だ。一郎さんへの豪気な言い様も今なら理解できるけど、それを乗り越えた一郎さんのとった方法が非常に気になる！

「秘密だ。ただ言えるのは、大和も好きな人を前にすると解ると言うことかな」

「むぅ…。なんだか負けた気がする。一郎のくせに！」

「ふはははは！　これで俺も立派な男だ！　童貞のお前とは違うのだ！！」

「なあ！？　み、皆の前で言うなあ！！！！」

◇◆◇◆◇◆◇

「まったく、酷い目にあったわ。あんた、分かってるんでしょうねぇ…」

「大変申し訳ありません。非常に反省しております」

これから霧雨邸で宴会を！　と洒落込もうとした所、何処かで下着

を着直した零夢に首根っこを掴まれマウントポジション。顔面を殴打。殴打！　殴打！！　終いには男の象徴を蹴りあげられて悶絶、気がつけば神社に転がされてました。

そして今は母屋の縁側で御茶を啜る零夢に土下座している最中です。

「前から思ってたけど、あんたって奴はどうしようもない変態ね」

「返す言葉もございません」

縁側にツンツンしながら座る零夢の背中に土下座を続ける１００倍以上も長く生きた男、伊吹大和。確かにやり過ぎたとは思うけど一郎さんの為だ、後悔はしてない。…これからが大変だろうけど。

「……ねぇ、大和は結婚を考えたことあるの？」

「え？　いや、ないよ」

今までの責めるような尖った声とは一変して、柔らかい声が聞こえてきた。…今回のことで思うところでもあったのだろうか。零夢ももう年頃の女の子だし、僕もそろそろ此処を出て行った方がいいのかな？

そう思うと、少しだけ胸が痛い気がした。

「もし、私が結婚すると言ったらどうするの？」

「え…そりゃあ、どうしようかな？」

「答えて」

頭は下げたまま悩む。…どうしよう、なんて答えればいいのだろうか。

頭に言葉は浮かんだけれど、それを正直に言うのはどうも憚れる。と言うか嫌だ。言いたくないと思うのは間違いじゃないはず…。だって負けた気がするし。

「じゃあさ、僕が結婚するって言ったら？　零夢はどうするの？」

我ながら上手い切り返しだと思う。こう言ってしまえば零夢は「好きにすれば？」　と言うだろう。だから僕もそれと同じだと言ってしまえばいい。でも返ってきた言葉は、僕の想像を遙かに超えたものだった。特に「君と同じだ」　なんて言えるものじゃなかった。

「……嫌よ。絶対に嫌。もしあんたがそう言ったら、何が何でも邪魔してあげる。私以外と結婚すると言うのなら、私は全力で邪魔するわ」

「え？」

思わず下げていた頭を上げてしまった。でも零夢は僕に背を向けており、こちらからはその表情を見ることが出来ない。月明かりに照らされた幻想的な少女の背中しか見えなかった。

「あ、え、う…？　ええ？」

身体が熱を帯び、火照り出す。歓喜の輪が身体中に広がり、無自覚の内に笑顔となる。

わけが解らなかった。零夢が言ったことも、喜んでいる自分がいることも、少し肩が震えている零夢が目の前にいることも何もかも。

「……嘘よ。冗談に決まってるじゃない。馬鹿ねぇ、こんなことに引っ掛かるなんて。だから行き遅れるのよ」

「うっ、うるさい！　余計なお世話だ！」

何だよ、馬鹿にしやがって。少し、ほんの少しだけ浮かれた自分が馬鹿みたいじゃないか。

「もう帰る。零夢も早く寝たら？」

「解ってるわよ。じゃあね、御休み」

あそこで僕が零夢に一言でも返していれば…、とは思わない。

気付いた時にはもう遅い。この手が届くことはないのだから。

そう。僕は何時だって、失ってからしか気が付けない。

何であんなこと言ったのかしらね…。もう長く生きられないと知っておきながら情けない。もう諦めたはずなのに、あれじゃあ心残りが残るだけだ。私にも、あいつにも。

気付かないで欲しかった。気付かないでいたかった。……気付いて欲しかった。

私だけを見てよ。私を見ないでよ。私を愛して。私も愛していたい。一緒の時間を過ごしていたい。笑って、喧嘩して、泣いて、愛し合って、結婚して、子供を育てて。

でもそれは無理。残された時間はごく僅か。

何で？　どうして？　私だけ？　いいえ、彼も。縛られた人生。全ては世界の為？　世界の為なら個人は犠牲にしてもいい？　ふざけんな。私の人生だ、好きにさせてなるものか。

それでも運命を覆すことは出来ない。

お願い、気付いて。もう一度私を救って。私が死ぬ前に。どうか、どうか。

「やまと…」

◇◆◇◆◇◆◇

大「一仕事終えた大和と」

文「ネタを得た射命丸文でございます！　いや～縛札衣もそうですけど、今回はいろいろと詰め込みましたねぇ。一郎さんの相手の名がアレとは。まさかアレの子孫からアレが産まれるとは…。元気の良さくらいしか似てませんけど」

大「ネタばれはいかんよ、ネタばれは。まあ解りきったことだと思うけど」

文「じゃあ質問に入りましょうか。今回は二つ行きたいと思います。では第一問『目の前にフランのアルバムとレミリアのアルバムが置いてあります。さぁどっちを取る！？』　今回は姉妹にも関係するので来て貰いました！」

レ・フ「「どっちを取るの？」」

大「そりゃフランのでしょ。赤ちゃんの時から今まで見てきたし、感慨深いものがあるんだろなぁ」

フ「ごめんなさいお姉様。私の勝ちみたい」

大「別にレミリアのが気にならないってことじゃないよ？　ずっと隣で過ごしてきたし、別に振り返らなくても忘れたことなんてない

し」

レ「フラン、ちゃんと大和の答えを聞いたの？　私と過ごした時間は振り返らなくても直ぐに甦るのよ。貴方とは違って」

レ・フ「「……」」

文「バトルは終わってからにしてください。では次の質問です。『大和君の恋愛の対象年齢は何歳？　もしかして１０歳から５００歳？』　あ、これ私も気になってました」

大「う～ん…。実際はそれほど歳は関係ないよ？　背格好が同じくらいなら歳の差は関係ないです。ただ、この２人みたいに小さな子を恋愛対象として見ろと言われたらちょっと…。」

文「あ、それ禁句「ヤメテ！？　打たないで！？」　あらら、じらい踏んじゃいましたか。ではまた次回です！」

大和と4兄弟―再・後編？―（後書き）

直接的な表現ってどれくらいまでならＯＫなのか？　じらいです。

前までは妹紅と零夢の表現をねちょねちょなまでに書いた奴あったのですが、運営様に消されそうなので健全に直しました。どうも私には少しで止めるのは無理みたいです。やるなら何処までも突き進み、やらないのならやらない。極端な作者ですいません。

今回の話で９９話。そして次回は記念すべき１００話。活動報告での宣言通り、萃香と大和をお送りいたします。が！　これも何度も言ってきましたが、萃香エンドを書くわけではないので！　どうかそこだけは理解してください！　期待してはいけませんよ！？　ＫＥＮＺＥＮな親子の絆を楽しんで頂ければ。

後、有幻覚云々で疑問に思った方、私の活動報告にて説明（笑）がありますのでそちらも参考にしてみてください。今回の幻覚ネタは炎の髪の女傑でした。

番外　親子2人（前書き）

前半健全　後半Ｒ－１５かも。ご注意を

番外　親子2人

それは博麗大結界が貼られて間もない頃の話。

～魔法の森の手前・大和家～

「な～な～、大和～。母さんには手伝ったお礼は無いのかい？」

「息子に物をねだる親がいますか」

「大和は紫と私から服貰ったくせに、息子の為に頑張った母さんは何も貰ってないなんて変な話だねぇ」

…解って頂けただろうか、僕が母さんを頼りたくない理由の第一がこれです。小さい時から何かを頼ると、こうやって対価を求めてくる。これも躾だと言われて納得した昔の僕よ、今すぐ目の前に出てこい。頭冷まして上げるから。…まあ、感謝の気持ちを持つことは重要だと思うけどさ。

その対価がお酒やら手造り御飯とかなら別にいいけど、一日中肩車させろ、とか、一日中抱っこさせろ、なんて無茶苦茶なモノばかり。勇儀姉さんには笑われ、他の鬼の皆にはニヤニヤした視線が集中する。昔でも恥ずかしかったのに、今そんなことになってしまえば羞恥のあまり死んでしまう。

「お酒でも買ってこようか？」

それだけは何としても阻止しなければならない。今の僕はあの頃とは比べ物にならない程に友好関係が多い。その分笑われる数も多くなる！

なんなら破産覚悟で超高級酒をダース単位で買ってあげてもいい！

頑張れ大和、久々に母さんに反抗する時が来たのだ！

「間に合ってる。それよりも何かこう、私と大和の絆を更に深めるようなものは無いかい？」

ガッデム！　母さんがお酒に振り向かないなんてどうかしてるぜ！

どうする！　どうする大和！？　お酒が駄目なら何を犠牲にすればいい！？

「よし決めた。大和にはこれから一日、母さんの言うことを聞いて貰うことにする」

終わった…。僕、今日は里から依頼を受けているのに…。この様子じゃ母さんも付いて来るに決まってる。人里での僕の威厳がガタ落ちになる…。

「じゃまずは肩車からだよ。母さんがしてやってもいいけど、今回は労ってもらう側だからね。大和にやって貰うとしよう。さ、屈みな」

神様、もし僕の声が聞こえるのならお願いします。助けて下さい。――――――どうやら幻想郷にはそんな勝手の良い神様はいないようです……。

「さあ行こうか！」

「母さん、スカートが被さって前が見えないんだけど…」

◇◆◇◆◇◆◇

「今回の依頼はですね、その…」

「店主さん、僕の頭上は気にしないで下さい。僕も気にしませんから」

「は、はぁ…」

八百屋で売られる旬の作物。そのほとんどは人の手によって作られた物だけど、それだけでは満足できない人もいる。春には春の、秋

には秋の旬の食物をもっと大量に仕入れたい。しかし作物が実る場所には妖怪も多く出没し、危険も多い。

そんな時に僕が持って来たのが竹林のタケノコだった。何年も前の話だけど、そうやっている間に、報酬と引き換えに作物を採って来てくれないか？　と頼まれた。それが子や孫にも引き継がれているのだ。

「山に入って川魚、ねぇ。今の時期って何だっけ？」

「夏は岩魚や山女だ。母さんも手伝ってあげるから、さっさと山に入ろうか」

何とも頼もしいお言葉ではあるんだけど、僕の髪の毛で遊ばないでください。

◇◆◇◆◇◆◇

山に入ると同時に監視の目が飛んで来た。僕が何時もの事にげっそりしていると、何を思ったのか母さんが妖力全開で周囲を見渡すように顔を向けた。肩車をしているせいで表情を見ることはできないけど、全ての視線が一瞬で消えたことから、凄くおっかない顔をしているのだろうと思う。

そりゃあ誰だって山が揺れる程の妖力を込めて睨まれたら気絶するよ。

「…大和。何時も『こう』　なのかい？」

「そうだよ。でももう気にならないけど」

「へぇ……。最近の天狗ってのはどうも調子に乗ってるみたいだね。この山が誰の物だったのかを忘れちまったらしい」

…何故だろう。これだけの妖力を身に浴びたら寒気がするはずなのに、逆に温かく感じるのは。何度も浴びていたから感覚が鈍くなったのかな？

なんて気付かないフリはしない。自惚れでも何でもなく、母さんは僕がこういう対応をされるのが気に喰わないのだろう。でも少しは天狗のフォローをしておいた方がいいかもしれない。母さんに暴れられでもしたら面倒だ。主に事後処理に当てられるであろう僕が。

「でもさ、僕がそれだけ警戒に値する人物だってことだよね？　だって僕、母さんの息子だし。おまけに強いからね」

出てきた言葉は当然と言えば当然の答えだった。でもその言い回しを気にいったのか、母さんは上機嫌で笑ってくれた。

「大和も言う様になったじゃないか！　いや～母さんは嬉しいぞ！！」

「だからって頭を撫でまわさないでよ！？」

「この可愛い奴め！　こうしてやる！！」

なんて言って頭を抱きかかえられる。肩車をしたまま頭を抱かれるので自然と足が首を絞めてくるわけで。

「絞まってる！？　母さん首が絞まってるって！？　――――――――――ぁぅ」

「うわぁ！？」

だからそのまま後に倒れても仕方がないことです。もちろん母さんの足を掴んだままだ。せめて道連れにでもしないと僕も納得がいかないよ。

◇◆◇◆◇◆◇

まったく、酷い目にあった。僕じゃなかったら確実に死んでたね。まあ、僕が母さん程の力で首を絞められて折れなかったのは、地獄

廻りで鍛えられた身体のおかげなんだけど。でも、もし一つ間違えていたらぽっくり逝ってた所だった。

「だから悪かったって言ってるじゃないか」

「もう怒ってないよ」

妖怪の山。河童が住む川の岸辺に2人並んで座り、釣り糸を垂らす。母さんと一緒にいるためか、何時もは川に見られる河童の姿は見えない。川のせせらぎと、蝉の鳴き声だけが静かに一帯を包み込む。

こうやって母さんと一緒にゆっくり過ごすのは本当に久しぶりだ。昔、僕がまだ弱くて幼かった頃もこうしていたのを今でも覚えている。あの時もそう、こうやって親子水入らずだった。

「懐かしいね。大和が豆粒みたいな頃もこうしてたよなぁ…。遠い日の記憶のはずなのに、まるで昨日のことのようだ」

「豆粒って…僕は一寸法師じゃないよ。鬼退治じゃなくて、鬼の為になりたかったし。そう言えば母さんと姉さん、それに大母様のお酒のつまみの為に毎日通ったこともあったなぁ…」

宴会が何日も続いたせいでつまみが切れたんだっけ？　あの時の宴会は酷かった思い出がある。皆酔っ払っててどうしようもなかったんだよね。今思えば、妖怪の山で子供一人だけだなんて、どれ程危

険なことをしていたのやら…。

「あの時の宴会が終わったのは大和のせいだったはずだ。魚を捕ってきてくれって頼んだが最後、日が暮れても帰って来なかったから」

何やらニヤニヤして言われているけど、僕にはそんな記憶ない。無い…はず。

「あれ？　そんなことあったっけ？」

「あったあった。あの時は大変だったんだぞ？　総出でお前を探しに出て、朝日が昇るころに漸く大泣きしているお前を見つけ出したんだから」

ええ！？　そんなことあったっけ！？　…う～ん、覚えてないなぁ。

「それよりもさ、私が知らない大和の旅の話を聞きたいな」

「そうだね。母さんにはまだ詳しく話したことなかったし、前に話した時はお酒が入っていたからね」

これ以上昔話をしていると、僕も覚えてない恥ずかしい話が出てきそうで怖い。昔話も別にいいけど、僕も自分の通って来た道を母さんに知って貰いたい。

「じゃあ都で母さんたちと別れた後の話からするね。あの後大変だったんだよ？　帝の所に連れて行かれて――――――――――――――」

都で問い詰められた母さんとの関係。初めて見た海に感動しているのもつかの間、船ごと海に呑まれて漂流。辿り着いた蓬莱島。母さんは僕の話に一喜一憂し、まるで自分のことのように僕の体験談を聞いてくれている。

蓬莱島での出合った輝夜・師匠・師父。僕の武術・魔法の基礎を創ってくれた人たちには感謝してもしきれない。そして生き別れの妹、アキナとの出会い。迷ったけど、僕とアキナの関係も全部話した。僕がなんであそこに居たのか。どういう存在なのかも全て。

「お前がどう思っているかは知らないけど、私はお前のことを大切な一人息子だと思っている。たとえ創られた存在だろうと、戦いの為だけに創られた存在だろうと、お前は私の息子だ」

「…ありがとう。僕、母さんの息子でよかった」

僕の素性を話しても母さんは微笑んでくれた。微笑んで、お前は自慢の息子だ、と。だから僕も笑って告げる。母さんに拾われて本当に幸せだと。…なんだ、目の前が見にくいや。

話は続き、紅魔館での死闘の話になると、流石の母さんもハラハラしている。それがすごく子供っぽくて、なんだか新しい一面を見れた気がした。

紅魔館の面々。騎士として、己の正義を貫く大陸の武士の話。ケビンさんの話をした時に母さんは酷くご立腹のようだったけど、裏では人情に溢れた良い人なんだろうと言っていた。…驚いた、話からだけでそこまで判断できるだなんて。

そして人妖大戦。私も死ぬ時は闘って死にたい、と言う母さんに、少し釘を打っておく。もう僕の大切な人達が死んでいくのは嫌だ。

先生が愛娘の前で死んだ様子を告げると、母さんも俯いて納得してくれたようだ。

「母さんが誰かに殺されたとしたら…大和はどうする？」

「……解らない。殺しはしないと、そう心に決めた。でも、目の前でそんなことが起こったら、たぶん僕は自分を押さえきれない。死んででも仇を…そうなると思う」

母さんに限ってそんなことはないと思うけど。

そう付け足したけど、これは母さんだけに当てはまる話じゃない。零夢やレミリア、フランにパチュリー、慧音さんや妹紅…は死なないのか。輝夜も死なないから心配はないけど、親しい誰かが目の前で殺された時、僕は自分を押さえられる自信がない。

心が弱いから、とは言わない。それだけ失いたくない人達だから、大切な人達だからこそ。

そして話は幻想郷へと続く。ここからは母さんも何故か、な・ぜ・か非常に詳しく知っていた。まるでずっと後で見ていたかのように。

「母さん、もしかして僕の後を付けてたりしてた？」

「？　可愛い息子の後を付けちゃ駄目なのかい？」

…何だ、愛されている…のかな？　でももう小さくないから危険なことはしない、だから安心して大丈夫だと伝えても、母さんは首を横に振るばかり。

「大和に悪い虫が着いちゃ駄目だからね。こうやって母さんが見守ってあげてるのさ！」

「…僕も大きいですから意味は解っているつもりです。でもね、僕に限ってそんなことはないから大丈夫だよ」

何時までも小さくないから！　いいや、お前が気が付いてないだけだ！　私はこの目で見たぞ！！

なんて言い合いが始まり、気がついたら僕の女性事情の話に変わっ

ていた。月に何度か輝夜に会いに（地獄廻りの間違い）　行っているとか、零夢に向ける視線が変わってきてるとか。闇魔との同棲では何をしていたんだ！？　挙句の果てには紅魔館の小さなお嬢様がいいのか！？　母さんが大好きだから、母さんくらいの子がいいのか！？　母さん（自主規制）　なんて暴走しだす始末。

ここまで騒いでいては魚が針に引っ掛かることもなく、日が傾きだしたにも関わらず一匹も捕れず仕舞いだった。

「……まあいい。また家に帰ってから詳しく聞くことにする。それよりも魚だよ、魚」

「騒いだせいで魚が逃げちゃったからね。どうしようかな」

「ふっふっふ、ここは偉大なる母に任せなさい！」

そう言って川に入って行く母さん。何をするつもりだろう？　そう思っていると、母さんは拳を振り上げ、

「魚！！」

川底に向けて思いっきり振り下ろした。凄まじい轟音と共に水しぶきが上がり、川に入っていない僕までもが水浸しになってしまった。

「見ろ大和！　魚が浮いているぞ！！」

「母さん、それ反則ですよ…」

「何を言ってるんだい？　母さんは昔からこうやって捕っていたぞ？　釣りもいいけど、アレは飽きる上に時間が掛るからねぇ。その点、これは速くて大量に手に入れられる」

何てことない、と魚を拾っていく。まあ僕も拾うけどさ。

でもね母さん。魚だけじゃなくて河童も流れて来てるんだけど…

◇◆◇◆◇◆◇

～大和家～

依頼されていた分の魚を納品して、余った分は家に持ち帰って来た。そして今、大和は風呂に入っている。私が水浸しにさせたからか、今日はお湯に入って温まるらしい。あの子は炎系の魔法が使えるから、水を沸かすのもお手の物。便利な魔法を持っている

折角だし、わたしも入ろう。久しぶりに一緒に入って息子の成長ぶりを見てやるのだ！

善は急げ。服を投げ捨て、一糸纏わぬ姿になる。右手に手ぬぐい、左手に桶を持ち風呂場の扉を開ける。湯に浸かっている大和が驚いたような顔で私を凝視していた。

「かかかかっ、母さん!?　何入ってきてるんですか!?!?」

「いやぁ～、折角だから私も入ろうと思ってさ」

「だったら後でいいじゃないですか!?」

「母親が可愛い息子と一緒に入りたいと言ってるんだよ」

私に背を向けて必死に説得し続ける大和を見て、少し意地悪をしてやろうと思った。

「何だ何だ、母さんの裸体に興奮でもしたかい？　初心な子だねぇ」

「そ、そんなことないよ!!」

見てやってくれ勇儀。この子も立派な男子になったみたいだよ。これくらいで真っ赤になっちゃうなんて、本当に可愛い子だねぇ。

「邪魔するよ」

そのまま風呂ぬ入って大和の隣に座る。前を隠してください！　と言う大和に、それは風呂場での規則違反だと言ってやる。すると大和は必死になって目を閉じて何かに耐えているようだった。…ふむ。

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ!?!?」

「おお!?」

何だ、その…。掴んだソレは立派な物だった。我が息子ながら恐るべし。月の全因子とやらはこんな所にも影響を与えているみたい。わたしも掴んでビックリしたよ…

「大和は肝っ玉が大きいからね。コッチも大きくなったんじゃないのかい？」

「…もう、泣いていいですか…？」

何言ってんだい。泣くのは大和じゃなくて、相手の方だろうに。こんな大きいものだと壊れちゃうよ。……ふむ。

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐッ!?!?　う、うわーーーーーーーーん!!」

「あ、逃げるな！」

…少しやり過ぎたのか、大和は大泣きしながら逃げて行った。仕様がない奴め。これから背中を流してもらおうと思ってたのに。あと、風呂から逃げる時にちらりと一物が見えたけど、思った通りのモノだった。一瞬私が驚きで固まるぐらいに。

「……なんだ、わたしも火照ってきちゃったよ」

お湯が熱いからだろう。この心地い火照りを逃がさない為にも、今日はゆっくりと浸かっていよう。

それは久しぶりに親子水入らずで過ごした、とある一日の話。

◇◆◇◆◇◆◇

文「記念すべき１００話でも質問コーナーは行います！　射命丸文

です！」

大「実はこのコーナーも、（仮）　をいれると１０回目になるのです。正直、ここまで続いたことに驚いてます」

文「では早速質問の方に行きたいと思います。今回は人里の守護者こと、慧音先生に質問が来ているのでお越しいただきました」

慧「どうぞよろしく」

文「では慧音先生に質問です。『四兄弟も子供の時は寺子屋通っていたはず。子供の頃から現在のような才覚を発揮してたんですか？』だそうです。気になりますねぇ～」

慧「あの子たちのアレか…。実は私と伊吹君のせいだと言っても過言ではないんだ。年に一度、性に関する授業をすることがあってな。私は女性だから男性のことは良く知らない。だから伊吹君には当時寺子屋に来ていた４人を含む男子の説明を任せたんだ」

大「…僕は何もしてませんよ？」

慧「確かに伊吹は何もしなかった。だからこそ、それが不味かったんだろう。彼らが初めて不埒な行為をした時、何を行ったか分かるか？」

大「…？」

慧「『だって大和さんが、不思議に思うんだったら確かめたらいいって言ってた』　だぞ？　あの時、私は心底君を恨んだよ…。その後は君も知っている通りだ」

文「あやや…。ではあの４人がああなったのは大和さんのせいだと？」

慧「伊吹君と、伊吹君に任せた私の責任だ…。だからあれから伊吹君を授業に呼んだことはないんだ」

大「（絶句）」

文「大和さんは知らない内に彼らを導いていたと…。今の気持ちを一言でどうぞ」

大「後悔もしてるし、反省もしています」

文「以上、第１０回質問コーナーでした」

番外　親子2人（後書き）

直接的な表現は無しで頑張ったじらいです。

まず言い訳をしましょう。大和はロリじゃないと。例え親であれ、いい歳した男が一緒に風呂に入られたら誰だって恥ずかしがります。そして大和の『息子』　ですが、どういう状況かは皆さんでご想像ください。風呂場でのＩＦなんて書く気ないんですからね！　そしてもう一度言いましょう。大和はロリじゃないよ。

さて、次回からは日蝕異変が始まります。レポートが溜まってますので更新が遅れます。更新してない時は1話目から読み直してもらえると嬉しいです。

4年越しの異変

――日蝕異変――

博麗大結界構築を隠れ蓑に、４年越しの時を経て計画された大異変。日蝕の名の通り、幻想郷の空を明るく照らしていた太陽はその姿を消し、幻想郷は闇の世界に包まれた。人々は混乱したが、それでもどこか安心していた。私たちにはあの２人がいる。だからその内この空も元通りになるさ。

あの時は誰もがそう思っていた。私も含めて。

「見えた！　零夢、行くよ！！」

「射線上には入らないでよ。あんたごと吹き飛ばしちゃうから」

漆黒の空を駆け抜ける二つの光。激戦の末に首謀者たる妖怪を倒した２人だが、幻想郷に太陽は戻らなかった。そして丁度その時、人里は所属不明の妖怪たちによる奇襲を受けていた。

「チッ数が多い。慧音、ちょっと無茶するけど、ついて来いよ！」

「ああ！　しっかりと着いて行かせて貰うさ！！」

幻想郷で初めて行われる、人妖間直接戦争。幻想郷は嘗てない程の混乱に突入する。属に言う、日蝕異変の始まりだった。

最初期の奇襲により、人里は退治屋の過半数を失うと言う壊滅的な打撃を被った。そして一方的な防戦に追い込まれた人里の切り札となったのが、歴代最高と名高い博麗の巫女と、隣で彼女を支え続けた彼だった。

「こんな争い、何の意味があるんだよ！！」

「まったく、面倒なことを起こしてくれるわね！」

次々と里に攻め入る妖怪たち。膨大な妖怪戦力に比べ、人間側の戦力はごく僅かにまで減っていた。日に日に憔悴していく里の民。だがそれを感じさせぬ程に、この異変における2人は正に圧倒的だった。時に味方である私たちでさえ、不安と恐怖を抱くほどに。

そしてこの状況を望ましく思っていないあの2人が、遂に動き出す。

「美しく残酷に、この大地から往ね！」

「すまないが主の命令だ。容赦はできない」

「あんたがこの異変の首謀者？」

「そうだよ。さあ、殺り合おうか」

「そんな…××××が…」

「――――――――――――という夢を見たんだ。どう思う？」

「妄想力が豊富ね、とは言えないのがあんたの能力なのよね…。あんた、誇張してるでしょ」

「それも勘？」

「まあね」

別にお告げと言うわけでも、的中率１００％の占いでもないんだけどね。ただ『在り得るかもしれない一つの未来』という可能性も多いにあるけど。でもこのテの先見は外れたことがないからなぁ。

「とりあえず、里が襲われることは無いと思う。でもこれを期に善からぬことを考える輩が出るかも」

（母さん、近くに居るのなら応えて）

「はぁ、仕方ないわね。…大和は今すぐ里の半獣に夢の内容を知らせて、直ぐに帰ってきなさい。迷惑かけるんじゃないわよ？」

（……なんだい？）

「分かってるって。零夢は？」

（頼みたいことがあるんだ）

「戦闘準備」

御札を構え、ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべる零夢。最近暴れていないせいか、手に持った御札からは目視出来る程に具現化された霊力が見てとれる。おっかないことこの上ない。

歴代最高の巫女、博麗零夢。昔はそうでもなかったのに、今の零夢って僕より強いんだよね…。どれくらい強いかと言えば…鬼くらい？　ほら、僕が都に寄った時に凄い陰陽師の人が勇儀姉さんと殴り合いしてたよね？　あの人と同じか、それよりも強いって言えば解ってもらえると思う。

まあ零夢は力を見せびらかす人じゃないからそれ程悔しくない…嘘です悔しいです。うぅ…守ってあげるつもりが守られる側に変わるなんて情けない話だよ…。

「何一人で百面相してるの、早く行ってきなさい。今日の晩御飯は

私が作ってあげるから」

「本当!?　じゃあ行ってくる!」

笑顔でそう言われると、その期待に応えたくなる。

あの日の夜から、零夢は少しだけ優しくなった。誰も気が付かない程度だけど、何時も一緒にいる僕には手に取るようにそれが解る。たぶん、たぶんだけど、そういうこと……なんだと思う。でも、僕も零夢もお互いにその話をすることはない。別に普段の生活に影響してるわけじゃないから別にいいんだけど…もどかしいなぁ。

何か切っ掛けでもあればいいのに。

◇◆◇◆◇◆◇

里に向かうと決まれば早いもので、ほんの少し空を駆ければ里につく。蒼い空に白い雲、こんな清々しい天気が続いているからか、あんな大それたことが起きるとは到底考えられない。むしろあんな事は起きないで欲しい。

「ご主人さまは里に何をしに行くの?」

「ん?　慧音さんにちょっと用事があるんだ」

そのほんの少しの道中でルーミアちゃんに出会った。両手を広げてぷかぷかと空中遊泳しているところを見つけたので声を掛けてみたところ、またしても空腹を訴えてきた。放っておくのもどうかと思ったので人里でご飯を食べさせてあげようと思ったんだけど、驚いたことに要らないと断られてしまった。

困り果てた僕に、一緒に里に行ってもいい？　と言われたので、今は隣と飛んでいるのだ。

「へー、どんな内容？」

「ん～。ルーミアちゃんにはちょっと難しい内容だよ」

夢を見たんだよ～、なんて言ったところで馬鹿じゃないの？　と言いたげな顔で見られるに決まっている。さて、慧音さんにはどう説明したものか。

里が見えたのと同時に、僕は何をどう説明すればいいのかを纏め始めた。…今更だよねぇ。

「慧音さんは…ああ、いたいた」

買い物かご片手に野菜と睨みあっている姿が見えた。慧音さんって家庭的だよね。ほんと、慧音さんの旦那さんになる人は羨ましいと

思う。慧音さんって尽くすタイプだと思うし。

「慧音さん慧音さん、少しいいですか？」

「……ん！？　ああすまない、どうかしたのか？」

野菜とのにらみ合いに忙しかったらしく、僕に気付いてくれたのは声を掛けてから少し後。本当に野菜選びに集中していたらしく、隣に僕が立っていることに驚いた様子だった。でもさ、別に一歩下がらなくてもいいと思うんだ。…そりゃあ、いろいろやって来たけどさ…。

「先見です。詳しいことはここでは言えませんが、直ぐにでも対処が必要な案件です」

気にしても仕方がない。ちょっと悲しいけど、今日は零夢の晩御飯だ。美味しいご飯を腹に入れれば、そんな気持ちも吹き飛ぶさ！
さあ、早く帰らないと後が怖いぞ！

結局何と言えばいいのか纏まらなかったけど、慧音さんは僕の能力について良く理解してくれている。だから慧音さんなら僕の言いたいことを理解してくれるだろうという、全て慧音さん任せの一言で伝えてみた。それに、こんなに人通りの多い場所で細かく説明してしまうと、里の人達に不安を煽ってしまうことになる。妖怪は人の畏れや恐怖と言った感情を糧にする。差し迫っている状況の中で妖怪に力を強められたら最悪だ。

「…成程、だいたい理解した。直ぐに――――ッツ！？」

「ッ始まった…！」

予想していたよりも随分と早い行動だ…！　大規模な妖力反応と共に空が闇に包まれ、太陽はその姿を消していく。あちこちから人の悲鳴や怒号が聞こえてくるが、それどころではない。この妖力の発生源は、

「わはっ！」

「ヅゥッ！？！？」

「伊吹君！？」

すぐ隣で僕らの会話を聞いていたルーミアちゃんなのだから。

ルーミアちゃんの背後から伸びる、見覚えのある漆黒の棘で腹を貫かれた僕は、大量の血を流しながらその場に崩れ落ちた。貫かれた腹部からは血が噴き出し、生温かい血液が地面に広がっていく。咳き込むと同時に口からも大量の血が飛び出した。止血しようと腹部に当てている手も「――――何時までそうしているつもり？」

「ご主人さま、下手な芝居は止めようよ」

「あちゃ、バレてたのか」

ルーミアちゃんが闇に染まった空に浮かぶ僕を見上げる。地面でスプラッタを晒しているのは幻術で創られた僕だ。悲しいかな、血を吐いて倒れ込むイメージってすごく浮かびやすいんだよね。師匠の扱きのおかげか、やられるイメージなんてものの数秒も掛らずに浮かんでくるという情けなさだけど、今回ばかりは騙し通せた僕を褒めてあげよう。

「お互い様だよ？　私も刺すまで気が付かなかったし。でもご主人さまはどうやって私に気が付いたの？　自分で言うのもなんだけど、完璧な擬態だと思ってたのに」

「確かについ最近まで騙されてたよ。分かった理由は「先見。『先を操る程度の能力』」の応用でしょ？」…解ってるのなら聞かなければいいのに」

「ごめんね。でも４年間も我慢したの。だからもう…我慢はいいよね！！」

すぐ横にいる慧音さんや、その近くにいる里の人達には見向きもせず、空に浮かんでいる僕に向かって一直線に飛んで来る。口を三日月のように開け、犬歯を剥き出しにして向かって来る様は妖怪そのもの。こうも欲望を向けられると、逆に清々しいものがある。

「慧音さん、里は頼みます！！」

「すまない！　伊吹君、死ぬなよ！！」

「そんなのほっといて、私と遊ぼうよぉ！！」

慧音さんに大声で一言言い、出来るだけ里から離れるために空を飛ぶ。後を追いかけてくるルーミアちゃんはあの時の球体のようにはなっていないが、その身から放たれている妖力は間違いなく上級妖怪のもの。そのまま闘って、里に被害を与えるわけにはいかない。

それに零夢には言わなかったけど、あの夢には続きがある。

彼女の狙いはおそらく僕。夢でルーミアちゃんはこう言っていた。

「ご主人さまが、ご主人さまが食べたいの！」

これで僕が狙いだということが確実になった。だから僕はわざわざルーミアちゃんに声を掛け、一対一の状況を創りだした。何故なら僕は、今回の襲撃の全貌を視たからだ。そして結末も…。だから神社を出る時に決めた。

この戦いに、零夢は関わらせない。絶対にだ。

だから母さんに頼ってまで零夢の足止めをしている。闇が空を覆っ

てからもう少し経つ。空間転移ができる零夢が、今この場に現れていないことを考えるに、どうやら母さんは上手くやってくれているようだ。

「僕を食べるって、出来れば止めて欲しいかな!?」

「妖怪は誰でも月の魔力の恩恵を受けてるよ！　私たち妖怪からすれば、ご主人さまからは今の月そのものなの！　食べると元気になるの！」

無視かよ。しかも月って…月の因子のことか!?　ルーミアちゃんの言うことが正しいのなら、そりゃあ月の申し子とも言うべき僕は格好の獲物なんだろうね！

「そう易々と食べられるつもりはないね！」

「4年間も待ったの！　だから美味しく食べてあげるからね!!」

「そう言うのはもっと大きくなってから言って欲しかったね!!」

後方から黒色の鋭利な棘が幾つも迫って来る。高速で飛んで来るそれらを身体を捻るように回避しながらも、里から離れることを止めはしない。首を捻って後を見てみると、ルーミアちゃんを中心に闇そのものが形作られている。剣・槍・棘…ありとあらゆる武器が闇によって具現化されていく。

「やっぱり基本は操影術…。だったら――――光よ！！」

「眩し！」

後方へ向かって光の魔法を放つ。操影術の対処法はパチュリーと何度も話し合った。闇の弱点は光。簡単だけど、とても分かりやすい事実だ。だったら影が消える程の光を当ててやればいい。

ただ光を出すだけのような簡単な魔法なら僕にだって即興で出来る。思った通り、強烈な光によって照らされたルーミアちゃんの身体からは闇が消えていた。

好機！　ここを逃す手はない！！

すぐさま反転。目も使える状況ではないのだろう、手で必死に目を掻いている。こんな小さい子に武器を向けるのことに思うことがないのかと聞かれると、思うことはある。だけれども、こちらとしても引くわけにはいかないのだ。

「う～、漸く見えて「ごめん、先に謝っておく」　え？」

――――魔砲　マスタースパーク――――

魔法媒体でもある短剣の切っ先をルーミアちゃんの胸に突き刺し、零距離からマスタースパークを放った。小さくてもこの子は上級妖

怪だ。僕の持つ最上級の威力を誇る魔法とはいえ、所詮は中級の上位程度の魔力しか持ち合わせていない僕だ。この程度なら気絶はともかく、死ぬなんてことは無いだろう。

「でもこれで終わり。これで零夢も「あら、まだ始まってもなくてよ？」　――――信じられない、無傷だなんて…」

誰だ、君は？

「あのままでもイケると思ったのだけど、案外頑張るわね。思わず本気になっちゃった」

煙の中から無傷で出てきたルーミアちゃん…いや、ルーミアと呼ぶべきか。鯖読んでもローティーンにしか見えなかった彼女の姿はハイティーンにまで成長していた。そして放たれていたプレッシャーもそれに比例するかのように桁違いにまで跳ね上がっている。

「もうちょっと大きくなってから、ね。あは、御望み通り大きくなってあげたわよ？　だから頑張って足掻いてね、御主人様。今の私、たぶん貴方の師匠と同じくらいのバケモノだから」

闇に覆われた虚空に手を伸ばし、そこから一振りのバスターソードを取り出す。その剣でどれほどの血を吸ったのか、刀身は赤黒く変色していた。それを片手で持ち、もう片方の手は鉤爪のように、こ

ちらも赤黒く変色した妖力で覆われていく。

目つきは鷹のように鋭く釣り上がり、今までのような幼い面影は鳴りを顰めた。覚悟するしかない、彼女はホンモノだ。

逆手に短剣を構え、気で身体を覆う。幻術行使の為に、魔力は極力温存しなければならない。

「さあ、やり合いましょう」

戦力差は圧倒的。それでも絶対に負けられない戦いが始まった。

◇◆◇◆◇◆◇

文「第１１回質問コーナ～。毎度御馴染射命丸と」

大「大和です。今回は長めです。理由はは母さんと姉さんも来てるからです」

萃・勇「まあ、飲むかい？」

文「お酒を飲みながら聞いた方が面白い解答が聞けるかもしれませんね、今回は。御二人に質問が届いたんですよ。『大和が子供の頃

に一番可愛かった時、また恥ずかしいエピソードを教えて』　です。御二人は文字通り子供の時から面倒を見てますし、色々とあったのではないのですか？」

勇「そうだねぇ…。そう言えば大和がまだ歩きだして間もない頃の話なんだけどさ。何故か知らないけど私のことを母親だと思ってた時期があった」

萃「あの時はねぇ…鬱になりかけてたよ…。わたしが母さんなのに、何故か勇儀を母親だと勘違いして歩いて行くんだからさ…。ううん、思い出しただけでも涙が…」

大「覚えてないなぁ」

勇「当たり前だろう？　まだ1歳になったばかりの話だ。よちよち歩きで私を『かーしゃん』　と呼ぶお前はそりゃあ可愛かったさ。隣で血涙流してる馬鹿がいなけりゃもっと最高だったね」

萃「でもでも！　わたしがず～っと付きっきりで面倒を見ている内に、大和がわたしのことを『かーしゃん』　って呼んでくれたんだよ？　あの時の大和ときたら、もう死んでもいいくらいに可愛かったよ！」

文「つまり、大和さんは誰が『かーしゃん』　か解らなかったんですね？」

大「いや～、今の僕に聞かれても解らないよ」

萃「いいんだよ！　お前は私の子なんだから！　他にも可愛いとこも、大和にとっちゃ恥ずかしいこともたくさんあるよ。たとえば―

――」

文「ああっと、もうこんな時間ですか。次の質問に移りたいと思います。これは大和さんにですね。『彼女作る予定ありますか！？』
おおっと！　親の前でとんでもない質問が来たあ！！」

大「ある「ないよ」　…」

萃「あるわけないじゃないか。大和は私の子供だよ？」

大「いや、あ「ないったらない」　…彼女も欲しいし結婚もしてみたいよーーーーー！！」

萃「……大和。少し、あたま冷そっか。大丈夫、母さんが優しく教えてあげるから。さ、向こうへ行こ？」

大「絶対に彼女をつくーーー」

文「そしてそれ以降、大和さんが姿を見せることはなかった…」

勇「こらこら、馬鹿言ってんじゃないよ」

文「あやや、勇儀様は反対しないのですか？」

勇「あの子の人生だ、好きにすればいいさ。あの馬鹿も早くそれに気づいて子離れしなきゃいけないって言うのに」

文「大変ですねぇ。では今回はここまで。次回に会いましょう！」

4年越しの異変（後書き）

かなり難産な話でした、じらいです。始めをどうするかで今後の予定が変わるので、プロットというか妄想を決めるのに時間が掛りました。とりあえず、零夢の没後まではだいたい決まりました。また変わるかも知れませんが。

文頭の夢の部分ですけど、ネタが解る人にはすぐにバレてしまうと思います。私もフロム脳なわけでして。？が楽しみですね、はい。始めは本気であの通りに日蝕異変をやるつもりでした。でも時間も余力も実力もないわけで…。だいぶ縮小された異変になります。ちなみにバスターソードとか言ってますけど、ｗｉｋｉに載っている写真を見て決めただけなので特に意味は無いです。

そして活動報告でも言っていた件ですが、皆様の非常に温かい？後押しによって真・ＳｕｉｃａＥＮＤを書くことに決まりました。やっちゃいましたね！　何か案があればお願いします。むしろそれをそのまま書いてみてもいいかもｗ　一応こちらに投稿できるものを考えています。「もっと熱くなれよ！」　と言われたらどうなるか解りませんがｗ

長々と失礼しました。お莫迦な作者ですが、今後もよろしくしてもらえると嬉しい限りです。では

日蝕異変（前書き）

たぶん上編

日蝕異変

空が闇に覆われていく。

母屋の台所で晩御飯の仕込みをしていた私は、突如として幻想郷を覆っていった膨大な妖力を感知した。野菜を刻むために持っていた包丁をまな板に思い切り突き刺し、楽しい時間を邪魔してくれた事に対する怒りとする。さて、邪魔してくれた妖怪をどうしてくれようか、と考えるのも束の間。棚に綺麗に仕舞われている御札に針、そしてお祓い棒を片手で持ち境内へと走る。

さっさと片付けて夕飯の支度をしないといけない。台所はこのままでいいだろう。

今は大和が闘っているのだろう、あいつの魔力と気が高まっていくのが解る。それと同時に相手側の妖力も先程まで感じられていた以上に膨れ上がっている。

私と同等か、それ以上。否…、全力を出せない私を基準にするのは間違いか。

客観的にそう判断し、大和には荷が重い相手だと判断する。今すぐ駆けつけてやらないと、あいつが危ない。そう考え、空間転移を行おうとしたその時にまたしても邪魔が入った。

「ちょっといいかい？」

「何よ？　今すごく虫の居所が悪いの。あいつの母親だかなんだか知らないけど、邪魔するならぶん殴るわよ」

伊吹萃香。馬鹿息子の馬鹿親。この前の大結界の時には助けて貰ったけど、ただそれだけ。感謝はするが、邪魔をしようとするなら容赦はしない。

「大和にお前を引き留めておけって言われちゃってねぇ」

「…？　何で？　理由もなしにそんなこと言わないでしょ」

「さあ？　わたしも詳しいことは聞かされてないんだよ。ただ『零夢を来させないで』　って言われただけさ」

「はあ？　何よそれ」

訳分かんないわね。何時もは分かりやすいくせに、こうやって大事なことになると隠して、自分だけで何とかしようとする。…足手纏いになりたくなかったのに、これじゃあ何の為に私が巫女を続ける決意をしたのか分からないじゃない。

「意地でも通してもらうわよ。あんたも親なら分かってるでしょ？　大和じゃ勝てない。無駄死にするだけよ」

「そいつはどうかね。わたしたち親子ってのは諦めが悪いことで有

名なんだ。案外勝っちゃうかもしれないよ？」

「馬鹿言ってんじゃないわよ！　あんたも大人なら、少しは現実を見なさい！　…感じるでしょ？　あいつの魔力、どんどん減っていってるじゃない。息子に死んで欲しくなかったらそこを退けと言っているの！！」

こうして話している間にも大和の魔力反応はどんどん小さくなっていく。にもかかわらず、妖力はその力強さを保ったままだ。当然のことながら、苦戦しているのだろう。

「行けば、お前が死ぬかもしれないよ？　相手が相手だ、今回で限界を超えるかもしれないよ？」

「…癪だけど、あいつには私の命を懸けるだけの価値があると思ってる。大和の為なら死んでもいいって思える自分がいるのよ。ほんと、癪だけどね」

それだけ言って転移の準備を始める。ふふ、何でかな。死ぬかもしれないって言うのに、笑みが止まらない。何時も隣で感じていた、馬鹿みたいに暴れ回っている魔力を感知するのは慣れている。…別にあいつが何時神社に来るかを探ってたから得意なわけじゃないわよ？

座標を固定。待ってなさい、今助太刀に行ってあげる。

そんな私に難しい顔を向ける鬼は、それ以上何も言わなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「あはは！　ほら、もっと避けて避けて！」

「……」

交戦から数十分、僕は荒れ狂う暴風の如く迫る棘を躱し続けていた。

迫る闇棘や闇槍に逃げる空間を固定され、そこに黒い塊…おそらく高濃度の妖力弾を打ちこんでくるルーミア。僕はそれを冷静に対処する…しかない状況に追い込まれている。

正直、打つ手がないのだ。最大火力であるマススパークは効かず、接近しようにも面で迫る槍や棘の間を抜ける程の空中機動を僕は持ち合わせていない。こちらが散発的に打つ魔力弾や気弾はクリーンヒットしようが気にもされないのに、こちらは一発でも貰えば行動に支障が出るだろう。悲しいかな、基本能力の差がここまではっきりと現れるとどうすることも出来ない。

ではイクシードに秘められた魔道機関を使うか？　速度を上げたうえで能力で更に加速、そのまま肉薄し、先生をも唸らせた紅蓮一式を叩きこむ一手もある。だが、師匠はその速度にも難なく付いて来ていた。ならばその師匠と同格と豪語するルーミアにこの手は効くのか？　イクシードは全3回使えるが、身体への負担も大きく、2

度目はないと考えた方がいい。

だからこそ、僕はどうしようも出来ないでいた。ただひたすらに戦力分析と、僅かな隙はないかと目を凝らすことしか出来ない。

「うーん、面白くないなぁ。もしかして、避けられてると思ってる？」

途端、ルーミアの姿がぶれた。

「グゥッ！？」

「違うわ、甚振ってるだけなのよ？　…もう、また偽物」

保険とでも言うべきか、この幻想郷では僕にしか出来ないだろうと師匠に言われた『超高速機動戦闘下』　での幻術行使。常人の目には留まらない速度での近接戦闘。１秒にも満たない内に幾つもの攻防が繰り広げられる中で先を読み、幻術を練り、それを行使する。昔の僕なら「何ふざけてるの？」　と言っただろうけど、これが出来なければこの闘いで既に二桁は殺されているだろう。

「まあ、直ぐに果てられるよりはマシなんだけど。お姉さん、直ぐにイッちゃう子は嫌いだから」

「何でかな、その姿で言われると恐ろ嬉しいんだけど」

釣り上がった目で見られると背中がゾクゾクしてくる。師匠とは違って本気で死を感じさせられるからか、あんなことを言われても苦笑いしか出て来ない。

「そうね…。御主人様が勝ったら私を好きにしてもいいわ。何と言っても御主人様なんだし」

「なんですと!?」

「あは！　御主人様もやっぱり男の子だね！」

悲しいかな、こんな状況でも反応してしまうのが男の子。ちっちゃいままのルーミアちゃんならともかく、大きくなったルーミアは出るとこは出てるし、へっ込むところはへっ込んでいる美人さん。こんな人にそんなこと言われてしまったら反応してしまうのは仕方がないことで。

「『もしも』　勝てたらね！」

「ヅッ!?」

だからこそ、決定的な隙を生み出してしまう。

音もなく懐に入られ、左手に持つ剣を突き出される。辛うじて身を

左に捻って避けるも、右肩を貫かれてしまった。左拳を振うも頭を伏せられ、逆に右手で頭を掴まれてしまう。

不味いと思った瞬間には地面に向かって2人突進していった。後頭部や背中を、地面が陥没するほどの力をその身に受けることになった。ルーミアは僕で全ての衝撃を和らげたのか、笑顔で…っておいおい、何で頬が上気しているんだ!?

「ハァ…ハァ…。うふ、ウフフフ…アハハハハハ！　もう我慢できない！！」

「痛ゥッ！？」

右肩を貫いた剣を杭に、大地に縫いつけられた僕に、ルーミアがその牙を僕の腕に突きたてた。食い千切られるのではないかと思うほどの力に抗おうにも、頭を掴まれている右手にも力が込められていく。頭と腕、両方がメキメキと音を立てていく。

「こん…の……舐めるなァ！！」

だからと言って負けるわけにはいかない。イクシードを起動させ、大幅に増幅した魔力の全てを身体強化へと回す。

「どけえッ！！」

発動で深紅に変わった魔力を纏い、ルーミアの拘束を力づくで引き剥がす。腕を引き千切ることに夢中になっていたせいか、牙以外はそれほど抵抗なく剥がすことが出来た。だが、深く犬歯を突きたてられた右腕の肉は少し抉りとられていた。

右腕に激痛が走るが、それでも戦闘は続行される。頬を紅潮させて奪い取った肉を咀嚼しているルーミアの背後を取る。振った拳は自動防御にでもなっているのかと思うほど完璧に防がれ、逆に刃と化した影が躱しきれない僕の右腕を更に抉った。

「また偽物」

背後に迫った僕は偽物。今までも有幻覚という感触までリアルな幻術を用いていたせいか、そう判断したのだろう。だけど今回は本物だ。自分を餌にして虚を作り出す。自分の命でも懸けないと、格上の存在には一太刀浴びせることも出来ない。それほどの差が僕らにはある。だが、命を懸けた大一番に僕は勝った。

「もらったァッ！！」

驚きの表情を浮かべるルーミア。寸での所で気付かれた。師匠クラスならほぼ確実に迎撃される距離。間に合うか、いや間に合わせる。掌を突きだし、一撃必殺の紅蓮一式を放とうとしたその時だった。

「……なん…で……」

ルーミアを守るように、全方位に向かって棘が突き出されていた。黒い尖った球体に覆われたルーミアに傷を与えられるはずもなく、反対に全力で突進した僕はその身体を幾つもの棘に貫通された。右脇腹・右腕・両足を一ヶ所ずつ。せめてもの救いは、突き刺さった棘がそれほど大きくなかったことか。

「…正直肝が冷えたわ。ここまで接近されるなんて」

「う……ゲホッ！！？」

全身を貫かれた影で固定され、抜け出せない。頼みの魔力上昇時間も既に尽き、残った魔力では化物クラスの妖力には対抗できない。血と言う生命エネルギーがあらゆる傷から流れ出し、気を練るのも難しくなってきた。

「うん、流れ出した血で更においしそうになった。血の一滴も残さず食べてあげるから、安心して眠っててていいよ」

「だれ…が…、まだ……おわ…って…」

「ううん、もう終わり。じゃ、いただきます」

愉快に笑うルーミアを前にしても、死を感じるより何も出来なかっ

た自分に怒りを感じた。完全なる敗北。僕一人で何とかすると意気込んで来たはずが、このザマか。情けない…本当に自分が情けない。

「私の友達に、何してくれんのよっ！！」

結局、来ちゃったじゃないか。

◇◆◇◆◇◆◇

文「質問コーナーですよ～」

大「実は今回の話がシリアス過ぎてやるか迷ったんだよね」

文「でもここは別枠！　一度そう決めたんだから、それを守らないといけませんと言う訳で第一問！！『幻術が完璧に使えるようになったら、やってみたいことありますか？』です。私ならそうですね～、隠れてスクープ撮りまくりたいですね！」

大「いや、誰も文に聞いてないよ？　僕は…う～ん、悪戯かなぁ」

文「お風呂を覗いたり？」

大「それは最後って、何言わせてるの！？　メモとらないでよ！？」

文「いえ。大和さんなら姿隠して一緒にお風呂入るくらいするでし

ょう（キリッ」

大「しないよ!?　僕どれだけ変態だと思われてるの!?　せいぜい脅かしたりするくらいだよ!」

文「後からいきなり現れて、あんなことやこんなことして脅かして、その反応を見て楽しむんですね、わかります」

大「もう…いいですそれで…」

文「冗談ですって。大和さんのことは私が一番よく理解してますから…」

大「文…」

文「実は里の中の男性よりも変態だってことくらい!」

大「言いがかりじゃ「ではまた次回!」　…いいです。どうせ好奇心旺盛ですよ、グスン」

日蝕異変（後書き）

内容を生贄に、更新速度を召喚！　意味不明なじらいです。文字通り、内容が死んでます。大和も死にかけ…ではないですけど、ボロボロです。一応言っておきます。大和、これでも強い方です。本当だよ！　化物クラスがバケモノなだけなのです！

そして大和、物理的に食べられそうです。そこでヘタレ勇者を救うために、最強のお姫様が颯爽と現れました。勇者よりも強いお姫様。こういうのをテンプレって言うらしいです、はい。

死亡フラグが乱立している零夢と、ボッコボコにされた大和で勝てるのか？　それとも第三者が現れるのか？　次回に回します。

それぞれの思惑

八雲紫は知っていた。とある強大な妖怪が数年も前から伊吹大和の周りを探っていたことを。

幻想郷の管理者にとって、伊吹大和という存在は今後を左右する重要ファクターである。それ故に彼の行動は式によって逐一報告され、彼にとって害と成り得るモノは彼女と彼女の忠実な式によって静かに、しかし確実に排除されていった。

だが、常に張り詰めていては流石に気が滅入ってしまう。そんな時には2人の可笑しな毎日を見て、僅かな癒しを得るのが最近の日課となっていた。

八雲紫が彼女の存在に気がついたのは4年前。何時ものように大和と零夢の行動を隙間を通して覗いていた時の話だ。

2人を眺めるその姿を第三者が見れば、さぞ驚くことだろう。何時も薄笑いしか見せない彼女が、勘の良い零夢にバレないかと少しびくつきながら、しかしある意味仲睦まじい2人を見ては優しく微笑んでいるのだから。

何時も通りに2人を眺め終わり隙間を閉じようとした時、ふと遠目に妖怪の姿が入った。希薄な妖力しか放っていなかった彼女を見つけられたのは、正に奇跡的としか言えない。それ程までにその妖怪は周囲に溶け込んでいた。

そんな彼女が見つめる先は幻想郷の要である大和。何を企んでいるのかは知らないが、彼女程度の存在が彼をどうこう出来るハズもない。捨て置くこともできた。しかし、それでも気になった私は警告の意味を込めて彼女と会うことにした。

対面してから、初めて彼女の異常性に気付いた。客観的に見ても、八雲紫という妖怪は強い部類に入る。そんな強大な存在が吹けば飛ぶような存在の前に現れると、大抵の者は恐怖に震える。だが彼女は笑っていた。

恐怖で狂ったか。

そう考え、無駄な時間をとられたことに落胆する。…消すか。

少しの妖力をくみ上げ、一瞬であの世に送るつもりで掌を向けた。

たが、思いもよらぬ答えがその動きを止めさせた。

「漸く私に気付いた？　管理者様」

その言葉を聞いた私は即座に彼女の深淵を覗いた。…甘かった、としか言うしかなかった。藍は否定するだろうが、あの時手玉に取られていたのは間違いなく私だった。

それから少しの会話の後、私たちは協力関係になった。表向きは協力関係という形だったが、私は彼女を利用しようと考えた。彼女の望みは大和と戦うこと。私の望みは彼女を大和にとっての最大の踏み台にすること。

今回の異変を機に『伊吹大和』　という存在を幻想郷中に知らしめるデモンストレーションとすることに即座に決めた。

だが大和ではルーミアには勝てない。確かに強い部類には入るが、私たちの領域にまでは足を踏み入れていない大和では万に一つの可能性すらないだろう。では無様な姿をただ晒すだけになるのではないのか？

今回の目的は大和の強さを知らしめるものではない。彼の『繋がり』を知らしめることが目的なのだ。彼が危機に陥れば紅魔館の連中が動く。竹林に潜む者たちが動く。人里の守護者とその友人が動く。そしてもちろん彼女も。山の天狗や河童、閻魔などは立場上動けないだろうが、それはいい。ピンチに陥った大和という餌を撒き、傍観に徹している者たちを表舞台に引きずり出してやる。

結局のところ、大和が勝とうが負けようがどちらでも構わない。

そして彼が着ている服は八雲を象徴する服装。既に我々が手を付けていることもここで示す。そして気付くだろう。彼が今後の幻想郷においてどのような立場になるのかを。それすら理解できない小物など、何れは消えゆく運命だ。

そして今、八雲紫は焦っていた。

隙間で各勢力に大和とルーミアの闘いを流しているが、彼女の予想は根本から大きく覆されていた。本来、戦闘開始時から共に戦うはずだった零夢の姿はなく、たった一人で立ち向かっていたのだから。

格上の存在に対し、１人で挑むなんて馬鹿げてるわ！　死にたいの!?

大和が敗れても死ぬことはないだろう。そう考えていたのは、一重

に博麗零夢の存在があったからである。常に大和の隣に立ち、威風堂々たる姿を見せる彼女がいれば死ぬことはない、と。だからそう言わずにはいられなかった。

既に隙間で各勢力にこの戦闘模様は流れている。だが巫女はおろか、未だに救援に来る者はない。結果は予想通りの敗北だが、既に許容できる範囲を超えてしまっている。

（紫様、大和殿が…。如何いたしますか？）

このままでは大和が殺されてしまう。そう思っているのだろう、２人の近くで控えている藍が少し焦った様子で念話を飛ばしてくる。

（ここで動けば、更に醜態を晒すことになるわ。引き続き、その場で待機よ）

既に破れた大和も、そして大和を押した私達も。ここで動けば傷を増やすだけだ。

（しかし、これではもう…）

（解っているわ。でも動いては駄目よ）

助けろ、と喉元まで込み上げてきた言葉は言えなかった。沸き立つ

焦りを鋼の理性で抑え込み、増援が来ないかと必死に目を凝らす。

（紫様！　零夢が来ました！！）

影に掴まり、あと少しで捕食されると言う所でその時は来た。

◇◆◇◆◇◆◇

「そこの大馬鹿、説明」

ルーミアに蹴りを入れる…のではなく、僕の顔面に強烈な蹴りを入れて拘束を外すという、なんとも粗っぽい方法で僕は助けられた。ドゴォッ、と比喩でもなく、そんな音を立てながら僕はの華麗に蹴り飛ばされた。痛む頬を擦りながら顔を上げた僕の目には、こちらを見降ろし説明を要求する零夢がいた。

「えっと…、あそこに立ってる妖怪に「誰が状況報告をしろって言ったの？」　じゃあ何を説明すればいいんだよ…」

「何を説明…ですって…！？」

あ、ヤバイ。何故か知らないけど、零夢が本気で怒ってる。見る見る内に頬は引きつり、額にそれは見事な青筋を浮かべ、限界まで釣り上がった鬼をも射殺さん目つきでこちらを睨んでくる。

あのー零夢さん？　その振り上げた拳はどうするおつもりですか？

「この…馬鹿大和！！」

「プギャッ！？」

脳天にグーで、霊力を篭められたグーで上から叩きつけられるように振り下ろされた。おおぅ…頭がシェイクでスターがフライしている！？

「人がどれだけ心配したと思ってんのよ！　何で一人で闘いに行くの！？」

強烈な拳骨で脳を揺らされていた僕は、その言葉で冷水を掛けられたかのようにはっきりさせられた。

心配しているのだ、零夢は。たった一人で闘って、もう少しで殺されるところだった僕を。…こんな時だけど、零夢が心配してくれているのを思うと、少し嬉しく思ってしまう。

でも、何故一人で闘ったのかを言うことは出来ない。言ってしまえば、それが本当になってしまいそうで怖かった。

「少しは私を頼りなさい」

「…ごめん」

「若いっていいなー。そっちの巫女もやっぱり美味しそうだし。う～ん…」

だから僕は謝ることしかしなかった。そしてこれからの事に思考を巡らせる。負けはしたけど、動けない程のダメージを負っているわけではない。まだ身体は動く。魔力も気も戦闘に支障はない。必要だと思えば、無茶をしてでもイクシードを使ってやる。

そう考えていると、身体が浮遊感を感じた。あれ？　と思い振り返ってみると、零夢が僕を、猫を持つ様に掴みあげていた。そして、

「じゃあ兎に白髪、こいつを頼むわよ」

「へ？」

首根っこを掴まれたまま、思いっきり後方へ投げ飛ばされた。うぉい！？　普通怪我人を投げ飛ばす奴がいるか！？　それより白髪と兎って誰だよ！？

「おっと」

「はいはい、てゐちゃんにお任せあれ」

「妹紅!?　それにてゐちゃん!?」

投げ飛ばされた僕を掴んでくれたのは僕の2人目の姉貴分、妹紅だった。その隣に立っているのは永遠亭の兎、てゐちゃん。手には大きな箱を抱えている。

「2人とも、なんでここに…?」

「詳しいことはてゐに聞いてくれ。私は巫女を援護してくる」

そう言って妹紅は炎を纏いながら、既に戦闘を始めている零夢の援護に向かって行った。

「てゐちゃん、どういう状況か説明してもらえる?」

「任せるウサ、と言いたいけど、こっちも色々面倒くさいから省略するよ。隙間で見てた。以上」

「短!?　せめて10文字以上で言ってよ!?」

「隙間妖怪の隙間で見てたウサ」

「何にも変わってないよね!?」

「我儘は姫様だけにして欲しいウサ！」

それは同感…じゃなくて、もうやだこの兎。てんで話にならないよ。

（大和、聞こえる？）

（パチュリー！？　どうして、と言うか…ああもう！　いったい何が起きているんだよ！？）

状況を全く理解できていない僕の頭にパチュリーからの念話が届いたことで、僕は更なる混乱に陥るのだった。

◇◆◇◆◇◆◇

～紅魔館・図書館～

私たちは隙間妖怪によって送られてくる大和と闇を纏った妖怪の戦闘模様を見ていた。

開戦当初からはらはらしていたレミィとフランドールだが、２人は

現党首であるアルフォード・スカーレットの命令で静かに座っているしかなかった。

始めから予測出来ていたことだが、時が経つに連れて大和は除々に追い詰められていく。そして大和が貫かれたところで、今まで静かにこの様子を見ていたレミリアとフランドールがゆっくりと立ち上がった。

「お嬢様方、ここで動いては成りません」

それを反対側で見ていた美鈴が立ち上がって2人を止めた。何時もの柔らかい雰囲気はなりを潜め、真剣そのもの。だけどその気は不安定に揺らいでいて、如何に動揺しているかが見てとれる。

「止めるな美鈴、もう我慢ならん。私は行くぞ」

「フランも。ヤマトを助けに行くよ」

「今はまだ、武人の一騎打ちを邪魔するわけにはいきません！」

「では大和に死ねと言うのか、貴様は！！」

つい最近から使いだした言葉は、元来持ち合わせていたレミィのカリスマを更に高みの存在へと押し上げているようだ。実際に言われた美鈴はそんなレミィを前に言葉が咽喉につっかえている。…仕方がない、此処で勝手に動かれる前に助け舟を出そう。

「レミィ、少し落ち着きなさい。おそらくだけど、大和は死なない」

「…どういうことだ？」

「質問一。私達が此処に来る時、誰に何を言われたか？」

「それは…。八雲紫に「大和が幻想郷にいるから会いに行かないか」と」

「質問二。何故大陸に、それも欧州にいた大和がほんの僅かな時間で島国であるここに辿り着けたのか？」

「飛んで、では早すぎるか…」

「答えは目の前にあるわ」

今この様子を見せている隙間。これがその答え。あの妖怪賢者はどうやってか、この広大な世界に一人しかいない大和を見つけ出し、此処まで飛ばした。つまり、それは大和の行動は逐一把握しているということ。そこから大和が八雲にとって何かしら特別な存在だということが推測される。今着ている服もそう。大和は八雲から譲り受けたものだと言っていた。

それも、式である者と同じものだと。

それは八雲の手の者だという証明になる。本人に自覚はなくとも周囲はそう見るだろう。少なくとも私や美鈴、当主に執事はそれに気付いている。だから2人は『座れ』　と命じられた。大和を助けることは、突き詰めれば八雲を助けることになる。つまりそれは八雲一派と見られるということ。子煩悩な当主のことだ、これから先の2人の苦労を考えてそう命令したのだろう。何より、私たち紅魔館は既に一度、かの妖怪賢者にいいように使われたのだから。

私達にも私達のプライドがある。良いように使われるだけでは、私達はいずれ飲み込まれてしまうだろう。故に紅魔館は動けない。

「でもヤマトが死んじゃったらどうするの？」

「ありえない。それは賢者にとっても都合の良いものではない。すぐ近くに式が待機しているでしょうし、何よりまだ彼女が来ていない」

博麗の巫女。レミィは一度しか会ったことがないと言っていたが、同時にこうも言っていた。『たぶん、幻想郷でアレに敵う者はいない』　と。

「！　お嬢様、巫女が大和さんを助け出しました！」

随分と粗っぽい方法ね、もっと選択肢もあったでしょうに。だけど、巫女が怒っているのも解る。格上の存在に一人で挑むなんて言ったら、私だって本を投げつけるだろうから。身の程を知れ、と。

「里の半獣の相方と…あの兎は何だ？　持っているのは薬箱のようだが」

レミィの視線の先には、確か藤原とか言う人間と初めて見た兎がいた。彼女についてはだいたいの調べはついている。不老不死・藤原妹紅。この目で見たことはないが、殺しても死なないのが自慢らしい。

だがそれよりも気になるのはあの兎だ。アレは初めて見る。見た所、それなりに親交があるように思う。大和の行動範囲は広く、その分交友関係も広い。…気になってしまえば、どうにかして知りたくなってしまうのは魔女としての性か。何か言い合っているようだけど、巫女たちの戦闘音が大きすぎて聞きとることは出来ない。

「パチェ、ここから解らないように大和を支援できないか？」

大和に救援が現れたのを見て焦っているのだろう、レミィがそう尋ねてくる。…ああ、あれなら会話を聞くこともできるはず。

「一つだけなら。でも、それは大和と当主の意見しだいよ」

「おとうｓ…当主様、直接的でなければ、友人を助けてもよろしいですか？」

現状では父に言うのでは間違い、と言うことが解るくらいには頭も冷めてきたようだ。

自分を抑えるということは、考えている以上に難しいことだ。その点、レミリア・スカーレットはそれが拙いながらも出来ている。一人の少女としては悲しいことだが、これから上に立つ者としてこれほど出来たものはいないと思う。…少し友人として贔屓目ではあるけど。

「…いいだろう、許可する。だが八雲以外には覚られるなよ？」

「無論です。…パチェ、頼むわよ」

「任せなさい」

最後の最後で我が出てしまうのは、彼女なりの抵抗だろうか。紅魔館のレミリアではなく、一人の友人であるレミリアとして助けたいと思う彼女の願い。それに気付いた当主は少し目を吊り上げたが、直ぐにそれを隠した。それに気付いたのは付き合いの長い執事だけだったろう。

◇◆◇◆◇◆◇

～永遠亭～

「永琳、私の能力が干渉されて…何、それ？」

つい先程、私（かぐや）の能力で地上の穢れから隔離していたこの永遠亭が一種の攻撃を受けた。最初に頭を過ったのは月の襲撃。再び居場所がバレたという可能性が浮かんだが、それは永琳の元に急いで行くと直ぐに消えた。

「ああ、輝夜。いいところに来たわね。これを見てみなさい」

そう言われ、目の前に浮かんだ割れ目…隙間と名付けよう、を見てみると、大和が闘っている姿が見られた。どうやら相手は格上の存在らしい。

「でも永琳、どうしてここにこんなものが？」

大和が来る日以外は、この永遠亭は歴史から外されている。だからここを見つけることは物理的に不可能なはずだ。なにせ、歴史上に存在しないのだから。

「偉大な馬鹿弟子が、愚かにも付けられていたんでしょう。…腕が

鳴るわね、これからの虐…修行に」

「今虐待って言おうとしなかった？」

でも大和が付けられたと考えるのが妥当ね…。私の能力にこうも簡単に干渉して、その上一部だけ限定して破るなんて並の者じゃできないはずだから。

でもこれが月の追っての仕業だったらどうする？　答えは簡単。今度は大和も連れて一緒に逃げるまでだ。私の心を奪って行った男を逃がしてやるほど私も優しくはない。

大和と妖怪の激しい闘いが続く。大和は簡単にあしらわれ、身体に刻まれる傷も多くなっていく。

「勝てない…。貴方じゃ勝てないわよ、大和。何してるの、早く逃げなさい…」

「…そうね、今はまだ対等に闘える相手じゃないわ」

追い詰められ、剣で肩を貫かれる。そのまま地面に叩きつけられ、腕を喰い千切られそうになった所で私は居ても経ってもいられなくなった。

「！　待ちなさい輝夜！　どこに行くつもり！？」

大和を助けに行こうと走り出した所で、永琳に腕を掴まれた。

「離して！　このままじゃ大和は確実に死ぬわ！　私は大和みたいに未来は視えないけど、そんなの必要もないくらいはっきり解ってることじゃない！」

「行く必要はないわ」

「永琳！？　貴方…。もういい、私だけでも大和を助けに行く！」

見つかる可能性と、大和を天秤に掛けたのか！？　とまでは口にしなかったが、合理的な永琳のことだ。私達のこれからを考えて総合的に導き出した答えなのだろう。でも私は…、と思った所でその考えが間違いだったことを知らされた。

「だから、既にてゐに薬を持たせて向かわせているの。だから行く必要はないのよ」

てゐを…？　そう言えば、先程から姿が見えない。

「今回の騒ぎにこの映像を流す意味。これらを私なりに考えての行動よ。説明はいるかしら？」

「あ～…別にいいわ。どうせ理解出来ないだろうし」

「あまり私に頼りっきりでは困るのだけど」

遙か昔から人智を超えた知能を持つ存在がいれば、誰でも頼っちゃうわよ。

「はいはい、じゃあそんな永琳に一つだけ聞かせて頂戴な。…大和は死なないわよね？」

「月が滅びるくらいにあり得ないことだわ」

「そ、ならいいわ。じゃあ折角だし、ゆっくりと見させて貰いましょうか」

「そうね、これで弟子がどれほど成長したかも見れるわ。貴方も想い人の勇姿が見れるわよ？」

「もう、からかわないで」

隙間には、再び空に上がった強い背中が映っていた。

それぞれの思惑（後書き）

書いたあと、久しぶりに疲れましたじらいです。書いてて辻褄あってるかな？　間違ってないかな？　と思いながら確認しましたが、たぶん間違ってるでしょう。これが今の私の限界です、おぇ。

これだけ書いておきながら、まったく進行していないといのが悲しい現実ですホント。深く考えずに自分の感性に任せて行動するのが大和ですから、それを裏でどうこうする人が必要だよなぁ…。と思っていたので形にしてみました。

八雲・紅魔館・永遠亭。大和を取り巻く人達です。今回、八雲は利用。紅魔館は手助け。永遠亭は信頼…かな？　人によっては違うように見えるでしょうが、それはそれでお願いします。

今回質問コーナーは無しです。と言いますか、日蝕異変終わるまでやれると思えませんｗ　雰囲気に合わないので！　だから今の内に溜めておいて、第二回（仮）という形で溜まった分を出すつもりです。なので今は特に質問をお待ちしております！

ではまた次回の後書きで

僕は心からそう思うよ（前書き）

久しぶりに書いたので、ところどころおかしいですが御容赦を。夏が来たのか、とでも思ってください

僕は心からそう思うよ

（よかった。繋がるかどうか心配だったけど、貴方との魔力ラインは今も有効なようね。今から魔力を送るから身体に馴染ませなさい。それで少しは身体の治癒が早まるはずよ）

（魔力ラインって、人妖大戦の時の？　アレって一時的なものじゃなかった？）

あれだ、大戦前にパチュリーと…あ〜、チッスした時の。でもあの時は一時的に繋げるものだと言ってたに、それに今までも繋がってなかったのにどうして？

（一度繋がれば繋がりやすい。貴方と私の相性も中々と言うことね。貴方でも理解出来るように言ってあげるとしたら…離した手をもう一度繋ぐようなものかしら）

（馬鹿にしてるよね!?　僕だって魔法使いの端くれ、その程度のことくらい理解できるよ！　でもそれって難しいの？）

（少なくとも私が拒否するから貴方からは無理…ちょっと待って、レミィが騒いでる。……魔…ライン…。…方法？　……！！）

拒否って、拒否はないでしょうにパッチェさん。でもこれ、前より更に良くなっている。視覚・聴覚の共有も相変わらずだ。で、今は

パチュリーがレミリアに説明してる様子がパチュリー視点から見えてるんだけど。…うーん、実際に言われてるのはパチュリーなんだけど、何故かレミリアの視線が僕を捉えているように見えて仕方がない。

（ごめんなさい、終わったわ）

（これ凄いね。パチュリーが何を考えているのかもなんとなく理解出来るし）

（…聞いてた？）

（全部。でもはっきりと解ったわけじゃないよ）

（当たり前よ。心の中まで見えたらそれはもう違う魔法になるわ）

「大(やま)ちゃん、てゐちゃんも早くお仕事終わらせてこの場から逃げたいんだけど。いいかな？」

「あ、ごめん。それって薬箱だよね？」

「知り合いから預かった薬が入ってるウサ」

知り合い、ね。

てゐちゃんが敢えてそう言うってことは、師匠たちは存在を隠して

おきたいんだろう。幻想郷でも隠れて暮らしているんだ、この支援が限界といったところか。それでもすごくありがたいんだけども。

「じゃあその薬もらえるかな？」

「ほいさっさ。痛みを和らげる薬と、痛みを無くすけど飲むとブッ飛ぶ薬、痛みなんて元からなかったんだぜヒャッハー！　な薬の３種類があるよ。どれがいい？」

「……い、痛みを和らげる薬がいいなぁ」

「別に答えは聞いてないから最後のでいいよね。つべこべ言わずに飲むウサ」

（独特な色の薬ね。毒物かしら？）

僕もそう思う。

にこやかに笑っているてゐちゃんだけど、僕にはその笑顔が悪魔にしか見えません。絶対楽しんでるでしょこの兎。あれよあれよと言う間に怪しげに光る薬は手の中に収まった。ああ神様…名誉の戦死ではなく毒で死ぬだなんてあんまりです。

「いっき、いっき！」

「…ぇえい！　男は度胸！！」

鼻を摘んで一気飲み。不味い、苦い、臭いの三拍子揃った独創性溢れた薬だけど師匠が作った薬だ。それに良薬は口に苦しと言う言葉もある、たぶん凄い効果が

「んがががががが g┓?」

「おお!?」

（ちょっと、本当に大丈夫?）

熱い!?　身体がアッツーーーーイ!!　これ本当にヤバイ薬なんじゃないの!?

「あ、それ飲んだ後にこっちの飲まないと解毒できないんだった」

「そ、それヴぉはやぐ!」

「ほい」

追加で渡された薬も怪しかったけど、もうそんなことを言ってられない程辛い。身体が内側から燃える!

「ヴぇ…本気で死ぬかと…」

追加で渡された薬を全て飲みほしてからほんの少しで痛みは引いていった。…よかった、身体が痺れるとか意識が飛んで逝くとかの副作用はないみたい。

「いやード忘れしちゃってたよ。でも実は別にそれを飲まなくても大丈夫だったんだよね。身体の火照りを鎮めるだけの薬だから。それにほら、肩とか腕の怪我もぜーんぶ治ってる。魔力も気も全部元通りになってるはずだよ。なんたって大ちゃん専用だー、って言ってたし」

そ、それも早く言って欲しかった。でも出来れば忘れないで欲しいなぁ、なんて。

（遊ばれてるわね大和）

いやいや、ド忘れというのは誰でもあるものだよ。ここまで薬を届けてくれたてゐちゃんに感謝です。それにしてもこの薬の効果は凄い。怪我だけじゃなくて気や魔力も全部元通りに戻ってる。僕専用ってことは、修行中に魔力とかは抜き取っておいたり？　気絶してた時に何かされているのは知ってたけど、流石にそれはない…とは言い切れないのが辛いね…。

「ああそうだ、知り合いからの伝言があった。『勝て』　だとさ。じゃあ今度こそ逃げさせて貰うよ。こんなとこにいたら命が幾つあ

っても足りないウサ」

すたこらサッサ、一方的に言葉を残したてゐちゃんは脱兎の如く逃げ去って行った。

「さて、と。じゃあ行きますか」

『勝て』　か。格上相手に師匠も中々難しいことを言ってくれる。でもこれは師匠からの命令だ。弟子はその期待に応えないといけない。何より、僕を育ててくれた師父と師匠、先生の為にも簡単に負ける訳にはいかない。

遙か上空で激戦を繰り広げている3人を見上げる。何やら苦戦しているようだ。その理由は零夢の動きが前に比べて悪い、いや、らしくないからか。何時もはガンガン逝こうぜ！　を作戦に馬鹿げた霊力で敵を圧倒する零夢が、まるで腰が引けたように空を飛びまわっている。何やってんだか。

（私の魔力も使って構わないわ。思う存分暴れなさい）

（合点承知！）

さあルーミア、今度の僕はちょっと違うぞ？

◇◆◇◆◇◆◇

「白髪！　私の射線上に入んなっ言ってるでしょう！！」

「ッ悪かったね！　こちとら不甲斐無い巫女様を守るために前に出てるんだけどなっ！」

「必要ないって言ってるでしょうがっ！！」

「調子の悪い奴は下がれって言ってんだろうが！！」

「あはは、私を前に余裕だね。そんなに死にたいの？」

「「お前が死ねや」」

「何この状況？」

（私に聞かないで頂戴）

空に上がってみると仲間同士で喧嘩をしていた。えー何それ？　そう思ってしまう2対1じゃなくて1対1対1の混戦状態。昔の僕なら尻尾を巻いて逃げだす状況の中に突入する僕という生贄。ん？　今の僕は裸足で逃げたい気持ちですよ？　殺されかけたのに怖がらないわけないじゃないか。

「遅いぞ大和！　早くこの巫女をどうにかしてくれ、邪魔で仕方がない」

「何言ってんのよ。あんたが退けばそれで終わりじゃない」

「僕と一緒に協力し合おうよ」

札やら棘やら炎やら色々な物が飛び交う中でそれぞれ会話になっていない会話を交わす。話している最中にも魔力弾は放ち続けているし、ルーミアからは物質化した槍に棘、妖力弾が笑いと共に放たれている。数が3人ということと、僕らが気の抜けた会話をしていることもあるのだろう。とても避けやすい親切な弾幕しか張られていない。あちらもこの状況を遊んでいるようだ。

「この巫女てんで役に立たないぞ。効きもしない弱々しい霊弾に御札、やる気がないなら帰れってんだ」

「零夢、どういうこと？」

「別に。あの程度の妖怪はこの程度で十分だと思ってるだけ」

「ハッ、自分の実力も理解できてない訳か。歴代最高とやらは嘘っ八だったようだな」

「何ですって！？」

らしくない、らしくないよ零夢。零夢ほどの実力者がルーミアの実

力を測り間違えるなんてことはあり得ないし、何時も手加減なんてしないのに、この程度で十分だなんて考え方をするなんてどうかしてる。妖怪と僕相手には決して容赦するような優しい心を持ち合わせてないのにそんなの間違ってるよ。

（私も同感よ。音に聞こえた博麗の巫女の実力はこんなモノじゃないはず）

（じゃあ何か特別な事情でも？）

（何時も一緒にいる貴方が知らないのに、私が知っているわけ無いじゃない）

あーでもないこーでもないとパチュリーと念話で話している最中にも、目の前では零夢と妹紅の激しい言い争いが続いている。でも思い出して欲しい。いくら手を抜かれていても今は戦闘中であって、ルーミアは師匠クラスの化物である。少しでも気を抜けばどうなるかを。

「！　白髪、伏せ！！」

「うおッ！？」

さっきまで妹紅の頭があった場所に漆黒の槍が通過していった。咄嗟に零夢が注意をしたので大事には至らなかったが伏せる際に靡いた髪の毛がごっそりと持っていかれ、綺麗な白髪が宙を舞う。あれ

だけの実力があれば当てることも出来ただろうに。視線をやると表情からは笑みが消えている。遊びは終わりといったところか。

「遊びはお終いよ、小娘共。死ぬか逃げるか選ばせてあげる。私の狙いは御主人様だけだから」

「寝言は寝て言え。弟分を狙うって言うのに黙っている姉貴分がいるか」

「別に良いけど。でもそっちの巫女は足を引っ張った末に確実に死ぬわよ。とある事情から全力が出せない身体になったのだから」

「!?」

「ルーミア、何か知ってるの?」

「むしろ御主人様が知らない方がおかしいと私は思うのだけどね。知らないのなら話してあげても「黙ってろこの糞妖怪!!」　あら、野蛮ね」

何を思ったのか、激高した零夢がルーミアに突っ込んで行った。おい馬鹿よせ!　と妹紅が声を張り上げるも、それを無視した零夢はルーミア目掛けて拳を振りぬく。だがルーミア曰く、全力を出せない零夢がルーミアに敵う訳もなく、抵抗虚しく身体を闇によって拘束されてしまった。

「ふふ、綺麗な顔ね。御主人様が夢中になるのが解るわ。嫉妬しち

ゃいそう。貴方を殺せば、御主人様は私を見てくれるのかしら？
ねえ、貴方はどう思う？」

「この…っ！」

四肢を拘束した零夢の顔に、細長い指をゆっくりと這わせていく。
額から鼻、唇を伝ったその指はやがて首へと至る。今なら直ぐにでも殺せるわ。その呟きが耳に入った瞬間、身体中に迸る魔力を纏わせ、我を忘れて跳びかかる体勢にまで入っていた。

「…大和、お前まで感情的に動くなよ」

「解ってるさ…ッ！」

（……）

咄嗟に動き出しそうになった僕は妹紅によって制止させられた。

ああ、解ってるさ。ここで僕が勝手に動いてもどうにもならないことぐらい。でもね妹紅、解っていても出来ないことってあるんだよ…！！

「私と御主人様が初めて会ったのは大結界構築の時だったわよね」

今すぐ動く、そう心に決め動き出そうとした出鼻を挫かれる形で会

話に引きずり込まれた。相手にこの場を支配されているな。零夢が捉えられているというのに、まだ冷静な思考を巡らせる自分に少し苛立つ。

「君があのルーミアちゃんだなんて思ってもみなかった。過去に戻れるなら自分に言っておきたいよ」

「時既に遅し、よ。私達が闘っていたあの時、博麗神社ではもう一つの出来事があったのを知っているかしら？」

「…？　何があt「聞かないで！！」　零夢…？」

「少し黙りなさい」

口を塞がれた零夢は必死に何かを僕に訴えてくるが、声なき声を上げる零夢が何を言いたいのか理解することは出来なかった。

「あの時この子は死ぬ予定だった。霊力の枯渇によって」

「…知ってる。だけどそれは母さんがどうにか止めたって聞いた」

「その後は？」

「え？」

「助かったから気付かなかったの？　死にかけた理由と、その後の後遺症を」

（普通、死ぬ寸前まで力を抜かれた場合はもう元通りになることはない。水源がなくなれば水を得られないのと同じように）

じゃあ零夢はその水源がなくなったって言うことなのか？　でも零夢からは今まで通りに霊力を感じ取ることが出来る。２人の言ってることが真実だとしたら、もう零夢からは霊力が感じられないはずなのに。

（一つだけ方法があるわ。それは…）

「命という燃料を燃やすこと」

「なんだって！？」

驚愕の事実に驚きが隠せない。驚いて零夢を見るも、俯いて静かに目を瞑っていて僕を見ようとはしない。その様子から感じ取れるのは肯定の意。じゃあ本当に、零夢は命を削って？　でも、どうしてそこまで…？　わからない、零夢が何を考えているのか僕には全然解らないよ。

「今も残り少ない燃料を使って平時の霊力を保っているだけ。戦闘なんかしたら直ぐに空になるわ。特に私みたいな高位の妖怪相手だとね」

…解らないことだらけだけど、一つだけ解った。もう零夢を闘わせることは出来ないということだ。だからさ、

「妹紅ォ！！」

「任せな！！」

正面を妹紅に任せて僕は加速、背後に回る。悪いけど、死なない妹紅には少し無茶をして貰うしか零夢を助けるすべはない。2対1のアドバンテージを持っていたとしても、一つ上の世界にいるルーミア相手には何の意味も為さないのだから。

背後に回った僕をその双眸はしっかりと捉えていた。背中にゾッとする寒気が走る。ふざけた奴め、能力を使って全力で『先』　に動いているのに全く意味を為さないなんて。師匠クラスの化物め、怖気が走る。

だけど無茶をするのが僕になっただけのこと。なら少しのダメージはやせ我慢でどうにかして、妹紅に零夢を助け出してもらおうと思った瞬間に零夢の拘束が解かれた。

――――最後の挨拶でもしてきなさい――――

小さく聞こえてきたその言葉は幻聴だったかもしれない。でも冷笑を浮かべるルーミアは確かに僕にそう言っていた。

「妹紅、少しだけ時間を稼いで！！」

「時間稼ぎ？　ハッ、私が一人で倒しといてやるよ！！」

頼もしい姉貴分だ。妹紅なら本当に倒してしまう気がする。でもたぶんそれは無理だろう。妹紅と輝夜が同じくらいの強さなら、それはルーミアより弱いことの証明になるから。

俯いたままの零夢を抱え、僕は妹紅に背を向けて飛んだ。少しでも遠くに逃げて零夢の安全を確保しなければならない。尚且つ妹紅の為にも急いで戻らないといけない。

「降ろして」

全力で空を駆けている最中に零夢が何か言ったような気がした。消えるような小さい声だったせいか、はっきりと聞きとることが出来なかった僕は何も気付かないフリをして空を飛び続けることにした。

「降ろせって言ってんでしょうが！！」

「降ろせるわけないだろうが！！」

空を飛んだままの僕の襟首を掴んで激高する零夢に、僕も零夢の襟首を掴み上げて怒鳴り散らした。降ろせ？　ふざけんな！　死にか

けてる人間を戦場に向かわせられるわけないじゃないか！！

「私はまだ闘える！　死ぬまで巫女を続けるって自分に誓ったのよ！！　それが私の、博麗零夢としての誇りなのよ！！」

「だからそれで死んでもいいって？　ふざけるのも大概にしろよ小娘…！　２０も生きていないお前が生意気言ってんじゃない！！もっと自分を大事にしろよ！！」

「あんたがそれを言う！？　一人で先走ったあんたが！？　何も知らない癖に…私がどういう想いで今ここに居るかも知らない癖に！！」

「お前だって…零夢も僕がどうして一人で闘いに行ったか知らないじゃないか！！」

――――何で解ってくれないんだ――――

――――どうして解ってくれないのよ――――

宙に浮いたままお互いがお互いの主張のみ言い、決して譲ろうとしない。それは２人が相手を本心から想っているからこそ。ただ傷ついて欲しくない、危険な目にあって欲しくない。お互いの胸には同じ想いが渦巻いていたが、それを口にすることが出来ないでいた。

「早く戻るわよ。あの白髪だって一人で勝てるわけないんだから」

話は平行線のまま続いている。こうしている間にも妹紅は闘ってくれているっていうのに、僕らはいったい何をしているんだ。どうにかして、どうにかして零夢に解って貰うしかない。

「知り合いなんでしょう？　私も行けば少しは勝率は上がるはずよ」

だから僕は恥の一切を捨て、己の気持ちを全て伝えることにした。それでしか零夢を納得させられないと思ったから。

「行くわｙ「零夢に傷ついて欲しくない。お願いだよ零夢、お願いだから大人しく待っていて」　あんた、まだそんなことを…！　いい加減にして！　私は「あの時の答え！！」　…何よ」

「零夢があの夜に僕に言った質問に今だからこそ答えるよ」

一郎さんを花嫁のもとまで連れて行った時の、あの夜の答えを。心が示す方向に歩いて行くとあの時決めた。だからこそ、

「零夢言ったよね。私が結婚するって言ったらどうするって。はっきり言ってあげるよ。――嫌だね」

「なっ！？　い、今はそんなこと言ってる場合じゃないでしょ！？」

「ああそうさ、こんな時だからはっきりともう一度言ってやる。お前が誰かと一緒になるなんて嫌だね！」

「う、うっさい黙れ！　第一…、第一私はあんたのことなんて大っ嫌いなのよ！」

「ああ僕だって零夢が大っ嫌いさ！　でも気に喰わないものは気に喰わない！　つまりずっと一人身でいろって言ってるんだよ！！」

「それが年頃の女に言うセリフ！？」

「何度だって言ってやるさ！　零夢が諦めるまで何度でも！」

そうしたら何度でも会いに行けるじゃないか。

息苦しい。顔面が真っ赤なのが自分でもはっきり解った。正面にいる零夢も顔を真っ赤にして口をぱくぱくして何も言えずにいる。…ああ畜生、直接言葉にしたわけじゃないけど言っちゃったよ。後悔先に立たずとは言うけどこれは酷い。穴掘って潜りたいよ…。

「…あー、だから零夢には無茶して欲しくないっていうか、なんというか」

「ふふ…あはははは、あっはははは！」

「なぁ!?　笑うなよ!!」

「クスクス、ごめ、ごめんなさい。でもまさかあんたが、ねぇ。へー、そうなんだ。ふーん」

こ、この性悪巫女め…。にやにやと勝ち誇ったかのような笑みを浮かべながら僕の顔を覗きこむ零夢が長い生涯の中で憎たらしい…！
殴ってやろうか!?

「ねぇ、何時から?」

「五月蠅い」

「いいじゃない。教えなさいよ」

「喧しい」

「私は別になんとも思ってないけど、そこんとこどうなのよ?」

「…もう勘弁してください」

頬をつつくな、頬を。

「そんなことより解って貰えたのなら下がっていて欲しい。零夢が傷つく姿を見たくない」

「勘違いしてるみたいだから言っておくけど、別に今すぐ死ぬわけじゃないのよ？　全力の夢想封印もあと5発は放てるし。だから足手纏いになるわけじゃないわ」

「僕の気持ちの問題だよ。零夢が死ぬ夢を僕は視たんだ。だから嫌なんだよ。零夢はここで死ぬべきじゃない」

「死に場所なんて今までにもあったわ。誰かさんの親切のおかげで生きながらえたけど。それに、あんたは私がいないと駄目じゃないの。忘れた？　私の隣に、あんたの隣に立っていいのは私だけなのよ？」

そう言って笑う零夢はとても可愛くて、行く手を阻むものは全てなぎ倒す自信に満ちた強さを秘めていた。ああクソッタレ、本当にどうしようもない奴だ。僕も零夢も。これが惚れた弱みって言うのなら、僕はそれを恨むよ。

「…わかった。でも無茶だけはしないでよ。ってそうだ、僕ら連携なんてしたことないじゃないか…。どうしよう、これじゃあ今までと全く同じじゃないか…」

今まで連携なんて皆無だった僕らの妖怪退治。何時も一緒に妖怪退治を行ってきたけど、いつも互いの足を引っ張りながら闘ってきた。時には妖怪をほったらかしにして喧嘩するなんてこともあったぐらいだから、一緒に協力するなんて考えたこともなかった。

「仕方ないわねぇ…。大和の勇気に免じて、今回だけ私があんたに合わせてあげる。後を気にせずに闘いなさい」

「…信じていい？　後から撃つとか止めてよ？」

「さ、行くわよ」

「ちょ！？　零夢さん！？」

そこは否定して欲しかったです。

～オマケ　隙間で覗き見する人達の反応～

レミリアの場合

「…よし、あの巫女を消そう。それがいい」

輝夜の場合

「ねぇ永琳、私と巫女の違いって何かしら？」

「大和に聞くのが一番ね」

「そう…。久しぶりに私も身体を動かしたくなってきたわ。次の修行には私も付き合うわ」

「あらあら、それじゃあ弟子が死んでしまうわ」

義母の場合

「巫女はこの際放っておこう。だが愚息、テメェは駄目だ。母さんが許さん」

僕は心からそう思うよ（後書き）

夏だなぁ（挨拶）　熱さで頭をやられたじらいです。Q．どうしてこうなった？　A．夏だから。あ、でも直接言葉にしたわけじゃないからセーフですよ。セーフセーフ。

色々カミングアウトした大和ですが、次回からは大和無双が始まるかも。大和の最終奥義（迫真）的なものを遂に出す時が来た…！
ヒントは北痘神げんこつ。社有者～！！

とある外科医のタイムスリップなるものが終わってしまい、日曜夜の楽しみが無くなってしまいました。だから事故しても治らなかったのだ…

強者の条件

「あー、くそ。勝てねえ」

大和からコイツの相手を任されてから数分、珍しく弱音を吐く。輝夜なんて比じゃない強さを誇る化物相手に粘って粘って粘り続けてきたけど、流石にもう妖力が残り少ない。私らしくもなく、早く戻って助けろなんて思ってしまう。

「貴方も損な人ね、勝てる訳ないのに時間稼ぎのためだけに残るなんて。ほら、もう解ったでしょう？　諦めてそこを退きなさい」

「残念ながら、どっかの誰かさんと同じように諦めが悪いんでね。もう少しだけ粘らせてもらおうか」

「はぁ…、殺しても死なないって本当に面倒」

「そう言わずに付き合ってくれよ」

とは言ったものの流石に手強い。だが太刀打ち出来ないほどじゃあないことも確かだ。一度だけ腕を？がれたけど、ただそれだけ。その程度の傷なら、蓬莱人である私は瞬きする間に修復されるから問題はない。ただ修復に私の妖力を使うという点が逆に私を追い詰めているのだが、それは仕方のないこと。その他にも炎を出し過ぎたせいか、もう後がなくなって久しい所だ。

「そろそろ本気で行こうかしら。何時までも此処で時間を取られるわけにはいかないし…」

「そいつは頼もしいね」

ここまで私を追い詰めておきながら尚余裕の態度を崩さないとはね。でも貧乏くじを引いた、とは思わない。少し強がるのと同時に残った妖力で炎を纏う。こちとら今までの攻防で既にお前の弱点は把握しているんだ、此処で一度痛い目を味あわせてやらないと気が済まない。

「粉々に吹き飛ばせば復活に時間がかかるでしょう？」

「っふざけやがって、避ける隙間もねえじゃねえか！？」

千か万か、それともそれ以上の槍が視界を埋め尽くす。それはもはや弾幕ではなく一枚の壁。一つ一つに妖力が込められた槍は、その一つが鈍い光沢を放ち、敵を射殺す命令を待っている。それが目の届く範囲、すなわち視界全体を覆っているのだ。上下左右共に逃げ場はない。

「どうせ避けられないんだ。…だったら全力でいってやる！　『フェニックス再誕！！』　」

残った妖力の全てを込め、今出来る最上級の妖術を放つ。伝説の不死鳥、火の鳥を再現したそれは私の持つ中で最大の熱量と破壊力を兼ね備えた正しく奥義と呼べるもの。

「ど真ん中を突っ切る！！」

「ねぇ永琳、大和と妹紅の闘いを見て少し思ったことがあるんだけど」

「何かしら？」

「あの妖怪に弱点なんかあるの？」

「在るわよ」

むしろ弱点の無い者など存在しない。それが精神面か肉体面かの差があるだけだ。もちろん他人に完璧と言わしめていた私にも弱点は存在する。ただ私達クラスになるとそれを隠すのが非常に上手くなるため、弱点が無いように見えるだけ。

「そうなの？　強大な妖力に豊富な手数を以て圧倒してくるあの妖怪に？」

「在る。それも致命的とまで言えるものよ」

確かに存在する。だが、おそらく今の博麗の巫女では彼女は倒せまい。あの場所で彼女を倒しきることが出来る者がいるとすれば、我が不肖の弟子である大和だけだろう。

「大和は一度だけだけど彼女に肉薄することに成功したわ。御世辞にも賢い方法だったなんては言えないけれど。その時、彼女は決定的なミスを犯した。それは私達なら何の動揺もなく冷静に対処できる程度のこと」

「これがどういう意味か解るか？　フランドール」

「ん～。お父様なら対処出来て、尚且つヤマトを殴り返せたってこと？」

「その通りだ。ではレミリア、何故あの妖怪はそうしなかった？」

お父様なら完全に対処出来ていた…。でもあの妖怪は何か慌てたように全方位に咄嗟に迎撃用の攻撃を放った。そこから何が導き出せるか？　それは、

「接近戦が苦手だから、ですか？」

「正解だ。あの妖怪は接近戦を非常に嫌っている。最初こそ肩を貫かれもしたが、そもそもあれはあいつの注意不足だ。参考程度にしかならん」

「じゃ、じゃああの剣を出したのは…？」

「ブラフだ。初めに剣という接近戦用の武器を相手に見せ、接近戦の心得があることを示そうとしたのだろう。レミリア、よく覚えておくがいい。闘いとは、何も武力を以て行うだけではないのだ」

「じゃあ大和があのルーミアとか言う妖怪に勝てる可能性はあるのね？」

「十二分にあるわ。それだけのことを教えてきたし、それ並み以上の経験も積んでいる。それに輝夜、如何に貴方と云えど、もう大和相手に超高速下での接近戦で勝ちを拾うのは難しいわ。あの子はもうその領域にまで成長している。あとは…」

「大和がそれに気が付いているか、ね…」

多くのことを教えてきた。だから、今の大和なら…

「じゃあ私が後衛、大和が前衛でいいのね？」

「うん、それしかないと思う。零夢も接近戦出来るだろうけど、どちらかと言えば後から御札や霊弾を撃つ方が得意だよね？　それに零夢の援護があれば僕も安心して闘える」

ルーミアの弱点は付かず離れずの接近戦。それが僕の結論だ。

あの時、師匠なら間違いなく僕を投げ飛ばしたはず。アルフォードはその暴力的な魔力を用いて殴り返すだろうし、美鈴も迷いなく撃ち返すだろう。僕よりも強い人達は必ずそうする。だけどルーミアはしなかった。いや、不利な距離まで詰められ、焦らされたために出来なかったのだ。これさえもブラフならどうするのか、と考えないでもない。だけど僕には心強い仲間がいる。

隣を飛ぶ巫女、博麗零夢。彼女となら何でも出来ると思える。一度負けたというのに、自然と負ける気はしない。能天気なのか、それとも零夢が緊張していないからか。とにかく隣に彼女が居るというだけで僕は強く成れた気がしている。

「…何見てんのよ」

「いや、僕も単純だと思って」

「今更？　…まあいいわ。大和、これが終わったら決着を付けましょうか」

「…？　何の？」

「…はぁ、これだから鈍ちんは困るのよ。そんなの決まってるでしょ。私達の関係に、よ」

な、何を言っているのか僕には理解…できます、はい。だからそんなに睨まないでよ。

「と、とにかくまずは目先のことに集中しよう！」

…顔がニヤけるのを止められない。

「だがなレミリア、己の弱点をそのままにしておくのは3流のすることだ。俺たちのような強者、即ち誇り高い者たちはそれを克服し、総じて奥の手と言うモノを隠しているものだ。それを一般に奥義などと言ったりすることもある。紅、お前ならあの妖怪の奥の手は何だと思う？」

「そうですね…。接近戦に弱いのなら、接近されても大丈夫なように対策をするのが普通です。それが返し技なのか、防御に徹する技なのかの判別は付きませんが」

「だろうな。俺もその可能性を考える。だがあの小僧がそこまで考えているとはどうも思えんのだ」

「「「あ～、解る気がする」」」

広範囲に渡って槍を展開していたせいか、やはり一点集中を狙った攻撃には弱い。全ての槍を私の炎がいとも簡単に飲み込み囲いを突破し、私は宵闇の妖怪に迫ることが出来た。既に大半の力を失った私が、まさか囲いを突破出来るとは思っていなかったのだろう。目の前には驚愕に満ちた表情を浮かべた間抜けの顔がある。残念、もう防御は間に合わないぜ！　その顔目掛けて思いっきり右腕を振りぬいた。

手応えあり！

鈍い音とともに右腕に手応えを感じた。確かに右手は当たっていた。ただ、あと数ミリで頬と言う所で影から伸びた障壁のような物に阻まれた。さほど厚いとは思えない障壁だが時間を多く掛けて作られたのだろう、今の私には破れる気が全くしなかった。

「自身の影から伸びる自動防御。私の意識の範囲外の物を感知し、それらを完璧に防ぐ。最後の砦にふさわしいように、込めている妖力もそれなり以上のものよ。並大抵の攻撃じゃあ私に傷一つ付けることも出来ないわよ？」

阻まれた右腕を掴まれ、自慢げに宣言してくる馬鹿を嘲笑ってやる。大馬鹿だなお前は。自分の奥の手をさらけ出すなんて、よっぽど自

分に自信がある馬鹿以外には出来ないことだ。それと二つ目のミスだ。なぜなら既に、

「妹紅を、放せーーーーーーーーーーー！！」

2人はこの光景を見ていぶるぅぁあ！？

「妹紅大丈夫？　怪我してない？　死んでないよね？」

「こ、このクソ大和！　助けだす相手に蹴り入れて助ける奴がどこにいる！？」

「えっと、僕と零夢」

「私はそんな野蛮じゃないわ。一緒にしないで」

「え！？」

「どうでもいいんだよそんなことは！　…ああもう、覚えとけよ！それと今の見てたんだろ？　行けるよな？　行けないんだったら私が強制的に逝かせてやるから覚悟しろよ」

「大丈夫、行けるさ。だから妹紅は後で見ててよ」

…へぇ、いい顔するようになったじゃないか。中々にいい男だよ、今のお前は。

「そうさせてもらうさ。流石に疲れた…」

ああ、見させてもらうぞ大和。お前がどれだけ強くなったのかをな。

強者の条件（後書き）

とりあえず早く投稿をと頑張ったじらいです。褒めて貰えると大変喜びます。そして零夢と大和の初めての共同作業だと思った方、すいません。まずはルーミアの弱点バラシをすることにしました。

今回、せっかく隙間で皆さん見ているのだから場面を変えていきたいなぁ、と思ったので場面が飛び飛びしてしまいました。とりあえず行を少し多めに空けることで読みにくさを無くそうと思ったのですが、それでも読みにくいのなら言って下さい。もっと空けます。むしろ止めろと言われた場合には…熟考です。

最近、サブタイについて悩んでます。ポンと浮かぶのは中二ばかり。それ以外なら大和に何か言わせるかくらいで、どうにもなりません。

決着・上（前書き）

製作時間・約一日。今日暇でよかった…

決着・上

「さあ始めよう、御主人様。私と貴方たち、勝つのはどちらか一方。貴方をこの身に取り込み、私は更に強大になる」

「負けられない。今までだってそう、僕は何時も自分より強い人たちと闘い、そして勝ってきた。今日、それがまた一つ増える」

「私は何時も通りに妖怪を懲らしめるだけ。博麗の名の懸けて、あんたを倒す」

三者三様に力を滾らせていく。魔力、妖力、そして霊力。各々の力の種類は違えど、その場に充満していく力によって大地が鈍い音を立てて震えだす。この場に常人がいれば気を失うだろう、妖怪なら場を占める力によって消滅するだろう。それ程までに強大な力が渦巻いている。

一瞬、それぞれの身体から爆発的に出されていた力の放出が止まり、大地の震えが止まる。次の瞬間には三者がその場から完全に消え去っていた。

右から聞こえる爆発音。それを察知し右に顔を向ければ、すぐさま左から爆音が聞こえる。更に後方、上、下。3人はその場から消えたのではない。もはや達人以外の者には影すら映らぬスピードで空を駆け、己の倒すべき存在へと力を振っているのだ。

（突撃する！　零夢、援護を！！）

（任せなさい！）

言葉を交わすのではない。目で語り合うことも必要としない。ただ零夢は大和の背中がそう言っていることを理解し、それをなさせる為に動く。何時も真横でお互いを感じ合ってきた2人には、お互いが何を欲しているのかが手に取るように解っていた。故に、共闘するために一番厄介な意思疎通のタイムラグと言うモノはこの2人には存在しない。

「吶喊！」

触れれば大理石の柱でもバターのように切れる魔力糸を前方に向けて乱雑に放つ。魔力タンクと化した魔女を内包する今の大和の魔力糸なら、いかな妖怪とはいえ当たればダメージは必死。だがルーミアも然る者、それらを闇から創りだした槍で全てを撃ち落とし、迫る大和の迎撃に移る。

その隙間を縫うように飛ぶのは博麗の文字が刻まれた札。突きを放つために振りかぶった腕、その脇の下。僅かに捻られた首を掠るようにして放たれる、一つ喰らえば鬼でも怯む威力が込められた御札がまるで引き寄せられるかのように逃げるルーミアを追尾する。舌打をちしながら回避運動をとる。その対処にルーミアが追われる中、遂に大和が肉薄に成功する。

「なッ！？　デコイ！？」

左手に逆手に構えた短剣を突き刺すも、最初からそこに居なかったかのように闇に消えるルーミアの影。己の十八番である幻術もどきで攻撃を凌がれた大和に瞬きよりも短い隙が生じる。

「百万の影槍」

大和の頭上に回避していたルーミアから、その名の通り数えるのも愚かな程の影槍が射出された。ここしかないと言える完璧なタイミング。隙間で覗いている誰もが串刺しにされる大和を幻視しただろう。彼女がいなければ。

「二重結界」

大和の頭上に展開されるは博麗の十八番である結界術。歴代最高と謳われる彼女の結界は影槍の一本も通すことなく大和を守りきる。その光景を見て考えを改めたのだろう、大和よりも零夢に向かって多くの棘を放つルーミア。だが巫女はそれを見ても動揺することはない。彼女が大和を守るように、彼も零夢を守るからだ。

それを同数の、それと全く同じ漆黒の棘がそれを撃ち落とし、相殺させたものがある。

「流石に何度もみさせてもらったからね、模倣するのも楽だったよ」

今までとは一転し、ルーミアと大和の影槍の撃ち合いが始まる。あらゆる角度から迫る圧倒的質量の影槍に対し、それと同数の模倣した影槍、即ち有幻覚によって創られた槍との撃ち合い。全て後手で放っている大和だが、それでも均衡を保っていられるには大きな要因があった。

（たかだか一妖怪が、生粋の魔法使いである私に演算で勝てると思わないことね！）

瞬時にルーミアの技を解析し、それを有幻覚で模倣することが出来たのは七曜の魔法使いパチュリー・ノーリッジの存在があればこそ。有幻覚にとって一番重要なものはイメージだ。だがイメージだけで扱えるほど魔法は単純なものではない。

（魔力にも妖力にも、何かを起こすには必ず構成術式がある。その大まかな部分は大和が感じ取ってイメージにする。私はそれを更に複雑かつ綻びのない魔法構成まで昇華させる。ただそれだけの単純作業）

彼女はこう言うが、言うは易しというものだ。大和の知り合いの中にも戦闘中に敵の攻撃を分析するのならまだしも、そこから新たな魔法を構成できる者など彼女だけだろう。

（操影術の魔道書を読んでいて良かった。そうじゃないとこうも簡単にイメージなんて出来なかっただろうし）

（貴方がこれほどに操影術を理解していることに驚きなのだけどね。よくここまで魔道書を読み込んだわ）

そう、闘いはあの時から既に始まっていたのだ。真正面から闘って勝てる敵など、大和の経験では数少ない。常に自分よりも強い相手を闘ってきた大和には格上に対する対処法と言うモノが、自身の経験と師たちの辛く長い修行によって骨の髄まで染み込まれていた。

「あんた、接近戦が苦手なんだって？」

「ック！」

大和がルーミアを引きつけている内に、お祓い棒に膨大な霊力を徹した零夢が迫る。それを見たルーミアは大和との撃ち合いを切り上げ、お祓い棒を振り上げる零夢に備える。

「消えた！？　また幻覚による子供騙し、後ねッ！！」

「残念、そっちが幻術だよ」

「私は真正面よ、馬鹿妖怪」

「なあッ！？」

二重幻術。零夢を周囲に溶け込ませ、ルーミアの視界から消す。始めに迫る零夢を、僕が散々見せてきた幻術による幻だと思わせるために、実際に幻術で出来た零夢を背後に創り出す。結果として本物が目の前にいると言うのに、それを感じさせることなく騙すことに成功した。これが幻術の真骨頂。これが魔法使い、伊吹大和の本質。

「くたばれ！！」

「でも、その程度じゃ私には届かない！」

「そんなの解ってるわよ！　大和！！」

振り降ろされたお祓い棒が自動展開された障壁とぶつかり合い火花を散らす。そのまま押し切ろうとする零夢、揺るがない障壁に微笑を浮かべるルーミア。そのルーミアの余裕を打ち崩すのもまた、武人・伊吹大和である。

「数え抜き手！　四！！」

最高の師によって鍛え上げられた肉体に気を纏い、親指を覗く４本の指で障壁を突く。

「三！　二ぃっ！！」

小指、薬指と数を減らしていく技を数え抜き手と言う。師父によって伝承された、対障壁用の秘義の一つ。単純に数を減らして単純に突くのではなく、一度一度に特殊な力の練りを加え、変化することで最終的にはどんな障壁をも貫く脅威の技。

「一ぃッ！！」

最後に人差し指一本で放たれた抜き手はルーミアの障壁を完全に貫いた。ガラスが砕けるような音と共に障壁は砕け散った。最後の砦である障壁を無くし全くの無防備な姿を晒す彼女に、大和は全身の気を拳に載せた一撃を放つ。

「雷声　砕月！！」

嘗て自身の妹に向けて放った奥の手の一、太極拳の秘法『雷声』。特殊な呼吸法によって横隔膜を振動させ、己を一つの弾丸の如くさせ、そこから放たれる最高の突き。あの頃とは比べ物にならない気と錬度を以て放たれた一撃は、ギリギリのタイミングで腕で防御出来たルーミアを、それでも遙か彼方へと吹き飛ばす。

寸での所で防御が間に合ったが、確実にダメージを負ったルーミアに対しトドメを刺さんとする零夢の周囲に、極大の霊弾が浮かび上がる。全てを浄化する博麗の奥義が今、放たれようとしている。

「これで決まりよ…夢想封いッ…！　ゲホッゲホッツ！？」

「零夢！？」

後一歩、後一撃と言った所まで僕らはルーミアを追い詰めた。だがそこで零夢が突然血を拭いて空から降下していくではないか。

――――命を燃料として

まさか、限界なのか？　ルーミアが言っていた言葉が頭を過った。どうする？　ルーミアを倒す為には無茶をするしかない。とてもじゃないが僕一人では勝てｓ…何を考えているんだ僕は！？　今、僕は零夢と勝負を天秤に懸けたのか！？　零夢は僕にそう言ったけど、いざとなれば僕は零夢を何よりも優先すると決めていたのに！

効率よく敵を倒す。そのために戦闘時には非情にならなければならない時もある。２人の師の教えだけど、今はそう育てられた自分が厭らしく、腹立たしく感じた。だからここまで。下で僕らを見上げている妹紅に零夢を預けて、ここからは僕一人でやる。そう決めて零夢の下へと行こうとした時だった。

「まだよ！　まだ私は闘える！！」

「む、無茶言うな！　そんな身体で何を…！」

「前を向きなさい！　もう一度仕掛けるわよ！！」

「～～～～ッ！」

血反吐を吐きながらも吠えるように声を張り上げる零夢。私を足手纏いにしないで！　零夢の釣り上がった目からはそう強く訴えているように感じた。博麗の巫女として一緒に闘ってもらうか、零夢として大人しく引き下がってもらうか。握った拳から血が滴り落ちる程に悩んだ挙句、僕は最後まで博麗の巫女としていようとした零夢を選んだ。

「…やってくれたね、御主人様。ここまでコケにされたのは初めてよ。でもそれも終わりのようね。彼女はもう限界よ。御主人様だけは私に勝てない」

「…ざけんな。ふざけんじゃないわよ！」

自分に限界が近いことを悟っているのだろうか。後方から札を放つという時間の掛ることは考えず、零夢は『ういた』。ルーミアから放たれる影槍は全て零夢を通り抜ける。こうなった零夢は、もう誰も止めることは出来ない。僕達からは触れることすら出来ない。だというのに零夢からは思い通りに攻撃を仕掛けられる。博麗の秘奥・夢想天生。今の零夢を止められる者は幻想郷にもいないだろう。

為す術もなく有効打を与えられていくルーミア。再構築したであろう自動障壁は展開こそされているが、全ての事象から浮いている零

夢に対してはその意味を全く為していない。拳や蹴りは全てルーミアに吸い込まれていく。

だが、その振われる拳にもだんだんと力が失われていく。身体を覆っていた霊力も力なく消え去っていく。気付けば、零夢はもう空を飛んでいることが限界の状態にまでなっていた。

「…気は済んだ？」

「ハァ…ハァ…。ま、まだ…」

「御主人様、この巫女を退けて頂戴。私は花の妖怪とは違って虐めるのは好きじゃない」

「…零夢」

もういい、もういいんだ。一人で飛ぶことすら侭ならない零夢の肩を抱いて地面に降りる。

「ごめん妹紅。零夢を頼む」

「…お前、死ぬつもりか？」

「まさか。まだ答えを貰ってないのに死ねるわけないじゃないか」

死ねるわけない。人生で初めて好きになった相手から、何の解答も

無しに死ねるわけないじゃないか。

「ああ、クソッタレ。こんなことにならない様にあれから鍛えて来たってのに。またお前に全部預ける形になっちまったじゃねえか」

「はは、じゃあそれは次の機会に」

「馬鹿野郎、こんなのは二度とごめんだ」

肩で息をする零夢を妹紅に預け、再び空を目指す。その前に零夢に声を掛けられた。柄じゃないけど、流石に今回は神様にでも願いたい気分だ。でもそんなに都合のいい神様なんて幻想郷を探してもいない。だから僕の女神様にでも肖ろう。…柄じゃないなぁ。

「行って来るね」

「…行ってらっしゃい」

まるで夕飯の買い物にでも行くかのような簡素な言葉を交わして、僕は再び空を目指した。

◇◆◇◆◇◆◇

「ごめん、待たせたね」

「ホントに。挨拶は済ませておきなさいって言ったじゃない」

ごめんごめん。でも良く待ってくれたと思うよ。普通なら攻撃されても仕方ないんだけど。

「始めから言ってるでしょう？　御主人様だけが狙いだって」

「…それに、本当は勝っても負けてもどっちでもよかった？」

普通、あれだけ自分の弱点を出す格上の人なんていない。更には自動障壁だなんて最後の奥の手までわざわざ僕の目の前で見せてきた。達人ではありえない失態。何か別の思惑でもあると考える方が普通だ。

「やはり貴方こそ私の御主人様に相応しい…。私の、私だけの主様。でもまだ足りない…私より弱い人を私は認めることが出来ない！」

「何を言ってるか知らないけど、君を倒すことに異論はない！」

今までも本気だったのだろう。しかし、零夢に向いていた槍も僕に向かって来る。数の暴力、激流の川の水の如く飛来する闇の棘。

僕はその中にひっそりと佇む岩となる。岩が畏れるか？　岩が考えるか？　否。岩はただ前からくる流れを、後へ流すのみ。

「流水制空圏」

制空圏を薄皮一枚まで絞り込んで攻撃を察知し、回避する。

（何時まで続きそう？）

（話掛けないで！　始めから限界…ッ！）

一見完璧に見えるこの技。確かに師父である武天が使えば完璧に使いこなすのだと思う。でも師父は僕に必要最低限のことしか教えてくれなかった。そこからは僕自身の技に昇華しろと。

「だからって、こんな不完全な技じゃ…！」

しだいに掠る棘の数が多くなってくる。このでは串刺しになるのは時間の問題だ。

（アレしかない…。師匠と再会した時に一度だけ出来たあの状態をもう一度…！）

炎を生み出し、一度巨大な爆発を起こして距離を取る。

「右手に気、左手に魔力…ッ！」

流水制空圏を纏った状態での気と魔力の融合。だがルーミアはもう待ってくれない。次々と飛来してくる槍に思考を乱され、思う様に発動できない。これさえ発動出来ればあの一撃も十分耐えられるはず。ならば一撃を貰う覚悟を以て発動しようと試みるも、心は素直に飛んで来る槍を恐れてしまう。

「何をするのか知らないが、早くしろ！　長くは持たない！！」

「ナイスだよ妹紅！」

僕の前に妹紅が炎の壁を張ってくれた。僅かな力しか籠められていないからそう長くは持たないだろう。だけどそれで十分だ！

炎壁が破られ、影槍が迫る。僕はそれを素手で掴んだ。

「待たせたね…。これが僕の秘奥、その第一段階だ！！」

気と魔力、相反する力を合成した新たなる力を僕は身に纏った。

決着・上（後書き）

久しぶりに二日続けてのじらいです。頑張った私を褒めてくれてもイイノデスヨ？　しかし全力疾走で書いたために穴だらけ。戦闘描写、ほとんどノリです。その上くどいと言われても仕方ないほどに単調。なんでこんなに難しいんですか戦闘描写！？　誰かタスケテ…。変な所があればご報告を

今回は決着・上。次回は決着・下といったところです。そして大和の奥の手、第一段階発動。と言うことは、第二段階があるわけです。かなりのご都合なので覚悟だけしておいて下さい。では

決着・下（前書き）

EXラスボスラッシュ！！＋aを聞きながら書きました。聞きながら読むと私と同じ気分に成れてもっと入りこめるかもしれません。つまり、熱くなれる曲を聞きながら読んで貰えるといいわけです。

決着・下

――才能なんて、始めから無かった
何時も前を歩く背中に羨望と、ほんの少しの嫉妬を混ぜた視線を送るだけ

それが堪らなく悔しくて、惨めで、だから地を這って泥を被ってでも努力しようと決めて

泣くだけの自分とさよならした

それでやっと追いついたと思ったら、自分の追いかけた背中の遠さに気付かされて

諦め切れなかった、本当は認めたくなかっただけなのかも知れないでも現実は非常で、遙か前を歩む貴方たちのようには成れなくて

それでも何時か、何時の日か必ず、あの人たちの横に立つ　そう決めたから――

「やあぁぁぁぁあ！！」

「うっッらアッ！！」

弾く。槍を弾く。一つ一つに明確な殺意と、必殺に値する妖力が込められた漆黒の槍を受け流していく。迫り来る槍の数は今までの比ではない。本気なのだ、ルーミアも。そして僕も。今までにも多くの槍、棘が確かに飛来して来ていた。だが、ただそれだけだ。雄たけびを上げ、自分を鼓舞する。負けない、負けられない、君には絶対に負けない！　その想いが2人を更なる高みへと誘う。

（八時方向！　数7、いや９０００！　迎撃は間に合わない！！）

「だったら全て弾くまでッ！！」

パチュリーの念話を聞いてからでは到底間に合わない。僕らの闘い

は既にそんな一つ上の次元にまで到達している。そこに他人の踏み込む余地は存在しない。僕とルーミア、たった2人だけの世界で僕は歯を食い縛り、拳を振い続ける。

「でエエぇぇやあッ！！」

「はあああああああああッ！！」

互角、それも全くの。どちらか一方が選択を誤るまでこの状態は継続されるだろう。それは僕か、ルーミアか。だけどそんなの望んでは無い。楽しいんだ。今、僕（わたし）は生きている。生と死の狭間で、互いに好敵手と認められる相手と死闘を繰り広げることで、僕（わたし）は生きているというナマの感触を味わうことが出来ている。脳から溢れだすモノは身体を燃やし、身体は更にソレを求め続けている。もっと上へ、もっと先へ。この先にある勝利をこの手に！！

「パチュリーッ！　グングニルの構成任せる！！」

（ッツ了解！！）

イメージするのはあのいけ好かない男の槍。必殺必中の名を冠された神の槍。一度この身を貫いたあの魔槍。なればこそ、あの槍の神々しさと神をも射殺すその威力をこの手に宿すことさえ出来るはず。

「ぁぁぁあ〝あ〝！　百万の影槍ッツ！！！」

「二度もそんなモノで…、舐めるなァッ！！」

音より速く、光よりも速くも速く空を舞う。両目は光を放ち、全ての『先』　は僕の手の中。その僕に二度目など通用しない！

「早ッ、私が目で追えない！？！？」

「堕ちろォッ！　グングニル！！！」

その名の通り、放たれた神槍は咄嗟に回避行動を取ったルーミアを、それでも右半身を吹き飛ばした。飛び散る血飛沫が闇に満ちた空を紅く染め上げる。それでも僕らは闘いを止めない。どうせこの程度、ルーミアにとっては屁でもない。

「あは、アハハハハッ！！　楽しいね御主人様！　私もう何度もイっちゃったよ！？」

流石は師匠クラスの妖怪。半身を吹き飛ばされたくらいでは怯みもしない。既に吹き飛んだ半身は再生し、五体満足の姿で両腕を大きく広げる仕草を取っている。

「だから御主人様をイかせてあげるねッ！？」

「ッツ、レーヴァテイン！！」

（もう！　無茶言わないでよ！！）

それでも瞬時に構成できるパチュリーはホントに頼りになる。手に持つは燃え盛る炎の大剣。先生の、今ではフランが使う神話の剣。気と魔力の相反する力を籠められた炎剣は、元々炎属性を得意とする僕と、完全に模倣させたパチュリーの構成もあってか。もはやオリジナルを超える程の禍々しさを放っている。

「メシアの抱擁！！」

救世主（メシア）は世界が滅ぶ時に現れ、この世に救いを齎す。そのメシアが世界の破滅を望んでいるとしたら？　破滅こそが救いだと考えていたら？　それを意識したであろうルーミアが放った空間消滅魔法、とでも呼べば良いのだろうか。まるで重力魔法に囚われたかのように、闇に自分と世界が共に押しつぶされていく。

（これ程の手をまだ隠し持っていたって言うの！？　駄目！　その剣でもココは抜け出せない！！）

パチュリーの全魔力と僕の力で以て剣を振っても尚、この空間から抜け出せない。更にパチュリーの魔力も限界が見えてきた。この闘い、まだパチュリーの援護が必要になる。無駄な消費は出来ない。未来から取り寄せるか？　無理だ、時間が足りない。こうなったら

…！

（ッ止めなさい大和！　それは日に一度しか…！）

イクシード、起動。更に三倍の魔力を上乗せにする。ビキビキと身体の組織が無理な魔力行使によって壊れていくのが解る。それでも諦めることなんて出来ない。信じて待ってくれている人の前で、無様に倒れる姿を見せるのは男じゃない！

「こん、のおおぉぉオオオオオオオ！！」

全身を駆け巡る鋭い痛みに大声を上げながら耐え、そのまま上段に構えた剣を振り下ろした。

◇◆◇◆◇◆◇

「永琳！　どうなっているの！？」

「解らないわ…。でも、あの魔道機関は身体への影響を考えると日に一度しか使えない。無理な行使は身体の組織に相当なダメージを与えているはず。不味いわね…」

◇◆◇◆◇◆◇

「小僧、よくも俺の槍を…」

「旦那様、押さえて下さい。御息女様たちが怯えになっております」

「む…。すまん、気をつける」

「で、でもヤマト大丈夫かな…？」

「パチェ？」

「……」

「ッお嬢様！　パチュリー様が！！」

「パチェ！？　しっかりしなさい、パチェ！！」

◇◆◇◆◇◆◇

「あッァ…～ッツ。くそっ、傷が深い…」

「…チェックメイト、御主人様」

「ック！」

膝を着いている僕に対して、こちらも満身創痍のルーミアが剣を僕の首筋に突きたてる。僕もルーミアもボロボロ、自分の魔力はもう空。気は…まだ戦闘出来る程度にはある。でも身体が動かない。一日に二度イクシードを使ったせいか、反動が大きすぎる。

（パチュリー…まだ魔力はある！？）

（……）

返答がない。少し辿ってみると繋がっていたラインが途切れているのが解った。あれだけの大魔法と呼べる物を受け続けていたのに怪我がそれ程負っていないのは、パチュリーが守ってくれたのかもしれない。だから魔力切れを起こしたのか。

それでも万事休す、か。ルーミアも今までの戦闘で消耗が激しいみたいだけど、魔法を使えない僕では全く勝てる気がしない。何か、何か手は無いのか…！？

「楽しかったよ、御主人様…。こんなに楽しかったのは始めてかも。あは、私の初めてまで持っていっちゃったね。…でももうお終い。じゃあね、ばいばい」

振り下ろされる死神の鎌。身体は動かない。妹紅が何かを叫ぶのが聞こえた。

『この…馬鹿息子！！！！！！』

薄皮一枚。刃が首を切り堕とす瞬間、突如響き渡った声によって剣が止まった。

『誰が負けていいと言った!?　何時か母さんより強くなって、わたしを守れるくらい強くなるって豪語したのはどこの馬鹿だ!?伊吹の名に傷をつけるんじゃないよ!!』

どこから現れたのか、僕たちを覆う様に空に浮かぶ無数の隙間。そこからはこの闘いを見ていたのだろう、多くの面々が見てとれる。

『まあ、私としても大和さんが死ぬのは嫌ですねー。だからそんな妖怪、ちゃっちゃと片付けちゃってください』

『こら～大和～！　まだまだ実験に付き合ってもらわないといけないんだぞ！　早く終わらせて山に来いよ～！』

文、にとり。初めて出来た親友。一緒に遊んだあの時と変わらない、気の抜けた声を出す2人に少し苦笑が零れた。

『四季様、大和が死ねばここで働かせるってのはどうです？』

『それもありですね。久しぶりにあの微妙な味のご飯が食べたいと思っていた頃です。ああ、でも死んでも死なないでもまた来なさい。少しお話をしましょう』

『おー怖。災難だなぁ大和』

『…小町、貴方は今からです』

『げえぇっ！？』

心優しく不器用な閻魔と、その閻魔に仕える死神。相も変わらぬ2人の関係に、他の隙間からも笑い声が聞こえてくる。

『ヤマトなら大丈夫！　なんたって紅魔館の執事だからね！！』

『大丈夫ですよ、大和さん。落ち着いて内功を練って下さい。それで少し楽になります』

『ふん、貴様などそうやって地を這っているがいい』

『旦那様、ここは空気をお読み下さい。…執事足る者、如何なる時も完璧であれ。そう教えたはず』

紅魔館の面々。その中にレミリアも居た。真っ直ぐに僕の瞳を見つめてくるレミリアは少し不安げに、しかししっかりと胸を張って立っている。

『後でゆっくり、紅茶でも飲みながら話をしましょ？　その時は皆で貴方の勝利を祝ってあげる』

強く優しい、誇り高い吸血鬼。大陸で出会った実の妹のような子。母親が死ぬ切っ掛けとなった僕の罪を共に背負うと言ったあの時の様に、彼女は淀みなくそう宣言した。まるで運命がそう言っているかのように。

『勝て。私はそう言ったはず。だったら何をすべきか、解らない貴方じゃないでしょう？』

『全く、暇で暇で仕方ないわ。こんな勝敗の解りきった闘いを見る

のは。だから早く終わらせて遊びに来なさいよ』

隙間に背を向け、顔は見えないようにしている2人。だけどその背中だけでも2人の想いは十分に伝わってくる。厳しい言葉に、素っ気ない言葉。これがこの2人なりの激励だ。この人たちの期待に応えたい、そう強く思う。

『地底から勇儀姉さんとその仲間たちだ！　おいこら大和、この馬鹿弟分！！　お前は強い！　私の次には強くなった！　だから負けるな！！　いつか姉貴である私を倒すまで、絶対に負けるんじゃない！！！』

はは、久しぶり姉さん。相変わらず豪快そうで何よりです。母さんから聞いたけど、地底の暮らしはどうですか？　地底と地上は関係を持たないって聞いたけど…型破りの皆のことだ、言っても無駄なんでしょうね。

『強くなったの、大和。じゃがちと惜しい。あと一皮剥ければ辿り着けるやもしれん。私たちの領域に、の？』

大母様に、鬼の皆。一つしかない隙間を取り合う様に次々と顔が移り変わっていく。あの頃と変わった僕。変わらない皆。でも胸に抱く想いはあの時のまま。貴方達の横に、僕は立ちたい！

「お前ってホント解らない奴だよな。見ろよこの光景。大和の為にこんなにも集まってくれたんだぜ？　だったら何すればいいかぐらい解るだろ？」

ああ解るさ妹紅…！　こんなとこで座ってる場合じゃない。僕は…、僕は…！

震える膝に必死に力を込めていく

『さあ立つんだ、私の最高の息子。――――――この光景を見ている者に告げる！　残念なことに、我が息子には才能がない。運命がこの子に味方しなかったのかもしれない！　――それがどうした!?　今、私の息子はこれだけの面々に支えられているではないか！　それは大和が自分の運命に打ち勝ってきた証拠じゃないのか!?　いいか？　運命なんてブチ壊せるものだって、諦めない悪足掻きがどれだけの力を持つか、しっかりその目で見ておけ!!!　そして刻め!!　伊吹大和の、私の息子の勇姿を!!!!!』

「う…がぁぁぁぁぁぁあああああああッツ!!」

「うそ…。もう立てるはずないのに…」

『よし！　偉いぞ大和！！　それでこそ私の息子だ！！』

な、なんとか立ち上がることが出来た。でも身体が動かない。少しでも気を抜けばまた倒れって、うわっ！？　案の定、力の無い足腰では自分を支え切れなかった。

「まったく…。あんたって奴は本当にどうしようもない奴ね。私がいないと何も出来ないんだから」

「…お互い様だろ、零夢」

そんな僕の肩を支えてくれる人がいる。あの日から堅く結ばれた僕たち2人の絆は、誰にだって負けやしない。

「…そうね。だって、もうあんたがいる事が当たり前になっちゃってるんだから」

「夢想封印。最後の特大の一発よ。一分、時間を稼ぎなさい」

嬉しいことを言ってくれるねぇ。男名利に尽きるとはこのことだよ。

「撃てるの？」

「巫女舐めんな。あんたこそ、2秒で倒れたりしたら承知しないわ

よ」

「そっちこそ、魔法使い舐めんな」

後に下がる零夢を守るように前に出る。目の前に立つルーミアは驚愕の表情を浮かべ、その後にと満面の笑みを浮かべる。

「あ～あ、ここまで粘られるとは思ってなかった。こんなの見せられたら本気で勝ちたくなっちゃうじゃない。いいよ、すごくいい。もう私も限界。だけどね、これほど勝ちたいと思った勝負は初めてだよ！！」

再び、空を覆い尽くした槍が迫る。

――流水制空圏とは、全ての流れに身を任せることから始まる

――幻覚の中の有幻覚。有幻覚に潜む幻覚。真実を解き明かそうとすればするほど、謎は深まるわ

――未来を視ろ。先を読め。最善ではなく、最高の一手を完全に読み切ることが出来る君が私は羨ましい

――夢想天生？　そうねぇ…。敢えて言うなら全部に身を任せる、かしら。気付けば『ういて』　るのよ

イクシード、三度目発動。流水制空圏、気と魔力を融合。

『『『『『なッ！？！？』』』』』

僕を捉えるハズだった槍は、その全てが僕を通過していった。一つも当たらず、掠ることもせずに。

ああ、そうか。そう言うことだったんだ。

修行の合間にふと思い、師匠との再会の後に自宅で行った自主鍛錬。全てから『ういた』　ような感覚。周りに溶け込むような、そんな感覚を求めて何度も練習した。でも上手くいかなかった。

零夢が消えて帰って来た後、僕は同じような魔法があるか探した。でも図書館にはそんな本は無かった。悔しかったよ。だって、次に零夢が姿を隠すような事があったら見つけようがないじゃないか。

夢想天生は夢想天生でしか破られない。成程、そう思った。だって『ういた』　相手を探すには、自分も『うく』　しかない。だからあの時の本当に悔しかった。

でも今、僕は零夢の夢想天生に限りなく近い状態になっている。

「さしずめ、無想転成と言ったところかな…。無から転じて有と成る。はは、無能だった僕にはちょうどいいや」

「あ、ありえないッ！　だってそれは博麗の『くくく…あっははは!!』　五月蠅いわよ小鬼!」

『いや、すまないね。まさか伝説とまで言われた博麗の秘奥を、あの大和が出来るようになるなんて！　これを笑わないでどうするって言うんだい!?』

正確には限りなく近い状態だけどね。流水制空圏の全てに身を任せる流水の動き。在るか無いかの境界線を幻術で弄る。最高の一手、未来を手繰り寄せる『先を操る程度の能力』。僕の持つ全ての能力を総動員して起こした奇跡に近い現象。気と魔力の融合、その第二段階『無想転成』。

「く…でも夢想天生じゃない！　だったら当たる可能性だって…！」

「無駄だよ。――止まれ」

荒れ狂う闇の棘に掌を向けるように右手を掲げる。

「…おいおい、マジかよ。全部止まってるぞ」

「無想転成の第一段階は膨大な身体能力と魔力や気といった力の大幅アップにある。だからルーミアの攻撃を素手ではじく粗技が出来たわけだし。となれば、今の弱ったルーミアになら地力の上がった僕の能力も通用する。…行くよ」

もとより時間は限られてる。3度目のイクシード発動のせいか、もう痛覚や触覚なんて感じられない。目も霞んで見にくい上に、長時間この奇跡を起こしていることは出来ない。例え長く続けられても今の僕ではルーミアを倒すことは不可能に近い。でもこれで十分、僕が拳のみ具現化してルーミア本人と自動障壁を破れれば…！

「この…砕けろ！！」

イクシードに込められていた魔力が急激に減少していく。間に合うか！？　いや、間に合わせる！　決死の想いで夢想封印を放とうとしている零夢の為に、必ず間に合わせて見せる。

イクシードの輝きが消え、それと同時に無想転成が解除される。そ

の姿を見たルーミアは、死に体ながらも僕を貫くために最後の一槍を放つ。

身を過る。間に合わない。右肩に当たり、腕を?ぎ取られた。血飛沫が舞、感じなかった苦痛に顔が歪む。ルーミアは勝利を確信して笑う。でも僕は諦めない。残った左腕で自動障壁に触れる。ルーミアの顔が驚愕で埋まる。こちとら最初から、右手の一本くらい捨てる覚悟は出来てるんだよ!!

「浸透…水鏡掌ォッ!!」

再び自動障壁が破られる。僕の仕事はここまで。あとは任せたよ、零夢!

「これで本当の終わりよ…夢想封印!!」

極大の光弾が防御の術を失ったルーミアに叩きこまれて行く。

「…初めて、初めて勝ちたいと思った相手に勝てないなんて…」

「人生なんて…そんなモノだよ…」

僕が最後に見た光景は、地に伏せたルーミアと、ゆっくりと地面に

倒れ込む零夢の姿だった。

決着・下（後書き）

鉄は熱い内に叩け！　じらいです。冷めないうちに、読んで下さる皆様に最速で届けようと思った次第であります。前書きにもあるように、このＢＧＭを永遠ループしながら書きました。ノリノリです。むしろノリノリで熱い曲を聞きながら読まないと「こいつ頭大丈夫か？」　と思われるかもしれませんねｗ　それ以前に分がおかしいかも知れませんが…

これにて日蝕異変は決着。多くのことを語りたいのですが…時間が無いので割愛。質問は感想でどうぞ～。残りは事後処理ですね。大和の最終形態は無想転成。無想転生のパロであり、夢想天生のパロです。無敵です。無双です…が、大和がそんな大それたことを長時間出来る訳ねぇだろ、です。出来ません。その辺の理由も次回出てくるはずです。…忘れてなければ。

さて、と。明日提出のレポートどうしようかな…。グッバイ睡眠時間！

誰が敵で、誰が味方か

「全身打撲、筋断裂、限界を超えた魔力行使で身体はボロボロ、終いには右腕が吹き飛んで血液不足で死亡寸前。医者泣かせとはこのことね。そう思わないかしら馬鹿弟子。聞いてるの？　聞いてないでしょうね。自己を弁えずに3回も魔力機関を使う愚か者には師の言葉は理解できないでしょうから」

「し…ししょう…。後生です、後生ですから輝夜を上から退けてくれませんか…？」

ルーミアとの決戦から3日。緊急手術とかいうものを受けた僕は、痛みは残っているものの起き上がれるまでには回復していた。種族・魔法使いなこと、内功を無意識にも練れていたこと、何より師匠の並外れた医術があってこそらしい。人間のままなら完全に死んでたらしい。

「あら？　永琳、永遠亭の布団は言葉を話せたかしら？」

「何を言っているの、布団が話すなんてあり得ないわ。言葉すら理解出来ないと言うのに」

「……重い」

「フンッ！！」

「痛い！？」

大ちゃんが目を覚ましたぞー、と僕を看てくれていたてゐちゃんの声が永遠亭に響き渡ってから数秒。部屋の襖を蹴飛ばして入って来た輝夜が僕を見ること更に数秒。重症を負った僕を労ってくれるかと思えばいきなりお腹に尻をｏｎされた次第であります、ぐへぇ。お転婆姫様に文句を言ってやろうと思ったけど流石に目が潤んでたからなぁ…。何も言えなかったよ。

でもその時にちゃんと言ってれば今の状況にはなってなかったと数十秒前の自分に言いたい。

「まあ折角助けた命を散らすのも勿体ないし、助けるのに費やした時間が無駄になるなんて以ての外。輝夜、そこから退いてあげなさい」

「え～、別にいいじゃない。それに永琳、大和にはきつく言っておかないとまた同じことになるわよ？　だからこうして身を以て教えておかないと」

「思う存分跨ってやりなさい」

「師匠ーーーーー！？」

少しは怪我人の僕を労るとか、ルーミアに勝った僕を褒めるとか、そういうのは無いの！？

「ある訳ないウサ」

「周りは敵だらけだ！　母さん助けてーーー！！」

「呼んだかしら？」

「初代母さん！？」

チクショウ！　僕の周りは酷い人ばかりだ！　誰か僕を労ってよ！

「お、何か騒がしいと思ったら大和の奴目が覚めたのか」

「妹紅！　ちょうどいいｔ「誰に許可を得て私の屋敷に上がってんのよ焼き鳥。殺すわよ」「あ゛？　…大和、ちょっと待ってろ。この糞女燃やすから」　……」

もう…ゴールしていいよね…？　と言うか、位置的に僕巻き込まれること確定なんだよね？　輝夜の師匠仕込みの弾幕と、背中に炎の翼が生えている妹紅さんの争いに。

「はいはい、２人ともそこまでよ。弟子が別世界に逝く前に止めておきなさい」

「ッチ、命拾いしたな」

「あんたこそ」

「ちぇー、面白いことになると思ったのになぁ」

「てゐちゃん、君って僕に怨みでもあるの…？」

「姫様ー。大ちゃんが姫様のお尻に興奮してるってー」

「ちょっ！？」

男の性をとやかく言うのはマナー違反ですよ！？　…ねえ、なんで輝夜はニヤけてるの？　ここは怒るところだよね？　無言で微笑まれたら余計に怖いんだけど！？　でもって頬を触るか触れないかの微妙な手つきで撫でるな！　お尻の感触と相まってマイサンが反応するじゃないか！？

（マイサン：呼んだ？）

（呼んでない！）

「…話を進めるわよ。大和、貴方は妹紅に礼を言っておきなさい。貴方が倒れた後、直ぐに隙間は閉じたわ。そして私はおそらく貴方がここに来るだろうと思って治療の準備に追われた。…何故ここが知られたのかは、後でゆっくりと、私と2人きりで話しましょう。それで何故妹紅に礼を言うか、だったわね。この子が貴方をここに連れてきたの。私の読み通り、私しか貴方を治療出来ないと思ったのでしょうね」

「妹紅が…。ありがとう、妹紅。たぶん、妹紅が永遠亭に運んでくれなかったら僕は死んでたと思う。僕も師匠より医術に詳しい人は知らないし」

何か『2人でゆっくり』　なんて不吉な単語が聞こえてきたけどそれは幻聴だ。幻聴でしかない。疲れてるんだよ、きっと。

「ん、受け取っておくよ。まぁ、私もお前の状態を見てここしか無いと思ったからな」

「ふふ、泣きついて来た妹紅の顔は最高だったわ。額に大汗掻いて『大和を助けろ!!』　だもの。普段からあれだけ可愛げが有ればねぇ」

「な!?　おっ、お前だって『大和!　大和!!』　って泣き喚いてたじゃないか!!」

「なぁっ!?　それ言ったら殺すって言ったじゃない!!」

「お前が先に言いだしたんだろが!」

…ごめん。2人は恥ずかしそうに言い合ってるけど、僕、すごく嬉しいよ。顔がニヤけるのが止められないくらい。ここまで僕のことを想ってくれる人が居てくれて、本当に嬉しい。

「姫様ー、大ちゃん本気で興奮してるウサ。食べられる前に退いたほうがいいと思う」

「てゐちゃん、手を出せば吹き飛ぶのが解っているのに出す馬鹿は居ない」

むしろ僕、零夢に告白っぽいことしちゃいましたから。

「あら、別にいいのよ？」

なんですと！？

「…まあ、そんなこんなで貴方はここに連れて来られた。連れて来られた貴方はまるで死体の様だったけどね。直ぐにでも蓬莱人になってもらうしかないと思ったくらいに」

背筋に嫌な汗が流れる。自分ではそれ程酷い状態ではないと思っていたけど、それは痛覚が働いてなかったからなのだろうか。師匠が匙を投げかけたのなら尚更に。

「でも輝夜に止められたわ。大和の意志に関係なく蓬莱人にしてはならない。月の頭脳と呼ばれるくらいならこれくらい治してみせなさい、とね。ま、結果は貴方も知る通り成功。妹紅が拾ってきた腕も神経を繋げれて万々歳。ああ、まだ完全にくっついてないでしょ

うから無理に動かしては駄目よ」

「解りました。何時頃歩けるようになりますか？」

「歩きたいのなら何時でも。ただ酷く痛むだけだから。…でもこんなのはこれっきりにして頂戴。何度冷や汗掻いたか解らないわよ、まったく」

胸を撫で下ろし、深い溜息を吐く師匠には一生頭が上がらないと思う。もう絶対に足を向けて眠れないね。ついでに修行の内容も少なくしてくれると大変嬉しいです。むしろルーミアにも勝てたんだし、そろそろ卒業なんてどうです？

「だから対抗策を考えたわ」

「ゑ？」

あ、ヤバイ。馬鹿なことを考えたからか、久しぶりに危機管理センサーが全力で命の危険を訴えている。今すぐ逃げ出さないと…輝夜さん、そこ退いてくれませんか？　え？　無理？　あ、そうですか。僕、ここまでなんですね？

「私に殺されるか、敵に殺されるか。どっちが早いかしら？」

拝啓、映姫様。僕、近いうちにそちらでお世話になると思います。

またご飯作るんで、一緒に暮らしましょう。

「師匠、死ぬ前に一つ聞いておきたいことが。零夢って、今何してるか解ります？」

「……あの子も此処で治療はしたわ」

◇◆◇◆◇◆◇

～博麗神社～

「で？　お前の身体は大丈夫なのかい？」

「なわけないでしょ。赤青の医者にも匙を投げられたのよ？　もって１０日らしいわ。だから後７日てところね。正直、こうして立っているのも辛いわよ」

「…すまないね」

「謝らないでよ。別に後悔なんかしてないんだから」

「それでも、だ。息子の母親として礼を言わせてくれ」

律義な奴だ。そう言えば大和も変に律義…いや、あれは頑固なだけか。とにかく、親子揃って面倒な奴だってことは確定だ。

「…それで？　私をここに呼んだのは何で？」

宵闇の妖怪、ルーミア。つい先日私たちと死闘を繰り広げた妖怪が目の前で座って暇そうに欠伸をしている。妖力を回復しやすくするためか、幼児体型にまで身体を小さくしている。何でも、この姿で大和と会っていたらしい。…あいつ、まさかそういう趣味だったの？　と疑ってしまうのも仕方ないだろう。私のことが好きな癖にフラフラしてるなんて許せないじゃない？

「危険なあんたを封印するため。…表向きはね」

「ふーん。じゃあ裏は？」

「随分と軽いわね…。そうね、別に今までとあまり変わらないわ。私の代わりにと言ったら何だけど、これから大和のことを守って欲しいの。それにあんた、そこの小鬼と繋がりがあるんでしょう？」

「…萃香、喋ったの？」

「小鬼は何も言ってないし、そもそも聞いてないわ。只の勘だけど、大当たりのようね」

やっぱりね、おかしいと思ってたのよ。この親馬鹿なら、大和が肩を貫かれた辺りで確実に出て行くはずだ。それまでもそう、息子が危機に追いやられても出てくる気配はなく、ただ監視するような視線が幾つか向けられているだけ。おそらく大和は大結結界構築前から監視されていたはず。それまでは私も狐に探られてたみたいだし、それくらいはあって当然だろう。おそらくその犯人は小鬼と八雲。今回の一件で確信した。

そして勝敗が着いていたあの状態、次の瞬間には大和が殺されるかもしれないのに双方共に出ていかなかった。狐は上手く隠れていたつもりのようだったけど、今にも動き出そうとしてたのを私は見つけていた。だから八雲にとってあれは完全に予定外の出来事だったはず。大方、常に一緒にいる私が何とかするとでも思っていたのでしょうけど…

その私を邪魔したのは、この小鬼だ。

「あんたは大和に私を邪魔して欲しいって言われたらしいけど、それを言われなくても邪魔したでしょ。目的は八雲に一泡吹かせること、明確な宣戦布告。違う？」

最初から勝ち目のない勝負に行かせるほど小鬼がぶっ飛んだ性格じゃないのは今までによく解っているつもりだ。でも敢えて私の邪魔をして、息子を一人で死地に向かわせた。実際は死地なんかではなく、八百長だらけの戦場だったのでしょうけど。

「だから、表向きとして力の封印を行う。あんたにはあらゆる場面で大和を影から支えて欲しい。これは私の我儘と同時に命令よ。嫌なら力の封印じゃなくて、あんた自身を封印させてもらう。幸い先祖代々伝わる札があってね、私の霊力なんて使わなくてもいいのよ」

味方は多いほうがいい。特に八雲なんて強力な者に狙われているのなら尚更だ。こいつは大和を慕っているようだし、今回の件で力を持っているのも解った。小鬼との繋がりがあるのなら、いざと言う時にも安心していられる。

「有無は言わせない。頷くか、ハイと言いなさい」

もうすぐ死ぬ私に代わって、大和を支えてあげて。

「…わかった。全部引き受け得るし、全部話すよ。巫女さんの言う通りだよ。事実、私は萃香から大和に勝たせてやってくれって言われてたし。それまでのは場を盛り上げるための演技だったの。…流石に最後は本気だったけど」

「はぁ…、私も本当はこんな搦め手を使いたくはなかったんだけどねぇ。紫に対抗『させる』　ためにはこれくらいの荒療治が必要だったのさ。大和と、大和を取り巻く環境のためにも」

大和の為なら今回の騒ぎの目的は……大和に経験を積ませること、かな。格上の、それほど接近戦が得意ではない者との戦闘を予期しての。と言うことは、こいつらの言っていることは対八雲戦を見越しての模擬戦だったと言うことなの？

「本来なら博麗大結界構築のすぐ後にでもご主人さまを襲うつもりだったの。管理者との契約なんて最初からどうでもよかったし、私を管理出来るのはご主人さまだけだし。でも萃香から止められたんだ。舞台は紫が用意してくれるからそれを待とうって」

「私はあの大結界の後、一度地下に潜ってね。目的は話合いと言ったところか。遂に紫が動きだしたことの報告と、これから大和をどうするか。地下に引きずり込むって案もあったよ。地下と地上は不干渉だし、何よりあそこは鬼の御膝元だ。紫も簡単に手は出せない」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ。遂にってことは、あんた達は前から気付いていたの？」

いったい何時から大和は騒動の中心にいるのよ…？

「当たり前だろ？　紫は大和がまだ豆粒の時から何かと手を出してたくらいだ、大和と紫の仲には何かあるに決まってる。それに紫とは付き合いが長くてね。あいつがわたし達を知っているように、わたし達もあいつを知ってるのさ。だから大和が幻想郷に来た時、紫

が動くのと同時にわたし達も動き出した」

「そうとは露知らず、私はご主人さまを追いかけ回してたの。４年前に。擬態には自信があったけど、周囲全てを覆っていた萃香にはすぐ掴まった。ご主人さまの周囲を固めていたのは、何も管理者たちだけじゃないよ？　紅魔館の連中だって時々使い魔を飛ばしてるし。だから管理者に見つかった時には言ってやったわ、『遅いね』って」

「その時、既にルーミアはこちら側だ。だからルーミアには紫と偽の契約をして貰って紫の真意を探って貰うことにした。そこから知れたことは黒い黒い、橋姫が嫉妬に狂うくらいに歪んだ愛を受けてた事実」

「でも大結界時には巫女さんが何かされると言うことしか私も知らなかったの。…ごめんね、こんなことになるなんて」

「言うな、ルーミアはやるべきことをした。止められなかったのはわたしの責任だよ。…紫の覚悟を測り間違えた、わたしのせいだ」

「あーはいはい、もうそれはいいから。…最後に教えて頂戴。あんた達はのやってることは、大和の為になる？」

結局の所、今の私にとって重要なのはそれだけだ。死に逝く私に出来ることなんて、もう殆どないのだから。

「…あの子の周りに居るとさ、温かいんだ。お前も知っての通り、あの子の周りに居る奴は皆自然に笑顔になれる。敵とか味方とか、仲が良いとか悪いとか関係なく。あの子はさ、太陽なんだよ。皆を明るく照らす、皆の太陽だ。だから私達はあの子を利用しようとする奴を許しはしない」

「私は闇の妖怪。過去も未来も現在もぜーんぶが真っ暗。だから明るい太陽に引き付けられるのは仕方ないことなの。だって憧れるんだもん。こう言うのを一目惚れって言うらしいよ？　萃香に言われた時は半信半疑だったけど、今回の一件で確信して納得した。ご主人さまは太陽として、これからの幻想郷を担うことになるって」

「そして紫の目的もおそらく…。だからあいつの思惑に乗っかることにしたのさ」

そこで小鬼はニヤリと笑ってこう言ってのけた。

――――わたし達は、あの子を幻想郷の二代目管理者にする――――

◇◆◇◆◇◆◇

「――と考えているでしょうね、萃香は」

「あの鬼が搦め手を…？　失礼ですが紫様、私にはそのようには見えませんが…」

「甘いわよ、藍。貴方も私の後を継ぐ者ならもっと頭を柔らかくしないといけないわ。あの子も鬼神ほどではないけど聡いのよ？　でも今回は勝敗着かず、と言う所かしら。私は大和の存在を知らしめ、傍観している連中を引きずり出すことに成功した。萃香も大和の宣伝と、大和を中心に置けば団結出来るであろう未来への可能性を示してみせた」

表は大和、裏は私と藍。これがベストな関係だ。表立った対決は大和にやらせば大抵のことは上手く行くだろう。彼には昔から人を引き付ける魅力があったし、現に今も彼と深い関わりを持つ勢力も多い。

私は彼がここまで大きく成ることを見越してここまでの成長を促してきた。魔力も与えてやったし、能力の拡張も手伝ってやった。そ

して幻想郷に来てからは『博麗の巫女』　という此処での重要な役職と深い関わりを持つように誘導もした。

今回の一件は幻想郷のほぼ全てに流された。最後に隙間から声援を送っていた者たち以外にも、花の妖怪や山の天狗を筆頭に多くの者が見ていたはずだ。今後大和に必要なのは、彼女たちから納得されるように信頼を勝ち得ることだろう。

そして萃香も同じことを考えているはず。

ただ、彼女と私では望んだ結果が同じでも過程が異なる。私達は敵対する者は始末するが、萃香たちはその者達とも友情を望むはず。何よりも大事な大和が『殺し』　を恐れているからだ。でもね萃香、仲良子よしではいずれ幻想郷は朽ち果ててしまう。世界の停滞は妖怪にとっても死活問題。適度に刺激を与えてやるほうがいい。だから刺激を求めると言う中で私を引き摺り下ろすと言うのなら、その挑戦受けて立つわ。期間は私が大和を導くまで。

「そうと言えば、連中に動きはあるのですか？」

「いいえ、まったく。こちらからも向こうからも、向こう数百年は何もないでしょう。こちらにも半月は居るのだから問題ないわ」

ああ、確かに気を懸けるのは大和達だけではないわね。何時かの借りもあるし、利子を含めて返してやるのも一興か。

「本当に、面白くなってきたわねぇ」

だがこの時、妖怪の賢者は間違いに気付けなかった。小さいが、それでも確かで決定的な間違いを。彼女がそれに気付くのは、全てが終わってからのことである。

誰が敵で、誰が味方か（後書き）

テストって7月下旬だからまだ大丈夫なはず…じらいです。大丈夫、大丈夫と自己暗示しながら勉強して、息抜きに書き上げました。一応気をつけて書き上げましたが、抜けているところがあるかもしれません。何かあれば御一報ください。

さて、それぞれが何を為そうとしているのかが遂に解りました。大和、完全に蚊帳の外です。自分の置かれた状況などまったく理解していません。何時になったら自分の立ち位置を理解するのやら…。

次回は番外の質問コーナーです。これは置いておいて、その次は遂に『別れ』　の話です。零夢は大和の想いを受け止めるのか？　それともこのまま逝ってしまうのか？　はたまた何かしらの奇跡が起こって生きながらえるのか？

どちらにせよ、大和と零夢の物語も二話後で完結です。

それではまた次回の後書きで…

第2回　質問コーナー（前書き）

超番外です。本編とはまったく関係ありますいや、たぶん無いかなぁ。

第2回　質問コーナー

文「まさかの第二回!?　質問コーナーです。いや～第二回ですよ、第二回。まさかここまで続くとは思わなかったですね～」

大「初めの頃はここまで質問が続くとは思わなかったから驚いているんだよね。それでその内容もかなり突っ込んだところまで聞かれるから解答にも気を許せないという罠。むしろ番外で僕のキャラが壊れていく…。番外なのに…」

文「そう言えば、大和さんが幼女性愛者…漢字で表わすと犯罪っぽいのでカタカナでいいですよね。とにかくロリコンって言われだした原因すら遙か昔のように感じてしまいますし、むしろ忘れちゃいましたよ」

大「…僕さ、何時も慧音さんみたいな人が好みだって言ってたよね？　それに零夢にも言っちゃったわけだし。むしろ何でロリコンと言われるのか小一時間話し合いたいよ」

文「そんな時間も余裕もないのでこの話はここまでにしておきましょうか。とにかく今回は溜まってた分を全部吐き出していきたいと思ってます。相方の大和さんにもガンガン質問していきますし、ゲストの方にも登場してもらう予定です。」

大「今回もぶっ飛んだ質問が多いとのことなので…帰りたいです、ハイ」

文「何言ってるんですか。今回は結構重要な内容もあるんですよ？　例えば能力のこととか。こんな質問が届いています。『最初の頃

大和が使っていた未来予知の目じゃないもう1つの目の能力は？』
どうです？　真面目な内容ですよ」

大「こういう質問を僕は待っていた…！　えっとですね、昔の僕って自分の能力すらまともに使いこなせなかったんだ。旅に出る前かな？　母さんと闘った時に発現したあれは『先を操る程度の能力』の片鱗なんだよ。まだ能力を使いこなせない僕が魔力を使って無理やり叩き起こしたみたいなもので。実は相手の一歩先とか二歩先に動ける力なんだけど、師匠クラスの相手にはまったく意味なかったです、はい。何故かと言われると、先に動いたはずが次の瞬間には更に先に行かれるわけで」

文「つまり、相手のスピードが速すぎてどれだけ先をとってもイタチごっこになると？」

大「そうだよ。最近も多用してるけど、それは相手のスピードに追いつくためになっちゃってる。格上相手ならそんなことないのにね。幽香さんとの闘いの後には使い方もなんとなく解って、能力を掌握してからは使用にはまったく問題ないです。目が光るのは初めの頃のなごりかなぁ」

文「両目がうっすらと光ってるのを見るのは少し怖いですけどね…。こんな質問もありますよ。『魔力収束はどこいったの？』　大和さん、こんなこと出来たんですか！？」

大「う～ん、出来ることには出来るんだけど…。あれ、すごく集中力と時間がいるんだ。幽香さんと闘った時はわざわざ待って貰ってたみたいなものだし。大陸で先生と闘う時の『大魔砲　月隠す極光』では使ったよ？　大気中の～、の所だね。とにかく魔力の収束にはすごい時間が掛るんだ。ルーミアと闘った時には待ってくれなか

ったからなぁ…。でも決戦魔法の時には使わざるを得ないだろうね」

文「はぇ～、大和さんも成長しましたねぇ。あ、元ネタは魔王様の魔砲らしいです。ピンクが空を覆うアレと同じだと思って貰えれば」

大「実際、一年分の大魔砲はそれを超えてる！　…といいなぁ」

文「所詮は中級妖怪の上位程度の魔力しかありませんからね。…さあ！　真面目な話はここまでです！　お楽しみの時間がやってきました！　皆さんの質問で大和さんを苛めぬいていきますよ！？」

大「終わった。僕の今までコツコツと積み上げてきた清純派のイメージが崩れる未来が視えた」

文「最初の質問からマッハですよ！　私よりもぶっ飛んでます。あの人里での結婚事件の出来事です。『ズバリ、零夢の下着はどんなのでしたか？（キリッ　』」

大「キリッじゃないよ、キリッじゃ。…答えないと駄目？」

文「もちろんです。読者の皆様のご要望にお答えくださいい」

大「ぐへぇ。あー、えーとですね。白い褌でした。生温かかったです、はい、本当にありがとうございましたｏｒｚ」

文「綺麗なｏｒｚありがとうございます。しかし私の履いている様なタイプのモノではなく、古き良き褌ですか。流石は博麗の巫女、赴きがありますね。付け加えるのなら大和さん、そのあと袴捲りとかしたかったですか？」

大「…ノーコメントで」

文「つれないですねぇ。今更清純派気取ったところで意味ないですよ？　では次の質問です。『結婚騒動以外で縛札衣を使ったことある？』　これって変態技ですからねぇ。夜這いにはもってこいです。あ、私にしたら山の木に磔にしますからね？」

大「文のパンツなんて昔から見てたじゃないか。僕の上を何度飛んだと思ってるんだよ…」

文「萃香様に言っておこう。息子さんに汚されました、責任取るとか言って求婚されましたがどうすればいいですか？　って」

大「うん、使ったのはあれが初めてだよ。それに使ったとしたら、慧音さんあたりに頭突きで矯正されるよ」

文「スルーされるとは悲しいですね！？　里の守護者の頭突きで頭割って死ねばいいんですよ！　ふんだ、別にいいですよ。どうせ今回のゲストはあの御方ですし。…それでは登場してもらいましょう！　息子の為ならこの人もただの母親か！？　息子の溺愛歴は脅威の数百年！　鬼の四天王が一、伊吹萃香様です！！」

萃「いやぁ二回目だね。今回もよろしく頼むよ」

文「はい、よろしくお願いします。そう言えば萃香様、素朴な疑問なのですが」

萃「ん？　大和のことなら何でも聞いてくれていいよ？」

文「あやや、まあ大和さんに関係することなんですけど。萃香様っ

て、普段なにをしてらっしゃるんですか？」

萃「普段かい？　とりあえず大和の周りを漂っているか、酒を飲むかの二つだよ。なんせ暇でねぇ。息子を眺めることくらいしかすることがないのさ」

大「もう止めてって何度も言ってるのにね…。母さん止めてくれないんだよ」

萃「この子もどんどん鋭くなって来てるからねぇ。最近じゃ覗きにも苦労してるよ」

文「あややや。まあその辺は御二人でお話して貰いましょう。では質問に入りますね。折角なのでこれは御二人に応えて頂きます。ではまず最初の質問です。『風呂場での出来事に付いてどう思った？』　また、『本当は興奮して以下略』　です。なんでしょう、下の話が多いですねぇ。まあ大和さんも隠れ変態ですから丁度いいんですけど」

萃「じゃあまず私から答えようか。実はあの時大和の息子調査をしてね。あれは驚いたねぇ…。正直、胸にグッとくるモノがあったよ、うん」

文「そ、それは…。ど、どんな感じでしたか…！？」

萃「お前は一生知ることはないから別にいいだろう？　手を出せば捻り潰すぞ」

文「そっそうデスネ！？　藪蛇でした！！　で、では大和サンはどうですか…？」

大「泣きたいです」

萃「うん、だったら母さんが代わりに答えてあげよう。これは内密で頼むよ？　実は息子の息子が自主規制状態に成りかけてたのさ。流石の母さんも息子の息子の大きさに驚いて腰が抜けるかと思ったね。実際、腰は砕けるだろうねぇ」

文「うわぁ…」

大「だって…僕だって男なんだよ！？　握られたらそれくらい……なんて言っても無駄だよね、首吊って来ます。皆さんさようなら…」

文「わーわー！　死ぬ前に質問にだけ答えて下さい。その後は止めませんので」

大「僕って…友達いないんだね…」

文「では次の質問に移りましょう。これは萃香様への質問です。『大和の旅の話を聞いたり、ストーカーしたりした結果、今のところ大和の嫁にしても良さそうな人はいましたか？』　実際のところどうですか？　この人なら息子を任せてもいい、と言う人が一人くらいならいると思うのですが…」

萃「ない！　息子はやらないよ！　欲しいと言うのなら…この私を倒してみせろ！！　それが出来たら考えてやってもいいぞ！！　考えるだけだけどね！！」

文「でも御子息は巫女に夢中のようですが？」

萃「ああアレ、アレねぇ。一種の気の迷いだろうよ。だろ？」

大「なわけないです。至って真面目だよ」

萃「よし、じゃあ後で家族会議だ。その間違った考えを心の底から矯正…いや、強制してやろう」

文「（こ、これは早く次の話題に入らなければ…！）　そ、それでは次の質問です。これは大和さんに質問です！　『春画は持ってますか？』　この状況でこの質問を読み上げなければならないとは…！　なんと言う拷問！！　火に油を注いでどうする私！？」

大「そんなの持ってるわけ「母さん、嘘は嫌いだな。鬼は嘘が一番嫌いなんだ。知ってるだろ？」　…何言ってるの？　僕、春画なんて持ってないよ？」

萃「春画は、だろ？　有幻覚の魔道書の中に挟まっていたあの写真。アレは何なのかな？　母さん気になるなぁ」

大「な、何を言っているのかな…？　わけが解らないよ」

萃「とぼけるんじゃないよ。半獣の際どい写真、あれは結婚騒動の時の報酬だろう？」

大「ワケガワカラナイヨ！！」

萃「他にもあった気がするね。そうそう、ｒ「待った！　言うから！　もう暴露は止めて！！？」　始めから正直に言えばいいんだよ。許しはしないけど」

大「うぅ…二郎に報酬としていろいろと貰ったんだよ…。それに文！　アレは文が用意したって聞いたよ！？」

文「あの方たちは大切な読者様ですので。それに四郎宛の特別なブツも渡されたらしいじゃない。どうだった？」

大「どうもこうも、僕はロリコンじゃないよ！？」

萃「なんだとぅ！？」

大「何で怒るの！？」

文「ヒートアップしてきましたがこれが最後の質問です！　『息子さんがロリコンだと言う噂を聞きましたが、その場合あなたも守備範囲に入ってしまうと思うんです。もし息子さんに迫られたらどう対処しますか？』　キタァ！　火に油を注ぐ大参事がキタァ！！　むしろどうとでもなればいい！！」

大「あるあ…ねーよ。いや、マジでねーよ」

萃「あるあ……あるよ。あってよし。むしろあるべきだね」

大「！？　母さん何言ってんの！？　…ああ、ボケたんだよね。長く生き続けて疲れたんだよね。そうじゃないとこんなに変になるはずないし」

萃「ん？　お前は目に入れても痛くないし、それほど可愛い奴だ。それに息子と言ってもお前は義理の息子だぞ？　いい男に育ってくれたし。ということは――――」

大「待てや愚母。それ以上は禁則事項だろ」

萃「よろしい。ならば家族会議で決着だ」

親子　肉体会議中～

文「えー、あー、修羅場というか、大和さんの貞操を懸けた本気の家族会議が始まりましたので今回はここまで…あ、大和さんがゴミ屑のように吹き飛ばされましたね。――おおっとぉ！　大和選手マウントポジションを取られたぁ！？　これは大ピンチかぁ！？……うわぁ、これは酷い。――おっと、今回はここまででしたね。

それではまた次回です」

大「ぎにゃあああああああああああああああ！？！？」

萃「にゃはははははははは！！　天井の染みでも数えてたら終わるさぁ！！」

第2回　質問コーナー（後書き）

やっぱり本編とは関係ないってことでいいですか？　じらいです。ただの息抜きですよ、息抜き。テスト期間はまだですけど、こうやってガス抜きをしないといけませんね！　ちょっとだけ親子サービスしただけですよ、ええ。

実は次回の話、もう出来あがっているんですよ。上げようと思えば今日にでも上げられるのですが、それを上げても後が続かないのです。困ったものです。

ＰＶ１００万が近づいて来てる…！　これで伊吹伝も大台ですよ！　実はもう半年も続けているんですよ、これ。今日気がつきましたｗ　何かしようといろいろと考えています。大和が異世界に飛ぶ～、とか。真・Ｓｕｉｃａエンド？　だからまだ新世界は早いですよ…。と言うか、意見を募っておきながら書けない私をお許しください。必ず何時か書きますので。でも本当に何しましょうかね？

貴方に逢えて本当によかった（前書き）

8月15日更にタイトル変更

貴方に逢えて本当によかった

空を　駆ける

――長くて１０日

空を　駆ける

――その時は明日か、それとも今日か。今この時か

涙が溢れそうになるのを必死に堪え、痛む身体に鞭を打つ

――博麗零夢は、助からない

「～～～～ッ信じない！！」

師匠から伝えられた事実。最後の夢想封印・霊力の枯渇・命を対価に。

聞かされた時、師匠が何を言っているのか理解出来なかった。零夢が死ぬ？　はは、そんなことあるわけないじゃないか。だって、あの零夢だよ？　強くて、ふてぶてしくて、ちょっと寂しがり屋だけど、それでも不敵に笑って見せる零夢が死ぬ？　助からない？

「絶対に…そんなの、間違いに決まってる！！」

無自覚に流れ出していた涙に気がつくことは無かった。

◇◆◇◆◇◆◇

「流石に…もう立つのも辛いわね…」

自分のことながら、他人のように感じるのは何でかしら？

小鬼たちとの話し合いの後、寝巻に着替えた私は寝室で横になっていた。大きな立ちくらみを覚えたのであって、何も本気で昼寝をするわけではない。

「もって7日、か…。それまでにあいつに返事を返ｓ…ッッツ！？」

胸を刺すような鋭い痛みに背中が丸く縮まり、胸を手で押さえる。この痛みが私を苦しめるのはこれが初めてじゃない。初めて起きたのは大結界の後だったと思う。あの頃から突如こういう痛みが胸を襲う様になった。自分で霊力の枯渇による副作用だろうと決めつけ

たけど、あながち間違いではないのだろう。

「そう…言えばっ、大和に隠し、通す…ッのはっ！　骨がっ折れた…わねッ！」

無駄な所で無駄に鋭い、無駄の塊のような優男。名前を伊吹大和と言う。人の身でありながら鬼の子であり、魔法使い。常に面倒事の中心で無自覚・勝手に暴れ回る厄介な男。

そして、私が心から愛した唯一の男

最初で最後の片想い。そう決めて過ごして来たけど、つい先日告白された…のだと思う。へっぽこな男の、へっぽこな告白。思い描いていたような素敵な告白じゃなかったけど、それもあいつらしいと言えばあいつらしい。なんと言っても嬉しかったし。

そりゃあ私だって花咲く歳の乙女、恋の一つや二つに憧れるのは当然のことなんだけどね。まあ、あいつに出会わなければそんなことすら考えなかったんでしょうけど。

とにかく嬉しかったからそれでいいのよ。でも自分で言うのもなん

だけど、私は負けず嫌いだ。だからついあいつに『私は何とも想っていない』と言ってしまった。

私の馬鹿！　こんな時くらい素直になりなさい！

心の底から嬉しがっている癖に、自分のちっぽけな感情のせいで大和の想いを無碍にしてしまった。穴があったら入りたい…。土下座でもするべき？　嘘よ、許して！　って。でもあいつはやっぱり笑ってくれて。ああ、やっぱり私達ってこうじゃないと。自然にそう想えた。

でも私は、あいつに返事を返していない。

幸か不幸か、それは今の私にとっては都合がいい。私は大和にはっきり言わなければならない。

――私は、あんたと一緒にはならない

断る。そう、断るのだ。言っておくけど、本心は全くの逆よ？　でもこれ以上は駄目なの。私という枷を大和に課したくない。言ってしまえば、受けてしまえば、あいつは前に進めなくなる。きっとあいつは私以外を選べなくなる。大和は皆を照らす太陽。ええ、まさにその通りね小鬼。太陽が曇れば日は照らない。ここまで考えてそう言ったのなら、あんたは正しく本物の『鬼』　ね。身も、そして心も。

「だからっ…はやく収まりなさいッ！」

大和が、来る。

◇◆◇◆◇◆◇

「零夢！」

何時も境内で箒を持つ姿がない。

「零夢！！」

何時も境内でお茶を啜る姿がない。

「零夢！！！」

「五月蠅い！　眠れないでしょうが！！」

母屋全体に響き渡るかのような怒声が届いて来た。この方向にあるのは…寝室かな？　そう思って廊下を出来る限り速く飛ぶ。今は歩くより飛んだ方が楽だし速いから。でも痛む身体が本当に憎いよ。

「零夢！　…って何？　本格的な昼寝でもするつもり？　まだお昼なのに」

寝巻姿で横になっている零夢はしっかりとそこに居た。…ほら、やっぱり零夢は零夢だ。そう簡単に死ぬわけないじゃないか。まった

く、師匠も人が悪いよ。

「悪い？　こっちは朝から客が来て眠れてないの。用事がないんだったら…ああそうだ、あの件だけど」

あの件…？　あ、ああ！　あの件ね、あの件！　うんうん解ってるよ。でもプライドの高い零夢のことだ、嫌々ながら受けてくれる「断るわ」　…へ？

「だから断るって言ってるの。それと此処にはもう二度と来ないこと。わかった？　なら話はそれだけよ。じゃあね」

空いた口が塞がらないとはこのことか。まさか断られるとは思わなかった。自惚なんかではなく、本当に零夢は受けてくれると思っていた。お互いの気持ちが解るくらいの長い間、僕らは一緒に過ごして来た。だから零夢の心の内も解っているつもりだった。だから信じられなかったし、それと同時に一つの可能性が浮かんできた。それは僕が一番否定したかったこと。だから僕は確かめなければならない。そうじゃないと納得がいかなかった。

「僕のせい？」

「……」

「僕が弱いから、零夢を傷つけてばかりで。零夢に一生元に戻らな

い程の傷を負わせてしまって…。それなのに、また僕のことを優先しようとしているんだろ!?」

「……ぃ」

「どれほどの時間を共に過ごしたと思っているんだ!?　お前、また自分を殺して僕をとっただろ!」

「……っさぃ」

「解らないとでも、隠しきれるとでも思ったのか!?　自分が死ぬから、僕を悲しませたくないからとか思ってるんだろ!?　違うのか!?」

「五月蠅い!!!!」

「ッ!!」

瞼を真っ赤に腫らして睨みつけてくる零夢を前に、僕は声を失った。自分自身の中にあるナニかを押し殺して耐えている零夢に、掛けられる言葉なんて見つからなかった。

「……とにかく、話はここまでよ。終わったのなら出てって。時間がないのよ」

「…わかった。また来る」

もうここまで。そう言って僕に背を向けて寝転がった零夢の後ろ姿に、僕もまた背を向けた。

背中が泣いていた

◇◆◇◆◇◆◇

「これじゃない…。これでもない…。くそ、時間が無いって言うのに…ッ！」

紅魔館の大図書館。先生の跡を引き継いだ僕は形だけだがここの所有者となっている。史上最高と謳われた魔女であった先生。僕の先生が蒐集した魔道書の数は数えることが馬鹿と思うほど多い。僕は

その数え切れない魔道書の中であるかどうかも解らない一冊を探していた。

「これだけの蔵書があるんだ、霊力に限らなくてもいい。失われた力を取り戻す魔法さえあれば…」

僕が今探している本。それは零夢を助ける希望になるはず。師匠もパチュリーも、零夢が力を根源から失ったから助からないと言っていた。だからそれさえどうにか出来れば…！

「…クソ！　見つかりやしない！」

苛立ちからか、手に取った魔道書を投げ捨てて頭を抱える。どうする…？　どうする大和！？　あるかどうかも解らない本に時間を費やしていいのか！？

「だったら私も手伝うわ」

苛立って魔道書を投げ捨てた僕を見ていたのか、何処からともなく現れたレミリアがそう言って立っていた。ご丁寧にその小さい身体に大量の魔道書を抱えて。僕の役に立つ本を探しに来てくれたのだろうか。

「1人より2人の方がいいわ。それに、2人よりも3人。3人よりも4人よ」

「私は普段から使わせて貰っているわけだし、役に立つと思うけど」

「探す人は多い方がいいもんね！」

「パチュリー、身体は…？　それにフランドールも…。ありがとう、恩に着る」

「大和は解ってないわね。家族に恩を売ってどうするのよ。巫女を助けるのでしょう？　さっさと探すわよ！」

◇◆◇◆◇◆◇

次の日、僕は再び博麗神社を訪れていた。結局あの後睡眠は一度もとらずだ。時間が惜しいのもあるし、零夢のことを考えるとこの程度のことは苦にもならなかった。…レミリアやフランは必死に眠気を堪えていたようだけど。夜型のはずなんだけどね。

「…来るなと言ったはずなんだけど」

「起き上がれない奴が生意気言うな」

寝室にいるであろう零夢を見に行くと、膝立ちの状態で止まったまま零夢を見つけた。…立ち上がれないらしい。本人は強がっているけど顔色もよくない。…時間が無くなってきているのだろう。でも本人がそんな素振や弱音を言わないから、僕も唇を噛んで何時も通り接することにした。

「ほら、おじや作ってきたから。食べれる？」

「うげ。あんたの料理食べたら余計に体調崩しそう…」

「…口開けろ。無理やりでも食べさせてやる！」

「ちょ！？　止めなさい！　自分で食べれるわよ！」

いやいやと首を振る零夢におじやを突き付ける。何時か僕が風邪を拗らせた時とは逆だね。あの時は食べさせて貰うなんてことは無かったけど、本音を言えば食べさせて欲しいとちょっとだけ思った。そんな僕と零夢はおじやを挟んで無言の会話をしているのだ。はい、あーんして。無理。食えや。無理、恥ずかしい。…実力行使！

「醜態だわ…。大和に看病されるなんて…」

「お粗末さまでした」

項垂れている零夢だけど、僕の作ったおじやは残さず食べてくれた。
食べながらも不味い不味いと言い続けていたけど、雀の子のように
次を求めていた姿からはそうは言ってないように思えた。ここまで
間近で零夢の食事姿を見たのが初めてだったからか、頬を紅く染め
た零夢に見惚れてしまった。…ほんと、可愛い子だよ。

「ふあぁぁ…食べたら眠くなってきたわ…。ちょっと寝るわ」

「ん、わかった。ここで座ってるから用事があれば言ってね」

「…ねぇ。手、握っていい？」

おずおずと、初めて聞いたような女の子らしい声に、僕は苦笑で返
した。

◇◆◇◆◇◆◇

～4日後　紅魔館・夜～

「…ない。……ない…ない…何でないんだよ!!?」

机の上に置かれていた本や紅茶、クッキーなどを全てぶちまけて怒鳴り散らした。あれから4日。睡眠も食事も、水さえ摂らずに過ごして来た。だけどそんなことは魔法使いである僕にはとってはどうでもいいこと。朝から夜、零夢が寝付くまでは神社で過ごした。夜は夜通し紅魔館で本を探し続けた。それでも見つからなかったのだから、僕の心は焦りとやるせない怒りで荒れ狂っていた。

「やっ大和、落ち着いて！　まだ時間は…」

「落ち着いていられるか！？　もう時間がないんだ！　どうする…どうすれば零夢を救える…！？」

髪の毛を掻き毟って必死に打開策を探す。考えろ、考えろ大和。師匠の教えはなんだ？　焦った時こそ冷静に。そうだろ？　なら考えろ。逆転の一手を…！

「死霊魔術（ネクロマンサー）…」

「え…？」

死者の魂を操る禁忌『死霊魔術』

そうだ…まだこの手が残っていたじゃないか。何も零夢が死ぬのを止める必要はないんだ。僕は零夢が隣にいてくれればそれでいい。だったら別に死んだ後で死霊魔術を行えば…！

「レミリア、今すぐ死霊魔術に関する本を集めてきて！　こうしちゃいられない、時間は待ってくれないんだから！」

僕には才能が無いからね！　修得するのも時間が大量掛るだろう。アハ、やっぱり駄目だなぁ僕。こんなことにも気付かないなんて、弟子失格だね。

「大和…それ、本気で言ってるの…？」

「ん？　本気も何も、超本気さ。死んだ後に僕が零夢を操る。これしか零夢を救えないんだ。僕は馬鹿だから今まで気付けなかったよ。さあ早く「馬鹿！！」　～～～ッツ！？」

乾いた音と共に、僕の視界からはレミリアの姿が消えた。どこに消えたのだろう、そう思った時には自分の顔が横にいるパチュリーの方を向いているのが解った。驚いて正面のレミリアを見ると、目に涙を浮かべながら僕を叩いた手を擦っている。

「大和の馬鹿！　ボケ！　アホンダラ！　死んでから操るですって？　これでしか巫女を救えないですって？　――ふざけんじゃないわよ！！」

「れ、レミリア…」

「貴様の一番大切なモノを、貴様自身で穢すな！　現実を見ろ！　巫女はもう助からん！　違うか！？」

「あ…ぅ…」

「それをなんだ貴様は！？　死者を操るだと？　そんなものは巫女の為ではなく、貴様の為でしかないだろうが！！」

「で、でも僕にはもう…」

唸るように、犬歯を剥き出しにして叫んでいたレミリアはそこで一息ついて…

「……まだやれることがあるでしょう？　ただ一緒に居てあげるだけでいいの。ただそれだけでいいのよ、大和。それだけで幸せになれるの。それが自分の好きな人なら尚更に」

少し歪ながらも微笑んでそう諭してくれた。

「……ごめん、レミリア」

「いいから。今は一緒に居てあげなさい」

優しく微笑むレミリアに背を向けて、僕は博麗神社を目指した。

「ぅ…ヒック……。ぱちぇえ……。わだじ、わだじぃ～～～～ッ！」

大和が出ていった後、私は妹の前でありながら親友に抱きついて大

泣きした。声を大にして、今までにも無いくらい叫びながら泣いた。悔しかった。大和は巫女を見ていて、私を見てはくれない。それでも私は大和の助けになるのならと思い、一生懸命魔道書を探し続けた。

でもそれは、醜くも打算に満ちた行為だった。

頑張った私を褒めてくれると思っていた。良く頑張ってくれたねって、微笑んで頭を撫でてくれると信じていた。でもそんな予想は外れ、見えてきたのは自己を顧みず必死に『巫女を』　救済するための策を探す大和。策が見つからず、遂には『巫女を想ったあまりに』　壊れかけた大和だった。

「わっわだじ、みごが死ぬと聞いてぼっとじだのよッ！？　ごれで大和のおぼい人がいなぐなるっで、わだじを見てくれるっで！！」

「レミィ…」

「お姉様…」

「うぅ…ッ！　うぅわぁあああああああああああああああああああああ！！」

自分の力で想い人を遂には奪えなかった悔しさと、好敵手に立ち向

かうことすら出来ずに勝ち逃げされることが何よりも辛く、私のプライドを傷つけた。卑しい自分を認めてしまうと涙が止まるはずもなかった。親友の胸で幾ら泣いても、私の心の穴は埋ることはなかった。

◇◆◇◆◇◆◇

零夢の寝室に行くと、彼女は死んだように眠っていた。その姿に思わず胸に耳を当ててしまうほどに僕は動揺しきっていて、ただ眠っているだけだと解った時には思わず泣いてしまいそうになった。

「零夢は…優しいよね」

少し時間を置いてから零夢の横に座った僕は、これまでの日々を振り返っていた。

この数日、僕はずっと零夢のことだけを考えて過ごして来た。初めて会った時、あまりのふてぶてしさに思わず生意気な奴だなと思った。次に会った時も、年上を相手に随分な物言いをする奴だなって。同じ時間を過ごすようになってからは、その姿勢が彼女の素だと知った。

「いつからかなぁ。僕が零夢に惹かれたのは…」

初めて彼女を胸に抱いた時だろうか。零夢が隠れてしまった時、僕の世界は灰色になっていた。何かが足りない。それが零夢だって気付くのにそれほど時間はかからなかったけど、あの時はまだ自覚が無かったのだろう。自覚したのは、大泣きする零夢を抱きしめた時かな。愛おしかった。華奢な身体で強がって、でも本当は脆くて弱いこの女の子がどうしようもなく愛おしく思えた。

「零夢もそう想ってくれていると思ってたんだけどなぁ…」

どうやらこの生意気で可愛い女の子は、死ぬまで博麗の巫女でいるらしい。振り向かせることが出来なかったのは僕が臆病だったせいだ。2人の関係を壊したくなくて、居心地の良い距離を保ち続けてきた。漸く言えたと思えたら、もうお互いの時間は残されてない運命の残酷さを呪うしかなかった。

「もう何も出来ないけど…その時までは、傍に居る」

残された時間はもうない。だから、僕は僕にしか出来ないことをやろう。

「ねぇ大和、境内まで連れて行って」

「うん？　動いて大丈夫なの？」

「今日は調子がいいわ。それにあんたが抱っこしてくれたら大丈夫よ」

寝転がりながらも抱っこを強請る零夢に苦笑して、少し痩せた彼女を胸に収める。僕の首に腕を回してしがみ付く零夢は、鼻が当たる程の距離から優しく微笑み、僕に声援を送ってくれる。

「ほら、もうすぐよ。頑張って」

「別に零夢は重くないよ。痩せたからかな？」

「あら、言ってくれるわね。せっかくだし、もう少し痩せてみようかしら？」

「冗談、今がちょうどいいくらいだよ」

何時もの様に軽口を叩きながら、僕らは境内へと足を運んだ。あの頃から変わらない境内だけど、あの頃とは見える景色が違う。隣に零夢（やまと）がいるだけで、世界の見え方が変わったのだから。

「ここでいいわ。座りましょう」

2人寄り添うように境内に座る。自分を支えられない零夢は僕にしな垂れるように体重を掛けてくる。そうして密着しているせいか、柔らかくて甘い、女の子特有の香りが鼻孔を震わせてくる。それを身体中で感じていると、零夢から沈黙を破るように話掛けてきた。

「覚えてる？　神社で初めて会った時のこと」

「忘れるわけないよ。『とまと』　呼ばわりされたんだから」

「あの時は本気でそう思ってたのよ。何に対しても興味がなかったし」

酷い奴だなぁ。まあ、僕も最初は興味本位で零夢に近づいたんだけど。

「そう言えば、零夢が大泣きした場所もここだったよね」

「…まだ憶えてたの？　しつこい男は嫌われるわよ？」

「はいはい、別に良いですよーだ。僕は一人に好かれるだけでいいですから。……ねぇ零夢、別に答えないでいいから聞いて欲しい。僕は零夢のことが「待って」　……どうしても聞いてくれない？」

こんなにも…こんなにも君のことを想っているのに…

「駄目よ、大和。言えば、言葉にしてしまうだけで心残りが出来てしまうわ。私はそれが嫌なの。お願いだから解って…。こんなこと、何度も言わせないで…」

そう言った零夢は静かに涙を流していた。滅多なことでは人前で涙を見せない零夢が、僕に身体を預けながら泣いていた。そんな零夢を前に、僕は何も言えずにただ抱き締めることしか出来なかった。

「言葉には出さなくても、心で解るでしょう？　心が聞こえるでしょう？　私の胸、すごく早く動いてる。何でか解る？　あんただからなのよ？」

「うんっ…うんッ！」

「もう、泣かないでよ。私まで悲しくなっちゃうじゃない」

無理だ…こんなの耐えられない…

「二つ、お願いがあるの。そのままでいいから聞いて。まず一つ目。私の後に来る博麗の巫女を助けてあげて。きっと私みたいな無敵で可愛らしい女の子じゃないと思うの。そんな子達にはあんたの助けが必要よ。力になってあげて」

「もう一つは大和自身のこと。恋をしなさい。誰か別の人と愛し合って幸せになるのよ。私を忘れろ、なんては言わないけど、出来れば忘れて誰か違う人を探しなさい。時間がかかってもいいから」

「無理ッ…だよぉっ！　そんな、無理ッ」

「接吻も目交うこともしなかった女のことくらい、忘れるのは楽でしょう？」

「何言ってッ！　そんなの…そんなの何の関係もないよ！　零夢は零夢で、僕にとっての零夢がそれなんだから！！」

「…まったく。あんたって男は…」

呆れたような顔をした後、零夢は僕の膝に頭を乗せて横になった。そんな零夢の手を握って、僕は努めて笑顔を浮かべた。歪んでいようが醜かろうが、僕は笑っていようと決めたから。

「……」

「……」

風が境内の木々を揺らして、葉が音を鳴らして踊る。肌を撫でていく風が何時もより妙に気持ち良く感じた。

「……気持ちいいわね」

「…そうだね」

「少し…喋り過ぎたわ…」

「…はは、何時もの倍は饒舌だったんじゃない？」

「まったくよ…おかげで疲れたわ…」

「……ちょっとだけ、眠る？」

日の光が僕らを照らす。

「そうね…ちょっとだけ眠るわ…」

「…何時起きる？」

「さあ？　でも、きっとすぐ起きると思うの。だから…それまでは……お休み、大和…」

眩しさを避けるように、零夢は瞳を閉じた。

「うん。お休み、零夢……大好きだよ」

「――――――――――――逝っちゃった…か。こまっちゃんにも、仕事サボってって言うべきだったかなぁ…。……辛い、なぁ。うん。思ってたよりも、ずっと辛いよ…」

博麗の巫女としての運命に翻弄された女の子は、光り輝く太陽に見守られながらこの世を去って逝った。

辛うじて塞き止められていた雨はその枷を無くし、滝となって大地を濡らす。

その日、太陽は確かに泣いていた。

――――――――――ねぇ…聞こえる…？　ありがとう！

何時も通りの予告編（前書き）

だいたいこんな感じになるだろう、な意味の予告編です。ネタばれあり！　もう一度言いますよ？　ネタばれあり！！　でもこの通りに進むことも『ほぼ』　ないのが痛いところです。読むのは貴方様の判断に任せます！

読めば生殺しです？

『皆に支えられているから今の僕がいる。自分だけでなく、誰かの為となった時にこそ一番の力が出ると僕は思ってる』　随分前に師匠が言ってたけど、この話を聞かされるまでずっと一人で突っ張ってた私には理解出来なかったな。

「貴方が彼の教え子になって一悶着あったのは里では有名ですからね。師弟関係になる時、更に一悶着あったらしいですけど」

あ～、嫌なとこ突いてくるな。まだガキだったころの話だぜ。

今でも子供ですけどねぇ。

まったくだ。師弟ともども青臭いったらありゃしねえ。

酷い天狗と姐さんだぜ。少しは子供に優しくする心をもったらどうだ？

「でも、よく大和さんが昔話をしてくれましたね。あの方はあまり自分のことを話してくださらないのに」

それもそうだな。大和の奴は恥ずかしいとか言ってあまり人に話そうとはしないからな。

そりゃあれだ、この可愛らしい弟子が酌をしてべろんべろんになるまで酔わせた成果だぜ。泣き上戸なのがうざかったけどな。

あややや…。大和さん、相変わらず貴方には甘いですねぇ。

だな。お前、本当に可愛がられてるな。

馬鹿言わないでくれよ姐さん。実践主義とか言って可愛い弟子を何度も殺しかける師匠がいると思うか？

残念ながらいるのよね、これが。兄弟子も師匠には何度も殺されかけたらしいし、今も時々生死を彷徨っているわよ。…それに付き合わされる私の身にもなれって言うのよ。

お、誰かと思えば御苦労さんじゃないですか。ちなみに先程の話は大和さんと貴方の師匠にも伝えておきますんで。更なる苦労を期待します。

ちょ！？

「御苦労さんです」

御苦労さん

ホント、御苦労なことだぜ

あんた達、わざと言ってるでしょ！？

「そう言えば、大和さんは貴方の兄弟子に当たるのですよね？」

（スルーしやっがったよこいつ…）正確にはもう違うのだけど…まあそうね。とにかく、師弟の関係なんてそんなものよ。それにあの人も師を名乗れるほど…と言うより、べらぼうに強いでしょ？

私の方が強いぜ！

私の方が強いな。

私の方が強いですけどねぇ。

…ごめん、言った本人だけど自信なくなってきたわ。あと、私の方が強いわ。

「確か…貴方が出会ったのは博麗零夢さんが逝った後ですよね？その頃の大和さんの行動記録だけが抜け落ちているのですが、何か知りませんか？」

私があの人と特別親しくなったのは異変の後だから何とも言えないけど、出会った頃の話でいいのなら…

「それで十分です。ではお話して貰えますか？」

▽▲▽▲▽▲▽

「伊吹君。私に出来ることがあったら何でも言ってくれていいんだぞ？」

「大丈夫ですよ、慧音さん。恥ずかしながら、一通り泣き終わりましたから」

博麗零夢の没後、彼の生活は変わった。里から離れ、極力人と付き合うのを避けだしたのだ。人付き合いが多く、よく里に顔を出していた彼の姿も今は見えない。そんな落ち込んでいる彼の姿を見つけては、周囲の者は気遣うのであった。

「…服が、表裏逆なのだがな」

違和感に気付かない者がいないわけもなかった。

「萃香、私は全て大和に教えるよ。今の大和は辛うじて耐えれている状態だ。ほんの少しでも傾けば崩れ落ちる程に。そんな時、一番力をもたらすのは何だと思う？　…復讐心さ。それも燃え滾るような、ね」

望む望まないは関係なく、遂に自分の置かれている状況を嫌が応にも把握した大和。その心に宿るのは愛した者を奪われた復讐心か、それとも…

「パチュリー。僕、決めたよ」

「何を？」

「正式に先生の跡を継ぐ」

「…言っている意味が解っているの？　それがどれだけの意味を持つか。どれだけ大変なことかを」

「解ってるさ。でもそれでも目指そうと思う、本当の意味での魔法使いを」

天才と呼ばれる存在がいる。凡人には理解できないことを考え、そ

れを何でもないように軽々とこなす。彼が先生と呼び親しんだ存在もその一人だった。大魔道の称号すら持て余した伝説的な魔法使い。そんな彼女すら、志半ばとはいえ為し得なかった一つの境地を目指すと彼は誓った。すべては己の信じたモノのために。

「名付けるとしたら…奇跡の魔法使いってとこかな？」

「ちょっといいかしら？」

「はいはい、誰ですかー？」

「この森に住む許可が欲しいのだけど…。貴方、この森の長なんでしょ？　森の生物たちがそう言ってるわ。ああ、自己紹介がまだだったわね。アリスよ、魔法使いのアリス・マーガトロイド。よろしく」

森に住む新たな住人、アリス。自身と同じ魔法使いを名乗る少女との出会いは、いったい何をもたらすのか。

「要するに、貴方は肩に力が入り過ぎているのよ。もう少し気楽に

生きてみなさい。どうせ長い人生なんだから」

「肩の力を抜いて…。成程、母さん達みたいに人生を謳歌すればいいんだね？」

「ま、そう言うことじゃないの？」

彼の母親について詳しく知らない彼女が言った言葉が、後の彼に大きな影響をもたらす。そしてそれを知った誰もが言うだろう。お前が言わなければ、と。

「アキナさん!?　どうしてここに!?」

「アキナを知っている…？　まさか…月からの追手!?」

月の兎と月の申し子。兄弟子と妹弟子の初めての出会い。

「お孫さんを、僕が？」

「うむ。君もこの子も経験は多い方が良い。この子もそれを望んでおる」

「お願いします！」

幼い剣士と傷心の魔法使い。教わる側だった彼が、今度は教える側に初めて立つ。

「この子の名前？　霊夢、博麗霊夢だ。では頼む」

「名前？　魔理沙、霧雨魔理沙！　よろしくお願いします、先生！！」

そして彼と彼女たちは出会った。

「結婚してないし未亡人でもないのに、お義父さんになっちゃったよ…」

それは里から離れた、真の意味で彼を知る者の少ない話

何時も通りの予告編（後書き）

7月にはもう投稿しません出来ません、じらいです。私の大学に祝日など関係ないのだー！！　とりあえず前話で長い間投稿しないまま言うのも何ですから、予告編を入れさせて貰いました。ただやりたかっただけとも言います。とりあえずこれからの妄想を膨らませてもらえればＯＫです。

そして読んでしまった方、これまでにも予告編を読んだことのある人はもう察しているでしょう。この通りに話が進んだ試しがないじゃないか！？　と。その通りなんですけどねｗ　でもこればっかりは止められないのです、ええ。

予告編も登場人物が増えてきました。人形師に妹弟子、果てには幼女剣士です。原作主人公ズももうすぐですね！　その原作までももう間近。そこまで話数を挟みたくないなぁ、と思いつつもそうもいけそうにないもどかしさ。どうしてくれようか？

あと疑問です。アリスって何時幻想郷に来たのですか？　旧作のことは一切考えてないです。詳しく知らないものは書けそうにないのでｏｒｚ　とりあえずこの時期で登場させる予定ですが、何かおかしいところがあればお願いします

それでも世界は廻る

少しきつい日射しが木々に遮られ、心地よい木漏れ日となって視界を楽しませる。そよ風が肌を撫でるが、それでもなお暑い夏の日にも関わらず、縁側で熱いお茶を飲む僕。隣からはぽりぽりと、小さな口を一生懸命大きく開けて煎餅を齧る音が聞こえてくる。時々こちらを盗み見てくるのは煎餅はあげないと言う意志表示なのか。

そうまでされると意地悪したくなるね。

食い意地を張っている彼女に少し苦笑しながらも、お茶を啜るのを止めない。せっかく暑い中に彼女が煎れてくれたお茶だ、冷ますのは少々もったいない。ゆっくりと口に含みながら今日の予定に思考を巡らせる。山まで夕食の魚を捕りに行こうか？　でも境内の掃除をして、その後は彼女と一緒に魔法で涼むのもいいかもしれない。

一通り悩んだけど結論は出なかった。こういう時は隣で咽喉に煎餅を詰まらせている彼女に聞くのが一番良いだろう。どうせ今日も一緒にいることになるのだから。そう思って彼女が座っている方向に顔を向け――――――――

「ご主人さま、朝だよ。起きて」

「あ……」

「顔、洗ってきた方がいいよ。酷いことになってる」

「…解った」

「いい加減、乗り越えないと巫女も報われないよ？」

「そんなこと…言われなくても解ってるよ…」

彼女が逝ってしまってからもう2ヶ月近く経った。始めの一週間は泣き続けた。二週目は荒れて、母さんやルーミアに気絶させられるまで自分を痛め続けた。三週目に入ると何もやる気が起きなくなって、1ヶ月を超えたらただ寝て起きての繰り返しになった。そんな僕を心配してか、小さくなったルーミアちゃんが僕の家で僕の面倒を見るようになった。ルーミアちゃん曰く、零夢がルーミアちゃんの力を封印したらしい。もっとも、力の大半を封印されたルーミアちゃん本人でも破れるような簡易な物らしいけど。

でもそんなことどうでもよかった。今の僕は何もやる気が起きない。そんなだらしない生活から抜け出させるためにルーミアちゃんが話をしてくれたり、規則正しい生活をさせるために世話を焼いてくれているけど、それでも駄目だった。

「今日は里の半獣に呼ばれてるんでしょ？　早く着替えて行かないと頭突きされちゃうよ？」

「僕、断ったんだけどなぁ…」

少し前、姿を見せなくなった僕を見兼ねた人達が家にやって来た。パチュリーもフランも、文やにとりも来た。他の皆もしきりに僕を心配してくれていた。何時までメソメソしているつもり？　と、叱咤激励してくれた人もいた。そんな中で一番酷かったのは妹紅だ。

『何時までも甘ったれるな！！』

そう言って胸倉を掴まれ、思いっきり殴られた。何の抵抗もせず、受け身すら取らず堅い地面に身体を打ち付けられた。本来なら殴られた頬も、打ち付けられた背中も本当は酷く痛むはずだった。にもかかわらず、何故か痛みは感じなかった。身体の痛みなんて感じられることすら出来なかった。理不尽にも殴られたことに言い返す気力すら沸かない。もうどうにでもなれ、それが正直な気持ちだった。

「焼き鳥さん怒ってたから。半獣に告げ口でもしたんだろうね」

「…やっぱり行きたくないなぁ」

「来ないのなら出向くって言ってたじゃない。どっちにしろ逃げられないのだから、行った方がいいよ。ほら、しゃんとして。道中には気をつけてね」

「うん。…ルーミアちゃんはさ、何でここまで面倒を焼いてくれるの？」

「ん～？　お嫁さんになってあげるっていったじゃないのー」

「はは…そりゃどうも。じゃあ行ってくるね」

「行ってらっしゃーい」

零夢がいなくても世界は廻る。それが酷く憎く感じた。

「さて、と。じゃあ私は五月蠅いゴミでも掃除してこようかな」

最近になってこの家を探るような目が増えた。ただの監視やら覗き程度なら問題視しないが、それに明らかな敵意が込められているのなら話は別だ。

「いったい何を考えているのかな？」

萃香はご主人さま関連の話で地下に籠りっぱなしだ。気力を失ったご主人さまを再び立ち上がらせるためには、全てを話して復讐心を煽るしかないと言うのに、いったい何を話合うと言うのだろうか。それを理解してない、理解したくない萃香に腹が立つ。大方、大好きな息子に自分の汚い部分を知られたくないのだろう。鬼の癖に随分な小心者だよね。

そして動く気配のない管理者と、ご主人さまを狙う連中にも腹が立つ。

普段のご主人さまならいざ知れず、今のご主人さまでは勝負にもならないだろう。それを知って動かないとは、こちらの動きでも探っているのだろうか？　それとも…。…まあいい、所詮は失意のうちを狙う外道。ならば外道が外道らしい最期を迎えられるための『お手伝い』　をしてあげよう。直接殺すようなことはしない。ただ、私は萃香ほど甘くはないってことを教えてあげないとね。

「私のご主人さまに喧嘩を売ったことを後悔させてやる」

◇◆◇◆◇◆◇

「久しぶりだな伊吹君。待ちかねたよ」

「…すいません慧音さん。それで用事ってなんですか？」

「ああ、里の者からの依頼なんだ。ここ数日姿を見せなかったせいで溜まっているようだぞ？」

皆、君のことを心配しているぞ？　慧音さんはそう言って、予め用意していた急須からお茶を淹れる。そう言われても、今の無気力な僕には何をやらせても上手くいかないだろう。自分のことくらいしっかりと把握している。たった1人、零夢がいないだけで何も出来ない軟弱者で、最低の男だってことくらい。だから僕はここ数日で考えていたことを正直に話すことにした。

「…僕は、もうこりごりです。大切な人を創るのも、大切な人が逝く姿を見送るのも…。だから、里や友人からは少し距離を置こうと思ってます」

「まあそう言わずに。とりあえずは里の依頼をこなしてくれないか？」

僕の言葉なんて聞いてないかのようにそう言われた。慧音さんの顔からは有無を言わせないという少々強引な意志が感じ取れる。依頼を受けるのは君じゃないと駄目だと言う人が多くて困っているのだよ。湯呑に入ったお茶を飲みながら、慧音さんは苦笑して更にそう付け足した。僕じゃないと駄目なのだ、と。

「頼まれてくれるかい？」

「…そう言われたら断れるわけないじゃないですか。でも、これっきりにしてください」

卑怯だ、慧音さんは。そう言われたら僕が断れないことを理解している癖に。

「その時はまたお茶に誘わせてもらうさ」

優しく微笑む慧音さんの顔を見ても逆に心苦しくなるだけだった。心配してくれているのも、励まそうとしてくれているのも十二分に理解出来る。でも心の中の喪失感だけはどうしようもなかった。今までも、きっとこれからもそうなんだろう。きっと僕は彼女を忘れることなんて出来ないのだから。

なんとも形容しがたい思いを胸に秘めたまま、湯呑に入ったお茶を

飲み干した僕は慧音さんの家を後にした。

「隠れてないで出てくればどうだ、妹紅」

「べ、別に隠れてなんてないぞ！」

「箪笥に入っている奴が何を言うのやら…。心配なんだろう？」

「別にそんなわけじゃ…。ただ…だな、あいつが笑ってないと何か腹が立つんだよ」

「そう簡単に笑える訳ないだろうに…。巫女が伊吹君にとって特別

な存在だったことくらい、最早周知の事実じゃないか」

「そりゃそうなんだろうけどさ…。でも、長く生きてれば別れなんて何度も経験するんだよ。お前だって私より先に逝くだろう。大和だってそうだ。悲しいのは解る。辛いのだって理解出来る。でも自分が悲しいように、逝く方だって悲しいに決まってる。長く生きるつもりなら割りきらないと駄目なのに、あいつは解っちゃいないんだ」

「…私はまだそれほど長くは生きていないが、妹紅が言いたいことは何となく理解しているつもりだ。里では私も見送る側だしな…。だが、今の伊吹君の状態から元通りになるのには時間が掛ると思うぞ？　今までの元気な姿は見る影もなかった。……が、伊吹君ならきっと大丈夫だろう。何たって、老婆心全開なお姉さんがいるのだからな」

「う、うるさい！！」

まぁ確かに慧音の言う通りかもしれないけど。前までは死んだような目をしていたけど、最後にほんの少しだけ光が見えていた。このまま自分がどれだけ頼りにされているかを自覚してくれれば、いずれあいつは元通りになるだろうよ。利用しているようで悪いけど、私はあいつが笑ってくれるほうがいい。だから慧音も強引にでも里と関わらせようとしたんだろうよ。

「少し落ち着いて元気になった暁には、巫女との話を聞きながら酌をしてやってもいいな」

「その時は私も参加させて貰うよ。きっと楽しい宴会になる」

「襲われても知らないぞ？　慧音ような奴が好みだって言ってたからな」

私のような残った奴に出来ることは、そいつの生き様を後世に伝えることくらいなんだからさ…。

◇◆◇◆◇◆◇

「つまり、僕にマジックアイテムの作成依頼をしたいって？　…一郎さん、そりゃ無茶だよ」

「すまん大和。でもこんなの頼めるのお前しかいなくてさ…」

所変わって霧雨魔法店。人里でもそれほど多くない、マジックアイテムや魔道書やらを売買している魔道具の専門店だ。以前霧雨家に婿入りしたド変態こと一郎さんも、今ではすっかり店長としての面構えが板について来ているようで。子供が産まれた今ではすっかり父親をしているらしい。

「数年続いた霧雨魔法店もこれで閉店、か。残念なことに僕はマジックアイテムなんて創ったことないんだよ。解ってくれた？　じゃ

あね」

「お待ちください大和様！　どうかこの通り！　この通りですから！？」

「…嫁さんの前で土下座を敢行出来るのは凄いと思うけど、その様子を見て笑える妻と子供はもっと凄いと思うよ」

「こうやって家族のためなら何でも出来るのがこの人に良い所ですから」

「いや、それは一郎さんを美化しすぎだと思う」

やはり一郎さんを夫に迎えただけあって、どこか飛んでいる部分があるようだ。…幸せそうだからいいんだけどね。

「でも本当に創ったことないし、創ったとしても売れる価値が着くか解らないよ？」

「それでもいいんだ！　将来的に、この子が店を継ぐ時にでも売れるようになっていればそれで十分だから！」

一郎さんも、逝く日が来るんだ。

そんな咽喉まで出かかった言葉を空気と一緒に呑みこみ、心の内がバレないように目を伏せる。零夢が逝ってから人の死について過敏

になってしまった。今までも誰かが死ぬのは嫌だったけど、それが更に強くなった。もう目の前で誰かが死ぬのなんて見たくない。だから慧音さんにもああ言ったのに…

「わかったよ…。じゃあ暇を見つけて創ることにする。でも期待しないでよ？　本当に創ったことなんてないんだから」

「やったわね貴方。これで霧雨魔法店も安泰よ」

「ああ、これで安泰…じゃない。今も閑古鳥が鳴いてるじゃないか。大和、今すぐに売れるものないか？」

「そんな都合良くあるわけないじゃないか。…あーでもあそこなら何かあるかも」

「あそこ…？　それは何処ですか？　出来れば向かってみたいのですけど…」

「ちょっと危ないから僕が行きます。あまり期待せずに待ってて下さいね」

魔法の森を抜けた場所にある無縁塚。あそこなら何か珍しいものが落ちているかもしれない。ついでにあの2人に会いに行くのも良いだろう。聞きたいこともあるし、ね…

それでも世界は廻る（後書き）

7月にはもう投稿出来ないと言いましたが…あれは嘘になりました。嘘吐きな私に文句を言う場合は『勉強しろよこの馬鹿野郎！』　とでも言っておいてください。むしろ言ってください！　じゃないと直ぐＰＣに手が行くのでｗ

皆さんは主人公が苦しんでもがく姿を見たい？　想像？　していた人が多かったでしょう。私ももっと苦しめたかったですが技量不足でした。どうも表現が単調化してしまって…。申し訳ないです。

２７時間テレビが笑顔なのに、鬱な主人公の話…。とりあえず２７時間で次話書くか番外書くことにします。番外は笑顔だよ！

失意の中で

～地下　鬼の集会場～

「――――――以上が今の大和を取り巻いている状況だよ。何か質問は？」

地獄にある鬼の集会場に、鬼神や勇儀をはじめとした鬼たちが集まっていた。下手をすれば幻想郷どころか結界外の世界すら滅ぼせる程の戦力が集まって何を話しているのかと言えば、１人の小さな同胞について熱く語り合っている…はずだった。

「質問も何も、あいつの好きにやらせりゃいいじゃねえか」

「そうそう。あの子ももう小さな大和ちゃんじゃないんだからさ」

「なんなら俺と新しい子供をつくるか！？」

今の彼らにとっては暇つぶしか酒の肴程度にしかならないのだ。それは大和のことなど別にどうでもいいと思っているのではなく、過酷であったろう旅を経て帰還し、先の戦闘でも十二分の成長を見せ

てくれた大和のことを既に1人の男として見ているからである。だからこうして集まっても酒を飲みながら冗談半分に話をしているのだ。

「ええいお前ら！　わたしがちょっとしか酒も飲まずに話しているんだから真面目に聞けー！！　あと最後のやつ表でろ！　すり潰してやる！！」

「はいはい落ち着きな。お前らも少しは考えてやんなよ。私達の弟分の話なんだからさ」

「勇儀ぃ…わたしの仲間はお前だけだよぉ…」

「酒飲みながらさ」

「駄目だこいつら！？」

それが解らない萃香は頭を抱えて天を仰ぐ。彼女からしてみれば息子は何時までたっても息子であって、旅に出る前の小さな大和と大差代わりないのだ。確かに心や身体も強くなったし、大きく成長した。でもそれとこれとは別の話であって、つまり何が言いたいかと言うと、何時までも息子の為の母親でありたいのである。周りからすれば少し行き過ぎた行為にも見えるが、それも昔からのことなので誰も何も言わなくなっているのだ。

更に大和をルーミアに預けて数日経過していることが焦りに拍車を掛けている。

今の大和には何も出来ない。それは外に対して無防備であり、彼を狙う者にとっては絶好の機会なのだ。これは大和が博麗の巫女と共に妖怪退治を行ってきたことが原因になっている。不殺を拳に誓う大和が滅さなかった妖怪や、音に聞こえた巫女の相棒を討って名を上げようとする妖怪たちが弱った大和を狙っているのだ。ルーミアに任せているとはいえ、身近にいない萃香にとっては気が気でなかった。

「萃香よ、大和が帰って来た時に話した私達の基本方針じゃが…憶えておるか？」

「ぅ…お、憶えてるよ…。け、けどさ！」

「八雲に対しての手も、私達に出来る限りの援助についても話合ったの。確かに状況は常に変化するが、それでも基本方針は変わらん。『子供の喧嘩に親は出ない』　忘れたか？」

鬼神の言に言葉が詰まる。子供の喧嘩に親はでない。当り前のことではあるが、それが鬼達の基本方針だ。幻想郷の管理者にするために手は打つ。だが、その過程で大和に害が無ければ手は出さない。

そもそも八雲の計画を上塗りする形で決まったことなのだ。本人の力で解決させるのが大和の成長にも一番良いに決まっている。八雲が大和自身が知らぬ内に利用しようとしているので手を打ったが、鬼神にとってはそれすら不満なのだ。

「気を落とすのは大和の業、狙われておるのも中途半端に敵を生かした大和の業。全て理解して行動した結果じゃろう。そもそも八雲に打ち勝てぬようなら幻想郷の管理者になどなれる訳がなかろうに」

「た、確かにそうだけどさ…。ルーミアだって何考えているか解らないんだよ!?」

萃香たち鬼はルーミアを全く信頼していない。彼女が大和に執着しているため害を及ぼさないであろうと信用はしているが、信頼関係など築けてはいない。そもそも彼女の目的自体が未だはっきりと解っていないのだ。本当にただ大和を主と言い慕っているだけなのか、それとも他に何かあるのか…。

「大和自身がそれを一番理解しているだろう。何も問題はない」

「でももし「萃香よ、お主には暫くここで時間を潰してもらうことになっておる」　…なんだって？　勇儀…？　わたしには大将が言ってる意味が解らないんだけど？」

だからこそ、萃香には鬼神の言っていることが理解出来なかった。不確定要素を多分に含んだ地上に今すぐ戻れと言われず、逆に地下に居てもらうと言われたことが。

「…萃香にはここで静かにしてもらうってことさ。つまり軟禁状態になって貰うってこと」

「逃げようとは思うでないぞ？　これは私達の総意じゃ。暴れてもここにおる全員がお前を抑えつける手筈になっておる。お主が霧になるよりも私の方が早いのは、お前が一番理解しているだろう？」

先程まで陽気に酒を飲んでいた鬼たちの顔からは笑顔が消え、古から恐れられてきた妖怪の頂点としての顔が浮かんでいる。萃香が動けば皆が動く。脅しなどではなく、この場にいる全員が全力で自分を抑えつけるのだと理解せざるを得なかった。

「…理由を聞いてもいいかい？」

だから彼女にはせめてもの抵抗として、その真意を聞くことしか出来なかった。納得など出来ようもないが、それでもその程度のこと

しか出来なかった。

「大和の成長のため。それとお主の子離れのためじゃ。安心せい、大和はお主の思っておる以上に強い。あの子を信じて酒でも飲んでおれ。――――さあ酒じゃ！　宴会を始めるぞ！！」

大和のもとに行くことを禁じられた萃香は、どうしようもない気持ちを胸に酒を煽った。その姿を見た勇儀が少しバツの悪い顔を浮かべて隣に座り、同じように酒を飲む。今日は悪酔いして、多くの者に迷惑を掛けることになるだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

無縁塚。魔法の森を抜け、再思の道を抜けた先に存在する無縁の者が眠る場所。結界の外から流れ込んだ者や、生きる気力を失った者が最後に流れ着く場所でもある。

「今の僕にはピッタリ……なんて、冗談でも笑えない」

今ではこう思えるけど、一瞬、ほんの一瞬だけ死にたいと考えたこともあった。でも思い止まるしかなかった。母さんや皆を悲しませたくなかったし、何よりそんなことを零夢が許さないと思ったから。死に際の際まで僕のことを考えてくれた彼女だ、自殺なんてしたら向こうで殴られた挙句に追い出されかねない。だから僕は死ねないんだ。そう、どれだけ辛くても僕を想ってくれた人の為に死ぬ事だ

けは出来ない。

「それだけ意志が強けりゃあたいの出番はまだ先のようだね」

「…あってもサボる癖に」

「人聞きが悪いね、ただ休んでるだけなのにさ。…こうやって顔を合わせるのは久しぶりだね、大和。もっと早く来ると思ってたけど」

三途の川の陽気な案内人、小野塚小町。にしし、と巨大な鎌を引っ提げて陽気に笑う姿は今の僕とは正反対だ。よく仕事をサボっては映姫様に叱られているというのに、また船頭の仕事をサボって遊びにでも来ているのだろうか。

「うん、久しぶりこまっちゃん。もしかして僕が来るの解ってた？」

「何言ってんだい、呼んだのはあたい達じゃないか。飯作りに来いって映姫様が言ってただろう？」

「…ああ！　そう言えばそうだったね」

しまった、完全に忘れてたよ。そう言えばルーミアちゃんとの闘い

の時に映姫様から御誘いを受けていたんだった。憶えていたとしても自分から動こうなんて思わなかっただろうけど。でも聡い映姫様のことだ、きっと理由を察してくれているはず…。

「とりあえず映姫様はお怒りだよ。何時来るつもりだ！　ってね」

「ぅ…で、でもこまっちゃんもこうやってサボりに来てるんだから…」

「残念。これでもあたいは仕事中なんだよね」

「ダウト」

「…あたいってそんなに信用ないかい？」

いやいや、日頃の行いというやつです。そもそもこまっちゃんを基準にすると、暇を見つけては散歩と惰眠を繰り返すぐうたらな人が死神だと思われてしまうだろうね。実際、映姫様に「死神ってみんなあんな感じですか？」　って聞いてみたことがある。「悪いのは目ですか？　それとも頭ですか？」　って割と本気で心配されたけど。

「本当のところ、何しに来たの？」

「お前さんを迎えに来たのさ。付いて来な、川を渡らせてやる」

「…生きたまま？　それっていろいろと問題があるとか言わなかった？」

「権力ってのは使う為にあるんだよ。ま、あんたが気にすることじゃないさ」

◇◆◇◆◇◆◇

生きたまま三途の川を超えることは初めてのことじゃない。あの時もそう、今のように塞ぎこんだりしていた時の話だ。あの頃の僕はレミリア達と仲互いしたばかりで、何をどうすればいいのか解らなかった。

そんな僕を救ってくれたのが映姫様だった。逃げるように紅魔館を出た僕を拾ってくれてたのも、沈んでいた僕にあれこれと手を焼いてくれたのも彼女だった。僕が『自分の信じた正義を貫く』　と決心することが出来たのは、厳しくも優しい閻魔様の下で辛い時期を送れたからだと思っている。

「ああ、この味も懐かしい。ここまでになるといっそ清々しいくなるほど残念な味です」

それなのに、何で僕の料理の品評価になっているのだろう？

「あー…映姫様？　そろそろ本題に入っては…？」

「む…ですが小町、貴方ももう少し食べてみてはどうですか？　このような味の料理とはそう出会えませんよ？　美味しくもなく、不味くもない…とは言えません。食べる人によっては不味いと言うでしょう。それでも味は濃いくもなく、薄くもない。まるで奇跡の調理法で生み出された料理です。本当に形容しがたいですね、貴方の料理は」

「…ねぇこまっちゃん。ここって怒るところ？」

「いや。あたいの経験上ここは黙っておくとこだね」

あの時の誓いを今の貴方では果たせない。　貴方は一度決めたはずなのに、二度とブレないと決めたはずなのに、またも自分を見失っている。そう、貴方は心が弱すぎる――――――

三途の川を渡るや否や、その言葉を皮切りに悪夢のような説教が始まった。「とりあえず座りなさい、話はそれからです」　と有無を言わせず座らされてかれこれ数時間。ようやく解放されたと思ったら直ぐに夕食の準備に掛りなさいと命令された。とてもありがたい

長話を聞き流していたせいか、解放されて気付いたころには日も暮れていた。

「どうです？　作った本人も食べてみては如何ですか？」

「あ、いえ、僕は毎日食べてますので。それ程珍しいものではないです」

勧められても逆に困ってしまう。何せ自分が作ったものだ、それほど美味しくないことくらい承知している。映姫様もこんな微妙な味付けの料理を好き好んで食べずにもっと美味しい料理を食べればいいのに。

「食べてみないと何も解りません。それとも食べ続けているから味覚が麻痺したのでしょうか？　大和、貴方はどう思いますか？」

「…それが当たり前になっているから、では駄目ですか？」

映姫様が箸を置いて僕の目を見て話をしてきたので、少し考えてから答えた。真面目な話や勉強の話、仕事の話になると映姫様は決まって人の目を見て話す。それは閻魔という職業柄故なのだろう。相手の真意を測るときには必ず人の目を見て話す。それ即ち、言葉の

表面だけを受け止めて答えていい問答ではないと言うことをだいぶ前に学んだからだ。

「『当たり前になっている』　これは忌々しき事態です。僅かな変化に気付けない危険な状態と言っていいでしょう」

「僅かな変化？　当たり前だったら、僅かな変化を感じ取れると思いますけど…」

「隠されていたのなら、『当り前の日常』　を周囲が演じていれば貴方は気付けますか？　気付けるわけがありません。何故ならそれこそが『当たり前』　なのだから。そしてその僅かな変化に気付けないのは死活問題になり得る。程度の差があれど、時には人の一生を左右するほどの問題にもなります。例えばそう――――――つい最近ここで裁判を受けた女性」

ドクンッ。心臓が跳ね上がった音が耳まで聞こえる。

閻魔と死神、そして魔法使い。三途の川を渡った地で行われているからなのか、まるで死後の裁判を受けているかのように感じる。目の前に座る2人の顔付きにますます真剣味が増し、それに釣られた様に僕の顔も緊張で険しくなっていくのがわかる。

「仕事柄、死人の話を聞くのが好きでねぇ。その日も乗せた奴の人

生を聞いたのさ。あたいが聞いた話じゃ、なんでも男の為に命張ったらしい」

「彼女は幸せだったそうです。しかし私が見た彼女の一生は凄まじいものでした。人によればその一生は本当に幸せだったのか？　人によってはそう思う人もいるはずです。だが闇魔である私には関係がない。ただ公平に判決するだけでした」

「……何が言いたいんですか？」

口の中が乾いていく。

微動だにしない2人が言っている女性が彼女とは限らない。限らないと解っているにも関わらずも胸のざわめきは止まらず、逆に鼓動が激しく胸を上下させている。

「何故彼女はそこまで必死になれたのか？　他人の為に命を懸けたことに少しの後悔もなかったのか？　有るすれば、それはどのようなことなのか？　気になった私は彼女に尋ねてみました。すると彼女はこう言っていました。

『何時も隣で元気に居るのが当たり前だからか、私が意図的に隠したせいなのかは今となっては解らないけど、気付いて欲しかった。何時もと変わらない私を繕っていた私のことを『当たり前』　だと

思わずに気付いて欲しかった』

彼女は少し悲しげにそう言っていました。自分が後悔したことではないのだけど、と」

「だから！　映姫様は何が言いたいんですかッ！？」

聞けば聞くほど、僕の脳裏には生前の彼女の面影が浮かんでくる。映姫様の話す女性と彼女が重なって、映姫様の言い様がまるで彼女に責め立てられているかのように感じる。『僕が彼女を死に追いやった』　のではないのかと言う、今まで否定していた思いすら頭を巡っている。

揺らいだ心が正常な思考をさせないでいる。

「貴方はこの料理と同じです。美味しくもなく、不味くもない。感じ方は人それぞれであって、人によっては不味いと言う人もいるでしょう。――――貴方はこれまで多くの人に肯定され、協力されてきました。それが『当たり前』　になってしまっている。全ての人にただ肯定されるだけなどありはしないというのに。…大和、貴方はもっと周囲に気を配るべきです。そうであったなら彼女も――――いえ、過ぎたことを言っても仕方ありませんね」

「…すいません、調子が悪くなったので帰らせてもらいます。今日も興味深い話をしてもらい、ありがとうございました」

「また逃げるつもりですか？　貴方はもう一度自分の置かれた立場を考えるべきなのです！」

もう何も聞きたくない。僕は逃げるようにして部屋を抜け出した。

◇◆◇◆◇◆◇

「逃げちゃいましたねぇ」

「まったく…。軟弱だと思っていましたが、まさかこれ程とは思っていませんでした」

「ま、あの2人の関係を考えたら仕方ないとあたいは思いますけど。映姫様も本当は解っているんじゃないですか？　だからこうやって切っ掛けを与えたんじゃ？」

「――――流石に気付きますか」

「あたいも巫女から話を聞きましたし、これだけやると気付きますって。あたい達は直接手伝ってやることは出来ないからこうやって切っ掛けを与えることしか出来ないことくらい」

生きている者に直接手助けすることは出来ない。私に出来ることは、生きている者がよりよい判決を迎えられるように助言することだけ。なのだが、

「大和を生きたまま三途の川を渡らせる…。映姫様、ホントのところ始末書じゃすまない話じゃないんですか？　そうまでする必要があったわけでもないでしょうに」

「意味はあります」

あの妖怪に話の内容を聞かせるわけにはいかなかった。

と言うのも、別に大和のことを特別大事に想っての行動ではない。あの妖怪の傍若無人な働きは目に余る。このままでは地獄逝きも止むお得なくなってしまうだろう。ならば少しは痛い目を見て、それを機にこれからの余生を素晴らしいものにしてもらいたい。大和との対決は彼女にとってもいいことだろう。もちろん『大和が勝つ』という大前提があってのことだが。

だからあの者が手を出せない場所で彼に気付かせてあげたかった。出来る限りのことはしてあげたつもりだけど、彼が気付けたかどうか…。

「ま、あたいもあいつが気に入ってるから力になってやりたいとは思ってますけどね。――――話は変わりますけど映姫様」

「何ですか？」

「映姫様にとっての料理はどうだったんですか？」

「…解りきったことは聞かない様に」

「あらま、これは手厳しい」

そんなの、美味しいに決まっている。

「周りを見ろって…僕にどうしろって言うんだよ…」

闇魔と死神が投じた一手。

静まりかえった水面に投じたこの一石が、大和をある一つの事実へと導く。そして彼は知ることになるだろう。自分がどういう存在なのか？　自分の周囲が何を考え、何をしていたのかを。

そして、何故零夢が死ぬことになったのか。

物語の舞台は次の段階へと進むことになる。

失意の中で（後書き）

料理ってなんだよ、訳分かんねえよじらいです。ちょっと深い話をしようとしたら訳がわからなくなりました。おまけに時間を見つけて書いたので内容もまちまち…。慣れないことはしない方がいいです、はい。だから練習が必要なんですけどねｗ

萃母さんこれにて退場。次回の登場予定は何時になるか決まってません。ここからは大和一人で頑張って貰うことになる予定です。今まで綺麗なままだった大和も少し汚く…は成れないんだろうなぁ。何と言っても大和だし…。鬼畜大和とかも機会があれば書いてみたいです。

テストも一山超えました。あと山が４つあるんですけどｗ　その中の２つは本気で落しかねないやつなので息抜きすら出来ません。

真実と決心

「情けない…ッ！」

零夢が逝って、何も出来なくなって

「何時かこうなることくらい解ってたくせに…ッ！」

皆に心配されていることに気付いている癖に、それでも立ち直れない。立ち直ろうとしない

「いざその時になったらへこたれて…皆に迷惑かけてッ！！」

終いには助言してくれた映姫様からも逃げた

「零夢が今の僕を見たら、きっと鼻で笑うんだろうな…」

情けないと言うだろう。らしくないとも言うだろう。…それで最後には一緒に悩んでくれるんだろう。でも彼女はもういない、もういないんだ。いくら泣き叫ぼうが、今更何かが変わる訳じゃない。

「なら何時までも沈んでいるわけにはいかない。そうだろ、大和」

直ぐに何時も通りとはいかないだろう。でも前を見て歩いて行けなければ、それは死んでいることと同義だ。ルーミアとの闘いでアレだけの傷を負っても尚、僕は生きている。だったらそれには意味があるはずだ。

零夢は最期のその瞬間まで先を見据えていた。零夢は僕に、僕の力をこれから巫女の役を引き継ぐ者のために役立てて欲しいと言った。ならそこからもう一度始めよう。零夢との約束を果たすことが、生き残った僕のやるべきことなのだと思うから。

「辛くても立ち上がれ、か。何だ、普段の修行と変わらないじゃないか。…でもその前に一つ、確かめないとならないことがある」

映姫様はもう一度自分の周囲を見ろと言っていた。どう言うことかイマイチ解らないけど、おそらくそれが今の僕に一番必要なことなのだろう。閻魔様の言うことだ、絶対に意味が有るに違いない。そして僕の周囲を知ることが零夢の…零夢が『死んだ』　ことと関係しているのかもしれない。そうとれるような言葉も映姫様は言っていた。『そうすれば彼女も…』　と。

だから僕は知らなければならない。そうしないと駄目なんだけど…

「いったい、何をどうすればいいんだろう?」

非常に情けないことながら、何をどうすればいいんだろうね?　いきなり言われて、はいそうですかとも行かないよ、これは。

◇◆◇◆◇◆◇

「もう一度自分の周囲を知るとなると、今までのように主観ばかり

なのは不味い。じゃあ周囲の人に聞くのがいいんだろう。僕と僕の周囲に詳しい人となると…何故だろう、友人よりも母さんが最初に浮かんでくるのは…」

気付いたら常に傍にいるからなぁ。姿は見えなくても霧状になって隠れているなんてザラだし。別に嫌ではないんだけど、そろそろ放っておいて欲しいなぁ…なんて最近は思ってみたりもする。僕もいい歳だしさ…いろいろとあるんだよ。

まぁそんなこんなの嬉しいやら鬱陶しいやら複雑なんだけど、僕のことを一番見て理解しているのは母さんだろう。

「と言うわけでルーミアちゃん、母さんが何処にいるか解る？」

「鬼さんが『何処で何をしているのか』　は知らないよー」

「知らないのかー」

「そーなのだー」

ならどうしようか？　大陸時に一緒に生活していた紅魔館にでも行く？　レミリアやフランはともかく、パチュリーや美鈴なんかは客観的に物事を捉えてくれてそうな気がするし。アルフォード？　最初から選択肢にないです。

「でもね――――――――ご主人さまのことなら何でも知ってる」

ゾワッ

紅魔館へ行く算段をしているところに、重く圧し掛かるような妖気と、身の毛もよだつ様な低い声がルーミアちゃん…いや、ルーミアから放たれた。何時解いたのか、手には外された封印符が持たれている。姿は小さいままだが、放たれている圧力が尋常ではない。それに当てられたのか、急激に変わった空気を察知した身体が反射的に力を籠め、臨戦態勢に入ってしまう。

「別にご主人さまを傷つけるつもりはないから安心していいよ。ちょっと脅かしてるだけだから」

「…襲うつもりが無いならそのプレッシャーと、結界の展開を止めて欲しいね。居心地の悪さに今にも逃げ出したいくらいなんだから」

「一瞬でも私と対等に闘った人の言葉じゃないよ。…私はね、ご主人様を試してるの」

「試す？」

「うん。これから私が話すことは、こんな脅しすら笑いに変える程

の真実。だから全力で試すの。――ここから先、本当に聞きたい？」

「ぐっ……！！」

ルーミアから放たれるプレッシャーが更に強くなる。絶対強者の放つ途方もない圧力に腰が引けそうになるのも、真っ直ぐ前を見据えながら必死で耐える。ルーミアから放たれる妖気が頑丈に立てたはずの家をカタカタと揺らし、重い空気に呼吸が乱れる。

流石は師匠たちと同じ化物クラスの存在といったところか。昔の僕なら気絶してい酷ければ失禁までしてるかも。でもね――

「聞く。聞かないと、全部知らないとここから先に進んでも意味が無い。そう思うから。だから聞かせて欲しい。ルーミアが知る、僕の全てを」

ニヤリ

ルーミアがそう笑った。

◇◆◇◆◇◆◇

「パチェ、ちょっといいかしら」

「何？　占いの途中だから邪魔しないで欲しいのだけど」

「そんなの後にして頂戴。それよりも私が大和と仲直りするにはどうすればいいと思う？」

「仲直り？　何時喧嘩したの？」

「喧嘩なんてしてないわ。前の話よ」

「律義ね。大和は何も気にしてないでしょうし、そもそも何にも気付いてないわよ。放っておいて構わないと思うけど」

「そんなの解ってるわよ。これは私の自己満足だし、私なりのけじめなんだから。それでパチェ、えっと…その…何か良い案ない？」

「そうやって上目遣いで顔を真っ赤にしてれば済むと思う」

「もう！　真面目に聞いてるのだからちゃんと聞いてよ！」

…大和のこととなるとどこまでも真っ直ぐな乙女なのは相変わらずか。最近は威厳ある紅魔館の主になって来たと思っていたけどそんなことは無かったわね。同じ女としてその気持ちは理解出来るけど、何でそこまで頑張れるのやら。でも頼まれたのなら仕方ない、紅魔館の参報役として知恵を絞るとしよう。

「古より男を満足させるにはまず腹を攻めろと言うわ」

腹を満足させれば男は堕ちる。前読んだ本にはそう書いてあった気がする。美味しい料理を作って家庭的な部分を見せればいいとかなんとか…。大和にも通用するでしょうね。何と言っても、アレが作る料理は不味いから。

「まままままままままッ満足させる!?　セッ攻める!?　ぱっパチェ！　貴方なんて破廉恥なことを言うの!?　そんなのまだ早いわ！　で、でも大和がそうしたいって言うのなら…が、頑張る！パチェ！　私頑張って大和を満足させてみせるわ!!」

そう言ったはずなのに何を勘違いしたのか、暴走した乙女が顔を真っ赤にして走り去って行った。おかしい。私は料理を作れと言った

はずなのに何故それをそんな風に履き違えるのだろうか。私の言い方が悪かった？　いや、何も間違った言い方は言ってないはず。

まぁいい、アレも少し痛い目を見るべきだ。そうしないとレミィの好意にも気付けないだろう。…フフ、慌てふためく姿が目に浮かぶわ。

「運命の輪…正位置」

中断させられた占いの結果だ。どうやら遂に動き出すらしい。ここから先、辛いことも待ち受けているでしょうね。でもまずは、

「レミィの暴走を止めてもらいましょうか」

出来れば最初にこっちを解決してもらいたい。他はともかく、これぱっかりは手伝いようがないし。

◇◆◇◆◇◆◇

「……」

「これが私の知るご主人様を取り巻く現状」

「…零夢を……本当に、紫さんが……？」

「直接でないにしろ、切っ掛けを創ったのは間違いないよ」

「…そう……なんだ…」

子供の頃から今まで、自分の周りで何が起きているのかも知らず、知ろうともしなかった。大陸では結果的に先生を殺した。幻想郷に来てからはレミリアを苦しめた。そして一番の友人が苦しんでいることに気付かずのうのうと日々を過ごした。

「結局ッ！　何一つ守れてないじゃないか！！　いったい何のために強くなったんだよ！？　僕は…僕はァッ！！」

自分のコトだけで精一杯だったなんて言い訳は通用しない。そんな事が良い訳になっていいはずがない。だって僕はあの笑顔を守り切れなかった。それも守り切れなかったのではない。守ることすら出来なかった。鬼の息子だ、魔法使いだなんて大きな力を持っていて

も、すぐ隣にいた存在すら守れていない。

「畜生ッ…ちくしょぉ……」

情けない自分に涙が止まらない。出来ることなら命を捨ててでも謝りたい。でもそれすら出来ない。ごめん、ごめんよ零夢…。僕、君のことが大好きだったのに…！　気付けずに何も出来なかった僕を咎めず…ッ！　そればかりか、僕のこれからのことまで案じて…ッ！

「辛いでしょ？　悔しいでしょ？　…仇をとりたいと思わない？」

「え…？」

俯いたまま泣きじゃくっている僕の上から、ふとそんな言葉が聞こえてきた。

「ご主人様、八雲紫を××したくない？　私たちね、ご主人様こそがこの幻想郷の管理者に相応しいと思ってるの。それは萃香や鬼達も同じこと。だからこそご主人様を次の管理者に推すんだよ。あいつ、邪魔だと思うな。早めに始末した方がいいと思うなぁ」

「始末…？　零夢の仇を…？」

でもそれは…紫さんを『殺す』　ことだ

「そうだよ。大丈夫、私も手伝うからきっと上手くいくよ。狐が邪魔するだろうけど、私とご主人様なら簡単に倒せる。憎いでしょ？
　業が沸くでしょ？　…怒りに身を任せてもイインダヨ？」

心の中にあるどす黒いモノが大きくなっていく。憎しみと怨みで激情に狂ってしまいそうな自分と、まだ何処かで律しようとする自分。
アレは敵だ。あれだけ良くしてくれたのに？　零夢を殺した仇だ。敵討ちをして何が悪い。誰も殺さない、殺させないって決めただろ。それを破るのか？

「零夢なら…零夢ならきっと　――きっと、零夢ならこうする。ルーミア、決心したよ」

「ようやく決心出来た？　じゃあ行こうか、あいつらの住処は「敵討ちはしない」　え…？　なっ何で！？　あいつらはご主人様にとって仇なんだよ！？　それなのに何で！？」

「…確かに紫さんが憎い。ほんと、今まで良くして貰ってきたけどこればっかりは許すことが出来ない。…でもさ、僕は一度決めてるんだ。誰も殺さないし、殺させないって。新しい憎しみが生まれるから、なんて難しい考えがあるわけじゃない。ただ僕が臆病だから誰かを殺すことが出来ないだけ。ほんと、こればっかりはどうしようもないんだ」

「だからって…そんなちっぽけなことで敵討ちを諦めるの！？」

「敵討ちはするよ。ただ僕達のやり方でやらせてもらうってだけ。僕と零夢の妖怪退治、意見がぶつかったり仕様もないことで喧嘩になったりしたら何時もしてたことだよ。…相手が泣いて謝るまで、ひたすら殴る・蹴る・組伏せる！　ってね」

何度も何度も僕たちはぶつかり合った。時には手も出る時もあった。そんな時、僕たちは何の強化もしない生身のままで感情を剥き出しにして取っ組みあってきた。だからお互いを深く知り合うことが出来たと思ってる。

「そんな…そんな馬鹿な考えだけで私の能力を無効化するなんて…」

「紫さんが何でこんなことをしたのかを聞いてからでも遅く無いと思う。…僕の心の闇を操ったルーミアから一方的に聞かされただけで判断するのは時期尚早だからね。だから真正面からぶつかって勝って、それから気が済むまで殴らせてもらうことにする」

「…ハァ、私の負けだよ。解った、ご主人様がそう言うのなら私は何も言わない。甘いやら青臭いだなんて一言も言わないよ、うん。ただ黙って後を付いて行くのが良いお嫁さんだって言うし」

やれやれ、と頭を振りながら溜息を吐くルーミア。よくもまぁ、人の心の闇まで操って惑わせてくれたものだ。おかげで自分を見失うところだった。

「黙って後を付いて来てくれるのは嬉しいけど、誰がお嫁さんだよ。誰が」

「む～。私が大和のお嫁さんになるの～！」

「小さい子に興味はありません！」

「なんなら大きくなるよ？」

「…それはちょっと考えるかも」

どうしようも無くなった僕たちはお互いにふき出してしまって。花が咲いたように笑うルーミアとは違って涙まじりだったけど、これでいいんだよね、零夢。これが僕なんだから、きっと君も解ってくれると思う。

だから僕が紫さんを倒すまで楽しみに待っておいて欲しい。

僕達のやり方で、最強の妖怪退治といこうじゃないか

真実と決心（後書き）

長い間待ってくれた人もそうじゃない人もお久しぶりなじらいです。
今回の話は難産でいまいち納得いかない部分が多くてどうかなー？
なんて少々ビクついております。大和らしさが出てればいいなぁ。

さて、活動報告でも報告した通り、ただいま初期の話を加筆修正？
改訂？　しております。良ければそちらもどうぞ。前よりは見やすくなっていると思います。そして活動報告に書き込んで下さった皆さん！　返信出来なくて本当に申し訳ありません！　こんな私をお許しください！

次回は輝夜とのネチョＲ－１５を入れる予定…予定です。Ｒ－１５の限界が何処までか知りませんが、とりあえず限界目指して突っ走ります。夏ですからｗ　ではまた近いうちに逢いましょう！

これも若さだよ、うん（前書き）

Ｒ－１５…？　を含みます。１５歳未満の方は全力で引き返してください

これも若さだよ、うん

～ルーミアから真実を伝えられた翌日～

ちょっと来なさい、と呼び出された僕は永遠亭に招かれていた。特別に何かあるわけじゃないだろうし、修行とも言ってなかったので修行でもないだろう。ただ傷心気味な僕の為に宴会でも開いてくれるのかな、なんて楽にお出掛け気分で出かけたんだけど…

「馬鹿弟子～？　何処に逃げたって結果は変わらないのよ～？　…さっさと出て来ないとここ一帯を無に帰すわよ！」

…死にかけてます。

「隠れてないで出てきなさい！」

「出たら撃つじゃないですか！？」

「撃たないから出てきなさい」

「わｋ…ってそんなわけあるかァッ！？」

ハローハロー、皆元気？　僕大和。うん、知ってるよね。でもごめん、師匠が怖すぎて何がなんだか解らない状態なんだ。どれくらいかと言うと、目の前に大嫌いなアルフォードが居ても助けを求めるくらいかな？　とりあえず、現在永遠亭前の竹林では命懸けの鬼ごっこが行われています。理由？　何でも紫さんにこの場所がバレたからなんだって。

うん、それって僕のせいですか？　ええ、貴方のせいね。

にこっと笑って訊ねて見ると、ニコッて笑い返されました。笑顔見てからの幻術&逃走までコンマ2秒楽勝でした。…なわけ無いでしょ!?　ヒィヒィ言いながら逃げてます。今も全力でここへ来たことに後悔してるところだよ!!

「そこねェッ!?」

「ぴぎゃァーーーーーーー!?」

あ、あんまりだ!　弾が着弾した場所が地面深くまで抉られてるよ!?　しかもこの鬼師匠、弓まで持ちだしてます!?　師匠に弓なんて持たせた日には、一国が一夜で滅びるとか聞いた気が…。チキショー!　串刺しにされてたまるかァ!!

「待ちなさい馬鹿弟子」

「待てませんよ鬼師匠!　弟子を殺す気ですか!?」

「この程度で死ぬわけないでしょう?　…死にたくなるほど痛いだけなのよ?」

「ふざけてますよねそれ!?　生存権と最低限の人権を主張します!!」

「そんなものはデブリと一緒に宇宙にでも捨てておきなさい。それに…これはお仕置きだって言ってるでしょう！！」

―閃―

光り輝く一矢が、辛うじて身を過った僕の脇を通り過ぎて行った。
それが通り過ぎた場所に生えていた竹は根元から抉られており、無残にもその身を大地に晒している。

「ひ、酷い…。こんなの…こんなの人間のやることじゃない！！竹だって必死に生きてるのに…竹の気持ちにもなってみてくださいよ！！」

「貴方が避けるからいけないのよ…。私も、出来れば竹にこんなことしたくなかった」

「師匠…いや、永琳！　貴方だけは…ッ！！」

「おやおや、漸くお仕置きを受ける気になったみたいね…？」

愛する竹（貴重な僕の収入源）　の源を壊された怒りを胸に全力で師匠に突撃する。あそこにどれだけ金のなる子が埋まっていたと思う？　見てみなよ、この無残な竹を。（せいかつしきん）これだけで何日生活出来ると思っているんだい…？　遠出しなくても一ヶ所で大量に稼げる、貴

重な収入源なんだよ…？　それをこんな、許せるわけないよね！？

そんな僕を撃ち落とそうとする師匠。放たれた矢は有幻覚でできた僕を盾にして防ぎ「偽大）アッーーーー！？」　師匠に肉薄する。接近戦で弓は取扱にくい！

「ぶべっ！？」

なんて思ってた時期が僕にもありました！　弓が近接武器じゃないなんて、そんなことは全くなかったよ、うん。まさか弓で地面に叩きつけられるなんて思ってもみなかった。あの弓が竹で創られているとしたら、僕は恐怖のあまりタケノコを刈りつくしているところだ。

「弓術は教えてなかったかしら。馬鹿弟子、つ　か　ま　え　た」

ふふふ…現実逃避も全く意に介さない師匠の圧倒的存在感に、僕の身体は武者震いが止まりませんよ…。そのまま組伏せられて腕を抑えられました。拙いよ、本気で拙い。師匠本気で怒ってる。だって目も顔も笑ってない。今回ばかりは本当に死んじゃうかもしれない。

「や、優しくしてください…？」

せめてもの情けを受けようと得ようと必死に努力するのを、君たちは笑うだろうね。でも地に這いつくばってでも生きようと努力する今の僕を、君は笑うのか！？

「今日の私は、ちょっと激しいわよ？」

「アッーーーーーーーーー！？」

◇◆◇◆◇◆◇

「……ハッ！？」

こっここは!?　…和室？　ああ、永遠亭の一室か。良かった…。
僕、まだ生きてる…まだ生きてるよぉ…。

「…ってちょっと待て、絶対一回は死んだ。間違いない」

ゆっくりと身体を起こしながら腕を掴まれた時のことを思いだ…すのは止めておこう。きっと悲しみの汗が流れるだろうから。うぅ…今も師匠の恐ろしい死の雰囲気が纏わりついているのか知らないけど、冷や汗がすんごい勢いで噴き出してくるよ…。

「…あ～、そろそろ話掛けてもいいかしら？」

「…ごめん、もうちょっとだけ待ってくれる…？」

目が覚めてから視界に入っていた月のお姫様・輝夜。どうやら僕が更に増えたトラウマに打ち勝つ努力をしている間は、空気を読んで話掛けるのを止めておいてくれたらしい。…滝のような冷や汗を見て躊躇った方が多いと思わないでもないけど。ちょっと顔が轢くついてるし。

「永琳のことは許してあげてね。最近元気のなかった貴方を元気づけようとしただけだから」

「元気づけ？　あれは文句無しに死ねる。元気になる前にこの世から消滅させられるのかと思ったよ…」

「永琳は不器用だから。不器用なりの愛情表現ってとこかしら」

「師匠が？　似合わないなぁ」

「そうでもないわ。ああ見えて結構繊細なのよ？」

ふーん。僕はそうは思えないけど。だって怖いし、恐ろしいし、常識の範囲外の存在だし地球外知的生命体御師匠様だし。一度だけ目の前で涙を流した姿を見たけど、アレすら無かったかのように扱われてるくらいだしね…。一応、僕って月での実験の被害者なんだよね？　ねぇ、そうなんだよね！？　なのに何で無かったかのように扱われるの！？

「…それで？　何で輝夜はにじり寄って来てるの？」

三度悲しみの汁が流れだそうとしている僕だけど、視界の端から四つん這いになってにじり寄って来る輝夜の姿が入ってきた。そんな体勢だからか、服の隙間から覗ける胸元に目が行ってしまう。駄目

だ駄目だ、心頭滅却すれば火もまた涼し。欲情したら止まれない。そういうことを考えること自体が駄目なんだよ。

「私なりの愛情表現でもしようかと思ってね」

「何そr…んん！？」

「ん……」

いったい、何が起こったのか。僕の目の前には輝夜がいて、その輝夜が僕の口を塞いでいる。もちろんそれを塞いでいるのも輝夜のそれだ。

「ちょっ！？　かぐ、むぅッ……んんんッ！？」

何も言うな。息継ぎの間に一言言おうとした時に輝夜を見ると、彼女の眼がそう訴えていた。むしろ何か言うために息継ぎに入ると同時に、その開いた隙間に舌が侵入してきた。それをなんとか押し出そうとすると自然と舌同士が絡まってしまうわけで。それをどう勘違いしたのか、機嫌を良くした輝夜に僕は再び布団に押し倒された。

「…何してくれる」

「嫌だった？」

「嫌とかじゃなくて…もっとこう、何かあるだろ？」

「あの巫女のことかしら？」

「う…ま、まぁそうだけどさ…」

図星を突かれたからか、覆いかぶさるように僕を見る輝夜の視線から逃げるように顔をずらした。

今も僕の心の中には零夢がいる。一緒にいた時間は輝夜に比べたら一瞬のことだけど、それでも僕にしてみれば宝石のような時間だ。まだ振り切れてないのにこういう事をすると、自分の気持ちに嘘を言っているようで嫌だった。

それにこの構図、男としては酷く屈辱的だ。本来なら男である僕が押し倒すべきなのに、なんで押し倒されているんだよ。弱っているからなんて、そんなのは理由になんてならない。こんなヘタレだから零夢にも最後まで言えなかったんじゃないのか？

「貴方、無理してる。悲しいのに、無理やり自分を抑え込んで…」

「……解る？」

「当たり前よ。どれだけ見てきた思ってるの」

振り切ることは出来るのだろうか？　零夢が望んだように、僕は新たに恋をすることが出来るのだろうか？　…いや、出来るかどうかじゃない。やるんだ。零夢の仇をとったは、必ず幸せになってやるんだ。

「大和、人は何時か死ぬわ」

「知ってる」

「貴方も死ぬ時がくる」

「解ってる」

きっとその時は、僕の周囲の大部分の人が逝った後だって決めてるけど。でも、僕たちが逝っても逝けない人達も居る。それが妹紅であり師匠であり…輝夜である。

「…怖くなった。巫女が死んで悲しむ大和を見て、何時かそれが私にも来るのだと思うと怖くて仕方なくなった」

「…そう簡単に逝くつもりはないよ」

「でも何時かは逝くわ。それは逃れられない事実」

「それは…」

仕方のないことなのだろう。不老の身とはいえ、身体を使い続けている限りいずれガタがくる。特に僕のように身体を酷使するようなことを繰り返していれば尚更だろう。そうなってしまえば最後、僕は他の人よりも早く死ぬ。…今まで考えたことがなかった。いや、考えることを放棄していた。他人の死には敏感な癖に、自分が死んだ後に残される人のことなんてそれほど深く考えたことが無かった。

「だからね……奥手になるのは止めたの。もう、時間を無駄にはしない」

押し倒されたまま、再び激しくキスされた。粗い鼻息と熱い舌が絡み合い、溢れだした唾液が布団に染みをつくる。汗ばんだ肌から溢れだした男と女の匂いが部屋に充満し、鼻腔から新たな刺激を与えてくる。今度は目を閉じてしっかり感触を味わっているのだろうか、そんな彼女を見ていると『そういう行為』　をしているのだと嫌でも感じさせられる。

長く艶やかな、それでも軽く柔らかい黒髪が頬を優しく撫でる。寸分の隙間もなく密着した身体が更に輝夜の存在をアピールさせ、雄の象徴がその役目を果たさんばかりに静かに動き始めた。

覆いかぶさるように重なる輝夜の、これでもかと押し付けられる胸の膨らみが僕の胸板で踊る。柔らかい感触が胸板で何度も形を変えながら潰れ、輝夜の口からは苦悩の声が漏れた。

これは、拙い

そんな僕の反応を感じ取ったのか、輝夜は更なる快感を求めるように身をくねらせた。互いの局部に交差するように添えられた膝が僅かに、それでも確かに動かされては僕の獣としての意志も更に活性化して――――

「んむぅ……だっ駄目だ！　これ以上は駄目だよ輝夜！！」

「んっ…大和…好きよ…。貴方が…」

「駄目だ…駄目なんだよ…」

「何で…？　半端な理由じゃもう止まれないわ。ほら、私の胸、こんなにも高鳴ってる。貴方を求めているのよ…」

僕の手を自身の胸へと導く輝夜。柔らかな感触と共に、胸が激しく上下しているのが手に取れた。そんな輝夜の頬は上気し、目は潤んでいる。輝夜は既に出来あがってしまっており、本当に止まれないところまで来ているようだった。

「…こんな状態で輝夜と愛し合っても、きっと輝夜を一番に愛せない。僕の中にはまだ彼女が、零夢がいるんだ…。そんな状態で愛し合っても、お互いが傷つくだけだ」

「私が忘れさせてあげるわ。巫女のことなんてどうでも良くなるくらいに激しく貴方を愛してあげる。だから…」

「ううん、それじゃ駄目だ。愛し合うのなら、ちゃんとした状態で輝夜を愛したい。こんな傷の舐め合いなんかじゃなくて、真正面から輝夜の全てを愛したい。それじゃ駄目かな？」

「そんなの、本当に何時になるか解らないじゃない。貴方だって他の誰かを好きになるかもしれない。怖いの。逝かれるのも、誰かに

とられるのも…」

「…じゃあ僕を惚れさせればいい。都中の男を落した輝夜姫の本気で、さ。それにこれ以上やられると…」

「やられると…？」

「……たつ」

立ち上がる、もしくは爆発するとも言う。笑い事ではすまない。これは男として死活問題なのだから。僕だって軟弱モノの烙印を押されたくはない。押されたくはないが都の男衆を落した輝夜姫の本気、言葉に出来ないモノがありました。

「……そっそう、それは大変…ね…？」

なんとも言えない虚脱感が、そこにはある…！

「はぁぁぁ……。まぁいいわ、こんな所も含めて大和だものね。あ～あ、どうして貴方みたいなのを好きになっちゃったのかしら。オマケに惚れさせて見せろですって？　私に対してよくもまぁ、図々しいわね～」

「あはは……。それはまぁ、言葉の綾と言いますか…」

「そうやって何人の女の子を泣かせるのかしら？　ああ、でもこんな変な奴を好きになる子なんてそういないか」

それはない、とは言えなかった。それなら僕は既に真の男になっているだろうから。真の男に成れていないと言うことは、それほど異性受けがよろしくないのだろう。つまりは人生の負け組。男としての負け組なのだ。世の人はそんな男たちをD．Tと言う。時には同じ男でさえ愚かな生き物を見るような視線を向けてくる。長生きのくせにD．Tな僕だ、そのうち人里でキング・オブ・D．Tなんて呼ばれたり…？　…それは……いやだ……

「はいはい、落ち込むのもいいけどもう寝るわよ」

「ええ!?　さっきの話で納得してくれたんじゃないの!?」

「お馬鹿。貴方は気絶してて知らないでしょうけど、今は深夜なのよ。部屋に戻るのも面倒だし、せっかくだから私も此処で寝るわ」

「布団はどうするつもり？　ここにはもうないと思うけど…」

「あるじゃない、そこに」

ニヤリと笑って指差した場所には僕と輝夜の下に轢かれてある布団。
…ちょっと待った。これはもしかしてもしかするのか…？

「一緒に寝ましょ？」

「さいですか……」

「手を出してもいいのよ？」

「出しませんッ！！」

この夜、僕は良く我慢したと自分を褒めてやりたい。綺麗に気絶した後に良く眠っていたせいで寝付けなかった僕は、静かな寝息を立てる輝夜の抱き枕として一夜を過ごすことになったのだから…。

「もしかして不ｎ「それはないからッ！！」　そ、ならいいわ」

本当に、本当にそんなことはないから！！

これも若さだよ、うん（後書き）

やりすぎた、ちょっと本気出したじらいです。書いた自分が言うのもなんですが、何だこれ？　夜中にこそこそとナニやっているんだ私は！？　…いいよ、夏だから余計に頭がイカレたとでも思ってくれていいです。

…それでですね、今回は前回言った通りに輝夜とのネチョでした。R－18に引っ掛かったら全力で消します。アウトだと思った方、遠慮なく言ってください。自分では基準がイマイチよく解らないです。でも今回の話で解ったことがあります。

寸止めって、難しいですねw

拗ねて落ちて卒業して（前書き）

第１０部まで改訂完了。よければそっちも見てみてください

拗ねて落ちて卒業して

「昨夜はお楽しみだったようね。元気が出る薬、いる？」

竹林からの木漏れ日が届くこの永遠亭では、その住人と弟子一人が談笑しながら朝食をとっていた。

僕に輝夜、師匠にてゐちゃん。皆で一つの食卓を囲む心地良い時間。永遠亭でのお泊りの際には僕が食事担当となるのだけど、何故か今日は師匠が作ってくれた。疲れているでしょう？　と気遣われた時には何事かと、今日は本格的に矢が降るのかと恐怖したけど、師匠が何事もなく朝食を作りだしたのでそれを眺めるに終わった。

だから今日は師匠が作った、それはもう絶品と言える朝食を食べていたんだ。…平和だった。本当に平和だった。

師匠が爆弾を投下するまではね！！

「…し、師匠……。一つ言わせてもらうとすると……五階です」

「ここは一階よ」

だ、駄目だ…。額に滲む汗がこの上なく鬱陶しい。何も疾しいことはない、疾しいことはないはずなのに動揺が止まらない…！　ニヤニヤしているてゐちゃんに、解ってるわ、とでも言いたげな師匠の視線が辛い…！　そんな目で見ないで、僕はやってないんだ。…それでも僕はやってないんだ！！

「輝夜からも何か言ってやってよ！　誤解は解いた方がいいだろ！？」

「…腰が痛くてね、それどころじゃないの」

「ふぉおおおおおおおお！？　大ちゃんやるぅ！　見直した！！」

「誤解だーーーーーーーーーー！！」

「…五回も？　我が弟子ながらあっぱれね」

師匠！　貴方解ってるでしょう！？　解ってて僕を虐めてるんでしょう！？　ほら、すごい笑顔じゃないですか！　さっきのは誤解だと気付いてますよね！？　…そうだと言って下さいよ師匠！！

「輝夜ぁ！！」

「大和、何も言わなくても解ってるわ。…それはもう、激しい一夜だったわ。大和に何度も何度も求められて、私はそれに応じたの。あれほど燃えたのは初めてよ。妹紅の炎なんて比じゃなかったわ…」

「うわーぉ。大ちゃんもやっぱ男だね。やる時はやるんだ。気をつけないとてゐちゃんの貞操もピンチかも」

「やるのはいいけど、程々にしときなさいよ？　盛った獣じゃないんだから」

頬を染めて冗談じゃ済まない嘘を吐く輝夜。自身の身体を抱きしめて、まるでケダモノでも見るような目を向けてくるてゐちゃん。もはや笑顔すら隠さずに、それでも淡々と事務的な注意を促す師匠。

「みんな大嫌いだチクショー！！」

朝食なんて食べてられるかこの野郎！　向けられる視線に居た堪れなくなった僕は全力でその場から逃げだした。みんな酷いよ！　誤解なのに！　ここの皆は僕の敵…いや、女性そのものが僕の敵だ！

信じないぞ！　僕はもう信じないからね！！

◇◆◇◆◇◆◇

「てゐ」

「あいあいさー。連れ戻せばいいんでしょ？」

「ええ、頼むわ」

やれやれ、少しからかっただけなのに逃げ出すとは。あの子のああいった初心な所も可愛いのだけど、そろそろいい歳なのだからそれなりの対応を覚えてもらいたいわね。師匠としてもそうだし、私も一応はあの子の母親なわけだし。

「あの子の調子はどうだった？」

「まだ引き摺ってるけど、ある程度は乗り越えているわ。後は時間の問題ね」

漸く、か。てゐに調査を頼んではいたけど、こうやって実際に会ってみるのが一番あの子の状態が解っていい。輝夜もこう言っているわけだし、もう問題はないのでしょうね。後はあの子がどれだけ現状を理解しているかだけど…。まぁいい、これ以上は関わらないと

決めたのだから。私たちは影から応援させてもらうことにしよう。

「それよりも聞いてよ永琳。大和の奴、私が誘っても受けなかったのよ？　ふざけた奴だと思わない？」

「ふふ。地上の男達の目を集めていたせいか、自信過剰ね輝夜」

「事実じゃない。これでもそこらの女よりは自信があるの。もちろん永琳よりもね」

「あらあら。恋の病に薬無しと言うけどこれは重症ね。まぁ程々に頑張りなさいな」

「当たり前よ。見てなさい、巫女なんて目じゃないわ」

輝夜を前にしてお預けとは、大和も中々どうして意志の固いことで。それだけあの巫女を想っていたのか、それともただ手を出すに出せなかったのか…。気になる所ではあるけど、私も馬に蹴られて死にたくないから見て楽しむだけにしよう。

それにしても、教え子と息子が結ばれると言うのは中々複雑な心境ね。

◇◆◇◆◇◆◇

「タケさんタケさん。僕ね、実は虐められてるんだ。…前からだけど」

「……」

「みんな酷いんだよ？　僕な～んにもしてないのにさ。それなのに勘違いされてさぁ…」

お師匠様に言われて探しに来たけど、流石のてゐちゃんもこれには引くね～。ドン引きだよ。何せ永遠亭を飛び出した大ちゃんがタケノコ相手に話かけてるんだよ？　それも綺麗な三角座りで。思わずこのてゐちゃんが突っ込みそうになったよ。

「君たちはいいよね～。僕に見つからなかったら後は大きくなるだけなんだからさ。羨ましいよ。…僕も昨日大きくなったのを見つけられなかったのは幸いだったけどさ」

ブフォッ！？　卑屈な顔から発せられた不意打ちの下ネタに思わず

噴き出してしまった。この状況で…、しかもわたしが近くにいるって言うのに。仮にも武人なんだし、普通は気付くだろ…くっくくく…あっはははははは！！　だっ駄目ウサ、これじゃあ腹筋が割れる…ッ！

それにしても大ちゃん、そり立ってたわけか…。これは報告することが更に増えたウサ。

「お～い大ちゃん、そんなとこで拗ねてないで帰るウサ」

「…帰んない」

「ただ皆してからかってただけだからさ」

「…その冗談が、人を苦しめることだってあるんだよ」

こりゃ重症だ。まったく、みんなして大ちゃんをからかい過ぎウサ。それにもっと計画的にからかった方が面白…もとい、傷は浅くなるって言うのに。こんなヘタレを連れ戻す役を任されたわたしの身にもなって貰いたいね。

「今回はお師匠様の重大発表があるって聞いてたんだけどな～」

ピクッ、とヘタレの肩が動いた。よしよし、掴みは成功みたい。

「それも永遠亭のこれからの方針～とか言ってたような、言わなかったような…」

ピクピクッ。耳が兎みたいにピクピク動いてるウサ。ウシシ、大ちゃんは確実にわたしの話に興味を持ったようだね。後は釣れるのを待つまでだ。

「大ちゃんにも大事な話があるから呼んだって言ってたのにな～。本人がこれじゃあ意味はないよね…。うん、お師匠様にはちゃんと言っておいてあげるから帰るといいよ。姫様にはわたしからキツく言っておくからさ」

「…あ、あの～、それって本当の話…？」

釣れたーーーーーーーーーー！！

「本当だよ。聞きたい？」

「う、うん」

「だったらこうしてはいられない。さあ早く！　付いて来るウサ！！」

「わ、わか――――――――――――――――――――!?」

立ち上がって一歩を踏み出した大ちゃんの姿が一瞬にして視界から消えた。巧妙に隠されていた私の落とし穴に嵌ったのだ。いやーむしろ不思議だったよ。何で真後ろに落とし穴が有るのに落ちてないの？　ってね。まさか壊れてるかと思ったけど、壊れてないようで良かった良かった。…見つかる心配？　やめてよね、てゐちゃんの罠がトーシロに見破れるわけないじゃない。それに言っただろ？計画的にからかった方が面白いって。

◇◆◇◆◇◆◇

「随分とまぁ、土に塗れたものね」

「てゐちゃんの落とし穴に嵌ったんですよ…。あの兎〆ていいですか？」

「やめなさい」

無理です。あの兎、絶対いつか痛い目に合わせてやる。

永遠亭の一室。ここには僕と師匠の2人しかいない。輝夜とてゐちゃんは師匠のお願いでこの場にはいないのだ。何でも、僕と師匠…師弟の2人きりで話合うことがあるとか。

「私の弟子、伊吹大和。貴方に話があります」

「はい。何でしょうか、師匠」

居住まいを正す師匠に、僕も背筋がピンと伸びる。余程重要な案件なのだろうか、師匠の顔は今まで見た中で最も険しい部類のものだった。

「前に言ったことを覚えているかしら？　弟子は卒業だと」

「はい、覚えてます。でもあれは僕を月との戦いから遠ざける為の口実だったんですよね？　…まさか！」

「察しの通りよ。今日を持って貴方は正式に弟子を卒業する。もうここで辛い修行の日々を送ることはない」

「それは…喜ぶべきなんですよね、普通は」

でも何故か、手放しで喜ぶことが出来なかった。死ぬやら殺されるやら、辛いやら苦しいやらと苦言や泣き言を何度も言ってきたけど、それももう無いと思うと少し悲しいものがある。あの辛く厳しい修行を耐えきったから今の僕がある。そう思うと、何とも言えないモノが込み上げてきた。

「それから…私たち永遠亭はこれ以上貴方を手助けすることは一切ありません」

「そっそれはどういうことですか!?」

「当たり前でしょう？　もう弟子ではないのだから私たちは手を貸さない。降りかかる火の粉は自分で払いなさい。一人前の大人というのはそう言う者を言うのよ」

「…紫さんのことですか」

「…何か気付いたことでもあるの？」

「はい。実は…」

つい先日、ルーミアちゃんから聞かされた事実をそのまま師匠に話した。話している間、師匠は目を瞑って何かを思案しているように見えた。おそらく僕の聞いた話を深く理解しようとしているのだろ

う。月の頭脳とまで言われた人だ、１言えば１００を理解するなんて屁でも無いに決まっている。

「…そのルーミアと言う妖怪は結界を張って話をしたのね？」

「そうです」

「なら何も問題ないわ。…ああ、でも一つ教えて頂戴。全てを知った貴方は、これからどうするつもり？」

「…今は耐える時だと思ってます。その時が来るまで、何も知らない道化のフリでもしておきます。幸いにも向上心のある者だと思われているので、対策を練っていてもまた変わった事でもしているのだと思われるだろうし…。裏はルーミアに任せるつもりなので」

「そう」

「…やっぱり、助言はしてもらえないんですね」

「これは貴方の問題。自分で解決しなさいな。私から言えることは、師の名前を辱めるようは行為はするな、くらいよ」

…手厳しい。けど、誰もがこうやって大きくなっていく。それは誰も変わらない。僕にも漸くその時が来ただけだ。守られるだけの存在じゃない、僕が守っていく存在になる。昔、心に決めた誓いが、今初めて形になり始めたんじゃないか。

「解りました。では、これからは此処に来ることも少なくなると思います」

「何言ってるの、此処には定期的に顔を出しなさい。修行でなくとも、私たちは貴方が来るのを楽しみにしているのだから。…確かに修行はもうないけど、組手の相手ならしてあげるわ。もう手加減は出来ないけどね」

「…！　わかりました！」

よかった、別に顔を出すくらいならしてもいいんだ。関係を切ることと同じことを言われたと思ったから、てっきりもう会うことはないのかと勘違いしてしまってた。これでも師匠たちは隠れている身、本来なら外部との接触は極力避けるべきなのだから。

「じゃあ最後に…師から弟子への、最後の手向けよ！」

言うや否や、跳ねるように立ち上がりお互いに距離をとった。師と弟子。武人にこれ以上の言葉は要らない。積もる話はお互いにあるだろう。でも後は、話すことは全て拳で語ればいい。

正面に師と仰いだ人が立っている。…本気だ。今なら解る。師匠が今までどれだけ手加減していたかが、手に取るように解る。…違う、本気になった師匠は全然違う！　向かい合っただけで誰もが戦意を失う程に恐れる。これが月の頭脳の、八意永琳の正真正銘の本気…！

でも、これからはこういった手前を相手にする時が必ず来る。だからこの組手は、それに向けた予行演習。これが師から弟子への最後の手向け。怯んでなんかいられない。最後に弟子としての、今出せる最大限の力で向かって行くんだ！

「はい！　し…、永琳さん！　…あ～、やっぱり今まで通り師匠って呼んでいいですか？　どうも永琳さんとは呼びにくくて…」

今更永琳さんだなんて、そんなの無理だった。卒業しても、この人が僕の師であったことにかわりはない。長らくそう呼び続けていたせいか、今更『母さん』　とも言い難いし…。

「はぁ…まったく貴方って者は…。好きにするといいわ」

「ありがとうございます！　じゃあ…いきますッ！！」

僕は貴方が生み出し、育て上げた弟子。覚えが悪くてすいません。
泣き言も沢山言いました。悪態も吐いたし、陰口もいっぱい叩きました。でも貴方が居たから僕が生まれて、貴方が居たから僕が居る。
…師匠、僕は貴方の自慢の弟子でいられましたか？　貴方の自慢の息子でいられましたか？

思いは尽きない。その思いを乗せた拳を、僕は精一杯に振った。

◇◆◇◆◇◆◇

～迷いの竹林　入口付近～

…やはり、言い過ぎただろうか。いや、それほど言っては無い。間違ったことは言ってないし、むしろ落ち込んでいるあいつの為に言ってやったんだから感謝されても怨まれることじゃない。ああ、でもあいつ弱いからなぁ。沈み込んだ挙句に自殺なんて…

ああもう馬鹿らしい！　なんで私が大和のことでここまで悩まされ

なきゃならないんだよ！　ああ腹が立ってきた！　あいつが立ち直ったら絶対に一杯奢らせてやる！

「ん…？　何だあれ…？　って、おっおい大和！？　そんなぼろぼろで…何があった！？」

噂をすればと言う奴か、何日振りかの馬鹿姿が目に入った。だけどその姿が普通ではなく、何故か全身傷だらけの状態で足を引きずっていた。それは正に、満身創痍の言葉をそのまま身体で体現しているようで、見ている私の方が身体が疼きそうだった。こいつがこれ程の傷を負うなんて、いったい何があったのだろうか。

「は…ははは、妹紅だ。久しぶりの妹紅だ…」

「久しぶりってお前、前会ったじゃないか。…大丈夫か？」

こんな満身創痍の姿でも、前とは違って頼りがいのある存在のように見えた。今の大和は以前のような弱々しさが抜けていて、何時もの大和らしい大和に戻っているようだった。それでも心配になった私はそう尋ねてみたが、返って来る答えはだいたい予測が着いていた。

「うん、もう大丈夫。心配かけたね…。それに…」

「それに…？」

「届いたんだ、この拳が…。僕の尊敬する人に、やっと、やっと届いた。少しだけど、それでも届いたんだ」

「お前…」

「あ～ごめん、もう無理みたい。後頼むよ」

「おっおい！？」

倒れ込むように私に身体を預けてきた。少し体勢を崩しながらも、男にしては少し低めの大和をしっかりと受け止めることが出来た。どうやら気絶しているらしい。無理もない、何があったのかは知らないがこれだけの傷を負っているのだから。

…でも軽いようで案外重いんだな、こいつ。

「おーい妹紅ー。ちょっと頼みがーーー」

「ああ慧音か、こいつをお前の家に送ろうと思うんだけどいいだろ？」

「――ああ、そうだな。それがいい。それと宴会の準備だな。人里を挙げての」

「そうしようぜ。もちろん代金はこいつ持ちだ」

「はは、困りきった顔が今から目に浮かぶよ」

「それくらいしないと、腹が収まらないね」

――――――――――この愛すべき馬鹿には、さ

拗ねて落ちて卒業して（後書き）

夏休みって誰の為にあるの？　子供の為？　私は子供のおもちゃじゃないと必死に訴えるじらいです。早速ですがちょっと愚痴ります。近所の子供が素直で胸が痛い。夏コミ行ってみたい。暑い。以上です。どうもすいませんね。

タイトルの卒業が童貞だと思った方、良い病院を教えて下さいｗ
具体的に言えば腕が折れてもすぐ治るとこを。そして今回の話、正直詰め込み過ぎました。２話くらいでグッと深く食い込むべきだったかもしれません。特に弟子卒業とか、何気に大イベントですし。でもその分原作にグッと近づきました。…言いわけ乙ですね。

詰め込んだ　ああ詰め込んだ　詰め込んだ

きっと松島を歌った芭蕉先生も同じ心境だったんでしょうｗ　あれです、言葉に出来ないって意味で。…松尾芭蕉が何を考えて歌ったのかは知りませんけどｗ　すいません、知ったかぶりました。

前書きの通り改訂作業も継続中。改訂前との違いと言うか、大和が少し子供っぽくなったと思います。母さんを思って～、なんて入れてみました。目標まであと２８部。夏休み中に終わるわけがない…。

次回はＰＶ１００万記念。長らくお待たせしました…が、甘い話なんてしませんよ？　ここまでの話で出来なかったネタや、裏話など

をちょちょっと書いた小ネタ集のようなものです。題名は今昔大和物語。題名の通り、小さい大和から大きい大和までです。…長くなりそうです

それではまた次回に

番外　今昔大和物語（前書き）

これは本編ではやらなかった、もしくは都合により出来なかったネタです。こんな一面もあったのか、くらいに留めて貰えると嬉しいです。

番外　今昔大和物語

～拾われたばかりの頃～

「びえええええええええええええええええん！！」

「ゆっ勇儀！？　大和は何で泣いてるんだ！？」

「さあねぇ、何でだろうねぇ。あたしゃ連日の夜泣きのせいで寝不足でね、頭がこれっぽっちも働かないよ。周りを見てみな、まるでここが地獄の一丁目みたいだ」

人間との闘いの末に拾われた赤子。大和と言う名前と母親（仮）は決まったものの、誰も人間の赤子など育てたことがない。鬼式の子育て方もあるにはあるが、人間の赤子にそれが通用するか解らない。そうやって考え込んでいる内に連日の夜泣き。鬼達の疲労はピークに達していた。…一人を覗いて。

「おしめか！？　それともお腹が空いたのか！？」

「お乳でもやればいいじゃないか」

「出るわけないだろう!?　よしよし、母さんが付いてるからな～」

初めての子育て、初めての子供。母親となった萃香の奮闘は続く――

◇◆◇◆◇◆◇

～大和5歳～

「お姉さん、だれ？」

「紫じゃないか、久しぶりだね。ほら大和、挨拶しな」

「大和です！　初めまして！」

「あら、出来た子ね。初めまして、私は隙間妖怪の八雲紫。貴方のお母さんの友人よ」

この瞬間、初めて2人は出会った。当時はただの暇つぶしでしかなかった八雲紫と、伊吹を名乗ることを許されなかったただの大和。当時の大和はまだ5歳。あまりにも幼く、そして今よりももっと純粋な子供でしかなかった。

「母親の真似事をしているとは聞いたけど、本当だったのね」

「ふふん、真似事なんかじゃないぞ？　大和は私の自慢の息子だ」

「あらら、熱いことで」

「紫さん、すきまって何？」

「うーん、説明しても君にはまだ解りにくいかな？　そうだ、実際に見せてあげましょう」

「…その変な割れ目がすきまなの？」

「え？　私はまだ隙間を開いて…。まさかこの子…？　ねえ、貴方の目には何が映っているの？」

「わかんない！　母さんたちは未来が～なんて言ってた！」

「萃香？」

「たぶん、ね…。この子は能力持ちだ。それも随分と強力な」

「……へぇ」

若干５歳にして大和はその能力を開花しつつあった。彼女がその能力の全貌を知ることはまだ先であるが、それでも彼女なりのある種の未来予知とでも言うのだろうか、大和の力を感じ取っていたのだろう。その時の八雲紫は口元を歪ませ、それはそれは愉快な笑顔を浮かべていた。頼みの母親が友人の変化を訝しげに見ているのを感じ、すぐさま表情を隠したのだが…。

それ以降は隙間を使い三人で遊んだり、萃香の武勇伝等を聞かされ終始和やかな雰囲気だったそうな…

◇◆◇◆◇◆◇

～大和６歳～

「お姉さんだれ？」

「子供…？　それも人間じゃない。僕、ここで何してるの？」

無知とは罪である。そして罪であると同時に冤罪でもある。妖怪の山から抜け出す手段を持たぬ少年がどうして彼女の存在を知り得ようか。いや、知り得る術などなかった。

普段の彼女ならば幼子など瞬きする間に捻り潰せるだろう。だがそうはならなかった。子供だからか、それとも人間の子供が一人山で釣りをしている度胸を認めたのかは解らないが、彼女の気紛れによって幼い命は失われずにすんだ。例えそれがとるに足りぬ存在故に見逃したのだとしても、少年の命が助かったことは特筆するに値する。

「魚つり！　でもつれなくて困ってるんだ。これじゃごはん食べられないよ」

「あ、そ。…一応聞いておきましょうか。僕、鬼がどこにいるか知ってる？」

「知らない人には教えちゃだめだって、母さんが言ってた」

「母さん？　僕、鬼の子供なの？」

「そうだよ！　母さんはしてんのうでとっても強いんだ！」

「…噂は本当だったわけね」

この頃になると、とある有名な鬼に一人の子供が出来たという噂が山以外にも流れ出していた。もっとも、まだ余り知られていない上に、その噂を笑い飛ばす者の方が多かったのだが。彼女もその笑い飛ばした者の一人だが、現実に目の前で呑気に釣りをしている子供を見ては信じないわけにはいかなかった。そうでないと、このような場所で子供が一人釣りなど出来るはずもないのだから。

「じゃあ何処に住んでいるかくらい解るわよね？」

「だから、知らない人に教えちゃだめだって言われてるんだ」

「（＃、ー｜ゝー）　じゃあ魚をとってあげる。そうすれば知らない人にならないでしょう？」

「知らない人からモノをもらったらだめなんだよ？」

「…名前は風見幽香。（＃＾∀＾）　これでいいわね？」

「は、はいっ！」

ご存知の通り、水中に大きな衝撃を与えれば魚が気絶して水面に浮いてくる。ガチンコ漁と言って褒められる漁の仕方では決してないのだが、そんなことは彼女には関係ないし通用しない。

――同士ノ河童諸君へ。全力デココカラ退避セヨ。水中ハ危険ナリ。繰リ返ス、水中ハ危険ナリ！！

省ける手間は省く。彼女は握りしめた拳で水辺の石を殴りつけ、その衝撃によって辺りを泳いでいた魚達がゆらゆらと浮いて流れてきた。そして残念なことに、この山の川に住むものは魚だけではない。…その光景を見れば誰もが納得するはずだ。妖怪の山では、河童も衝撃で気絶するという事実と、河童の川流れとは本当に河童が川を流れていく様を言うのだと。

「これで魚は十分でしょ？　ほら、鬼が何処にいるのか教えなさい」

「アッチデス」

「そう――」

魚と河童が同じように流れていくと言う阿鼻叫喚の光景を前に、少年は身体から沸き上がって来る震えを止められずにいた。だが少年の恐怖はまだ始まったばかりだった。彼女の手に持たれた日傘から視界いっぱいの妖気の塊、所詮レーザーらしき物が放たれたのだ。それもつい先ほど少年が指差した方向、つまり鬼の集落にだ。放出された妖気の塊が集落付近に激突し、光が弾ける。遠く離れた場所、少年のいる川にまでその余波が届き、その余波に耐えきれなかった少年は岸辺をころころと転がって木に当たって止まった。

その瞬間、山の所有者たる鬼神の怒気が一気に山を包み込んだ。鳥たちは一斉に木々から飛び立ち、大地では様々な生き物が身に危険を感じて走り出した。空ではその鳥に混じった天狗達が我先にと山から逃げ出して行く。鬼神の怒気とはそれ程のものなのだ。

そして件の少年と言えば、嘗てない程の気に当てられ逃げ出すことも出来ず、その場で気絶した。その気絶する瞬間にふと目に入った彼女の表情は、それはもう極上の笑みだったそうな…

◇◆◇◆◇◆◇

～大和7歳～

「だからこの『妖力増加装置』　を付ければ文も鬼の妖力に追いつけるかもしれないんだって」

「にとり、出来れば魔力増幅装置も欲しい！」

「まぁ待ちなよ。それはこれが完成してからだ。…文、準備はいいかい？」

「準備完了！」

「じゃあいくよ！　ぽちっとな」

妖怪の山の問題児。少年と少女らがそう呼ばれるのには理由がある。

一人はその生まれ持った才能から将来を約束されていた鴉天狗。だが現在はそうではない。彼女自らその約束された将来を反故にしたのだから。天狗社会の為に生きていればよかったものを、最低限のルールを守るだけに留め、己の道楽の為にひた走ったのだ。人間に、しかもまだ子供でしかない者に誑かされた愚か者。そう影口を叩く者もいるが、それは彼女がそれでも優秀な証拠か。

一人は人間を盟友と謳いながらも人見知りをする河童。この世の物ではないような、まるで未来の産物のような物を操って摩訶不思議な現象を引き起こす天災集団の一員。彼女たち河童にしてみれば作れない物などありはしない。その謳い文句と共に今日も山の地形を変える程の発明を起こす。

一人は山に住むたった一人の人間であり、鬼の子である少年。彼の存在から魔法使い成る者を聞き、日々その存在になるために努力を惜しまない。こう聞くととても素晴らしい美談のように思える。が、それをフォローする者を思えばそうとは思えない。考えてみて欲しい。猛獣の群れに放り込まれた一匹の草食動物がいったいどういう存在なのかを。自身は気付いていないだろうが、山での少年は正に

それなのだ。いくら鬼がバックについているとはいえ、それを理解できない妖怪など山には数え切れぬほど存在する。少年が一人特訓を行えるのは、一重に哨戒天狗たちの血の滲むような努力の結果なのだ。

故にこの三人は山の問題児として、一部を除いて広く知れ渡っている。そして誰もがこう言うのだ。『ああ、またあの3人か』　と。

「成功だ！　文の妖力が膨れ上がっていくぞ！」

「でもこれどうやって止めるの？」

「あ」

「ちょっとにとり！？　これ止まらないんだけ――――――――

そして今日も妖怪の山には愉快な爆音が響き渡るのだった。

今回の原因→増加した妖力の暴走

◇◆◇◆◇◆◇

～大和１３歳～

「あの魔道機関を改良したい？　そうは言われても最近の魔女狩りのおかげで魔道具を扱う店なんて一般にはないで？」

「やっぱそうだよね…。はぁ、せっかくパチュリーが改良案出してくれたんだけどなぁ…」

大和の師父、武天が授けた魔道機関『イクシード』。込められた魔力を三倍にして持ち主に返すという意味増幅器のような役割を果たす機械なのだが、誰がどう見てもオーバーテクノロジーの塊でしかない。しかも渡された当初はさびた鉄屑でしかなかったのだから、オーパーツと言われても頷けるだろう。それでも今では本来の形を取り戻し、新たな持ち主である大和の力になるようにパチュリーが解析・改良案を提示した。その為にイクシードを改造出来る場所を探しているのだが、魔女狩りの影響は多方面にも渡っているようである。

「まあ待ちいや。一般に無かったらワイらはどうやって魔道具の整備をすると思う？　蛇の道は蛇。ほれ付いてき、ワイら守護騎士専用の工房に案内したる」

そう言われ、案内された場所には小さな工房があった。それも人目を避けるかのようにひっそりとした路地裏に建てられており、一般人の目には確実に留まらないように配慮されていた。

「おーい爺さん、仕事やでー」

「あ、ケビンさんお久しぶりです。すいません、おじいちゃんは今出ちゃってて私しかいないんです」

「そうなんか？　それは困ったな…」

「何か急ぎの用事ですか？　何ならわたしが見ますけど…」

「お、さすが爺さん秘蔵の孫娘やな。ほれ大和、物を渡し」

目の前には長い金髪に赤いベレー帽、ゴーグルという特徴的な格好をしている少女。歳は大和と同じかそれより下か、自身と変わらぬ年齢の少女に大和は内心不安がっていた。自身と変わらないような少女に師父から貰った大事な物を預けて大丈夫なのだろうか、と。

「…言っとくけど、この子は魔道具に関しちゃワイらよりも博識やで？　ワイもようお世話になっとるし、深く知り合えるええ機会やないか」

「えへへ、最近は機械についても勉強を始めたんです。だからその、預けて貰えますか？」

「…解った、じゃあ頼むね。ああそうだ、これ解析結果と改良案なんだけど…」

「これは…こんなの見たことが無い。騎士団の新たな戦術魔道機？　ううん、それでも規格外すぎる。造りも精巧で僅かな歪みもない、こんなの今の技術力じゃ絶対に出来ないのに…。いったい何処の誰がこんな代物を――――ってはぅ！？　すっすいません！　わたしこういった物を見ると夢中になっちゃって！？」

「はは、すごいね。一応解析結果と改良案があるから渡しておくね」

「あぅ…すいません…。でもこんな物、いったいどこで手に入れたんですか？」

「僕の師の一人から貰ったんだ。何時か役に立つ時が来るからって」

「そうだったんですか…。あ、この改良案なんですけど、実現するにはたぶん時間が掛ると思います。解析結果があっても実際にバラしてみないと解らないこともあるんで…」

「その辺はお任せ、ちゅうことで。大和君もええやろ？」

「うん。じゃあお願いするね？」

「はい！」

こうしてイクシードは改良され、魔法媒体としても使える短剣に搭載されることになるのだが、それは何年も先のことである。

◇◆◇◆◇◆◇

～大和１４歳～

「いやぁー今回もお疲れ様」

「……」

「大和君のおかげで今回の任務も無事成功！　お互い怪我もないし大成功やな！」

「いったい誰のおかげだと思ってるんです！？　毎回毎回僕と敵が

重なるように位置をとって、オマケにその後からボウガン撃つし！
　避けれなかったら死ぬよね！？　僕が敵の銃弾避けてもケビンさんが死ぬよね！？」

騎士団の任務を終えて帰って来た二人は人目も憚らずに言い争っていた。とは言うものの、熱くなった大和が一方的にケビンに捲し立てているだけなのだが。しかしそれも仕方が無いことなのかもしれない。何故なら大和の言う通り、ケビンは毎回大和と一直線になるような位置取りをする。そうすることで自身に迫る攻撃を大和という盾で防いでいるのだ。そして敵に隙があれば大和の真後ろからボウガンを放つ。大和の言う通り、これなら何時どちらかが死んでもおかしくないだろう。

「おい見ろよあの二人。また言い争っているぞ」

「まあ、またあの二人？　華の騎士団にもああいう輩はいるのねぇ」

大和とケビン。名前こそ知れ渡っていないが、その格好と騎士団から流れ出る噂が噂を呼び、二人は騎士団の中でも特に民衆に知られる存在になっていた。一人は騎士が着ないような派手な礼服を纏った長身の男。一人は執事服に、背中に騎士団の紋様が刻まれたロングコートを羽織った少年。こんなデコボコ異色コンビが目立たない訳が無かった。

「ほれ大和君、人の目もあるからそれくらいにしとき」

「他人事!?　まさかの他人事なのこれ!?　なんなら団長に直訴するよ!?　コンビ解消だって!」

「大和君!」

「っ、何だよ…」

「上手い飯でも食べに行こう」

「…は……ははははは……。その顔が陥没するまで殴ってやる!殴ってやるぞ!!」

「止めてや、せっかくのイケメンが台無しになってまうやろ?」

こうしてまた悪い噂が流れ、それを聞いた副団長は頭を痛めるのであった。

◇◆◇◆◇◆◇

～大和　15歳～

「ケビンさん、僕はただの手伝いだよね？」

「そうやで。ただのワイのお手伝いさんや」

「じゃあさ、何でこんな重要マークが付いている書類を僕に回すの？」

「そりゃお前、その方が効率ええからに決まっとるからな」

聖堂騎士団守護騎士第七位就き特別補佐官（出向）

長い役名であるが、簡単に言うと雑用係である。しかしただの雑用係ではない。特別補佐官とはデスクワークも戦闘もこなさなければならない役職なのである。守護騎士には正騎士や従騎士が何名かで補佐をするのだが、彼のような問題児にはそれでも数が足りない。そこで白羽の矢が立ったのは彼の友人であり、彼のことを良く理解している大和だったのである。

普段ならケビンの幼馴染であり従騎士である女性が仕事をしろと五月蠅く言うのだが、生憎と今日は出張っていてここにはいない。その為に大和が重要書類を捌いているのだが…。

「止めてやるぞ…。こんな職場、絶対に止めてやる…。アルフォードが何か言ったらぶん殴ってやる…。協力関係？　ハッ、だったら自分で出向すればいいんだ」

「そんなこと言わんとって。大和君に見捨てられたらワイどうすればええん」

「潔く尻に轢かれればいいよ。よかったね、墓場まで一緒だ」

「堪忍してや…今日『も』　ええ店連れてったるさかい」

ここで言う『ええ店』　とは……『ええ店』である。未成年は知らなくてもいい店である。ただ美人なお姉さんが居て、お酒が出てくるだけでなんの問題もないお店である。強いて言えば、そのお酒が銘柄以上に高値で売られているので財布が軽くなることくらいか。

「…前と同じお店がいい」

「へへ、なんやぁ？　大和君もイロイロと好みがあるんやな？　この浮気もん、レミリアちゃん達が知ったらなんて言うやろな～？」

「別に何も言わないよ、ただお酒を飲みに行くだけだし。それより早くしないと彼女が帰って――」

「もう帰ってます」

空気が死んだ。間違いなく二人がいる執務室の空気が死んだ。それも仕方が無い、二人が今一番聞きたくない声が部屋に響き渡ったのだから。

二人の男の額は汗で光っている。実は彼らが如何わしい店に行っているという噂は既に聖堂・ヨハネ騎士団内では結構有名なことなのだ。それについてとやかく言われないのは実際にその光景を見られたことが無かったことと、騎士団で問題視されるケビンでも流石にそれは、と思われていたからである。

幻術に長けた大和が追跡の目を誤魔化し、悪名高いケビンが嘘か真かをただ立っているだけで誤魔化す。そうした二重の誤魔化しによって二人は夜の街に消えてきたのだが、今回ばかりは現場を抑えられてしまった。それも厄介な相手に。会話だけとはいえ、それでも聖堂騎士団式拷問術で追求する価値があるものを聞かれた二人の心境はどれ程の言葉を以てしても形容出来ないだろう。

「ケビン、ちょっと外でお話しましょうか」

「おッ落ち着け、落ち着いてくれ頼むから！　その法剣を下げようや、な…？」

こうなってしまえば最早これまで。幼馴染に剣を向けられた友人を尻眼に、大和は幻術で姿をくらまして離脱を計る。そしてそれは成功するのだが、執務室を後にする彼の耳にはある種の死刑宣告が届くのであった。

「紅魔館の方にも証拠が揃い次第、正式に報告させて貰いますね？　実は私、今日はその調査だったんです。あそこのお嬢様に貴方の身辺調査を依頼されまして。でもよかった、見つからなかった証拠が目の前に現れたので依頼は成功ですね」

後日、紅魔館に大和の悲鳴が響いたのは記すまでもないだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

～大和永遠の１６歳　幻想郷～

「ゲホッゲホ、すまないな伊吹君。子供たちを頼むぞ…」

「僕も精一杯頑張ります。だから慧音さんも安静にしてくださいね

？」

人里で依頼をこなすようになった大和には様々な仕事が舞い込んでくる。食材集めやその護衛、果てには喧嘩の仲裁まで様々なものだ。そして今回は風邪で寝込んだ慧音の代わりに一日教師を頼まれた。不安はあるがそれでもやるしかない、何故なら大和の仕事は何時の間にか何でも屋に変わってしまったのだから。

「はい、皆こんにちわ。今日は慧音さんから頼まれて僕が先生だから、わからないことがあれば何でも聞いてね」

「「「はーい」」」

とは言うものの、事前準備もなく授業など出来るわけもない。更に大和が持つ知識と言えば、魔法とその効率的な運用方法。その為の数式や物理式、そして諸外国でのコミュニケーションに必要不可欠だった言語くらいか。もっとも、言語に関しては魔法を介していたため余り褒められる出来ではない。後は身体を鍛える方法だけだが、それを実践させると間違いなく死人が出るためそれは却下した。

以上の事から今回は自習でいいと前もって慧音から言われていたために今回は自習で済ませ、何かあれば大和の解る範囲で教える…となっていたのだが、ここで一つ問題が起きた。

「大和せんせー、男と女の違いって何ですかー？」

二次性徴を間近に控えた少年が大和にそう尋ねたのだ。その少年の名を一郎と言い、その後には三人の弟達が連なっている。そう、これが大和と彼ら四兄弟の初めての出会いである。

男と女。思春期を迎えた子供達なら誰しも一度は考えたことが有るだろう問題を、永遠の１６歳である大和は解決しなければならない状況に追い詰められた。何せ今日は一日先生、生徒の質問にはしっかりと答えなければならない。自身の少ない知識を総動員して大和は必死に説明した。身体の造りの違いや何故かその魅力について、そして発達する心の違いを詳しく、それはもう詳しく語った。必死に説明する大和に、まるで何かの宗教にでも毒されたかのように熱を帯びていく四兄弟。その結果――

「うん、じゃあ実際に慧音さんに聞いてみようか」

己の思考の限界を感じた大和は、自身の勉強も兼ねてそう宣言したのだ。後の寺子屋異変の始まりである。大和自身も絶え間なく押し寄せる質問に頭が追いつかなくなったのだろう、しかし宣言したのは正しく変態のそれであった。

次の日、甲高い悲鳴と鈍い音が人里に五回鳴り響いたのだが、その理由は記さずとも理解出来るだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

～大和永遠の１６歳～

大和と零夢の半ば同棲とも言える奇妙な関係が続いてから早二年。二人は何度も衝突し、その度に無益な闘いを繰り広げてきた。例えば風呂場でばったり会った時――

「くぁｗせｄｒｆｔｇｙふじこｌｐ！？」

「…失礼しましたー」

扉を閉める大和だが、その扉ごと大和を蹴り飛ばす零夢。もちろん直ぐに蹴り飛ばしたためさらし姿のままである。更にその姿を見た大和が…の繰り返しに逆切れした大和も応戦。

例えば残り一つの煎餅の取り合い――

「…ちょっと、あんたその手を退けなさいよ」

「…誰がこれを買ってきたと思ってる？　そっちこそ譲れよ」

「年寄りは若者に譲りなさい。あんまり食べると歯が抜けるわよ」

「ぶくぶく太りたいのか？　巫女のくせに空が飛べなくなるよ」

どちらの手が早かったのか？　それは大した問題ではない。どうせ結局は組んず解れつの大乱闘になるのだから。そして何百年も生きた１６歳と、若干１３歳の花も恥じらう乙女の醜い争いは次第に間接を決め、『まいった』　『まいらない』　の寝技の応酬へと変化していく。ぎゃあぎゃあとお互いを罵りながらも笑顔が絶えないそんな日常。

しかしこの男女、本当に恥と言う言葉を知らないのか…

そして今日も今日とて、神社では騒がしい一日が始まる。そこには笑顔が溢れ、互いを信頼し合う二人の姿があったそうな…

「大和！　あんたまた――――――」

◇◆◇◆◇◆◇

～ちょっと先の未来で～

「……」

「どうです？　大和さんのこれまでを特集記事にしてみたんですけど」

「へ～…師匠、お前も大概馬鹿だな」

「……捏造だよ」

「マジかよ、自分の師匠がこんなにも変態だったなんてショックだぜ」

「いやぁ～これでもまだ押さえた方なんですよ？　ね、大和さん？」

「会話が成り立ってないね。とりあえず文は後で泣かす。でもその前に失礼な弟子を泣かす！」

「来いよ変態！　外聞なんか捨ててかかって来い！」

「この野郎ブッ飛ばしてやる！！」

「いったい何が始まるんです？」

大参事大戦だ。

オワレ

番外　今昔大和物語（後書き）

別にゴーグルの少女が某孫娘だなんて宣言するつもりはないじらいです。どうもお久しぶりです。

今回はＰＶ１００万記念と言う形でやってみましたが、案外楽しいものでした。本編に関わりがあるといえばあるんですけど、何故か気が楽でした。大和主観じゃないかもしれません。機会があればこう言う短い話もやってみたいです。

でも本当はもっとやりたかったんですよ。萃香暴走ルートのｉｆとか、つい最近の輝夜爆走ルートなどなど。ここまで長い話？　を読んで下さった皆様の為に後書きで輝夜ｖｅｒの触りだけでも…と思ったのですが、一行書いて止めましたｏｒｚ　根性無しの私をどうか許して下さいｗ　理由？　エロイのしか書けそうになかったからです（キリッ

人生って何があるか解らないよね（前書き）

何時もよりグダグダです。キャラ崩壊に注意して下さい

人生って何があるか解らないよね

「ご主人さま、昨晩は楽しかったね！」

「知りません、覚えてません、やってません！」

「いい加減に認めようよ～」

「…それよりもルーミアちゃん見てよこの財布。可哀そうだと思わない？」

「後悔してないし反省もしてない。両方の意味でごちそう様なのか」

突然で申し訳ないけど一つ言わせて欲しい。僕は無一文である。言い方を変えてみると、無一文にさせられました。身に覚えのないことを言うルーミアちゃんもどうにかしないといけないけど、これでは生活ができない。口を開けば『金をくれ』　が口癖になってしまいそうなくらいだ。更に無一文どころか多額の借金すら出来てしまった…と思う。これから先のことを思うと非常に泣きたくなるのだけど、そこは僕も男の子。溢れんばかりの涙をぐっと堪えて雨のせいだと言い張ります。

何故僕が無一文になったのか？　それを知るには昨晩まで遡ってみ

ようか…

◇◆◇◆◇◆◇

「……妹紅…？」

「やっと起きたか。身体の方は大丈夫か？」

「うん…見た目よりはだいぶね。綺麗に痛めつけられたから治りも早いはずだと思う」

「…それはそれで怖いな。なら行こう、慧音が待ってる」

妹紅に家まで運んで貰う様に頼んだはずなのに何故か慧音さんの家で目が覚めた僕は、あれよあれよと言う間に里で一番高級な料亭に連れて行かれた。こんな料亭で食べられる程のお金を今は持ち合わせてないよ？　そう言った僕を完全無視した妹紅は、僕の腕を引っ張ってどんどん奥へと突き進む。

道中には部屋に入りきれなかったのか、大勢の人が酒を片手に酔っぱらっていた。中には子供達の姿も見られる。もちろんこちらはお酒ではなく、お茶と料理のみだったけど。どうやら既に宴会が始ま

っているみようだ。

何か祝い事でもあったのかな？　そう思いながら歩いていると、何やら不吉な声が耳に入ってきた。

「今日は大和の奢りらしい。命一杯飲んで、あいつの懐を軽くしてやろうな！」

「最近元気がなかったのが治ったらしいからな、景気づけにこれ一杯！」

「く～ッ！　他人の金で飲む酒は上手いねぇ～！！」

…ちょっと待て、僕の奢りだって？　この人里最高級の料亭で僕の奢り？　懐を軽く？　馬鹿言っちゃいけないよ。この人数でこの料亭、手持ちとか家に置いてあるお金とか関係なしに、これじゃ間違いなく借金生活まっしぐらだ。

「もっ妹紅？　これはいったいどう言うことなんです…？」

「あん？　お前の復帰祝いが何時の間にか大きくなっただけだよ。喜べ大和、お前の復帰祝いに里中の人間が今日ここに集まったぞ。ああ、比喩じゃなくて言葉通り全員な。もちろんお前の奢りで話が

着いてるから観念しな。ああ、お前の財布の中はもう空っぽだぞ。私が慧音に渡したからな」

そう言われ、慌てて財布を確認するも既に軽くなった布切れだけだった。それを見て項垂れている僕の肩を叩くのはニヤついた妹紅。何処で貰ったのか、手には一升瓶が持たれている…っておい！？それ幾らすると思ってるの！？　しかも里中！？　この人達の子供の夕飯はどうするの？　もしかしてそれも此処で僕持ち？　里の人口がどれだけか解って言ってるの？　僕、本気で生活出来なくなるよ？

寝起きの頭がぐるぐると、嫌な予感で満たされていく。しかし驚きはこの程度で終わりはずもなく、奥の部屋へと進むに連れて宴会場は更に混沌としていく。

「見ろお前ら！　あっちで慧音先生と黒いお嬢ちゃんが飲み比べしてるぞ！？」

「わははーどんどん酒持ってこーい！！」

「何だこの酒は！　上手いじゃないか！？　えぇい造った奴は私の頭突きをくれてやる、表に出ろぉ！！」

「「「「押す！　先生の御凸、味わわせて貰います！！」」」」

酒を飲んでも飲まれることのない慧音さんが箍を外してしまったのか、一番奥の席で持って来られる酒を浴びるように飲み干していた。いったい何処で何を間違ったのか、清楚な慧音さんが姐御な慧音さんに変身してしまっているではないか。

そしてその隣ではどうやって入りこんだのか、家で留守番をしていたはずのルーミアちゃんが酒と摘まみに舌鼓を打っている。二人とも完璧に出来あがっているようで、酔っぱらって口に入れられなかったお酒が服を濡らし、身体のラインが完全に浮き上がっている。…うむうむ、これは眼福です。ってそうじゃなくてだね…。

一人この雰囲気に乗っかれない僕を傍目に男衆はそんな慧音さんを見て歓声を上げ、それに気を良くした慧音さんは更に酒を豪快に呷っていく。…ルーミアちゃん（小）　を見て歓声を上げる奴等なんて僕の目には入って来ない。来ないったら来ないのだ。

「残念だ…本当に残念だな大和…。慧音と潰れるまで一緒に飲んだことの無いお前は知らなくて当然だろうけど、あいつは本気で酔うと人が変わったように凶暴になるんだ。ああなったらもう私にだって止められない、本気で破産を覚悟しておくんだな。…同情するぜ」

「ちょ――――」

「おお主賓！　そこにいるのは主賓じゃないか！　早くこっちに来い、私が酒を注いでやろう！」

「ほら早く行け、私はあっちで静かに飲ませて貰うから…っさ！！」

慧音さんが大声で僕を呼んだからか、周囲の目が完全に僕に集中している。いやぁ照れるなぁ…なんて軽い冗談も出ないくらい、いろんな意味で怖いです。その光景にたじろいでいた僕の背中を、妹紅は容赦なく強く押してくれた。酷い。そして野次やら拍手やらで騒々しい輪の中に僕は放り込まれた。気分は見世物だよまったく…。

「飲め」

「いや、あの、慧音さん…？」

「私の酒が飲めんのか」

お前本当に誰だよ、なんて聞く度胸が僕には無かったです。

「い、いただきます」

「タマついてたら、どう飲めばいいかくらい解るよな」

慧音さんが僕に酒を渡すと、つい先程まで騒がしかった会場が恐ろしいほど静かになった。この場に居る誰もが僕を見守っている。完全に見世物な上に引くに引けない。どうしてこうなったのか？　これも僕の奢りなのか？　ルーミアちゃんは何でいるの？

なんて理屈っぽいことはもう全部投げ捨てて、僕は酒を呷った。もう考えるのが面倒になったんだ、てへ。

「「「「しゃぁあああああああああああああああ！！」」」」

御望み通り全部飲みほしてやると周囲から雄叫びが上がった。はっはっは、もう知らない考えない！　ヤケクソでも何でも今を楽しんでやるぞコンチクショー！

「よ～し教え子共、今日は飲むぞー！！」

「「「何処までも付いて行きます、慧音センセーーーーーー！！」」」

◇◆◇◆◇◆◇

…とまぁこんな感じで僕も宴会に突入して嵌めを外しちゃったわけです。暴走した慧音さんの、非常に愛の籠った頭突きを避けながらだったけど、久しぶりに多くの人と触れ合えた楽しい一夜だった。

特にアレだ、一郎さんとの話は盛り上がったね、うん。

何を話したかって？　そりゃあ服が身体に張り付いて身体のラインが見え見えだった慧音さんに決まっているじゃないか。気付けばほぼ男衆全員が集まってあの子が可愛い、あの子が狙い目だなんて話も始まっちゃってさ。いやぁ年頃の初心な青年を弄るのは楽しかったねぇ…。人を弄るのがこんなに楽しいとは思わなかったよ。…やられる方はたまったもんじゃないけどさ。

そうこうしている内にそれが女性達にばれて、一郎さんを始めとする既婚者は嫁にしょっ引かれて行った。霧雨家の嫁って手加減なしなのね、思いっきり顔面を強打たれてた。浮気者はしょうがないな！　そう言って僕も含めた半分以上はその光景を見て笑っていたんだけど、気付いた時には僕にとっても笑いごとじゃなくなってた。酔っぱらったルーミアちゃんが僕の首根っこを掴んで攫おうとしたのだ。結婚するー、とか言って。

幼女か！？　やはり幼女なのか！？

なんてふざけた事をぬかした独身貴族を気取った結婚出来ない男共には、しっかりと愛の籠った拳骨をくれてやった。何度でも言うけど、僕は『お酒の入っていない』　慧音さんが好みのタイプです。結局その後も皆で酒を飲んで食べて暴れて――そこから記憶が無いんだよね。でも目が覚めた時には家の床で寝転がってたから、ちゃんと帰ってこれたとは思うんだけど…。

問題はその後。隣でルーミアちゃんが寝てた。それはまだいい、何時も勝手に布団を敷いて寝てるから。でも何故か僕のすぐ隣で『例のあの後』　のように衣服が着崩れしていた。

そんな、まさか…？　嘘ぉ？　…ないない！　例えナニがあってもそれだけは絶対にない！　証拠だ、証拠を出せェッ！！

なんて一人悶えながら証拠を探しているとルーミアちゃんが目を覚ました。↑今ココ

「じゃあ働こうか。主に借金返すために」

「うぅ、わたしの為に頑張ってねあなた…」

「よし、一度表に出て肉体言語で会話しよう。話はそれからだね」

「もう、昨日に続いて今日は外でだなんて…」

「もうヤダこの子…」

この際輝夜でも母さんでもいい、誰でもいいから僕を助けて――

「失礼、大和殿。少し尋ねたいことが…何をしているのだ？」

そんな僕の心の叫びが天に届いたのか届かなかったのか、運が良いのか悪いのかは知らないけど僕の家を訪ねる人がいた。あの紫さんの式、八雲藍さんだ。しかも家の扉を開けたタイミングが非常に拙い。だって僕、現在ルーミアちゃんに伸し掛かられて肩揺すられてますから。

「いえ、ちょっと取り込み中なんです。変な意味ではなく」

「ご主人さまは責任とらないのか？」

「責任…？　大和殿、あまり良い趣味とは言えないぞ」

「誤解ですって！　藍さんも騙されないでくださいよ！？」

あーもうっ、何でこうややこしくなるかなぁ！？

「…ふむ、見た感じそれらしい痕跡は無し。あの臭いも確認出来ず、か…。大和殿の言う通り、私の早とちりだったようだ。すまない」

「あ、いえ解って貰えたならそれでいいんで…」

臭いって藍さん、僕少し貴方が解らなくなりましたよ。でも流石、何時でも冷静なんですね。そう言う所は凄く羨ましいですよ。ええ、そこだけは本当に…。

「むむ…何かと思えば、それを忘れてたのか」

君はもう黙ってなさい。

そして藍さん、謝るらなくていいですから。むしろ早く帰って貰いたいです。零夢の仇の一人が目の前にいると思ったら、今にも飛び掛かってしまいそうな自分が居るんです。どうやら僕は貴方と違って冷静な人間じゃないみたいです。自制を心がけていても詰め寄りたい自分が此処にいますからね。

「…しかし大和殿も変わった趣味をしている。自身の命を狙った者と共に暮らすなど、危険だと考えたことはないのか？」

「嫉妬か？　それは嫉妬なのか～？」

「何、事実を言ったまでのこと。先日もここで強い結界の構築を察知したのでな。家主である大和殿が漸く帰って来たようなので、今日はそれについて聞きに来たわけだ。…大和殿、この妖怪に何かされなかったか？」

「大丈夫です。ちょっと暴れられましたけど大したことじゃなかったので」

半目になって探るように見つめてくる藍さんから、なるべく自然を装って目を逸らす。たぶん今、この人は僕の心の内を探っているはず…。

狐は一種の読心術のようなことも出来るはずだ、ルーミアちゃんからはそう聞かされた。ではどうやって？　読心術は心の動きを捉えることから始まると言われている。ならそれは僕の流水制空圏の原理と同じなんだろう。だとすれば、それは相手の目を見て心の流れを探る類の物のはず。読心術対策に大切なのは、まず目を合わせないことだと僕は結論づけた。

しかしそれでは足りない。ルーミアちゃんと僕の読みが間違っている可能性もある。だから完璧に騙し通すには、幻術で藍さんの心を気付かれないうちに騙すしかない。おそらく霊格が高いであろう九尾の狐である藍さんにどれだけ僕の幻術が効くかは解らないけど、これはもうやるしかない。出来ればもっと前準備が欲しかったけど無い物強請りだ。頼む、気付かないでくれよ…

…目を逸らして何秒経っただろうか、胸を叩く心臓の音がはっきりと耳に届く。まだか…まだなのか…？

「……解った。大和殿がそう言うのならそうなのだろう。だが何かあれば何時でも相談してくれ。私なら何時でも相談に応じるぞ？」

「あ……あはは～、じゃあ僕と結婚しません？　そうすればルーミアちゃんも諦めてくれるだろうし」

「フフ、君もそのような冗談を言うのだな。では前向きに検討させ

て貰うとしよう」

「よろしくお願いしますね～」

最後に妖艶な笑みを浮かべ、藍さんは僕の家から帰って行った――

――――――――――

――――――――――ぶはぁッ、よ、よかった～～～～～……。

一気に緊張が解けたからか、身体中の空気が口から溢れ出て行った。流石に今回ばかりは騙せないかと思ったよ。寿命も何年か縮んだかも…。でもその甲斐あって結果は良好…のはず。緊張しすぎて最後に変な事言っちゃったけど、それも冗談だと受け止められたみたい。

「ご主人さま、素晴らしい演技力だね。わたし感動したよ」

「ありがとうルーミアちゃん。そう言って貰えると苦労した甲斐があったよ」

「うん。だって最後の部分とか思わず噴き出しそうになっちゃったし。…騙すためとはいえ、ちょっと冗談が過ぎたんじゃないのかー？　嫁の名前を言ってみろ、なのだ」

「……僕にしてみれば君も冗談みたいな存在だよ」

油断も隙もあったもんじゃないよ、まったく。

人生って何があるか解らないよね（後書き）

正直宴会だけなら今回の話いらなかったと思ったじらいです。まぁその為に藍様に出てもらったのですが…あまり必要な内容ではなかったと少し後悔。はっちゃけるのが目的だったのでどうでも良かった…とは言いすぎですかねｗ

慧音先生ご乱心！　普段しっかりしてる人って酔うとすごい…と思うんです。だからやっちゃいましたｗ　ルーミア？　最後にヤンデレにしようかと一瞬迷って止めました。

次回からも更にグダグダになるかと思いますが、何卒ご容赦を。それでは

「なんかもう、一気に疲れた気分…。僕もう一回寝るけど、ルーミアちゃんはこの後どうするの？」

「わたしも一緒に寝るー。もちろん布団は一つでＯＫ？」

「Ｎｏ，子供は外で遊んできなさい」

「ご主人さまは年上好きじゃなかったのかー？」

「僕より年上なんですか！？」

ルーミアちゃんの暴走・藍さんの調査なんて濃い過ぎる午前を過ごして疲れ切った僕は、昨日のお酒も抜けきっていないこともあって、今日一日は家でごろごろしていようと二度寝に入ろうとした。ならば私もと、もはや僕の隣が定位置になりそうな…悪友？　何故かご主人さまとか言われてるけど、僕にしてみれば悪巧みをする友達です。

友達だ、なんて言っても本人は納得しないだろうけど、僕は子供を侍らすような変態的思考は持ち合わせてないので断固拒否します。出来れば呼び方も大和に変えて欲しい。知らない人が聞いたら確実に誤解されるから。

…もういいや、面倒臭いし寝よう。もちろん布団は二つで。寝てから考えるよ…。

そんな訳で横になったのはいいけど、最近特にべったりなこの子がそう簡単に諦めてくれる訳もないわけで。ごろごろと転がって布団に侵入してくるの金髪の小さな悪魔。これがボンッキュッボンッなお姉さん系だったら…なんて思うのは実際に変身出来るこの子相手に対しては愚の骨頂でしかない。むしろ本気で迫られたらどうしようもないので、逃げるために僕もごろごろと部屋の中を転がっています。

いや、立って逃げろよ。なんて言葉よりも先に眠気が吹き飛んで吐き気が沸いてた。二日酔いなのに転がり回った僕の阿呆。

「う〝ぇ〝気持ちわる…。ルーミアちゃん水とって」

「ご主人さまは鬼の子供なのにそんなにお酒強くないよね」

「肉体的にはちょっと変わった人間なだけだから……ん？」

渡された水をちびちびと口に運んでいると、遠くから知らない魔力反応が近づいてくるのを見つけた。…でも珍しいな、魔力持ちはほとんど魔法の森に住んでいるから知ってるはずなのに。何でか知ら

ないけど僕が魔法の森の主（仮）　みたいに言われてるから、これでも気には懸けてるんだよね。言ってるのは森の木とか生き物とかだけだけど。

まぁそれほど強い魔力は感じないから問題ないと思う。何かトラブルでもあったら僕の耳にも入って来るだろう。それにわざわざ森の目の前にある僕の家に来るわけでもないだろうし。

「反応、扉の前で止まったね…。ご主人さまアレだし、わたしがヤろうか？」

「待って…あっちは何もする気が無いみたい」

敵意…とでも言えばいいのか、感じられる魔力に棘々しいモノが感じられない。と言うか、むしろ必死で敵意が無い事をアピールしているかのような慌しい印象すら感じられる。

「ご、ごめんくださ～い」

すると少し緊張した様子の声が聞こえてきた。家に踏み込んでから挨拶をする某焼き鳥屋さんや、伝言を伝えるためだけに家に忍び込む某竹林の兎さんとは違った、デキたお客さんらしい。

「また女の声、しかも初めての…。ご主人さま、今度はどこで引っかけてきたのかー？」

「馬鹿言ってないでお茶の準備でもしておいて。…すいませーん、今いきまーす」

建てる時に母さんが張り切ったか僕が張り切ったかは今となっては解らないけど、僕の家は何気に大きい。紅魔館なんてふざけた規模の建物じゃないけど、一般の家に比べれば大きいはず。永遠亭や稗田家のような豪邸とは言えないけど、頑張れば建物を二分して片方を御店、もう片方を住居として利用出来そうな大きさだ。…ここ売ったら借金返せるかなぁ。

一人住まい…今は二人だけど、無駄に大きな家の廊下を抜けて、ようやく扉を開けた。

「え、えっと、はじめまして！」

「……はじめまして」

紅い髪に紅い目、翼を生やした綺麗な御方が立っていました。オマ

ケにボンッキュッボンッ…まではいかないけど、それなりの御方で何が言いたいかと言うと…とりあえず好みです。御近づきになりたいね！

◇◆◇◆◇◆◇

ドンッ！！

勢いよく置かれた湯のみ茶碗から、熱したお茶の飛沫が飛び上がって台を濡らした。そんな勢いよく置いたのは我が家の新家政婦ことルーミアちゃん。にこにこと無邪気な笑顔を浮かべながら、いったい腹の中ではどれだけ黒い事を考えているのだろう。歯ぎしりが鳴りやまないことから心中穏やかじゃないとは確かだろうからね。…ってこらこら、妖力出して威嚇しないの。小悪魔さんがプルプル震えてるじゃないか。

ああ、この翼の生えた女の子は小悪魔って言うらしい。パチュリーの使い魔として呼ばれたらしいけど…パチュリーめ、こんな可愛い人を召喚出来るなんて羨ま…もとい、こんな有能そうな人を召喚出来るなんて…妬ましいぞ！

「ぐぬぬぬぬ…」

「（プルプルプル…）」

震える姿も実に可愛いです…。

でも小と付くように力は弱いみたい。今も僕の隣に座っているルーミアちゃんを怖がっている。リボン代わりの御札で妖力押さえられているはずなんだけど、本人からは何とも言えないオーラが、ね…。いや、平然としてるけど僕も怖いからね？　…でっでもまぁ、この女狐め！　とか、実際に襲いかかったりはしないだろうから僕も平然としているんだけど。

「この女狐めッ！！」

「ちょっ！？」

「ヒィッ！？」

「なんなのだその胸は！？　封印されてるわたしへの宛てつけなのかー！？」

「どうどう！　落ち着いてルーミアちゃん！！」

卓袱台に足のっけるの禁止！　壊れるから！！

「離してご主人さま！　じゃないとこいつをヤレない！」

「やらなくていいから！？」

本当に封印されてるのか疑ってしまうほど元気が溢れてますねお嬢さん！？　フンガー！　なんて女の子が言う言葉じゃないよ！？
…仕様が無い、僕もこんなことで怒りたくなかったけど。

「…やめなさい」

「ッ…はい…」

少し力を込めてそう言うと解ってくれたのか、足を降ろしてくれた。
シュン…と項垂れているこの子を見ると、何だかすごく悪いことをした気分になって来る。その姿が余りにも悲壮感漂っていたので、仕方なしに胡坐を掻いて膝の上に座らせてあげた。すると今までの姿が嘘だったかのように、まるで子猫が甘えるように足の上で笑っている。咽喉は鳴らしてないけど。

…はぁ、なんでこんなにも懐かれたのかなぁ。

「ほぇ～、あの話は本当だったんだ…」

「…どんな話かなぁ？」

「な、なんでもないです！　そっそれよりもですね、今日は用があってこちらに参らせてもらいました。実は伊吹さんに我らが主、レミリアお嬢様より招待状を預かって来ました」

我らが主…？　ああ！　レミリアが遂に紅魔館の主の座を馬鹿親から奪い取ったのか！　さてさて、だいたいどんな内容かは予想がつくけど、今は渡された招待状を読んでみよう。

『ヤマトへ。お姉様が紅魔館の主になったから皆でお祝いパーティーしようね！』

「……小悪魔さん？　これ、レミリアじゃなくてフランが書いた奴じゃない？」

流石は紅魔館、僕の予想の斜め上を爆走してくれる。スカーレットクオリティここに極まるってやつだ。まさか招待状が新しい主からではなく、その妹からだなんて思いもよらなかったよ。

「え…？　…す、すいません！　妹様からお嬢様のだと渡されたので、私ったらそれを信じて…。本当にすいません！」

「別にいいじゃないですか、それくらい。それにあの姉妹っぽくていいと思いませんか？」

「駄目です！　今回はお嬢様にとって大事な…ハッ！？」

「大事な？」

「な、何でもないです！」

「…小悪魔さんって、天然だとか言われません？」

「ッ～言わないでくださいよぉ～」

な、なんて可愛さなんだ！？　クッ、使い魔を召喚したくなる衝動が僕に…。静まれ、静まるんだ僕の使えもしない召喚魔法よ…。新しい恋をしろなんて言われたけど、幾らなんでも浮気はまだ早いぞ…！

「と、とにかく紅魔館に来ていただけますね？」

「もちろんです。あ、祝いの品を買いたいので人里に寄ってもいいですか？」

「はい！　お嬢様も御喜びになります！」

「わたしも行くよー」

「「…え　ぅ？」」

◇◆◇◆◇◆◇

所変わってここは人里。今の僕にとっては金摂りの里。ぐぅの音も出ないほど絞りとられた憎き里でしか買い物が出来ないなんて、幻想郷はいったいどうなっているのだろうか。だからごめんね、レミリア。今の僕には安っぽい物しか買えそうにないよ…。なんて一人涙を流しながら人里で安物を探そうと思い歩いていると、必死に頭を下げている変な人を見つけた。

「本っっ当に申し訳ない！」

「いいですって、別に謝られる程のことでもないですから。慧音さんは酔った時の記憶が無いって言うし、それに僕だって良い物見れましたし…」

「…他の者も言っていたが、いいものとは何のことなんだ？　気になっているのだが、粗相をした私からはどうも聞きにくくてな…」

「気にしたら負けです」

「わたし知ってるよー？」

「本当か！？」

「慧音さん、この子の発言の９割は嘘で出来てますから信じないほうがいいです」

「いや、しかし…」

「ほぇ～、人里って初めてですけど…案外拓けてるんですね」

変な人の正体は里の住人に必死に頭を下げている慧音さんでした。いったい何をしているのだろうかと声を掛けようとしたところ、血相を変えた慧音さんがそのままダイブするかの勢いで迫って来た。そのまま両肩を掴まれて真摯な目を向けられた時には、僕も混乱の極みにあって…。

一瞬目を閉じて待ち構えた愚かな僕を、背中にへばり付いているルーミアちゃんが正気に戻した。…仕方ないじゃないか、あんな真摯な目で見つめられたら誰だって想像するよ…。

「本当に気にすることじゃないですよ？　あ、でもどうしてもと言うのなら提案が。昨日のアレ、僕と二人で割り勘にしません？」

「頑張ってご主人さま！　借金減らすチャンスだよ！」

今、慧音さんは僕に対する罪悪感と自分の犯した粗相で胸が押しつぶされそうなほど苦しんでいる。だからこその提案だ。でも勘違いしてもらっては困るな。別に弱みに付け込もうだなんて微塵も思っていないよ？　むしろそんな慧音さんを助けるための妥協案と言うモノを提案するのが、真の友だと、そうは思わないかね？　そう思うだろ、君。

「すまないが、無理だ」

「へぁ？」

即答！？　今まで見せていた僕への罪悪感は！？　自分の粗相への心配はいったいどこへ投げ捨てたの！？　少しは昨日の自分を知った方が、僕にとっても里の人にとっても良いことだと思うよ！？

「私はね、働き手がいない、か弱い女の一人暮らしだ。解るだろう…？」

何を仰るハクタクさん、貴方自身が働き手じゃないですか。それにか弱い人は肩に乗せた手に力を籠めるなんてことはしません。むしろ自分を知るために払った方が身のため…

「い　ぶ　き　く　ん？」

痛い痛い！？　肩がメキメキ言ってる！　畜生、この人昨日から容赦なくなってきてないか！？

「りょ…了解、です」

「…ふぅ、解ってくれたか。ところで今日は何をしに？　まさか昨日今日であの料金を払えるわけもあるまい」

そう思うのなら、少し肩代りするかあの場で自重して欲しかったです。

「紅魔館の主が変わったので、その祝い品を買いに」

「何だと！？　それは本当か伊吹君！？」

「ええ、そうですけど…」

「…一大事だぞ、これは。その者が人里を襲うなんてことになったら…」

うんうん唸っている慧音さんも心配が尽きないんだろう。確かに紅魔館には前科があるからね…。あれ？　でも確かあれは紫さんから条件を出されて解決したってレミリアから聞いてたけど…？

「それはないから安心するといいぞ、上白沢慧音」

「お前は確か八雲の…」

「藍だ。…数時間ぶりだな、大和殿」

噂をすれば、というのはどうやら本当らしい。数時間ぶりに見た藍さんだけど、今回は本当に偶然みたいだ。買い物籠の中に大量の食材が詰め込まれている。

「藍さんは買い物ですか。何時も此処で？」

「ああ、君が採って来た物もよく買わせて貰っているよ。紫様も褒めているぞ？　あの子が採って来た物は美味しい、とね」

「あ、紅魔館でもそうお嬢様方が言ってました。ちなみに執事長が買い出しに来てるんですよ？」

「それは…照れますね」

藍さんを目の前にしても普通に会話することが出来るのは、僕が何時も以上に疲れているからなのだろうか。朝に会った時に沸いて来たようなどす黒い感情はなく、あるのは全てを知る前の穏やかな感情だけだった。

「すまない、紅魔館のことを詳しく説明してもらえるか？」

「もちろんだ。後で詳しく説明しよう、今まで説明していなかった私達に非があるのだからな。まったく、紫様が我儘を言わなければもっと早くに説明出来ていたものを…」

「相変わらず苦労しているんですね」

「出来れば変わって欲しいところだよ…。ああそうだ、朝に伝え忘れたことなんだがな、博麗神社に新しい巫女がやって来たんだ。すまないが、大和殿のほうで面倒を見てやってくれないか？　勝手知ったる神社だ、君ならばと頼んでみたが…どうだろう？」

「ほう…博麗零夢に続く新しい巫女か。気になるな」

新しい巫女、か。零夢の願いでもあるし、僕にも異論はない。あるとすれば、これから起こるであろうことに巻き込まないように注意することくらいか。もう零夢みたいな不幸な出来事を生み出さないためにも、出来るだけ距離をおいてサポートに回るだけにしよう。

「はい、大丈夫です。零夢からも頼まれていたので、最初からそのつもりでしたし」

「助かるよ。では私の方から彼女に連絡を入れておくから、出来るだけ早く行ってやってくれ。…すまない、待たせたな。では紅魔館のことについて…」

紅魔館について話し始めた二人を置いて、僕らはまたお店を回り始めた。そんな藍さんと会った僕を心配してくれているのか、背中のルーミアちゃんが後ろ頭を撫でてくれる。可愛い子め、へばり付いているのもしんどいだろうから、おんぶしてあげよう。

でも心配してくれなくても大丈夫だよ…未来は視えているはずだから。

「さて、僕らも御祝いの品を買って行きますか！」

「おー！」

「はい！」

まぁとりあえずは、新しく主に就任した小さな女の子の御祝いをしに行こうじゃないか。

何でもない日常が楽しいって感じる（後書き）

サブタイがまったく思いつかないじらいです。最近は涼しいので外で走り回っても汗が…出ますね。滝のように出ます。運動不足を感じさせられますよ…。

今回もグダグダでした。むしろキャラが多すぎてどのセリフが誰か解らないかも。
オマケにルーミアのキャラが固定出来なくて困ってます。台詞とか特に。ヤンデレにするかデレデレにするかも迷ってます。むしろ今のままじゃマスコットみたいなんでｗ

次回は久々のおぜう暴走…ですが、遅くなります。ちょっと旅行にでも行く予定なので。…男だけで旅行に行って何が楽しいのやら、私にはまったく解らないですね！　華がないですよ、華が。むさくるしいだけです。

でもこの3日で仕上げれたら投稿しておきます。零の軌跡が終われば…ですけどね！　遂に第４章入りましたよ！　この思いは活動報告にでも書いておくので、それ見て笑ってやってください。

久しぶりに見る顔（前書き）

日常編なんて、キャラ崩壊しまくりですｏｒｚ

久しぶりに見る顔

あの後、霧雨魔法店で適当な物を買った僕らは、本来の目的地である紅魔館へと足を進めた。

あそこの店主である一郎さんはあまり良い売り物がないと言っていたけど、店を訪れた僕にはそうは思えなかった。と言うのも、確かに置いてあるもので実用的なものは少なかった。しかし魔術的価値の高いものや、魔力そのものが込められた魔道具…アーティファクトなんかが並べられてあったから驚きだ。こういった物に疎い僕には解らないけど、パチュリーなんかが見たら発狂するものもあったのかも…。いっそ連れ出して鑑定会でも開こうかな…？

そう言うわけだから早急に実用的な売り物が欲しい、一郎さんにそう再び催促された。

僕、本当に作ったことがないんだけど…。そう言っても、前に無縁塚で拾ってこなかったこともあって断りきれなかった。今日は紅魔館に行くし、せっかくだから魔道具の製作関連の本でも探そうかと思っている。…適当に掃除用の魔法が付加された箒の作り方の本でいいよね…？

「でも、レミリアと会うのも久しぶりだなぁ…」

「妹さんは来たけどその時は放心状態だったし、姉は来なかったからねー」

「私も召喚されたばかりで新生活に忙しかったですから、その辺りの事はよく解りません…」

情けないことながら、フランやパチュリーにも迷惑掛けたからなぁ。でもレミリアだけは来なかったんだよね。余りにも情けないから見切られたのかと思っていたけど…そうじゃなくて良かった。ま、アルフォードの奴なんかは今日の顔合わせでぐだぐだ言うだろうけどね。それでも今日は目出度い日だ、蟠りなく過ごせたらいいとは思うよ、うん。

「だから今日は大人しくしているつもりだから安心してくれていいよ、美鈴」

目の前に立つのは紅魔館の門番、紅美鈴。食い逃げ犯とその追手、しかしその追手も実は食い逃げ犯だった経歴を持っていて…そんな馬鹿らしくもおかしな出会い方をした僕たち。一緒に働いて、一緒に旅して、そうしている間に僕らは紅魔館に辿り着いた。

それから辛い時も苦しい時も、果てには戦場でも背中を預けた武の先達。今は別々に暮らしているけど、それでも大切で頼りになる人。それが僕にとっての紅美鈴だ。

「そう言って安心出来る日がありましたか？　私たちが紅魔館で働きだしてから、一日でもそんな日があれば良かったと今日も一日思考を巡らせていた所なのに…。まぁいいです、それが貴方達の仲ですから」

「僕はあいつが大嫌いだけどね」

「はいはい、解ってますよ。では中にお通ししましょう」

だから何気ない会話も、すごく楽しく感じれる。

◇◆◇◆◇◆◇

「今夜の為の特別メニューは執事長（クラウス）に頼んだし、パーティードレスも着こんだ。ベッドメイキングも完璧…よし、後は待つだけね」

パチェの助言を受けてから数日、私は図書館で参考文献を漁り回っていた。パチェが呆れた目で私を見ていたけど、私にしてみればとても重要なこと。吸血鬼と人間が、その…子を為す方法、とか…。

幸いにもお母様の研究結果やここの蔵書にはそういうものもあって、私の知識はほぼパーフェクト。絵や文章を見ても最初の頃とは違って気絶もしないし、鼻血も最小限に抑えられる。隣で料理書なんかを眺めていたフランなんて目じゃないわ。

ふふ、貴女も大和を狙っている節があるようだけど、ここは姉の勝利ね。なんせ私は大人の階段を…おっと、鼻からまた…。

図書館でもそうやって優越感に浸っていた時に、私のリードを手助けしてくれたパチェがやって来た。なにやらフランに話があったらしい。最近はフランもパチェに助言を受けているようだけど、流石は私の親友。私に花を持たせる為に上手く誘導してくれているようだ。

『フランドール、調子はどうかしら？』

『初めは難しかったけど、今では妖精メイドにも手伝ってもらって少しは美味しく作れ出したよ！』

『それは良かったわね。…どこかのお嬢様は話を聞かないどころか、暴走した挙句に不埒な蔵書に手を出しているみたいだけど』

『あはは、だってそのお嬢様は、大和が絡む時は何時だって全力で間違えてるからね。そこが可愛くて好きなんだけど』

『同感ね』

フフ…そう褒めて貰っても何もでないわ。この紅魔館の当主、レミリア・スカーレットはカリスマ意外は出ない仕組みになってるの。思い出すだけでも自らが誇らしいわ…ふふふ…ハーハッハッゲホッ

ゲホ！？　う～、カリスマが溢れ出過ぎて咽ちゃったじゃないの…。

ええい、遊んでいる暇はないのよ。大和が来るまでにもう一度確認しておかないと…

「身体は念入りに洗った、魅力溢れるドレスも来た、部屋には埃一つない、ベッドメイキングも完璧、溢れだすカリスマはもはや止めることすら出来ない。…よし、後は私の頑張りしだいよ、レミリア」

そして全ての知識を得た私は今日、紅魔館の新しい主になると同時に運命の伴侶を得る。そう、これは決められた運命。未来を視る力を持つ大和は、その意志一つで未来を変えられるから捕まえることは困難。でも私は更にその上を行くわ！　今日ここで、私と大和の運命は一つになるのよ！

「伊吹大和様御一行、到着！」

美鈴の声が私の耳に聞こえてくる。ふふ、未来の旦那様が漸く来たのね…。明日から自分の物になる城に帰って来たのだから、そのワイフとしては迎えない手は無い。

優雅に余裕を持った立ち振る舞いで、私は大和が来るのを待った。あの扉が開く時、私の新しい生活が始まる。あの運命の出会いから今日これまで、自身を姫、彼を王子として何度夢を見たことか。何度枕を濡らしたことか…。だけど夢に見るのも今日でお終い、私が見た夢が現実になる時がきたのだ。

扉がゆっくりと開く。ここは可愛らしく、大和の知っているレミリアで挨拶しようかしら？　そう思ったけれど、『今は』　まだ私が紅魔館の当主。ならば私は当主らしく、気高い立ち振る舞いをしましょう。でも、明日からは貴方が私のご主人様よ…もうっ、何言わせてるのよ！

「よく来てくれた。紅魔館の新しい主として歓迎ｓ……やまと、そのとなりのこ、だれ…？」

「わたしはね、ルーミアって言うの。大和の妻だよ、よろしくー」

「……は？」

彼の手を握る小さな子供が言った一言を、私は直ぐには理解出来なかった。

◇◆◇◆◇◆◇

「やまと、そのとなりのこ、だれ…？」

能面な顔でそう聞かれて思わずちびってしまいそうになった大和です。扉を開けたらお化け屋敷のお嬢様が御出迎えってどんな罰ゲームですか？　見てよレミリア、小悪魔さんなんか恐怖のあまり固まっちゃってるじゃないか。きっと隣の僕も、それは素敵な表情を浮かべていると思うよ？

「わたしはね、ルーミアって言うの。大和の妻だよ、よろしくー」

ダウト。そしてアウト。なんだか良く解らないけどこれは非常に不

味い状況だと、数多くの修羅場を超えてきた僕の本能がそう告げている…！　次の一言、どちらにも何も言わせてはならない。本能からそう思った。僕から誤解を解かないと、明日の朝日を拝める気がしない…！？

「あー…レミリア、この子は「今は一緒に住んでるよ」　もう、馬鹿だな～ルーミアちゃん。君はただ「本当なの…？」「嘘偽り無しの事実だよ。ね？　ご主人さま」　さて、と…パチュリーはどこかな？　相談したいことがあるんだけど」

まだ死にたくない、まだ死にたくないよ！　僕を見つめる二人の視線が怖い！　どうしてこんな殺伐とした空気になってるの！？　僕はただ、レミリアの御祝いに呼ばれて来ただけなのに！？

「ウフフ…ねぇ金髪、貴女一回死んでみる…？」

「あはは、余りおいたが過ぎると早死にするよ？」

「大和さん、敵前逃亡は武術家としての死ですが、ここは逃げるべきだと私の直感が訴えてます」

同感だ。僕の武術家としての勘も直ぐにここから逃げ出すべきだと訴えている。でもこれは生きるか死ぬかの生存戦略。

『勝てない相手と遭遇した時には逃げる。それもまた闘い』

師匠達もそう言ってたじゃないか。今ここで動かなければ、僕に明日は無い。だからこれは逃げるんじゃない、逃げるんじゃないんだ。これは……明日への逃走だッ！

「ヤーマトーーー！」

未熟な我が身の不甲斐無さに悔み、絶望に満ちたこの世界から逃れようとする僕に救いの女神の声が聞こえてきた。それはまるで、光を知らない世界を優しく照らす一筋の希望。必死に飛んで来るその姿が、僕の目にははっきりと見えている。天使のような笑顔を浮かべ、髪を靡かせて飛ぶ姿が。その姿が七色に煌く翼と相なって、彼女と言う存在を更に幻想的に見せる。

ああ、生きててよかった……

懸命に伸ばされた小さくも儚い救いの手を、僕はしっかりと自分の手で――――――――――

「浮気なのか？」

「それは、紛れもなく浮気ね…」

――――――――掴み損ねました。

◇◆◇◆◇◆◇

「それでそんな恰好なわけね。…一言言わせて貰ってもいいかしら？」

「パチュリー様、大和さんもへこんでいるので軽めで…」

「ボディーブローはもう勘弁願いたいです、はい」

「…よくもまぁ、そんな祝日のパパみたいな姿になったものね」

「じゃあ奥さんはパチュッて痛いから!?　左右の二人、本気で痛いから!?」

「このペド野郎。百年早い」

「いろいろと限界だよねパチュリーさん!?」

現在の僕の状況は混迷を極めている。少しでも解って貰うために説明をすると…右手にレミリア、左手にルーミア。合成する場所が無かったために肩車でフラン。小さい子に手を繋いで許されるのは祝日に遊びを催促されたパパさんだけです。間違っても知らないお兄さんに付いて行っては駄目ですよ？

「そう言えば、アルフォード様は何処に？」

「もうすぐ来るはずだと思うけど…。貴女達もそろそろ離れなさいな、前当主が来るわよ」

「パチェの言う通りね。貴女達、そこを退きなさい」

「年功序列と言う言葉を知らないのかー？」

「ヤマト、今日の料理はフランもお手伝いしたんだよ！」

「そうかーフランはえらいなー」

「えへへ、いっぱい食べてね！」

楽しみだなぁ、フランの料理。本当に楽しみだよ…。…僕、口にすることできるかなぁ……。

「…っと、嫌な気配がしてきた。皆離れて、あいつが近くまで来てる」

「…何をしている」

「Ｓｐｅａｋ　ｏｆ　ｔｈｅ　ｄｅｖｉｌ…噂をすれば影、か。諺と言うモノは良く出来てるよ」

「フン…貴様の顔など見たくもなかったがな」

「僕のセリフを盗らないでもらいたいね」

紅魔館の前当主、アルフォード・スカーレット。僕が初めて紅魔館に訪れた時、誤解によって始まった戦闘の張本人だ。通称親馬鹿、そしてヘタレ…だった癖に、大戦が終わって幻想郷で再会してからは一段と偉そうになった。

…僕のせいかもしれないから、あまり強くは言えないけど…。

でも、やっぱり僕はこいつが嫌いだ。理由は知らないし、言いたくもない。でも嫌いなモノは仕方が無いよ。あいつも僕を嫌っているし御相子だよ、御相子。

「旦那様、食事の準備が出来ました」

「ご苦労だった、クラウス。下がって良いぞ」

「畏まりました」

その影からス――――、と一つの影が現れた。

広い館の雑用を一手に引き受ける程の超スペックを誇る紅魔館の最強執事、執事長クラウス。大陸時には仮執事として働かされていた僕の上司に当たる人だ。妥協や諦め、甘えは一切受け付けない鬼のような従者にしごかれたせいで、僕の下っ端根性にますます磨きがかかってしまった要因であるかもしれないと最近はよく思っている。

まぁ、この人のおかげで一人暮らしを出来る程になれたのだろうけど。

テーブルに並べられた豪華な食事も、おそらく執事長が作ったのだろう。そう言えばフランも手伝ったと言ってたような…？　そう思ってフランを見ると、嬉しそうに微笑んでいた。

えらいえらい、よく頑張ったね。普段ならばそう言って褒めていただろうけど、今はそんな雰囲気ではない。紅魔館の主要メンバー全員＋僕とルーミアちゃんにワインが配られ、前当主であるアルフォード・スカーレットからの言葉を待っている。…約一名はそんなこと気にせずに一杯目を飲み干しているが。

「新たな当主の誕生に」

人外だけの、悪魔が主催する宴が始まった。

久しぶりに見る顔（後書き）

ヒューッ！　なんとか間に合ったじらいです！　…いや、ホントは間に合ってないんですけどね。だって本当なら宴の内容も全部書くつもりだったんですから。でも５０００字行ったし、おぜうと大和の絡みは次回にでも掘り下げるかなぁ…なんて。何と言っても私、文字数が増えれば増えるほどやる気が失せていきますからｏｒｚ長くなってくると読む方も辛いでしょうし…。

そんなわけで自分に次回は内容を濃くして書けよー、とプレッシャーを掛けるのでした。ホント馬鹿だなぁ…。

今回のレミリアお嬢様はおぜうでした。何時もとあまり変わりありませんけどねｗ　はっちゃけ具合が酷くなったくらいかと。ルーミアとの絡みも早い段階で書けて良かったです。むしろこれがやりたかっただけに今回の…何でもないです、はい。

次回、覚悟を決めるのはレミリアか大和か！？　たぶんそんな感じになると思います。あまり期待せずに待っておいて下さい！

何時までも変わらない人なんていない（前書き）

Ｒ－１５らしき表現があります。つまり『戻る』　推奨です。特にレミリアファンの方は避難を急いで貰えると助かります

何時までも変わらない人なんていない

大陸の西…欧州で一般に開かれるパーティは、僕の故郷である妖怪の山で開かれる宴会とは違った楽しみがある。騎士団内で開かれるパーティにはビュッフェ…だったかな？　とりあえずいろいろな形式があった。でも騎士団で開かれる場合は人気取りの為に招かれる貴族たちも多くて礼儀作法が厳しく、山での宴会は何でもありだっただけに少し堅苦しいと感じていたけどね。

でもそれでも楽しく感じることもあった。例えばお酒。飲まれるお酒の味もまったく違い、初めて『ワイン』　と呼ばれるお酒を飲んだ時の衝撃は今でも忘れられない。ブドウと呼ばれる果実から造られるのだけど、残念ながら幻想郷ではあまり広まっていない。実はワインが僕の最初のお酒だったりもする。それだけに愛着や拘りもあったりするけど、やっぱり母さん達が飲むようなお酒も美味しいく感じている。

今回紅魔館で開かれたパーティは正餐と呼ばれているものだ。前菜と呼ばれるものから始まる料理を食べ、それぞれワイン等を飲むものだ。騎士団等では人が多かったためにスタンディング・ビュッフェと呼ばれる立食パーティだったけど、今回は仲間内だけで行われるだけにそうなっているのだろう。

「ご主人さま、料理美味しいね」

「本当だ、美味しい。流石は執事長ですね」

「確かに私も手を出したが、下準備を手伝って下さった方に礼を言ってもらいたい」

運ばれてくる料理はどれも美味しく、見た目もすごくいい。料理下手で味音痴らしい僕は舌に自信があるとは口が裂けても言ってはならないのでどこがどう美味しいとは言えないけど、それでも美味しく感じる。高級レストランで出される料理と大差変わりないんじゃないのかな、これは…？

そして執事長がこう言うということは、やっぱり作ったのは…

「褒めて褒めてー？」

少しお酒が回り出したのか、白い頬を仄かに染めたフランドールなわけだ。

「…え!?　フラン、貴方料理なんて出来たの!?」

「えっへん!　お姉様が馬鹿している間にたくさん練習もしたんだよ?」

「その頃のレミィは違うことに熱心だったからね…。前々から美鈴の昼食もフランが作って持って行っているのよ?」

「ホント、初めの頃に比べるとだいぶ上達しましたよね!　妹様のお料理、とても美味しく頂いてます!」

本当に…フランも大きくなったんだなぁ。自分で料理出来るようになったなんて。産まれた時から面倒を見てきたからか、こうして目に見えた成長はとても喜ばしいね。お兄さん、妹の成長が嬉しくてついつい笑顔が零れてしまいます。

それにほら、上座の親馬鹿もえらく上機嫌に見える。自分では隠しているつもりなのだろうけど、すごくニヤつきながらワインを口に運んでいる。でも解る、今回ばかりはその気持ちが僕にも解るよアルフォード。こんなに可愛い子がすくすくと育っていく姿を見て喜ばない人なんていないだろうから。

「そっそれよりも大和、もう大丈夫なの!?」

「ん？　何が？」

満面の笑みを浮かべているフランドールを皆が褒めていると、レミリアが焦ったように話題を変えた。今回はレミリアの晴れ姿を披露するのだから、自分が中心にならなければそれは面白く思わないだろう。新しく紅魔館の主になったと言っても、まだ僕より歳も身体つきも幼い少女。子供っぽいところはまだ抜けきっていないのかもしれない。

だからフランに向けていたままの笑顔でレミリアを見て、蔑ろにするつもりはないと伝えておく。どちらかだけを可愛がっては駄目、姉妹平等に接してあげないといけない。親や兄と言うモノは、そうやって良い関係を築くべきだと思うから。それにどちらかを優先してしまうと、この姉妹は情け容赦なしに不満を僕にぶつけるだろう。そうなったら目も当てられない。

「えと……だから、その……巫女のこと…とか……」

「…あぁ、それならもう大丈夫だよ。……はは、もう大丈夫だからそんな顔をしないで。せっかくのレミリアのための宴なのに、そんな辛そうな顔は駄目だよ」

…そう言えば、レミリア達にはまだ僕が立ち直れたことを伝えてなかったね…。風の噂では聞いているかもしれないけど。

そのレミリアは焦り過ぎて言葉を失ってしまったのか、それとも言ってしまってから不味いと思ったのだろうか、一言づつが消えそうなほど小さな声でそう尋ねてきた。表情までも先程声を張り上げた時とは違って、少し怖がったように感じられる。優しいレミリアのことだ、会いには来なかったけど、きっと僕のことを心配してくれていたんだと思う。それでその想い故に、咄嗟にそう口に出たのかもしれない。本人の意思に関係なく。

でも言ってしまったことは仕方が無い。今までその話題に触れようとしなかったパチュリーやフランや美鈴、執事長までもが目線で僕のことを見てくる。

本当にもう大丈夫なのか？　前回のように、また一人で逃げ出すよ

うなことはしないのか？

皆がそう言っている。あのアルフォードでさえ、伏せ目がちだが視線を送ってきている。こちらは何を考えているのか解らないけど、おそらく罵倒に近い心配なんだろうと勝手に解釈することにした。…喧嘩を売られている気がしないでもないけど。

だから僕も一度頷いて、強い視線で皆を見た。でも心ではこう思う。本当に、自分はどうしようもなく弱い奴だな、と。でもだからこそ、僕はこうして多くの人に支えられているのだと。そしてこれからは、僕が皆を支えられるようになるのだと、強く思った。…僕の出来る範囲でだけど。

近くにある手を掴めない僕が、腕を伸ばしても何の意味もないことくらい痛いほど学んだからね…。

「それにほら、今はこの子が傍で騒がしくしてくれているから。レミリアが心配してくれることはないよ」

隣で一心不乱に料理を口に運ぶ小さな友。何でこんな僕に力を貸してくれるのかは解らないけど、それでも彼女は隣にいる。零夢の代わりなんかじゃない、代わりになんてなるはずもないけど、人とは現金なモノだと思う。だって、誰かが隣に居てくれるだけで、こんなにも違うんだから。

「ッ！　そ、そうね…。大和は……大和は皆に支えられてるから…私は…」

「…？」

「ううん、何でもないわ。…そんなことより、今日は楽しみましょ！　私の晴れ舞台、フランが手伝った料理もあるんだから！」

「…それもそうだね、せっかくだし楽しませて貰うとするよ」

◇◆◇◆◇◆◇

差しこんでくる月の光が優しく照らす紅魔館の一室。新しく当主になったとはいえ、私の部屋が変わることはない。当主になって変わったことと言えば、昔にお母様が使っていたクローゼットを使わせて貰うようになったくらいか。

そのクローゼットに着ていたパーティードレスを脱いで入れようとしたが、そんな気分にはなれなかった。レディの風上にも置けないはしたない姿だとは思うけど、下着姿のままでベッドに沈んだ。もちろんドレスは床に脱ぎ捨てたまま。でも少し疲れた私にはそれが心地よかった。当主としてはアレだけど、誰にも見られない今の時間が一番好きなのかもしれない。

「はぁ…結局、何も言えなかった。それどころか傷を抉るような事を言って……私の馬鹿…」

仰向けにベッドに倒れ込んで月の光を全身に浴びる。何時もならすごく気持ちいいはずなのに、今日に限ってはそうは思えなかった。それも全て、私の自業自得と言えばそうなんだけど…

あの後はただ純粋に宴を楽しめた。可愛い妹が作ってくれた料理も悔しいけれど美味しかったし、心配していた大和とお父様の諍いも比較的小さくて済んだ。一名気に喰わない奴が居たけど、何よりもこうやってまた皆一緒に楽しめることが出来て本当に嬉しかった。

でも、

「本当に…どうしたらいいのかしら…」

当主になんてなりたくなかった――――――とは言わない。でも本当の所はそうとも言えない。誇り高きスカーレット家の重圧を可愛い妹に丸投げになんか出来ない、という理由もある。本当ならフランに投げ出して大和と駆け落ちでもしたいけど、そうすればあの娘が本気で怒るだろうからそれは出来ない。

私は紅魔館の主として強く、気高く、この地に根付かなければならない。でも本来の私はそれほど気が強い者ではない。むしろ弱い方だと思っている。…何を言ってるかって？　私も心の底は臆病者だと言うことよ、認めたくはないけど。子供の頃はただの世間知らずで無鉄砲だっただけ…。だからこそあれだけ動くことが出来たんだと思う。

だからこそ変わらなければならなかった。当主になるために、お父様から私がどれだけのモノを背負って立つのかを学ばされた時、私は自分がどれだけ重要な存在になるのかを認識させられた。王が動かねば民は動かない。だからこそ、時には自分すら偽らなければならない。王とはそういう存在なのだ、と。面倒な…。

そうやって理由がなければ、自分では動くことすら出来ないと言われた。…ふざけるなと、私自身は勝手に動くつもりだと思った。だってお父様も勝手にしているのに私だけだなんて、そんなのずるいじゃない。

でも無邪気だったあの頃とは違って、今の私には背負うものが多すぎる。大和のように、自分の意志で好き勝手に動くことは出来なくなった…はず。だから当主になりたくないなぁ～…なんて。だって今の私、まるで蜘蛛の巣に捕えられた蝶のようじゃない。動こうとすればするほど、雁字搦めになって動けなくなる。

大和への気持ちだってそう。臆病な私が初めて巫女と会った時、絶対に彼女には敵わないと思った。それと同時に、彼女が居る限りは私の想いすら叶わないと解った。

――――――でも仕方ないじゃない、どうせお父様は反対するわ。それに大和だって、私になんか興味なんてないはず。だってこんな子供みたいな身体つき、彼の好みじゃないもの。

しないと決めた理由付けをして、私は自分を納得させた。巫女が居る間はどうせ無理だ、でもあの巫女さえ居なくなれば…。一度心の底から溢れた思いは加速し、当主になるために培った知識が私に更なる手段を閃かせる。それは巫女と正面からやり合わず、如何に出し抜くか。規格外の巫女とはいえ所詮は人間、寿命は私の生きてきた年数にも満たない。だからその後から頑張ればいいじゃない。愛する者を失って悲しみに暮れる大和を慰めれば、後は…。

そして思いの他早く訪れたその時に私は心配しているフリを装い、まるで聖女のように大和の心に訴えかけた。打算的な考え。物事を知ったために純粋ではいられなくなった私が初めて行った捻り手が、想い人に対するこの仕打ちか。理由を付けて逃げて、結局闘わずして勝ち逃げされたことに気がついた。大和が目の前から去った時に全てを悟ってしまった私は、愚かな自分が悔しくて涙が止まらなかった。

だから私は、せめて彼に対するこの想いだけはもう真正面から自分の気持ちに従おうと思った。例えどんな強敵が現れても真正面から

捻り潰す！　当主の時は当主として威厳ある姿で、無慈悲に強力な夜の女王として君臨する！　そうやって区別をつければ何の問題もない！　だから湧き出るカリスマにも磨きをかけ、夜の女王としての知識も完璧にマスターした！

「でも何も言えなかったら意味ないじゃないの！？　私の馬鹿馬鹿馬鹿馬鹿！！　それに大和も大和よ！　あんなにおめかししてきたのに、綺麗だね、とか、似合ってるよ、とか気の利いた事を言えないの！？」

「…あ～、何と言うか…綺麗だったよ…？」

憤りのあまりにベッドで手足をばたつかせていた私に聞こえてきた声は、待ち望んだ想い人の声だった。跳ねるように起き上がり、苦笑している彼を見る。何でここに？　どうして？　まさか…これが噂に聞いたジパング名物『ＹＯＢＡＩ』　なるものなの！？

「とりあえず勝手に入ったことは後で謝るから、服着ようか。その格好は目に悪い」

「へ……～～～～～ッキャ「待ったぁ！！」　むぐむｇｍじゅ！？」

自分が下着姿だと言うことを指摘されて思わず声を上げそうになった所で、彼の手が私の口を押さえつけた。その勢いが余りにも強かったので私は溜まらず後に倒れ、それに続くように彼が私に伸し掛かって来た。服を脱いでいるために、彼の感触を直に肌で感じることが出来る。

そう思ってしまうと、次第に身体が火照っていくのが解った。今、私と彼を止めるものは何もない。これはもしかすると…もしかするのかもしれない。お母様、今から私は大人の階段を上ります…。お父様、紅魔館にまた新しく当主が誕生します。もしかするとその跡取りまで…。

圧し掛かるようにして私に覆いかぶさっている彼を一度見て、私は静かに目を瞑った。……パチェ、貴方は知識は武器だと言っていたけど、知ってるだけじゃこんなの対応しきれないわ…。

◇◆◇◆◇◆◇

大和です。パチュリーにレミリアの様子がおかしいから見に行ってあげてと呼ばれて来た大和です。まず最初にレミリアの部屋の前に着いてから何度かノックをし、返事が返ってこない状況が続きました。でも部屋の中に気配はあるし、時々声も聞こえてくるのに全く返事がないのを不思議に思った僕は、少し悪いかと思いつつも扉を開けて部屋に入りました。

「でも何も言えなかったら意味ないじゃないの!?　私の馬鹿馬鹿馬鹿!!　それに大和も大和よ!　あんなにおめかししてきたのに、綺麗だね、とか、似合ってるよ、とか気の利いた事を言えないの!?」

すると何と言うことでしょう、何故か悪口を言われていました。あちゃぁ、確かに一言似合っていると褒めておくべきだったかもしれない。少し後悔しながら声を出してみると、なぜか綺麗だったに変わっていた。しかも吃りながらでしか声も出ない。…おかしい、似合っていると言うはずだったのになんで…?

少し困惑しながら彼女にそう言うも、僕の視線は彼女の姿に釘付けにされていた。またそんなはしたない格好をして…。そう思いつつも、月の光に照らされた彼女の肢体に魅了されていた。…なーんて、何言っているんだか。

「とりあえず勝手に入ったことは後で謝るから、服着ようか。その格好は目に悪い」

別に子供なんて目に悪くねーです……何言ってるんですか僕。うん？　本当に何を言っているんだろうか…？　お酒が回ったせいか、はっきりしない頭から捻り出すように服を着ろと言った時、僕はまるで冷水を浴びさせられた気分になった。自分がどう言った状況に陥っているのかを理解してしまったのだ。

つまり――――目の前には下着姿のレミリア→それを凝視するお姉さん好きの男→恥ずかしさのあまり悲鳴を上げるレミリア→皆が駆け付ける→変態趣向と勘違いされて社会的に死亡

「待ったぁ！！」

必死だった。本気で社会的に死ぬかどうかを賭けた世紀の一戦だった。おそらく自己最高の踏み込みでレミリアの口を押さえることに成功した…が、勢い余って二人仲良くベッドに沈んでしまった。これはむしろ、前より不味い状況なんじゃ…？

そう思った僕は慌てて退こうとするも、下に居るレミリアが邪魔で上手く力が入らない。ふがふがと何かを訴えている口を押さえるためにも片腕は塞がれている。時々艶のある声なき声を上げるレミリアに僕の冷や汗は増していくばかり。正に万事休す。こんな所を誰かに見られたら間違いなく死ねる。

「あ～レミリア…？　僕ちょっと退くけど、騒がないで貰える…？」

「へ…？　――――――――――――――――――――――――ウン、ワカッタ。フクキルカラ、ドイテクレル？」

「あっ、ありがとう」

「ウウン。ダッテ、ハジメカラシタイモンネ？」

「…？　何言ってるのかは解らないけど、とりあえず服を着てね。あっち向いてるから」

何故かカチンコチンに固まっているレミリアを尻目に、僕は背を向けた。いくら小さいと言っても、もう紅魔館という組織の主となったレディの着替えを見るのは失礼だろう。…下着姿を見るのもどうかと思うけど、それは事故だよ事故。

「着替え終わったわ…」

「解った。じゃあ振り向くけどいい？」

「いいよ…きて…」

「…？」

振り向いた時、何時もの白い服を着たレミリアがベッドに座っていた。が、何故だか高いお店…なんのお店かは突っ込まないでくれるとありがたい。ちなみに知っているだけで、断じてそこにだけは行ったことはないと亡き零夢に誓って宣言する…に勤めている人たちが取るようなポーズで横になっていた。あまりの突然の出来事と、何故レミリアがそんなことを知っているのかという思考が頭を支配して、口をポカンと開けて呆然としてしまった。

「ｃｏｍｅ　ｏｎ！」

「……レミリア？　何処でそんなの憶えたの？」

「図書館の本」

「先生ぇ……」

本を集めるのが好きだとは聞いてたけど、そんなものまで集める必要ないじゃないですかぁ…。貴方の娘さん、酷い勘違いおこしてますよぉ…。

「…あのねレミリア、こういうことは好きな人とするんだよ？　君はまだ幼いから変な思い込みをしているんだ。女の子はね、決して自分を安売りしては駄目なんだよ」

本当はこんな軽い行いをするレミリアに本気で怒りたかったけど、努めて優しくそう言った。きっとこの子は何も解っていないんだ。興味があって調べたのはいい、どうせこの先必要になる知識なのだから。でも実際に行動を起こすとなると話は別だ。

「だから――――――ってまだ話は終わってないよ!?」

僕が更に説教を続けようとすると、何を思ったのかレミリアはスタスタと歩いて部屋の中を移動する。いったい何をしようというのか？　するとレミリアは綺麗な木箱の中からワインを一本取り出し、

「遊びでやってんじゃないのよ!!」

僕に向かってそう吐き捨ててからワインを飲んでいった。小さな口では瓶から流れ落ちるワインを受けきれなかったのだろう、零れた雫が咽喉を通って服を濡らした。…あんなに一気にお酒を飲んで大丈夫なのだろうか。

「あそひでこんらこと、れきるわけないわひょ！　わらしは！　やあとが！　すひなの！　わはる！？」

「何言ってるかさっぱりだよ！？」

「むぅ～～～～！　そほにすわひらさい！！」

「とりあえず落ち着いて！？」

「すはるの！！」

「…はい」

酔った勢いに負けた僕は指で示されたベッドの上に座り込んだ。すると鬼気迫る表情で僕を見つめるレミリアもベッドに上がり、対面するように座った。窓から差し込む月の光がお互いを照らし、頬を真っ赤に染めたレミリアの顔が目に映る。…僕は、いったいどんな顔をしているのだろうか。

「わらひは、あならがすひ」

「…家族として」

「ちがふ！」

「じゃあ、どういうことなんだよ…」

そんなの、聞かなくても解っているくせに。僕が自分でそう思ったのか、それともレミリアが僕にそう言ったのかは定かではない。でもこの時、僕の頭ははっきりとそう言っていた。聞くだけ無駄だと、今まで逃げてきた想いからは、もう逃げられないのだと薄々感じて来ていた。

「とりあえず酔いを覚まそう、じゃないと会話が成り立たない。コップと水は…あれ、ここには置いてないの？　仕方ない、魔法で――――」

「出さなくていいわ。こんなこと、酔った勢いじゃないと言えない」

今までの呂律が回っていなかったことが嘘のように、レミリアは流暢にそう言った。酔った振りをしていたのか本当に寄っていたのかは解らない。でも未だに顔は真っ赤に染まっている。でもそれは酔っているからなのか、それとも…。

「もう一度、何度でも言うわ。――――――好きよ。私は貴方のことが大好き」

「……」

「家族としてじゃない。一人の男として、貴方が好き」

「……」

「何処にも行って欲しくない。ずっと傍にいて欲しい。危険な事もして欲しくない。……でも、無理よね…。だって貴方は大和だもの。それが、私の好きになった大和だから」

「……」

「諦めようって…何度も叶わないって思ってた。それでも諦められなかったから今も頑張ってアピールしてるの。でも今日の金髪の子との間柄と、さっきの大和の対応で解ったわ…。大和は私とは違う場所に立っている。私なんかじゃ「それでいいの？」　え…？」

「僕が言えることじゃないけど、それって簡単に諦めていいモノなの？　譲ってもいいモノなの？　レミリアにとってそれは、その程度のことだったの？」

僕は決して諦めることは出来ない。零夢を諦めることなんて出来なかった。だから最後まで、最後の最後までずっと傍にいて、一緒の時間を過ごした。今だってそう、他人の思惑で生きている人生から抜け出すために、必死に努力している。ルーミアちゃんだって、母さんだって、紫さん達だってそうだ。だれもが諦められないモノ、譲れないモノの為に必死に努力している。だから想いがぶつかるんだけど、それすら乗り越えていければ、きっとその先には素晴らしい世界が待っていると信じている。

「だからレミリアも、諦めたら駄目なんだよ。…ほんと、言えたことじゃないんだけど」

「……諦めなければ報われるのかしら」

「解らない…。でも、悪いようにはならない。それだけは約束できる」

「そう……。――――――――――私は、大和が好き。大和は、私が好き？」

真摯に見つめてくるレミリアを見て、僕の知らない間に成長したのだと思った。人とは違って、妖怪は成長が遅い。特にレミリアたちは身体の成長にそれが著しく見られている。けれど、それは見かけだけのことだった。心はしっかりと、強く成長している。何時までも変わらない人なんていない。もう、子供扱いはできないね…。

「今はまだ断言できない。妹として好きだという感情の方が大きいから。でもきっと、今までみたいな子供扱いは出来なくなると思う」

「ふふ、それを聞いて安心したわ。…だったら覚悟しなさい、絶対に振り向かせるから」

「うげ…まるで輝夜が増えたみたい」

「輝夜…？　ちょっと大和、貴方まさか…！？」

「あ〝！？」

ヤヴァイ、口が滑った

「ちょっと…いったい何人に好かれてるの！？　もしかして、巫女の代わりがもういるなんて言わないわよね！？」

「いるわけないよ!?　それにレミリア、ちょっと深くまで踏み込んで来てない!?」

「当たり前よ！　もう隠すモノも何もないのだから、ガンガン行くわ！」

「だからって服を脱がないの!?　……このッ、こっちににじり寄らないの！　お兄さんはそんなはしたない子に育てたつもりはありません！」

「子供扱いしないんじゃなかったの!?」

ぎゃあぎゃあと、薄暗い廊下に響く二人の声。月に照らされた夜に想いは告げられ、新たな関係の始まりを祝福するかのように淡く月が輝いた。これは一つの想いを伝えた吸血鬼のお姫様と、そんな彼女を迎えに来た王子様の物語。

「ま、この調子じゃお姉様もまだまだかなぁ～。さて、と……わたしもそろそろ頑張ってみようかな～？」

そして、それを聞いて微笑むお姫様がもう一人。

何時までも変わらない人なんていない（後書き）

やることなくなってきたからエロに走るしかなくなったじらいです。いや、本当は部屋でゆっくりワイン飲みながらレミリアが想いを告げて…なんてロマンチックなものにする予定だったんですよ。でも何故かこんな形に…。書いてて思ったのですが、どうも私は話が長くなればなるほど雑になっていくみたいです。だからなのかも。…あるぇ？　これ前にも書いた気が…。

正直最後の方は何を書いているのか理解不能でした。一応見直しましたが、おかしいだろこれ！？　と思う所があれば言って貰えると嬉しいです。

気がつけばユニークアクセス数が１０万超えてました。そして最近はお気に入りも増えて来ているようで…感謝です。モチベーションも上がります、ウィーン。せっかくなのでユニーク記念でもしようかと。やるとすれば…要望があればそれにします。話のタネを下さい。あと十五夜もやりたいなぁなんて思ってますが、時間がたりるのか心配です…。

旅行から帰って来ると台風直撃。しかもリアルで家が流されそうな現時刻。周囲の地域は避難勧告が地味に出てたり…。と、とりあえず脱出準備だけは完璧です。この鍛え抜かれた逃げ足には自信がありますよ！　とりあえず今日は寝ずに家の番をしなければならないようです…！

奇跡の魔法（前書き）

タイトルは…ネタばれです

「昨晩は酷い目にあったみたいね。レミィが喜んでいたわ」

「レミリアが喜んでいたら酷い目に合うって、その解釈はどうかと思う。……ちょっと待て、何で知ってるの？」

「覗いていたからに決まってるじゃない。それで？　この解釈は間違っているかしら？」

「……間違ってないです」

レミリアの追撃を躱しつつ宛がわれた部屋に帰ってきた僕を待っていたのは、一つしかないベッドを占領して爆睡したルーミアちゃんだった。とりあえずベッドの端に移動させた時には僕も眠気が限界で、そのまま心地よいベッドに沈んで深い眠りについた。

そこまでは良かった。よく寝れたし、疲れもとれた。背伸びをして、今日一日また頑張りますか、と気合を入れていた気持ちのいい朝の時間にあの子が現れた。それが誰かは言うまでもないだろう。はた迷惑にも、夜行性の癖に朝駆けを敢行しにきたらしい。

僕よりも早くそれを察知した優秀な護衛によって取り押さえられたので実害はなかったけれど……正直少しは自重してもらいたい。枷が無くなったと言っても、何でもやって良いわけじゃありません。結局そのあと二度寝しに帰って行ったけど、当の僕はあまりの出来事に二度寝なんて出来なかった。頼りの護衛も食糧庫を漁ってくると言ってさっさと出て行ったし…。

だから僕も図書館で本を探して帰ろうと訪れたお日様おはようの時間帯、既に図書館で活動をしていたパチュリーを見つけたので話掛けてみたらこれだ。

「そもそもの原因は貴方よ。薄々感じてはいたんでしょう？」

「まぁ……それなりに」

「呆れた……だったら直ぐに答えてあげればいいじゃない。それがどんな答えであれ、あの子は受け入れるわ」

「本気でそう思ってる？」

「……」

「そこは言いきって欲しかったよ……」

だからなんだよなぁ、僕が直ぐに返事を返さないのは。返したところで余計に話が捻じれるだけだと言うのが目に見えてるから先延ばしにしているのに…。輝夜にも言えることだけど、この問題を解決するには僕がＹＥＳかハイと言うしか解決策がないんだ。情けないことだけど…。あぁ、あとは僕が自分から誰か違う人と恋仲になるとかもアリだろう。そうすれば流石に身を引いてくれる……なんて希望的観測を持っていたり。

「それで？　此処へは何の用事で来たのかしら？」

「こらこら、此処は僕の場所だというのを忘れないように……。二つほど相談事があってね。一つは魔道具の製作に必要な本。人里の魔法店からの依頼でね、実用的な物が欲しいって言われたんだ」

「……その魔法店の店主、本気？　いえ、正気かしら？　貴方にそんなことを頼むだなんて、世界が滅ぶと言われても私には出来ないわ」

「言い過ぎだよ。……でもほんと、僕も初めてだから困ってるんだ」

「ふぅ……小悪魔、ちょっと頼まれてくれる？」

「お任せ下さいパチュリー様、初心者入門からでいいですか？」

「そうね、全て貴方に任せるわ。大和もそれでいいでしょう？」

「もちろん。小悪魔さん、頼みますね」

「では少々お待ち下さい」

そう言って頭を下げた小悪魔さんは、ふわふわと本を探しに飛んで行った。ずっとここにいるパチュリーの使い魔なんだ、図書館の蔵書についてもそれなりに理解しているのだろう。本来の所有者である僕はパチュリーにまかせっきりだからなぁ……少しは手伝ったりしたほうが、と言うより整理したほうがいいのだろうか？　正直、僕もこの図書館の蔵書を把握出来てないし…。有効的に活用するとなると、目録でも付けるのが一番いいだろう。

とは言うものの、この広大な図書館の本を全て管理するとなるとどれだけの日数がかかることか…。この際本気で使い魔召喚魔法を調べてみようかな？　手助けが増えるのは嬉しいし、小悪魔さんみたいな美人な使い魔だったら大歓迎だ。

「まだ呼びだしてからそれ程日数は経ってないけど、あの子は司書として一生懸命働かせているわ。これからは探している本があればあの子に……ちょっと、聞いてるの？」

「えっ？　あ、もちろん聞いてるよ？　で、何だっけ」

「……馬鹿者、鼻の下が伸びてるわよ。私じゃなくて、貴方が用があって来たのでしょう？」

「別に伸びてないですよ…？」

ただ美人さんにちやほやされたいと思うのは男の性なので……。なんて説明しても解ってくれないだろうから黙っておく。僕の周りにも綺麗所が多いけど、冗談じゃすまないほど我の強い女性ばかりだからね。そんな人達を相手にするのはね……色々と疲れるんだ…。だからほんわかした柔らかい雰囲気の女性って希少なんだ…。ま、こういうことは里の男衆しか話が通じないから辛いんだけど。

「……いい加減、要件を言って貰えないかしら？　私も暇じゃないのだけど」

「それもそうだね……じゃあ少し真面目な話をしようか。――――先生の研究ノート、何処に隠した」

「……何のことかしら？」

先生の残した膨大な魔道書、そして研究ノート。僕がこんなにも早く有幻覚を使えるようになったのは、この二つがあってこそ。生前に先生が有幻覚の魔法体系を綿密な計算の上に確立させていたから僕はそれに従い、少しのアレンジを加えるだけでよかった。

でも最近になってふと感じることがあった。先生はいったい何の為に有幻覚の魔法を確立させたのだろう？　実証されている全ての魔法を網羅し、大魔道の称号すら持て余した稀代の魔法使いがいったい何故？　想像の産物に過ぎない幻想を現実のモノとして具現化出来ると言っても、必要以上の魔力と時間が必要になる。先生ほどの高位の魔法使いならば、そんな工程を無視出来る違う魔法を使った方がよほどスマートなはずなのに。

だから僕は先生の残した研究ノートがまだ隠されているはずだと最近になって思った。もしそれが残っているのなら、『幻想を現実に持ってくる』　なんてふざけた魔法を考え出した魔法使いが残したものをこの目で見てみたい。それが僕の新たな『武器』　になるのなら尚更。まだ知られていない武器が、この先必ず必要になるから。

「惚けないでほしい、暇じゃないのは僕も同じなんだ。『必死』　なんだ、パチュリー。僕も『必死』　なんだよ。もう一度言う、先生の残した研究ノートを何処に隠した？」

「…私はあの人が何について研究してたかは知ってる。でもあれは、あんな馬鹿げた魔法は私でも使いこなせない。幾らその方面に長けている貴方でも『不可能』　よ。だからあの人だって志半ばで倒れた。そんな使えない物を隠し持ってどうするのよ」

「パチュリー！」

「だから、隠してある物なんてないわよ」

「……ごめん、熱くなった。はは……余裕が無いからかな、最近落ち込んだり怒ったり忙しいんだ…」

でも、無いんだ。僕の考え過ぎだったのかなぁ……。やっぱり僕程度が先生の考えを読むなんてことは無理だった「隠してないノートならあるわよ」　ひょ？

「だから隠しノートはないけど、隠されてないノートならまだあるわよ」

「……本当に？」

「むしろ何故有幻覚の魔道書を持って行く時に気付かなかったのかを不思議に思っていたわ」

「気付いていたのなら教えてよ……」

「他人から教わるのは恥だと、その時に言ったでしょう？」

畜生、あの時の僕の馬鹿。ついでにパチュリーの馬鹿。目先の物に目が眩んで一番重要な物を取り逃がしていたなんて！

「それでパチュリー、そのノートの場所は？」

「……貴方が持って言った魔道書のすぐ下の段」

そんな目で見られると照れるなぁ、なんて……はぁ。

◇◆◇◆◇◆◇

「結論から言わせて貰うと……不可能だろうね、これは」

「同感よ。これだけの術式と規模、それこそ無限の魔力でも無い限り起動することは不可能だと思うわ」

「でも一部くらいなら……」

「規模によるでしょうけど、ここに書かれている数値と貴方の潜在魔力から導き出すに……3分持つか持たないか。それも全魔力を用いることを計算に入れてだから、戦闘には利用できそうもないわね」

「ちなみにイクシードを使ってみたら？」

「三発の弾丸を一度に使って弾け飛んでみる？　骨は拾わないわ」

「それは勘弁……じゃあこっちの――――――――は？」

「……それよりも――――――――の方が現実的ね。グングニルは出せる？」

「アルフォードと比べると魔力雑魚なので中身はスッカラカン。幻術の名に負けぬ見かけ倒しな一品だよ」

「使えないわね」

「酷いっ！」

先生の研究ノートを見つけてきた僕は、小悪魔さんが戻って来るま

でパチュリーと共にどの魔法が使えそうかを討論していた。先生の研究成果は思っていた以上に進んでおり、術式の完成まであと数歩と言う所まで迫っていた……と言うのがパチュリーの見解だ。ちなみに僕らはこの魔法が起こすであろう現象を予想して検討している。全て正解とはいかないでも、大きく的を外れていることはないと思う。

……でも本当は、先生は既にこの術式を組み終わっていたのかもしれない。この術式でどんな魔法が起動するのかも予想がついた。だからこそ使うのを躊躇っていた……先生の文面から、僕はそう感じた。

「でも……出来ないことは無い」

「え？」

そしてそのノートには、どう見ても僕に向けて組んだとしか思えない術式が書き綴られていた。幻想を現実へ、夢を現実の物へと変える新たな魔法。数ある魔法は全て穴抜けで、中途半端な物ばかり。でもそれは、先生が僕に残したメッセージなのかもしれない。少ない時間とはいえ、教え子だった僕に向けた最後の出題。そう思えて仕方がないんだ。

「パチュリー。僕は、先生の跡を継ぐ」

「……解っているの？　貴方が今、何を言っているのか？　あの大魔道の跡を、貴方如きが？」

「無理だって言うのは簡単だ。違う道を探すのも大切だ。でも僕にはこの才能しかない。幻術以外の才能が無い僕に出来るのは、ただ一つの道を愚直なまでに突き進むことだけ。だから絶対に諦めないし諦められない」

「…はっきり言っておく。もし貴方がここにある魔法を何かの間違いで完成させたとしましょう。でもそれで？　貴方の魔力量では使うことは愚か、術式の起動すら出来ないのよ？　……やるだけ無駄だわ」

「珍しいね、パチュリーがそんなこと言うなんて。魔法使いから探究心を奪ったら何が残るの？　僕は薄暗い部屋で本と一緒に干からびているつもりはないよ」

「……」

「別に僕だって簡単に出来るとも使えるとも思ってないさ。これはただの探究心と好奇心、それと我儘かな。目の前に新しい可能性があるのに、そこから目を背けるなんてことは僕には出来ない」

先生からこの図書館と莫大な量の魔道書を授かった。だったらその後を継ぐのは教え子の僕しかいない。魔法使いはそうやって後世の者に技と技術を継承させていく。それを教えてくれたのは、他でもない君だろう。

「……わかった、もう何も言わない。どうぞご勝手に、無駄な時間を過ごせばいいわ」

はぁ、と深い溜息を吐きだした後にそう言われた。今までずっと振り回されてきたからか、僕がもう何を言っても意思を曲げないことを悟ったのだろう。僕の想いが通じたみたいで良かった、良かった。……辛辣さは更に増したようだけど。

「なるべく迷惑は掛けない様にする。このことでパチュリーに何か聞くことは無いようにするから」

「当たり前でしょう。……でも……そうね、実は私、最近暇なの」

「……？」

「最近研究していた賢者の石についてもだいぶ煮詰まってきたし、次は何をしようかと悩んでいたところなのよね」

「……で？」

「……」

「もしかして誘って欲しいの……？」

「……解っているのなら早く言いなさいよ」

「…くっ…くくく……ぶぁっはっはっはっ！？」

「ッ～～～～～～！！」

ククク……おかしい、おかしすぎるだろこれはッ。散々人を貶しておいて私も研究に混ぜろだなんて、いったい何を考えているんだか！？　何時も最後は助けてくれるお人好し精神がまた発作でも起こしたのかな！？　何にせよ、これほどおかしいことは無いねッ！

「わっ笑わないでよ…！」

そんなこと言っても、顔を真っ赤にしてプルプル震えちゃってさぁ……そんな状態で凄んでも何にも怖くありません。逆に可愛いくらいだよ？　こんなパチュリーなんて滅多に見れない。でも残念ながら、からかうことを止めはしないよ？　日頃やられている分を今回で帳消しにさせてもらおうかなぁ？

「ククク……本当は、先生が残した魔法が気になって仕方がないんだよね？　ククッ」

「うっうるさい馬鹿！　私はただ貴方だけじゃ何年掛っても出来ないだろうと思って親切心から……」

「あれ～？　迷惑掛けないのは『当たり前』　だったんじゃなかったっけ？」

「～～～～～～～ッもう知らない！　だったら自分一人でやればいいじゃにゃい」

「……じゃにゃい？」

（ぷるぷるぷるぷるぷる）

怒って後を向いたのは良いけど、身体がすごく震えている。耳も真っ赤で、紫色の髪から僅かに見えるそれは綺麗な紅がに染まってい

た。今正面に回ったらそれは愉快な表情を浮かべているんだろうね…！　……このチャンスを逃すわけにはいかない。今こそにとり謹製のカメラでこの珍しいパチュリーを記録に残すのだ！　これほど珍しい光景には早々出会えない、そう思うよねにとり！？

「その顔頂き「ロイヤル…フレア…！」　…へ？」

正面に回った僕の目に映ったのは、それほど珍しくないパチュリーの無表情な顔と、非常に珍しい本気の魔法の嵐でしたとさ。

奇跡の魔法（後書き）

何故パチュリーさんがツンになったのか疑問で仕方がないじらいです。

今回は何故かパチュリーさんの回。山もなく谷もない話でしたが、ちょっとだけ可愛さはあった…はず。最近自分の思っていることが文章にならないもどかしさを感じていますｏｒｚ　妥協して話が余計にややこしくなっているわけ…ではないはず。何故かは解りませんが、最近になって余計に物書きが難しく感じるようになりました。…スランプ？

さて、本題に入りましょう（キリッ　上記でも言った可愛さと言えばアレです。某動画サイトのＭＭＤ。えぇ、皆さん感づかれた人も多いでしょう、アリス（大と小）が踊るアレです。実は私、ＭＭＤ舐めてました。だからＭＭＤはあまり見なかった方なのですが、ランキングの上位にあったので見ることに…。

新しい扉を開けてしまった気がします…。どんな扉が開いたかは聞かないで下さいｏｒｚ

ロリコンじゃない…私はロリコンじゃないはず…ッ！

初めの一歩（前書き）

出せません

初めの一歩

「まったく……冗談が過ぎるのよ。普段大人しい貴方が煽ると余計に腹が立つ。そこの所、ちゃんと理解している？」

「そりゃあこれだけ容赦なしにやられると嫌でもね……」

「ぅ……まぁ悪かったとは思っているわ……」

パチュリーの羞恥心？　を呷り過ぎてボロボロで動けなくなった僕だけど、そんな僕を癒してくれているのもまたパチュリーだった。周りの人が見ていればさぞ不思議に思うだろう。人を酷い言葉と魔法の嵐でボロ雑巾のようにした魔女が自分の付けた傷を癒し、ボロボロの状態で治療を受けながらも笑いを隠せない魔法使い。

僕が笑っているのは別にマゾヒストだからじゃない。酷い罵倒と治療の中にもパチュリーの『ごめんなさい』　という意思が伝わってきたからだ。治癒魔法に一番大切なのは、その人を想う心。心の底から相手を想ってあげることで、治癒魔法はその力を増していく。だからこそ笑みも浮かぶと言うものだ。

そうやって不機嫌を装いながらも僕を治療してくれた魔女のおかげで傷も癒えてきた……と言っても、そこまで酷い怪我を負ったわけではないから当たり前か。せいぜい炎の操作の取り合いで狂ったロイヤルフレアが暴走して出来た火傷を負ったとか、風の刃にボロボロになるまで切り刻まれたとか……後は水流に押しつぶされたくらいだ。……あれ？　これって『くらい』　なの……？

ま、まぁ気にしないでおこう、あまり傷は深くないし……。

本来魔法と言うものは、精巧な術式と正確な魔力操作によって現象が起こされる。魔法使い同士の闘いになると、ただ単に魔法の撃ち合いだけで勝負は着かない。むしろ勝負が着くとすれば、それは双方が未熟だからに違いない。ある程度の実力がある武術家が緊湊に至るように、ある程度の実力が付けば魔法使いも次の段階に進む。

それはお互いの魔法に干渉すること。僕の傷がそれほど深くないのは、僕がパチュリーの魔法に干渉出来たからだ。もちろんこれは簡単に出来ることではない。相手の魔法を直感的に理解・解析する必要がある。また、双方の実力差も大きく左様する。今回はパチュリーの魔法を僕が知っていた・パチュリーがそれほど本気でなかった……その為に僕が干渉出来たのだ。もちろんパチュリーが本気になった場合、僕程度で干渉できるかと言われれば頷けないんだけどね。

「そう言えばさ、魔力不足について良い案があるんだけど」

「……あげないわよ。絶対に」

「……けち」

「アグニ「冗談！　冗談だって！！」　……貴方ね、少しは私の立場も考えて発言してちょうだい」

「あー……？　うん、だいたい把握した。迷惑はかけない。……それでさ、『魔法陣』　を使うのはどう思う？」

「……？　もしかして、儀式補助の魔法陣のことを言っているのかしら？」

「もちろん」

儀式補助の魔法陣。その名の通り、儀式を補助するための魔法陣だ。儀式と呼ばれる魔法の大抵は、一人の魔力では補えないものが多い。しかし多人数で儀式をするにしても、魔法使いは秘密主義の者が多く共同で行う者は少ない。そんな時に重宝されたのが、魔力を格段に増幅させる儀式補助魔法陣。それを用いれば、限定下とはいえ使えるはず。

「確かにそれを使えばなんとかなる『かもしれない』　けど、正直オススメ出来ないわね。だって前提からして間違っているもの。あの人が残した魔法は、その多くが戦闘に転用できるもの。貴方もそのつもりでしょう。でも儀式用魔法陣を書くためには時間と手間が掛り過ぎる。その時間は致命的なものになるはず。……そう言えば、貴方は未来から魔力を持ってこれるじゃないの。それはどうなの？」

「形振り構ってられない時はそうなると思う。魔法陣も問題が多いからね……。だからパチュリーには「イ　ヤ　よ」　……はぁ、じゃあ別の案でも考えるとするよ」

パチュリーが手を貸してくれたら一番手っ取り早いんだけど……そうも言えないんだよなぁ。そもそもこれは僕の闘いなわけだし…。これ以上、誰かに迷惑を掛けるわけにもいかないだろう。研究を手伝ってくれるだけでも万々歳だよね。

「パチュリー様～、大和さ～ん。見つかりました～！　運ぶの手伝って貰えますか～～！？」

「取りに行ってきなさい」

「はいはい……じゃあ僕はこのまま帰るから。色々とありがとうね」

「感謝するのなら少しは誠意を見せてもらいたいわね」

「はは、それはまた今度ということで……。じゃ！」

さて、することも沢山できた。これからが本当の勝負だ。待ってろよ……必ず……

◇◆◇◆◇◆◇

先生の研究ノートと、小悪魔さんから受け取ったすごい量の魔道書を抱えた僕は、帰宅するために空を飛んでいた。隣には律義にも門で僕を待っていたルーミアちゃんがいる。どうやら紅魔館の食糧庫から拝借してきたようで、腕の中には沢山の食材が抱かれている。

……これ、後で請求書とか来ないよね？

「ねぇご主人さま、その怪我どうしたの？」

「ちょっといろいろあって。でももう何ともないから大丈夫」

「ふーん。でもあんまり無茶しないでね？」

「ありがとう。ルーミアちゃんは本当に良い子だなぁ」

よしよし、頭を撫でてあげよう。僕は気遣いしてくれる人が大好きなのです。でもあんまり盗んじゃ駄目だよ？　幾らアルフォード相手だからと言っても、良心が痛むからね？

「ご主人さまを気遣うのは当然だよ。だって弱ってるとこ見ると襲いたくなっちゃうもん」

前言撤回、色々と駄目だこの子。

◇◆◇◆◇◆◇

さて、家に帰ってきたは良いけど、今の僕には沢山やることがある。まず一つ目、一郎さんに頼まれた魔道具の製作。二つ目、藍さんに頼まれた博麗神社に現れた新しい巫女への挨拶。三つ目、先生の残した魔法の完成。そして最後の一つ、対紫さんを想定した戦闘訓練。

でも僕の身体は一つしかない。特に最後の案件に力を入れると、他の事はまったく手に着かなくなるだろう。それに監視されているかもしれない。別段怪しまれることは無いと思うけど、そういうのは出来るだけ見られたくない。だからどこか身を潜めることが出来る場所で行うことになるだろう。そうなると迂闊に外に出るわけにもならないので、長い間その場に拘束されることになるだろうし……。

まあそれほど考え込むことでもない。こんな時こそ魔法の力を使うのだ！

「と言うわけで、前に試作で作った自分の有幻覚を使おうと思う」

「……何をどうするの？」

「ざっくりと説明しようか。まず魔道具の件だけど、これを最初に対処するつもりだ。とはいっても作り方を理解するだけだけど。これについては僕の有幻覚で作れると思うんだ。それほど難しくない筈……掃除を補助する魔法を付加したものとか、簡単な物に絞るから。これなら術式も難しくないからオートで出来ると思うんだ。ちなみにこの分身を本物の僕に仕立て上げるから。あと、ルーミアちゃんの命令に従うようにしておくね。

次に巫女の件。あまり距離が近くならない様に僕本体で対処する。要件があればこの家まで持ってきてもらおう。その時はルーミアちゃんが対応して、後で僕の分身に話掛けてくれると助かる。そうすればリンクしてある僕にも聞こえるから。

それで僕本人だけど……長い間身を潜めることにする。場所はルーミアちゃんにも教えられない秘密の場所。そこで魔法の研究と、対策を立てる。何かあれば伝手を頼って手紙を送るよ。その時にパチュリー向けにも手紙を送る予定だ。……まあこんなところかな。じゃあ質問は？」

「潜伏先・協力者・伝達方法。いざという時直ぐに駆けつけたいから……。まぁ、だいたい予想はついてるけど」

「場所は妖怪の山のどこかとしか言えない。協力者云々は僕の周りを嗅ぎまわっていたルーミアちゃんなら解ると思うよ。……他には無さそうだし、もういいね？」

さて、なら行動を始めようか。まず最初にすることは、博麗神社に向かって新しい巫女と話をすること。とりあえず零夢から任されたことは伏せておこう。あまり頼られて距離が近くなっても困るし。影で支える人として、僕の存在を教えて……

「むぅ……」

「な、なに……？」

何か変な所でもあったのだろうか、ルーミアちゃんが難しい表情を浮かべて唸っている。うん…？　でもこれが一番良いと思うんだけど…？

「私はご主人さまと離れるんだよね……？」

「そりゃあそうだよ。ルーミアちゃんには分身の面倒を見てもらわないと」

「…………いーーーやーーーだーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー！！！」

「えええええええええええええええええええええええ！？！？」

何でーーーーーーーー！？　駄々っ子のように畳の上をじたばたと転がりだしたルーミアちゃんを見て思わず叫んでしまった。予想外、いやこんな反応は想定外だよ！

「ちょっ！？　何で！？　とりあえず落ち着こうよ、ね！？」

「いーーーやーーーなーーーのーーーかーーーーーーーーーーーー

ー！！！！！」

宥めようと声を掛けてみるもまるで意に介さない……むしろ逆効果だった。手足をばたつかせて叫ぶ様は駄々を捏ねる子供と何ら変わらない。あのルーミアちゃん（大）　しか知らない人が見たら目を疑う光景だろう。…知っている僕だって驚いているんだから。

「とりあえず落ち着「なのかーーーーーーーー！！」　あ〝ぁーーもう！　この駄々っ子め、こうしてくれる！！」

「なのか！？」

じたばたと駄々を捏ねている手足を魔力糸で縛り、そのまま宙に十字架の状態で拘束する。身体を左右に揺するも妖力を封印されているせいで抜け出すことは出来ないだろう。悪い妖怪は十字架に捕えられましたとさ。

「何で嫌がるかなぁ」

「だって一緒に居たいんだもん……」

なんともまぁ嬉しいことを言ってくれる子だ。こうまで好かれているなんて、僕には勿体ない子だと言うのに……。でも今回ばかりは役割を分担しないと無理だ。紫さんの目を欺くのは並大抵のことじゃない。
だから、

「それは無理」

「むぅーーーー！　ご主人さまの馬鹿、ケチんぼ！！」

「はいはい、僕は馬鹿でケチですよ。だから頼むよ」

「……交換条件なのだ」

「……何を所望で？」

「キス」

「地面としたい？」

「じゃあ腕一本ちょうだい……足でも可」

「折って欲しいんだね？」

何なら今すぐさせてあげよう、もう二度と味わいたくなくなる濃厚で痛々しいものを。はっはっは、これでも外道騎士と一緒に仕事をした経験があるからね、話合いや交渉については並以上の知識があるんだ。もっとも僕はあまりお話したことはないけどね。だって僕が近づいたらみんな勝手に喋り出すんだから。

「ヒッ!?」

ハハッ☆　何怖がったフリして後に下がるんだい？　何時もそうだ、僕が近づくと小動物みたいに震えちゃってさ……結構傷つくんだよね、この反応。ただケビンさんの真似して笑顔になっているだけなのに。僕は馬鹿なこと言ってる子供を黙らせる方法なんて知らないからね、これが僕なりのしつけになるよ？

「だっ、だっこ！　それかおんぶ一日でいい！！」

「むぅ……その辺りがお互いの妥協点か……」

「そ、そうなのだ！　私もご主人さまも、お互いにとって一番良い

んだよ！」

「子供なのか……」

「そっそうだよ！　私は子供なの！！」

この子は…どうしてこうなった……。母さん、いい加減姿を現してください。僕一人じゃルーミアちゃんを止めることは出来ません。出来れば子育ての仕方も教えてもらえると非常に助かります。

「はいはい、じゃあおんぶしてあげるから。……っと、その前にお客さんみたいだから後でね」

魔力反応アリ。また感じたことのない新しい魔力だ。最近本当に忙しいなぁ……。

「残念ながら一日は始まってる。それ即ち、今からおんぶなの」

「……おんぶでお客さんに対応しろと？」

「もちろん！」

それはいろいろと誤解が生まれると思う……。初対面の方、残念ながら僕にはこの子を御することが出来ません。今日訪れた自分の悲運を恨んで下さい。

「ごめん下さい、家主はいるかしら？」

「はいはい、居ますよ」

「いるのだ」

「……親子？」

「「友達（つま）です（だよ）」」

「……こ、込み入った事情があるみたいね…」

初めの一歩（後書き）

自己嫌悪中のじらいです。全ては成績のせいです。自分の馬鹿具合に開いた口が塞がりません。小説もスランプだし。後期の始まりからアッパーもらった気分です。格なる上は……

本編では次回からアリス登場。何時幻想郷に来たのか解らないのでこの辺りで登場させてみました。ちなみに旧作は知らないので最初からアリス（大）　です。

腹黒い、黒いよ君

つい先ほど淹れた紅茶をテーブルに置く。数は二つ。僕と訪れてきた少女の分だ。水に加熱の魔法を掛けてお湯を沸かしてもいいんだけど、初めて会う人には僕が紅茶を沸かせることが出来る紳士だと知って貰いたい。特に女性に対しては良いカッコをしておきたいと思う小さな男心。

手間を掛けて水を沸かしている間、少女は棚に並べられてある魔道書や、つい先ほど持って帰ってきた魔道書と研究ノートに目を奪われていた。とは言うものの、勝手に中を見たりはしなていない。すごく見たいと言う雰囲気が溢れだしてはいるが、当然の事ながら勝手に人の研究を見ることはしないようだ。

「お待たせしました。初めまして、伊吹大和と言います」

「いきなり訪ねたりしてごめんなさい。アリス・マーガトロイドよ、よろしく」

「その周りの人形……マーガトロイドさんは人形遣いなんですか？」

「敬語は使わないで結構よ？　あとアリスで良いわ、私も大和と呼ばせて貰うから。察しの通り、この子達は私の大事な人形たち」

淹れた紅茶を机に置き、一息つける状態になった所で自己紹介。アリスはルーミアちゃんと同じ流れるような金髪に、染まることを知らない白い肌。整った顔立ちは可愛らしい服装と相なって、まるで大陸で見た人形のように感じる。

「紅茶をどうぞ、なのか」

まるで自分で淹れたかのように紅茶を勧めるのは、座っている今も背中にへばり付いて離れないルーミアちゃんだ。紅茶を淹れる時も、片時も離れるかと言わんばかりにへばり付いていた。僕も両手を使っていたので支えることは出来なかっただけど、そんな問題など些細な事らしい。……暑苦しい。

「ありがたく頂くわ。……あら、いい葉を使っているのね。フフ、この国特有の外見をした屋敷だったから紅茶は置いてないと思っていたのだけど、案外見栄っ張りなのかしら？」

「紅魔館から盗った紅茶があってよかったね、ご主人さま」

「盗った……？　それにご主人さまって、貴方も魔法の森の妖怪？」

「紅魔館から貰った、の間違いだよ。あと、ルーミアちゃんは魔法の森の妖怪じゃないよ」

「今はご主人さまの肉ｄ「宵闇の妖怪です」　……言わせてくれないのかー」

言わせればどんな誤解が生まれるか解ったもんじゃない。事情を知っている人でさえ変な目で見てくるのに、これ以上被害を広げるわけにはいかないよ。なるべく気にしないようにしているけど、あの奇異な目で見られるのは精神的に堪える。

「でも今ご主人さまって言ったわよね？」

「言ったよ？　でも何で私が森の妖怪だと思ったの？」

「え……だって今ご主人さまって……」

「「……る？」」

これはいったい……

「「「どういうことなの？」」」

◇◆◇◆◇◆◇

「つまり貴方は年端もいかない少女に主従プレイを強要している『変態』　だというわけね？」

「その歳になってもまだ人形遊びに夢中な『変態』　に言われたくないね」

「「「……フフフフフフフ」」」

「これが『変態』　同士の視殺戦なのか……」

「「君（あなた）も十分変態だから」」」

お互いの誤解を解くためにとりあえず話をしたり聞いたりしてみると、何をどう間違った解釈をされたのか、誠に不愉快な『変態』という称号を付けられた。なんでも小さな子に主従プレイを強要している鬼畜野郎だと思われたらしい。何度でも、誤解のないようにはっきり言っておくと、僕は強要なんてしてないし、そんな呼び方されて飛び跳ねて喜ぶ変態じゃない！

……慕ってくれるのはちょっぴり嬉しかったりだけど。仕様が無いじゃないか、懐いてくれて悪い気分なんてしないんだからさ。

「……お互い無益な争いは止めましょうか。これ以上言い争ったらどんな墓穴を掘るか……」

「だね……」

「わははー、つまり此処には変態しかいないのかー……オゥチッ！？」

終わらそうとした話を掘り返すような子には後頭部の頭突きをあげよう。高い鼻を押さえて悶えてればいいよ……って、顔をぐりぐり

背中に擦り着けるな！？

「なのかなのかな・の・か！！」

「仲良いわねぇ」

「そう見える？　……あーもう、ルーミアちゃんの好きにしたらいいよ」

「いいの！？　するよ？　じゃあするよ？　本当にしちゃうよ！？」

「やっぱり止めようか！」

「……私はちょっと見てみたいかも」

他人のネチョを見たいって……アリスのスケベェ……

「ッオホン！　じゃあ本題に入りましょ。私が此処に来た理由はね、森で住む許可を貰うためなの」

「……ちょっと待って、何で許可なんて？　勝手に家建てて住めば

いいじゃないか」

「私だってそのつもりだったわよ。でも森の魔法生物や妖怪たちが貴方に許可を貰ったのか、って五月蠅いのよ。何でも自分たちの主だから、貴方に木を切り倒すのも森に住むのも許可を貰えって。それどころか貴重な魔法植物の採取だって……。貴方、あそこで何したの？」

「特に何もしてないけど……。ああ、喧しい奴等には話合いの席に着いて貰ったっけ？」

クックック……なんて怪しく笑ってみる。ちょいと力を入れて話合いの席に着いて貰っただけですよ？

「ごっご主人さまからしょ、瘴気が……！？　きっとそれなのだ……間違いなくそれなのだ……さっきみたいに般若な顔だったに違いないのだ……」

般若とは失敬な。普段は浮かべない、それはもう優しい笑顔を浮かべているだけなのに。

「酷いこと言うなぁ。ねえアリス、アリスはこの笑顔っていいと思わない？」

「ひぃっ！？　やややや、大和！　貴方本当にナニしたの！？」

「……皆酷いや。心当たりと言われても一つくらいしかないよ」

ルーミアちゃんが言うほど酷いことはしてないつもりです。

家を建てたばかりのころは新参者弄りと言うか、上下関係をはっきりさせようとする輩が多かったんだ。だから、とりあえず向かってくるのは千切っては投げ千切っては投げで対応していたんだけど、流石に数が多くなってくると流石に面倒臭くなってね。仕方がないので僕から出向いて森の頭を叩きのめしたんだ。そのあと僕のお願いを少し聞いて貰えるように幻術で脳をいじ…もとい洗ｎ…でもなくて、話合いで決着を着けた。

「見かけによらずに残酷なことするのね」

「何度も襲ってくる相手がいたら、アリスだってそうすると思うけど？」

「心外ね。会ったばかりの人にそう言われるとは」

「いいや違うね。僕が言っているのは『アリス』　だからじゃない。『魔法使い』　だからだ」

基本的に魔法使いは容赦という言葉を知らない者が多い。極論で言うなら、自身の研究の為なら他人の命でも道具のように扱う者も数多くいる。そんな人たちは自分の命すら道具のように扱うだろうけど。……まぁ今回の場合は、基本的に排他的で自分本位な輩が多い魔法使いがただ襲われるのを黙っているはずがないと言うだけなんだけどね。

「ふぅん……ただの甘ちゃんかと思ってたけど、その認識は改める必要がありそうね。魔法使いとして最低限の矜持はあるみたいね」

「ま、僕の場合は少し特殊だけどね。むしろさっき君に言われた言葉をそのまま返してやりたいよ」

「あらごめんなさい、私も『自分本位な魔法使い』　なの。貴方は

そうじゃないようだけど」

「……その確信はどこから来るのか聞いても？」

「森の生物たちの大半は貴方に強要されたようでなかったし、なにより貴方達の関係を見ていると解るわよ。上辺だけじゃない、心から許せる相手がいる。それだけで証明になるわ」

「うんうん、会って直ぐなのによくご主人さまのことを見てくれている。ご主人さま、これがご主人さまの強みなんだよ？　絶対に、これを忘れたら駄目だよ？」

後から僕の頭を撫でながら、ルーミアちゃんがそう言った。なんて言うか……恥ずかしいです、はい。なんだか子供扱いされてるみたいで少し腹も立つ。僕だってもういい歳だ、子供扱いされて嬉しいことなんて一つもない。

ルーミアちゃんのくせに、僕を恥ずかしがらせるなんて生意気だ。

「わかった、わかったから手を退けてよ」

「恥ずかしがってる？」

背中から移動して僕の正面、膝の上にちょこんと座る。視線から見えたのは、今まで見たことのないような慈愛に満ちた表情で見つめてくるルーミアちゃん。優しく髪を撫でてくる姿は、まるで全てを抱擁する聖母のように感じた。

「ならいいの。それさえ忘れなかったら、どんな時でも前を向ける。だから頑張ってね？」

最後に抱き着くように僕の胸に倒れ込んだ小さな聖母は、そう言った後ゆっくりと小さな寝息を立て始めた。背中を擦ってあげるとくすぐったいのか、僅かに口元が緩んでいた。そんな彼女がすごく可愛らしくて、とても愛らしく感じた。

「ルーミア……」

「うォッホン！　……あー、いいかしら？」

ちょ、しまった!?　アリスがいること完全に忘れてた!

「妬けるわね～お二人さん。やっぱりそういうカンケイなの?」

そう言うアリスは立ち上がり、ニヤついて見降ろしてくる。不味い、このまま誤解されたまま帰られるととんでもない間違いが起きそうな気がする。

それだけは回避しなければ!　引き留める為に僕も立ち上がろうとするも、膝の上で寝息を立てているルーミアちゃんが邪魔で立てない!?　でも背に腹は代えられない!　起こしてでも……って、この子ニヤついてる!?　まさかこれを狙って!?!?

「ち、違うよ!　僕たちはただの友達で悪友なんだ!!」

クッ!　アリスの側からはこの悪魔の顔は目に入らない。しかも僕

が立てないように巧みに動いている。手詰まりかよコンチクショウ!?

「必死に否定しちゃってまぁ……童貞？」

「喧し……しまった!?」

つい条件反射でそう返してしまった!?　畜生、これじゃあ認めたも同然じゃないか!?

「あ、そうなの。だったら童貞の血が要る様になったら抜き取らせてね」

「なっ!?　嫌だよそんなの!!」

「あら？　ロリコンだって言い触らされたいの？」

「謹んでお受けしましょう。何リットル必要ですか？」

背に腹は代えられぬ……背に腹は代えられぬぅ！

「冗談なんだけどね。だいたい必要なのは処女の血よ。童貞の血を使う魔法があれば見てみたいわよ」

「……ボクだってジョウダンでしたヨ？」

ロリコンじゃない。僕はロリコンじゃないです。断じて！　僕は四郎みたいな幼女性愛者ではない！！

「まぁ良いわ。じゃあ森に家建てるけど良いわよね？」

「好きにしたらいいよ……」

なんかもう、疲れたよ……。

背を向けて帰っていくアリスを見て、上手く言い包められた自分に自己嫌悪。はぁ……やっぱり腹の探り合いっていうのは苦手だ。『

魔法使い』　相手に勝てるなんて思ってもなかったけど。おまけに味方が味方として働いてくれなかったし……やっぱ向いてないよね、こういうの。戦闘ならともかく、本格的な頭脳戦にでも持ち込まれたら僕に勝ち目なんてあるのか？

相手が誰であろうと、僕は負ける自信がある！

「脳筋ここに極まる……笑えないぞ！？　スペック上は頭はそれほど悪くないはずだと思うんだけどなぁ。何たって僕、月のサラブレッドだし」

師匠のだって混じっているんだから賢いはずなんだ！　こういうのはおいおい勉強していこう。一朝一夕で出来る物でもないだろうし。

「さて、じゃあ神社に行きますか。……寝てる人は置いて行くからね」

「起きたのか！」

「現金な子だなぁ……。じゃあ行こうか、悪友」

「はい、あなたッツゥ～～～！？」

冗談が過ぎるとブツからね？

「普通はブツ前に言うんだよ……」

どの口が物を言うか。

腹黒い、黒いよ君（後書き）

書　け　な　い　じらいです。机に向かうと眠気が襲ってきます。それがＰＣを触るためだとしても。……勉強したくない病（仮）などと勝手に命名してみたりしています。

今回も時間が掛った割に文字数も少ない、内容も平らでした。まぁこんな話があと……何話続くのだろう？　少し変化が欲しいと思う今日この頃です。巫女・魔法・兎・山・剣とネタは盛り沢山なのですが……自信ないです、はい。何かもう、最近自信ないです。

とまぁ少し愚痴って置きまして、次回は神社です。時間は掛ると思いますが、頑張っていきまーーーしょい！

表面化し始めた全面対決

～地霊殿～

最近の地底は騒がしい。旧都に向かわない限りは引き籠ってばかりの私だけど、今の地底が異常なほどの盛り上がりを見せているのは嫌でも理解できる。誰も彼もが浮かれ気分、まるで永遠に終わらないお祭りが続いている状態だ。

『クソッ、何としても止めるぞ！　あの子の為にも地上へ向かわせるな！』

『そうは言っても、あの方を止めるのは私たちだけじゃ……ねぇ？』

『……来るぞッ！？』

わーわーぎゃーぎゃーと、地霊殿にまで届く怒声と爆発音、砂煙が地底を覆っている。ああ、今日もまた洗濯をし直さないと……。

ぶつかり合っているのは巨大な妖気が多数と、それら一つ一つを遙かに上回る余りにも大きすぎる妖気。旧都では旧地獄と言う言葉に相応しい地獄絵図になっているはず。そして今日もその周りでは新たな名物となりつつある賭け事が行われているのだろう。

賭けのお題は『鬼が地上に行けるか』

この賭けは少し前から始まっており、今では一種の珍名物にもなりそうな勢いにまで成長した。もちろん私も参加したことがあるし、今日の分もお燐に任せてある。……何故任せたかって？　別に私が他人嫌いで引き籠りだから外に出ないわけじゃないの。今日はお客さんが来ているからそれの相手をしているだけ。

そうそう、以前は堅実に賭けたせいか勝ちはほぼなかったけれど、今回は大穴を狙ったの。きっと私の大勝利になると思うわ。自信と確信があるもの。ふふふ、これでどれくらいの収入になるのでしょう？　最近あの子がちょろまかした金額よりは多く入って来るといいわね。

また悪そうな顔をしよって……。そんなじゃから誰もが気味悪がって近寄らんのじゃ

「あら、ペット達には近寄られているから問題ないわ」

そう言う問題でもないじゃろうに……

「意思疎通無しに相手の考えていることが解るのは便利よ。呼吸・表情・仕草。相手の心を読むこの三つが無くとも相手の心が手に取るように解る……。便利なことに違いないわ」

ま、お主がそう思っておるのならそれでいいんじゃが……妹の方はまだあれか？

「貴女には関係ないことです」

つれないのぅ……それよりも「喋らせてくれ、ですか？　いいじゃないですか、ここでは言葉を発する必要がないのだからそれで」

「そういう訳にもいかんじゃろうに。酒の味を知っておっても飲まねば旨くない。言葉は交わさねば会話は成り立たぬよ」

「まぁそれもそうですが『突破されると次の宴会で酒は無しなんだぞ！？　それを解って『退けーーーーーーーーーーーー！！』　ああもう、いい加減にして下さい萃香様！！』　……いいのですか？　部下の方達、今日も空を飛んでそうですけど」

と言うより、ここの縁側からも空に吹き飛んで行く鬼達の姿が見えている。ああ、私は今回はあの鬼が地上に逃げる方に賭けたの。だって彼女を唯一完全に止めることが出来る存在がここで酒を飲んでいるのですもの。それを知らない普通の鬼たちは必死に大将であるこの鬼が来るまでの時間稼ぎをしているのだろう。

ふふふ……何時もは大穴になんて賭けないのだけどね。でも今回は次があるかどうか解らない絶好の機会、大穴狙いに行かざるを得ないの。へそくりも合わせて私の有り金半分をつぎ込んだのよ、勝ってもらわなければ……どうしてくれようか。あの鬼の恥ずかしいことでも言い触らしてあげるのもいいわね。

……それにしても、この鬼らしい理由で此処にいるのね。

「いやぁ、の……色々あるんじゃが、萃香が余りにしつこいんで面倒になった」

「――――――――――――――――――――成程、もう地上に出ても出なくても変わらない程の状況になったと」

「……フン、勝手に心を読みおってからに」

「覚なので」

「馬鹿者。もう少し面白い冗談でないと酒のつまみにもならんわ」

「では――――――――――――――今時の青年の話でもしてみましょうか？」

旧都の方では最終局面を迎えているよう。二つの大きな妖気……おそらく勇儀さんなのだろう。萃香さんを止めるために出張って来たのでしょうね。

『退きなよ勇儀……怪我するよ……？』

『退けないねぇ。大和の成長にあんたは邪魔なんだよ。だからここで大人しくしてな』

『……ッ！　今、言っちゃならないことを言ったね……？　……ブッ潰すッ！！　それで大和の所へ行くんだ！！』

『ええいこの親馬鹿！　これだけ離れていても治らないのかい！？』

二人の大声と周囲の喧騒がここまで響いてくる。やれやれ、洗濯のし直しならともかく、明日からはまた旧都の復旧作業が始まるのでしょう。手伝いに行っても疎まれるだけだから行かないけど、これで何度目になるのかしら……？

「やれやれ、あの二人が旧都を壊さなければいいのじゃが……」

「嬉々として壊していた人の言う言葉じゃないですね。それで青年の話ですが――――――――」

「話さなくて良い。……まったく、そうだから忌み嫌われるのじゃぞ？」

「……性分ですので。生まれを恨みます」

「ふん……じゃから私もお主が嫌いなのじゃ」

奇遇ですね、私もです。私は、この世の全てが嫌いです。

貴女達の心を占める、『大事な大和』　とか言う青年は特に。

◇◆◇◆◇◆◇

～所変わって大和邸～

――――――――――――――――と

「……？」

気のせい、かな？　今懐かしい声が聞こえたような気がしたんだけど……そんなわけないか。ってあれ？　何で懐かしいだなんて思ったんだろう……？

「ご主人さま……？」

「あ……いや、何でもないよ。それよりも今から神社に行くんだけど、ルーミアちゃんはやっぱりお留守番」

「何故なのか！？　おんぶ一日は！？　一緒に神社に行くのだ！！」

「味方に足を引っ張られるのはもう勘弁です。だからお留守番して、そこの魔道書の読解でもしておいて。文字が解らなかったらそこの辞書使えば大丈夫だから」

ちょっと嫌な予感がするから僕一人で行きたいんだ。アリスの時みたいに誤解されるのはもう勘弁です。巫女とはあまり深く関わらないようにするとはいえ、初めて会った人が子供をおんぶした青年だったら嫌でも記憶に残るだろうし。

などと色々考察しているけど、正直おんぶに疲れただけです。フッ……これ見よがしに洗濯板を押し付けてくるお子様の相手は疲れるのさ……別にー子供相手にー興奮するとかーないですから～！　……いや、本当に疲れているだけです、はい。

「厄介事だけ押し付けて自分は巫女とハネムーンなのか！？　「去らば！」　あ！　……もう！　晩御飯抜きだからね！！」

フハハハハ、魔法使いは食事しなくても大丈夫なのだ！　……精神的にキツイけどね！！

◇◆◇◆◇◆◇

「大和さんってホント凄い人なんですね！　わたし、紫様や藍様から貴方の話を聞いた時は本当はお話の中から出てきたのじゃないかと思いました！」

「いやぁ……まぁ、それほどでも……」

「特に博麗大結界の時や、先の日蝕異変……わたしは『外』　出身だから詳しくは知らないんですけど、まるで英雄みたいで！」

「あ、あははは……偶然だよ、偶然」

どうしてこうなった？

ただいま博麗神社の母屋に来ております。目的は言わずもがな巫女さんへの挨拶。困った時があったら何時でも相談に乗るからって言って帰るつもりだったのに、自己紹介をした途端に境内から母屋まで拉致られた。

零夢が死んでから僕は一度も神社を訪れていなかった。もうあの時は戻って来ない。だったら、彼女との思い出が色濃く残る場所に行っても悲しくなるだけだからだ。でもその零夢はそんな僕にはお構いなし。自分の後を継ぐ巫女を助けろだなんて無理難題を言い残して……僕が辛い想いをすることなんて勘定に入れないんだからなぁ。

とまぁ僕が訪れなかった理由は置いておいて、今の状況は拙い。非常に拙い。僕の計画なんて知ったこっちゃねぇぞと言わんばかりに話掛けてくる巫女さん。流石は博麗の巫女、誰も彼もが僕の思惑をブチ壊してくれる。

それだけならまだ修正が効くはずだった。冷たく接したりすることで一方的に関係を薄くすることも出来ただろう。でもそうはならなかった……できなかった。

「伊吹殿の行いが偶然と言う言葉では片づけられないだろう。今ではこの幻想郷の中でも有数の実力者であるし、紫様だって君のことを認めているのだ。無論、私も」

そう、今この場には藍さんがいる。神社で僕の到着を待っていたのではなく、僕が神社に到着すると同時に神社にスキマから現れた。……正直、心臓が止まるかと思った。お前の考えなど全てお見通しだと言わんばかりに頬笑みながら一礼された時には。

だからこの巫女さんを蔑ろにすることなど出来ようもなかった。あの場で快く引き受けた手前、藍さんの前では迂闊なことは出来ない。そして何より僕の計画を知られるわけにはいかない。もしかすると既に大まかな計画は把握されているかもしれないけど、『僕の最後の一手』　まで察せられるわけにはいかない。

「凄いなぁ、憧れるなぁ……」

「いや、本当に偶然に偶然が重なっただけだからね？　今までだって何度も『あ、これは死ぬかも』　とか思ったし。それに僕が闘ってきた相手はみんなすごく不利な状態だったから……」

「それでも伊吹殿はここまで辿り着いたではないか。紫様も褒めていたよ、あの子は本当に強く育ってくれたと」

そして最後の誤算は巫女さんが僕のことをまるでおとぎ話の王子様のように見ること。紫様、藍様と言う敬称を使っていることから、この子は既に紫さんの手の内だと思われる。この子にそのつもりが無くても、そう誘導されているのだろう。そう考えないと、これ程までに僕の過去を知っているわけがない。

少々の脚色を加えてやれば小事でも大事に変わる。

英雄を創り上げる時にはそれに相応しいエピソードを作り、観衆にそれがどれだけ素晴らしい行いなのかをアピールする。小さなうねりは人々の間で揉まれ、話は更に肥大化していき、人々がその存在

に気付いた時に英雄は生まれる。騎士団で知らずに定着した知識が頭を過った。

紫さんはこの子までも利用しようとしている――――――――――――

「大和さんはわたしのお手伝いをして下さるのですよね!?」

「そうだね」

「だったら先代様の時のように一緒に生活しませんか!?　わたし、一人でここに住むのがちょっと寂しくて……。でも大和さんと一緒なら「悪いけど、それは出来ない」　……そう、ですよね……。すいません迷惑かけるようなこと言って……」

冷たく接することは出来ないと言ったけど、それとこれとは話が違う。ここで僕が受けてしまえばあの計画はどうなる?　紫さんを零夢の墓の前で謝らせる僕の目標は、いったいどうなる?　それを考えれば目の前で涙を浮かべそうになっているこの子には悪いけど、僕は自分のエゴを取らせて貰う。

「ふむ、伊吹殿も何かと忙しい身であることには変わりない。つい先日、里で飲んだツケも多く残っているようだしな。……しかし大和殿、それでこの子を蔑ろにし、亡き先代の遺言を無碍にするつもりか？」

エゴを取らせて貰う――――――――――――――――――――――――――――――――だけどこの人たちは本当に……ッ！

「いいえ、そんなことは絶対にないです。彼女の意志を継ぐ者としても、そして右も左も解らない彼女をこのまま放っておくわけにはいかないので」

どこまで人を馬鹿にしてくれれば気が済むんだッ！　零夢の願いを僕が蔑ろにするつもりが無いことを知っている癖に、敢えて挑発する！？　――――――――――――――――ふざけんなよ！！

怒りが爆発しそうになる。でも怒ってはならない。それが誘いだと解っているから。一つでもボロが出れば全てがバレてしまう可能性

だってある。だから心は熱く、頭は冷静に。魔法使いとして、“静”の武術家として冷静に怒りを内に封じ込めていく。この想いを外に表すのはまだ先なのだから。

「じゃ、じゃあ！」

「定期的に訪れるし、何かあれば何時でも相談してくれればいいよ。……それでいいかな？」

「はい！　えと、不束者ですが、よろしくお願いします！！」

涙を浮かべていた巫女さんだけど、それも見る影はなくなった。跳ねるようにして僕に握手を求める彼女に、僕も苦笑を浮かべながら手を差し出した。

「ふふ、若さはいいものだな。……時々羨ましくなるよ、私達にはないモノの輝きを見るたびに」

「……藍さんは――――――――――――――――――――――――――いえ、何で

もないです」

「――――――――――――――――――――――――そうか、なら私から言うことは何もないよ」

「ではまたいずれ。君も何かあれば魔法の森まで来たらいいよ。直ぐに僕の家が見つかるだろうから」

「はい！　大和さん、帰りもお気を付けて！」

博麗神社を背に僕は帰路へ着く。はてさて、本当に困ったことになった。でもまぁ、もう成るようにしか成らないだろう。本当に……

「世の中は儘ならない」

茜色に染まった空を漂いながら、僕はそう溜息を吐くのであった。

――――――――――――――――――――や―――――と

表面化し始めた全面対決（後書き）

安西先生！　感想が欲しいです！　と、久々に感想を催促するじらいです。どうか皆様、私に清き一票を。

そんな感想を催促した私ですが、今回はすらすらと指が動きました。理由は感想からネタを考えだしたからです。プロット？　合ってないようなものです。何故ならその場で急に変更することの方が多いから。こっちの方がいいかな？　いややっぱあっちの方が……と言った感じです。いや、貰ったら嬉しいだけとかじゃナイデスヨ？

地霊殿の御方は誰と言わなくてもお分かり頂けるでしょう。ちょっと特別出演させてみました。地霊殿はあまりしていないのでちょっと口調が不安ですがｏｒｚ　停滞気味だった話もゆっくりと進み始めました。これで少しは筆の進みが戻ればいいのですが……どうなることやら。

ではまた次回の後書きで

反撃への決意

「出て行く前にはあんな事は言ったけど、やっぱり美味しいご飯を食べて明日も頑張って貰わないと」

そう思って手作りのエプロンを身に纏い、気合を入れて台所で料理をしているのはご主人さまの妻こと ルーミアだよ。お玉を片手に味噌汁の味見をする……新妻だと思わない？

でも本当は作るかどうか迷ったんだよ？　ご飯抜きは流石にやりすぎじゃないかとか、いや、でも甘やかしても駄目だし……とか。そうやって悶々としていたけど、悩むくらいなら作った方がいいに決まっている！　そう思った私は今日も台所に立った。やっぱりあの人の笑顔が見たい。一人で人間を食べるのも楽しいけど、一緒に食べるご飯はまた違った楽しみがある。

一人で食べるより、二人で食べる方が会話というスパイスが効いていて美味しい。心がぽかぽかになるの。

もちろん人間を食べるだけでも十分満たされる。でもご主人さまと一緒に食べるともっと満たされる。もちろん食べるのは人間じゃなくて調理された食材だけど。むしろ最近はそれしか食べていないし、ずっとこの家にいるから人間を食べる機会なんてない。けどそれでも大丈夫！　ルーミアちゃんの作ったご飯は美味しいね、なんて一言言って貰えるだけで私は満足！

「萃香には悪いけど、義理の娘が出来る日も近いかも。……でも封印状態だったらそれも難しいだろうなぁ。そういう意味で見られてないし。いっそのこと夜這いを掛けて……は止めておこう。私は今の関係が続けばそれでいいわッッと……まずいのか」

おっとっと、口調が元に……。ご主人さまは『ルーミア』　と『ルーミアちゃん』　を別人として捉えている。どちらも私なんだけど、ご主人さまがそう望むのなら私もそれに応えないと。

『あの時スキマで見られたのはルーミアだけど、ルーミアちゃんはそれほど知られてないよね？　だったらルーミアちゃんの方が大手を振って歩けるんじゃない？　たぶんあの姿だったら人里に入れないと思うんだ』

別に私は人里に入れなくてもいいんだけど……とは言わなかった。一緒にいると言うことは、常に一緒に行動すること。護衛も兼ねているから当然のことだし、人里に訪れるご主人さまの隣を歩くこともある。だったら力が弱くてもあまり知られていないルーミアちゃんの方がいい。里の守護者もご主人さまと一緒なら気にしてないようだったし。そして何より、この姿だったらご主人さまと多く触れ合える！　大きくなったら警戒されて近づけないから、こっちの方が断然良いに決まっているのだ！

「完成！　これで今夜も笑顔いっぱい、お腹いっぱいなのだ！」

鼻歌交じりにエプロンを脱ぎ、出来あがった料理を食卓へと運ぶ。箸も二つ、湯呑も二つ、並ぶ食事も二人分。フッ……見たか萃香、誰が見ても夫婦の食卓なのだ。

「ただいまー」

「お帰りなのか！！」

「ただいまルーミアちゃん。早速で悪いんだけど……バレたかもしれない」

「なん……だと……！？」

夜の帳につつまれた頃、私を置いて行った癖にいけしゃあしゃあと帰ってきたご主人さまの第一声がこれだった。幸せな時間を返せ、なのか。

◇◆◇◆◇◆◇

どうも、大和です。ただいま居間で猛省中です。もちろん反省の色を前面に出すために正座をしていますが、それでも目の前で仁王立ちをしているルーミアちゃんを目視することが出来ません。ええ、彼女は大変お怒りのようです。更に優しいルーミアちゃんは健気に

も晩御飯を作ってくれていたようなので、僕は罪悪感というか、やってしまった感にこの身が引き千切られそうな想いです。

「私が邪魔だと言って一人で行ったんだよね？」

「はい……」

「それで、その邪魔がいないのにバレたの？」

「その通りでございます……」

「……はぁ。とりあえず、ご飯を冷める前に食べる。続きはその後」

うぅ……申し訳なさでいっぱいです。

何時もとは打って変わって口数一つない晩御飯。食卓にはお米に焼き魚、味噌汁に漬物と一般的な家庭料理が並べられている。魚はこんがり焼かれており、漬物は食べやすい大きさに切られている。味噌汁も僕の好みの味付けがされており、ルーミアちゃんの努力が垣間見れる。本来なら会話が弾み、美味しい料理に舌鼓を打つはずの一時。しかし僕らの間に会話はなく、お互いの食器が生み出す音しかこの場にはなかった。……味噌汁がしょっぱいよ……。

「それで、どうするの？」

「（もぐもぐ）　……んぉ？」

「八雲にバレたかもしれないんだよね？　ご主人さまはこれからどう動くか、決まってる？」

箸を置き、食べるのを止めたルーミアちゃんが話掛けてきた。これまたタイミングが悪く、口に含んだ食べ物をもぐもぐと噛んでいた時だったために変な言葉になってしまった。気不味い……が、ルーミアちゃんが気にしていないようなので、僕も箸を置いて気にせず話をすることに決めた。

「このまま行くしかないと思う。……それに今回の一件で心も決まった。僕はあの人を止める、僕が止めないといけないんだ」

バレるのが早まったのなら、むしろ開き直った方がいい。それにバレた言っても僕の勘だし、思い違いだってこともある……といいなぁ。でもバレたと言っても僕が全てを知ったということまでしか解らないはずだ。まぁ紫さん程の人なら僕が次にどう動くのかを予想して、その裏付け調査するだろうけど。

だったら一度、大きな賭けに出てみたい。きっと紫さんなら受けてくれるであろう大きな賭けを。

僕はその考えを、目を瞑って聞く体制に入っているルーミアちゃんに言ってみた。途中までは大人しく聞いてくれていたけど、最後の賭けの内容を告げると目を見開き、卓袱台をひっくり返さんばかりの勢いで叩きつけた。

「だっ駄目だよ！　そんなの、許せるわけない！！」

「ルーミアちゃんはさ、負けた時のこと考えたことある？」

「……ないよ。だって闘いで負ける姿なんて考えたら、本当に負けちゃうから」

「僕もそうだよ。でもね、今回ばかりは話が違うんだ。相手は僕が

小さな時から知っている紫さんで、僕よりも僕を知っている人。正直に言うと、勝てるイメージなんて微塵もないんだよね」

頭脳明晰、妖力膨大、挙句の果てにはスキマなんて反則技まで持っている。そんな人と闘う？　何それ、ふざけてるの？　過去の僕ならこう言うだろうね、馬鹿げてると。僕が成長するように仕向けたのも、僕が魔法使いになることに切っ掛けを与えたのもあの人だ。そんな相手と、僕自身が闘って勝つイメージが持てる？　流石に無理だよ。

でも僕にも引けない理由がある。だから闘うと決めたし、その為の秘策もある。文字通り、僕の全てを賭けた闘いになる。その全てを賭けてもまだ互角、決してそれ以上にはならないだろう。だから勝負の行方は解らない。だからこそ、後の人たちの為にも僕は僕自身を賭けの対象に使う。

「それとこれとは話が……」

「もし賭けをせずに負けたとしたら、その後はどうなるの？　きっと僕自身も歯向かったことに対する制裁がある。僕が死んで、また僕みたいな操り人形が出来るかもしれない。そんなの見過ごせない」

「らしくない！　負けること考えるなんて、ご主人さまらしくない

よ！！　何でそんなこと言うの！？」

「――――――神社でね、藍さんに会ったんだ。……すごく辛そうだった。本当はこんなことしたくないんじゃないかって思うくらい、辛そうな感じがしたんだ。私達には羨ましい……藍さんは僕に向かってそう言ったんだ」

もしかしたらあの人達も、やむにやまれぬ事情があってしたことなのかもしれない。そう思ったんだ。ならどうしてこんな方法をとったのか理由を知って――――――――――その後で叩き潰す。悪いことをする人がいれば殴ってでも更生させる。それが僕が自分に課したルールだから。

「これはね、賭けであると同時に保険であって、提案でもあるんだ。…それに勝てばいいんだよ。勝てば何の問題もない。もしかして、ルーミアちゃんは僕が負けると思ってるの？」

「ッ卑怯な言い方なのだ……。私がそんなこと、言えるわけないのに……」

「卑怯で結構。勝つためなら嘘も吐くし、使える物なら親だって使ってやる。でも自分の意志だけは、闇魔様の前で誓った誓いだけは

絶対に曲げない。紫さんに勝って、必ず零夢の墓の前で謝らせてやる！！」

力拳を握りしめ、悪人顔を浮かべてそう宣言してやった。絶対に、何が何でも勝ってやるぞ！　待ってろよコンチクショーーーー！！

「……御主人様だから、大和だからこれも仕方ないことなんだよね……。でも今まで以上に、今の貴方は私の理想の貴方に近付いている。もうこうなったらやるしかないし、貴方がそう言うのなら私も全力で応援させてもらいます。いえ、やらせて下さい」

「うん、ありがとう。苦労を掛けるね」

「……そう思うのなら少しくらい労って欲しいのだ」

「うーん……じゃあ肩でも揉もうか？」

「じゃあお願いするのか。もちろん私がいいと言うまでやってもらうから！」

その後は、何時も通りの僕ら二人の喧しい声が家中に響いていった。

新しく手に入れた、虚に塗れた穏やかな日常が動き出す。

そしてその光景を、悟られぬように細心の注意を払って見ようと画策する者。

そして、その覗いている者を覗いている目が二つ――――――――――

「地底の仲間に報告することが増えましたね。やれやれ、これは私の出番も近いかもしれません」

◇◆◇◆◇◆◇

～翌日　魔法の森～

ここで一つ重要なことを思い出しておこう。決して目を逸らしてはならない、逃れられない運命を持った一生一度の一大事を。

「人それを借金と言う」

簡単に説明すると、以前に人里で飲んだツケである。妹紅に乗せられ、慧音さんに見捨てられて出来た巨額の借金。普通に働いて……何年掛るだろうなぁ……。えへへ、高級料理店って本当に高級なんだなぁ……などと、現実逃避ももう出来ないだろう。

「まさか朝一で取り立ての刺客を送りこむとは……非道な」

朝から扉を叩く音がしたので何事かと開けてみた所、少し申し訳なさそうにした慧音さんが立っていた。そう、刺客は慧音さんだったのだ。一緒に飲んだ手前こんなことを言うのは辛いのだが……と言い淀む慧音さんを見て、だったらお前も払えと思った僕は何も間違ってない。

「確かにあの守護者も非道なのだ。有り金の半分も持って行かれたし……。もう食材の残りもあと少しなのに」

「これはもうあれだね、働くしかないね！　でも修行もしたい！　だから魔道具を売ってお金を儲けるぜ！　な感じになれって言われてると考えるべきだね」

「その儲かったお金も徴収されるのではないのか？」

「大丈夫、慧音さんだって無い所から絞り取るようなことはしないよ。儲かったお金の少しだけを納めて、残りの儲かったお金をその場で全部使って食材を買いだめするんだ！」

「でもそれじゃあたっぷりは買えないのだ。私はよくお腹が空くけど、その分はいったいどうするのか！？　お腹が空いて生き倒れだなんて、人生に何度も経験したくないのだ！」

「そのための魔法の森です」

魔法の森には食べれるキノコも多く生息している。だったらそれを食べれば良いじゃないか！　そう、以前からここで生活していた僕には、森に食べられるキノコをあることを知っているのだ！　更に妖怪の山にだって食べられる食材は多くあるし、竹林に行けばタケノコだって採れる。食に困ると言うことは決してないのだよ！

「と言うわけで、ルーミアちゃんは森で食材探し。僕は箒造りのた

めに木を探して、良いのがあったら切り倒して家まで運ぶ作業をするね。日が落ちるころには家で落ち合おう」

「了解なのだ！」

「では解散！」

わははーーー！　と背中に大きな籠を持ったルーミアちゃんを見送った後、僕も使える木を探すために森の中を歩き始めた。

「森の主ねぇ……確かに今の状態からしてみればそんな感じかも」

道行く妖怪はお辞儀をするし、人面樹は枝を一本持っていかないかと話掛けてくる。肉食植物は引っこ抜かれるとでも思ったのか、これでもかと言わんばかりに小さくなっている。……恐れられてるのと同時に親しまれてるのって、なんだか変な感じだなぁ。

「おっと、これは中々…。ねえ、ここから先切ろうと思うんだけどいいかな？」

「どうぞ」

一応持ち主の木である彼？　に切って良いかと聞いてみると、色よい返事が返ってきた。これを中心に据えて、下部の周囲に綺麗に枝を付けてやればいいだろう。後で掃除補助の魔法を付加してやれば完成と言うところか。

それにしても……どうして生活の役に立つ魔法なら幾らでも使えるのに、戦闘用とかになると無理になるのかなぁ。僕って雑用係で調整されてたわけ？

「ん？　あれは……なんだアリスか。あんなに大きな木で……ってああ、家を造ろうとしてるのか。あそこ一帯も綺麗に整地されてるし、場所も決まったんだね。手伝う必要もなさそうだし、出来上がりを見計らってから行ってみよう」

あの人形では家造りも出来るみたいだから邪魔をしてはいけないよね、うん。上手とか時間掛ってるとか木になることはあるけど、沢山の人形が手に道具を持って木々をそれなりの形にしていっている。……それにしても万能過ぎだよあの人形。ちょっと欲しいかも……。せっかくだし今度一体貰えないか聞いてみようかな。

そんなことを考えながら、家を建てているアリスに背を向けた僕でした。……別に面倒だったから手伝わないわけじゃないですよ？家まで建てれる有能なアリスさんの邪魔をしちゃったらワルイカナーと思っただけだからね？

「チッ、見つけたのなら手伝うくらいの甲斐性くらい見せてくれたらいいのに……もうッ！　時間が掛るわね！」

聞こえなーい、聞こえないーい。僕には何にも聞こえませんよ？

「いっぱい採れたから今日はキノコ雑炊なのだ！」

「……うん、よく採ってきたね。でもこれ全部食べたらトんじゃうから捨てようね？」

ルーミアちゃんの戦果は半分以下になりましたとさ。……ってこらこら、それくらいで涙ぐまないの。

反撃への決意（後書き）

頑張った。早く投稿しようと超頑張ったじらいです。もう無理です。早く来い土日、休みじゃない祝日なんて捨ててかかって来い。

前回は後書きで感想を催促したかいがありました。本当に感謝です。やはり沢山貰うとアレです、モチベーションの上がり具合がヤバイですねｗ　早く書かねば！　とターボがかかりますｗ　うん？　私はリッター１０くらいです。燃費が悪いのですよ、色々と。

で、今回から大和逆襲開始と鬱展開は消える…はず。まぁ予定は未定なのです。新しく出てくる構想が予告編からこれほど離れて行くのは久しぶりですｗ　自分でも書いてて大丈夫か！？　と思って必死に資料漁ったり…ぐへぇ…ｏｒｚ

次回は…どうしましょうかと考えておりますｗ

心の底から貴方を殴りたい・上（前書き）

大和劇場、始まります

――――――――――生まれ、地上に堕ち、育ち育たれ魔法使いとなった。それは仕組まれたことだったのか？　初めから決められていたことなのか？　……そんなことない。決してそんなことは無いと僕は言い切れる。だってこの心にある喜びも、怒りも悲しみも何もかも僕のものだから。

魔法使いになりたいと願ったのは誰？

――――――――――僕だ

先生の死を切っ掛けに家族と言える人たちから逃げ出し、世界を改めて見つめ直そうとしたのは誰？

――――――――――僕だ

誰も死なせないと言いながら、それでも好きだった人を救えなかったのは誰だ？

――――――――――僕だ

全部全部全部、今まで歩んできた道のりの全ては僕が自分で望み、成し、後悔してきたことなんだ。そこに誰かの意志なんて関係ない。魔法使いになるために努力したのは僕だ。レミリアと喧嘩をしたのも僕だ。零夢と温かい日々を過ごしたのも僕なんだ。

踊らされているだけ？　違うよ、踊っているんだ。相手の思惑にまんまと乗せられた？　それも違う、僕が乗ってあげたんだ。僕は僕の夢を叶えるために、相手の造ったレールの乗ってあげただけ。

ほら、考え方一つかえるだけでこんなに変わる。それなのに僕をここまで導いたと言うの？　馬鹿言ってんじゃない、人一人を自分の思惑通りに育てるなんて出来るわけない。

だからこそ言える。『僕は大和だ』　と。ねぇ、今の君には辛いことばかりだと思う。でもね、『僕ら』　は何度も壁を乗り越えてきたんだ。今まで何度も、何度だって壁を乗り越えて一つづつ強く成っていけたよね。だから出来る、絶対に出来るんだから。どんなに辛くたって絶対に諦めるなよ、僕――――――――――――――

「今のは……僕、なのか？　…はぁ、いい加減寝ている間に勝手に能力が発動しないようになりたいよ。これじゃあまるでオネショをする子供だ」

能力の暴走と言うわけではない。『先を操る程度の能力』　の先見、まあ一種の予知夢みたいなものなんだ。寝ている時に見る夢なので望んで見れるものではないし、夢の中なので勝手に動き回ることも出来ない。だから何時も予知夢が見れた時はその光景をみているだけ……だったんだけど、今回は違った。

あれはたぶん、未来の僕だ。何故だか解らないけどそんな確信がある。まぁ今まで夢の中の人が話しかけてくるようなことは無かったから不思議に思うんだけどさ。

「僕もアキナみたいに上手く使えればいいんだけど……難しいよなぁ」

まだ能力を持て余してるくらいだからね。僕の能力はもっと応用の効いたことが出来るはずなんだ。僕はやればできる子、やればできる子なんです。……自分で自分を褒めないと誰も褒めてくれないので、自分で褒めているだけです。ほっといて下さいよぉ……

「今からだって言う時になに落ち込んでいるのだ。早く準備して山に上がるんでしょ？」

「解ってるって。……じゃあそこの『僕』　のこと、頼んだよ？」

今から数ヶ月前……いや、もう去年の話か。魔法の箒の生産を行い、借金返済のなかでも僅かながらの定期収入も出来た。そんな中、僕は自分の分身体をルーミアちゃんに預けて山に籠る準備をしてきた。つまり家には僕が二人とルーミアちゃんの三人が居たわけ。

分身を消さずにおいたには訳がある。これは以前レミリア相手に造った有幻覚の分身体を改良したもので、あの時からもただ命令をこなすだけなら何の問題は無かった。ただ今回は分身体を通して本体である僕と通信を出来るようにするため、その場その場での微妙な調整が必要だったからだ。

その甲斐もあって通信機能を搭載した分身体が出来たのだけど、そこに力を注いだ分耐久力が落ちた。下級妖怪の攻撃でも消滅するくらいの紙強度。それにどう頑張っても完全に自立した分身には成らなかった。命令をこなすことは出来る、でも自分では動けない……。儘ならないものだよまったく。

「任せるのか。忘れ物は？　魔道書と研究ノートは持った？　今は冬だから厚着の服も――――――」

「わかってる、わかってるってもう…。ルーミアちゃん、これじゃあまるで母さんみたいだよ」

玄関まで移動した僕に手荷物はない。何故なら魔法で別の場所に置いているから。まぁ便利な場所に荷物が置いてあって、何時でも好きな時に好きな物を取り出せるようにしてあるってわけ。魔法使いなら誰でも知ってる収納魔法の一つだ。

それを知っているはずなのに、僕の後を着いて来たこの子は心配が絶えないようだ。

「つ　ま　なのだ」

「はいはい、冗談冗談。……それじゃ、言ってくる」

胸を張って宣言するルーミアちゃんの頭を撫でてあげた。目を細めて擽ったそうにする悪友を見ると、もう自分だけの闘いでは無くなったのだとつくづく思わされる。今まで支えてくれたこの子の為にも、僕の為にも、皆の為にも負けられない闘いが始まる。

「悔いのない時間を、我が主」

もう絶対に後悔しない。その為に僕は山を目指した。

◇◆◇◆◇◆◇

妖怪の山、誰がそう呼びだしたのかは定かではない。ただ、その山は僕が拾われる前からそう呼ばれていた。僕の故郷でもあるこの山には、鬼が居なくなった今でも天狗を始めとした様々な妖怪や神様が住み、変わらない日々を送っている。長い間妖怪が住んでいるだけあり、山には多くの妖気が充満している。にもかかわらず、山が齎す恩恵も多くあり、山の幸を求めて山に入ろうとする人間も多い。まぁそのほとんどは哨戒天狗や親切な神様に追い返されているのだ

けど。

その哨戒天狗、白狼天狗たちに追い返されない例外もあって。その内の一人が僕だ。母さんの息子だからなのか、一定以上の力を持っているのかは解らないけど、問答無用で追い返されたりすることはない。それに故郷であるだけあって、余り知られていない場所や秘密の場所についても知っている。だから山で修行するように思った。

「聞きましたよ大和さん、人里で大きな飲み会をして嵌められたそうじゃないですか」

「案外耳が遅いんだね、文。もっと早く取材しに来るかと思ってたけど」

「いえいえ、はぶられているとはいえ私も天狗社会の一員なので。色々と雑用等が多いのですよ」

「はみ出し者故に？」

「はみ出し者故に」

とは言うものの、先程から文と一緒に山の中を歩いている僕に多く

の視線が突き刺さってきている。おそらく何時も通りの警戒なのだろうけど、少し違った感じも見受けられる。隣の文が何も言わないということは、特にこれといって変わった事情もないのだろう。

「ところで大和さん、こんなに雪が多く積もっている時に何用なんです？」

「ちょっとね……。文はこれから何か用事でも？」

「いえ、何もないです。だからご一緒してもいいですか？」

「もちろん。ああそうだ、後で頼みたいことあるけどいいかな？」

「そうですね……。まぁ他ならぬ大和さんのお願いですし、何とかしてみましょう」

「ありがとう。じゃあ行こうか」

少々引っ掛かる物言いをする文に首を傾げながらも、雪深い山の中をゆっくりと飛んで行くのであった。

◇◆◇◆◇◆◇

雪深い山の中を進むこと数十分。山の中でもあまり知られていない、所謂秘境と呼ばれる場所に僕らは辿り着いた。木々が生い茂る山腹に、まるで闘技場のような円状に整えられた場所。嘗ての僕と勇儀姉さんが修行に使っていた場所だ。僕の夢の原点であり、幼かった僕の思い出深い夢の足跡。

まるで穢れを知らない純白に染まった世界にその人はいた。雪のように白い肌に長い金髪、鮮やかな紫色のドレスを着こなす女性。その人の名前は八雲紫。僕にとって超えるべき人であり、止めるべき人。そして、僕にとっての仇……。

「久しぶりね、伊吹大和。遅かったけど、久しぶり過ぎて迷ったのかしら？」

「久しぶりです、紫さん。雪景色を見ていたら遅くなっちゃいました」

「フフ、その気持ちは解るわ。穢れを知らない白い雪、風情ねぇ」

「ですねぇ……」

微笑を浮かべる紫さんに対して、僕も紫さんに微笑で返した。……もっと怒り狂うと思っていた。この人の姿を見た瞬間に殴りかかるのだろうと、ついさっきまでは思っていた。でも実際に相対してみるとそんな事は出来ず、身体中から噴き出る冷や汗を隠し、強がるだけで精一杯だった。

「私がどうして貴方に会いに来たのか、もう解っているわよね？」

「……ッ」

一瞬、視界が歪んだ。濃紺な殺意と妖気に完全に飲まれた僕の足はプルプルと震えだし、その震えは今尚大きくなっていく。頭を垂れ、

膝が地面に着きそうになるのを耐え、必死に視線を逸らさないように意識を集中させる。

「全て知ったのでしょう？　私が貴方をどうしようとしたのか、私が零夢をどうしようとしたのか」

「……知り、ました……。だから、だから僕は……！」

ここで引くわけにはいかない……ッ！　何としても、僕の有利になるように話を進めなければ……

「まぁ跪きなさいな」

「……嫌ですッ！」

「跪け！！」

「ぐぅッ……！？」

意志の力だけで人を殺せるのだとしたら、僕は既にこの世にはいないだろう。今までの闘いでも殺気は受けてきたし、受け流す技術は既に修得している。でもこれは余りにも違い過ぎる。殺意だなんて軽いものじゃない、まるで人が放てる意志全てが僕を跪かせたように感じた。

「彼女には悪いことをしたわ。あの場できちんと始末しておけば、長く苦しむことも無かったでしょうに。本当に悪いことをしたと思っているの」

「だったら……なんで、殺すことは悪いことじゃないんですか……!?」

「『必要』　だったのよ、伊吹大和。幻想郷という世界構造を確立させるために、彼女という犠牲は『必要』　だったの。元々博麗の巫女は幻想郷を守る為にいるのだし、彼女も本望だったでしょう」

「零夢は一度だって、死にたいとか考える人じゃない！」

「でも彼女、貴方には相談もしなかったのでしょう？」

「…！　そ、それは……」

「愛する人に何も言わないのは裏切りに値する行為だわ。伊吹大和、貴方は最初から騙されていたの。かどわかされていたの。あの巫女、

博麗零夢に。だってそうでしょう？　何も言わないってことは、信頼されていない証拠だもの」

「ち、違う！　僕と零夢はお互いに信じ合って「いいえ、それは思い違いよ。だって、私だもの。私が全て仕組んだことだもの」……な、何言ってるんですか……？」

解らない分からないわからないワカラナイ……。何だ……これ……なんなんだよこれは！？

「今貴方の暗示を解いたのだけど、思い出せたかしら？　貴方が彼女に興味を持つ様に仕向けたのは私よ」

「嘘だ……嘘だ嘘だ嘘だ！　だって……こんなッ！？」

「いいえ、今の暗示が解けた貴方になら真実が解るはず。――――――零夢が死んだのは、貴方のせいよ」

「そんな……僕……僕……嘘、うそだよ、嘘に決まってる……うそ……」

真白な世界は、初めから真黒な世界だった。

◇◆◇◆◇◆◇

藍の様子がおかしい。私生活も諜報活動も不備があるわけではないが、博麗神社に向かわせ、大和と合わせてから妙な空気を漂わせるようになった。おそらく私でないと気付けない僅かな変化。計画に支障はないとはいえ、働き過ぎで倒れて貰っては困る。そう思った私は彼女に7日間の休暇を与えた。

そして休暇明けの7日目、自室から出てきた藍の想いもよらぬ一言に私は度肝を抜かれた。

「伊吹殿に……後世の者に期待することは出来ないのでしょうか。私は……私はこの7日間そのことだけを考えていました。初めて紫様の式になった時、崇高な思想の下にこの身を犠牲にすることに対し何の躊躇いもしないと誓いました。それは今でも変わりません。……しかし、今の伊吹殿を見ていると思うのです。

この人なら私たちの為し得なかった方法で世界を変えてくれるのではないか、と。

幸いにも博麗の巫女は我々の手にあります。だからこそ、我々は後からそっと支えてあげるだけでいいのではないかと、私は最近になって思うのです」

貴方は既に多くの血で塗れたこの手で、彼らを支えろというのか。なら私たちが今までしてきたことは、私たちの為に散っていった者たちはいったい何になると言うのか。藍の話を聞いた時、私は思わず藍を打ってしまった。正気に戻れと、夢は見るだけ無駄なのだ、と。

もはや止まれない。ならば、いっそのこと彼を完全に取り込む。絶対にそれだけはすまいと思っていた最後の一線に足を踏み入れるこ

とを私は決心した。

それは彼を私の式にし、必要のない記憶を弄った操り人形にすること。そうすれば……もう誰も傷つくことはない。誰もこの美しくも残酷な世界に対して、憎しみの声を上げずにすむのだから。

そう決心私は、大和を徹底的にもう一度調べあげた。家族・交友関係・最近何をしたのか、何をしようとしているのか。……借金があると知った時は思わずお茶を吹き出してしまったが、お約束だろう。彼はいい意味でいつも私の裏を取ってくれる。

そして彼が妖怪の山に入る準備をしていることに気付いた私は、天魔に話をする為に山に入った。要件は二つ。一つ、山を出た鬼と私が戦闘になった時どちらの味方をするのか。二つ、伊吹大和が山で暴れた時に手を出すのか。

天魔の下した回答は静観。つまり、何が起ころうと手出しはしないと言うこと。保守的な天狗らしい実に良い回答だった。ならば話は早い、彼が山に入ると同時に私も山に入った。そして彼が幼いころ

修行場として使っていた場所に先回りし、彼を待った。

そして彼がここに辿り着いた時、私は彼の心を壊す作業に入った。
その方が式にし易いから……。彼にとって最大のトラウマは零夢だ。
ならば彼女への不信感を強めてやればいい。

そう思った私は『零夢の時と同じように彼に暗示を掛け始めた』

博麗大結界時、私は零夢に『彼が興味を持つ様に私が心を弄った』
と言ったが、あれは真っ赤な嘘だ。彼は自分で興味を持ち、恋し、
そして愛した。あの時の巫女は霊力を吸われており、余裕もなかっ
た為に私の暗示の前に屈した。暗示を掛けた理由は僅かな反骨心を
も持たせないため。心を完全に折る為だった。

そして大和に対してもそう。まずは絶望という鎖で彼の心を縛り、
思考の海へと彼を沈める。そしてその後で救済と言う名の手を差し
伸べてやる。絶望が深ければ深いほど、僅かな希望に縋りたくなる。
……結局、人とはそう言うモノなのよ。

「辛いでしょう、悲しいでしょう。でもそれでいいのよ。それでこ

そ貴方なのだから。だからこそ――――――伊吹大和、私の式になりなさい」

「式……？　藍さんのような式に……僕が？」

「そうよ。貴方のような人を生み出さないように……この幻想郷を守っていきたいのならば私の手を取りなさい。絶対に後悔はさせない。もう二度と、絶対に後悔させるようなことはしないと誓います」

「……」

沈黙、か。まぁそれもいい。どの道彼はもう堕ちた。だけどその御陰で幻想郷は安定期を迎える。彼という柱を中心に据えた新しい世界が始まるのだ。

「貴方は何も言わないのね」

この場で静観を決めている天狗に向かってそう言った。彼女は大和の古い友人で、彼のことをとても大切にしている。もともと真面目だった彼女がなぜおちゃらけたのかは知らないが、おそらく大和が何かしたのだろう。

しかし彼女も天狗社会の一員。長の言葉は絶対であり、その長が静観を決めたのだからその決まりには従うしかないといったところか。

「貴方、生まれた頃は幹部候補だったようね。そのあと人が変わった様におちゃらけ明るくなったらしいけど、それも大和のおかげなのかしら」

「……まぁそうですね。大和さんのおかげと言われれば、間違っているとは言いません」

「だったら貴方自身は、今回の件についてどう思っているのかしら？　第三者として、この幻想郷に住む者として」

「さぁ……私は貴方のように賢者と呼ばれるような存在ではないので何も言えませんね」

「そう……」

友として糾弾してくるのかと思ったが、彼女は何も言わなかった。むしろ罵倒でもしてくれれば私としても気が楽になるのだけど……彼女がそう言うのなら仕方がない。これも『必要』　なことなのだから。

「ですが一つだけ言えることがあります」

「……なにかしら？」

「お前が大和を舐め過ぎているってことよ、この腐れ外道が！」

その瞬間、世界が砕けた

心の底から貴方を殴りたい・上（後書き）

鬱展開は無いと言ったな、あれは嘘だ。すいません、やはりこうしてしまったじらいです。まぁいいですよね、これからですから、これから。楽しくなってきましたよ…！

次回は心の底から貴方を殴りたい・下です。意味深な終わり方をしたので最初からクライマックスです。更には前回紫を覗いていた人も出て来て…？　な感じになると思います。まぁ今回ばかりは本当にゆっくり書き上げるので、一週間後か二週間後になると思います。勉強しないとね！　オラに元気を分けてくれー！　切実に願っているぞー！

もっと語りたいこととかいっぱいあったのですけどちょっと衝撃的な出来事がありまして忘れてしまいましたｏｒｚ

心の底から貴方を殴りたい・下

「お前が大和を舐め過ぎているってことよ、この腐れ外道が！」

大人しくしていた天狗が一転、そう私に吐き捨てた途端に視界の端々にヒビが入っていく。そのヒビは大きくなり、視界のほぼ全てに亀裂が走った。このあり得ない現象を前に、私は一つの可能性に辿り着いた。

「まさか……幻術！？」

頭に過ったのは一つの可能性。私の知る限り…いや、調べられる限りでは世界最高峰といっても過言ではない精度を誇る大和唯一の魔法体系。今代最高の幻術遣いである彼の十八番、幻術魔法。

幻術には様々な種類がある。代表的なのは視覚や聴覚などの五感を騙したり支配するものだが、彼には更にその上がある。それは有幻覚と言われ、形を持ち、現実に干渉できる物理的な力すら持つ驚異の魔法。幻術とは術士のイメージが最も重要になると言われている。とするのならば、彼は自らが望んだ物全てをこの世で表現出来ると

考えても間違ってはいない。……それに彼が気付いているのかと聞かれれば、判断に苦しむのだけど。

だからこそ私は警戒していた。しかし油断が全くなかったと言えば嘘になる。これまで掌の上で踊っていたの私ではなく大和であり、私は常に彼を躍らせていた。だからこそ今のような事態になるとは思ってもみなかった。故に一部の隙を見せてしまったのかもしれない。

しかし私も彼の幻術魔法の脅威についてはよく知っている。だからこそ、私は注意を払って彼と対面した。……注意を払って対面したはずだった。

「どうしたんですか？　紫さん、何時もより顔色が悪いですよ？」

しかし蓋を開けてみればどうだ、私は彼が幻術を行使する瞬間すら察することが出来なかった。実際に相対して掛けられたことがないからなのか、それとも情報ばかりが先走りして無駄な力が入ったのかは解らない。しかし今現在、掌の上で踊らされているのは彼ではなく私の方だった。

「……やってくれたわね。でも、現実じゃこうはいかないわよ」

「はは、お手柔らかに頼みます。じゃあそろそろ起きて貰えます？　今頃本体は暇を持て余してるので」

「ッ馬鹿にして……」

「嫌だなぁ、僕は本当のことを言ったまでですよ。紫さんだってそうじゃないですか、頼んでもないのによくもまぁ……。おかげで貴方が僕にやってきたことのほぼ全てが解りましたよ」

「……今の貴方に何を言っても無駄でしょうから、文句は全て『現実』　で言わせて貰うわ」

「そうしてくれると嬉しいです。それでは『現実』　で……」

砕け散っていく世界を眺めながら、私は彼への認識を改めるのであった。

◇◆◇◆◇◆◇

「お帰りなさい、紫さん。いい夢でしたか？」

「ええ、それはもう素晴らしい夢でしたわ」

今の心情を一言で表すとするのなら、恐怖。すごく怖いです、冗談抜きで漏れるかも……。まるで親の仇を見るような鋭い眼光で僕を睨みつけてくる紫さんを見て、つい先程まで調子に乗り過ぎた自身に酷く後悔しているところです。でも仕様が無いじゃないか、初めて紫さんに対して優位に立ったんだから。

それに僕だってここまで良い様にやられて悔しく思わないわけがない。こんな少しくらいやり返したところでも、まだまだ足りないと思うのが本音だ。

「では紫さん、答え合わせの時間です。解答と解法を紫さんが理解出来るようにゆっくりと、丁寧に説明するんで一回で理解してくださいね？　あ、やっぱり質問してもらえますか？　自分一人で話すと何でもかんでも話してしまうかもしれませんので」

「……」

はっはっは、怖いくせに何煽るようなこと言ってるんでしょうね僕！？　ついさっきから僕の膝はプルプル震えてますよ隣の文さん！？　え、なに？　因果応報？　は、ははははははははははは！　もうここまで来たら最後まで馬鹿にした態度で突っ走ってやる！　これが生涯最期の会話になるかもしれないからね！！

そう決めた僕は、おそらく自分で見れば迷わず殴りかかる程ウザイ笑みを浮かべて事の次第を話すことにした。

「ならお言葉に甘えさせて貰おうかしら。私が今までやってきたこと、それはルーミアから聞いた？」

「そうです、あの子が全部を話してくれました。そのあと藍さんが訪ねてきた時は誤魔化すのに苦労しましたけど」

「やはりあの時……藍もまんまと騙されたわけね。じゃあそれからかしら？　この作戦を考えていたのは」

「いいえ、考えたのは神社で藍さんと会った後です。その前までは別のことを考えてました」

「別の事？　……もしかして、仇討ちなんて考えてなかったでしょうね？」

「その通りですよ？　僕は貴方を倒すことを第一に考えてきました」

「……貴方、笑えないわ。ええ、本当に笑えない」

笑えないのは僕も同じなんだけどね。こんな状況で……闘う為に何の準備も出来ていないのに笑えるわけがないから。

何を隠そう、紫さんの前で余裕立ちをしている僕ですが、ここから先は何の策もありません。何故なら賭けを受けて貰う為だけにおびき寄せたのだから。でもそれは予定では今日じゃなかったんだけどね。修行の為の２００年くらいは分身で隠し通せるだけの自信があったのだけどなぁ……。山に入った瞬間に待ち伏せされるなんて本

当にツいてない。

それなのにこれほど刺激させていいのか？　と聞かれれば、これでいいのだ、と答えるけど。

何故かって？　賭けと言うのはね、対等の立ち位置だからこそ成り立つ物なんだよ。幾ら吠えようが力の無い者の言うことなんかに聞く耳を持つはずがない。風が吹けば簡単に飛んでいく存在を前に無駄な時間を過ごそうなんて酔狂な人、そうそう居ないでしょ。だってぶん殴って黙らせて言うこと聞かせることが出来るんだからさ。

だからこそ僕がそれなりに『デキる』　と言うことを身を持って知って貰わなければならない。今までの僕とは違うのだと、もう一筋縄ではいかないのだと言うことをアピールすることが必要だった。だからこそこうやって虚勢を張ってまで余裕の演技をしているんだよ。

「藍が神社から帰ってきた後から私は監視の目を強めていたのだけど。どうやってその監視の穴を突いたのかしら？」

「紫さんならきっとそうすると思ってました。だからこそ、僕はそれまで通りに隠れて準備をしていたんです。山に入る準備をね」

「でも私はその動きを察知していたわ。隠れていたつもりなら、察知されるのは拙いんじゃないのかしら？」

「それがそうでもないんですよ。だって紫さん相手に僕が隠し通せるわけ無いじゃないですか。だから見られていると知りながら態と放っておいたんです。僕が山に入る準備をしていると知って貰う為に」

これはほとんど嘘だ。見られているだろうと予測はしていたけど、本当に見られているのだとは気付けなかったし、今日紫さんが僕の前に現れるというのは本当に誤算だったから。本来なら修行の全工程を終えた後に僕の前に現れるように仕向けようと思っていたから。それにあのルーミアちゃんが何も言わなかったくらいだ、きっとあの子も気が付けないレベルの監視だったのだろう。だったら僕が気付けるわけもない。

……今思うと最初から挫かれていたんだよね。でも計画の要となる分身体にはそれだけの自信があったのも確かなんだけど。本心から２００年の時間稼ぎくらい出来ると思っていたんだけどなぁ……。けど、それでも僕一人では紫さんの上を行くことは出来なかった。

「それは嘘ね。あれからは私が持てる技を尽くして監視していたのよ。だから絶対に気付くなどら出来ない。だから貴方は今日、私が此処に来ること事態知らなかったはず。なのにどうやって私に覚らせずに幻術を使えたのかしら」

「……言ったでしょう、大和さん。妖怪の賢者とまで言われた方に下手な嘘は通用しません、と」

嘘と真実を混ぜればそれなりに通用するとは思ったけど、それすら難しかい。文の忠告を無視して嘘を真実と織り交ぜて出してみたけど、逆に下手を打ってしまった自分の愚かさを少し怨んだ。確かに今日の一件は紫さんの言う通り、僕は何も知らなかった。そんな早すぎる襲来に対して対応できたのは、隣にいる文と一人の天狗の影響が大きい。

「『大和』　には私が教えたのよ。八雲紫が山に入っているけど貴方と関係あるのかしら？　とね。私じゃ場所の特定は大まかにしか出来ないし、近づきすぎると覚られる。だから目の良い子に頼ることになったけど」

「……射命丸文。貴方は自分が何をしたのか解っているの？　この一件、天魔は『天狗は関わらない』　と誓ったのよ。貴方はそれを単独で破った、つまり長の命令に逆らったのよ。これが天狗社会の中で生きる貴方にとってどれだけ影響を及ぼすのか解らないわけないでしょう？」

それが一番の懸案事項だ。文ともう一人の子は天魔の命令を無視してまで僕に強力してくれた。白狼天狗のあの子は無理やり強力させられたと言えばなんとでもなるだろうけど、一緒に行動している文は言い逃れが出来ない。僕も知らせてくれるだけで十分だと強く言ったのだけど、そんなことは屁の河童だと言う本人が付いてくると言って聞かなかった。逃げる場合には最速の足が必要だろう、と言って。

「後のことなんてどうでもいいのよ。そりゃあ私だって自分の置かれている状況くらい解っているし、キツイ制裁を受けるでしょうね。こんな私でも天狗社会の一員なわけだし、何時もなら嫌々でも一族の命令には従うわ。でもね、親友のピンチに見て見ぬフリをしろだなんて命令は無理。不可能。断固拒否。恩に仇で返すぐらいなら親友と心中するほうがマシよ」

「……」

「私達はね、まだ生まれて間もない時から固い絆で結ばれているの。そこに誰かの意志が入り込む余地なんてないの。私はただ親友を助けたかったから助けただけ。だいたい他人を助ける時に自分の身の安全を計る奴なんていると思う？　いるとしたら、きっとそいつは誰も助けられやしないわよ」

こんな文に惚れ直す、と言うのは表現が違うけど、僕は一人じゃなくて良かったと思う。僕一人じゃどうすることも出来なかったから。もし文がいなかったら、今頃僕は紫さんに連れて行かれていただろうし。

『一人で無理でも二人なら、二人で無理なら三人で……多くの人と手を繋ぎ、同じ方向を向けば不可能なんて言葉は意味を為さなくなる。誰かと繋がりがある、どれほど長い年月が過ぎようとも砕けない絆の力。一人じゃないと言うことはとても頼もしいことなんだよ。その中心に立つ人はね、ご主人さまなんだよ』

全てを知ったあの日、ルーミアちゃんが言っていた意味が今なら少しだけ解る気がする。こうして誰かの力を借りて、誰かと一緒に前を向ける。それだけで可能性は広がっていくんだ。だから僕は紫さんとも手を繋ぎたい。そうすれば二度と僕や零夢のような存在を生み出さなくて済むはずだから。

「紫さん、賭けをしましょう」

「賭けですって？」

「そうです。お互いの人生を賭けて一回きりの勝負。勝った方が負けた方を好きにする」

けど手を繋ぐにはまだ早い。今のこの人には何を言っても通用しないだろうから。そうじゃないと人を殺すことを『必要だから』　なんて言葉で纏められるわけがない。だから僕は僕の全てを賭けて真正面からこの人を叩き潰して、映姫様の前で誓った自分への誓いを果たす。１００人じゃない、１０１人で宴会を開く為に。

「僕が勝てば、僕の理想とする幻想郷の為に一緒に働いて貰います。紫さんが勝てば……どうにでもしてくれればいいです。式にでも下僕にでも成りますよ」

「じゃあ今から――――――」

「おっと、それは無しですよ。今の僕は未完成な幻術を無理やり使ったせいで魔力が零なんで。こんな全力には程遠い状態じゃ無理なんですが……紫さんならそんな事関係無しに襲ってきますよね。でも、もしそうすると言うのなら――――」

「言うのなら……？」

「――――――逃げます。具体的に言うと母さんの所まで。追いかけてくるのなら友人全員頼って返り討ちです」

「足は私です。追いつかせやしませんよ？」

唇の端を吊り上げてそう宣言してやった。どうだ参っただろう！

・・・・・・・・・・

「……ごめんなさい、やりたくないけど突っ込みを入れさせて貰うわ。自分で言って情けないと思わない？」

「五月蠅いですよ！？　そりゃあ自分で言ってて泣きたくなるくらい情けないですよ！　でも今の僕じゃ全力出せても勝率なんて零だし！？　だから修行しようと思って山に入ったのに何故か待ち伏せされてるし！？　何なんですかいったい！？」

ふん！　今の僕が紫さんに勝てるわけないに決まってるでしょ。だから親だって友人だってみんな巻き込んでやる。どうせ皆見て見ぬフリをして来たんだろうし、この際表舞台に引きずり出してやる。終いには紅魔館を始めに映姫様まで味方に引き込むぞゴルァッ！？

「この際だから開き直させてもらいますけどね！　僕は最終的に皆で楽しく笑って楽しく過ごせればそれでいいんですよ！　その為には今の考えを持った貴方じゃ駄目なんです。だから改心してください。いや、本当にお願いします」

「奇遇ね。私も甘い考えを捨てきれない貴方では使い物にならないと思うわ。改心なさい」

「ほら平行線じゃないですか。だから自分自身の信念と誇りを賭けて勝負をしようと言っているんです！　……僕の修行が全部終わってから」

じりじりと、コンマ一秒も掛らない間に文に跳び付ける位置まで動く。どうせこの話はもう平行線のまま動くことは無い。それに紫さんが今の僕を見逃してくれる訳もないだろう。だから瞬時に逃げられるように身体に力を入れた。無論文もそれに気付いているらしく、何時でもトップスピードで飛べるように準備を始めている。

分の悪い賭けや闘いなら幾らでもしてやる。でも勝てない闘いをするほど僕も愚かじゃない。逃げることも立派な闘いだ。

「……はぁ、貴方自身はそれで負けたら満足できるのね？」

「……！　乗ってくれるんですか！？」

やれやれ、と両手を広げて首を振る姿を見るに、どうやら納得してくれたみたいだ。驚いた、もう逃げるしかないと内心思っていた所なのに。でも何でこんな馬鹿な提案に乗ってくれたのだろう？　また汚いことでも考えているのだろうか？

「１００年程の猶予をあげる。それまでに貴方自身を『完成』　させなさい。私がまた調整するのも面倒だし。……それに、貴方が何をしようと世界は変わらない。そんな理想など実現不可能だと言うことを自覚する為の時間として遣いなさい」

「……貴方が何をしようと、僕はもう揺るぎません」

「……ホント、萃香と同じで頑固ね。本当に貴方たち親子は――――いえ、何でもないわ。せいぜい貴方の最期に相応しい舞台を用意しておくことね」

そう言った紫さんはスキマを開いて背中を向けた。

「まぁその前にそこの鴉天狗を助けてあげることね。それすら出来ないのなら、直ぐにでも迎えに行くから」

そう一言言い残し、紫さんはスキマに消えて行った。確かに文をどうにかしなければならない。紫さんが去ったからか、多数の妖気がここを目指して飛んで来るのが解る。

「うーむ、これは非常にマズイですね。非は私にあるわけですから抵抗も出来ませんし。むしろしたらしたで余計に罪が重くなりますし……。これは参りましたねぇ」

「その割には落ち着いてるね」

「え？　大和さんが身体張ってくれるんじゃないんですか？」

「うげ……随分難しいこと言ってくれるなぁ」

「でもそのつもりなんでしょう？」

「そりゃあね。僕の為にしてくれたことだし、文の代わりにけじめをつけなきゃならないだろ」

向かってくる天狗たちを迎撃するために気を纏って空に浮かぶ。地面では木に背中を預けた文が余裕そうに僕を見上げている。……期待されてるなぁ。ま、せいぜいその期待を破らないようにしよう。恩にはそれ以上の恩を持って返す。母さんの教えだ、守らないわけにはいかない。

「親友一人守れないようじゃ生意気なんて言えるわけもない。ここは絶対に引けない」

鴉天狗に白狼天狗、それを率いる一際大きな妖気は大天狗と呼ばれる幹部なのだろう。１０人程が戦列を組んでこちらを睨んでいる。これだけ引き寄せるだなんて文も人気者だなぁ。

「伊吹大和、そこの同胞を「嫌だね」　なッ!?　抵抗する気か!」

相手の出方を待つまでもない、やることは既に決まっているのだから。先手を取って一番弱い白狼天狗に打撃を加え、結果3人堕とすことに成功した。幻術が使えない今、僕は小細工が何一つ出来ない。

魔法を使えない状態で始まる戦闘は初めてだ。

「さあ行くよ、古からの友人たち。善も悪も関係ない――今この瞬間は、力だけが全てだ！」

だからこそ、純粋な武術家としての真価が問われる――――――

◇◆◇◆◇◆◇

「ああもう、貴方達もしつこいなぁ」

いったいどれだけ時間が経っただろうか、心身共に疲れ切った僕は、其れでもなお空に浮かんでいた。ノした天狗の数は２０を超えてから数えるのを止めた。だって倒せば倒すほど次が出てくるから。どうやら文だけじゃなく、僕自身を気に入らない人たちも多いらしい。そんな人たちは少々のダメージなど気にせず突っ込んで来るから僕

も無傷でいられる筈もなかった。

身体には斬られたり殴られたりして出来た傷が多くある。近接戦闘は得意なつもりだけど、時間を於かずに向かってくる数の暴力には耐えきれなかった。飛んで来る天狗を掴んで盾代わりにもしてみたけど、あまりにも可哀そうだからと途中で止めたのが間違いだったのかも知れない。でも掴んだ天狗を武器代わりに投げたりはしたけどね。

「流石は伊吹と言ったところか……よくここまで粘った。だがもうそろそろ諦めてそこの部下を渡してはもらえんか？」

「無罪放免」

「それではこちらとしてもけじめがつかんのよ」

「ケチ。僕を好きなだけ甚振ったくせに。それで手打ちでいいじゃないか」

「それよりも堕ちた部下の方が多いから困っている……」

……もしかして頑張り過ぎたかな？　今、僕は大天狗たちに囲まれている。襲いかかって来る人を堕とし続けていると、知らない間に

大御所まで出てくるようになってしまったのだ。まぁ付けられた傷のはほとんどがこの人たちだから僕もこう言ってるんだけど。

「どうしても退いてくれんか？　こちらとしてもお前の親が怖いから、これ以上手出しはしたくないのだ……。頼む、この通りだ。お願いだから引いてくれ。我々としてもまだ死にたくない」

一斉に頭を下げる大天狗たちを前に、僕自身パニックに陥りそうになっている。だって仮にも山の幹部たちだよ？　そんな人たちが束になっても母さんが怖くて手出し出来ないって、いったい母さんってどんだけ怖いんですか！？　って話なわけですよ。

もしかして、この人たち全員相手にしても無双出来るほど強いなんてことは無いよね……？

――――――止めよう、想像したら本当に出来そうに思えてくる。でもこれはチャンスだ。これ以上僕に手が出せないのならそこから強請りをかけてやればいい。ヌフフ、僕も悪よのぅ……。

「だったら無罪放免でいいじゃないですか」

「だからそれは無理なんだ。……困った、儂だってまだ死にたくないのに」

「だから――――――」

「もう手打ちでいいではありませんか。これ以上すると言うのなら儂としても黙っておくわけにはいきませんからね」

「……ッ誰！？」

少しの気配も感じさせず、僕の隣にピンク色の髪をした女性がいきなり現れた。急に現れた女性に驚いて飛びのこうとするも、伸ばされた片腕に僕の腕が掴まれてしまった。……いったい何者なんだ、僕に気配の一つすら覚らせずに隣に現れるなんて……。

「伊吹大和」

「え、あ、はいなんでしょう？」

「頭を下げなさい」

「へ？　……って、うわっ！？」

「どうも私の知り合いが不始末を起こしたようで、申し訳ありませんでした。今後はこういうことが起こらないよう、十分教育しますのでこれで手打ちにして貰えませんか？」

この人は何者なのだろうか、何で僕の名前を知っているのだろうかと困惑している僕は、何を言われているのか意味が解らずに呆けてしまった。すると突然、掴まれていた腕が後頭部へと場所を移し、強制的に頭を下げさせられた。なんなんだこの人！？　さっきから何の抵抗も出来ないんだけど！？

「いや、しかし儂にも立場と言うモノがあってですな……」

「……頭を下げるだけでは足りないと？」

「いや、そういうことではなくてですね……」

「そもそもこの子を倒せないそちら側にも非があると思うのですが。この程度の子供、貴方たち大天狗が本気になればものの数秒も持ちますまい。それをしないと言うのはいったいどういうおつもりか。この山を任された者として、この対応はあまりに不適切ではないのですか？　……もしや、本当にこの子の親が怖いだけではないので

しょうね？」

母さんを知っている!?　と言うことは、僕が鬼の子供だということも知っているんだ……。だとしたら、きっと妖怪の山に住んでいた人のはずなんだろうけど……。でも本当に誰なんだろう、こんな人僕は見た覚えが無いのに。

「いっいえ、儂らはただ――――――」

「ふぅ、久しぶりに俗世に出てみればこれか。山の管理者は仕事をしない、同胞は地下に潜ったまま出て来ない。ああ、まったくもって嘆かわしい。もう結構、私たちはこれで失礼します。――――――ああ、そこの鴉天狗の貴方も来なさい。天魔には私の方から連絡を入れておくから心配は無用です。それでは天狗の皆様、またお会いしましょう」

次から次へと出てくる話題と、有無を言わせない圧力に僕らは圧倒されてしまった。口を挟むことは出来るだろうけど、挟めば倍以上になって帰って来るだろうと直感してしまった。……だから誰も口を挟まないのかも。だってこの人、まるで映姫様みたいだし……。

「あの～、貴方様はもしかして……」

「私の家に着いてから話をしましょう、鴉天狗。大和、もちろん貴方はこれから説教です」

だから、貴方は誰なんですかってばよ……

心の底から貴方を殴りたい・下（後書き）

ちょうど一週間といったところでしょうか、じらいです。今回はですねぇ…本当に時間掛りました。リアルの問題でモチベーションは下がりますし、ちょっと愚痴らないとやってられません。と言っても一日ずつちょこちょこと書いていたのですけど。

そのせいとは言いませんが、今回の話には無理がありすぎだと思うというか、納得出来る要素が何時も以上に少ないんです。どこがと聞かれれば何となく感じるだけなんですけど。ここ一番の盛り上がりのはずがなんかちょっとどうよ？　みたいに。でも精神状態って小説書くのにすごく影響するんですね。私だけかもしれませんけど…。

さてさて、ここからは私情です。長くなるので一言二言。腐った現実の中での零の軌跡は楽しかった！　碧の軌跡最高！　ビバ☆現実逃避

知らない人は知っている

～地底　旧地獄～

丸十日以上続いた鬼同士の闘いは終わり、この地底にも漸く静けさが戻ってきた……こともなかった。地底に住むほぼ全ての住人がせっせと忙しそうに汗水流して走り回っている。無駄に派手で熱い闘いによって吹き飛んだり、粉々になった民家やお店といった都の復旧が総出で行われているのだ。

「失敗した失敗した失敗した失敗した……私は賭けに失敗した……」

もちろん私やお姉ちゃんも賭けに参加した以上、手伝わない訳にはいかない。と言っても私はサボってるし、お姉ちゃんは賭けに負けたせいか目のハイライトが消えた状態でブツブツ言って怖いから誰も近づけない。そんな状態だから、わたし達は自然と二人きりになるんだけど。それでも金槌片手に釘を打つお姉ちゃんは妖怪の鏡だよまったく！

「こいし……そこにある釘を取って」

「はいお姉ちゃん。でも鬼を打っちゃ駄目だよ？　釘が折れちゃうから」

「ウフフ、なら心に釘でも打っておきましょうか……？」

「ん～、それなら何の問題もないんじゃないかな」

「そうね、それがいいわ……。ウフ、ウフフフ……待ってなさい、一生モノの釘を打ちつけてあげる……」

う～ん、お姉ちゃんも中々に病んでるなぁ。まぁそれも仕様が無いかも。なんせ有り金のほとんどを注ぎ込んだ博打だったらしいし。それだけ怒り心頭ってやつだね、くわばらくわばら。と帽子のつばを人差し指でクイッと上げて考察してみる。

んっふっふ、お姉ちゃんには黙っているけど、実はわたし、一人勝ちしたんだよね。相討ちという予想を的中させたわたし、流石無自覚な妖怪！　いやぁ、自分でも驚いたよ。なんたって一日にして大金持ちだからね。これで少しはお小遣いが稼げたし、ちょっと豪遊するのも悪くない。ま、お姉ちゃんが困ってたら全部渡すつもりだけど。

――鬼さんこちら、手のなる方へ

――萃香、後は任せた。ありゃあ私の手には負えないよ

――ちょ、勇儀！？　わたしだってあんな虚ろな覚妖怪なんて相手に出来ないよ！？

お姉ちゃんも楽しんでるみたいだし、一人勝ちしたわたしは先に地霊殿に帰って祝勝会でも開いておこう。確かお姉ちゃん秘蔵のお酒が蔵の中に幾らか入っていたはず。

「でも地上か……。あんな汚い世界に行きたいなんて変な鬼……やめやめ、不毛なことなんか考えないでおこ」

別にわたしには何の関係もないし。

地上に続く道に背を向け、わたしは帰路を目指した。

「それにしてもお姉ちゃん、本当に楽しそうだったなぁ～」

◇◆◇◆◇◆◇

見知らぬ女性の後を、冬の冷たい風を切りながら空を飛ぶ。眼下には降り積もった雪に夕焼けが反射し、キラキラと輝いて見える。今の季節だと秋の神様姉妹は家で寝てるのかな、と他愛もないことを考えながらも、前をゆっくりと飛んで行く女性について考えを巡らせる。

淡いピンク色の髪に、二つのシニョンキャップ。左手には母さんと同じような鎖付きの枷が嵌められた左腕に、右腕は怪我でもしているのか、その全てが包帯に包まれている。そして膨らんだ胸には大きな牡丹の花飾り……駄目だ、特徴を捉えて記憶の中を漁ってみても何一つ思い出せない。

一度会った人のことは忘れまいと思っていたけど、中々そうもいか

ないものなんだね。長く生きていると、出会って来た人との思い出も記憶の中に埋もれていく。それも仕方のないことなのかな……。

「私のことが思い出せませんか？」

「あ……すいません、思い出せないです」

「無理もないことです。貴方と私が出会った時、貴方はまだ赤ん坊でしたから」

「え……なら、貴女も鬼なんですか！？」

「茨華仙。ただの行者ですよ」

「茨華仙！？　やっぱり貴女様は「私はただの行者ですよ、射命丸文」　そ、そうですか……」

文の反応を見るに、鬼と深い中なのは何となく理解出来る。でも僕はこの人を知らないし、この人は赤ちゃんだったころの僕を知っていると言っている。じゃあ母さん達とどういう関係なのかを聞こうとしたところで、眼下の白銀色に染められた妖怪の山の中に、ぽつりと同じく白く染まっている大きな屋敷を見つけることが出来た。そこへ向かって降下していく茨さんの後姿からは、それ以上聞くなという雰囲気が漂っているように思えた。なので深く聞くことも出

来ないまま、僕と文も降下していった。

でも行者か……。行者と言えば師父みたいな人を思い出すけど、そう言えば師父は今何処にいるんだろう。蓬莱島で別れた後は何の音沙汰も無いけど、元気にはしていることは間違いないとは思う。なんたって師父だし……あの師匠よりもふざけた存在の師父だし……。いきなり目の前に現れても、驚きはしても不思議には思えないんだろうなぁ。

とまぁ僕の行者との経験は別にいい。今重要なのは、目の前の屋敷が中々の大きさを持つと言うことだ。

「あの、大和さんを助ける時に手伝ってくれた子がいるんですけど、その子もここに連れて来ていいですか？　出来ればその子も私と一緒に助けて貰えれば嬉しいのですけど」

「ああ、彼女ならもう道場にいると思いますよ？　オタオタしている所を先に回収しておいたので」

良かった、と僕と文は胸を撫で下ろした。あの子を巻き込んだ手前、最後まで面倒を見るのは当然だから。

降り積もった雪に足跡を着けながら、屋敷に繋がる道を歩いて行く。まったく穢れを知らない純白の地面に足跡を付けるのは乙なものだと思う。普段は形のない自分の軌跡と言うモノを見れる数少ない機会だし、何と言っても雪の上を歩くのは楽しい。

子供みたいに雪を踏みしめて楽しんでいると、正面から女の子が走って来るのが見えた。

「文さん！　良かった、ご無事でしたか。それに大和様も」

「や、椛。無事で良かったよ。あと、様は要らないからね？」

犬走椛。剣と盾を持った白狼天狗で、妖怪の山では哨戒任務に当たっているらしい。千里を見通す目を持っているとのことなので、紫さんの居場所を探るために急遽文が連れてきた協力者だ。如何な紫さんと云えど、遙か彼方から見つめる目、しかも何の術式も介さない視線に気付くことは出来るはずもない。

「そうはいきませんよ。既に山には姿をお見せしませんが、大和様は伊吹萃香様のご子息であらせられますし」

「だから別に大和で良いって言ってるんだけどなぁ……。駄目？」

「駄目です」

上下関係に厳しい天狗社会にどっぷりと浸かっているせいか、生真面目な子だと言うのが僕の第一印象だった……のだけど、助けて欲しいと頼むと二つ返事で了承してくれた。そのせいか、この子も僕の中では文の様にちょっと外れた子なのかと思う様になってしまった。……別に文のようにはみ出し者だと言うわけじゃないだろうけどさ。

「椛も相変わらずお堅いわねぇ。でも良かったわ。貴方だけ処罰を受けるなんてことになったら、流石の私もほんの少しだけ目覚めが悪くなっていたし」

「……別に私は大和様の為を想ってやったことです。それで咎められようと、最早自己責任の領域です。貴女に心配される筋合いはありません」

「え、えぇっと……お二人さんは、もしかして仲悪い……？」

「「悪くはないですよ、ええ」」

「貴方は良い友人を持ちましたね」

非常に愉快なお友達です、はい。でも文が椛を連れてきた時も、椛は凄く嫌そうな顔してたし。今は着替えてきたのか、僕の前に現れた時は抵抗した後が服にありありと見てとれてたからなぁ……。無理やり連れて来られたのに、それでも手伝ってくれた椛には感謝してもしきれません。

「友人とはいえ、文さんは大和様と親しく接しすぎだと思います。もっと距離を取ってですね――――――」

「もっと距離を取って、誰かさんの様に覗きをしろとでも？　誰とは言いませんが、ネタもだいたい取れてるのよね。その誰かさん、何を思ってかその視線がアツイのよ。――――――おっと、これ以上はおふれこと言う奴です」

「何を仰っているのか解りませんが」

「おやおや？　どこぞの忠犬は自分のことすら分からないようね」

「……茨さん、寒いし中に入りませんか？」

「そうしましょう。お茶を淹れてくるから、座って待っていて下さい」

女性の喧嘩に男は口を挟めない、もとい挟まない。藪蛇は嫌だし、長生きしたいのなら厄介事に首を突っ込むのは止めておこう。特に言葉を使う喧嘩では、ね。

◇◆◇◆◇◆◇

それなりに広い部屋で、お茶を淹れに行った茨さんを待つ。ふと窓から外を覗いてみると、ヒートアップした二人の言い争いが見てとれた。アハハ、楽しそうだなぁ……と、扇と剣で鍔迫り合いをしている二人を見て感想を言ってみる。……僕も疲れてるなぁ。

「光陰矢のごとし――貴方に出会ったのがつい先日の様に感じる

わ」

「茨さん？」

テーブルに四つお茶が置かれた。その内の二つはもちろん二人の為に淹れて来たお茶なんだろうけど、肝心の二人はこの寒さにも関わらず、元気に外で暴れ回っている。

「お茶を淹れてきました。外の二人は……放っておけませんね。ここは私が――――――」

「あー、あの二人も色々あるみたいですし、放っておいては？」

人の良さそうな人にこれ以上迷惑を掛けるわけにはいかないよ。椛は真面目そうだからいいとしても、文は絶対に迷惑を掛ける。間違いないです。慧音さんが悪の手先（取り立て）　となってしまった今、心の安定剤となり得るかもしれない人とは是非とも仲良くなっておきたいです、はい。いやホント、切に願います。

「ですが……そうね、今回は二人に任せておきましょう。目の前にも助言しなければならない者がいることだし」

「……？　……えっ僕？」

前言撤回、この人から映姫様と同じ臭いがする。

「貴方以外に誰がいると言うのよ……。いいですか？　萃香がどうやって育てたのかは知りませんが、貴方は少々短絡過ぎませんか？　貴方の行動を今まである方に頼まれて追って来ましたし、それなりに評価出来ることもあることは認めましょう」

「はぁ」

怒られているのだろうか、きっと怒られているのだろう、いや怒られているに違いない。でも僕の動きを追っていたとか、母さんを呼び捨てとか、映姫様みたいに説教？　を始めるとか色々と突っ込みどころが満載なのはこの際放っておこう。ただ茨さん、貴女はいったい何者なんですか？

「今回、貴方は一度引くということも出来たはずです。いいですか？　八雲紫と貴方の戦力差は二段階ほど違う。実際に対峙した時にはそれ以上と考えた方がいいかもしれないくらいです。確かに貴方は弱くない。しかし、貴方と私たちでは根本から違うのです」

「むっ……今回は僕だって勝機があったから仕掛けたんです。それにまだ完成してないとは言っても、新しい幻術にはそれなり以上の自信がありました。未完成ですけど」

僕だって紫さんや母さん達とは根本から違うことや、今闘っても勝てないことは理解している。だから自分を鍛える為に此処に来たし、それに今回は勝機もあった。そりゃあ賭けの要素が多かったけど、別に部の悪い賭けなんかじゃなかった。

「私の言っていることは貴方の事ではありません。――――――心配なのは貴方の親のことです」

「あ――――――」

「親のことを考えるのならばこそ、軽率なことは控えるべきではないでしょうか……。私はそう考えます」

……僕も軽率なことをしたのかもしれない。例えば僕が紫さんにやられて酷い目にあったとする。そうするとたぶん母さんは――――――

「「それはもう、大暴れするに決まっている」」

二人同時に同じ結論に至ったのか、同じ台詞を吐いてしまった。そのことにお互い目を見開いた後、クスクスと初めは小さく、しだいに大きくなる声を隠さずに笑い合った。お互いその姿が用意に想像できるからか、駄々っ子のように暴れる母さんを想像して笑ってしまったのだろう。

「茨さんはやっぱり鬼なんですか？　母さん達のことをよく知ってるみたいですし」

「ふふ、古い友……とだけ言っておくわ。今の私はただの行者。まぁ大将とは今も連絡を取り合ってるけど」

「『今は』　って、隠す気ないじゃないですか」

「実は八雲と貴方の行動も逐一報告してたりするの」

「ええ!?　ど、どうやってるんですか!?　そんなこと気付きもしなかったんですけど!?」

「秘密。でもあの萃香が親か……。ねぇ、貴方からした鬼ってどんなものか教えてくれない？」

「いいですよ？　じゃあ僕が小さかったころなんですけど――――」

この後、妖怪の山で起こった出来事や、山での僕らの生活なんかを茨さんに話してあげた。それを聞いた茨さんはころころと笑ったり、ムッとしたりと忙しい百面相を見せて楽しそうにしてくれた。その後は自然と僕の話になって、人里で起こった覗き事件なんかを問い詰められたり、宴会で借金が出来たりと耳が痛くなる話にまで広がっていった。

「あの宵闇の妖怪と同棲していると伝えたのだけど……話を聞く限りかなり不味いことをしたわね……」

「知りませんよ、僕は……。茨さんが頑張って止めて下さいよ？」

「頭の上の蝿も追えぬ者に成長はありません。と言うことで、自分

でなんとかしなさい」

「僕に死ねと……？」

どうやらこの人も心の清涼剤にはならなさそうです……

知らない人は知っている（後書き）

どうも、茨華仙です……嘘です、じらいです。未だ全貌が解らないのでゲスト出演程度に考えていました彼女ですが、この度出演することに決まりました。一巻しか持ってないせいか、知識は深くありません。一応調べながらやってますが、ちょっと違うのは御愛嬌。特に口調が丁寧なものなのか普通なのかが難しいので、説教の時だけ丁寧な口調にしようと思ってます。

で、伊吹伝での彼女の設定ですが、一応は行者。鬼の四天王に近いことを仄めかすくらいです。私個人では四天王の一人だと信じていたり……。

紫と大和の傍に控えていたルーミアに気付かれずに探れたのはただの動物を使役したから、という理由です。動物に見ておくように頼む→動物に話を聞くの繰り返しみたいな。

次回は蓬莱島・修行風景の時のような短編集のような形になるかもしれません。と言うことは、時系列がまた一気に進みます。

サブタイトルが本当に付けられないで困ってます。

修行とか、もう山でする必要ないよね（前書き）

手抜きです。すいません

修行とか、もう山でする必要ないよね

～夜～

夜も更け、折角なので夕飯を御馳走すると言う茨さんの提案を快く受けた僕らは、一つの机を囲んで食事を取っていた。外で元気に暴れていた文と椛も、堪忍袋の緒が切れた茨さんによって鎮圧されて今は大人しく夕飯を食べている。

まぁ、ね……茨さんを怒らせるのは駄目だと言うことを理解させられたよ。二人に向かって『ばかものーーーー!!』と一括したあれには、僕も身体中の毛が逆立っちゃったし。

「明日からは此処で修行よ」

「……はい？」

そんなこんなで我が家よりも質素な料理が並ぶ茨邸。行者だから食事も制限しているのだろうか、と少し物足りない夕飯に無言で箸を

伸ばし続けていると、何故か明日からの予定を決めるような一言を言われた。文や椛も気になっているのか、耳をピクピクさせて聞き耳を立てている。……白狼天狗って、耳フサフサで気持ち良さそうだね…。

「修行をしに山まで来たのでしょう？」

「そうですけど、紫さんとの決着もついたので山でする意味ももう無いんですけど……」

「私が修行して上げると言えば、考えは変わりますか？」

「見て貰えるんですか！？」

これは嬉しい誤算だ！　見た感じかなり茨さんも相当デきそうだし、やっぱり模擬戦でも実戦でも一人の修行よりかはすごく為になるからね。闘いの勘を失わない為にも、是非とも付き合ってもらいたいと思う。

「ええ。貴方を立派な仙人にしてあげましょう」

「大和さんの修行風景ですか……。私も覗いていいですか？」

「私も大和様の修行の内容が気になります。どうすれば強くなれるのか、勉強させて貰えませんか？」

「いいわ。この際、貴方達も見てあげましょう」

この時、僕は気付いておくべきだった。茨さんが言ったのは『立派な仙人にしてあげる』　と言ったのであって、戦闘面での修行だとは言わなかったことに。だって気付けていたら、元々恥も外聞もないけど、それでも全力で逃げ出していたからさ……。

◇◆◇◆◇◆◇

～翌日・早朝～

「貴方は欲が多すぎやしませんか？　健康的な身体、健全な魂を持つ為にその欲は邪魔にしか成りえません。徹底的に、その堕落した精神を健全なモノに矯正してあげましょう！」

「修行を見てあげるって、精神系なんですか！？」

「……？　貴方は行者に何を求めているの？」

「だって母さんの知り合い……と言うか、戦闘もお手の物じゃないんですか！？」

「私は行者です。そして行者の修行と言えば、精神統一しかないじゃない」

戦闘訓練なんてするわけないじゃない、と半ば呆れ顔の茨さん。何だか裏切られた気分……。母さん達の友達だから、それはもう濃い修行の日々を送れると思っていただけに。それなのに精神統一ｗｉｔｈ　動物。何故動物？　そう思うのも仕方がないけど、これには理由がある。

茨さんは動物を使役することができるらしく、また自身も修行の身なのでそれほど僕に構っていられないらしい。あと、僕を見張るため。修行に耐えられなくなった僕が逃げ出すのを見張る役割りらしい。これらが理由だけど、僕としては後半の理由の方が大きいと思う。既に逃走を謀ったからね……

「葦酒山門に入るを許さず。しっかりと実践していくわよ」

「それ禅宗ですから！　……あっ！　文、僕を置いて逃げるなぁ！？」

◇◆◇◆◇◆◇

～数ヶ月後～

一日の殆どを精神統一ばかりでは、心が鍛えられても身体が鈍る。暇を見つけて魔法の研究をしても、魔法は上達しても身体は鈍る。とにかく身体を動かしたいことを茨さんに伝えてみると、少し苦笑いでＯＫを出してくれた。……まさか許可出すの忘れてたとかじゃないだろうね？

「と、言うわけで頼むよ椛」

「若輩の身ながら、精一杯相手を務めさせて貰います！」

「さーて、椛がどこまで相手になるか見ておきましょうか」

なので道場を借りて、椛と模擬戦をすることに。文は先の一件で更にはぶられたのか、それとも自分から距離をとったのか、ほぼ毎日此処に顔を出すようになった。とは言っても、文にはちょっと調べ物を頼んでいるので、それの報告も兼ねて来ているのもあるのだけど。

「では、いかせて貰います！」

結論から言うと、下っ端の椛では模擬戦の相手になりませんでした。そのせいで泣き出しそうになっている椛を見た時は迷わず後に向かって全力で走りだしました。……見てないよ？　泣いてる姿なんて、僕は見てないよ？

◇◆◇◆◇◆◇

～半年後～

椛が来なくなりました。……はい、僕のせいです。反省してます。後悔もしてます。だから石投げないでー。そう言っても意味は無いぜ！　とばかりに文にはその件で弄られ、華扇さん（名前でいいらしい）　には修行不足と言われた僕は、少しの気分転換も兼ねて椛に会いに行くことにした。

「おーい、椛ー」

「……大和様、何か御用でしょうか。私みたいな何も出来ない下っ端の犬っころに出来ることなんて、何もないですよ……」

ハハハ……と暗く笑う椛を見て、思わず後ずさってしまったけど今回は逃げ出すことだけは出来ない。文も煩いし、何より女の子を泣かせた事に逃げるのは紳士のすることではないと気付いた次第であります。レミリアの時の教訓はどこに行ったとか言わないで。人は同じ過ちを繰り返す……まったく！

「僕には椛が（修行の為に）　必要なんだ。文や華扇さんでもない、

一緒に（辛い精神統一の修行の時に）　いてくれる君が、何よりも必要なんだ！　だから一緒にいて欲しい……！」

「大和様……！　解りました！　何時までも貴方様に着いて行きましょう！！」

とりあえず思ったことをそのまま椛に言って、また修行に付き合うと言ってくれた。そんなこんなで茨邸に帰って来た時、満面の笑みを浮かべて尻尾を振っている椛を見た文がこめかみを押さえていました。

「刺されても助けませんよ、大和さん」

「……？　何のことか解らないけど、やるって言うのなら受けて立つよ？」

「……薄々感じ取ってる癖に」

「な、なんのことかなぁ……？」

態とじゃないんです。そりゃあ色々と言葉足らずだったのは確かだけど、あの時は必死だったんです。また何時泣かれるのかとビクビ

クしてたし。それに、今更嘘だなんて言ったらそれこそ刺されると思わない？

椛の持つ剣が鈍い輝きを放っているのを見て、少し寒気が走った。

◇◆◇◆◇◆◇

～一年後～

「じゃあこの手紙を紅魔館まで持って行って貰っていいかな？」

「お安いご用です。じゃあ直ぐに戻ってきますんで」

先生の残した魔法を完成させるのは、僕一人では時間が掛り過ぎる。出来ないと言わないのは、残された魔法が本当に僕向きのものばかりだから。でも月一にするパチュリーとの文通のおかげで、開発に掛る年月が減っているのは確かだ。特にパチュリーの魔法に対する

捉え方は逸脱していて、僕は毎回驚かされてばかり。僕がパチュリーを驚かせる日は来るのだろうか……。

他の時間は専ら精神修行の連続。いい加減長い間座るだけの座禅にも慣れてきた。今では華扇さんの御言葉を聞きながら座禅を組んだりもしている。

「どうかしら、大和。少しは落ち着いた雰囲気を纏えるようには成ってきたと思うのだけど」

「はぁ……自分ではよく分からないですけど。でも最近、何だか欲が沸かないような気がするんです」

何だか知らないけど、最近は全てが手に取るように解るような気がする。落ち着いてからなのか、はたまた深く精神を沈みこませているからなのか、周囲の出来事に対しての認知度も随分と上がっている気が……。

「それは一種の悟りと呼べるもの。貴方も漸くその境地に――――」

「でも性欲が大きくなってる気がするんです。どうしたらいいですか？」

最近、ムラムラします。ええ、下の話になるのですが、こんなのは初めてだよ。他の欲が無くなってきた分、間違った方向に欲が溜まっていっている気がしてならない。

「……修行を倍にしましょう」

「ちょッ！？　子孫を残そうと思う本能まで否定するんですか！？」

「貴方の一番無くさなければならない欲が減って無いじゃない！」

ここから一月、気を纏った状態での強制滝行を言い渡された。何故か纏った気が柔らかくなっていた気がする。これも精神統一のおかげ？

◇◆◇◆◇◆◇

～時間跳んで１９００年～

「ふぅ……この紅茶は美味しいね。何の葉を使ってるのかな？」

「……」

「最近は紅茶なんて高級品にありつけなかったから、もう味なんて解らなくなってたよ」

「……ちょっと」

「いやぁ～、今日という日はなんて良い日なんだろう」

「ちょっと！」

「何かな？　アリス。僕は久々の紅茶を飲むのに忙しいんだ」

「図太い奴ね……。いきなり家に上がってきたと思ったら勝手に紅茶を淹れ出すし、貴方いったい何がしたいのよ」

「……一服？」

「出てけ」

魔法の森、所謂ホームグラウンドに来てます。違った、帰って来ました。もとい、逃げてきました。あれ以上あそこに居続けたら大切な何かを失う気がしたからね。こうやって娑婆の空気を味わって、適度にリフレッシュしないと馬鹿になっちゃうと言うわけ。

「アリスの分も淹れてあげたじゃないか」

「確かに美味し――――じゃないわよ「あ、これ手作りクッキー？貰うね」　……ああもう、好きにしたらいいわ。……あれ？　そう言えば、今日は里に行くとか言ってなかった？」

残念、それは分身です。と言っても説明がややこしくなるので言わないでおく。むしろ家に帰ったら帰ったでルーミアちゃんが離してくれないだろうからそれも却下。自然と避難所に選ばれたのがアリス邸と言うわけになるのです。

「ほらほら、僕のことはどうでもいいから。それよりも自動人形の方は捗ってる？」

「今邪魔をしている人の言うことじゃないわね」

誠に申し訳ないです。

アリスが何の魔法研究をしているのかは、分身体を通してルーミアちゃんに既に教えて貰っている。他にもルーミアちゃんからは良く報告が届いている。博麗の巫女さんがよく家に来ているとか、慧音さんが鬼だとか、時々遊びに来る妹紅と酒盛りをしているとか。……楽しそうです。

まぁそれはいいとしよう。今は目の前のアリスについてだ。紅茶を飲む顔にも少し疲れが溜まっているように見える。

図書館の文献を貸してあげてもいいんだけど、アリスには図書館のこと教えてないしなぁ……。それにそこまでしてあげる義理もなければ、分身との付き合いがあるとはいえ特別深い仲でもない。ギブ&テイクを基本とする魔法使いとして、僕には何のメリットもないし。アリス自身もそれに気付いているから協力を頼んで来ないし、何より図書館に陣取っているパチュリーが嫌がるだろう。

とは言っても、僕も薄情者ではない。インスピレーションを起こしやすくするために、マンネリと化した日々に少し刺激を与えてあげよう。

「上海はアリスのことどう思ってる？　やっぱりいい主だ、とかかな？」

「もちろんです！　アリス様は私の自慢の主人です！」

「シャン……ハイ…？　あなた、言葉を！？」

まぁアリスに上海が喋ったと言う幻術を掛けただけなんだけど、上手く騙されてくれたみたいだ。とりあえずこれで何か閃けたらいいかな？　と思いつつ、上海の状態を確認しだしたアリスを傍目に、僕は席を立った。

それにしても、アリスは本当に人形が好きなんだね。あの笑顔を見るだけでもいい気分転換が出来たよ。

「まさか逃げ出されるとは思わなかったわ……」

道場に帰るまではね……

◇◆◇◆◇◆◇

～１９１０年～

気と魔力を合成した状態、無想転成の第一段階。ただ垂れ流しにしか出来なかった頃が懐かしく感じられる程、今の僕は力の制御が上手くなってきた。出力を操れるなったことで燃費も少しは良くなった……はず。今は薄らと薄皮一枚を覆う程に留めている……のだけど、まだ難しい制御に額からは少し汗が。

それも少しずつ収まっていく。深く、深く、より深く。心の底を見つめることで自分を見つめ直す。禅を組む意味を教えられたのは、今のように力の制御が出来るようになってからだった。まったく、華扇さんも人が悪いよ。始めからこれが目的だったって言ってくれたら良かったのに。

「闘いの中に奇跡はないと言われる。では奇跡とは何です？　自分

や周囲の人の幸せ？　仲間や間違いを正してくれる人がいること？
……奇跡とはそういった何気ないことを言うのだと私は思う。そうであれば、この世には奇跡が溢れている。なんと素晴らしいことでしょうか。今を生きる貴方にとって、それを感じることは何よりも大切なこと。忘れてはいけませんよ」

そしてその状態を保ちながら、華扇さんの話に耳を立てる。広い道場に響き渡る声に思考を巡らせ、自問自答を繰り返す。奇跡とは何か、僕に必要なこととは、何か。

「幻想郷には奇跡が満ち溢れています。ですが、正義はないと私は考えます。誰もが各々の好き勝手に生き、迷惑を掛けることに対して露とも感じていない。……八雲紫は、そんな世界に絶望したのではないでしょうか」

「……！？　華扇さん、それは……！」

「目を瞑りなさい、話を続けます。――――――私自身、今の幻想郷はとても危うい状態だと考えます。ほんの少しでもバランスが崩れると、どうなるかくらいは想像できます。だからこそ、彼の賢者は秩序ある世界を創ろうとしているのではないでしょうか。だとしたら私も……」

……だとしたら、何なのだろうか。まさか、華扇さんまで目的の為なら手段を問わないとでも言うのだろうか。……いや、この人にとってそれはないだろう。あるとしたら、共感出来る程の感情だと思う。

「では、そもそも正義とは何か？　所詮正義という感情など、個人の持つモノ。形や在り方も無数にあるモノ。だとしたら、本当は正義などこの世には無いのかもしれない。それでも人は正義を求めます。例えそれがどんな形でも、時には他人の思惑など無視してまで。何故か？　なぜなら正義は人の心の拠り所であり、自身の行為を絶対のものにする為の根拠なのだからです。では我々はどうすべきなのか。……忘れてはいけませんよ、貴方にとって大切なのは――――――」

「――――――自分を見失わないこと。そして、何が起ころうと自分の信じた正義を貫き通すこと……ですよね？」

「ふふ……よく出来ました。ではお昼にしましょう。あと、射命丸文には礼を言っておきなさい。八雲紫についてここまで調べて来てくれたのですから」

そう言う華扇さんの手の中には、分厚いメモ帳が握られていた。成

程、紫さんのことが出てきたのは文に頼んでいた調査が上手く行っているからなのか。礼を言って、後で僕も目を通しておこう。これで、紫さんが何故こうも急いだのか解るかもしれない。

「知らないと始まらない。でも、知ったところで如何し様もないことだってある。それでも僕は――」

絶対に、諦めてなるものか。しつこさと諦めの悪さにだけは、自信があるからね。

修行とか、もう山でする必要ないよね（後書き）

手抜きは仕様です、と開き直りつつも反省をしているじらいです。私には時間を跳ばして上手く書ける自信がありません！　と言うことで今回の話でした。重要なのは最後の話だけかな？　巫女さんと絡めた話も最初は書いていましたが、技術が足りずに断念。ルーミアも断念。でもアリスは出る。いつか魔法使い同士で話が書けたらなぁ、と狙っています。

次回は人里１９３０年。あの人が起こす、最後の騒動です。変態紳士の方、ネタが有れば送って貰えると変態嬉しいです。もう風呂ネタは使えませんのでｗ　でもこれからまた一週間ほど時間が空くかもしれません。…明日は新しいゲームがね、出るのですよ。昔から追いかけている戦闘機の。

踊る阿呆に舞う阿呆

～１９３０年～

博麗大結界によって外の世界と隔絶されて早４５年の時間が流れた。幻想郷がどう変わったのかなんてのはあまり実感ができない。その間に友人が以前とはまるで別人のようになってしまったが、それでも幻想郷自体にはゆったりとした時間が流れている。特に幻想郷の中に於いても外との繋がりの少ない此処ではその傾向が顕著に現れていると私は思う。むしろそうであって欲しい。

「座禅を組み始めてもう５０年近く。大和もだいぶ大人っぽくなったじゃない。落ち着いた風格を纏ってるわ」

「はは、華扇さんにそう言って貰えると僕も嬉しいです」

「大和様、私も成長出来たでしょうか！？」

「もちろんだとも。僕と同じ修行をした椛が成長出来ないはずないよ」

だってそうじゃないと、私の友人がこれほど変な方向に変わるわけないから。今も忠犬椛の言葉に菩薩様のような笑みを浮かべているのは、精神修行によって性欲すら乗り越えてしまった大和だ。既にデフォルトと化した後光が眩し過ぎて、私にはもう直視できないレベルにまでなってしまった。華扇様はそんな大和を直視し、満足気に頷いている。……萃香様に『この子は私が育てたと』　でも言うつもりなのだろうか。

そんなことになったら……山、平地になるんだろうなぁ。

……駄目だ、早くなんとかしないと。この状況を打破できるのは私しかいない。文、私に幻想郷の未来が掛っているわよ。なんとしても大和を元に戻す。それが私(とも)の出来ることだ。

「では久しぶりに外出許可を出しましょう。悟りを開きつつある貴方なら、今までと違った世界が見えてくるはずです」

「分かりました。それを糧に、また精進します」

なんていう眩しさなの！？　更に強さを増す後光に私は思わず目を瞑ってしまった。…クッ、状況は最悪ね……ッ！

「今日はもう休ませて貰います。明日は朝から人里に向かって、紅魔館に行くので帰りは遅くなると思います」

「わかったわ。でも羽目を外さないように」

「解ってます。お休みなさい」

……人里。これは……チャンスだ……！　流石に外出する時くらいは華扇様も付いて行かないはず。なら大和さんは自然と一人になる。ここで大和を以前の彼に戻してあげよう。さもないと本当に手遅れになってしまう。

とりあえず大和がこうなった原因を思い出してみよう。確か大和が菩薩様のような後光を放つようになってしまったのは、精神修行によって己の欲を乗り越えてしまったからだ。それなら……抑えきれないほどの欲望を与えてあげればいい。溢れだすパッション！　迸るパトスをもう一度！　酷くヤラシイとまで称された『あの頃の大和ｖｅｒ．変態』　をもう一度この世に顕現させてあげようではないか！！　……うん？　私がやればいいって？　そりゃあ自信はあるけど残念ね。私はそこまで軽い女じゃないの。

場所は人里、用意するのは掻き立てられる欲望。ムフフ……浮かぶ、浮かびますよ～！　記者として培った私の頭の回転の速さは伊達で

はない！

「人里なら、あの人たちの力を借りなければ始まらない」

自然と口元が吊りあがっていく。ボロを出さない為にも、今から人里に向かって向かうとしましょうか。

「文文。新聞、射命丸文。いっきまーす！」

◇◆◇◆◇◆◇

翌日の朝、私は大和さんの変態仲間である三人と一緒に物影に隠れていた。理由は言わなくてもいいでしうけど一応言っておきましょう。身体が老いても、下心は老いないこの人達の力を借りる為です。

「嘘だ……。あれが、大和……！？」
「ありえない……奴も俺たちと同じなのに！　なのに何故！　あの人は俺達にはない輝きを放っているんだ！？」
「輝きと言うか、普段よりもキリッとしてますね。愚弟達にはない大人の雰囲気……いや、これは余裕ですか？　文ちゃん、もしかして大和さんは――――――」

「それはないです。そんな一大事、あったなら私が新聞に載せないわけないですよ」

上から五十を過ぎても年下好き（それはもう犯罪だ、とは言ってあげないで）　の四郎、貧乳から巨乳に鞍替えした三郎、そして一郎を除いた兄弟の中で唯一所帯を持った二郎、そして天狗一の記者・射命丸文です。ちなみにもしかしての後に続く言葉は……言う必要はないですよね？

それにしても、やっぱりこの方達も大和さんの変わりようを驚きますか。道行く人も思わず振り返っているし、古い知り合いの人たちの中には目を擦っている人までいるくらいだと言えば、少しはその異様さが伝わるでしょうか。

でもそれも仕方のないことなのかもしれません。今までの活発で少年らしい雰囲気は鳴りを潜め、童のような笑顔は消えました。その代わりに悟りを開いた仙人のような落ち着きと、見る者を安心させ

る温和な笑みを浮かべ、周囲の人と挨拶を交わしています。

――――――なんだか私の知らない大和がいるようで……すごく怖い。

「許せん……！　あの子は俺(しろう)が赤子の頃から手塩に掛けて食べ時を待っていたというのに！　俺の光源氏計画がッ！！」

「むぅ、その隣の家の子もか。中々のバストだと言うのにもったいない。俺なら更なるバストを提供できると言うのに、大和には勿体なさすぎるぞ」

「四郎、捕まる前に慧音先生に頭突きを貰ってきなさい。と言うか現実を見ろ。そして三郎、それは少々凹凸に欠けた嫁と結婚した俺に対する厭味か？」

「と言うか、女性の前でそんな話をしないで下さいよ」

「俺たちに何を言っているんだか」

「女性を見て感銘を受けるのは男の性だ」

「そもそもの前提から間違ってますね。変態にそんなことを言っても無駄です」

「ですよねー。あ、そう言えば一郎にも孫が産まれたらしいですね、おめでとうございます。――――あれ？　そう言えば一郎は何処に居

るんです？　こう言ったことには直ぐに喰いつくと思ったんですが？」

「兄は……人生の墓場に頭まで浸かってしまったんだ。――――――惜しい人を、亡くしたよ……」

「「二郎兄さんが言うな」」

大和さんの親しい友人で、兄弟の中でも一番の変態だった一郎がこの場にはいない。聞いた話によると、一郎は霧雨家に婿入りしてからは奇行に走っていないらしい。なんでも霧雨家のお嬢さんがとんでもなく強かなんだとか。一度浮気をしようとしたところを先回りされて、そのあと酷い折檻をうけたらしい。なんともまぁ、犬も食わない喧嘩なことで。

「まぁ戦力はこれでも十分でしょう。頼みますよ皆さん、大和さんを以前のような彼に戻してやって下さい」

「応」

「任せてくれ」

「まぁそれなりにやらせて貰いますよ」

「私はこっそり見ているので、各々が思うままに行動してくださいね？　では……散開！」

◇◆◇◆◇◆◇

～四郎の場合

「お～い大和、ちょっといいか？」

「四郎？　久しぶり、元気にしてた？」

近づくと余計に光って見えるのだろう、四郎が大和から少しめを逸らしている。でも落ち着きなさい四郎、嘗ては同じ志を持った同士。何も怖がることはないはず。欲望という希望の光を持って、大和さんを覚醒させてあげてください。

「ちょっと見てくれよこの写真。さっき大和が話していた女の子の写真なんだけどさ、可愛いだろ～？　あの子、俺のことをおじさんって慕ってくれるんだ。それでさ「四郎、ちょっといい？」　……え？」

ふむふむ、人間にカメラを売ったとにとりが言ってたけど四郎のことだったのね。よりにもよってあんな変態に売るとはにとりも何を考えているのやら。……まぁそれは置いておこう。とりあえず大和さんがそれに反応すれば……ってあれ？　もし大和さんがそれに反応したらロリコンということに…？

「僕はね、元々そんなのじゃないんだ。それに今となっては尚更さ」

なんと！　巷で噂されていたロリコン説は嘘だったのですか！　ちぇ、もし本当なら今度の特集にそのネタを使おうと思ったのに。まぁ沢山の人から裏は取れるでしょうから何れ特集を組むとしましょう。

「――――ッ嘘だ！　大和、お前だって一緒に風呂覗いたり、服を剥ぐ技を教えてくれたじゃないか！？」

「もう過去のことさ……。じゃあね」

四郎は敗北、と。ま、犯罪（仮）　写真集に興味を示されなかった時点で負けは決まってましたけどね。次行きましょうか、次。

◇◆◇◆◇◆◇

～三郎の場合の場合

割☆愛

「（三）ちょっ！？」

面倒臭いので簡潔にすると『チチの大きさの神秘について三郎が語る→僕興味ないんだ』　の流れです。はいはい、私はそれほど大きくないですよ。大きくないから聞く必要もないんです。

◇◆◇◆◇◆◇

～二郎の場合

「――――つまり夜の営みにおいて大切なのは、如何に相手の表情を読みとれるかです。一瞬によって変わる表情、声の大きさ・質、汗。これらを逃さず把握できれば、普段の生活でも夫婦仲がこじれることはないでしょう」

「二郎は出来てるの？　奥さんは大事にしなよ、あと子供も」

「あ、それは大丈夫です。それよりも聞いて下さいよ、家の娘がね――――」

思わず赤面してしまう程の生々しい男女の話すら、しれっと流してしまう大和さん。私なんか途中で耳を塞いじゃったのに、大和さんったらニコニコして聞いているんだから……。

これで私が頼んだ兄弟は全敗。ちょっとでも欲を与えてやれば後は大丈夫だと思っていたちょっと前の私を叩いてやりたい。でも今までだったら直ぐに跳び付いてもおかしくなかったのに……。

――――もしかして、本当に枯れちゃった？

それは不味い。ひじょ～に拙い。萃香様にとってそれがプラスになるかは分からないけど、今までの面影が全くない大和さんを見たらきっと悲しまれる。と言うか、華扇様にブチ切れる。そうなれば山は崩壊、一緒に居た私は何をしていたんだと打たれて物理的に地獄に落とされる。椛は……まぁどうでもいい、大和さんの為なら本望だろう。

――――――それに私もこんな大和は嫌だ。馬鹿みたいに明るくて、馬鹿をやっては笑って、馬鹿なことを本気でやる大和だからこそ私も惹かれたのに。それなのに大和は……

「あら、鴉天狗じゃない。そこで何やってるの？　……何あれ、いったいどうなってるの？」

「思わぬ助っ人アリスさん、確保ーーー！！」

「うわぁっ！？　な、何よいったい！？」

「お願いです！　私の為にひと肌脱いで下さい！　出来れば物理的に！！」

「はあ！？」

◇◆◇◆◇◆◇

～飛び入り・アリスの場合

「ちょっといいかしら」

「あれ、アリスじゃないか。久しぶり」

「ええ、久しぶりね……」

「……」

「……」

「……？　で、何の用？」

「えっ！？　えっと、その――――そう！　人形のことなんだけど――――」

チッ、嫌がる背中を無理やり押したせいか全く話にならない。人形遣いなら男の一人くらい操ってみろっての。ひと肌脱いでと頼んだのに全然脱ぐ気配もないし、これじゃあ何の成果も上げられないで

はないか。

そんなこと知ったことではないと魔法談義で盛り上がり始めた二人が妬ましい……。私の努力を知らずに楽しそうに話している大和が妬ましいわ……。

仕方が無い。格なる上は強制的にひと肌脱いで貰いましょうか！！

「風よ！！」

「へ――――？　――――……ッキャァァアアア！？！？」

「ブホッ！？」

小さな竜巻を起こしてアリスさんの長いスカート巻き上げ、刻んでみた。へっへっへ、お嬢さんいい声で泣いてくれますねェ。その甲高い悲鳴が何よりのスパイスですよ。刻まれたスカートの奥、神秘に満ちた秘境から見える綺麗な太股がこれまたエロいエロい。大和さんも目の前で起こったことに加えて今までの我慢が集ったのだろう、滝のような鼻血に頬を伝う涙、グッと握りしめられた拳で目の前の光景への感動を示している。

「あ、ありす……黒は、黒色はだめだと……プハッ！！」

「う、煩い見るなぁっ！！」

「む、無理っす。それよりも某、眠っていた欲望が目覚めてもう限界でごわす。早く服を着るかどうかして貰わないと、アリスに向かってダイヴしてしまいそうです」

「ちょ、ちょっと……馬鹿な真似は止しなさいよ！？」

「だから早く服を着てと言っている！！」

「逆切れ！？」

「「「アリスちゃーーーーん！！」」」

「更に四兄弟！？　変態が編隊を組んでいるとでも言うの！？」

おお、流石は歳老いても最低の紳士達。必死に千切れたスカートで下半身を隠すアリスさんに向かって行く変態の一個小隊。いつのまにか一郎まで加わっているじゃないですか。妻の折檻を受けてでも見る価値があると言うのですね、わかります。

「あんた達……死ねーーーーーーーーーーーーーー！！」

おお、アリスさんの人形から放たれた魔力弾で変態たちが錐揉みしながら空を舞っている……ん？　あの中に大和さんの姿がないですね。

「その程度でやられる程、軟な鍛え方はしてないんだよね！？　お願いだから服着るか逃げるかしてよ！　身体ガ勝手ニ動クノデス！！」

「そそっそれくらい我慢しなさいよ！！　男でしょ！？」

「男ダカラデス！　むしろアリスみたいな可愛い子がいたら、発狂するのもおかしくないですよね！？」

「それもそうね……じゃないわよ！　本気で怒るわよ！？」

「我々の業界では御褒美です！　むしろそれ位じゃないと迸るパトスを抑えきれませぇん！」

最早涙目になってしまっているアリスさんの前に人形たちが集結していく。なんとなく怒っているような表情を浮かべているのは主の仕様なのでしょう。そして槍や剣を構えた人形が大和さんに突撃していき――――――光が弾けた。

「うわぁ……これは死んだかも……」

思わず顔が引き攣ってしまう程の爆発と共に大和さんは光に包まれて行った。

「お前たち……頼むから里の中で暴れないでくれ……」

◇◆◇◆◇◆◇

「スイッチの切り替え、ですか？」

「そうだよ。こう、キリッとしたカッコイイ僕と、普段の僕との切り替えが出来るかなぁって練習してただけなんだ」

「相変わらず馬鹿ね、貴方」

「相変わらず酷いなぁ。けっこう苦労したんだよ？」

大和さん曰く、ヘタレた自分を直す為に考え出したらしい。キリッと凛々しい人に成りたいから頑張ったらしいですけど、正直意味不

明です。そんな無駄なことするくらいなら、仙術の一つでも修得すればいいのに。

「しかもカッコつけたいからだけって言うのがふざけてます」

「だから謝ってるじゃないか、ごめんって。でもスイッチ切り替えるのも便利なんだよ？　一種の悟りみたいなものだから」

「興味ありません。……心配して損したじゃないの」

「ん？　何か言った？」

「何でもないです。私はもう帰りますから」

変わったようで何も変わっていなかった友人に安堵しつつ、私は風を切っていく。心の底からの笑顔を浮かべながら。

「大和、貴方何を企んでいるの？」

「何も。ただ必要だったから切り替えを憶えただけだよ」

「……私に関係ないのなら別に何をしようが貴方の勝手よ。でもね、周囲の人を悲しませることだけはするんじゃないわよ」

「――了解。じゃあね、アリス。また話せるといいな」

踊る阿呆に舞う阿呆（後書き）

何とか間に合わせようとして頑張りましたが、無理だったじらいです。できたてほやほやですので、誤字が多いかもしれません。むしろ今回はなかってもよかったかも…なんて思っていたりしていますｏｒｚ

特に最近、話数が多い伊吹伝がどうなのかと考えるようになりました。これほど話数が多ければ読み返すのも面倒だし、もっと一話一話の字数を増やそうかな、と。今更ですけどねｗ　それに一人称にも限界を感じてきました。三人称でやってればよかったなぁ…ｏｒｚ

次回はまた時間が跳んで、遂にうどん&みょんです。もう二人一遍でもいいかなと。嵩張りますし。それで時間一話か二話挟んで原作。紅魔郷・そして…と言った感じですかね。紅魔郷始まるまでに、ちょっとしたアンケートでも採ろうと思ってます。それはまたその時に。

兎さんいらっしゃーい

魔法使いと言う種族に人間の常識は通用しない。常識と言っても世間一般の常識や人としての矜持……なんかは人によるけど、それは魔法使い以外の人でも言えることだろう。僕が言いたいのは、魔法使いと言う種族には睡眠や食事といった、人としての生活習慣と言う点での常識が通用しないと言うことだ。捨食・捨虫の法を習得している僕にもその法則は通用する。通用するんだけど……

「元人間の僕からしてみると、この生活習慣はとって当たり前の行為。仙人みたいに腹減ったら露食ってろなんて生活はもう無理です」

「露食ってろなんて言ってませんし、ちゃんと毎日食事はとっているじゃない。何が不満なの？」

「量です。それと味です」

「私の料理が美味しくないと？」

太陽さようなら、また明日も頑張って。一日頑張ってくれた太陽にお礼を言って、さあもうすぐ晩御飯だという時間帯に僕はそう言った。いや、別に華扇さんの料理が不味いわけではないですよ？　何時も割烹着姿で調理を頑張ってくれているのも知ってるし。……で

も味は薄いし量は少ないし、七日に一回は同じ料理が食卓に並ぶ繰り返しが気が遠くなるほど続いたら誰だって不満はでるってもんです。

「今日は外食してきます！」

「こらっ、勝手に――――――ああもう！　まだ修行の身だって言うのに……椛！」

「お任せ下さい！」

基本的に華扇さんは折檻以外で僕に手を上げることはない。つまり正面切って闘わないってことだ。理由は知らないけど、そうしたくない何かでもあるんだろう。だから僕が逃げ出す時……今までに何回かの時は、文が塞き止め役になっていた。けど文は今ここにはいない。だから椛に頼んだのだろうけど、それは間違いだよ華扇さん！

「大和様、御戻り下さい！　まだ修行は終わっておりません！」

「却下！　通してもらうよ！」

「左様ですか……なら私も実力行使で――――『椛、お座り！！』

わん！　……ハッ！？」

「はいちょっとごめんよ～」

対椛用拘束術『お座り』

事の発端となったのは文の一言だった。

『大和さん、ちょっと椛にお座り！　って言ってみてくれませんか？　私の勘だと、柔らかいお腹でもムキムキになれそうな気がするんですよ』

ニヤニヤしてそう言ってくる文だけど、その時の僕は文が何を考えているのかさっぱり分からなかった。とりあえずモノは試しか。そう思って頭の上に疑問符を浮かべている椛に向かって『お座り！』と言ってみると、『わん！』　と元気よく返事をしてから座り込んでくれた。

……笑った。それはもう、笑い過ぎて腹が捻じ切れてしまうほど僕と文は笑い転げてしまった。当の本人は一瞬何をしたのか、させられたのかを理解出来ずにポカンとしていたが、数秒して自分のした

行動に考えがいったのだろう。顔を真っ赤に、目には涙を浮かべて剣を振り回してきた。その姿があまりにも可愛らしかったので頭を撫でてあげると、これまたあやされる犬のように静かになってしまった。その姿にまた笑い転げて――――――

――――――が始まりであって、椛が忠犬と文に呼ばれてしまう一番の原因となってしまった。よって今回の『お座り！』も椛にとっては効果抜群であり、僕は何の障害もなく華扇邸を抜け出すことが出来たのでした。

◇◆◇◆◇◆◇

～大和邸～

「いやぁー、ルーミアちゃんのご飯は美味しいねぇ。僕は涙が出ちゃうよ」

「もっと食べるのだ！　もっといっぱい作って来るから、もっと食べていいんだよ！」

「うぅ……苦労を掛けるねぇ……」

「それは言わない約束だよ、おとっつぁん」

「……何だこれ、何かの芝居？　とりあえず私もおかわりだ、ルーミア」

「はーい」

連絡も無しにいきなり帰ってきた僕だけど、ルーミアちゃんは温かく迎えてくれた。夜も更けて晩御飯の時間はとうに過ぎているのに、まだ食べていないと僕が言うと台所にすっ飛んで料理まで始めてくれた。……いや、もう時間が時間だから里の門は閉まっているだろうから、自分で作るしかないと思ってたんだ。別に作ってくれることを期待して帰ってきたわけじゃナイデスヨ？

「大和、醤油とってくれ」

「はい。そうだ、久しぶりにお酒でも飲もうかな……。たしかそこら辺に結界張って隠してたワインやらなんかがあったはず……」

そんなこんなで家に向かって全力で空を飛んでいる時に、見慣れた白髪を靡かせている妹紅が目に入った。本体である僕と会うのは久しぶりだったから声を掛けてみたところ、まだ夕飯を取ってないと

聞いたので家まで連れてきたってわけ。本人は別に食べなくてもなんとも思わないと言ってたけど、それは人としてどうなのか!?と言って無理やり家まで引き摺りこんでやった。ご飯はしっかり食べなさい!

「ああ、酒は別にいい。飯を御馳走になるだけでも十分だ」

「そう？　じゃあ僕だけ貰うね」

幻想郷に帰ってきた時に持っていたワイン、今となっては年代物です……！　保存状態は最高。なんたって魔法を使って保存してたからね。

グラスにワインを入れて口に運ぶ。懐かしいなぁ……。あの頃は紅魔館で飲んだり、騎士団の人たちと飲んだりしてたっけ。本当に懐かしいなぁ……。

「追加の料理なのか～」

「ルーミアちゃんありがとう。そうだ、一緒に飲む？」

「じゃあ頂くのだ」

「……悪い、ああ言ってなんだけど私にもくれないか？　お前を見てると妙に飲みたくなって来た」

「いいよ、じゃあ今日は飲もうか！」

こうして久しぶりに帰ってきた僕は、美味しいご飯とお酒を友人たちと囲むことが出来た。ホント、華扇さんには悪いけど、今日くらいは大目に見て貰おう。

◇◆◇◆◇◆◇

「それで終わればよかったんだけどねー」

「まったくそうなのだ」

昨晩はしゃぎ過ぎたお陰で家の食材を全部切らしてしまった。今日は朝から断食気分なのか、と涙目に伝えてきたルーミアちゃんに苦笑しつつも、僕らは買い出しに里まで来ている。分身体ではなく久

しぶりに面と向かって話せる相手との買い物が嬉しいのだろうか、ぴょんぴょん跳ねながら必要な物を選んでいっている。

その分身体も今日はお休み。新しくバージョンアップする為にも一度消している。パチュリーの助言もあるし、今回のは以前よりも更に性能がアップするはずだ。

難しいことはもう考えないでおこう。僕だって久しぶりの休暇だし。

……しかし目の前のこの光景は――――――

「本当に主婦みたいだね……」

野菜や魚と真剣に睨めっこをしている姿はどう見ても主婦にしか見えない。もしルーミアを知っている人がいたら、それは驚くのだろうなぁ……。だって元は僕より強いんだよ？　この子。封印解けたら、次は勝てるかどうか解らないほど強いんだよ？　そんな妖怪が日々の為に食材と睨めっこ。人って変わるものだと言うことが理解させられるよ。

「ご主人さま、次行くよー」

そう、人は変わっていける。ただ誰もがそれに気が付けないだけで、気が付かない内に人は変わって言っている。だから人は変わっていけるものなんだよ、紫さん――――――

◇◆◇◆◇◆◇

「いっぱい買ったね、ご主人さま」

「いや、これは買い過ぎだと思うけど。……お金は大丈夫なの？」

家を目指して空を飛ぶ僕たちの両腕の籠の中には、溢れんばかりの食材が詰まっている。日持ちするモノは少ないけれど魔法や妖術を使えば何とでもなるので、大人買いするのが僕やルーミアちゃんの生活だ。

「大丈夫だよ、最近はアリスも魔道具の作成を手伝ってくれたりしてるから」

「そうなんだ……ってちょっと、聞いてないよそんなこと。僕が偽物だってバレてない？」

「流石にバレてるんじゃないかな？　アリスもかなりやり手の魔法使いだし。でも本人が何も言わないから放っているの。自分に害がないから触れないでいるんじゃないかな」

それはそれで何か悔しいような、寂しいような……。反応に困って苦笑していると、魔法の森の入口が見えてきた。もちろんその前に建っている僕の家も。

「――ご主人さま」

「解ってる。ルーミアちゃんは荷物を頼むよ」

「……解ったよ」

……何か様子がおかしい。家の中から異様な気配が漂っている。どうやら侵入者のようだけど、僕が知っている気でも魔力でもない。感じる力にはどこか懐かしい感じはするけど……

地面に降りてゆっくりと玄関に近づいて行く。既に頭のスイッチは

戦闘用に切り替えが完了している。深く、深く、より深くに精神を沈めていく。相手が何者なのかは知らない。しかし敵対するのなら容赦はしない。

玄関にまで辿り着くと、そこから見える廊下が異様に長く、また歪んでいた。――成程、侵入者は僕と同じ幻術遣いか。小さく舌打ちしてその場にしゃがみ込んだ。正直幻術遣いとまともに闘ったことがない為にあまり自信がない……が、やるしかない。

幻術を見せられていると言うことは、既に僕は相手の領域に囚われてしまっていることを示している。ならばまずは相手の幻術を破らなければならない。視覚などの五感を惑わせる幻術を破る方法は幾つか存在するが、一番有名なのは確固たる自我を保つことだろう。同じ幻術遣いである僕にはそれがよく解っているし、相手にもそれは良く解っていることだろう。

つまり幻術を破る為には、僕が自我を保つ為に集中するしかない。それを相手は知っている。幻術返しも出来なくはないけど、相手をおびき寄せるにはこれが一番早い。何故なら――

「やぁあああ！！」

「――――…ハッ！」

精神を深くにまで沈めた僕の制空圏は、広範囲に渡っての３６０度、死角の一つも無い。例え幻術で姿を消そうとも肉体そのものを消せない限り、今の僕からは逃れられはしない！

左から迫ってきた蹴りを受け止め、そのまま足を掴む。そのまま右に足をその場で回転させてやると、人体の構造的に人は左足を浮かせてでもうつ伏せの状態になる。そのまま地面に押さえつけて腕の関節を極めてやる。

「ツッ――――――――!?」

「動くな。命まで取るつもりは無い」

捕まえたのは長い髪をした少女だった。ギリッと唇を噛む少女はどうにかして逃げようと、ギチギチと嫌を音を立てている間接を無視してまで拘束から逃れようとしている。

「止めた方がいい。これ以上無理をしたら腕が折れる」

「……独房に入れられて、死ぬくらいなら腕の一本くらい……ッ！！」

「わ、ちょっ……本当に折るぞ！？」

「ぅ――――あ〝あ〝あああああああああああ！！」

「――――――――ッ！」

もう折れる、そんな状態でも声を上げて逃れようとする彼女に、僕は思わず手を離してしまった。ああもう！　容赦はしないとかスイッチ切り替えたとか言ってカッコつけた癖に、相変わらず甘い奴だ！　そんな自分が嫌になっちゃうよ！！

拘束から逃れた少女はすぐさま立ち上がって僕と対峙した。僕の顔を真正面から見て、驚いたように目を見開いて息を飲む。そして何かを諦めたように項垂れ、その場にしゃがみ込んでしまった。

「は……ははは……。追手はアキナさんだったってわけ……。そりゃあ簡単に私が捕まるわけだ…。それにしても、私も運がないなぁ…。よりにもよって、副隊長が相手だなんて」

「アキナ……？」

「もういいです。月から逃亡して、捕まった時点で私の負け。しかも相手がアキナさんなら尚更です。煮る焼くなり好きにして下さい。どうせ月に帰っても重罪人、むしろここで殺された方が満足できる

かもしれません」

…とりあえず現状を把握してみよう。この子は家に勝手に入ってきた侵入者であって、月からの逃亡者（仮）。親愛なる妹、アキナが上司（仮）でこの子が部下（仮）。そして月からの追手がアキナと瓜二つの僕（笑）。

――――――よし、誤解を解こう。この子が何で月から逃げてきたのかは知らないけど、話はそれからだ。

「あー、ちょっと質問いいかな？」

「……どうぞ、副隊長」

「まず、僕が誰に見える？」

「誰って……アキナさんはアキナさんです」

「僕は大和だよ。アキナは僕の妹にあたるんだ。聞いたこと無い？」

再び目を見開いた彼女を見た僕は溜息を吐いてしまった。目の前の少女は間違いなく月に住んでいた過去があって、しかもアキナを知

っているのならそれ程昔でもないくらい。ならこの子を廻って、また月と揉めることになる可能性があるかもしれないと思うと、頭を抱え込んでも仕方のないことだと思う。

とっくに切れたと思っていた月との縁が再び繋がった気がした。どうやら、僕はどうあっても月とは無関係ではいられないのかもしれない。

◇◆◇◆◇◆◇

「お茶なのか」

「……すいません、勝手に家に入った上にお茶まで出してもらって……」

「気にすることはないよ、勝手に家に入って来るのは君が初めてでもないから」

母さんとか母さんとか母さんとか、あと妹紅やレミリアなんかも何も言わずに入って来てたし。まぁいきなり襲いかかられたことは流石にないけど。

「まずは自己紹介をしようか。僕は伊吹大和。さっきも言った通り、一応アキナの兄ってことになってる。で、こっちの子がルーミアちゃん。僕の友達で妖怪」

「よろしくなのか」

「……月ではレイセンって呼ばれてました。えっと……」

「ん？　……ああ、大和でいいよ」

「では大和さん、と呼ばせて貰います」

「『さん』　はいらないよ？」

「いっいえ！　アキナさんの兄に『さん』　を付けないなんて知られたら、アキナさんに今度こそ殺されてしまいます！！」

……アキナって、いったい何者なんだろうね。いや、僕の妹であることに変わりは無いんだけどさ。でもこの子、レイセンの狼狽ぶりを見るととんでもなく恐ろしい人に感じて仕方が無いんだけど。月

から逃げてきた――――なんて言ってたけど、本当はアキナから逃げてきましたー、なんてことはないよね……？

「月から逃げてきた――――そう言ってたけど、理由は話せる？」

「……すいません」

それにしてもこのレイセンって子、全く落ち着きが無い。いや、もしかしたら僕に怖がっているのかもしれない。聞く所アキナが苦手のようだし、目の前にアキナと同じ顔があったらそうなるのも無理無いのかもしれないけど。そんな僕に逃げた理由を話せるわけもないか……。

「いや、ならいいんだ。じゃあもう一つ質問。これからの身の振り方はどうするの？　行く宛てとかある？」

「……ないです」

「となると――――――――うん、やっぱあそこしかないかぁ。ルーミアちゃん、悪いけど留守番しててくれる？」

「お任せあれ、なのだ」

月とくればあそこしかないよね。ずっと引き籠って生活している三人だ、一人くらい増えた所で返って賑やかになっていいくらいだろう。文句を言われるかもしれないけど、僕がこの子を庇い続けるのも不可能だし……。師匠たちには頑張って貰おう。

「あ、あの！　いったい何の話ですか……？」

「ん？　君を預けられる適切な場所があってね、そこを紹介しようかと思って。もちろん君の意志が一番だけど」

「……何でそこまでしてくれるんですか？　私、貴方のことを多少は知ってます。そういう場所に居ましたから……。それなのに何故月に、月の民に怨みを抱いてないんですか？」

今度は僕が目を見開く番だった。僕たちの出生の秘密を知っていることにも驚きだし、今更そんなことを聞かれるなんて思ってもみなかったから。

「その質問、アキナにもしてみた？」

「そんなこと…畏れ多くて出来ませんよ……」

「初対面の僕は畏れ多くないのかと小一時間問い詰めたいところだけど、それは百歩譲って放っておくとしよう。僕としてはね、そんなことはどうでもいいんだよ。もう終わったことだし」

「終わったこと……？」

「僕は今ここで生きている。それが全てだよ。――――じゃあ行こうか、夜遅くに行くと何言われるかわかったもんじゃないからね」

◇◆◇◆◇◆◇

「それでここに連れてきた、と？」

「すいません師匠。でもこんなこと頼めるのは師匠しかいなくて」

「あわ……あわわわわっ！？！？」

なんとか日が沈む前に永遠亭に辿り着くことが出来た。周囲に張ってある結界を僕らが超えた時、僕以外の異物が混じっていることに気が着いたのだろう。師匠が弓を構えて待ち構えていた。……生き

た心地がしませんでしたよ、ええ。

そして師匠にレイセンを紹介して、レイセンに師匠を紹介したところ、月の頭脳とまで呼ばれた師匠を前にレイセンは頭がオーバーヒートしてしまった。仕様が無いか、なんせ月を裏切って目下逃亡中の存在だし。むしろ月では伝説になってるかも。ちなみに僕の中では師匠は既に生きる伝説になってる。文武両道ってレベルじゃないです、この人は。

「この子は私たちにとっても御荷物にしか成り得ないのだけど。貴方もそれを理解しているでしょう？」

「そりゃあ僕だって理解してますよ。理解した上で頼んでるんです。でも今更一人や二人増えた所で変わらないじゃないですか。――――輝夜もそう思うよね？」

視線の先、玄関からゆっくりと出てくるのは月の元お姫様。レイセンも師匠ほどではないにしろ、輝夜の名前くらいは知っていたのだろう。月でもビッグネームを誇る二人を前にあわあわ言うどころか、遂には僕の影に隠れるように引っ込んでしまった。……ううむ、掴まれた腕に二つの果実が当たっているわけですが……これは役得ですな。怯えてしまった子を振り解くなんてことを紳士である僕が出来ようか、いや出来まい。故にこれは必要なことなのですよ、ええ。

「まぁね。私としては大和も一緒に住んで貰えると嬉しいのだけど、どう？　イロイロと退屈させないわよ？」

「御断り。今はそれどころじゃないからね」

今はこの感触を――――なんて冗談を言える状況じゃないからね、本当に。今の僕には先に起こるであろう全面対決のことしか考えられない。今こうしている時間ももったいない……！？　し、しまったぁ！？　華扇さんの修行を抜け出してきたんだった！　やばいやばいぞ大和……！　外食するって抜け出してきたのにもう二日も経とうとしている！

「よしじゃあレイセンは永遠亭に住むってことでいいよね僕は今すごく大変な用事を思い出したからもう帰るけど大丈夫安心していいよこの二人の他にもてゐって兎の妖怪がいるんだけど三人ともすごくいい人たちばかりだからじゃあ僕はもう行くけど師匠あとはよろしくおねがいしますそれでは！！」

「あ、こら大和！　泊まっていきなさいよ！！」

「や、大和さん!?　私をこんな魔境に置いてかないでください!?」

輝夜とレイセン何か言っていたようだけど全部無視して空を駆ける！　家に帰って分身造って、はやく山に帰らないと……うぅ、僕の馬鹿！　なんで何時も大切なことを忘れるかなぁ!?

「さて、抜け出した者には罰を与えなければいけませんね」

用事を済ませてから全速力で華扇邸まで帰ったけど、もちろん華扇さんは許してくれませんでした。

兎さんいらっしゃーい（後書き）

みょんと鈴仙を纏めて書きたかったけど所詮は無理なことだと気付いたじらいです。何でこんなに話数が多いのでしょうね…ｏｒｚ。自分の話を纏める力の無さに嘆く…前に、まともにプロットを考えない自分に嘆いたほうがいいですねｏｒ２

次回は絶対に妖夢。チビ妖夢です。半人判霊の外見がどれほどの早さで成長していくのかは知らないので妄想になりますが、それでもチビ妖夢です。その後に一話か二話挟んで遂に原作！　長いよ！

それではまた次回の後書きで

2000

アイ　アム　ストロング（前書き）

副題はアイ　アム　ストロング（笑）

2001

アイ　アム　ストロング

紫さんに啖呵を切ってからどれくらいの年月が経ったのだろう。華扇邸の道場は、風のざわめきや虫や動物の鳴く声以外は何の音も無い世界になっている。家主であり、一応は僕の面倒を見てくれている華扇さんも僕と同じように隣に座り、座禅を組んでいる。チラっと薄めで隣に目をやると、真剣な面持ちで禅を組んでいる華扇さんが目に入る。相変わらず自分にも厳しい人だね……っと、いかんいかん。見惚れている場合じゃない、集中集中……。でもこうやって目を瞑っていると、まるで周囲の時間が止まっているかのようにすら感じられるね。

そう言えばパチュリーとの文通も届かなくなってからもう長い。後は貴方次第、そう書かれた手紙を最後に届かなくなった。僕としてはまだ力を借りたかったのだけど、そう言われてしまえば手を引くしかなかった。末端とはいえ、僕にも一魔法使いとしてのプライドもあるのだ。

「大和、そろそろ時間よ。支度しなさい」

「あ、はい解りました」

2002

隣からそう声が飛んで来た。隣を見てみると、まだ目を瞑ったままの華扇さんが座っている。どうやら今日はお見送りはないらしい。

結局華扇さんは精神修行以外は何も見てくれなかった。ごねにごね、一度だけ遠方の場所に移動する『縮地』　と言う技の修得チャンスを手に入れたのだけど、結局僕には修得出来なかった。曰く『呆れるほどに才能がない』　だって。百年以上同じことを繰り返せばあるいは、らしい。……その日の夜には一人枕を濡らしました。次の日の朝、目が若干腫れているのを椛に見つかったのが恥ずかしかったです。その心遣いにさらに胸を抉られましたよ……。

そんなこんなで色々とあったけど、座禅ばかりの変わり映えしない時間の中、一通の文が僕のもとに届いた。

――――――久しぶりに白玉楼にいらっしゃいな。話たいこともあるし、歓迎するわ。

文から届けられた文にはこう書かれてあった。差出人は西行寺幽々子さん。季節に沿った挨拶から始まっているのだけどそれは割愛。一流階級の人が出す文のように季節の風流を謳う挨拶から始まって

いるのだけど、僕にはさっぱり解りません。学がなくてすいませんね、ほんと。とりあえず本文を要約するとそう書いてあることは解ったから別に問題ない……はず。

しかしこの文、驚いたことに僕の家に届けられたものではない。なんでも人里で取材をしていた文が、妖忌さんに『この文を山にいる大和殿に渡してもらいたい』　と言って渡されたらしい。……いったいどうやって僕が山にいることを知ったのだろう。紫さんにも聞いたのだろうか？

そうするとこの文にも警戒してしまって、迂闊にほいほいと白玉楼まで行くことができないんだよね。そうやって一人で云々悩んでいると華扇さんが、

『行ってきなさい。八雲紫と西行寺幽々子は確かに友人だけど、この件に関しては何も関与してないでしょう。――そうね、もし何かあれば私が動くわ。だから貴方は何も心配しなくていい』

と言ってくれた。行けば何が待っているのだろうか、罠の可能性は万に一つも無いと言えるのだろうか、なんて不安は拭えないけど、僕は結局行くことにした。お世話になった尊敬できる人に胸を張ってああも言われたら、僕としても行かない訳にもいかない。母さんの友人で家族の一員（仮）。それだけで信じるに値するから。

「じゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃい。――――呑まれないようにね」

何だろう、最後の一言ですごく不安になったよ…。

◇◆◇◆◇◆◇

白玉楼。亡霊の姫が住む場所。行ったことは数えられる程しかないけど、あの見た目麗しい西行寺さんのことは今でも憶えている。もちろん傍に控えていた妖忌さんも。それほど仲が深いわけでもないのに、いったい何の用があるんだろうね。……ああ言っておいて何だけど、実は西行寺さんと会うのは少し楽しみだったりする。何と言っても美人だし。

少し胸を高鳴らせながら白玉楼への長い階段を昇る。とは言っても、先が見えないほどに長いので飛んで横着をするのだけれども。

長い階段ももう終わりに近づいたころ、一つの異変に気が付いた。
前に来た記憶通りならこの辺りから人魂が漂っていたりするはずなのだけど、何故か今日は人魂が一つも漂っていない。それどころか、辺り一帯には張り詰めた空気が充満してきている。所謂、殺気と言ったところか。少し温いような気がするけど、それでも油断は禁物だ。何と言っても色々と危ない状況に身を置いている僕だ、思っていた通り嵌められた可能性だってある。この温い殺気も、僕を油断させる為の物かもしれない。

でも真正面から対決すると言いながらも、紫さんは僕を嵌めたのか。そう思うと沸々と怒りが沸いてきた。何処までもふざけた真似をしてくれる…！　でも今の僕ではまだ勝てない。それなり以上に闘える自信はあるけど、魔法が完成していない僕では勝つことは絶対にない。だから引き返そうと思った瞬間、正面から小さな姿がすごい速さで飛んで来ているのが見えた。

「伊吹大和――――――覚悟！！」

「こ、子供！？」

まだ小さな子供が、身体よりも大きい剣を振りかざしてきた。避けることも十分に出来た。しかしいきなり現れた子供に、しかも見ず知らずの幼い剣士に命を狙われるという妙な出来事に驚いていると、気付いたころには懐にまで入り込まれていた。

「斬り捨て御免！！」

鋭い一撃――――あの剣を腕で受け止めるのは、例え魔力や気で覆っても無理だ！

直感的にそう頭に過った僕は後腰に差した短剣を抜き取って逆手に構え、上段から振り下ろされる剣を受け止めた。甲高い音を残して短剣と長剣がぶつかり合う。その先には、まだ十に届くか届かないかの年齢であろう幼い少女が、自身よりも長い剣を握っている姿が見てとれた。

「ちょ、ちょっと待って！　君は誰！？　何でこんなことを！？」

「そんなこと、斬れば解る！！」

「何その理屈！？　君って辻斬り！？」

「辻斬りじゃないッ！　おじいちゃんの教えを馬鹿にするな！！」

「うわっ危なっ！」

辻斬りか、そう言った途端にいきり立つように激昂して、目の前の子供は剣を振り回した。そこには初撃のような鋭い太刀筋は消え、今となっては駄々っ子のように剣を振り回しているようにしか見えなくなった。当然ながらそんな剣が仮にも上級クラスの僕に当たる訳もなく、太刀筋の無茶苦茶な剣は虚しく空を切っているだけだった。この子は武術家で言うところの弟子クラス……下級～中級クラスと言ったところか。

なら、僕とはあまりにも実力が違い過ぎる。手を抜いて相手をしないと……間違って殺してしまうかもしれない。

それにしても、おじいちゃんだって？　いったい誰のことを言っているのか目の前の子供をもう一度しっかりと確認しみよう。そう思って当てない様に蹴り繰り出して距離を取ろうとした。僕だって子供相手に本気になるほど大人げない大人じゃないつもりだ。力を抑えて、ゆっくりと――――――

「ぐはッ――――！？」

「――――…へ？」

当てない様にしたはずなのに、僕が放った蹴りはそのまま子供の横腹に突き刺さってしまった。子供はそのまま地面に向かって吹き飛び……激しい音と共に階段に激突した。……だ、大丈夫……だよね

…？　今、反射的に腕で胴を守れてた…よね……？

「……」

「……こ、これはもしかして、もしかするともしかしたアレなのか……？　や、やっちゃった……とか…？」

ち、力はちゃんと抜いた！　避けれるであろうギリギリの速度で蹴りを放った！　だから普通は『お前も中々やるな！』　みたいな感じで距離を取ってからお互いを称えるところじゃないの！？　なんで吹き飛んでるの！？

今まで闘ってきた中で一番と言っていいほどに血の気が引いた。急いで倒れている所までいって、左手を首筋に、右手を胸に手を当てて心臓が動いているか確かめる。…！　手を当てた胸が上下しているのが確認できた。

「う――――――あ……」

「よ、良かった！　早く治療を……って僕には治癒魔法なんて使えないし――――――白玉楼で手当てしてもらうしかない！」

砕けた階段の上で大の字になって呻いている辻斬り子供を抱いて、白玉楼まで急いで飛んで行く。

ああもう！　今のくらい避けて貰わないと直ぐに死んじゃう――――じゃない！　この子はまだ弱いんだ、昔の僕と同じなんだよ？　今の蹴り、昔の僕なら避けれたかな？　……うん、無理だね。師匠の足が胴に突き刺さる光景が浮かぶってことは無理だってことだ。

……ええい、反省も謝罪もこの子を治療してからだ！　とにかく今は白玉楼に急ごう！

しかし余程大事なのか、意識が無いはずなのに握った剣だけは絶対に離そうとはしない。良い根性してるよ、本当に。

◇◆◇◆◇◆◇

白玉楼への門を突き破るようにして潜る。前に訪れた時と同じように広大な土地と美しい屋敷が目に入るも、以前のように感動してい

る暇はない。ごめん！　と玄関を開け、屋敷に入る時に大声で一言。到着の挨拶も碌にせずに廊下を走って家主を探していく。胸に抱いた幼い剣士が時折呻き声を上げているのに冷や汗が流れて止まらない。

「あら、来たのね」

そんな僕の心中とは裏腹に、のんびりとした声が奥から聞こえてきた。

「西行寺さん！　いきなりですいませんが、この子の手当てをお願いできないでしょうか！？」

「あらあら、妖夢も派手にやられたわね。でもそんなに深刻な顔しないで。見た目よりかなり頑丈だから、そんなに慌てなくても大丈夫よ。奥で妖忌が治療の準備をしているからそこまで運んで下さる？」

「わかりま……うぇ？」

「……？　どうしたのかしら、妖夢を奥に連れて行くのでしょう？」

いや、何でこの子のことを知ってるのかなー……って。それに頑丈だから大丈夫って……僕じゃないんですから…。

「……まぁいいです、後で話を聞かせてもらいますから」

「クスクス。ええ、後でゆっくりとお話をしましょう」

◇◆◇◆◇◆◇

「改めまして、よくいらして下さいました」

縁側に座っていた西行寺さんの横に腰を下ろして一呼吸つくと、先程と変わらないほんわかとした雰囲気のままに話かけられた。待たせてしまったかな？　と思うも、置いてあるお盆には大量のお茶菓子とお茶が乗っていたので、これでも食べて暇つぶしをしていたのだろう。

「その……すいませんでした。あの子は軽傷だったのにそれに気付けなくて……騒々しくしてしまって」

「構いませんわ。これで少しでもあの子が大人しくなるのだと思えば、安いものですもの」

あのあと西行寺さんの言った通りに奥まで運んで行くと、妖忌さんが塗り薬などの治療具を用意して待ってくれていた。僕が怪我を負っている子供を布団に寝かせると、妖忌さんは何の動揺もなく治療を始めていく。大丈夫なのだろうか、そうやってそわそわしていると妖気さんは『心配せずともこの程度、妖夢にとっては日常茶飯事だ』　と笑っていた。その姿を見た時に『ああ、なら大丈夫か…』　なんて勝手に納得してしまった。何故ならその笑みがね……師匠たちの浮かべる笑みにそっくりだったんだ……。もう直感的に覚ってしまったよ。この子も嘗て僕が通ってきた地獄を味わっているんだと。

「大人しくなる、ですか？」

「どうせいきなり斬りかかって行ったのでしょう？」

「あはは……」

「妖夢の世話は妖忌が見ていますの。もちろん剣も妖忌から教わっているのだけど……どうも頭が固いと言いますか、元気が溢れ過ぎているとは思いませんでしたか？　見ている分としては可愛いのですけど、あのまま大きくなってしまうと色々と困るでしょう？」

「うーん…でもあの子も男の子だし、元気過ぎるくらいがいいんじゃないですか？」

「……」

「……へ？　あ、あれ？　僕なにか間違ってますか…？」

僕がそう言うと、西行寺さんはキョトンとした表情をしたまま固まってしまった。え……？　だって妖夢君は妖忌さんのお孫さんで、剣を教わっている。いきなり斬り掛って来る困った子だけど、それも元気があっていいことだと思うし……。あれ？　僕、何か間違ったこと言った？

「伊吹さん？　妖夢は男の子じゃないわ。女の子よ」

――――――は？

「冗談、ですよね？」

「それは私が貴方に聞きたいわ。今日はスカートじゃなかったかしら？」

「……短いズボンでした」

「確かに今は見様によっては男の子みたいに見えます。だとしても少し失礼じゃなくて？　幼いとはいえ、あの子も立派な乙女ですのよ？」

「返す言葉もございません……」

短髪で凛々しいし、あまりにも勝気だったから男の子かと思ってた…。しかも半ズボンで剣まで振るわれたら勘違いしてしまっても仕方がない、なんて言い訳にもならないよね！　うわー……倒れている時にちょっと、うん、思いっきり触れて確かめたりしたんだけど。だから男の子だって思ったんだし……こんなこと、本人はおろか西行寺さんに知られたら大変なことになるぞ……。

「どうかしたのかしら？」

「いえ、何でもないです」

「あの子の胸、無いに等しかったでしょう？」

「いや、でもまだまだ子供じゃ……あ〝！？」

「あらあら、これは妖夢が傷モノにされた責任をとってもらわないといけないかしら？」

しまったー！？　と思った時には時既に遅し。目の前にはしてやったり、とニタリと笑う西行寺さん。そんな西行寺さんとは打って変わって、僕の額にはじわりと汗が滲んできた。まるで初めての浮気がばれた気分……いや、どっちの相手もいないけど。初めから解っていたのか、それとも鎌をかけられたのかはもうどうでもいい。とりあえず知られたくなかったことを知られたくない人に知られた、それだけが全てです。

「あら伊吹さん、後をご覧なさいな」

「……」

――――――チャキ

うん、現実逃避はもう止めようか。なんかとても素敵な音がね、聞こえてるんだ。振り向きたいけどね、振り向けないんです。それでもって、ついさっきからとてつもない程の怒気と共に僕の制空圏が侵されているんでせう。しかもね、ほっぺにぺちぺちと冷たいモノが当たってるんだ。

「おい」

「……ナンデショウカ」

「ゆっくり振り向け。ゆっくりだぞ」

「……ゆ」

「ゆ？」

「ゆっくりしていってね！　「天誅！」　ってウソウソ！　冗談だから斬りかからないで！？」

「煩い！　お前のような不埒者、私が斬り捨ててくれる！」

振り返った途端に目と鼻の先を切っ先が通り過ぎて行った。ちょっ！？　髪の毛が何本か持っていかれましたよ！？

「おじいちゃん！　こんな軟弱者が私の師になるのですか！？　私は反対です！」

「失礼なことを言うな！」

「イタッ！？」

怒り心頭の妖夢君……もとい妖夢ちゃんの頭に、何時の間にかその後に立っていた妖忌さんが拳骨を落した。ゴンッ！　というイイ音

が響いた頭を両手で抑える妖夢ちゃん。よほど痛かったのだろう、若干目に涙を浮かべている。……それでも唸りながら僕を睨んでいるんだけどね。

まぁ小さい子に凄まれても何とも思わないから別にいいんだけどさ。それよりも聞き捨てならないことが聞こえてきたよね、今。

「あの、妖忌さん？　そう言えばさっき、僕が師だとか言ってました……？」

「うむ、師と言うほど大層なものではないがな。互いに切磋琢磨してもらいたい、と言うのが本音だ。孫に経験も積ませてやりたいし、それに君は無手だ。剣を教えろというのにも無理があろう」

そりゃ無理があるね……じゃないよ。今この人なんて言ったの？師？　まだまだ半人前から抜け出せない僕が？　師匠から免許皆伝されたと言っても、まだ一本も取ったこと無い人が師匠になるだって？　いやいや、馬鹿を言っちゃだめですよ妖忌さん。

「待って下さい妖忌さん。この子に僕が教えられることなんて一つもないですよ？　妖忌さんが言った通り得物も違いますし、一度立ち会っただけですが、僕の印象ではこの子はとんでもない剣の才能を秘めていると思わされました。そんな子の成長に僕なんかが入り

込んでも余計なこと以外起こりませんって」

「そうだそうｄ「お前は黙ってなさい。……伊吹殿、そう言わずに引き受けて貰えないだろうか。私は君の人となりを見込んで頼んでいるのだ。なに、教えると言っても実際は組手を組む程度のことだ。心配することはないよ」

「それが心配なんですよ……。それに僕、弟子は取らない主義なんです！」

嘘も方便。いや、あながち嘘じゃないんだけど。人の道から外れたような修行をした僕が人に教えるとなると、絶対に人の道から外れた教え方になる自信がある。下手をすれば取った弟子がちょっとした手違いで死人になる可能性だってあるし。だったら弟子なんて取らない方がいいに決まっている。僕以外にも伝手なんて幾らでもあるだろうし。

「ようむようむ～、伊吹さんに胸触られたわよね～。私、確か前言ったわよね～。傷モノにされたら～？」

……ちょっと待って西行寺さん、何で今まで黙ってたのに急に口出しするんですか。しかも何ですかその不吉な予感のする台詞。非常に胸のあたりが苦しくなってきたのですが。逃げ帰っていいですかね？　あ、逃げたら容赦しないんですか。そうですか……はぁ……

逃げたい。

「責任を取って貰え、ですか？　ですが私はこの不埒者が責任を取って師になるのは反対です」

「伊吹さんどうかしら？　この子はまだ小さいですけど、大きくなったら私の言った意味も理解できるでしょうし、矯正するのなら今の内ですわよ？　それにこの子、私の命令ならなんでも聞いちゃうの。いったいどうなるのかしら～？」

「謹んでお受け致しましょう。ばっちり矯正してやりますよ、ええ。命に変えても。……僕は組手を組むだけ、それでいいんですね？」

「うむ。それで頼む」

よっしゃる気出てきたぞー。お兄さん頑張って矯正してやるぞー。逃げ場なんてものはなぁ……最初っからねーんだよこんちくしょー。今決めた、紫さん倒したら絶対に山に籠ってぐうたらしてやる。隠居だ隠居、魔法使いな仙人になってやる。あ、でも御正月には母さん達に会いに行くよ。家族は大切にしないとね、うん。

「なっ――――!?　私はお前など――――」

「認めない、かな？　でも自分で言うのもなんだけど――――」

弟子クラス程度の目には影すら映らないスピードで妖夢ちゃんの背後に回り込み、

「僕、これでもかなり強いよ？」

首根っこを掴んで持ち上げてやった。武人なら強い者の言うことを聞きなさい。弱肉強食！　う～ん、今となっては良い言葉だね、はっはっは！

「はっ放せ！」

「聞こえなーい聞こえなーい。さぁ組手だ、それ組手だ、とことん組手だ。死ぬほど痛いけど死なないから大丈夫だからねー。さぁ……逝こうか」

怨むなら僕を選んだ祖父と主を怨むがいいよ。僕だってあんな人を選んだ自分を何度も怨んだからね！

2022

アイ　アム　ストロング（後書き）

妖夢一話のはずが、何だか次も続く勢いになってしまったじらいです。小さい子供って、男の子か女の子か見分けがつかない子供っていますよね？　いますよね？　いるんです。いると思って下さいｏｒｚ

次回も妖夢はでますが、たぶん出番は少なくなるはず。時間も飛びます。原作の二歩手前くらいです。霊夢や魔理沙の出番近し。でもその前にイイ男に会っておかないと…。

それと誤解を与えないように言っておきますが、大和の行った生死確認？　は無茶苦茶です。真似したら駄目ですよ？　…突っ込まないで下さいね！　どさくさに紛れて胸触んなよ！　なんて突っ込まないで下さいね！

あと質問です。原作開始時の霊夢と魔理沙の年齢って、幾つですか？　正確な年齢が解る人は是非お願いします。

2023

インターミッション（前書き）

最初～途中までは妖夢
そのあとは藍編です

活動報告に大和の設定を上げてますので、興味のある方は是非。頂いた二つ名がネタと変わって本編に出るかもしれません。

2024

インターミッション

～幼い剣士～

「この鬼！　戦闘馬鹿！」

「褒め言葉をどうも。でもそんな事言ってる暇があるのならもう少し強めに逝こうか？」

「――――――ッ！？」

白玉楼上空では見るも無残な修行（イジメ）が続いている。もちろん虐め……もとい、教えているのは僕で、教えられているのは妖夢ちゃん。それでもちゃんと妖夢ちゃんが付いてこられる限界ギリギリを見切って組手をしているのだから、僕も手加減が上手くなったと思う。

なんせ今まで闘ってきた相手が格上ばかりだったせいか、初めの頃の僕は手加減の『て』　の字すら知らなかった。だから初めの頃は力の出し具合が解らずに妖夢ちゃんが空を舞うこともしばしば……。その度に罵詈雑言を浴びせられたりしたんだけど、そんな生意気を言う子は組手だ！　と言って無理やり組手に付き合わせてあげた。その御陰で妖夢ちゃんはちょっとやそっとじゃやられない程に成長したし、僕も手加減の仕方がだいぶ解ってきたのだから万事オッケ

ーだと自己完結。

「ほらほら避けないと、当たったら痛いよ？」

「こ……んのぉーーー！　舐めるなァ！！」

「うおっと、危ない危ない…」

僕が思った通り、この子は武術の才能に満ち溢れている。僕への反抗心も多いにあるのだろうけど、それでも毎回闘いの中で凄い成長を見せてくれる。今だって堕としてやろうと思って放った突きを避けて、逆襲の一太刀を浴びせようとしてきた。前回なら絶対に出来なかったことを、直ぐに修正して実戦で使ってくる。

そんな妖夢ちゃん……妖夢に少し……いや、正直、僕はかなり嫉妬してしまう。この子の溢れんばかりの才能に。僕の予想を遙かに上回るスピードで成長する姿に。もがきながらも必死に顔を上げて僕を睨み、絶対に倒してやるんだという強い意志を感じさせられるその瞳に。僕には無い才能がこの子にはたくさん秘められている。そんな妖夢の全てが、僕には羨ましく感じられる。

師匠もそうだったのだろうか？　そう考えたけど、すぐにそれは無

いだろうと考えるのを止めた。だって御世辞にも僕が優秀な弟子とは言えなかっただろうから。師匠や師父が溜息を吐いている姿を何度も目撃したのだから、相当育ちの悪い弟子だったんだろう。

「これで堕ちろ変態修行馬鹿！　未来永劫斬！」

「ムカ……教える人に対して礼儀がなって無い子にはお仕置きだ！　雷声――――砕月（１／１０）！！」

それでも今はまだ、妖夢ちゃんなんだけどね。

◇◆◇◆◇◆◇

「あらあら、今日も妖夢は負けたのね」

「まぁ僕とはまだ実力の差がありますから。年の功ってやつですかね」

私(ようむ)がこの男、伊吹大和と組手をするようになってから半年程経つけど、私はまだ一度も傷を付けたことは無い。幽々子様にデレデレしているような軟弱者だが、それでも武の先駆者の一人。学ぶべきことは多いし、ここ半年の組手で自分の腕が上がっていると感じられているのも確かだ。

それでも、やっぱり私はおじいちゃんに剣を教えて欲しかった。と言うのも、全ての始まりであるおじいちゃんが頓悟したことから私の苦悩の日々は始まった。この男とは組手するだけで、引き続き私に剣を教えてくれる約束だったのに『教えられることは教えた、後は伊吹殿と切磋琢磨しなさい』　と残して幽居したのだ。そのせいで私はこの男と組手をする以外には、自分の技を効率よく高めることが出来なくなった。

「……？　僕の顔に何かついてる？」

「別に、何でもない」

……非常に不満だ。だからせめてもの抵抗として、汚い言葉遣いで対応することにしている。武術では敵わない私の出来る唯一の抵抗だけど、この男はそれすら気にしていない。私は相手にもされていない……。

「妖夢～、お腹が空いたわ～」

「分かりました、直ぐに御造りいたします」

「僕、手伝おうか？」

「いい、邪魔になるから」

私がそう言うと苦笑して、じゃあ止しておくと言う。まったく、少しは強く言えないのだろうかこの人は。組手の時にはこれでもかと攻めてくるのに、普段の生活になると軟弱者に早変わり。だから解らないんだ、この人の事が。何が出来るのか、何をしようとしているのか、何を思っているのか……。普段の情けない行動にも本当は何か別の意図があって、わざとこういう態度をとっているのかもしれない。そう思うと心を許すことなんて到底できることじゃない。

「では台所に行ってきます」

……また無駄な思考に時間を取られてしまった。幽々子様はああ見えて沢山食べるんだ、早くしないと。

今日も台所は戦場だ。

◇◆◇◆◇◆◇

「――――あの子はどうかしら？」

「表面上はああですけど、内心は寂しいはずです。肉親と離れるって言うのは、以外と寂しいものですよ」

「妖忌がいなくなってから半年近く。伊吹さんはどうするの？」

「どうするのって言われましても……ただ組手をするだけですよ？　僕だって、今は周りに気を使えるほどの余裕はないんです。――――知ってるんでしょう？」

「ええ、知ってます。でも私にとってはどうでもいいことなのよ」

「……言ってくれますね」

「だってどちらも気に入っちゃってるんだもの、仕様が無いじゃない。だからどうでもいいの。でも妖夢は特別よ？　だからあの子のこと、気に掛けてあげてくれませんか？　妖忌もこうなることを見越して貴方に頼んだと思うの」

「買い被り過ぎですよ、妖忌さんも……西行寺さんも。僕はそこまで万能じゃありません。ちっぽけな一人の人間でしかないです」

「そんなちっぽけな人間に紫が興味を持つかしら？　ねぇ伊吹さん、貴方は自分を過小評価し過ぎよ。貴方の持つ力は人を救う力――――ほら、そんな顔しないで。貴方なら出来るわ。妖夢のこと、頼みます」

「……善処します」

◇◆◇◆◇◆◇

――――トトトトトト

包丁を使うのも修行の内。対象の斬りやすい位置、包丁を入れる角度、その全ては剣の道に繋がる……そう勝手に思い込んでいる。そうじゃないと、いつも大量の食材をただ切るだけでは暇で仕方がない。台所を任された当初は誤ってまな板ごと斬った苦い思い出もあるけど、今となっては過去のこと。包丁捌きは見違えるほどに上達した。でもまだ苦手なことがある。それは――――

「塩入れ過ぎた――――砂糖を入れて元に戻さないと」

「ちょっと待てい」

「……何しに来た。邪魔だ」

む……邪魔だと言ったのに来たのか。しかも私の調理に口出しをするとは、いったい何様のつもりだ。戦闘馬鹿なら戦闘馬鹿らしく、ただ拳を振っていればいいのに。

「あのね……もしかして何時もそうやってるの？」

「当然だ。幽々子様は美味しいと言ってくれる」

「……ちなみに味見したことは？」

「それほど美味しくない……けど、幽々子様が美味しいと言ってくれるからそれが全て」

料理は本当に苦手だ。味付けは特に苦手だ。焼き物なんか焦がすことのほうが多い。だから私は自分の料理が美味しいとは思えない。けど幽々子様は美味しいと言ってくれる。だったら、別にそれでいいじゃないか。

「はぁ……ちょっと退いて」

「あ、おい！」

伊吹大和が私を押しのけて調理場に立つ。焼き終わったばかりの魚に箸を伸ばして――生意気にも幽々子様の為に作った魚を口に運んだ。

「不味い」

「うっ……」

「非常に不味い。御世辞にも美味しいとは言えない。塩辛いし……何これ、砂糖でも入れたの？　甘さと辛さの嘗てない程のハーモニーだね。――うん、二度と食べたくない」

酷い言われ様に涙が出そうになった。だって、こんなのあんまりだ。組手の中でならまだしも、苦手な料理にまで採点されて馬鹿にされた。でも泣いたら駄目だ、泣いたら負けになる。私はおじいちゃんからここを授けられた身。余所者の目の前では絶対に泣いたら駄目なんだ。

「こんな半端者に後を任せるだなんて……」

「なっ――――おじいちゃんを馬鹿にするのか！？」

今――――――――なんて言った？

「じゃあ自信を持って言える？　後釜がこの始末じゃあね……嫌になったって仕様が無いじゃないか」

私を信じて任せてくれたおじいちゃんを、こいつは馬鹿にした！？

「おじいちゃんは悪くない！　おじいちゃんは何時だって私のことを考えてくれた！　だから私にここを任せてくれたのにそれを……それをおじいちゃんのことを何も知らないお前が馬鹿にするなぁ！！」

こいつの言っていることは頭では理解できる。私が半端者の未熟者だってことは百も承知だ。でもそう言われて心で納得出来るかと言われれば、絶対にできない。大好きなおじいちゃんが馬鹿にされて、それが自分のせいだと思うと言い返さずにはいられなかった。だから私は涙を流してでも咬みついていった。

「……僕は妖忌さんを馬鹿にしたつもりはないんだけどね」

「ぐすっ……ひぅ……え？」

「半端者って言うのは僕のことだし、僕みたいな後釜で嫌にならないかなーって思ってね」

何を言っているのか、と思ったが、目の前でニヤついている男を見ると自分が嵌められたのだと気付いた。……この男、さっきの中で一度もおじいちゃんを馬鹿になんてしていない。全部私が勝手に勘違いして、勝手に怒っただけだ。

「どう？　涙を流して少しは楽になった？」

「……」

「大好きだったおじいちゃんが急にいなくなって……寂しかったよね。しかもその後釜がこんな奴じゃあ、嫌になってストレスも溜まるよ」

背丈の小さい私に視線を合わせるように膝を曲げてくる。今までにないほどの近い距離で向かい合っているせいか、まるで初めて見た人の様に感じた。でもまだ少し嗚咽が漏れているし、顔も涙の後が残っているだろうから、私は俯いてやった。――こんな顔、こい

つに見せてなるものか。

「僕も君と同じ体験をしたことがあるよ。心に穴が空いてさ……悲しくてどうしようもなくなって。それで何かに当たりたくなる」

ポンッと頭に何かが置かれた。感触で手を置かれたのだと解った。普段なら絶対に振り払っただろうけど、何故だか振り払う気にならなかった。まるでおじいちゃんに撫でられているようで気持ち良かった。

「だから僕に当たれるように組手を組んでたんだけど、失敗だったみたいだね。やっぱ泣くのが一番心にも身体にもいい。嵌めるようで悪いとは思ったけど」

はは、と苦笑しているこの人と同じように、私も内心で苦笑する。あんな一方的な組手で心が休まるものか。本当に、人の気持ちも読めない馬鹿者の軟弱者め……。

「おじいちゃんのように、とはいかないと思う。でもさ、今度からは僕を頼ってもいいんだよ。もちろん西行寺さんも。もう知らない仲じゃないし、出来る限り協力してあげる。だからさ、今はとりあえず泣いておこう？　お兄さんの胸なら幾らでも貸してあげるから。さぁ――――――Ｃｏｍｅ　ｏｎ　！！」

「キモイです」

両手を広げて待ち構えている姿を見てつい本音が出てしまった。ごめんなさい、最後のが無かったら正直に泣けてたと思う。それも抱き着いてわんわん泣いたと思う。でも…でももう無理……

「ぷ……プププッ、あっはははは！」

「よ、妖夢ちゃん……？」

「何だ、それ！？　それで慰めてるつもり！？　むしろ、笑わせようとしてるんじゃない！？」

「失敬な。これでも真面目に慰めたつもりだよ！」

本当に……本当に可笑しな人だ。何考えているのかなんて、この人本当は何も考えてないんじゃないか。自分でも解らないうちに勝手に身体が動いて、その場その場で全力なだけじゃないか。でも……そんな人がいても悪くないと思う自分が、確かにいる。

「これからもよろしくお願いしますよ、大和さん」

おじいちゃん、私に目標が出来ました。私、まずは大和さんを越え

てみせます。

「今日から好敵手（ライバル）です。私が倒すまで負けないでくださいね？」

ずい、と一歩を踏み出したら目と鼻の距離。でも目の前に見えて、とんでもなく長い道のり。でも絶対に追いついてやる。追いついて、追い越して、絶対に一歩先を歩いてやるんだから！

「……な、生意気言ってくれるね！？　コイツめ！　こうしてくれる！」

「わっ！？　や、止めて下さいよ！　髪の毛ぐちゃぐちゃになるじゃないですか！」

せっかく私から目を合わせて言ったのに、大和さんは私の頭をくしゃくしゃにするようにして前を向かせないようにしてきた。今度は払いのけようと手を伸ばしても、上手く逃げられて邪魔すらできない。むむむ、こんな所でも実力の差が出るなんて……！

「まだまだ子供が生意気言うんじゃないです！　僕を倒そうだなんて百年……いや、五十？　もしかして三十……い、いや！　千年早いよ！！」

「む！　直ぐに追いつきますよ！　それに未熟ですけど、子供扱いは止めて下さい！　私だって立派な淑女です！」

「それこそ千年経ってから言うんだね！」

◇◆◇◆◇◆◇

～最後の欠片～

紫様と大和殿が約束を交わしてから間もなく九十年。つまり、大和殿が自由に過ごせる時間はあと十年程しか残っていないということを意味する。紫様の式である私には、大和殿では紫様に勝てないという確信がある。だからこそ紫様に歯向かうな、そう助言をしたのだが、それも虚しく消え去っていった。

「藍、新しい博麗の巫女候補が見つかったわ。場所は――――――よ。迎えに行ってちょうだい。教育は何時も通り、始めは貴方が行いなさい。頃合いになれば私も手を出すから」

そう言って紫様はスキマを開けた。この先に今代の巫女がいるのだろう。できれば無理やり攫うと言う真似はしたくないな、そう思ったが頭を振って考えを改めた。今更だ、こんな考えなど今更でしかない。大の為に小を切り捨てる。今まで何度もやってきたことだ、今更何を悩むことがある。

私が迷う様になったのは、大和殿が僅かな希望を見せてくれたからだ。あれから私の中で何かが変わってしまった。機械的にこなすだけの作業（コロシ）にも、彼ならどうするのだろうか？　彼なら情けを掛けるのだろうか？　彼なら、彼なら……。そのような考えが頭を過るたびに私は頭を振ってこう思っていた。こんな感傷、今更でしかないと。

複雑に絡まり続ける思いに悩まされ続けられた私は、何を思ったのか式を造ってしまった。名前は橙。この子は私たちが行っていることは何も知らないし、知らせない様にしている。紫様もそれに賛同してくれた。何も知らない橙は明るく、私の心を癒し、苦しめた。

「赤子……この子が、次代の博麗……」

そして今、何も知らない哀れな赤子が目の前にいる。スキマを抜けた先にいたのはこの子だけ、つまりはそういうことなのだろう。抱

きかかえて再びスキマを潜ろうと振り返った時、そこにスキマはなかった。……歩いて帰れと言うことなのだろうか。まぁ、あの人は時々意味のないことを唐突にするからな。これもその一つなのだろう。

「仕方がない、飛んで――」「藍さん？　こんなところで何して…　…え？　赤ちゃん？」　……」

何故か目の前に、とても偶然とは思えないタイミングで大和殿が通りかかった。

「まだ小さいのにこの霊力……ッ！　まさか藍さん、この子!?」

「いかにも。この子は次代の博麗の巫女として見定められた赤子だ。今から私が教育し、然るべき処置を経て巫女となる」

「――僕がそれを聞いて、黙って見過ごすと思いますか？」

爆発的に大和殿の魔力と気が増幅した。……予備動作もなしに無想転成の第一段階、それも前回のようにただ垂れ流しているだけではなく、完全に自分のモノにしている。質・量ともに申し分なし。これなら……いや、しかし……あるいは

「私もこの子を傷つけるのは本意ではない。そこで提案なのだが……この子は君が育ててくれないだろうか？」

「――――――言っている意味が、いまいち理解できません。巫女になるのなら、今代の巫女に任せればいいじゃないですか」

「彼女は今朝亡くなったよ。だから一刻も早くこの子には成長して貰わなければならないのだが……どうだろうか？」

これは……裏切りなのだろうな。でも私は見てみたい。嘗ての私たちが目指し、憧れ、それでも届かなかった理想の果てを。諦めるしかなかった無念の果てを。時代を生きる若者にしか持つことの許されない新たな可能性を、私は信じてみたい。

「君が断ればこの子は連れて行く。だがこの子を巫女として君が育てると言うのなら、渡してやってもいい。さあ、どうする？」

さぁどうする？　君は受けるしかこの子を助けることはできないのだぞ。だから受けろ、私の提案を。そして救ってくれ、紫様を――――

「解りました。この子は僕が、次代の巫女として育てます」

「では頼む。――――――ああそうだ、その子の名前だが……『霊夢』　と名付けるとしよう」

胸に抱いた子を渡しながら、私はそう言った。何故だかは解らないが、名前をつける時になって彼女と同じ名前を口が発していた。しかし大和殿は私の名付けた名前が気に喰わなかったのだろう、今すぐにでも咬みつかんとばかりに私を睨みつけている。……まぁ、彼と彼女のことを思えば当然なのだろうが。とりあえず弁明はしておこう。

「……皮肉ですか？　ぶん殴りますよ」

「いや、その子を一目みた瞬間にそう頭が過った。皮肉でも何でもないさ、なんなら名前を変えてやってもいい」

「……いえ、よく見ると確かに霊夢みたいな顔してますね……。それでいいです」

「そ、そうか……。ではな、大和殿。――――――次に会う時は、きっと命の取り合いになるだろう」

何故か納得してしまった大和殿を見て、私は顔が若干引き攣ってしまった。……それでいいのだろうか？　…いいのだろうな。何せ彼が決めたことだ、私はそれでいい。

私は苦笑を残して空を目指した。さて……紫様に何と言い訳するか考えねばならないな。

インターミッション（後書き）

超・展・開！　だと勝手に思い込んでるじらいです。まぁ予定通り…じゃないんですけどね。何か気の利いたことでも書ければいいのですが、特にないですｗ　…感想待ってます？　くらいしか言えませんｏｒｚ

次回はインターミッション2。大和、子育てする。お縄につく。食べられそうになる（嘘）　の三編を予定してますが、まぁ変更されるでしょうｗ　とりあえず魔理沙と咲夜が出せれば満足出来ます。そんな話になるかと。ではまた次回

何時も通りの予告編（前書き）

何時も通りの予告編です。だいたいこんな感じになるだろう、な意味の予告編です。ネタばれあり！　もう一度言いますよ？　ネタばれあり！！　そしてこの通りに進むことも『ほぼ』　ないです。もう解っていらっしゃるとは思いますがｗ

読むのは貴方様の判断に任せます！

何時も通りの予告編

……いや、その、なんだ。霊夢のやつが産まれた時から馬鹿師匠に育てられたってのは噂程度だと思っていたんだがな。まさか本当だったなんて……

私もあいつが赤子を抱いているのを見た時は何事かと思ったな。何せいろいろと迷惑な噂や伝説やらが里では語り継がれていた『あの』大和だ。慧音が思わず頭突きをしてしまったのも仕方がないと思うぞ。

何言ってるんですか焼き鳥さん。貴方だってそいつは輝夜との子供かー！？　なんて言って燃やそうとしてたらしいじゃないですか。

し、仕方ないだろ。黒髪だし、当時の私の中じゃ自然とそう完結したんだよ！

妹紅は知らないだろうけど、あの頃の永遠亭は酷かったのよ。てゐが噂を持って帰って姫様に伝えた時なんて……うぅ……。

「そんな一大事だったんですか？　私もまだまだ彼について知らないことが多いですね……」

いや、そこまでたいした師匠じゃないから放っておいていいと思うぜ。

むしろ関わりを持たないほうが身のためだと思うぞ。

楽しいことは間違いなしなんですけどねぇ……。

あの人と知り合ってからは心が休まる時がないわ。

「あはは、でも皆さんが大和さんのことを話す時はすごく楽しそうでしたよ？」

そうですねぇ……まあ良かったと思いますよ。彼みたいな人がいて。

知り合いにそっくりで怖いけど、でも良い人よ。

とんでもない馬鹿だけど、弟分だしな。

……こう言ったらあれだけど、感謝はしてるぜ。それ以上に思うこともあるけどさ。

「そうですか……。さて、では続きを聞かせてくれませんか？　彼がどうなったのかを――」

▽▲▽▲▽▲▽

「慧音さーん！　いきなりで悪いんですけど、僕と一緒に子供育てません？」

「……は？　その子は？」

「あ、霊夢っていいます。僕が育てることになったんですよー」

「伊吹君、誘拐はいけないな。それにいくら悲しいとはいえ、何も知らない子供に彼女の姿を重ねるとは……見損なったぞ！！」

「うえぇ！？　ご、誤解ですよ！！」

藍から渡された次代の博麗の巫女。好きな時に好きなように泣き始める霊夢に頭を抱える大和。初めての試みに四苦八苦する彼だが、嘗て母が自分にどのように接してくれていたのかを思い出し、それを実践していく。

「やあと」

「kっききk聞いた妹紅っ！？　僕の名前を呼んだよね！？　今、呼んだよね！？」

「あ〝ー！　もう煩いな！　……ほら、妹紅って言ってみ？　も・

こ・う。ほらほら」

「……」

「何で言ってくれないんだー！？」

「フッ……。妹紅は子供の扱いがなってないなぁ。まぁ私に任せてみろ。霊夢、慧音だ。け・い・ね。解るよな～」

「……」

「「大和（いぶきくん）、しっかりとしつけろ（なさい）」」

「この子は渡しませんよ！？」

日々成長していく霊夢を見て、大和は時代が動いていることを確信する。もう、自分の時代ではないのかもしれないと。

霊夢は成長していくにつれ、彼女の生き映しのような容貌に、彼女を彷彿とさせる霊力、その全てに面影が見られるようになっていく。ならば彼が考えることはただ一つ。どのような形であれ、あと僅かで全てが変わる。その時この子に何をしてやれるか、何をして貰いたいか。自分の全てを託すべく、彼は動き出す。

霊夢が成長していく傍らでは、ある一人の女の子が大和にしつこく付き纏っていた。名前は霧雨魔理沙。古くから交流のある霧雨魔法店の一人娘が、魔法使い志望として大和に弟子入りを迫っていた。

「先生！　正式に先生の弟子にしてください！」

「だからね魔理沙ちゃん、僕は弟子を取らない主義なんだって」

「じゃあどうすれば弟子にしてくれますか？」

「……ある程度強くないと無理かな」

苦し紛れに言った一言が大変な出来事を引き起こす。魔理沙がどれほど本気だったのか、それを理解しきれてなかった故にそれは起こってしまった。

「アタイったらサイキョーね！」

「妖精くらい、私にだって倒せるんだから！！」

その頃、紅魔館では一人の少女が現れていた。

「大和、久しぶりに紅魔館に来なさい。頼みたいことがあるの。――あ、それと能力は常に全開でいなさい」

レミリアからの誘いを受け、何の疑いもなく紅魔館を訪れる大和。
出迎えたのは視線を覆い尽くすほどのナイフだった。

「何事!?」

「時の止まった世界で動ける……？　何者?」

時とナイフを操るまだまだ幼い少女。いきなり襲いかかってきた彼女の目的とはいったい……?

そして時は流れ、幻想郷を紅い霧が包み込む。

「貴方が大和の弟子とか言う子？」

「はん！　あんな弱っちい奴、師匠でも何でもないぜ！」

「でしょうね。……貴方程度の力しかない者が大和の弟子を名乗るなんて、身の程知らず以外の何者でもないわ」

ぶつかり合う魔法使いたち――――

「さて、どれだけ成長したか見せて貰おうかな？　咲夜ちゃん」

「今の気持ちを一言で表すとすれば……うぜぇ、ですわ。とりあえず死ね」

出会った当初からソリの合わなかった二人による、ルール無用のガチンコバトル――――

「クックククククク……まさかまた会えるとはな、博麗の巫女！！」

「なにあんた、頭狂ってるの？」

「別にお姉様は狂ってないよ？　ただ霊夢が零夢そっくりで、借りを返せると思ってるんじゃない？」

「はあ？」

二人の吸血鬼と博麗の巫女。

「受け入れろ、博麗の巫女。これが吸血鬼の力だ」

「当然の結果だよね」

「……」

霊夢が危機的な状況に陥っているなか、大和もまた生涯の天敵との決着をつけようとしていた。

「決着をつけてやるぞ、小僧」

「アルフォード、悪いけどお前なんかに構ってられないんだ。僕はもっと上に行く。――特殊術式Ｒｅｍｎａｎｔ（レムナント）起動。再構築……開始！」

それは、若者たちの始まりの物語

何時も通りの予告編（後書き）

インターミッション2とか言いながらすいませんｏｒｚ　何時も通りの予告編を挟ませて貰いましたじらいです。次章は名付けるとしたら『断章』　と言ったところでしょうか。原作主人公たちの成長と紅魔郷を送りたいのですが、長くなれば紅魔郷と分けるかもしれません。予定は未定、何時もの事です。

赤ちゃんといい歳した大人たち（前書き）

１３６部の全域で変態注意報が発令されています。注意してください。

赤ちゃんといい歳した大人たち

藍さんから渡された赤ちゃんを抱いて五分ほど経っただろうか。僕はこれから何をしたらいいのか解らずにただ呆然と赤ちゃんの顔を眺めていた。その間、件の心配ごとの霊夢は泣き声ひとつ上げることなく静かに寝息を立てている。その姿をジーっと見つめ続けてみると……可愛いなぁ…。すご癒される。赤ちゃんってこんなに可愛かったっけ？

「でもどうしようか。博麗の巫女として育てるってことは神社で暮らして、巫女修行させて……。そう言えば赤ちゃんの食べ物って何？　確かお母さんのおっぱいだとか何だとか聞いたような……あれ？　それであってたかな……？　えーい！　赤ちゃんなんて育てたことないからどうすればいいかさっぱり解らないよ！」

そう言えば僕が赤ちゃんの頃は何を食べてたんだろう？　気付いた時には山の物を食べてた気がするけど、流石に赤ちゃんの頃からそれはないだろうし。じゃあ母さんの……？　いやいや、ねーよ。何と言うか、それは常識とか何か大切なものをぶっちぎって無理だろう、たぶん。まぁまずはこの子の育て方や何やよりも先に、今はこの子の食事事情をどうにかすべきだ。

まぁある程度大きくなってくれればレミリアやフランの時のように接すればいいんだろうけど、流石に結婚を経験したことのない僕は生憎と幼児教育なんて皆無。フランドールの時だってある程度大きくなるまでは触らせても貰えなかったし。

そんな僕が子供を育てるとなると……母親役がいるよね、うん。母親がいれば食事事情も解決するだろうし、いるに決まっている。

じゃあ誰に頼むかという問題が出てくる。知り合いの中で頼むとしたら、一番候補はやっぱり慧音さんかな。イメージは母性たっぷりお母さん。うん、想像に容易いのは僕の頭が悪いからじゃない、とんでもなくイイ身体……ではなく良いからだ。ちょっと想像してみようではないか、慧音さんが母親になった時のシチュエーションを――

～大和脳内劇場・ｖｅｒ慧音～

『伊吹君、今日は遅かったな。霊夢も寂しがっていたぞ？』

『お父さん、お仕事大変だったー？』

『ありがとうね、霊夢。よしよし、お父さんを労ってくれるなんて家の子はかわいーな～。ねぇ、慧音さん』

『もう……なら二人目でも――――――』

そして僕らの夜は更けて行く……

～大和脳内劇場・完～

……ぶほっ、やっやば、想像しただけで鼻血が……。

でも素晴らしい……素晴らしいじゃないかデスカ！　僕、天☆才！

よし、慧音さんに決定だ。じゃあ人里に行って、慧音さんに頼もうか！

◇◆◇◆◇◆◇

人里に入ると、すぐに蒼くて長い髪を靡かせながら歩いている後姿を見つけることが出来た。隣にはこれまた見慣れた長い白髪をした後ろ姿も見える。慧音さんだけなら話易かったのになぁ……。妹紅がいたら絶対に話がややこしくなるに決まってるし。

「慧音さーん！　ついでに妹紅も、久しぶり！」

「おい、ついでとはえらい言い様だな大ｔ……！？」

あ、妹紅が口を開けたまま固まった。腕に抱いた霊夢と僕の顔を何

度もいききしている。目をまん丸にしてパチクリしている姿は何時もの男勝りとは違って、とても間抜けに見える。こんな表情二度と見れないだろうからよく拝んでおこう。

「……ん？　ああ、伊吹君か。久しぶｒ……！？　伊吹君、話掛けてくれるのは嬉しいが常識がなってないぞ。人と話すときは幻術を使う必要なんてないだろう？」

「…？　幻術なんて使ってませんよ？」

「じゃあその赤ちゃんは……？」

「Ｍｙ　ｄａｕｇｈｔｅｒ（仮）　です」

「あ、相手は？」

「（最初から）　いませんよ？」

それよりもこの子、可愛いでしょう？　と良く見えるように抱き直すためにヨイショ、と下を向いた途端にガシッと肩を掴まれた。顔を上げてみると、目の前には目に燃え盛る炎を宿した妹紅。……あのー、妹紅さん？　ちょっと痛いんですけど……

「この不埒者がぁ！！」

「もｇぺきょ！？」

抗議を入れようとした瞬間、何故か思いっきり殴られた。足を踏ん張り腰を入れ、教科書の応用編に載ってそうな振りかぶり方、しかもグーで。突然のことに足に力が入らず、吹き飛ばされる瞬間に霊夢を上に放り投げた。一緒に吹っ飛ぶと危険だ！　と一瞬の判断を下した僕を褒めるのと同時に誰か霊夢をキャッチしてあげて！？

そんな僕の心配を察してか、頬を抑えながら起き上った時には妹紅が霊夢を抱えていた。どうやら先程の行いで起きてしまったらしく、抱えている妹紅が「起きた！？　慧音、この子起きた！？」　とか言いながらオロオロと。何やら腰が引けたようで慧音さんに霊夢を渡してホッとしている。殴った僕のことは無視ですかこの野郎。あ、頬が少し腫れてきた……

「ちょっと妹紅、頬が腫れたじゃないか」

何してくれる、と睨んでやると、振り返った妹紅が私の拳は凶暴ですと言わんばかりにボキボキ鳴らしながら近づいて来た。ヤんのかこの野郎、それなら相手になってやるぜ！　と僕も負けじとボキボキ拳を鳴らして近づいて行く。鼻が当たりそうになる距離まで近づいて、お互いにガンを飛ばす。遂にはおでこがゴツゴツと当たって鼻が当たって擦れた。……頼むから唾は飛ばさないでね？

それにしてもち……近い……と言うか妹紅の目が怖い……。今までの僕なら後ろに向かって全力疾走だけど、今日の僕は一歩も引くつもりはない。何故なら娘の前でそんなことは出来ないからだ！　お父さんカッコイイね！　と言って貰えるまでは絶対に情けない姿なんて見せられないよ！！　でも怖いものは怖いので、足がちょっぴ

り震えてます。これくらいは見逃してくれ娘（仮）　よ。

「お前……相手がいないんじゃなくて言えないんじゃないのか？　この黒髪！　お前の娘！　相手は輝夜なんだろ！？　だから私がついでだってか！？　私の前じゃ言えないってか！？」

「ねーよ」

此処まで来て導いた答えがそれですか！？　と、思わずコケてしまいそうに、思わず噴き出してしまうのといことはなかった。逆に的から外れ過ぎて熱くなってた自分が馬鹿みたいに思えてきて、一気に熱が冷めてしまった。はぁ……と溜息を吐いて離れようとしたけど、どうやら妹紅の熱はまだまだ納まりきらないようで、肩を掴んで離してくれなかった。

「私は知っているんだぞ！？　輝夜がお前のことをすッ……す、すすすす――」

「――おやおやぁ？　妹紅さんや、顔が真っ赤でございますよ。もしやとは思いますが、妹紅さんほどの方が初心なわけないですよねぇ？」

こう言うも、僕は内心で確信していた。と言うか初めて気付いた。まさか妹紅ともあろう人が『好き』　すら言えない初心だったなんて。まぁ妹紅が顔を真っ赤にしてなかったら僕が真っ赤だったんだろうけど……ふっ、でもこの反応じゃ誰かを好きになったこともな

さそうだね。なら僕の方が大人と言うわけだ。はっはっは！　せっかくの機会だ、もっと弄らせてもらおうか！

「あれ？　妹紅ってソッチ系の知識はあるのに、恋の経験皆無だったりするの？　そんだけ長生きしてて？」

「うっ五月蠅い！　私は理想は高いんだよ！」

「逃げの常套句だし、顔を真っ赤にされて言われてもなぁ」

「～～～～ッ！」

「おい伊吹君、あんまり妹紅を虐めてやらないでくれ。妹紅のやつも意外と初心なんだ、そっとしておいてやってくれ」

「むぅ……慧音さんが言うなら仕方ないですね…」

頼みたいこともあるし、あまり妹紅を虐めるのも心象が悪くなるだろうしね。まぁ涙目で顔真っ赤な妹紅なんて貴重なモノも見れたことだし、これで良しとしよう。……ちょっとと言わず、だいぶ勿体ないけど。

「今日は慧音さんに頼みがあって来たんです」

「ああ、何となく察してるさ。この子のことだろう？」

そう言う慧音さんは優しげな表情を浮かべて霊夢をあやしていた。
その光景がまるで一枚の絵のように見えて、僕は自分の考えが間違っていないことを確信した。

「はい。霊夢のことなんですけど――」

「……すまない伊吹君。今、この子の事をなんと呼んだ？」

それが一転、厳しい視線を僕に送ってくる。何か不味かっただろうか、それとも聞き取れなかったのだろうか。そう思った僕はもう一度言い直す。

「え？　だから霊夢（れいむ）のことで――」

「この――――――馬鹿者が！！」

「b――――――」

痛いなんて言葉すら言わせて貰えず、僕の意識はおでこから受けた衝撃で闇に沈んで行ってしまった。

◇◆◇◆◇◆◇

「すまなかった！」

目が覚めて　説明すると　土下座なう――大和心溢れる川柳で今の状況を説明してみるとこうなる。とりあえず目が覚めた所に説明を要求されて、紫さんたちとの確執は隠してコトの事情を説明した。ちなみに件の霊夢は横になりながら慧音さんの土下座を見て元気に笑っている。……この子の笑いのツボがどこにあるのか探す必要があるかもしれない。もちろんパパとして。

「別にいいですけどね、こんなこともう馴れっこですし。それにそう思われても仕方のないことだってやってきましたし」

「慧音が早とちりするのもしょうがねぇよ。霊夢なんて名前を付けた子供を育てるなんて聞かされたら、誰だってこいつの感性を疑うさ。それに、里じゃお前とあの四兄弟の話は伝説になってるくらいだからな」

「妹紅！」

「伝説？　いやぁ……照れるなぁ」

「……お前本当に頭大丈夫か？」

うん？　ちょっと打ち所は悪かったような気がするけど、まぁ大丈

夫だろう。おでこの腫れもその内治るだろうし。……頬の腫れもね。

「ああそうだ、伝説どうのこうのはどうでもいいんだけど、一郎さん達の墓って里の墓地にあるよね？　一応墓参りしておきたいんだけど」

人が死ねば当然それを弔うべきであって、その場所も必要になる。妖怪に荒らされない様に人里の中にも墓地があって、そこに沢山の人達が眠っている。もちろん零夢の墓も、僕が落ち込んでいる間にそこに建てた。その時の記憶は……まぁ、正直曖昧だ。ほとんど放心状態だったからね……。命日に一回と、掃除を兼ねて年に数回訪れている――んだけど、実はまだ一郎さんたちの墓参りは僕本人はしたことがない。だからちょっとついでにやってあげたいんだけれども……

「行く必要なんてねえよ。あいつらは盆になれば悪さしに還ってくるからその時に挨拶しておけばいいさ」

「……まさかとは思うけど、盆に還ってきてるの？」

「……昨年も霧雨魔法店の店主とその店員、森近霖之助君が取り憑かれていたよ。私が頭突きをしても他の者にのり移るから、正直生きていた時よりも性質が悪い」

「去年なんて『今年こそは慧音先生の裸体をー』　なんて言って突っ込んで来やがってな。のり移られた森近もろとも私が燃やしてやったんだが……今年も還ってくるんだろうなぁ…」

……何やってるんだよあの人たち…。死んでも元気なのを褒めるべきなのか、それとも死んでもまだ迷惑を掛け続けることを嘆くべきなのか……。僕が教えただけに判断に困るなぁ。

「で？　映姫様にこの事は言ったの？　と言うか、よく映姫様もOKだしたんだね。あの人の管轄だろうに」

例え盆とはいえ、あの厳格な映姫様が悪さするためだけに還ってくる人たちを見逃すなんてあり得ないと思うんだけどなぁ。それこそ地獄から一歩も出させて貰えないと思うんだけど。まぁ、あの人たちは煩悩が多過ぎるから天国には逝けて……るんだろうなぁ。なんせ還ってきてるんだし。

「もちろん言ったさ。でもあの馬鹿者たち、一年に一度還ってくるために普段はとても真面目らしい。だから四季映姫も見逃さざるを得ないと言っていた。あと、どうしても駄目なら伊吹君に手綱を握らせるようにも言っていたぞ」

「ボクナニモキイテナイヨー」

「ばーか。もう遅い――――ん？」

――――――――――――――どどどどどど

「え？　何この音、敵襲？」

「いや……これは私がお前の為に呼んだ奴の足音だな」

――――――――――――ドドドドドド

「ぅ……！？　僕の分身が……消えた…！？」

「私に感謝しろよ大和。――――さっきの借り、万倍にして返してやったぜ」

「……しゅ……さ……！」

――――――ズドドドドド！

なんだこれ……頭のてっぺんから足の先までが『死にたくなければニゲロ』　って言ってるのに、肝心な身体が反応してくれないんですけど！？　と言うか、僕の分身が消えたり時々聞こえてくる叫びとかでもう誰か察したんだけど、これ本当にヤバくないですか！？

最近ほったらかしにしてたから、どうなるか解らないんですけど！？

――ズドドドドドドドド！！

「ごぉーーーしゅーーーじーーーんーーーさまーーーーーーーーーー！！」

「ほらねーーーーーーーーーー！？！？」

扉を吹き飛ばして派手に登場したのは、やっぱり僕の悪友ことルーミアちゃんだった。慧音さんが吹き飛ばされた扉を見て頭を抱えているけど、小さい肩を激しく上下させて息継ぎをしているこの子には関係ないみたい。文字通りの全力で飛んで来たのだろう。でもそんなことは目を血走らせて唸っているルーミアちゃんの様子に比べればどうでもいいことのように感じます……とりあえず幻術で気配遮断。霊夢を連れて逃げる準備しよう……って、慧音さん何抱えてあやしてるんですかー！？　それ僕の、僕の出番ですから！！

「赤ちゃんは！？　赤ちゃんはどこ、もこたん！？」

「もこたん言うな、ぶりっ子ルーミア。赤ちゃんならほら、そこで慧音に抱えられてら」

「慧音……それ、チョウダイ」

「「ひっ！？」」

ルーミアちゃんの、この世の者が発するとはとても思えない声に慧音さんがビクッ！　と肩を揺らすのと同時に、僕もビクッ！？　と物音を立ててしまった。そして彼女からしたら僕の姿は見えないのだろうけど、正確に隠れている位置を見てニタァ、と笑らい掛けられた。

その様子に完璧に固まってしまった僕を尻目に、ルーミアちゃんがユラユラと、一歩づつ慧音さんに近づいて行く。慧音さんはどうすればいいのかと必死に顔を移動させて、僕を探している。この光景を造り出した妹紅はそれを見てニヤニヤしている始末。

畜生……怒られるのは嫌いだけど、霊夢には代えられない。甘んじて罰を受けよう――――――

「……ル「ご主人さまーーー！！」　はいはい、なんでございましょうか臣下殿」

まだ『ル』　しか言って無いんだけどね……何この反応速度。慧音さんに向かって歩いていたはずなのに、すぐさま反転して飛び付いて来た。とりあえず謝ろうと思っているのだけど、頭をぐりぐりと押し付けてくるせいで謝れない。むしろ……怒ってない？

「ルーミアちゃん、怒ってないの？」

「怒っているのだ。とんでもなく怒っているのだ。赤ちゃんのこととか赤ちゃんのこととか。だから怒りを抑える為に分身は食べちゃった」

「そ、そうですか……」

それはつまり、分身がなければ僕が食べられていたと言う訳だよね……？　九死に一生ってやつ。いや、はっはっは。笑うしかないね！

「説明して。理由があるんだよね？」

「ん？　ああ、そうだね「ぅ…ぅ、ぅうあああああああああああん！！」　霊夢！？　ど、どうしたの慧音さん！？」

事の次第をルーミアちゃんにも話そうとしたところで、いきなり霊夢が泣きだした。抱いている慧音さんはさっきよりも動揺しているようで、オロオロとその場で右往左往しだしている。貴方赤ちゃんなんて慣れっこじゃないんですか！？

「え？　あ、え、妹紅！？」

「私に振るなよ！？　……何だ霊夢、ぽんぽん痛いのか？」

「「ブホッ！？」」

「な、なに笑ってやがる馬鹿主従！」

「も、もこたんがぽんぽんだなんて……ぷぷ」

「似合わないと言うか、予想外だよ……ぶふっ」

「お、お前ら～～～～ッ！！」

「そんなことより霊夢をどうにかしてくれ！？」

慧音さんの言うこともももっともだ、妹紅を弄るのは後で幾らでも出来そうだし。今は霊夢を泣きやませないと……。

「ご主人さま、この子お腹すいてるんじゃないの？」

「おお！　そう言えば何も食べてない！　――――――慧音さん！」

「無理だぞ私には！？」

「まだ何も言ってないのに！？」

「言わなくても解るわ！　とにかく、私からは出ない！　出ないったら出ない！」

じゃあどうするのさ！？　問答無用で出るモノじゃないの！？　半妖じゃ駄目なのかー！？

「妹紅！」

「いや、無理だろ」

「妹紅様！」

「言い方を変えたってこればっかりはなぁ……。そういう身体じゃないし」

「ご主人さま、なら私が――」

「「「やめとけ、自虐は」」」

「酷いのだ！？」

物理的に無理でしょうに、そんな貧層なまな板じゃあ……。

「おぎゃあああああああああああ！！」

「ええい伊吹君！　霧雨魔法店に新婚ホヤホヤの新妻がいるから彼女をここに連れて――いや！　君はもうここに来るな！　絶対、この場所を伝えたらここに来るなよ！！」

「霊夢が泣きやむのならなんでもいいです！　じゃあ行ってきます！！」

◇◆◇◆◇◆◇

霧雨魔法店の若奥さんに事情を説明したところ、なんでも新妻でもまだ無理だと言っていた。なので助っ人を途中で拾って行くと言って出て行った。何だろう、僕ってすごい無知。こんな僕がこれから霊夢を育てられるんだろうか……

「はぁ……疲れたなぁ」

「溜息を吐くと幸せが逃げて行くよ、大和君。はい、お茶淹れてきたから」

「ああ、ありがとう霖之助くん」

森近霖之助。半妖で霧雨魔法店……今は道具屋の店員。とりあえず現店主である霧雨さんの新妻さんに慧音さんの家まで行くように頼んだ後、色々あってぐったりした僕に対応してくれた親切なイイ男というのが初対面の感想だ。ただ、見た感じ何故か一郎さんたちに近いものを感じるのは気のせいなのだろうか？　取り憑かれた影響がまだ残っているとは思えないんだけど、だとしたらこの人……仲間？

「それにしても、この店も変わったなぁ…」

「え？　前にも来てたじゃないか」

「え？　ああ、そうだったそうだった…。ちょっとド忘れしちゃったみたい」

「しっかりしてくださいよ？　あの件だってまだ答え聞いてないんだから」

「……あの件？　ごめん、なんだっけ？」

不味いなぁ、ちっとも連絡取らなかったから全然解んないよ。どうも彼とは親しい仲だというのは何となく分かるんだけど……。やっぱり経験がそのままフィードバックされる幻術体の開発とかしたほうが良いかもしれない。

「本当に大丈夫かい？　僕が森の前に店を構える許可が欲しいって、前から言ってたじゃないか」

「ああ、そうだったね――――――そうだ、すごく良い物件があるよ。広くて綺麗で頑丈なやつ」

「本当かい！？」

「もちろん。でもお金は貰うよ？　何と言っても、僕の家だし」

「家？　じゃあ僕は伊吹君たちと一緒に住むのかい？」

「いやいや、そうじゃない。僕は博麗神社に居を構える」

どうせ霊夢は神社で育てないといけないんだ、だったら僕が神社に住んで世話をするのも当たり前。そうなったら当然ルーミアちゃんも付いてくるだろから、何の問題もない。あるとしたら……妖怪が神社に住むことくらい？

「でもいいのかい？　そんなことをしたら、八雲紫なんかが黙ってないんじゃ？」

「その辺はなんとかなると思うよ。なーに、大和さんを信用しなさい！」

残った借金……あるかどうか解らないやつもとりあえずこれで返済できるだろう。もうあちらも何度も世代交代をして無かったことになってるかもしれないけど。

「分かった。じゃあ支払は出世払いで頼むよ」

「はっはっは、任せな――――え？」

つくづく思う。僕には金運はないんだと。

◇◆◇◆◇◆◇

「ん？　いらっしゃい、慧音。今日は何を？」

「すまないな霖之助君、今日は客じゃないんだ。伊吹君、いるか？」

「ふぉ？　はいはい、いますよ～」

やば……座ってたらウトウトしてた……。慧音さんが来たってことは、もう霊夢は泣きやんだのかな？

「とりあえず霊夢も連れて来たんだが、これからどうするつもりだ？」

そう言った通り、慧音さんの背中には霊夢がおんぶされていた。紐で括りつけて……うん？　どうやっているんだろうか。ちょっとまだ寝ぼけているみたいだ。

「どうするも何も、僕が神社で育てますけど」

「その、言いにくいんだがな……君は本当にこの子を無事に育てられるのか？」

「あ……」

そう言われて、僕は即答出来なかった。自分のことなら何とでもなるけど、こんなまだ産まれたばかりの赤ちゃんと触れ合ったりする機会なんて無かった僕だ。慧音さんがそう思うのも無理はないだろう。

「君が思っている以上に子育てと言うのは難しいぞ。夜泣きもするし、おねしょもする。この子のためだけに三年以上は無くなると考えた方がいい。……その、なんだ。今まで黙っていたが、私もそれなりに情報通だ。事情はある程度知っているつもりでいる。妹紅もそう言っていたが――今の君にはやはり無理があるんじゃないのか？」

思わず、額を抑えて俯いてしまった。溜息も同時に出た。霖之助くんはそんな僕と慧音さんのやりとりをじっと聞いている。自分の出る幕ではないと感じているのだろう。本当に出来た男だよ。

でも別に隠していたつもりじゃなかった。知られたくはないとは思っていたけど。いったいどこから漏れたのやら……。でも、なら理解してくれるはずだ。僕の想いも、僕以上に無念だった彼女のことも。

「それでも僕が育てます。育てないといけないんです。それが、僕の出来ることですから」

ある程度知っているのなら、何も言う必要はない。この子を託してくれた時の藍さんの表情を、心の底から僅かに覗けた感情を見てしまった今、僕にはこの子を育てないなんて選択肢はあり得ない。僕がこの子を立派な巫女に育てる。誰にも負けず、誰よりも強かったあの子のように。

その決意を瞳に宿して、真正面から慧音さんを見た。慧音さんはそんな僕と目を数秒交わした後、ふぅ、と優しい表情を浮かべた。

「分かった。なら、責任を持ってしっかりとな。ただ、何か困ったことがあったら直ぐに相談するんだぞ？　これでも人里の慧音先生だからな」

「はい、頼りにしてますよ先生」

その後、慧音さんからおんぶ紐の結び方を習い、すぐに来たルーミアちゃんと一緒に博麗神社を目指した。数年ぶりの博麗神社。境内を見ると、また泣きそうになるかもしれないな……

～おまけ～

「ご主人さま、居間の机に『ほにゅうびん』　と『粉みるく』　とか言うのが置いてあったよ。あと差出人の名前の書いた紙も」

『外の世界では母乳の代わりにこれを飲ませるらしい。母親がいない霊夢もまた、これを飲ませるのが上等だろう。作り方は粉ミルクの入った箱に書いてある。それを見てくれ。しっかりな。――――――八雲藍』

「……ホント、律義な人だなぁ」

「ねね、ご主人さま。私とご主人さまも頑張ったら「頑張らなくてよろしい！」　……ッチ」

赤ちゃんといい歳した大人たち（後書き）

とにかく詰めに詰めたじらいです。子育てに入る前に書きたかったのはこれくらいになるのかな？　とりあえず深夜テンション（欝）で書き上げた為にイマイチ出来が解りませんが…普段通りの酷い奴でしょう。

大和がヘタレなのは何時も通り、彼はこれくらいがデフォでいいと思います。でも霊夢やこれから出てくる魔理沙の前ではやる気スイッチが入って別人になりますｗ　誰テメェ！？　ってくらいカッコつけさせようと思ってます。

次回は1～2週間空くかもしれません。何時もの如く空く空く詐欺になるかもしれませんが、一応。テスト、バイト、そしてゲーム。ＦＰＳって中々楽しいですね。実は初めてだったり。それではまた次回

子育て最前線（前書き）

子育てなんて、したことないです。

子育て最前線

～母、地下にて衝撃す～

「萃香よ、ちょっといいかの？」

「なんだい大将？　今日は暴れずに静かにしてるよ」

「ならばそのまま暴れずに聞いてくれるかの。……大和が子育てをするらしい。元気な娘じゃと」

「……ぬ？」

萃香おばあちゃん、暴走開始。

◇◆◇◆◇◆◇

～博麗神社～

藍さんの言っていた通り、博麗神社にはもう巫女の姿はなかった。つい先日、と言っていた通り、境内も母屋も綺麗なままだったので大規模な掃除をする必要はなくてよかった思う。でもその巫女さんがどんな人で、どんな人生を送ったのか。何故亡くなったのかは知らない。そう思うと、なんだかやるせない気持ちが沸いてきた。

「……ありがとう。そしてごめんなさい。僕は自分の為に、君たちを見捨てました」

賽銭を入れて祈る。こんなことをするのは場違いな気がするけど、それでも祈らずにはいられなかった。例えそれが何もしなかった自分を擁護するためであったとしても。

「……ご主人さま」

そんな僕の心境を察してくれていたのだろう、ルーミアちゃんは僕の祈りが終わるまで待ってくれていた。現状で一番僕のことを理解してくれている子だ、僕が何を思っているかくらい分かってくれているのだと思う。

でも暗くなるのはこれでおしまい！　今からはやることが沢山あるからね。一番忙しいのは引っ越しかな？　まぁ収納用の魔法があるからなんとか半日で終わるだろうけど。でも便利だねー魔法。なんでも修得してみるものだよ。

「じゃあとりあえず、子育て頑張っていきますか！」

「うん！　あ、霊夢のお風呂と下穿きの取り換えは私がするね」

「なんで？　僕だって練習すればそれくらい出来るよ」

むしろ出来なかったら駄目だろう。霊夢の父（仮）としても、一人間としてもいろいろと。むしろこの子の為ならお父さん、どんなことでも張り切っちゃうつもりなんですよ？

「見ちゃ駄目なのだ」

「……ルーミアちゃん？　僕、大人。霊夢、赤ちゃん。そして僕、お父さん（仮）。ＯＫ？」

「だ　め。見たらご主人さまを食べるよ。封印解いて、抵抗出来ない様に影で縫い付けて食べるよ？」

「そ、その程度で責任あるお父さん役は引けないのです！」

「……じゃあ本人に聞いてみるのだ」

笑顔でにじり寄ってくるルーミアちゃんのプレッシャーに耐えつつ、何とか父としての最終ラインの防衛戦で踏みとどまる。コンチクショウめ、お札リボンをちょっと緩めるなんて味なマネをしおって！

背中の霊夢が泣いたらどうしてくれる！

「霊夢はご主人さまにお風呂入れて貰うのかー？」

そんな僕の心配とは裏腹に、ルーミアちゃんは背中に背負われた霊夢の頬を突きながらそう聞いた。はは、流石のルーミアちゃんもまだ赤ちゃんには疎いようだね。まだ一歳にもなってない赤ちゃんがハイかイイエを聞かれて答えられるわけが……

「おぎゃぁあああああああああああああ！！」

「……」

「……どんまい、なのだ」

肩に手を置かないで。なんだかとっても切なくなるから……はぁ

◇◆◇◆◇◆◇

大掃除をする必要がないとはいえ、赤ちゃんには清潔な場所で育っ

てほしいと思うのは父親として当然のこと。そう思ってお掃除専用魔法を全力で母屋全体に掛けた翌日の朝。生活魔法は得意な僕だけど、建物一つ丸ごととなると中々に疲れました。

なのでちょっと三人で川の字に寝転がっていると、いろいろと心配性な慧音さんと、意外と世話焼きな妹紅がやって来た。慧音さんからは子育ての経験のある母親たちからの経験談が聞けて、とても有意義な時間が過ごせた。妹紅？　ルーミアちゃんと二人で霊夢の相手をしてました。……いったい何しに来たのさ。

そこで慧音さんに教えて貰った一つが『育児日記』　と言うもの。文字通り、赤ちゃんの成長を記録するものだ。何でも親たちはこれを見て我が子の成長を数値でも確認するらしい。あんなだったこの子もこんなに大きくなって……と言える日が来るように、僕も頑張って付けていこうと思う。

◇◆◇◆◇◆◇

～初めての御引越手伝い～

3日ぶりに家に帰ってみると、何故か人形たちが部屋を綺麗に掃除していた。アリスの人形がなんで？　と僕は不思議がっていたけど当の本人の姿は見当たらず。頭を捻っている僕とは違って、背中に

背負った霊夢はそんな人形に興味津々の様子。きゃっきゃっと笑って何やら満足気にぶぅーと唸ってみたり。

そんな我が子（仮）　のあまりの可愛さに悶えているとお尻に激痛が走った。オウッ！？　と思わず跳ねてしまうと、霊夢の笑い声は更に大きくなる。そうかー僕が蹴られて楽しいのかー……。

赤ちゃんの笑いのツボはよく解らないね。まぁ可愛いからいいけど。とりあえず僕を蹴ったと思われる犯人には抗議をしておこう。蹴った犯人は分かっているからね。一緒に引っ越し作業をしているのはルーミアちゃんしかいないから。お尻を抑えながら振り返ってみると頬を膨らませて不満げな顔。どうしたのかと聞いても無言で、必要な家具・食器類を淡々と外に運んでいる始末。そんなちょっと気不味い雰囲気の中で引っ越し作業を続けていると、アリスが現れた。

「あら……もしかして、おめでた？　相手はルーミアね？」

僕の背中を見て一言。

「残念ながらお相手がいないよ」

「別に隠さなくてもいいじゃない。隠せない証拠もあるんだし」

私には理解出来ないけど納得はするわ、この変態（ロリコン）。まるで汚物を見るような目で僕を見てくるアリスに仕返ししてやろうと思ったけど、やめておいた。何と言っても霊夢が見ているのだ、悪い影響は与えたくない。この子にはお淑やかに、周囲を煩い人達に囲まれた僕のためにもお淑やかに育って貰いたいのです。

でも説明しても相変わらず冗談を言う人にはお仕置きも必要。なので出来るだけ見えない様に、魔力糸を放ってあげた。けど駄目だったよ、アリスの方が糸の操る技術は何倍も上でした。魔力糸で防御魔法描くなんてどれだけ器用なんだよ。……ちょっと練習してみよ

「あ、一応聞いておくけど、ただいまお母さん募集中です？」

「顔をあらって出直しなさい」

少しくらい考えてくれてもいいと思います。

◇◆◇◆◇◆◇

～夜泣き朝泣き～

引き取ってからはずっと霊夢に付きっきりの生活。初めての事ばかりで手探りで進めて行くしかないため、何事にも手を抜いたり集中力を切らせたりは出来ない。そんな日が何日、何週間も続くと如何に妖怪や魔法使いといった人外でさえ、身体はともかく精神面での疲れは隠しきれない。時刻も草木も寝静る丑三つ時を過ぎ、当然のように僕らも床についている。しかし、赤ちゃんにはそんなこと関係ないのだ。

「ぅgぇあ、ぅgぇああ！　おぎゃあ、おぎゃあ！！」

「――はいはい！　なんだい霊夢、よーしよし。ミルクか～？　それともおねしょかな？」

泣き声が聞こえてきた跳ね上がる直ぐに起きる。

精神面での疲れは隠しきれない？　普通ならそうだろうね！　でも残念、僕には通用しないのだ。疲れは溜まってるよ？　でもこの程度でどうこうなるようなら輝夜の相手なんて出来ません。あの我儘姫様に昼も夜もないのだから。須臾を生きる私に時間なんて関係ないわ、とか言ってたけど僕の時間にそんなものないと思った蓬莱島での日々。それに比べたら何のその、しかも今回は僕が育てている子供相手だ。疲れたとしてもそれを理由に逃げたりなんて出来ない。

「下穿きは濡れてない。と言うことは……ミルク？　じゃあ作りますか！」

とりあえず、今はこの子を立派に成長させる。紫さん？　……魔法の完成を急ごうか。

◇◆◇◆◇◆◇

～仙人と記者と忠犬～

「この子が噂の赤ちゃんですか。この年にしてこの霊力、中々育てがいがあるわね。どうです？　大きくなれば私に一度預けてみない？」

「大和さん、その子とのツーショットを撮らせてもらっていいですか？　もちろん特別号として特集記事で出しますよ！　……見出しは『あの伊吹萃香の息子に赤子が！？　相手はいったい誰だ！？』で行こうかしら。ふふふ……次回の新聞大会は頂いたも同然ね」

「あ、もう。耳を触るなと何度言えば……むっ胸は駄目！　胸はもっとだめぇッ！！」

「ねぇご主人さま……ここって神社だよね？　こんなに妖怪がいていいの？　参拝客とかいないけど大丈夫なのかなぁ」

上から華扇さん、文、椛、ルーミアちゃん。そして霊夢はと言うと、赤ちゃんは初めてだという椛が抱き上げられている。霊夢はそんな椛のフサフサな耳を楽しそうに触ってた。まぁ……確かにフサフサだからなぁ。そしてその次は……うむ、形容しがたいでござるな。霊夢そこ代わｔ……何も言ってないヨ？

でもルーミアちゃんの言う通り、参拝客が全然来ないんだよね。まだ赤ちゃんだけどちゃんと巫女はいるのに。――――――と言いますか、皆さんここで何してるんだよ。最近は何もなくて暇を持て余してるのはなんとなく理解できるけど、それでも仕事とかあるだろうに。

「貴方を観察するのが私の仕事よ」

「新聞作るのが仕事ですよ？」

「わ、私は無理やり文さんに連れて来られてぇ……やぁっ、もっもういい加減に……！　い、いえ！　大和様に会うのが嫌とかじゃなくてですね！」

見ない、知らない、妬まない。椛の膨らみに頭を埋めている娘（仮）が羨ましいだなんて、お父さんはちっとも思わない。煩悩は退散されるべきなのです……煩悩退散、煩悩退散！！

――ふぅ、とりあえず此処に来ている人は全員暇らしい。最近は妹紅やアリスなんかもよく来るしなぁ……暇なんだろう。幻想郷全体が暇を持て余してるように感じる……まぁ嵐の前の静けさなんだろうけどね。

それにしても霊夢大人気、お父さんはとても嬉しいです。でも僕としてはアリスはともかく、柄の悪い妹紅の影響を受けないかが心配でならないんだけども。

「あ、そう言えば大将から伝言があったわ」

「大母様から？」

珍しい、と言うか帰ってきてからは初めてじゃないの？　地下に潜ってからは全然連絡の取りようもなかったからなぁ。

「ええ。なんでも『萃香が暴れて止まらない。手紙でも何でも書いて事情を説明しろ』　ですって」

「うわぁ……。でも、何で母さんが？」

「貴方に仮とはいえ娘が出来たことを知ったからでしょう」

「――――――ちなみにそんな迂闊なことをしたのは……？」

「私よ？　賑やかになっていいじゃない」

――――――まっまあ、僕も一人立ちしてるし？　お、大人だし？　こっ子供の一人や二人くらい居てもおかしくないし？　かかかｋっ母さんのゆゆ許しを得てないけどッ、別に大丈夫だろうしっ！？

「『軟禁・監禁程度は覚悟しておくように』　との伝言もあったわ」

「――――ちょっと紫さんに頼んで幻想郷から脱出させて貰ってく

る」

決意して立ち上がるとルーミアちゃんと椛に止められた。ええい、離してくれ！　怒った時の母さんは本当に怖いんだ！！　あの拳骨をもらったことのある人なら誰だって逃げ出したくなるよ！！

「なんで！？　もう僕も大人だし、自立してるんだよ！？」

「落ち着きなさい大和。例え話をしましょう。霊夢が大きくなって結婚相手を連れてきました。さあどうする？」

「不殺を誓った僕の拳にも血がこびり付くだろうね……はっ！？」

「ま、そう言うことよ。良くも悪くも、貴方達は似た者親子ということ。諦めなさい」

カエルの子はカエル。つまりはそういうこと。

◇◆◇◆◇◆◇

～熱が出て～

「ルーミアちゃん新しい手拭持ってきて！　あ、あと毛布も！」

「わかったのだ！」

霊夢が原因不明の高熱に襲われた。最初は元気がないだけだと思っていたけど、半刻も経たないうちにぐったりとしてしまった。まさかと思っておでこに手を当てると、異常なまでの熱さだった。そこからはもう大変、何をしたらいいのかさっぱり解らない僕らは今も慌てふためいている。今までに出来たことと言えば、汗を拭いてあげただけか。

「毛布と手拭なのだ！」

「よし、じゃあ毛布で霊夢を包んで……」

医療の知識がない僕に原因不明の病気への対処法なんて解るわけがない。だったら解る人のいる所まで連れて行く！

「師匠の所まで行ってくる！」

「外は寒いのだ！　毛布から出しちゃ駄目だよ！！」

「わかってる！」

＝＝＝＝⇒永遠亭

「師匠！！」

「……大ちゃんと――――急患ウサね。ししょー、大ちゃんが急患を連れて来たよー」

永遠亭の扉を開けてそう叫ぶと、すぐにてゐちゃんが飛んで来た。付いて来い、と言われ、てゐちゃんの後を少し小走りしながら付いて行く。その間にも霊夢は苦しげに唸っていた。

廊下を急いでいる中で、てゐちゃんは僕への小言を多く漏らしてくる。なんでも僕が近づいて来ていることを察知した師匠たちは持て成しの準備を始めていたらしいんだけど、僕の魔力や気の波長が大きく揺らいでいることに気付き、急遽それを中止。僕の近くから霊力も感じたことで戦闘準備に入っていたらしい。それがいきなり助けてと言われたのだからもう大変。今頃は大急ぎで受け入れ準備をしているのだろうとの事らしい。

つまり、御馳走を食べ損ねたと言うことらしい。

「その子が患者ね、大和」

てゐちゃんの後を歩き続けていくと、部屋の前で師匠が待ってくれていた。目の前に居るのは僕が絶大の信頼を寄せている『師匠』だけど、それでも僕は聞かざるを得なかった。

「は、はい！　……師匠、霊夢は大丈夫ですよね……？」

「この程度なら大丈夫よ。一歳になるまでの幼児なら誰でもかかるものだから……ほらほら、そんな泣きそうにならないの」

よかった……本当によかった……。師匠のお墨付きを貰えて安心してしまったからか、僕はその場にしゃがみ座り込んでしまった。はあぁぁぁぁ、と大きく溜息を吐きながら天井を仰いでいると、

「お久しぶりです、大和さん」

「レイセン……だっけ、久しぶり」

誰かと思えば、僕が永遠亭に引き渡した顔が逆さに見えた。憶えていてくれましたか、と苦笑する彼女に僕も苦笑で返した。あはは、えへへ、と会話が繋がらないためにお互いの顔を見て笑うだけなんだけど、なんだか悪い気はしなかった。むしろ和みます。

「今は鈴仙・優曇華院・イナバと言います。鈴仙って呼んで下さい」

「うん、わかったよ鈴仙」

「優曇華、早く来なさい。赤子に対する治療法を実践するから」

「あ、はい。じゃあ大和さん、また後で」

「うん。霊夢をよろしくね」

にこっと、それこそ華が咲くような笑顔を見せてくれた鈴仙はとても可愛かったです、はい。新しい心の清涼剤を見つけてしまったかもしれません。そうぼへぇー、と天井を見続けていると、何だか顎の先がチリチリしてきた。見られてる。メッチャ見られてます。顎に凄い視線がキテマス。

「久しぶりね、や　ま　と？」

「や、やぁ輝夜サン。本日もご機嫌麗しゅう……」

そうだと思ったよ。輝夜だと思ってましたとも。だってもう彼女しか残って無いんだから！　でも僕、一度本気で迫られてから輝夜のことを思いっきり避けてるんだ。とにかく会わないように、そう思いながら行動を続けてきた。仕方ないじゃないか、あの感触とかこの感触とかが甦ってこられたら僕だって辛いんだから。

「ねぇ大和、あの子は貴方の実の子供？」

「ち、違うよ？　あの子は僕が預かっただけだよ？」

何も疚しいことはないはずなのに、何故か悪いことをした気持ちに

なる。いや、させられている。僕が逃げ出せないように太股に手を添えられて上目遣いなんてされたら、誰だって意識してしまう。しかし、だがしかし息子よ、お前は御呼びじゃない。

（息子：呼んだ？）

（大：呼んでない！！）

「ずっと私の事避けるし、永遠亭には来ないし……。――寂しかったんだから。どうせあの子も今日一日は永琳が面倒を見るでしょう。だから今日一日は私と一緒にいなさい。それで一緒に寝ましょう。なんなら今夜は前の続きをしてもいいわよ？」

そのまましな垂れ掛ってくる輝夜にどぎまぎしながら、今夜も一晩耐久の我慢大会が始まるのかと思うと顔が歪んだ。それはもうはっきりと。それに気付いているはずなのに輝夜は引いてくれない。……何で僕なんだろうね、本当に。

結局その日一日、輝夜と囲碁や将棋をして夜には無理矢理同じ布団に沈められた。僕は貝、貝なんだと堅く自分を律して一夜を耐え抜きました。……等身大抱き枕的な扱いだったと思います。詳しくは憶えてません。

◇◆◇◆◇◆◇

～名前を呼んで～

霊夢が1歳を過ぎて自分で歩けるようになってからも、僕らの生活は霊夢のための生活一色だった。でもね、霊夢が自分一人で歩いた時は号泣しました。隣のルーミアちゃんが引くくらいに泣いて喜んで、その日一日は赤飯を炊き続けた。

そして今日は霊夢の初めての人里訪問。転ぶことは多いけどしっかり歩けると判断した僕は、霊夢の人里訪問を立案した。自分がこれからどんな場所で生きて行くのかを勉強させる意味も込めて、これからはどんどん外へ連れていこうと思う。友達は多いほうがいいからね。

そして里前で待っている慧音さんと妹紅に合流してゆっくり、霊夢の後を付いて行っているとある事件が発生した。

「やあと」

「「「……ゑ？」」」

あっちへふらふら、こっちへふらふらとしていた霊夢が振り返って突然何かを言った。何時もの喃語かな？　と思ってみるも、なんだか知っている単語のように聞こえた。

「やあと、れむ。やあと、れむ」

「やあと…？　やあと……やまと、大和！？　霊夢、いま大和って言ったの！？」

にひぃ、と笑顔を見せる霊夢に僕は確信した！　この子は今日！この瞬間！　僕の名前を呼んでくれたんですよ周りの皆さん！　どうです家の子、犯罪的な可愛いさでしょう！？

「やあと、れむ」

「『れむ』　は『霊夢』　のことか。うんうん、えらいぞ霊夢。大きくなったら私の寺子屋で勉強しような？」

「……」

「む、無視か。では霊夢、私の名前を言ってごらん？　けいねだ、け　い　ね」

「やあと」

「……」

「……フッ」

名前を呼んでくれなかったことが余程ショックだったのだろう。慧音さんは地面に手をついて項垂れている。反対に僕は鼻で笑える程

の余裕立ち。『けいね』　ではなく『やあと』　だったからね。お父さんの完全勝利です。

「はは、慧音は嫌われたな。勉強とか言うからだぞ？　……ぅんん。霊夢、もこうだ、も　こ　う。もこでもいいんだぞ……？」

しゃがみこんで霊夢にそう言う妹紅の顔からは溢れんばかりの期待が見てとれる。妹紅が隠れ乙女だとは何となく気付いてたけど、まさかこれ程とは……。妹紅に娘が出来た時にいったいどうなるのか、ちょっと気になるぞ。

「やあと！」

「……霊夢、『もこ』　だ。『もこたん』　でもいいんだぞ？」

「やあと！　れむ！」

「……おい大和」

「なに？　もこたん」

そんなに睨まないでよ。怖いよもこたん！　でもそんな君が新鮮でとても可愛いよもこたん！　胸倉掴まないでよもこたん！　苦しいから！！

「……しつけは、しっかりな」

「これが成果です（ドヤ」

その後はもっこもこになるまで焦がされました。調子に乗りすぎちゃったけど、悔いなんてない。むしろこの傷は名誉の負傷ダ☆

子育て最前線（後書き）

赤ちゃんがどう行動するのか解らないので、ほとんど妄想でお送りしたじらいです。キモイ？　申し訳ないですｏｒｚ　今回ばかりは全力で謝ります。自分の経験したことも多分に含まれていますが、まぁ突っ込みどころ満載です。二度と赤ちゃんの話なんて書くものか…。

さて、結局空く空く詐欺になった私でございますが、次回からはおそらく霊夢３か４か５歳くらい。…適当だなオイ、との突っ込みはいりません。でも霊夢の話にはたぶんならないと思います。妖夢（大）・アリス・魔理沙（小）・紅魔館@咲夜（小）。書きたいネタは沢山あるのですが、それを全部出すことは出来るのやら…。こうやって次に何をするか書いておかないと直ぐ忘れてしまいますからね、私は。ではまた次回

欠片と友人と（前書き）

タイトルは…ネタばれです

欠片と友人と

「やまと」

「なんだい霊夢、厠？」

「……おんぶ」

「よしよし、じゃあおいで。しっかりと肩を持つんだよ？」

「……ん」

「甘えんぼだなぁ霊夢は」

あぁ……生きてるって素晴らしい……。母さん、そりゃ貴方も自分の子供が好きにもなりますよ。今、僕はその気持ちを噛み締めてます……！　こんな可愛い子、放っておけないもんね。

博麗霊夢は今年で四歳になる可愛い可愛い、それはもう可愛すぎる僕の娘。娘の後の（仮）なんてもういらない、この子は僕の娘です。

そんな霊夢が三歳になった頃、流石に巫女と妖怪が暮らすのは駄目だろうとルーミアちゃんが出て行った。出て行ったと言っても、神社が建っている山の山腹に家を構えたから直ぐに来れる距離にはいるんだけども。ご飯も毎回作りに来てくれているし。本人曰く通い

妻。そこまでしてくれるのなら一緒に住んでいたら良いと思うんだけど、神社で暮らしているのは彼女の気分的にも良くないらしい。……妖怪だから？　ちなみに霊夢が大きくなったらそれも無しらしい。

だから神社で暮らしているのは僕ら二人だけ。親子水入らず？　等と思っている。しかし、霊夢を育てている間にある問題が発生した。

それは霊夢が成長していくに連れて、嘗て僕が共に過ごした彼女とそっくりになってきたことだ。

そんな霊夢の姿を見ていると、僕は時々胸が苦しくなる。泣きたくもなるし、どうしようもなく愛おしく思ってしまったりもする。

霊夢は彼女よりも霊力は劣るし、性格も全然違う。僕に似て素直な子だからね。でも霊夢の顔立ちが、まるで彼女の生き写しのように見えて仕方が無い。時には霊夢と彼女がダブって見えてしまうこともあるくらいだ。それ程までに、霊夢と彼女は似過ぎている。外見だけなら、もはや同一人物と言っても過言ではない。一緒に過ごした僕が言うのだから、間違いは無いだろう。

このまま霊夢が大きくなると、僕は霊夢を零夢として扱ってしまうかもしれない。だからこそ僕は娘の後に（仮）　を入れないようにした。そうじゃないと霊夢自身を見れないから。自分に線引きをすることで予防線を敷くことにしたのだ。

そしてこの子が五歳を過ぎたら、僕はこの子の前だけでは絶対に素の自分を出さないことに決めた。良い父で在りたいのもあるけど、他の人とは違う接し方をされているのだと気付いて貰いたいから。君と僕の関係は友人ではないのだ、と。なんならただの変な人くらいでもいいと思っている。……いや、やっぱり近所のお兄さんがいいかなぁ…。

とっとにかく、僕は霊夢をしっかりと育てる。その為には自分の意志なんか二の次、無視すべき事柄だ。心の中ではしっかりと愛して、表面上には絶対に出さない。今まで自分の為に巫女たちを見殺しにしてきた僕だ、自分を殺すことを苦だと思ってはいけないのだ。

「やまと、だっこ」

「はいはい」

でも今だけは、親馬鹿で居させてね。君の思い出の中には残らないようにするからさ――――

でもでも、霊夢が『どうしても』　お父さんとか大和兄さんとか呼びたいんなら吝かでもないけどね!!

◇◆◇◆◇◆◇

～アリスの人形～

右を見たら人形。左を見ても人形。別にこの家には人形しかないわけじゃない。でも見慣れた西洋風の家具よりもやっぱり精巧に造られた人形に目が行ってしまう。

「うん、美味しい。相変わらず良い葉を使ってるね」

「そうね。でも幻想郷じゃ紅茶の葉は貴重だから……高いのよ」

「それをタダで飲ませてくれるなんて、アリスは人間の鏡だよ」

「勝手に入って来た人間の言う言葉じゃないわよ、まったく……」

最近になって漸くアリスとよく会うになった僕だけど、生憎と僕には霊夢の世話という仕事がある。アリス自身も忙しい僕を見てか、それとなく編んだ幼児服を渡して帰るだけなのでゆっくりと話をする機会が少なかった。

「あはは、でもアリスはもてなしてくれたじゃないか」

「ぅ……ま、まあね。私だって薄情な人間じゃないもの」

「霊夢の幼児服もね。ありがとう、助かってるよ」

「……どういたしまして。そう言えば、その霊夢は放っておいていいの？」

「今はお昼寝中。分身も置いてあるから大丈夫」

霊夢も少し大きくなったので、この際アリスとも親交を深めようと思った僕なのであります。まぁ遊び半分、お願い半分と言ったところなんだけどね。お願いと言っても、霊夢を育てている時にふと思ったことなんだけどね。あったら便利になるんじゃないかなぁ、くらいのどうでもいいことなんだけど。

「アリス、出来ればお願いがあるんだけど…」

「なに？　無茶なことは言わないでよ？」

「無茶と言えば無茶なんだけどさ…。アリスの人形を一つ貰えないかなぁ、と」

僕一人じゃ流石に家事はキツイからなぁ……。僕も魔力糸なら扱えるから、アリスみたいに人形を使って家事を分担でも出来たらいいと思っていたんだけど――――

「あの～……アリスさん？　何で僕は人形に槍を向けられているのでショウ？」

「……私もね、理解はしているつもりなの。それに貴方はあの大和だものね、人よりそういうのが多いのも当たり前よね。でも貴方、よくもまぁ本人を前にそんなことが言えるわ」

「へ？」

アリスは何を言っているんでショウ？

……よし、とりあえず落ち着け僕。突いてくる尖った物なんて目に入らないぞ、うん。大丈夫、僕ももう一児の父。何時もはここいらで自爆してきたけどそれは卒業しないとね。なんといっても一児の父だし。

とりあえず僕がアリスに何を言ったか？　内容はアリスの人形が欲しい。つまり、家事手伝いの人形が欲しい。誰が操るのか？　僕が操る。……何も問題ないじゃないか。

「だってアリス以外に人形に詳しい人は知らないんだから仕様が無いじゃないか」

「そう」

「うん、そう」

「一度死んどけ、この変態」

いったい何が悪かったと言うのだろうか。

ぼっこぼこに顔が腫れるまでタコ殴りにされました。しかもアリスは僕が等身大のアリス人形を使って、あーんなことやこーんなことをするつもだったと勘違いしていたらしい。

お人形遊びは趣味じゃないです、ええ。しかもその発想はなかった。アリスのエッチ。

腫れた顔のまま文句を言うと、目を泳がせながらそんな風に勘違いされる普段の行いが悪いと返された。

でも悪いことをしたと思っているからか、傷の手当てはしてもらった。結局人形はくれなかったけどね！　魔力糸の扱いが人形にあってないやらなんやらと言うから、じゃあアリス人形を頂戴と言っておいた。顔を真っ赤にしたアリスに今度は拳で殴られたけどね！　悔いはないね！

人形遣い：アリス・マーガトロイド。魔法と人形を用いた闘い方を主体とする技巧派魔法使い。

――――募集完了

◇◆◇◆◇◆◇

～見える背中～

「シッ！」

「ハァッ！」

剣術三倍段と言う言葉がある。無手の者などは剣を用いる者の三倍の実力を持っていなければ相手にならない、と言う言葉だ。ならば、今私（ようむ）を圧倒している相手（やまとさん）は私の三倍以上の実力を持っていることになる。

――――正直イライラする。

私だって昔に比べたら身体も成長したし、強くなった。料理の腕もかなり上達したと思う。それでも目の前のこの人には未だ手が届かない。拳撃と剣撃。武器を使う私が有利なのは明らかなのに、それでも届かない。しかも口元に若干の笑みを浮かべながら次々と私の剣撃を往なしていく。そんな顔を見ていると、どうにかしてその顔面に剣を叩きこみたくなる。むしろ叩きこませろ。

……決めた、少し無茶をしてでもやってやろう。

そう決めた私はすぐ傍に漂っていた半身を掴んで

「うおりゃぁああ！！」

「へ……うぉわ！？」

そのまま投げつけてやった。許せ半身、君も私なんだからちょっとは貢献してもらわないと。

そんな私の奇行を見て思わず大和さんは思わず声を上げて大袈裟な回避行動をとる。そこに私は今回の模擬戦で初めての好機を見た。

一瞬の思考の内に左手の白楼剣を投げ捨て、代わりに桜観剣の鞘を持ち、その中に桜観剣を納める。

「斬り捨て御免！！」

そして抜刀術の要領で楼観剣を一閃！　狙いはもちろん顔面、と見せかけて首。その鬱陶しい顔を飾り物にしてやる！　と思っていたけど辛うじて逃れられた。けれど残念、私にはまだ左手が残っている！

「ふん……だあッ！！」

「ッ鞘！？　……っ～～～～！」

「一撃……確かに入れましたよ？」

楼観剣とその鞘による二段抜刀術。魂魄流ではないけど、私なりに考えて創り出した一撃。タイミングはばっちしだったにも関わらず、顔面ギリギリの所で神速の鞘は大和さんの腕に止められた。おそらく制空圏の恩恵なんだろうけど……厄介な。もう少しで顔面を殴打できていたのに……。

「ギリギリ！　ギリギリ掠っただけ！　だからノーカウント！　ノーカウントだよ妖夢ちゃん」

「約束通り一撃入れたじゃないですか！　妖夢ちゃんは止めてください！！」

「いーや今のは掠っただけだね！」

「掠ったのも当たり判定です！」

「それなら何人もピチュってるね！　だからノーカウント！」

「そんなの私は知りませんよ！」

私が一撃入れたら妖夢ちゃんではなく、妖夢と呼んで貰う。模擬戦の前にそう言われたから頑張って一撃入れたのにこの始末、どうしてあげよう。

「妖夢妖夢～、あまり大和さんを苛めないであげてね～。彼、貴方に追い詰められて切羽詰まってるから～」

「な！　西行寺さん、僕は切羽詰まってないです！　よゆーですよ、よゆー」

大和さんは手をカクカクとぎこちなく動かして余裕のアピール？

をしているのだけど……正直それが本当かどうか解らない。まぁ……大和さんのことだから本当に余裕なのかもしれないけど。なんせ私が最初に立てた目標だ、数十年で追いつかれて貰っても困るもん。

「まぁいいですけど。師から受け継いだ技ばかりで私みたいにオリジナル技を生み出さない大和さんなんて、もうすぐにでも追い抜きますから」

だからちょっと挑発しておく。簡単に私に追いつかれないでくださいね？　と。

「……そう、だね。オリジナル技か……砕月もそうだったし、久しぶりに頑張ってみるか……。妖夢ちゃんの言う通りだね。師匠たちの技だけじゃ師匠たちを超えられない。自分だけの技を創らないとね！」

深く考え込みながらブツブツと、あーでもないこーでもないと思案している。……要らないことを言ったかもしれない。これでまた一段と背中が遠くなるかもしれない。そう思ったけど、何故か私は大和さんが強くなるかもしれないと思うと嬉しかった。

でも絶対に追いつく。今回のことで少しは背中も見えたことだし、私だって出来るはず！　見てて下さいおじいちゃん、幽々子様。私は頑張ります！

「ホントにあぶなかった……。妖夢ちゃんめ、滅茶苦茶強くなってるじゃないか。あまりの成長と実力に僕ももう笑うしかなかったしね…。実際に一太刀入れられたし、正直苦しかったからなぁ。――――もう一度鍛え直そう。言われた通り、オリジナルも含めてね」

幽人の庭師：魂魄妖夢。楼観剣と白楼剣の二刀を使う剣格

――――募集完了

欠片と友人と（後書き）

遅くなりましたじらいです。まぁこれからはこのスピードになるかもしれません。話も佳境に入って来ますし、後のこと考えると下手な進行は出来ないので。頭の中で展開を妄想してたら遅くなりましたｗ　お陰でネタ帳と称したメモ帳ｔｅｘが埋まる埋まる…うへぇ、全部は出来ませんよｏｒｚ　もちろん奇跡の魔法やらなんやらも考えてますが、未だに最終決定じゃないんですよねぇ…。大方は決まっているんですが。

タイトルはネタばれ、本編にも完璧にネタばれが入っています。正直なんにも無しに奇跡の魔法を展開だ！　大和最強だ！　ヒャッハー！　な感じでもいいじゃないか私も疲れたよ…と弱音を吐く頭に喝入れてます。出来ればこれからは熱い話にしたいですね。

次回は魔理沙編。出会いから始まる男女の第一種接近遭遇まで…第一種接近遭遇って何です？　とりあえず魔理沙編（小）です。

小さな大ファン

魔法の森の入口近く。その場所にあった僕の家は改装され、香霖堂と名付けられた店と代わっている。店主は羨ましいを通り越して妬ましい程に身長の高い森近霖之助くん。霖之助、と呼び捨てにしてもいいほど僕の方が年上なんだけど、身長の差のせいか呼び捨てにするのは憚れている。

「……霖之助くん」

まぁそんなことはどうでもいい。今日は目の前で額から汗を流しているこのイケメンに大切な用事があって来たのだから。

「なんだい大和君」

「まだ此処の家賃払ってもらってないんだけど」

そう、この家はタダであげたわけじゃないのだ。自分の店を持ちたいと言っていた霖之助くんに僕が家を売ってあげた。霊夢を育てることで家を開けっぱなしにするからほとんど投げ捨てる勢いだったけど、それはそれ。初めての商売相手に僕がなってあげたのだ。

「……そうそう、この前面白い服を手に入れてね。黒色の『じゃー

じ』　と言うものなんだけど、君の髪の色ともすごく合いそうなんだ。どうか着てみてくれないか？」

こ奴め、今日も物で買収するつもりか。この前は変な箪笥だったっけ？　……ふん、そんな物で僕を買収できるなんて……

「お、すごく動きやすいねこの服。けっこう丈夫そうだし、魔法を掛けておけば十分戦闘服としてもやっていけそう」
「そうだろう、そうだろう！　君の為にほつれたところは直しておいたからそのまま着て帰ってくれて構わないよ！」
「このまま帰れ？」
「いやぁ……今回はそれで許して欲しいね」

むぅ……今回は良いもの貰っちゃったからなぁ。それに僕も鬼じゃないし……鬼になれるのなら成りたいけどさ。使用が無い、今回はこれで許してあげ…れないね、僕だけ新しい服だったらあの子たちに何言われるか解ったもんじゃない。

「霖之助くん、ちょっとお願いがあるんだけど。聞いてくれたら今日のところは帰ってあげるのも吝かじゃないよ？」
「素晴らしい脅迫どうもありがとう。それで、僕に何をさせるつもりだい？」
「子供用の浴衣を二着、新しい巫女服を一着用意してもらえない？」
「浴衣は今度の縁日用だろうけど二着もかい？　巫女服は霊夢の分だろうけど」

「浴衣はルーミアちゃんと霊夢の分だよ。巫女服についてはまぁ…
…そろそろあの子も自分置かれている立場も理解しないといけない
からね。酷だけど、それが博麗の巫女の在り方だから」

あの子ももう8歳になる。軽い修行は始めているけど、そろそろ次
の段階に進まないとならないから。だから僕も心を鬼にして霊夢と
向かい合う時期が来たということだ。

……駄目だなぁ、僕は。出来ることなら全部放りだして霊夢を育て
ていたいなんて思って。全部自分の捲いた種なのにさ。

でもそんなことが出来るはずもないし、許されるわけもない。だか
ら今回が最後。僕が表立って霊夢を可愛がって一緒に楽しめる最後
の機会に……本当にしたくないです、はい。これからも手を繋いで
歩きたいし、おんぶしたいし抱っこもしてあげたい。でも最近僕に
甘える数が少なくなって……うぅ……可愛い子には旅をさせろだな
んて嘘だよぉ……。

できることなら一生可愛がって面倒見てあげたいです。……霊夢が
結婚したら？　させるわけないじゃん。そんなふてぇ野郎は全力で
潰す！　見敵必殺！　父親は娘を悪漢から守護するノデス

「……君も大概親馬鹿だね。」
「失敬な。子煩悩なだけだよ」

じゃかあしい！　家の霊夢は嫁にはやらん！　絶対にやらん！！

そう言うこともう無いだろう。僕と霊夢の関係は親子でも友人でもなくなるのだから。

「……まぁいいさ、浴衣については明日にでも取りに来るといい。君は運が良いよ、何故か子供用の二着が余ってるからそれを用意しておく。外の世界の流行りモノだから期待して待っててくれ。巫女服は時間が掛るけど、それでもいいかい？」

「それで大丈夫、全部任せるよ」

「了解。そうだ、帰りに霧雨道具店に寄ってくれないか？」

「…？　何かあるの？」

「君の大ファンがいるんだ。会ってあげてくれ」

ほぅ……僕に目を付けるなんて、その人は見る目があるね！

「わかった。じゃあ今から寄って帰るよ。じゃあね」

「ああ、気を付けて」

霖之助くんに背を向けて香霖堂を出る。すると、真っ先に目に入るのは魔法の森だ。可笑しな植物やふざけた魔法生物がひしめく正に魔境と言える場所。貴重な生物が多く、魔法使いにしてみれば夢のような場所だ。だからアリスなんかもこの森に住んでいる。

ここまで来たんだし、また紅茶とクッキーを御馳走になりに行こうかな？

そう決めて空に浮かぶと、森からアリスの魔力がこちらに向けて近づいて来ているのがわかった。残念、紅茶とクッキーは次の機会になりそうだ。

「ご機嫌よう、大和」
「ご機嫌よう……じゃないって、なんで会っていきなり『さようなら』　なんだよ」
「貴方に会うと碌なことにならないじゃないの」
「相変わらず酷いね。友達の少なそうなアリスを思って会いに行ってるのに」
「お世話様、間に合ってるわ」

手をひらひらと振ってさっさとどっか行けとアピール。そんな嫌そうな顔されても何処にも行かないよ？
それにアリスはそう言うけども、ずっと森にいて魔法を研究しているだけなら対人関係は絶望的だと思うんだ。それに魔法使いって一人が好きな人が多いし。僕は嫌だけど。

「でもアリスが出かけるのって珍しいよね。……何処行くの？」
「言ったら付いて来るだろうから言わないわ」
「そこまで解ってるのなら、出会った時点で諦め付いてるんじゃないの？」

一度天を仰ぎ、地に向かって溜息を吐かれた。そこまで嫌なのか、それとも嫌なフリをしているのか……。ま、答えは解っているんだ

けれども。それにそんなに会ってないのによく僕のことを理解してくれているようで……まだまだ甘いけど。不肖、この伊吹大和、狙った獲物は逃がしません。しつこさに定評のある大和さんですからね！　とは文の言だ。

「……時々、何故か貴方を殴りたくなるわ。別にムカついたとかじゃなくて、無性に」

「僕をサンドバックにしないでね！？」

「等身大のサンドバックでも作ろうかしら……」

もちろん貴方がモデルね、と言っているけど、アリスは解っているのだろうか。そんな物を作ったら、ずっと僕がアリスと一緒にいるのと同義なんだけど。リアル人形なだけに。

「まぁいいわ。とりあえず行きましょう」

「お、観念したの？」

「どうせ渋っても無駄だしね。時間は有効に使わないと研究も進まないわ」

「せっかく長命な魔法使いなんだから、じっくりとやっていけばいいのに」

「じっくりでも急いでも結果は変わらないの。それに長命だからと言って惰性で生きてたら、それは死んでるのと同義よ。私は生きてるの」

それは同感。まだ心が死んでない内にやっておけることはやっておきたいし。せっかく手に入れた不老長寿、有効に使わない手はない

からね。

「ところで何処に行くの？」

「霧雨道具店よ。今度の縁日で人形劇をする材料を買いに行くの」

「人形劇…？　今ある上海とか蓬莱とか使わないんだ？」

「上海たちも使うけど、衣装がいるのよ。晴れ舞台なんだからおめかししないとこの子たちも可哀そうでしょう？」

◇◆◇◆◇◆◇

僕と霧雨道具店との付き合いは長い。一郎さんが婿養子として入った頃からの付き合いで、僕が作った魔道具を買い取り続けて貰ってかれこれうん十年にもなるだろう。主に魔法の箒を売っていたけど、最近はアクセサリーなんかを売ろうと育児の傍らに画策している。ルビーとかトパーズに障壁を自動で展開できる物なんか作った日には僕も小金持ちに違いない。錬金術って、お金になると思うんだ！

「せんせー、魔法を教えてよー」

「いや、ね？　魔法は難しいんだよ……？」

「そんなことないよー。なーせんせー、別に教えてくれるくらいいいじゃんかー」

そんな霧雨家とも一郎さんが亡くなってからは関係が薄くなった。

とは言ってもあの頃が異常なまでに深い関係だっただけなんだけどね。だから今日は僕の大ファンがその霧雨家にいると聞いて、一郎さんみたいな子だったらどうしよう？　と店の前に着いて初めてビクビクしていた僕。でも実際は一郎さんなんかよりだいぶマシな子で、かなり問題アリな子が待っていた。

「あのね、魔理沙ちゃん。僕の魔法は特化しすぎて教えるとか出来ないの。解るかな？　考えるな、感じろ。そう言われたら解る？」
「わかんない！」
「アリス先生！　チェンジで！！」

霧雨魔理沙。霊夢と同じ歳くらいの女の子だけど、無口な霊夢と違ってよく喋る。店に入るとすぐ目に入った鮮やかな金髪の女の子だったけど、始めは店に訪れた僕らと一瞥するに留まっていた。ところが、アリスが僕の名前を呼んだと同時にこちらに駆け寄って『伊吹大和？』　とクリクリした目を向けて尋ねられた。

突然そう聞かれた僕もちょっと驚いたけど、霧雨家の子供だし少し可愛がってあげようと思って自己紹介をした所、魔法を教えてと言い寄られて現在に至っている。可愛がってあげるつもりが、困惑させられてます。流石穢れを知らない子供パワー、汚くなった僕にその純粋無垢な姿は目に痛いです。

そんな悶え続けている僕はアリスに救助を求めた。求めたのだが……

「店主、この生地はいくらかしら？」
「――――でどうでしょう？」

「ちょっと高いわね…。――――でどう？」
「アリス無視しないでー！？」
「なーせんせー、いいだろー？」

我関せずを貫くアリス。そして申し訳なさそうにする店主。申し訳ない顔をするくらいならごねる娘さんをどうにかしてくださいよ。

「せんせー、この箒使ったら飛べるの？」
「そりゃあ魔力が透る木を使ってるから飛べるけど……ってこらこら、何やってんの」

それを聞いた魔理沙ちゃんは木に跨ってフンッ、と顔を真っ赤にさせる勢いで力を入れている。なんて言うか、その姿は可愛いんだけどちょっと馬鹿らしい。

「……せんせ、飛べないよ」
「そりゃあ魔力を込めないと飛べないし、飛行用に作って無いから初心者には尚更かな」

ぷぅ～、とふくれっ面になった姿に僕も苦笑するしかなかった。子供はいいね、楽しみが簡単に出来て。僕も子供の頃は楽しかったから、なんだか少し懐かしく感じるよ。――――せっかくだし、少しだけならいいかな？　僕の大ファンらしいからサービスしてあげよう。うん、それがいい。

「魔理沙ちゃん、その箒持って外に行こうか」

「教えてくれるの！？」
「フッ、君は運が良い」
「やったー！！」
「見せてあげるだけだけどね！」
「……えぇ～！？」

喜びが一転、ぶーぶーと文句を言いながらポカポカ叩いてくるのを見ているとついニヤけてしまう。最近霊夢がそこまで甘えてくれないからか、なんだかすごく癒される。このくらいの子供はやっぱりこれくらい元気があった方がいい。霊夢は良い子だけど、感情の起伏がそれほど見られないからなぁ…。

……文句の中からケチやらドケチやら後から聞こえてくるけど、そんなこたぁ僕には関係ないのです。子供に何か言われて腹を立てるような大人は、真の大人とも紳士とも言えないのです。何せ僕は紳士だからね。

「どけちー。あほー」

そう、例え何を言われようと――

「へたれー、ぼけー。ちびー」

一児の父あり、真の紳士である僕は――

「せんせーの、えとなんだっけ……？　え～とたしか……ろりこん！」

「なんだとぅ!?」
「うわ、せんせーが怒った!」

怒るよ!　流石にそれは怒るよ!　誰だこの子にそんな言葉を教えたのは!?

「ご先祖さまの日記に書いてあった。せんせーは『たいへん』…?で『ろりこん』　だって」
「……それは、誰の日記かな?」
「いちろーって人と、その弟だって。お父さんが言ってた」

やっぱりか!?　やっぱりなのか!?　……あんのクソ野郎どもめ……死して尚、僕を陥れようとするか…!　今度還ってきたら二度と還りたくなくなるくらい痛めつけてボッコボコにしてやる。霊体とかそんなの関係ない、魔法使いの底力を見せてやる……!

「わたしはその日記でせんせーを知ったの」
「……え?」
「日記に書いてあった。最高の友達で、最強の魔法使いだって」
「――――――そっか。……まったく、あの人達ときたら……」

どこまでも人のことを馬鹿にして…

「……?　せんせ、目が痛いの?」

「――ああ、うん、何でも無いよ。……そうだ、魔理沙ちゃんは空を飛んでみたい？　魔法は教えられないけど、空なら連れて行ってあげる」
「うん！　その後で魔法を教えてね！」

いや、だから教えるつもりは……まぁいいや。今はこの子にお礼をしないとね。

「まずは僕が箒に跨ります」
「はーい！」
「魔理沙ちゃんは僕と向かい合う様に跨ります」
「はい！」
「空は風がきついからしっかり掴まってるんだよ？　じゃあ……しゅっぱーつ！」
「しゅっぱーつ！」

短い腕で僕の身体に抱きついた魔理沙ちゃんを気遣いながら、僕はゆっくりと地面を蹴った。澄みきった蒼い空だ、きっとすごく気持ちいい風が吹いているだろう。

◇◆◇◆◇◆◇

「ありがとう店主。予算内で買えたわ」

「アリスちゃんにはお世話になってるからね。次も頼むよ」
「解ったわ。やま――――あれ？　何処に行ったのかしら？」
「家の娘と箒持って出て行きましたけど……気付いてなかったんですかい？」

流石に気付いてはいたけど、そこまで気にしてなかっただけよ。

「――――――！」
「……！！」

「外で遊んでいるのかしら…。店主、また来るわ」
「待ってますよ」

大和、あの子に何もしてないかしら？

◇◆◇◆◇◆◇

「せんせースゲー！！」
「わっはっは、どんなもんだい！」
「凄いせんせ！　魔法教えて！」
「わっはっは！　断る！！」

空中散歩をしている間、魔理沙ちゃんはずっと歓声を上げっぱなしだった。最初こそ高度に怖がって震えていたけど、少し経つと自分から身を乗り出すようにするので僕の方が肝が冷えたけど。

楽しんで貰えて良かった。十分に散歩を堪能して貰って着地した後、僕を待ち受けていたのは思っていた通りのおねだりの嵐だった。

「せんせ、わたしも空が飛びたい！」

「そう言われてもなぁ…」

この子の保有魔力は人間の子供にしては多い方だけど、それで通用するのかと言われれば答えはＮＯだ。そりゃあ単に空を飛ぶだけなら何も問題ないだろうけど、好奇心の多そうなこの子なら必ず次の段階に進みたくなるだろう。そうすると僕のように必ず人間の限界に突き当たる。それを越えさせるのが師の役割なんだろうけど……正直僕には出来ると思えない。ふざけた方法で強くなった僕が思いつく修行法なんて右へ倣えくらいだし。そんなの、この子が耐えられるわけもないだろうし。

結局、下手な力は怪我の元にしかならない。魔法を教えるにしても、武術を教えるにしても中途半端に教えるのだけは絶対にしたら駄目なことだからね。

「飛行魔法くらいなら別にいいじゃない。その後の事はその後で決めさせれば」

「アリス！？」

「何よ、別にそれくらいなら貴方でも教えられるでしょう？」

おおー！　と声を上げているけど君は解ってくれるだろうか。僕が修得した時はご丁寧に空中から落されただけだからね？　魔力制御できれば大丈夫だろうとか無茶苦茶言った人達に殺されかねなかった状況だったからね？　その辺解ってくれてます？　むしろ体験してみる？

「それよりも大和。今度の縁日で私に付き合いなさい」

「……へ？」

ここおこおこ!?　これはデートの御誘いなのかッ!?　ならば僕は受けて立つしかない！　真正面から受け取って抱きしめてやんよ！

「人形劇の背景にも魔法を使うんだけど、貴方の幻術ならそれも楽でしょ」

「そんなことだろうと思ったよチクショーッ!!」

ケッ、どうせただの幻術馬鹿ですよ。背景担当ですよ。……言ってて悲しいね…。

「せんせー達、今度の縁日で何かするの？」

「人形劇をするの。魔法が好きなら見に来れるといいわ。そこで黄昏ている馬鹿の特一級品の魔法も見られるから、たぶん楽しいんじ

ゃないかしら？」
「おおー！　せんせーの魔法、楽しみ！」
「人形劇はどうかしら？」
「びみょー」
「……貴方、女の子よね？」
「そうだよー」

魔理沙ちゃんと楽しく話しちゃってさ、僕の扱いとは大違いじゃないですかアリスさん。その優しさの半分でも向けてくれると救われるんだけど。

「せんせ、縁日一緒に回ろう！」

いや、僕は霊夢とルーミアちゃんと回ろうかなー、なんて思って……うん？　そうだ、霊夢も友達が出来ればもっと明るくなってくれるかも……。よし、魔理沙ちゃんには霊夢と友達になって貰おう。……霊夢断ったりしないよね…？

「大和、他にも誰か誘えば？　……この子に世界と言うものを教えるのに、これほど良い機会は無いかもしれないわよ」
「……僕は時々、アリスが優しいのか残酷なのか解らなくなるよ」
「良くも悪くも現実主義者なのよ、私」

まぁアリスの言う通りかもしれない。これで怖気づいて引き下がってくれたら一番いいんだけど、この子は無理かなぁ。アリスはああいったけど、子供には二種類いる。本能で危険を察知して身を引く

子と、そんなものは気にせず進む子。この変は子育てして気付いたんだけどね。

まぁこの子は後者だと思う。なんかどっかでこんな無鉄砲な子がいたような気がする。その子にそっくりなんだよね、誰かはしらないけど。

「それで大和、誰を呼ぶの？」

「そんなの、決まってるじゃないか」

ニヤリと笑ってアリスを見ると、顔を少し歪められた。残念だねアリス、君がそんな事を言うから悪いんだよ？　言わなかったら僕だって、こんなことしようとは思わなかったんだからね？

「裁判長から吸血鬼まで、全員呼んでの大縁日だ！」

「あぁ……私の大馬鹿。こいつはこういう奴だったのを忘れるだなんて……」

紅魔館、白玉楼、妖怪の山、地獄、あと出来れば永遠亭。人里が吹き飛ぶかもね？

小さな大ファン（後書き）

どうしてこうなった！？　と、頭を抱えているじらいです。最近書けません。本当に書けません。これも3回くらい書き直しましたｏｒｚ　本当なら縁日とかしないはずなのに、ちょっとやってみようかなと手を出してしまいました。おまけに初めて大量にキャラが出るし…一人称でどこまでできるのやら不安に思います。

書けない時には『人には言エナイヨ』な話が頭に浮かんでくる私はもう末期。ＰＣのメモ帳が大変粗ぶってますｏｒｚ　しかもつい最近ＴＶでやっていた冬季うつの項目を全て網羅しているなんて…どうなっているんでしょうね。私はうつじゃないです、変態ですとでも言えと？

とまぁ冬に向けて更に頭が冷えるどころか沸騰しっぱなしの私は放っておいて、次回は縁日です。全員でます。全員です。萃香たちは出ませんがね！　とりあえずそれぞれの場所から数人は出て貰います。正直自信がないので縁日の話は無かったことに…と冗談が言える間に書いておきます。それでは

あ、魔理沙のモデルは某映画の鈴木オートの子供ですｗ　解る人いるかな？

波乱縁日：その一

――急に押し掛けてごめんね。ちょっと伝えたいことがあるから分身を介して話をするよ。

明後日、人里で縁日が行われるのを知ってるかな？　夜店や花火もあるし、僕も人形劇の手伝いをするんだ。出来れば一緒に楽しみたいと思っているんだけど、駄目かな？　ああ、ちなみに僕の分身は僕の友人全員の所に行っているから、初対面ばかりの大所帯になるかもしれないけど勘弁してね？

それで参加するに当たって守って欲しいことがある。まずは人里のルールを破らないこと。これ絶対。後は縁日に相応しい格好をして欲しいことくらいかな。じゃあ明後日、人里の広場で会おう――

「さぁ準備に取り掛かるわよ」
「もちのろんだよお姉様」
「縁日に相応しいのは……浴衣ね」
「あら、パチェも行くの？」
「貴方達だけで行かせるのが心配よ。美鈴やあの子は行かせないつもりなんでしょう？」
「連れて行ってもいいのだけど今回は見送るわ。まだあの子の調子が良くないし。小悪魔は？」
「留守番。アルフォード様は？」
「パチュリー、お父様が行くわけ無いじゃん」
「言ってみただけよ、妹様」

「イナバ、服を用意なさい」
「駄目ですよ姫様。私たちは隠れて生活しているのですから」
「助けてえーりん」
「確かに最近は優曇華が来てマシになったとはいえガス抜きも必要かしら……。輝夜、行きたいのなら別に行っても構わないわ。ただ変装はしてもらうけど」
「ししょうの持ってる薬、新薬うさ!?」
「さあ、どうする輝夜？　優曇華？」
「望む所よ！　……イナバ、毒見」
「私ですか!?」

「華扇様も行くのですか？」
「もちろん行くわ。賑やかなのは嫌いじゃないの」
「私も大和様にお誘い頂いたのでご一緒させてもらいます」
「やれやれ、店を出す側になっていたにとりが可哀そうに思えてき

ますね」

「映姫様はどうするんです？　あたいは参加したいんで、休みが欲しいんですけど」

「駄目です」

「うげぇ……（これは当日はサボり確定だね）」

「とは言っても貴方のことです。当日はサボるつもりなのでしょう？」

「そ、そんなことはないですよ！？」

「……まぁいいです。私だけ参加して貴方だけ働かせるのも平等ではありません。その日は休日としましょう」

「さっすが映姫様！　話の解る上司を持ったあたいは幸せですよ！（てか、ちゃっかり自分は行くつもりだったんですかい……）」

「まったく伊吹君は……。どれだけ私に苦労を掛けさせれば気が済むんだ……」

「ははっ、そう言うなよ慧音。あいつの知り合いだ、どうせ碌でもないやつばかりなのは察しが付いてるんだろ？」
「だから胃が痛むんだ……。この痛みを少しでも和らげるために…
…まずはお前の着せ替えをさせて貰おうか…！」
「ちょっと待てなんでそうなる！？　私は浴衣なんて着ないぞ！？
持っても無いし！」
「そんなことが許されるとでも思っているのか？　縁日だぞ？　それに相応しい格好はして貰おうか。なに、妹紅だって器量はいいんだ。きっと絵になるさ……」
「ちょ、待って慧音！？　無言で服を剥ぐな！？」

「え～と、浴衣はどこにしまったのかしら？」
「ちょっ、幽々子様は動かないで下さい！　片付けが増えますから！！」
「え～。私もちょっとは妖夢の役に立たないと駄目でしょう？」
「じっとしてて下さい！！　浴衣は私が探してきますから！！」
「まぁあの子ったら、あんなに楽しそうにしちゃって。そんなに嬉しいのかしら？　……せっかくの縁日だし、お友達にも声を掛けておこうかしら。きっと呼ばれないことに悲しんでるでしょうし」

みたいな感じになってればいいんだけどなぁ……。皆さん参加してくれるだろうか？　参加してくれなかったら……僕に人望がない証明になったり？　い、いやいや、何を仰るお馬さん。みんなただの人見知りなだけかもしれないじゃないか。うん、そうだ。そうに決まってる。

などと考えるのもいいんだけど、とりあえず――

「――るーひやひゃん、いひゃい」

「ぶぅ……私と二人で回ってくれる約束だったのに……」

頬を抓らないで！？　案外痛いから！！

「この口が勝手に言ったのか？　悪いのはこの口なのか？」

「いひゃひゃひゃひゃ！？」

「もう……少しは乙女心を理解して欲しいの…だッ！！」

「ブャッッツ～～～～～！？」

最後に一度、捻じるように引っ張られた頬に思わず声を上げてしまった。ふぉぉ、抓られるだけでこんなに痛いとは……。

「ご主人さまの大馬鹿」
「…ごめんごめん。でもルーミアちゃん、霊夢もいるから元は三人だよ？」
「おチビは数に入らないのだ」

博麗神社の境内で掃除をしている霊夢を傍目に、ぷんぷん怒っているルーミアちゃんを宥める。膝の上から可愛く睨んでくるこの子に悪いことをしたなぁ、と苦笑しながら謝っているけど、どうも許してくれない。確かに今回は僕が約束を反故にしたからなぁ……。

「だいたいご主人さまもご主人さまなのだ。私に何の説明も無しに知り合い全部集めるなんて、何処に敵の目があるか解ったものじゃないのに」

それは大丈夫だと思う、と、頭で考えても口には出さない。紫さんは誰かに頼るなんてことはしない。いや、頼れない。文に頼んで調べて貰ったここ数百年の幻想郷では大規模な妖怪同士の戦闘は起こっていない。にもかかわず、強力で所謂危険分子と思える存在はその姿を消している……らしい。

まぁ……十中八九消されたんだろう。もしくはその頭脳を持って追い詰め、幻想郷から出て行かざるを得ない状況に追い詰めたか。

その時によく姿を見せていたのが九尾の狐だったと言う話があるのだから、それは藍さんで決まりだろう。それを知った時は『やっぱり』　と思ったよ。陰謀に長けた紫さんは決して表に出て来ないん

だってね。

あの人たちが今まで誰かと協力しているところを見てないし、協力するつもりも必要もないんだと思う。何せ今まで無敗の完璧者だし、あの人自身が他人を信用してないのだから。結論を言うと、あの人たちは二人だけで行動をしているってこと。調べてくれた文もそれで間違いなしだと言っていた。

だから僕と紫さんの大きな違いは――――っと、そんなことは今関係ない。どうせ紫さんは来ないだろうし、今の僕にはこの機嫌の悪い悪友を宥めないといけないからね。

「まぁそう言わずに。ルーミアちゃんの為に浴衣を用意したんだ」

右手をごそごそと、何もない空間で動かして感触で浴衣を探す。ルーミアちゃんの怒りを鎮めるためと言ったらなんだけど……っと、この感触は魔道書だから違う。こっちの柔らかいのだ。

「はい、黒色の浴衣。ルーミアちゃんに似合うと思うな」
「わぁ……！　ありがとうご主人さま！！」
「そんな大層な物じゃないけどね、どう致しまして」

渡した浴衣に目を輝かせている。どうやら気に入って貰えたみたい

だ。……ってこらこら、感極まったとしても抱き着くんじゃありません。そこは霊夢のポジションです。あ～、猫みたいに頬擦りしないでくれます？　どうも反応に困ります、はい。一応頭は撫でておこう、この可愛い奴め。

それにしても黒を用意してくれるなんて霖之助くんも解ってる。何時も黒色の服を着ているルーミアちゃんだ、きっとよく似合うだろう。あ、ちなみに霊夢は赤基調の浴衣。娘の初の浴衣姿、お父さんはちょっと楽しみだったりします。

「霊夢ー、少しこっちにおいで」
「……？　わかった」

掃除中に呼ばれたからか、コテンと首を傾げながら近づいてくる霊夢。身の丈よりも大きい箒を持ってトコトコと歩いてくる姿が可愛くてもう……抱きしめて世界の中心で叫びたいです。僕の娘可愛いでしょー！？　って。

「今度の縁日、一緒に回ろっか」
「……別にいい」
「はうっ！？　で、でも縁日は楽しいんだぞー？　霊夢、お父さんがりんご飴を買ってあげよう！　わた飴もつけるよ！！」
「いらない。やまとに迷惑掛けられないから」

（ルーミアちゃん……）
（解るよご主人さま……。今夜は私が慰めてあげるね！）

（ちょっくら首吊ってくる）
（ちょ！？）

お父さん、本気で泣いてしまいそうです。

――拝啓、母さん。息子は、親と言うものが解りません。でも次に会った時は、出来るだけ甘えてみたいと思います。

◇◆◇◆◇◆◇

「やってきました縁日。いやぁ……何時もに増してすごい活気だね」
「そうだね。おチビ、大丈夫なのか？」
「大丈夫。やまとが手を握ってくれてるから」

うむうむ、お父さんがいる限り霊夢には指一本触れさせんぞ。反対側には当然とばかりにルーミアちゃんが握っている。まぁ今日は保護者だからね、これくらいは当然だ。

「などと考えながらも、自慢の娘に顔を緩める大和さんなのであった。その顔いただき！」

パシャッ。光と共にそんな音がした。犯人が誰かは言わないでもいいだろう。天狗で親友、射命丸文だ。

「どもども、今夜はいい絵が撮れそうですねぇ」
「大和、自分でそれなりの格好と言っておいてそれは何です？　黒装束は祭りに似合いませんよ？」
「大和様！　お誘いいただきありがとうございます！」

「華扇さん、これも一応流行りの『じゃーじ』　と言うものらしいです」

そう言った華扇さんも含め、三人とも見事に浴衣を着こなしている。むむむ……何時もと違ってすごく綺麗に見える。特に文、まるで別人だね。椛は脇が出てないし、華扇さんは……まぁ予想通りかな。良く似合ってる。

「フフン、天狗等に見惚れている暇はないわよ？　大和」
「えへへ～、似合う似合う？」
「こうやって顔を合わせるのは久しぶりね」

「お、レミリア達も来てくれたんだ。……まさかパチュリーが来るのは予想外だったけど」
「悪い？」
「いや、歓迎するよ。紫の浴衣も良く似合ってる」
「そ……ならいいわ」

そこで若干でも顔を染めるとか恥ずかしがるとかしてくれたら、僕も嬉しいんだけどなぁ……。ま、パチュリーだからそれもないか。もっと突っ込んだら恥ずかしがってくれるだろうけど。

「それよりも大和、どう？」
「フランも！」
「……うん、二人とも良く似合ってる」

蒼に紅、鮮やかな衣装を着こなすのは流石スカーレット家の娘と言ったところか。背伸びしているように見えなくもないけど、それでも似合っているのは確かだ。

「あらあら～、もう大勢集まってるのね～」
「大和さん、誘われたので来ました」
「西行寺さん、来てくれたんですか！　ありがとうございます！　あと一応妖夢ちゃんも」
「一応ってなんですか、一応って」

実は一番浴衣姿を期待してたのは西行寺さんだったり。初めて会った時、あまりの美しさに言葉を失った経験があるからね。とても楽しみでした。

「私だって一人前の女です！」

「いやぁ……馬子にも衣装って言わない？」
「……斬りますよ」
「降参でーす」

長刀を抜き去った妖夢ちゃんに両手を上げて降参宣言。目がマジですよこの子、くわばらくわばら。……あと後に控えてるみなさーん、今日は縁日だから妖夢ちゃんに向かって殺気飛ばさないでくださーい。この子も友達だから、可愛い冗談なんですって。

――集めておいてなんですが、これからの展開に不安で胃がねじ切れそうです。お願いだから暴れないでね？

でもまさかのダークホース現る、かぁ……。すごく似合ってるんだよね、妖夢ちゃんの浴衣姿。だから虐めたくなっちゃうんだけど。何時もと違って髪の毛をサイドで縛っておめかししちゃって……。

「だいたい貴方と言う人は「似合ってるよ、うん。悔しいほどに」
……ぁ…ぅ……な、ならいいです……」

だから思ったことをそのまま言ってみた。そしたらシュゥ……と頭から湯気？　を出し、俯きながら剣を納めようとしているけど、上手く鞘に入らないようでカチカチと虚しい音だけが響いている。

……え？　何この可愛い子。……え？　何で皆さんニヤニヤしてるんでせぅ？　レミリャ殿、視線が痛うございます。妹君、爆笑しながらレミリャ殿の背中を押さないで下さい。その一押しで僕はもげ

ます、たぶん。あとルーミア様、指が砕けそうなので力を緩めて下さい。ホントお願いします。

納まらない痛みに顔を歪めていると、少し遠くから歩いてくる四人組が見えた。慧音さんと妹紅と……鈴仙？　あと一人は……え！？

「すまない伊吹君、待たせたな」
「……」
「……」
「アハハ……久しぶりです、大和さん」

今、目の前では奇跡のバーゲンセールが起こっております。まず一つ目は人里の姉貴分こと妹紅。たぶん慧音さんに無理矢理着せられたんだろうけど、信じられないほど乙女臭がしている。流石は元貴族、普段からは信じられないほど和服も似合う。

そして次が酷い。感じる気は正しく輝夜なんだけど、その格好が酷い。どんな化学反応が起きたのかしらないけど、背丈が霊夢と同じくらいにまで縮んでしまっている。オマケに頭からはウサ耳が生えている。兎に変装したつもりなのだろうか。隣にいる鈴仙も同じように背が縮んでいるから、きっと変装なんだろう。そうじゃないと、僕は自分の頭が信じられないよ。

そして最後はその二人が手を握っているということだ。……解って

くれるだろうか？　あの仲の悪い二人が手を握っているのです。これはもはや、天変地異の前触れと言われてもおかしくない状況だ。でもお互いに足を踏み合いっこしてるから少しは中和されてハルマゲドンは起きそうにないかな？　良かった良かった……って、良くねえです。輝夜さん、あんた隠れてないでいいんですか！？

「あ〝ー、こういう時ってどんな顔すればいいのか解らないね」
「笑えよ、大和」
「ぶぅあっはっはっはぁっ危なッ！？」

この状況で何をどうすればいいのか解らない僕はそう聞いてみた。だったら笑えと言われたので全力で笑ってみると、特大の炎が飛んできた。いきなり死ぬかと思ったよ妹紅！？

隣にいるルーミアちゃんが消してくれなかったら、今頃両手が塞がった僕は丸焦げになってた所だよまったく……。お礼を言おうとルーミアちゃんを見ると、目をまん丸にして首を振っていた。……え？　反対側だって？

「やまと……大丈夫？」
「……うそん」

今の、霊夢がやったの？　周囲を見渡してみると、誰もが霊夢を興味深そうに見ていた。八歳にも満たない子が、全力には程遠いとは言え、それなりに力の篭った炎弾を打ち消したのだ。それも放たれてからの僅かしかなかった時間で。

「……あ～、皆にもこれから関係するだろうから、とりあえず紹介しておくよ。今代の博麗の巫女、博麗霊夢。どうぞよろしく」

ルーミアちゃんに握られていた手を放してもらい、霊夢を抱いてそう紹介した。バタバタと足をバタつかせているのは……僕に抱っこされるのが嫌なんですね……。昔は…もっと小さい頃は抱っこって言ってくれたのに……。

「子供の成長を喜ぶのは当然ですが、嘆くことはないでしょう」
「くっくっく、相変わらずで安心したよ大和」
「映姫様には親の気持ちは解らないですよ～だ」
「……それは私に対する挑戦状ですか？」
「……映姫様、今日、縁日。暴力、ダメ、絶対」

最後に到着したのは地獄コンビ、映姫様とこまっちゃん。二人ともちゃっかり浴衣姿で来てくれている。来てくれているのはいいんだけど、映姫様の目は爛々と輝いて周囲の人たちを見渡している。説教のしがいがあるとか考えているんだろう。周囲の皆と言うと……おお、全員が全員明後日の方向を向いて話している。しかし残念、閻魔様からは逃げられない。愛のある？　説教を受けて下さい。それが皆に出来る善行です。

「まぁ今日は縁日ですので、私も程々にしておきましょう。それよりも……」

「……？　映姫様？」
「――ふむ、仕込みは上々。後はタイミングですか」
「えっと、僕と霊夢に何か……？」

映姫様は僕と霊夢を交互に何度も見てブツブツと呟いている。しかし何を言っているのか、聞き取れはしても意味が解らなかった。とりあえず、僕と霊夢に関係していることなんだろうけど……。ま、いっか。来る時になれば来るさ。

「さて！　揃ったことだし、縁日に繰り出しますか！」
「大和さん、ちょっといいかしら？」
「西行寺さん？　どうかしましたか？」
「あと二人呼んでるんだけど、ちょっと待って貰えるかしら～？」

二人……？　西行寺さんが呼ぶ二人組といえば……まさか！？

「ふうん……中々に面白い面子じゃない、大和」
「久しいな、大和殿。今宵は我々も参加させてもらおう」
「っ！　紫さん…！」

目の前に開いたスキマから出てきた紫さんを見た瞬間、考えるよりも先に身体が動いていた。不意打ちを食らわないように後方に跳ぶ……つもりだった僕の肩をがっしりと掴んで、後に跳べないように抑えつけられた。

いったい誰なのか？　そう思って後を振りかえった瞬間、僕は再び度肝を抜かれた。

「敵前逃亡とは情けないわね」

『風見幽香！？』

最強を自負する四季のフラワーマスターが、にっこりと笑って僕の肩に手を置いていたのだから……。

「せんせ、おまた……あれ？　何やってるの？」

僕が聞きたいよ！

波乱縁日：その一（後書き）

できたてホヤホヤなじらいです。マッハでやってみましたが、どうでしょう？　登場人物が多過ぎて頭が混乱するかもしれませんが、なんとか脳内変換して下さい！　いやホント、よろしくお願いしますｏｒｚ

とりあえず出せるひとは出しました。紅魔館の方も何かある。映姫様も何かある。何か紫まできて、終いには輝夜に幽香で…。やっちまいましたね！　次、本気でどうしましょうね！　困ってます！！そして最後の大和の一言。僕が聞きたいよ！　は私も聞きたいです。どうしてこうなった！？

今回の頑張ったで章は妖夢です。デレてないヨー。妖夢はデレてないヨー。いつも馬鹿にされてる人から褒められて、ただ恥ずかしがってるダケダカラネー。他意はないヨ、うん。マジです。

次回は未定。とりあえず縁日で大和と紫の語り合いくらいしか考えてません！　先走った結果がこれだよ！　まぁ今回みたいに早い更新は無理だと思うので、ゆっくりと待って頂けると幸いです。では

波乱縁日：その二（前書き）

誤爆注意

波乱縁日：その二

突然目の前に現れた八雲一味。関係者たちに一気に緊張が走る状況は、何の前触れもなく現れた風見幽香によって更に拍車を掛けられる形となった。和やかだったお祭りムードは一転、触れれば爆発しそうなほどに張り詰めた空気が場を占めている。

「あらあら。紫、遅刻ね」
「申し訳ありません幽々子様。それに大和殿も」
「そう言わないの。これでも急いで来たんだから」

そんな張り詰めた空気の中で、西行寺さんの柔らかい声が響く。この状況で何事もなかったかのように友人に話掛ける度胸には驚嘆するよ。

友人を呼ぶと西行寺さん言ったけど、まさか紫さん達を呼んでくれるとは……。僕らの確執を知らない訳じゃないだろうに、いったい何を考えているのだろうか……。でも起きてしまったものは仕方がない、僕は何時、何が起きても対応できるように体内の気を練っておこう。

「……スキマ妖怪、何しに来たのだ？　事と次第によっては私が相手になるよ……？」

そんな待ち構える姿勢を見せていた僕の意に反し、ルーミアちゃんが最初に動いた。楽しみにしていた縁日を台無しにされて怒っているのだろう、普段よりも深く、聞いた者は震え上がるような低い声を発した。実際、霊夢や魔理沙は程度の差はあれ身体全体が震えている。……仕方がないだろう。封印されているとはいえ大妖怪が放つプレッシャーだ、何の訓練もしていないただの人間は息をするのも辛いはず。

そんな二人を見てルーミアちゃんに止めるよう声を上げようとするも、幽香さんがそれをさせてくれなかった。

「駄目よ、勝手に動いては」

両肩に手を乗せられ、僕は一切の動きを封じられているのだ。そして耳元で僕にしか聞こえないようにそう囁いて来た。

「……あの二人にこれ以上は無理です。まだ子供なんですよ？」
「あら、昔の貴方は常時こんな環境で暮らしてきたのではないの？
……それに安心しなさい、半獣たちが二人の防波堤になってるわ」

幽香さんの言う通り、会話を止めて見てみると、慧音さんと妹紅が霊夢と魔理沙に及ぼすプレッシャーから身を呈して庇っていた。流石は人里の守護者といったところか。あの二人に任せておけば大丈夫だろう。

「虚勢を張るつもりかしら、宵闇の妖怪。今の貴方では私の指一本すら止められないわよ」
「試してみる？」

二人の睨み合いも最終局面。と言っても、ルーミアちゃんはともかく紫さんはまったくやる気が無いように見える。しっし、と腕を面倒臭そうに振っている。浴衣姿でもあるので、もしかすると純粋に縁日を楽しみに来ただけなのかもしれない。

「正解よ大和。今日は縁日。今日だけは争い事を気にせず、一緒に楽しみましょう。解ってくれたらそこのお嬢様方も殺気を飛ばさないで頂戴」

一緒に楽しむ？
ふざけるな！　どの口がモノを言うつもりだ！　そう吐き捨てて跳びかかってやりたかったけど、ここで暴れると人里に大きな被害が出る。……ああ解ってるさ、それくらい。だから映姫様も華扇さんも、そんな目で見ないでも大丈夫です。僕は至って冷静ですよ、ええ。

「ご主人さま？」
「…大丈夫だよ。……レミリア、フランも抑えて」
「……フン。命拾いしたな、スキマ妖怪」
「今日はヤマトに免じて何もしない。でも家族に手を出すのなら……壊す」

冷静になって周りを見てみると、二人も敵意を剥き出しにしていたことに気が付いた。幻想郷に来たばかりにしてやられたことに対してのことかと思ったけど、どうやら違うようだ。

そんなフランに家族と言って貰ったことに顔が綻ぶ。うん、紅魔館は僕にとっても第二の家だと思っているから。そう言って貰えて本当に嬉しい「私を無視するなんて、成長したわね」　……よし、現実逃避はここまでだ。そろそろ肩に掛る重圧とも向き合うとしよう。でも今日は縁日だし、幽香さんだってただ楽しみに来ただけだったり――――

「貴方の花は咲いたのかしら?」

貴方の花は咲いたのかしら?

大和意訳：花を愛する幽香さんは花を愛してしまうあまり、摘んでしまうのデス（たぶん）。子供の頃は雑魚の中の雑魚だった貴方も、少しは成長したのかしら?　だったら摘みごろね。プチッと首根っこからもぎ取ってあげるわ。

…ヤバイよ!?　僕の両肩に置かれた手はそのまま首元に行くの!

？　まじでプッツン三秒前なの！？　ちょ、そんな笑って首元触らないで下さい怖いです！！

「アノー幽香サン？　手ヲ退ケテ貰エマセンカ？」
「フフ――い・や・よ」
「皆さん助けてー！？」
「本当に弄りがいがあるわぁ、貴方」

そりゃあ弄る方は楽しいでしょうけどね！　弄られる方は堪ったもんじゃないよ！　誰か救いの手を差し伸べてくれる人はいないのか！？　そう周りを見渡しても、一部を覗いて全員が笑っていて助けてくれない。妹紅なんて指差してまで笑っている。あん畜生め、憶えてろ……なんて思っていると、純粋無垢な瞳が僕を見ていることに気が付いた。

霊夢の前で弄られてるんですか僕！？　一番見せたくない姿だったのに……。い、いや！　まだ遅くない！

「んん〃！　幽香さん、放してください」
「あら……なら自分でやってみなさい」

これは僕に対する挑戦状のつもりなのだろうか……？　あの手も足も出なかった頃から僕がどれだけ成長したか。帰って来たばかりで情けない姿を晒した僕への。だとすれば、僕もそれに答えないわけにはいかない。それになにより――負けっぱなしだと伊吹と父親の名前に傷が付く。

「『小さな巨人（ネフィリム）』」

ボソッ、と誰にも聞かれないように呟く。すると、幽香さんはまるで何かに押されたかのように僕の近くから押しのけられていった。

「……面白いことをするのね」

「僕が出来る唯一の物ですから」

使ったのは新たな魔法。紫さんを目の前に何をしているのか、と事情を知っている人たちは僕を見るも、その人たちの目にも僕が何をしたのか解る人はいない。この魔法がバレる心配はまずないのだから。それは同じく先生の魔法を研究していたパチュリーも同じだ。

新たに構築したこの魔法は、僕の完全オリジナル。例え紫さんであっても見破ることは出来ないと自負している。それほど慎重に幾重にも幻術を重ねて編み出した物だ。それこそ『現と幻の境界』でも弄られない限りはバレることはない。

「流石、私が目を付けただけのことがあるわね」

「…僕としては遠慮したいですけど……。じゃあ縁日、せっかくなんで一緒に楽しみます？」

「あら、誘ってくれるのかしら？」

「そりゃあ勿論。…じゃあ皆、行こうか。くれぐれも、く　れ　ぐれ　も　里の人には迷惑を掛けないように！　……って慧音先生

が目で訴えてるから守るように」

ちゃんと注意事項は言いましたから、慧音さん。だから頭を抱えないで下さいよ。

「……あれ？　そう言えば幽香さん、何で縁日に来たんですか？興味なさそうなのに」

「純粋に楽しむことと、不届き者がいれば懲らしめるためよ」

幽香さんの助言……背筋が冷えるのは何でだろうね

◇◆◇◆◇◆◇

「せんせ、わた飴買って！　ほら、霊夢もおねだりして」

「……別にわたしは…」

「ご主人さま、焼きそば買ってきたから食べよ！」

「いいなールーミア。ヤマト、私にも焼きそば買ってー」

「フラン、お金は渡してあるのだから自分で買いなさい。……大和、焼き鳥を買ってきたのだけど…どう？」

「うわ、お姉様ったら自分だけちゃっかりしてる」

「……ねぇパチュリー。僕、楽しいんだけど楽しくない」

「私は楽しんでるわ。いい顔してるわよ、貴方」

「……趣味悪いよ、パチュリー」

夜店の並ぶ一帯に近づいた途端、紅魔館の我儘姉妹に連れ去られた。元々一緒に回る予定だった霊夢とルーミアちゃん、魔理沙ちゃんも付いて来たけど、気付いた時には僕の周りには子供ばかり。遙か後でのんびりと楽しんでいるであろうお姉さん方の浴衣姿が見れない僕は、せめてもの慰めとしてパチュリーと並んで歩いているのだ。

わた飴を魔理沙ちゃんと霊夢に買い、ルーミアちゃんの焼きそばを食べ、逆にレミリアに焼き鳥を食べさせてあげた。もちろんフランドールにも。

そうやって子供たち（レミリア達もいるけど子供たちでいいや）のお願いを聞いてあげてるも僕の虚しさは暗くなってきた空の彼方へ。ああ、後には慧音さんや西行寺さんもいるというのに……。

「フランドール、金魚すくいやろう！」
「いいねルーミア。ってあれ？　お姉様、金魚すくいの金魚が金色じゃない！」
「あら本当……金色の魚じゃないじゃない。店主、これはどういうことなの？」
「ふ……。そんな問答は愚問でさぁ妖怪のお嬢ちゃん」
「む……店主、納得のいく説明をして貰おうか。そうすればこの私をお嬢ちゃん呼ばわりしたことも不問にしてやろう」

そんな僕の心内なんてなんのその。腹が膨れれば次は金魚すくい、

節操無しな紅魔館の現当主。いや、別にいいんだけどね？　楽しんでくれてるし、僕も悲しいけど楽しいし。でも店のおじさんに喧嘩売るのは止めて下さい。

「レミィたち、楽しんでるわね」
「放っておいていいの？」
「お祭りの雰囲気に当てられてるだけよ。放っておいていいわ」

ああ、納得。確かにウキウキしているオーラが身体全体から染み出してるからなぁ……。

「お譲ちゃん、この世でもっとも光輝くのが何かしってるかい？」
「……？　金ではないのか？」
「それは物欲に塗れた者の考えでさ。この世で一番輝いているもの……それは恋！」
「こ、恋！？」
「金魚と言う魚は特別でね、恋を多くすると言い伝えられているんでさ。だから恋する光り輝く魚、金魚と呼ばれてるんでさ……。そしてこの話には続きがありまして……この金魚を手に入れた者は愛する者を手に入れることができる」

！？　と聞いている三人に頭上に浮かび、背中の羽がパタパタと忙しなく動いている。駄目だこりゃ、完全におじさんの商売に嵌ってる。レミリアはともかく、残り二人は作り話だということに気付いてるだろうに。ノリノリだよこの子たち。

「ロマンチックね……。店主、これは幾らで買える？」
「残念ながらお譲さん、恋は金では買えません。奪い取るのです。このポイで！　恋同じですよ」
「…！　そ、そうね……。店主、私は挑戦するわ！　この金魚すくいに！！」

やってやるぜ！　と意気込んでお金を払い、ポイを片手に金魚を救う。しかし、金魚が捕まることは無く紙が破けてしまった。あ、三人とも少し涙目になってる。

「……大和、すごい見られてるわよ」
「……いや、そんな『私頑張るから！』　みたいな目で見られても……なぁ？」
「いいじゃない、応援してあげれば」
「他人事だと思って……。三人とも、頑張ってね」

『うん！！』

素直すぎるのも罪だと思うよ、うん。さて、霊夢と魔理沙ちゃんは何をしているのかと言うと……ああ、お面を買ってるのか。

「せんせ、やまと仮面売ってた！」
「やまと仮面…」
「けいね仮面もあったけど、やっぱせんせーの仮面だよね」
「ちょっと待てい」

なんだこの精巧な作りは！？　そのまんま僕じゃないか！　……でもけいね仮面もあるのかー。そーなのかー。ふーん……後で寄っておこう。

「それよりもせんせ、お小遣い頂戴！」
「親父さんから貰ってないの？」
「貰ってるけど、足んないよ。それにれいむと一緒に回りたいし……」
「霊夢？」
「この子が無理矢理…」
「無理矢理じゃないよ、せんせ。れいむが何も知らないから、わたしが案内してあげるんだ！」

まぁ、霊夢も初めての縁日だからね。それに友達と呼べる存在もいないし……。魔理沙ちゃんが友達になってくれるんだったら、僕も嬉しいかな。

「よし！　じゃあお金は魔理沙ちゃんにあげよう。でも霊夢の分も預けておくから、一人で使ったら駄目だよ？」
「せんせ、さんきゅー！」
「……ありがと」
「はいはい、気を付けてね」

手を振って二人を見送る。うんうん、霊夢にも友達をガンガン作っ

てもらいたいね。零夢のような悲しい暮らしだけはさせたくないからさ…。

「趣味が悪いわね」
「……解ってるさ」

観衆の中に消えていく小さな背中を眺めていると、隣からはっきりとそう言われた。
解ってるさ、趣味が悪いことくらい。あの子が霊夢と名付けられたことに反対しなかったのも、僕が霊夢を育てていることも。全てが救えなかった彼女の代わりで、僕の自己満足な贖罪だってことくらい……。

「だといいわね。……それより大和、さっきの魔法は何？　幻術？　構成は？　用途は？」
「ちょっ、パチュリー近いって！」
「あんなのあの人のノートには記されてなかった。それに私は貴方の幻術構成パターンを把握しているのに看破することが出来なかった。あれは何？」
「……秘密」
「……」
「イタタタ！？　頬を抓るな！？」

こんにゃろう、この前ルーミアちゃんに抓られたばかりで痛みが余計に倍増して！？　――ふ、ふふふ……なら僕も抓ったらー！！

「はにゃしにゃしゃいよ」
「はちゅいーがしゃきにはにゃせ」

お互いに両手で相手の頬をがっしり抓る。にゅへへ、とニヒルな笑みを浮かべて睨みあっているけど、これ以上不毛な争いを続けても仕方がない。交互にゆっくりと力を外して、それでお終い。少しだけ背の高い僕が見降ろし、少しだけ背の小さいパチュリーが僕を見上げたまま何も喋らないと言うなんとも言い難い空気だけが残った。

「……ねぇ」
「……なに？」
「レミィの気持ちに応えてあげないの？」
「……いきなりだね」

本当にいきなりだった。始めは少し躊躇いがちに、それでもはっきりと目を見て聞かれたのは、僕が先延ばしにしよう、逃げようとしていたことだった。

だから『無理だ』　という言葉は出て来なかった。きっとこれから僕は誰も選ばないし、選べない。心を奪われたままの僕が誰かを好きになんてなるわけがないから。

答えられもしない問に対して出てきた想いは、情けながら如何にこの場を乗り切るかということだった。

「今のままじゃ、駄目なのかな」
「駄目よ。レミィがそれを望んでないもの」

無理ね、と首を振られた。そこでふと、頭を過る思いがあった。僕以外の人は、こんな時にどう答えるのだろうか。人も妖怪も関係ない。誰もが一度は絶対に直面するであろう問題に、この人生経験豊富そうな魔法使いは何と答えるのだろうか。

「……パチュリーは？」
「え？」
「僕がレミリアと一緒になったら、パチュリーはどう思う？」

細い腰に手をやって、先程よりももっと近く。もっと互いの吐く息が感じれるほど近くにまで引き寄せた。想像よりも遙かに華奢だった彼女は、何の抵抗も感じさせずに引き寄せられた。

「わ、私は……」

僕の胸板に手をやり、逃げるように半身を逸らす彼女を逃がさぬよう、より強く彼女を引き寄せる。密着した薄い浴衣からは、元来着やせする彼女の肢体を余すことなく伝えてくる。

「もしここで、僕がパチュリーを選ぶと言ったら……どうかな？」
「ぇ…ぁ……ぅ…その……」
「もし僕がパチュリーの為だけに生きるって言ったら、受け入れてくれる？」

合わせられない視線は虚空を描き、朱に染まった顔は僕の視線から逃げようと忙しなく動いている。逃げないで。言葉にするよりも、僕はもう片方の手を頬に優しく添え、一切の隙間もないほどに強く抱きしめた。

震えている。パチュリー・ノーレッジの身体は、小刻みに震えていた。目は潤み、頬は朱に染まりきっている。絡みあった視線と身体からは、得も言われぬ言葉が発せられていた。……それが答え。今目の前で起こっていることが全て。パチュリー・ノーレッジは――

「少し、からかい過ぎたかな？」
「え……？」
「いや、僕もレミリアにいきなりそう言われたみたいなものだからさ。パチュリーにもちょっと体験して貰おうかなー、なん…て……！？」

「――そう」

鬼が、いました。家族である鬼よりも、もっと怖くて、強そうな鬼が。

「少しでも、ほんの少しでも貴方のペースに持っていかれた自分が情けないわ」
「少しじゃなかったような……」
「黙りなさい！」
「ホントすいませんでした！？」

その後は何時通りの二人の空間。喘息気味なのに勢いよく怒鳴り続けるパチュリーを上手く躱しながら、僕は少し近くなった距離感と先延ばしに出来たことに安堵し、パチュリーはしてやられたことに対して怒っていた。

後にいる人達と合流するためにパチュリーたちと別れ、一人で夜店が並ぶ中を歩く。確か、大陸にいた時も二人で露店巡りをしたような。ふと昔の情景が思い浮かんだけど、すぐに頭から消し去った。このままがいい、このままでいさせて欲しい。

「祭りの雰囲気に当てられたのはレミリアだけじゃない、か……」

呟いた声は、賑やかな観衆の中に消えていった。きっと誰にも聞こえていないだろう。聞こえていたら困るし、見られていたら更に困る。

歩く先には言い争っている二人と、それを宥める二人がいた。まったく、縁日の日くらい仲良く出来ないのかな？　そう苦笑しながら、僕もその不毛な争いを止めるために一歩を踏み出した。

知らず火照っていた身体は、もう元に戻っていた。

「……馬鹿」

波乱縁日：その二（後書き）

全力でパチュリールートを開拓したじらいです。別段進むつもりはないですけどね！　イツマデモー、ヤラレッパナシジャナインダカラーｂｙ大和。とまぁ、少し、ただ単に調子に乗ったわけです。しかしなんと言うか、こういうシーンになるとすごくやる気が出ますｗ　普段は出ないパゥワーが噴き出てる感じが…ｗ

金魚の作り話はどこかで聞いた話です。確か知り合いのオッサンがこんなアホなことを言っていたような…気がしなくもない。なんかそんな話したなー、くらいです。…ところで、金魚ってなんで金魚と言う名前なんです？

さて、大和の新魔法が出てきました。予定では2話後に新魔法の名称と種類が発表になると予定してます。まぁ結局は大和なので、お前ぇの魔法つかえねぇから！　になる…はず？　男は黙って拳振ればいいんです。

それではまた次回

波乱縁日：その三（前書き）

その一：霊夢と魔理沙

その二：永夜と愉快な仲間たち

その三：縁日将棋大会

詳しくは後書きで

波乱縁日：その三

「れいむ、リンゴ飴食べよ！」
「……」
「あ、向かいのおじさんだ。おーい、おじさーん！」

いったい、この子は何なのだろう。さっきからわたしの手を握ったまま放さないから、一人で好きに移動も出来ないし、見たいものも見れない。

「はい、れいむ。リンゴ飴。美味しいよ？」
「……」

差し出された手には食べ切れそうもない大きさの……これがリンゴ飴？　リンゴがそのまま一つ……これを食べたら他の美味しそうな物が食べれなくなる。

「いらない」
「何言ってるの、はい！　美味しいよ」

わたしが何を言いたいのか、この子はまったく理解してくれない。やまとは何も言わなくても解ってくれるのに。正直、面倒……。

「あの「れいむってせんせーの弟子なの？」　……違う」

面倒だから帰るって言おうと思ったけど、それも無理そう。もういいや、聞かれたことぜんぶ答えて帰ろう。

「…？　じゃあせんせーってお父さん？」
「違う……と思う」
「じゃあ何なの？」

お父さん……じゃないと思う。お母さんいないから。巫女の真似事…修行？　はしなさいって言われても、見てるだけだからこの子の言う『せんせー』　と言うものでもない…はず。じゃあ、わたしのやまとって……？

「……なんだろう？」
「わたしに聞かれても困るよ…。でも、お父さんでもないなら呼び捨てって悪いんじゃないかな…。『とても親しいでも、年上の人にはけいしょーを付けなさい。じゃないとしつれーだ！』　ってお父さんも言ってたし？」
「けいしょー？」
「ほら、なんとか『さん』　って言うアレ」

しつれー……ああ、失礼のことだ。じゃあわたしは知らない内に、やまとに失礼なことを言っていたの……？　それは嫌だ。だって嫌われたくないもん。ならけいしょーを……やまと…さん？　やまとさん……。うん、これから『やまと』は『やまとさん』　だ。

「やまとさん」
「いいじゃん！　やまとさんって、せんせーに合ってる！」
「……えっと、マリオさん？」
「マリオ？　誰それ？」

え？　だって、この子の名前は確かマリオだったような……。違うの？　いいこと教えてくれたから、失礼のないようにけいしょーをつけて呼んでみたんだけど…。何か間違ってるのかな？

「あなたは、マリオさんじゃないの？」
「……まりささんだよ」
「……そうなんだ」
「しつれーだね」
「……ごめん」

あれだ、『恩を仇で返す』　と言うのをしたのかもしれない。やまと…さんが一番やっちゃいけないことだって言ってたのに、わたしやっちゃった……。どうしよう…

「しつれーなれいむは、魔理沙さんとともだちになりなさい！」
「ともだち？」
「そう！　ともだち！」
「……わかった。よろしく、まりささん」

そう言うと、魔理沙さんはチッチッチッ、と指を揺らして笑ってい

た。……なんかむかついた。

「ともだちに、けいしょーはいらないんだよ！」

「……よろしく、魔理沙」

やまとさん、わたしに初めて『ともだち』　が出来ました。わたしよりも物知りだから、なんとなく楽しくなるかもしれません。

◇◆◇◆◇◆◇

視線の先では二人が言い争っているけど、あの二人の争いが並大抵のことで止まらないと言うことは既に承知していること。あの二人を止めるには文字通り身体を張るか、何かインパクトのあるアクションで気を惹かないと、鎮圧どころか巻き込まれて痛い目を見ることになる。

僕だって焼かれるのは嫌だし、自慢の宝物アタックを貰うのも嫌だ。縁日だからお互い手を出すことはないと思うけど、それでも今までの経験と二人の性格を良く知る僕は心配が尽きないのです。

だからインパクトを持ったアクションをする為に『けいね仮面』を買ってみた。これで慧音さんの真似をすればきっと気が惹けるはず。……二人の為に仕方なく買っただけで、別に他意はないよ？

…無いったら無いのだ！　とにかくこれを装着してっと……。

……なんだかこれ、すごく先生です…。訳解んないけどなんだかテンション上がってきた。今なら僕も先生に慣れる気がする！　専攻科目は保健体育だ！　みんな、イキイキするぞ！　……なんちって。

ああ、そう言えば他にも『もこ仮面』　が二種類売ってたけど、そのうちの一つ『もこたん』　は売り切れだった。店主曰く、妹紅の珍しい笑顔を模した仮面らしい。妹紅の笑顔を見る為に何日も付けてた店主の努力に合掌。でも手に入れられなかったから大人しく妹紅に焼かれて下さい。

残ってあったのは『もっこす仮面』　怒り顔で、しかめっ面をしていた。それでも売れていたんだから需要はあるんだろう。でもあれはそれほど欲しいとは思わなかったね。だって妹紅の怒ったりぶすっとした顔なんて何時も見てるし。

まぁ何はともあれ、二人の言い争いを止めに入ろう。けいね仮面を装着しているんだ、慧音さん×2で仲裁力も二倍になるはず……。

「っけ、兎の格好なんかしやがって。性悪な顔と畜生が混ざって、更に性悪になってるぜ」

「あらあら……。貴方もだいぶお似合いよ、その浴衣。身の丈に合

わないから胸元が空かすかで肌蹴けてるわ。まるで安っぽい売女ね」

――ああ……うん、あれだ。手が出ない分、何時もよりも罵り合いが激しいんだね。止めようと思ったけどこれは無理だ。慧音さんと鈴仙も半分諦めているようだし、ここで僕が何かしても無駄だよね……。うん、無駄に決まっている。そうに違いない！

…よし、逃げよう。そうと決まればこんな空気の悪い場所に長いする必要もない。背中を向け、さっさとトンズラさせて「伊吹君じゃないか！」――oh……一歩遅かったみたいだ……。

「おい大和、こいつどうにかしてくれ。もう限界だ」
「大和が来たからには貴方なんて用済みよ。何処へなりとも消えなさい」
「大和さん……（助けて下さい）」

ダメだ、全員が僕の姿を捉えているから逃げられない。と言うか、逃げたら絶対に追い掛けられる。そして意味も無く怒られる。つまり逃げられない……！　だったら仕方が無い、今の僕は大和先生だ。困った生徒はちゃんと指導しないとね！

「やぁ、みんな元気なのか？」
「「「ブッ！？」」」

振り向きながら慧音さんの真似をしてやった。逃げる為に背中を向けていたので、お面を被っていることまで解らなかったのだろう。声色とそのまんま慧音さんの顔を見た三人は思わず噴き出して笑った。……よし、掴みは上々だ。

「フム……伊吹君、冗談が過ぎるのではないかな？」

全然上々じゃなかった！　受けは良いと思っていたけど、笑いの種にされた本人が全然笑って無かった！　普段からすると珍しい程に無表情だよ慧音さん！　あの綺麗な笑顔を見せてくださいよ！

「冗談でやっているわけではないさ、慧音」

「……私は冗談が過ぎるのではないか、と聞いたんだがな」

ダメでした。更に慧音さんの視線が冷たくなって、もう耐えられないよ！？　そんな僕らのやりとりを見ている三人は、声を出さないように口を抑えて笑っている始末。場を和ませようと思ってやったのに、なんで僕が笑いの種にされてるんだ！？

「……伊吹君？　それは何だい？　教えて貰えると嬉しいんだが……」

「アッチノ夜店デス」

「ふむ……では逝ってくる」

「逝ってらっしゃいマセ」

怨まないでくれ、店長。僕も背に腹は代えられないのだ。それにけいね仮面を手に入れた以上、君の店に用は無い……。でも次にれいむ仮面を創るって言うのなら、全力で助けてあげなくもないんだよ？

そう合掌しながら鬼のような後ろ姿を見送った僕は、気になっていたことを聞くことにした。

「出てきて大丈夫なの？」

輝夜、と名前は出さないでおく。博麗大結界がどういう仕様なのかイマイチ理解できていないので、迂闊なことは言えないからだ。とりあえず、僕は外と中を分けるだけだと思っている。でも蓬莱島での件もあるからね、破られる可能性がないわけじゃない。

「何のことかしら？　ああ、初めまして大和。噂はかねがね」

「初めまして、小さい兎さんたち。……で、なんて呼べばいいの？」

そんな目で視なくても言わんとしてることくらい解ってるさ。まったく、いったい何年の付き合いだと思ってるんだか。輝夜の考えてることなんて見ただけで解るさ。

「私はレイセンです、大和さん」

「レイセンね、初めまして。そっちの君は？」
「……」
「……おーい、名前は？」
「……よ」

聞こえないよ、輝夜。そう目で訴える。届け、僕の意志！　と馬鹿な眼力を送ってみるも、輝夜は不機嫌な顔をしたまま言葉を発さない。

何も言わないのなら仕方が無い。隣でニヤついている妹紅に聞いてみよう。

「もっこす、この子の名前は？」
「……新しい名前じゃねえよ、燃やすぞ馬鹿大和。……こいつはな、『てるよ』　って名前なんだと。保護者がどうしても縁日に参加させてやりたいって泣きついてきたから、仕方なく面倒見てやってんだ」

……ああ、師匠が輝夜のガス抜きを考えでもした結果なんだ。こんなこと話せるのも妹紅だけだったからこうなったわけなんだね。でも妹紅も輝夜も嫌々ってわりには楽しそうだったけど。面倒見の良い妹紅のことだ、何やかんやで気に掛けているんだろう。

「ふーん、てるよちゃんか……」
「な、なによ？　そんなに私の名前が変かしら？」

いや、名前なんて別にどうでもいいと思うよ？　僕にとっての輝夜が輝夜だし。それよりも気になるのがその縮んだ身体と、まるで本物のようなウサ耳だ。師匠謹製の薬だろうけど……背を縮めるのなら、伸ばすのもあるはずだよね……？　貰えないかなぁ……。

「あの、大和さん。それは難しいと思います」
「…もしかして、口に出てた？」
「あ、いえ……何だかそう思っているような気がして……」

オズオズと控え目に放す鈴仙はやっぱりどこか腰が引けているように感じる。他の人と比べてどうとかもあるけど、僕にはすごく気を使っているように思えて仕方が無い。……やっぱ、顔が似てるから負い目とか感じてるのかなぁ。似てるどころか、そっくりそのままだからね。

「あの子も考え事をすると、こんな感じになるのかな？」
「…はい、そうです」
「やっぱり苦手だったり？」
「私は特に……。鬼教官でしたから」

あちゃぁ……。そりゃあ苦手意識もでるよ。鈴仙みたいに日常生活ではどうも感じないけど、こと戦闘となると苦手意識というか、敵わないってイメージが完全に出来あがってるからなぁ…。うんうん、解るよその気持ち。

「でも僕は僕だから、違う人と思ってね？」
「……努力させて下さい」

妹（アキナ）、いったいどれだけのことをしたんだよ……。完全に怯えてるじゃないかこの兎ちゃん……。

「もう！　イナバと話してないで、私と話なさいよ」

頭をボフン、とお腹に埋めた輝夜に顔が思わず引き攣った。そこ、ギリギリお腹なんです。ちょっとでも下を向かれると、お兄さんは殴ってでも君を放さないと公衆的に悪いです。

「……駄目だなぁ妹紅、子守りを引き受けたんならちゃんとしないと」

だからそうなる前に、妹紅に引き剥がすように頼んで……ってオイい！？

「ワリィな。いま両手が塞がっちまっててな。こんな時でもないと食べ物も食べられないからさ……。レイセン、お前も食うか？」
「あ、じゃあ私も頂きます」
「なら、これをやろう。そんなわけで大和、ちょっとそいつ頼むわ。私はちょっと喰い物探してくるから」

「ちょ、妹紅!?　もこたん!?　……もっこーーーーーーーーっす!!」

片手を上げて別れの挨拶をする、頼もしい背中が遠のいて行く……。
残されたのは口元を歪ませてニヤつく輝夜。ヤバイ喰われる……なんて言葉が頭を過る程に追い詰められている。こんな状況で残っているのは、申し訳なさそうに、でも私は空気ですと言わんばかりに焼きそばを食べている鈴仙だけ。……君、苦手意識持ってるなんて嘘だよ。

「ねぇ、何で会いに来てくれないの?」
「最近忙しいんだよねー、あはははは」
「あんな小娘、放っておいても勝手に育つじゃない。なんなら私たちも子供を作ってみる?」

馬鹿言わないで下さい。回した手で腰をくねくねと刺激しないでください。ホントお願い放してー!?

と結構な力を入れて引き離そうとしたけれど、やはり師匠に教えを受けただけのことはある。そんな細腕の何処に力があるのかは知らないが、しっかりと掴んで離してくれない。

そんな時、僕の目に入ったのは二本のウサ耳だった。藁にも縋る思いでその耳を掴んでみると……

「ヒッ……んっ…！」

利いていない！？　腕の拘束が少しも緩くならず、逆に強くなったように感じた。けど、いま出来る抵抗と言えばこれしかない。まるで本物のような感触のウサ耳をコネコネモミモミと撫でてやった。どうせ偽物なんだ、どうと言うことは無いはず。

「あッ……だめ…や、ひん……はぅッ！？　…だ、……！　や、そこ……だ、ダメッ！　やめ……ァッ！？」

輝夜の身体全体が小さく震え出してから、僕はようやく事の異変に気が付いた。何故か足に力の入っていない輝夜は、身体を支えるために腕に力を入れているのだ。

「やまとぉ……」

輝夜の熱が篭ったような声を聞いた瞬間、背筋に何かが走った……気がした。ヤバイと本能が叫んでいる。どうにかしろと、しかしこの状況はいったいどうなって起きたのか！？　冷静になれない頭で必死に冷静になろうと考えた結果、鈴仙を見ることにした。

「あの……えっと、兎の耳って敏感なんです……」

それを聞いて、全力で、逃げ出した。無想転成まで使って。仕方が

ないとです。聞いた瞬間、自分のしでかしたことに頭がどうにかなりそうだったとです。鈴仙、悪いけど後は任した！

◇◆◇◆◇◆◇

「新しい扉を開いてしまうところだった……」
「その新しい扉が何なのか気になる所ですけど、答えてはくれないんですよね？」
「無理」
「実は先程からの写真がこの中に…」
「…もう駄目だぁ…お終いだぁ……」

全力で走っていると、文・椛・華扇さん・映姫様・こまっちゃんの集団に掴まった。なんでもにとりが主催している催し物に出場するとか。もう帰りたい！　帰らせてくれ！？　そう言って夜店の並ぶ中を全力で駆けていた僕だけど、映姫様の棒？　で叩かれてこかされた挙句、華扇さんの『無い腕』　に掴まってしまった。

「嘘ですよ。で、本当に何があったんです？」
「探らないで下さい、お願いだから。探ったら自殺してやる！」
「じゃあ大和もアタイと一緒に死神生活だねぇ」
「……死んでからも働くって、そんなの嫌だよ」
「あっはっは！　じゃあ一緒に酒でも飲もうじゃないか」

それはそれで楽しみかな？　あ、でも映姫様の下で働いてたら休日なんてなさそうだから嫌だなぁ。以前、一緒に暮らしてた時も休日と言う休日なんてなかったから。

「小町、貴方はサボり過ぎです。いいですか？　死者を導くと言うのは――」

「はいはい映姫様、今日はせっかくの休暇なんですからそう言うのは無しにしましょうよ」

「貴方は何時も一日の半分以上が休暇でしょう。……まぁいいです、こういう機会でないと私もこの方と話す機会などないでしょうから」

ちら、と映姫様の向ける視線の先には華扇さんがいた。意味深なことを言っている映姫様と違い、こちらは普段よりも二割増しのニコニコ顔である。

「見聞を広めるいい機会でしょう？　貴方も私も。二択しかない選択肢なんてつまらない」

「黒か白か。確かにそれだけでは世の中は理解しきれませんからね。しかし仙人である貴方は――」

「――いいえ。どうしてもと――――十王全員でも呼んで――」

「椛、ところでにとりの出し物って何なの？」

気になったから少し二人の会話を聞こうと思ったけど、あの御二方

が話している内容が凄過ぎて付いて行けなくなった。だから少し暇そうにしていた椛に話掛けてみた。と言うか、話掛けて下さい！みたいな雰囲気を出してチラチラ見られたらそうするしかないよ。

「将棋ですよ、大和様。豪華景品も出るらしいですよ？　なんでも姿を隠せる布だとか」
「椛もそれが欲しくて参加を？」
「いいえ、私はそれが欲しいわけではないです。ただ将棋には並々ならぬ自信がありまして。勝つ、それだけです」
「へぇ～、すごいんだね椛って」
「優勝したら、布は大和様に献上します！」

フン！　と鼻息荒く言う椛は相当気合が入っている。自慢の耳もピンと張って……椛の耳って本物だよね？　やっぱり敏感なんだろうか…？　っと止め止め、こんなこと考えてたらまるで変態じゃないか。

しかし将棋かぁ……。僕も輝夜と打ったことはあるから多少は出来ると思うけど、将棋は奥が深いからなぁ……。確かに自分がどれだけ強いのかを試すには丁度いいかも。

「椛、貴方はこの素晴らしい先輩に献上しようとは思わないのですか？」
「思いません」
「……相変わらずですねぇ。ねぇ大和さん？　どうですこの忠犬っぷり」

「振らないでよ。……文は布が欲しくて？」
「もちろんですよ。あれさえあれば、幾らでもスクープ取り放題じゃないですか！」

……よし、文にだけは優勝させないでおこう。僕の為にも皆の為にも、もう一回僕の為にも決して優勝させてはならない。

「こまっちゃんは……言うまでもないか」
「お、流石だねぇ。話が解るじゃないか」
「そこは褒める所なのか……」
「堅いこと言うんじゃないよ」

姿を隠す布さえあれば、隠れてサボる必要もないからね。まぁ映姫様に通用するかどうか解らないけど。その前に、映姫様に将棋でボコボコにされる未来が視えるのはなんでだろうね。

「ところで主催のにとりは何処にいるの？　姿が見当たらないんだけど」
「布の有用性を示すために、隠れているらしいですよ？」

それでいいのか、河童さん。

「大和さんも当然参加するんですよね？」
「え……これって強制参加？」

「違いますよ。……でも布があれば、何でもし放題ですよ？」
「――――よーし、優勝するぞ！」
「本当に、欲望に忠実ですねぇ」

違うよ！　霊夢と隠れんぼするだけダヨ！　本当ダヨ！！

と、言うわけで将棋大会。トーナメントで行われるらしい。本当は一番上手い将棋を打った人が優勝だったらしいんだけど、急遽そうなった。なんでも錚々たる参加メンバーを見た人たちは叶わぬと悟って、参加を表明していた人数が棄権などでだいぶ少なくなったらしい。里の人間でも参加しているのは人里で一番強いと言われているお爺さんただ一人。あと僕たち七人だけ。なんだか申し訳ないような気がしたけど、これで少しは優勝が近づいたかもしれない。

一人余るので、くじ引きによって僕は一回戦はシードとなった。うむうむ、今の内に勉強しておこう。

そして始まった第一試合は、里のお爺さん対椛。あれだけ自信があったからなのか、それとも将棋を打ってきたてきた年季が違うのか、

椛は難なくお爺さんを下していた。褒めて欲しそうにしていたので褒めてあげると、すごく喜んでくれた。本当に良い子です、唯一の心の清涼剤。

第二試合はこまっちゃん対映姫様。大戦前は頭を抱えていたこまっちゃんだけど、かなりいい線まで行っていた。流石はサボり魔。しかし映姫様の頭脳には勝てなかったみたい……。今日休んだ分、一週間は休みなしと言われていた。哀れ……。

第三試合は文対華扇さん。勝った方が僕との試合だ。少しでも手を見ようと思ったけど……まったく解らなかったです。負けた文が弱過ぎるんじゃない。華扇さんが異常過ぎた。でも文、君の負けは大きな負けだ。これで僕も躊躇いなく『ズル』　が出来る。

二回戦第一試合は椛対映姫様。誰もが映姫様の勝利を疑わなかっただろう。しかし結果は椛の勝利。白熱した試合に会場は大いに沸いた。頭を撫でてあげると、唸っていた。ワンちゃん可愛いです。

二回戦第二試合は僕対華扇さん。さぁ、出番だ！

「私は六枚落ちで構いません」
「なん……だと……！？」
「私と貴方の力量差はざっとこんなものです」

六枚落ちとは……六枚落ちである。詳しくは省くけど、華扇さんは対局前から負けて当然の状態から始まる。更に僕は、絶対に負けない自信がある。何故なら『未来が視えるから！』　全部手が読めるんですよねぇ…！　そんな僕相手に六枚落ちとか、舐めてるね。悪いけど、そんな華扇さんなんてちょちょいのちょいだ。

「…ま、まいりました……」

「私の手が限られているからと言って、正直に前に出過ぎたわね。それが敗因よ。あと、ズルは駄目ね」

「……視られないように常に思考を変えて、未来を変えたくせに良く言いますよ…」

「当然でしょう。貴方はこのテの勝負事にはズルし放題なのだから」

始まった当初から未来の光景は変化しっぱなしだった。華扇さんがこう打つ、と決めたら未来が確定して視えるけど、やっぱりこっち、いやでもこっちか、と言う感じに華扇さんが考えを変えることで未来の光景がどんどん移り変わっていった。

結果、未来を視ることに意味が無くなりました。後手である僕が打つ時も常に思考を変化させているのだから、もうお手上げ状態。まさかこんな方法で僕の能力を破ってくるなんて……。

どうしようもなくなった。でも華扇さんは六枚落ち、手が限られているから大丈夫だ！　なんて安易な考えで突っ込んで行くと思わぬしっぺ返し。気付いた時には僕が六枚落ちの状態だった。とほほ……

決勝戦は椛対華扇さん。ちょっと気になったので椛の未来を覗いてみると……吐きそうになった。すごい勢いで未来の情景が変化していっている。頭の回転が早いとか、もうそういう領域を超えている気がするよ。気分が悪くなったので少し休憩していると、周りから『おお…』　と言う声が聞こえてきた。

「文ちゃん、解説よろしく……ぅっぷ」
「……大丈夫ですか？　吐くのなら向こうで吐いてくださいよ？…えっとですねぇ……簡潔に言うと、華扇さんが椛の小さな、ほんの小さな隙を突いたんです」
「それだけではありません。あそこに駒がある限り、あの白狼天狗に勝機はないでしょう」
「退路が塞がれたようなもんだからねぇ。ここが勝負どころになりそうさ」

なるほど、解らない。とりあえずもうすぐ終わるんだね？　ならいいや、もう少しだけ休憩させてもらおう……。

「参りました……」
「って、はやっ！？　もう終わったの！？」

勝負所と言う所で椛が敗北を宣言した。何で！？　まだ負けるなんて解って無かったんじゃないの！？

「全ての手を読み切って、それでも勝ち目がないと悟ったのでしょう。ですがあの白狼天狗、ここから終局はまで読めるのは流石と言えます」
「映姫様も負けましたからねぇ。あたいにはさっぱりですよ」
「椛も頑張ったんですけど、やっぱり華扇様は強いですね」

華扇さんの表彰式が始まっている中、肩を落とした椛がしょぼしょぼと帰って来た。そして申し訳ありませんでした、と深く頭を下げられた。……いやいや、何やってるんだこの子は。

「椛は良くやったよ。すごく良い対局だった」
「ですが……」
「いいんだって。最初のルールだったら椛が優勝で間違いなしだから。少なくとも僕はそう思うよ」

うん、今回のベストは間違いなく椛だった。意外性もあったし、誇っていいことだ。

「…あ……ありがとうございます！　あっあの！　撫でて、くれませんか？」

……再び催促されるとは思わなかったよ。最速さんはもうカメラ構えて親指を突き出してるし、椛は椛で目を瞑って上を向いている。
……映姫様？　これって撫でてやるのが善行なんです？　……え？

淫行？　じゃあ駄目ですね……ってああ！　泣きそうにならないで椛！？

退路がなくなった僕は、頭を撫でてやりました。あと、気になっていた耳も。何が起きたかは言うまでもないよね……。輝夜の時は逃げ切れたけど、今度ばかりは逃げられませんでした。正座させられて、映姫様と華扇さんの二人に怒られたんだ……。

僕、もうすぐ人形劇なのにね……。

波乱縁日：その三（後書き）

はっはっは！　三部構成のはずだったんですよはっはっは！　終わりませんでしたよ、はっはっは！　と最早笑うしかないじらいです。各パートごとに分けてやろうなんて考えなければよかった…。でも断章が終われば後は全部シリアス。これが最後の清涼剤です。

と言うことで、次回も縁日です。予定では人形劇と、その他色々。考えが纏まってはいるのですが、書いている途中に妄想が浮かぶのでどうにも言えないと最近また気付きました。

それにしても早いもので、もう師走ですね。書き始めてもうすぐ一年になるんですよ、私。出来れば一年で終わらせたいなぁ、という気持ちは今では変わりません。ＰＶももうすぐ２００万ですし、ユニークなんて１５万です。気付いたら凄いほど増えてて、なんだか怖いですｗ

あと、今回は輝夜に悩みました。たぶんセーフ、たぶん。そんなにハッスルしてないので、たぶんＯＫ。耳繋がりで椛もですが、描写は敢えて書かないでおきました。流石に同じ話の中での二度ネタはダメですよね常考。

それではまた次回

子供を中心に、多くの人に囲まれている中に一際目立つ金髪の女の子がいた。最前列には霊夢やレミリア達、大人たちに混じって一緒に来ていた皆も劇の開演を待っていた。それぞれが様々な合図を送ってくる中、とりあえず僕は苦笑で返した。人形劇をやると言っても、僕はただの背景係なのだから。

そんな中、腕を組んでしかめっ面をしているアリスの姿があった。僕を見つけて一度は口を開けたのだけど、これから劇を見て貰う人前で怒るのは良くないと感じたのだろう。何も言わずに手を掴まれて、少し離れた場所に連れて行かれた。

「遅いわよ。もうすぐ開幕だってのに、打ち合わせの時間が全然ないじゃない」

連れて行かれ先でそう言われたけど、口調は怒った感じじゃなかった。ただ起こってしまったことは仕方が無い。だから次はちゃんとしなさい。アリスの目がそう訴えている。

「ごめん。でも、なんとかアリスに合わせてみせるから！」

だから僕も、一つ謝って次を見据える。自信はある。空気を読んで、

アリスの邪魔にならないように最高の背景を演出してみせるさ！

「まったく……。まぁいいわ、随時念話で指示を出すから。くれぐれも、く れ ぐ れ も 勝手な行動はしないでよ？」

「はっはっは！　全て大和さんに任せなさい！」

「……蹴っていいかしら？」

「え ゞ！？」

◇◆◇◆◇◆◇

～不思議な国とアリス～

……不思議の国のアリスではなく、不思議な国とアリス。

（不思議な国って何？）

（不思議な国よ。それよりも森を出して。いいこと？　イメージは全て優雅な物にするのよ）

（はいはい）

「この物語の主人公、アリスと言う名の少女は暇を持て余していました。アリスと言う名の少女は、立てば芍薬　座れば牡丹　歩く姿は百合の花と称することが相応しい程に――」

突っ込まない。例えその主人公がアリスそっくりな人形で、アリスが自分を褒め称えているように聞こえても僕は絶対に突っ込まないぞ。それにアリスの言う通り、人形は可愛く仕上がっていて、別に間違っているわけではないんだから。

「ある日、アリスは目の前を亜高速で走り去る天狗を見つけました。『あややや！　このままじゃ明日の朝刊が間に合わないです！』　暇を持て余していたアリスは気の向くまま天狗を追いかけることにしました（妖怪の山、山腹。あと、大きな空洞がある木）」

（……はい）

アリスからの念話に突っ込みを入れたくて仕方が無い。亜高速ってなに？　亜高速です。子供たちは頭上に『？』　を浮かべている。そんな子供たちに、亜高速とはとりあえず早いことだと慧音さんが教えている。その後では藍さんが何か話をしたそうにウズウズしていた。……亜高速について詳しいのだろうか？

そして天狗人形。文を模して作られているであろう人形も、本人と見間違うほどそっくりに出来ている。文はその出来を見てうんうん、と頷いていた。それでいいのか親友。亜高速だよ？　身体が摩擦で焼けるよ？

「目にもとまらぬ速さで木の中に入った天狗に付いて行くように、アリスも木の中に飛び込みました。するとそこは一つの部屋でした。そして、そこには紅茶とケーキが置いてありました。

『あら？　私のために用意してくれたのかしら？』

客人である自分を持て成す準備をこれほど早く済ませるとは、ホストの鑑ね。そう、アリスは置いてあった紅茶を飲みました。すると――――――大人になりました」

！？　と何年経っても子供な人と、純粋に子供な子らは反応している。別に誰かと言う必要はないだろうけど一応言っておこう。半霊とか吸血鬼とか、あと宵闇の妖怪とか。そりゃあこんな不思議な薬、何年経っても成長しない子たちには魅力的な物だろうね。背が高くなるのなら僕も欲しいぞ。

「抜群のプロポーションを誇る自身の肉体に驚きつつも満足したアリスは、次にケーキを食べることにしました。すると、身体は元に戻りました。しかしそのままでは満足出来ません。そこでもう一口食べることにしました。すると更に小さくなり――――幼女と変わらぬ姿となってしまいました」

最早、何も言うまい。好きにアリス・ワールドを展開していって下さい。僕は無言で背景係をさせて貰うから。むしろ僕も背景の一部に取り込まれてるから。

でも子ども組にこんなはちゃめちゃな設定は通用しても、大人組に面白味なんて全くないんじゃないの？

「私はケーキの方がいいわね～。紅茶は美味しいけど、お腹は膨れ

ないもの。紫もそう思わない？」
「……そうね」
「紫様。お歳なのは解りますが、実際にそんな物はありません」
「それくらい解ってるわよ！？」

ああ、うん、大人組も楽しんでるみたい。その隣では真面目に紅茶に入った薬の成分を検証したり、そんな効果をもたらす植物の種があるとか言ったり。はたまた実際に仙術で若返りが出来ると等と聞いて、過半数がそれに喰いついてカオスになっているけど一つ言わせて欲しい。

劇見ろよ

あと、みんな人外なんだから歳とか気にする必要なんてないだろうに。むしろ年寄りの方が強くていいじゃないか！

「見た目は幼女、頭脳は大人。アリスはその幼女姿のまま、入口だった場所とは反対側の扉を開きました。すると、そこは薄暗い霧の張り詰めた森でした。

『じめじめした森ね、焼き払ってあげましょうか？』

実はアリスは可愛いだけでなく、すご腕の魔法使いでもあるのです。みんなにバレると魔界のお母さんに怒られてしまうので内緒にして

いるのです。でもここは誰もいない森の中、どれだけ暴れようとバレることはないのです。

そんなアリスが魔界の劫火で森を焼き払おうとすると、一人の男性がやって来ました。

『こんにちは、可愛い可愛いお譲さん。お兄さんと一緒にお茶会をしないかい？』

『いきなり現れて何なのよ貴方。名乗りなさい』

『おお！　お譲さんの言うこともっともだ。ボクは箒屋のヤマート。趣味はお譲さんのような可愛い可愛い女の子とお茶会を開くことさ！』」

「ちょっと待てぃ！　なんだその変な奴!?　しかもその人形、僕にそっくりじゃないか!?」

「劇の最中です。背景は黙ってなさい！」

「肖像権を傷つけられた！　と言うか名誉棄損だよ!?」

「フィクションの人物です。実際の人物、団体とは一切関係ありません。……これでいいかしら？」

だったら別に僕じゃなくてもいいじゃないか！　なんで僕そっくりの人形使うの!?　……でもほら、アレは僕じゃないし。だから皆さん、そんな『解ってるよ』　みたいな生温かい顔を向けないで下さい。

……え？　バッチこいだって？　フランドール、お姉ちゃんの頭を一度壊してあげて。たぶんそれで治るから。――あぁ……また映

姫様と華扇さんが溜息を吐いている……。

「コイツはヤバイ。色々な意味で、初めて恐怖を感じたアリスはヤマート目掛けて魔界の劫火を放ちました。それの直撃を受けたヤマートは燃え尽きて灰になってしまいました」

「なぁれいむ。せんせって、死んだ？」

「やまと…さんは、そう簡単に死なないって言ってた……。それに、やまとは炎が得意だから大丈夫」

魔理沙ちゃん、それ大和ちゃう。ヤマートや。君の言うせんせじゃないです。あと霊夢、僕をゴキブリみたい…に……？　うん…？　なんか霊夢の呼び方に違和感があったような……まぁ、気のせいだろう。……うん、幻聴だ。そうに決まっている。そうであって欲しい……ッ！

「灰になったヤマートを満足気に眺めていたアリス。しかし、次の瞬間にアリスは自分の目を疑う光景に出合いました。なんと、ヤマートが灰の中から復活してきたのです」

「ほら…やまとさん、生きてた」

「う～ん、ゴキブリとどっちが強いのかなぁ」

やまと……さん…？　今、僕は霊夢に『やまとさん』　って呼ばれ

たのか…？　膝が砕けそうだ。心が折れそう……いや折れた。

ぼく　は　めのまえ　が　まっくら　に　なった

……ゴキブリと生命力を比べられて僕の方が強いって言うのなら、僕もそれはそれで嬉しいよ。生命力が高いと褒められるのは決して悪いことじゃない、良いことだ。ポジティブに行こう！

――――でもね……霊夢、お父さんは涙が止まらないよ。

何でだろうね？　明日からは他人のつもりだって思ってたのに、君にそう言われるとすごく悲しいよ。何かもう、世の中どうでもよく感じるよ。紫さん？　勝手にして下さって結構です。鬼の皆？　僕がいなくても楽しくやってるだろうね？　いいじゃないか、もうそれで。

僕、明日から何を生きがいにすればいいんだろうねぇ……。えへ、えへへへへ……へぇ。

「『クッ……私の劫火を耐えきるなんて…！』

アリスは再び魔界の劫火を放とうと手を振りかざします。しかし、亜高速よりも早く動けるヤマートに腕を掴まれ、小さなアリスでは身動き一つ取れなくなりました」

そんな挫けた僕を尻目に、アリスの可笑しな人形劇は進んで行く。

主人公アリスのピンチって奴ですね、解ります。子供たちが盛り上がる所なんだろうけど、お兄さんは盛り下がってます。もう劇とかどうでもいいです、ええ。背景だけはしっかりやっておくけど、やまとさんの精神はもうダメです。

「ああ、私はこの男に掴まってしまうのね。アリスは目を瞑って来るであろう衝撃に耐えようと思いました。しかし、何時まで経っても何も置きません。不思議に思ったアリスが目を見開くと、先程まで腕を掴んでいたヤマートが頭を垂れていました。

『ボクを貴方のしもべにして貰いたい』

それを聞いたアリスは驚きました。しかし直ぐにこうなることは必然だったと思い直したのです。何せ自分は世界でも類を見ない美少女。美少女好きのこの男が自分のしもべになるのは当然なのだ、と」

「――――――はい、第一部はここまでです」

人形を舞台裏に運びながらアリスがそう言った。ああ、第一部が終了なんだ。なんかもう、いろいろあって疲れたよ。

◇◆◇◆◇◆◇

「ほんと、疲れた……」
「一応、御苦労さまと言っておきます」

あの後も人形劇は続いた。詳しいことは省くけど、何処かで見た顔の裁判官が出てきたり、どこかで見た天狗が出たり。とりあえず酒飲み場にいる半分以上……まぁ今は全員が此処にいるから、集まった人の半分以上が登場人物として出ていた。

自分そっくりの人形の扱いに誰もが納得することはなく、危うく修羅場になりかけた場面もあったけどそこは大人組が抑えていた。そのあとでそれぞれの登場人物を模した人形をアリスが売って更に一悶着あったのだけど、それはもう思い出したくもない。そんなアリス本人は自分に飛び火する前に帰っていったし……あの目狐め。何時か泣かしてやる。

「妖夢ちゃんたちは出なかったから、そんなこと言えるんだよ」
「あれ？　出てたのは大和さんじゃなくて、ヤマートじゃなかったんですか？」
「……」
「……あの、えと、色々すいません」

これ以上虐めないで、と妖夢ちゃんを見つめていると何故か謝られた。普段から未熟者と馬鹿にしている子にまで憐れまれる僕っていったい……。

下を向いて項垂れていると、上から影が降りてきた。少し首を上げると、目の前の机にコトっと御猪口が置かれる。更にそこから視線を上にやると、金髪・桃髪・金髪。紫さん、西行寺さん、藍さんが僕と対面するように座っていた。

「お疲れ様。お酒、貰ってきてあげたわ。飲む？」
「……貴方のお酒なんて、飲めませんよ」
「あらあら、それは残念」

それほど残念でもなさそうだ。紫さんはしれっと僕の前の御猪口をスキマにしまった。隣の西行寺さんはにこにこと笑みを絶やさず、御猪口に入ったお酒を口に運んでいる。藍さんは無言で表情を一つも変えない。何しに来たんだこの人たち。

「あらあら？　妖怪の賢者ともあろう方が弱い者虐めかしら？」
「ふふ、面白いことを言うのね風見幽香。貴方の狙いもこの子でしょう？　なんなら貴方も弱い者虐めをしてみる？」
「結構。もうすぐ満開になる花を摘み取る趣味はないわ。摘み取る時はそう、一番美しく咲いた時でないと」

居心地が悪くなってきた場所に、更に幽香さんが乱入してきた。隣にいる妖夢ちゃんは何事かと主に問いかけているが、黙って見ていなさいと言われている。事情が解らず目を白黒させているが、知らない方がいい。……知られない方が気が楽だ。

「……勝手なこと言わないでくれますか？　僕だって無抵抗じゃない」

「解ってるわ、無抵抗の貴方を倒しても何の面白味もないもの。精一杯抵抗して、それでも勝てない相手の存在に絶望する顔を私は見たいの。解るかしら？」

「趣味悪いですね、幽香さん」

「良く言われるわ」

毒を吐こうが、幽香さんはまったくブレない。自分の力に絶大な自信があるからなのだろうか。はたまた、僕程度では相手にもならないと思っているからなのだろうか。

「でも私は花が咲く努力をしているのをただ見ているつもりもないの」

「……どういうつもりかしら？　貴方がこの子の代わりに私と闘うと？　それとも、二人同時に掛ってくる？　私は別に構わないですわよ？」

「フフ、強がっちゃって。……大和、私はこの妖怪を一度倒したことがあるの」

…！？　幽香さんが紫さんに勝っただって！？　……いや、この二

人のことだ、どちらが勝ってもおかしくない状況だったんだろう。

「戯言を……あんなもの、勝負とは言えないわ」

「ええそうね。逃げまどう貴方を私が一方的に殴っていただけなのだから。いいこと、大和。この頭でっかちと闘う時は絶対に距離を取らせないこと。それさえ出来れば貴方の勝ちよ。ただ力の扱いが上手なだけだから。それ以外は貴方以下」

「あらあら……頭が腐ったのかしら、風見幽香。私がこの程度の童に負けるとでも？」

む……聞き捨てならないな、今の言葉は。確かに僕と紫さんじゃ魔力や妖力といった地力の力は比べるのもおこがましいだろうさ。けどそれ以外のモノでカバーしきって見せる。二流には二流なりの闘い方があるんだ。

そう反論しようと口を開ける前に、幽香さんの口が開いた。

「負けるわ。絶対に」

異論は許さない。そう思わせるほどはっきりと、力強くそう言葉を発した。その迫力にこの場の誰もが口を結んだまま動けなかった。聞いていた僕も、言われた紫さんも。

「――――そう言えば、今日はよく集まったわね～」

そんな空白な中、最初に言葉を発したのはやはりと言うべきか、西行寺さんだった。

「…はい、みんな暇だったんでしょうね。最初は心配でしたけど、集まってくれて嬉しかったです」

「だとしても、これだけの妖怪がこうして一同に会することが出来たのは大和さんの成果よ？　ねぇ、紫？」

「……集まる切っ掛けを創ったのは確かに大和よ。でもそれまでの私の努力を忘れないで欲しいわね」

「え、あの……紫様、私には何がなんだか理解出来ないのですが……」

黙って見ておけと言われていたけど、流石に黙っておくことにも我慢の限界だったのだろう。事情を全く理解出来ていない妖夢ちゃんが口を挟んだ。その姿に紫さんは一瞬目をやったが、直ぐに藍さんに目で合図を送った。

「妖夢、少し向こうで私と話をしようか」

「え？　ええ？　藍さん？」

「私も行くわ。これ以上居ても面白くないでしょうし。……あの仙人の相手でもしておこうかしら」

三人がこの場から離れた所で、再び話を始める。その前に一杯いかが？　と西行寺さんに誘われたがやんわり断った……のだけど、無言の笑みを浮かべたまま引っ込まないので仕方なく一杯呷った。空

になった御猪口を置くと更に注がれる。……この人は何がしたいのだろうか。

「ぅん……。これは僕が紫さんに見せれる一つの成果です。邪魔者は消す。そんなことをしなくたって、こうやって僕らは一緒に笑っていられる」

誰もいなくなることなんてない。それを僕は示さないといけない。これはその縮図。僕だって考えなしに今回の参加者を募ったわけじゃない。

「その環境を創ったのは、紛れもなく私よ。好戦的で危険思考……そんな輩を見つけては排除する。その結果が今の状況を生んだのよ」

「外で生きられなくなった妖怪を受け入れるのが幻想郷じゃないんですか……？」

「半分正解よ。ただ、ここの住民は私の裁量によって決められる」

「ふざけてる……神にでもなったつもりですか、貴方は」

「違うわ。私はこの幻想郷の母なのよ、大和」

死に体でやってきた者すらその秤にかける。救いがあるとやってきた場所が、実は一番危険な世界だった。それはどれほど残酷なことなのだろうか。

……確かに紫さんの言う通り、危険な奴が霊夢たちを脅かすと言うのなら僕も黙ってはいない。でも実際に起こしたわけではないのに、ただ危険かもしれないと言うだけで排除するのは間違っているとし

か思えない。何かしらの注意を喚起し、前科があるようならとりあえず一発殴って力関係をはっきりとしておく。それくらいでいいはずなんだ。ここにいる人達の力なら、並大抵の事では動じるわけないのに。どうして殺すという最終手段を用いようとするのか。

「何事もルールが大事なのよ。守れない者にはご退場願うだけ……。これ以上話しても無駄ね。私と貴方が言葉を交わすことで相容れることはないのだから」

「……首を洗って待ってて下さい」

「楽しみにしておくわ。幽香じゃないけど、私もただ勝つだけでは面白くないわ。じゃあね、幽々子。藍には気が済んだら帰ってくるように言っておいて」

そう言い残して、紫さんはスキマの中に沈んでいった。僕は西行寺さんが再び注いでくれたお酒を呷った。……うん、さっきよりも美味しい。美人さんに御酌してもらうのは男として至高の一瞬だ。

そうやって二人でお酒をゆっくりと飲んでいると、後から元気な声が聞こえてきた。

「せんせ！　花火作れない!?」

「……はい？　なんでまた、花火なんてものを？　今日は打ち上げ花火があるんじゃなかったっけ？」

「花火のおっちゃんたちが天狗のお酒で酔っ払って、立ち上がれないんだって！」

「あらあら、それは困ったわね～」

「文……天狗の酒なんて度数の高いものを……」

「せんせ、助けて！」

そう言われても流石に花火は……親友の高笑いが聞こえてきそうだよ。まったく、文はこういう時は絶対に悪ノリするからなぁ…。

「……あれ？　そう言えば霊夢は？」
「うん？　あそこだよ」

びし！　っと魔理沙ちゃんが指をさした先に霊夢はいた。しかし、同世代の男の子たちに囲まれているのだが。霊夢が男の子に囲まれる→ちょっと困っている霊夢→目が合う。助けを求めている→周囲を蹴散らせ！

花火よりなにより、三度の飯より霊夢です。西行寺さんにお礼すら言わずに、魔理沙ちゃんの首根っこを持ち、それこそ亜高速と言えるスピードで霊夢の横に移動した。

「ヌフフ……ねぇ僕たち？　ちょ～っとオイタが過ぎるんじゃないかなぁ……？　お前ら、家の娘に手を出したら三途の川すら渡らせん！！」
「おお！　せんせ、親馬鹿！」

全力で魔力と気を放出しながら威嚇すると、男の子たち蜘蛛の子を散らすように大泣きして逃げていった。この子は嫁には行かせんぞ

！　少々大人げない気がするけど、これくらい父親なら普通だ。

「そんな訳がありますか！」
「イッ～～～！？」

成果に満足して頷いていると、後頭部を堅い何かで思いっきり叩かれた。何事か！？　振り返った先には将棋場などとは比べ物にならないほどの怒気を含んだ映姫様と華扇さんが立っていた。

「まったく貴方と言う人は！　ただの人に、しかもまだ子供を脅すとは何事ですか！？」
「でも映姫様、あのままじゃ霊夢が襲われて――」
「ッばかものーーーー！！　そんなことするのは貴方だけです！　大事にしたい気持ちは解るけど、少しは限度を考えなさい！　今の貴方はあの萃香とまったく変わらない！」
「僕だってしませんよ！？　あと、母さんよりもだいぶマシだと自負しています！」
「「黙ってなさい！！」」
「……ハイ」

……はい、はい、……ええ、僕が悪うございました。本日何度目か解らないお叱りを受けている大和です。

「二人とも、やまとさん「ぐっはぁ！？」　をいじめないであげて」
「そうだそうだ！　せんせをいじめるな！　せんせは今から花火を

打ち上げるんだから！」

「うわぁ……大和さん、死にました？　…あやや、痙攣してますね」

「大和様にとって今日一番のトドメかもしれません」

う、煩いぞ外野……この程度で死ぬなどと…。この伊吹大和、侮って貰っては困「大丈夫？　やまとさん」　ぅっ……。

「お姉様、ヤマトが死んじゃった」

「落ち着きなさいフラン。この後で慰めるというイベントが待っているはずなの。そこまで我慢するのよ」

「レミィ、どこでそんなことを？」

「うん？　図書館にあったわよ」

「――ぬふぅ…こうなったら……こうなったらやけだこんちくしょーッ！　行くよルーミアちゃん！！」

「おー！　なのだ！」

外野が煩過ぎて悲しみに浸る暇もないねッ！　だったら精一杯、霊夢に最後の楽しい一日を送ってやる！

二人、空に向かって多種多様の色と形をした魔力・妖力弾を打ちあげ

――――――ドンッ！！

弾けさせた。弾けた魔力弾が夜空を染め上げていく。次は時間差と形を考えてどんどん空に向かって打ち上げる。

「へっ、お前にしちゃあ粋なこと考えるじゃないか。手伝ってやるよ」

「もこたん……」

「うっせ」

妹紅の力も加わり、次々と色取り取りの花火…弾幕が豪快な音と共に夜空に散っていく。その音に惹かれた様に、夜店を回っていた人達も空を見やって歓声を上げている。見たことも無い花火だと思っているのだろう。当然だ、こんなこと考えてもやる人なんていないだろうからね！

「あらあら～、楽しそうなことしているわね～。…妖夢、行ってらっしゃい」

「ご自身ではやらないので？」

「私は見ているのが楽しいの～」

「……解りました。では行ってまいります！」

――妖夢ちゃんが

「このレミリア・スカーレットが一番綺麗な花火を上げてみせるわ！」

「ほらほら、パチュリーも！」

「もう、疲れてきたのに……」

――紅魔館の面々が

「これはシャッターチャンスですね！　これほどの妖怪が――」

「文さんも花火を打ち上げて下さいよ。華扇様も」

「花火もいいけど、このカラフルな弾幕も中々なものね……」

――妖怪の山の三人も

「ほら、映姫様も打ち上げましょうよ。たーまやーーーー！！」

「ふぅ……その後が抜けていますよ小町。……かーぎやーーー！！」

……場を盛り上げてくれるために顔を真っ赤にして頑張ってくれた閻魔と死神も、みんなが夜空に向かって思い思いの花火を打ちあげる。

「あらあら、せっかく私たちが夜空を彩るのよ？　空を横切る花火があってもいいんじゃないかしら」

「ひｍ……てるよ様！　危ないから降りましょうよ！」

空では輝夜と鈴仙が楽しそうに弾幕を避けながら花火を四方に放っていた。確かに地面で打ち上げるだけってのも面白くないな。そう

呟いた妹紅も空に上がり、慧音さんもそれに続いた。僕もそれに倣って空に上がると、何時の間にか全員が空に上がってきた。

「ほら大和！　私の弾幕(あい)を受けなさい！」
「ちょ！？　レミリア、それ殺傷能力高過ぎだって！」
「大丈夫よ！」
「アッハッハ！　楽しいねヤマト！」
「全然楽しくない！！」

ちょっと時間が経つと、何故か全員が僕の方に向かって弾幕を放つ様になった。下からは頑張れー！　やら、そらそこだ！　なんて応援まで聞こえてくる始末。こんちくしょう、他人事だと思って楽しみやがって。

「僕だってやられっぱなしじゃないぞ！　マスター…」
「それは元々は私のモノよ」
「へ？　ッて、うぉわッ！？」

背筋にゾクッと嫌な予感が走った瞬間に回避行動を取ったことが功を奏した。あと少しでも遅れていたら幽香さんの放った力の奔流にのみ込まれて……

「や～ま～と～～～！　後に私たちがいるのを解っていて避けるなんて、いい度胸してるじゃねぇか」
「ウワー妹紅サンたち、何デソンナニ真ッ黒ナンデスカ？」

振り向いた先には真っ黒に焦げた面々がいた。

「気にすんなよ、お前も真っ黒にしてやるから」

――フェニックス…

――蓬莱の玉の…

「え……ちょ…」

――スピア・ザ…

――レーヴァ…

――賢者の…

「みなさま…？　なんでこちらを向いて…？」

――一念無量…

「なんでそんな良い笑顔！？　みんな楽しくやってるんなら別に僕じゃなくても！？」

――無双風…

「文？　僕たちシンユウだよね…？」

――ラストジャッジ…

ウワーォ、すごい光景。変わりたい人がいたら今すぐ此処に来てね、世界一綺麗な光景を見せてあげる。代金は命ね。

「ルーミアちゃん……。僕、生きて帰ったら零夢の墓参りに行くんだ……」

「……うん、頑張ってね！　私は一足先に降りておくから」

ふっ……悪友にも見捨てられた、か。僕の命運もどうやらここまでらしい。

「大和」

「はい！　なんでしょうか幽香様！　助けて下さい！」

「耐えなさい。全員分じゃないだけマシよ」

「慰めになってなーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーいッ！！」

太陽が昇るにはまだまだ早い時間にも関わらず、幻想郷の一部では朝日が昇ったかと思うほどの光が満ちた……らしい。

「と、言うわけでだ。魔法は常に危険と隣り合わせにある。だから僕は魔理沙ちゃんに教えるのは反対だ」
「あれ、せんせーだけが危険だったじゃんか」

そう言われると何も言い返せないね。……まぁ、飛行魔法だけならいいかな。霊夢の友達になったんだ、空くらい飛んで貰わないとあの子が悲しむだろうしね。

波乱縁日・終（後書き）

予定を二回も変更したじらいです。

長かった縁日もこれで終わり、次回からは魔理沙と大和の日常編を！　…と考えていたのですが、割愛。いずれ過去編で一度にやるか、それとも～があったから～になったのだ、みたいな感じにしようかと。

なので次回はついに紅魔館のメイド長が初登場。もっとも、主人公組が幼いのであの人も幼いのですが…。そして次回は大和の魔法の完成宣言と、その魔法の片鱗をちょこっとだけ。そして大魔道の名を襲名します。

それが終われば…原作です。この想いは次回にでも語らせて欲しいですね！

それでは次回

新しいメイドと大魔導師（前書き）

咲夜さん初登場。キャラ崩壊してます

『こんにちは大和。ご機嫌いかが？　子育てに忙しいと聞いた貴方の為に、息抜きの為のお茶会でも開こうと思っているの。昼頃に開くつもりだから、巫女には留守番でもさせていればいいわ。じゃあ待ってるわね。――ああ、門を潜ったら能力を全開にしておきなさい。これは絶対よ』

こう書かれた手紙を蝙蝠が持ってきた翌日、僕は紅魔館に行くために豪雨の中を飛んでいた。手紙に合った通り、霊夢は神社で留守番だ。巫女修行をしておくようにと言いつけてあるのだけど、どうしていることやら……。

あの縁日のあと、僕らの関係はまるで壊れた歯車のようなちぐはぐになってしまった。原因は僕が急に霊夢への対応を変えたからだ。今までとは違い、まったくの他人として扱われることに霊夢は戸惑っているのだ。

――どうして？

霊夢はそんな雰囲気を醸し出すことが多くなった。僕もそんな不安そうな顔を見つけては『どうかしたのか？』　と尋ねてはいる。でもその聞き方も今までとは違うので、霊夢の不安そうな顔は尽きな

い。……きっと時間が解決するだろう。それまで耐えて欲しいと思う。霊夢の未来を考えるのなら、これが一番だと思うから……。

前が見えないほど降り続く雨に、少し気が重い。

「明日にしよう、って分身に言付ければよかったなぁ……」

魔法で覆っているから香霖堂で貰った一張羅が濡れることはないけど、それとこれとは話が別だ。これだけ雨が降っていれば、濡れてなくても濡れた気になってしまう。

「じめじめして気持ち悪いし……今日は早く帰ろう」

どちらにしろ、今の不安定な霊夢を一人で置いておくことは少し不安だ。

◇◆◇◆◇◆◇

「や、美鈴。……酷い雨だね」

「こんにちは、大和さん。本当に酷い雨ですよ。傘を差していても濡れるんですから」

はぁ、と溜息を吐く美鈴の服は端々が濡れている。そんな美鈴と打って変わって、僕はまったく濡れていない。そんな美鈴が少し恨めしそうに見て来るので、熱風を送って服を乾かしてあげた。

「ありがとうございます。…相変わらず、こういう魔法は得意なんですね」

「家庭的な魔法使いとでも呼んでよ」

幻術以外はからっきしな僕だけど、一般生活に使える魔法は得意だ。もっとも、魔法使いなら誰でも使えて当たり前のようなものばかりだけど。戦闘に使うことは出来ないけど、修得しておいて損はないと言われて修得したものだ。まぁ先生の言った通り、損どころか得ばかりなんだけど。

「じゃあ僕は中に入るね。雨の中辛いだろうけど、門番頑張って」

「気遣ってもらってありがとうございます。……そうだ、能力の件は憶えてますよね？」

「ずっと発動しておけってことだよね？　大丈夫、憶えてるよ。でも何でそんなことを？」

「それは入ってからのお楽しみです。大丈夫ですよ、大和さんなら」

非常にありがたい言葉だ。君なら出来ると言われて喜ばない人なんていない。でもね、何故能力を常に展開しておかなければならないのか、僕にはまったく心当たりがないよ。言われたからには一応そ

れに従っておくけどさ、何でなのか教えてくれたっていいじゃないか。

少し愚痴りながら門を潜り、大きな扉を開けて館の中に入る。

「……おかしい、館の中が静か過ぎる」

館に入った瞬間、違和感を僕の身体を包み込んだ。物音一つしない、まるで無の中にいるみたいだ。騎士団や数々の実戦を経験している僕の身体は、考えるよりも早く戦闘状態に移行している。気を纏い、索敵の術式を四方へ巡らせる。

「レミリア達の魔力は感じ取れる……。よかった、何かよからぬことでもあったのかと……ん？」

廊下へと続く扉から一人の少女が出てきた。見た感じ、霊夢と同じ年齢だろうか。銀髪をした小柄な少女だ。メイド服を着こなしていることからメイドだと思うが、こんな子共は見たことが無い。あの時ならいざ知らず、幻想郷でのメイドは妖精たちがやっている。何せここは吸血鬼の根城だ、目の前の少女のような『人間』　がこの紅魔館にいることはありえない。

「あれが対象……新しい私の初仕事」

コツコツと靴音を立てて近づいてくる少女がそう言った。成程、信じられないことだけどレミリア達の新しいメイドみたいだ。初仕事と言うのは客人(ぼく)を案内することなのだろう。

無表情で、まるで機械のように歩いてくるメイドをじっと見つめ続ける。どれ、紅魔館の小さなメイドがどれだけ仕込まれているか確かめてみようじゃないか。執事経験のある僕としても気になる所があった。

――――――いや待て……だとすると、今も感じるこの静けさはいったい……？

「排除する」

「ッ！」

目の前で僕を見上げていた少女が一転、鋭利なナイフを突きたてようと迫ってきた。

「…！　私の時間の中で動いた！？」

「いきなり何を！？」

突き出されたナイフを躱して距離を取る。少女は驚いたように声を上げているが、それは僕も同じだ。ナイフを突き出された速度が下級妖怪のそれだったから良かったものの、師匠たち上級クラスだっ

たらと思うと……僕もまだまだ修練が足りない。

「でもっ！」

「待て！　話をッ……問答無用か、なら！」

女子共は関係ない。闘う意思を持った者は皆等しく戦士であり、故に加減は許さぬ。

構えを取り、少女を迎え撃つ。師匠達の教えの通り相手をさせて貰おう。でも僕だって弱い者虐めをするつもりは無い。首裏への当身で眠って貰おう。

「フッ…ハァッ！！」

急所を狙ってくるナイフを寸での所でのらりくらりと躱していくと、先程まで無表情を装っていた顔に陰りが見えだした。僕との実力差に気付いたのだろう、顔を歪めている。どうやら機械と感じたことは訂正する必要がありそうだ。それでも闘う意思を下げないのは立派だが……無謀でもある。実力差のあり過ぎる相手と闘うには事前に策を練っておくか、逃げるかしかないのに。

「……なかなか急所を見せては貰えないね」

しかし未熟ながらにして見事。全力には程遠いとはいえ、僕の動き

にしっかりと身体を合わせている。僕が首裏への一撃を狙っていることに薄々気付いているなんてね。この子を試したくて態と見せているとはいえ、戦闘中に相手の真意を読みとって体捌きを行うなんてこの年齢にしては出来過ぎだ。おそらく霊夢でも出来まい。だとするとこの子、

「厳しい修練の日々を過ごしてきたのか、はたまた実戦経験豊富なのか」

「ッたあ！！」

「聞く耳持たず、ね。その歳にしては規格外だけど……もっと周りに気を配らないと」

「あっ――――――」

隠していた魔力糸を幾重にも重ねて面とし、それで少女の首裏を叩いた。ぎりぎりとはいえ目視出来る程度に抑えて幻術を掛けていたのだけど、やはりここまでは見抜けなかったのか。でも、それを抜いたとしても……

「面白い。そうでしょう、大和。この子、途轍もない才能があると思わない？」

「……遅かったじゃないか、レミリア。それにいきなり襲ってくるなんて酷いよ」

「ごめんなさいね。でもこの子に貴方の強さを教えるのはこれが一番だったの。それに遅い速いの理屈ではないわ、この子の前ではね。その子をおぶって頂戴、お茶の準備が整っているわ」

「僕の強さって……別に見せびらかす物でもないんだけど」

何故か楽しげに肩を揺らして歩くレミリア。その小さな背中を追うように、背中に先程の少女を背負って続く。さて、そろそろこの子の説明があっても良い頃合いだと思うんだけどな。そう思っていると、前を歩くレミリアから声が上がった。

「十六夜咲夜。私の新しい従者よ」
「…本名じゃないでしょ」
「解る？」
「うん。この国の人間じゃなさそうだし」
「私が名付けてあげたの。私に仕えるのだから、全てを捨て、全てを私に委ねなさいってね」

それは……あまり好きなやり方じゃないな。声には出さないけどそう心で思う。

「……安心していいわ。この子は元々、吸血鬼と闘う為に仕込まれたらしいの。でも既に空想上の産物に過ぎない吸血鬼を外で見つけることは不可能。彷徨っている最中、気付いたら幻想郷にいたらしいわ。出会った当初はいきなり殺されかけたけど、今じゃ私の従者」

僕が難しい顔をしているのが解ったのだろう、レミリアはそう付け足した。居場所のない少女を引き取る感覚にでも近いのだろうか。でも一度殺されかけた相手を身内に引き込むなんて流石は現当主レミリア・スカーレット。あの馬鹿親父とは違って懐が深い。

「……って、ちょっと待った。だとすると、この子を育てた何かしらの人物やら組織やらがあるはずだ。それについては？」
「な～んにも解らないわ。魔女狩りを行っていたテンプル騎士団とその一派か、はたまた何処か別の組織か。何も解って無いのよ。この子自身、この歳では身の丈に合わないほどの卓越した殺人術しか身につけてなかったし。ここまで常識を育てるのに執事長（クラウス）も苦労してたわ」

それはまた……執事長も苦労をしたんだろう。僕がむりやり執事の真似事を教えられた時も……いや、思い出すのは止めておこう。あの狼執事長の怒った姿なんて、思い出しただけで震えが止まらなくなる。

でも一番肝心なことが判明していないのか……。まさかとは思うけど、またあの連中と会うなんてことは……。

「大丈夫よ大和。今のところ、そんな運命は視えてないから」
「……はは、なら安心だ。なんと言っても、運命を操る我らがお嬢さまの御言葉だ。これほど安心出来ることは無いね」

そう言って、腰に手を当てて自信満々に言いきるレミリア。当主になったとはいえ、あの頃とまったく変わらない仕草が微笑ましく感じる。そんな見ていて微笑ましい笑顔を浮かべている頭を、僕は軽く撫でてやった。

「……こうされるのも、なんか久しぶりに感じるわね」
「そう？」
「そうよ。だって大和、神社に住み着いてからは特に来なくなったもの」
「住み着いたって……そんな言い方はなんかアレみたいで嫌だね。お兄さんがいなくて寂しかった？」

既に手は動かしていないけど、掌には柔らかい髪の感触が伝わってくる。ぴょんぴょん飛び跳ねたり、左右に揺らしたりと、レミリアが自分で頭を動かしているのだ。まったく、何時まで経っても子供なんだからさ。

「そりゃあ、旦那様がいなかったら寂しいわよ。何時になったら紅魔館の当主の座を引き継いでくれるの？」

前言撤回、やっぱ色々とダメだこの子。

◇◆◇◆◇◆◇

「ヤマトヤマト、今日は泊まっていくの？」
「いやいや、むしろ早く帰ってお風呂に入りたいよ。じめじめして、

もう最悪だ」
「ここのお風呂に入ればいいじゃない。もう何度も入っているのだから、今更でしょうに」
「……遠慮しとくよ、パチュリー。向かいのお譲様が涎を垂らしている姿を見たら余計に、ね」
「お姉様……」
「……ハッ！？　よ、涎なんて垂らして無いわ！」

フランドール、パチュリー、そして涎を拭うレミリア。小悪魔さんは仮眠中で、美鈴はこの雨の中も門番をしている。だから何時もと同じ三人でのお茶会だけど、今回は新しく参加者が増えた。

「お譲様方、紅茶をお持ちいたしました、ってうわぁッ！？」

ガッシャーン、と大きな音を響かせて紅茶をぶちまけた新しいメイド、咲夜ちゃんだ。紅魔館の高級な絨毯を紅茶が吸っていく……。
あぁ、こりゃあ掃除が大変そうだ……。

「やーい、咲夜のドジっ子～」
「うぅ……も、申し訳ありません（キリッ」
「そんな顔したって、咲夜はドジなんだから。ほらほら、笑って～？」
「い、妹様！　止めて下さい！」

何を隠そうこの咲夜ちゃん、メイドの癖にメイドスキルが全く無い

のだ。オマケにドジっ子属性付き。箒を掃けば箪笥が吹き飛び、雑巾を掛ければ床に穴が空く。そして更に、完璧なメイドであるかのように無駄に虚勢を張っている。実際の行動とのギャップが更に皆の笑いの種になっているのだけど、本人はそれを全く理解していない。駄目メイド、ここに極まると言うものだ。

「咲夜」
「も、申し訳ありませんお譲様！　今すぐ掃除を――」
「あとで執事長に頼んでおくから」
「うっ……も、申し訳ありません……」
「いいのよ。時間を掛けて憶えていきなさい」

そう咲夜ちゃんに頬笑みかける姿は正しく先生のそれだった。まるで親が子供に向ける笑み。どうやらレミリアは本気でこの子を気に入っているらしい。

「それよりも咲夜、貴方の先生が見つかったわ」
「…！　本当ですか!?」
「ええ、そこに座っている大和よ」
「……え？　僕？　ムリムリ！　無理だって！」

先生って言うのはその名の通り先生なんだろう。でも僕は既に手一杯もいい所だ。霊夢の相手に魔理沙ちゃんへの魔法講義（仮）、妖夢ちゃんとの模擬戦、そして僕自身の鍛錬。どれも外せない事ばかり。分身で数を稼げるとは言っても限度がある。

「最初は執事スキルを活かして咲夜を立派なメイドにして貰おうかと思っていたけど、それは執事長に任せておくわ。大和には美鈴と一緒にこの子に実戦経験を積ませてあげて欲しいの」
「時間的に無理だよ。それに美鈴が教えるのなら僕はいらないじゃないか」
「それがいるのよ、運命的に。それに『時間を操る程度の能力』を持っているこの子の前に、時間なんて概念は通用しないわ。私の睨んだ通り、大和なら咲夜の時間に介入出来るみたいだし」

時間を止めるのをマイナスとして、自分が先に進もうとするのがプラス。＋－でちょうど0、なんてレミリアは軽く言っているけど、とんでもない能力を持っているんだねこの子。ほとんど無敵じゃないか……。

あとレミリア、どんな運命だ、どんな。僕だって運命じゃないけど未来は視ることが出来る。この子がメイドとして立派に働いている未来だって視えているんだ。だったら別に僕が関与しなくてもいいじゃないか。

「大和には月に数度来て相手をして貰うだけでいいの。だって元々――」
「あの、お譲様…？」　何かしら？」
「私も出来れば遠慮してもらいたいです……」
「……何故かしら？　大和は優秀よ。それに元人間でもある。貴方が得られる物は多いと思うのだけど」
「だからなんです。何と言いますか、私の能力が通用しないせいで苦手意識が……」

……つまりだ、僕は時間がないので無理。この子は僕に苦手意識が芽生えたから出来れば止めて欲しい。……結果が出たじゃないか！

「レミリア、この話はなかったことに……」

「駄目よ。咲夜、貴方も私の従者になるつもりならもっと強くなりなさい。その為に、大和の教えを受けなさい！」

「本音は？」

「そうすれば会う機会が増える…ってパチェ！？　何言わせてくれるの！？　とりあえず咲夜！　貴方は教えを受けなさい！　これは命令よ！」

「そんなご無体な！」

「ねね、ヤマト。お姉様たちなんてほっといて遊ぼうよ」

出来れば僕もフランの言う通りにしたいよ。こんなことに付き合わされるくらいなら、今は霊夢の傍に居てやりたいし。図書館にだって小悪魔さんに会いに……もとい、本を読みに行きたい。でもレミリアは逃がさんと言わんばかりに目を光らせているし、咲夜ちゃんは助けを求めるようにチラチラ見てくるし。唯一中立のパチュリーは何時もの如く我関せずを突き通している始末。やっぱり僕の味方は何処にも居ないのだ！

「もうあれだ、月に数度くらいなら僕も時間を割くよ。それでいい？」

「それでいいわ！　咲夜もいいわね！？」

「……それがお嬢様の命ならば」

うわぁ……凄い嫌な顔されてる。何で断ってくれなかったんですか！　って言葉が聞こえてくるよ。僕も断れるのなら断りたかったけど、こうなったレミリアは何が何でも自分の希望を徹すからね。諦めるしかないんだ。咲夜ちゃんも従者になるのならその辺りも早く学んだ方がいいよ？

「伊吹大和。よろしく」

とりあえず先生になるのだから、と思い手を差し出して握手を求める。何事も信頼関係が大事だからね。妖夢ちゃんとの模擬戦よりも一方的なものになると思うけど、この子もいい物を持っている。……追い抜かれないようにしないと。

「……十六夜咲夜。よろしくしてやらんこともないです。ガブッ」
「ッアンギャー！？」
「ああ、咲夜は気に喰わないことがあったら噛みつく癖があるから注意してね。直しなさいって言っても聞きやしないんだから……」

それは主としてきっちりと直しておいてよ！

「咲夜！　何時まで噛んでいるの！？　大和を噛んでいいのは私だけよ！？」
「怒る所が違うッ！！」
「フンガーッ！」

「大和、あとで図書館の方へ来なさい。話をしましょう」
「そんなことよりも今助けてよ！？　って、イタタタタッ！？」
「フンッガーーーッ！！」

◇◆◇◆◇◆◇

「うぅ、手が真っ赤だ…。見てよこれ、歯型までくっきり。まったく酷い目にあったよ」
「相も変わらず、貴方は大和ね」
「……なんだろう、その言い方に酷く悪意を感じるのは」

紅魔館の大図書館。僕の所有物となっているけど、実際にはパチュリーの物のようになってしまっている。まぁ管理やら何やらを全部丸投げして、欲しい資料だけ貰っているから何も言えないんだけど。こんな広い図書館を一人でやりくりしている小悪魔さんには脱帽だよまったく。

「さて、じゃあ聞かせて貰おうかしら。貴方の『魔法』　を」

図書館に寄ったのはこのためだ。首根っこを掴まれ、無理矢理ここまで連れて来られたのはパチュリーが僕の魔法について理解するた

めだ。本来魔法使いと言うものは他人に己の魔法を晒さないのが普通なんだけど、僕らの間じゃそんなものはない。ずっと助けてきてもらっているし、それに先生の魔法は僕ら二人で組み上げたものだからね。

「じゃあまず最初。逆転術式（アンチシール）。まぁそのままの意味だね」

「事象を逆転させる術式ね……。使い方は？」

「秘密」

「……」

「いや、考えくらいつくだろ？」

障壁に付与して攻撃を跳ね返すとか、その他色々と使い勝手がいい魔法だ。

「じゃあ次に行くね？　次は――――――」

先生の編み出した魔法の完成系を次々とパチュリーに示していく。小さな巨人、残片（レムナント）、その派生形である全残片（レムナント・エーリュシオン）。そして集大成である奇跡の魔法『箱庭（クレイドルガーデン）』。まぁレムナントの魔法には裏バージョンがあるんだけど……それは言わないでおこう。僕だって使いたくないし。

「はぁ……」

「…？　どうしたの、溜息なんて吐いて」

せっかく完成した魔法の説明が終わったって言うのに、溜息なんか吐いちゃって。どこか可笑しな所でもあるのかと思っちゃうじゃないか。

「溜息くらい吐くわよ。……どうもこうも、『逆転術式』と『小さな巨人』　以外、貴方の魔力量じゃウンともスンとも言わないものばかりじゃない」

「……あ、あははは、仕方ないよねーこればっかりは。無い物ねだりだし。でも残片は使えるんだよ、驚いたことに」

「だとしても笑え無いわよ。だから最初に言っておいたじゃない、完成させても貴方じゃ使えないって」

「面目ないです」

「私に言われてもね……。魔力さえもっとあればなんとかなったのに」

「パチュリーなら使えそう？」

「……そうね、最後の『箱庭』　以外なら」

「これが地力の差か……」

パチュリーの言う通り。あの三つ以外、中級程度の魔力量しかない僕ではこれらの魔法は使いこなせない。箱庭なんて以ての外だ。使いこなすどころか、術式の起動すらしないだろう。それこそインチキでもしないかぎり。

「でも対策も考えてある。もう儀式用魔法陣の再構築だって終わってるし。今だって戦闘中でも描けるようにって、魔力糸の練習もしてる」

「そう簡単に行けばいいけど」

はぁ、と再び深い溜息を吐くパチュリー。そう思うのなら、あの時みたいにパスを繋いでくれればいいのに。そうすれば僕だってこの魔法を使いこなすことが出来るはず！　……そう言えばまだ繋がりは残っていたはずだ、ちょっと試してみよう。

「……あれ？」
「無駄よ。私が拒否してるから」
「酷い」
「人の中に土足で踏み入ろうとする者の言葉じゃないわね」

むむむ……そう簡単に繋いでは貰えないのか。でもパチュリーって優しいから、僕が本当にどうしようもなくなったら手を貸してくれそう。今までだってそうだったし。…でもこれは僕の闘いだから、やっぱり一人で勝利を勝ち取りたいと思う。だとすると、やはり勝負の分け目は儀式用魔法陣が描けるかどうかに掛ってくるか……。

「でもまさか、本当に貴方がこれを完成させるとは思わなかった」

そうやってうむうむと考えを巡らせていると、深い溜息のようにパチュリーが言葉を吐きだした。

「…？　何言ってるんだ、パチュリーだって一緒だったじゃないか。

文通でだけど」
「馬鹿ね。私はこういうアプローチもあるんじゃないの？　って書いていただけよ。術式の構成は全て貴方」
「……うそだぁ」
「嘘なものですか。何度私が度肝を抜かれたことか…。やっぱりこれは貴方のための魔法なのよ、大和。……いいえ、当代の大魔導師・伊吹大和」

大…魔導？　……それって確か先生の！？

「あの人の最後の教えを貴方は完成させた。あの人すら為し得なかったことを、貴方は成し遂げてみせた。この功績は正に大魔導師のそれよ。……ありがとう、大和。貴方のお陰で、私は新たな魔法の完成をこの目で見ることが出来た」
「そんな……僕なんかが大魔導師だなんて」

僕へと深く頭を垂れる姿に混乱が収まらない。そりゃあ全く新しい魔法を生み出すとかの功績を上げれば、それなり以上の魔法使いとして名が広がるとは聞いたことがあるけど……僕が大魔導師？　魔力なんて、魔法使いからしたら底辺から数えた方が早い上に、幻術以外はからっきしな僕が？

「僕なんかよりもパチュリーの方が相応しいと思うんだけど」
「馬鹿ね、貴方。魔法使いの中では、弟子は師の全てを受け継ぐ。短い期間、そして仮とはいえ、大魔導師の弟子であった貴方がその名を受け継ぐのは最初から決まっていたことなのよ。……例え貴方

がどれだけへっぽこ魔法使いだったとしても」
「はぅ!?　…ね、ねぇパチュリー、もしかして…悔しがってたり……？」
「悔しくなんかないわよ」
「……」
「悔しくなんかないわよ。……じっとしてなさい」

二度も言ったのは、なんでだろうね？　なんてツッコミを入れることは出来なかった。藪を突いて魔女が出てくるのは勘弁です。

でも大魔導師って、そんなに凄いものなのかな？　僕自身はまったく興味がないからさっぱりなんだけど……。事態が理解できない僕だけど、そこに立っておけと言われたので立っておく。

「これは貴方の師が着ていたもの。感謝しなさい、封印を解いて奥から引っ張り出してきたのよ？　大魔導師シルフィーユ・スカーレットのローブを」
「……これ、レミリアたちにとっては形見なんじゃ？」
「許可は取ってある。むしろ喜んでいたわ。亡き母親のローブを預けることで貴方との絆が深まるって。さぁ、受け取りなさい」

渡されたローブに袖を通す。魔法使いのローブらしく、袖も足元も全てが覆い尽くされてしまった。……別に僕が先生より小さいとかそう言うことじゃないはず。でもこれを着ていたら派手に動きづらいかな？　そう思っていると、ローブは幾何学模様を浮かべて淡く輝きだした。

「これは…？」
「貴方にとって一番良い状態に変化しているのよ。……どう？」
輝きが収まった時、僕は先程とはまったく別物のローブを羽織っているかのように感じた。
「すごく軽い。まるで羽織っていないみたいだ……。袖も長いはずなのに、派手に動いても全然問題なさそう」
「拳士である貴方にとっても使い勝手がよさそうね、大魔導」
「……あの、パチュリー？」
「何かしら大魔導師。私は機嫌が悪いのだけど」
拗ねてる。この魔法使い、大魔導師になれなくて拗ねてらっしゃる。口を尖らせてそっぽを向いてしまった。その姿、まるでヘソを曲げた猫そっくりだ。
「早く帰りたかったのでしょう？　……帰れば？」
「酷い！　本当に扱い酷くない！？」
「私も暇じゃないのよ。……ああそうだ、大魔導がどう言うものかはこの際理解して貰わなくてもいい。でもこれだけは憶えておきなさい。――大魔導師の敗北は魔法使いの敗北。解った？　解ったのなら帰りなさい」
「……やっぱり悔し「早く帰る！」　了解しました！！」

無理矢理追い出すなんて酷いよ！　まだ小悪魔さんと話もしてないのに！　猫をあやすように撫でてやろうか、パチェ猫め！

新しいメイドと大魔導師（後書き）

クリスマスが近くても関係ないじらいです。カップルだらけの中でバイトとか死にたくなります…ｏｒｚ　そんな時は漢字にルビを振って中二になろう！　…ｏｒｚ

そんなことは置いておいて、今回、大和は間違いを一つ犯しています。馬鹿なことですが。更に咲夜ちゃん。何がどうして駄メイドとなってしまったのか…。まぁ成長するころには瀟洒なメイドに変身してくれることを信じましょう。

そして遂に魔法の名前が出てきました。漢字にルビを振るのはロマンかと。実際に使うのは一回ぽっきりかもしれませんが。その成果として大魔導の名を襲名。大和の場合は大魔導師（笑）ですがｗジャージの上からローブを羽織る。それってなんて魔法使い…

ではまたすぐ後に

閑話　空白の時間（前書き）

一気に時間が跳びます

閑話　空白の時間

～霧雨魔理沙～

私には大っ嫌いな奴がいる。本当に嫌いで、顔も合わせたくない奴がいる。そいつの名前は伊吹大和。腹立たしくも、私が幼いころ魔法を習っていた男だ。最初の頃はなんとも思わなかった。でも教えて貰っていくに連れて、私たちの仲は悪くなっていった。あいつは私のことなんて何も解ってくれなかった。理解しようともしてくれなかった。だから私はあいつが大嫌いなんだ。

でも妹紅の姉さんはそうは言わない。笑って、アホだけど凄い奴だと言ってた。姉さんが嘘を吐くとは思えなかったけど、確かめる為に阿求に資料を見せて貰いに行ったこともある。そこに書かれてあったのは、あいつの途轍もない経験の数々。大きな争いには必ず参加し、必ず戦果を上げていると書かれてあった。

でも、それは本当のことか？　私は一度もあいつが闘っている姿を見たことが無い。それどころか、妖精に売られた喧嘩すら謝って躱して行くような奴だ。そんな奴が強い訳なんて無い。そんな奴に教えて貰ったって、強くなれるはずもない。

だから私は一人で強くなった。あの男を見返す為に。今日はその為の最後の仕上げ、頼んでいた箒を香霖堂まで取りに行く予定だ。霖之助は私よりもマジックアイテムを創るのが上手だからな、頼んで

おいたのさ。

「やぁ魔理沙。頼まれていた箒、準備しておいたから持っていくといい」
「サンキュー。……お！　流石は霖之助、いい仕事してるぜ」
「……そうかい、なら良かったよ。」

古くなった実家の箒とは今日でおさらば。明日からはこの箒で、新しい魔理沙さんの誕生だ。今の私を止められるやつは、そうそういないぜ！

「行ったよ……。まったく、そんなに気になるのだったら自分で渡せばいいのに」
「……嫌だね」
「二人とも素直じゃないね」

◇◆◇◆◇◆◇

～博麗霊夢～

私の神社には、何とも言えない不思議な魔法使いが住み着いている。古い記憶を漁ってみると、何時どの記憶の中にもその姿がある、なんとも不思議な魔法使い。記憶の中の彼は太陽のような笑顔を浮かべているのに、目の前にあるのはただの仏頂面。まるで別人だ。

そんな彼に一度『貴方は私の何なのか？』　と聞いたことがある。貴方が親なのか？　とも。そう聞くと、彼は困ったように苦笑して『何なんだろうね、僕にも解らないよ』　と情けない言葉を返してくる。

そんな彼に、私は『ふーん』　とだけ返しておいた。物心ついた時から一緒に居たようだし、私の成長を見守ってきたとも言っていた。記憶の中もそう。そんな彼を今更追い出すことも出来ず、今でも共に神社で生活している。なんとも不思議な関係だけど、何故か心地いいと感じてしまう。

そんな彼がつい先日、『君が出て行って欲しいと、少しでもそう感じたら言って欲しい。僕は出ていくから』　と言った。私は笑って『馬鹿ね』　とだけ答えると、久しぶりに仏頂面が変化した。眉と口元がピクピクッと動いただけだけど、能面のような顔ではなくなった。

一緒に暮らしていると、まだ記憶の中でしか見たことのない太陽のような笑顔を見る事が出来るかもしれない。それを拝める日が来るまでは、とりあえずは一緒に暮らしていこうと思う。

「大和さん、御夕飯できたわよ」
「わかった、今行く」

◇◆◇◆◇◆◇

～十六夜咲夜～

駄メイドと言われ続けて数年、情けない自分に涙し、妹様にからかわれて涙し、大和様（一応敬称）　に咬みついたり逆に咬みつかれたりした私は、紅魔館のメイドの長としての座を勝ち取った（キリッ。もう箒を掃いても箪笥が吹き飛ぶ事は無い。雑巾掛けでも床に穴が空くことは無い。全てがパーフェクトで瀟洒なメイドへと成長した私に死角など存在しない。

「ほら、そうやって時間を止めてればいいと思ってる。何時かこの戦法が通用しない相手が来るかもしれないのに、それじゃあ駄目だよ」
「貴方みたいな理不尽な人間、一人で十分だわ」
「……僕で理不尽なら、この世は理不尽の塊だよ……」

それでも能力が通用しないこの人だけは苦手だ。はっきりと『うぜぇですわ』　と言ったこともある。お譲様には叱られたけど、悔いは無い。毎回こってり絞られているのだから、これくらいの毒は吐

かせて貰いたいですわ。と、上品に言っても聞きいれてはくれなかった。

将来のご主人様なのだから、最大限の敬意を払いなさい！　とお譲様は仰るけど、別にこの人の扱いは適当でいいのではないかと最近よく思うようになった。少し苦笑するけど、どう扱っても何も言われないし。その代わりに手は出るけど……。

「さて、じゃあ僕は帰るかな」
「お帰りの前に、お譲様に会いに行って下さい」
「ちょっと調子が悪くて……」
「嘘は止めて下さい。貴方が行かないと、あとで私が叱られるの」
「なんだろう、この生贄の気分」
「間違っては無いわね」

ああ、悲しきはメイド長という身分。主の命令には絶対服従。でも私はそんなメイドどいう下僕の存在でありながら、長と言うだけあって権限が与えられている。例えば使えない妖精メイドの統括とか統括とか統括とか……。だから私はこう言うわ。

『中間管理職は辛い』　と。

この鬱憤は、最近紅魔館を私に任せている美鈴を苛めて発散しよう。あの門番め、私がメイドとして使えるようになったからって手を抜いき、挙句の果てには居眠りまで……許すまじ。

私はお譲様に仕えることは幸せだと思っているし、妹様に弄られるのももう馴れた。むしろあの愛くるしい二人の姿を見ていると不満なんて吹き飛ぶ。

だが門番、テメェは駄目だ。可愛げのない奴は自分の仕事はしろ。

「ナイフよし、時計よし、鬱憤よし。さて、今日もお仕置きの時間ね…」

◇◆◇◆◇◆◇

～あの男と人形遣い～

「本当に、何時見ても信じられないわ……」

「ふふん、いいだろ？　このローブ。何と言っても大魔導師の証だからね」

「裸の王様ならぬ、裸の大魔導師よ。ま、貴方の場合は指摘してくれる私がいるから、ただの見かけ倒しな大魔導師ってところかしら」

「フ……アリス、お主も悔しいのだろう？」

「はいはい、悔しいわ。ね～上海？」

「……」

「相手にされないだけで本気で落ち込むんじゃないわよ……。それよりも貴方、この紅い霧に心当たりがあったりするんじゃないの？」

「ないよ！」

「あるのね」

「ないよ！」

「何か企むのはいいけど、私だけには迷惑を掛けないでよ？」

「最近なにか迷惑掛けたっけ？」

「森に住み着いたあの子」

「ぬ……」

「何がぬ、よ。最後まで面倒くらい見なさいよ。そうじゃないとあの半端者……いずれ死ぬわよ」

「解ってる。もう手は打ってあるから」

「そ、ならいいの。それよりも、この霧は何時晴れるのかしら？」

「あと三日もしない内に晴れるよ」

「やっぱり貴方の企みなんじゃない」

「あ〝」

「ふぅ……。まぁいいわ、せいぜい足元を掬われないように注意することね」

「心配してくれるの？」

「忠告してるだけよ」

「素直じゃないね。……じゃあもう行くよ。紅茶、美味しかった」

「はいはい、気を付けてね」

さて、と。じゃあそろそろこの紅い霧を晴らしに行きますか。ま、僕はただのサポートなんだけどね。

「頼んだよ霊夢。僕自身が賭けの対象なんだから」

ここ数年で怠惰になってしまった巫女に一抹の不安を覚えながら、僕は空を目指した。

――――――頼みの巫女は、まだ深い眠りの中

閑話　空白の時間（後書き）

最後は会話文だけ、手抜き！と言われればそっぽを向くじらいです。
三人とも、大和を入れれば四人とも数年の内に変化がありました。
というこぼれ話。

大和については、まぁ…やせ我慢してるだけなんですが。お父さんでいたいけどいられない！　みたいな。霊夢の前では表情を崩さないようにしています。この辺りの話も詳しく出来ればいいですね。
霊夢の前では仏頂面ですが、他では…まぁ察してやって下さいｗ
いつもの大和ですから。

魔理沙はそのまんま。大和のことが大っ嫌いに育ちました。何でしょうね！

咲夜は駄メイド卒業。どうしてでしょうね！

と言った感じに、数年間に何があったのかを考えて貰えたらなぁ…と思いつつ、次回からは紅霧異変…ではなく予告編を入れようかと。
それを除いても、ついに東方紅魔郷に突入です。長かったなぁ…。
ここまで来るのに、一年近くかかりましたよ…。

ではまた次回

何時も通りの予告編（前書き）

何時も通りの予告編です。だいたいこんな感じになるだろう、な意味の予告編です。ネタばれあり！　もう一度言いますよ？　ネタばれあり！！　今回は普段よりも多くネタばれが含まれていると思いますのでご注意を

読むのは貴方様の判断に任せます！

……今思う。お前ら師弟ってやっぱ馬鹿だろ。仕様もないことで喧嘩して。

酷いぜ姉さん。…まぁ、私もあの頃は若かった。それだけの話だぜ

いやいや、だから魔理沙さんは何歳のつもりなんですか。

「あの頃、里ではいつ貴方達が顔合わせをするか冷や冷やしたものです。貴方は知らないでしょうけど、同じタイミングで二人が人里に入った時は慧音さんが苦労したんですよ？　なんとか大和さんをその場に留めようと」

……結構とんでもないことになってたんだな

あの～……

どうした、永遠亭のご苦労うさぎ

その言い方は止めて。……貴方と兄弟子の間に何かあったのかな～って……

……駄目だな、このご苦労うさぎは

駄目ですね

まったくもって、話にならないぜ。

「貴方が言うことじゃないですど、話になりませんね」

ちょっと!?　いい加減この扱い止めてくれないの!?

▽▲▽▲▽▲▽

幻想郷には、総じて『異変』　と呼ばれる騒動が起こることがある。人間にとってははた迷惑な、そして妖怪にとっては一種のお祭りのような大騒動。これは史上稀に見ない、度重なる異変の始めとなった話。

「紅いわね」
「紅いねぇ」
「涼しいわね」
「涼しいねぇ」

博麗の巫女、博麗霊夢。かの有名な巫女、博麗零夢の後継と謳われる程の実力を持つ彼女の初陣。容姿・霊力・在り方……全ての点で嘗ての巫女を彷彿とさせる彼女。しかし、全てにおいて博麗零夢には劣っている。それが周囲の認識であり、事実であった。それでも

彼女の再来だと言う一番の原因は、その後に立つ一人の男の存在があってこそだった。

「霊夢。僕は君の盾であり、君の拳だ。君が異変の首謀者と対決するのであれば、僕はその露払いを受けよう」

「そ……。じゃあ頼りにさせて貰うわ」

しかし彼もまた、嘗ての立ち位置とは違った場所にいた。隣に立つのではなく、常に一歩後ろで支援に徹する。しかしその実力は鈍るどころか、洗礼されていく一方。実力者の仲間入りをした彼が支える巫女は、はたしてその才を開花させることができるのだろうか。

「じゃあ行きましょうか、大和さん？」

「ああ、行こうか」

成長する力が、紅い霧に包まれた異変を解決へと導く。

「さて、と……あの二人も行ったみたいだな。じゃあ私も行くか。魔法使い魔理沙さんの門出だぜ！」

その後を追うように、一つの影が空へと上がった。

「貴方は食べてもいい人類？」
「れいとうほぞんしてやるわ！」
「ち、チルノちゃん、ルーミアちゃんも止めておこうよぉ。敵いっこないんだから、ね？」
「相手になるって言うのなら退治してやるわ」
「ルーミアちゃん……あのお馬鹿…。何やってんの…」

立ちふさがる悪友。そして破天荒な妖精と大妖精。

「ほぉ～。紅い、紅いなこの館。まるで悪魔の館だ」
「その通り、悪魔の館です。ところで小さな魔法使い。この館に何用か？」
「私は世紀の大魔法使いになる予定の魔理沙さんだ。そこを退いてもらおうか」
「……残念ながら、今宵ここを通ることが出来るのは二人と決まっているのです」

一足先に悪魔の館に辿り着いた魔法使い。彼女が門番との戦闘中に、大和と霊夢は館内へと侵入する。

「まったくあの二人、やってくれるぜ……。お、なんだここは？まるで宝の山じゃないか」
「止まりなさい、未熟な侵入者」

相対する魔法使いたち

「さて、どれだけ成長してくれたのやら」
「うぜぇですわね。黙ってお引き取り下さい」
「無理な相談だよ」
「そうですか。なら……」

メイド長と元執事の、一切の加減を許さない真剣勝負

「来たわね、怨霊」
「出たわね、悪魔」

館の主と、当代の巫女の一騎打ち。そして――

「わたしが勝ったら、わたしの物になってね？」
「そりゃあ勘弁願いたいね…！」

悪魔の妹までもが、その姿を現す

「アルフォーーードォォォォォォッ！！」
「調子に乗るなよ！　小僧ォッ！！」

数百年の時を経て、二人は再び激突することになる。

これは、終幕へと向かう物語――

何時も通りの予告編（後書き）

何かもういいや、と投げやりにストック全てを投げたじらいです。今まではちょくちょくと出し惜しみではないけど、調整して投稿して来ましたが、何と言っても師走。走りたくなるのですよ、ええ。しかしもう手札０。ライフも０。次回は何時になることやら…

と言う訳で次回からは原作突入。その前にもう一度、活動報告の方で大和の現状報告とか、今度は交友関係とかやってみようかなと思ってます。上がったら見てやって貰えると嬉しいです。

それではまた次回

霊夢、大地に立つとか立たないとか

――パチッ

――パチッ

パチッ――乾いた音が清閑な部屋に響く。

「う……ま、まだまだ！」

――パチッ

「甘い甘い」

「うげっ……」

「ふふん、投了しなさいな」

「ま、まだ終わっちゃいない…」

パチッ。右手で持った碁石を網目模様の盤上へと打つ。碁盤を挟んで座る相手は月の姫、蓬莱山輝夜。弟子を卒業してからと言うと、たまに永遠亭に遊びに行けばこうして輝夜の遊び相手をすることが多い。今日も今日とて遊び相手として碁を打っているのだが……形勢は圧倒的不利。でも諦めたら駄目なんだ、諦めたら……

「フフ、諦めない心は流石だけど……終いよ」

パチッ――――――だが無常にも、僅かに残っていた息の音を盤上で殺された。

「……」

ぐぅの音も出ないほどの敗北。今の僕はさぞかし醜い顔をしていることだろう。

「じゃあ今回の罰ゲームね。これで何度目かしら？」

罰ゲームが待っているからだ。今回は囲碁だったけど、将棋やオセロ、チェスなんかでもやっている。でも賭ける内容だけは何時も同じ。勝った方が相手に一つお願いを言う、と言うシンプルなものだが、それだけに性質が悪い。もっとも、あまり無茶な要求は突っぱねることが出来るのだけど。

「ほら、その胡坐をやめなさい。今回は膝枕よ」

「はいはい、どうぞお姫さま。……ちぇ、今回は自信あったのになぁ」

碁盤を除けて胡坐を組んでいた足を伸ばすと、そこに輝夜の頭が乗ってくる。僕の顔を見上げている輝夜は満足気だけど、見下ろす僕の表情はきっとげっそりしていることだろう。相手が輝夜だから、と言うのが多いけれども。

別に不満があるわけじゃない。ただ、なんて言うかこう……いいようにしてやられてるからだ。

「それ、前も聞いたわ。何時になったら私に勝ってくれるのやら。ほら、姫様の髪を手櫛なさい」

「……よ～しよしよしよし！」

「わ！　こっ、こら！　せっかく揃えてあるのにクシャクシャにしないで！」

撫でろと言っておいて怒るとは。…ん？　手櫛はもっと優しく丁寧にだって？　はは、そりゃあ僕の待遇に関しても言えることですよお姫様。

「ちゃんとやりなさい。約束を守らない貴方じゃないでしょう？」

「……見てろよ、次は勝つ！」

「聞き飽きたわ」

ぐぬぬ……鬼の一族としても僕個人としても、約束と言われれば文句が付けられない。仕方が無いので前髪を手櫛で髪を梳いてやると、擽ったそうに目を半分閉じて笑っている。こうしているとすごく可愛いのに……などと思っていると、不満げな顔をされた。見惚れてしまっていたのか、手櫛が止まっていたようだ。

「大和」
「うん？　何？」
「なんだっけあのルール……弾幕？」
「ああ、弾幕ごっこね。名付けたのは僕じゃないけど」
「でしょうね。貴方が闘いに『ごっこ』　なんて名前、付けるはずがないもの」

幻想郷の新しいルール、通称『弾幕ごっこ』。『スペルカード』という幻想郷の体制そのものを変える全く新しいルールを、霊夢名義で広めるように文に頼んだのは僕だけどね。その主なルールとしては

一、相手を殺すことを禁じる
二、決闘前に決闘内での使用回数を掲示すること
三、技を使う際には「カード宣言」をすること

まぁ大きな決まりごとはこの三つ……かな？　他にもあるけど省略。まぁ霊夢が案を出して僕が煮詰めたのだけど、中々のモノが出来あがったと思っている。でも驚いたことに、一については僕が言いだしたことじゃない。霊夢自身が『後々に遺恨が残るのは面倒だからパス』　と最初に言ってきたのだ。大和さんもそうでしょう？　と付け加えられた時には、僕のことを理解してくれてるのかなぁ……？　なんてちょっと嬉しく想ってみたり。思わず『よしよし』　したくなってしまったのは秘密だ。

ところで何故こんなルールを制定したかと言うと、藍さんから送ら

れた手紙が原因だ。妖怪の弱体化が～、なんて書いてあったけど、実感が無かった僕としては動くつもりが無かったのだけど。だからどうすればいいのか華仙さんに相談してみると『好きな時に暴れる口実でも欲しいのよ。最近は暴れられないことにイライラが溜まっていた妖怪が多いから』　と言われた。

まぁ……暴れられない理由は僕にもあるらしいんだけど。博麗の巫女と伊吹大和が同時に在るということは、妖怪連中にしてみればトラウマらしい。やんちゃしすぎたあの頃、妖怪が勝手に自分たちで自分たちに植付けた『敵うわけがない』　なんて可笑しな先入観に怯えて動けないでいる……らしい。

まぁそれは置いておいて。妖怪が気楽に人を襲えない↓恐れの感情が弱まって弱体化。そんな流れを喰い止める……もとい喰い止めなさい、それも博麗の役割でしょうが。なんて敵味方両方から言われたら流石に動かない訳にもいかない、という流れでこうなった。霊夢は面倒だって言ってたけど、本心じゃやる気だったに違いない。面倒だと言う割には真面目に話を聞いてくれてたし。

「それにしても弾幕ごっこ、ねぇ。大和には相当不利なんじゃないの？　遠距離戦、苦手なんでしょう？」

「うーん…どうだろう。相手が張る弾幕の質と量にもよるけど、簡単に堕ちるつもりもないし。まぁ……僕の場合は弾幕ごっこなんては呼べないんだろうね。どうせ今までと同じ闘い方に、スペルカードルールが加わったくらいかな」

「この間の模擬戦で永琳を正面から吹き飛ばしたアレもあるし……その後ボッコボコにされてたけど。でも貴方を相手に場合、近寄ら

れたら殆どの人が終わりかもしれないわね」
「師匠のアレには僕も本当に驚いたよ。まさか単純な技で、あれ程の成果を出してくれるなんて思わなかったから。でも……簡単に終わってくれる相手ばかりならいいのにね。輝夜でも師匠に柔術を仕込まれているし、正直不利なことに変わりは無いのかも」
「でもって何よ、でもって」
「そのまんまの意味じゃないか。見た目はこうなのに、何で怪力なんだか……」

輝夜に全力で殴られたら頭蓋骨陥没は免れないと思う。誰が永遠亭の屋根を剥がして……いや、言うまい。とにかくこんなナリをして本当に恐ろしいほどの怪力だ。そのうち永遠亭そのものを投げてきそうで怖い。

そんな輝夜はさておき、僕の闘い方は変わらないだろう。魔法・拳。遠距離も出来ないことはないけど、僕の魔力弾はマススパークを除いたら貧弱な部類に入るからなぁ。やっぱり避けて弾いて、後は蹴って殴って。うん、いっそ清々しいほど愚直な闘い方だ。魔法の引き出しが多くなった分、トリッキーな闘い方が出来るだろうけど。あ…でもスペル宣言があった。

「それにしてもこの紅い霧はどうにかならないの？　こう言うのは博麗の仕事なんでしょう？　監督者として何か策はないの？」
「あー……まぁ輝夜になら話してもいいかな。この霧、元はと言えば僕が原因なんだ」
「――――――は？」

「いや、ちょっと知り合いの吸血鬼に頼んで……ね？」

何やってるのよ、と言いたそうな顔から逃げるように目線を泳がせる。僕だってここまで大事になるなんて思ってなかったんだよね。でも――――たぶん、レミリアは張り切ってるんだろうなぁ。そこそこでいいって僕は言ったんだけど、なんで幻想郷を覆うほどの霧を発生させているんだか…。

「ね？　じゃないわよ。説明してくれるんでしょうね？」

「まぁ、ね。目的はさっき話していたスペルカードルールと弾幕ごっこ。この二つを迅速に広めるためにレミリア、知り合いの吸血鬼に一役かってもらったわけ。『何か悪さをして、負けてくれ』　って。ぶっちゃけると、この騒動は狂言なんだ」

「何と言うか……一気にどうでもよくなったわ。それにしても吸血鬼……あの時の餓鬼は無駄にプライドが高そうだったけど、よく負けることを了承してくれたわね」

「いや、騒動を起こすのはいいけど負けないって言ってたよ。しかも騒動を起こすに当たっての対価と、勝負の賭け品も求められたし」

「……いいこと無しじゃない、貴方」

「そうかなぁ……」

僕はそうは思えないんだけど。霊夢が新しいルールでレミリアを倒せばそれだけで普及速度は上がるし、霊夢には吸血鬼を倒した名声と経験を積ませる事が出来る。それだけでも十分だと思うんだけど。

「それに対価と賭け品って、貴方に払えるモノなんてないでしょう

に。宝物の一つも持ってないのに」
「…？　あるじゃないか、僕にだって」

そう言って、僕は僕自身を親指で指した。

「貴方まさか…！？」
「察しの通り、僕の出した対価と賭け品は『僕自身』。こっちのルールでやってくれるって言ってるんだ、相手側が最も欲しがったモノを差し出すのが当然だろ？」

モノではないけど、僕自身なら賭けることが出来る。僕程度で霊夢の今後が明るくなるのなら、すぐにでも差し出すさ。もちろん相手は選ばせてもらうけどね。

「ばっ、馬鹿じゃないの！？　じゃあ貴方、この騒動が終われば吸血鬼の所に行くって言うの！？　私を置いて！」
「私を置いてかはどうか知らないけど、その前にこれが賭けだってことをもう一回確認し直してよ。対価はせいぜい数日向こうで過ごすこと。賭け品は相手が勝てば持って行かれるもの。とにかく、霊夢が勝てばいいんだよ」
「貴方ってやつは……」

まあそう言わずに。勝てばいいんだよ、勝てば。それに僕だっている。闘いに勝つための一番の課題は、如何に霊夢の消費を抑えてレ

ミリアまで辿り着かせるか。それさえ出来れば、あとは霊夢が何とかする。道中の露払いこそ一緒にするだろうけど、相手側の戦力は僕が削らせて貰うつもりだ。とは言っても、パチュリーには別のことを頼んでいるから戦力は減っているんだけれど。

「……負けた時はどうするのよ」

「負ける？　はは、輝夜は何も解っちゃいないね。霊夢は強いよ。零夢ほどじゃないけど、そこいらの妖怪なんか一呼吸のうちに倒すくらいだ。普通じゃないんだよ、あの子も」

霊夢が、れいむが負けるわけがない。修行はあまりしてないけど、そんなのあの子の前では通用しない。何と言っても真の天才だからね。咲夜ちゃんは鍛えたら光る天才だったけど、あの子は違う。最初から輝きを放っていた。そうさ、だかられいむが負けるなんてありはしない。

「……大和、あなた少しおかしいわ。どうして考えても部の悪い賭けじゃない。経験の浅い巫女と、長い年月を生きたホンモノの吸血鬼。誰が見たって勝負は決まっているようなものじゃない」

「輝夜はれいむを知らないからそう言えるんだよ。あの子の傍にいた僕には解る。あの子は勝つよ」

「……やっぱり貴方、変よ。期待したくなるのもわかるけど、それでも異常だわ。――――名前や姿が同じでも、嘗ての巫女とは違うのよ？」

「解ってるさ、解った上で言ってる。れいむが負けることは絶対に無い」

「……亡霊の姿に惑わされていないと、はっきり言えるの？」
「……誓って。その為に線引きまでしたんだ…」

輝夜も可笑しな事を言ってくれる。そんな錯乱をしているのなら、今のれいむにも昔のれいむにも申し訳がたたないじゃないか。悲しそうな顔をしていたあの頃のれいむに、僕はどう謝ってやれと言うんだ。終わったことはもうどうすることも出来ない。だから僕は霊夢に賭けたい。

「どちらにしろこの霧は消える。それまで辛抱して貰ってもいいかな？」
「……わかったわ。でも早くしてよね、鬱陶しいから」
「もちろん」

――そう言って大和は笑っていた。でも私（かぐや）は、どうしても大和があの女の影を追っているようにしか見えなかった。嘗て大和の隣に立ち、全ての妖怪から恐れられた巫女、博麗零夢の影を――

◇◆◇◆◇◆◇

「はてさて、狂言と言ってもそろそろ動きださないと慧音さんに文句を言われそうだ。働かない奴だ、なんて思われたら嫌だし、そろそろ動きだす人もいるかもしれない」

紅い霧の中、神社を目指して飛びながら思考を巡らせる。霊夢だってこの霧のことは何日も前から気付いているのに、全く動こうとしないからなぁ。期を待っているのかもしれないけど……まぁそれはないか。面倒だ面倒だと言うことが多くなった霊夢だけど、まさか本当に面倒だから動かないわけじゃない……よね？

「あ、大和さーん！」

その帰り途の道中、聞きなれた声が風に乗って聞こえてきた。

「あれ？　文じゃないか。たしか山って警戒中で出れないんじゃ？」

この霧のせいで山は全面出入り禁止。そんな噂が流れていたんだけど……まぁ文には関係ないかもしれない。だとしても、いったい何の用だろうか。取材って感じじゃなさそうだけど。

「抜け出してきちゃいました。それよりも以前に頼まれていた資料

です」
「おお！　ありがとう文！」
「いえいえ、こちらこそ時間が掛ってすいません。でも、これで少しは恩も返せたってものです」

以前、といってもかなり昔の話になる。紫さんと山で決別した百年程前、文に頼んでいたものだ。それは紫さんの身辺調査書。何時、何処で、何をしたのか。何故此処を作ったのか。消された妖怪と紫さんの関係。その他いろいろ。言葉の通り、解ることの全てだ。

「やっぱり多いね」
「その分細かいことまで書かれてますよ。苦労したんですから」
「ありがとう。今度何か奢るよ」
「本当ですか？　楽しみにしておきますね！」

やっほう！　と両手を上げる文にもう一度礼を言っておく。両手で漸く持てるほどの資料を集めてくれたんだ、そんなことでいいのなら何処へでも連れて行ってあげようじゃないか。

「……っと、一つだけ謝っておくことがあるんです」

喜びの顔が一転、文が真面目な表情を浮かべた。それにしても謝る？　何か対価を要求するのなら解るし、どちらかと言うと謝るのは僕の方だと思うんだけど……。

「調べていく内に……その、大和さんの同類の方との関係が……」
「……それも、この中に？」
「…はい」

……何と言うか、何処までも生まれは付き纏ってくるみたいだ。文は紫さんと『僕ら』　に、何かしらの関係があると気付いたのだろう。僕自身も知らない何かを。

「その……すいませんでした」
「へ…？　何で謝るの？」
「私なりのけじめです。もっと早くに気付いていれば、大和さんを苦しめずに済んだかもしれないのに」

……。まったく、このお人好し鴉天狗は…

「お馬鹿。もう済んだことだし、僕自身気にして無いって帰って来た時に言ったじゃないか」
「でも……」
「はいはい、じゃあ受け取っておくよ。それでこの話はお終い」

まったく、何時もは厚顔なくせに変な所で義に厚いんだから。まぁそこが文の良い所で、好きな所なんだけどさ。

「じゃあ読んでおくね。ありがとう」
「いえ、じゃあ私はこれで。奢りの話、楽しみにしてます」

◇◆◇◆◇◆◇

文から受け取った大量の資料を魔法で収納をした後、博麗神社に戻ってきた。少し話しこんでいたせいか、太陽が少しずつ傾いて来ている。

「さて、ちょっと話をしに行きますか」

境内に降り立った後、とりあえず居間にいるであろう霊夢を探しに行くことにした。ここから先は顔の表情を変えない鉄仮面に変身だ。平常心を繕うのが難しいから苦手なんだけど、スイッチの切り替えはちゃんとしないとね。

この時間帯だと……丁度夕飯の支度をしているだろう。それを眺め終わって、食べながらでも今回のことについての話をすればいいか。とりあえず話があることだけ言っておこう。

「霊夢、ちょっと話が……ってあれ？　いない…」

その霊夢が台所に居なかった。おかしいなぁ、今までの霊夢の行動から予測したら此処にいるはずなんだけど。此処にいないとなると私室かな？　……仕方ない、少し気が乗らないけど訪ねてみよう。そう言えばかなり久しぶりかもしれない。こうやって霊夢の私室を訪ねるのは…もう何年振りにもなるのか。

「霊夢？　入るよ」
「大和さん？　どうぞ」
「お邪魔しm……！？」
「こんな格好でごめんなさい、着替える最中なの」

襖を開けて入ると霊夢の姿が目に入った。ただしサラシ姿の、だ。サラシを捲いているだけなので、身体のラインが完全に見えている。と言うか、ほぼ裸。

「（大和自主規制モードハイリマス）」
「最近鬱陶しい霧が出てるでしょう？　それの元凶を探しに行こうと思って着替えてたの……って、大和さん？　どうかした？」
「い、いや別に……。着替えてるのならそう言ってくれれば良かったのにって……」
「……？　小さい頃から一緒にいたんだから見慣れてるんじゃないの？　別に私はどうとも思わないんだけど……流石に見つめられると恥ずかしいわ」

「あ、いや……ごめん」
「ううん、別にいい」

恥ずかしそうにモゾモゾとしだした霊夢に背を向けて……心の中で頭を抱えた。拝啓、ルーミアちゃん。貴方様が昔担当していたお世話は、僕がやっていたことになってますよ。でもそれ以上に驚きなのが、お兄さんはこの子のサラシ姿を見て動揺しそうになったけど、当の本人は何も思っていないんだ。これって喜ぶべきなのかな？

「それでも、だよ。それに、乙女の肌は簡単に人に晒したら駄目だからね。霊夢も注意するんだよ？」

一応注意はしておく。人前で肌なんか晒して、それが誰か男の目に留まってみろ。僕、久しぶりにその人を殺さなきゃならなくなる。そんなの嫌だからね？

「今の所は大和さん以外に見せるつもりはないけど、わかったわ」
「いや、僕にも駄目だからね？」
「はいはい」

そう言って巫女服を着ていく霊夢。見てないよ？　音で判断しているだけです。ちなみに香霖堂から調達したもので、脇を露出する新しい巫女服になっている。初めて霊夢がそれを着た時は霖之助君には酷い事をしてしまった。だって脇丸出しだよ？　下心丸出しで作ったんじゃないのかと勘ぐりもするさ、お父さんだし。

それにしても霊夢の…は……いや、何でもないです、ハイ。お父さんですからね、僕。スタイル云々よりも、羞恥心の欠片も無いこの娘の方が心配だ。嫁に行かせるつもりはないけどこれほどに器量の良い霊夢だ。何れは里のクソッタレの馬鹿共による争奪戦が始まるに違いない。まぁそうなったら……里から男はいなくなるだろうねぇ。ま、無駄なことは考えなくていいか。行かせないし。

「それよりも大和さん、頼みがあるのだけど」
「ん？　何？」
「今回の騒動の解決、手伝って貰えないかしら」
「……この霧のことかな？」
「ええ。私一人でも十分だろうけど、手伝って貰ったほうが楽になるだろうし」

どうやら、霊夢も漸く動く気になってくれたらしい。それも僕が望んでいた通りに、僕を連れて。これが霊夢にとって最初の、僕にとっては……。だからここで誓っておこう。前々から考えていたことを伝えておこう。……悔いの残らないように。

「霊夢」
「何かしら？」
「僕は君の盾であり、君の拳だ。助けを求めるのならどんなことをしてでも助けてあげよう。怪我をするのなら僕が。恨まれるのなら僕が。そして死が避けられないのなら、僕の命を代わりに差し出す」
「大和さん…？」

怪訝な表情を浮かべる霊夢。そでれも関係なく、僕は続けていく。

「僕は僕の全てを君に預ける。だから一つ、約束して欲しい」

「……何かしら？」

「僕を信じて」

「――――――わかったわ。私は、大和さんを信じる」

真っ直ぐにお互いの目を見ながら、そう誓いあった。――――さあ行くぞレミリア。君には悪いけど、負ける気がしないね。

「お、霊夢は行ったな？　じゃあ私も――――あ？　なんであのへっぽこまで一緒なんだ？　足手纏いにしかならないだろうに。……まぁいいさ、私も勝手にやらせて貰うぜ」

二人の影を確認した魔法使いも、箒に跨って地を蹴った。不敵な笑みを浮かべながら…

～少女祈祷中～

霊夢、大地に立つとか立たないとか（後書き）

一週間でストックなんて出来るわけないじらいです。前に出し過ぎたせいでストックはゼロ！　一週間に最低でも一話との目標はなんとか達成ですが、続きが無い…。

紅魔郷、始まります。でもその前に弾幕ごっこのルール説明を、とのことで輝夜さん登場。輝夜に膝枕？　だれかクリスｍ（ｒｙ　大雑把にルールを言うとだいたい緋想天とか、そんな感じです。むしろ緋想天がいいです。ぶっちゃけ大和にとっては殴って蹴ってしか出来ないのでそんな感じで。魔理沙流に言うと『アレは弾幕じゃない』。

その魔理沙にはだいぶ苦しい想いをして貰おうと思ってます。扱いヒデェ…と思われる方もいると思います。しかし東方での努力系な魔理沙には辛い思いをしてもらい、頑張って報われて貰おうと思ってますので。魔理沙ファンの方には申し訳ないですが、飛鳥文化アタックは避けて貰いたいです。ここ、狭いですから（笑）

誰も彼もが猫かぶり

～紅魔館～

「レミィ、報告よ」
「何か」
「霊力と魔力の移動を確認。おそらく大和と巫女よ。真っ直ぐここを目指している。あと大和が読んでいた通り、もう一つの魔力も確認したわ」
「そうか」

フッ、と唇の端を吊り上げて哂う。漸く……漸くこの時がやってきた。上座に座りながら私は今までの出来事を振り返っていた。

思えば……長かったものだな。大和を夫して我が一族に迎え入れる時まで本当に長かった。運命の出会いから五百年、想いを伝えたのは数十年前。そして今日この日、私は生涯の伴侶を手に入れる。それも嘗て苦渋をなめさせられた巫女の系譜を下して、だ。

「妹様、お譲様の様子が何時もと違うのですが…？」
「あぁー、当主モードで無駄に虚勢を張ってるだけだから放っておいていいよ。どうせヤマトを見たら元通りになるんだから。……可愛いでしょ？」

「愛くるしいですね」
「でしょ？　だから咲夜も何時も通りポカしてもいいんだよ？　その方が可愛いし、弄りがいがあるから」
「もっ、もう下手はしませんよ！」

フッ、煩い外野だ。新しい当主の来訪を待ち望むのは構わないが…
…まぁいい、この神聖な決闘に水を差さない限りは何も言うまい。

「それよりもパチュリー、歓迎の準備はどうなっている？」
「問題無し。適当に暴れるように言ってある」
「ならいい、お前たちも美鈴のように配置に付け。私は此処で巫女を待つ」

今宵、紅魔館を訪れる運命を持つ者は全部で三人。大和、博麗の巫女、そして招かれざる魔法使い。歓迎の仕方は各々に任せてあるが、当たる相手だけは私が決めさせて貰った。

大和には咲夜が当たる。相性は決してよくないが、咲夜の成長が見るためには丁度いいだろう。そしておそらく突破されるだろうが、その後にはフランが詰めている。流石の大和も二人続けて襲撃を受ければ大人しくなるはず。

巫女には私が当たり、完膚無きまでに潰す。前情報によると、その姿はあの勝ち逃げされた巫女の生き映しらしい。……個人的には非常に楽しみだ。現巫女には関係ないことだが、私自身のけじめだけはきっちりと果たさせて貰おう。

招かれざる客は……どうでもいい、眼中にないからな。美鈴とパチェの好きにするといいさ。大和からも何か頼まれているようだし。

「ねぇ咲夜、パチュリーは『適当』　って言ったよね？」
「その通りですわ。私には万事適当と聞こえましたけど……お譲様はお気づきになられませんね」
「仕方ないなぁお姉様は。ヤマトのこととなると周りが見えないんだから」
「妹様はどうなのです？」
「ん～……秘密！」

しかし懸念もある。お父様が何やらこそこそと動いているのだ。邪魔をするつもりはないのだろうが、大和を襲う可能性があるかもしれない。だがもし大和に怪我を負わせてみろ、『お父様なんか大っ嫌い！』　と言って出て行ってやる。そのままハネムーンよ。

「さぁ、盛大なパーティーと洒落こもうではないか！」

大和。私、五人は欲しいわ。頑張るから！

◇◆◇◆◇◆◇

「……」
「……」
「……」
「……へっぷしゅッ、ぅー流石に空は冷えるな…」
「……」

無言。それは物を言わないこと。紅い夜空を駆け抜ける僕たちの間に会話はなく、まさにそれだ。普段からも事務的な会話しかしないのに、長い間一緒に居るからと言って会話が成立するはずもない。昔みたいに霊夢が話をしたがっている雰囲気を作らないし、僕からなんて尚更だ。自分で撒いた種とはいえ、互いに何も発しない無表情のまま寂しい空を飛ぶ。

少し居心地の悪い空気の中を飛び紅魔館まであと僅かと言ったところ、僕たちは紅魔館付近の湖まで来ていた。しかし何時もと様子が違い、本来なら月の姿を反射しているはずの水が凍っていた。

確かこの辺りは氷の妖精がよく遊んでいたはずだ、もしかしたらあの子の仕業かもしれない。そう思い、辺りを見渡してみると小さな人影が行く手を阻むかのように湖の上で静止しているのが見てとれた。しかしこんな夜更けに妖精が遊んでいるはずは…、などと考え、確認するよりも先に声が上がってきた。

「止まれー！」
「止まるのか～」
「と、止まるのは二人だって！　止めようよ、勝てっこないって！」

両手を広げ、夜空に浮かんでいる影の正体はやはり考えた通りの人物だった。しかし、その隣には僕の友人の姿も見てとれたが。

現れたのは悪友であり、影で支えてくれるルーミアちゃん。破天荒な氷の妖精チルノと、その友人の大妖精。二人は行く手を遮るように手を広げ、大妖精がそれを止めようと必死になっている。

「誰よあんた達。邪魔する気？」

この異変を解決することが目的の霊夢がそんな二人にいい顔をするわけもなく、御札を手に取り威嚇するように構えた。そんな霊夢の成長を嬉しく思いながらも、僕は悪友の奇行に頭を抱えたくなっていた。にこにこと笑いかけてくる姿は何時も通り可愛げがあっていい。でも今回は、霊夢のこれからが懸っている今回だけは絶対に邪魔だけはしないでくれと頼んでいたのだ。にも拘らず、この場に妖精たちを引き連れて現れた。

それなのにこうして現れたということは、何か外せない理由でもあるのだろうか？　でもそうなると、その理由はきっと大きいに違いないと思われる。普段の行動から奇行ばかりなだけに、いったい何を企んでいるのか気が気でならない。

「あれれ？　やっぱりおチビは憶えてないのか～？」
「はぁ？　あんたみたいな奴を見るのは初めてね」
「むぅ、酷いおチビなのだ。あんなに可愛がってあげたのに……。ね？　ご主人さま」
「はぁ？」
「……何を言っているのかな？」

本当に頭が痛くなってきた。鉄仮面を装っている額を揉みながら、それはもう盛大な溜息を吐いた。いや、本当に何を言っているんだろうか、この小悪魔は。霊夢の前では秘密にすると約束したことをこうもあっさりと……。いったい何がしたい……いや、何を企んでいる？

嘗て敵だったころがあるだけに、僕の心は少しづつ不安に苛まれていく。なぜなら今の姿は仮初、本来は僕よりも強く頭の回転も速い大妖怪だ。油断なんて出来るはずもなく、彼女が本気になれば紅魔館に辿り着くことすら危うくなる。それに最近は会わない日がほとんどだったためにその動向を知らない。それが余計に不安感を煽ってくる。

「ルーミ「おおっと！　アンタの相手はあたいよ！」　……チルノ？」
「フン！　前のあたいとは違う所を見せてあげる！　それにあたいがどれだけ強くなったか見てもらわないとね！」
「ご、ごめんなさい伊吹さん。チルノちゃん、成長したのを見せてやるんだって聞かなくて……」

……どうする？　どうやらチルノは僕が狙いみたいだ。となると大妖精もそうなるはず。チルノは端から霊夢を見ていないし、当の霊夢はルーミアちゃんと睨み合っている。二人を同じ空間に居させたくないけど、チルノが僕を逃がしてくれることもないだろう。

…よし、先にチルノを沈めよう。その後でルーミアちゃんに真意を問う。

「いいよ、チルノ。相手をしてあげる。ただし、スペルカードルールは解ってるね？」
「もちろん！　よし、じゃあ付いて来な！　あたいの実力、見せてあげる！」

そう言い、霊夢たちから距離を取るように飛んで行った。あまり二人から離れたくはないんだけど……この際仕方が無い、すぐに帰ってくればいいだけのことだ。

「霊夢」
「なに？」
「油断は禁物だ」
「言われなくても」

霊夢の背中に一抹の不安を抱きながらも、僕はチルノを追って行く

ことにした。霊夢を信じよう、この子ならきっと上手くやるさ。僕もすぐに終わらせて帰ってくるから、それまで頑張ってくれ。

◇◆◇◆◇◆◇

「ちぇ、遅れちまったか。まったくこの私を差し置いて弾幕ごっこなんて羨ましいぜ。残念と言えば残念だけど、まぁそこで時間を喰ってればいいさ。一番槍は私が頂いて行くからな」

数もほぼ同じ、私が手を貸すまでもない。そう判断した私は、戦闘を開始した二人を遠目に先へ進むことにした。

あの二人が気にならないかと言うと、そんなことはない。霊夢とは友達？　のような関係だし、ライバルだとも思っている。アイツが負けるなんてことはあり得ないだろうが、それでも気になるものは気になる。

それよりも気になるのがあのへっぽこ野郎だ。あの時は平身低頭もかくやと言わんばかりの対応をしていたにも拘わらず、今回は自ら進んで闘いに行った。霊夢の前だから良いカッコをしたいのか、それとも引くに引けない状況だったのか。遠目に見ていたから会話は聞き取れなかったが、まぁ雑魚はすぐに堕ちるだろうな。その方が

邪魔者もいなくて空が静かでいい。

「…にしても紅い館だな、これ。二人が目指してたのも此処なのか？」

「その通りです」

「おっと、いきなり案内人発見だな。幸先がいいぜ」

「ようこそいらっしゃいました、若き魔法使い。お帰りは反対側です」

デカイ館にデカイ門。そして行く手遮るように待ち構えているデカくて紅い妖怪。これだ、私はこう言うのを求めていたんだ。魔法を使って悪を薙ぎ倒していくシチュエーションを。誰だって一度はヒーローに憧れて、あんな風になりたい、あんな風でありたいと思うんだ。

でも現実にはヒーローなんか居ないって、ただのおとぎ話だけの存在なんだって気付いてしまう。そしてそれに気付いた時に、信じていた気持ちを粉々に砕かれるんだ。結局、誰もが憧れる存在なんてありはしないって。

だから私がヒーローになりたい。いや、ヒーローになるんだ！　誰もが憧れるヒーローに！

「ブチのめしてやるぜ！」

「気合は十分……でも実力が伴っていなければいけませんよ」

さぁ行くぜ、私の記念すべき初陣だ！

◇◆◇◆◇◆◇

「どうしたどうしたー！？」
「なかなかどうして、楽にやらせてくれない……ッ！」
「頑張って！　チルノちゃん！」

大妖精の応援を背に、チルノはその弾幕の数を増やしていく。

開戦から数分、僕は未だにチルノを堕とすことが出来ないでいた。放った魔力弾や気弾がチルノの放つ弾幕と衝突して弾ける。数こそ僕の方が多く放っているが、次の闘いを見越した僕では色々と足りない物が多い。

それは元々僕が保有する魔力であったり、気であったり。魔力は魔法に全力を注ぎたいと考えているし、気はこれからあるであろう接近戦のために残しておきたい。だから本来なら直ぐに片が付くはずの闘いが長引いてしまっているのだ。

「アンタ本気だしなさいよ！　今のアンタに勝っても全然面白くないわ！」

確かに全力には遠いけど、それでも真面目にやっている。だからこそ焦りが募る。楽に勝てると思っていた相手にこれほど時間を喰われるなんて……。次を見越したはずの闘い方が逆に仇となったか。

霊夢の事も気になるし、これ以上時間を掛けるわけにもいかない。

此処からは全力で行かせてもらおう！

「目つきが変わった！　『凍符―パーフェクトフリーズ―』」

「スペルカードか！？」

質、量、速度。どれをとっても今までの通常弾とは比べ物にならない……が、所詮は妖精の放つ弾幕。大した脅威には……

「止まれぇ！」

「なッ、止まった……凍ったのか！？」

「フフン！　驚いたでしょう！」

「驚いたけど、弾幕ごっこで弾を凍らせてどうするつもりなんだ！？」

「……あたいったらサイキョーね！」

「照れ隠しか！？　照れ隠しなんだね！？」

弾幕が止まったせいで、潜りぬける隙間が極端に狭くなっている。ならば、と魔力糸を用いて弾を弾いていくと、目の前から更に次の弾幕が迫ってきていた。それを回避しながらこちらも弾幕を放っていると、またチルノの弾幕が止まった。

「……わざとやってるの？」

「えっへん！　すごいだろう！」

「いや、まぁ……うん。退路を制限するには凄いと思う……けどッ！」

「ッいなくなった！？」

通用しないけどね、と小さく付け足して高速移動。高速、などと言っているけど、それはチルノにとってはだ。僕にしてみれば師匠との修行でしているようにしか動いていない。後に回り込み、ここで決めるために脚に気を纏わせ、振う。もちろんチルノの目が追えるはずもなく、僕の存在にまったく気付けていない。

もらった――脚を振う瞬間、確かに僕は自分の勝利を確信した。

「うしろ！」

「……うそ――避けられた……！？」

だがそんな思惑とは裏腹に、綺麗に、そして完璧に避けられた。目で追えるはずがないにも拘らず、チルノは僕の渾身の一撃を躱してみせた。結果として僕が出来たことは、スペルブレイクだけだった。でも何だ今の……。脚の振りが一瞬鈍ったように感じたぞ…？

「フフン！　驚いたでしょう！」
「驚いた……まさか避けられるなんて…」
「あたいは最初からこうなるって解ってたけどね！　なんたってサクをねったんだから！」
「……へぇ、是非ともお聞きしたいね。今後の参考にでも」

まさか自分で自分の策を披露するはずはないだろう、と思いながらも聞かずにはいられなかった。

「いいわ、教えてあげる。感謝して聞きなさい！」

教えてくれるんですか……。

「アンタの動きを読みとったのよ！」
「……ふーん」
「あれ？　驚かないの？」

そうは言われても、ねぇ？　どう読み取ったのかを聞きたかったんだけど。

「冷気？　だっけ？　それをいっぱい身体につけて、そこにあったかい物が入ってきたから感じ取れた。冷気がなかったらあたいは死んでたわ……」

「死にません。……つまり、冷気で僕を感じ取ったんだね？」

「それだけじゃない！　冷気に気付かれないように湖に氷を張って周囲を冷やしておいた。それにアンタ、さっきから何か焦ってたじゃない。だから気付けなかったんだ」

……なるほど、なるほど。次の為に僕は全力を出せない。自身と僕の手を抜いた弾幕はほぼ同じ威力、ジリ貧になるのは確実。ならば僕が接近するのは時間の問題。しかし目で追えないのは解っていたため、目以外の感覚を頼りにするために冷気を纏う。しかも膨大な冷気の層によって、攻撃が遙かに遅くなるため避けやすい。更に冷気を纏っている事を至近距離でしか悟らせないために湖を凍らせ、周囲の気温を下げておく。

以上のことが今回のチルノの策。……すっごいや。こんなこと考えるなんて、一介の妖精の出来ることじゃない。……ルーミアちゃんの差し金かな？

「これ、誰が考えたの？」

「あたい！　アンタを今日倒すために、みんなに少し考えて貰ったけど……でもあたいが考え出したことにかわりはないね！」

――――は…ははは！　あっはははは！　なんだこれ、笑いが止まらない！

笑わずに居られないよ！　だって絶対に負けることがないと思っていたのに、まんまと一杯喰わされたんだから！　最近になって忘れかけていたことに気付かせてもらったことに、感謝してもしきれない！　そうさ、誰だってどんな相手にでも勝つ可能性はあるんだ！

でもすごい、こんな、なんかすごく嬉しい。今まで感じたことがないよ、こんな感覚。今までは僕が挑戦者で、ずっと挑む側だったからこんなの初めてだ。まさかこんな、挑まれる側がこんなに嬉しいだなんて思ってもみなかった。自分を倒そうと思って来てくれる相手がいるなんて、武人としてこれ以上の誉れはないよ。

「すごいよチルノ！　本当にすごい！」
「あたいったらサイキョーね！」
「うん、本当にすごい――だから、僕も本気だ。この一撃で決める」

一枚。宣言するためにローブから一枚のカードを取り出した。そこに描かれているのは幼い頃から使っている砲撃魔法。僕の中でも最高の破壊力をもつ最高の一撃！

「魔砲『マスタースパーク』」

チルノからもスペルカードの発動が確認できたけど、それすらも呑みこんで行く極光。やがて光が収まった時には、チルノが地面に一直線に堕ちていく姿が見てとれた。それを大妖精が追って行っている。心配はないだろう。

でもチルノには僕の全力を受けて、それでもまた向かって来て欲しい。楽しみに待ってるから。

◇◆◇◆◇◆◇

「わははー、当たらないのだー」
「……ちょこまかとしつこいわね！」
「おおっと！？　当たらなければどうということは無い！　と言うのだ」

ひらりひらり、のらりくらりとまるで揺れ動く葉のような動きで弾幕が躱されていく。横に広げられた手からは弾幕が放たれている。

「むー、このまま闘うだけじゃつまらないねー。お話でもしよっか？」
「いらん。むしろ早く堕ちろ」
「言葉がキツイのだ。昔は、いやご主人さまの前では今もか。柔らかい言葉だったのに何でなのか？　それとも、今の姿が素のおチビなのか？」
「ッあんた、あいつのこと何か知ってんの！？」
「知ってるも何も、ご主人さまなのだ。夜符『ナイトバード』」

っ、会話をすると言いながらもスペルカードを発動だなんて、ちゃっかりしてるわね。でもやる気があるのかどうか知らないけど、こんな単純な弾幕なんて目を瞑ってても避けられるわ。

「本当は気付いてるんじゃないのか？　記憶をよーく探ってみるのだ。おチビにとって、ご主人さまはその程度の人なのか？」
「おチビって呼ぶんじゃないわよ、このドチビ」
「私のこれはないすばでーに変身するからいいのだ。でもおチビ、最近は気持ち悪～い感覚に包まれてるんじゃないのかな？　ご主人さま……大和さんが遠くに行ってしまったような、自分が遠くに行っているような」
「……」
「沈黙は肯定なのだ」

たしかに私はあの人のことが気になっている。いったい何者なのか、どうして私に手を焼いてくれるのか。……どうして、こんな関係に

なってしまったのか……。

記憶の中のあの人は笑っていて、小さな私も楽しそうにしていた記憶がある。あるってだけで、実際どうだったのかは知らない。でも今は氷のように、まったく変わることのない鉄の表情。事務的な受け答えしかせず、まったく弾まない会話。

私が悪い子だから大和さんはああなってしまった。気を惹く……なんて子供みたいな真似もしたいけど、迷惑を掛けてこれ以上関係が悪くなるのも嫌だ。肉親でも親戚でもないみたいだけど、あの人は昔から傍に居てくれた人。今でも居てくれなければきっと寂しくなってしまう。どうでもいいなんて思うことは一度もなかった。

出来れば記憶の中のような関係になりたい。でも目の前にある現実がそうである限り、それは決して覆らない。だから私は別にそれでいい。このままでいいんだ。大和さんの前では良い子なんだ、私は。

「話はそれだけ？」

「うん？　もっと色々話したいのだ。おチビと私の関係とか、私のご主人さまへの愛とか」

「あ、そ。じゃあ堕ちとけ。夢符『封魔陣』」

「……ふぅ。おチビ、堕ちる前にこれだけは言っておくのだ」

――――――見えているものだけが真実じゃない。主も、たぶんお前も

「そんなの……私が一番良く解っているわよ」

最後にそう言い残して堕ちていく姿を眺める。……勝つには勝った。でも、何故だか勝たせて貰ったという感じがしてならなかった。本当に、嫌な奴だった。

ふと、後方から私の名を呼ぶ声が聞こえてきた。振り向くと大和さんが片手を上げて近づいて来ていた。その姿が笑ってて、記憶と重なるように見えたけど、近づくとやはり笑ってなんかいなかった。

「霊夢、怪我は無い？」
「大丈夫。大和さんは？」
「問題無し。じゃあ行こうか」
「ええ」

再会のあとも言葉少なく、再び空を駆ける。でもそれでいい、これが今の私たちなのだから。

誰も彼もが猫かぶり（後書き）

もう幾つ寝ると御正月？　じらいです。

今回は自分で納得がいかない部分が多いのですが、情けない話、自分でも何が納得できないのか解っていないんです。おそらくないとは思いますが、急に思い立ったように書き換えたりするかもしれません。その時は活動報告で報告します。

と、言う訳で猫かぶりは誰？　という回でした。言わずもがな、被っているのは大和とルーミア。あとは読めば……。

出来れば来年までにあと一つは上げたいですね……。それではまた次回

嵐の前に

～紅魔館門前～

「くぅ……流石に手強いぜ！」
「そう言う貴方もなかなかどうしてやるじゃないですか。驚きましたよ」
「お誉めにあずかり恐悦至極。でもまだまだ行くぜ！」

戦闘開始から幾分……声を大にするだけあってこの魔法使いに実力はあることは理解出来ました。人間のわりには、との前提が付きますが。確かに魔法の威力はそこそこ、当たれば痛い程度はあります。空を駆けるスピードも中々早く、現に私も攻めあぐねています。

ただ惜しい事に、この魔法使いにはそれだけしかない。目を見張るような身体能力も、他を圧倒する魔法も、一点特化した技術もない平々凡々な存在。まるでどこかで聞いたことのあるような人間、それがこの魔法使いの在り方。

だからこそ惜しい、余りにも惜しいというのが私の正直な感想ですね。それであっても、今ここで私を相手に堕ちないでいられるのだからその実力は人間として中々なもの。大和さんは『立ち直れないくらいボコボコにしてやって』　と言ってましたが、ここで潰すには本当に惜しいと思う。

「マジックミサイル、行け！」
「…！　彩符・極彩颱風！」
「スペルカード！　ってわわわ！？」

迫りくる緑色の弾幕にスペルカード宣言をして吹き飛ばす。避けることも叩き落とすことも出来ましたが、この辺りで真価を試させて貰いましょう。これが避けれればこの先に進ませてあげます。この程度、貴方の師はなんなく躱してみせるでしょう。弟子だったのならばこれくらいは突破して貰わないとこの先に進んでも意味はないですから。

第一、私が試すのはこの子の度胸と気合だけだったんですよ。それさえ見せて貰えれば通してあげるつもりだったんだけど、後に控える方を考えるとどうしても気遣ってあげたくなるんですよね。この子に度胸があることは初めの内に解ってましたけど、流石に実力を計らないわけには……。何せこの先に待ち受けている魔女は、私と違って容赦と言う言葉なんてないのだから。

「……スペルブレイク。避けきりましたか」
「当たり前だ。こんなの屁でもないぜ」

やや危うい場面がなかったわけでは無いですが、それでも被弾せずに避けきりましたか。……うん、この子なら何とかやっていけそう

な気がする。むしろやって貰わないと通した私の面子がありません。

「さて、お前のスペルが終わったところで私の番だな」
「……へ？　通ってもらって構いませんけど……」
「まぁそう言わずに貰ってけ。私の最高の一撃だ！」

彼女が突き出した魔道具？　に魔力が集中していく……！？　まさかアレは大和さんの…！

「マスターーースパーーーーーーーーク！！」

迫りくる極光は正に大和さんのそれと遜色なかった。むしろこっちの方が……ッ！

荒れ狂う魔力の濁流の中、必死に気で身体を覆いながら地面に向かって降下する。アイタタタ……、まさかこれ程の魔法を、しかも大和さんと同じものを隠し持っているなんて…。

痛む身体を擦って身体を労る。……まったく、油断したとは云えいらない怪我をしちゃったなぁ。空を見上げた時にはもう魔法使いの姿はなく、残ったのは魔砲の傷跡が刻まれた門だけだった。

ふぅ、と一仕事終わったことに一息吐いて思う。大和さん、あの子はやっぱり大和さんの弟子ですよ。馬鹿正直で、度胸は人一倍ある

ところなんてそっくりです。それに師匠とは云え、仲互いした相手の魔法なんて使わないです。きっと、まだ心のどこかで貴方のことを想ってるんですよ。

ふと夜空の彼方から大和さんと巫女が飛んで来るのが見えた。……そう難しい顔をしないでくださいよ、私はちゃんと自分の仕事はしましたから。

「美鈴、門番しなくていいの？」
「勝手に通ってもらって構いませんよー」
「……？　ああ、そう言うこと。じゃあ通らせて貰おうか、霊夢」
「……ええ」

ふふ……。大和さん、貴方の目論見はどうやら失敗に終わりそうですよ？　あの子は貴方にそっくりで、ここしかないと言う土壇場でとんでもない力を発揮するに違いありません。付き合いの長い私が言うんです、間違ってないはずです。

けどそれでパチュリー様を越えられるかと問われると、それは無いって言いきれるんですけどね。

◇◆◇◆◇◆◇

「大和さん、ちょっといいかしら？」
「ん？　ちょっと待って……ねッ！」

妖精メイドの手洗い歓迎それも花束を模した弾幕を躱しながら、逆襲の弾幕で蹴散らしていく。何故花束なのかと言われると……いろいろと察してください。きっとレミリアが徹底させたんだろうけど、嫌がらせ？　にも程がある。身体よりも先に心が折れそうだよ。

「ふぅ、これで粗方片付いたか……。ああ、それで何か？」

周囲にいた妖精を鎮圧して一息。霊夢と初めての共同作業を秘かに楽しんでいる僕を見つめる霊夢の表情は堅かった。まさか怪我でもしたんだろうか？

「大和さん、あの門番と親しいの？」

よかった、被弾したわけじゃなさそうだ。僕の治癒魔法なんて舐めれば治る程度の傷しか癒せないからね、怪我でもしてたらどうしようかと思ったよ。

でも、その質問にはどう答えればいいのだろうか？　別に僕の在り

方がバレるわけでもないし、ここは素直に答えておくのがいいかもしれない。真実味があるほうが嘘もその信憑性を増すだろうし。

「知らない仲じゃない。どれ程の関係かと言われると、数百年前からの付き合いかな」

「じゃあ今回の異変の主も知ってる？」

「え？」

「知ってるの？　知らないの？」

「一応知ってるけど……それが？」

付き合いが長い。そう言うと、霊夢が掴みかからんばかりに近づいて詰問してきた。今までの穏やかな雰囲気とは違い、まるで燃え盛る炎のような勢いだ。いったい何がどうなっているのだろうか。

「先に進むわ」

「まっ、待って霊夢――――ッ！」

何が霊夢を変えたのか。何がそこまで駆り立てたのか。急に変わってしまった霊夢が気になり、訳を尋ねようとした瞬間、背筋にゾワッと冷たい感触が走った。

周囲に異変を感知した僕は、注意するように叫ぼうとした。しかし霊夢に目をやって、それがいらないお世話だと思い知らされることとなった。霊夢は僕が注意するまでもなく、飛来するナイフを避けていた。流石としか言いようがないよ、まったく。

「いきなりの奇襲は酷いんじゃないかな？」

誰もいない空間に向かって話掛ける。姿は見えないけど、何処かに隠れているに違いない。

ナイフを挨拶変わりに飛ばすなんて、この悪魔が住まう紅魔館でも一人しかいない。昔はただの駄メイド、今は訓練されたメイド。大事な所でポカするのは変わらないレミリアの従者、十六夜咲夜。

「躱しておいて良く言いいます。くたばって下さってよかったのに」

まるで瞬間移動のように目の前に現れたメイド姿の少女。腕を組み、さも残念と頭を振る姿に僕も溜息がでた。小さな頃から、僕に対する態度だけはまったく変わらないのだ。

「相変わらず辛辣だなぁ」

「遠慮など必要ないと言ったのは貴方だと記憶してますが」

「言ってません！　敬意を払えって言ったんだよ！」

「……あら？」

「あら？　じゃないって……」

「別にいいじゃない、減るものでもないし」

「僕の尊厳ｇ「そちらは初めましてになるわね」　……」

いいのかしら、その子の前よ？

勝ち誇ったようにそう微笑みかけてくる咲夜ちゃん。それは、さながら嘘をばらすぞという強迫の意が籠められた笑みに思えた。繊細な綱渡りの上に漸く成り立っている嘘を霊夢にバラす。人が一番望ましくないと思う所を突く。なんとも効率のいい攻め方だ。

それだけに僕も押し黙るしかなかった。煮え立つモノを抑えながら。

「この館はメイドを飼ってるの？」

「飼われてるのかしら？」

「……私に聞かれても知らないわよ」

「元先生？」

「誰が元先生だ……飼われてるんじゃないの？　噛みつき咲夜ちゃんは」

「誰が噛みつきますか。……まぁ、飼われてるみたいです」

霊夢、元先生の所で反応しないで。ただ弄り役を引き受けていただけだから。そして咲夜ちゃん、少しはメイド長としてしっかりしてきたと思ったら、全然駄目じゃないか。馬鹿親父付きの執事長が聞いたら教育的指導が始まるよ？

「まぁそんなことはどうでもいいんです。私の仕事は足止めですから」

どこからともなくナイフを手に取り、僕に向けて突き付けてきた。

……なるほど、初めから僕狙いということか。となると、期せずし

てレミリアの相手は霊夢がすることになる。全てが計画通りということに、僕は笑みを隠せているかが心配になった。

「霊夢、ここは任せて先に進んでくれ」
「いいの？」
「構わない。それに……このメイドにはお仕置きが必要みたいだ」

教育的指導を執事長に任せるまでもない。コケにされた借りを返さないと、元先生としても立つ瀬が無いからね。

「……わかった。気を付けてね」

…あぁ……その言葉だけで一生闘っていけそうだよ…ッ！

小さくなって行く背中に感涙を隠せなかった。対する咲夜ちゃんの顔が引き攣っているけど、そんなものはどうでもいい。ぼくぁこんなにしぁわせなのはひさしぶりなんだ！

「キモイです」
「野郎てめぇブッ飛ばす！」

キモくて悪いかぁッ！？　溢れだしているのは『愛』　と『親心』なんだよ！

◇◆◇◆◇◆◇

「オイオイオイ……なんだこの魔道書の数は。まるで宝の山じゃないか。これなら私の魔法もバージョンアップできるぜ」

あれが大和の言っていた子……？　ふざけてるのかしら……？

私（パチュリー）が最初に思ったことがそれだった。感じ取れる魔力は並よりは上。だが魔法使いたる心構えがまったく感じられない。

それは魔道書の扱い方一つでも解る。いろいろと物色しては乱雑に投げ捨てる。自分の気に入るものが無いのだろう。しかしそれは許せる所業ではない。魔法使いにとって、魔道書とは己の命よりも価値のあるものだ。何せ一子相伝の奥義が示された書物。積み重ねてきた年月を考えれば、例え副本でもそのような真似が出来るわけがない。

故に私はあの魔法使い……いや、未熟過ぎる小娘を認めることが出来ない。そして何より、此処は親友の母親が残した形見であり、友の管理する場所。預けられた身として、同士として黙って置けるはずが無い。

これは怒りだ。一魔法使いとして。大和が頼むまでもない。私が、全力で、本気で、小娘を潰す。立ち直れないほど粉々にその鼻先を折ってあげる。

「そこまでよ」

「あ――？　誰だお前？　魔女か？」

「そして此処を任されている者でもある」

「そりゃあいい。幾らか貰って行くぜ？　おおっと！　何もタダでとは言わないぜ？　もちろん弾幕ごっこの後に正当な報酬としてな？」

腹の立つ笑顔をどうもありがとう。

美鈴、確かに貴方が通した理由は解ったわ。度胸には花丸を付けてもいい。でもそれ以外は駄目ね。私、もう怒りが抑えきれそうにないの。その辺りも考えて貰えればよかったのだけど。

「その前に一つ聞かせなさい」

「ん？　なんだ？」

「貴方、大和の弟子だって聞いたことがあるのだけど。本当かしら？」

「……あ？」

聞くと、小娘の表情が固まった。笑顔は無表情へと変わり、怒気を含んだ暴力的な笑みに変わっていく。

「あの弱っちい奴が師匠？　ハッ！　ふざけるのも大概にしとけってやつだ。この私があんなへっぽこ雑魚野郎の弟子？　ありえないぜ！」

「……でしょうね。貴方程度の小娘が大魔導（やまと）の弟子だなんて、あってはならない事だもの」

――――――もう限界だった。

今の私は、いったいどんな表情をしているのだろうか。

初めてだ。これ程の怒りをこの身に宿すのは。私は産まれて初めてと言っていいほどの怒りに、身を包まれている。決して自分のことではない。しかし無関係などでも決してない。私が認めた男から無様にも逃げ出した、そんな小娘が、途方もない時間を掛け、一つの極地へと辿り着いた魔法使いを馬鹿にすることなど決して許さない。許してはならない。

「掛ってくるといいわ。ただし、容赦はしない」

これは、魔法使（わたし）いの闘いだ。

◇◆◇◆◇◆◇

無限に続くかと思うほどの廊下を抜けると中庭に出た。見上げた月は紅く、まるで血に染まったよう。

吸血鬼にとっては最高の夜。
でも負けない。どんなやつが来ても負けることはないと、そう思う。
なんとなくだけど。

「いい夜ね……。見てみなさい、月があんなに真っ赤。綺麗だと思わない？」
「目に毒ね」
「人間にはね」
「吸血鬼にはね」

――――強い
一目見て解った。コイツがここの主だって。象徴である蝙蝠の羽が、並大抵の妖怪ではないと物語っている。そして今まで出会った妖怪の中でも飛び抜けて感じる、途轍もない妖力の波動。それらが、目の前のコイツが主である紛れもない事実だと、私の勘がそう言っている。

「私の夫は元気かしら？」
「子供にしては気が早いわね」

「これでも五百は生きているの」
「ババアか」
「夫はもっと年上よ？」
「夫って誰よ」
「大和。一緒に来てたじゃない」

……は？
この妖怪には、妄想癖でもあるのだろうか。私の知る限り、大和さんに女はいない。いれば神社に住んでいるはずもない。でも私は大和さんについてほとんど知らない。知っているのは神社に住んで、世話を焼いてくれる無愛想な人程度。むしろ目の前のチビよりも知らないのかも知れない。

あの門番もこの妖怪も、大和さんのことをよく知っているはず。そうでないと、あんな軽口も夫なんて世迷言も出てくるはずが無い。
……よし、とりあえずコイツをブッ飛ばしてから聞きだそう。

「とりあえず退治するわ。この霧、あんたでしょ？」
「そうね。でも難しいと思うわ」
「『出来ない』　んじゃないのね」
「巫女って美味しいのかしら？」
「試してみる？」

濃厚な妖力が見てとれる。あいつの目からも、私の霊力が見えているはずだ。でもそれだけじゃない、私には陰陽玉もある。本気よ、

私。聞き出すために負けられない。

「フン……こんなに月も紅いから、本気で殺すわよ」

「……こんなに月も紅いのに」

――楽しい夜になりそうね

――永い夜になりそうね

嵐の前に（後書き）

どうもこんばんは、じらいです。今年ももう終わりですねぇ…

今回はそれぞれの闘い前と言った所でしょうか（一部戦闘もありましたが）。最後は紅魔郷のセリフと、原作を少し意識して会話させてみました。少しでもあの独特な雰囲気がでていればいいですね。

今年はこれが最終更新の予定なので、次を期待してくれている人には少し悪いことをしたなぁ、なんて少しは増えてきた閲覧者の数を見て笑ったりｗ　長期休みになると増えるのは当たり前なんですか慧音先生!?　と突っ込みを入れたら次はバトルに突入です。ハードル高い……ｏｒｚ

次は正月三が日にの何れかにと思ってます。手が空いていれば、ですが。それでは読んで下さっている皆さん、また来年にお会いしましょう。

良いお年を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0467q/

東方伊吹伝

2011年12月28日02時49分発行